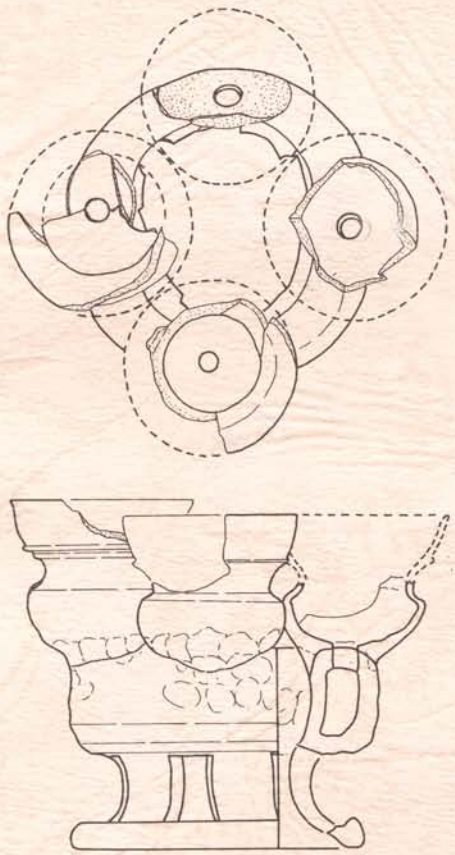
三重県埋蔵文化財調査報告 115－16

一般国道23号中勢道路（８工区）建設事業に伴う

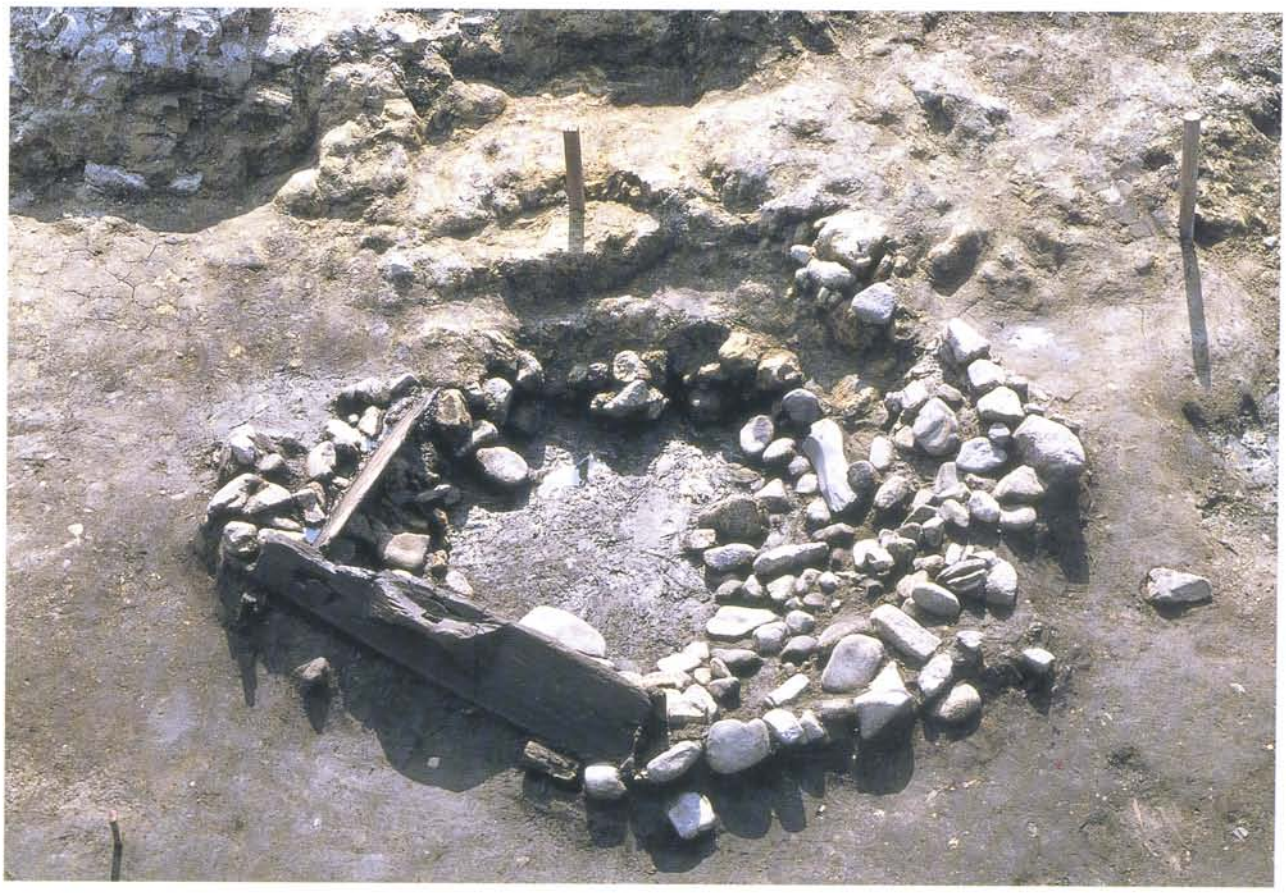
六大Ａ遺跡発掘調査報告



２００２年３月

三重県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（西から，上は伊勢湾，左の川は志登茂川）



井泉１全景

初期須恵器

韓式系土器

脚付環状連結四連甑（3455）

獣脚部付圏脚円面硯（3899）

序

現代は、飛行機で簡単に海外へ旅行することが当たり前になり、逆に東京や大阪のような大都市でなくとも、街で海外からきた人を見ることも珍しくなくなりました。テレビやインターネットなどを通じて、海外の情報がリアル・タイムで日本に伝わり、また日本から海外へ向けて情報発信が行われています。そういう意味では、情報に国境はありません。

では、列島に国家が形成されてくる頃、海外の情報や文化はどのようにして日本へ伝えられたのでしょうか。北部九州のように、大陸と絶えず通交を行っていた地域ではない当地方にとって、大陸から伝えられる新技術や文化は、より一層、恋い焦がれ、憧れ、希求したものだったのでしょう。

今回報告する津市六大A遺跡では、朝鮮半島から渡来してきた集団が残したと思われる韓式系土器が大量に出土しました。彼らは、何も土器だけを伝えたわけではないでしょう。土器は彼らの存在証明。おそらく、この地域の人びとが待ち望んだ、新しい技術を携えて当地にやって来たに違いありません。

ところで、当地には、後に「安濃津」と呼ばれ、中世には海外にまで知られた良港がありました。この原型となるものがいつ形成されたかについては、各方面から様々な検討がなされていますが、古墳時代中期に渡来してきた集団が安濃津の歴史にひとつの画期をなしているであろうことに疑いはありません。

このように、埋蔵文化財は、それぞれの地域がかつて経験した海外との交流のあとも、鮮やかに映し出してくれます。そういう意味で埋蔵文化財は、たんに古い時代の大切なもの、というだけではなく、過去の時代を通して私達自身を映す鏡でもあります。つまり、今わたしたちがどのように未来に向けて歩んでいくかを知るための指針のひとつ、といえるものではないでしょうか。

最後になりましたが、本書によって、過去に学んで豊かな未来像を構築するための一助となることを期待するとともに、県民の皆様の埋蔵文化財へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成14年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　桂川　哲

例　　言

1　本書は、一般国道23号中勢道路（第８工区）建設に伴って調査された、三重県津市大里窪田町字花村に所在する六大Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2　六大Ａ遺跡の大溝（ＳＤ１）及び旧河道（ＳＲ２）出土の木製品については、『六大Ａ遺跡発掘調査報告（木製品編）』（三重県埋蔵文化財センター、2000．３）としてすでに刊行している。ご参照されたい。

3　調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局からの委託を受け、平成５年に範囲確認調査を行い、平成６年度から８年度に本調査を実施した。調査にかかる費用は建設省中部地方建設局の全額負担によるものである。

4　六大Ａ遺跡の現地調査は、平成５年度の範囲確認調査を小菅文裕・穂積裕昌・中村光司が、平成６年度の本調査を穂積裕昌・中川明・中村光司が、平成７年度の本調査を穂積裕昌・山本義浩が、平成８年度の本調査を宮田勝功が担当した。

5　出土遺物の整理及び当報告書作成にあたっては、調査第二課第二係（平成12年度以前は第三係）業務補助職員の黒川敬子・蒔田やよい・太田浩子・森川絹代・倉田由起子・市川嘉子・新田智子・鈴木妙・脇葉輝美の補助を得たほか、調査補助員として藤田有紀・川崎志乃・杉崎淳子・田中美穂・中村友子・石田浩司が現地調査もしくは当報告書作成に関わる整理作業に携わった。また、遺物トレースは、資料普及グループの楠純子・石橋秀美・山上由香が行った。

6　発掘調査から当報告書作成までには多数の方々のご教示を頂きました。特に、本分冊の作成に関しては、以下の方々のご指導、ご教示を得ました。記して感謝の意を表します。
青柳泰介　赤塚次郎　荒井格　石野博信　岩本貴　植田文雄　上原真人　植野浩三　臼居直之　岡田精司　岡田登　岡戸哲紀　置田雅昭　工楽善通　笠原潔　金子裕之　金原正明　川崎保　河野一隆　小林秀　酒井清治　坂本和俊　佐藤達雄　静野勝信　申敬澈　椙山林継　鈴木敏則　田口一郎　竹谷俊夫　高松俊雄　辰巳和弘　全玉年　寺内隆夫　寺沢薫　中浦基之　中川律子　橋本博文　八賀晋　林大智　坂靖　樋上昇　藤川智之　藤田三郎　藤原学　洪普植　丸山哲夫　光谷拓実　宮島義和　望月由佳子　森浩一　山田昌久　山内紀嗣　湯村功　李柱憲　和田萃（順不同、敬称略）

7　巻頭写真２～４は山口格が撮影した。

8　本報告書の執筆は、三重県埋蔵文化財センター技師穂積裕昌及び技術補助員小林俊之が分担して行い、目次に明記した。全体の編集は、本堂弘之の調整のもと、穂積裕昌が担当した。

9　六大Ａ遺跡については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅶ（三重県埋蔵文化財センター1995）及び『同』Ⅷ～Ⅸ（三重県埋蔵文化財センター 1996～1997）等にその途中の成果を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

10　本書に用いた地図・遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、挿図の方位は全て座標北で示した。

11　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターに於いて保管管理している。

12　本書で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。なお、遺構の名称及び番号は、調査時点および調査途中の概報での呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。
ＳＡ；柱列　ＳＢ；掘立柱建物　ＳＤ；溝・大溝　ＳＥ；井戸　ＳＨ；竪穴住居
ＳＫ；土坑　ＳＲ；旧河道
ＰもしくはPit；柱穴・小穴　ＳＺ；集配石・遺物溜・その他不明遺構

13.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ　前言 …… （穂積） …… 1
第1節 調査に至る経緯と経過 …… 1
第2節 六大A遺跡の調査経過 …… 1
第3節 調査の方法 …… 4
第4節 本書での遺構番号付与方法 …… 4

Ⅱ　位置と環境 …… （穂積） …… 6

Ⅲ　遺構・層序の概要と土器分類 …… （穂積） …… 10
第1節 遺構の概要と本書の記述方針 …… 10
第2節 基本層序 …… 13
第3節 弥生後期～古墳時代土師器の形式分類 …… 13

Ⅳ　旧河道ＳＲ２とその周辺遺構の調査 …… （穂積） …… 24
第1節 旧河道ＳＲ２の調査 …… 24
1　形態 …… 24
2　層序 …… 27
3　遺物出土状況 …… 27
a　縄文時代晩期～弥生時代前期 …… 28
b　弥生時代後期～古墳時代 …… 28
c　古代・中世 …… 28
4　出土遺物 …… 30
a　縄文時代晩期～弥生時代前期 …… 30
b　弥生時代後期～古墳時代 …… 30
c　古代 …… 34
d　中近世 …… 34
e　その他 …… 35
第2節 ＳＲ２の周辺遺構の調査 …… 35
1　遺構の概要 …… 35
2　出土遺物 …… 36

Ⅴ　大溝ＳＤ１とその付設施設の調査 …… （穂積） …… 36
第1節 大溝ＳＤ１の概要 …… 36
1　谷状地形の形成 …… 36
2　規模と形状 …… 36
3　流水量の推定 …… 37
第2節 ＳＤ１の基本層序 …… 37
第3節 ＳＤ１の付設施設 …… 39
1　井泉 …… 39
a　素掘り井泉 …… 40
b　石組井泉 …… 43
2　石組遺構 …… 48
3　木組遺構 …… 50
4　礫群 …… 50
5　木柱列 …… 51
6　礫敷 …… 53
7　家屋壁材 …… 62
8　貼石 …… 62
第4節 ＳＤ１の遺物出土状況 …… 62
1　ＳＤ１全体の遺物出土状況 …… 62
2　土器群 …… 81

第５節 出土遺物 ……107
1 付設施設に伴う遺物 ……107
2 土器群出土遺物 ……111
3 ＳＤ１埋土出土遺物 ……126
a 縄文晩期土器と石器 ……126
b 弥生時代後期～古墳時代の土器 ……127
①Ⅲｂ層最下部出土遺物 ……127
②弥生後期土器と古墳時代土師器 ……127
③韓式系土器と初期須恵器 ……133
c 古墳時代後期～古代の土器 ……138
d 中世の土器 ……143
e 土製品 ……143
f 石製品 ……146
g 石製模造品 ……146
h 金属製品 ……148
第６節 ＳＤ１上面「肩溝」 ……149

Ⅵ 集落域の調査 ……150
第１節 集落域の遺構 ……150
1 古墳時代の遺構 ……（穂積）……150
2 古代の遺構 ……（小林）……154
3 中・近世の遺構 ……（小林）……159
第２節 出土遺物 ……180
1 古墳時代の遺物 ……（穂積）……180
2 古代の遺物 ……（小林）……182
3 中・近世の遺物 ……（小林）……182

【出土遺物実測図】 ……191～400

Ⅶ 遺構・遺物のまとめと考察 ……（穂積）……401
第１節 六大Ａ遺跡の調査成果のまとめ ……401
第２節 六大Ａ遺跡の祭祀の諸相 ……403
第３節 六大Ａ遺跡の井泉とその祭祀 ……406
第４節 絵画・記号土器とその系譜 ……409
第５節 六大Ａ遺跡にみる首長関連要素 ……411
第６節 韓式系土器・初期須恵器の系譜 ……415
第７節 古代の文字関連資料とその周辺 ……420
第８節 中世の墨書土器について ……423

Ⅷ 調査の総括と学術上の課題 ……（穂積）……426

挿 図 目 次

第１図　遺跡周辺地形と年度別調査区位置 …… 3
第２図　調査区地区割図 …… 5
第３図　中勢道路内遺跡位置図 …… 8
第４図　六大Ａ遺跡周辺の土地条件 …… 9
第５図　年度別調査区と段丘面の対応 ……10
第６図　中段実測図（ＳＤ１周辺） ……11
第７図　上段実測図（一部中段含） ……12
第８図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（１） ……15
第９図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（２） ……17
第10図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（３） ……20
第11図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（４） ……22
第12図　下段実測図（ＳＲ２周辺） ……25
第13図　ＳＲ２土層図 ……26
第14図　ＳＲ２下層確認グリッド土層図 ……27
第15図　ＳＲ２土器群59出土状況図 ……28
第16図　ＳＲ２遺物出土重量分布図 ……29
第17図　ＳＫ６実測図 ……35
第18図　ＳＫ７実測図 ……35
第19図　ＳＤ１土層図（中央部） ……37
第20図　ＳＤ１土層図（下流部） ……38
第21図　ＳＤ１付設施設配置図 ……39
第22図　ＳＤ１井泉10実測図 ……40
第23図　ＳＤ１井泉５出土状況（上）と完掘状況（下） …40
第24図　ＳＤ１井泉４実測図 ……41
第25図　ＳＤ１井泉６出土状況（上）と完掘状況（下） …41
第26図　ＳＤ１井泉２実測図 ……42
第27図　ＳＤ１井泉３出土状況と完掘状況 ……42
第28図　ＳＤ１井泉１実測図と出土遺物 ……43
第29図　ＳＤ１井泉７実測図 ……44
第30図　ＳＤ１井泉８実測図 ……45
第31図　ＳＤ１井泉９実測図 ……46
第32図　ＳＤ１井泉11実測図 ……47
第33図　ＳＤ１井泉12実測図 ……48
第34図　ＳＤ１井泉13・14実測図 ……49
第35図　ＳＤ１石組１実測図 ……49
第36図　ＳＤ１石組２実測図 ……50
第37図　ＳＤ１木組遺構実測図 ……51
第38図　ＳＤ１礫群１・柱列実測図 ……52
第39図　ＳＤ１礫群２実測図 ……53
第40図　ＳＤ１礫群２実測図 ……54
第41図　ＳＤ１礫群３実測図 ……55
第42図　ＳＤ１上層礫敷実測図 ……56
第43図・第44図　ＳＤ１下層礫敷実測図 ……56～58
第45図　ＳＤ１上流部最下層礫敷 ……59
第46図　壁材（壁木舞）出土状況図 ……60
第47図　ＳＤ１右岸貼石実測図 ……61
第48図　出土状況図の図画一覧 ……63
第49図　ＳＤ１上流部Ⅱ層下部出土状況図 ……64
第50図　ＳＤ１中上流部Ⅲｂ層出土状況図 ……65～66
第51図　ＳＤ１中流部Ⅲｂ層出土状況図① ……68
第52図　ＳＤ１中流部Ⅲｂ層出土状況図② ……69
第53図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図① ……70
第54図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図② ……71
第55図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図③ ……72
第56図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図④ ……73
第57図　ＳＤ１中流部右岸Ⅲａ層出土状況図 ……74
第58図　ＳＤ１Ｅ-Ｔ13Ⅲａ層木製品溜出土状況図 ……75
第59図　臼玉小地区別出土個数図 ……76
第60図　ＳＤ１下流部Ⅱ層下部～Ⅲａ層出土状況図 …77～78
第61図　ＳＤ１下流部右岸Ⅲｂ層出土状況図 ……79～80
第62図　瓢箪出土位置図 ……81
第63図　土器群図画一覧 ……81
第64図　ＳＤ１土器群１出土状況図 ……82
第65図　ＳＤ１土器群２出土状況図 ……83
第66図　ＳＤ１土器群３出土状況図 ……84
第67図　ＳＤ１土器群４出土状況図 ……85
第68図　ＳＤ１土器群５出土状況図 ……85
第69図　ＳＤ１土器群６出土状況図 ……85
第70図　ＳＤ１土器群７出土状況図 ……86
第71図　ＳＤ１土器群８出土状況図 ……86
第72図　ＳＤ１土器群９出土状況図 ……87
第73図　ＳＤ１土器群10出土状況図 ……87
第74図　ＳＤ１土器群11出土状況図 ……88
第75図　ＳＤ１土器群12出土状況図 ……89
第76図　ＳＤ１土器群13出土状況図 ……89
第77図　ＳＤ１土器群14出土状況図 ……89
第78図　ＳＤ１土器群15出土状況図 ……90
第79図　ＳＤ１土器群16出土状況図 ……90
第80図　ＳＤ１土器群17出土状況図 ……90
第81図　ＳＤ１土器群18出土状況図 ……90
第82図　ＳＤ１土器群19出土状況図 ……91
第83図　ＳＤ１土器群20出土状況図 ……92
第84図　ＳＤ１土器群21出土状況図 ……93
第85図　ＳＤ１土器群22出土状況図 ……93
第86図　ＳＤ１土器群23出土状況図 ……93
第87図　ＳＤ１土器群24出土状況図 ……93
第88図　ＳＤ１土器群25出土状況図 ……94
第89図　ＳＤ１土器群26出土状況図 ……94
第90図　ＳＤ１土器群27出土状況図 ……94
第91図　ＳＤ１土器群28出土状況図 ……94
第92図　ＳＤ１土器群29出土状況図 ……95
第93図　ＳＤ１土器群30出土状況図 ……95

第94図　ＳＤ１土器群31出土状況図 ……96
第95図　ＳＤ１土器群32出土状況図 ……96
第96図　ＳＤ１土器群33出土状況図 ……96
第97図　ＳＤ１土器群34出土状況図 ……97
第98図　ＳＤ１土器群35出土状況図 ……97
第99図　ＳＤ１土器群36出土状況図 ……98
第100図　ＳＤ１土器群37出土状況図 ……98
第101図　ＳＤ１土器群38出土状況図 ……99
第102図　ＳＤ１土器群39出土状況図 ……99
第103図　ＳＤ１土器群40出土状況図 ……99
第104図　ＳＤ１土器群41出土状況図 ……100
第105図　ＳＤ１土器群42出土状況図 ……100
第106図　ＳＤ１土器群43出土状況図 ……100
第107図　ＳＤ１土器群44出土状況図 ……100
第108図　ＳＤ１土器群45出土状況図 ……101
第109図　ＳＤ１土器群46出土状況図 ……102
第110図　ＳＤ１土器群47出土状況図 ……102
第111図　ＳＤ１土器群48出土状況図 ……102
第112図　ＳＤ１土器群49出土状況図 ……103
第113図　ＳＤ１土器群50出土状況図 ……103
第114図　ＳＤ１土器群51出土状況図 ……103
第115図　ＳＤ１土器群52出土状況図 ……104
第116図　ＳＤ１土器群53武器形集中部出土状況図 ……104
第117図　ＳＤ１土器群54出土状況図 ……105
第118図　ＳＤ１土器群55出土状況図 ……105
第119図　ＳＤ１土器群56出土状況図 ……106
第120図　ＳＤ１土器群57出土状況図 ……107
第121図　絵画土器（1599）のモチーフ ……123
第122図　韓式系甕（3281）の破片出土地区一覧 ……134
第123図　土管の分類 ……145
第124図　勾玉の分類 ……147
第125図　臼玉の分類 ……148
第126図　ＳＤ１上面肩溝位置図 ……149
第127図　ＳＢ19実測図 ……150
第128図　ＳＡ８実測図 ……150
第129図　中・上段遺構配置図 ……151
第130図　ＳＡ18実測図 ……151
第131図　ＳＢ17実測図 ……152
第132図　ＳＫ74実測図 ……152
第133図　ＳＫ64実測図 ……152
第134図　ＳＫ80実測図 ……153
第135図　ＳＺ16実測図 ……153
第136図　ＳＺ21実測図 ……153
第137図　ＳＢ40実測図 ……154
第138図　ＳＢ46実測図 ……154
第139図　ＳＢ47実測図 ……155
第140図　ＳＢ53実測図 ……155
第141図　ＳＢ54・ＳＡ55実測図 ……156
第142図　ＳＢ67実測図 ……156
第143図　ＳＢ70・ＳＢ71実測図 ……156
第144図　ＳＢ72実測図 ……157
第145図　ＳＤ60・ＳＤ61・ＳＤ62実測図 ……157
第146図　ＳＥ９実測図 ……158
第147図　ＳＥ12実測図 ……158
第148図　ＳＫ94実測図 ……158
第149図　ＳＫ91実測図 ……159
第150図　ＳＡ10実測図 ……159
第151図　ＳＢ22実測図 ……160
第152図　ＳＢ48・ＳＢ49実測図 ……160
第153図　ＳＢ50実測図 ……161
第154図　ＳＢ52実測図 ……161
第155図　ＳＢ66実測図 ……161
第156図　ＳＢ69実測図 ……162
第157図　ＳＢ73実測図 ……162
第158図　ＳＢ77実測図 ……162
第159図　ＳＢ78実測図 ……162
第160図　ＳＢ88実測図 ……163
第161図　ＳＢ93実測図 ……163
第162図　ＳＤ56・ＳＤ57実測図 ……163
第163図　ＳＤ63・ＳＫ64・ＳＤ65実測図 ……164
第164図　ＳＤ95・ＳＤ96・ＳＤ98実測図 ……164
第165図　ＳＤ97・ＳＫ100・ＳＫ101実測図 ……164
第166図　ＳＤ82・ＳＤ83実測図 ……165
第167図　ＳＤ86・ＳＤ87実測図 ……165
第168図　ＳＸ76実測図 ……165
第169図　ＳＥ20実測図 ……166
第170図　ＳＥ31実測図 ……166
第171図　ＳＥ41実測図 ……167
第172図　ＳＥ42実測図 ……167
第173図　ＳＥ43実測図 ……167
第174図　ＳＥ44実測図 ……168
第175図　ＳＥ45実測図 ……168
第176図　ＳＥ51実測図 ……168
第177図　ＳＥ85実測図 ……169
第178図　ＳＥ89実測図 ……169
第179図　ＳＥ90実測図 ……170
第180図　ＳＥ92実測図 ……170
第181図　ＳＫ13実測図 ……171
第182図　ＳＫ14実測図 ……171
第183図　ＳＫ15実測図 ……171
第184図　ＳＫ23実測図 ……172
第185図　ＳＫ32実測図 ……173
第186図　ＳＫ33実測図 ……173
第187図　ＳＫ34実測図 ……173
第188図　ＳＫ35実測図 ……173
第189図　ＳＫ37実測図 ……173
第190図　ＳＫ38実測図 ……173
第191図　ＳＫ39実測図 ……174

第192図　ＳＫ58実測図 ……174
第193図　ＳＫ59実測図 ……174
第194図　ＳＫ68実測図 ……174
第195図　ＳＫ75実測図 ……175
第196図　ＳＫ84実測図 ……175
第197図　ＳＫ99実測図 ……175
第198図　ＳＫ102実測図 ……176
第199図　ＳＫ11実測図 ……176
第200図　ＳＺ24～ＳＺ29実測図 ……176
第201図　ＳＺ24実測図 ……177
第202図　ＳＺ25・ＳＺ26実測図 ……178
第203図　ＳＺ27実測図 ……178
第204図　ＳＺ28実測図 ……178
第205図　ＳＺ29実測図 ……179
第206図　ＳＺ30実測図 ……179
第207図　ＳＺ36実測図 ……179
第208図　ＳＺ79平面略図 ……180
第209図　Ｈ－Ｓ12pit３位置図 ……180
第210図　Ｅ－Ｗ15pit２位置図 ……181
第211図　Ｈ－Ｐ９pit３位置図 ……181
第212図　6828～6835採集の畑地 ……181
第213図　ＳＲ２出土遺物（土器群58・59を含む） ……191
第214図　ＳＲ２出土遺物（土器群60を含む） ……192
第215図～第231図　ＳＲ２出土遺物 ……192～209
第232図　ＳＲ2・ＳＤ3・ＳＤ4・ＳＫ6表土出土遺物 ……210
第233図　ＳＤ１出土遺物（井泉４～７・10） ……211
第234図　ＳＤ１出土遺物
（井泉7･9･11～14･井泉7～9周辺・石組１） ……212
第235図　ＳＤ１出土遺物
（石組２・木組・礫群１・２） ……213
第236図　ＳＤ１出土遺物
（礫群２・礫群２下～礫群３） ……214
第237図　ＳＤ１出土遺物
（礫群２下～礫群３・礫群３下・上層礫敷） …215
第238図　ＳＤ１出土遺物（上層礫敷） ……216
第239図　ＳＤ１出土遺物
（下層礫敷・下層礫敷上面・下面） ……217
第240図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷下面） ……218
第241図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷下面） ……219
第242図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷下面・土器群１） …220
第243図　ＳＤ１出土遺物（土器群１） ……221
第244図　ＳＤ１出土遺物（土器群１・２） ……222
第245図　ＳＤ１出土遺物（土器群２・３） ……223
第246図　ＳＤ１出土遺物（土器群３） ……224
第247図　ＳＤ１出土遺物（土器群４） ……225
第248図　ＳＤ１出土遺物（土器群４・５） ……226
第249図　ＳＤ１出土遺物（土器群６・７・８） ……227
第250図　ＳＤ１出土遺物（土器群８） ……228
第251図　ＳＤ１出土遺物（土器群９・10） ……229
第252図　ＳＤ１出土遺物（土器群10） ……230
第253図　ＳＤ１出土遺物（土器群11） ……231
第254図　ＳＤ１出土遺物（土器群11・12） ……232
第255図　ＳＤ１出土遺物（土器群13） ……233
第256図　ＳＤ１出土遺物（土器群13・14） ……234
第257図　ＳＤ１出土遺物（土器群14） ……235
第258図　ＳＤ１出土遺物（土器群15） ……236
第259図　ＳＤ１出土遺物（土器群16・17） ……237
第260図　ＳＤ１出土遺物（土器群17・18・19） ……238
第261図　ＳＤ１出土遺物（土器群19） ……239
第262図　ＳＤ１出土遺物（土器群19・20） ……240
第263図　ＳＤ１出土遺物（土器群21） ……241
第264図　ＳＤ１出土遺物（土器群21・22） ……242
第265図　ＳＤ１出土遺物（土器群23・24・25・26） ……243
第266図　ＳＤ１出土遺物（土器群26） ……244
第267図　ＳＤ１出土遺物（土器群26・27・28・29） ……245
第268図　ＳＤ１出土遺物（土器群30） ……246
第269図　ＳＤ１出土遺物（土器群30・31・32） ……247
第270図　ＳＤ１出土遺物（土器群33・34） ……248
第271図　ＳＤ１出土遺物（土器群34・35・36） ……249
第272図　ＳＤ１出土遺物（土器群36・37・38） ……250
第273図　ＳＤ１出土遺物（土器群38・39） ……251
第274図　ＳＤ１出土遺物
（土器群39・40・41・42・43　） ……252
第275図　ＳＤ１出土遺物（土器群43・44） ……253
第276図　ＳＤ１出土遺物（土器群44・45） ……254
第277図　ＳＤ１出土遺物（土器群45・46） ……255
第278図　ＳＤ１出土遺物（土器群46・47・48） ……256
第279図　ＳＤ１出土遺物（土器群49・50・51） ……257
第280図　ＳＤ１出土遺物（土器群51・52） ……258
第281図　ＳＤ１出土遺物
（土器群53武器形集中部・土器群54） ……259
第282図　ＳＤ１出土遺物（土器群54・55） ……260
第283図　ＳＤ１出土遺物（土器群55・56） ……261
第284図　ＳＤ１出土遺物（土器群56） ……262
第285図　ＳＤ１出土遺物（土器群56・57） ……263
第286図　ＳＤ１出土遺物（縄文晩期土器と石器） ……264
第287図　ＳＤ１出土遺物（Ⅲｂ層最下部） ……265～266
第288図～第348図　ＳＤ１出土遺物
（弥生後期土器～古墳時代土師器） ……266～326
第349図～第355図　ＳＤ１出土遺物(韓式系土器) …327～333
第356図～第362図　ＳＤ１出土遺物(初期須恵器) …334～340
第363図～第375図　ＳＤ１出土遺物(須恵器) ……341～353
第376図　ＳＤ１出土遺物（円面硯を含む須恵器） ……354
第377図～第381図　ＳＤ１出土遺物(古代土師器) …355～359
第382図　ＳＤ１出土遺物（古代と中世の土器） ……360
第383図　ＳＤ１出土遺物（中世の土器） ……361
第384図　ＳＤ１出土遺物（中世と近世の土器） ……362
第385図　ＳＤ１出土遺物（土玉） ……363

第386図　ＳＤ１出土遺物（土玉・土錘・土製紡錘車等）　364
第387図　ＳＤ１出土遺物（土馬等）……365
第388図　ＳＤ１出土遺物（土製品・竈・鞴羽口等）……366
第389図・第390図　ＳＤ１出土遺物（土管）……367～368
第391図　ＳＤ１出土遺物（土管・円筒埴輪）……369
第392図・第393図　ＳＤ１出土遺物（方筒状土製品等）
……370～371
第394図～第398図　ＳＤ１出土遺物（瓦）……372～376
第399図・第400図　ＳＤ１出土遺物（砥石）……377～378
第401図　ＳＤ１出土遺物（砥石・軽石・石製硯）……379
第402図～第404図　ＳＤ１出土遺物（滑石製模造品）
……380～382
第405図～第410図　ＳＤ１出土遺物
（滑石製臼玉・土玉・ガラス玉）……383～388
第411図　ＳＤ１・上面肩溝・H-S12pit３・ＳＫ15混入
遺物・ＳＫ74・64・80・E-W15pit２出土遺物
（銅鏃・銭貨）……389
第412図　ＳＺ21・調査区隣接の畑地採集遺物・H-Ｐ９pit３・
ＳＢ17・ＳＺ16・包含層出土遺物……390
第413図　ＳＢ67・ＳＥ９・12・91・ＳＫ94・H-Ｘ８pit９・
H-Ｙ８pit19・K-Ｄ９pit３・包含層・ＳＡ10
出土遺物……391
第414図　ＳＢ93・ＳＤ57・95・96・ＳＸ76・ＳＥ20・41
出土遺物……392
第415図　ＳＥ42・45・51・89出土遺物……393
第416図　ＳＥ90出土遺物……394
第417図　ＳＥ90出土遺物……395
第418図　ＳＥ92・ＳＫ14・68・75・59・13・15・84・99
出土遺物……396
第419図　ＳＺ24出土遺物……397
第420図　ＳＺ24・27・26・30・79・各pit出土遺物……398
第421図～第422図　包含層出土遺物……399～400
第423図　各地の井泉事例……408
第424図　六大Ａ遺跡出土の土器絵画と記号文……410
第425図　蛇モチーフの変遷模式図……411
第426図　六大Ａ遺跡出土の馬具……412
第427図　木製脚台付曲物と同形態の土製品・石製品……412
第428図　石川県小松市千代能美遺跡遺構要図……414
第429図　島根県八雲村前田遺跡出土の刀把装具と盾……414
第430図　島根県八雲村前田遺跡の貼石溝の遺物出土状況
……414
第431図　六大Ａ遺跡出土の首長層関連木製品群……414
第432図　六大Ａ遺跡初期須恵器関連資料……418
第433図　仙台市郡山遺跡出土の円面硯（上）と石組池（下）
……422

表　目　次

第１表 中勢道路（８～10工区）内遺跡調査経過表……２
第２表 遺構一覧（大溝・溝・土坑・井戸・墓・不明遺構等）……188～189
第３表 遺構一覧（ＳＤ１内付設施設）……189
第４表 遺構一覧（掘立柱建物・柵・柱列）……190
第５表 里前遺跡墨書分類表……423
第６表 墨書分類表……424

巻　頭　写　真

巻頭１　遺跡遠景 ／ 井泉１全景
巻頭２　初期須恵器
巻頭３　韓式系土器
巻頭４　脚付環状連結４連鬲 ／ 獣脚部付圏脚円面硯

Ⅰ 前 言

第１節　調査に至る経緯と経過

昭和58年４月に都市計画道中勢バイパスとして鈴鹿市北玉垣町から一志郡三雲町までの33.8kmの区間が都市計画道路に決定された。

この中勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和57年１月に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会を受けたので、三重県教育委員会が主体となって、当該市町村教育委員会の協力を得て分布調査を昭和58年度に実施した。その後、この結果を受けて、三重県教育委員会と建設省中部地方建設局が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、現状保存が困難な遺跡については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査は、建設省中部地方建設局から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは新たに発足した三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。

調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会人事交流要綱」に基づき、津市教育委員会から２名の派遣職員を得た。また、現地作業は、調査の円滑化を期して、建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。そして、調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「協定書」を締結し事業を推進している。

第２節　六大Ａ遺跡の調査経過

さて、六大Ａ遺跡の発掘調査は、平成５年度に実施した範囲確認調査（試掘調査）の結果、県道津・関線の北側隣接地で中世を主とする遺構・遺物が、北側の市道の南側で弥生時代後期から古墳時代の多量の遺物が、市道とＪＲ紀勢本線の間でも古墳時代の遺物が出土したため、南から便宜的にＡ、Ｂ、Ｃ地区と呼称し、３調査区の計10,650㎡について本調査必要範囲とした。しかし、平成６年度の調査の過程で、当初、遺構・遺物が希薄として本調査の対象からは除外した部分（Ａ地区とＢ地区の間）にも遺構が広がることが明らかとなり（範囲確認調査の試掘坑は、結果としてちょうど大溝ＳＤ１を外すかたちで設定されていた）、平成７年にその部分も追加して調査を行った。この結果、最終的な調査面積は当初の計画よりは増加し、計13,220㎡となった。以下、年次を追って、調査経過を記していこう。

平成６年度の調査は、４月よりＢ・Ｃ地区より開始した。

Ｃ地区は、4,980㎡と３調査区のなかでは最も広い面積であった。しかし、北側に志登茂川が形成した低湿部と推定される落ち込み遺構（ＳＲ２）が認められたものの、全体に遺構の存在は希薄で、また南側が削平を受けていたため調査は順調に推移した。天候に恵まれたこともあって、８月上旬に航空写真測量、その後に下層確認調査を行って、８月下旬には全ての調査を終了した。

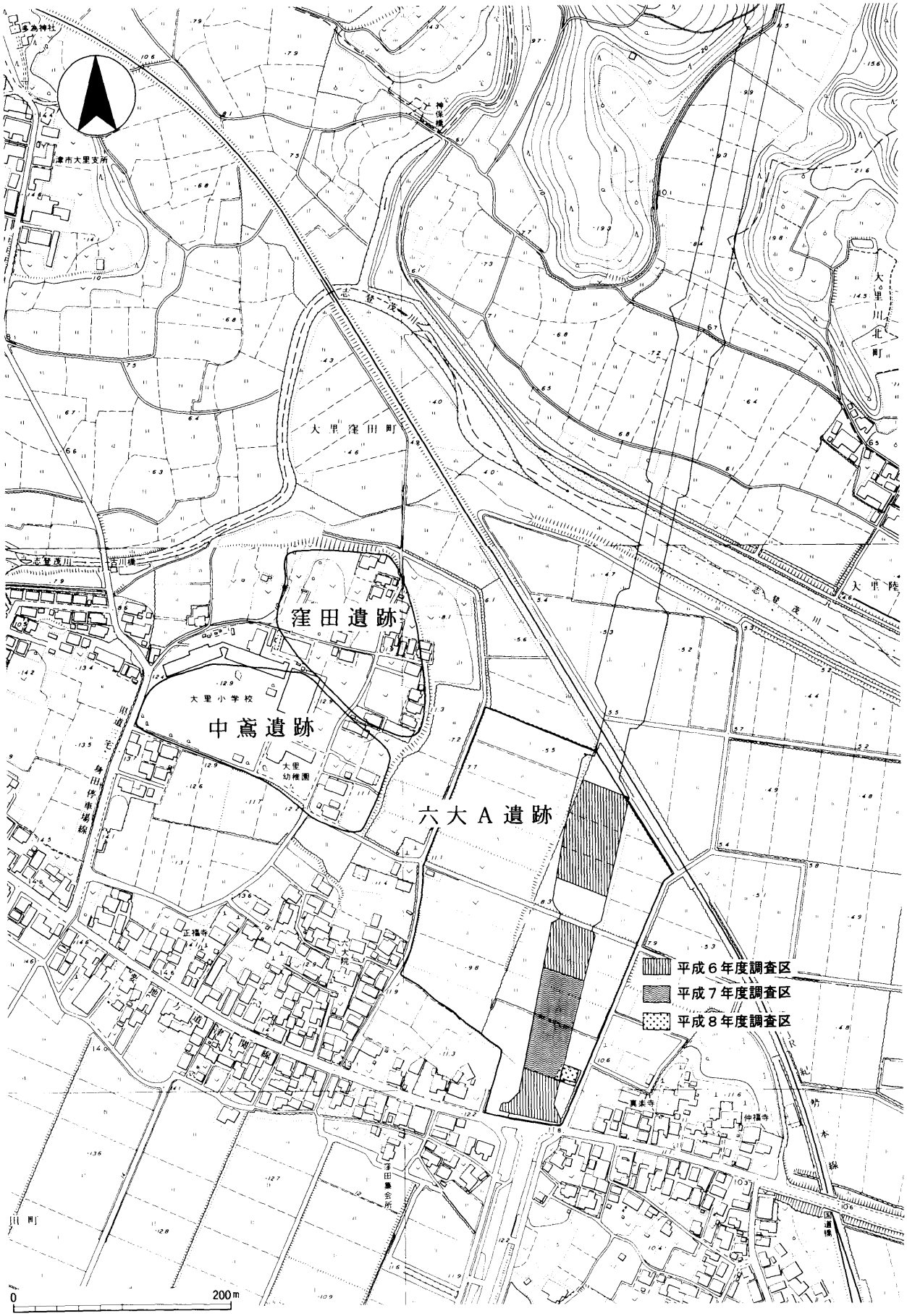
Ｂ地区もＣ地区と同時に調査を開始した。2,030㎡と比較的狭い面積の調査区ではあったが、調査区を縦断するかたちで検出された大溝遺構（ＳＤ１）が予想以上に深く、出土遺物も膨大な量に上った。また、井泉や礫敷、壁材をはじめとする注目すべき遺構の検出も相次ぎ、調査に慎重を記したため、調査の進捗は大幅に遅れ、ほぼ１年を通した調査となって、３月上旬に終了した。

11月上旬より調査を開始したＡ地区は、1,820㎡と３調査区のなかでは最も狭い調査区であったが、遺構密度は予想以上に高く、鎌倉時代を中心とする掘立柱建物群や井戸などまとまった集落域の調査となった。１月下旬に航空写真測量を行って調査を終えた。

平成７年度の調査は前年度に行ったＡ地区調査区とＢ地区調査区に挟まれた残りの部分、計4,130㎡について、４月より実施した。前年度の調査区から続く大溝ＳＤ１がそのまま南へ延び、また南側の集落域もそのまま北側へ延びていたため遺構密度は高かった。大溝ＳＤ１は、右岸全面に２面にわたる礫敷が認められた他、前年同様の井泉遺構や木組み遺構、多くの土器溜（土器群）などもあって図化作業は困

工区		遺跡名	調査対象面積（㎡）		調査年度												
			範囲確認調査	本調査	昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12以降
8工区	18	丸市遺跡	128	—						範							
	19	山王遺跡	128	—						範							
	20	内垣内遺跡	128	—						範							
	21	天堤古墳	55	—						範							
	22	河崎遺跡	256	—						範							
	23	六大A遺跡	448	13,220						範	範8,830	4,130	260				
9工区	24	六大B遺跡	456	26,235	範		17,525	3,420	範3,350	1,270	670						
	25	橋垣内遺跡	176	12,000	範	7,000	4,925	75									
	26	大古曽遺跡	680	12,435	範		範	5,160	範240	7,035							
	27	新池2号墳	198	—									範				
	28	新池1号墳	20	—	範												
	29	西岡古墳	70	2,000				範	2,000								
	30	西岡2号墳	30	—				範									
	31	山籠遺跡	208	1,100	範	1,100											
	32	門脇北古墳		1,100		1,100											
	33	コウゼンジ遺跡	80	—	範												
	34	宮ノ前遺跡	144	2,800	範	2,700				100							
	35	森山東遺跡	240	5,230	範 4.230	1,000											
	36	太田遺跡	469	3,320	範 3,320												
	37	松ノ木遺跡	144	7,800	範	7,800											
	65	長遺跡	0	3,700								3,700					
10工区	38	蔵田遺跡	1,356	16,340		範					5,600	範6,810	3,300			630	
	39	位田遺跡	416	4,600		範							4,600				
	40	替田遺跡	432	[10,060]		範							範6,620	3,140			300
	41	弐ノ坪遺跡	320	5,100		範								5,100			
	42	里前遺跡	256	1,280		範							範		1,280		
	66	梁瀬遺跡	1,152	3,620									範	範	3,620		
	43	鎌切5号墳	—	—													
範囲確認調査			7,990		2,249	1,680	300	100	68	1,047	96	748	1,024	678			
本調査合計				131,940	7,550	20,700	22,450	8,655	5,590	8,405	15,100	14,640	14,780	8,240	4,900	630	300

第1表　中勢道路（8～10工区）内遺跡調査経過表



第１図　遺跡周辺地形と年度別調査区位置（１：5,000）

難を極め、年度も押し迫った３月31日に何とか全ての現地調査を終了することができた。

平成８年度の調査は、家屋移転が遅れていたため調査ができないままでいたＡ地区の残り260㎡について実施した。隣接する既調査部分と同様、掘立柱建物等の集落に関わる遺構が確認された。

第３節　調査の方法

調査区の設定　六大Ａ遺跡の調査は、ほぼ南北軸に沿った比較的幅の広い道路部分の調査であったため、調査区の設定を事業地内を平面直角座標系の第Ⅵ原点からの座標値に基づいて行った。その具体的な方法は、以下のとおりである。

① 座標値の100ｍを単位とする正方形を大地区の境界線とし、六大Ａ遺跡の調査区を含む地域をＡ～Ｌの12ヶ所に分割した。

② 大地区を南北・東西とも北西隅を基準に１辺それぞれ４ｍを単位として25分割し（小地区）、各大地区毎に北から南へＡ～Ｙ、西から東へ１～25の記号を与え、大地区の名称と組み合わせて小地区（グリッド）の名称とした（例「Ｈ－Ｇ11」）。

③ 従って、小地区（グリッド）名称の頭にくるアルファベットは、便宜上分けた前述のＡ～Ｃの調査区名ではなく、あくまで国土座標に基づいた地区割別による区割りである。本章以外の部分（Ⅲ章以降の具体的な遺構や遺物説明）で地区名を記す場合は、基本的にこのことである。

表土除去　検出面より上位は、圃場整備事業による客土が厚く堆積していたため、基本的に重機（バックホー）による表土除去を実施した。

遺構カード　小地区（小グリッド）を単位として1/40で作成し、略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物取り上げにおける遺構番号の注記台帳として使用した。

遺構番号の付与　調査における遺構番号は、ピットのみ小地区毎の通し番号としたが、その他の遺構は、年度別かつＡ～Ｃの便宜的調査区毎の通し番号で行った（平成７年度調査区は全域を「Ｂ地区」として扱っている）。しかしながら、後述のように、これはあくまで調査段階の名称であり、本書において、遺構番号は基本的に付け替えを行っているので調査段階の遺構番号は変更がある。

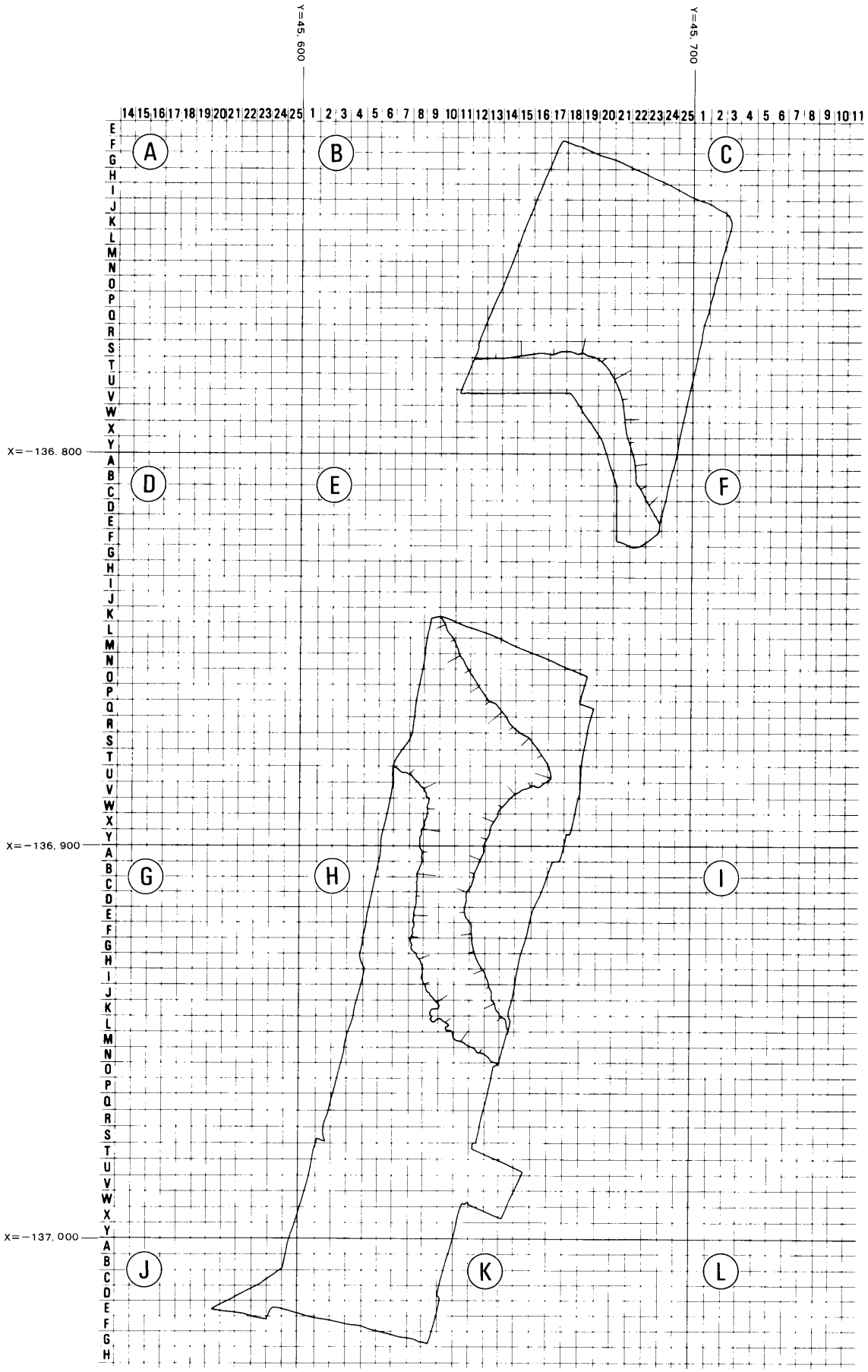
実測　土層や、掘削が終了して必要と認められる遺構は、実測を行った。調査区土層図は1/20、遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10で作成することを基本とした。また、大溝ＳＤ１右岸の礫敷の一部は、ラジコン・ヘリによる1/20作図の航空写真測量を実施し、人力による現地補足を経て原図として取り扱った。大溝ＳＤ１およびその付設施設（礫敷・貼石・井泉・木組み遺構等）と土器溜、木製品の出土状況など個別遺構図の作成を行ったものは数多い。ただし、遺構全体の実測については、すべて１/50作図の航空写真測量を実施した。

遺構写真撮影　基本的に６×９㎝判（ウィスタＳＰ）を使用し、補助・メモ的に35㎜判白黒ネガおよびリバーサルも使用した。

第４節　本書での遺構番号付与方法

前述のように、調査における遺構番号は、遺跡全域の通し番号ではなく、年度毎の便宜上の調査区となったＡ～Ｃの３調査地区毎の通し番号となっている。これは、やや離れた場所を同時期に調査開始することになったためと、調査時の簡便さを求めたためであるが、報告にあたっての煩雑さ、分かりづらさは否めない。このため、例えば調査時の遺構番号も、遺構が別であるにもかかわらず、便宜上の地区が異なっていれば同一の遺構番号が付与されることもありうる（実際には、遺構カードには国土座標に基づく地区割のグリッド名も併記されているため、全く混同するということもないが、分かりづらさは変わらない）。

従って、本書において、これまで各々個別に付与されてきた遺構番号を踏襲すると、対応表を付けても大混乱は免れない。そこで、今回の報告にあたっては、年度毎に便宜上与えられてきたＡ～Ｃの調査区の名称を廃止するとともに、年度毎に各調査区毎に与えてきた遺構番号を全面的に改定し、全調査区・調査年次を通した遺構番号とするため、遺構番号の抜本的な再編成を行った。ただし、ピットに関しては、遺構番号が膨大な番号になる煩雑さを避けるため、グリッド毎での通し番号とした（例；Ｅ－Ｒ



第２図　調査区地区割図（１：1,500）

12　ピット３）。

検出した遺構は、ピットや性格不明の土坑も含めて非常に多いが、そのうち報告にあたって必要不可欠と考えられる遺構は102 を数えた（ＳＤ１付設施設を除く）。

ただし、このなかには、大溝ＳＤ１の内部に付設された井泉や礫敷、木組み遺構等は除いている。これは、それら遺構があくまでＳＤ１に付設する施設として位置づけたためであり、記述にあたってはそれぞれで独立した遺構番号は付与せず、あくまでＳＤ１を構成する遺構群とし、具体的にはＳＤ１内でのその種別毎の通し番号として表現した。

なお、大溝ＳＤ１や旧河道ＳＲ２では、土器が狭い範囲でまとまって出土した部分がある。これには集中して大量の土器が存在したものや、同一面と捉えられるところで少数の土器が隣接して出土したものなどがあり、それぞれ「土器溜」「単位」「セット」などと認識して１/10図作成のうえ取り上げを行った。本書においては、これらは当該部分の出土土器量の多寡にかかわらず、すべて「土器群」と呼称することとし、それぞれ遺構番号とは別に、算用数字の通し番号とした。（穂積）

Ⅱ　位置と環境

（地理的環境）

六大Ａ遺跡は、津市の北側を流れて伊勢湾に注ぐ志登茂川右岸の標高４ｍ～10ｍのなだらかな段丘斜面に立地する遺跡で、行政的には津市大里窪田町字花村に所在する。小字名称とは異なる「六大」を遺跡名に冠している理由は、直接的には『津市遺跡地図』[1] に従ったものであるが、それ自体はかつて当地に所在したという「六大院」なる寺院跡に由来している。

志登茂川は、近年まで洪水を繰り返す暴れ川であったが、これは現在の三重大学付近から北側へ砂堆が発達し、これに阻まれるように河口部が狭窄していたためで、古い時代にはその内側が広く水が溜まるか低湿状になっていたようである。こうした状況は、この砂堆上に鎮座する津市栗真中山町の逆川神社という神社名に如実に示されているとともに、この砂堆内側に低湿状の池が散布することからも窺うことができる。また、地元の伝承では、河口からちょうど六大Ａ遺跡付近まで舟が遡上していたことを伝えている[2]。

津市を流れる主要河川には、北から志登茂川（支流・毛無川）、安濃川（支流・美濃屋川）、岩田川それに雲出川がある。このうち安濃川と岩田川は、水源こそ異なるものの、同じ平野部を潤すもので、ふたつの河川の流域は地域的には一体のものとして捉えられる。

志登茂川流域と、安濃川・岩田川流域の間には、安濃町より延びる見当山（長岡）丘陵が割って入っており、海浜部の津市上浜町付近でやっと南北の沖積地がひとつに繋がっている。

（歴史的環境）

安濃川・岩田川流域は、津市から安濃町、芸濃町の一部へと続く当地域では最も沖積地が広く、生産性も高い地域である。郡域としては、旧安濃郡に属し、県内最大の弥生集落、納所遺跡[3]が所在するのをはじめ、弥生時代中期後半の竪穴住居が実に200基以上も確認された長遺跡[4]や弥生水田が確認された森山東遺跡[5]など、広い沖積地を舞台とした弥生文化が一気に開花した。

こうした安濃川・岩田川流域の発展は、墓制のほうからも窺える。弥生時代を代表する墓制である方形周溝墓は、すでに中期初頭には納所遺跡の西側の松ノ木遺跡[6]で確認されるのをはじめ、集団墓から離れていく有力者層の墓制である単独の方形台状墓が中期中葉の安濃町清水の倉谷弥生墳墓[7]以来認められる。その方形墳の系譜は、個人墓的様相を徐々に強めつつ、弥生時代後期の高松弥生墳墓[8]や大ケ瀬墳墓[9]等を経て、古墳時代前期の坂本山古墳群[10]へと続き、古墳時代中期には、大方墳である明合古墳[11]を築造するに至る。

これに対し、志登茂川流域は、郡域としては河芸町から鈴鹿市南部まで続く奄芸郡の南端部を占め、安濃川流域とは郡域を異にする。この流域では、弥生時代中期の方形周溝墓や土坑墓が橋垣内遺跡[12]で、

また弥生時代末から古墳時代前期の方形周溝墓群が川北遺跡[13]で確認されているものの、弥生時代中期以前では集落としても今のところ大規模なものは知られていない。同様に、前方後円墳をはじめとする首長墓に属するような古墳の築造も、この流域には確認されていない。このことは、直接的には志登茂川流域の本格的な開発が安濃川流域よりも遅れていたことと平野部自体の狭小性を示すものであろう。

このように、安濃川流域と志登茂川流域は、その開発の進展度において弥生段階では差異がある。しかしながら、律令期以降は両地域が異なる郡域に編入されるものの、古墳時代以前においては両地域は低い丘陵を隔てただけの一体の地域として、換言すれば相互補完的な地域関係として捉えられるのではなかろうか。このことは、六大A遺跡が立地する地勢的条件と5世紀の状況をみると、より明瞭に理解されうる。すなわち、六大A遺跡の西側谷筋をそのまま奥へ入っていくと、最奥部には5世紀末の須恵器・埴輪併焼窯である安濃町内多遺跡[14]が所在しており、本書で報告する六大A遺跡の調査成果（初期須恵器類の出土等）も勘案すると、当地域は伊勢における最初期の須恵器生産地帯であった可能性が考えられるからである。この背景には、前述のような、志登茂川の水運の問題とも密接に関わるものであろう。例えば、内多にしても領域的には安濃郡に所在するが、水運というてんでは安濃川へ出るよりも、谷筋を下って志登茂川水系に出たほうが労力が少なくて済むと思われる。こうしたことから、ちょうど六大A遺跡付近は、ここまで舟が遡上したという伝承も含めて、明合古墳も所在する安濃郡の中心域にとっての東の玄関口に相当する地域、と評価することが可能であろう。

なお、このてんに関して、六大A遺跡の北側に隣接する中鳶遺跡[15]では、調査区は狭いながらも古墳時代前期の竪穴住居群の存在や優秀な土器類の出土が明らかになっており、志登茂川に張り出した河岸段丘上への占地ということも考え合わせ、周辺の遺跡のなかではひとつ抜け出た存在の遺跡であった可能性を指摘しておきたい。

さて、律令時代に入ると、それまで安濃川流域の有力遺跡が目立っていた前代の様相とは打って変わり、志登茂川流域でも掘立柱建物群をもつ有力遺跡が一斉に成立する。この場合、竪穴住居はほとんどなく、小規模な家屋であっても基本的に掘立柱建物が採用されていることが重要である。これは、一般層における掘立柱建物の採用がさらに時代が下ると思われる伊勢においてはやや特異な在り方といえ、ひいてはそれが志登茂川流域のこの時期における相対的な先進性を示すものと捉えられよう[16]。

こうした状況は、「伊世国奄伎郡」（表）「久善多里私部小」（裏）と書かれた平城宮出土木簡[17]や、平安時代に成立した『和名抄』記載の「窪田郷」にも窺え、地域的には南に偏るとはいえ、古代奄芸郡の中心地のひとつになるまで成長をとげる。

中世以降も、当地域は衰退することなく、安定して集落が継続する。六大A遺跡と六大B遺跡の間を通る伊勢別街道がいつこの地に成立したかは不明であるが、この街道を中心とした地域が「窪田御厨」や「窪田荘」と呼ばれる荘園になっていた[18]。この史料上の初見は、『吾妻鏡』文治3（1187）年3月30日付の「公卿勅使伊勢国駅家雑事勤否散状」で、ここに大江広元を地頭とした「窪田庄」が不勤仕庄のひとつとして名を見せている。これは、いわゆる平家没官領で、その後、伊勢神宮や東北院、北条得宗家などに地頭職が代わったり寄進されたりする。

室町時代には、当地が伊勢参宮道の宿場となって栄えていたようで、大永2（1522）年には参宮を終えた連歌師、宗長が当地に宿泊、「窪田」や「御願寺六大院」の名を『宗長日記』に残している。そして、文明年間には、県内最大の寺院である高田本山専修寺の前身となる寺院が東側の一身田に成立し、当地はそれを望む宿場として発展した。（穂積）

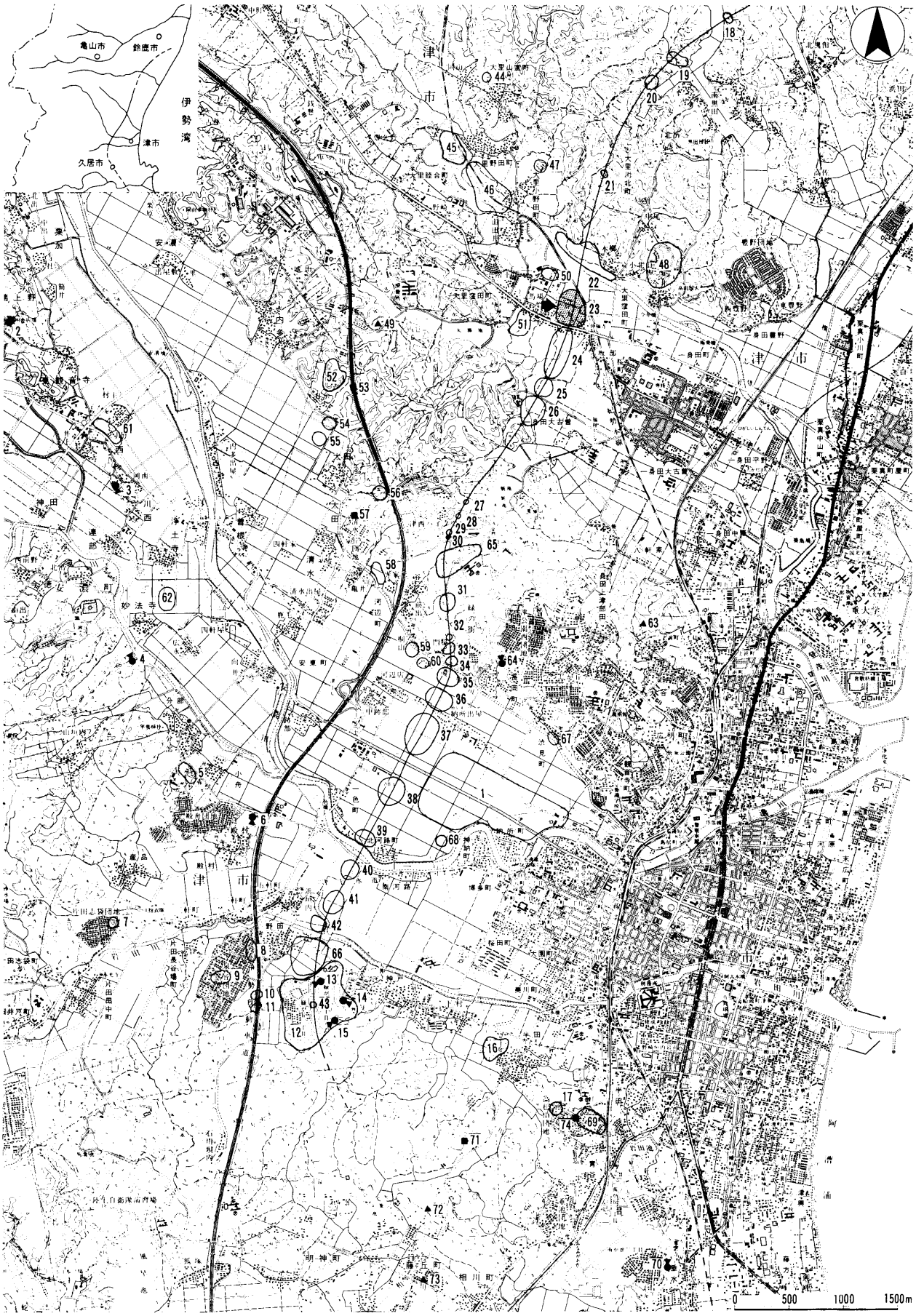
（註）

① 津市教育委員会『津市遺跡地図』1988

② このことに関わる地元伝承は以下のとおり。
「昔、六大院に大きな松があり、これを目印にして、その下まで舟が遡上してきた。その後、その松は切り倒されて、津の観音さん(津市大門)の用材として用いられた」

③ 伊藤久嗣ほか『納所遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1980

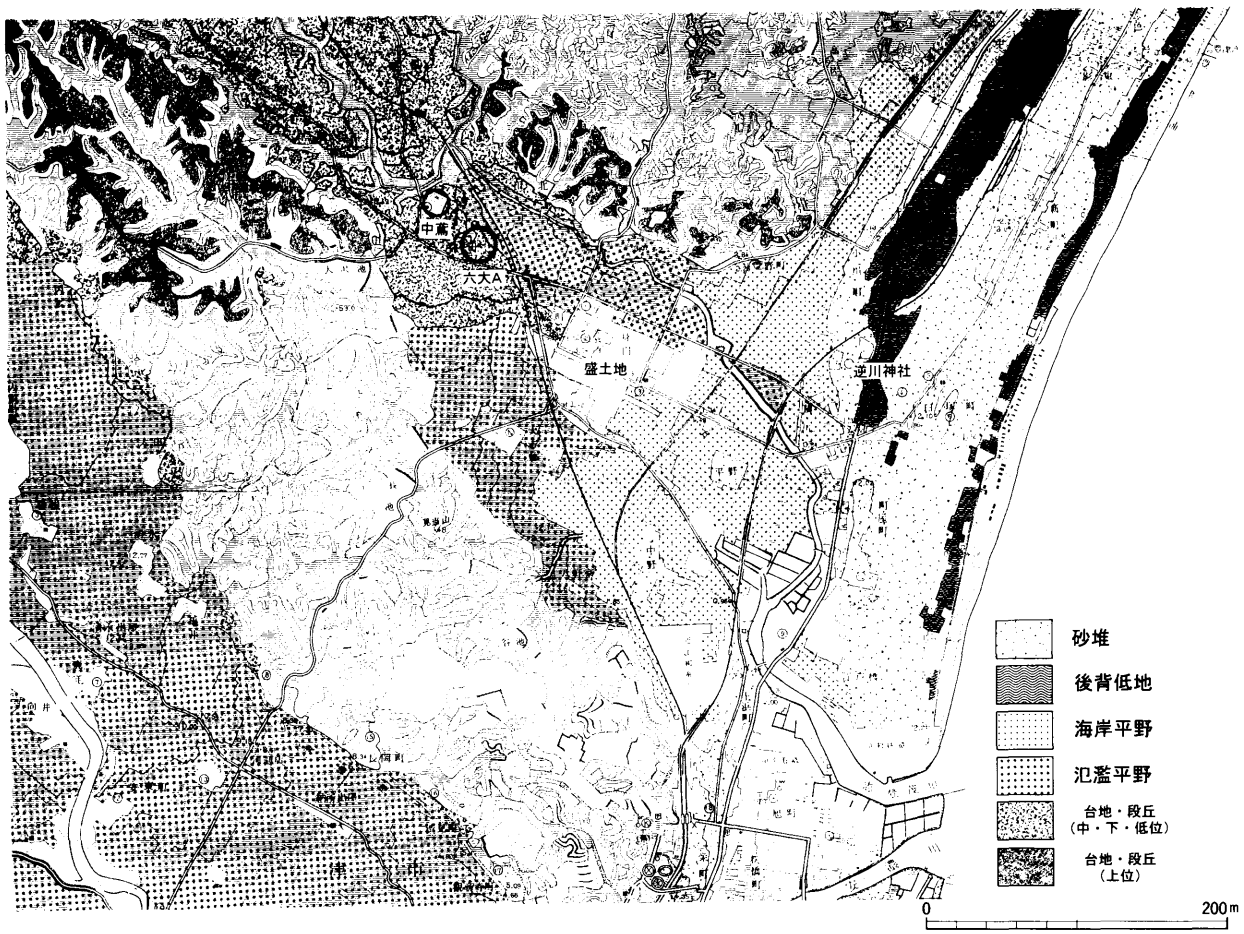
④ 池端清行『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター



第３図　中勢道路内遺跡位置図（１：50,000）

1 納所遺跡	12 鎌切・稲葉古墳群	23 六大A遺跡	34 宮ノ前遺跡	45 若林遺跡	56 倉谷弥生墳墓	67 竹川遺跡
2 明合古墳	13 鎌切3号墳	24 六大B遺跡	35 森山東遺跡	46 大里西沖遺跡	57 堂山1号墳	68 養老遺跡
3 岡南4号墳	14 鎌切1号墳	25 橋垣内遺跡	36 太田遺跡	47 東浦遺跡	58 亀井遺跡	69 高松遺跡
4 御屋敷跡13号墳	15 おこし古墳	26 大古曽遺跡	37 松ノ木遺跡	48 川北遺跡	59 桐山遺跡	70 池の谷古墳
5 メクサ古墳群	16 上村遺跡	27 新池2号墳	38 蔵田遺跡	49 内多古窯跡	60 森山遺跡	71 元井池古墳
6 殿村1号墳	17 尺目遺跡	28 新池1号墳	39 位田遺跡	50 中鳶遺跡	61 多倉田遺跡	72 藤谷埴輪窯跡群
7 坂本山古墳群	18 丸市遺跡	29 西岡古墳	40 替田遺跡	51 安養院遺跡	62 浄土寺南遺跡	73 久居古窯跡群
8 野田遺跡群	19 山王遺跡	30 西岡2号墳	41 弐ノ坪遺跡	52 大城遺跡	63 ヲノ坪窯跡	74 高松弥生墳墓
9 大ヶ瀬遺跡	20 内垣内遺跡	31 山籠遺跡	42 里前遺跡	53 日余1号墳	64 君ヶ口古墳	
10 大ヶ瀬弥生墳墓	21 天堤古墳	32 門脇北古墳	43 鎌切5号墳	54 北端遺跡	65 長遺跡	
11 平栄遺跡	22 河崎遺跡	33 コウゼンジ遺跡	44 小谷遺跡	55 辻の内遺跡	66 梁瀬遺跡	

※下線のあるものは中勢道路内の遺跡



第４図　六大Ａ遺跡周辺の土地条件（１：5,000）

2000

⑤ 増田安生・倉田直純ほか「森山東遺跡」『一般国道23号中勢道路（９工区）建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993

⑥ 竹内英昭「松ノ木遺跡」前掲註⑤文献所収

⑦ 田中秀和『大塚西山Ａ遺跡／倉谷方形台状墓発掘調査報告』安濃町教育委員会他　2001

⑧ 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市文化財保護協会　1970

⑨ 谷本鋭次・伊藤久嗣「山口遺跡・大ケ瀬遺跡・平栄遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会　1973

⑩ 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教

育委員会　1970

⑪ 浅尾悦生『安濃町史資料編』安濃町教育委員会　1994

⑫ 穂積裕昌ほか『一般国道23号中勢道路（９工区）建設事業に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997

⑬ 昭和53年、津市教育委員会調査

⑭ 前掲註⑪

⑮ 萱室康光『中鳶遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1977

⑯ このことの詳細は、前掲註⑫文献参照

⑰ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12　1978

⑱ 以下、中世の窪田庄・窪田宿については、角川書店『角川日本地名大辞典24三重県』1983を参照

Ⅲ　遺構・層序の概要と土器分類

まず、ここでは、個別遺構・出土遺物の説明の前に、それらがどのような関連のものに存在するのかを簡潔に把握する必要がある。このため、まず最初に全体の遺構の概要や、層位など個別遺構・遺物の枠を越える内容についての説明を行い、あわせて本書における個別遺構説明の方針を延べる。

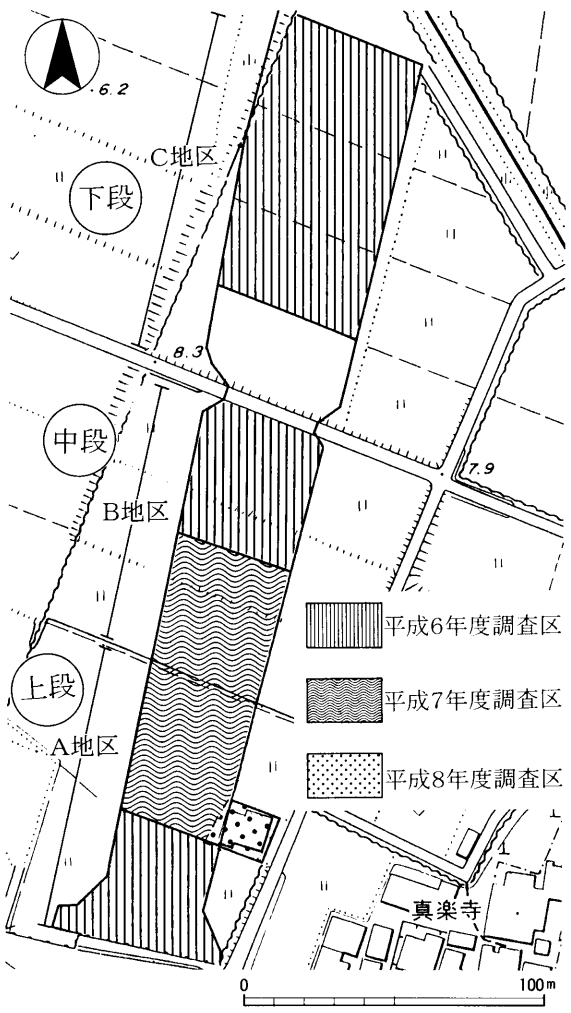
第１節　遺構の概要と本書の記述方針

１．遺構の概要

六大Ａ遺跡の調査区は、道路の路線敷の調査のため、ほぼ南北軸に沿った細長いものとなっている。なおかつ、県道津関線（伊勢別街道）から北へ、志登茂川に向かって下っていく段丘斜面の傾斜地に立地していることから、遺構の種類もその立地場所に応じて異なったものになっている。このような状況のため、遺構の全体像を簡便に把握するには、段丘の面毎に把握することが適切と思われる。

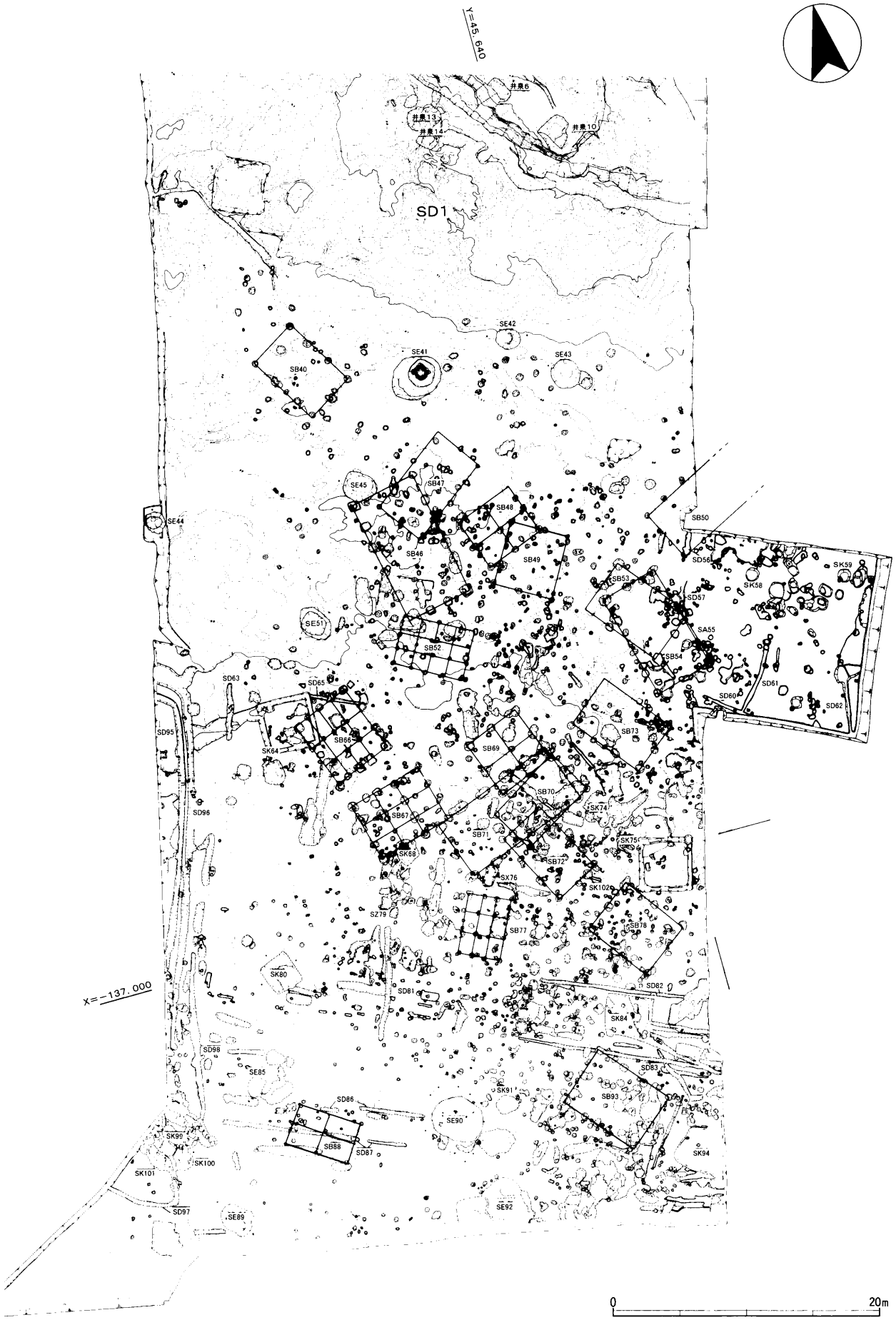
上段　　当初、便宜的にＡ地区と呼称していた遺跡南側の県道津関線の脇の部分に相当する。六大Ａ遺跡では最も高い標高９ｍ～11ｍの部分で、古代から中世を中心とした集落域となっている。

中段　　当初、便宜的にＢ地区と呼称していた標高７ｍ～９ｍの部分に相当し、漸移的に上段とは連続するものの、遺構の有り様が上段とは全く異なっている。すなわち、中段での遺構の中心は長さ100ｍ（直線距離）、最大幅32ｍを測る大溝遺構（ＳＤ１）で、それがほぼ調査区を縦断するかたちで存在する。ＳＤ１の内部には、貼石や礫敷、井泉といった内部に付設された施設群も多く、これらが中段のメインとなる。これに対し、上段でみられたような集落に関わる遺構は少数の井戸や土坑、配石、柱列などが散在する程度であった。従って、中段は、特に古代～中世については上段に存在する集落域の周縁に相当する部分、古墳時代以前についてはＳＤ１脇に存在する少数の古墳時代の掘立柱建物も含めてそのあり様はＳＤ１と密接に関わる遺構といってよく、ＳＤ１の付設施設とも呼びうるものである。



第５図　年度別調査区と段丘面の対応（１：2,500）

第６図　中段実測図（ＳＤ１周辺）　　（１：400）



第７図　上段実測図（一部中段含）　　（１：400）

下段　当初Ｃ地区と呼称していた遺跡北側のＪＲ紀勢本線沿いの部分で、遺構検出面で５ｍ前後と六大Ａ遺跡では最も低い。遺構としては、志登茂川にそのまま続くとみられる低湿の落ち込み状の遺構（ＳＲ２）と、その埋没後に存在した少数の溝があるのみで、建物等はない。

このように、六大Ａ遺跡は、標高差６ｍの範囲に性格の異なる遺構群が分かれて存在しており、それらをそのまとまり毎に説明していくのが分かりやすいと思われる。そこで、本書においては、遺構・遺物の個別説明は、以下のような区分に基づいて記述を行った。

・旧河道ＳＲ２とその周辺の溝の調査（下段に相当する部分の調査）
・大溝ＳＤ１とその付設施設の調査（中段に相当する部分のうち、遺物量が膨大なＳＤ１とその付設遺構、及び古墳時代の遺構の調査）
・集落域の調査（上段の集落域と、中段の遺構のなかで、ＳＤ１以外の遺構群の調査）

第２節　基本層序

六大Ａ遺跡の調査区は、幅が30～50ｍなのに対して、最南部となる上段の南端から最北部となる下段の北端までの総延長が310ｍという南北に非常に細長いものとなっており、また検出面での比高差が６ｍも存在する。こうした傾斜地に営まれた遺跡であるうえに、昭和40年代後半に行われた団体営圃場整備事業のため、六大Ａ遺跡の事業地内は客土が厚く堆積していたり、逆に激しく削平された部分が存在する。客土の堆積は、地形的に小さな谷地形となる大溝ＳＤ１がかつて存在していた中段の中軸線付近が特に顕著で、最厚部で１ｍにも及ぶ。

以上のような状況から、六大Ａ遺跡の基本層序はいわゆる包含層に相当する部分の堆積がほとんどなく、表土以下、圃場整備による攪乱土や客土を取り除くと、即、遺構検出面という場合が多かった。このため、旧河道（ＳＲ２）や大溝（ＳＤ１）といった埋土自体の堆積が厚い遺構を除き、あまり層序で問題のある箇所はなかった。

ただし、それでも遺構検出面に至るまで若干の層の堆積が認められる場合があった。全体的な堆積状況は以下のように整理できる。

①　耕作土
②　橙褐色土（客土）
③　暗褐色土（包含層）
④　淡青灰色～黄灰色粘土（検出面）
⑤　暗茶色～黒褐色土木質土
⑥　灰色褐色砂質土

このうち、包含層に相当する③では、弥生時代後期から近世までの遺物が混在状態で出土しており、それらが細分土層毎に、下から上へ時間に従った昇順状態で遺物が分かれて出土するという状況にはなかった。中段部分では、検出面にいたるまで厚い土量があったにもかかわらず、この包含層に相当する部分が極めて乏しく、ほとんどが圃場整備に伴う客土である②に覆われていた。

また、いわゆる地山として認識できた④は、一定の厚さを経て漸移的に⑤に移行していく。⑤は、大きく谷状に落ち込んだ中段の大溝ＳＤ１下流部の埋土を全て除去したところのみで確認できたもので、基本的に大溝ＳＤ１に伴ったものとみてよかろう。

なお、④の形成過程の途中で、いわゆる「黒ボク」を挟む部分がある。この黒ボクは、橋垣内遺跡や六大Ｂ遺跡でもあり、この地域に広く堆積が確認できるものである。黒ボクは、六大Ａ遺跡よりも南側の橋垣内遺跡では、層中から押型文土器が出土している他、その放射性炭素法による年代測定で5100±ｙ.B.P（Ｇａｋ－14,890）という年代値が出ていることから[1]、本遺跡の黒ボクの形成時期についても一定の指針が得られるものと考えられる。従って、④の上面は、この年代よりも新しく形成され、その後弥生時代後期以降の遺構群によって掘り込みが行われたものとして捉えられる。

（註）

① 森勇一・永草康次「橋垣内遺跡における黒ボク土について」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 1991

第３節　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類

六大Ａ遺跡から出土した膨大な土器のうち、大多数を占めるものは弥生時代後期から古墳時代に属する。これは、そのほとんどが大溝ＳＤ１と旧河道Ｓ

R２から出土したもので、種類や器種も多岐にわたる。そこで、出土遺物の記述をできるだけ簡潔に行うため、最初に当該時期の土器分類を提示する。縄文土器や須恵器、韓式系土器、古代以降の土器に関しては、出土量も限られるため個別説明とし、ここでは特にそれらの土器分類は提示しない。

なお、通常、土器の分類は形式（器種）を横軸、型式をその縦軸として構成され、厳密な意味での形式分類はいうまでもなくその横軸、つまり形式の抽出を目的とすることが多い。しかし、ここでは、高坏の一部や甕の一部などは縦軸、つまりひとつの形式の型式変化毎の形状も分類に一括して含めている。本来はそれらも厳密に捉えるべきであろうが、ここでは膨大な土器の記述をできるだけ簡便に行うための、形態的特徴の共通性をより重視した分類とした。従って、形式としての分類基準の統一性には欠けるが、ご了解されたい。

【壺】

広口壺

A　垂下口縁をもつものを一括した。口縁内面を加飾するものも多い。形態により、２細分する

A１　体部と頸部の境界が不明瞭で、大きく外反しながら立ち上がるもの

A２　頸部が外方へ直線的に立ち上がるもの

B　頸部から外反して広がるものを一括した。頸部の立ち上がりや文様の有無から細分する

B１　体部と頸部の境界が不明瞭なもの

B２　体部と頸部の境界が明瞭なもの。通常、口縁部や体上部などに加飾を有するが、薄手で無文化したものも含める

C　頸部が一旦立直気味に立ち上がり、屈曲して外反するもの。パレス壺を志向した広口壺を含む。頸部の立ち上がり方から２細分する

C１　頸部が外傾気味に立ち上がるもの

C２　頸部が外傾しつつも内彎気味となる、いわゆる「袋状」を呈するもの

D　頸部が体部から屈折して外方へやや短く直線的に伸びるもの。口縁端面は加飾するものが多く、頸部突帯をもつものもある

E　口縁部が受口状をなす広口壺

F　窄まった頸部から、口縁部が外反して開く細頸広口壺

複合口縁壺

A　パレス壺およびその系統のもの

B　頸部が外傾気味に立直した後、さらに外側へ直線的に開き、口縁端面も拡張されて外斜面をもつもの

C　口縁外面を垂下口縁として面を拡張し、円形浮文を貼付して加飾したもの

有段口縁壺

A　広口壺にさらに口縁部を付加したいわゆる二重口縁壺。形態によって細分できる

A１　体部より頸部が立直もしくは外傾気味に立ち上がった後、外側へ折れ、その後に外反して広がる口縁部が付加されるもの

A２　頸部から外反して広がる広口壺に、外反して広がる口縁部が付加されたもの。いわゆる「伊勢型二重口縁壺」

A３　短く外反する広口壺に、外反して広がる口縁部が付加されたもの。いわゆる「伊勢型二重口縁壺」も含む

A４　短く外反する広口壺に、立直する口縁部を付加したもの。二重口縁部を加飾するものもある

B　口縁部をく字形に内側に折り返し、袋状となったもの

C　口縁内外面を櫛描列点文で装飾したいわゆる柳ケ壺形土器

長頸壺

A　口頸部が外傾しつつ直線的に延びるもの。口頸部外面を加飾するものもある

B　口縁部にいくに従い外反するもの。A類に比べて短い

脚付壺

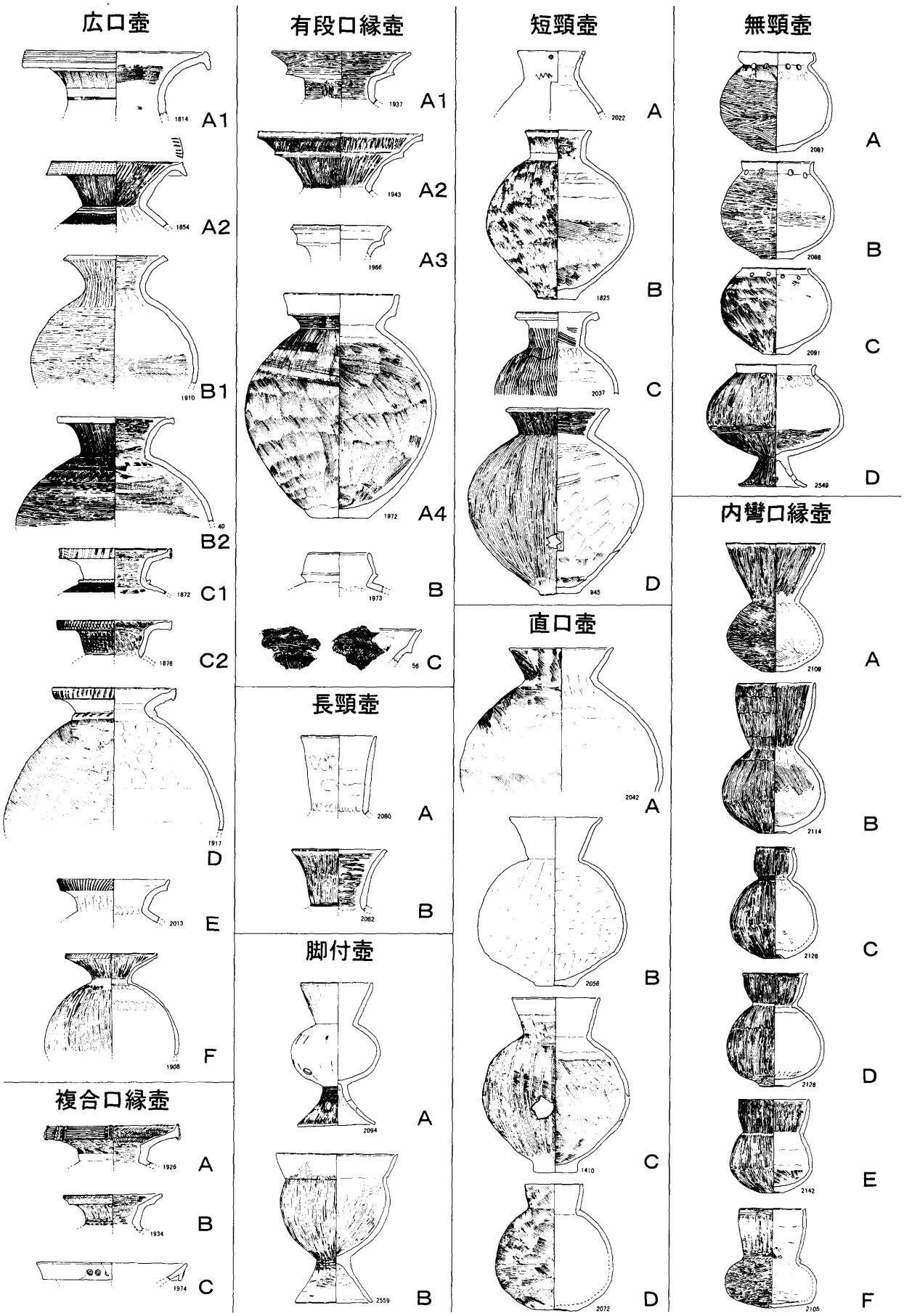
壺に脚台を付加したもの。東海地域に特徴的に存在する器種

A　脚台上に長頸壺を載せるもの

B　脚台上に内彎短口縁の鉢的な土器を載せるもの

短頸壺

A　口頸部と体部の境界が不明瞭で、頸部のくびれが弱いもの



第８図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（１）

B　口頸部と体部の境界が明瞭で、口縁部が緩く外反するもの

C　頸部が立直して立ち上がり、口縁部が外面して端部に面をもつもの。長頸壺を短くしたもの

D　卵形の体部をもち、太い頸部から短く外反する口縁部をもつもの。広口短頸壺

直口壺

A　窄まった細頸の頸部から直線的に急角度で外傾する口縁部が延びるもの

B　下膨れの体部から外傾してやや長めに立ち上がる口頸部をもつもの

C　やや太めの頸部から、緩く外傾する直線的な口頸部をもつもの

D　円形もしくは下膨れの扁球形の体部から、短く立直する口縁部をもつもの

無頸壺

無頸の壺もしくは体部から短い口縁部がそのまま付くものを該当させる。蓋を装着し、そのための紐通し孔をもつものが多い。

A　くびれ径と短く立ち上がる口径がほぼ等しいもののうち、口縁部が受口状に内彎するもの

B　口縁部が短く立直するもの

C　立ち上がりが全くないもの

D　脚台が付く台付無頸壺の形状をとるもの

内彎口縁壺

A　口径と扁球形の胴部径がほぼ等しく、口頸部が大きく外傾しながら逆三角状に開き、口縁部付近でやや内彎するもの

B　Aよりも口縁部の開きが緩やかで、口頸部中央へ向かって一旦膨らみ、口縁でやや窄まるスマートな形状をとる。貝殻腹縁による扇状刺突を持つものも多い

C　体部が下膨れの形状が進み、口頸部はBの口頸部を縮小して内斜面のヨコナデが強まって端部を外側へつまみ出した形状をとるもの。貝殻腹縁による扇状刺突を持つものもある。いわゆるヒサゴ壺

D　Cの口頸部がさらに外開きとなり、端部の外面への突出も強まるもの

E　緩やかな膨らみをもった長めの口頸部に、口頸部高よりも低い下膨れの偏平な胴部をもつもの

F　くびれが弱い太頸から、短く膨らむ体部高の約半分の口頸部が延びるもの

小形壺

器高が25cm以内の小型の壺で、様々な形状の口縁部をもったものを総称する。これまで分類してきた各種壺の縮小版のものが多く、これを基本として分類する。

A　広口壺の縮小版タイプ

B　短頸壺の縮小版タイプ

C　太頸短頸広口壺の縮小版タイプ

D　直口壺の縮小版タイプ

小型直口壺

球形もしくは扁球形の体部から外傾する直線的な口頸部が延びる小型の壺。底部は丸底。口頸部形状や法量の差異から3細分する。

A　器高が15～16cm前後にあり、やや太めの頸部から直線的な口頸部が延びるもの。直口壺Cの縮小版タイプ

B　器高が15～16cm前後にあり、窄まった頸部から外傾する直線的な口頸部が延びるもの

C　器高が約12cm前後と小さいもの

【小型坩】

丸底の体部に、外傾して広がる口頸部をもつ小型品のうち、いわゆる小型丸底壺と小型丸底鉢を一括する。なお、平底のものに関しても、この系統の土器と認められるものについてはここに含める。

A　いわゆる小型丸底壺のうち、短口頸のもの

A1　内彎系の短い口縁部が付くもの

A2　外反系の短い口縁部が付くもの

B　いわゆる小型丸底壺のうち、口縁部がやや長いもの

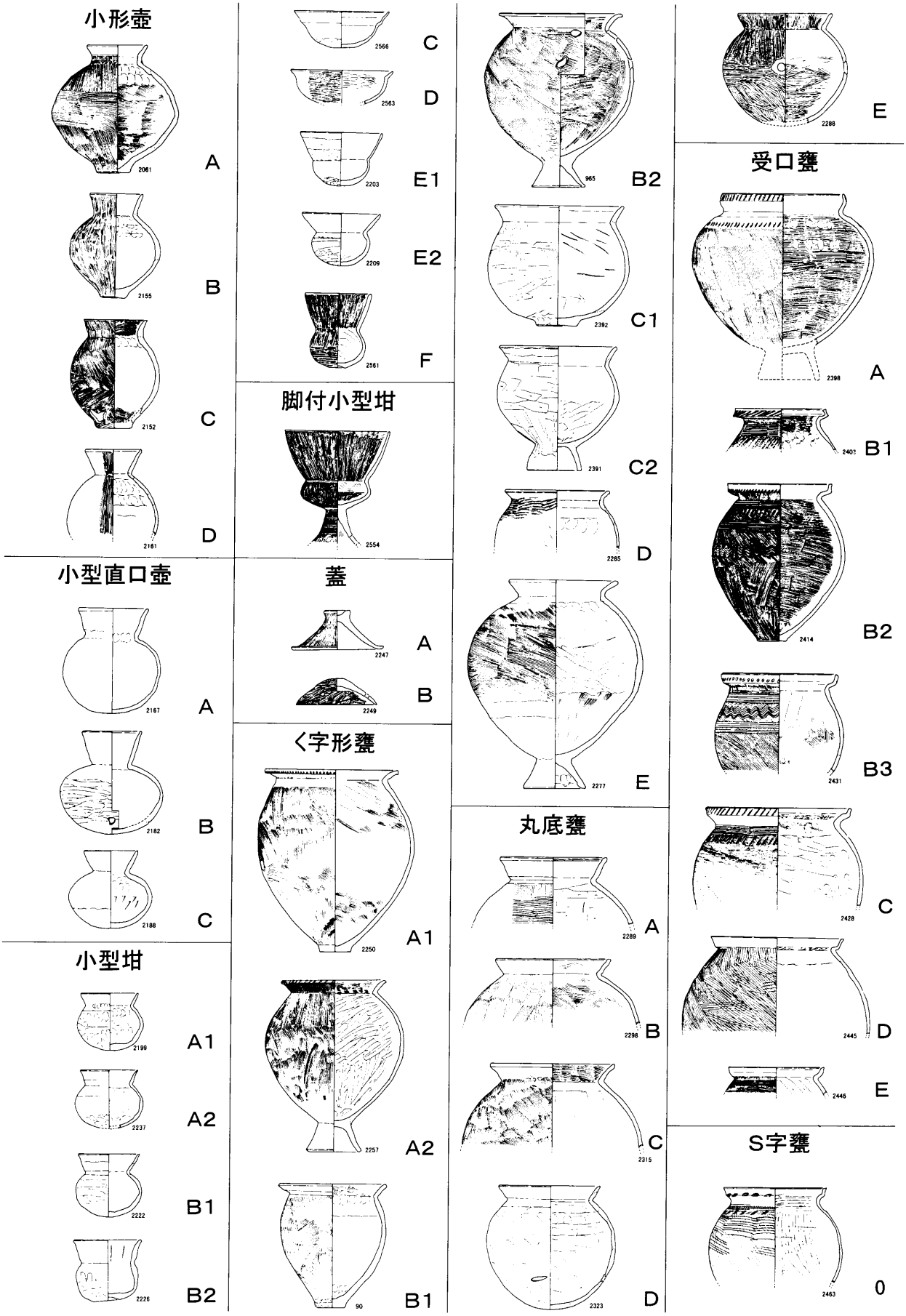
B1　口縁部が外傾して直線的ないしは外反して外側へ延び、胴部成形が比較的丁寧なもの

B2　口縁部の外傾度がやや弱まり、頸部の括れがゆるやかで、口径と胴部径が拮抗する粗製のもの

C　口縁部が有段の有段鉢の形態をとるもの

D　体部径が大きい横長形態の体部に短い口縁部が付くもの

E　いわゆる小型丸底鉢のうち、口径が体部径を凌



第９図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（２）

ぐもの。形状により２細分する

E１　口縁部高と半球状の体部高がほぼ拮抗し、内彎する大振りの口縁部が付くもの

E２　頸部がより窄み、体部高が口縁部高を凌ぐもの

F　球形の体部に長大な内彎口縁が付くもの。口径と体部径は同等かやや口径が勝る

【脚付小型坩】

いわゆる小型丸底鉢（小型坩）に脚台が付くもの

【蓋】

A　山形で、頂部にツマミが付くタイプ

B　頂部は丸く肥厚するが、ツマミが付かないタイプ。有孔

【甕】

甕は、大きく口縁部形状から、く字形口縁甕、受口口縁甕、S字状口縁台付甕（以下、S字甕）の３種に分かれる。

く字形甕

口縁部が外傾もしくは外反する平底（上底を含む）ないしは台付の甕を一括する。

A　最大径が中央もしくはそのすこし上にくる紡錘形もしくは卵形の体部をもち、外反する口縁部の端部に刻みを入れるハケ調整のもの

A１　平底のもの

A２　脚台付きのもの

B　口縁端部に刻みをもたない胴長形状のハケ調整のもの

B１　平底のもの

B２　脚台付きのもの

C　口径が体部高に近い下膨れのずんぐりとした器形をもつもの

C１　平底のもの

C２　脚台付きのもの

D　体部をタタキ調整するもの

E　B２形態と類似するが、脚台を含む下半部の形状がS字甕と共通するもの

丸底甕

口縁部はく字形を呈するが、底部が丸底になるもの。系譜上の淵源が近畿地方の布留式の影響下にあり、それが在地化したものも含む。口縁形態や調整等から５つに分ける。

A　口縁部が内彎して端部が肥厚し、体部内面をヘラケズリするもの。肩部外面にはハケを施すことが多い。比較的布留式の規範を踏襲しているもの

B　口縁部は内彎しつつも上端に面をもつか外傾するもので、体部内面がハケもしくはナデ調整となったもの

C　口縁部は、外傾するか外反気味で、外斜面をもち、やや厚手の作りのもの。体部内面はナデ調整を基本とする

D　口縁部が外反もしくは外傾し、外面調整はケズリ・板ナデ・ナデを基本とした粗製のもの

E　体部をミガキ調整した精製のく字形丸底甕

受口甕

口縁部形態より、大きく５類に分け、さらにそれぞれを細分する。

A　口縁部を内側に屈曲させ、頸部くびれより上が「く」字形を呈するもの。口縁外面に刻みを入れて装飾する

B　外反する受口基部に上方への立ち上がり部を付加したもの。形態から３類に分ける

B１　体部と受口基部の屈曲が緩やかで、立ち上がり部が内側へ屈曲し、端面が内斜面となるもの

B２　立ち上がり部が立直し、口縁上端に面をもつもの

B３　体部と受口基部の屈曲が鋭くなり、立ち上がり部が外側へ向かうもの。口縁端部は外斜面をなす

C　外反する基部が長いのに対して、立ち上がりが短小なもの。はね上げ口縁的なものもある

D　基部が短く外側へ屈折し、外反する長い立ち上がりをもつもの。装飾は少ない

E　基部と立ち上がりの境が不明瞭で、強い内彎形状を呈するもの。外面は、基部１回と立ち上がり部１回の計２回のヨコナデを施すが、内面は１回のヨコナデによるものが多い。装飾は少ない

S字甕

大きく分類すると受口甕の一種には違いないが、S字甕としてひとつの系列をもつため、ここでは独立して扱う。伊勢出土のS字甕の分類については、川崎志乃・伊藤裕偉両氏により提示された島貫分類[1]があり、ここでもそれを準用する。なお、S字甕は学史上、成立期のものを0期とするのが一般的なため、ここでもそれを踏襲した。

0　頸部（基部）の屈曲が緩やかで、立ち上がり部がほぼ立直するもの。口縁部外面を押し引き文、体上部を直線文で装飾し、さらにその上もしくは下部に刺突文で装飾するものがある

A　口縁端部に施された強いヨコナデのため、端部内面に外側へも突出するシャープな面をもつようになるもの。頸部の屈曲が鋭くなり、口縁部の断面が「S」字状を呈するようになる

B　体部ハケ調整（体部く字形状のハケ施文）、脚裾部の内側への折り返し等が定式化する

C　口縁部の立ち上がりが弱くなり、外側へ向かって開くようになる段階。口縁端部は上端に面を形成する

D　頸部の屈曲後、基部が短く、立ち上がり部に大きなヨコナデを1回施して外傾きの口縁部を形成するもの。肩部のヨコハケは消失し、ハケ全体が粗雑化する

E　受口状の口縁を形成せず、頸部から口縁部外面までを1回のヨコナデによって形成するが、口縁端部の外側へのつまみ出しと口縁内面のヨコナデによる内彎に前代の名残を見せる

S字系複合口縁甕

口縁基部の成形方法がS字甕C類と共通し、それとの類縁性が強いもの。形態的には、S字甕C類の口縁部に粘土を追加して口縁部を延ばし、複合口縁化したもの。

【鉢】

把手付有頸鉢

大型の有頸鉢の体上部に逆U字形の把手をもつもの。脚台付きになることが多い

有頸鉢

A　頸部がくびれる大型の鉢

B　頸部がくびれず、半円形の体部に外反する口縁部がつくもの

C　口縁部が受口状口縁になる加飾鉢（受口鉢）

D　口縁部が後半期のS字甕と共通する口縁部をもつ深鉢タイプの鉢。体部調整はナデ・ケズリを基本とした粗製の調整をとるもの（S字鉢）

無頸鉢

A　口縁部の屈曲がない無頸・平底の粗製の鉢のうち、深鉢タイプのもの

B　同様の調整・口縁形態をもった浅鉢タイプのもの

小型有頸鉢

A　有頸であるが頸部がくびれない深鉢タイプの小型品

B　いわゆる小型丸底鉢の底部が明瞭な平底形態をとるもの（口径の半分程度の底径）

C　頸部がくびれる丸底タイプの小型有頸鉢

小型無頸鉢

A　平底もしくは上げ底の底部からやや内彎気味に外傾して外開きになるもの

A1　ヘラミガキを用いた精製品

A2　ナデ・ハケ・ケズリを残す粗製品

B　平底なしいは上げ底の底部から、半球形の体部が立ち上がる碗状を呈した小型鉢

B1　ヘラミガキを用いた精製品

B2　ナデ・ハケ・ケズリを残す粗製品

C　平底の底部から外傾してやや直線的に立ち上がるやや腰高の鉢。甕の体下半部の形状に共通する

D　半球状もしくは碗状の体部に台がつく脚付鉢

【手焙形土器】

雲出島貫遺跡の川崎分類[2]を踏襲・追加し、鉢部の口縁形態から分類する。

A　く字形口縁を有する鉢部に覆部が付くもの

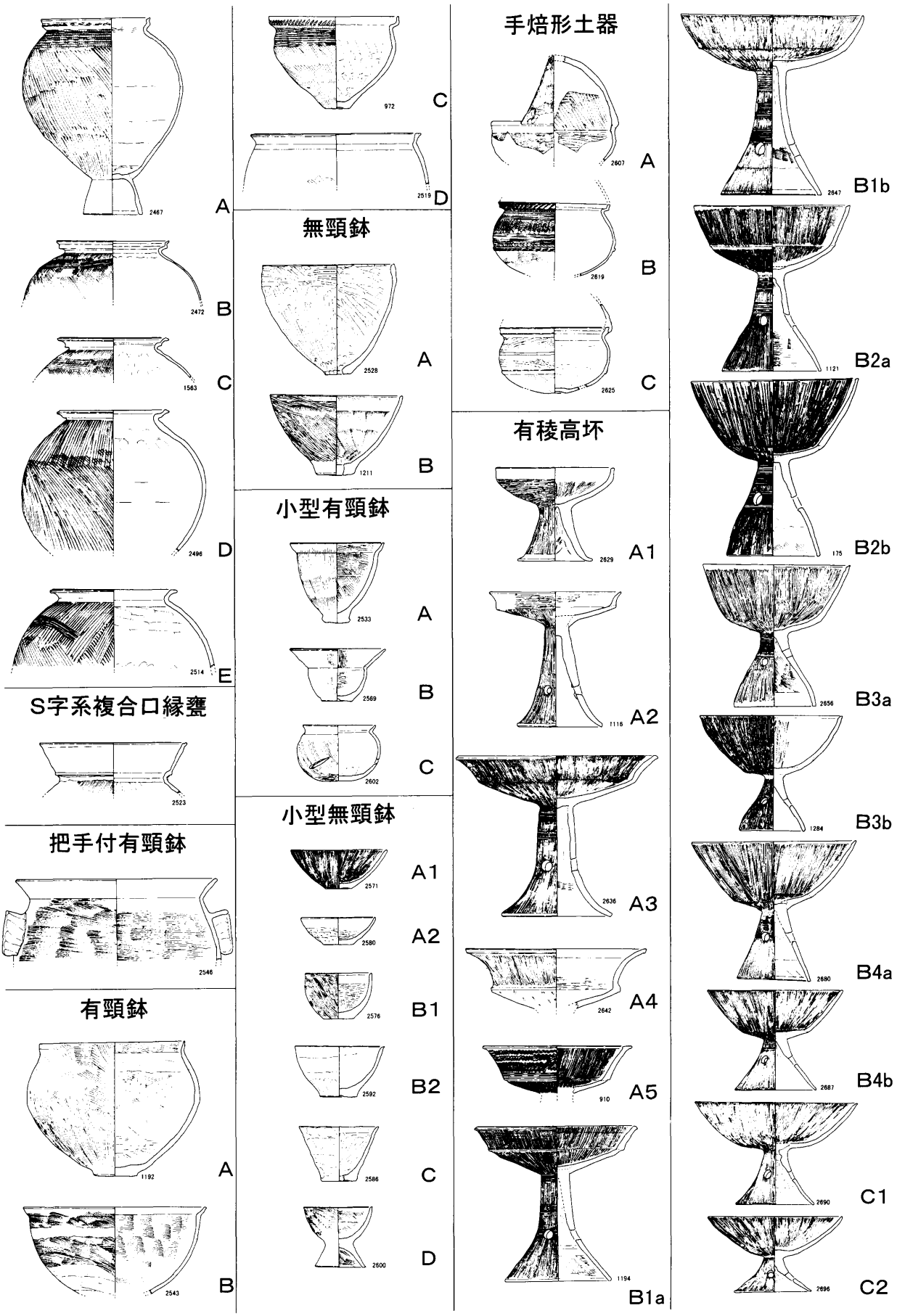
B　受口状口縁を有する鉢部に覆部が付くもの

C　S字状口縁を有する鉢部に覆部が付くもの

【高坏】

有稜高坏

弥生時代後期から古墳時代前期の高坏のうち、い



第10図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（３）

わゆるV様式系の口縁部が外反する高坏から型式変化を追える東海系の有稜高坏を一括する。以下、V様式系の坏部・脚部が外反系のものをA、内彎傾向を持ちはじめて以降をB、再び外反化するものをCとして扱う。

A1　坏部は、内彎気味の底部に短く立直する口縁部が付き、脚部は太く、脚上から裾部にかけて外側へ広がるもの。弥生中期の形態を残す

A2　坏部は、内彎気味の底部から屈曲して短く外反する口縁部が付き、脚部は脚上から脚裾にかけて外反するもの

A3　脚上部が柱状を呈し、屈曲して脚下部が外反するもの

A4　坏の受部が発達して口縁部が長大に外反したもの

A5　坏の受部が発達した上端面をもち、受部外面を加飾したもの

B1a　坏部は依然外反傾向を持つが、長脚の脚裾部が内彎傾向を持ちはじめるもの

B1b　坏部の大型化が進み、脚裾部は明瞭に内彎する。坏部は発達するものの、見込み部のほうが口縁部よりまだ長く、口縁端部は丸く収める

B2a　坏部の見込み部と口縁部の長さが等しいか内彎する口縁部のほうが長くなり、端部は内斜面をもつ。脚部は依然長大で、脚裾の内彎傾向が一段と進む

B2b　口縁部が発達して長大になるのに対して見込み部が縮小し、脚部も脚上の脚柱部が省略されて内彎する脚裾部が直接坏に接合されるようになる

B3a　坏部がやや浅くなって、脚部の低脚化もあり、脚部の短小化が一段と進む

B3b　坏部の外傾傾向が強まり、脚部が内彎しつつも最も短小化したもの

B4a　見込み部の縮小化が進行し、口縁端部の内斜面が明瞭でなくなり、丸く収められるもので、坏部・脚部が直線傾向をもつ

B4b　浅い坏部の受部が直線化し、直線化した脚部がより短小なもの

C1　坏部が浅く外開きとなり、脚部が外反化するもの。脚部の内面は、ヘラケズリするものが出てくる

C2　坏部は見込み部と口縁部の境が曖昧となり脚部の外反傾向も強まる

ワイングラス形高坏（以下、グラス形高坏）

A　坏部は、下膨れでその部分に最大径があり、口縁部がわずかに外反するもの。脚部は長脚で裾部が外反し、円孔をもつ

B　坏部が下膨れのボール状を呈するもの。Aに比べるとやや脚部が短い

C　坏部が下膨れ形状をとり、その部分の径とゆるやかに外反する口縁部の径がほぼ同等なもの。Aに比べるとやや脚部が短い

D　坏部が下膨れ形状で、外反する口縁部が最大径になるもの。脚部は直線文と刺突文で装飾するものが多い

碗状高坏

A　坏部が浅い皿状を呈するもの

B　坏部が半球形を呈するもの。法量に大小がある

C　平坦な坏底部から深く内彎しつつ立ち上がる口縁部が付くもの

D　長脚の脚部にやや外反気味の浅い碗状の坏部をもつもの。脚部に羽状列点文等の装飾を施すものもある

E　浅い碗状の坏部に底径の狭い脚部をもつもの

小型高坏

A　有稜高坏を小型化したもの。有稜高坏同様に坏部形態が異なるが、全体に坏部を小さく作る傾向にある。形態により2細分する

A1　内彎口縁に内彎脚がつくもの

A2　浅めの坏部に外反脚がつくもの

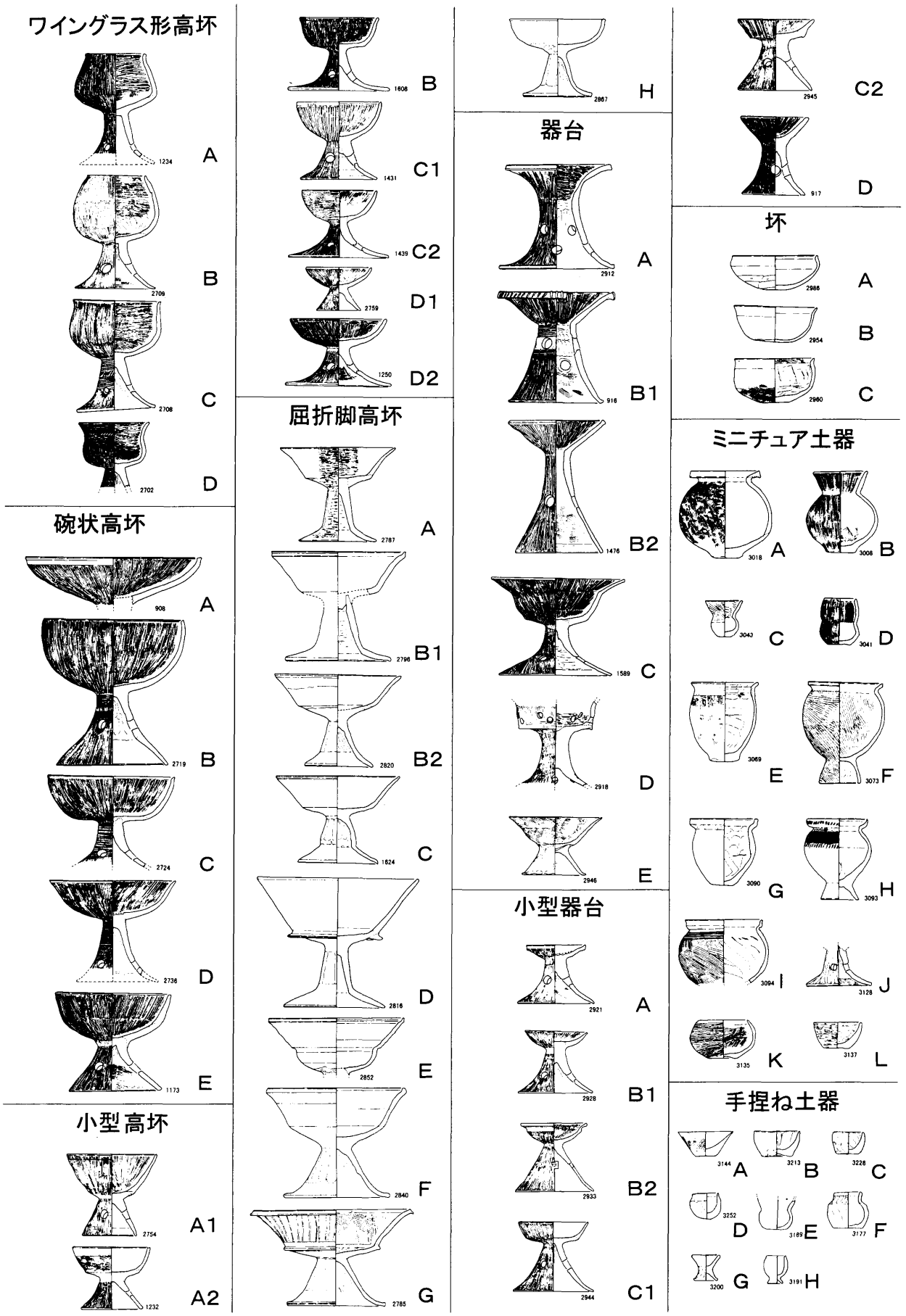
B　坏部は前述の碗状高坏Cを小型化したもので、口径よりも大きい底径の裾広がりの脚部をもつもの

C　半円形を呈する深めの坏部に外反して広がる脚部が付くもの。脚形態の差異より2細分する

C1　口径が底径に優越するもの

C2　底径が口径に優越する裾広がりのもの

D　浅い碗状坏に外反して広がる脚部をもつもの　脚形態の差異より2細分する



第11図　弥生後期～古墳時代土師器の形式分類（4）

D１　口径が底径に優越するもの

D２　底径が口径に優越する裾広がりのもの

屈折脚高坏

古墳時代前期から中期にかけて存在する脚部に屈折部をもつ高坏を総称する。形態差や坏部と脚部の接合の差異も大きいが、形状の認識をより明確化するため、多少の分類を行う。

A　比較的細長い脚上から明確に屈曲して開く脚裾をもち、坏部も平坦な見込み部と外反する口縁部が明確に区別できるもの。脚部は横方向の細かいヘラミガキを施すのが基本。基本的には円孔を持たないが、例外的にもつものもある。坏部に脚部を挿入して坏部と脚部を接合する。近畿地方の布留式の影響にあるもの

B　Aの規範が弱まり、脚上と脚裾の区別、坏見込み部と口縁部の区別が一部もしくは全体に緩んできたものを一括する。脚柱部内面の成形方法の差異より細分する

B１　脚柱部内面をヘラケズリするもの。脚部内面の脚柱と脚裾の境界が明瞭

B２　脚柱内面はナデ調整により、シボリ痕跡がより明瞭なもの。脚内面の脚柱と脚裾の境界が不明瞭

C　脚柱部が膨らむいわゆるエンタシス形の脚部をもつもの

D　坏屈曲部に明瞭な垂下部が存在するもので、大型品

E　坏部が碗状の見込み部から屈曲して外方へ直線的に広がる口縁部をもつもの

F　口縁部は外反しつつ広がって端部をつまみ上げるもので、脚裾部は屈折というより外側へ屈曲するもの

G　坏屈曲部に明瞭な段をもち、口縁部は外反するもので、脚部はハの字状に外開きになるか、さらに脚裾部が外側へ屈曲するもの。坏の内外面に太めの縦ヘラミガキを間隔を開けて施す

H　碗形の坏部をもつが、前述の有稜高坏の系譜に属さず、古墳時代中期以降に出現するもの

【器台】

A　透孔の形態や装飾の有無に差異はあるが、口縁部と脚部、括れ部の境界が不明瞭なものを一括する

B　受部と脚部の境界が明瞭で、細長い脚部から直線的に外方に開く受部をもつ、いわゆる「東海系器台[3]」。形状より２細分するが、これは時期差を反映していよう

B１　やや外反気味の脚部をもつもの

B２　長脚の内彎脚をもつもの

C　一旦碗状に立ち上がってさらに屈折して外方へ立ち上がる受部をもつもの。高坏とすべきかもしれない

D　高坏タイプの受部に透孔をもつもの

E　ハ字状に開く脚部に、大きく逆ハ字状に開く受部をもつ粗製のもの

【小型器台】

受部の形態を軸に分類する。なお、六大Ａ遺跡土の小型器台は、ほとんどが受部と脚部が貫通しない。

A　大きくハ字形に広がる脚部に、直線的に外側へ開く受部をもつもの

B　浅い碗状の受部をもつもの。口縁端部の形態によって細分する

B１　口縁端部を丸く収めるもの

B２　口縁がヨコナデによって外反するもの

C　受部が屈折して立ち上がるもの。Ｂより口縁部が大振り。立ち上がりの形態によって細分する

C１　受部立ち上がりが内外面ともに明瞭なもの

C２　受部立ち上がりが外面は明瞭であるが、内面は不明瞭なもの

D　やや碗状の受部に外反する長脚をもつもの

【坏】

A　ややひしゃげた半球状を呈するもの。口縁端部を丸く収めるものと、ヨコナデによる内斜面をもつものがある

B　口縁部内面に施したヨコナデのため、端部が外反するもの

C　やや下膨れで平底を呈するもの

【ミニチュア土器】

範となった土器があってそれを縮小再生産したも

の、ないしは範となったものは不明ながらミガキ等によって精巧に作られた土器。既に述べてきた本来の大きさの土器（範となった元の土器）を基に分類する。ただし、本来の大きさより縮小化されているとはいえ、その大きさにはバリエーションがある。

A　広口壺・複合口縁壺・有段口縁壺などを母体とするもの
B　短頸壺・直口壺などを母体とするもの
C　小型坩を母体とするもの
D　内彎口縁壺を母体とするもの
E　く字形甕を母体とするもの
F　台付く字形甕を母体とするもの
G　受口甕を母体とするもの
H　台付受口甕を母体とするもの
I　S字甕を母体とするもの
J　高坏を母体とするもの
K　内彎の無頸鉢を母体とするもの
L　形状的には鉢タイプの手捏ね土器と共通するが内外面の調整にミガキを用いた精製品

【手捏ね土器】

ナデ・オサエ・板ナデ等によって成形された粗製の土器。大まかに「壺」「鉢」などの指向はあるが何か元あった器種の縮小版ではなく、小さいながらもそれ自体一つの独立した器種として成立しているもの。形態より細分するが、法量には幅がある。

A　平底で、括れなく外方へ立ち上がる鉢タイプのもの。口縁部が外方へ直線的に立ち上がり、端部に向かって厚みが細くなっていく
B　口縁部が内彎気味に立ち上がる碗状タイプのもの。口縁端部に面をもつものもある
C　平底で、上方に立ち上がるコップタイプのもの
D　丸底で、半球形もしくはさらに口縁部が内側へ内彎した無頸壺を呈するもの
E　丸底で、明瞭な外広がりの口縁部をもつもの
F　平底で、壺を指向するもの
G　台付鉢を指向するもの
H　脚部を有し、碗状のものが載るもの

（穂積）

（註）

① 伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の上師器」・川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」ともに『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001　所収
② 前掲註①川崎文献
③ 赤塚次郎「東海系器台覚書」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会　1993

Ⅳ　旧河道ＳＲ２とその周辺遺構の調査

六大Ａ遺跡では最も低く、市道を境として一段下がった場所にあたる。平成６年度末の範囲確認調査の結果、市道際（南側）の水田１枚分は既に削平されていることが明らかになったため、その部分を除外した4980㎡を本調査範囲として発掘調査を実施したが、調査の過程で調査区南側は削平等によってさらに広く無遺構部が広がることが判明した。そのため、遺構の存在しなかった部分は遺構の有無を確認しただけで図化は行わなかった。これにより、最終的な図化面積は3770㎡となった。

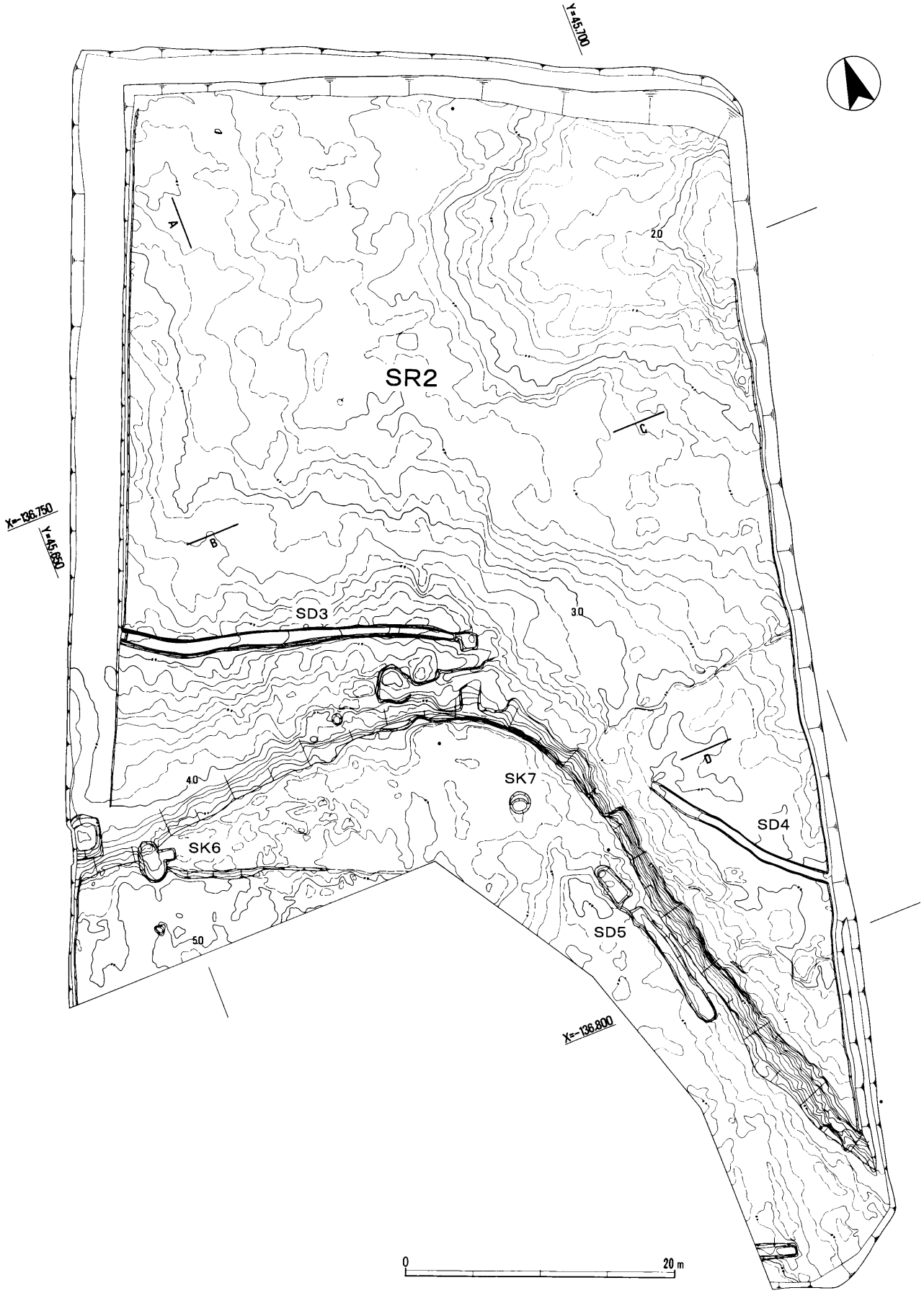
確認された遺構には、北を流れる志登茂川へ向かっての段丘状の落ち込みと考えられるもの（ＳＲ２）の他、溝３条と土坑２基がある。このうち、人為的なものは溝２条と土坑１基である。

第１節　旧河道ＳＲ２の調査

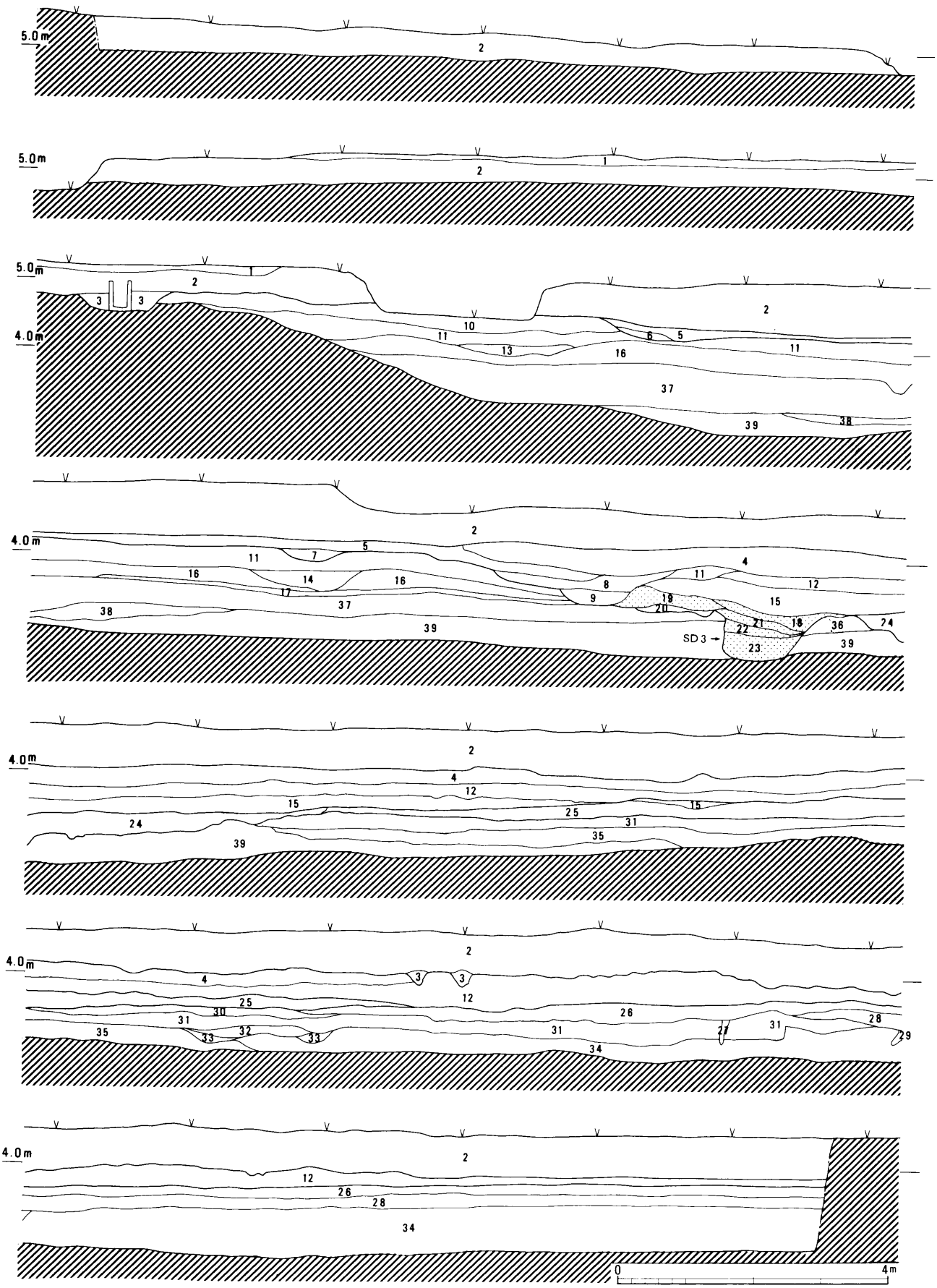
１　形態

旧河道ＳＲ２（以下、「ＳＲ２」）は、下段の調査区のほぼ全域にわたって確認できた段丘状の落ち込み遺構である。肩部から段がつくように１ｍ程度一気に落ちるが、そこから先はなだらかに下がっていくのみである。

平面形は、調査区の南側でＬ字状に屈折し、頂点から一方は西側へ、もう一方は南側へ延びる。このうち、西側へ延びる方の肩部は、中段の大溝ＳＤ１が延長してきた右岸部分に相当する可能性が高い。そういうてんでは、ＳＲ２とＳＤ１はセットで考えられるべき遺構というか、同一遺構の上流（ＳＤ１）と下流（ＳＲ２）の関係になるものと思われる。



第12図　下段実測図（ＳＲ２周辺）　　（１：400）



第13図　ＳＲ２土層図（１：80）

1 表土
2 整地土
3 攪乱
4 灰黄褐色砂質土(～3㎜の石含)[10YR4/2]
5 褐灰色砂質土[7.5YR4/1]
6 黒褐色土[5YR2/1]
7 黒褐色砂質土[10YR3/1]・灰黄褐色砂[10YR6/2]混層
8 褐灰色砂(礫含)[10YR6/1]
9 褐灰色砂[10YR6/1]
10 黒褐色土[5YR2/2]
11 黒色土[7.5YR2/1]
12 褐灰色土(やや砂質)[10YR4/1]
13 灰白色砂[N8/]
14 黒褐色砂質土[10YR3/1]・灰白色砂[10YR7/1]混層
15 褐灰色シルト[10YR4/1]
16 黒褐色粘質土(若干植物質含)[7.5YR2/2]
17 黒褐色粘質シルト[7.5YR3/1]
18 褐灰色砂質土[10YR4/1]
19 褐灰色砂質土[10YR4/1]
20 褐灰色砂[5YR4/1]
21 褐灰色砂(礫含)[5YR4/1]
22 黒褐色粘質シルト[10YR3/2]
23 灰白色砂[7.5YR1/1]
24 褐灰色砂(礫含)[5YR4/1]
25 褐灰色砂質土(細かい石粒多量に含む)[10YR5/1]
26 黒褐色土(やや粘質)
27 褐灰色砂
28 黒褐色砂質土(細かい石粒含む)[10YR3/1]
29 褐灰色砂質土
30 黒褐色砂質土(細かい石粒多量に含む)[10YR3/1]
31 黒褐色粘質土(粘質強い)[10YR2/2]
32 黒褐色粘質土[10YR3/1]
33 灰黄褐色砂[10YR5/2]
34 黒褐色粘質土(粘性強い)
35 褐灰色粘質土[10YR4/1]
36 黒褐色粘質土(植物質含)
37 暗褐色植物質堆積層(39に比べ粘質やや強く植物質が若干少ない)[10YR3/3]
38 暗褐色植物質混入粘質土層[10YR3/4]
39 暗褐色植物質堆積層[10YR3/3]

北側の肩部は、調査区内では確認できない。出土遺物も、南側の肩部に近い部分では大量に出土したが、北へ行くに従って疎らとなり、出土する遺物も山茶碗など時期幅が広くなっていく。

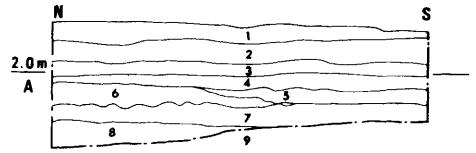
こうしたことから、ＳＲ２は志登茂川との間にもう一度立ち上がることなく、地形に従って志登茂川へ向かってそのまま落ちていくものと思われる。

そういう意味では、ＳＲ２は、志登茂川の流れによって形成された段丘状の落ち込みがそのまま低湿状になって志登茂川へ続いていくものと考えることができる。

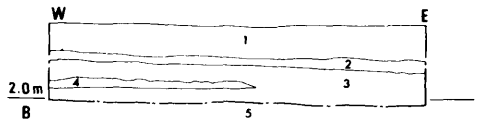
2　層序

埋土は、全体に粘性が強く、いわゆる砂層やラミナは存在しない。従って、絶えず水が流れていた状況ではなく、ゆるやかな堆積が徐々に進行していったものと判断される。

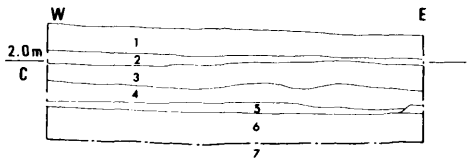
埋土は、大きく上層と下層に分けることが可能であるが、このうち遺物が出土するのは上層までで、下層は遺物を全く含まない木質を主体とした有機質の堆積層である。この有機質土は、草本植物と低木



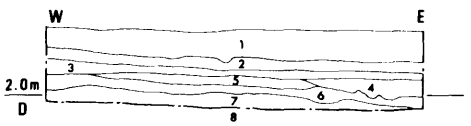
1 有機質堆積層(木質多含、マーブル状に堆積)灰色[5Y4/1]
2 黒褐色粘質シルト[2.5Y3/1]
3 黄灰色粘質シルト(粘性強)[2.5Y4/1]
4 黒褐色粘質シルト[10YR3/1]
5 黒褐色シルト(木質含)[10YR3/1]
6 黒褐色木質堆積層[10YR2/3]
7 黒褐色粘質シルト[10YR3/1]
8 黄灰色砂質土(若干の木質含)[2.5Y4/1]
9 灰色砂



1 有機質堆積層(木質多含)黒褐色[10YR3/1]
2 黄灰色粘質シルト[2.5Y3/1]
3 有機質堆積層 黒褐色[10YR2/3]
4 黄灰色粘質シルト[2.5Y3/1]
5 灰色砂



1 有機質堆積層(木質多含、マーブル状に堆積)灰色[5Y4/1]
2 黒褐色粘質シルト(木質含)[2.5Y3/1]
3 黒褐色粘質シルト(2層より粘性強、植物質少含)[2.5Y3/1]
4 黄灰色粘質シルト(3層よりも粘性強)[2.5Y4/1]
5 黒褐色粘質シルト(粘性は2層と同程度)[10YR3/2]
6 黒褐色木質堆積層(1層より木質少含)[10YR2/3]
7 灰色砂



1 有機質堆積層(木質多含)黒褐色[10YR3/1]
2 黒褐色シルト(木質含)[10YR3/1]
3 黄灰色粘質シルト(粘質強)[2.5Y4/1]
4 有機質堆積層(1層に比べ木質少含)[10YR2/3]
5 黄灰色粘質シルト(3層より粘性弱)
6 褐灰色粘質シルト[10YR4/1]
7 有機質堆積層(1層より木質少含)[10YR2/3]
8 灰色砂

第14図　ＳＲ２下層確認グリッド土層図（１：80）

が交互に堆積したような状況を呈しており、水位の上下動に伴う植生の変化を示すもの、と捉えられている①。

上層の遺物を含む層は、土質や埋土の色調によって細分することが可能であるが、それに対応して出土遺物も時代毎に出土するわけではない。

（註）

① 中村光司「Ｃ地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅶ三重県埋蔵文化財センター 1995

3　遺物出土状況

前述のように、南側の肩部を中心に大量の遺物（土器・木器・石製品）が出土した。出土遺物の時

間幅は、弥生時代後期から古墳時代後期を中心とするが、縄文時代晩期のものや、古墳時代以降のものも少数ながら出土しており、中世まで確認できる。

遺物が出土する部分は、埋土でも上層である。前述のように、分層した層序と出土遺物の所属時期が対応して出土するわけではない。

第16図は、『概報』Ⅶに掲載した中村光司氏作成の出土遺物小地区別重量分布図である。この図からも読み取れるように、遺物はＳＲ２の肩部付近、具体的には肩部から直線距離にして16m以内の部分からの出土が中心で、特に濃密な部分は肩部からの距離が８m以内の部分に納まり、北側へいくほど希薄になっていくことが分かる。出土遺物の多くがあまりローリングを受けた状況にはないこととも考えあわせ、ＳＲ２の出土遺物のほとんどが肩部より投棄されたものであることを示していよう。

以下、時代毎に、出土遺物の出土の状況をみていこう。

a　縄文時代晩期～弥生時代前期

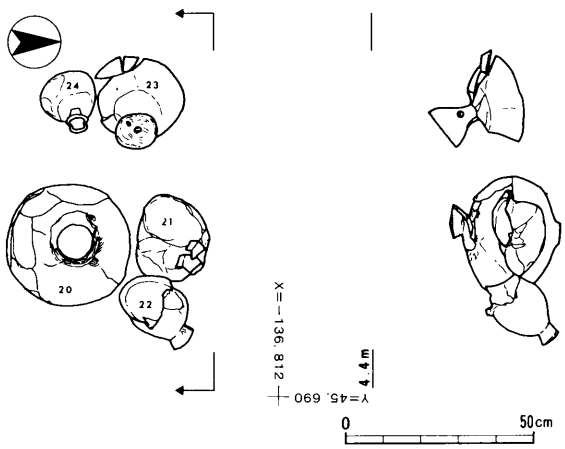
遺物量こそ少ないものの、小地区Ｂ－Ｓ14区を中心とした東西12m×南北８mの範囲内で集中して出土した。もっとも、この範囲は最大に見積もっての範囲であり、遺物取り上げが４m方眼の小地区単位のため、実際にはＢ－Ｓ14区を中心としつつも、もう少し狭い範囲に集中していたのかもしれない。これ以外の地点での出土は極めて単発的である。そういう意味では、当該時期の遺物の出土状況には、ある程度の偏在性を認められうる。

なお、単発的に出土したものについても、出土地点は１点を除いていずれもＳＲ２の肩部もしくはその隣接地である。

b　弥生時代後期～古墳時代

ＳＲ２出土遺物の大部分を占める。ＳＲ２の肩部とその隣接地を中心として大量に出土したが、同じ肩部でもＳＲ２の屈曲部はやや遺物の出土が薄く、その両側で多い。遺物の出土が肩部を中心とすることや、ほとんどローリングを受けていない土器が多いことは、これら大量の遺物が肩部からＳＲ２に向かって投棄されたことを示しているのであろう。

肩部出土の土器のなかには、投棄時の一括性を示すと思われるような出土状況をとるものもある。前述のように、今回、それらをそれぞれ「土器群」として把握し、報告していく。



第15図　ＳＲ２土器群59出土状況図（１：20）

土器群58

壺２点が倒れた状態で、同一面から２点並んで出土した。ローリングも受けていない遺存状態のよいものであり、他所で別々に投棄されたものがたまたまここに流れ着いたと考えるより、やはりここで同時に投棄されたとみたほうが自然であろう。

土器群59

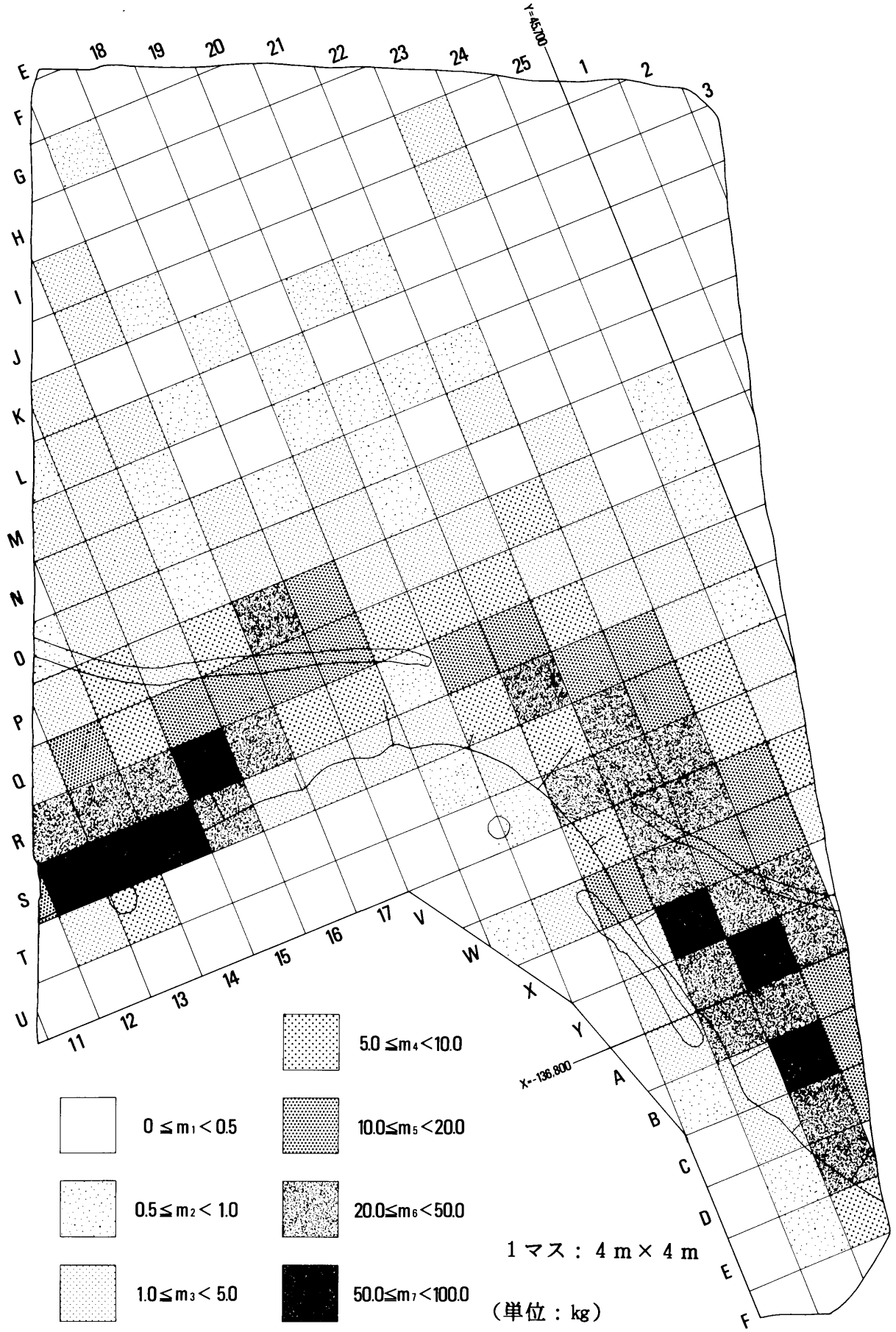
同一の検出面で、幅80×55cmの範囲で隣接して出土した一群で、一括性は高いと思われる。広口壺１点と甕２点、それに高坏２点がある。広口壺の１点は正立状態で出土したが、甕や高坏などは倒立しており、置かれたような状態にはない。低湿状のところに一括して投棄されたため、たまたま壺は正立で残ったものと考えられる。

土器群60

Ｂ－Ｙ24区からまとまった状態で出土した一群である。出土状況図や写真はないが、現地調査段階では同一面での一括出土として認識され、ラベル付けのうえ、取り上げられた。図面類がないということではやや客観性に欠けるが、一応、これも土器群として把握し、後述の遺物説明に繋げる。

c　古代・中世

ＳＲ２の肩部付近からの出土は多いが、弥生後期～古墳時代の遺物ほどその集中性は顕著ではなく、特に山茶碗などの新しい時期の遺物は調査区北側も含めた広い範囲から出土する。こういうてんでは、肩部から投棄された遺物というよりは、いわゆる包



第16図　ＳＲ２遺物出土重量分布図（１：400）

含層的なものとして扱えられるものと思われる。

4　出土遺物

出土遺物には、土器・木製品・石製品があるが、木製品は既に報告しており、石製品は少数である。

出土遺物の時期は、大きく分けて、縄文時代晩期から弥生時代前期のもの、弥生時代後期のもの、古墳時代のもの、古代のもの、中世のものがある。

以下、時代別に見ていくこととする。

a　縄文時代晩期～弥生時代前期（1～17）

突帯文土器（1～12）と浮線網状文系土器（13～14）、それに弥生時代前期遠賀川系の壺（16）と打製石斧の破片（17）が存在する。

突帯文土器はいずれも深鉢で、刻目突帯のものと素文突帯のものが存在する。刻目突帯のものは、貝殻状工具によるものと押圧によるものがある。いずれも小破片資料のため、口縁部から肩部まで連続して残る個体は存在しないが、肩部にはあまり明瞭な段や稜はないようである。ただし、肩部にも突帯をもついわゆる2条突帯になるものはある。口縁端部に刻みをもつようなものは存在しない。全体として突帯文期のなかでも新しく、いわゆる馬見塚式以降の所産であろう。

浮線網状文系土器は2点出土しており、いずれも浅鉢である。13は口縁部が内側へ屈折するタイプ、14は口縁部が屈折せず全体形がボール形を呈するタイプである。ともに文様は横方向の多重凹線を基本として、その一部が途切れて凹点もしくは短凹線を貫入させている。

弥生時代前期の土器は1点のみ出土した（16）。肩部にヘラ描沈線を施した壺形土器である。

17は、厳密にはこの時期かどうか不明であるが、残存が悪いものの打製石斧の破片と思われることから、ここに措いた。

b　弥生時代後期～古墳時代

土器群58出土遺物（18～19）

広口壺B2（18）及びE（19）がある。

18は、口頸部の彎曲が弱く、やや直口口縁気味である。19は受口状口縁を呈し、胴部に焼成後穿孔を有する。祭祀用として使用されたものが、使用後に投棄されたものであろうか。

土器群59出土遺物（20～24）

短頸壺D（20）・受口甕E（21）・く字形甕B2（22）・有稜高坏B3a（23）・碗状高坏C（24）がある。

短頸壺20は、広口壺的様相をとるが、口縁部が短く、短頸壺とした。いわゆる短頸広口壺である。頸部直下の直線文の端を流水文状に垂下させて終わらせ垂下単位の間には羽状刺突をもつ。

受口甕21は、緩やかに内彎する口縁部をもった受口甕で、胴部が球形を呈して鉢的様相をとる。底部は残存していないが、脚付の可能性もある。

高坏を指標とすると、欠山式中段階で廻間Ⅰ式併行期[1]のものであろう。

土器群60出土遺物（25～35）

有段口縁壺A2（25）・直口壺A（26）・S字甕D（27）及び同E（28）と台部（29～30）・く字形甕（31）・屈折脚高坏B（32～34）・粗製無頸鉢（35）がある。土器群全体を通してミガキ調整が乏しく、ハケもしくはナデ仕上げのものが中心である。古墳時代中期の所産であろう。

埋土出土遺物

土器群としてまとまらなかった当該時期の遺物を一括する。出土量が多いため、個々の土器の形態や分類は実測図や観察表を参照願うとして、特徴的な個体を中心に記述を進めたい。

【弥生後期土器～古墳時代土師器】

広口壺（36～50）

A（36～38）・B2（39～41・44～46・49）・C2（42～43）・D（47～48）・脚部片（50）を図示した。

このうち46～48はやや小振りである。加飾のある個体は、口縁端部を拡張して羽状刺突もしくは列状刺突をもち、体上部に直線文と波状文を組み合わせた文様帯をもつものが多い。

なお、45は、口頸部の製作方法は、直口壺Aとの共通性がある。

複合口縁壺？（51）

口縁部の欠損のため不確定要素が大きいが、体部文様は当地域の複合口縁壺A（パレス壺）の有り様に類似しているため、本例に措定した。

有段口縁壺（52～59）

A2（53～55）・A3（52）・B（58～59）・C（56）がある。57は、口頸部が小さく、あるいは器台など

である可能性もある。53はヘラミガキが横方向であること、55は口縁内外に斜格子文を施すこと、58～59は体部内面にケズリが認められることに特徴がある。

長頸壺（60）

球形の体部をもった長頸壺Ｂである。口縁部加飾の有無に違いはあるがＳＤ１出土の1096等と共通する器形である。

脚付壺（61～62）

61は、脚付壺Ａで、胴部穿孔を有する。

短頸壺・直口壺（63～67）

63は短頸壺Ａ、64は直口壺Ａ、67は直口壺Ｄである。65は、丸底甕Ｄと類似するが、底部を平底に作った壺形状をもとるため、短頸壺として措定した。66は、体部文様がＳ字甕のハケ施文手法と共通性をもつ。

小形壺（68～78）

72には、胴部穿孔がある。77～78は、太頸で内彎口縁をもつ粗製品で、厚手の平底形態をとる。やや法量が大きく、小形壺に措定した。

小型直口壺（79～82）と小型坩（83～86）

79～81はいずれも頸部が締まる小型直口壺Ｂをとる。小型坩はいずれも粗製化したもので、86の底部外面には粗いケズリ調整の痕跡がよく残る。

内彎口縁壺（87）

口頸部は欠損するが、体部の形状や体部への貝殻腹縁刺突の特徴は、内彎口縁壺の特徴をよく示している。

く字形甕（88～93）

88～89はＢ、90はＢ１、92～93はＢ２、91はＡである。口縁形態や胴部形状には差異が大きい。92の胴部には焼成後穿孔を有する。

丸底甕（94～95）

94はＣ、95はＤである。

受口甕（96～101・103～109）

いずれも口縁部に列点文をもち、体部文様は直線文・波状文・列点文で２種類程度を組み合わせるものが多い。104や106は、口縁端部が外側へ引き出されればＳ字甕といえるような特徴をもつ。

Ｓ字甕（102・110～141）

102は、そのなかでも受口甕からの過渡的様相を示す成立期のＳ字甕の特徴をもつ。一応、こうした初期のものも認められるが、どちらかというと量的中心はＳ字甕でも後半期のＤ・Ｅ類にあろう。

甕脚台部（142～153）

142～145は、く字形甕か受口甕、146～153はＳ字甕の脚部であろう。

小型甕（154～161）

いずれもく字形甕の小型化であるが、159と160は口径に比べ器高が低く、鉢的様相をとる。また、体部内面をケズリ調整する161は、器形の特徴は小形壺としてもよい。

有稜高坏（162～189）

163と173は、脚部に直線文の他に列点文による加飾をもつ。182はやや小型の有稜高坏であるが、脚部の安定性の割には坏部がやや小さい。

屈折脚高坏（190～283）

形態的にはほぼ分類表に示したもので包含できるが、208は坏部に有頸の鉢を載せた形態をとる。また、全体に厚手で歪んだ作りの217や、極めて粗製の265など、個々にはやや斉一性に欠くものもみられる。

小型高坏（284 ～287）

286は小型高坏Ａ２、285は小型高坏Ｃ１であるが、285は坏部のミガキが横もしくは斜め方向を採っている。

坏（288～300）

288～298は坏Ａであるが、299と300は鉢的な器形である。

器台（301）

器台Ｂ１である。脚部と受部の境に素文の突帯をもつ。

小型器台（302～309）

302と303は受部中央が開放されており、器台Ｂ１を小型化したもので、小型器台の分類ではＡに相当する。304～305はＢ２、306～307はＢ１で、306や307は横ミガキも施されている。なお、坏部を欠損する308～309 は小型高坏の可能性もある。

脚付坩（310）と小型坩（311～323）

脚付坩は縦ミガキ調整の精製品、小型坩はいずれもミガキを施さない粗製品である。

小型直口壺（324）

口縁部は欠損するものの、小型直口壺である。胴

部穿孔を有しており、底部の尖り具合など器形的には須恵器甕との共通性をもつ。

小形壺（325～327）

325～327 は小形壺である。325は二重口縁壺、326は広口壺、327は内彎口縁壺との類縁性をもった縮小版であろう。

小型鉢（328～338）

有頸、無頸の小型鉢を一括した。328～330・332～333は小型有頸鉢Ｃ、331・335～336は小型無頸鉢Ｂ２、334は小型有頸鉢Ｂ、337は小型無頸鉢Ｃである。また、338は、口縁部や外面のハケがＳ字甕と共通する部分があり、Ｓ字鉢（有頸鉢Ｄ）を小型化したものとみることができよう。

ミニチュア土器（339～355）

ミニチュア土器である。339～342は壺の精製品、343～344は精製ではないが文様をもつ。348は無頸壺もしくは鉢が祖形である。352～355は、甕のミニチュアである。

手捏ね土器（356～377）

ハケをもつ360のようなものもあるが、基本的にはナデ・オサエによる成形である。

鉢（378～380）

378は、粗製の丸底？鉢で、口縁部はわずかに外反する部分がある。379と380は器形や体部調整にＳ字甕との共通性を有するＳ字系の鉢（有頸鉢Ｄ）ということができる。

手焙形土器（381～382）

このうち382は、口縁部の作りがＳ字甕と共通する。

蓋（383～385）

383は皿を倒立させたような形態、384は円盤状の形態をとる。385は本遺跡分類のＡ類である。

【韓式系土器】

ＳＲ２から出土した韓式系土器には、長胴甕・甕・把手付鍋・甑がある。

長胴甕（386）

格子タタキ後にハケを施した長胴甕である。六大Ａ遺跡出土の韓式系土器は、長胴甕の組成が低いのが特徴であるが、本例はその数少ない例になろう。

甑（387～393）

口縁部が外反するものと直口のまま収めるものがある。外面調整は、格子タタキのみで終えるものとその後にハケを施すものがある。

頸部もしくは胴部破片（394～414）

394は、頸部の屈曲が大きいもので、甕もしくは把手付鍋であろう。いずれも格子タタキを施す。

395も欠損部分も大きいが、やや寸胴な長胴甕もしくは甕になろう。

396～414は、胴部小片のため具体的な器種は決しがたいが、直線的なもの（例えば400等）は長胴甕もしくは甑、丸みを帯びているもの（例えば409等）は甕もしくは把手付鍋になろう。

甑もしくは把手付鍋の把手（415～422）

胴部との接合は挿入法によっているもので、把手上部からの切り込み、ないしは把手下部からの棒状具による刺突が認められるものについて韓式系土器の把手と認定した。なお、上部切り込みや下部刺突を持たないものでもこれらと極めて類似する胎土・焼成の特徴をもつもの（421～422）についても、韓式系土器とした。

【初期須恵器など】

若干新しい時期の須恵器も含むが、当地域での須恵器生産が一般化する以前で、主にいわゆる初期須恵器に相当する時期のものを一括した。以下、やや丁寧に解説する。

坏身・坏蓋（423～425）

坏蓋423は、天井部に丁寧なロクロケズリが施され、平坦化したもので、全体にシャープな作りである。これに対し、坏身424～425は、全体に丸みのある器形やシャープさに欠ける調整で、423よりも古い様相をもつ。

大型蓋（426～427）

ツマミ部と蓋本体がある。蓋は、手持ちヘラケズリによる調整が施されている。

高坏脚部（428～430）

428は、短脚で２段の透かしをもち、坏部との接合部に同心円状の沈線を有するもので、本遺跡出土須恵器のなかでも最も古いグループに属する。429は、脚裾に隆帯、その上に小円孔をもつもので、無文の430とともに定型化以前のものに属しよう。

無蓋高坏（431～434）

431～433は、突帯の本数や波状文との位置関係に差異がある。最も残りの良い431は、上から突帯・

波状文・2突帯という順になる。434は装飾をもたないタイプで、口縁端部は丸く収められている。

直口壺（435・452）

435は、口縁部外面を微かな隆帯によって上下2段に区画し、口縁部は丸く収めたもので、極めて装飾性に乏しい。452は2条の隆帯によって口縁外面を3段に区画し、中央部に波状文を施している。ともに薄手の作りである。

甕（436～438）

口頸部の波状文が436・438は頸部、437は口縁部に施されている。最も残りのよい438は、頸部が良く締まり、上方にせり出した肩部をもつ。

脚付壺（439）

壺の口縁部を倒立させたような形態の脚破片である。かすかな隆帯によって口縁部を2段に区画し、底部側に波状文を施し、端部には面を作りだす。

壺（440）

肩部に沈線を施した肩部破片である。小破片のため詳細は不明で、大形甕の可能性もある。

把手（441）

比較的大形の把手である。図示した下部のほうがやや大振りでカーブもやや緩いが、片側へのせり出しがあまりなく、比較的丸い形状の把手といえる。両端の接合部が緩い「ハ」字形に割れていることから、壺や提瓶など大型で丸い器形をもつものに接合していたものと思われる。

器台（442～449）

442～448は高坏形器台である。443は、口縁部を丸く収めた深い器形をもち、外面上部に断面が丸い突線間に上から斜格子文・スピード感に乏しい波状文、下部に列点文を施す。これに対し442や444は、口縁端部に面をもつやや浅めの器形で、突線はやや鋭くなり文様もロクロに対応した波状文のみとなり（ただしスピード感は乏しい）、やや新しい要素をもつ。脚部は、446と448が共に受部との接合部が太いタイプの器台で、446が最上段に円孔、以下、千鳥式に長方形透かしを配するのに対し、448は長方形透かしを直列式に配する。ともに波状文による装飾で、特に448は波状文の特徴やそれを区画する突線断面が丸い特徴などは443と極めて共通性が高い。447は、これらと違って、脚上部が細く締まるタイプの器台で、装飾はラフな波状文による。

449は、筒形器台の脚部である。小破片のため詳細は不明であるが、上段に透かしを施している。

壺・甕類（450～451・453～460）

法量の差異が大きいが、通有の壺・甕類を一括する。口縁端部は、丸く収めるものと外面に面を有するもの、それに450のようにやや肥厚したものなどがあり、いずれもやや下がった位置に突帯をもつ。451は、口縁部内面にユビオサエの痕跡が明瞭で、口縁部作出にあたってはいわゆる「手延べ」技法も使われていることがわかる。450のように口縁部が肥厚したものは、相対的に新しい時期になろう。

【その他の古墳時代須恵器】

上記に含めなかった古墳時代須恵器を一括する。

坏蓋（461～474）

461は天井部のロクロケズリも深く、全体に古い様相をとどめている。また、472は外面にカキメ状の細線をもつ。473～474は法量が極端に小さい。

坏身（475～487）

475は、口縁端部を面取りせずに丸く収めるもので、古い様相をもつ。外面に山形沈線のヘラ記号を有する。

碗状坏（488）

同時期の土師器坏を模倣したものであろう。

短脚高坏の脚部（489～491）

489～490はカキメを施している。いずれも透かしは円形で、脚裾を外反させない特徴をもつ。

甕（492～493）

ともに厚手で、493は円孔部が突出する。

器台（494・496）

脚部496は、1段につき3条の波状文を上から下へ施文している。

甕（495）

口縁部は丸く肥厚させ、体部外面に平行タタキ後カキメを施し、内面は同心円状あて具痕が残る。

【古墳時代後期土師器】

甕2点（497～498）を図示した。ともに口縁部を外反させるハケ調整の甕で、端部は丸く収めている。

【土製品】

土玉（499～503）

明確な所属時期は不明であるが、弥生時代後期か

ら古墳時代に所属時期の主体があるものと考え、ここに措いた。499は、やや断面が方形状を呈しており、あるいは土製紡錘車の可能性もある。

【石製品】

紡錘車（504）

断面の反りが強く、やや偏平な紡錘車である。

剣形（505）

薄型・粗製化し、全体の作りもシャープさに欠けるが、尖先部に穿たれた小円孔が剣形であることを示している。

勾玉（506～507）

剣形同様、薄く模造品化したものである。

双孔円板（508～516）

丁寧に作出された大型でやや厚手の508と、作りも粗雑な509以下がある。510や514、516などは欠損部を差し引いても正円形にはならず、やや楕円形状をとる。

管玉（517）

細長い形状をとる滑石製の管玉である。

滑石製臼玉（518～522）

518のみやや大形であるが、519以下は非常に小振りで、断面中央に稜線をもつタイプである。

c　古代

この時期の遺物はさほど多くない。以下、特徴的なものを中心に概観しておこう。

【土師器】

甕（523 ～527）

526や527は、口縁端部に上端面をもつ粗製の甕で、鍋への連続性を示す平安時代の所産であろう。

把手付鍋（528）

把手の断面が円形を示すことはやや古い様相を示すものであろう。ハケ痕跡が残る。

【須恵器】

陶臼（529）

厚手の底部から一端括れて外傾する体部をもつもので、底部に刺突はない。

円面硯（530）

非常に厚い作りの大形品で、脚部に方形透かしをもつ。

坏（531）

高台は底部裾のやや内側に付き、立ち上がりは直線的である。

【陶器】

緑釉陶器碗（532～534）

底部片のみを図示した。いずれも全面に施釉されている。

灰釉陶器碗（535）と灰釉陶器皿（536）

ともに薄手の端正な作りである。

陶馬（537）

外面には自然釉が付着している。

d　中近世

山茶碗・山皿を中心とした中世前期の遺物は多いが、いわゆる中世後期に属する遺物は少ない。

青磁碗（538～540）

龍泉窯系で、いずれも内面に飛雲文状の模様をもつ。

山茶碗（541～574）

563～574は底部外面に墨書をもつ。563と567が「大」、564と570は「ます」、569が「上」、572が「厨」？、また566が文字ではなくて格子文、573が記号「○」と記号不明（「○」？）であるが、その他は釈読不明である。ただし、571 は花押である。

山皿（575～583）

高台をもつ575～576と、平底の577以下がある。

土師器皿（584）

口縁部をヨコナデして端部を丸く収め、底部をユビオサエする。

陶器碗（585）

底部外面に「上」？と書かれた墨書をもつ。

【土製品・石製品・鉄製品・銭貨】

陶製人面（586～587）

施釉陶器の人面片で、所属時期は不明である。

土錘（588～593）

確実にこの時期になるとはいえず、もっと古い時期のものである可能性もあるが、一応、ここに措定した。大形で重量の重い588 から紡錘形で軽い593まで形態差がある。

硯（594）

使用による磨耗が激しい。

砥石（595～597）

これももっと古い時期の可能性もあるが、一応、ここに措定した。

金属製品（598～601）

598が小刀、599と600が鉄釘、601はキセルである。小刀は、刀身にやや反りがあり、把の刀身寄りのところに目処孔をもつ。キセルは、薄い鉄板を巻き込んで作っている。

銭貨（602～606）

602は祥符通寶、603は嘉祐通寶、604は熙寧通寶、605～606は寛永通寶である。

e　その他

所属時期はわからないが、馬歯が２本出土している（607～608）。

（註）

① 以下、本文中で廻間編年を使用する場合は、下記文献を参照

・赤塚次郎「廻間式土器」（『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990）

・赤塚次郎「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」（『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1997）

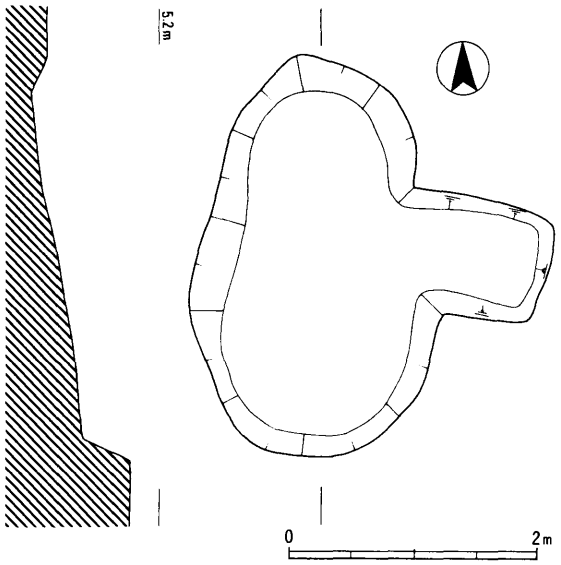
第２節　ＳＲ２の周辺遺構の調査

１　遺構の概要

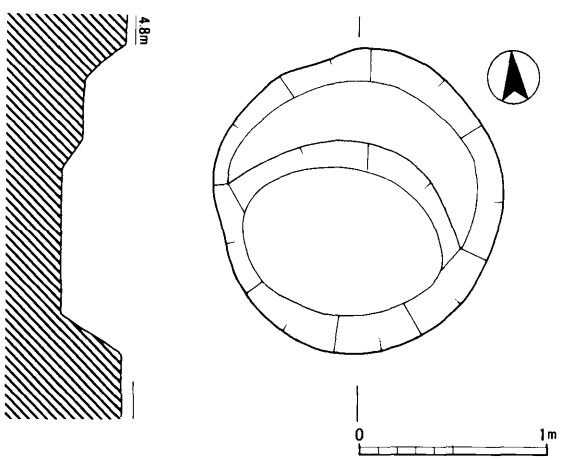
ＳＲ２以外で下段に存在する遺構は、３条の溝と２基の土坑があるのみで、非常に少ない。以下、順に記述していく。

ＳＤ３・４（第12図参照）

ＳＲ２の落ち込みのカーブに沿うように検出された溝で、途中が攪乱によって途切れているため２本のように見えるが、本来的にはひと続きのものと思われる。一応、北西側をＳＤ３、南東側をＳＤ４として扱った。ＳＲ２の断面図（第13図）が明瞭に示すように、ＳＲ２の埋没過程の途中で掘り込まれたものである。従って、ＳＲ２の検出面ではこの遺構は検出できず、ＳＲ２掘削の途中で部分的に検出されはじめ、最下層の腐食土層をも切り込んでいたことによって、その全体像が明瞭となった。つまり、ＳＲ２という低湿地状の堆積をベースとしてある時期形成されたが、ＳＤ３・４埋没後再びＳＲ２の堆積が続く、という状況をとる。埋土には砂層が嵌入しており、志登茂川の氾濫・堆積作用によって一気に埋没した溝のようである。古墳時代中後期の遺物が出土している。



第17図　ＳＫ６実測図（１：60）



第18図　ＳＫ７実測図（１：40）

ＳＤ５（第12図参照）

ＳＲ２の肩部に沿って存在した長さ14ｍの溝状の遺構で、幅２ｍ、深さ20㎝を測る。本来的にはもう少し長い溝であったのであろう。

ＳＫ６

ＳＲ２の肩部から掘り込まれた楕円形の土坑で、長径3.2ｍ、短径２ｍ、深さ50㎝を測る。古墳時代前中期の遺物が出土している。

ＳＫ７

ＳＲ２の屈曲部付近で検出された円形の土坑で、径1.7ｍ、深さ30㎝を測る。平面プランを見る限り井戸的あるが、底に曲物があるなどの状況はみられなかった。また、図示しうる程の遺物も出土しなかった。

2　出土遺物

ＳＤ３出土遺物（609～610）

土師器屈折脚高坏Ｂ１（609）・小型丸底壺（610）がある。小型丸底壺はやや大形、高坏はやや小形である。

ＳＤ４出土遺物（611～615）

Ｓ字甕Ｅ（611）・屈折脚高坏Ｂ１（612～615）がある。屈折脚高坏は、いずれも脚裾が緊張感なく平坦化したものである。614は、ＳＤ３出土の609などと非常に類似した器形・調整をもつ。

ＳＫ６出土遺物（616～621）

土玉（616）・小型器台Ｂ１（617）・Ｓ字甕Ｃ（618～619）・小形壺（620）・屈折脚高坏（621）がある。全体にＳＤ３・４の出土遺物より若干古めである。

表土出土遺物（622～647）

下段の表土掘削中に出土した遺物である。ＳＲ２の堆積土上面で出土したものも多いが、ここで一括する。古墳時代のものも含まれるが、主体は中世以降である。

622は、銭貨である。天聖元宝である。

623は、手捏ね土器Ｃである。

624は、古墳時代の須恵器坏身である。６世紀代の所産であろう。

625は、灰釉陶器碗である。高台は小さい。

626～630は山茶碗、631～635は山皿である。

636は、土師器皿である。偏平な器形である。

637は、陶器の蓋である。皿状の器形の中央部にツマミを持つ。

638～639は、常滑の甕である。

640～642は、土錘である。重量の差が大きい。

643は硯、644は砥石である。

645～647は、金属製品である。645は鉄製針、646は不明鉄製品、647はキセルの雁首である。

（穂積）

Ⅴ　大溝ＳＤ１とその付設施設の調査

第１節 大溝ＳＤ１の概要

大溝ＳＤ１（以下、ＳＤ１）は、中段を南北に縦断するように形成された谷状地形を基盤として存在した大溝である。大きく南から北へ向かって流れ、遺構の状況や地形から判断すると、最終的には下段のＳＲ２へ流入するものと判断される。以下、個々の内容へ入る前に、ＳＤ１の全体に係わる内容を概説しておく。

1　谷状地形の形成

ＳＤ１の基盤となっている谷状地形は、自然の作用で形成された開折谷である。

ＳＤ１の最下層には弥生時代中期末から後期にかけての土器が包含されている。それより下位となる検出面（いわゆる「地山」）は、乾くと岩盤状となる粘質土もしくは木質を多量に含んだ有機質の砂質土である。

この有機質砂質土（第20図ＳＤ１下流部土層図中の９層）に含まれる木片を放射性炭素14による年代測定[1]を実施したところ、2160±70yrＢＰ年の結果が出た（なお、同層のさらに砂層を挟んだ下層になる同図中の12層が2990±100yr ＢＰ）。従って、この開折谷の形成は、現時点から3000年以上前には遡ることとなる。

そして、弥生時代後期頃に至り、谷状地形そのものが利用されるようになり、それ以降、堆積や部分的な掘削、再掘削を重ねながら利用され、最終的に中世に埋没する。

2　規模と形状

ＳＤ１の規模は、最も広い調査区内での最下流部で幅30ｍ・深さ３ｍ、最も狭い調査区内での最上流部で幅15ｍ・深さ１ｍを測る。調査区内でのＳＤ１の総延長は約100ｍである。

ＳＤ１の上下流側、つまりＳＤ１の両端はＳＤ１が調査区外へ延びるため確認できなかったが、上流部は浅くなってきており、遠からず源流部があるものと推定される。

全体の形状は、上流部より大きく弧を描くように回り込んできて、一度屈曲して東北側へ向かい、調査区外へ抜ける。屈曲部の右岸は、流路の開析作用の影響か瘤状に東側へ入り込んでいる（「入江状屈曲部」）。

また、ＳＤ１が存続する弥生時代後期から中世に至る間には、後述のようにいろいろな施設がＳＤ１内や肩部に付設された。

3　流水量の推定

ＳＤ１最下層の埋土を全て除去すると、中央部に幅50cm内外の小さな溝が確認できた。これは、上流の一部でのみ確認されただけのもので、下流部等へは追うことができなかった。ＳＤ１は、下流部では幅30ｍもある大規模なものであるが、雨天時などを除く本来の水量としては、この程度の小規模な溝で処理できる程度の水量であったのであろう。

この小溝は、いわゆる地山で検出を行ったＳＤ１の最下面でのみ確認できたものであるが、埋土の層毎に確認できなかったとはいえ、本来的にはどの時代でもこの程度の小溝とそれに対応する水量はあったものと推定される。

そして、ＳＤ１の埋土があまりラミナ等の砂層を含まない滞水性の粘質土であったことを考えると、この水量が最終的にＳＤ１を埋没させていく主体であったと考えられる。

（註）

① 三重県立博物館を通し、株式会社パレオ・ラボ（検査担当山下秀樹氏）による測定

第２節　ＳＤ１の基本層序

ＳＤ１は、総延長100ｍ、最大幅30ｍ、最深３ｍを測る大規模なものであるが、堆積に関しては層の厚薄はあるものの、基本的に同一の層序で連続して堆積している。基本的には、以下のように大きく分層することが可能である。

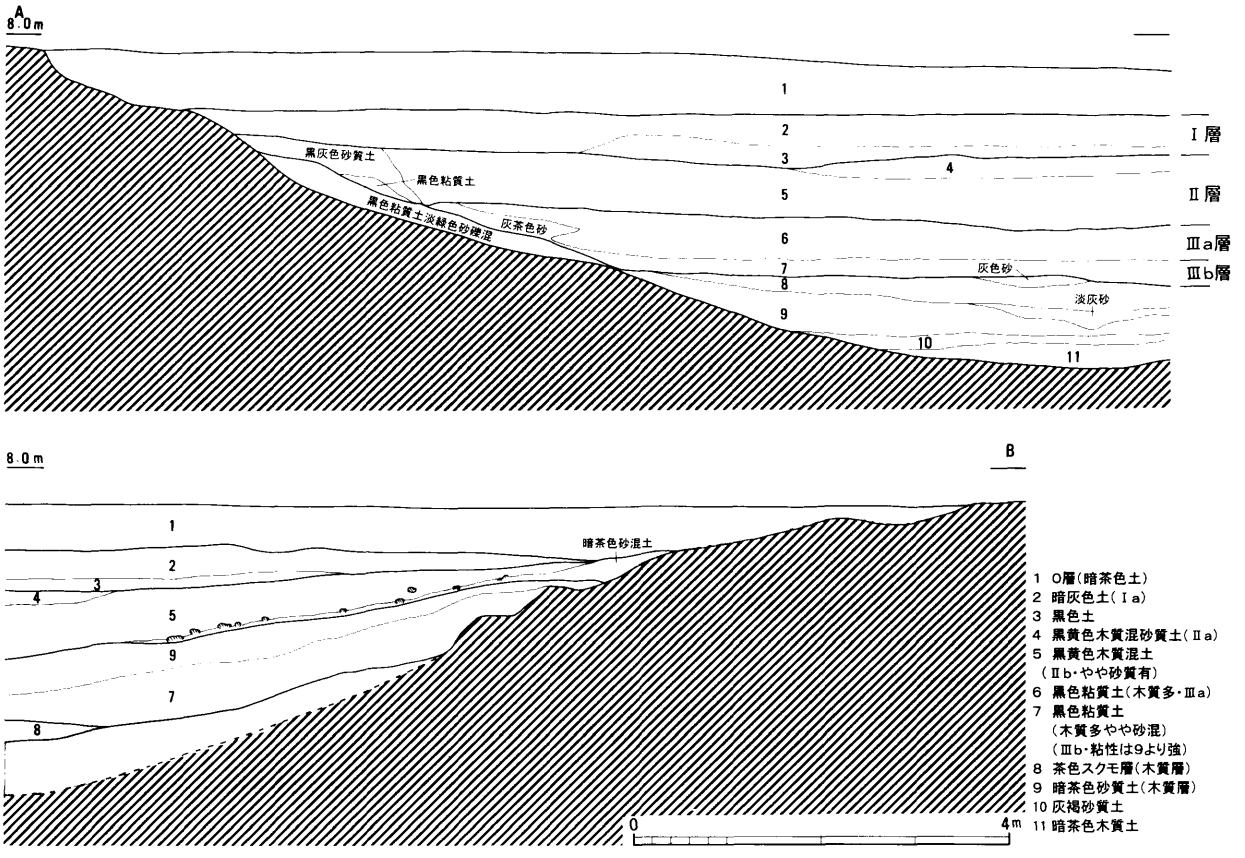
Ⅰ層　暗灰色砂質土（中世を中心とした歴史時代の遺物を包含する）

Ⅱ層　黒黄色木質混土（古墳時代中後期の遺物を主体に一部奈良時代の遺物までを含む層）

Ⅲａ層　黒色粘質土（古墳時代前期の土器を主体とし、一部初期須恵器も含む層）

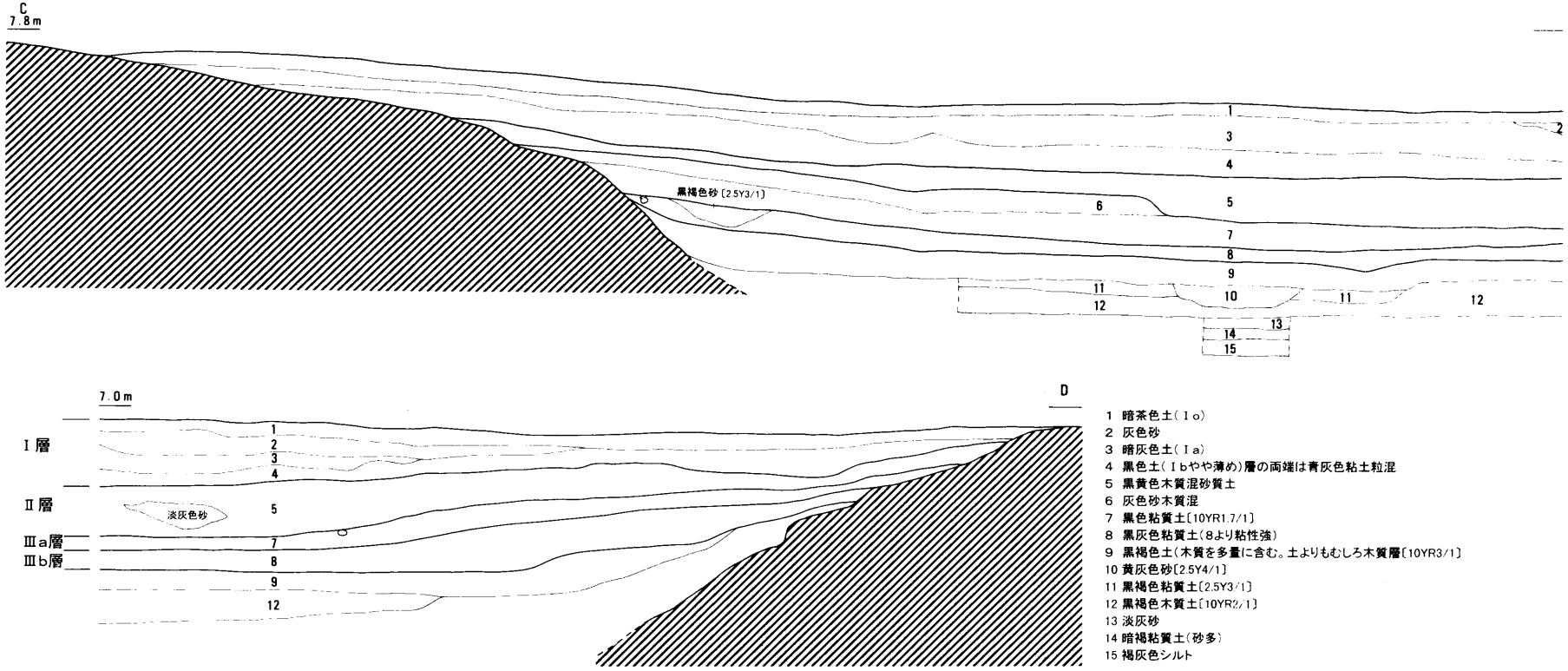
Ⅲｂ層　黒色～黒灰色粘質土（弥生時代後期から古墳時代前期の土器を多量に含む層）

Ⅳ層　灰褐色砂質土（部分的にしかみられない



第19図　ＳＤ１土層図（中央部）　※実測位置は第６図参照　（１：80）

第20図　ＳＤ１土層図（下流部）



1 暗茶色土（Ｉo）
2 灰色砂
3 暗灰色土（Ｉa）
4 黒色土（Ｉbやや薄め）層の両端は青灰色粘土粒混
5 黒黄色木質混砂質土
6 灰色砂木質混
7 黒色粘質土〔10YR1.7/1〕
8 黒灰色粘質土（8より粘性強）
9 黒褐色土（木質を多量に含む。土よりもむしろ木質層〔10YR3/1〕
10 黄灰色砂〔2.5Y4/1〕
11 黒褐色粘質土〔2.5Y3/1〕
12 黒褐色木質土〔10YR2/1〕
13 淡灰砂
14 暗褐粘質土（砂多）
15 褐灰色シルト

1 客土
2 暗褐色土
3 黒色土
4 暗茶色土
5 黒色粘質土
6 黒灰色土（茶色混）
7 淡黄褐粘土
8 灰色細砕砂
9 淡青灰色～黄灰色粘土

※実測位置は第６図参照

（１：80）

が、若干の弥生時代後期の遺物を含む）

Ⅴ層　黒褐色木質土（ＳＤ１の下流部にのみ認められる層で、遺物を全く包含しない腐食植物質層。下段のＳＲ２の下層で認められたものと基本的に同一のものと思われる）

勿論、それぞれの層は、図19～20のように、さらに細分することが可能であり、実際、遺物の取り上げにおいて、細分した層毎に取り上げることができた部分も存在する。しかし、細分した層序毎に遺物の時期が分かれるわけではない。

検出面（いわゆる地山）は、岩盤のように固い淡青灰色粘土であるが、ＳＤ１では法面の下にいくに従って漸移的に砂質土に移行し、ＳＤ１床面では砂質土が底になる。

先に概説した付設施設のうち、貼石はⅡ層中に、上層礫敷はⅡ層とⅢａ層の間に、下層礫敷はⅢａ層中に、上層礫群はⅢｂ層上部に、下層礫群はⅢｂ層中程に、礫敷はⅢｂ層下部に、壁材はⅢａ層中に存在している。

第３節　ＳＤ１の付設施設

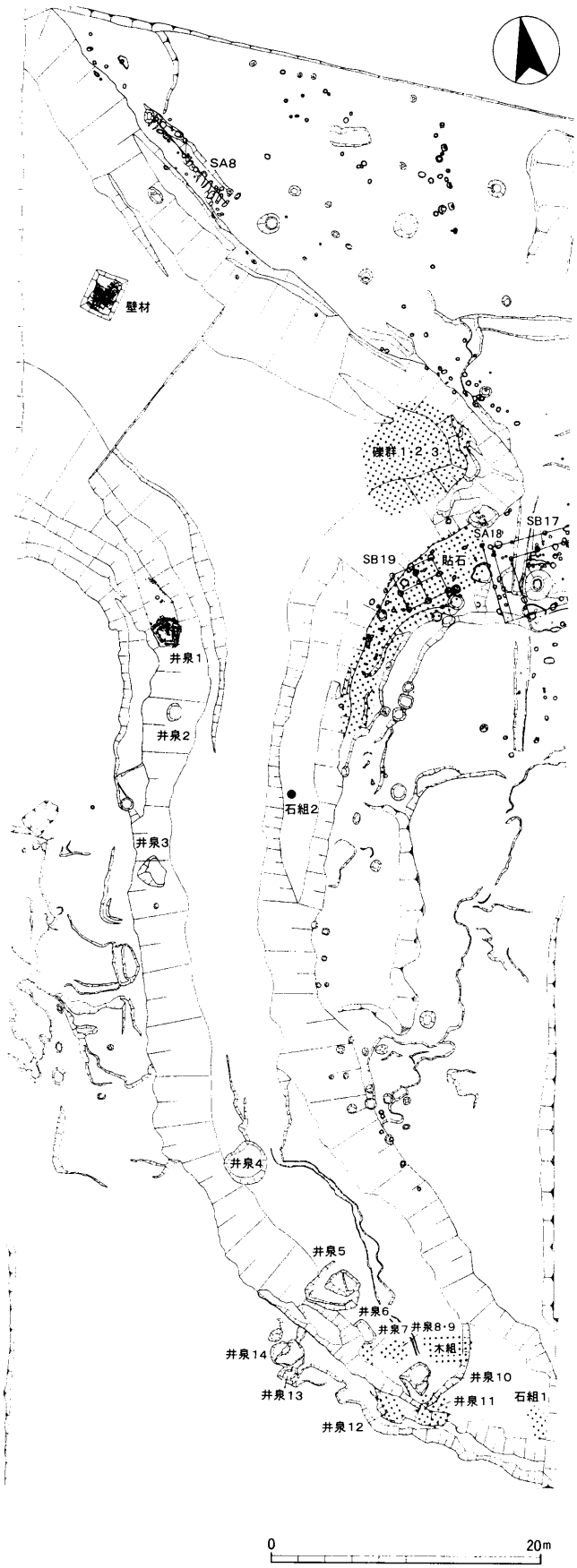
前述のように、ＳＤ１にはさまざまな施設が付設されている。これは、ＳＤ１という場を利用し、さまざまな活動が行われたことに他ならない。付設施設の多くは、豊富な湧水の存在と関連するところが少なくない。以下、付設施設のまとまり毎に解説していきたい。

１　井泉

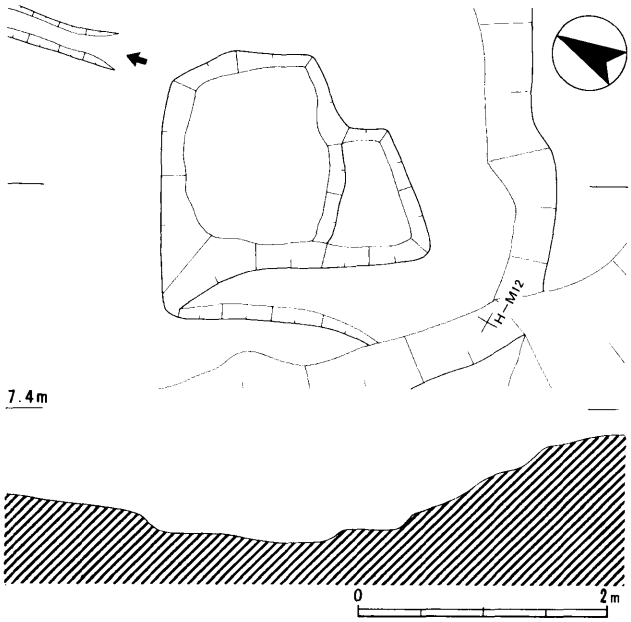
湧水の湧きだし出口となるＳＤ１の左岸側に認められる遺構で、遺物を包含する最下層のⅢｂ層からⅡ層までの11基と、ＳＤ１の肩部に掘削された２基とがある。井泉が全て左岸側に設置されたのは、左岸が地中を流れている水脈の湧きだし出口となっていたことによる。

時代が下るに従ってＳＤ１は埋没していくが、その状況に対応して、当初は左岸側溝底面に敷設されていた井泉が時代とともに溝斜面に移り、最終的には溝の肩部に設けられるようになる。

石組みをもち、何らかの行為を行ったかのような遺物の残存をみせる祭祀的な様相の強い井泉と、さ



第21図　ＳＤ１付設施設配置図（１：500）



第22図　ＳＤ１井泉10実測図（１：60）

ほどの祭祀性は認められず、遺物も廃棄したような状況を示す素掘りの井泉とがある。

以下、素掘り井泉と石組み井泉に分け、それぞれ解説を加えていく。

ａ　素掘り井泉

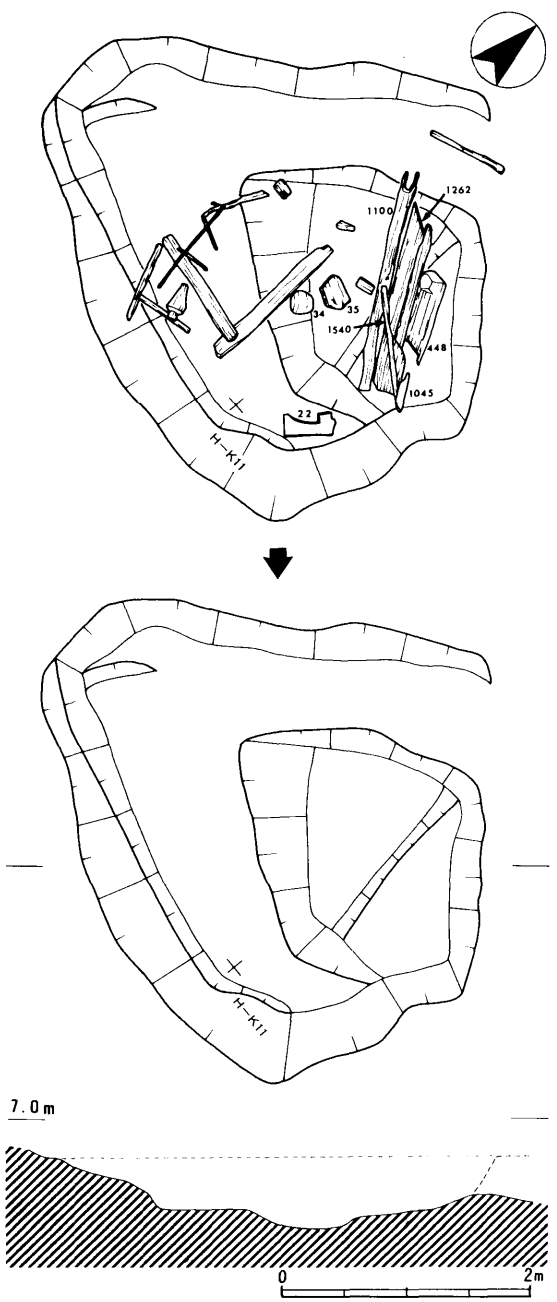
井泉10

長径２ｍ×短径1.7ｍ、深さ30㎝の方形土坑に小さな方形の段が取り付く素掘り井泉である。埋土から弥生時代後期の土器片が出土していることと、溝底面に設けられたことから、井泉としては最も古いもののひとつである。なお、井泉10付近からＳＤ１最下面で認められた小溝が出ているが、遺構の位置関係からこの小溝は井泉10を源流としていた可能性がある。

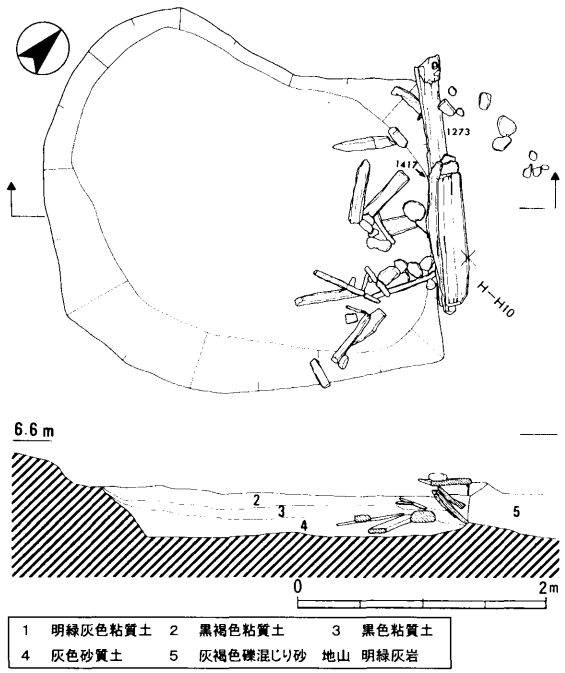
井泉５

外周は長径４ｍ×短径3.5ｍの三角状を呈し、その内側に長径2.1ｍ×短径1.9ｍ、深さ60㎝の小さな方形の土坑を伴ういわば２段構造の井泉である。溝斜面の下部を掘削区画して外周とし、そこからの湧水を中央の方形土坑に溜めようとしたものと思われる。方形土坑は対角線状に段掘りがなされ、湧水の出口となる東側（段の高い側）に、横転状態ではあるが横長の板材が存在していた（第23図参照、木1262等、以下報告書『木製品編』の遺物番号を示す時は、番号の前に「木」を付与）。このことは、本材を湧水出口側の枠材とし、内側に水を溜めていた可能性を想定させる。なお、方形土坑の内側（段掘り下部）に井戸枠状施設は認められなかった。

井泉埋土からは、弥生時代後期の高坏やミニチュア土器が出土しているが、床面に近いところからは農具（泥除未製品）も出土した（木34・木35）。従って、本井泉には、祭祀的な側面とともに、廃棄もしくは農具保管用の実用的な性格も強いものと思われる。その場合、埋土出土の高坏やミニチュア土器は、それ自体は非日常的な組成を示すが、直接的な井泉祭祀に係わるかどうかはなお検討を要する。



第23図　ＳＤ１井泉５出土状況（上）と完堀状況（下）（１：40）



第24図　ＳＤ１井泉４実測図（１：60）

井泉４

長径3.2ｍ×短径２ｍ、深さ50㎝の不定円形を呈する素掘りの井泉である。この時期（古墳時代前期）には既にＳＤ１の堆積が始まっており、ＳＤ１底面（当然、床面は地山ではなく堆積埋土）から掘削され、左岸傾斜面の下部へ一部かかるように設けられている。井泉８や５のように、いわゆる地山から掘り込まれたものではないため、湧水出口が安定していない。そのため、斜面側から湧き出てきた湧水を溜めるために、出口側（ＳＤ１の流心側）に板材を立てて杭で止めた簡単なダム状の施設が設けられている。こうした施設は、六大Ａ遺跡の井泉でしばしばみられる特徴である。出土遺物に木器の未製品があり、木器の保管に関わる井泉の可能性がある。

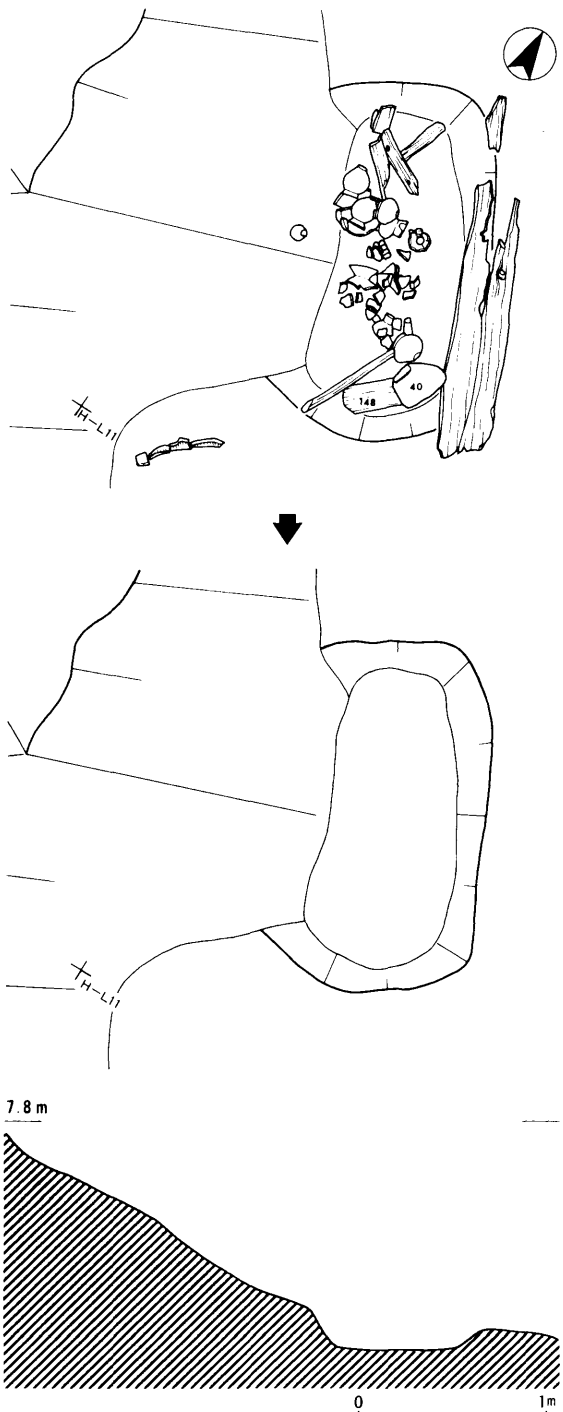
井泉６

井泉５の北側に所在する長径1.9ｍ×短径１ｍ、深さ25㎝の比較的小さな長方形状の井泉である。左岸斜面を背にして、ＳＤ１左岸の斜面法面がちょうど底面に変わる部分に造られている。前述の井泉４・５同様、井泉全面に板材が残存しており、これをダム状として水を溜めていた可能性がある。ただし他の井泉に比べて浅く、あまり多量の水を溜められるような構造にはなっていない。

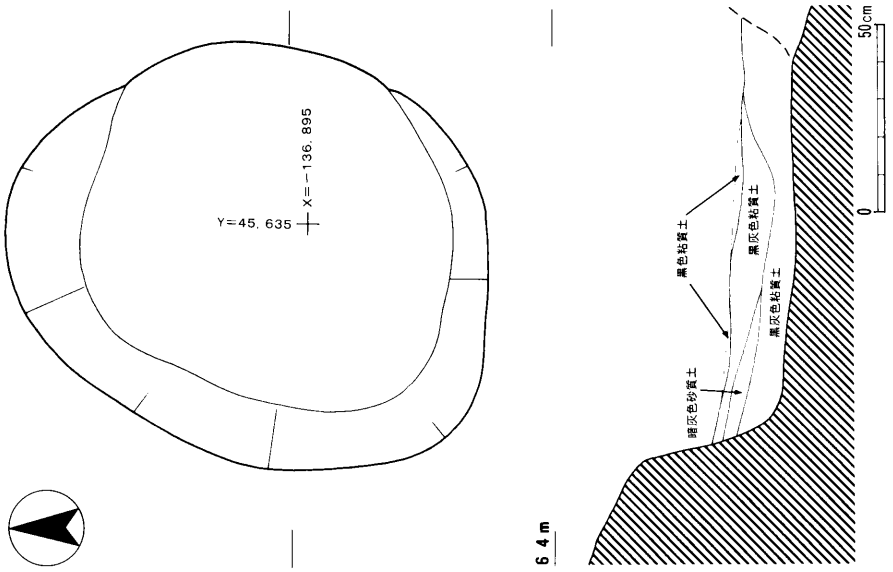
埋土から土器片が出土したが、特に図示しうる程のものはない。ただし、後述の土器群９は、ちょうど井泉６の上面から出土しており、井泉６埋没後あまり時をおかずにここに投棄されたようである。この土器群から、井泉が機能していたのは弥生時代末～古墳時代初頭以前であったと思われる。

井泉２

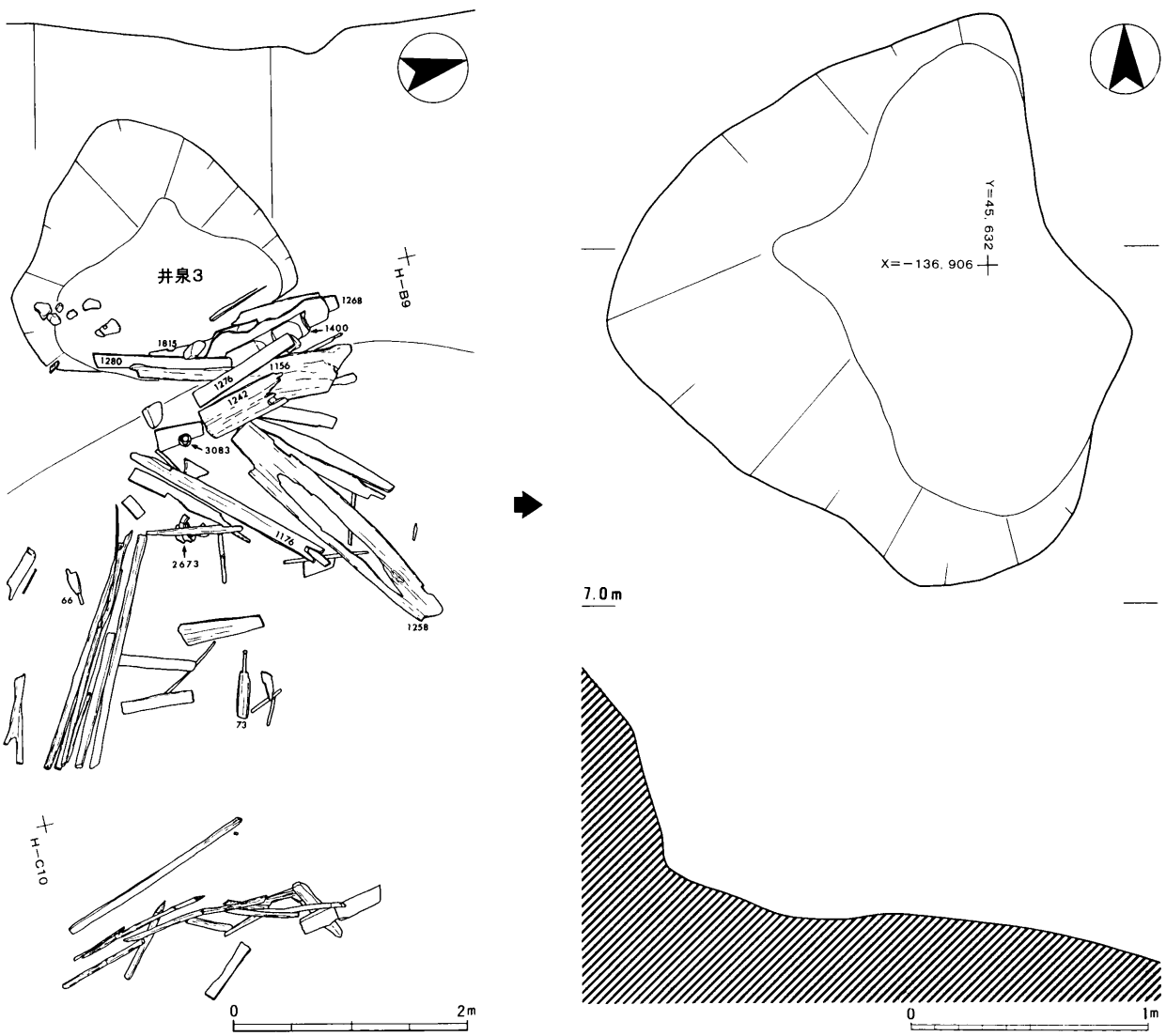
前述の井泉10・５・４は掘削が溝の床面に及んでいるのに対し（井泉10・５は地山からの掘削、井泉４は埋土から掘削して地山を抜く）、井泉２や井泉３は床面というより溝の斜面に設置されている。



第25図　ＳＤ１井泉６出土状況（上）と完堀状況（下）
（土器は井泉上面の土器群９）　（１：40）



第26図　ＳＤ１井泉２実測図（１：20）



第27図　ＳＤ１井泉３出土状況（左，１：60）と完堀状況（右，１：30）

これは、ＳＤ１の堆積が進行し、底面が上がったことと関連していよう。井泉２は、長径1.3m×短径1.2m、深さ40cmを測る略円形の井泉である。出土遺物はないため明確な時期は不明であるが、掘削された位置から古墳時代中後期の所産であろう。

井泉３

井泉２同様に、ＳＤ１左岸斜面に設けられた素掘り井泉で、長径2.45m×短径2.25m、深さ90cmを測る。井泉内部からの明確な出土遺物はないが、井泉のすぐ外側（流心側）の同一面で木製品の溜まりがある（第27図参照）。井泉３とこの木製品群がもし関連したものであるなら、井泉で保管された木製品というよりは、大形材や梯子（木1400）等の存在から崩れてはいるものの、井泉４等と同様に湧水出口に板材を渡して内部に水を溜めるための材であった可能性がある。そして、たんに枠材を構成する材とするには量が多いことや梯子（木1400）も含まれていることなどは、井泉に伴って何らかの木製の施設（例えば覆屋状の施設など）が存在した可能性を窺わせている。

ｂ　石組井泉

井泉１

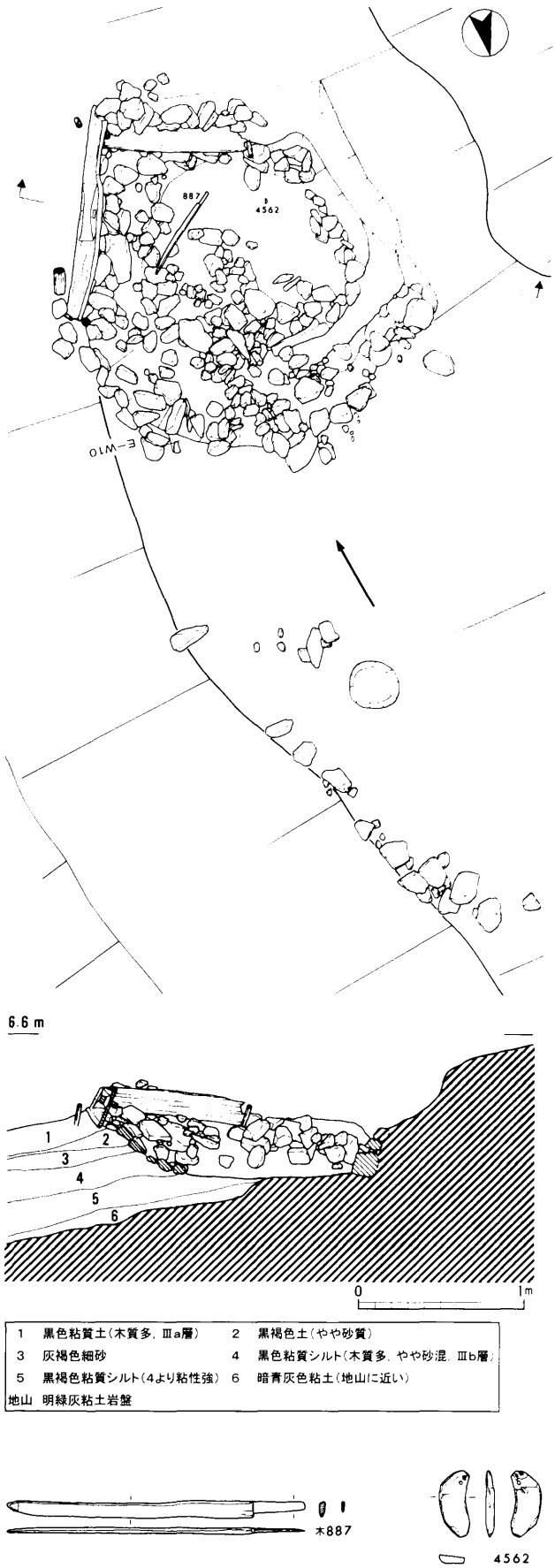
確認された井泉中、最下流（北側）に位置し、長径2.35m×短径2.25m、深さ40cmを測る。

ちょうど左岸斜面の地山からＳＤ１堆積土（Ⅱ層下部からⅢａ層）にまたがるかたちで設けられており、堆積土を掘り込んだ部分には石組みを施し、さらにその外側を２枚の板材でＬ字状に囲ってダム状としている。板材のうちの１枚は、扉板からの転用である（木1228）。

石組みに使用された石は、他所から持ち運ばれてきた石の他、地山の岩盤を打ち砕いた「磐」も利用されている。また、低石からの転用品もある。

井泉に溜まる水は、下から湧き出した水というより、地山である斜面の岩盤から滲み出てきた水である。まさに「磐井」というべき状況を呈している。

井泉から北側（下流側）には簡素な石列が延びていて、その部分が狭いテラス状となっている。おそらく、この井泉が利用された際にはこが導入路となっていた可能性が高く、それを目立たせ、結界する意図で石列が設けられたのだろう。



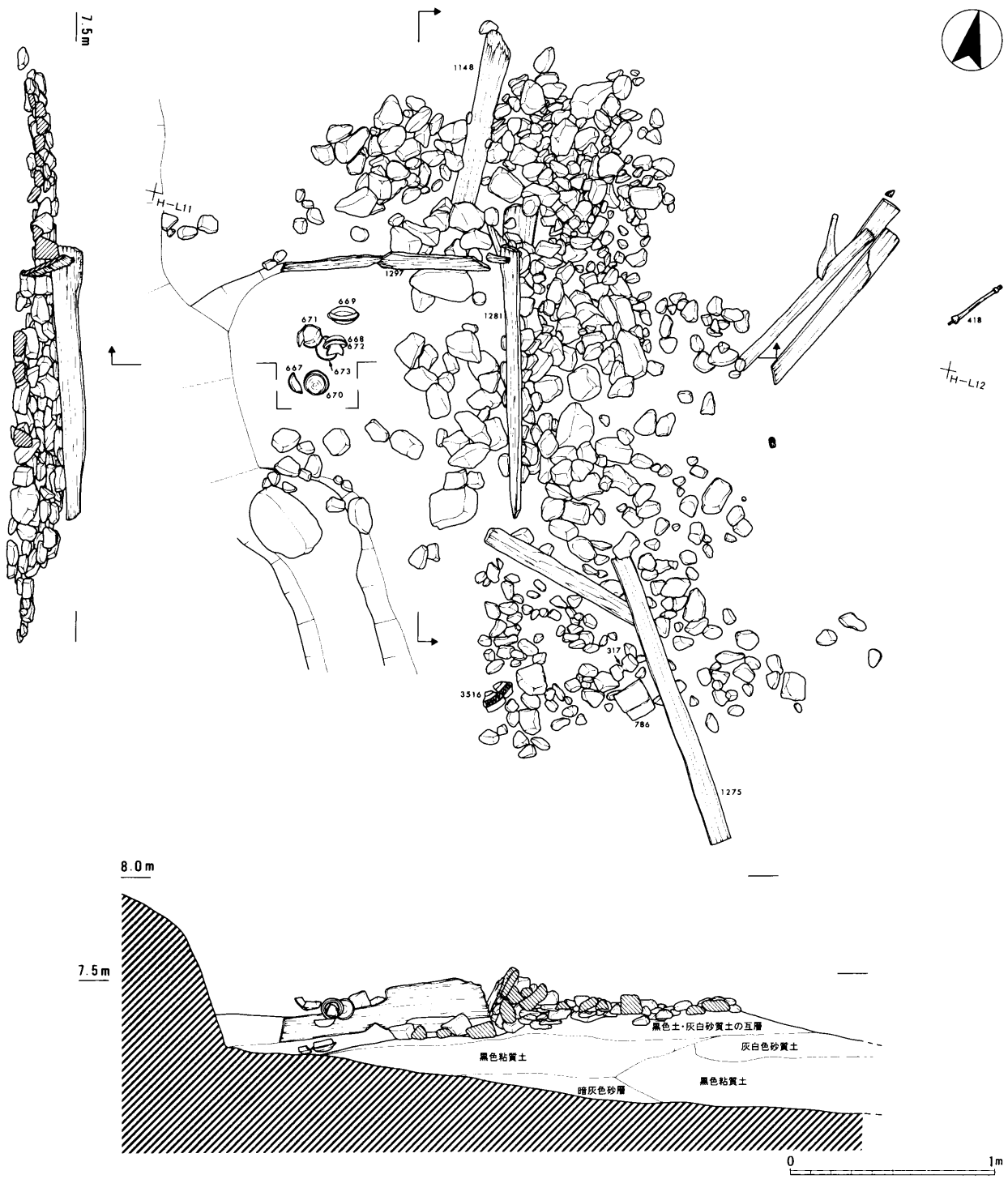
第28図　ＳＤ１井泉１実測図（１：40）と出土遺物

井泉のほぼ床面に接するかたちで、滑石製の勾玉と木製刀形が出土した。掘り込まれた層と出土遺物から、古墳時代中後期の所産と思われる。

井泉７

ＳＤ１斜面の地山岩盤から滲み出た水を溜めるための施設で、石組みを施し、さらにその外側を板材をＬ字状に組んで枠板としている。井泉といってもさほど深く掘り込まれた井泉ではなく、床面はわずかに窪まる程度で、枠材で湧水を溜めていた状況が窺える。

石組みは、井泉１同様、底面が溝の埋土である部分より施されており、枠板の外側まで石敷状となって広がっている。井泉の規模は、枠板内側で径1.5ｍ、石敷の範囲で長径3.4ｍ×短径2.2ｍを測る。



第29図　ＳＤ１井泉７実測図（１：30）

枠板の内側には、須恵器坏が正立状態で置かれていた（670等）他、埋土フルイ掛けによって滑石製紡織具１個・臼玉29個・ガラス玉１個が出土した。また、厳密には井泉６に伴うかどうかは不明だが、枠材の外側にも同時期の須恵器や滑石製品（臼玉77個・棗玉１・ガラス玉１個）の出土があり、さらに土器群56も井泉７の南に接して出土している。

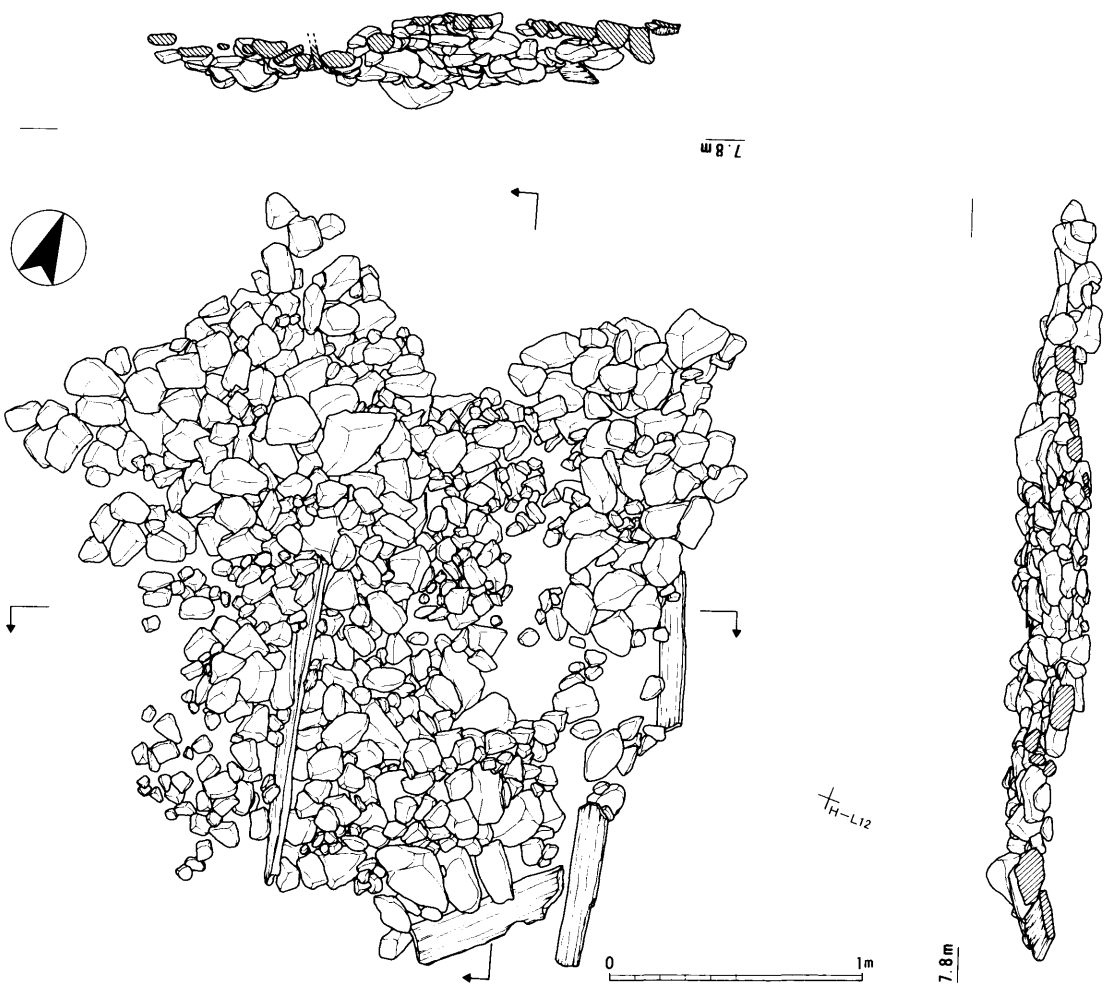
井泉８

井泉７の東南側に設けられた石組み井泉である。かなり崩れていて遺存状況は悪く、また非常に浅い皿状のものであるが、中央部がやや窪むことと、部ながら石の面が揃うことから人為的なものと判断し、井泉として認定した。後述の井泉９に覆いかぶさるように存在し、なおかつ底面のレベルがほぼ同じであることから、井泉９を造り替えたものかもしれない。

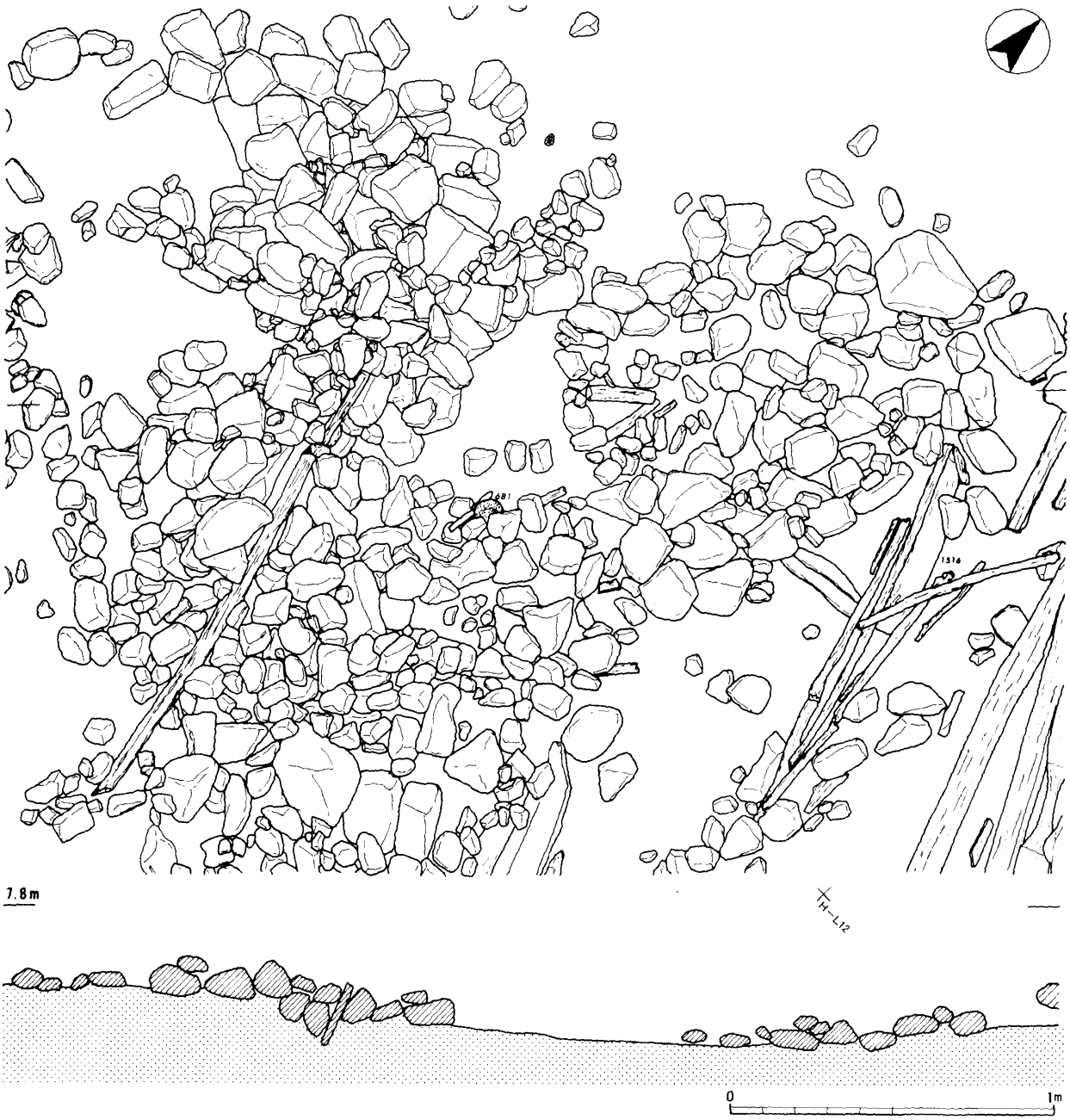
全体が石敷状となっていて、どこまでを井泉とみるかは難しいが、石の及ぶ範囲全体とした場合は長径３ｍ、中央部は長径２ｍ×短径1.6ｍ、深さ20cmの規模をもつ。また、石に挟まれるかたちで長方形の板材が見えるが、これは井泉７の枠材で、このことから井泉８が井泉７埋没後の所産とわかる。ただし石の並びでは明確に井泉７のものと井泉８のものを峻別するのは難しかった。この関係は、井泉８と次の井泉９との間でも同様である。

井泉９

井泉８の下面に存在したもので、底面が僅かに窪んでいることから井泉としたが、石組の可能性もある。一応、井泉とした場合、石が長径２ｍ×短径1.8ｍの範囲で面的に広がり、中央が15cm程窪んでいる。これ単独で何らかの意味があるというよりは、どの遺構かの確定はできないものの、周辺他遺構（例えば後述の木組遺構等）とセットとなって存在していた可能性が高い。



第30図　ＳＤ１井泉８実測図（１：30）



第31図　ＳＤ１井泉９実測図（１：20）

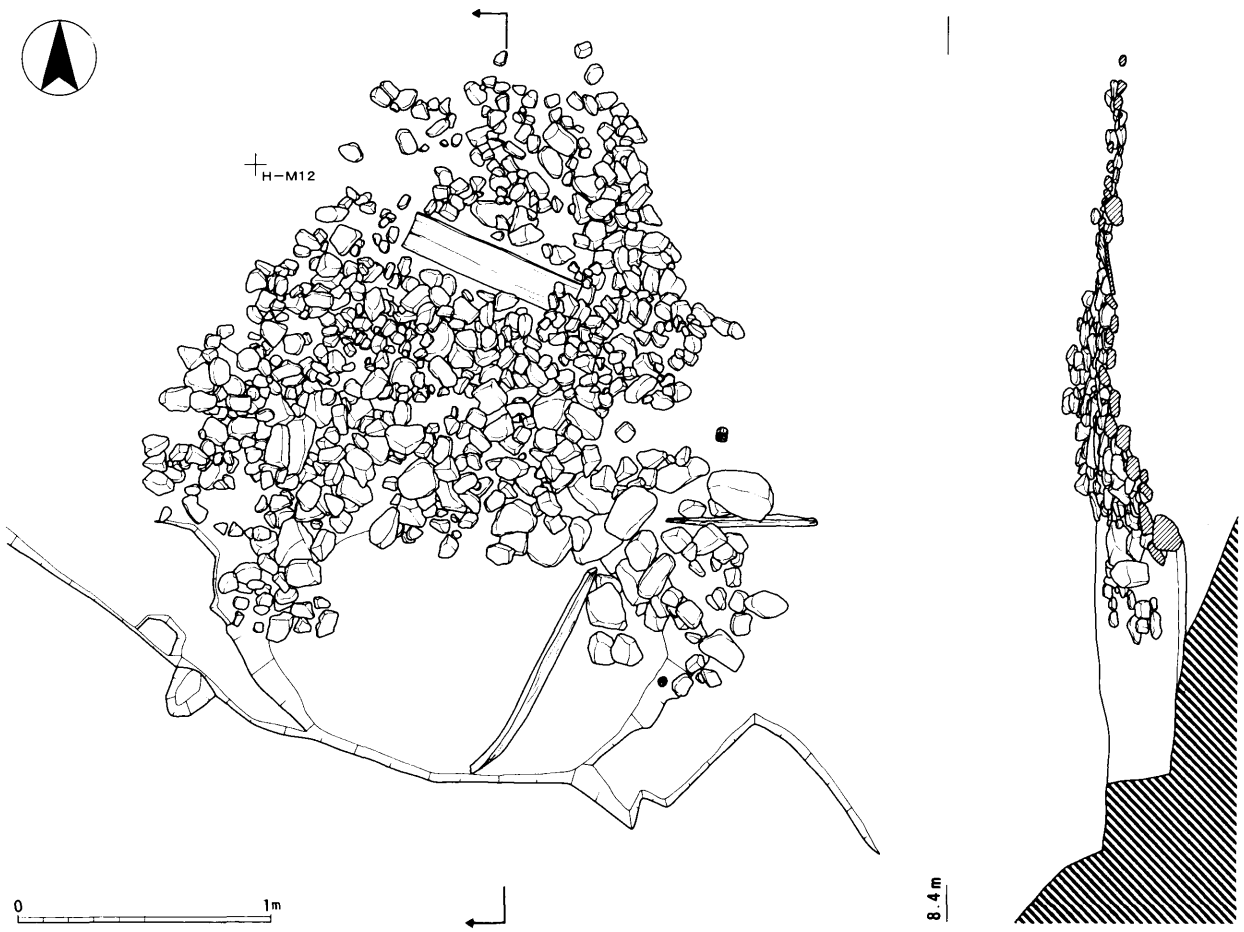
石に挟まれる状態で須恵器の蓋？（681）が倒立状態で出土している（碗とすると正立）。また、下面より５世紀後半～末頃の須恵器が出土している。

井泉11

井泉１や７同様、ＳＤ１の斜面から掘り込まれた石組み井泉である。井泉底面は地山ではなく、ＳＤ１の埋土に相当し、その部分に石敷状の石組みが施されている。溝斜面の岩盤から湧き出た水を溜めるため、また南側からの溝の流水を井泉内へ流入するのを遮断するため、南側（溝の源流側）は横板を立てかけて枠材としている。

横板より内側の井泉部分は、長径1.5m×短径1.3m、深さ35cmを測るが、横板より外側の石敷部分を含めるとその範囲は長径2.85m×短径2.5mとなる。このように、枠材となる横板の外側にまで石敷が広がっている状況は、前述の井泉６と同様であるが、井泉７の枠板がＬ字状を呈するのに対して、枠材が溝本体部からの流水の流入を防ぐための溝源流側の一面のみにしかみられないのが特徴である。また、前面（流心側）の石敷が広く取られていることは、ここが何らかの儀礼の場であったことを示すものかもしれない。

井泉内からの土器類の出土はないが、外側で少量の須恵器と土師器が出土している。また、埋土フル



第32図　ＳＤ１井泉11実測図（１：30）

イ掛けから滑石製臼玉39個が出土した。

井泉12

ＳＤ１左岸の斜面をテラス状に成形し、そこを掘り込んで造られた井泉で、ＳＤ１の埋没に対応して井泉も斜面のより高い部分へ移っていく状況が窺える。斜面側を方形に掘り込み、その逆側（流心側）にＬ字状に石列を組んでいる。この掘り込まれた部分は、井泉11とした石列で囲まれた部分よりも東南側へ広がっており、当初はこの掘り込み面いっぱいに井泉を構築しようとしたか、あるいは現状では不明ながらこの部分にもう１基の井泉が存在したのかもしれない。

一応、石列を意味の範囲とすると、全体の規模は長径1.1m×短径0.8mである。井泉床面は僅かに窪んでいるが、さほど深いわけでもなく、全体の深さは石列の上面までで15cmを測る。石列に用いられた石は、拳大から人頭大の石を組み合わせたものである。石列の内側から須恵器坏蓋が出土している他、１点のみであるがやや大形の臼玉も出土している。

井泉13～14

他の井泉がＳＤ１の床面もしくは斜面に造られたのに対し、井泉13と、これに重複する井泉14は肩部に設けられている。

検出時に切り合いが明瞭でなく、長径2.5m×短径1.5mの不定形を呈する井泉として、遺物も一括して取り上げた。しかし、歪な平面形や、掘り進めるに従って底面に２か所の掘り込みが認められたこと、出土遺物が大きく二時期に分かれることから、これらが重複によることが明らかとなった。以下、ＳＤ１より遠くて小規模なほうを井泉13、ＳＤ１に近い大きいほうの井泉を井泉14として改めて把握したい。なお、遺物は大きく古墳時代後期から飛鳥時代に属する一群と、中世に属する一群があるが、後者の一部が明らかに井泉14に伴っていた。従って、井泉14の所属時期は中世であろう。井泉13については、明確な所属時期は不明であるが、状況的には飛鳥時代の可能性がある。

井泉13は、長径1.6m×短径1.3m、深さ60cmのや

第33図　ＳＤ１井泉12実測図（１：20）

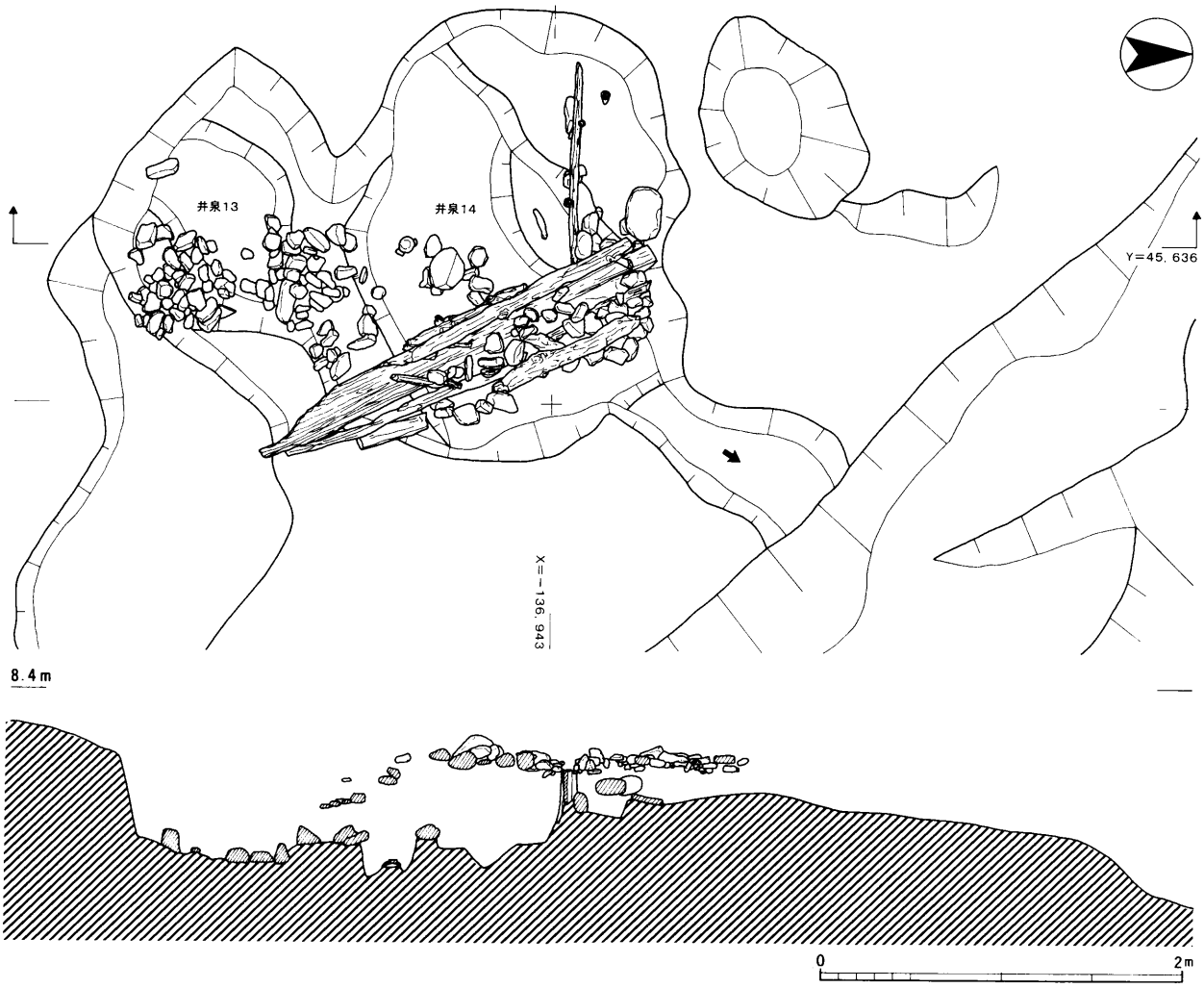
や小規模な井泉である。状況的には、井泉14に先行する井泉と思われるが、調査段階で切り合い関係を押さえているわけではない。

井泉14は、長径2.4ｍ×短径1.9ｍ、深さ70㎝を測る楕円形の井泉で、不要な水を排出するための小溝が伴い、ＳＤ１側（北東部）に延びる。水の出口（小溝側）は、板材を立てて杭で止めたダム状の施設を設けている。井泉の壁面には石組みが施されたようであるが、残りは悪く、多くが転落した状態で出土した。

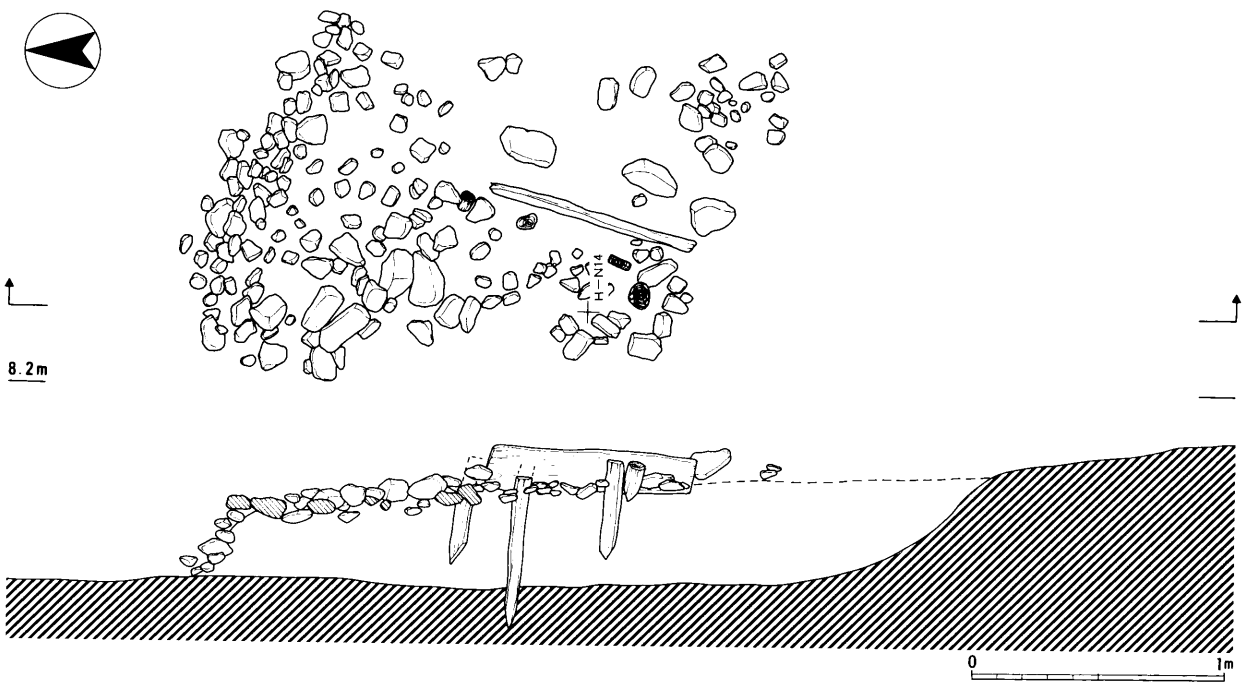
埋没後、その上面に礫が面的に存在していたが、これは湿地状となった埋土の沈み込み防止のためと思われる。ここからも山茶碗類の出土がある。

2　石組遺構

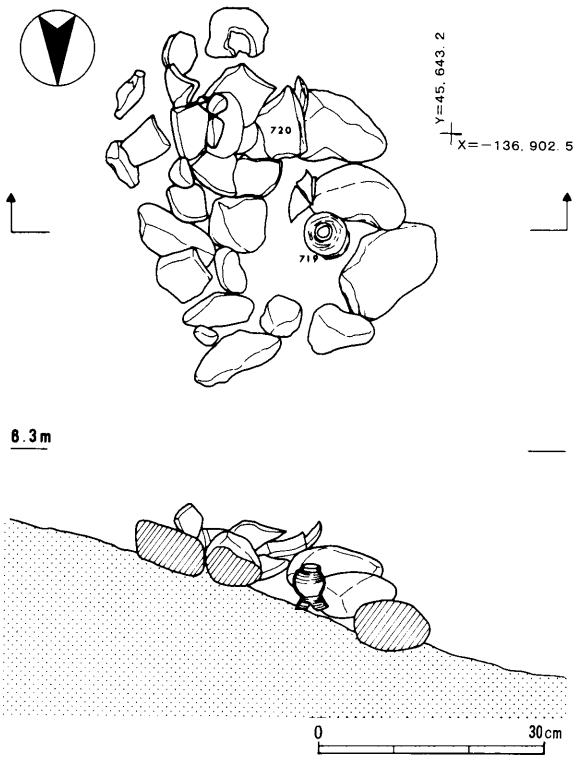
石組遺構として把握したのは２か所である。ただし、一括して「石組遺構」と称してはいるが、その性格はそれぞれ異なっている。以下、解説を加えていこう。



第34図　ＳＤ１井泉13・14実測図（１：40）



第35図　ＳＤ１石組１実測図（１：30）



第36図　ＳＤ１石組２実測図（１：10）

石組１

調査区ぎりぎりのＳＤ１最上流部のⅡ層中の流路ほぼ中央部（流心部）に存在する石組で、石組前面（下流側）に杭で止められた立板を伴うことから木組ともいえる。全体の形状が不明なため未確定なところは残るが、流心部分に設けられていること、なおかつ水の流れには障害となる立板も設けられていることは、ここで一旦水を止めることを意図した施設といえよう。そういう意味では、これより上流部で何らかの行為を行うために設置された施設である可能性がある。石組及びその周辺から初期須恵器などの出土があり、５世紀代の所産と思われる。

石組２

ＳＤ１右岸斜面のⅢａ層で確認したもので、ＳＤ１の埋土の傾斜に沿って径40cmの円形に石が配され、内側よりミニチュア土器（719）が倒立状態で出土した。石を組んで土器を設置したらしい状態は、何らかの祭祀に伴う祭壇的な様相をとっているように見受けられる。ＳＤ１を利用した祭祀関連施設のひとつと理解したい。

3　木組遺構

ＳＤ１上流部のほぼ中央の流心部分に所在し、位置的には石組１のやや下流側に相当する。

板材を立てて、杭を打ち込んで固定した木組施設で、上流側は板材を横に立てかけて流れを止め、下流側はＳＤ１の形状に沿って細長い板材を側板状に廻し込むようにして設置している。

つまり、上流部で一旦止めた水をオーバーフローさせ、一種の導水施設のように下流部へ流し込んだ施設、ということがいえようか。この部分のＳＤ１は大きく屈曲する形状をとっているが、木組遺構もＳＤ１の形状に合わせ、板材も弧を描くように設置されている。

ただし、最近各地で確認されているような木樋と大形槽を伴う導水施設とは異なり、あくまで狭い範囲とはいえ水は面的に流れ、施設的にも転用材を中心に、より簡便な仕事で組み上げられている。木樋や大形槽はなく、また埋土に寄生虫の包含もない[1]。

上流部の板材に止まるかたちで木製鐙が出土した他、この遺構の検出面の埋土から滑石製臼玉や淡緑青色の小勾玉（4549）なども出土している。また、構築材の枠内から瓢箪１個が出土している。

（註）

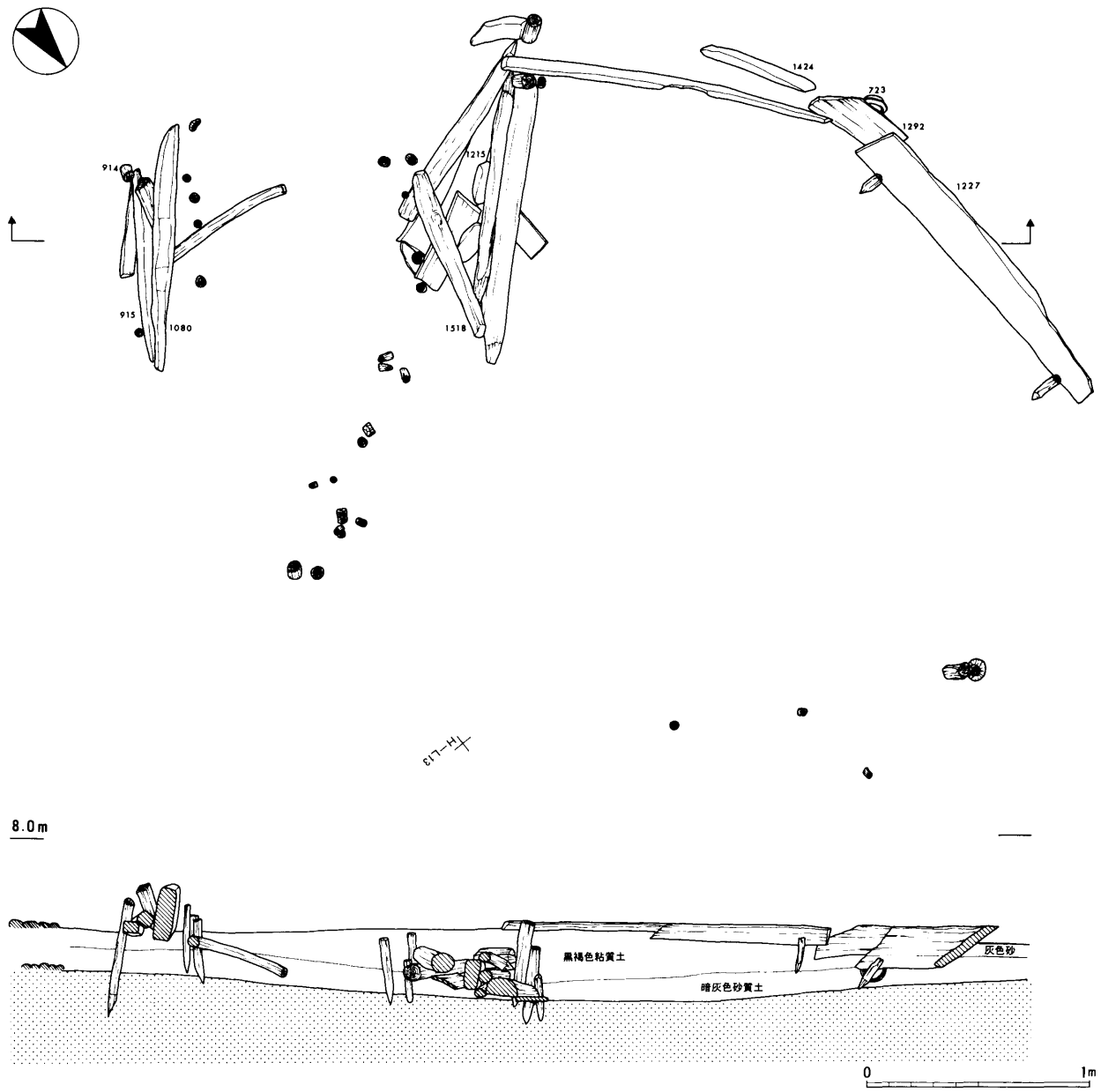
① 木組遺構を含むＳＤ１の要所の埋土を金原正明氏に分析して頂いたが、寄生虫の包含は確認されなかった。

4　礫群

入江状屈曲部で認められた、古墳時代初頭から前期にかけて（Ⅲ層中）、上中下の３面にわたる礫の面的な集中で、石敷や石組みと称するには雑然としすぎていることから、礫群として把握した。流水の攻撃面に相当しており、自然（流水）の作用で基本的には形成されたものと見受けられるが、全く人力で礫を放り込んだ状況がないとはいいきれない。結果として、面となった部分があり、ここを利用して遺物が投棄している状況が認められる。

礫群１

最も上層の礫群である。後述の木柱列もこれに伴う可能性がある。長径６ｍ×短径２ｍの範囲で拳大から人頭大までの石が面的に多数集積しているが、後述の礫群２よりは礫の間隔は若干疎らである。この礫群上面には、古墳時代前期を中心とする土器が出土している。



第37図　ＳＤ１木組遺構実測図（１：30）

礫群２

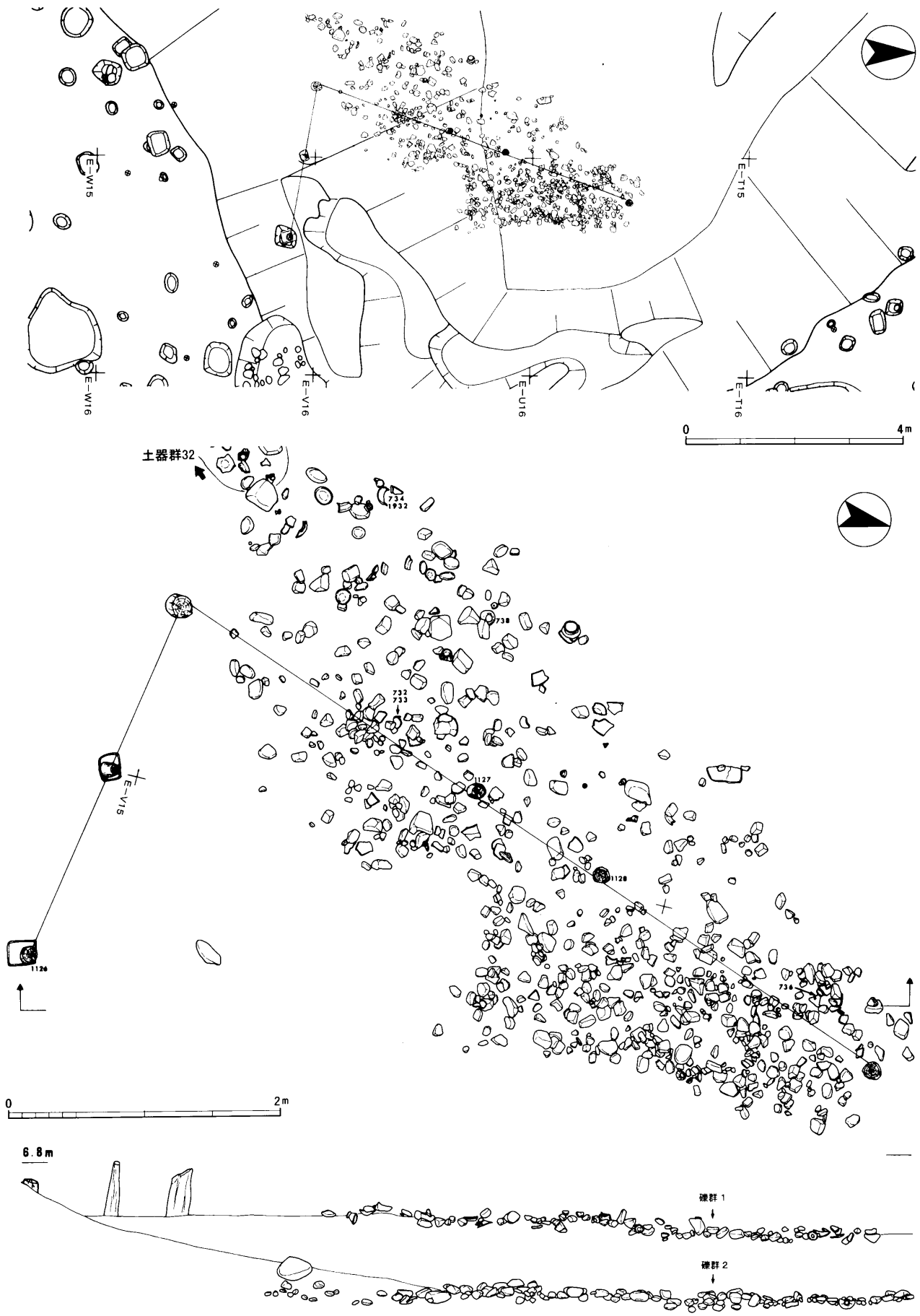
礫群１よりも50㎝程下位に長径７ｍ×短径４ｍの範囲で広がった礫の集中である。上層の礫群１に比べ、礫が密で、なおかつ大形の石が多い。杭もしくは立柱状の木も残るが、間隔が疎らで、明確な性格は不明である。あるいは、礫群とセットとなって、なんらかの場を構成していたものかもしれない。礫群の上面からは、廻間Ⅱ式を中心とする土器が出土している。

礫群３

入江状屈曲部のⅢｂ層最下部で長径５ｍ×短径４ｍの範囲で広がる面的な礫の広がりで、中央部が僅かに窪んでいる。ＳＤ１の右岸ではあるものの、入江状に入り込んだ部分に存在していることから、あるいは井泉的な役割があったのかもしれない。礫群２よりも下位に存在し、古墳時代初頭から前期の所産と思われる。また、礫群に直接伴うかどうかは不明であるが、礫群３を挟んだ上下から若干の土器が出土している。

５　木柱列

礫群１の検出面で確認した立柱の一群である。途中抜けているものもあるが、同一の柱を共有して、２間分（2.8m）残るものと３間分（6.2m）分残るものがある。掘立柱建物の残存とするには両者あま



第38図　ＳＤ１礫群１・柱列実測図（上１：100，下１：40）

第39図　ＳＤ１礫群２実測図（１：100）

りに鋭角的であり、建物とするには無理がある。しかし、同一の立柱を柱列端を構成する柱として共有していることから無関係とも考えられず、両者を一括して木柱列として扱った。ここで確認された部分のみで完結するのか、ＳＤ１の外側に所在するピット群のどれかの柱穴と組み合うのかはいまひとつ不明であるが、あまり柱筋は良くない。礫群１とセットとなり、何らかの場を構成する役割を担っていたものと捉えるのが妥当であろう。

6　礫敷

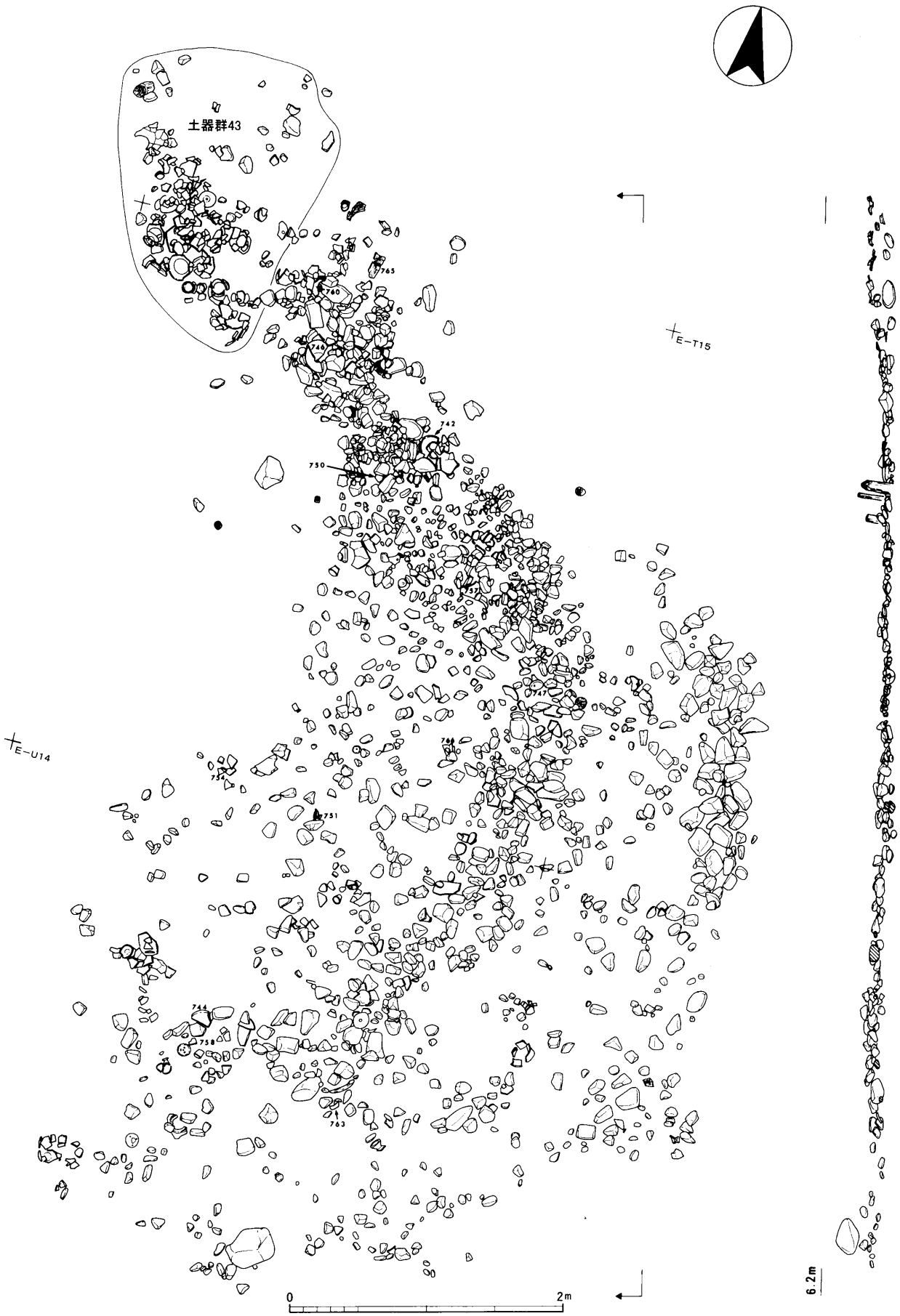
ＳＤ１の右岸には、計３回にわたる礫敷が存在する。このうち、最も下層に存在する礫敷は、ＳＤ１最上流部の底面を覆うように存在する。これに対し、残りふたつの礫敷は、溝流水の攻撃面・防御面に係わらず右岸のみ（上流部のみは全面）に存在し、意図的に配置された状況というには程遠いものの、低湿状となったところに石を意図的に放り込んだ状況が窺える。

なお、礫敷およびその周辺から出土した遺物は数多いが、ここでは礫の直上ないしは礫に挟まれる状態で出土した土器を抽出した。実際には、後述の土器群としたものや、全体の記述で一括しているもののなかにも礫敷に伴うものが含まれている可能性が大きい。しかし、その峻別はどうしても恣意的なものになってしまうのは否めない。従って、以下では、礫敷の出土遺物については、より礫敷部分に近い部位から出土した遺物に限定した。

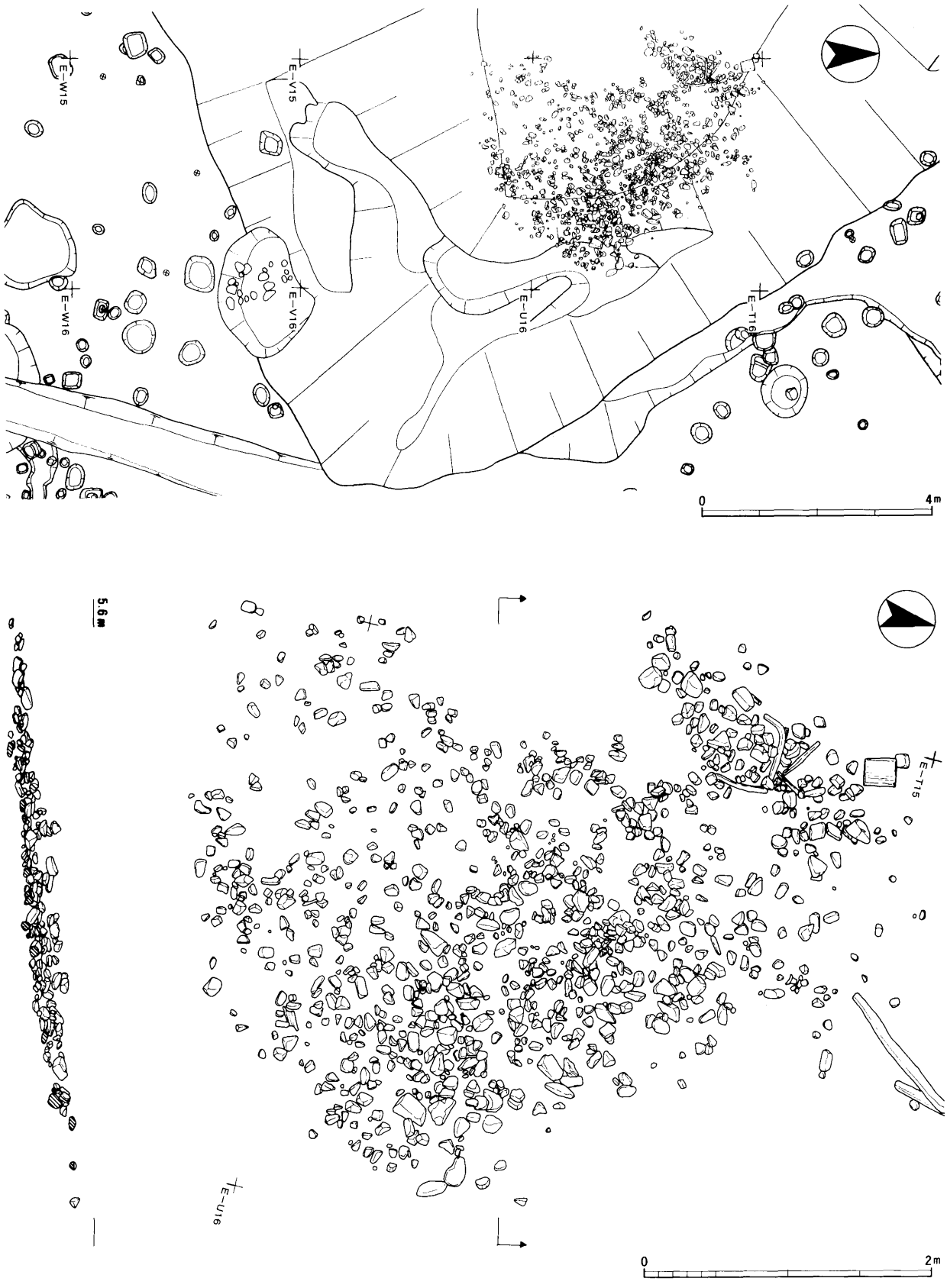
上層礫敷

Ⅱ層とⅢａ層の間に存在する礫集積で、調査区内のＳＤ１右岸全域に存在し、総延長は100ｍを越える。幅は、下流部で２～５ｍあるが、溝幅自体が狭くなる上流部ではそれに対応して漸次幅を減じ、２～３ｍと狭くなっている。ただし、入江状突出部のところは８ｍもの幅がある他、最上流部は溝床面中央部まで礫が及んでいて幅が広い。またＨ－Ｈ10・11区にかけて礫の密度が濃い部分なども認められるが、これが何らかの特別な区域に相当するのか、あるいは残存状況上たまたまそうなったのかは明瞭ではない。

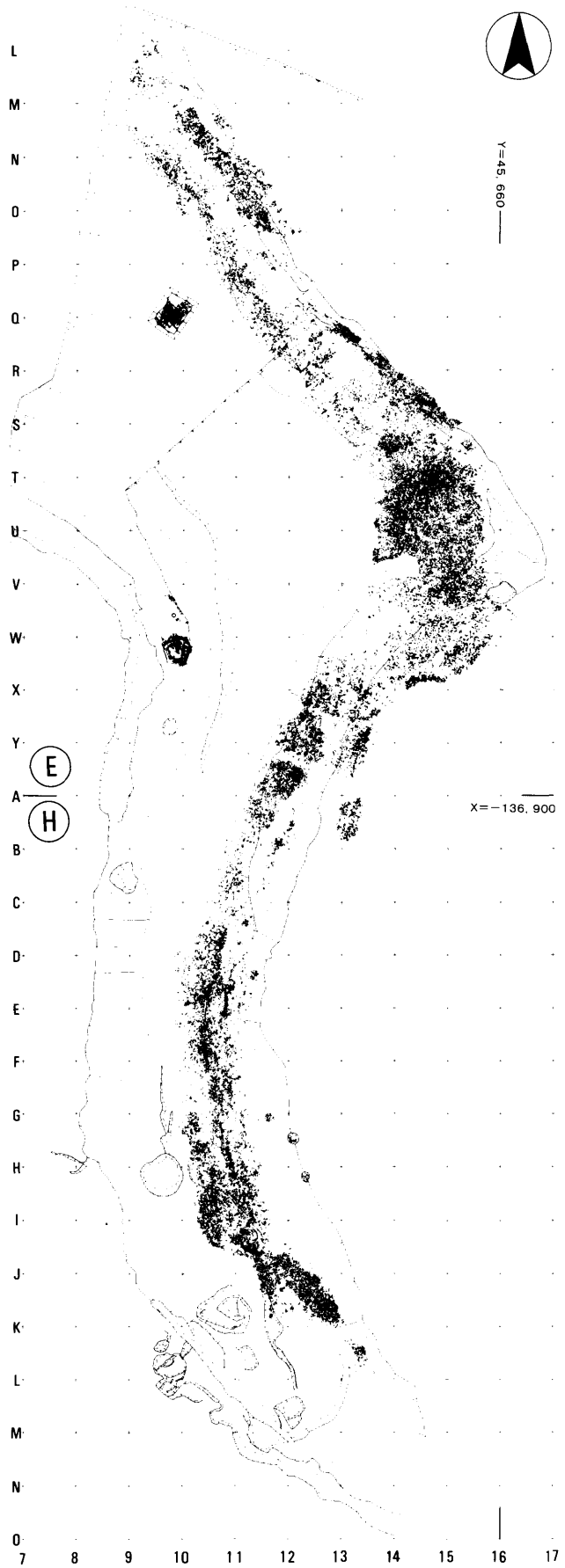
礫の密度は、疎らな部分もあり、石の配列に対しての規則性はないものの、拳大から人頭大の礫が面として存在しており、人為的に投げ込まれたような



第40図　ＳＤ１礫群２実測図（１：40）



第41図　ＳＤ１礫群３実測図（上１：100，下１：40）



第42図　ＳＤ１上層礫敷実測図（１：500）

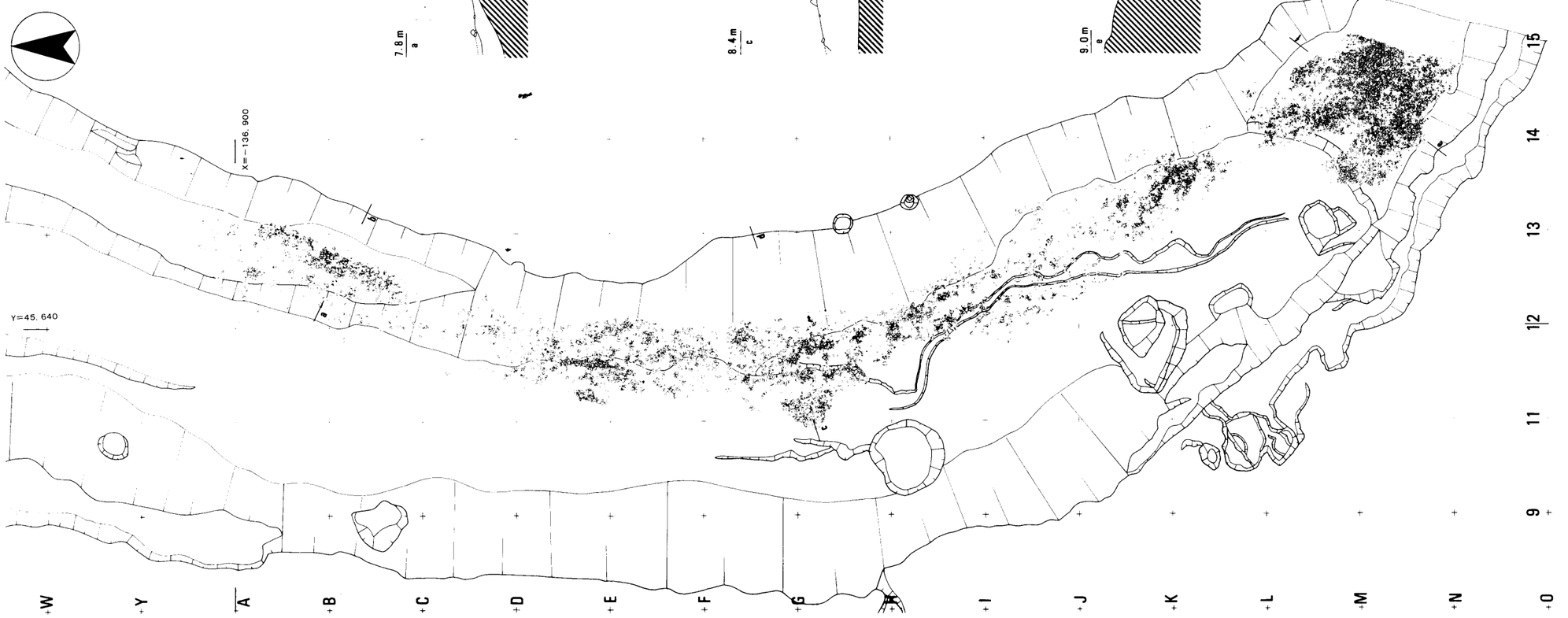
状況を呈している。おそらく、低湿状の落ち込みとなっていたＳＤ１へ礫が乱雑に放り込まれたような状況を呈しており、足場の安定を意図したか、あるいは石によって周囲と隔絶した状況ををつくる聖域区画の必要性が意図されたと思われる。

礫面では、滑石製模造品や土器（高坏が比較的多い）が出土したが、特筆すべき遺物として滑石製臼玉48個が入った土師器小壺（806）が出土した。また、初期須恵器や韓式系土器の出土も多く、上層礫敷の形成期の一端を示していよう。

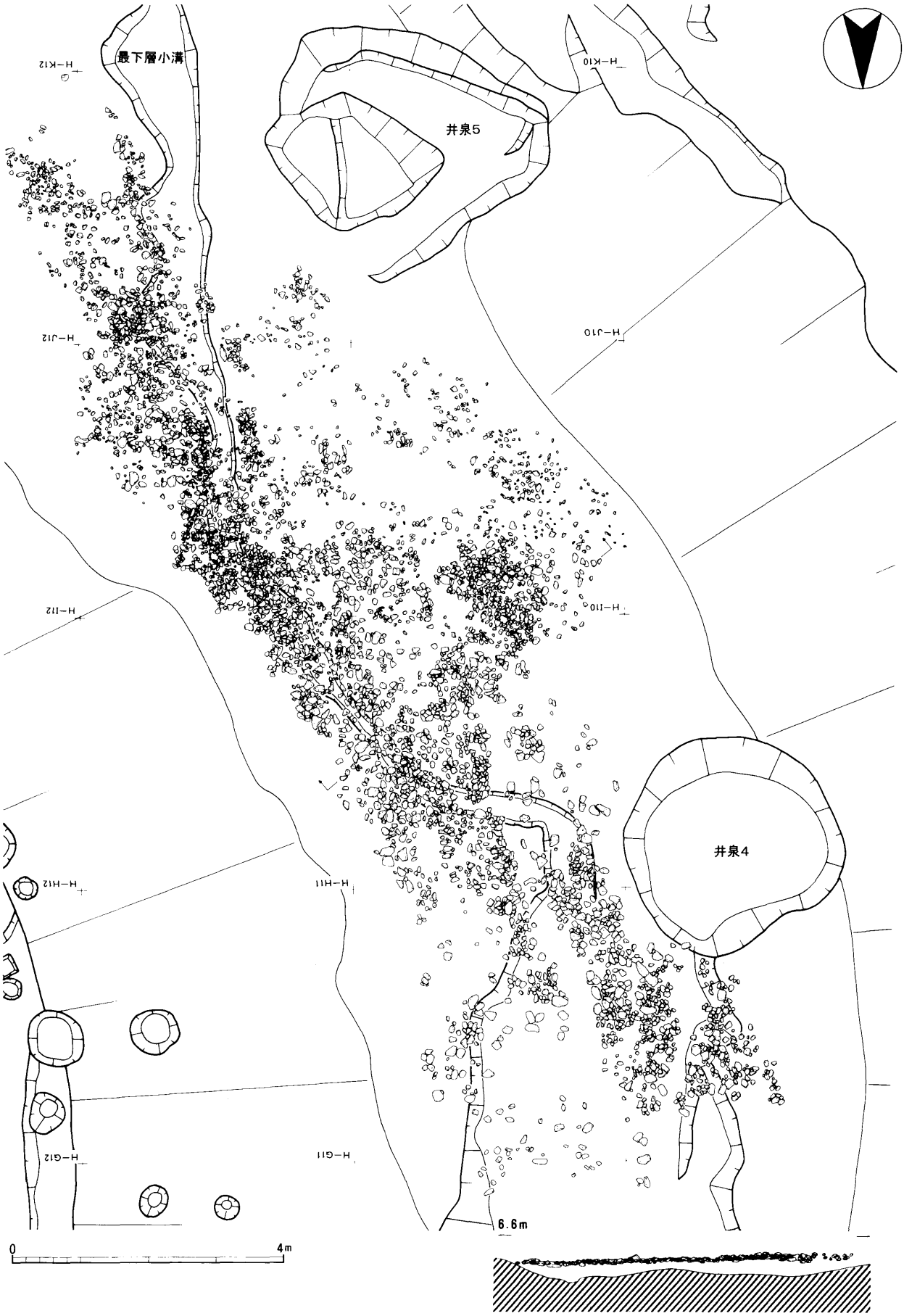
下層礫敷

ＳＤ１右岸上流部（ほぼ平成７年度調査部分に相当）に施された幅２～４ｍ、総延長36ｍのベルト状の礫敷で、Ⅲｂ層中に存在する。溝の肩部から斜面にかけてはいわゆる地山上に礫が乗るかたちをとるが、中心へいくに従い、大溝の堆積層（Ⅲｂ層）に乗るかたちをとる。従って、大溝中央部では礫面か

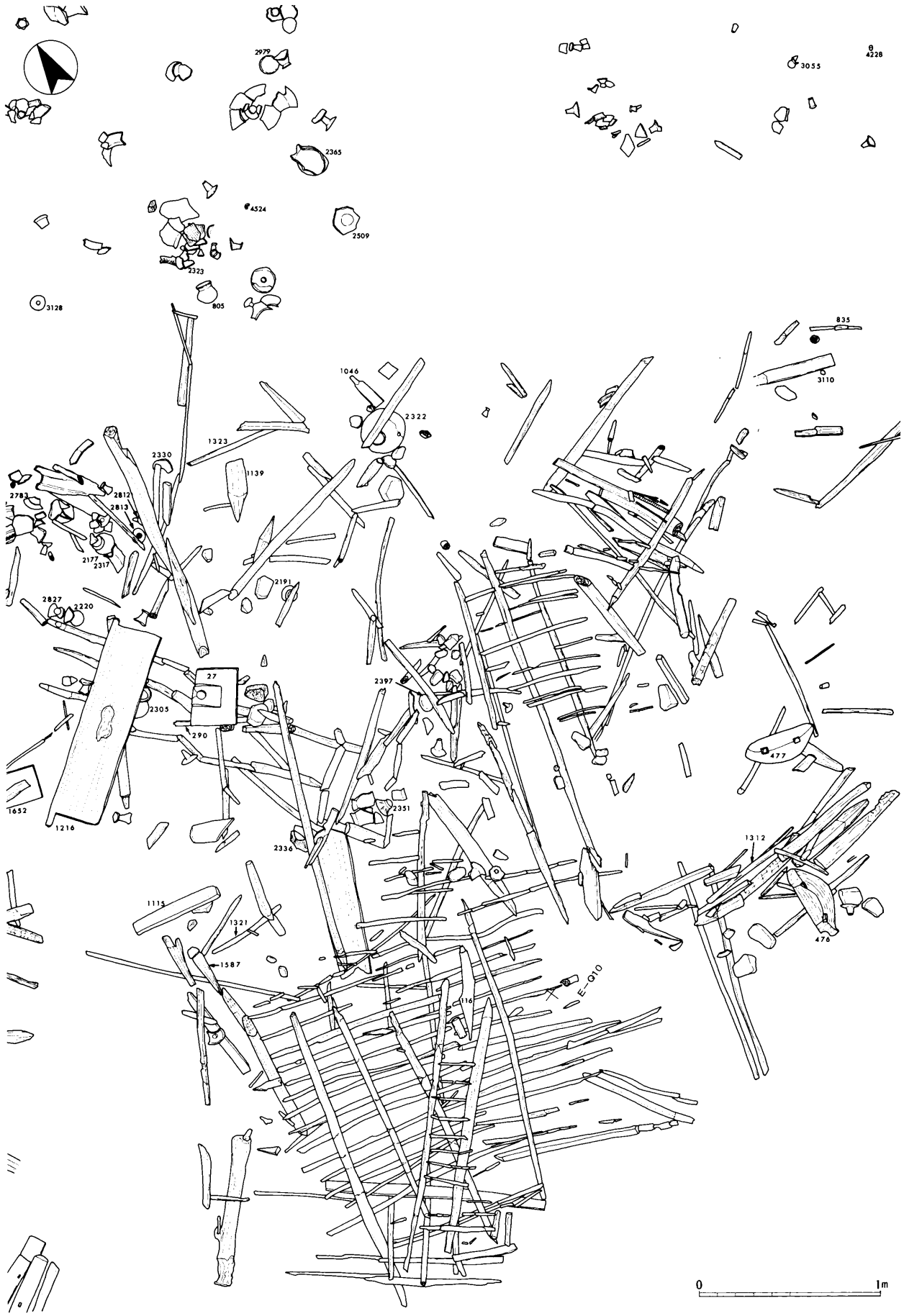
第43図　ＳＤ１下層礫敷実測図（１：500）



第44図　ＳＤ１下層礫敷実測図（１：200，断面は１：100）



第45図　ＳＤ１上流部最下層礫敷（１：80）



第46図　壁材（壁木舞）出土状況図（１：30）

第47図　ＳＤ１右岸貼石実測図（１：80）

ら地山まで40～80cm程度の厚さがある。部分的に、礫面の頭（斜面に設けられた礫敷の上側）が揃っているようにも見えるが、これは意図的というよりはこの部分で後世の削平があったために一定化したものであろう。礫は、上流部では法面ではなく床面前面に施されていて密集度が高い他、H－G10区でも礫の密集が認められるが、全体としては礫の密度は薄い。なお、礫に挟まるかたちで有孔銅鏃や漆塗りの飾弓等も出土している。

最下層礫敷

ＳＤ１中上流部のほぼ流心部（床面）にのみ存在する礫敷で、長さ14ｍ、最大幅5.6ｍに及ぶ。３面ある礫敷のなかでは最下層に属するが（部分的に確認できたⅣ層の上面で出土）、ＳＤ１の床面に貼り付くかたちで存在しているわけではなく、床面から20～30cmの堆積土を挟んで存在している。従って、ＳＤ１最下面に掘り込むかたちで存在する井泉５や小溝が埋没した後に、この礫敷が形成される。他の礫敷に比べ、石の密度はやや疎らである。

７　家屋壁材

既刊の『木製品編』で詳説したので多くは述べないが、ＳＤ１下流部右岸で倒壊状態の家屋壁材が出土した。付設施設というには躊躇するが、残存の状況からは近傍にこれが構成していた家屋が存在するものと思われる。

特に明瞭な出土遺物はないが、この周辺より出土したものに土師器高坏（2826～2828）やナスビ形曲柄又鍬（木116）がある。出土遺物から、ＳＤ１Ⅱ層下部併行の５世紀頃の所産と推定される。

８　貼石

入江状屈曲部の南側（上流側）で、長さ17ｍ×幅４ｍの範囲で拳大の礫を貼り詰めた部分があり、貼石として把握した。上層礫敷も完全に埋没し、ＳＤ１全体の埋没がかなり進行した古墳時代後期後半～飛鳥時代の所産と推定される。前述の礫群や礫敷が比較的疎らな礫集積に近いものであるのに対して、この貼石は非常に丁寧な仕事で、礫石の下には部分的に石を固定するための粘土も見られた。貼石面はほぼ水平であり、貼石部をひとつの場として使用していたらしいことを窺わせている。なお、貼石を取り払った下層には掘立柱建物が存在する。

第４節　ＳＤ１の遺物出土状況

ＳＤ１からは、弥生時代後期～中世の時期を中心とする大量の遺物が出土している。このうち、付設施設に伴う遺物の出土状況は既に前節で説明した。

それ以外の遺物の取り上げに関しては、基本的に前述したⅠ～Ⅳの大別層序毎の取り上げを行っている。このうち、遺物の出土が多い部分については、1/10作図の出土状況図を作成して各々の遺物を図上に落としたうえで取り上げ、さらに狭い範囲で遺物（特に土器）が集中して見られた部分については個々を土器群（調査時点では「土器溜」「単位」「セット」等とラベル表示）として把握して個別図を作成のうえ取り上げ作業を行った。

以下では、木製遺物も含むＳＤ１全体の出土状況について、その概要を述べる。

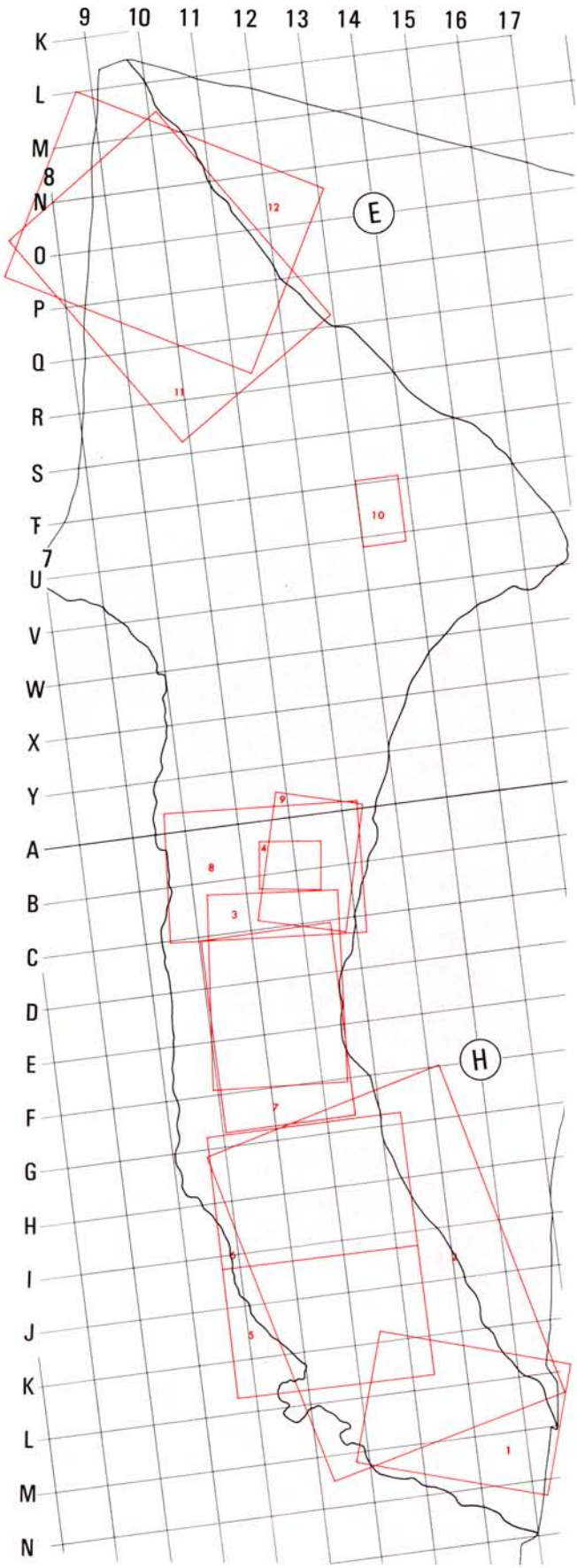
なお、前述したが、付設施設のうち礫群と礫敷の出土遺物に関しては、当該施設に存在した土器であっても、まとまりが良く土器群として認識できたものについては土器群として取り上げを行い、本書でも土器群のほうでそれら遺物を提示した。従って、これら施設出土として掲げた実測図は、当該施設出土として認識したものから土器群としたものを除いた遺物である。

１　ＳＤ１全体の遺物出土状況

ＳＤ１から出土した遺物は、種別毎にみた場合、土器、土製品、石器、石製品、木製品、自然木、種子類、それに極めて少数ながら金属製品がある。

このうち、時期が飛び離れて古い縄文晩期から弥生前期に相当する縄文土器・石器類は、ＳＤ１の埋没過程で流入した可能性が高い。

これらを除く遺物は、種子類や自然木などを中心に自然作用による流入のものも含まれようが、一旦人間の手を経て、その後ＳＤ１に人為的に入れられたものも多いものと思われる。この「入れられた」状況は、基本的にはこの場に投棄されたものが中心ではあろうが、なかには付設施設を含むＳＤ１内に意図的に「置かれた状態」のまま残ったと推定されるものも存在する。さらに、一言で「投棄」といっても、そこに至るまでの過程には様々な要因があったものと思われる。



第48図　出土状況図の図画一覧（１：500）

ＳＤ１の遺物の出土状況をみると、特定器種の土器が集中して出土したり、いわゆる祭祀的とされる木製品（武器形等）が集中して出土するなど、最終的にＳＤ１内で遺棄されるまでの過程がある程度類推できるものもある。

以下、ＳＤ１の上流側から順を追って出土状況の詳細を説明していくことにするが、提示する出土状況図は、次のてんを留意されたい。

・各々まとまり毎、あるいは単独で出土したものを重ね合わせた図のため、１枚に描かれているからといって図化遺物が全て同一面からの出土、あるいは同一時期を示しているとは限らないこと
・土器群として調査段階もしくは整理段階で認識した遺物群には、全体出土状況図に入っているものと入っていないものがある。これらは特に意図的に分けたものではなく、全体図化後に土器群を認識して取り上げを行ったか（個別図があり全図にも入っている）、最初から土器群のみを対象としての図化か（個別図のみで全図に入っていない）によっていること

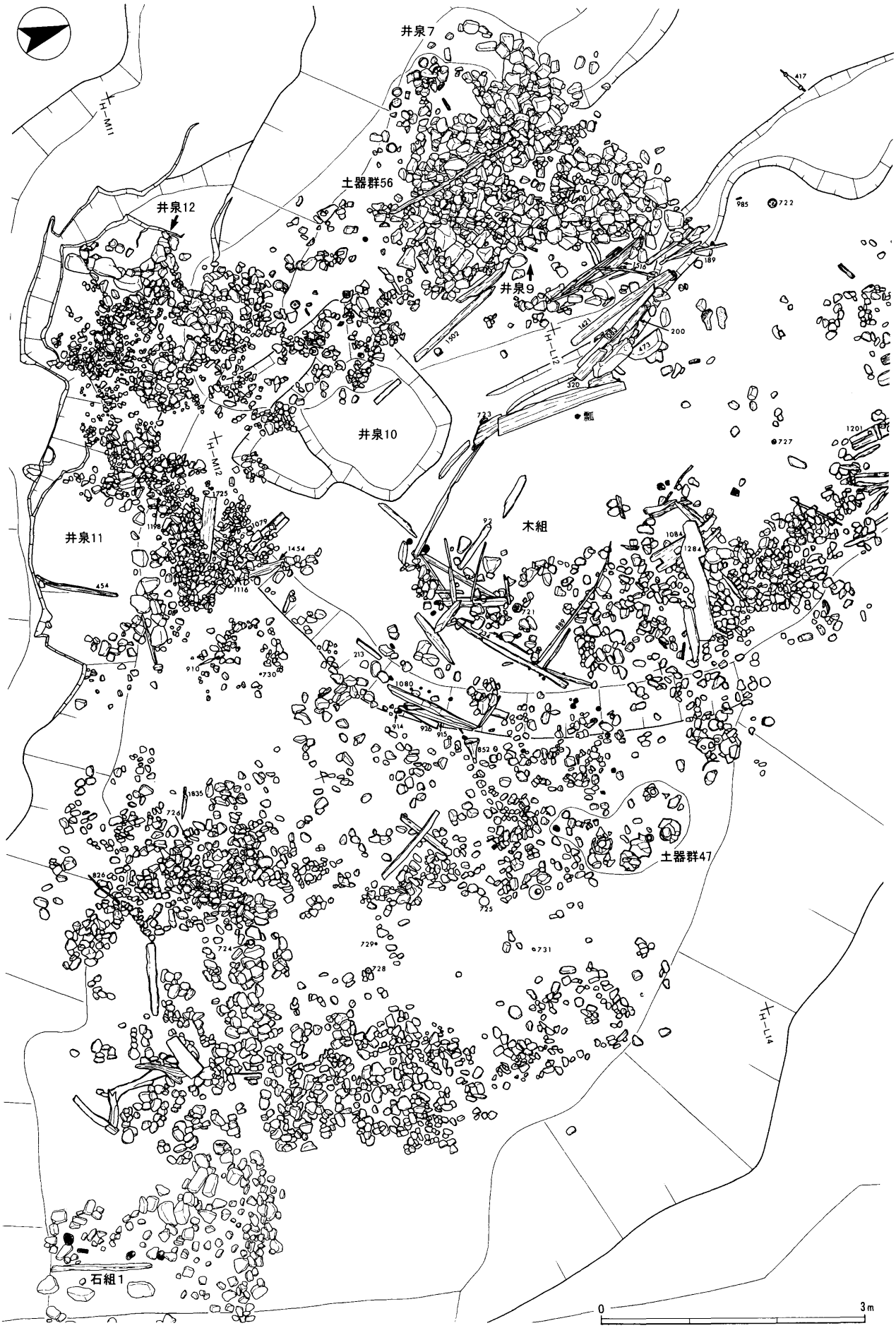
上流部Ⅱ層下部（図画１・第49図）

最終的な掘り上がりの航測図に、別途手描き作成したⅡ層下部出土の礫石や木製遺物を追筆し、Ⅱ層下部相当のＳＤ１上流部の全体像を示したものである。つまり、本図は、当該層の遺構実測図であるとともに遺物の出土状況図を兼ねたものでもある。

図示した下端部がＳＤ１の最上流部に相当しており、そこに杭列と縦板を伴う石組１が存在する。

ＳＤ１は、右岸側に礫敷が存在するが、図面からもわかるように、上流部に関しては全体に礫石を伴っている。図面ほぼ中央に木組遺構があり、そこより右側の礫石は右岸上層礫敷に移行していく部分である。

木組遺構の左側、ＳＤ１左岸の底部際には、上流側よりいずれも石組みの井泉である井泉11・井泉12・井泉９・井泉７が見えている（井泉８は井泉９の上面）。このうち、井泉11と井泉７は、井泉検出当初の状況を示したもので、前掲の井泉個別実測図はそこから不要な礫石類を撤去し、さらに井泉内の埋土も取り除いた状態を示したものである。また、図には素掘り井泉である井泉10も見えているが、こ



第49図　ＳＤ１上流部Ⅱ層下部出土状況図（１：60）　　図画１

第50図　ＳＤ１中上流部Ⅲｂ層出土状況図（１：80）　　図画２

れは下層の遺構である。

個々の付設施設の出土状況は前述したので、主にそれ以外の部分についてみてみる。6世紀初頭前後の須恵器坏類を中心として若干数の須恵器短脚高坏・壺甕類と、土師器坏・甕等で構成される土器群56が井泉7の南側を中心に存在する（詳細は後述）。

また、木組遺構と井泉9の間には、建築部材（木1421）や竪杵（木189・木200）、船材（木1083）、寝た状態で出土した杭（木1502・木1516）等の縦長系の木製品と槽（木473）や木錘（木320）等がＳＤ1の主軸（流水方向）に併行して存在する。木組遺構の近傍に槽が存在することは、いわゆる導水施設を構成する木材と共通する側面もあるが、木樋はなく、また槽も通常のタイプであることから、積極的に導水施設とする根拠は乏しい。ただ、これら木製品の遺存の方向に共通性があることは、何らかの意図でここに置かれた可能性を強く窺わせている。

その他の遺物については、基本的に単独出土ないしはそれに近いものであり、各々は出土状況図に示した遺物番号と対照されたい。

中上流部Ⅲｂ層（図画２・第50図）

最上流部よりやや下り、井泉10から井泉４までの部分に相当し、最下層の小溝も図示している。ただし、本図は、遺物の出土位置を簡便に把握するため全体の遺構配置図と個別に作成していた出土状況図とを重ね合わせたものであり、図示した付設施設群のうち、井泉10やＳＤ1底面中央の小溝などは明らかに図示遺物に先行する遺構群である。例えば、木製土卯具（木1043）や建築部材（木1452）等は、井泉10検出面の上面で出土している。井泉５の上面に存在する土器群13は井泉５の検出面より上である。小溝周辺で点々と出土している木製品・土器類も、小溝内から出土したものはない。とはいえ、ここに図示した遺物はいずれもＳＤ1上流部のなかではかなり底面に近い、換言すれば時期的に古い遺物であることは問題ない。

付設施設との関連が出土状況的に認められる遺物としては、まず井泉４～６に伴う木製品群がある。これらは、いずれも井泉の湧出し口となる部分に横長の板材が出土したもので、井泉の構造を知る資料としても注目してよい。井泉４は前述のように据えられた状態で出土しているし、そこに載るかたちで扉材断片（木1234）が出土していることも井泉１枠材の転用扉材との関連で注目できる。井泉６でも、板材が倒れてはいるが、井泉に伴うものとみてよかろう。井泉５はその部分の木材が多く（木1045・木1100・木1262・木1540等）、やや雑然としているが、やはり井泉４・６と同方向に横長系の木製品が存在することは両者の何らかの関連を想起させる。

また、井泉６の直上に存在する土器群９については、確かに我々が確認した井泉６の検出面よりは上での出土であったが、さほど深さに差はなく、土器群７が井泉６の埋没からさほど時間をおかない時期の所産と考えられよう。

この土器群９や土器群８・土器群13は、ＳＤ1の底面でも流心より左岸寄りにある。このことは、この時期（弥生時代後期から古墳時代初頭）はまだ左岸側からの投棄もある程度行われていたことを示すとともに（時代を追う毎に右岸側からの投棄が活発化する）、この時期のＳＤ1が、最下層の小溝こそ埋没しているものの、まだ谷地形の埋没がさほど進行していなかったことを示している。そして、土器群８などでの完形土器が相対的に多いことを考慮すると、その投棄は谷法面上からではなく、谷に下りて行われた可能性を強く示唆している。

また、井泉埋没後とはいえ、土器群９や土器群13が井泉の直上に位置していることは、埋没（埋戻）時の何らかの儀礼の存在を示すものかもしれない。

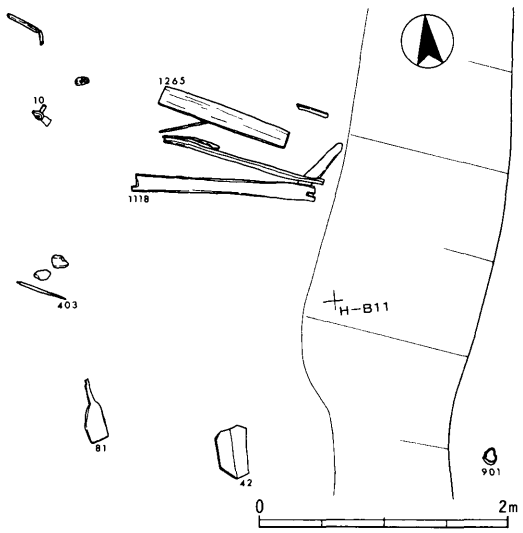
さて、この他の出土遺物について述べると、Ｈ－Ｈ・Ｇ10区で泥除未製品（木48・木50・木52）と鋤（木152）が近距離で出土しているのが目につく。近傍では、椅子（木804）や脚付き曲物（木540）などの出土もある。そして、この層序から確実にナスビ形曲柄又鍬（木103）が出土している。

中流部Ⅲｂ層（図画３～４・第51図～第52図）

先に見た上流部Ⅲｂ層相当部のやや下流に位置する。全体として、遺物の出方は比較的完形に近いものが単独に出土している例が多い。また、第52図に示したように、溝の主軸に直交したかたちで長い材（木1118・木1265）が出土している部分がある。

目立つものとしては、柄付き瓢３個が近接して出土していることは注目できる。ＳＤ1では、瓢箪・

第51図　ＳＤ１中流部Ⅲｂ層出土状況図①（１：60）　　図画３



第52図　ＳＤ１中流部Ⅲｂ層出土状況図②（１：60）
図画４

瓠の出土はしばしば認められるが、本例が最もまとまった例であり、自然堆積というよりは使用されたものが廃棄されたものであろう。

また、平鍬（木３・木７・木10）とその未製品（木17）、膝柄（木128）、横鍬や泥除未製品（木33・木42・木49）、東海系曲柄鍬（木81）といった耕起具類や、盾（木845）、弓（木827）、それに底板を嵌め込むタイプの琴（木983）などが単独出土している。これらは、全くの同時存在ではないものの、近接した時期に属する遺物群といえよう。

中上流部Ⅲａ層（図画５～８・第53～56図）

これまでの出土状況図同様、最終的な掘り上がり図に出土状況図を重ねたもので、多くの井泉はこれら遺物が投棄された時にはすでに埋没している。遺物と対応する付設施設は井泉３のみである。

井泉３は、これまで見てきた井泉同様、湧出し口に直交するかたちで板材が出土している。建築部材を転用したと思われるものが多く、この井泉に水を溜めるための枠材であった可能性がある。ただ、井泉３の前面から出土している木材の量が枠材相当分よりも多く、あるいは井泉３には覆屋状の施設が伴っていた可能性がある。また、ここからは梯子（木1400）も出土しているが、これを井泉と関連して考えた場合、枠材として転用されたとみる他に、ＳＤ１肩部から井泉へ下りるための梯子であったことも考えられる。出土状況のみからはいずれとも決しがたいが、ここでの木製品の集中的出土と共に、やはり何らかの意味を見いだすべきであろう。

木製品の出土状況で注目すべきこととして、ＳＤ１の流れの方向に直交して、板材や棒材がしがらみ状に横に連なって出土したことである（第56図参照）。ただし、しがらみとするには、これら材を固定するための杭等が必要となるが、それは存在しない。従って、これらがどのような意味をもつものかは明確にはしえないが、同一面における木器溜として、案（木784）をはじめとする木1146・木1291・木1375・木1377・木1439・木1500・木1535・木1608・木1729・木1862等が伴うことを確認しておく。

その他の木製品は、多少幾つかが重なって出土したものもあるものの、基本的には単独出土である。そのなかで、底部中央で東海系曲柄平鍬（木66）がこの層でも出土していることを確認することができるが、Ⅲａ層としてはかなり下部である。

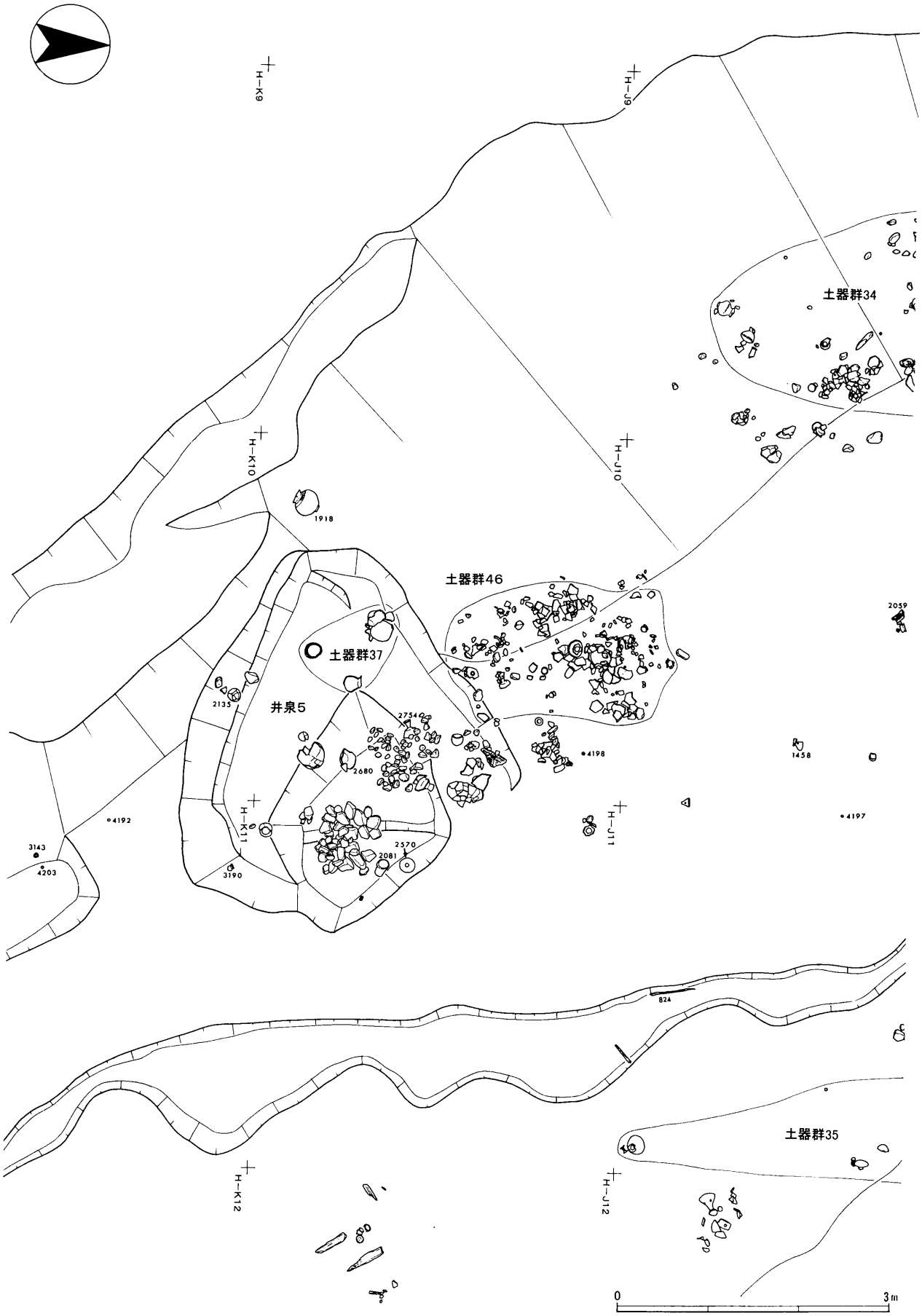
土器群は、ＳＤ１底面の中央付近にはなく、左岸では大溝法面下の底面との移行部付近、右岸では法面下裾から法面にかけての部分に存在する。このうち土器群24・25と土器群26は、レベル的にはさほど変わらないが、土器群24・25がより密集性が高いことから土器群26より抽出した。この土器群24・25も含め、土器群27・28・33・37などは、完形土器を含む少数の土器が極めて近接した状態で出土しており、ある程度の一括性を認めうる。土器群５もこれらとよく似た土器群であるが、時期的にはⅢｂ層に相当する。これは、法面でもかなり上位だったため層の幅が薄く、ＳＤ１掘削過程で本来の層位よりも上位で取り上げてしまったことによる。本来別図とすべきであったが、便宜上ここに措いた。

中流部右岸Ⅲａ層（図画９・第57図）

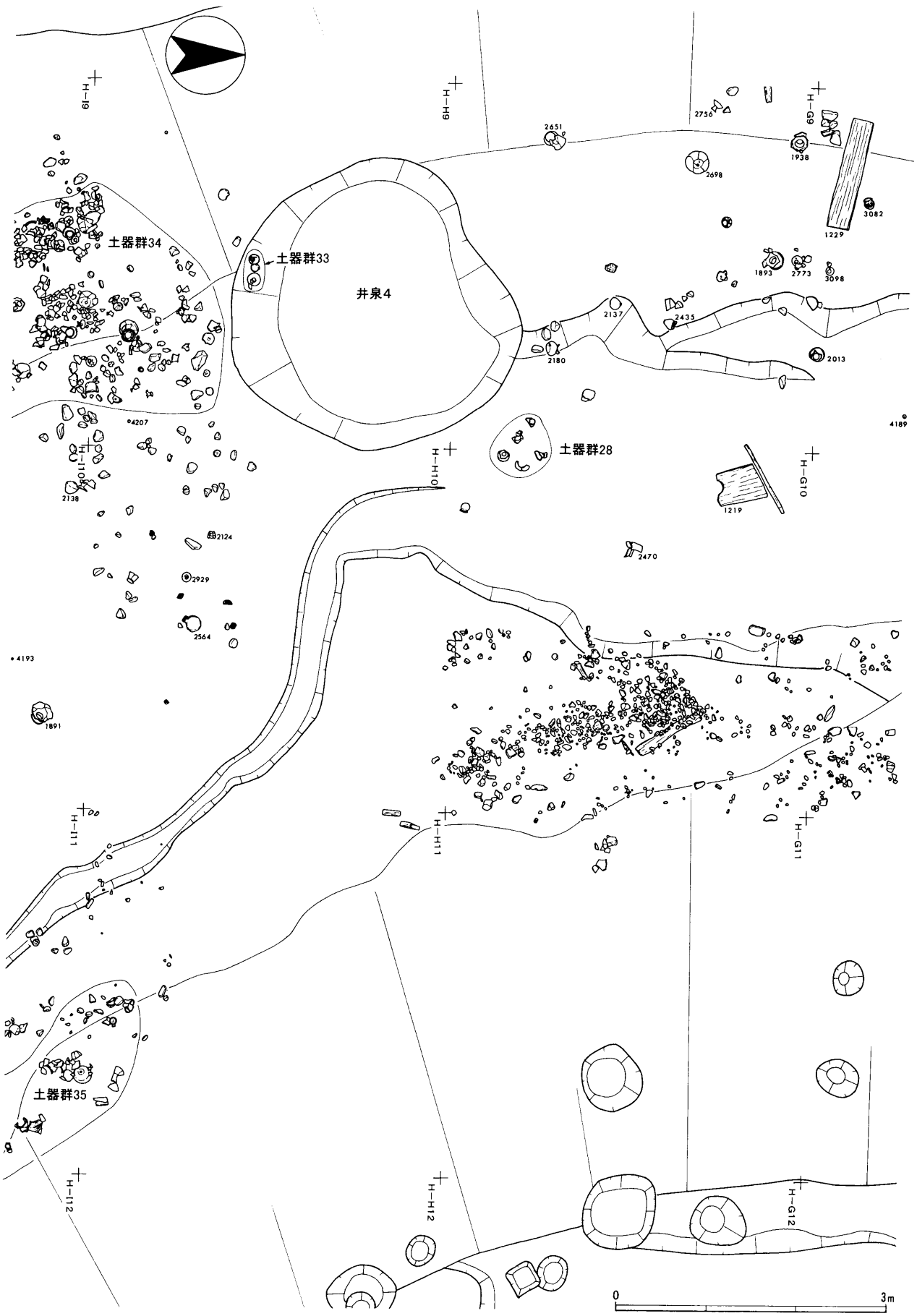
前図が示した部分と位置的には重なるが、そこよりもやや下位のＳＤ１右岸法面部である。図上右側の礫石は、上層礫敷・下層礫敷の間に相当し、やや疎らに存在することから礫敷として把握していないが、部分的に集中するところがある。このうちのひとつが石組２で、礫石を環状に組み、内側よりミニチュアの脚付土器（719）が出土している。

全体に、この部分の木製品は、まとまりとなるものはない。

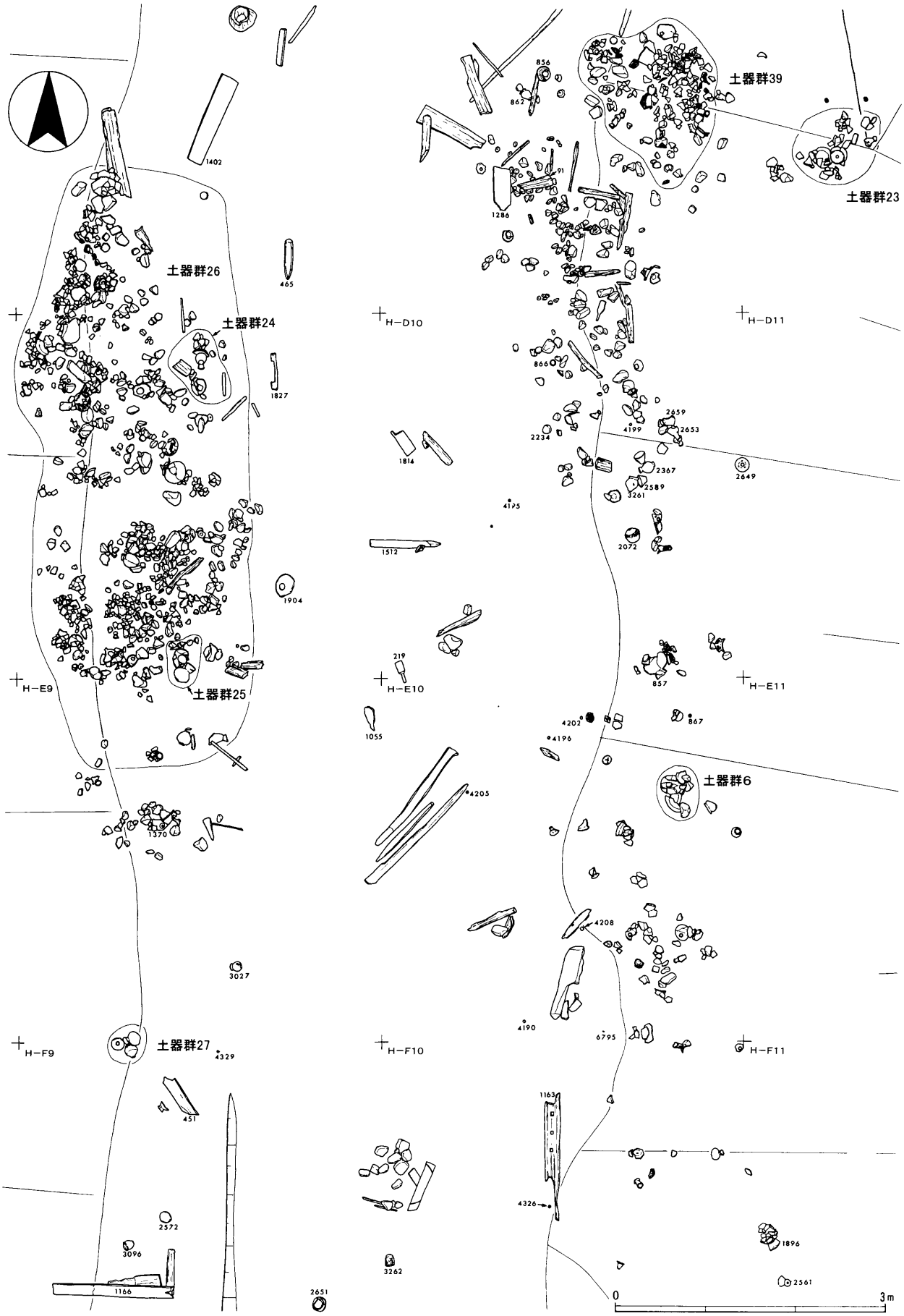
土器群には、土器群４・20・31がこの位置に存在



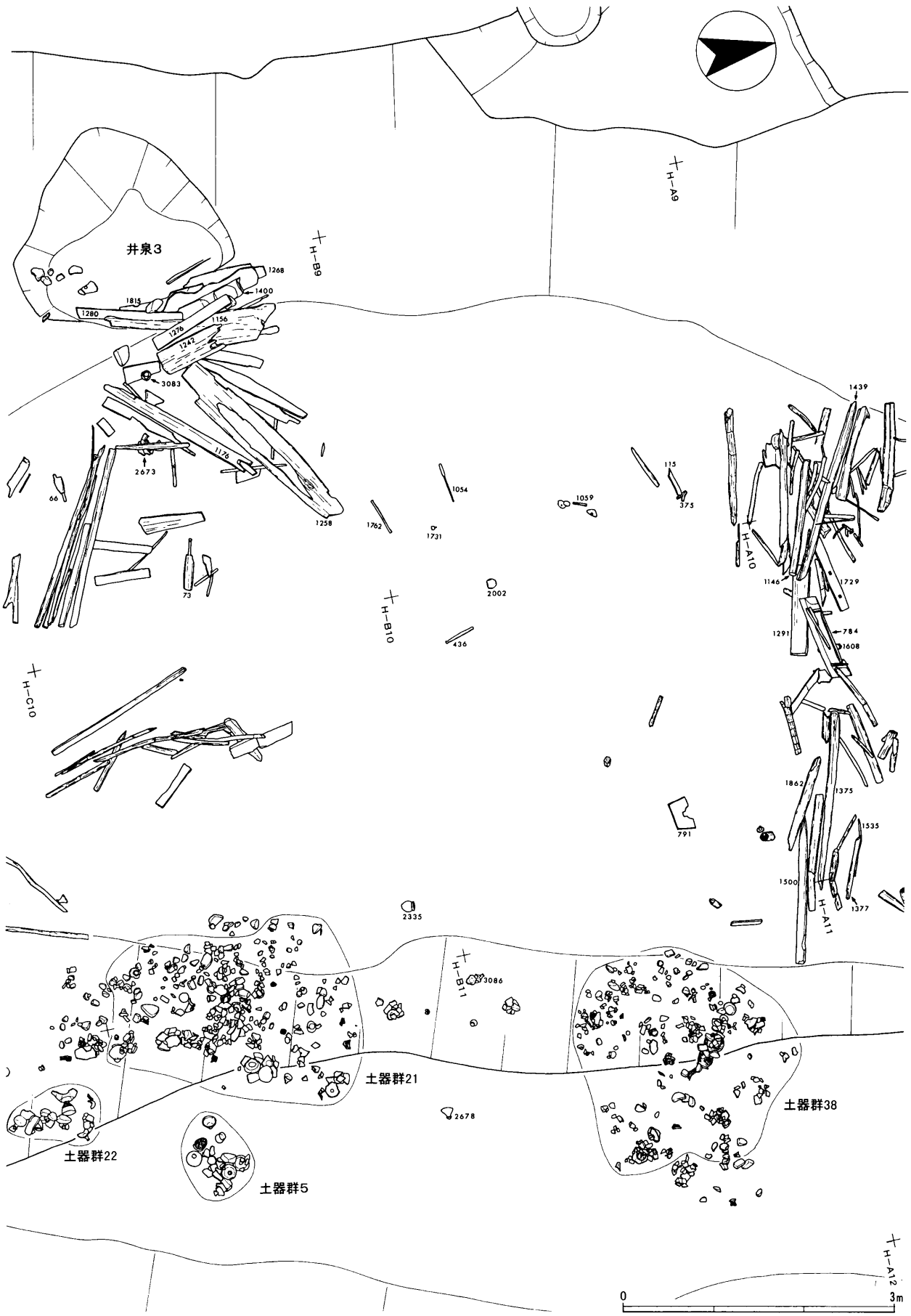
第53図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図①（１：60）　　図画５



第54図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図②（１：60）　　図画６

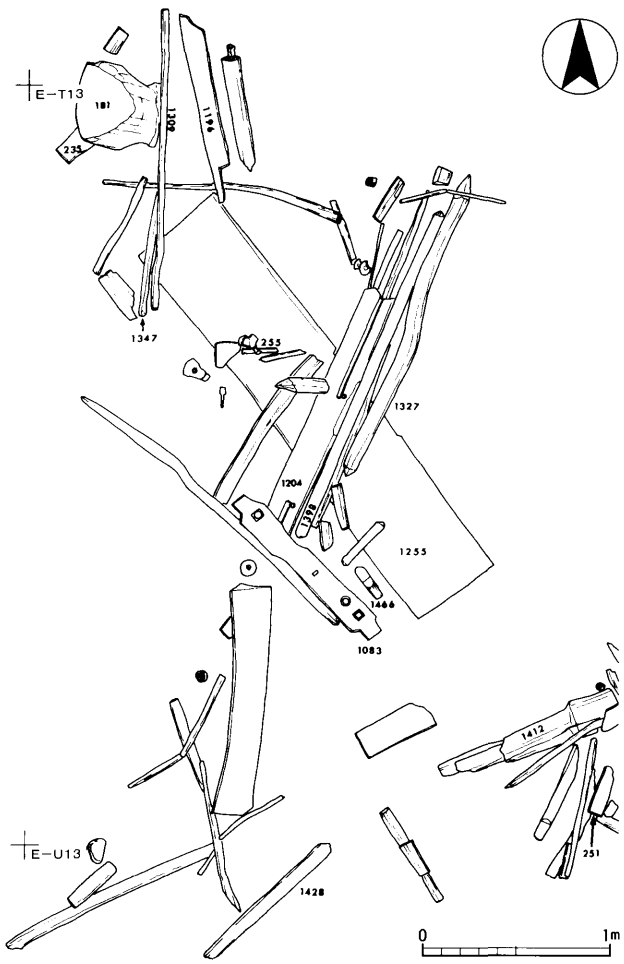


第55図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図③（１：60）　　図画７



第56図　ＳＤ１中上流部Ⅲａ層出土状況図④（１：60）　　図画８

第57図　ＳＤ１中流部右岸Ⅲａ層出土状況図（１：40）　　図画９



第58図　ＳＤ１Ｅ－Ｔ13Ⅲａ層木製品溜出土状況図
（１：40）図画10

する。このうち土器群４は前述の土器群21の真下に相当し、両者が一連のものである可能性がある。

Ｅ－Ｔ13区Ⅲａ層木製品溜（図画10・第58図）

入江状屈曲部のやや流心寄りの部分で確認した木製品溜まりで、ちょうどⅢａ層とⅢｂ層の境界付近となり、調査段階ではいずれの層に属するか決しがたかった。一応、Ⅲａ層として捉えておく。

出土状況に規則性はないが、木製品の組成には建築部材を主体として若干の別器種を伴う。同一地点の同一層で確認した木器群ということができる。ここから集中出土した木製品には、臼（木181）・田下駄（木235・木251・木255）・船材（木1083）・建築部材（木1196・木1204・木1255・木1309・木1327・木1347・木1398・木1412・木1428）がある。

下流部Ⅱ層下部～Ⅲａ層（図画11・第60図）

礫石は図示していないが、ＳＤ１右岸上層礫敷からそのまま溝中央に向けて発掘していって確認した遺物群で、ちょうどⅡ層下部とⅢａ層の層の変わり目を中心とした部分である。繰り返し説明しているように、本図も何面かの時期を重層的に作図したもので、全てが同一時期ではない。

木製品の出土状況的には見るべきものが多い。まとまったものとして土器群53と共に出土した刀形を中心とした武器形集中部、その下面にあった建築部材群、組み合った状態で出土した家屋壁材があり、それ以外でも部分的に木製品の集中が見られる。また、細かい植物繊維がスサ状に出土している部分があり、壁下地的なものになるかもしれない。

このうち武器形集中区は、2.5ｍ×2.0ｍの範囲に主に刀形と鑓形で構成される武器形が集中して出土したもので、土器群53も伴う。

この直下には、建築材の水平構造材とした木1180と木1181がある。これは、高床用柱材（木1106）と直交するかたちで出土している。周辺には、垂木（木1338・木1393）や、本来は垂木であった可能性のある細長い杭材（木1538）等も出土しており、これらがひとつの高床建物を構成していた部材であった可能性がある。その場合、木1106の西側に折り重なるように存在する長大な材（木1132・木1095・木1858等）やスサ状繊維も何らかのかたちでこれに組み合っていた可能性がある。

家屋壁材については前述した。

この他の木製品の出土状況について見てみると、Ⅲｂ層に相当する可能性のあるやや下層部からの出土であるが、壁板（木1249・木1250）と水平構造材（木1175）が集中して出土した部分がある。また、全体として、複数の棒状の材が横方向と縦方向に交差するかたちで出土している部分がしばしばある。

以上のことを勘案すると、本地区には、家屋壁材とした建物以外に、材の数量的には足りないもののもう１棟分の建物（高床建物）構成部材があり、２棟分の家屋が倒壊ないしはある程度組み合った状態で部分投棄された可能性がある。

土器群では、前述の土器群53の他、最下流部で韓式系土器等も伴う土器群52が出土している。

また、右岸法面ではちょうど上層礫敷が溝中央に向かって途切れるあたりを中心として、初期須恵器を含む古墳時代中期を中心の土器が出土している。

下流部右岸Ⅲｂ層（図画12・第61図）

大量の木製品及び土器が出土している。

このうち、木製品は、ＳＤ１主軸（流れの方向）に直交して柱・杭・棒状の長細系の木製品が出土している状況がある。特に、調査区北端の最下流部においてこの傾向が顕著である。この部分には、長さ4.7m以上の材を含む長い柱状の材（うち木1105は掘立柱建物用柱と報告）と長さ1.5m程度の短めの材が同方向にあり、少数ではあるがこれに直交する細長い材も存在している。これら一群は、全体として１棟分には足りないものの、長めの材は通柱、短めの材は屋根もしくは壁に係わる部材として、収斂されるかもしれない。また、この周辺および上面からはナスビ形曲柄平鍬（木85・木87）や泥除が装着された横鍬（木26）が出土しているが、木26は層位的に高く、Ⅲａ層に相当する部分からの出土である。

これに対して、本図の右下側（上流側）での木製品の出土は、規則性に乏しく、雑然とした状態で存在しており、焼けているものもある。

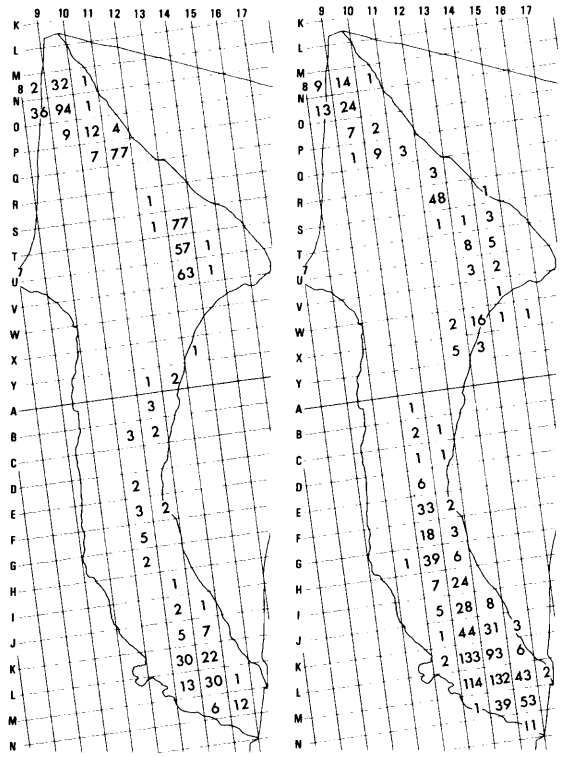
土器群として認識したものには土器群１・２・３・10・14・15・30がある。これらはいずれも法面から底面にかけてのいわゆる法尻部分に存在している。それとは別に、木製品群に混じって単発での土器の出土がある。

土器群を細かくみていくと、狭い範囲で集中的に出土しているものに土器群３・10・30があり、やや疎らながら土器群として把握したものに土器群１・２・14・15がある。このうち、前者はより一括性が高いもの、後者は一括というよりも何回かにわたる投棄の集積の結果ないしは土器相互の関連は薄いものの時間的な近接性を示す資料、と評価しえよう。

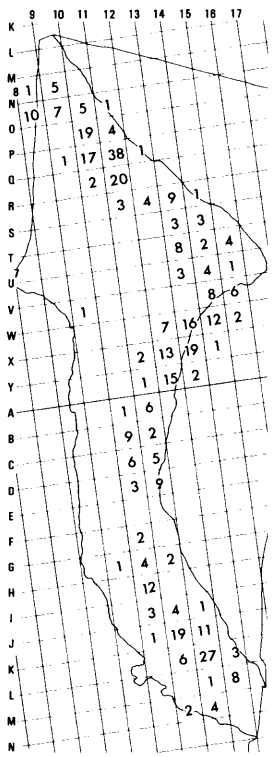
臼玉出土分布

第59図は、ＳＤ１からの臼玉出土の個数分布を示したものである。個々の土器群や井泉出土のものも所属層序に一端引き戻し、作成した。所属層序は、取り上げ時のラベルで「Ⅱ・Ⅲ層」としたものなどあいまいな表現をしたものも混じっているが、おおまかな傾向は示していると思われる。

図を見る限り、右岸での臼玉出土が圧倒的で、これは土器群等の出土頻度とも矛盾しない。また、上流部のみは特に右岸ということに限定されていない



Ⅲa層　　Ⅱ層下部



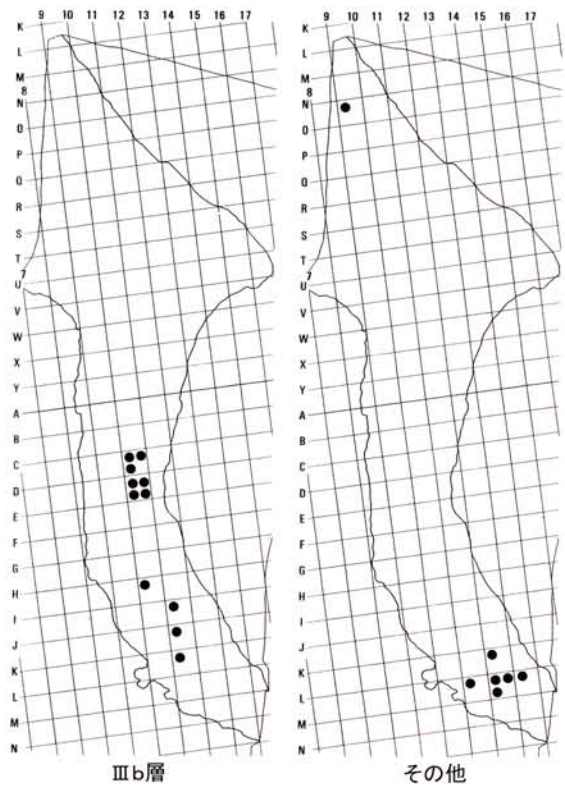
Ⅱ層

第59図　臼玉小地区別出土個数図

※木1216（扉板）は、独立行政法人奈良文化財研究所の光谷拓実氏による年輪年代測定によって西暦 319年を遡らないことが判明している。

第60図　ＳＤ１下流部Ⅱ層下部～Ⅲａ層出土状況図（１：60）　　図画11

第61図　ＳＤ１下流部右岸Ⅲｂ層出土状況図（１：60）　　図画12



第62図　瓢箪出土位置図

ことも明らかで、基本的に礫敷範囲と対応しているものといえよう。

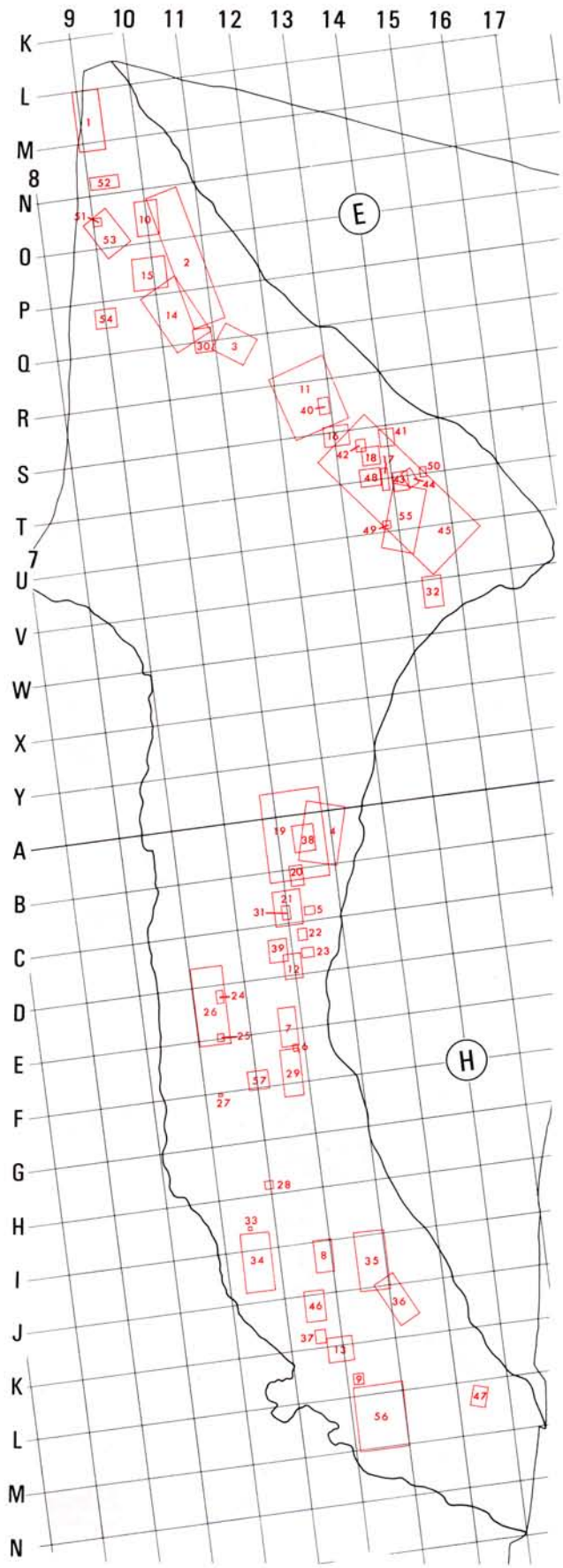
瓢箪分布

第62図は、ＳＤ１からの瓢箪の出土頻度を示したものである。瓢箪は、後の『延喜式』の規定の中に祭料として記されるものがあることから、一応、その出土と祭祀行為との何らかの関連の可能性を考えて本図を作成しておいた。ただし、同じく祭祀性があると捉えられることもある桃核については、ＳＤ１からの出土量が膨大であったため、分布図の作成はなしえなかった。

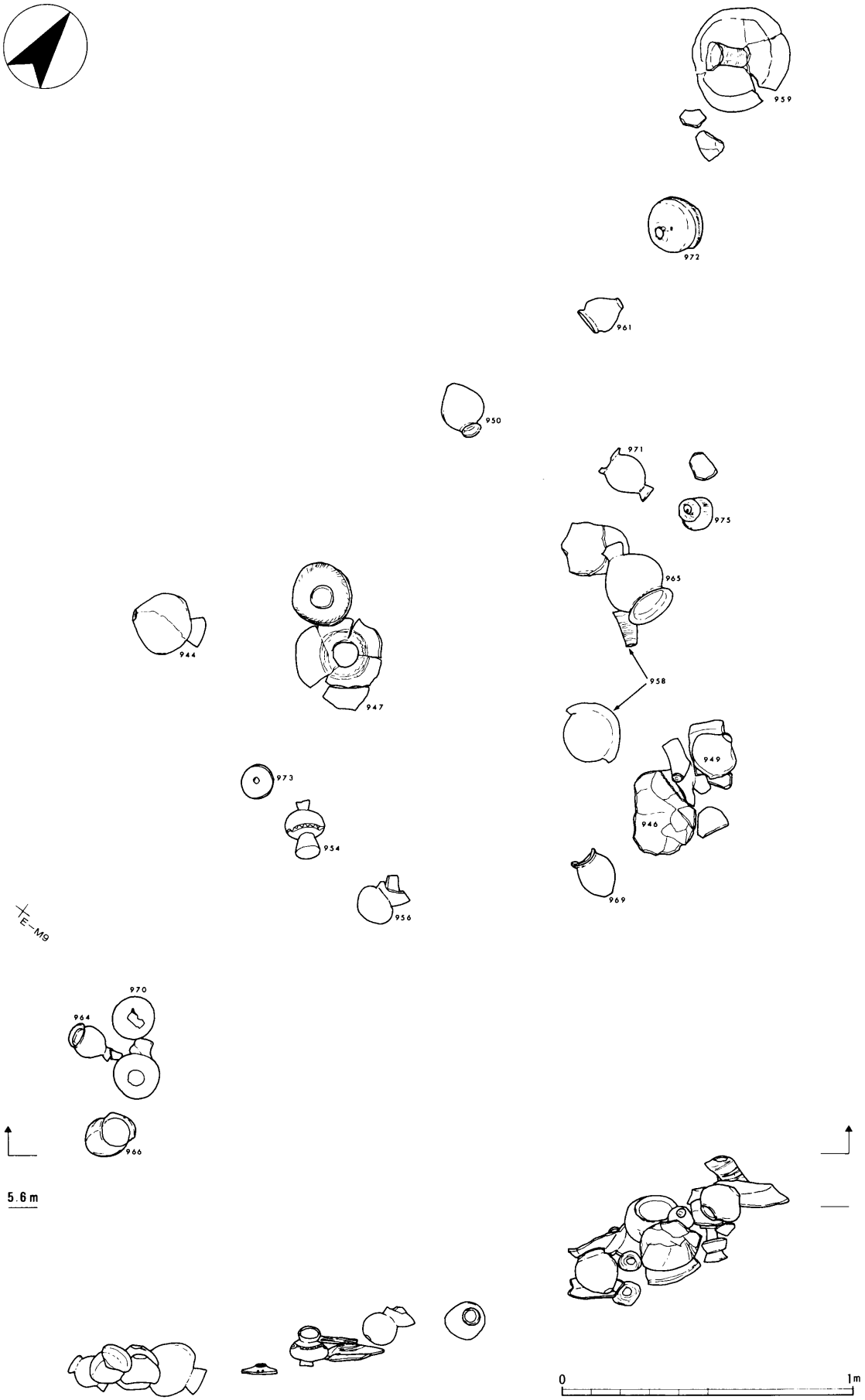
2　土器群

土器群は、発掘調査の時点で把握・取り上げたものと、発掘調査終了後の図面の整理段階で把握・遺物抽出したものがある。その場合、それぞれの土器群の背景は同じではない。例えば、

・廃棄もしくは埋置に一括性があり、時期的な同一性が保証され、編年等の基準となるとともに、組成自体も何らかの意味をもつもの
・廃棄の一括性には乏しいものの、組成はともかくある程度の同時期性が追えるもの



第63図　土器群図画一覧（１：500）



第64図　ＳＤ１土器群１出土状況図（１：20）

・時期的にはやや一括性が乏しいものの、完形土器の出土が多い等の理由で、その場所自体が何らかの意味をある程度通時的に持っていると判断されるもの

など、各々が持つ意味は様々である。これらは、土器群の組成や時期幅などから、個別に判断していくべきものである。

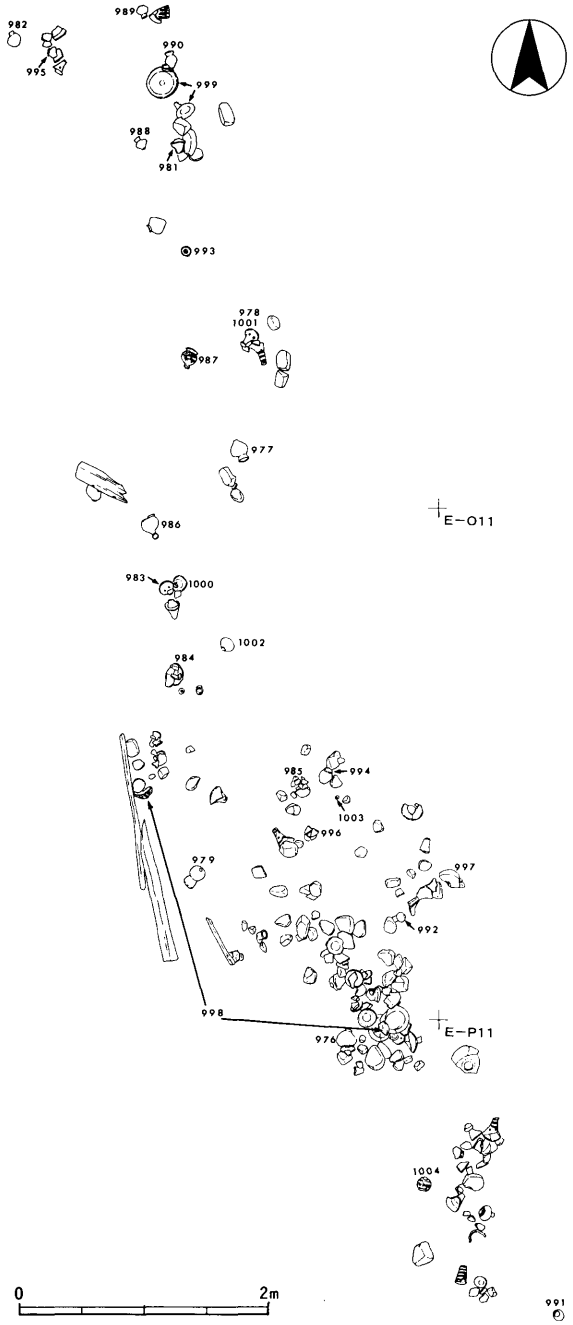
また、土器群と呼称してはいるが、当該遺物の構成遺物には土器以外にも木製品や滑石製模造品が伴う場合があり、なかには木製品を中心とするところに土器が伴う事例（武器形集中部と土器群53）も存在する。以下、個別にみていくことにする。なお、括弧内は、調査時点での名称で、括弧書きの注記がないものは調査後に遺物出土状況図から図上抽出したものである。

土器群１（土器溜Ｐ）

Ｅ－Ｌ９区を中心に長さ4.5m、幅2.2mの範囲から出土したⅢｂ層の土器群で、廃棄単位としての一括性には欠けるものの、ほぼＳＤ１の堆積具合に応じて出土した一群である。正立もしくは倒立状態のものは少なく、横倒しになったものが中心であるが、ローリングはあまり受けておらず、器面の遺存状態も良好であり、なおかつ土器群中に完形土器や遺存度の高いものが多い。従って、本土器群は、基本的にはＳＤ１の肩部から投棄された状態を示しているものと思われる。その場合、壺への線刻画の存在や壺・甕の胴部へ焼成後穿孔されたものが目立つことは、本土器群が何らかの祭祀行為終了後に投棄されたことを示唆している。

土器群２

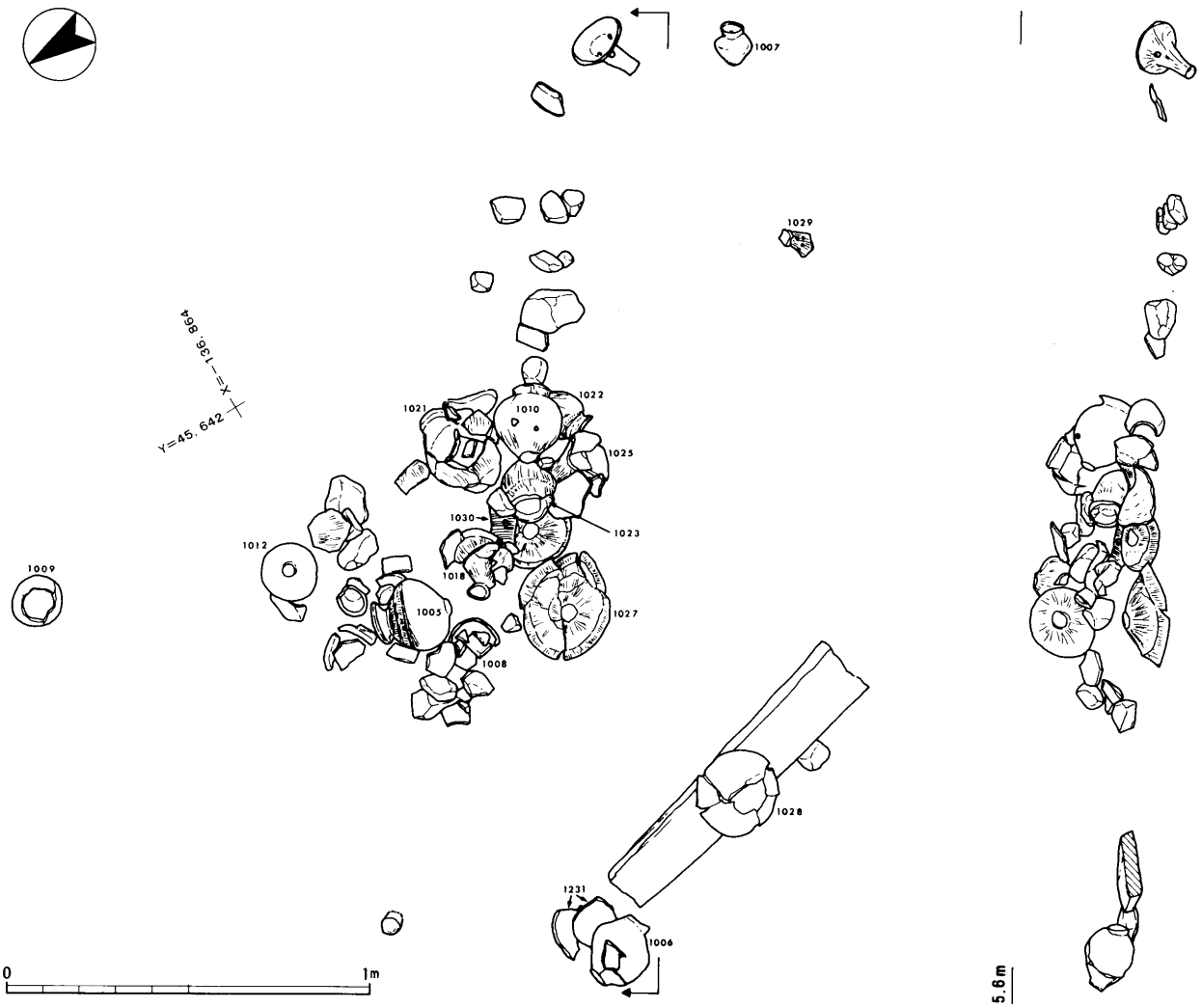
現地調査時点では、この部分を特に土器溜として認識していなかったが、その後、遺物出土状況図の検討で、遺物が完形土器を中心に面的に出土していることを確認し、土器群として把握した。従って、厳密な範囲は不明であるが、Ｅ－Ｎ10・Ｏ10・Ｐ11地区を中心とした細長いベルト状の範囲(5.6m×2.4m)で土器を抽出している。ローリングの少ない完形土器を中心とした一群が倒れた状態で出土しており、多少の時期幅をもちながらも、この場所から土器が投棄されたことを示していると思われる。なお、前述の土器群１と隣接した位置にあり、あるいはこれらを一括して把握したほうがいいのかもしれない。



第65図　ＳＤ１土器群２出土状況図（１：60）

土器群３（土器溜m）

前述の土器群１や２にほど近い位置からの出土であるが、2.7m×2.2mの比較的狭い位置（特に中心部は１m×１m）から完形土器を含む一群が倒れた状態で集中して出土している。胴部に穿孔を有する個体も存在する。特に中心部の一群は、土器が一括投棄された状態を示すものと思われる。割れずに完形土器が多いのは、一括投棄された当時、ＳＤ１がかなりの低湿状になっていたためと思われる。



第66図　ＳＤ１土器群３出土状況図（１：20）

土器群４

これも現地調査段階では把握できなかったが、その後の整理過程で、土器群として把握した。Ｈ－Ａ11・12区を中心に礫石に混じって出土しているが、その密度は他の土器群に比べやや疎らである。出土状況的には全体としての一括性にやや欠けると言わざるをえない。壺と甕が組成の中心であるが、高坏がないわけではない。また、注口部状の窓が付く甕形土器も存在する。なお、本土器群に重複するかたちで石組２が存在する。

土器群５（単位ａ）

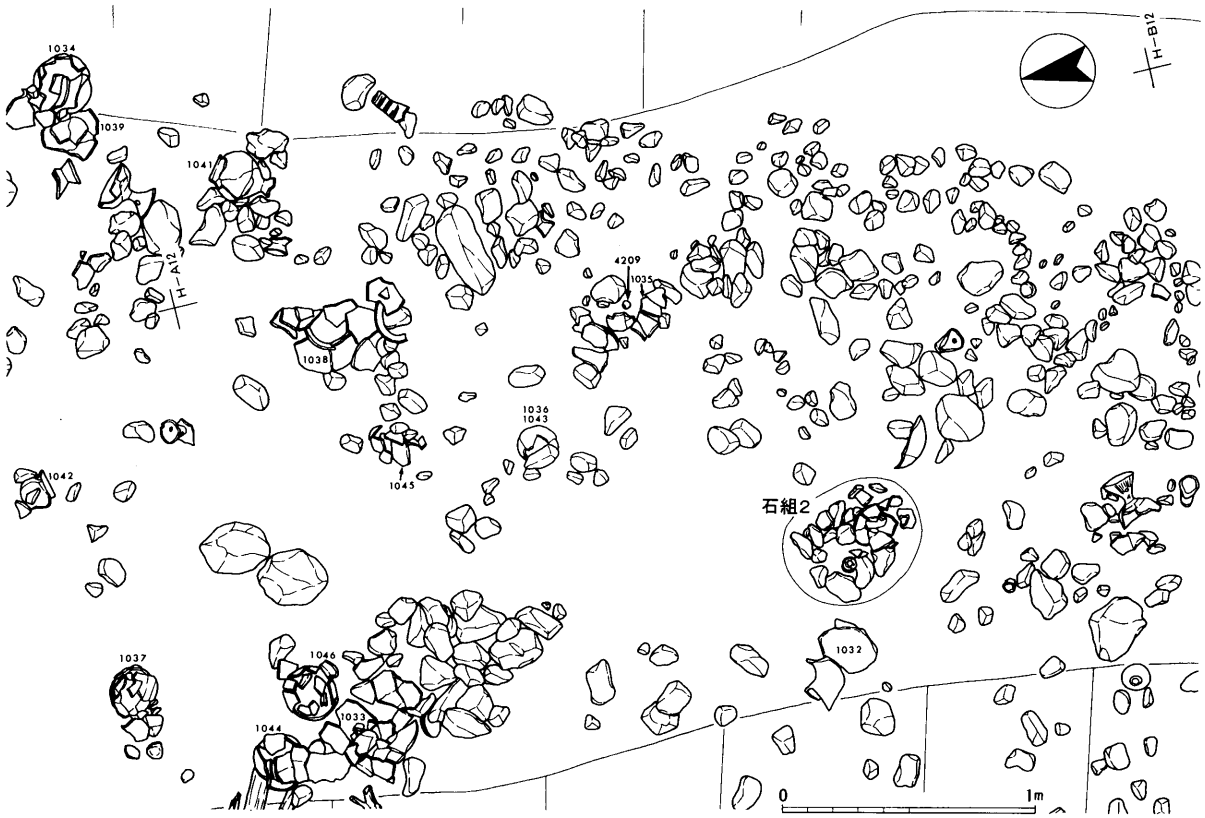
拳大の礫とともに、90cm×70cmの狭い範囲で集中して出土した土器群である。倒立状態で出土した土器が比較的多いが、横倒しのものもあり、基本的には一括投棄された土器群ということができよう。

土器群６（セットｉ）

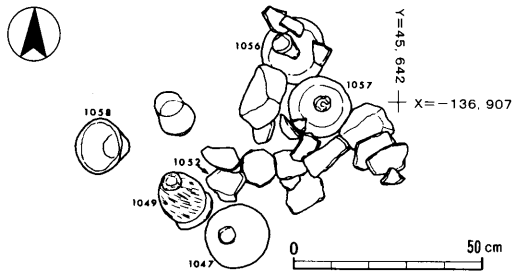
同一地点で折り重なるように集中して出土した壺・甕・高坏である。確認地点には複数の礫も存在しており、あるいは土器を伴う配石であった可能性もある。しかし、配石とするには礫の集中に欠けるため、可能性の提示に止めておきたい。土器の出土量的には少ない土器群である。

土器群７（単位Ｏ）

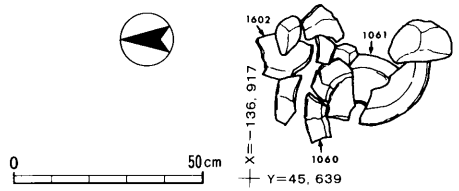
下層礫敷の下部から出土しており、前述の下層礫敷下部出土土器と同じ扱いにすべき一群であるが、2.9ｍ×1.5ｍの範囲で土器がやや集中して出土していることから土器群７として把握した。ＳＤ１右岸の層堆積及び下層礫敷に沿って出土しており、ほぼ同一面での出土と考えてよかろう。ただし、集中した出土とはいっても、一括廃棄を想定しうる程の集中性はなく、細かい廃棄の単位として復元できるわ



第67図　ＳＤ１土器群４出土状況図（１：30）



第68図　ＳＤ１土器群５出土状況図（１：20）



第69図　ＳＤ１土器群６出土状況図（１：20）

けではない。

土器群８（単位Ｌ）

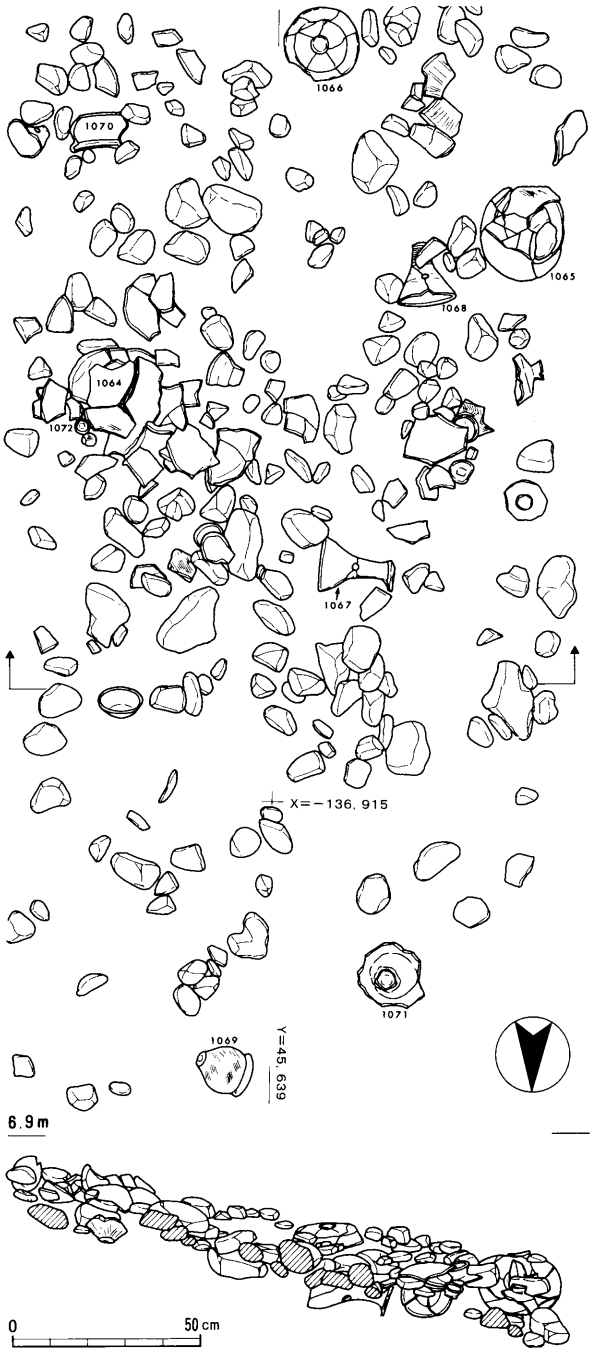
完形土器を含む残存状態のよい土器が、1.2ｍ×0.7ｍの範囲から出土した。全体に横転状態で出土した土器が多く、この場に廃棄されたものと思われる。ただし、1081などは同じ検出面ながら若干離れており、あるいは別の一群かもしれない。

土器群９（単位Ｑ）

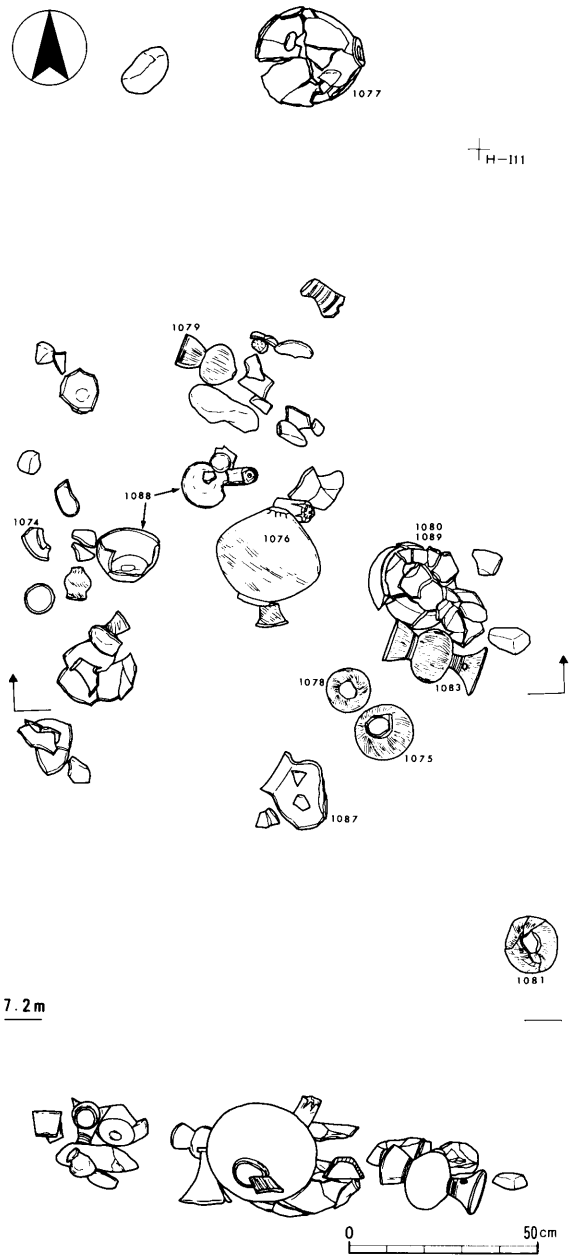
前述のように、井泉６の検出面の上面から出土しており、井泉６の埋没と何らかの関連を有していた可能性がある。１ｍ×0.5ｍという狭い範囲の同一面で確認された一群で、一括性は高いものと思われる。ただし、1096のみは、周辺部出土で、この一括に含まれていたかどうかは確定できない。完形土器を中心とし、全体に横転状態で出土している土器が多い。壺類、次いで高坏の出土が多く、甕は受口甕１点を図示しえたのみである。

土器群10（土器溜Ｑ）

2.6ｍ×1.8ｍの範囲から出土した土器群であるが、とくに集中しているのは第73図右上の1.9ｍ×１ｍの範囲で、さらにその周辺部からも土器の出土がある。倒立したり横転したりしているなど土器の出土に規則性はなく、投棄された状態を呈している。甕もあるが、より壺や高坏の出土が目立つことや、ミニチュア土器や胴部穿孔の壺が含まれることは、本土器群が祭祀に際して供されていた土器群である可能性を示していよう。おそらく、本土器群は、その祭祀終了後に投棄されたものであろう。ただし、出



第70図　ＳＤ１土器群７出土状況図（１：20）



第71図　ＳＤ１土器群８出土状況図（１：20）

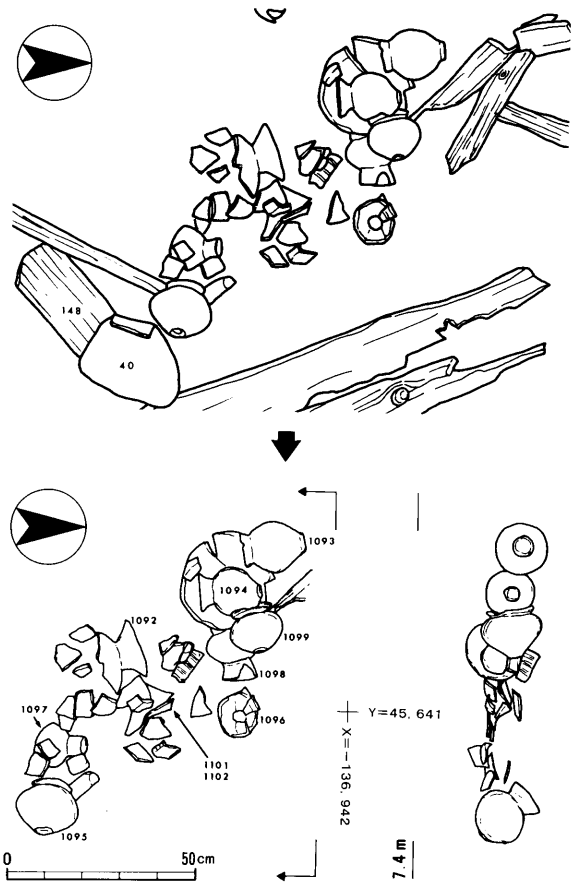
土土器には、高坏の形態などを指標とすると、若干の時期差が存在する可能性があり、完全な一括品というわけではない。

土器群11（土器溜Ｌ）

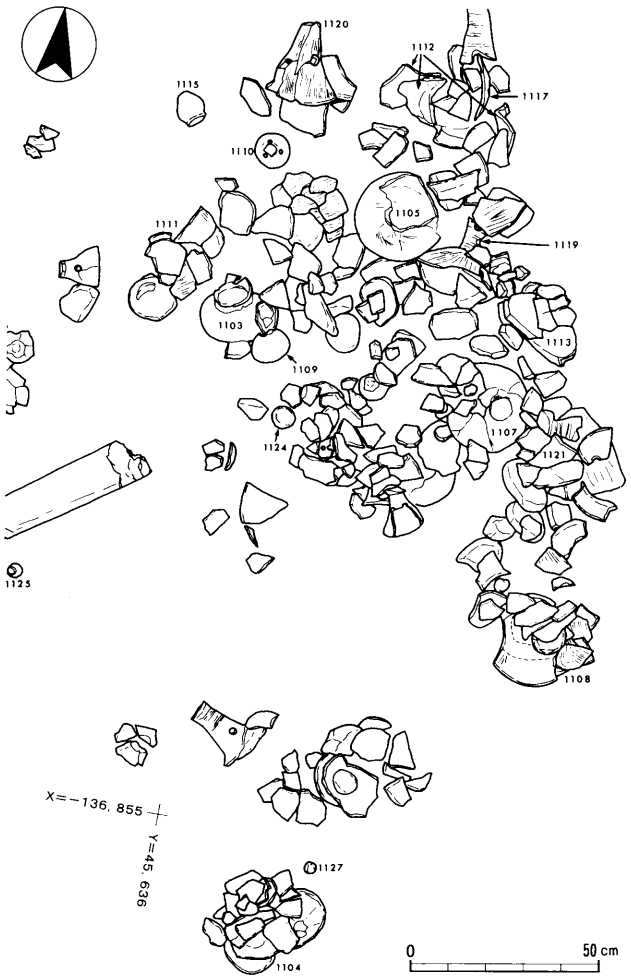
５ｍ×４ｍの幅広い範囲からやや散漫なかたちで出土した土器群である。これらは一回の投棄によるものではなく、複数回の廃棄の集積によるものと思われる。出土土器を見ても、例えば高坏などは山中式系のものと欠山式のものの両者が出土している。従って、本来もう少し細かい廃棄単位が存在するものと思われるが、出土状況では分けられなかった。土器組成的には壺が多く、そこに線刻や穿孔が施されたものも存在する。こうしたことから、この土器群のいくつかは、祭祀に際して供されていたものと推定される。

土器群12（単位ｊ）

1.8ｍ×1.5ｍの比較的狭い範囲に集中して存在した土器群である。下層礫敷の礫に混じって疎らに土器が出土する。土器群の底が溝の傾斜にそってほぼ一定しており、右岸から投棄された遺物群であろうと思われる。



第72図　ＳＤ１土器群９出土状況図（１：20）



第73図　ＳＤ１土器群10出土状況図（１：20）

土器群13（単位Ｎ）

井泉５の上面に存在した土器群で、2.2m×2.1mの狭い範囲に土器が集中して出土している。ＳＤ１で確認できた土器群のなかでは珍しく左岸寄りに存在している。土器群の底は、ＳＤ１の傾斜に沿っており完形品も多い。やや時期の異なる遺物（1194）も含むものの、全体としては一括性が強いものと思われる。なお、1177は、やや離れた位置から出土したが、本土器群の延長部分に存在することから同一の土器群と判断した。組成に占める広口壺の割合が多い。

土器群14

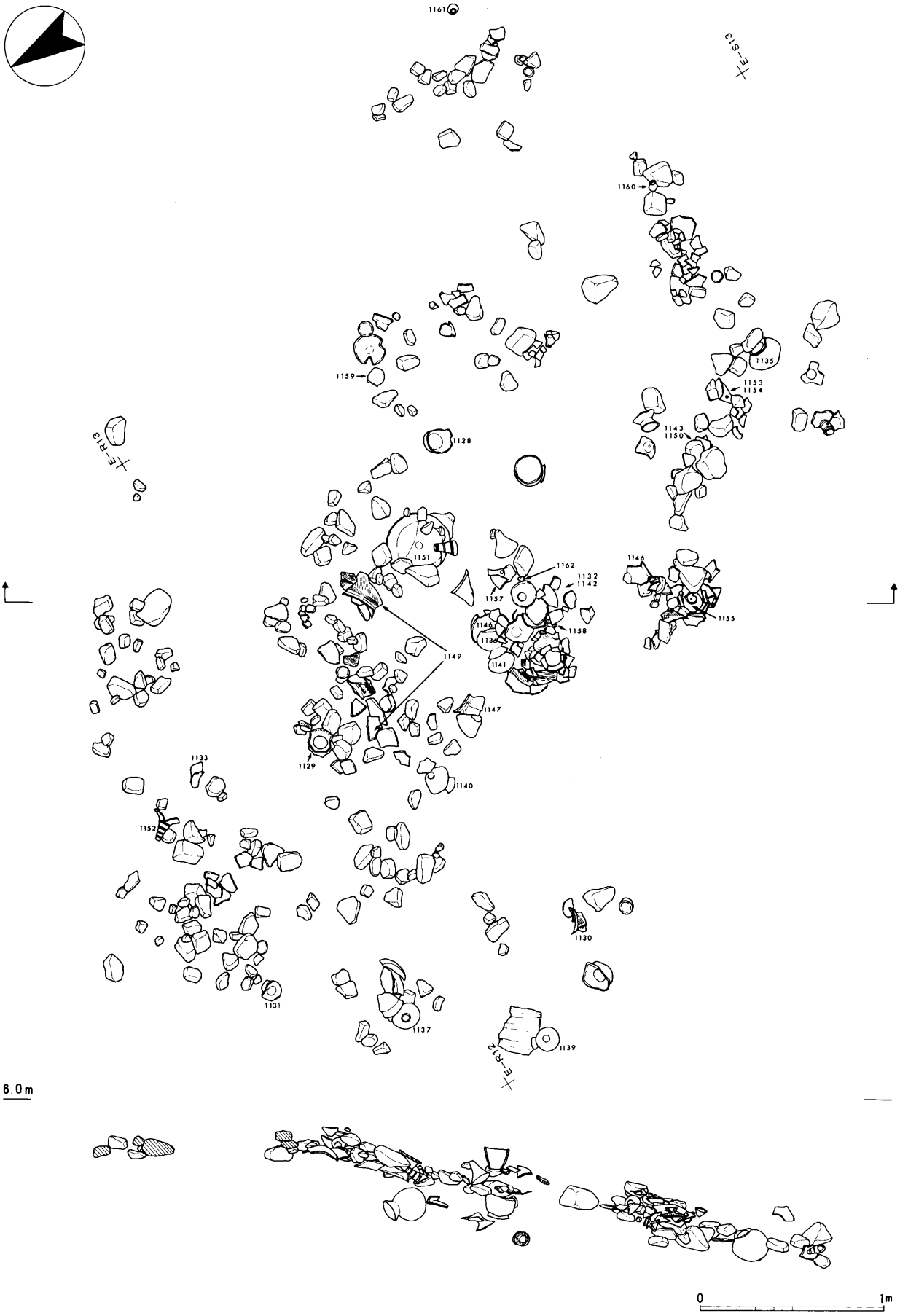
ＳＤ１の下流部右岸の床面で存在したものであるが、現地調査時点では土器群としての取り上げは行っていない。しかし、整理の過程で、面的に残存状況の良好な土器が広がっている4.7m×2.8mの部分を、整理段階で土器群として把握した。１か所で集中的に出土しているのではないため、一括性には乏しいと思われるが、明らかな混入品もあるものの、全体としてはほぼ一時期の所産であろう。完形品が多く、数次にわたって本地点に投棄されたものの集積であろうと思われる。

土器群15

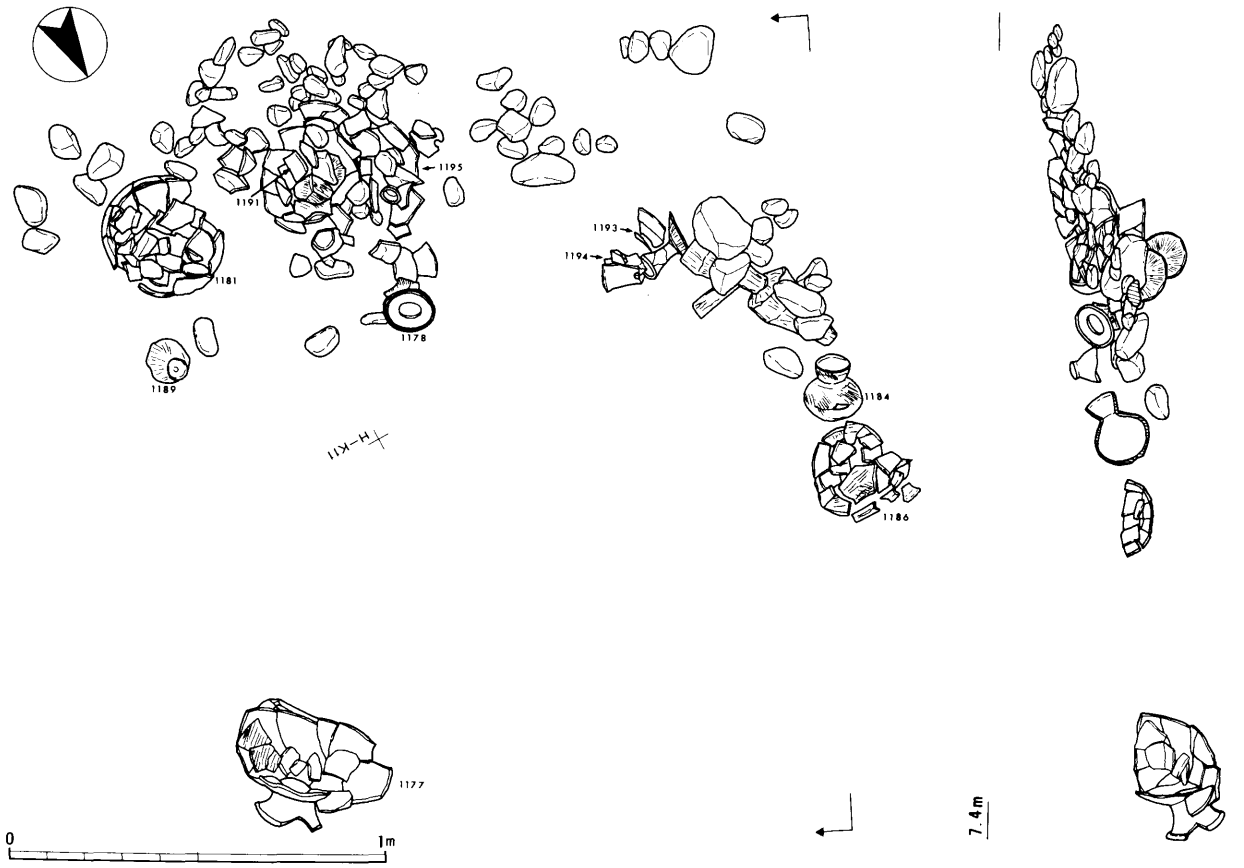
前述の土器群14の下流側に隣接して存在した土器群で、これも面的な出土状況を示していた3.8m×1.5mの部分を整理段階で土器群として把握した。土器は、土器群14同様、ＳＤ１の右岸側の底近い部分から出土した。土器群14とは別の土器群として扱ったが、両者は同一面（同じ高さ）で確認でき、なおかつ両土器群にほとんど時期差もないことから、一連の土器群の可能性もある。なお、この土器群を包含するかたちで梯子（木1410）などの木製品も多数出土している。

土器群16（土器溜ｇ）

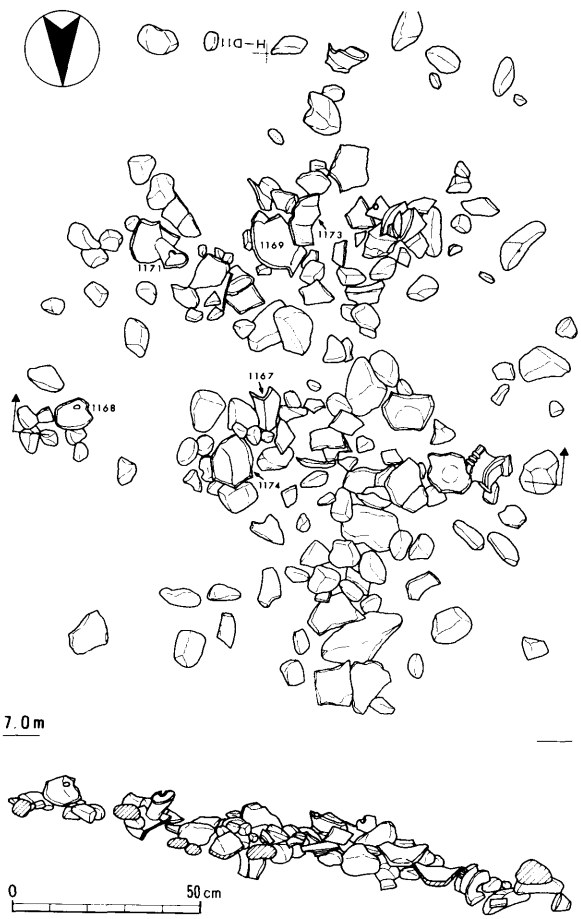
ＳＤ１右岸の溝の堆積の傾斜に沿って出土した土器群である。倒立状態や横転状態の完形品を含む土器が1.4m×1.2mの比較的狭い範囲から集中して出土しており、１回ないしは２回程度の廃棄によるも



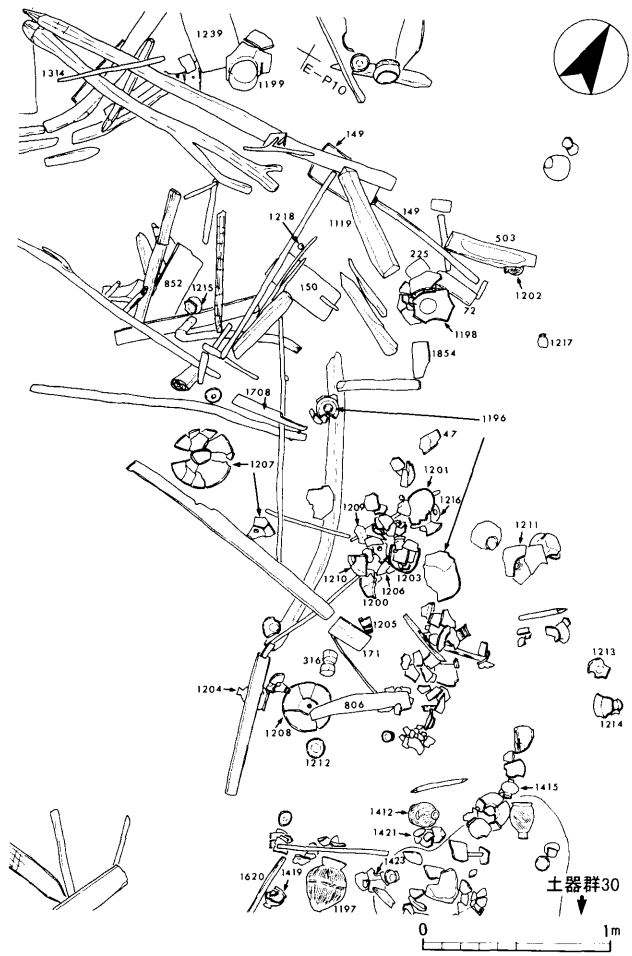
第74図　ＳＤ１土器群11出土状況図（１：30）



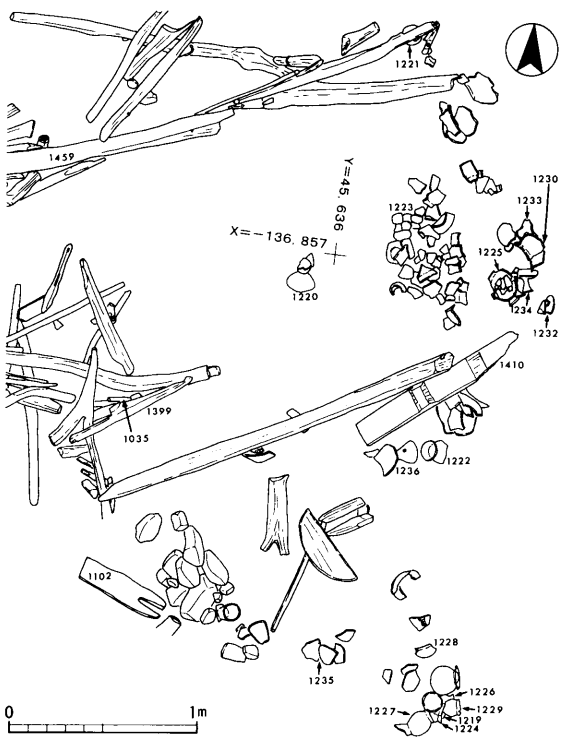
第76図　ＳＤ１土器群13出土状況図（１：20）



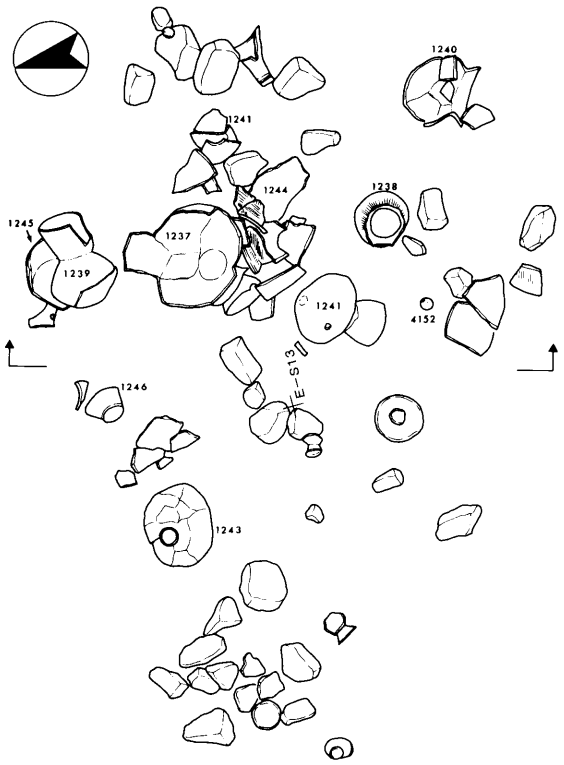
第75図　ＳＤ１土器群12出土状況図（１：20）

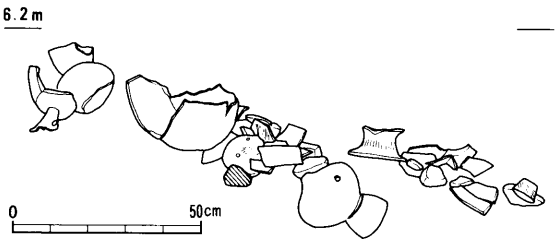


第77図　ＳＤ１土器群14出土状況図（１：40）

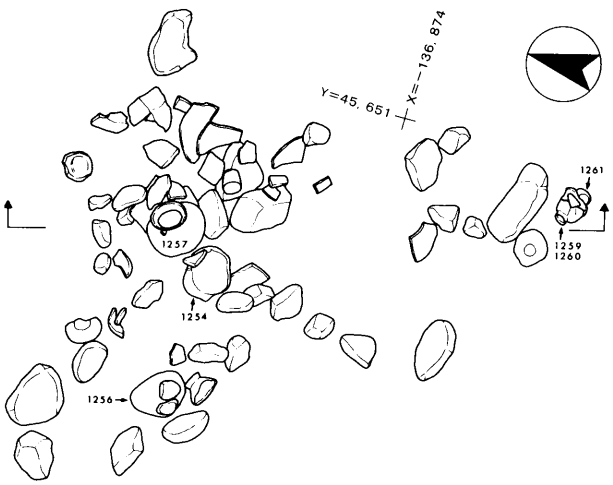


第78図　ＳＤ１土器群15出土状況図（１：40）

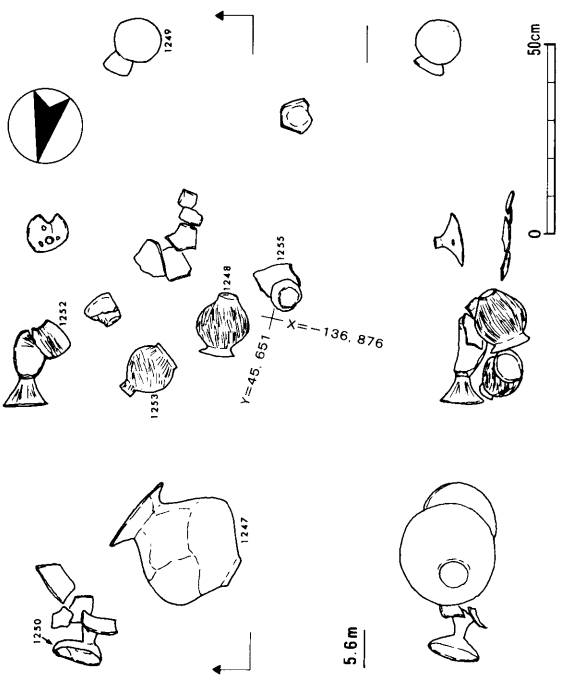




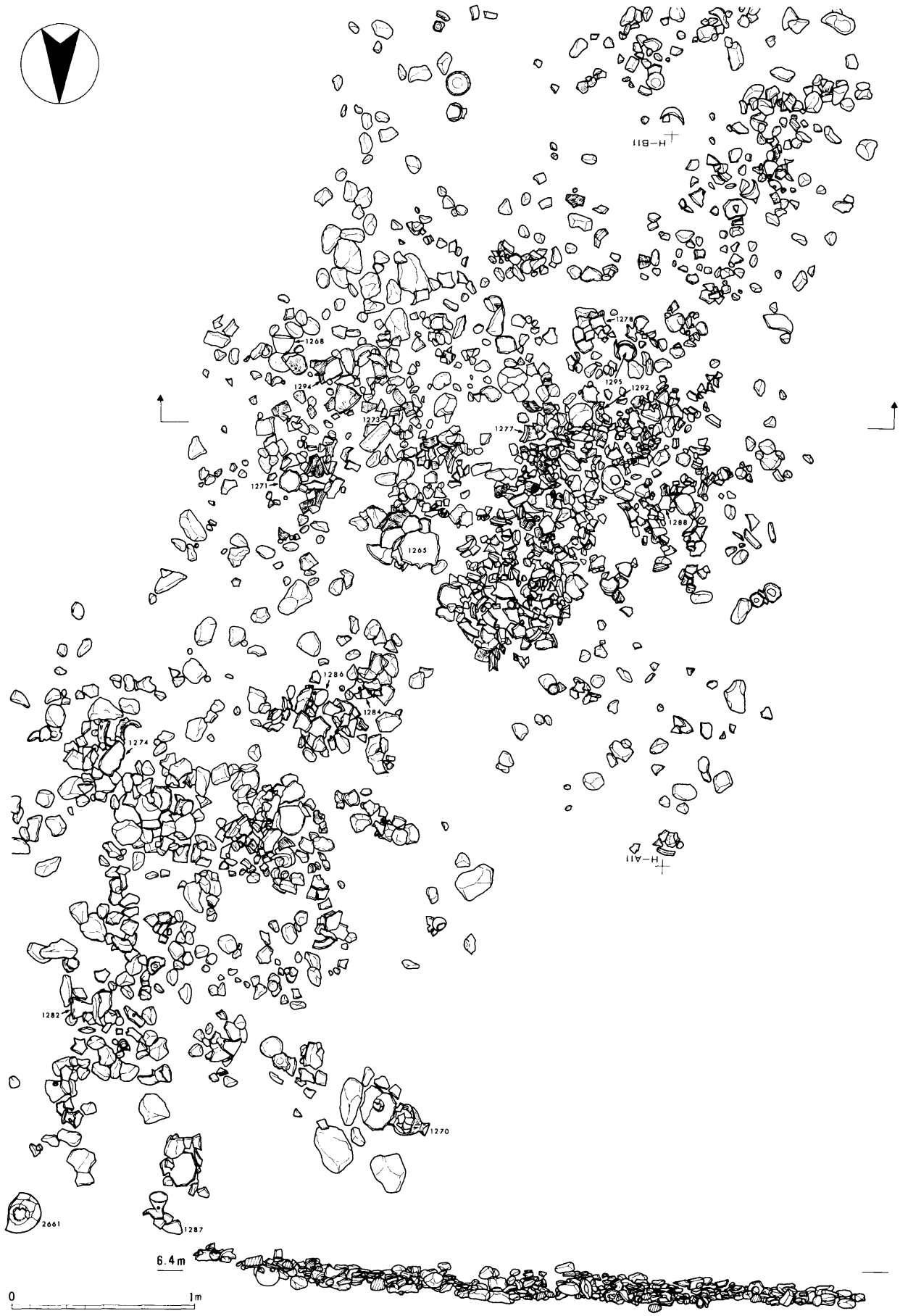
第79図　ＳＤ１土器群16出土状況図（１：20）



第81図　ＳＤ１土器群18出土状況図（１：20）



第80図　ＳＤ１土器群17出土状況図（１：20）



第82図　ＳＤ１土器群19出土状況図（１：30）

のと思われる。

土器群17（土器溜Ｈ・Ｉ下層）

後述の土器群45の下部で確認したもので、完形土器が横転状態で1.7ｍ×0.8ｍの範囲で出土する。狭い範囲ながら、土器どうしはさほどの集中性がなく、比較的疎らに存在するといってよい。他の土器群の多くが斜めに堆積するのとは異なり、水平堆積をしていることが特徴である。

土器群18（土器溜ｈ）

1.4ｍ×0.9ｍの範囲から礫とともに出土したものである。無頸壺である完形の1257は、礫に挟まれるように正立状態で出土していることや、ここで確認されている土器が手捏ねないしは小型無頸鉢といった小型品が多いことから、石組状の施設が存在した可能性もある。

土器群19（単位ｄ下部）

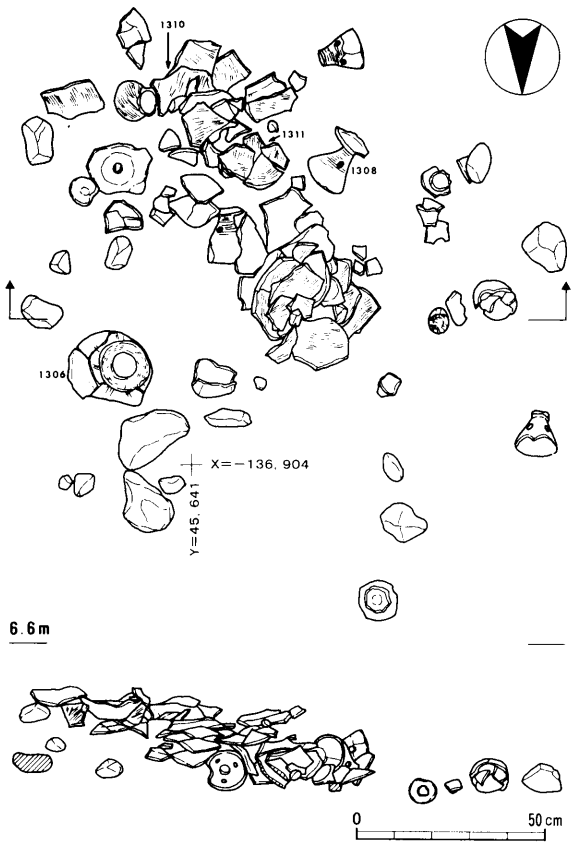
後述の土器群38の下部に存在した８ｍ×3.6ｍの面的な広がりをもつ土器群で、ＳＤ１右岸の下層礫敷に載るかたちで確認できた。面積的にも広いことから、本来は複数の廃棄単位があったものと思われるが、現場段階で一括性を認めて取り上げできたのは後述の土器群20のみで、それ以外は土器群19に一括した。完形土器も含むが、破砕土器が多いことは、投棄された場所が低湿状のところではなく、礫の多い部分であったことと関連すると思われる。手捏ね土器も存在しており、土器群の一部は祭祀に供されたものを含むものと思われる。

土器群20（単位ｉ）

前述のように、土器群19の一角から出土しているものの、集中性が高いと判断したことから調査段階で土器群19から抽出して取り上げを行った土器群である。1.6ｍ×1.5ｍの範囲を土器群20としたが、特に集中している１ｍ×１ｍの部分は、土器が折り重なるように出土している。このことは、廃棄における一括性を強く示唆するものである。

土器群21（単位Ｃ）

上流部から弧状に流れてきたＳＤ１が最も膨らむ部分の防御面側（右岸）に存在する土器群である。ＳＤ１の堆積途中の緩やかな傾斜に沿って2.4ｍ×2.3ｍの範囲から出土しているが、やや出土レベルに上下差があり、本来的には２回あった廃棄単位を



第83図　ＳＤ１土器群20出土状況図（１：20）

１回のものとして扱っている可能性もある。土器の集中度としては、密な部類に入るであろう。

土器群22（単位ａ’）

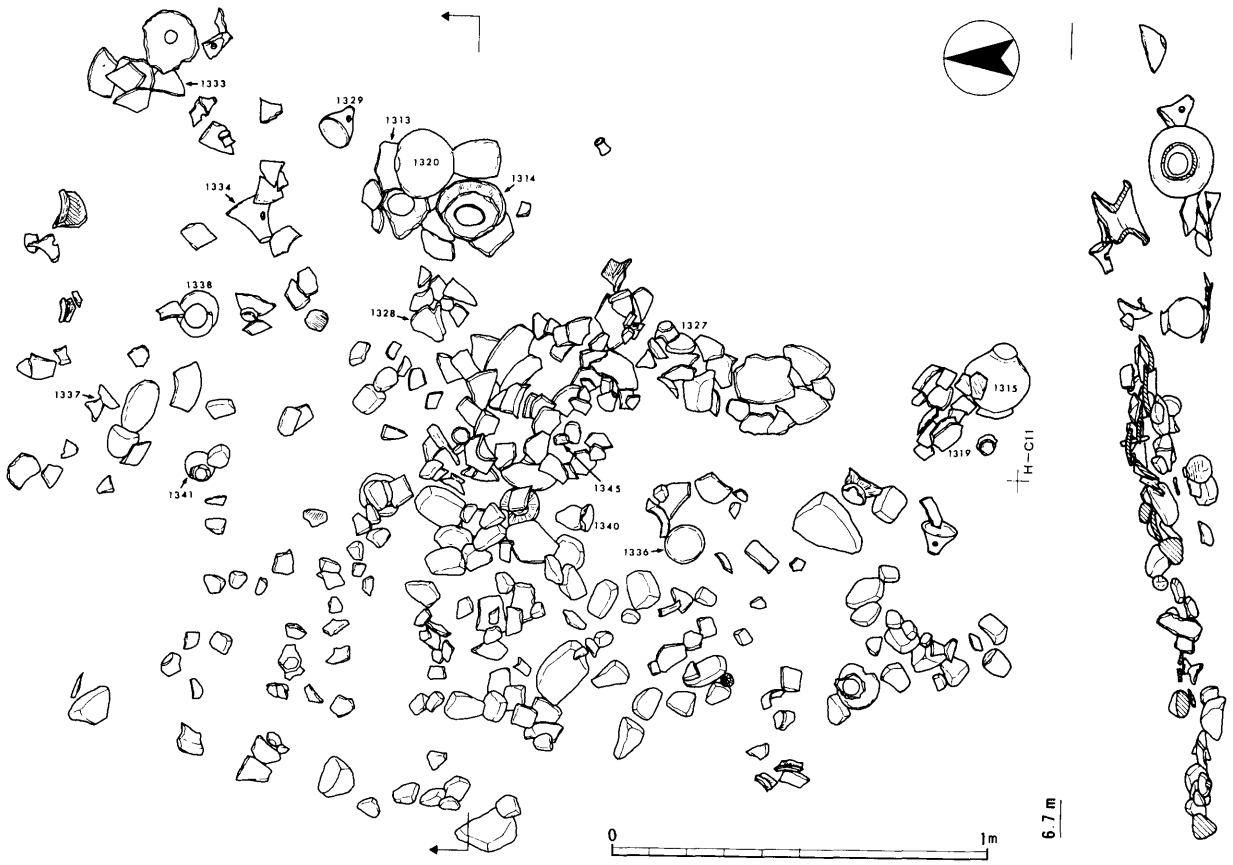
前述の土器群21同様、ＳＤ１の膨らみ部右岸の法面に存在した土器群で、南側には土器群23が存在した。１ｍ×0.6ｍの狭い範囲からまとまって出土しており、一括性は高いものと思われる。正立状態のものはなく、横転状態のものがほとんどであることから、この場所に投棄されたものであろう。

土器群23（単位ｅ）

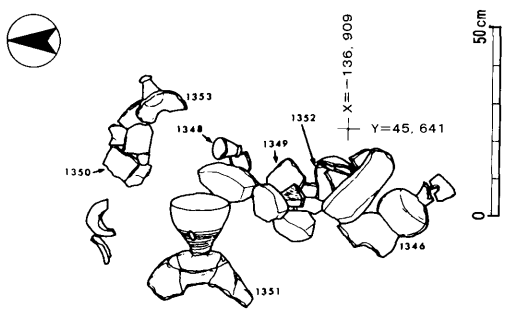
前述の土器群22に隣接して存在した土器群で、これも90㎝×80㎝の狭い範囲からまとまって出土している。北側に２本の杭が打ち込まれているが、これが本土器群もしくは土器群22に伴うのか、あるいは全く関係ないのかは不明である。土器の密度は高いが、完形に復元できるものはなかった。

土器群24（セットｃ）

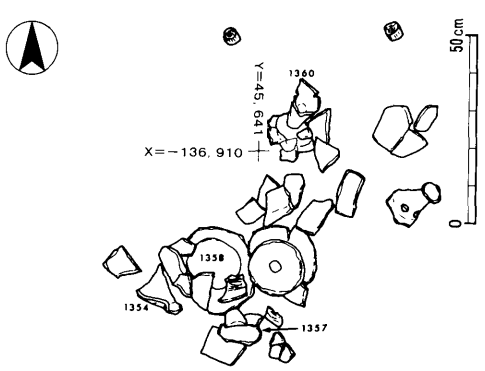
後述の土器群26の範囲に含まれるが、土器群24としたものは、後述の土器群25とともに、より密集性が強いため、ひとつの土器群として抽出した。これら土器群は、ともにＳＤ１出土土器群としては珍し



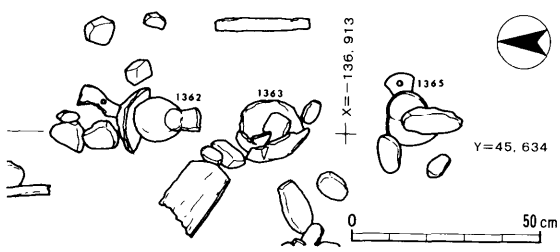
第84図　ＳＤ１土器群21出土状況図（１：20）



第85図　ＳＤ１土器群22出土状況図（１：20）



第86図　ＳＤ１土器群23出土状況図（１：20）

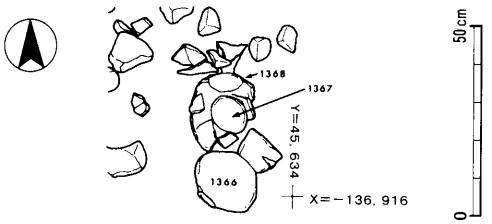


第87図　ＳＤ１土器群24出土状況図（１：20）

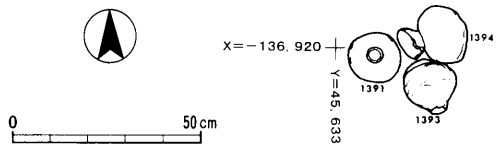
く左岸に形成されたもので、このうち土器群24は、１ｍ×0.3ｍの狭い範囲に遺存状況のよい土器が折り重なるようにして出土している。ただし、レベル的には、土器群25や土器群26と差はなく、これら３つの土器群は時期的にはさほど変わらないものであろう。

土器群25（セットｄ）

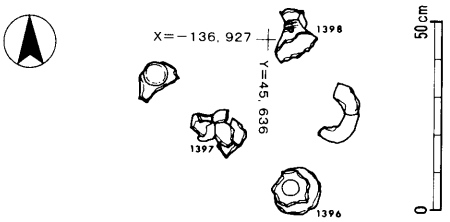
前述の土器群24同様に、土器群26とレベル的な差はないが、より一括性が高いと判断し、ひとつの土器群として抽出したものである。土器群26の南端部に位置し、50cm×30cmの極めて狭い範囲に、３点の土器が折り重なるようにして出土している。



第88図　ＳＤ１土器群25出土状況図（１：20）



第90図　ＳＤ１土器群27出土状況図（１：20）



第91図　ＳＤ１土器群28出土状況図（１：20）

土器群26（単位Ｇ）

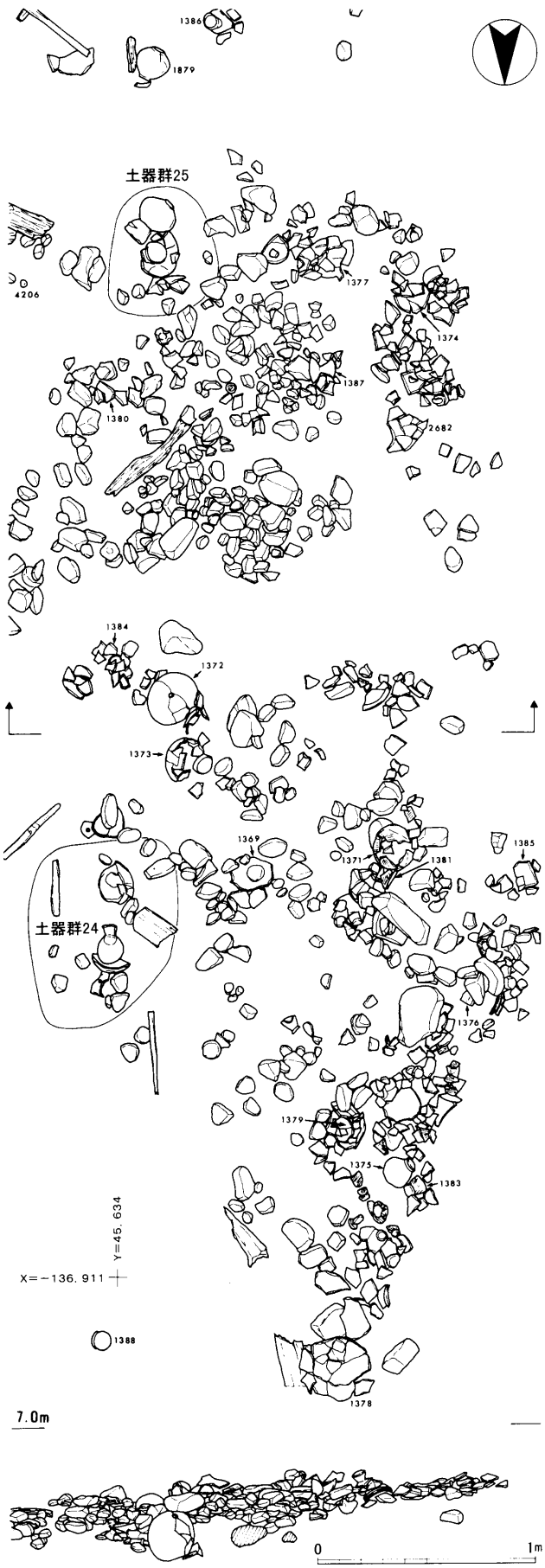
前述の土器群24・25を含むかたちで存在した土器群である。6.4ｍ×2.5ｍの範囲をもつが、先に土器群24・25を抽出したように、土器群26は本来いくつかの廃棄単位を含んでいる可能性が高い。時期的にも、若干の時間幅はあるようである。ただ、完形土器を含む遺存状態の良好な土器が中心を占めることから、この場所に、何回かに分けて投棄された土器の集積と考えることには問題なかろう。

土器群27（セットｅ）

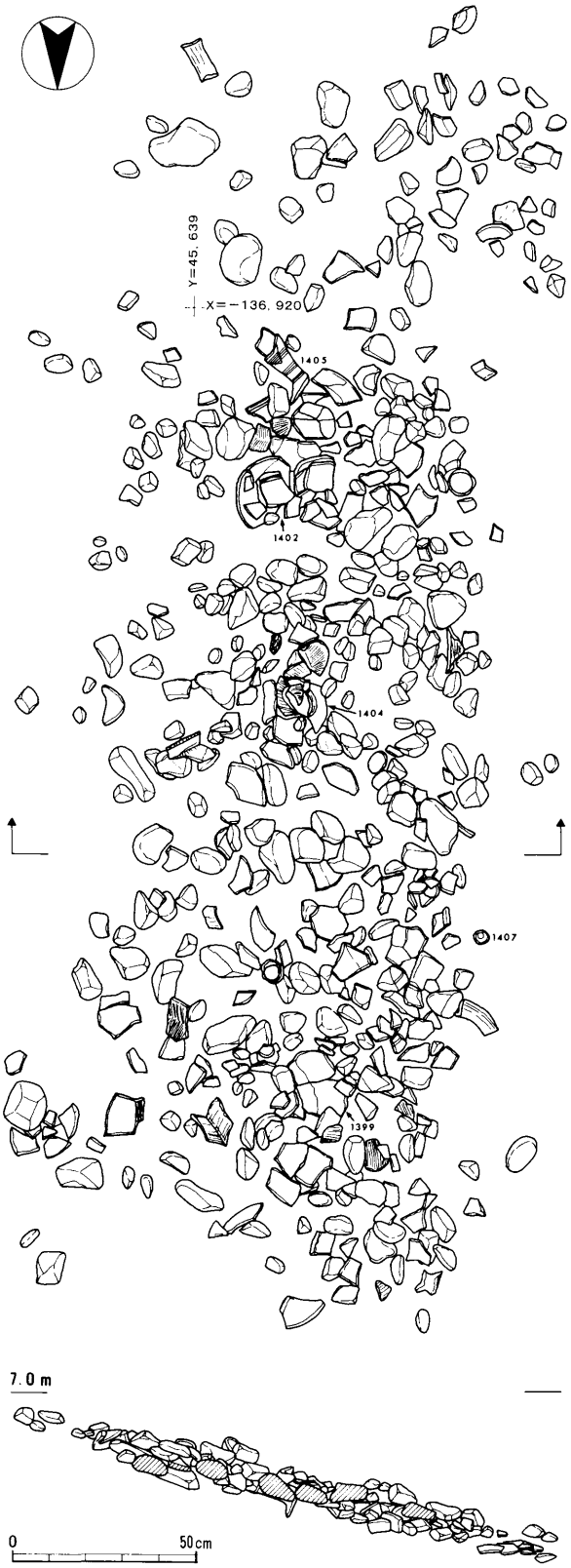
ＳＤ１左岸の底面で３点の土器が30cm×30cmの極めて密集した範囲から折り重なるように出土したものである。横転状態の出土ながら、土器の残りもよく、ローリングを受けた痕跡もないので、この位置に一括して遺棄された土器であろう。

土器群28（セットｈ）

ＳＤ１のある時期の底面中央部、井泉４の脇に存在した土器群で、60cm×50cmの範囲から出土した。いずれも調整痕跡等は明瞭であるが完形のものはな

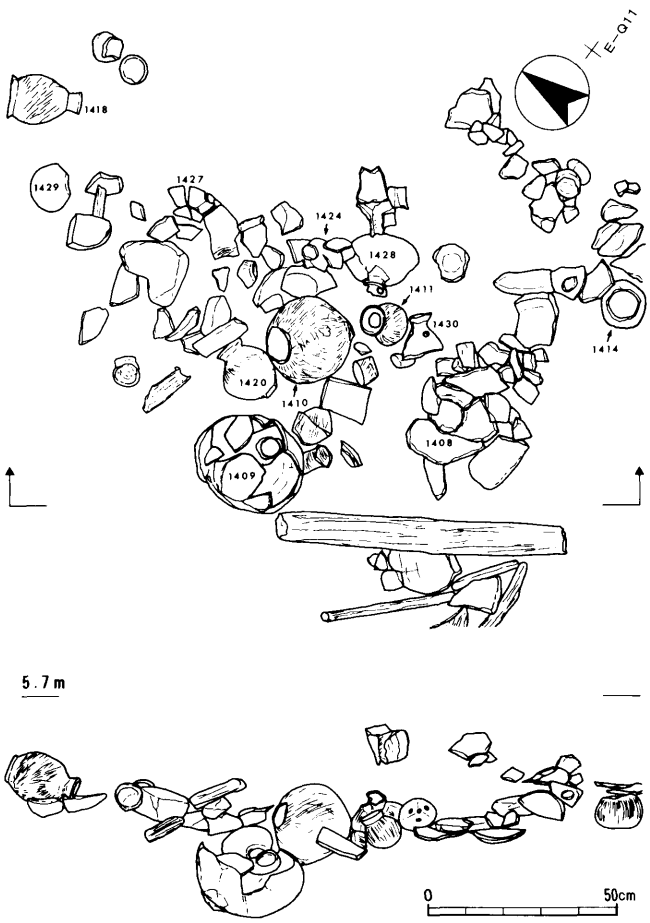


第89図　ＳＤ１土器群26出土状況図（１：30）



第92図　ＳＤ１土器群29出土状況図（１：20）

い。同一面からの出土ではあるが、廃棄の一括性というてんには問題が残る。



第93図　ＳＤ１土器群30出土状況図（１：20）

土器群29（単位Ｐ）

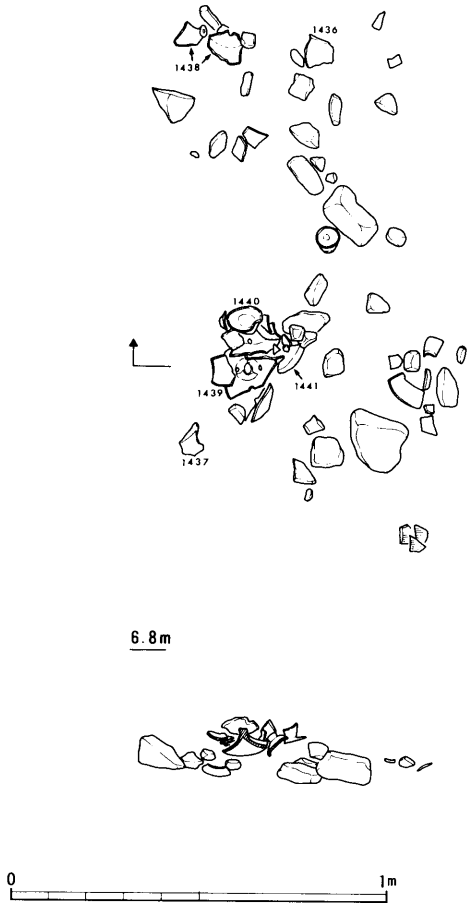
ＳＤ１右岸法面の下層礫敷部の3.6ｍ×１ｍの範囲から出土した土器群である。土器群としてはやや疎らな出土であり、一括性には欠ける。ただし、一部は礫群に挟まれるかたちで出土したものも存在することから、礫群形成の期間を考えるには好資料である。

土器群30（土器溜ｎ）

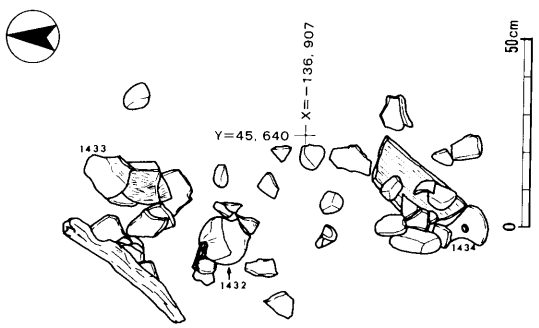
ＳＤ１下流部右岸に存在した1.7ｍ×1.5ｍの範囲から出土した土器群である。完形のものが多く、密集性は高いが、レベル的には若干の上下のものも含んでおり、完全な同時期性というてんでは欠けるかもしれない。横転状態のものが多く、この場所に廃棄されたような状態を示す。

土器群31（セットＡ）

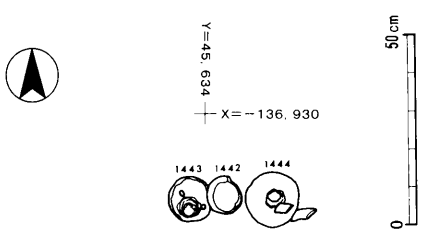
前述の土器群21の下部から出土したものである。1.1ｍ×0.6ｍの範囲からやや疎らに出土したもので、一括性は少ないと思われるが、同一面の近接地からの出土であり、土器群として扱った。



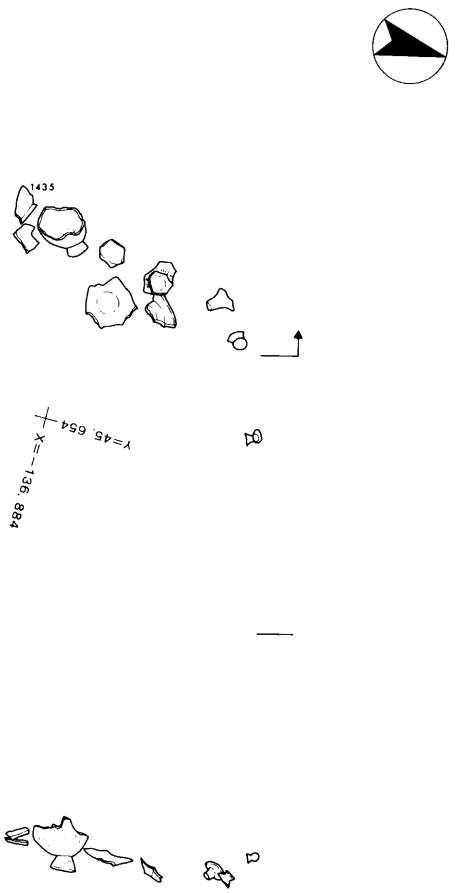
第95図　ＳＤ１土器群32出土状況図（１：20）



第94図　ＳＤ１土器群31出土状況図（１：20）



第96図　ＳＤ１土器群33出土状況図（１：20）



土器群32（土器溜ａ）

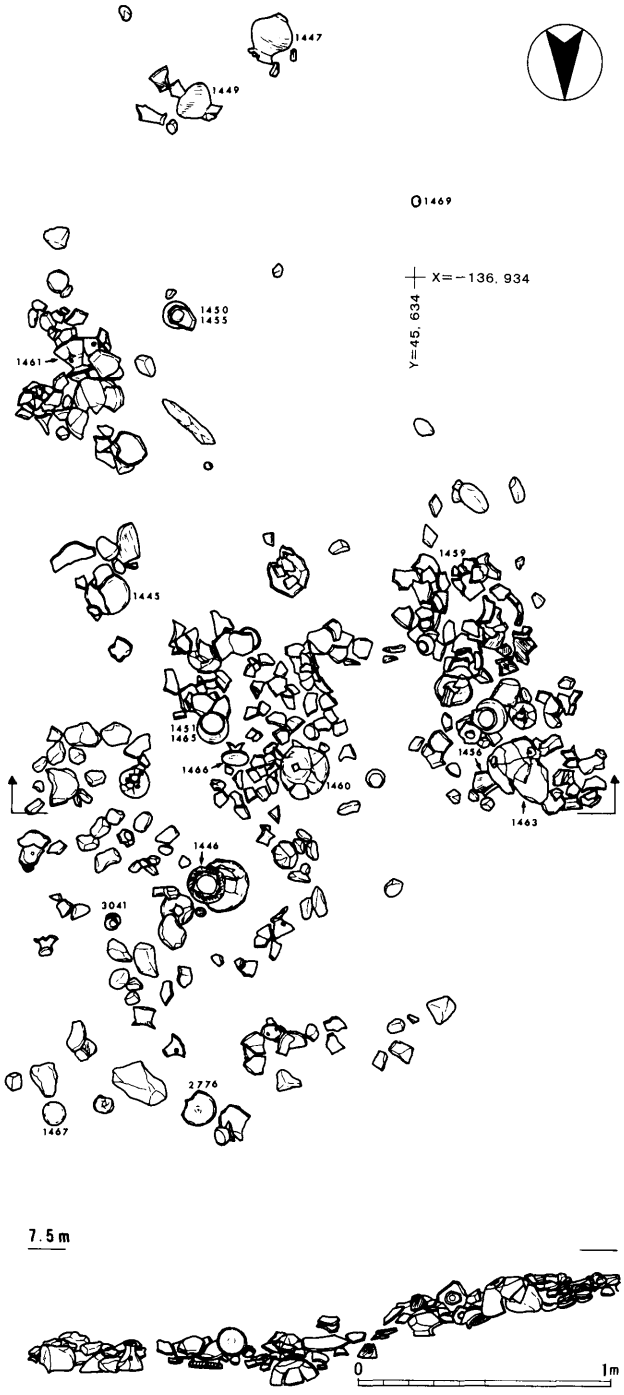
上流部より彎曲してきたＳＤ１が大きく入り込む入江状突出部の南側、つまり流路の右岸防御面の法面に置かれたような状態で出土した一群である。中間部の土器のない部分を挟んで北側に甕、より肩部に近い南側に高坏と器台がある。一応、レベル的にＳＤ１の傾斜に沿った同じ面に存在していたことから同一の土器群として扱ったが、両者は厳密には別の単位の土器群であった可能性もある。その場合、南側の高坏・器台が存在する一群は、正立状態のものが礫とともに存在しており、配石など意図的に置かれた一群かもしれない。

土器群33（セットＦ）

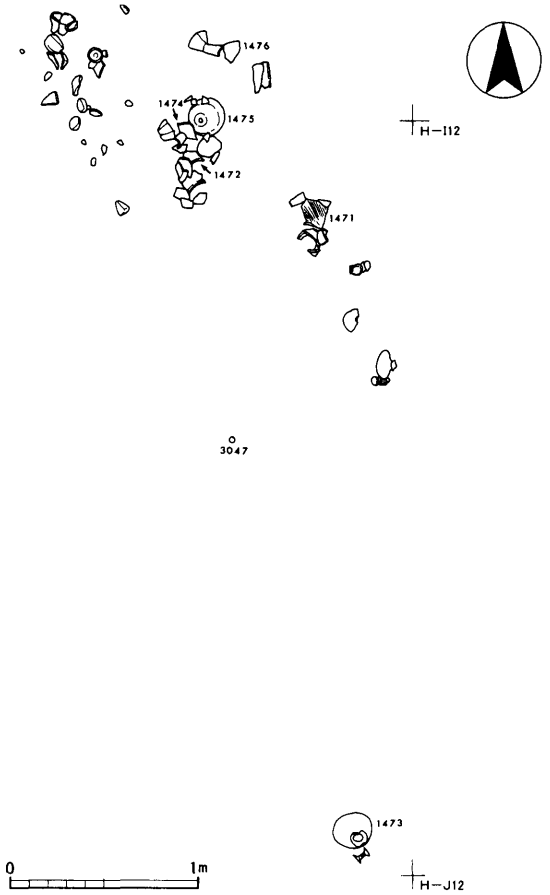
ＳＤ１左岸の法面と底面とが変換する部分、井泉４の脇に存在した土器群である。35cm×20cmの狭いところに土器が並ぶようにして存在している。

土器群34（単位ｈ）

ＳＤ１左岸の法面から底にかけて存在する土器群である。土器の遺存状態は良好であるが、横転や倒立状態で出土したものが多く、左岸肩部より投棄さ



第97図　ＳＤ１土器群34出土状況図（１：30）



第98図　ＳＤ１土器群35出土状況図（１：40）

れたものと思われる。4.5m×2.4mの範囲から出土しているが、土器の出土には疎密がある。本来的には複数の廃棄単位があり、本土器群はそれらが集積した状態のものである可能性がある。

土器群35

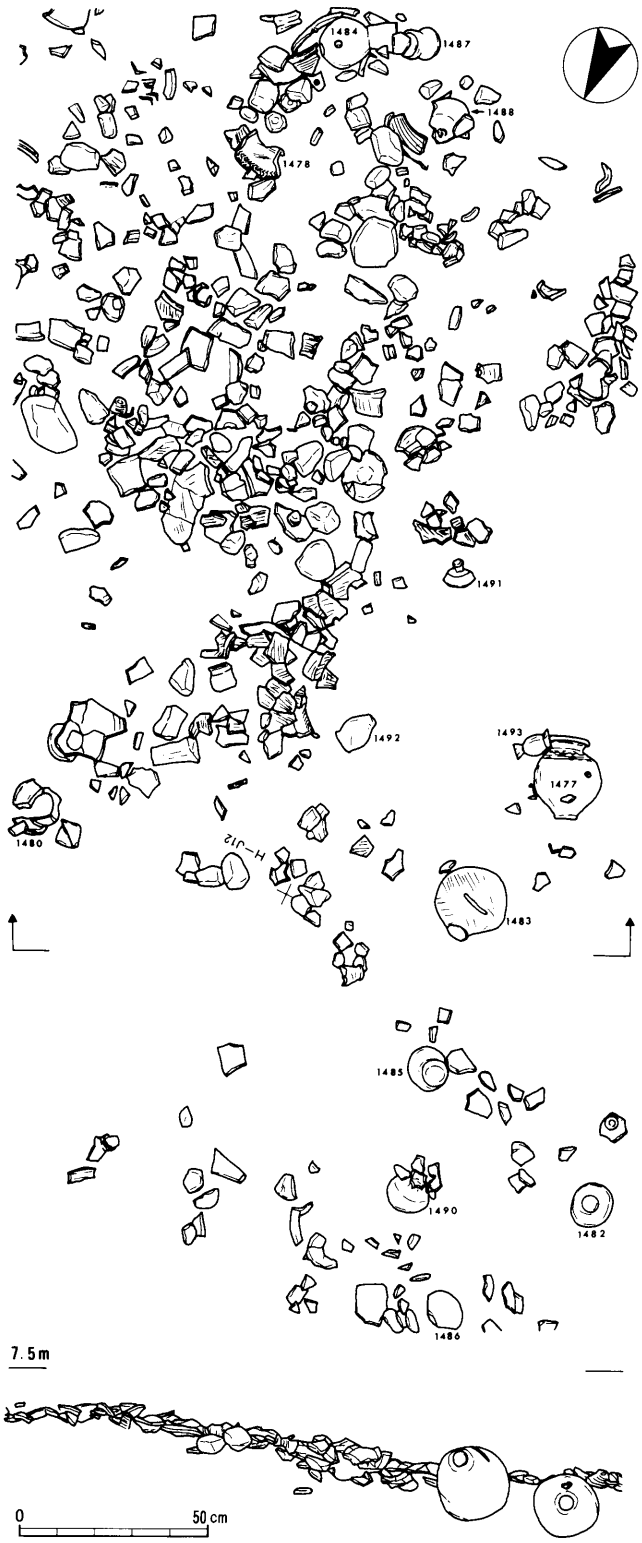
現地調査段階では、土器群としての取り上げは行わなかったが、整理段階で出土状況図の検討を行った結果、4.8m×１mの範囲で完形品を中心とする土器がまとまって出土していることを確認し、土器群として把握した。ただし、1473などはやや離れており、それを除くとより集中する部分は2.8m×１mの範囲ということになる。

土器群36（単位Ｋ）

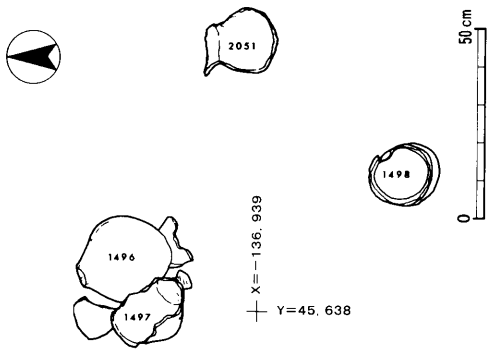
前述の土器群35に隣接する土器群で、3.6m×1.6mの範囲をひとまとまりとして認識した。土器の出土には疎密があり、本来的にはもう少し細かい廃棄単位に分かれるものと思われるが、レベル的には同一面からの出土といってよかろう。完形土器だけでなく、破片も含むが、穿孔を受けた土器も含んでおり、何らかの祭祀に供された土器群が廃棄されたものの可能性が高い。

土器群37（セットＧ）

ＳＤ１左岸に形成された井泉５の上面で出土した土器群である。３点の土器が90cm×90cmの範囲からほぼ同レベルで出土しており、土器群として認定した。井泉５とはレベル差があり、関連性は薄いとみられる。



第99図　ＳＤ１土器群36出土状況図（１：20）



第100図　ＳＤ１土器群37出土状況図（１：20）

土器群38（単位ｄ）

ＳＤ１右岸に存在する土器群４や土器群19の上面に存在した土器群である。2.4ｍ×2.3ｍの範囲から部分的な疎密を持ちながら出土した。おそらく、もう少し細かい廃棄単位に分かれるものであろう。

完形土器も多いが、図示しうるほどでもない破片も多かった。

土器群39（単位ｆ）

ＳＤ１右岸に存在した土器群である。1.7ｍ×1.4ｍの狭い範囲から密集状態で出土している。小形土器は完形品もあるが、基本的に破砕して出土したものが多く、右岸肩部よりここへ投棄された状態を示しているものと判断される。

土器群40（土器溜ｅ）

前述の土器群11の上面に存在したもので、１ｍ×0.8ｍの範囲から礫混じりで出土した。土器の点数としては少なく、小規模な土器群ということがいえよう。

土器群41（土器溜ｄ）

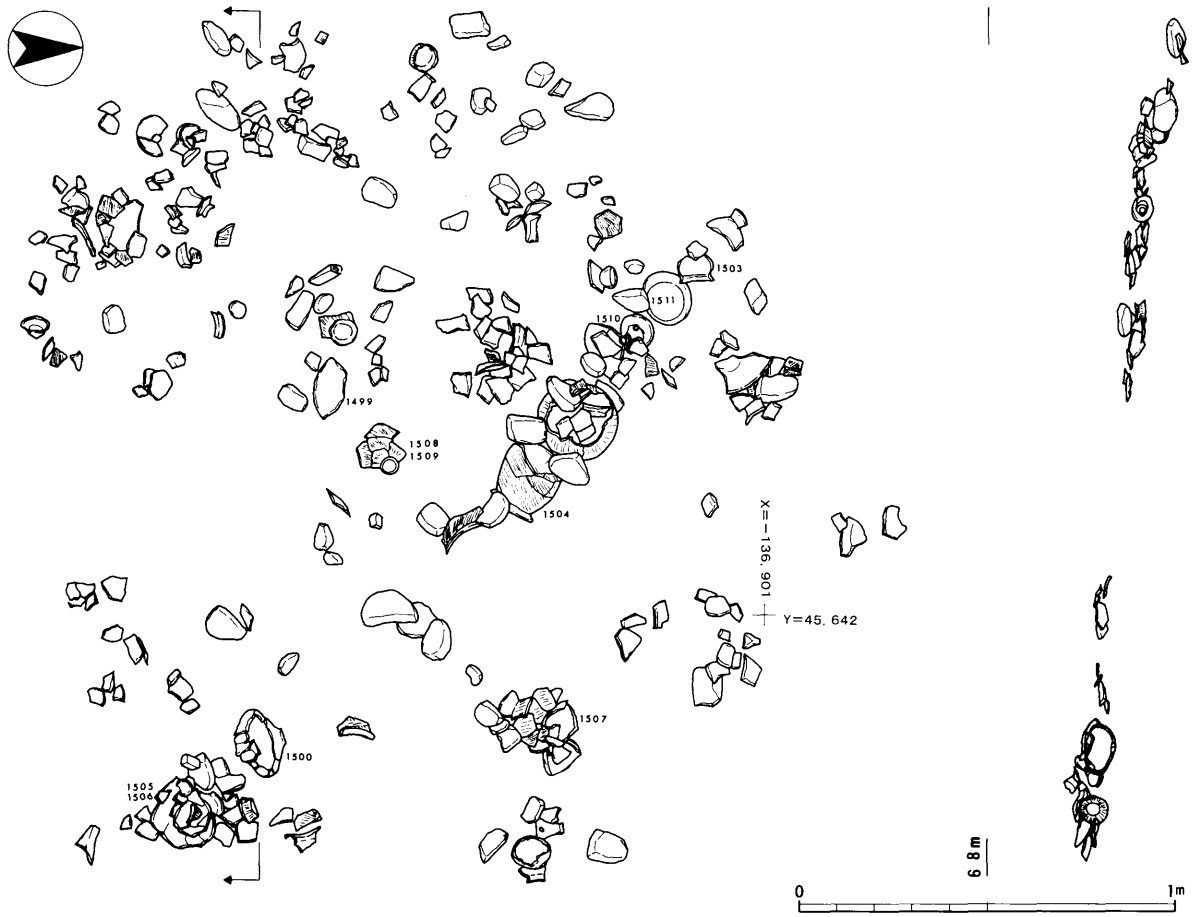
入江状突出部の礫群１に北接して存在した土器群である。礫群１出土遺物として扱ったほうがよいのかもしれないが、一応、独立した土器群としてみた場合、1.4ｍ×１ｍの範囲で礫のまとまりがあり、それに混じるかたちで出土した。近接して立柱があり、あるいはこれに関連して供された土器群かもしれないが、確証はない。

土器群42（土器溜ｆ）

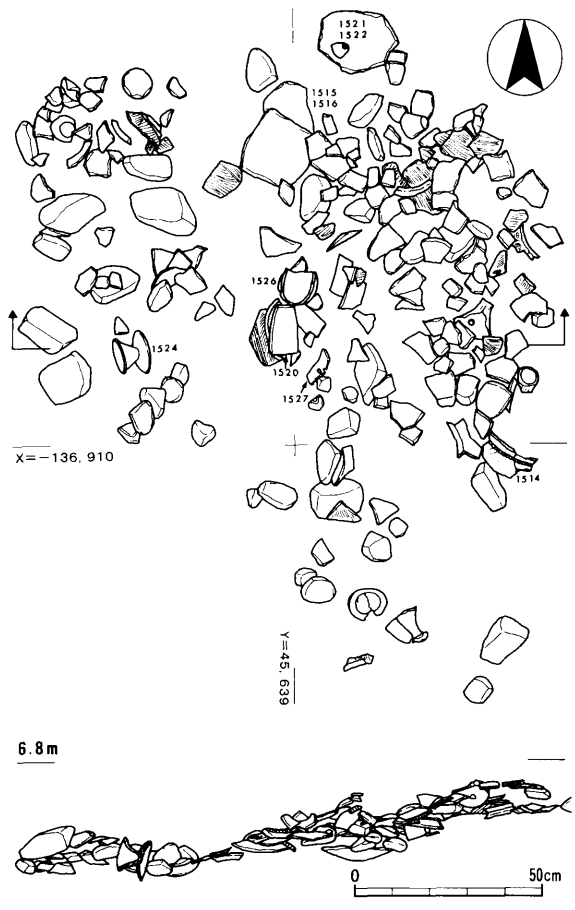
ＳＤ１右岸の入江状突出部に近い部分から出土したもので、溝の堆積の傾斜に沿って、90㎝×70㎝の比較的狭い範囲から密集状態で出土しており、一括性は高いものと思われる。横転状態で出土していることから、本土器群もここへ一括投棄された状態で残ったものであろう。

土器群43（土器溜ｊ）

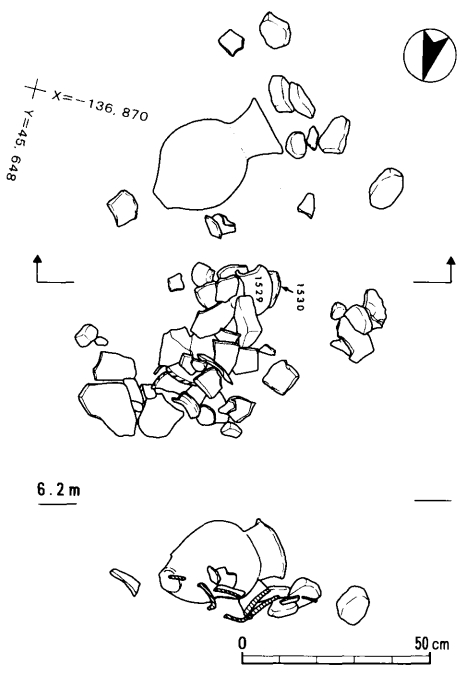
ＳＤ１右岸の入江状突出部の礫群２の北側1.6ｍ×１ｍの範囲に密集状態で出土した土器群である。



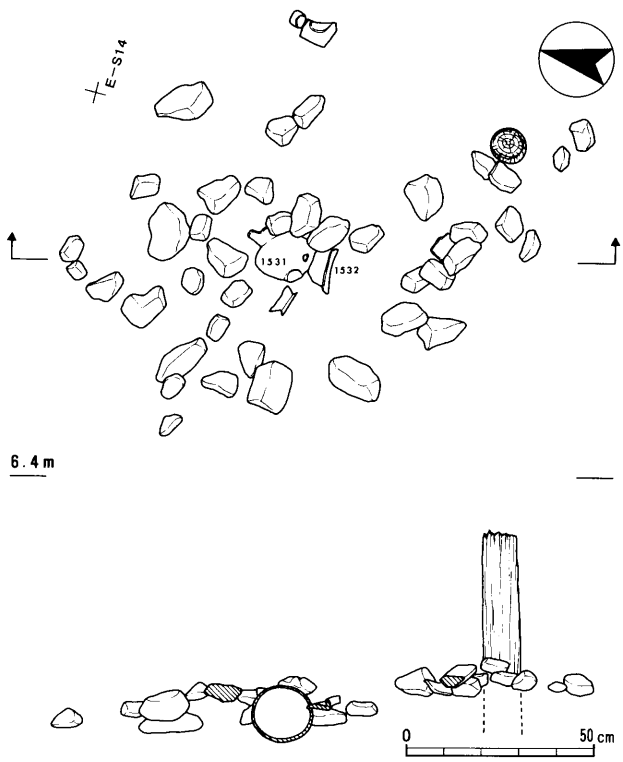
第101図　ＳＤ１土器群38出土状況図（１：20）



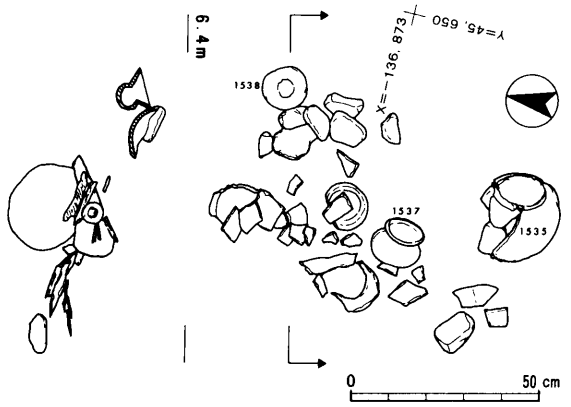
第102図　ＳＤ１土器群39出土状況図（１：20）



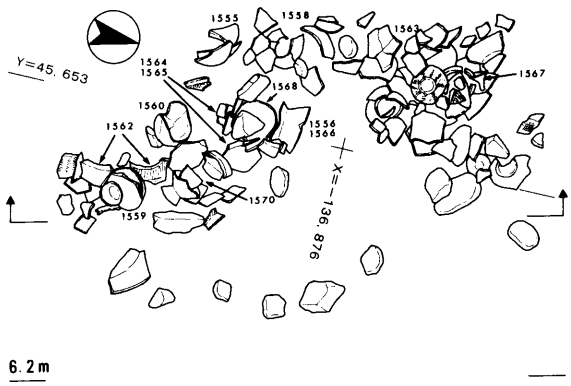
第103図　ＳＤ１土器群40出土状況図（１：20）

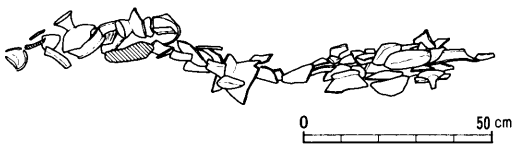


第104図　ＳＤ１土器群41出土状況図（１：20）

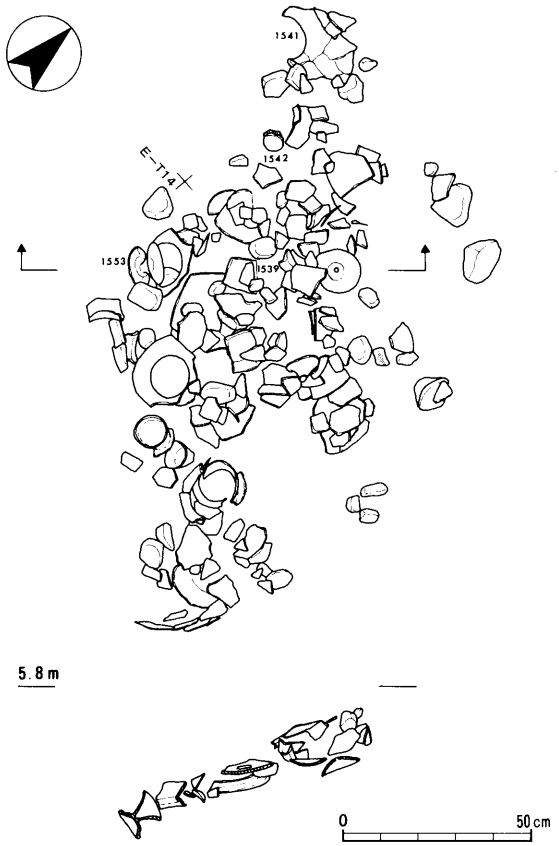


第105図　ＳＤ１土器群42出土状況図（１：20）





第107図　ＳＤ１土器群44出土状況図（１：20）



第106図　ＳＤ１土器群43出土状況図（１：20）

溝の傾斜に沿って斜め堆積状態で出土しているが、土器群のまとまりはよく、一括状態といってよかろう。完形土器が多く、また小形の器種や体部穿孔土器も含むことから、何らかの祭祀行為の後に一括投棄された一群の可能性が高い。

土器群44（土器溜ｃ）

ＳＤ１右岸に存在した土器群で、1.3ｍ×0.5ｍの範囲から密集状態で出土している。少数の高坏や手捏ね土器も存在するものの、土器群に占める甕の割合が高いのが特徴である。

土器群45（Ｅ－Ｔ14・15　Ⅲｂ層一括）

入江状突出部下部の12ｍ×６ｍの広い範囲から完形土器を中心とした土器が疎らに存在しており、それをひとつの土器群として認定した。ただし、土器

第108図　ＳＤ１土器群45出土状況図（１：60）

群全体としての一括性は乏しく、それぞれが個別にこの地点に投棄されたような状態を呈している。やや時期的に古い土器も混じるが、基本的には古墳時代前期のものが中心である。なお、その土器群の範囲内には、ナスビ形曲柄平鍬（木86・木88）や東海系曲柄鍬（木67・木69・木84）、椅子（木805）などの木製品も出土している。出土状況から土器群と同一時期になるものと思われ、木製品の時期を比定する際の好資料となった。

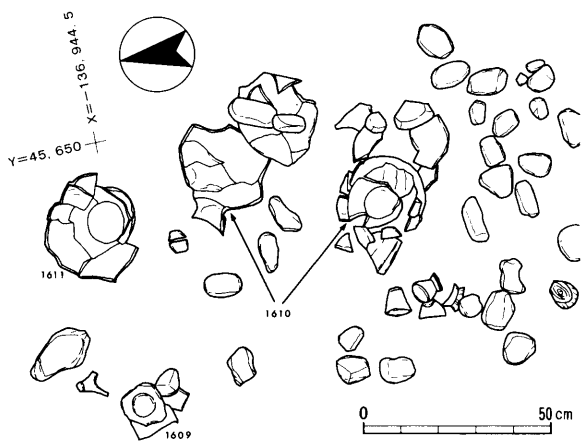
土器群46（単位ｂ）

ＳＤ１上流左岸に存在する土器群で、2.5ｍ×1.5ｍの範囲から出土した。ＳＤ１埋土の堆積に沿って斜め一面での出土であるが、まとまりはある。完形土器とともに、破砕土器も含んでおり、左岸肩部より投棄されたとみられる。赤彩された加飾の広口壺や小型高坏などがあり、組成上やや注意を要する土器群である。

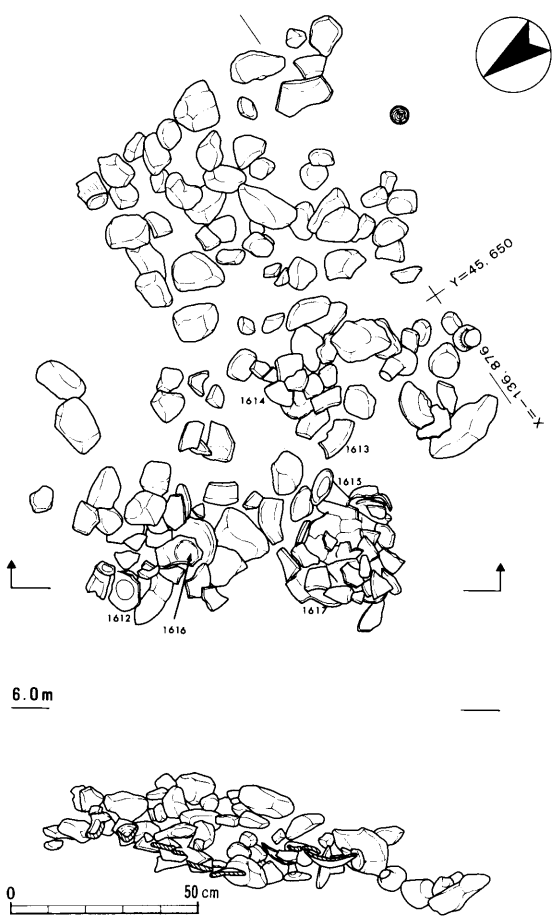
土器群47

現地調査段階では土器群としての取り上げを行っていなかったが、出土状況図の整理段階で複数の土器が同一面で近接して出土しているのを確認し、土

第109図　ＳＤ１土器群46出土状況図（１：20）



第110図　ＳＤ１土器群47出土状況図（１：20）



第111図　ＳＤ１土器群48出土状況図（１：20）

器群47として位置づけた。今回報告する土器群のなかでは最も上流となる。1.2m×1mの比較的狭い範囲からの出土の割には出土に集中性はなく、厳密な意味での一括投棄という状況にはないが、投棄時期にさほどの差はないであろう。

土器群48（土器溜ｉ）

入江状屈曲部の北端に相当する場所で確認した土器群で、1.5m×1.1mの範囲から出土している。礫とともに出土しており、配石的な様相を取っていた可能性がある。出土遺物も、高坏が多く、何らかの祭祀行為に関連しての遺物群の可能性が高い。

土器群49（土器溜ｋ）

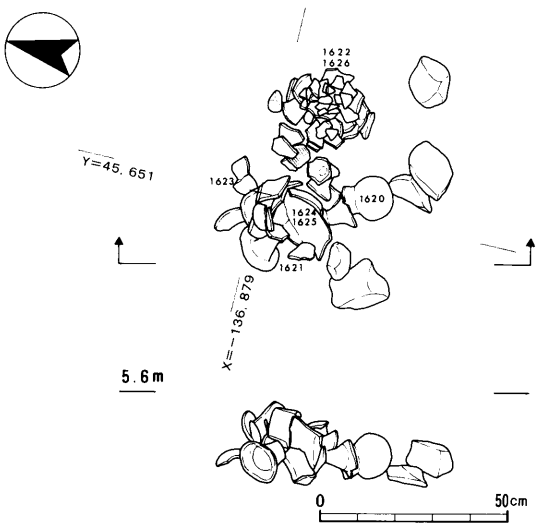
入江状屈曲部でも流心寄りのところに存在した土器溜で、50cm×50cmの狭い範囲から土器が折り重なるように出土しており、一括性は高い。一括投棄された単位を反映しているのであろう。

土器群50（土器溜ｂ）

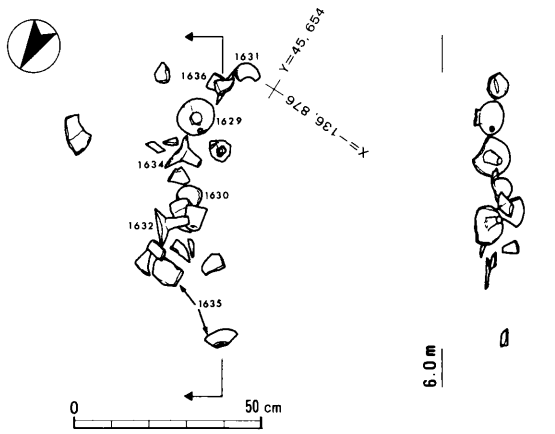
ＳＤ１の右岸から、80cm×50cmの極めて限定された範囲から折り重なるように出土した土器群で、一括性は高い。小型の壺と高坏のみで構成された土器群で、高坏は横転していたが、小型の壺は正立状態で出土しており、本来的にはこの場所に設置されたものかもしれない。なお、この部分の埋土から、滑石製臼玉77個も出土した。

土器群51（土器溜Ｒ）

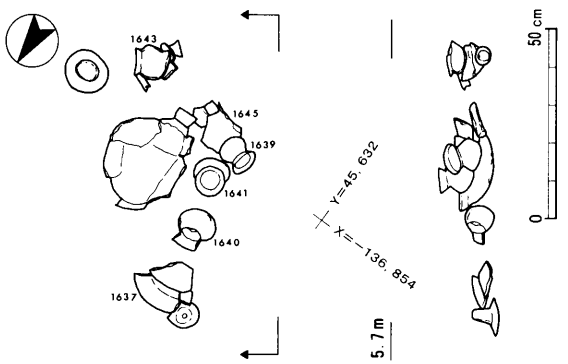
ＳＤ１下流部の右岸でも流心寄りに存在した土器群で、80cm×50cmの狭い範囲から完形の小型土器を



第112図　ＳＤ１土器群49出土状況図（１：20）



第113図　ＳＤ１土器群50出土状況図（１：20）



第114図　ＳＤ１土器群51出土状況図（１：20）

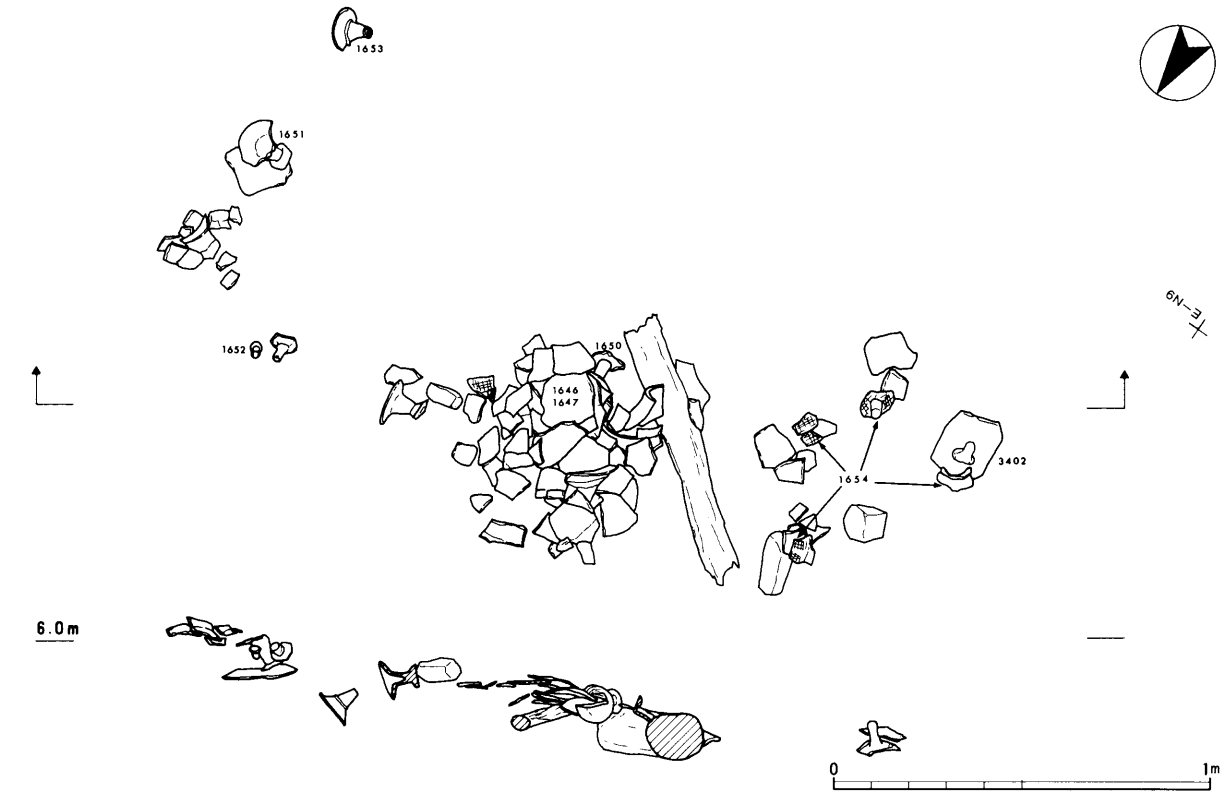
中心とした、まとまった土器群が出土している。横転ないしは正立状態で出土したものが多く、一括性は高いと思われる。ここに置かれたか、遺棄された土器群の可能性が高い。Ｓ字甕もあるが、小型の壺や高坏、小型甕を含み、総じて祭祀的な色彩が強い土器群である。何らかの祭祀行為終了後にここに投棄ないしは置かれたものと思われる。

土器群52（土器溜Ｏ）

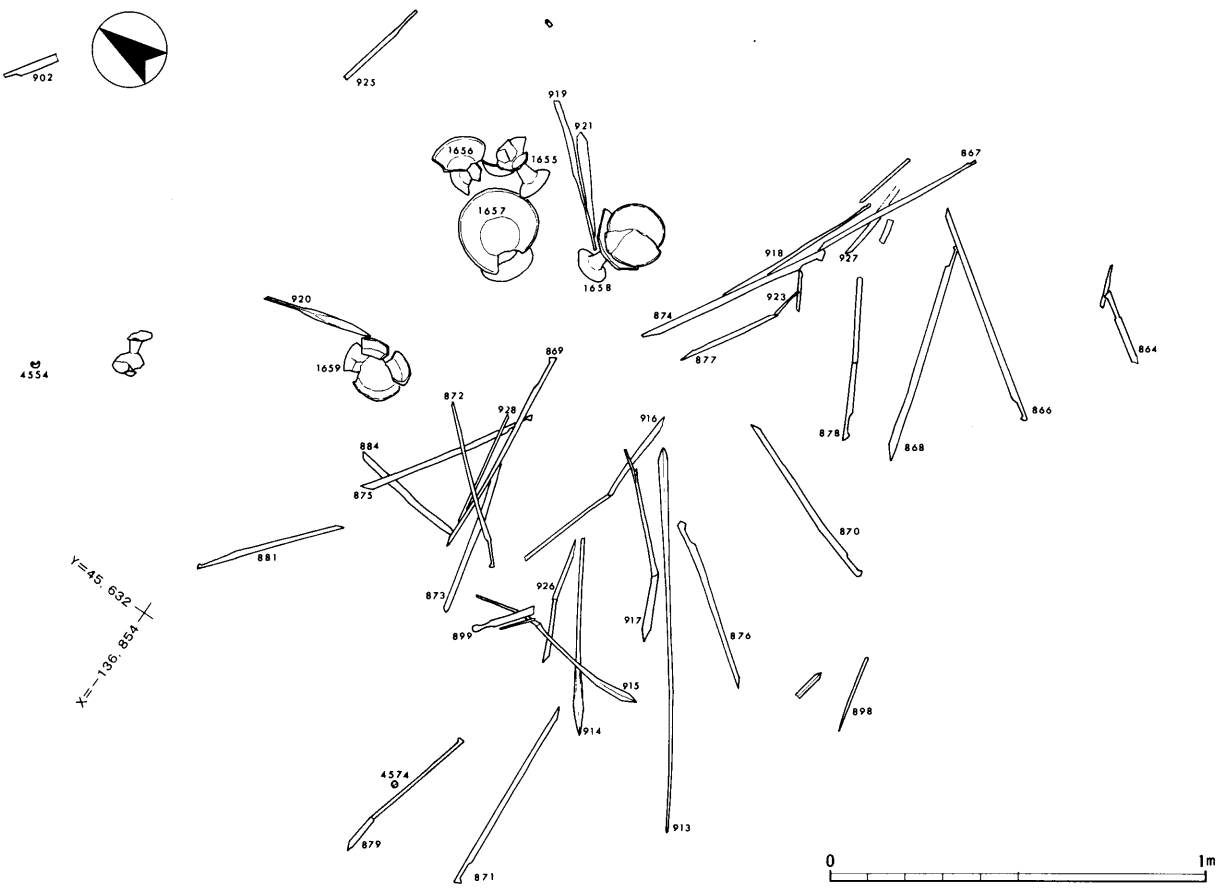
ＳＤ１下流部右岸の埋土の堆積に沿って、2.2m×1.5mの範囲で斜め面で出土した一群である。正立状態のものはなく、同一地点で潰れた状態で出土しているものがある。おそらく、投棄された衝撃でここで割れたものと思われる。なお、埋土から滑石製臼玉10個もフルイ掛けにより出土した。

土器群53武器形集中部（刀形周辺）

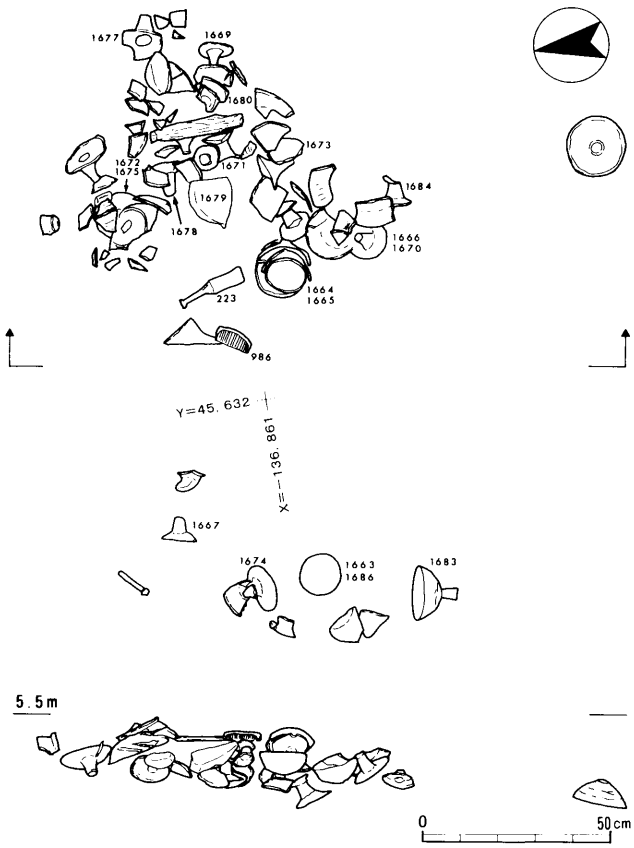
３m×2.4mの範囲に集中して木製武器形の出土があり、あわせて同じ面で正立状態の高坏を中心とする土器群と、滑石製模造品類の出土があった。武器形は、刀形（23本を確認）と鏃形（16本を確認）の他、剣形と思われるものも５本存在するが、これ



第115図　ＳＤ１土器群52出土状況図（１：20）



第116図　ＳＤ１土器群53武器形集中部出土状況図（１：20）



第117図　ＳＤ１土器群54出土状況図（１：20）

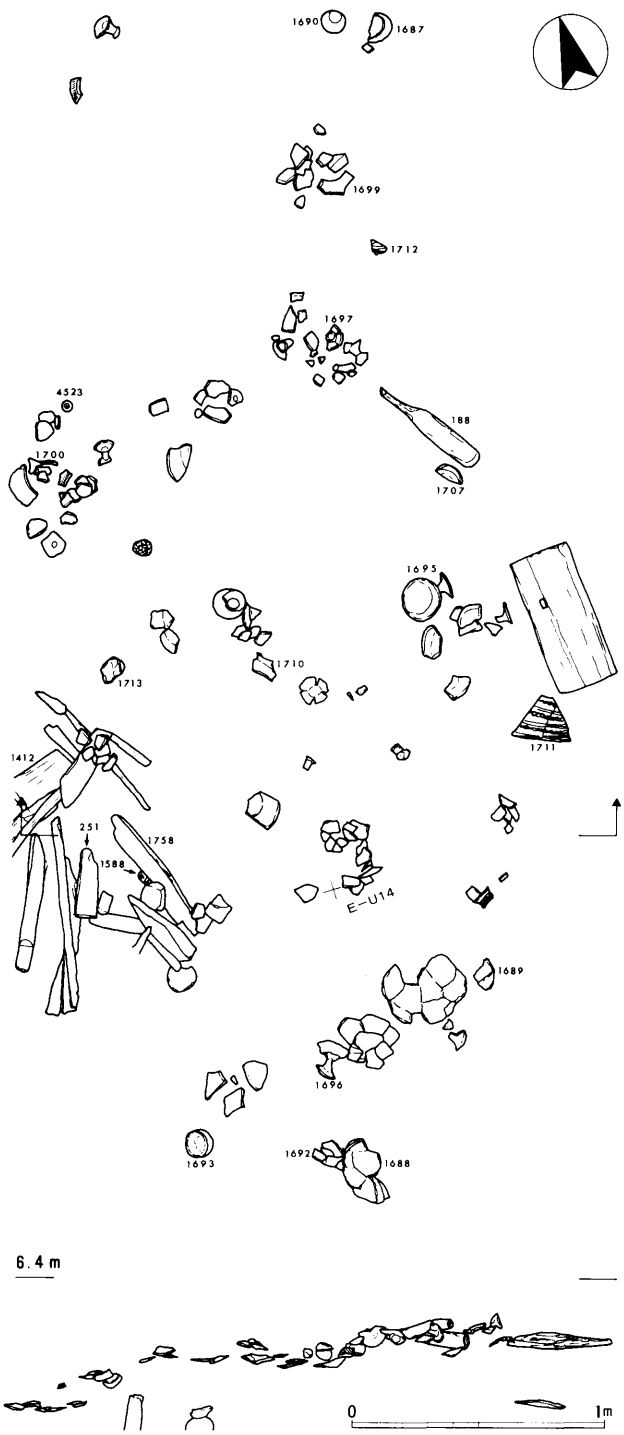
は鑓形の変形の可能性もある（以上は『木製品編』参照）。土器は、高坏と坏、甕がほぼ完形で存在しており、その組成からも祭祀色を強く想定させるものである。滑石製模造品には、勾玉（4554）と双孔円板（4574）の他、ヒスイ玉53個・ガラス小玉２個が出土した。おそらく、高坏を中心とする土器と木製武器形、それに滑石製模造品を使用した祭祀があり、その行為終了後、この地に遺棄されたものと思われ、一括性は高い。なお、初期須恵器及び韓式系土器破片は、本土器群として取り上げた破片であるが、時間的な近接性は示すものの、本来的に伴っていたかどうかは不明である。

土器群54（土器溜Ｓ）

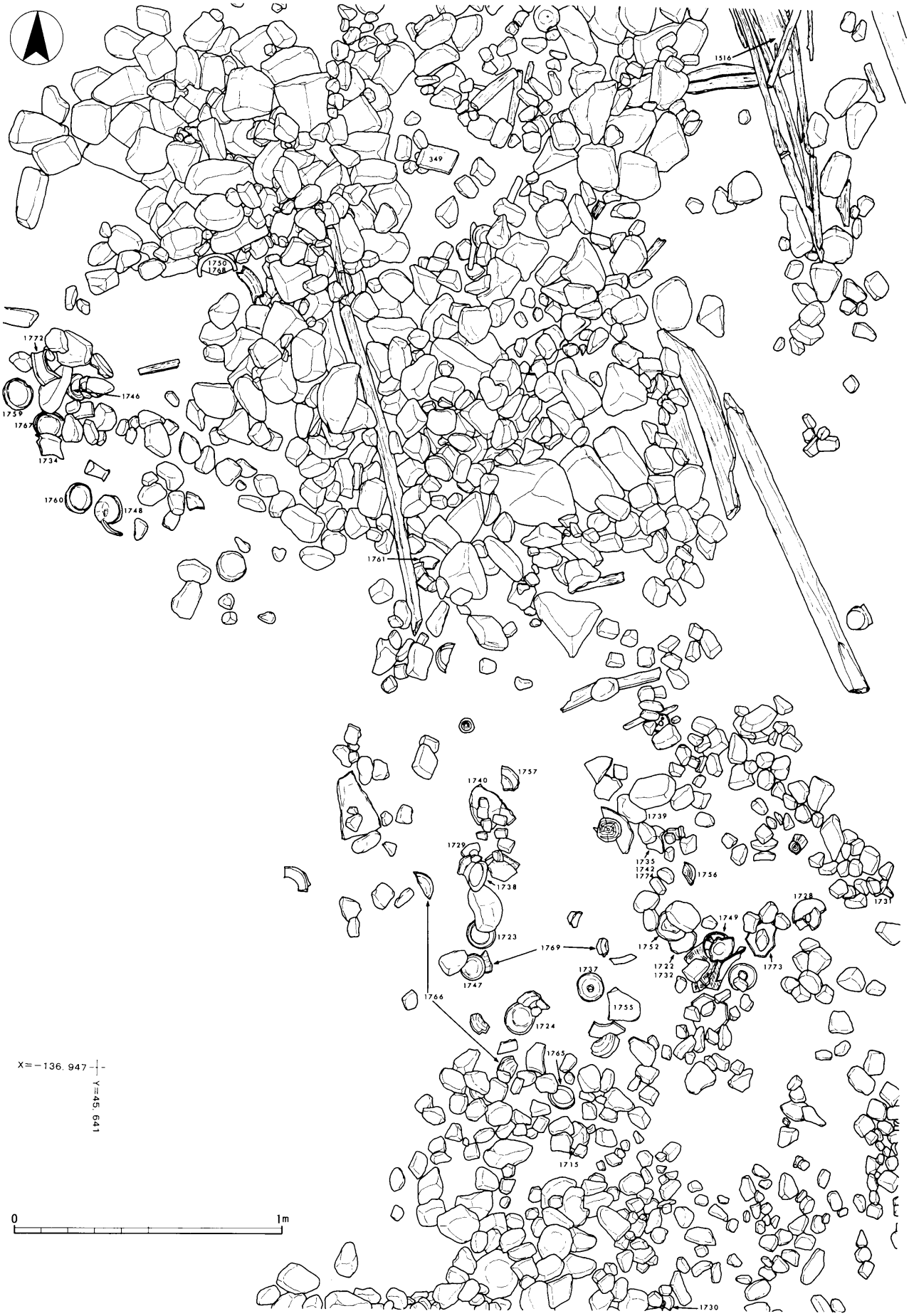
1.7 ｍ×1.1ｍの狭い範囲（より集中した部分は１ｍ×0.9ｍ）で高坏と坏を中心とする土師器が折り重なるように集中して出土し、あわせて木製横櫛(木986)と小形横槌(木223)の出土もあった。甑片も含むものの、土器組成には器種的な偏在性があり、祭祀等の特定用途で使用された土器群が一括投棄された状態を示しているものと判断される。横櫛や小形横槌も、同時に廃棄されたものと思われる。

土器群55（土器溜）

入江状屈曲部のところから4.7ｍ×2.3ｍの範囲で出土したものである。同じ面で押さえてはいるものの、広い範囲から疎らな状態で出土しており、一括性には乏しい。いくつかの単位で投棄されたものが集積された状態で遺存したものと思われ、時間的な近接性は追えるものと判断される。なお、埋土より



第118図　ＳＤ１土器群55出土状況図（１：30）



第119図　ＳＤ１土器群56出土状況図（１：20）

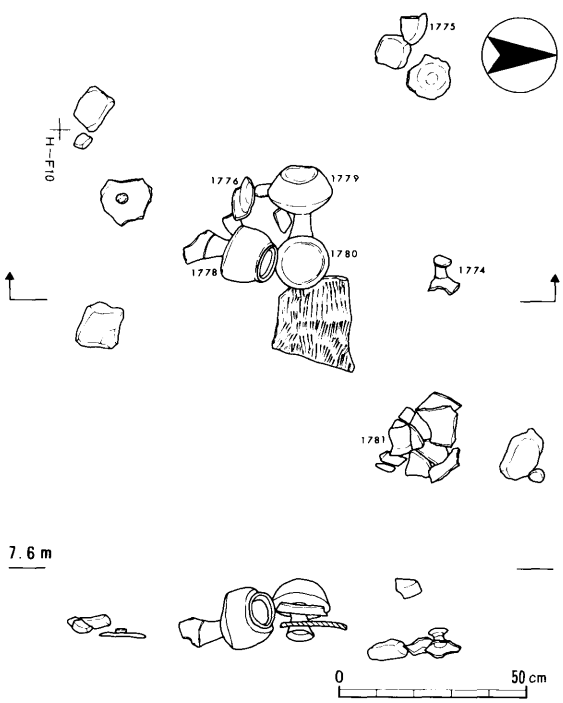
滑石製臼玉121 個が出土している。

土器群56（単位m）

ＳＤ１上流左岸の石組み井泉である井泉７や９の脇から出土したものである。ただし、明らかな井泉内から出土したものではないため、独立した扱いとした。4.5m×1.3mの範囲から、土師器坏と須恵器坏及び坏蓋を中心とし、土師器及び須恵器の甕を伴う一群が出土した。完形品が多い。また、土器群として認識する以前に、この部分からかなりの完形の土師器・須恵器の坏類を取り上げており、実際にはさらに多い数の土器が存在したようである。これらの多くは、「Ｈ－Ｌ11Ⅱ層下部」として取り上げているので、観察表で参照されたい。

土器群57（Ｈ－Ｅ10Ｉ層土器集中）

ＳＤ１上流寄りのところの流心部分に存在したもので、４ｍ×３ｍの範囲で出土した。やや疎らに出土している部分もあるが、須恵器・長頸壺を中心とした土器群が同一面から出土しており、一括性は高いものと思われる。その場合、本土器群がＳＤ１の流心部より出土していることは、この時期の流路が堆積が進み、常時流れている溝としての機能をかなり喪失していたことを示すものと捉えられよう。



第120図　ＳＤ１土器群57出土状況図（１：20）

第５節　出土遺物

１　付設施設に伴う遺物

井泉をはじめとするＳＤ１の付設施設に伴う遺物を一括する。ただし、土器群遺物（後述）のなかには「礫敷」や「礫群」に存在したものも含まれているが、それらは土器群のなかで扱っている。

井泉10出土遺物（648）

短く外反する有稜高坏Ａ３である。口縁内面を横方向、外面を縦方向にヘラミガキを施している。

井泉５出土遺物（649～654）

小型の広口壺（649）と有稜高坏Ａ３（650～651）・碗状高坏Ａ（652）、それにミニチュア土器（653）と手捏ね土器（654）がある。有稜高坏は、650の坏下部が外反気味で浅い坏部をもつのに対し、651は坏下部が内彎気味でより深い。653は口縁部を欠損するが、頸部に有孔をもつ。一括性に問題はあるが、ほぼ弥生時代後期後半の所産であろう。

井泉４出土遺物（655～658）

碗状高坏Ａ（655）・短頸壺（657）・受口甕Ｂ（656・658）がある。このうち高坏は、口縁部が短く内彎する弥生中期的な様相を残したもので、口縁外面に２条の凹線を残す。受口甕も口縁端部が内斜するしっかりとした古相を残す。弥生時代後期前半の所産であろう。

また、井泉４からは、直柄平鍬未製品（木18、以下、番号の前に「木」を冠した遺物番号は、既刊の木製品編の報告書の遺物番号に対応している）や泥除（木38・木41）、曲柄平鍬？（木82）といった木製農具も出土している。未製品を含み、製作途上の失敗品や破損品の廃棄土坑の様相も呈している。

井泉６出土遺物（659 ～666）

広口壺（660～661）・直口壺Ａ（659）・く字形甕Ｂ（664）・受口甕Ｂ３（662～663）・有頸鉢Ｃ（665）・底部（666）がある。

壺類はいずれも法量の比較的小さな中型品で、全体に装飾が乏しい。666 は、ミニチュア品に近いものであろう。

井泉１出土遺物

（4492・4562・4626・木887・木1228）

出土品として勾玉（4562）と木製刀形（木887）、

滑石製臼玉（4626）、井泉の構成材としての扉板（木1228）と大型の砥石（4492）がある。

勾玉は、薄型の模造品タイプで、作りは粗い。これに対し、木製刀形は、刀身と茎部分のみ表現した精製品である。刀形で把部の表現をしないものは珍しいが、刃部の作出は非常に丁寧である。滑石製臼玉は、1点しか出土していないため、混入品の可能性もあるが、小振りで断面中央が膨らむタイプである。井泉枠材となっていた扉板は、クスノキ製の閂受け用の把手を有するものである。また、井泉を組んだ石に利用されていた砥石は、重量が4kgもある大きなもので、表裏2面の磨面をもつ。

なお、扉板と組み合って井泉枠材を構成していたヒノキ製の板材は、年輪年代測定の結果、西暦364年を遡らない木（辺材なし）を使用していたことが判明した[1]。樹皮部分は残っていないため伐採年は不明である。扉板が転用材であることから、本例も転用材の可能性が高い。その場合、本材から遺構の年代を判定するには無理があるが、上限の年代を押さえることができたことは、意義があるであろう。

井泉7出土遺物（667～680・4627～4741）

須恵器坏・蓋類（667～670）・直口壺（678）・小型甕（679）、土師器坏A（671～675）・坏B（676）・手捏ね土器（677）・把手付鍋（680）、滑石製臼玉とガラス小玉類（4627～4734）がある。

土器は、667～673が井泉内、674～680が井泉外から出土している。須恵器坏・坏蓋は、天井部のロクロケズリがほぼ全面にわたるものと、1/2程度のものがある。680はハケ調整の把手付鍋で、口縁部は外反せずにそのまま収められている。

玉類には、棗玉1個・滑石製臼玉29個・ガラス玉1個があり、これとは別に井泉外の埋土から滑石製臼玉67個とガラス玉1個が出土している。臼玉は、断面中央に稜をもつタイプを主体とし、稜はないものの中央部が膨らむタイプが量的に続く。

なお、4735～4741は、井泉7の下で出土した滑石製臼玉であるが、こちらは全体的に小振りで、断面中央が膨らんで稜をもつタイプのみで構成される。

井泉9出土遺物（681～684）

すべて須恵器である。681は、天井部を丁寧にロクロケズリした深い器形で、壺類の蓋と考えたが、碗の可能性もある。他は、井泉石組みの下部から出土したもので、682は甕もしくは壺、683～684は坏身である。坏身はともに受部の立ち上がりが高く、底部は丁寧にロクロ削りされた、高蔵208号窯式[2]に併行する5世紀後半の所産であろう。

井泉7～9周辺出土遺物（685～690・4742～4782）

井泉に伴うとは限らないが、井泉7～9を調査する過程で周辺及び下面から出土した土器である。このうち、685と686はやや古く、井泉構築以前の所産であろう。685は体部内面をヘラケズリした外面ヘラミガキ仕上げの中型の直口壺、686は外面にタタキを施す字形甕Dで、体上部にハケを施している。689は坏部内側に赤色顔料が付着した坏もしくは高坏、687と688は屈折脚高坏、690は手捏ね土器Cであるが、外側にはオサエ痕に混じって布状の圧痕が認められる。

4742～4782は滑石製臼玉で、井泉7～8周辺で出土したが、どれに伴うものか特定が難しいものを一括した。4745などやや大振りで、断面中央が膨らまないタイプを含む。

井泉11周辺出土遺物（691～694・4783～4822）

土師器屈折脚高坏H（691）と小型壺A2（692）、須恵器坏蓋（693）、突帯付の土管（694）がある。全体として、古墳時代後期の所産であろう。

4783～4822は滑石製臼玉で、全体に小さく、断面中央が膨らんで稜をもつタイプが中心である。

井泉12出土遺物（695・4823～4824）

須恵器坏蓋（695）と滑石製臼玉（4823）がある。695は天井部ヘラ切り未調整で、7世紀代の所産であろう。4823は直径4㎜の臼玉としては大形の長方形タイプの臼玉である。

井泉13出土遺物（696～698）

古墳時代の須恵器である。696は坏蓋で、天井部の1/2をロクロケズリしている。

井泉14出土遺物（699～709）

平瓦（699～700）・山茶碗（702～706）・山皿（701）・陶磁器類（708）・須恵器壺（709）がある。やや時期的に幅を含むが、井泉の時期としては中世の所産であろう。平瓦は井泉脇からの出土である。701は口縁部が玉縁状を呈する。

石組１出土遺物（710～718）

須恵器無蓋高坏３点（715～717）と土師質の土製品（718）が石組出土、その他は周辺部出土である。須恵器は、全体として高蔵208号窯式に相当するものと思われる。土師器は、碗状の坏部をもつ屈折脚高坏H（710）と、おそらく小型直口壺になると思われる711がある。

718は土師質の土製品で、浅い碗状の下部に小さな覆いが付くもので、おそらく箕を造形化したものと思われる。

石組２出土遺物（719～720）

719は、土師器脚付長頸壺のミニチュアで、下膨れの胴部と脚部に直線文と列点文が交互に配されている。古墳時代初頭の土器を模した精製品である。

720は、石組２の脇から出土したもので、蓋止め用の穿孔を頸部に配した無頸壺Ｂである。

木組遺構出土遺物（721～731）

須恵器有蓋高坏蓋（721）・坏身（722～723）・土師器小型坩Ｂ１（724）・小型直口壺Ａ（725）・手捏ね土器（726～727）・台付甕形ミニチュア土器（728）・それに土玉（729～730）と土錘（731）がある。

須恵器類は天井部を3/4以上ロクロケズリして受部の立ち上がりが長いもので、概ね５世紀後半から６世紀初頭の所産であろう。この須恵器も含み、小型丸底壺タイプの小型坩や手捏ね土器など供膳形態の土器が多く、祭祀色が強い遺物群ということができる。726は、口縁下に蓋止め用と思われる２個１対の穿孔を有している。

礫群１出土遺物（732～738）

広口壺Ｃ１（732）・小形壺Ｂ（733）・精製の有頸丸底鉢（734）・Ｓ字甕Ｃ（735）・有稜高坏Ｃ（736）・手捏ね土器Ｂ（737）・小型無頸鉢Ｂ２（738）がある。全体として、廻間Ⅱ式併行であるが、Ｓ字甕735の体上部のヨコハケが消失していることは新しい要素であろう。図示した遺物は計７点と少ないが、特に出土遺物に組成的な偏りはみられない。

礫群２出土遺物（739～766）

広口壺Ｃ１（742）・有段口縁壺Ａ２（739）・内彎口縁壺（740）・直口壺Ｄ（741）・有稜高坏Ｂ４～Ｃ（744～749）・小型高坏Ｃ２（750）及びＡ２（751）・小型無頸鉢Ａ１（754）・小型器台Ｂ２（752）と小型器台Ｃ２（753）・Ｓ字甕Ａ～Ｂ（755～761・764）・受口甕Ｃ（762）・く字形甕Ｂ（765）・丸底甕？（766）・台付受口甕の小型品（763）がある。

有稜高坏は、礫群１のものに比べ脚部が若干内彎気味で、口縁端部も内斜面に僅かな面を残すものが含まれる。742も、口縁端面や体上部に文様帯をもつもので、同じ広口壺Ｃ１の礫群１出土の732に比べ装飾が豊かである。Ｓ字甕は、体上部にヨコハケを残すものであるが、口縁形態や体上部のヨコハケの施文位置の差に時間的な幅を推測させる。全体として上層の礫群１に比べ、一段階古い時期の所産と捉えられよう。なお、766は焼成後穿孔である。

礫群２下～礫群３出土遺物（767～775）

短頸壺Ｂ（767）とＤ（768）・受口甕Ｂ２（770）・受口鉢（771）・く字形甕Ｂ（772）・有稜高坏Ｂ4a（774～775）がある。また、769はパレス壺（複合口縁壺Ａ）、773は碗状高坏になるものと思われる。上面の礫群２出土遺物にくらべて、全体的に古い様相を示している。

礫群３下出土遺物（776 ～785）

小形壺Ａ（777）・短頸壺Ａ（778～779）・壺形のミニチュア土器（780～781）・く字形甕Ｂ（783～784）・有稜高坏Ａ３（782）・土玉（785）がある。

776は、やや口縁の開きが狭いが、広口壺ないしは短頸壺になるのであろう。く字形甕784は、体部外面をヘラケズリした中期的な様相を残す土器である。全体として弥生時代後期に位置づけられよう。甕もあるものの、組成的にミニチュア品を含む壺類の出土が目立っている。

上層礫敷出土遺物（786～855）

土師器では屈折脚高坏Ｂ（786～793）・器台（794）・丸底甕（796～797）・小型く字形甕（798）・小型器台Ｂ１（795）・小型無頸鉢Ｄ（799）・坏（800～802）・有段口縁壺Ａ２の小型品（803～804）・小型坩（805～807）・手捏ね土器（808～811）がある。

796は、口縁部が微かに内彎して端部を肥厚気味につまみ上げ、体部内面をヘラケズリする。803～804は小型の二重口縁壺で、803は胴部に焼成後の穿孔を有する。須恵器のうち812～828は初期須恵器である。有蓋高坏蓋（812～814）・体部外面を手持ちヘラケズリした坏身（815）・高坏（816～819）・直

口壺ないしは甕（820～821）・碗（822）・器台（823～824）・壺甕類（826～827）・器台（828）がある。

このうち、有蓋高坏蓋812～814は天井部を羽状列点文や直線文で装飾し、高坏816～818は脚部に透孔は持たないが稜突帯をもつ。ともに胎質土器の装飾を色濃く残すものである。また、器台823は、長方形透孔を直列に、同じく器台824は三角形透孔を千鳥式に配する。820や822の波状文は、非常に繊細である。なお、815や827はやや新しい時期に属するものであろう。

829～839は韓式系土器である。829は鍋、830～833は甑、834～839は把手付鍋もしくは甑の把手である。タタキ原体については、829～830が格子タタキ、831～832が縄蓆文タタキである。把手のうち、834～835・837は下面に円形刺突を有するもので、836は先端を切り落としている。

840は、鍋把手である。断面円形で全体に細長く屈曲する形状で、上述の韓式系土器の把手とは接合方法も異なる。

841～848は、古墳時代後期に属する須恵器で、時期幅がある。このうち、有蓋高坏蓋842の内面には同心円当て具痕がみられる。

849～855は、土玉・土錘類である。法量に若干の差異がみられる。

下層礫敷出土遺物（856～943）

856～868は上面出土遺物、869～877は礫敷面出土遺物、878～943は下面出土遺物である。ただし、前述のように、これらの抽出はあくまで現場での任意抽出のため、これで下層礫敷出土遺物の全てを示しているわけではなく、実際には後述の土器群のなかにも下層礫敷付近から出土したものもある。しかしながら、大まかな傾向は示せるものと考え、図示した。

上面出土遺物には、広口壺C 1（856）・直口壺A（857）・く字形甕B（858～859）・台付の受口甕B 2（860）・小型の台付く字形甕（862）・有稜高坏B 4（863）・小型高坏A（864）・脚付坩（865）・手捏ね土器（866）、土玉（867～868）を図示した。このうち、く字形甕Bとした858は、外面にナナメ方向を基調とした繊細なハケ調整と直線的に外側へ開いて上端面をなす特徴的な口縁部をもつ。

礫敷面出土遺物として現場で認定したものはあまり多くない。短頸壺A（869）・広口壺C 1（870）・く字形甕B（871）・ミニチュア土器J（872）・手捏ね土器B（873）・土管？（874）・土玉（875～877）がある。

このうち869は、頸部に列点文、体上部にヘラ描き沈線を施す。遺存状況が悪いため全体は不明ながら、このヘラ沈線は具象的な線刻絵画ないしは記号文の可能性が高い。871は、体上部のタテハケの有無に差はあるが、基本的に上面出土遺物の858と同タイプの甕である。

下面出土遺物には、広口壺B 2（878）・内彎口縁壺Dの大形品（879）・有段口縁壺A 2（880）・直口壺？（881）・広口壺E（882～883）・長頸壺A（884）・短頸壺（885～886）・大形壺の底部（887）・小形壺（888～890）・脚付壺（891～892）・無頸壺？（893）・く字形甕A（895～896）・受口甕（894・897～899）・脚付甕？（900・904）・有頸鉢C（901～902）・粗製小型く字形甕（903）・有孔鉢もしくは甕（905）・小型無頸鉢B 2（907・912）・小型有頸鉢A（906）・碗状高坏A（908）とC（915）・有稜高坏A（909～911）・ワイングラス形高坏B（914）とC（913）・器台B 1（916）・小型器台D（917）・小形壺（918）・ミニチュア土器各種（919～929）・手捏ね土器（930～938）及び土玉（939～943）がある。有段口縁壺など時期の新しいものも含むが、高坏や器台をみる限り弥生時代後期に属する土器が多い。

このうち無頸壺？893は、胴部の片面に傘状、その逆側に「◎」の炭化物状の黒色顔料？による線画が見られる。遺存時の状態が悪く、非常に薄いため、これがいわゆる墨書的なものかどうかの判断は留保したいが、今後、類例を注視していく必要がある。

881は、直口壺の可能性を考えたが、器壁が厚く広口壺の可能性もある。口縁上端面を形成し、そこに簾状文を施す。また、887は、内面に赤色顔料の付着がみられる。

甕には、く字形甕と受口甕がある。く字形甕は、口縁部と肩部に刻み列をもつハケ調整の甕で、いわゆる山中式の甕と共通する部分が大きい。

ミニチュア土器は、この時期の通常の広口壺や内彎壺などを忠実に模した精製品や、手捏ね土器がある。このうち、受口甕のミニチュアである928には蓋（927）が伴って出土した。

2　土器群出土遺物

土器群１出土遺物（944～975）

短頸壺Ａ（950）・Ｂ（944・951）・Ｄ（945）・広口壺Ａ２（948）・Ｂ２（946～947）・広口壺胴部及び底部（952～953）・直口壺Ａ（949）・脚付壺Ａ（954～955）・内彎口縁壺Ａ（956）・有稜高坏Ａ３（957～959）・小型く字形甕（960～964・966・974）・く字形甕Ｂ２（965）・受口甕Ｂ（968～969・971）・Ｅ（970）・有頸鉢Ｃ（972）・タタキ甕（967）・脚付小型坩（975）・蓋（973）がある。944や945、965など胴部を焼成後穿孔するものや線刻絵画を施した954を含む。以下、特徴的なものを簡単に触れておく。

短頸壺944は、胴部へラミガキを施すにあたって横方向を基調としつつも体上部については縦方向のものも重ねてミガキによる文様効果を意図した土器である。

広口壺946は、胴部が卵形で、体上部に櫛描文を施すものの、口縁部に装飾はない。

951は、口縁部のみをみると装飾性の乏しい広口壺のようでもあるが、胴部も含めた全体に占める口縁部の大きさが小さく、短頸壺とした。

954は、脚部が外反して広がる脚付の長頸壺の胴部に線刻を施したものである。図面右側は本来の形状からはかなり崩れているが竜を線刻したもの、左側は細長方形区画内に鋸歯文を充填し、両側縁から凧足状の垂れ下げ文様を描いたものである。前者を龍とするのは問題なかろうが、後者はあまり類例がない。鋸歯文を鱗の象徴と考え、古代中国の殷周時代の青銅器文様との構造上の共通性から、蛇を表したものの可能性がある（詳細は第Ⅶ章第4節参照）。

959は、有稜高坏Ａ３に措定したが、欠損している脚下部がやや内彎傾向を帯びる可能性があり、その場合はＢ1a類ということになろう。

土器群２出土遺物（976～1004）

直口壺Ａ（976）及びＣ（981）・直口壺？（980）・短頸壺Ｂ（977～978）・脚付壺（983）・小形壺（982）・内彎口縁壺Ｂ（979）・受口甕Ｄ（984）及び台付のＢ２（987）・く字形甕Ｂ（985～986）・各種小型壺類（988～993）・小型く字形甕（994～995）・小型有頸鉢Ａ（996）・有稜高坏Ａ２（997）・Ａ（998～1001）・小型無頸鉢Ｂ２（1002）・手捏ね土器Ｆ（1003）・土玉（1004）がある。

この一群は、精製の小形壺や甕が多いことや、胴部に焼成後穿孔が施された個体（980～981）を含むことが特徴であるが、やや時間幅がある。以下、特徴的な個体についてみてみよう。

976は、頸部の括れが極めて強く、口縁部が外方へ直線的に開く特徴的な器形を採る。これは、胴部に紐状のものを十文字に緊縛して括れの強い頸部と突出度の強い底部に引っ掛けて留めるに適した器形で、おそらく976は井戸状の施設から水を汲み上げるために使用されたものであろう。胴部に巻かれた紐状のものの痕跡が明瞭に残っている。

短頸壺Ｂとした978は、口縁端部を内側へ折り返し、いわゆる受口状をとる。

979は極めて精製度の高い個体で、口頸部外面及び胴上部外面に貝殻腹縁による刺突を施す。

993は、円盤状の胴部の最膨部に隆帯を貼付し、その上に横線文、上下端に刻みを施した小型の脚付壺で、胴上部にも直線文を施す。本例は、当地域の土器製作の伝統になく、おそらく吉備地域の影響を受けたものないしはそこからの搬入品であろう[3]。

土器群３出土遺物（1005～1031）

広口壺Ｂ２（1005）・短頸壺Ｂ（1006）及びＤ（1010）・直口壺Ｃ（1008）・小形壺Ｂ（1007・1009）・蓋Ａ（1011）・無頸壺Ａ（1012）及びＣ（1014）・脚付壺（1013）・無頸壺（1015）・く字形甕Ｂ（1016～1018）・粗製の小型台付鉢（1019）・受口甕Ｃ（1020）及びＢ（1021～2024）・有稜高坏Ａ３（1025・1027）・碗状高坏Ｂ（1028）及びＣ（1026）・小型高坏脚部（1029）・器台Ｂ１（1030）・手焙形土器？（1031）を図示した。

短頸壺1010や受口甕1021では、焼成後穿孔が施されている。全体として、山中式併行期[4]の弥生時代後期の所産として捉えられる。以下、特徴的なものを概説する。

1006は、胴部に弓状の半弧沈線を連続して線刻したもので、記号文として捉えられよう。

1010は、一見甕的ではあるが、胴部をミガキ調整しており、短頸壺に含めた。胴部下部に焼成後穿孔をもつ。

無頸壺とした1012は、本遺跡出土の典型的な無頸壺とは異なり、胴部がやや腰高で、底部からの立ち上がりがより上方を指向する。調整も胴部外面をヘラケズリするなど、粗製である。

1028は、有稜高坏Ｂ２とも類似するが、より彎曲性が高く、碗状高坏として扱った。ただし、形態的には口縁付近の内彎度が弱く、開き気味となるのが特徴である。

1029は、脚部中央に小円孔列をもつもので、ミニチュアに近い品である。

土器群４出土遺物（1032～1046）

広口壺Ｂ２（1032）及びＥ（1034）・直口壺Ａ（1033）・内彎口縁壺Ｂ（1035）・小形壺（1036）・中小形の壺（1037）・注口付短頸壺（1038）・有稜高坏（1039）・く字形甕Ａ（1040）及びＢ（1041～1042）・小型く字形甕（1043）・受口甕（1044～1046）がある。

壺類は、全体に装飾性が乏しい。また、1036・1040・1041には焼成の後胴部穿孔がある。以下、特徴的なものをみていこう。

1032は、口縁部があまり大きく開いていないものの、広口壺の系譜に属するものであろう。体部にミガキを施すものの、ハケも良く残り、かなり粗い仕上げである。

1034は、文様のない装飾性に乏しい広口壺であるが、口縁部を僅かに受口状にしている。

1037は、下膨れの太頸形態をとるハケ調整の壺である。頸部の括れが小さい短頸壺的な器形になるのであろう。

1039は有稜高坏であるが、脚部形態や脚部のナナメミガキ、あるいは坏部内面のヨコミガキなど、当地域に一般的な有稜高坏の組列からは外れるものである。

受口甕はいずれも個性的である。1044は器形的には口縁部がかすかに受口状をなす程度であるが、受口上段部外面に刻み列を有し、受口状口縁であることの系譜を示している。1045は装飾性の少ないハケ仕上げの受口甕Ｂで、脚台が付くようである。1046は口縁部内面に強いヨコナデを施すことによって受口化した受口甕Ｅであるが、受口部上段に刻みを入れてより受口部を明瞭化するとともに、底部に脚台を有する。

土器群５出土遺物（1047～1059）

小型の壺（1047）・く字形甕Ｂ（1048）及び小型のく字形甕（1049・1052）・受口甕Ｂ３（1050～1051・1053）・Ｓ字甕Ｂ（1054）・有稜高坏Ｂ1b（1055～1057）・高坏脚部（1058～1059）がある。

1054のＳ字甕Ｂ類などやや時期的に後出するものも混入するが、高坏などは同形態で安定しており、全体として弥生時代末から古墳時代初頭の所産であろう。組成的には壺がやや少ない。く字形甕とした1048～1049、1052はいずれも器高が短小で、鉢的な形態をとる。

土器群６出土遺物（1060～1062）

直口壺Ａ（1060）・有稜高坏Ｂ1a（1061）・く字形甕Ｂ（1062）の３点を図示しえたのみである。

1060は口縁部が内彎化しているが、土器形式としては直口壺に措定した。1062は、小型のハケ仕上げの甕で、上端面をもつことに特徴がある。

土器群７出土遺物（1063～1072）

小型の広口壺Ｃ１（1063）・直口壺Ｂ（1064）・壺の胴部（1065）・有稜高坏Ｂ1b（1066～1068）・小型のく字形甕Ｂ１（1069）・受口甕Ｂ３（1070）・Ｓ字甕Ａ（1071）・手捏ね土器Ｆ（1072）がある。

このうち、受口甕1070は、胴下部の屈曲が急角度で、鉢になるかもしれない。直口壺1064は、口縁外面をヨコナデしてその部分に刻みを施す。

土器群８出土遺物（1073～1091）

広口壺Ｂ２（1073～1074）・広口壺胴部（1077）・短頸壺Ｂ（1076）・小型の壺胴部（1075）・内彎口縁壺Ｂ（1078～1080）・脚付壺Ａ（1081～1084）・受口甕Ａ（1086～1087）・Ｃ（1085）・有稜高坏（1088～1090）・ミニチュア土器Ｅ（1091）がある。

全体として、壺が多く、特に脚付壺や内彎口縁壺といったものが多い。以下、特徴的なものをみてみよう。

広口壺1073は、頸部の屈曲がやや不明瞭で、口縁部もやや直線的で直口気味なのに対し、胴部の張りは大きい。

脚付壺のうち、1084は他の脚付壺に比べて小振りで、内彎口縁が付く可能性がある。また、1081は胴下部が脚部と接合するために突出しており、接合の具体相を知る好資料である。

甕1085は、有段口縁をもつため受口甕としたが、口縁部は撥ね上げ口縁気味である。1086と1087は、共に脚台をもつ受口甕である。

有稜高坏1088は、坏部がB2b型の特徴を示すが、脚部はやや太めで外開きするタイプである。

土器群9出土遺物（1092～1102）

短頸壺B（1092）・小形壺C（1093）・直口壺（1094～1096）・脚付壺A（1097～1098）・無頸壺A（1099）・受口甕E（1100）・碗状高坏B（1101）・有稜高坏A3（1102）がある。

全体として、壺類が組成に占める割合が大きい。以下、特徴的なものをみていく。

1092は、口縁部の開き具合が小さく、加飾性も少ないことから短頸壺とした。

1096は、球形の体部に外傾しつつ直線的に延びる口頸部を有するもので、口頸部及び胴部上面には直線文と列点文を交互に重ねた加飾性豊かな精製の直口壺である。こうした直口壺は、本遺跡では他に例をみない。

1101と1102は、碗状高坏と有稜高坏であるが、脚部形態は共通しており、非常に類縁性が高い。

土器群10出土遺物（1103～1127）

脚台付きの直口壺D（1103）及び直口壺B（1105）・広口壺A（1106）・短頸壺B（1104・1107～1108）・内彎口縁壺A（1109）・脚付壺脚部（1110）・受口甕B2（1112）・脚台付きの受口甕E（1111）・く字形甕B（1113）・有頸鉢C（1114）・ミニチュア土器E（1115）・有稜高坏A2（1116～1117）・同A3（1118）・同B1b（1119・1121）・同脚部（1120）・グラス形高坏A（1122）・グラス形の小型鉢（1123）・小型鉢（1124）・ミニチュア土器（1125）・手捏ね土器E（1126～1127）がある。

有稜高坏は、弥生時代後期に属するものと古墳時代初頭に属するものの複数の時期のものがあり、土器群全体の時間的な一括性には乏しい。広口壺（1106）や短頸壺（1107）、受口甕（1112）、有稜高坏（1116～1117）、グラス形高坏（1122）などは古い時期に属しようか。また、1108の胴部には焼成後の穿孔が施されている。以下、特徴的なものをみていこう。

1103は、脚付直口壺である。脚付の長頸壺や内彎壺はしばしばみられるが、本例のような短頸の直口壺で脚台が付くものは珍しい。

直口壺（1105）は、肩部が張る形態をとる。

有稜高坏は、時間幅がある。1118は、口縁外面に波状文と直線文を施して加飾したもので、太めの脚部をもって安定感がある。1120は、外反していた脚裾がちょうど内彎化していく時期に相当しよう。

グラス形小型鉢1123は、内彎口縁壺Cの口縁部をコップ状にしたものである。1125は、胴部穿孔をもち、1123のミニチュア的な器形である。

土器群11出土遺物（1128～1165）

広口壺B2（1128～1129・1131）及びD（1130）・直口壺A（1132）・長頸壺B（1133）・短頸壺A（1134）・小形壺（1135～1137・1139～1141）・内彎口縁壺A（1142）及びB（1143）・壺胴部（1138）・蓋A（1144）・受口甕（1145～1147）・く字形甕A2（1148）及びA（1149）・S字甕A（1150）・有稜高坏A3（1151）・A脚部（1152）・B1b（1153）・B3a（1154～1155）・高坏脚部（1156）・器台B1（1157）・小型の脚台付受口甕（1158）・ミニチュア土器A（1159～1160）・小形壺甕類の脚台（1161）・手捏ね土器C（1162～1163）及びG（1164）・小型高坏（1165）がある。

本土器群は、中型の各種壺類が組成の中心を占めることに特徴がある。ただし、高坏を指標にすると若干の時期幅があり、一括性には欠ける。ただし、そうした時期の異なるものを含みつつも、全体としては古墳時代初頭頃のものが多い。以下、特徴的なものをみていこう。

広口壺は、比較的簡素な加飾しかもたない中型品が中心である。

長頸壺とした1133は、近畿地方に多い長頸壺ほど頸部が長くないが、短頸壺とするには頸部が延びており、長頸壺として扱った。口縁部は内彎気味に外方へ広がる。

底部が非常に厚い短頸壺1134は、胴上部にヘラによる緩い弓状の線刻列を施している。

小形壺では、1135・1139・1140に胴部穿孔がみられ、特に1140は焼成前穿孔である。

1138は、壺の胴部破片であるが、特筆すべきこととして、形状は崩れているものの、竜を描いたと推定される線刻をもつ。

内彎口縁壺1143は、口縁部内面のミガキが横方向

となるのが特徴である。ただし、六大A遺跡出土の内彎口縁壺は縦方向が主流であるが、横方向もないわけではない。

く字形甕1148は、脚台が付き、胴部内面をヘラケズリする。脚台は、比較的大型のようである。

土器群12出土遺物（1166～1174）

複合口縁壺A（1166）・短頸壺D（1167）・胴部穿孔小形壺（1168）・く字形甕B（1169）・受口甕（1170）・有稜高坏B2a（1171）及びB3a（1172）・碗状高坏B（1173～1174）がある。

このうち、1166は複合口縁壺Aであるが、口縁外面の装飾が羽状列点文で、細い凹線列を基本とするいわゆるパレス壺の規範からは外れたものとなっている。

土器群13出土遺物（1175～1195）

広口壺B2（1177・1179～1180）及びD（1178）・短頸壺B（1176）及びD（1175・1182）・直口壺A（1181）及びD（1184）・小形壺B（1183）・く字形甕B（1185～1186）・受口甕B2（1187・1190）及びC（1188）・甕底部（1189）・S字甕A（1191）・有頸鉢A（1192）・有稜高坏B1a（1194）及びB3a（1193・1195）がある。

壺類は、全体に装飾が乏しく、比較的似通った様相を示すが、S字甕や高坏などをみる限り若干の時間幅を見込んでもよさそうな一群である。個別に説明するように、広口壺と短頸壺などで形式認定の要件が重複していることが多く、その境界が非常にあいまいなものがある。

広口壺B2としたものは、いずれも装飾性に乏しい。1177を除き、口縁部の開き具合も小さく、器形的には短頸壺Bとの区別もあいまいである。大形の壺であることと、口縁部の全体的な外反度を重視して、ここでは広口壺に措定した。

短頸壺は、いずれも広口短頸壺とも言い得る器形で、太めの頸部から短く外反する口縁部が付く。このうち、1182は蓋の紐留め用の穿孔を有し、本遺跡分類の無頸壺的な要素も強いが、やや口縁部が長いため短頸壺とした。

く字形甕1186は、口縁部に上端面こそもたないものの、頸部の屈曲具合やハケの特徴など871や985との共通性が強い。

受口甕のうち1187は、口縁立ち上がり部の上下に列点文をもつもので、ややイレギュラーな施文である。1188を除き、胴部の装飾に乏しく、壺の特徴と軌を一にしている。

土器群14出土遺物（1196～1218）

広口壺B2（1196）・短頸壺B（1197～1198）・直口壺D（1199）・精製のく字形甕（1200）・円窓付脚付壺（1201）・く字形甕B2（1202）・受口甕D（1203）・S字甕A（1204）・有稜高坏B脚部（1205）及びB3a（1206～1208）及びB4b（1209）・有稜高坏Cもしくは碗状高坏の脚部（1210）・有孔の無頸鉢B（1211）・小型有頸鉢B（1212）・蓋A（1213～1214）・小型坩B1（1215）・ミニチュア土器C（1216）・粗製のミニチュア土器（1217）・土玉（1218）がある。

壺はいずれも文様の施文がなく装飾性に乏しいことや、甕は小型品が中心であること、精製の甕や円窓付壺、胴部穿孔をもつ土器（1204）、それにミニチュア土器等を組成に含んでいることを特徴とする。有稜高坏をみると、若干の時期的な幅が認められるが、全体としてはまとまりの良い資料である。

短頸壺とした1197～1198は、法量的には大形の壺であり、口縁部の外反具合が直線的で、大形の直口壺的な要素もあるが、頸部の締まり具合等から短頸壺とした。このうち1198は、体部内面をヘラケズリし、外反する口縁端部をつまみ上げ気味とする特徴をもつ。

1200は、内外面の口縁部・胴部ともに横ヘラミガキをもつ精製の甕で、非常に丁寧な作りである。

円窓付土器である1201は、外面をケズリにより成形した土器で、外反する大きな脚をもち、太い頸部から直口する口縁部が付く脚付壺である。

1204は焼成後の胴部穿孔をもつS字甕である。口縁外面の刺突列を欠くが、体部外面のハケはS字甕特有のく字形施文を持たないことに特徴がある。なお、体部内面に炭化物の付着が認められる。

土器群15出土遺物（1219～1236）

広口壺B2（1219）・内彎口縁壺B（1220～1221）・短頸壺D（1222）・把手付鉢（1223）・受口甕E（1226）・く字形甕B2（1224～1225・1227～1228）・小型のく字形甕（1230）・ミニチュア土器F（1229）・小型無頸鉢C（1231）・小型高坏A2（1232）・碗状

高坏C（1233）・グラス形高坏A（1234）及びB（1235）・有稜高坏B4a（1236）がある。

全体の土器のなかで、グラス形高坏は時期的に古く、土器群全体の一括性には乏しい。

ただし、甕は、法量の似通った小型の台付甕、特に口縁部がやや内彎気味のものが多く、一定の斉一性をもつ。1226は、口縁部形態の内彎性が強く受口甕としたが、1224・1225なども若干ではあるが口縁部が内彎しており、1226はこれがより強いものとして捉えると、く字形甕の範疇に入れることも可能である。口縁上端面を形成することや、脚台などでも共通要素が大きい。1228と、ミニチュア土器とした1229も、器形上の共通性が大きい。

これに対し1227は、他の台付甕に比べて脚台が大振りで、なおかつ外反性が強く、いわゆる脚付土器との共通性をもつ。口縁部には片口があって、注口機能を有することも特徴である。

小型高坏1232は、有稜の坏をもち、口径が底径に勝る特徴をもつ。

土器群16出土遺物（1237～1246）

直口壺B（1237）・広口壺B（1238）・内彎口縁壺A（1239・1241～1242）・小形壺A（1240）・く字形甕B２（1243）・受口甕C（1244）・有稜高坏B2a（1245～1246）がある。

壺・甕ともに文様というてんでの装飾性が乏しいが、壺の多くはヘラミガキを施した精製系である。

直口壺1237は、口縁部がやや外反するが、広口壺という程口縁の開きは大きくなく、端部もそのまま丸く収めるのみで、装飾性に乏しい。ただし、装飾性の乏しさのというてんでは、広口壺1238も同様である。

受口甕1244は、口縁外面に１条の沈線を施すもので、体部最大径が体下半部にあり、やや下膨れの器形を呈する。

土器群17出土遺物（1247～1256）

広口壺B２（1247）・小形壺A（1248）・直口壺（1249）・く字形甕B（1251）・小型高坏D２（1250）・脚付く字形甕（1252）・台付の受口甕E（1253）・有頸鉢C（1254）・S字甕脚台部（1255）・小型無頸鉢B（1256）がある。

直口壺1249は、胴部の器形が内彎口縁壺の形態と同じであるが、口縁部が外反気味に広がる。

小型高坏1250は、本遺跡出土の小型高坏では珍しく、底径が口径を凌駕する器形をもつ。

く字形甕1251は、肩部が張る器形で、内外面をハケ調整する。

脚付のく字形甕1252は、脚台が大きく、安定感のある大きな脚台をもち、口縁をユビオサエにより摘み出し状に成形したもので、先に示したく字形甕の分類にはあてはまらない。

有頸鉢1254は、口縁上外面をヨコナデによってわずかに内側に折れ曲げる程度の受口で、底部が突出気味となっている。

1255はS字甕の脚台であるが、上部に焼成後の穿孔がみられる。

土器群18出土遺物（1257～1261）

無頸壺A（1257）・有稜高坏B2a（1258）・小型無頸鉢B２（1259）・手捏ね土器B（1260～1261）がある。図示しうるものは少ないが、小形の鉢や手捏ね土器など小型品が中心で、無頸壺も通有のものよりは若干小振りである。1259はやや上げ底で、手捏ね土器1260は口縁部を外側につまみ出している。

土器群19出土遺物（1262～1304）

広口壺B２（1262・1264）・複合口縁壺A（1265）・直口壺A（1267）及びB（1263）及びD（1266）・内彎口縁壺B（1268）・く字形甕B２（1270）・受口甕B２（1271～1272）・S字甕A（1273～1274）及びB（1275）及びC（1276～1278、うち1278は小型）・小型く字形甕（1279～1280）・有稜高坏B３（1281～1287）及びC１（1289）・碗状高坏脚部（1288）・器台C（1290～1293）・手焙形土器（1269・1294）・丸底甕（1295）・小型坩（1296）・蓋A（1297）・小型器台B１（1298）・坏（1299）・小型無頸鉢A１（1300）・手捏ね土器B（1301～1303）及びC（1304）がある。

全体に遺物量は多く、手捏ね土器や小型のS字甕等の小形土器も含む。また、器台Cが集中（４点）している。以下、特徴的なものをみていこう。

広口壺1262は、装飾性に乏しい薄手の作りで、製作技術的には直口壺との類縁性を認められよう。同じく広口壺1264は、口縁部に列点による山形文を施し、いわゆるパレス壺文様との共通性をもつ。

1265は、胴部文様の特徴などから複合口縁壺A

（パレス壺）の胴部の可能性を考えた。

直口壺1267は、焼成後胴部穿孔を有する土器で、下膨れでやや胴長の胴部をもつ。

受口甕のうち1271は、欠損しているものの脚部を有するらしい。

有稜高坏のうち1287は、脚部の法量は通有のものと同じだが、坏部がバランス的に脚部と比べて著しく小さい。脚部はふつうであり、小型高坏というわけでもない。

坏1299は、やや上げ底の浅い器形である。この時代、坏という器種自体、あまり一般的なものではない。本来別の器種（例えば内彎口縁壺等）の製作を目的としていたが、底部成形のみで製作を中止したものをベースに転用したものかもしれない。

土器群20出土遺物（1305～1311）

広口壺Ｂ２（1305）及びＣ１（1306）・小型坩Ｆ（1307）・有稜高坏Ｂ4a（1308）・Ｓ字甕Ａ（1309）・台付の受口甕Ａ（1310）・台付鉢（1311）がある。

広口壺1305は、文様施文のない装飾性に乏しいもので、1306も口縁部内外に列点文を施すものの、さほど豊富な装飾があるわけではない。

小型坩1307は、内彎口縁壺を小型化したような形態をとる。

受口甕1310は、しっかりとした設置面をもつ大きめの脚台が付く安定感のある形態である。口縁部には片口があって、注口機能をもつ。

台付鉢1311は、外見上は胴部が括れなく立ち上がってきて口縁部意識が乏しいように見えるが、内面のハケが口縁相当部のみ横方向に施されており、一応、口縁部の意識を見て取ることができる。

土器群21出土遺物（1312～1345）

広口壺Ｂ２（1312）及びＣ１（1313）・直口壺Ａ（1314）・短頸壺（1315～1316）・壺底部（1317）・内彎口縁壺Ｂ（1318～1322）・く字形甕Ｂ（1323～1325）・有頸鉢Ｃ（1326）・Ｓ字甕Ａ（1327～1328）・有稜高坏Ｂ（1329～1334）・碗状高坏（1335）・小型器台Ｂ（1336～1337）・内彎口縁壺Ｅ（1338）・無頸壺（1339）・小型有頸鉢Ｂ（1340）・ミニチュア土器Ａ（1341）及びＥかＦ（1342）・手捏ね土器Ｂ（1244）及びＧ（1243）・土玉（1345）がある。

高坏を指標とすると、若干の時期幅が想定できそうであるが、内彎口縁壺をはじめ短頸壺や小型坩も含めて壺系の土器は口縁部が内彎状を呈するものが多く、土器群としてのまとまりはある。以下、特徴的なものをみていこう。

広口壺1313は、最終のヘラミガキ施文によって一部消失しているものの、肩部に「Ｓ」字状の線刻を有している。

短頸壺とした1315～1316は、口縁部がかすかな内彎状を呈し、口縁端部はやや肥厚気味となる。1316は、胴部に顕著な横ヘラミガキを施した精製の土器で、底部を欠損する。

内彎口縁壺には、外面調整として、縦ヘラミガキだけのもの（1319）・頸部に横方向の沈線状のミガキを加えたもの（1320）・縦ヘラミガキ後に貝殻腹縁の刺突を加えたもの（1318）、縦ヘラミガキ後に横方向の細ヘラミガキを加えさらに貝殻腹縁刺突を施したもの（1321～1322）がある。Ｅの1338は、口縁部が短めで、法量的には小型坩に近い。

く字形甕のうち1323～1324は、頸部の括れが緩やかである。特に1323は、口縁部が直口気味に上方へ立ち上がり、体部外面調整もハケ後ケズリとやや異質な印象を受ける土器である。1325は、口縁端部をやや上方につまみ上げる形態を取り、その部分の外面調整のみヨコハケとなる。

有頸鉢1326は、手焙形土器の可能性もある。

土器群22出土遺物（1346～1353）

脚付壺Ａ（1346）・内彎口縁壺（1347）・台付の受口甕Ｃ（1348）・く字形甕Ｂ２（1349）・有稜高坏Ｂ2b～Ｂ３（1350～1353）がある。

出土量はさほど多くないが、土器群としての一括性は高く、完形品の多い一群である。

脚付壺1346は、外反する脚部に内彎口縁壺を載せる形態である。1347も、口縁部と底部を欠損しているが、1346同様の脚付壺になる可能性がある。

く字形甕1349は、ハケ調整する口縁外面の上端部をヨコナデによってハケを消して外斜面を形成するもので、口縁端部内面もヨコナデによって面を形成している。

土器群23出土遺物（1354～1360）

内彎口縁壺（1354・1356）・広口壺もしくは複合口縁壺（1355）・受口甕Ｃ（1358）及びＤ（1357）

及びE（1359）・有稜高坏B（1360）がある。完形品はなく、量的にも少量である。

1354は内彎口縁壺Aで、口縁端部は外面をヨコナデすることによって内側へ折り返している。

1356は口縁端部が外反する全体に開き気味の内彎口縁をもつものである。土器群23のなかでは新しい様相を呈しており、混入品の可能性がある。

壺の胴部破片1355は、球形を呈したかなりの大形品になりそうである。

受口甕は、いずれも口縁部形態に差異があるが、全体に装飾文様がないか口頸部に限定されるという乏しい状況は共通する。

土器群24出土遺物（1361～1365）

内彎口縁壺（1361～1362）・無頸壺A（1363）・有稜高坏A3（1364）・小型高坏A1（1365）がある。

有稜高坏1364だけは古い様相をもつが、他は時間的に同一時期として問題なかろう。

1361は、内彎口縁壺Aで、土器群23の1354同様、口縁端部外面をヨコナデするが、内側へ折り返すという程ではなく、器形的にも口縁部全体としての内彎性が強い。

1362は、口縁部を欠損するが、胴部の下膨れ形状やミガキの特徴は、内彎口縁壺と共通するものであろう。

土器群25出土遺物（1366～1368）

図示しうるものとしては、内彎口縁壺B（1366）・く字形甕B（1367）・有稜高坏B3（1368）がある。個体数は少ないが、時期的にはさほどの隔たりはなかろう。このうち、1367は、下層礫敷の871や土器群6の1062同様、頸部の屈曲が鋭く、口縁部に上端面を形成し、外面を斜め方向のハケを施す特徴的な土器である。

土器群26出土遺物（1369～1390）

広口壺D（1369・1373）・有孔の無頸鉢B（1370）・直口壺A（1371～1372）・内彎口縁壺B（1374～1376）・短頸壺（1377）・く字形甕B（1378～1380）・S字甕A（1381～1383）および、B（1384）・有稜高坏B4a（1385）及びB4b（1386）・小型高坏（1387）・小型坩B1（1388）・小型無頸鉢B2（1389）・土玉（1390）がある。

壺類を組成の中心として、なおかつ胴部に焼成後の穿孔を有するものが目立つ。若干の混入遺物も含むものの、全体的な所属時期は、雲出島貫遺跡Ⅱ期新相[5]、廻間遺跡編年の廻間Ⅰ式新段階[6]に併行する時期にほぼ相当しよう。以下、特徴的なものについてみていこう。

小形壺と内彎口縁壺を除き、大型の壺類はいずれも外面調整が基本的にハケ調整のままで、ミガキを用いないことが特徴として上げられよう。このうち1371は、直口壺に含めたが口縁上部は内彎して端部に内斜面をもつもので、形態的には広口壺とも言いえるものである。同様に1372や1373も、広口壺あるいは短頸壺との類縁性も有している。

胴部穿孔は、1372～1373、1375に認められる。いずれも、胴部最大径付近に穿孔されている。

1377は、口縁部形態や全体的な器形が丸底甕Cとの共通性をもつが、底部に外面ケズリを施してしっかりとした平底を形成しており、壺とした。

無頸鉢1370は、大形壺の体下半部を思わせる器形で、底部に焼成前の穿孔を有する。外面調整のハケや内面調整のケズリが口縁いっぱいにまで及んでいることは、この土器が本来さらに上に粘土を積み上げていく壺形土器の予定であったものが、製作途中で器形を鉢に変更したことを示していよう。

小型高坏1387は、浅い碗状の坏部に外反する脚部をもつものである。坏部と脚部の整合部が太く、脚部内面をヘラケズリし、坏部の最終調整にもナナメミガキをもつなど、かなり個性の強い精製の小型高坏である。

土器群27出土遺物（1391～1394）

図示しうるものとしては、直口壺D（1392）・小形壺（1391）・小形壺B（1393）・内彎口縁壺？（1394）がある。個体数も少なく、器種的にも偏りがある。

いずれの土器も外面にミガキ調整を施した中小の壺形土器である。このうち、完形の1393は、やや下膨れの体部から内彎口縁が付くもので、頸部の括れが小さく、太頸形状をとる。内彎口縁壺Dと形態上類似する部分もあるが、底部を突出させた平底の作りは内彎口縁壺よりもこの土器が広口壺等に系譜をもつ小形土器であることを示している。ただし、口縁形態は内彎口縁壺や有稜高坏Bと共通していることはいうまでもない。

土器群28出土遺物（1395～1398）

この土器群も数量的には少なく、短頸壺D（1395）・広口壺D（1396）・小型内彎口縁壺（1397）・有稜高坏B３（1398）があるのみである。

このうち、広口壺1396は、口縁外斜面と頸部の隆帯に刻みを施すもので、体部を波状文で加飾する。小型の内彎口縁壺である1397は、頸部径よりも口径のほうが小さい上窄まりの器形をなすが、口縁部や胴部には貝殻腹縁による刺突を施す精製の小型土器である。

土器群29出土遺物（1399～1407）

く字形甕A（1400）及びB（1399）・受口甕B（1402～1403）及びC？（1401）・脚付壺B（1404）・有稜高坏B1b（1405）及びB3a（1406）・ミニチュア土器（1407）がある。

図示しえたものがさほど多いわけではないが、全体として壺が少なく、甕が組成の中心を占める。有稜高坏にはやや時期差があり、土器群内の同時期性にはやや欠けるものとなっている。以下、特徴的なものをみてみよう。

1401は、受口甕としたが、口縁部が若干長めで、受口形状をとる短頸壺の可能性もある。

1404は、端部に刻みを施したかすかに内彎気味の長めの口縁部をもつ、脚台付の壺であるが、形態的には鉢にも近い。体上部にも刻みをもつ。いわゆる脚付土器の範疇に含まれるものといえよう。

土器群30出土遺物（1408～1431）

広口壺D（1408～1409）・直口壺C（1410）・小形壺A（1411～1412）・内彎口縁壺（1413～1414）・脚付壺A（1415）・無頸壺A（1420）・壺底部（1416）・く字形甕B１（1417）及び小型のB２（1419）・受口甕A（1421）及び台付のE（1418）・有稜高坏B３（1422・1424～1428）及びB4b（1430）及びC１（1429）・碗状高坏B（1423）・小型高坏C１（1431）がある。

甕も存在するものの、図示しうるものとしては大小の壺類や高坏類が多い。壺のなかには、胴部穿孔の認められるもの（1410）も認められる。以下、特徴的なものを個別にみていこう。

広口壺1408は、やや下膨れの器形で、外面の最終調整のミガキが横方向を基調としている。これに対し、1409は、頸部に刻目隆帯を貼付し、外面ミガキは縦方向を基調としている。

直口壺1410は、外面をハケ調整の後、口縁部にヨコナデ、体部に間隔の粗いタテミガキを施す。底部は厚めの平底を呈する。

無頸壺1420は、蓋止め用の穿孔を持たない平底のものである。

く字形甕1417は、頸部屈曲が鋭く、口縁端部に上端面を形成する外面ハケ調整の甕である。この特徴をもつ甕は、本遺跡出土品にしばしば見られるが、外面最終調整のハケが斜め下がりとなるものは珍しい。底部はやや上げ底気味となる。

有稜高坏は、全体としてまとまりのある資料である。このうち、1430については、全体に厚手の作りで、坏の有稜部の境界が不明瞭なため、有稜高坏とするよりも1423より浅めの碗状高坏を考えるべきかもしれない。

土器群31出土遺物（1432～1434）

図示しうるものは、無頸壺A１（1432）・受口甕（1433）・碗状高坏D（1434）の３点のみである。

無頸壺1432は、本遺跡で一般的に出土するものとやや異なり、底部は上げ底形態をとり、蓋止め用の穿孔も有さない。

受口壺1433は、く字形に屈曲させた口縁部の上半部外面にヨコナデを施して受口化したものである。本遺跡出土通有の受口甕に比べて受口の屈曲度合いは弱い。

土器群32出土遺物（1435～1441）

く字形甕B（1436）及びC２（1435）・S字甕B（1437）・器台？（1438）・小型高坏（1439）・小型器台B（1440～1441）がある。

器台や小型高坏など小形の精製土器の占める割合が高い。土器群自体の一括性も高いと思われ、S字甕と小型器台・く字形甕の共伴の好例である。

く字形甕1435は、口縁端部外面がヨコナデによって面を形成し、一見受口状を呈しているようにも見えるが、く字形口縁とするほうが妥当であろう。1436は、横方向に短いストロークのハケを重ね、口縁が鋭く屈曲している。

小型高坏1439は、坏部外面が横方向ミガキ、内面が斜めミガキ、脚部がタテミガキを施すもので、底径が口径を凌ぐ。

1438は、一見すると高坏であるが、坏部中央が開放されている。この部分が脱落したのかどうか断じ難いが、生きているとすれば器台ということになろう。高坏とした場合は、坏部の形態がいわゆる屈折脚高坏に典型的なものであるが、脚部が屈曲せずに外側へ丸く開いており、やはり器台としたほうが妥当性があろう。

土器群33出土遺物（1442～1444）

脚付坩（1442）・有稜高坏脚部（1443）・碗状高坏D（1444）の3点のみの土器群で、いずれも脚を有する器種が密接して出土している。

有稜高坏1443は、B3の特徴を備えている。碗状高坏は、やや浅めの坏部で、内外面にタテミガキを加えている。

土器群34出土遺物（1445～1470）

広口壺B2（1445）及びC1（1446・1448）・短頸壺D（1447）・脚付壺（1449）・直口壺D（1450～1451）・有段口縁壺（1452）・く字形甕B（1453～1454）・小型く字形甕B2（1455）・S字甕A（1456）・受口甕B3（1457）・有稜高坏B3（1458～1461）及びB4a（1462）・有稜高坏坏部（1463）・器台C（1464）・碗状高坏D（1465）・小型器台A（1466～1467）・手捏ね土器B（1468）・土玉（1469～1479）がある。壺・甕・高坏・器台など一通りの器種が揃っており、土器群としてのまとまりは良い。以下、特徴的なものを個別にみていこう。

広口壺1445は、頸部から外反しながら外側へ開くB2タイプであるが、広がり具合はさほど大きくない。むしろ、かすかではあるが途中の屈曲具合はC1の1446や1448とも共通している。

脚付壺1449は、下膨れの胴部に外開きの直口口縁気味の壺が載るもので、脚部はしっかりと外反している。

有段口縁壺1452は、いわゆる二重口縁壺で、形態的にはA2に類似して、口縁端部及び1段目繋ぎ部分に羽状及びノの字キザミを施すものである。内外ともにハケを残す、あまり精製度の高くない大型品である。

く字形甕1454は、口縁部に上端面を形成し、体部の最終のハケは短いヨコハケを基調とするもので、頸部内面の屈曲が鋭い。

S字甕1456は、S字甕特有の外面く字状のハケが未確立で、全体に間隔の短い右下がりのハケを基調としている。

小型器台1466～1467は、坏部がやや碗状になりつつあるが、明瞭ではなく、口縁部に外斜面を形成することからも、A類とした。

土器群35出土遺物（1471～1476）

広口壺D（1471）・短頸壺D（1473）・受口甕B2（1472）・有稜高坏B1b（1474）及びB2a（1475）・器台B2（1476）がある。

出土状況的には必ずしも確実に一括と言い得るものではないが、高坏・器台とも、長脚の内彎タイプのものである。以下、個別にみておこう。

広口壺1471は、口縁部が直線的に外側へ開いており、形態的には直口壺的であるが、口縁部の厚みや口縁端部に外斜面をもつなどの製作技術上の系譜から広口壺に措定した。

短頸壺1473は、球形の体部とストロークの短い右下がりの外面ハケが特徴的な土器である。形状的には平底の甕のようでもあるが、体部からの積み上げが壺の作りと共通することから壺とした。体下部に焼成後の穿孔を有する。

有稜高坏1475は、脚部の形態からすると坏部も内彎するのが通例であるが、本例は坏部が外反し、端部に外斜面をもつ。イレギュラー的な土器であるが時期は脚部の特徴が示していよう。

器台1476は、脚部の特徴は高坏B1と共通するもので、微かに内彎気味の直線的な受部が付く。

土器群36出土遺物（1477～1495）

広口壺B2（1478）及びC1（1477）及びD（1479～1480・1482）・直口壺A（1481）・壺体部（1483）・内彎口縁壺A（1485）及びB（1484）及び体部（1486）・小型坩（1487）・有稜高坏B3（1488～1489）・碗状高坏C（1490）・小型器台B1（1491）・S字甕A（1492）・小型脚付の受口甕（1493）・底部有孔の有頸鉢B（1494）・小型有頸鉢A（1495）がある。

壺のバリエーションが豊富なことと、その壺に胴部穿孔が施されたものが複数（1477・1483・1484）含まれることが特徴である。以下、代表的なものを個別に見ていくこととしよう。

広口壺1477は、口縁端部及び内側に羽状刺突文、

体上部には直線文と波状文を交互に施文する装飾豊かな土器で、外面調整はヨコミガキを基調とする。口縁部は一端立直気味に立ち上がった後に端部に向かって厚みを増しながら外側へ開き、やや下膨れの体部や上底と相まって見た目に重厚感がある。胴部に焼成後の穿孔を有する。1478も、口縁内面に羽状刺突をもち、体上部は直線文と列点文を交互に配する。

1479は、広口の短頸壺的な土器で、口縁部を上下に拡張して外面に羽状刺突文を施す。この形態は、本遺跡出土のもののなかでは珍しい。1480は土器群35の1471と同様の直口壺的な広口壺であるが、1480よりは多少装飾性があり、口縁外斜面を形成してキザミ列を入れる。

1486は、口縁部を欠損するが、体上部に二枚貝の扇状刺突が施されていることから、内彎口縁壺もしくはその影響のある土器ということができよう。

1487は、上げ底気味の底部をもつ小型坩である。内彎口縁であることや、体上部に直線文と刺突文を組み合わせて加飾することなどは、小型坩というより内彎口縁壺や広口壺等を小型化したものとの類縁性が窺える。

S字甕1492は、体部外面のく字形状のハケが未確立なもので、内面もハケ調整する。

有頸鉢1494は、外面調整はさほど口縁部と体部の区別がされているようには見えないが、内面は口縁のみ斜めハケが施され、口縁部と細部の境界を明瞭に区別している。

土器群37出土遺物（1496～1498）

短頸壺B（1496）・台付甕（1497）・脚付鉢（1498）の3点のみを図示した。以下、個別に見ていこう。

1496は、体下部に焼成後の穿孔をもつもので、体部中央をヨコミガキしている。

1497は、台付の甕であるが、体部の横方向のストロークの短いヨコハケとの組み合わせは、土器群34の1454等と共通することから、く字形口縁になる可能性が高い。

1498は、下部を欠損するが、接合痕から脚台が付きそうな土器である。内外ともタテミガキ調整の有口の鉢が上に載る。

土器群38出土遺物（1499～1512・4825～4826）

広口壺B2（1499）・無頸壺A2（1500）・有孔鉢？（1501）・直口壺D（1502）・く字形甕B（1503）・受口甕（1504～1507）・S字甕A（1508～1509）・碗状高坏（1510）・小型高坏C（1511）・小型無頸鉢B2（1512）・滑石製臼玉（4825～4826）がある。

全体として、やや壺甕類が目立つ土器群である。

広口壺1499は、口縁外面を拡張して擬凹線を施してその上面に3本1単位の棒状浮文を貼付する。これは、複合口縁壺ではないものの、いわゆるパレス壺に類縁性のあるものとして捉えられよう。

1501は、底部に小孔を4個穿ったもので、紡錘形を呈するものの、一応、鉢の可能性を考えた。ただし、甑として利用されたものであろう。

1500は、無頸壺であるが、やや口縁部が長めで、蓋止め用の穿孔を有しない。器形的には下膨れで、安定感がある器形をなす。

受口甕のうち、1506～1507はE類の特徴をもつ。これに対し、1504～1505は、口縁形態に若干の差はあるものの、両者ともにく字形口縁の端部を内外からのヨコナデによって上部につまみ上げたような形態をとり、C類と分類したものに類似する。ただし1504は、外側へつまみ上げており、端部に外斜面を形成する形状を呈し、底部には脚台をもつ。なお、この脚台は、S字甕の脚台に類似する。

1508は、S字甕であるが、口縁部は分厚く、口縁部形成の技術がやや稚拙な印象を受ける。

1510は、有稜高坏C1の脚部と形態上類似しているが、坏部は碗状を呈している。

滑石製臼玉4825～4826は、ともに断面中央が菱形に膨らんで稜をもつタイプの小さな臼玉であるが、2点のみであり、混入の可能性も捨てきれない。

土器群39出土遺物（1513～1527）

広口壺B2（1513）・短頸壺（1515）・内彎口縁壺（1514）・壺底部（1516）・受口甕C（1517～1518）・S字甕A（1519）及びB（1520）・く字形甕B（1521）・甕脚部（1522）・手焙形土器C（1523）・小型高坏D（1524）・小型器台B2（1525）・小型無頸鉢B2（1526）・有孔土器（1527）がある。

広口壺1513は、厚手の作りで、口縁部は比較的短い短頸壺的な小形の広口壺である。

内彎口縁壺1514は、頸部に刻目隆帯を貼付した大形品で、外面をハケ調整する。内彎というてんを除

けば、多分に直口壺的な要素も持つものであろう。

受口甕は、いずれも装飾性に乏しく、受口自体も口縁端部付近を微かに折り返す程度であるが、1517についてはその部分に刻み列があって、本例が受口甕の系列に含まれることを端的に示している。

手焙形土器1523は、覆部を欠損するが、口縁部の作りがS字甕の特徴に類似する、いわゆるS字系手焙形土器である。

小型無頸鉢1526は、器形的には無頸であるが、調整をみると口縁意識があり、調整種類が異なる。

1527は、器種の帰属は難しいが、体上部に2か所の焼成前穿孔をもつ。後述の3977のような多孔のものになるのであろうか。

土器群40出土遺物（1528～1530）

広口壺B2（1529）及びD（1528）・有稜高坏B4（1530）がある。以下、個別に見ておこう。

広口壺1528は、3個一単位の円形浮文を口縁部及び胴部に施すもので、上下に僅かに拡張させた口縁部には列点文、体上部に直線文と列点文を交互に配し、頸部には刻目隆帯を貼付する。1529は、口縁端部に刻みを施すだけの加飾の少ない土器であるが、口縁部・体部とも薄手に仕上げられ、体部のヨコミガキも丁寧である。

有稜高坏1530は、口縁端部に外斜面を形成するなど有稜高坏としては新しい要素をもつが、脚部はやや古い様相を残す。

土器群41出土遺物（1531～1534）

内彎口縁壺A（1531）・S字甕B（1532）・小型高坏脚部（1533）・手捏ね土器B（1534）がある。量的には少ないが、小形品や穿孔土器もある。

このうち、1531は、口径がやや減じてはいるものの、内彎口縁壺Aの系譜に連なる土器であろう。底部は厚い平底である。内彎口縁壺特有の優美さに欠け、製作技術がやや稚拙か、形式としての盛期を過ぎた状況を示すものとも捉えられよう。なお、体下部に焼成後の穿孔を有する。

土器群42出土遺物（1535～1538）

短頸壺（1535）・S字甕B（1536～1537）・小型坩E1（1538）がある。このうち1538は、やや上面からの出土である。

1535は、粗製の作りで、器形的にも甕としてもよいものであるが、土器群26の1377等と同様、壺として扱った。ただし、ナデや板ナデを基調とした全体的な調整は丸底甕Dと共通する。

S字甕のうち1537は、小型品である。

小型坩1538は、外面調整として口縁部縦方向、体部横方向のミガキを施し、内面はいずれもヨコミガキを基調とする。

土器群43出土遺物（1539～1554）

広口壺B2（1545）及びD（1544）・直口壺A（1546）・内彎口縁壺？（1547）・S字甕C（1539～1541）・小型く字形甕B2（1542）・小型のく字形甕（1548）・有稜高坏B4a（1549）及びC1（1550）・屈折脚高坏A（1543）・小型無頸鉢D（1551）・小型器台B1（1552）及びB2（1553）・ミニチュア土器I（1554）がある。

出土量はさほど多くはないが、一応基本的な器種は揃っている。以下、代表的なものをみていこう。

広口壺B2とした1545は、口縁部の長さがかなり短く、加飾もない。短頸壺的な土器といえようか。同様に、1544も、加飾性が乏しく、直口壺との共通性をもつ。

直口壺1546は、口縁端部を肥厚させて上端面をもっており、いわゆる布留式系甕の口縁部形成手法と同じである。体下部に焼成後の穿孔を有する。

台付く字形甕1542は、体部の粘土積み上げ痕を残した粗製の作りで、体部外面をハケ調整する。口縁部の開き具合は鈍く直口口縁的で、体下半部は下膨れの形状をとる。

屈折脚高坏1543は、薄手の屈折脚で、エンタシス状の脚柱中央やや下に透孔をもつことに特徴がある。タテミガキ後、疎らではあるが細いヨコミガキを脚柱部に施している。

小型無頸鉢1551は、台付甕の成形を体下部で止めて整形したような土器で、外面をハケ調整する。

ミニチュア土器1554は、口縁部形態や体上部のハケ施文などS字甕Bのミニチュアと捉えられ、S字甕Cである1539～1541に比べて古相を示す。

土器群44（1555～1570・4827～4828）

円窓付土器（1555）・く字形甕B（1556）・小型のく字形甕B2（1557）・小型受口甕（1558）・脚付の小型有頸鉢（1559～1560）・S字系複合口縁甕（1561

～1562）・S字甕C（1563～1566）・小型高坏（1567～1568、うち1567はC２）・手捏ね土器B（1570）及びC（1569）・滑石製臼玉（4827～4828）がある。

小型高坏なども少数含むものの、全体に占める甕の比率が高く、小型甕や小型鉢、手捏ね土器等の小形品も目立つ。特に甕や鉢は、台付のものが主体を占める。以下、代表的なものをみていこう。

円窓付土器1555は、胴部の中央より若干上部に焼成前の横長楕円形の穿孔を有するもので、器形的には寸胴なく字形の甕もしくは鉢形態をとる。外面調整はケズリによっており、口縁部が微かに内彎状を呈している。

く字形甕1556は、肩部が非常に張った特徴的な器形をもち、体部はストロークの短いヨコハケを基調としている。

図示した小形の甕・鉢は４点中３点が脚台を有するが、1558は体下部欠損のため脚台の有無は不明である。この1558は、口縁形態が受口甕Eの特徴をもっており、頸部に刺突を施している。

脚台付のく字形甕の小型品である1557は、口縁部外面にヨコナデによって面を形成している。欠損状況より判断する限り、脚台はかなり大型のものが付きそうである。

埋土中より出土した滑石製臼玉4827～4828は、２点だけのことであり、混入の可能性もある。

土器群45出土遺物（1571～1600）

土器には、広口壺A２（1571）及びB２（1572）・有段口縁壺A２（1573）・短頸壺B（1574）・小型の短頸受口壺（1575）・小形壺A（1579）及びB（1576）及びC（1578・1580）及びD（1577）・内彎口縁壺C（1581）・小型く字形甕（1582）・受口甕B１（1583）及びB２（1584）・S字甕C（1585）・有稜高坏A１（1594）・有稜高坏B（1586）及びC（1587～1588）・グラス形高坏C（1592）・小型高坏C（1593）・器台C（1589～1591）・小型器台A（1596）及びB１（1595）・底部有孔の無頸鉢B（1597）・小型無頸鉢A１（1598）・線刻入りミニチュア土器（1599）・土玉（1600）がある。

また、この土器群と混在するかたちで木製品も出土しており、曲柄鍬（木67・木69・木84）・ナスビ形曲柄平鍬（木86・木88）・捏台（木228）・木錘（木328）・椅子（木803・木805）・弓（木834）・棒軸形木製品（木973）・竪穴住居用柱（木1090）・壁木舞（木1320）垂木（木1355）・梯子（木1404）・丸杭（木1509）・有頭棒（木1590）・棒状具（木1624）・板状具（木1709・木1722）がある。

土器を見る限り、大きく弥生時代後期に属するものと、古墳時代前期に属するものの２時期があり、一括性には乏しい。前者（弥生後期）に属するものとして、1571・1574～1580・1583～1584・1592・1594・1599がある。1597・1598・1600はどちらとも言いがたいが、残りのものは後者（古墳前期）に属するであろう。

弥生時代後期は大小の壺類が多く、古墳時代前期は完形の高坏や器台・小型器台といった供膳形態の土器が多い。そういうてんでは、それぞれの時期毎の土器には、ある程度のまとまりを認めてもいいのかもしれない。つまり、土器群45は、時期の異なったふたつの土器群の混在状況を中心としているといえようか。ただし、その分布範囲は広く、遺物相互の間隔は粗く、一括性には乏しいものと思われる。

以下、特徴的なものを個別に見ておこう。

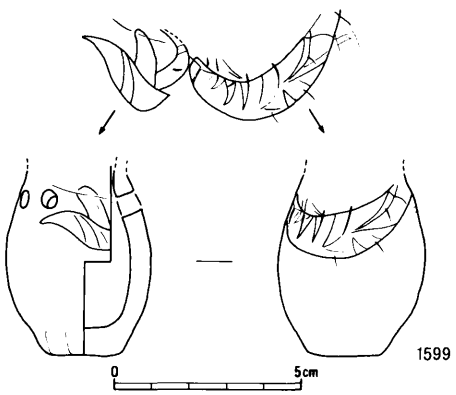
受口甕1584は、最大径が胴部中央付近にある壺的な器形をもつもので、胴部文様帯より下部をヘラケズリする。

有稜高坏1586は、坏部と脚部を同一個体として掲載しているが、坏部と脚部は別個体になく可能性が高い。脚部のほうが古い様相をもつ。

同じく有稜高坏1587と1588は、脚部形態などから1588のほうが新しい様相をもつ。このうち1588は、外面全域に縦ヘラミガキを施した後、坏部はさらに横ミガキ後に部分的に集約性のある縦ミガキを、脚部には脚裾部に横ミガキを施し、坏部内面には粗い横ミガキの後に間隔の粗い細い縦ミガキを施すなど横ミガキと縦ミガキを駆使し、ミガキによる高い文様効果の表出に努めている。

1589～1591は、いずれも受部が二段に屈曲する器台Cで、同一土器群での３点集中しての出土は注目できる。

有孔をもつミニチュア土器1599は、外面に線刻絵画をもつことは注目できる。三日月形の沈線内に斜沈線を充填して上部に羽状のものを線刻したもの



第121図　絵画土器（1599）のモチーフ（１：２）

（左）と、同じく三日月状の沈線枠内に鋸歯文を充填したもの（右）が連結した線刻である。ふたつのものを連続して描いたとみるか、そのふたつでひとつのものを表現しているとみるか二通りの見方ができるが、いずれをとるにせよ、基本的には龍をモチーフにした線刻とみてよかろう。なお、頸部くびれの下に有孔部が２個あることから、形状的には土笛の可能性がある。

土器群46出土遺物（1601～1608）

広口壺Ｂ２（1601～1602）・壺胴部（1603）・壺の底部（1604）・Ｓ字甕Ｂ（1605）・丸底甕Ｄ（1606）・屈折脚高坏（1607）・小型高坏Ｂ（1608）がある。

大型の加飾壺を複数含む土器群である。

広口壺1601と1603は、いずれも赤彩を伴う加飾壺で、口縁部を逆ハ形に拡張して綾杉文を施す。このうち1601は体上部には直線文と波状文、それに刺突文を組み合わせた文様帯を形成する。広口壺形態をとりながらも、いわゆるパレス壺との類縁性を有する土器ということができよう。

1603も、口縁部を欠損するものの、体上部文様は1601と共通しており、口縁の細部形態は不明ながら加飾広口壺になるものと思われる。

同様に1604も、体下部から底部にかけての形状や法量、ミガキによる外面調整や内面をヘラケズリすることなど1601と同様の特徴をもっており、同じく加飾の広口壺である可能性が高い。

丸底甕1606は、体部内外面をハケ調整した粗製の下膨れの有頸鉢的な甕で、薄い丸底に粘土板を貼付して厚化し、底部としている。

小型高坏1608は、深い碗状の坏部をもつ。

土器群47出土遺物（1609～1611）

直口壺（1609）・く字形甕（1610）・Ｓ字甕Ｃ（1611）がある。点数も少ないため、個別に見ておく。

1609は、甕的な器形であるが、口縁部がやや長く直線的に外方へ伸び上がる形態のため、直口壺として扱った。

1610は、底部が平底のためく字形甕としたが、口縁部の内彎形状や体部外面のハケ・内面のヘラケズリといった特徴はいわゆる近畿系の布留式甕（丸底甕）と共通する。なおかつ、底部の作出形状や底部付近の外面のヘラケズリ等の特徴は短頸壺とした土器群26の1377や土器群42の1535とも共通する。こうしたことから、1610の位置づけには難しいてんがあるが、一応、形態的には甕として問題なかろう。逆にいうと、短頸壺とした前述の1377や1535も甕的な要素も強くもつということであろう。

Ｓ字甕1611は、内面をハケ調整する。

土器群48出土遺物（1612～1618）

屈折脚高坏Ｂ１（1612）・同Ｂ２（1613）・同Ｃ（1614～1615）・同Ｇ（1616）・丸底甕Ａ（1617）・土玉（1618）がある。

土器量はさほど多くはないが、高坏が多いことに特徴がある。その高坏は、形態的に上述したようにいくつかの形態に分かれるが、それぞれの個性も見られる。

1612は、脚柱部が太く、かつ脚柱の上下をヨコナデするため、一見、脚柱がエンタシス状に膨らむ形状をとる。

1615は、脚裾端部がヨコナデによって外斜面を形成しており、初期須恵器高坏の端部処理に似る。

1616は、口縁端部の面が下内向きであることに特徴がある。脚柱部内面はヘラケズリしている。

土器群49出土遺物（1619～1628）

小型の二重（有段）口縁壺（1619）・小型坩Ａ２（1620）・屈折脚高坏の坏部（1622）及び同Ｂ２（1621）・同Ｃ（1623～1625）・Ｓ字甕Ｄ（1626～1627）・土玉（1628）がある。

やや高坏が多いが、甕や壺もあり、土器群としての一括性もある。

小型の二重口縁壺1619は、１次口縁端部の内外と２次口縁端部に刻みを有し、体部はケズリ後ラフな

縦ミガキを加えるもので、底部は上げ底気味の平底となる。

S字甕は、1627が受口口縁的な様相を強く残しているのに対し、1626は口縁部も厚く、体部のハケも粗くなり、型式学的には新しい様相がみられる。

土器群50出土遺物（1629～1636・4829～4905）

小型直口壺C（1629・1631）・小型坩B２（1630）・屈折脚高坏B１（1632～1635）及びB２（1636）臼玉（4829～4905）がある。

高坏と小型丸底系土器のみで構成される非常にまとまりのある一群で、一括性も高い。

小型直口壺1629は、胴部中央が張った形態で、その部分に焼成前の穿孔を有する。

小型直口壺1631は、底部がかなり偏平となっており、平底化したものといえる。これは、小型坩1630も同様である。

以上の３点は、口縁部の直線傾向の差異から小型坩と小型直口壺に分別しているものの、法量や調整での類似点が多い。

高坏は、1635が坏部底面の平底化傾向など整った作りをしている個体で、他のものは概して粗雑化が目立つものである。

土器群51出土遺物（1637～1645）

屈折脚高坏B２(1637～1638)・小型坩A２（1639・1641）・小型直口壺C（1640）・小型有頸鉢（1642）・く字形甕E（1643・1645）とB（1644）がある。

１点のみ大形の甕（1645）が存在するものの、高坏や小型丸底系の土器、それに小形の甕といった小形品を中心に構成されたまとまりある一群である。

小型鉢1642は、S字甕Dと共通した口縁部形態をもつもので、底部は平底である。器高が低い割には底が大きく、安定感がある。

く字形甕のうち、1643と1645は脚台や体部ハケの特徴がS字甕と共通する。さらに、大型品である1645は、口縁内面にも強いヨコナデを施すなどS字甕との共通性が大きい。

土器群52出土遺物（1646～1654・4906～4915）

土師器として丸底甕C（1646～1647）・S字甕E（1648）・小型有頸鉢C（1649）・屈折脚高坏H（1650）及び脚部（1651）・手捏ね土器D（1652）・須恵器高坏（1653）・韓式系土器把手付鍋（1654）・滑石製臼玉（4906～4915）がある。

焼成の種類はともかく、甕類と高坏を中心とした土器群で、韓式系土器など興味深い資料を含む。

丸底甕1646は、やや長胴で、外面をハケ、内面をナデ調整し、口縁部は外反してヨコナデによる外斜面を形成する。1647は、1646に比べて体部が球形に近く、口縁部の外反がより強い。

屈折脚高坏1650は、脚上に碗状の坏を載せるもので、本例の坏はやや浅めである。

須恵器高坏1653は、脚裾と脚柱の間にヨコナデによって盛り上がらせた隆帯を有する、いわゆる初期須恵器である。脚部内面はユビオサエの痕跡が著しく、本例が手延べによる成形にも拠っていることを示している。

韓式系土器1654は、片口を有する把手付鍋で、外面に格子タタキを施し、把手位置の横の延長線上に一条の沈線を巡らしている。把手は、断面円形で鍋本体の壁面に挿入されており、下方から円形の刺突が入っている。内面は、ナデ・オサエによる成形・調整で、特に底部付近はユビオサエの痕跡が顕著に残っている。

土器群53武器形集中部出土遺物

（1655～1662・4554・4574・4604～4605・4916～4970）

刀形と鏃形を中心とした木製武器形が集中して出土した部分から出土した土器・木器・石製品の一群である。

土器には、屈折脚高坏F（1657）及びH（1655～1656・1658）・坏A（1659）・丸底甕D（1660）・須恵器片（1661）・有蓋高坏蓋（1662）がある。

木器には、刀形（木863 ～木885）・鏃形（木913～木928）があり、あと剣形（木898～木902）もこれに伴う可能性が高い。

石製品には、勾玉（4554）・管玉（4604～4605）・滑石製の双孔円板（4574）・臼玉53個（4916～4968）・ガラス小玉２個（4969～4970）がある。

土器は主に正立状態で出土した高坏を中心とした土器群である。1661と1662については、小破片であったり、出土位置が若干離れていたりするなど、土師器の一括性に比べるとやや落ちる。

土師器坏1659は、半球形の深めの坏で、口縁端部内面にヨコナデによる面をもつ。

丸底甕1660は、口縁端部に上向きの外斜面を形成し、体部内面はヘラケズリしている。

須恵器片1661は、小片のため器種の特定は難しいが、外面タタキは縄蓆文タタキである。このタタキは、本遺跡では韓式系土器に微量ながら存在しており、本片もそれら焼成は異なるものの、関連の深いものであろう。

須恵器有蓋高坏蓋は、ツマミ部分を欠損するが、全体の形状が丸みを帯びていてやや新しい様相をもつものの、天井部に列点刺突列が存在するなどいわゆる初期須恵器の特徴が顕著である。

臼玉は、いずれも小振りであるが、断面中央が膨らんで稜線をもつタイプと、若干膨らむが明瞭な稜線を持たないもの、それに断面が膨らまず直線的なタイプが混在する。また、切り方が雑で、断面形が長方形ではなく横長台形状を呈するものも多い。

土器群54出土遺物（1663～1686・4971～4976）

土器には、坏A（1663～1665）・屈折脚高坏H（1666～1680）・同D（1681）・同B2（1683～1684）・同坏部（1682）・同脚部（1685）・甑（1686）がある。

また、土器群に伴って、横櫛（木986）・小型の横槌（木223）や、埋土フルイ掛けから滑石製臼玉6個（4971～4976）が出土している。

土器は、高坏と坏で構成された極めて一括性の高い一群である。

主体を占める土器は、碗状の坏を載せる高坏である。器高が12cm前後となるなど全体に非常に斉一性の高い一群であるが、1677は脚柱下部に貫通しない円形孔をもつ。

これに対し、1681～1685は形状的に異なるタイプの高坏である。このうち1683は、坏部全面にヨコナデ痕跡が顕著である。おそらく、土器があまり乾かない水分の多い状態で最終調整のヨコナデを施したものと思われる。

坏は、内斜面をもつ1663、やや外方へ摘まみ出しつつ内斜面をもつ1664、端部を丸く収める1665というように、口縁端部の処理に若干の差がある。

なお、この土器群から出土した滑石製臼玉は6個に過ぎないが、いずれも断面中央に稜をもつタイプの小振りの臼玉である。

土器群55出土遺物（1687～1713・4977～5097）

土器には、土師器小型直口壺A（1687～1688）・小型丸底甕（1689）・小型有頸鉢C（1690）・底部有孔の無頸鉢B（1691）・坏A（1692～1693）及びB（1694）・屈折脚高坏H（1695～1697）・小型器台B（1698）・丸底甕A（1699）・S字甕E（1700～1701）・手捏ね土器B（1702）及びC（1703）・韓式系土器甑（1704）及び把手（1705～1706）・須恵器坏身（1707）・無蓋高坏（1708）・甕（1709～1710）・器台（1711）・碗（1712）・小形壺もしくは鉢（1713）がある。

また、同じ部分から出土した木製品として、竪杵（木188）・出下駄？（木251）・不明部材（木1758）等がある。

さらに、この部分の埋土フルイ掛けの結果、滑石製臼玉121個（4977～5097）が出土した。

一部異なる時期の可能性のあるものも存在するものの、ほぼ古墳時代中期の所産であろう。ただし、出土状況や実際の遺物を見ると、完全な一括資料とは言いがたく、何回かの投棄の集積によるものと思われる。土師器小型器台（1698）や底部有孔無頸鉢（1691）は、古い時期のものの混入であろう。

1687～1703は土師器である。直口壺のうち、1687は体部内面をヘラケズリしている。

小型有頸鉢1690は体部にミガキを残すもので、古い時期のものが混入している可能性がある。

丸底甕1699は、いわゆる布留形甕である。不明瞭ではあるが体部上面（肩部）に刺突列を有し、内面をヘラケズリする。

屈折脚高坏である1695は、脚部に円孔を有するものである。通常、このタイプは無透か円形刺突を有するのみであるが、完全に開いたものは珍しい。

S字甕のうち、1701は口縁部がく字形口縁と折衷した変容タイプの可能性がある。

1704～1706は韓式系土器である。甑1704は、格子タタキ後、頸部に沈線を有する。

1707～1713は須恵器で、初期須恵器を含む。このうち、坏身1707は、底部をロクロに拠らず手持ちヘラケズリしている。器台1711は、受部外面に組紐文と波状文を施したもので、光沢のある焼成仕上がりになっている。口縁部を外側へ屈折させているところに特徴がある。碗1712は、胴部に2段の繊細な波状

文をもち、段で体部と口縁部を画している。

滑石製臼玉は、小振りなものが多く、なかには直径3㎜程度の極小品（5083等）も存在する。断面の形をみると、中央に稜線をもつタイプと持たないが膨らむタイプ、それに直線的なタイプが入り交じった状態である。

土器群56出土遺物（1714～1774）

土師器には、坏A（1714～1726）・屈折脚高坏H（1727～1728）及び高坏脚部（1729～1731）・壺底部（1732）及び胴部（1740）・S字甕E（1733～1736）及び脚部（1737～1738）・小型直口壺B（1739）・丸底甕体部（1741～1742）がある。須恵器には、有蓋高坏蓋（1743～1747）及び身（1748～1753）・坏蓋（1754～1764）及び坏身（1765～1770）・壺もしくは甕（1771～1774）がある。

全体に、須恵器と土師器の坏や高坏といった供膳具形態の土器の出土が目立つ。

土師器坏は、いずれも底部をケズリ・胴部をユビオサエ・口縁部をヨコナデして内斜面をもつ非常に斉一性の高いものであるが、1722は内面にハケを、1723も外面に粗いミガキ状の痕跡を残す。

高坏は、脚部のみのものも含めて基本的には坏を載せた碗状高坏であるが、脚柱部内面をヘラケズリする1730は坏部が別の形態の可能性が高い。

丸底甕1741～1742は、いずれも口縁部を欠損するが、おそらく外反口縁をもつものであろう。

須恵器高坏は、いずれも短脚1段透かしである。坏や坏蓋の形態からも、若干の時間幅はもつが全体として5世紀末から6世紀前葉頃の所産になるものであろう。このうち、有蓋高坏1749の脚部にはカキメがあり、1753は脚部の透かしが円形である。また坏蓋1754は、内面にヘラ状工具を渦巻き状に押圧した痕跡が明瞭に観察できる。

壺甕類のうち1771～1773は、口縁部がかなり肥厚した形態をとるが、1774は外面に面をもつだけのやや古い形態を残す。

土器群57出土遺物（1775～1781）

出土遺物はいずれも奈良時代の須恵器で、坏（1775～1776）・高坏脚部（1777）・長頸壺（1778～1780）・甕（1781）がある。

坏身は、1775は置いた時の安定性にやや欠けると、1776は端部をつまみ上げ処理していることなど、図版上では身として扱ったが、蓋になる可能性も高い。

長頸壺は、大小があり、やや膨らみをもった肩部から口頸部が外側へ彎曲しながら延びる。脚部のみを残す1780が最も大型品になる可能性がある。

甕1781は、外面に縦方向の平行タタキをもつ平底の甕で、内面に同心円当て具痕跡を有する。

3　ＳＤ１埋土出土遺物

ここでは、付設施設出土の遺物や土器群として認識した遺物以外のものを扱う。

埋土出土遺物は、一応層序毎の取り上げを行っている。層序と出土遺物の時期は、下層が古く上層が概ね新しいものが中心というだいたいの対応関係はあるものの、大溝という性格上、土器分析のレベルに対応するほどは層序に信頼性はない。しかしながら、部分的にしか把握することができなかったものの、ＳＤ１の最も下部で出土した遺物（Ⅲｂ層最下層もしくはⅣ層として取り上げたもの）については若干の時間幅はもつが概ね弥生時代後期の土器として認識できる。そこで、この遺物のみは「ＳＤ１最下層出土遺物」として弥生時代後期から古墳時代の項目の最初に提示した（ＳＤ１最下層出土遺物でも縄文晩期のものは除く）。

埋土出土遺物の大半を占めるそれ以外の遺物は、出土遺物の年代によって縄文時代晩期・弥生時代後期から古墳時代・古代・中世と時代を大別したうえで、層序を関係なく大別遺物時期毎のレイアウトを行った。これら遺物の出土層序等の情報は、観察表に拠られたい。

なお、埋土出土遺物は、調査過程で土器群としてはまとめきれなかった遺物であるが、実際には何らかの単位でＳＤ１に投棄などされた遺物が多いとみられる。出土状況図には、土器群以外にも図化している遺物が相当数あり、合わせて参照されたい。

ａ　縄文晩期土器と石器（1782～1811）

縄文晩期の突帯文土器と石器類があるが、石器類については時期比定が難しい。出土層位には若干のばらつきがあるが、全体としてＳＤ１でも下部からの出土例が多い。

縄文土器（1782～1793）

縄文晩期の突帯文深鉢である。1782～1783が口縁部二条突帯、1784～1792は口縁部一段突帯、1793は肩部に突帯をもつ胴部破片である。突帯は、素文突帯のものと刻目突帯があり、刻目突帯はさらにヘラ状工具による刻みのものと、櫛もしくは二枚貝による刻みのものとがある。

打製石鏃（1794～1800）

1796～1798がチャート製、残りがサヌカイト製である。大形の1794や凸基式の1799～1800は弥生時代の可能性がある。また、1795は、側縁が鋸歯状になっており、より殺傷力が強い。

二次加工有剥片（1801～1804）

全てチャート製である。明らかな人工加工を有するが、器種を限定できないものを一括した。スクレーパーもしくはピエスの類であろう。ただし、1801や1804は石鏃等の未製品の可能性もある。

石槍（1805）

サヌカイト製である。基部は欠損している。完全な左右対象形ではない。

扁平片刃石斧（1806～1807）

共に凝灰岩系の石材を使用している。1806は、基部が欠損している。弥生時代の所産であろう。

打製石斧（1808～1809）

紡錘形の1808と、しゃもじ形の1809がある。縄文晩期もしくは弥生前期のものであろう。

太型蛤刃石斧（1810）

刃部を含む大半が欠損して基部だけが残る。

打ち欠き石錘（1811）

偏平・楕円形の石の長側縁両端を打ち欠いたものである。

b　弥生時代後期～古墳時代の土器

①　Ⅲb層最下部出土遺物（1812～1843）

ＳＤ１埋土出土土器のなかでも、ＳＤ１の最下層として現場段階で認識できた遺物を一括する。ただし、出土位置は広範囲にわたっており、全てが同一時期の所産ではないし、実際の最下層の遺物の全てを網羅できているわけではない。

1812～1813は、ミニチュア土器である。1813はグラス形高坏のミニチュア品、1812も法量は異なるが同例になるか、脚付土器のミニチュア品であろう。

1814～1826は、壺である。広口壺（1814～1817）・短頸壺（1819～1821・1824～1826）・長頸壺（1823）などがある。1820は、頸部のくびれが太い甕的な短頸壺で、体部内面と外面下半部をヘラケズリする。また、1826は口縁部を内側に折り返し、受口状を呈する。ただし、いわゆる受口壺というよりは、短頸壺というべきであろう。

甕は、受口甕とく字形甕があるが、く字形甕で図示しえたのは小型品ばかりである。受口甕のうち、残りの良い1830は、受口甕Ｂで、体部文様は上から直線文－列点文－直線文－列点文－直線文ときて最下段を波状文で受ける。1831は、有頸鉢Ｃである。

高坏は、形態的には有稜高坏Ａ３をとるが、受部外面に直線文や波状文を入れて加飾を加えた高坏である。

1838は、小型丸底壺タイプの小型坩に脚をもった脚付坩である。小型坩の体部が壺を指向しており、脚付坩でも新しい時期の所産であろう。

②　弥生後期土器と古墳時代土師器

ごく一部に中期的な様相を残すものもあるが、あくまでその主体は弥生後期から古墳時代にあり、これらを一括する。出土量が膨大なため、特徴的なものを中心に概観する。

広口壺（ただし、一部に直口壺・短頸壺的なものを含む、1844～1925）

弥生時代後期以降のものと判断しているが、なかには弥生時代中期に遡るものもないとはいえない。

1844～1864は、垂下口縁をもつ広口壺Ａである。文様による加飾を施すものと無装飾のものがある。加飾系のものは、口縁外端面に櫛状工具による羽状列点文もしくは斜状列点文を施すもの、次いで凹線文を施すものが多く、他に円形浮文を貼付するものや竹管状刺突をもつもの、波状文をもつものなどがある。櫛状具刺突系や凹線系のものは、口縁端部内面にも列点文や羽状刺突文の加飾を施し、体上部にも文様帯をもつことを基本とした文字通りの加飾壺といえよう。これに対して、口縁部無装飾の1845などは体部も無加飾となる。

1865～1881は、頸部から一旦立直気味に立ち上がった後に外側へ外反する広口壺Ｃを中心にレイアウトした。ただし、頸部から外反して広がる広口壺Ｂと

の分別は流動的なところもあり、1875や1880は広口壺Bとみてもよい。こうした一旦立ち上がるタイプの広口壺は、口頸部が屈曲する器形の共通性からパレス壺との類縁性も考慮されるが、文様的には1870内面の羽状刺突列などを除き、規格化されたパレス壺の文様とは異なり、直線文や波状文、頸部刻目突帯など当地域の広口壺に通有の文様を組み合わせたパターンを有するものが中心である。

特徴的なものを個別にみておくと、1865は、胴部に三日月形の線刻を有する線刻土器である。口縁部は無装飾で丸く収められており、口縁部の開き具合から広口壺に入れているものの短頸壺Bとの共通性も強い。なお、線刻は、龍を表現したものが崩れたものの可能性がある。

1876～1877は、器形的にはパレス壺を含む複合口縁壺の要素も強いが、いわゆるパレス文様とは異なり、口縁部に連続斜格子文を繋いでいく。

1878は、体上部に簾状文、その下位に刺突文で囲まれた波状文を施すもので、類例に乏しい。口縁部は無加飾で、蓋留め用の穿孔を有する。

1882～1912は、口縁部の開き具合や長さ、加飾の有無や種類などに差があるが、頸部から口縁部が外反して広がる広口壺Bを中心にレイアウトした（ただし、1898は広口壺D、1899や1908は広口壺F）。口縁端部外面には羽状列点文や斜状列点文を施すものが多いことは広口壺A・Cなどとも共通する。体部装飾は、直線文と波状文の組み合わせによるものが多いが、扇状文や山形文なども認められる。このうち、1883･1887･1889～1892･1894～1895･1911などは赤色顔料を施した加飾壺である。1895は、口縁端部内外が羽状列点文による加飾ながら、体部文様にはパレス壺と共通する山形文も施している。口頸部を無装飾とするものでも体上部に文様帯を有するものも目立つ。また、はね上げ状の口縁部をもつ1912は、口頸部内面の中位に半円形の刺突をもつやや特異なもので、搬入品の可能性がある。

1913～1925は、頸部から外方へ直線的に延びる口縁部をもつ広口壺Dである。頸部に素文突帯もしくは刻目突帯を有するものと、突帯を持たないものがある。このうち、1913や1919は、口縁端部に外斜面をもって両端部に刺突を加える。

複合口縁壺・有段口縁壺（1926～1979）

1926～1932は、複合口縁壺Aとしたいわゆるパレス壺である。ただし、尾張地域で見られる典型的なパレス壺に比べて余分な円形刺突が加えられていたり（1927）、波状文のストロークが稚拙であったりするなど、在地的な要素とみられるものもある。

1933～1935は、複合口縁壺Bである。1933は、口縁部内面にも波状文の施文がある。

1936～1969は、有段口縁壺Aとしたいわゆる二重口縁壺である。このうち、外面調整が縦ミガキを基調とする1938～1940や1942～1956などは、いわゆる「伊勢型二重口縁壺」とされるもので、当地域に類例の多い精製の無文二重口縁壺である。これに対して、立直する頸部が極端に狭い1936や、口縁内外を横ミガキする1937、縦ミガキと斜めミガキを組み合わせる1941などは、他地域に系統を求めうる二重口縁壺の可能性がある。やや粗雑化の進んだ1957～1969は、やや新しい時期の所産と思われる。

口縁内面に羽状列点文や斜状沈線をもつ1957や1970は、いわゆる柳ケ坪形壺との類縁性を有するものであろう。

1971～1972は、有段口縁壺A4とした口縁部を立直させるもので、1971は竹管状刺突列を有する。

1973は口縁部を内側へ折り返した有段口縁壺B、1974は垂下した口縁部上に円形浮文を貼付した複合口縁壺Cは、本遺跡では本例のみの類例であり、他地域からの搬入品の可能性を強く想起させる。

1975は、袋状口縁を呈した極めて厚手の作りで、埴輪的な質感をもつ。類例に乏しい。

広口壺・複合口縁壺・有段口縁壺の頸・胴・底部片（1980～2005）

1983～1987は、頸部に1条もしくは2条の突帯をもち、刻みや円形刺突を施す。1984などは、円形刺突に赤色顔料が塗布されている。1988は、胴上部に紐結状に赤色顔料を塗布している。これら頸部凸帯付近に円形刺突を加える例は、伊勢では弥生中期後葉には認められる。

1994～1996は、脚台で、脚台付の加飾壺になるものであろう。

2004は、本遺跡で最大の法量をもつ壺で、おそらく広口壺になるであろう。頸部に素文突帯を有し、

外面をミガキ調整する。

2005は壺胴部の小破片であるが、いわゆる線刻絵画土器である。破片のため線刻の全容を窺い知れないが、併行する2本沈線とそれに交差する短沈線、及び三角状の沈線が認められる。これは、前者が梯子、後者が屋根で、高床倉庫を表現したものである可能性が高い。

受口系の広口壺及び短頸壺（2006～2020）

広口壺Eを含む受口口縁をもつ壺、あるいは口縁端部を内側へ折り返して受口状にしたものを一括した。このうち、2009は、体上部にヘラ状工具による波状の記号文がある。体部と頸部の境界があいまいな2010や2014～2017などは、弥生時代中期後半の系統を引くものであろう。なお、2021は、この位置にレイアウトしているが、土器分類でいう小形壺Bに相当するもので、口縁部を受口状に折り返し、胴部に焼成後穿孔をもつ。

短頸壺・直口壺（2022～2073）

短頸壺に相当するものは、頸部から体上部にかけて線刻を有するものが目立つ。2022はヘラ状工具による山形沈線、2023は鳥足文状の記号文、2026は3条3連の短沈線群、2037はヘラ沈線による緩やかな波状施文、2044は横方向のヘラ短沈線と竹管の組み合わせがある。また、2043は直口壺であるが、体上部に櫛状具によって重方（圏）文と弧状文、ヘラ状具による山形文を組み合わせた文様を全周させる。この他、2049は、胴部に網状のものを巻き付けた痕跡が残る。2059は、頸部の太い大型の直口壺で、頸部に突帯、体上部に直線文と波状文を施文したあり方は広口壺と共通する。2060は、胴部が卵形を呈した短頸壺で、口縁部に蓋止め用の穿孔を2個一対の単位で有する。

2045と2046は、縄文を施文した駿河の大廓式系の壺である。ただし、2046は、直口壺よりも広口壺の可能性が高い。

大形細頸壺（2074～2077）

弥生時代中期の系統を引く土器と思われる。出土層位がいずれもⅢb層であり、埋土出土土器群のなかでも相対的に古い時期の所産であろう。

長頸壺（2078～2084）

2080や2081は近畿的な文字通りの長頸を呈する土器であるが、他のものは概して長頸壺としてはやや短い。2078は、直口壺の可能性もあるが、口頸部に竹管刺突文、波状文や直線文、簾状文をもつもので、いずれにせよ珍しい。

無頸壺（2085～2091・2548～2550）

前群は平底、後群は脚付である。中型の大きさを基本とし、これらは基本的に口縁部に蓋止め用の円孔をもつが、2085や2548のようなやや大型の器形を呈するものは蓋止め用の穿孔を持たない。このことは、中型と大型では土器の機能に差異があった可能性を示しているものと思われる。なお、2548の脚部は、中実部をもつ厚手の脚で、本遺跡出土の他の脚付の壺や甕の脚部の形態とは様相を異にしている。

脚付壺（2092～2099・2101・2551・2559～2560）

基本的に壺部の口頸部は長頸を呈する。2094は脚部を直線文や斜状列点文で、2096は直線文で加飾するが、これらの特徴は当地域の有稜高坏の動きと軌を一にする。なお、大形の2092は胴部に焼成後穿孔をもつ。

内彎口縁壺（2102～2143）

2102は、胴下部に明瞭な稜線を有する整った下膨れの器形で、本遺跡では極めて珍しい。2103は、鉢になる可能性も大きい。2106～2113は内彎口縁壺Aで、縦ミガキを基調とし、2109のように横ミガキを加えるものもある。2114～2118・2120～2123は内彎口縁壺Bで、縦ミガキ後に細かい横ミガキや貝殻腹縁による横位の刺突などを加えるものが多い。2119・2124～2133はいわゆる瓠壺（内彎口縁壺のC・D）で、縦ミガキを基調とし、B同様の加飾を有するものもある。2141はやや特異な口縁部を呈し、形態的には内彎口縁を呈するものの、いわゆる内彎口縁壺とは別種の土器である可能性が高い。2108のように、内彎口縁壺にも胴部穿孔を有するものがある。口縁部を欠損する2139もその可能性が高い。

小形壺（2144～2165）

基本的には通有の広口壺や直口壺、短頸壺などを小型化であるが、原形となった土器が不明瞭なものもある。ミガキ調整による精製のものと、ハケやケズリによる粗製のものがある。2146・2147・2150・2153など、胴部中央もしくは下部に焼成後穿孔を有するものも多い。2164は、後述の小型直口壺とすべ

きかもしれない。

小型直口壺（2166～2197）

基本的に丸底を呈する。ミガキをもつ精製のものは2179など少数であるが、ナデ調整でも薄手で丁寧な作りのものが多い。2170は、肩部に刺突をもつ。2177は胴部に焼成前穿孔、2175や2182は胴下部に焼成後穿孔を有し、特に2177は須恵器の大型甕の影響を想定すべきかもしれない。

小型坩（2198～2241・2243）

2098は脚付の器形になる可能性がある。いわゆる小型丸底鉢形態をとる2200や2201は、ミガキ調整が横方向を基調としており、東海地域ではなく近畿地域での原則に則っている。小型丸底鉢の系統に属するものに胴部穿孔はないが、小型丸底壺の系統に属する2228は胴部穿孔をもつ。2243は、底部が上底気味の平底を呈する。

蓋（2244～2249）

ツマミをもつものとツマミではなく紐用の穿孔をもつものに分かれるが、2245はその両者をもつ。

く字形甕（2250～2287・2391～2394・2518）

平底もしくは台付のく字形甕である。このうち、2250～2258が口縁部に刻みをもつもので、2254や2255などさらに加飾を加えるものもある。2251は、胴部中央に大きな円孔を有しており、いわゆる円窓付の甕ということになろう。2277や2278は、後半期S字甕の脚台と同様の脚台をもつく字形甕Eである。2284～2287は、胴部にタタキを施すもので、いわゆる近畿地方のV様式系の甕ということになろう。

2391～2394は、底部形状に差はあるが、下膨れの器形をもつく字形甕Cと分類した。特に2392と2394は、底部の作出方法など共通性が大きい。

丸底甕（2288～2336）

ややイレギュラーの形態も含む。

2288は、胴部中央に焼成後の穿孔を有する丸底甕E、内外にミガキを丁寧に加えた精製の甕である。

2289～2296・2299などは、口縁端部が内側に肥厚し、体部内面をヘラケズリするという近畿地方の布留式の形態を比較的よく示している。2297～2298や2301・2303～2336は、2328を除いて明瞭な内面ヘラケズリを持たず、ハケやナデ、板ナデ系の調整を行っており、2320以下は外面調整もナデもしくはケズリ系の粗製の作りを示す。このうち、2322や2323には胴部に焼成後の穿孔がみられるが、2289～2299といった明らかに布留形甕の影響が強い甕には焼成後の穿孔はみられない。

小型く字形甕・小型丸底甕

（2337～2390・2395～2397）

2337～2353・2377・2385は平底（底部を欠損する2346や2349も全体の形状から平底と判断した）、2357～2370・2390は台付、2372・2374～2376・2378・2395～2397は丸底、その他は不明である。2377と2385を除く平底は、V様式系のものであろう。

台付のものは、脚台に形態差があり、例えば2358は低い上底気味であるのに対し、2361や2362はしっかりと踏ん張る大形の脚台をもつ。おそらく時期や系統に差異があるのであろう。2366は口縁部に片口の注口機能もつもので、焼成後の胴部穿孔も施す。2390は、脚台から胴部を連続成形し、いわゆる円盤充填によって体部底を埋めている。平底のものは、体部が球形を呈し、内面ヘラケズリを伴わない厚手で粗製の作りである。2377は、底部形状は平底であるが胴部は球形で、平底タイプの小型甕の形状により近い。底部形態が不明なものをみると、2371は体部の内外面を縦ケズリする。2385や2387は、端部に向かって尖っていく薄手の外反口縁をもち、体部をストロークの短いハケ調整をすることで共通する。このハケの特徴は、2389なども同様である。

粗製の小型甕である2395～2397は、やや後出する時期の所産かもしれない。

受口甕（2398～2459）

口縁部形態には差異が大きく、土器分類でも示したように大きく屈折系・内彎系・撥ね上げ系に分かれる。体上部に加飾を有するものは、基本的に口縁部にも刻みを加えており、例外としてはやや鉢状の器形を呈する2451がある。体上部文様は、最上位に直線文を施文することを基本とし、以下、斜状列点文・波状文・直線文の1～3単位を下位に加えていくものが多い。そういう意味では、体部最上位を斜状列点文とする2451や、波状文を最上位とする2435は、本遺跡の受口甕ではややイレギュラーなあり方を示す。また、脚台付の2454～2459は体部・口縁部ともに加飾を加えない無文の作りで、当地域の受口

甕に脚台が付くことが一般化する時期的な後出性を示すものとも捉えられる。なお、2407は、焼成後の胴部穿孔をもつ。

S字甕（2460～2517）

2462や2463など体上部に列点文などの文様を有して口縁部も受口的な様相を示す古いタイプのものから、口縁部がく字形化した新しいものまで、各時期のものを含む。また、法量的な差異も大きい。全体的な量としては、A・Bに相当する古い時期のS字甕と、Eを中心とした新しい時期のS字甕が多く、古墳時代前期頃に相当するCの量がやや少ない。

有頸鉢D（2519～2520）

S字甕と類縁性があるので、ここに配置した。2519は口縁部形態に、2520は体部ハケの特徴にS字甕との類縁関係を有する土器である。

S字系複合口縁甕（2521～2525）

S字甕の口縁部にさらに粘土を付加することによって成形されている。

無頸鉢（2526～2530・2535～2536）

法量や器形に差がある。深鉢形状をとる2528は、口縁部を横ケズリ後に横ミガキ、体部を縦ケズリ後に縦ミガキし、底部に円孔を穿つ。

有頸鉢（2531～2532・2534・2537～2547）

いずれも有頸であるが、形態的・法量的な差が大きいため、以下、特徴的なことを個別に記す。

2531は胴部中央に円孔をもついわゆる円窓付の鉢で、底部にも穿孔が加えられている。

2534は、体部から口縁部への移行が緩やかな外反を呈するもので、体部内面をヘラケズリしている。

2542と2543はいずれも大形の半円形の体部に口縁部が付く有頸鉢Bである。特に2542は、外面調整として口縁部から体上部に縦ミガキ、体中部以下に横ヨガキ、内面調整として口縁部横ミガキ、体部縦ミガキを施した精製の鉢で、外面の縦横ミガキの交点には貝殻腹縁による刺突で加飾されている。

2545は、ハケ後粗い横ミガキを施した大型の有頸鉢Aである。

2546は、把手付有頸鉢で、おそらく脚台を有するものであろう。

2547は、破片資料であるが、鍔付の大きな注口部を体部にもつ特異な形状を示す。土器群4出土の1038と共通する。

2537～2541は、有頸鉢Cである。口縁部や体部文様の特徴は受口甕と共通する。

脚付坩・脚付小型坩（2100・2552～2558）

脚部が外反するものと、内彎するものがあるが、これは有稜高坏などと型式変遷の軌を一にするものであろう。

小型坩（2561～2568）

口径が胴部径に優越する鉢タイプの精製の小型坩である。底部が残存するものは2566のみが丸底で、他は平底形状をとる。

小型無頸鉢（2570～2601）

2570～2598が平底、2600～2601が台付である。

このうち2570は、口縁部に片口をもった注口機能を有するもので、体部に横ミガキを加えている。

小型有頸鉢（2533・2569・2602～2606）

2602～2603が丸底の体部球形タイプ、2604～2606は平底である。2602は、体部穿孔を有する。

手焙形土器（2607～2625）

口縁部がく字形を呈する2607や2610・2611などは体下部の突帯をもたないのに対し、受口系やS字系では胴下部突帯（多くが刻目突帯）を有する。2625は、覆部に縦方向の沈線や沈線山形文による装飾をもつ。

有稜高坏（2626～2700）

このうち、2646までが口縁部・脚裾部ともに外反するV様式・山中式系のものである。この時期の有稜高坏は、坏部の見込み部と口縁部における口縁部の発達過程と理解することが可能であるが、2626～2631のような弥生中期の形態を残した口縁部が上方へ短く屈曲するタイプからのその後の展開は二通りの方向に進む。即ち、口縁部が外反しながら長大化する2640～2642の方向性と、口縁部の内彎化を経たうえでその方向での長大化を進む2647や2648の方向性である。前者はその後、当地域ではあまり発達せず、主流はあくまで後者の内彎化するいわゆる欠山式系高坏への方向性を辿る。なお、2633や2646など口縁部に波状文による加飾を加えるものや、2636など長い脚柱部に直線文を加える高坏は、尾張系の山中式の影響を受けた当地域の特徴であろう。

前述のように、2648以下は、口縁部ないしは脚裾

部の内彎化が始まる段階の有稜高坏で、2650～2655といった口縁部・脚部ともに長大化したものを経て口縁部の内彎・長大化を維持したまま脚柱部の省略による内彎形状を残した短小化へと進む。この後、脚部は内彎形状を維持する方向性と、直線化へ進む方向性に分かれ、後者はさらに外反化へ向かう。2690～2700がこうした脚部の外反化が進んだ一群で、これらは坏部も見込み部が極端に小さくなり、口縁部の長大化が進み、2699や2700などは口縁部も再び外反化する。

有稜高坏は、以上のような大まかな変遷過程を辿るが、2681などは極端な脚部の偏平化などこの流れからは若干ずれるものもある。また、見込み部が閉じないなど器台的な様相を示す2672もややイレギュラーな形態を示す。なお、当地域の内彎系有稜高坏は、前代以来脚部に直線文による加飾を加えることが一般的であるが、もたないもののなかには2663のようにやや変遷過程の流れにそぐわない器形をもつ土器も存在する。

なお、2652は碗状高坏の可能性もある。

グラス形高坏（2701～2718）

土器分類に示したように、坏部形状はいくつかの差異がある。脚部は基本的に外反し、2704や2708・2715など直線文や山形沈線、列点文などによる加飾を加えるものがある。なお、2710は内彎口縁壺の可能性がある。また、2718は口縁部が極端に窄まる形状をとる。

碗状高坏（2719～2739）

2720のような浅い坏部をもつものから、2719のように半円形の深い坏部に内彎脚が付くもの、2736のように口縁部が僅かに外反して加飾を加えた長脚の外反脚が付くものなど坏部形状や脚部にはいくつかの形態がある。2719等を除き全体に小振りの器形をもつものが多く、2738等は後述の小型高坏の範疇に含ませるべきかもしれない。

小型高坏（2740～2759）

いわゆる有稜高坏形状のものと碗状高坏形状のものに大きくは収斂されるが、必ずしもそれらの完全な小型縮小版というわけではない。2758と2759は他に比べてより小さく、小型器台的なあり方を示す土器であろう。基本的に縦ミガキのものが中心で、横ミガキを基調とする2748や2758は少数派である。

高坏脚部（2760～2781）

一部に小型器台の脚部を含む可能性もある。

2760・2764～2766は外面に赤色顔料の付着が認められ、2762は一部に漆の付着がある。小型高坏や小型の碗状高坏の脚部が多いものと思われ、櫛状具による加飾や装飾的に小円孔を穿つものも存在する。

屈折脚高坏（2782～2908）

2782～2785は、屈折脚高坏Gと分類したもので、坏口縁部に太筋のミガキを粗い間隔で施す。脚部は2782のようにほとんど屈折せずに収めるものと、2784～2785のような明らかな屈曲部をもつものとが存在する。

2786～2789は、外面仕上げに横ミガキを加えた近畿系の布留形精製高坏（屈折脚高坏A）である。

2791なども形状的には類似するが、脚柱部に円孔を加えたり、縦ミガキになるなど異なるてんも目立つ。2790は、外面に赤色顔料を塗布しているため、ミガキの方向は不明である。2792～2793は縦ミガキ、坏部が直線的でややイレギュラーな形態をもつ2795は脚柱部に縦ミガキが施されている。

2796～2815は脚柱部内面をヘラケズリするB1、2820～2835は脚柱部内面をナデ調整してシボリ痕を残すB2、2816は坏屈曲部が突帯状を呈するD、2836～2851は脚部の屈曲部が緩やかな大形高坏であるF、2852～2854は坏見込み部が浅い碗状を示すE、2855～2863が脚柱部がエンタシス状に膨らむC、それに2864～2898が碗状坏を載せたHの形状（2898は小型）をとる。

2817～2819は、仕上がり的には坏屈曲部に突帯を有するDの形態に類似するが、製作技術的には見込み部に外斜面を有する擬口縁を作り出した後、その端部やや内側から口縁部を付加して結果的として突帯状となったもので、Dとは別系譜である。ただD・E・F・Gはいずれも大型高坏で、2817～2819もこれらと類縁関係をもつものであろう。なお、2818は赤色顔料による加飾をもつ。

2899～2907は、ややイレギュラーの形態もしくは破片資料のため、形状細別が不分明なものを一括した。このうち、2907は、ミニチュアといってもよい小形の作りである。なお、2908は、脚付坏とすべき

ものであろう。

器台（2909～2919・2946～2948）

本遺跡出土の器台は少ない。そのなかで、2917や2918は受部に透孔を有するもので、北陸地域との関連が想定される。また2909や2911は長楕円形の透かしをもち、2911はさらに竹管やヘラ状具による加飾を加えたうえに赤彩している。Ｂ１形状をとる2914や2915は、貝殻腹縁による刺突も有する。

2946～2948は、小型ではあるが、粗製の器台Ｅである。各個による形状や調整の差が大きい。

小型器台（2920～2945）

形態差を越えて、東海的な縦ミガキを基調としたものが主流であるが、2925や2931～2932・2941などは坏部に横ミガキも有する。

坏（2949～3004）

口縁端部のヨコナデの強弱による口縁端の外方への突出度の違いや、平底を呈する2960や器高の高い腰高形状の2964～2965など若干の形態差がある。また、外面調整は基本的にナデ・ケズリ調整を基調とするが、ハケをもつ2959～2960、ミガキを加える2989～2991なども少数ながら存在する。

ミニチュア土器（3005～3143）

法量的にはややばらつきがある。

3005～3014は小形壺に分類したものより明らかに一回り小さく、その縮小版といった様相が強いが、ミニチュア土器とするよりは小形壺に分類したほうがいいのかもしれない。こうした法量的な差異はあるが、3005～3057は壺及び小型甕のミニチュア土器で、特に3038～3057は最も小さい一群である。加飾広口壺や内彎口縁壺など当地域に特徴的な壺のミニチュアも存在する他、縦方向の穿孔を有する把手を付加した無頸壺である3057などのやや特異な形態のものも存在する。

3058～3116は、甕のミニチュア品である（3087は壺とすべきかもしれない）。壺同様に、法量的にやや大型の3058～3100・3113～3116と小型の3101～3112（3114以下の法量はやや流動的）に分かれる。このうち、3094や3116などはＳ字甕のミニチュアで、非常に興味深い資料である。

3117～3130は、高坏のミニチュア品である。碗状高坏など弥生後期～古墳初頭の時期の高坏を模したものが多いが、3128～3130のような屈折脚高坏とみられるものもあり、特に3130は脚柱部が膨らむ形状の高坏を模している可能性がある。

3131～3145は、鉢のミニチュア品である。3137～3145などは手捏ね土器にも多い器形をなすが、ミガキ調整による精製品であったりするなどしっかりとした調整を加えて成形されていることから、ミニチュア土器として扱った。

手捏ね土器（3144～3259）

底部穿孔をもつ3175は、ミニチュア土器の可能性も高い。一部にハケなど簡単な調整を施すものもあるが、基本的に粗製のオサエ・ナデによって成形されている。土器分類でも示した通り、大きく壺系や鉢系などに収斂されるものもあるが、丸底球形のもの（例えば3245等）のように原形となったものが特定できず、あくまで手捏ね土器としてのみ存在する器形もある。なお、欠損などによる流動的な側面もあるが、法量的には、一応3146～3164の大、3165～3182の中、3183～3259の小に分かれそうである。

その他（3260～3275）

整理の過程で不注意にもレイアウトから漏れた土器を含む。このうち、3262は、コップを倒立させたような円柱状の台である。あまり類例を見ず、土器というよりは何らかの土製品の可能性もある。壺の胴部破片である3275には、詳細不明ながらヘラ状具による線刻が存在する。

③　韓式系土器と初期須恵器

【韓式系土器】

すでにＳＲ２やＳＤ１の付設施設・土器群出土のものは示したが、六大Ａ遺跡では多量の韓式系土器が出土している。ここに提示した埋土出土のものもその全てを網羅したわけではなく、胴部破片などは適宜選択して掲載した。ただし、把手については、できる限り掲載に努めた。

全体的な傾向を述べると、六大Ａ遺跡出土の韓式系土器には甕・長胴甕・把手付鍋・甑・有孔鉢・平底鉢があり、特に甕と甑、把手付鍋の占める割合が大きい。焼成は、ほとんどが軟質系とされるもので硬質のものは極めて少ない。胴部に施されたタタキの種類は格子タタキが大半で、ごく少数の縄席文が伴う。格子タタキと共に韓式系土器では一般的な平

行タタキは、本遺跡出土の韓式系土器ではほとんど存在しない。

甕（3278～3297）

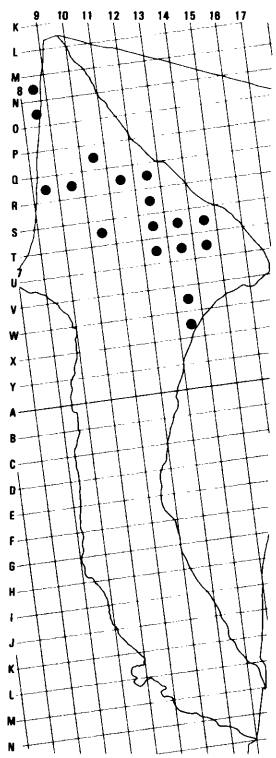
球形の丸底タイプで、頸部の屈曲部全体をヨコナデすることによって体部から口縁部の移行部は明瞭な稜を持たず、丸く移行していく。体部調整は格子タタキのみを施したものが大半を占めるが、3289のように格子タタキ後ハケを施したものも存在する。内面は、ナデ調整を基本とするが、3291のように底部内面にオサエ痕跡を残すものも存在する。なお、第122図は3281の破片がどの地区から出土したかを示した。

長胴甕（3298）

本遺跡では、韓式系土器における長胴甕の占める割合が低いのが特徴であるが、本例は胴部が直線的に復元できることから数少ない長胴甕の例になるものと判断した。基本的な調整は、甕と同じである。

把手付鍋（3299～3312）

把手のみのものは不確実さを残すが、内面のカーブの状況などから鍋と判断したものを含んでいる。口縁部は、内面への強いヨコナデによって、外方へ大きく開く。胴部は格子タタキを施した後、把手接合部の同じ高さで、１条ないし２条の沈線を全周させる。把手には、上部から切り込みが加えられるもの、下部から刺突が加えられるもの、その両方が存在するものがある。残りのよい3299は、内面を板ナデ調整している。また、3303は、外面に格子タタキを持たず、内外を粗いナデ調整し、把手に切り込みや刺突も持たないが、焼成や全体の形状、痕跡的に残った胴部横沈線の痕跡などから韓式系土器の系譜に属するものと判断した。



第122図　韓式系甕（3281）の破片出土地区一覧

甑（3313～3332）

把手のみの破片は、内面が上下に直線的であることから甑と判断した。3313のような口縁部が外方へ屈曲する有頸のものと、3332のように胴部と口縁部の境界をもたない無頸のものがある。3313は、格子タタキを施した後、間隔の開いた２条の沈線を巡らす。底部の穿孔には円孔と楕円孔があり、円孔のものには中央円孔が外周円孔より大きいものと同大のものがある。いずれも復元数であるが、大きさに差異がある3320は大１孔＋小７孔、3321は大１孔＋小６孔、3329は大１孔＋小５孔もしくは６孔が配されている。これに対し、同大のものは3323が１孔＋６孔、3331と3332が１孔＋５孔、楕円孔をもつ3330が円１孔＋楕円４孔である。3332は、格子タタキを施さない板ナデおよびナデ仕上げの粗製の作りで、内外に粘土接合痕を顕著に残す。

縄蓆文タタキの甑か把手付鍋（3333～3346）

厚みに厚薄２種があるが、Ｅ－Ｏ～Ｒ８～12区から出土しているものが大半で、個体数としては１～２個体程度になるものと思われる。

小型甑（3347）

把手が口縁下のかなり高い位置にあり、小型の甑と思われる。把手下部には円形刺突がみられ、把手は挿入法により接合されている。

有孔鉢（3348～3354）

3348は格子タタキをもつが、他のものはナデや板ナデによる粗い仕上げである。底部の穿孔は、８個の小円孔がアトランダムに穿たれた3349、小円孔が穿たれた小破片3351と１孔＋４孔の3352、比較的大きな円孔が１孔＋６孔の3353、隅丸方形孔が１孔＋５孔穿たれた3354がある。3350は欠損のため円孔数は不明であるが、把手付有孔鉢である。

把手（3355～3380）

甑もしくは把手付鍋に付属すると思われるが、器種不明のものを一括した。3355と3356は先端が切り落とされて面をもつ形態をとる。上部切り込みもしくは下部刺突をもつもの以外でも、それらと胎土や焼成が共通する同形態の把手はこの仲間に含めた。

平底鉢（3381）

口縁部は内面への強いヨコナデによって外方へ大きく開き端部に面をもつ。体部には格子タタキを施し、底部付近にはさらにケズリを加えている。底部は大部分欠損するが、かすかにいわゆるゲタ状圧痕様の痕跡が残る。本遺跡で明瞭な平底鉢は本例だけであるが、同形態の口縁部は他にも類例があり、あるいは他にも別個体が存在したのかもしれない。

胴部破片（3382～3400）

器種は特定できない。破片は図示した以外にも多数出土しているが、タタキ原体の代表的なパターンのわかるものを中心に抽出した。格子タタキは、3382や3384の粒が本遺跡通有の大きさで、2383のものはやや大形の粒である。3386のような細かいものや3395のような極細のものは少数である。また、3397～3399は本遺跡では少数派の平行タタキを施したものである。

その他（3401～3410）

厳密には韓式系土器といえるかどうかは微妙であるが、その技術的な影響を引いた軟質土器と、硬質の韓式系土器の可能性のあるものを一括した。3401～3402・3410は軟質の甑である。タタキを有するものはなく、ハケもしくはナデ調整で、把手のみが遺存した3410は把手先端形状が男茎を表現している。3406は軟質であるが、鉢形状の粗製のものである。3404～3405・3407～3409は硬質で、外面に格子タタキ、内面に当て具痕を残す。

【初期須恵器】

六大A遺跡では、韓式系土器とともに多量の初期須恵器も出土した。これは、現状では三重県内で最もまとまった資料であり、東日本でも最多量の部類に属する。すでにSR2やSD1土器群出土のものはみてきたが、埋土出土のものには類例の少ない特殊なものも含まれているため、以下、少し詳しくみていきたい。

高坏形器台（3411～3431・3433）

ある程度器形の復元が可能なものをみると、高坏部と脚部の整合部が幅広の3411～3412・3422と、接合部の幅が窄まった3425～3431のグループがある。

ほぼ完存の3411は、高坏部は口縁部があまり外へ開かず、低突帯と組紐文で加飾されたもので、脚部は低突帯間に長方形透孔が直列配置されている。高坏部上半が欠損した3412は3411の拡大版の形態を示すが、脚部に波状文を加えている。ともに高坏部内面にはかすかに円形の圧痕が認められ、無文当て具等で押さえられた可能性がある。3411・3412ともに組紐文はいわゆる疑似組紐文にならず、横S字を交互に連結していく正規の施文パターンで施されているが、仕上がった文様自体は技術的には稚拙で、整っていない。

3413～3421は高坏部破片である。口縁部片である3413・3414は、3411以上に口縁部が直線的である。3414は口縁下の2条の突帯間に斜格子文を線刻し、下位にはスピード感に乏しい波状文を施す。3415～3417は、いずれも鋸歯文をもち、3415はさらに波状文も確認できる。3418と3420は組紐文を施したものであるが、3420はかなり崩れている。3419は波状文を施したかなり薄手の土器、3421は沈線を挟んで上に斜状沈線列、下に斜格子文を施している。鋸歯文や斜格子文といった轆轤使用の利点が全く生かされない文様が多い。

3422～3431は、脚部片である。3426が組紐文を施すのを除き、脚部文様は波状文が多い。透孔は、3423～3424・3427が長方形透孔を千鳥式に、3425が三角形透孔を千鳥式に、3428が中段に長方形透孔・下段に円孔を千鳥式に配するのに対し、3430は三角形透孔を直列式に、3431は上段に長方形透孔・下段に逆三角形透孔を千鳥式に配する。なお、3426には脚部と高坏部の接合を容易にするための線刻があり、拓影も図示したが、これは3411などにおいても認められた。

3433は、上記のものとは異なり、円柱状の脚部をもち、先尖楕円形の透孔を穿った器台で、2条の沈線と波状文が確認できる。時期的にやや新しい所産であろう。

筒形器台（3432・3434）

3432は、小破片を復元的に図化したもので、高さはもう少し低くなる可能性が高い。しかし、細めの円柱部に2条突帯と千鳥式に配された鍵形の火焔透かし、スピード感に乏しい波状文が施されていることは確認することが可能で、半球形の脚部にも突帯を挟んで下に円孔、上に下向きの火焔透かしを千鳥式に配する。最下段の円孔は、上部に極細ながらかすかな縦沈線が入っており、火焔透かしを意識したものかもしれない。火焔透かしの確認は、三重県では初めてである。

3434は、鍔の下部に先端が尖る火焔透かし列を配したもので、鍔が付加された内面は、ユビオサエの痕跡が明瞭に認められる。管見によるかぎり類例を知らない。

筒形土器（3435）

小破片のため、不明な部分も大きいが、漏斗状の器形に鍔を付加した筒形土器である。筒形器台の可能性もあるが、3435などは器形がかなり大形であるため、器台よりも筒形土器の可能性を考えた。

長頸壺（3436～3437）

3436は、端部を欠損するが、口頸部片である。突帯間に複合鋸歯文、その下は2本の縦沈線間に縦2個の円形スタンプを配し、最下段を突帯で受ける。内面には顕著なユビオサエ痕跡が残り、この土器が単なる轆轤成形のみに拠っていないことを示している。胴部以下は欠損のため不明だが、口頸部文様は新羅的な様相である。

3437は、小破片のため復元の部分が大きいが、口縁部は直口口縁的で、2条突帯を挟んで下向きの鋸歯文が2段と組紐文が施されていることは確認できる。図上では、体部は肩の張った器形に復元できるが、多少焼成時の歪みがあるのかもしれない。

台付無頸壺（3438）

脚部や口縁部が欠損した小破片であるが、球形の体部に復元でき、台付無頸壺になるものであろう。体部は上位より無文部・突帯・波状文・突帯・密接の斜状沈線列と配される。土器表面がかなり磨滅している。

壺（3439～3454・3544～3547・3552）

若干初期須恵器の範疇に入らない新しいものを含んでいる可能性があるが、大阪府陶邑・大庭寺遺跡の分類に習い[8]、口径30cm以下の外反口縁をもつ壺甕類を壺として扱った。

3439や3442・3446のような頸部から口縁端部までを途中の区画なく一連で外反させるものと、3440や3443・3447のような途中隆帯により口頸部を上下2段に区画するものがある。3444は、中段の無文部を挟んで口頸部を上中下の3段に区画する。

口縁部の形状には、端部にヨコナデによる外斜面をもつ3439～3442のような一群と、尖らせて終わる端部の直下に隆帯をもつ3446や3448に代表される一群、口縁端部を丸くおさめ直下に丸めの突帯をもつ3544などがあり、3447のようなやや肥厚化した口縁端部をもつものは時期的にはやや後出するものであろう。このうち3440は、口縁外面にタール状の油脂の付着物があり、焼成時に付着した可能性が考えられる。

胴部破片である3452と3453は、体部に沈線で区画された波状文を施した土器で、3452は最上段に列点文も施す。3453の内面は、ユビオサエによる成形の痕跡も顕著である。底部破片の3451は、極めて細かい格子タタキをみることができる。

なお、口縁部片3450は、焼成は軟質、つまり土師器であるが、口縁端部の形状などは3446などと酷似しており、初期須恵器の技法で作られた土師器ということができ、ここにレイアウトした。

脚付環状連結四連壺（3455～3456）

3456のほうがやや大形であるが、同形態である。4個の小壺（うち1個は壺形態）の底部を穿孔して中空の環状部と連結し、さらにそれを短く外反する脚部で受けるという極めて特徴的な土器である。脚部には、長方形透かしを穿ち、端部を丸く収めている。小壺は、口縁部と体部は一連のヨコナデにより成形されているため境界が不明瞭で、むしろやや内彎気味の口縁上段部が稜により明瞭に区画されている。小壺部と環状部の接合のためのユビオサエの痕跡も顕著である。なお、3456は、小壺部分が焼け歪みによる変形をかなり受けている。

樽形壺（3457～3458）

いずれも小破片で、口縁部は欠損するが、樽形壺と認識した。いずれも沈線間に波状文を施す。3457

の波状文は小振りで繊細、3458のものはスピード感に欠いたやや大振りな波状文である。

甕もしくは小型直口壺（3459～3476）

口縁部がいわゆる二重口縁状を呈して胴部に円孔を有する甕と、直線的な口頸部を隆帯によって2段ないしは3段に区画する小型直口壺を一括してレイアウトした。いずれも繊細な波状文による加飾をもつものともたないものがある。

3459は、かなり湿った状態の時に成形されたと思われる土器で、ロクロナデによる砂粒の動きが顕著に残る。3465は、口縁部下段に細かい波状文を密接に施文する。3471は、口縁部に焼成時かと思われる油脂が付着している。3476は、胴部の円孔と波状文の下位には2条の小突帯が巡る。なお、3462はやや大形で、大形甕になるものかもしれない。

大形甕もしくは直口壺（3477～3488）

3477～3481・3486が直口壺、その他が大形甕の形態をとると思われる。

直口壺は、口縁部が横方向の小突帯によって3段に分割され、3477はその中段に波状文が施されている。最も大形の3486は、体上部に手持ちヘラナデ、体下部に無文板状具による圧痕が認められ、底部には砂粒痕がみられる。

大形甕は、3485などカキメを施したやや新しい所産も含む。3483は、体部内面に顕著なユビオサエ痕跡が残る他、底部にはタタキの当て具痕跡も残る。3484や3487とともに、体部成形にタタキが用いられたことを示すものであろう。

有蓋高坏蓋（3489～3490）

上端部に天井部と区画する凸帯は外側へ突出し、端部は丸くおさめられている。残りのよい3489は、天井部がやや丸みを帯びており、ほぼ中央に直線文が入る。

高坏（3491～3526）

確実な有蓋高坏は3494のみで、残りは脚部のみの残存か、無蓋高坏である。ただし、時期的にやや後出するものも含む。

有蓋高坏3494は、口縁端部や受部端部などが丸く作られており、やや長めの脚部には低い隆帯を作り出してその上部に長楕円形の小孔を穿つ。

3491は無蓋高坏として扱ったが、蓋の可能性もある。口縁部は端部に受部状の緩やかな段を形成して外面に2段の波状文をもち、下部外面に列点文と直線文を施す。脚部は下部が緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。赤褐色系の硬質の焼成である。

3492も有蓋高坏である。坏底部に波状文を施し、脚部には先端が尖った長楕円形の透かしをもってカキメを施している。

3493・3495～3507は脚部資料で、無蓋か有蓋かは確定できないが、非常に興味深い資料を含む。まず3493は、脚部中央の隆帯区画より上に小さな縦位の方形刺突列を穿つ。刺突は貫通しない。内面に顕著なユビオサエの痕跡が残り、脚部が手延べによっても成形されたことを示している。3495は、前述の有蓋高坏3494の脚部と共通し、脚中央に長楕円形の小孔をもつ。3496は、短脚であるが中央の隆帯で区画された上下に2段の長方形透かしをもち、下段側透かしの下も隆帯で受ける。3500も、3496と同様のものであろう。3497・3499・3502などは、脚端部の特徴や脚裾と脚柱の境の隆帯など上記の3493～3496などと特徴を同じくしており、ほぼ同時期の所産とみてよいであろう。3505も、途中の隆帯こそないが、端部の特徴は同じである。その他のものは、端部の肥厚化傾向がはじまっているものなど、若干新しい要素を含むものもある。

3508は無蓋高坏、3509は土師器的な形態を呈した高坏であるが、3509の坏部内面には同心円のタタキ当具痕が残る。

3510は、焼成は土師器であるが、脚部端部や脚部と坏部の接合を容易にするため刻まれた同心円状のスタンプ痕跡の存在は、初期須恵器の技法と共通しており、その技術で製作された土師器としてここにレイアウトした。

3511～3526は、無蓋高坏である。初期須恵器とはいえないやや新しいものも含むが、同一器種で一括した。このうち3511の坏底部内面には同心円のタタキ当具痕が残る。

提瓶もしくは把手付碗の把手（3527～3532）

胎土や焼成の特徴が他の初期須恵器と同様なものと、Ⅲa層出土のものなど層位的に下位から出土しているものを中心に措定した。ただし、新しい時期のものが混じっている可能性も否定できない。

小型碗（3533～3534・3537～3538）

いずれも小破片で、3534は無蓋高坏の可能性もある。3533は、口縁部に無文部、胴上部に2段の繊細な波状文を施す。

小型坏？（3535～3536）

中央部が膨らむ算盤状の器形をもったもので、一応小型の坏の可能性を考えた。中央は受部様に外側にやや突出し、その上下に方形刺突をもつ。底部が残る3536は、底部を手持ちヘラケズリしている。

坏身・坏蓋（3539～3543）

3539は羽釜状の器形を呈するため、やや古いものであろう。他のものは全体にやや新しいが、3543を始めとして端部を丸くおさめるなどシャープさに欠けるものを一括した。このうち、3542は天井部を手持ちヘラケズリしている。

甕（3548～3551・3553～3555）

前述のように、口径30cm以上のものを甕として扱っている。破片数は多いが、ある程度特徴の明瞭なものを抽出して図示した。

口縁部片では、端部を丸くおさめて直下に丸い凸帯をもつ3549～3551・3553～3554と、口縁端面にやや面をもつ3548がある。3555は、時期的に後出する可能性もあり、初期須恵器といえるかどうかはやや疑問である。

大甕（3556～3559）

3559は、全体に歪みが大きいが、体部外面には格子タタキ、内面には無文当て具？の痕跡を有する。また、3556も体部内面に無文当て具らしい痕跡が確認できるが、外面は無文である。

c　古墳時代後期～古代の土器

初期須恵器を除く古墳時代後期から古代の須恵器と土師器を扱う。

【須恵器】

初期須恵器を除く、須恵器を一括する。本来は、古墳時代のものと古代（歴史時代）のものに分別すべきであろうが、層位の堆積的にも型式学的にも連続性が高いので、実年代はともかく、坏蓋と坏身を除き、一括して扱った。

古墳時代タイプの坏蓋（3560～3597）

天井部と口縁部を分ける稜部分や口縁端部にシャープさをもち、天井全面に丁寧なロクロケズリを施した3560や3561から、法量が小さくなって天井部をヘラ切り後未調整にしたままの3597までの、いわゆる古墳時代タイプの坏蓋を一括した。

このうち3561や3566などは、口縁端部からやや上がった位置の内面に沈線が巡る。また、3575は天井部内面に同心円のタタキ当具痕が残る他、3584は天井部外面にヘラ記号がある。

3594～3597は非常に歪みが大きく、さほど遠くない場所に窯跡が存在した可能性を想起させる。

古墳時代タイプの坏身（3598～3663）

いわゆる古墳時代タイプとされる坏身側に受部が付くものを一括した。

各部位がシャープに成形され、底部のロクロケズリも丁寧な3599から、法量が極端に小さくなって立ち上がりも短小な3662～3663まで、様々な形態のものがある。法量が小さくなったものは、底部のロクロケズリも省略し、古墳時代タイプといっても暦年代的には7世紀以降であろう。

このうち、3613は、底部上半に波状文による装飾がある。3605や3616・3623・3630などは底部外面にヘラ記号をもつ。3637は、底部にヘラ切り痕が顕著に残る。

大形坏（3664～3665）

古墳時代タイプの坏身の大形品であるが、あまりに大形化しすぎて通常の型式変遷の流れのなかに乗るかどうか疑問があったため、大形坏として独立させた。ロクロケズリの範囲や受部の立ち上がり具合といった全体的な調整の特徴は、6～7世紀の古墳時代タイプでも比較的新しい時期の所産であることを連想させる。

有蓋高坏蓋（3666～3675）

天井部と口縁部を分ける稜線がやや退化し、沈線化もしくは稜の消失したものが多い。3667の天井部にはカキメも施されている。また、3674の天井部内面には同心円のタタキ当具痕が見られる。

高坏（3676～3712）

坏部が欠損していて有蓋か無蓋か不明なものも含むが、3676～3692は有蓋高坏、3695～3712は無蓋高坏と考えている。

有蓋高坏は、脚部にカキメを施したものが多く、確認できるものはすべて短脚1段透かしである。脚

部の透かしは、3677や3679～3681・3688のような長方形を基本とするが、三角形透かし？（3676）や円形透かし（3678・3682～3684）、小方形（3685）のものや無透かしのものも多い。また、3685や3692には、坏底部内面に同心円のタタキ当具痕が残る。

3693～3694は、長脚タイプである。欠損部分が大きく、有蓋か無蓋かはわからない。

3695～3707は無蓋高坏であるが、一部、初期須恵器併行のものを含んでいる可能性がある。

このうち、3695は脚部が2段に屈曲するもので、やや古い時期の所産であろう。3696も、長脚2段透かしの高坏であるが、通有のものに比べて法量が極めて小さい小型品である。3701～3702も同様の特徴をもつ。3699は、脚部は新しい感じがするが、坏部は土師器の高坏を模倣したような形態をとる。

3708～3712は、脚部のみの残存であるが、おそらく無蓋高坏になるものであろう。3708は下段が三角形透かしで、上段の切り込みのみのものと千鳥式配列をとる。

壺（3713～3730）

口縁部が長大化したものから、胴部円孔部が突出して注口化した歴史時代のものまでを一括した。

3714～3716は頸部に波状文による装飾をもつもので、3716は光沢を帯びた特徴的な焼成をしている。3722は、円孔を穿った時の粘土が土器内面に入ったまま焼成され、鈴状になっている。3722～3724は、底部にヘラ記号をもつ。3728～3729は、底部に高台を有するもので、歴史時代の所産であろう。

短頸壺（3731～3735・3754）

やや偏平気味の体部に、立直もしくは外傾する短い口縁部を付けたものを一括した。3731には肩部に刺突列が巡る。また、3734は、底部外面に平行タタキ痕が残る。3754は、他のものとはやや異なってやや長めの口縁を有する細頸タイプのものである。

小型有頸鉢（3736）

やや偏平の丸底鉢形状から、短く外反する口縁部が付くものである。

長頸壺（3737～3742）

3737は、脚部の一部が欠損しているものの、脚部に三角形透かしを穿った長脚の長頸壺で、全面を波状文で装飾豊かに覆う。3738は、3737に比べて肩部の張りが増した器形で、肩部に沈線とその直上に斜格子文、その上下にカキメを施している。

脚付坏（3743）

高坏という程高くはない脚部を付けた歴史時代タイプの坏である。

平瓶（3744～3746）

3744はやや大形、3746は小型品、3745は破片資料である。3744も欠損部が大きいが、体部にカキメをもち、体上部に円形浮文の貼付による装飾をもつ。

提瓶（3747～3751）

大形品の破片である3747や肩部の把手が退化した3749など、破片資料のみである。

小形碗（3752）

体部を沈線により上下に区画した小形品である。

コップ状土器（3753）

底部の立ち上がりが不明瞭なコップ状を呈した小形品で、外面をケズリ調整する。底部内面に刺突痕が残る。

蓋（3755～3764）

通有の坏の蓋とは若干趣を異にしたものを一括した。3755～3757は、返しの付かないもので、口縁部がやや内側へ内傾する。3758は、高台のない坏の可能性もあるが、天井部を非常に丁寧にロクロケズリしていることからそちら側を上と考え、蓋とした。3759～3762は、端部に大きな返しが付くもので、長頸壺などの蓋になるものであろう。ツマミを持たない3759～3760と、ツマミが付く3761～3762がある。3763～3764は、返しはないがツマミ付きの蓋で、3763は丸みをもった天上部、3764は短く直線的な天井部をもつ。

歴史時代型坏蓋（3765～3775・3792～3794）

3765～3775は端部に返しが付くもの、3792～3794は端部の返しが消失したより新しい段階のものである。いずれも返しの突出度やツマミの形状、器形の高さなどに差異がある。

歴史時代型坏身（3776～3791・3795～3823）

3776～3791は無高台のもの、3795～3823は高台付のものである。

無高台のものでは、3778は立ち上がり部中央に沈線が巡り、体部を上下に区画している。3786は、底部と立ち上がりの境が不明瞭で、広めの碗的な形状

を取る。

3789～3791は墨書土器である。3790と3791は厳密には高台の有無は不明である。3789と3790は「嶋」とみられるが、3791は「西」が欠けたようにも見えるが欠損のため明らかにはしえない。なお、「嶋」墨書は、後述の3840にも見られ、六大A遺跡では3例が確認される。

高台付のものは、3807のような小型のものから3815のような大型のものまで、法量の大小が大きい。

3816～3823は墨書土器である。3816は不明瞭ながら「●」記号、3817は文字らしいが判読不能、3818は「北」、3819は「□三」、3820は文字らしいが欠損のため不明、3821は花様記号、3822は「□卩」、3823が「調」？である。このうち3822は、1字目が不明であるが2字目が卩、すなわち部であることは「○部」という人名を示すものかもしれない。

脚付鉢（3824～3825）

外側へ広がる脚に内彎気味の鉢を載せたものである。3825のほうがやや深い。

脚付碗（3826～3827）

3826は、やや内彎気味の半球状を呈して外面にカキメをもつ。3827は、やや下膨れでカキメをもったグラス形の碗部を呈する。

碗（3828～3830・3851）

やや器形に差異があるが、底部はいずれもケズリ調整する。3851は下半分にカキメが巡る。

短頸壺（3835～3837・3864）

肩部が張り、口縁部が短く立直するものを一括した。最も残りのよい3837は、小型で、口縁部が短小に立ち上がるタイプである。3864は破片資料のため耳が付く可能性もあるが、一応、やや大型の短頸壺としておく。

鉢（3831～3834・3838～3844・3917）

無頸や有頸、浅鉢や深鉢など形態の差が大きいため、鉢類として一括した。まず最初に焼成について触れておくと、3833～3834・3839～3840は須恵器ではあるものの、生焼けで土師器的な色調を呈する。

3831～3833は、口縁部が短く外反する曲線的な器形で、3831は肩部にカキメを有する。

3834は外反する口縁部をもつ有頸鉢で、肩部にカキメをもち、それ以下はロクロケズリする丸底の鉢である。レイアウト上は離れた位置に置いてしまったが、3917も小型有頸鉢で、こちらは平底である。

3838～3839は、大型の無頸鉢で、口縁部は欠損するが3839は碗3827を大型化したような器形をなす。3838は、口縁外面が無文部となり、沈線で区画した下位にカキメを施した、いわゆる鉄鉢である。

3840は大型の平底深鉢である。底部からの立ち上がり部分に横位で書かれた「嶋」の墨書がある。

3841～3842は把手付鉢であるが、3841は半球形の丸底鉢、3842は平底の把手付浅鉢である。

3843～3844は、大型の有頸鉢である。特に3844は大型で、口径が胴部径よりも大きく、体部にはタタキ後カキメを施している。

甑（3845～3847・3860・3895～3898・4366）

3847は甑となるか疑問もあるが、3845～3847は体上部にカキメを施して体下部の内外面をケズリ調整した小形の甑である。3846と3847は体部中央に凹線が巡る。3860と3895～3897は大型の甑で、外面にタタキを施し、内面にタタキ受けの当具痕が残る。

陶臼（3848～3850・3852～3855）

分厚い底部から一旦くびれた後に外傾して上方へ延びる陶臼である。3853～3855のように底面に刺突を加えるものが多いが、3852のように加えないものもある。また個体による法量の差も大きい。

鍋（3856～3859・3861～3863）

3856や3857のような把手付のものと把手の付かないものがあるが、破片資料の場合は把手の有無は判断がつき難い。器形は、3863のみ口径が胴部径に優越し、3859は口径と胴部径がほぼ同大であるが、他のものは胴部径が口径より大きい。外面にタタキ後カキメを施すことを基本とするが、3861のようにカキメを省略しているものもある。

耳付壺（3865～3868）

肩部に耳部をもつ短頸の体部球形形状のものを一括した。いずれも外面タタキ調整の大型品で、3866～3867は四耳壺、3865と3868は双耳壺となる。3865はやや口頸部が長めの内彎形状で、口縁中央に3条の沈線を施して口縁部を上下に区画している。耳部は、3866は方形板を貼付して円孔を穿つが、他は断面円形の棒状のものを貼付し、アーチ形に上下を渡しきらず、下部を浮かした形状をなす。

横瓶（3869～3870）

外面にタタキ調整した横瓶で、3869はその後に縦方向のカキメを加える。3870は大形品である。

壺もしくは小型甕（3871～3883）

口径20cm以下の口頸部が外反する短頸のもの、もしくは体部の張りが弱く腰高の体部をもつ短頸口縁のものを一括した。このうち3874は、頸部が細く締まった細頸壺ともいうべき器形を呈する。3889は、口径がやや大きいが、腰高の胴部に復元できそうな器形で、体部内面に顕著な無文当具痕が残る。

甕（3884～3894）

口縁部が大きく外反し、球形もしくはやや肩の張る体部をもつものを一括した。基本的に体部はタタキ調整で、さらにカキメを加えるものもある。口頸部は無文のものと、波状文による装飾を加えるものがある。3892～3894はいわゆる大形甕で、3894は底部に別個体の破片が融着している。

円面硯（3899～3903）

3899は、獣脚部付圏脚円面硯ともいうべき大形品である。まず、透かしや貼付物のない圏脚円面硯に獣脚部を貼付し、その後に獣脚部と獣脚部の間に透かしを穿つ。獣脚部は、爪の表現も残る非常にリアルな作りで、小さな粘土塊に型押しによる文様の表出が行われている。透かしは全部で16孔あったと推定され、楕円透かしと十文字透かしという２種類の透孔が穿たれている。確認できるほとんどが楕円透かしで、一部に十文字も穿たれている。硯面部は一部焼膨れもみられ、あまり使用した痕跡は認められない。硯面と外堤でU字溝を形成するが、外堤は欠損のためどこまで立ち上がるかは不明である。また、外堤の下部に凸帯が巡り、そこに筆立てと推定される突起物が貼付されているが、欠損のためその形状は不明である。

3900も、大形品である。外堤は低く、硯面との間に内面凸堤が付く。脚部は欠損しているため高さは不明だが、細長い長方形透孔が穿たれている。

3901～3903は、比較的小型の円面硯で、いずれも方形透かしをもつ。

転用硯（3904～3906）

3904と3905は坏底部外面に、3906は坏蓋内面にそれぞれ墨痕がみられ、転用硯として使用されたものと見られる。

三足壺（3907～3911）

3907～3910は、刻みを入れて獣脚とした脚部を丸底の壺下部に貼付したものである。口縁部は欠損するが、円形もしくは楕円形の体部に長頸が付く瓶形態になるものと思われる。3911は、刻みのない偏平な脚である。

異形壺（3912）

胴部に４単位の隆帯が巡る異形の小形壺で、頸部は締まっているので細頸が付くものと思われる。底部は欠損しており、このまま終わるのか脚付になるかは不明である。

碗（3913～3914・3916）

大小の須恵器碗である。3916はいわゆる小碗で、同形態の緑釉陶器の原形のような形状である。

皿（3915）

底部をヘラケズリした皿で、厚手の作りである。

【土師器】

皿（3918～3936）

口径が20cmを越える大型のものと、20cm以下の小型のものがある。口縁部が内彎してくるものが多いが、3929のように口縁外面にヨコナデを施して口縁部が外反するものもある。基本的に精製のものが多く、内面に放射状暗文や螺旋状暗文をもつものも多い。底部は基本的にヘラケズリしている。

坏（3937～3952・3963～3976）

3937～3951は精製の坏で、3951は高台を伴う有台坏である。内面に放射状暗文や螺旋状暗文をもつものも存在する。3937は、平坦な底部から体部が上方へ立直気味に立ち上がる。3938や3941は、口縁端部内面に強いヨコナデが施され、口縁端部がやや肥厚する。3949や3950は器形的に底部と体部の境界がやや不明瞭である。また、高台付の3951は、底部外面に「×」印を線刻している。

3952も有台坏であるが、調整にミガキを伴わず、基本的にナデ調整である。底部外面には、全体にやや薄いことや後世の傷もあってやや不明瞭であるが、線刻文字が存在する。高台にかかる部分の線刻も文字とすると３文字となるが、上２文字を１字を分割したものと考えると全体が２文字になる。前者の場合、「夫人人（もしくは水）」あるいは「奉人（もし

くは水)」、後者の場合「奉人」あるいは「奉水」となる可能性がある。いずれにせよ、文字としてはあまりこなれておらず、文字に習熟したものの手になるようには思えない。「夫」を含むものであれば、「夫」は「夷」の異体字であることから蝦夷との関連が、「奉」を含むものであればなんらかの祭祀行為（2文字目が「水」なら水の祭祀）に関わったものの可能性がある[9]。

3963～3976はナデ・オサエ調整の粗製の坏で、3975と3976は大型である。一部、古墳時代中期の碗状坏を含むかもしれない。3963の底部には木葉圧痕がみられる。3966や3970～3971のように底部と体部が明瞭に分かれないものと、3972や3973、大形坏3975や3976のように明確に分かれるものがある。

高坏（3953～3962）

上部に盤を積載する3953も含めて、高坏に一括した。3953を除いて脚部のみの破片である。3953は、盤内面に放射状暗文と螺旋状暗文をもつ。多くの土器が脚部を面取りにより成形しており、3954には面取り後の脚柱部にミガキを入れる。

多孔鉢（3977）

体上部に横位に円孔列を有する特異な土器である。

甕（3978～4007）

一部に弥生～古墳時代のものを含んでいる可能性がないとはいえないが、一応、古墳時代後期以降と判断した。法量が小（3977～3983）・中（3991～4003）・大（4004～4007）と分かれそうであるが、4001や4004・4006などは口径が体部径に優越する鉢形態をとる。外面調整は基本的にはハケ調整であるが、4002や4003は下半部をヘラケズリする。内面はハケやナデ調整のものが多いが、4003や4007などはヘラケズリ調整している。

甑（4008・4012）

把手をもつ体部がやや直線的なものを甑とした。残りのよい4012は、外面をハケ調整、内面上半をハケ、下半をケズリ調整する。

把手付鍋（4009～4011）

把手が付くが、体部がより球形を指向するものを鍋とした。口縁部はヨコナデしてハケを消し、体部にはタテハケを施している。

把手付土器（4013）

小さな深鉢形状の土器に把手を挿入した土器である。ナデ調整に拠っている。形状的にもあまり例を見ない土器で、あるいは韓式系土器の系譜に属するものかもしれない。

把手（4014～4015）

小さな把手が2個存在する。特に4015は、ミニチュア的な壺の胴部最大径の部分に横長の把手を横位に貼付し、中央を縦方向に穿孔する形態を取る。

志摩式製塩土器（4016～4019）

平底の鉢形態をとる志摩式製塩土器である。内外面ともにオサエや板状工具によるナデ調整のみの粗製の作りで、輪積み痕も顕著である。

知多式製塩土器（4021）

筒状の長い突起形態を有する知多式製塩土器である。本遺跡では、この1点のみを確認できた。

【緑釉陶器】

碗（4022～4025・4027～4029）

法量に大小があり、4022～4023・4029は小碗で、なかでも4023は把手付である。

段皿（4026）

内面に段をもつ段皿で、貼り付け高台である。

【黒色土器】

黒色土器は、いずれも内面のみが漆黒色を呈するA類である。以下、器種毎にみていく。

鉢（4030）

横方向の細かいミガキを施した薄手の鉢である。口縁部にヨコナデによる面をもつ。

坏（4033～4035）

底部から体部の立ち上がりがやや不明瞭な4033・4035と、明瞭に屈曲する4034があり、4035は体部に高台をもつ。

碗（4031～4032・4036）

4041は、口縁端部の処理方法が坏とした4034と共通しており、あるいは坏とすべきかもしれない。最も残りのよい4036は、内面体部に螺旋状の暗文がみられる。

【灰釉陶器】

瓶（4037）

球形の体部に外反する長頸の口頸部が付く。頸部と体部の境界となるくびれ部分は隆帯状に盛り上がっ

ている。

鉢（4038）

高台が付く鉢である。外面は丁寧なロクロケズリが施されている。

皿（4039～4040）

4039はわずかに彎曲しつつ斜め上方へ、4040は直線的に斜め上方へ延びる。4040の高台は、丸い紐状を呈した低い形状を呈する。

碗（4041～4046）

底部外面に墨書のあるものを中心に図示した。4041～4043は「●」、4044は「大川」と墨書されている。4045は、欠損のため文字か記号か判読不明である。4042のみ高台が丸い紐状形態のものである。

耳皿（4047）

体部両端を内側へ折り返した耳皿で、底部外面に「×」印を線刻している。

d　中世の土器

【陶器】

山茶碗（4048～4098）

図示した遺物が山茶碗の全てではないが、墨書をもつものが目立つ[注]。なかでも注目できるものは4076～4078の3点で、これらはいずれも花押を墨書したものとみられる。4076は、底部の内外に墨書が施されたもので、その形態は旧河道ＳＲ2出土の571 とも類似する。4077と4078は共に体部側面に記されたもので、非常に達筆な筆運びである。ひらがなで「いし」と書いた下に花押を施す。六大Ａ遺跡の山茶碗墨書は、土器側面の例は花押であることが多く、それでいうと4079も花押の可能性がある。

この他、4048が「又」、4064～4066は564などと同じで「ます」であろう。4067が「田」もしくは「里」、4069は底部外面に横位に「土土」、4072は底部外面に「京」もしくは「東」、4093は体部側面に「吉」と墨書されている。他のものには、津市里前遺跡出土品と共通する記号[11]やいまひとつ判読できない文字がある。

山茶碗小碗・山皿（4099～4116）

山皿にも墨書されたものが多い。いずれも底部外面に墨書されたもので、文字として判読可能なものは、4100が「万」、4101は「大」、4105が「十」、4106が「一」で、この他に記号文や欠損などのため判読不明の文字がある。

墨書をもたないものにも触れておくと、4108～4109が高台付きの小碗で、特に4108は深みのある薄手の体部を呈する。これらはほぼ12世紀代とみてよかろう。4110～4111は、高台付の山皿で、こちらは13世紀代である。

瀬戸・小型三耳壺（4133）

肩部に帯状の粘土を横位に渡して小さな橋状把手としたもので、13世紀の所産であろう。

常滑・甕（4135～4137）

常滑の甕の口縁部を３点図示した。13～14世紀の所産と思われる。

その他（4134・4138・4144）

4134は施釉の壺底部、4138は瀬戸美濃製品の擂鉢と推定される。口縁外面を肥厚させている。4144は施釉の碗である。

【磁器】

白磁碗（4117～4126）

口縁部が残る4117～4118は、口縁部が玉縁状を呈する。また、4119は、内面にハケ状具を装飾的に施している。4126は、口縁部の小破片であるが、口縁部のみ釉がかからない、いわゆる「口はけの白磁」である。

白磁小壺蓋（4132）

いわゆる「青白磁」とも呼称されてきたものである。ツマミは欠損するが、天井部に蓮華文を削り出す。内面の返りは小振りである。

青磁碗（4127～4131）

出土数は多かったが、小破片が多く、５点のみを図示した。4127は鎬蓮弁を施す。

【土師器】

清郷型鍋（4139～4140）

口縁部を三角形状に外側へ突出させた清郷型鍋である。中勢での出土は珍しい。

皿（4141～4143）

それぞれ形態差のあるものを抽出した。4141は小振りでやや厚手、4142は口縁内側のヨコナデによって口縁部が外反し、体部内面に稜線をもつもの、4143は、薄手で南伊勢でよくみられるものである。

e　土製品

土器のような厳密な時代性が限定できないものも

現しただけの簡略な作りである。蛇もしくは魚を表現しているかもしれない。

移動式竈（4362～4365）

いずれもハケ調整を施した土師質の作りである。4363～4365は炊き口を覆う鍔の部分である。4362は竈の上部部分とみられ、竈を動かす時に使用する把手は下向きに付くようである。

フイゴ羽口（4367～4371）

いずれも出土層位がⅢａ層もしくはⅡ層下部からの出土であり、古墳時代中期もしくはそれよりも古い時期の可能性がある。厚手で火を受けており、実際に使用されたものとみられる。4367は先端部の破片で、端部に向かって窄まっていく状況が窺える。

土管（4372～4407・4428～4430）

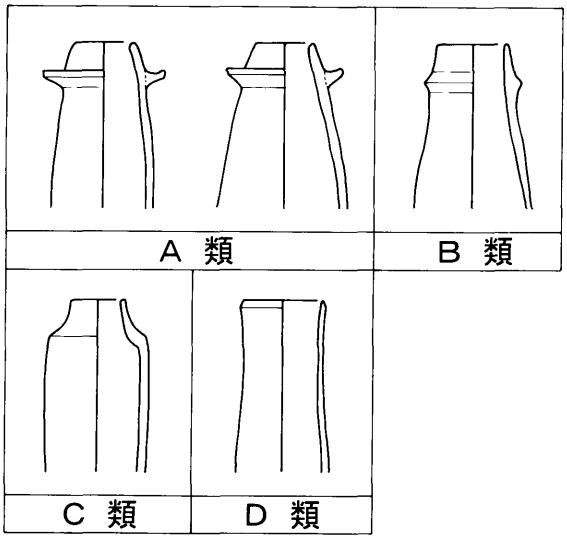
円筒状を呈した土製品を土管として一括した。Ⅰ層からⅡ層の出土である。須恵質焼成のものと硬質焼成のものがあり、傾向として前者がタタキ・ケズリを、後者がハケ・ナデ・ケズリを成形時に多様する。途中膨らんだり窄んだりするが、片側へ向かってかなり急角度で一方的に広がっていく4396や4397は竈の上部とすべきかもしれない。また、4400なども須恵器甑の可能性がある。

このような個々の器種認定の不確定さをもちつつも、形態的には以下のように分けることが可能である（以下、窄まる側の端部を便宜上口縁部として記述する）。

- **A類**　口縁の下に鍔をもち、体部以下と区画されるもの。須恵質のものはタタキ調整で内面に当具痕をもつもの、硬質のものはハケやケズリ調整のものが多い
- **B類**　口縁の下が山形に膨らみ、口縁部と体部が区画されるもの
- **C類**　口縁部が内側に窄んで体部以下と区画されるもの。
- **D類**　両端部が窄んだり膨らんだりするものの、両者の境界に明瞭な区画をもたないもの

破片ではなかなか判断しづらいものが多いが、以上の分類区分を実際に当てはめてみると、4375～4380や4388～4397がA類、4372や4398がB類、4401がC類、4374・4377・4405がD類ということになろう。

このうち、A類でも裾が極端に広がる例は、移動式の竈の可能性もある。B類の4398は山形肥厚部の下位に一対の棒状把手をもつ。C類の4401は、外面に縄タタキを施しており、瓦の調整との共通性が強い。D類の4374は片側（図上の上側）が屈曲して方形の開口部があり、コーナー部の繋ぎ材と推定される。また、4407は土管の部分にレイアウトしたが、何らかの土製品の台座になる可能性がある。



第123図　土管の分類

円筒埴輪（4408～4427）

Ⅱ層下部からⅢａ層を中心として出土している。焼成はいずれも硬質で、還元焔焼成に拠っていると思われる。4408～4409は、タガの下に円孔を穿っている。外面はタテハケ後ヨコハケもしくはタテハケのみ、内面はタテハケないしはナデ調整である。タガはどれも断面台形を呈し、極端に突出度の高いものや低いもの、M字形を呈するものはない。

方筒状土製品（4431～4439）

4434～4437を典型例とする。これらは破片資料であるため、実際に何個体あったのかは不明である。外面にケズリを施して表面の平滑化を図り、内面はナデ・オサエ調整を基本とする。各面は、直線というより僅かに外側への膨らみをもっている。

他のものは、タタキ手法であったり、薄手の作りであるなど典型的な方筒状土製品とはやや異なった特徴をもつため疑問も残るが、直線的に成形されていることから方筒状土製品の可能性を考えた。

不明土製品（4440～4442）

4440～4441は須恵質、4442は土師質である。4440

あるため、土製品として一括した。もちろん、遺物の配置や記述に関しては、その種別毎に配列した。

加工円盤（4145～4146）

4145は、内面にハケが残る土師器利用のもので、4146は陶器片を利用している。中近世には属しようが、細かい時期限定はできない。

土玉（4147～4259・4334～4338）

直径が2.4cm～4cm、20～40gで、球形を呈して1方向に貫通孔を有するものを基本とするが、さらに小さく穿孔のないもの等も一括した。用途はなかなか限定できないが、土錘もしくは祭祀具としての利用が考えられる他、紡錘車としても使えないわけではない。

4147～4259は、通有の土玉である。形態的には、ほぼ球状を呈するものと、貫通孔の上下がわずかに切り落とされているものがある。また、文様等を有するものもあり、4189は外面に丁寧なミガキ調整、4223は全面に円形刺突を施している。

4334以下はより小さいもので、4334・4335は穿孔もなされていない。また、4337は断面がソロバン状を呈して、法量的に小さいものの形状としては後述の紡錘車の形状に類似する。4338は、上下両端が凹んだ小型品である。

土錘（4260～4319）

断面が菱形を呈する4266～4268、円柱状を呈する4260～4265・4269～4270・4277、中央部が膨らみ両端部がやや細くなった細長い紡錘形状の4271～4276・4278～4319がある。このうち、菱形形状のものと円柱状のものは相対的に大型で、重量も重い。これに対して、紡錘形状のものは、小型で軽いものが多い。こうした土錘における重量・形状の差異は、漁撈の対象となった魚種の差異（水深のより深いところに棲んでいるか浅いところに棲んでいるか・それに関わるが魚の大小）によって使用する土錘に差異あったことを示すものであろう。今後、民俗資料などとの対比の必要性が望まれる。

紡錘車（4320～4333）

断面が長方形・台形・方形になるなど上下面を形成して、中央部に縦方向の円孔を穿つものを紡錘車として一括した。明らかに上下を切り落として上下面をもって断面形状がより球体に近い4326や4332～4333なども含めたが、これらは土玉の範疇にしたほうがいいのかもしれない。

4320や4327は断面長方形タイプのなかでもより偏平で、弥生時代の可能性があろう。これに対し、断面台形の4321～4322・4328は、石製紡錘車の形状と共通し、古墳時代に入ってからの所産であろう。

把手（4339）

土器の把手が外れただけのものかもしれないが、何らかの土製品の部分が外れたものである可能性を考え、ここに措定した。

土馬（4340～4360）

4340は、貼付粘土によって立髪（鬣）や耳、馬装などを豊かに表現した中空タイプの土馬である。胴部は、内面に輪積み痕が明瞭に観察できる。耳の欠落部には細い棒状の貫通刺突があり、焼成前に頭部と耳部とを細棒によって繋いでいたものとみられる。顔部は全体に方形に成形され、鼻は横2個の刺突、口は切り込みで表現される。頭部の精緻な成形とは異なり、体部は鞍部分の剥離痕から推定するかぎり表現はかなり省略され、実際の馬の大きさのバランス的にも頭部をより大きく表現している。

4341は、4340とは別個体であるが、それと同形態の土馬である。

4342は、上記2例とは異なり、小振りの中実タイプの土馬の頭部破片である。立髪や馬装をかなりリアルに線刻で表現している。

4343も、中実タイプの土馬の頭部破片である。円形浮文を貼付してその中央に刺突を施して目とし、立髪や手綱を線刻で表現する。かなり薄型の成形である。

4344～4360は、土馬の部品破片である。4340もしくは4341と同一個体になる部材が含まれているものとみられる。このうち4344は尻部分、4345～4346・4349は立髪、4347や4348は尾、4351～4357は足であろう。このうち4345は、頂部にキザミを施して立髪を表現している。立髪破片は、4340や4341とは接合せず、明らかに別個体になるものが含まれていることから、確認できる土馬総数は6～7個体あるものと推定される。

不明動物形（4361）

頭部破片である。刺突で目を、切り込みで口を表

は波状口縁で縦隆帯によって器面を区画したもの、4441は底部からラッパ状に大きく広がる器形をなすもの、4442は瓢箪形のくびれ部に隆帯状の突出部を巡らしたものである。

瓦（4443～4480）

軒瓦はなく、平瓦及び丸瓦ばかりである。4443～4467は外面に縄タタキ、内面に布目をもつ平瓦もしくは丸瓦、4468～4469は外面ナデ、内面に布目をもつ丸瓦、4471は外面ケズリ、内面に布目をもつ丸瓦である。

4470は、内外に布目を有するいわゆる凸面布目瓦である。

4472～4480は、外面に特徴的な花菱文をスタンプしたもので、志登茂川を挟んだ対岸に所在した川北城からも出土しており鎌倉時代の所産と考えられている[12]。

f　石製品

石製模造品を除く、石製品を扱う。

砥石（4481～4519）

ＳＤ１最下層から最上層までいろいろな時期のものが出土しており、一応、所属層序毎にレイアウトした。なかには、井泉や土器群周辺から出土したため既に述べたものもあるが、これらも含め再度全体を通してみておきたい。

4481～4483はⅢｂ層から出土したもので、そのなかでも4481は土器群１、4484は井泉４、4482と4485も下部からの出土である。

このうち、4481は薄手で方形の大形のもので、裏表２面を磨面とし、中央に向かって僅かに凹んでいく。4485も破片資料であるが、同形態である。4482は、断面方形で、明瞭な凹面を持たない。4483は、中央が大きく凹み、縁部に対して中央部が極端に薄くなっている。4484は、砥石というよりは磨石というべきであろう。4486～4488は小形で、手持ちの携帯用の砥石である。

4489～4491はⅢ層からの出土であるが、その細別層序はわからなかった一群である。いずれも小形の手持ちタイプの携帯用の砥石である。

4492は、石組井泉である井泉１の石組の構成材となっていた砥石である。断面三角形で、うち２面を磨面としている。

4493～4496は、Ⅲａ層出土の砥石である。このうち、4493～4495は、大形の据え置きタイプの砥石である。4494と4495は断面方形であるが、4493は断面が多面体形状をとっており、10面程度の磨面に分割されている。いずれも磨面はあまり凹んでいない。4494には、わずかではあるが赤色顔料の付着が認められ、あるいはこれで赤色顔料の原材等を擦っていた可能性も考えられる。

4497～4510はⅡ層出土のもので、このうち4497～4499、4506などはその下部からの出土である。4500や4502などは据え置きタイプと見られる砥石もあるが全体に小形で、携帯用のものが多い。4497や4504は端部に紐掛け用とみられる小円孔をもついわゆる提砥とされるものである。なお、4498は、全体に薄すぎるため、鏃などの表現はないものの、磨製石剣の破片とすべきかもしれない。

4511～4519は、Ⅰ層およびこれを覆う調査時の通称「０層」からの出土である。4512や4514などやや大きめのものもあるが、小形のものが多い。4518などは、薄手で長方形の整った形態である。

その他の石製品（4520～4522）

砥石や後述の滑石製品を除く石製品を一括する。

4520は、Ⅲｂ層出土の裾広がりの円柱状の石製品で、端部より下がった位置に別材と擦り合った痕跡がある。石斧の基部の可能性もある。

4521は、Ⅲｂ層出土の軽石である。竪穴住居などからしばしば軽石が出土することがあり、ここでも一応遺物としてあげておいた。

4522は、Ⅰ層出土の石製硯である。現用のものと同様の形態をしている。

g　石製模造品

紡錘車（4523～4528）

4523は土器群55出土、その他はⅠ～Ⅱ層の埋土出土である。4523～4525・4527はやや厚手で、上面が狭いのに対して、4526と4528は上面が広いより偏平な形状を呈する。4523～4525は製作時の削り痕が顕著であるのに対し、4526や4527はその後の磨き痕と思われる線状痕が顕著にみられる。

子持勾玉（4529）

親勾玉部、小勾玉部ともに本来の勾玉からは形骸化した形状をもつ。親勾玉部は、断面長方形で頭部

端部を切り落とすが、頭部と胴部の区別がない。小勾玉部は、すでに勾玉形態を無くして突起状となっているが、腹部に1個、背部に5個、側部に3個（表裏で6個）が台形状に削りだされ、特に背部のものは各個が独立せず、連山状に推移する。本例で特筆されることは、頭部の穿孔部に滑石製臼玉が1個嵌入していることある。意図的なものか、臼玉とともに紐で結んでいたものが偶然に入った使用形態を示すものか意見が分かれるところであるが、簡単には抜けないことをみるとやはり意図的に嵌入させたと考えるのが自然であろう。なおこの臼玉は、中央部が膨らんで稜線をもつタイプである。

勾玉（4530～4566）

断面が円形を呈するものと、薄くなって長方形を呈するものがあるが、前者は、最大のものでも直径2.8cmしかなく、全体に小形ものが多い。木組み遺構から出土した4549のみが淡青緑色の滑石以外の石材を原料としているが、その他はいわゆる滑石製である。断面形状に形態差を加味して以下の四形態に分類できる。

- **A類**　断面形が円形ないしは楕円形のもの
- **B類**　胴部の断面形は円形ないしは楕円形であるが、穿孔のある頭部は平坦化して断面が長方形を呈するもの
- **C類**　全体が平坦化して断面長方形になるが、頭部と胴部（尾部）で形態差があるもの
- **D類**　より薄型で、頭部と尾部の形態差がほとんどないもの

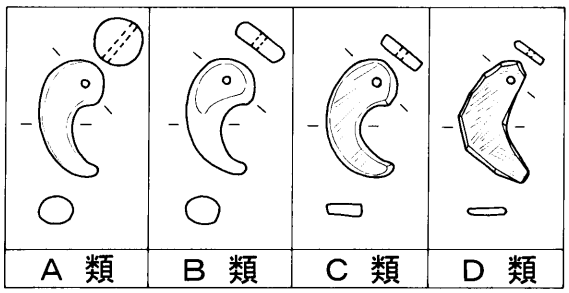
このうち、A類には、4531～4532がある。最大の4530でも全長2.8cmと小振りである。

B類には、4533～4543・4545がある。全長2.8cmの4533を最大として、小さいものが多く、4543などは全長わずか1cmにすぎない。

C類には、4544・4546～4547・4550・4554・4560・4563などがある。

D類には、4548～4549・4551～4553・4555～4559・4561～4562などがある。4548～4549は非常に小振りで、B類やC類の極小品の延長線上にあるものと思われる。また、4555や4557などは、腹部を緩く抉った三日月形の形状をとる。

4564～4566はいずれも欠損品で、薄型の棒状形を呈して端部に小孔を有する。一応、直線的なD類勾玉の4562のようなものの形態がさらに進行したものと考えて勾玉としたが、直線的な4564や4566については剣形とすべきかもしれない。



第124図　勾玉の分類

4543が井泉7、4562が井泉1から出土している。また、礫敷部等からの出土も目立つ。

剣形（4567～4568）

大小2点が存在するだけである。4567は片側に寄った変形菱形で、中央部に鎬をもつ。小孔が2個開けられているが、片側は極めて端部寄りの位置にあるため、あるいは本来もう少し大きかったものを削り落として作り直しているのかもしれない。

4568は、刃部と軸部が明瞭に区別されたより整った形状である。

双孔円板（4569～4585）

滑石製の円板ないしは楕円形板に2個の小円孔を穿ったものであるが、4570や4569は円孔がやや片側に寄っており、あるいは別のものになるのかもしれない。4572のような幅広のものから、4583のような極めて小さいものまで存在し、円孔の位置も中央に2孔を密接して穿つ4572から、両端部に穿つ4576のようなものまでがある。

単孔円板（4586～4591）

円板のほぼ中央に、1孔の穿孔を有するものである。4586はやや欠損部が大きく、双孔円板の可能性も残すが、一応単孔円板として扱った。4574が土器群53、4576が井泉7周辺、4590が土器群55から出土した。

石製加工円板？（4592）

石製の円形の板である。細部の研磨は仕上がっていないが、円孔を施す前の有孔円板などの未製品の可能性がある。

紡織具（4593～4594）

小さな棒状具の両端を有頭状に作り出しており、紡織具を模した石製の紡織具形と思われる。

棗玉（4595～4596）

中央部が膨らんで縦断面形が六角形を呈した棗玉である。やや細長い4595とやや偏平な4596がある。

管玉（4597～4622）

いずれも断面の直径が２～５㎜の細長い管玉である。4613や4619～4620はより小さい。4604～4605は土器群53から木製刀形などと一緒に出土した。

滑石製品の原石？（4623～4625）

穿孔等はなされておらず、製品とはいい難いが、石材的には滑石製品と同等で、若干人工も加わっていそうな石である。滑石製品の原石もしくは未製品の可能性がある。特に、4624は全面に磨き痕がみられ、あるいは管玉等の製作途上品かもしれない。

臼玉・土小玉・ガラス小玉（4626～6792）

ほとんどが埋土のフルイ掛けにより出土したもので、第405図～第410図の実測図に「ガ」と付したものがガラス小玉、「土」と付したのが土小玉である。すでに付設施設出土遺物や土器群出土遺物でも触れてきたように、レイアウトは遺構や土器群、あるいは層序や小地区毎に配列している。

圧倒的に多いのが臼玉で、子持勾玉4529の目に嵌入していたものを除いて、総数2159個を確認した。もちろん、この数値はフルイ掛けを行った部分が極めて限定されているため、実数的にははるかに多い量がＳＤ１には存在しているものと推定される。

臼玉の形態分類を行って当該遺物を編年研究の俎上に載せた篠原祐一氏の指摘[13]を参考とし、六大Ａ遺跡出土の臼玉を分類すると、以下のような６タイプに分類することができた。なお、この場合、穿孔の行われた方向を縦方向とし、これに平行する部分を側面、直交する部分を上下面とする。

Ａ類　やや縦長で、側面が丸く膨らむ棗玉形状のもの。上下面も丁寧に研磨される。直径６㎜以下

Ｂ類　側面が上下２段に研磨され、結果としてその間が稜線を形成して膨らみ、上下面も丁寧に研磨されて上下が平行なもの。直径６㎜以下

Ｃ類　側面の研磨はＢ類と同じであるが、上下研磨の片側が不十分で、片面が斜めに切り落とされたままなもの。直径６㎜以下

Ｄ類　側面研磨は１段になるが、上下は平行で、断面形が方形ないしは長方形を呈するもの。直径６㎜以下

Ｅ類　側面研磨はＤ類と同じであるが、上下研磨が不十分で、片側が斜めに切り落とされたままのいびつなもの。直径６㎜以下

Ｆ類　形状・研磨はＤ・Ｅ類と共通するが、直径８㎜を越えて粗雑化したもの

以上の形態を出土地点毎に簡単に概観すると、滑石製品が含まれる最も古い時代の層序であるⅢａ層ではＢ類でも直径４㎜程度の小形のものが多い。Ⅱ層下部のものは、Ｂ・Ｃ類を中心にＤ・Ｅ類も含まれ、６㎜のやや大形のものも散見される。飛鳥時代の須恵器も出土した井泉12出土の4823はＦ類で、Ⅱ層からⅠ層の上部層から出土しているものはＥ類やＦ類の粗雑化したものも目立つようになる。

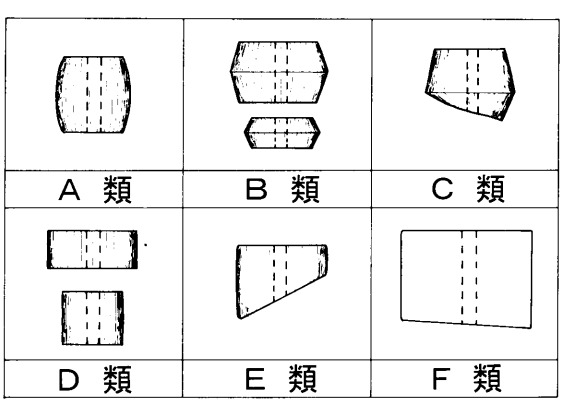
ｈ　金属製品

銅鏃（6793～6800）

6793は、有孔銅鏃で、身部に３個２対の計６個の小円孔が開いている。6749～6800は、無穿孔の銅鏃である。いずれも身の中央に鎬をもつ。基部や軸部に木質の残存が全くなく、矢となっていたかどうかは疑問である。

鉄矛（木835）

芯として木材を利用しているため、すでに『木製品編』で報告したが（報告番号は『木製品編』の番号）、再説しておく。



第125図　臼玉の分類

割材を断面円形に削り出した環孔材（樹種不明）を柄として、それに鉄矛を覆いかぶせたもので、柄は先端にいくに従って漸移的に尖っていく。目処孔は確認できなかった。

銭貨（6801～6806）

すべて銅銭である。6801はいわゆる皇朝十二銭の四番目（796年発行）である。隆平永寶、6802は天聖元宝、6803は紹聖元寶である。

（註）

① 独立行政法人奈良文化財研究所の光谷拓実氏に分析していただいた。

② 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981。以下、古墳時代須恵器は同書に拠る。

③ 933については、当センターの山田猛氏と岡山市教育委員会の扇崎由氏よりご教示を得た。

④ 赤塚次郎「山中式土器」『山中遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1992。以下、山中式土器については、同書に拠る。

⑤ 川崎志乃・伊藤裕偉『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001。以下、島貫編年は同書を参照

⑥ 赤塚次郎「廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990。以下、廻間編年は同書を参照

⑦ 田口一郎『元島名将軍塚』高崎市教育委員会　1981

⑧ 岡戸哲紀『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』（財）大阪府文化財調査研究センター 1995

⑨ 本線刻土器の判読については、斎宮歴史博物館榎村寛之氏のご教示を得た。

⑩ 六大A遺跡出土の墨書土器については三重県史編纂室小林秀氏のご教示を得た。

⑪ 川崎志乃『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002

⑫ 津市教育委員会中村光司氏のご教示に拠る

⑬ 篠原祐一「円玉研究私論」『研究紀要第３号』（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995

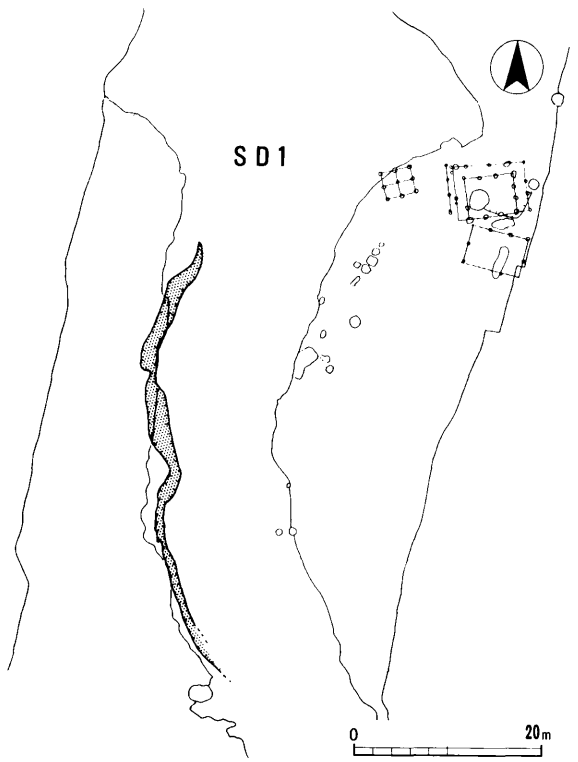
第６節　ＳＤ１上面「肩溝」

ＳＤ１検出時、ほぼ上流部の左岸肩部と重複して幅１～２ｍの溝が確認できた。調査時点では、ＳＤ１の左岸肩部検出ラインとほぼ一致していたことから、これを「肩溝」として把握した。別の溝とするより、ＳＤ１が機能した最終段階の姿として位置づけが可能と判断したことから、ＳＤ１全体の掘削の前にこの「肩溝」のみを掘削して、埋土の遺物取り上げを行った。しかしながら、かなり遺物に新しい時期のものまでを含んでいたため、この溝だけの精密図化は行わず、遺構カードによる略測図の作成に止めた。

埋土には、ＳＤ１本体から紛れ込んだと推定される古墳時代の遺物から近世の遺物の他、礫も多量に含んでいた。

出土遺物（6807～6813）

6807は須恵器甕、6808は古墳時代中後期の土師器坏、6809は陶器山皿、6810は近世陶器碗、6811は近世の軒平瓦、6812は平瓦、6813は丸瓦である。各時代のものを含んでおり、ＳＤ１本体部からの混入遺物が多い。　（穂積）



第126図　ＳＤ１上面肩溝位置図（１：800）

Ⅵ　集落域の調査

中段及び上段に存在する、大溝ＳＤ１（付設施設を含む）以外の遺構・遺物を一括する。なお、以下で報告するもののなかには、明らかにＳＤ１と密接な関連を有する古墳時代の掘立柱建物を含むが、建物はＳＤ１と有機的な関連にあるものであれ付設施設として扱わず、独立した遺構番号を与えた。

第１節　集落域の遺構

１　古墳時代の遺構

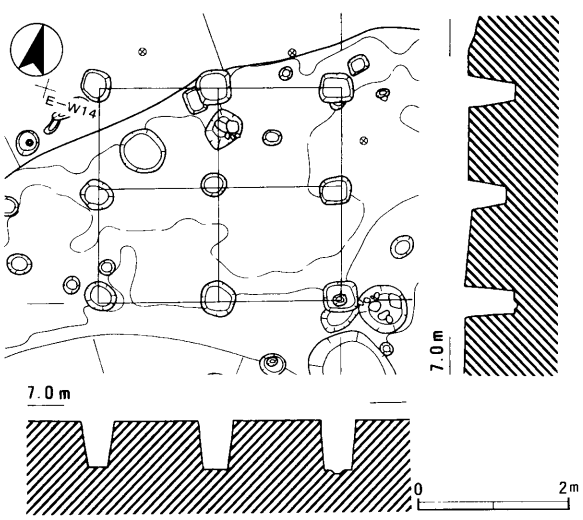
【掘立柱建物・柱列】

ＳＡ８

ＳＤ１下流部右岸の肩部に沿って、約９ｍの長さで存在する柱列である。途中、やや不連続があり、あるいは２本の柱列が重複している可能性もある。一応、一列とした場合、検出できなかった部分もあるが、短い柱間で推定12間程度存在する。ＳＤ１の付設施設として扱った家屋壁材は、ここより最短距離で南側８ｍの地点となり、何らかの関連があるかもしれない。図示しうる程の出土遺物はないが、古墳時代の遺物が出土している。本遺構が目隠し塀的な柵として機能していたのか、あるいはＳＤ１側にさらに平行する柱列の存在を想定して掘立柱建物の可能性を考えるのかは明確ではないが、この位置に何らかの建物を伴う施設が存在したであろうことは是認してよかろう。

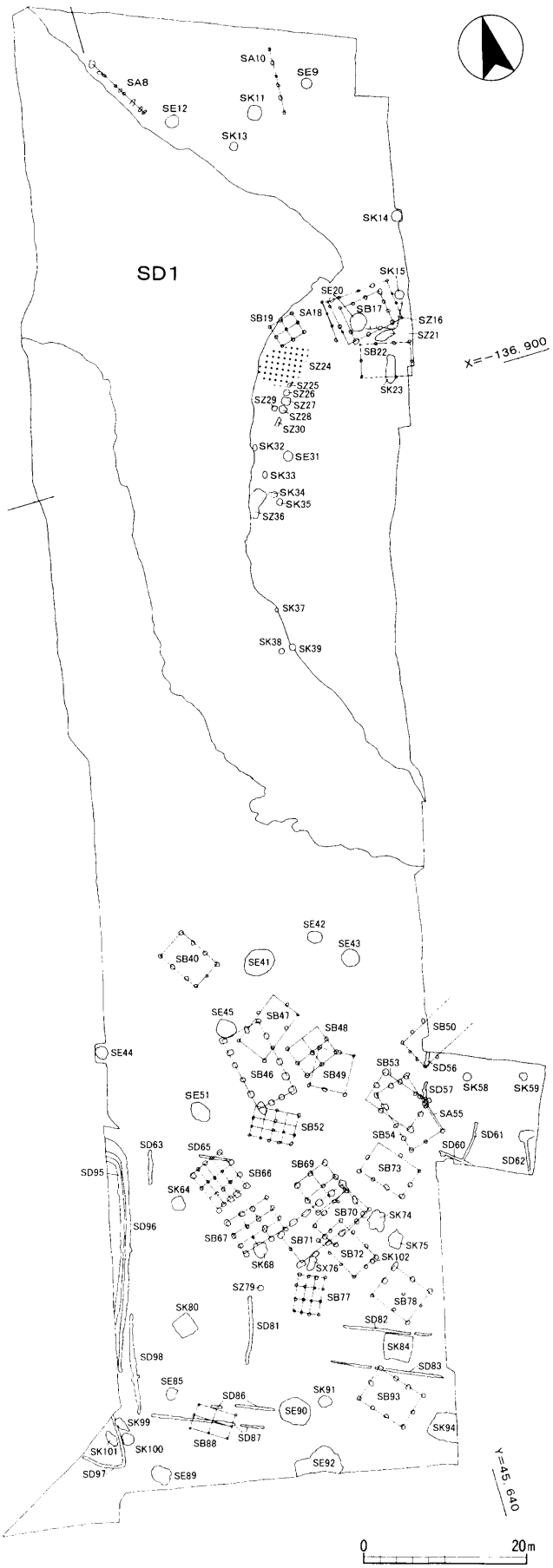
ＳＢ19

２間×２間（3.3ｍ×2.9ｍ）の小規模な総柱建物で、棟方向はＮ15°Ｗである。側柱の柱掘形は一辺40～50㎝の隅丸方形で、検出面からの深さが60～70㎝を測る立派なものである。これに対し、建物中央の束柱は径30㎝の円形と一回り小さい。この建物は前述のＳＤ１付設施設の貼石を取り外した後から確認できたことから、明らかに貼石に先行するもの



第127図　ＳＢ19実測図（１：100）

第128図　ＳＡ８実測図（１：100）



第129図　中・上段遺構配置図（１：800）

である。柱穴からも古墳時代の遺物が出土しており、古墳時代の掘立柱建物ということができる。そういう意味では、本建物は、ＳＤ１に付属する建物とみてよかろう。

ＳＢ17

３間×３間（5.2m×4.3m）のほぼ正方形プランの東西棟の掘立柱建物であるが、西・北・東の三面に併行する柱列があり、庇の可能性を考えた。内部に束柱は発見できず、いわゆる総柱建物の可能性は低い。外側三面を庇と考えた場合、母屋と庇部の柱筋の通りは悪い。こうした「庇」（いわゆる「縁」の可能性もある）を有する正方形プランに近い掘立柱建物は、いわゆる「四面庇付大形建物」として近年古墳時代の類例が増加してきているが、本例も南側を欠くものの、それに類似した構造をもつ建物であろう。

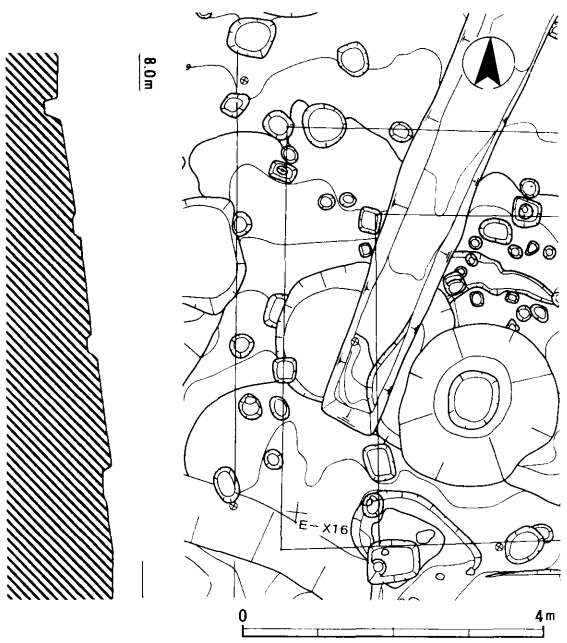
ＳＡ18

ＳＢ17の西側に存在する。一応柱列として把握したが、柱通りは悪い。ＳＢ19と主軸を一致する。ＳＤ１との直接の重複関係はないが、ＳＢ19を介してＳＤ１との密接な関連が窺える。

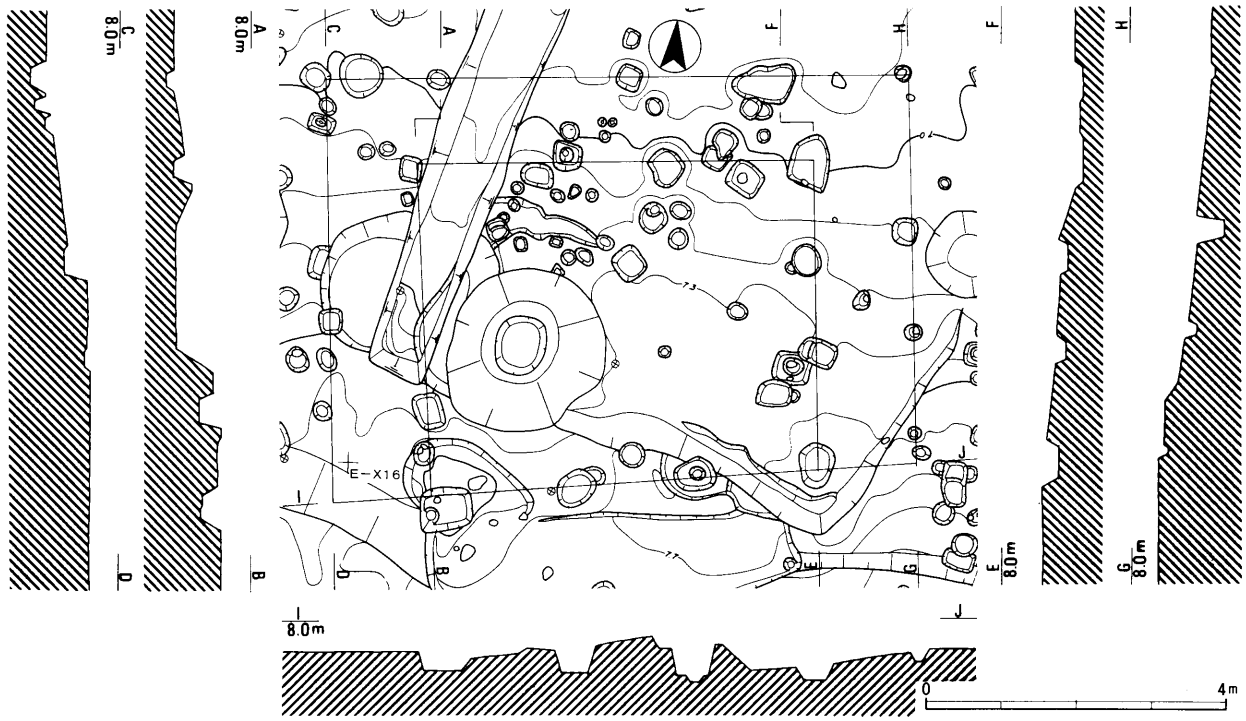
【土坑】

ＳＫ74

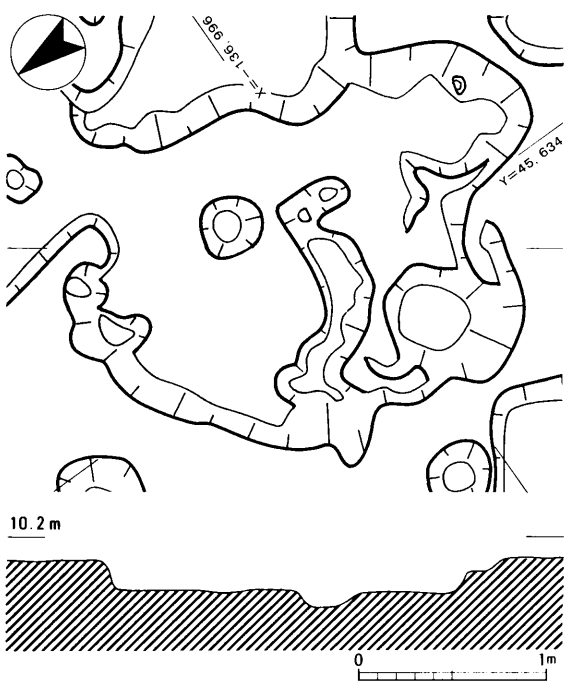
上段に所在した遺構である。重複が激しく、本来の形状は捉えにくいが、一応、長径2.5m×短径２



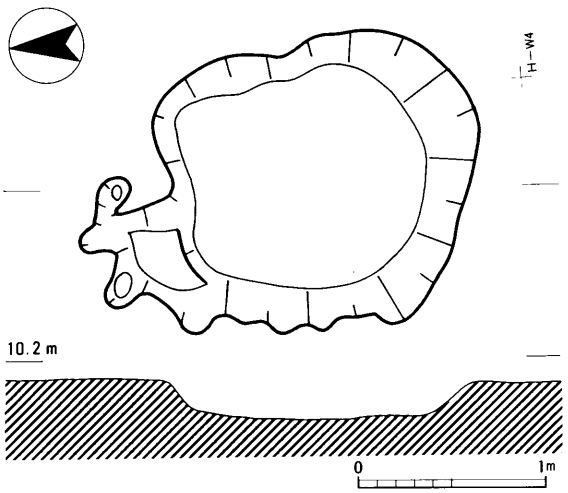
第130図　ＳＡ18実測図（１：100）



第131図　ＳＢ17実測図（１：100）



第132図　ＳＫ74実測図（１：40）



第133図　ＳＫ64実測図（１：40）

mの台形状の土坑で、深さは検出面から約20cmとして把握した。埋土より古墳時代前期後半の遺物が出土している。

ＳＫ64

上段に所在した長径1.7m×短径1.6mを測る略方形の土坑で、検出面からの深さは約20cmである。埋土からＳ字甕Ｄの出土がある。

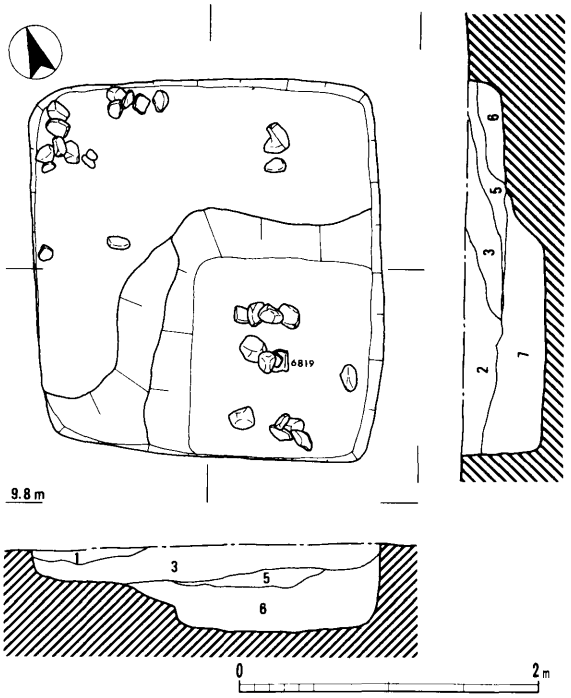
ＳＫ80

上段に所在した南北2.55m×東西2.35mの方形プランの土坑で、南東隅がほぼ1.7mの方形に一段深く掘り窪められている。周溝や主柱穴、焼土が確認できず、竪穴住居の可能性は低く、土坑とした。

【不明遺構】

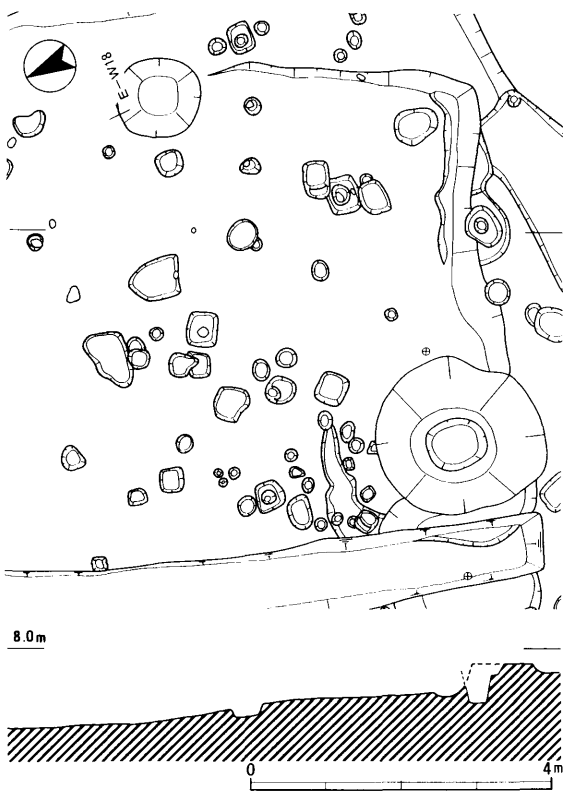
ＳＺ21

長径1.75m×短径1.2mを測る長細い不定型の掘り込みで、検出面からの深さは10cm弱を測る。埋土に

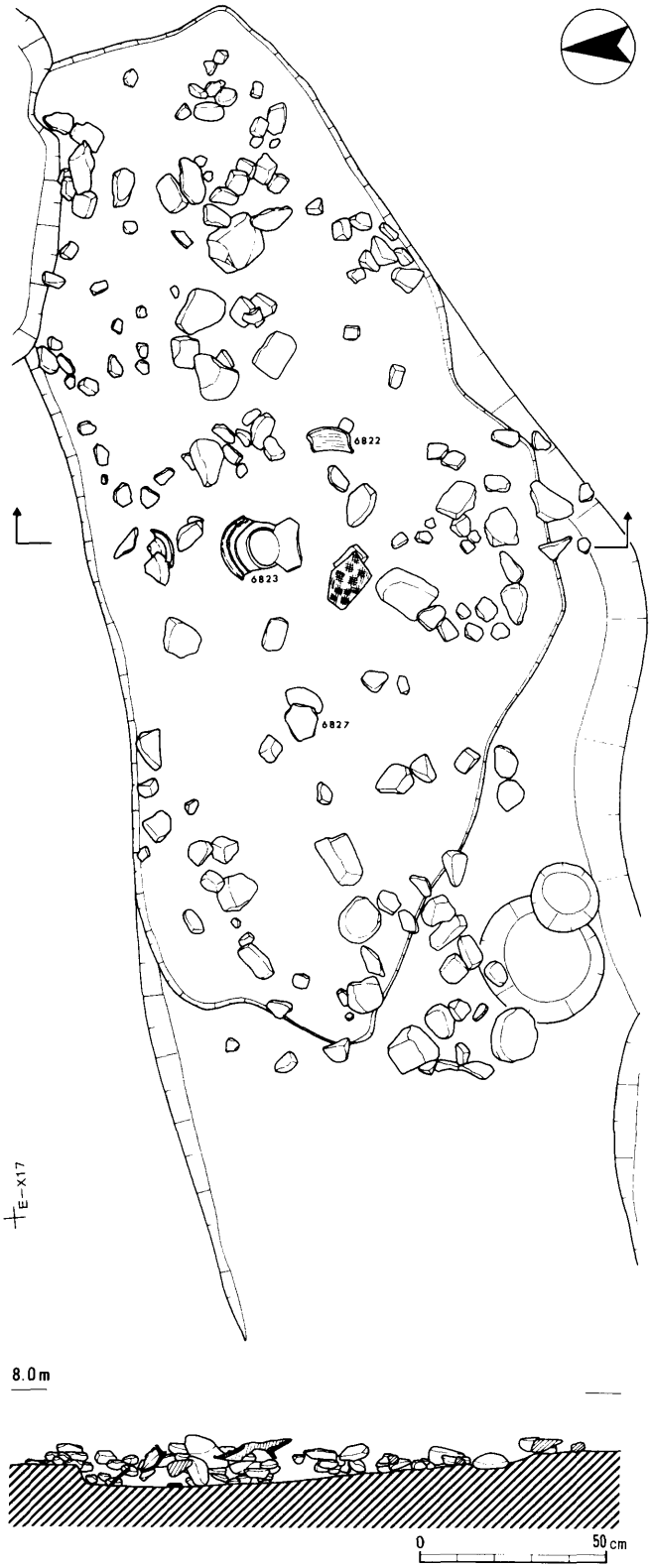


1 黒色粘質土　　2 黒褐色粘質土
3 黒褐色粘質土と淡黄色粘土粒の混土
4 黒褐色粘質土(淡黄色粘土粒含)
5 黒褐色粘質土と淡黄色粘土粒の混土
6 淡黄色粘土粒(黒褐色粘質土含)

第134図　ＳＫ80実測図（１：50）



第135図　ＳＺ16実測図（１：100）



第136図　ＳＺ21実測図（１：20）

は土器とともに礫も入っている。５世紀後半から末の遺物が出土している。

ＳＺ16

ほぼＳＢ17と重複して存在する竪穴住居状の掘り込みであるが、北側が削平のためわからないのをはじめ、ＳＥ20や攪乱などの重複のため確定することはできず、不明遺構とした。ただし、南側に一部周溝状の小溝が存在するなど竪穴住居との共通性も確かに存在する。埋土より、５世紀後半の遺物が出土している。（穂積）

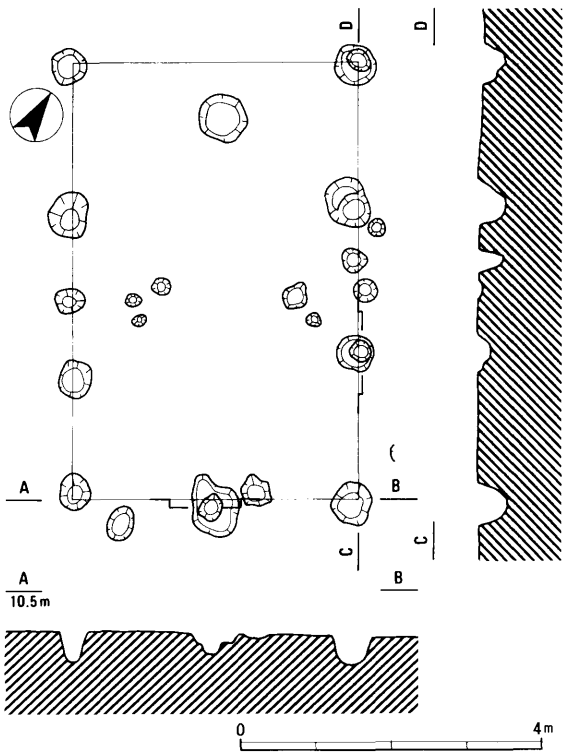
2　古代の遺構

【掘立柱建物・柱列】

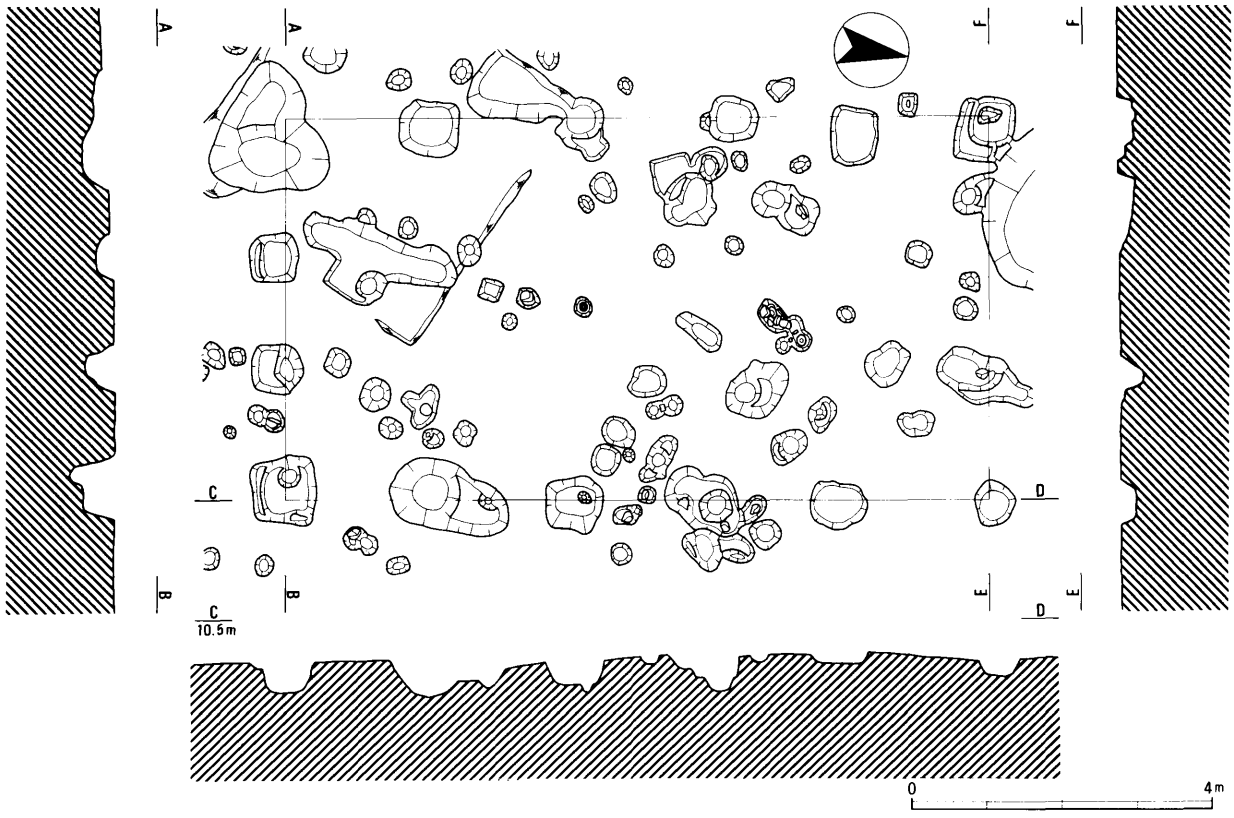
ＳＢ40

桁行３間（5.9m）×梁行２間（3.9m）の側柱建物で、棟方向はＮ32°Ｗの南北棟である。当遺跡調査区内のこの時期の建物としては最も北に位置する。柱掘形は円形のピットがほとんどで、径はほぼ0.4～0.5mである。柱痕が残るものや根石があるピットはない。

出土遺物は細片ばかりだが、中世の時期のものはなく、それ以前と考えるのがよいだろう。



第137図　ＳＢ40実測図（１：100）



第138図　ＳＢ46実測図（１：100）

ＳＢ46

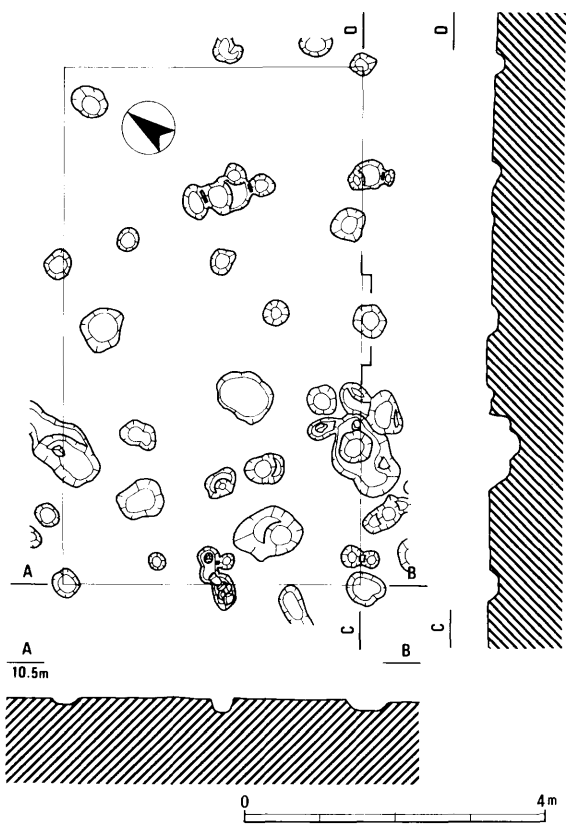
ＳＥ45の南に位置する桁行５間（9.5m）×梁行３間（5.2m）の側柱建物で、棟方向はＮ13°Ｗである。今回検出の掘立柱建物の中では、ＳＢ71と並び最も広い面積をもつ。ピットには方形のものが多く、径も0.5～0.8mと比較的大きい。柱穴の埋土もほぼ暗褐色土で揃う。

土師器甕の出土から８世紀代と考えられる。

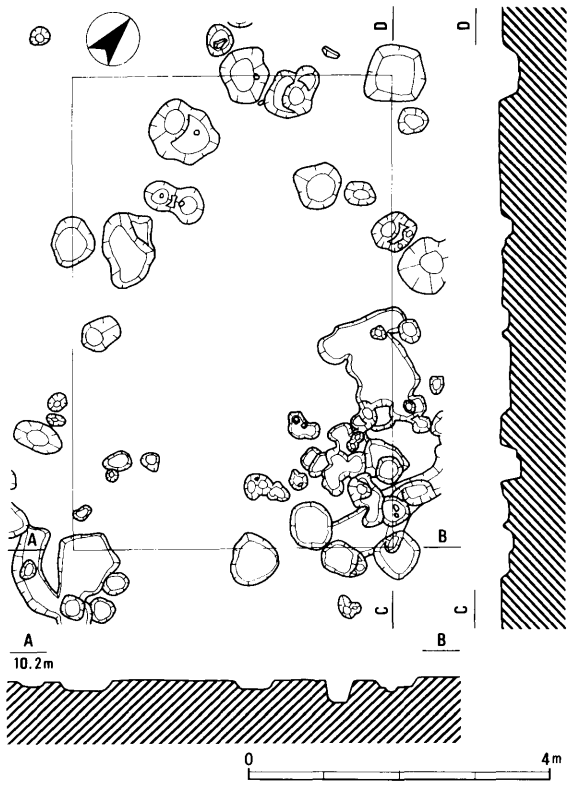
ＳＢ47

建物北辺の柱穴の検出が不十分であったため疑問が残るが、掘立柱建物の可能性が考えられるため報告する。ＳＢ46と重複する３間×２間の側柱建物で、7.0m×4.0mを測る。棟方向はＮ36°Ｗの東西棟である。柱穴は比較的小さい円形柱穴で、埋土はほぼ暗褐色土である。北西隅の柱穴は検出することができなかった。Ｈ－Ｓ７　Ｐ５には小石が多く詰まっているが、他の柱穴ではそれが見られず、根石ではなかろう。ＳＢ46と柱穴が重複するが、切り合い関係からＳＢ46の方が先行する。

出土遺物は細片ばかりだが、ＳＢ47の方がやや新しい遺物が入っているように思われる。



第139図　ＳＢ47実測図（１：100）



第140図　ＳＢ53実測図（１：100）

ＳＢ53

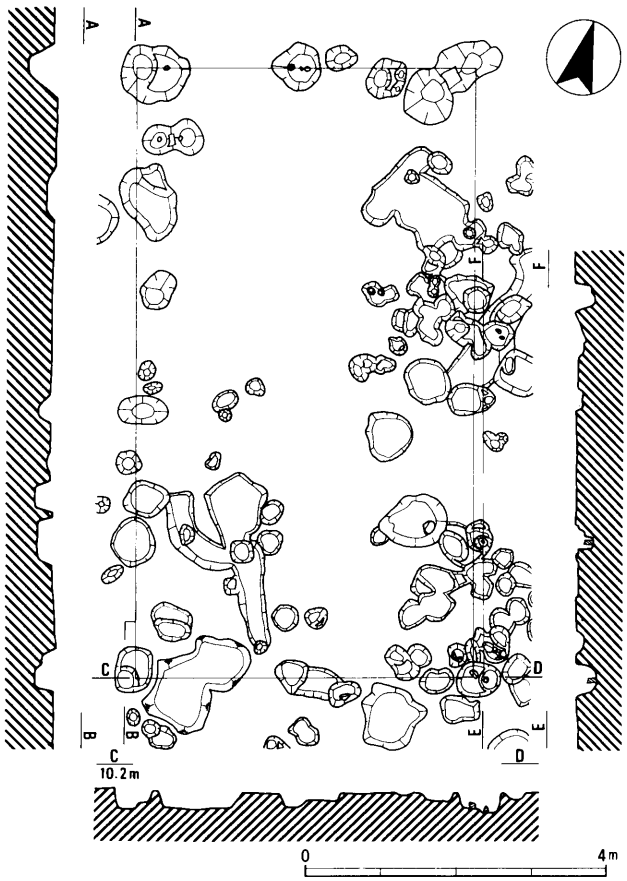
ＳＢ54・ＳＡ55と重複する桁行３間（6.4m）×梁行２間（4.3m）の側柱建物で、棟方向はＮ46°Ｅである。Ｌ字形の柵である可能性もあるが、ここでは建物の可能性をより強く考えた。建物南側のピット２個を検出することができなかったが、柱間はほぼ2.1m等間である。柱穴は径0.6m程度の隅丸方形のものが多い。

遺物は土師器の小片ばかりだが、８世紀後半から９世紀代であろうと考えられる。

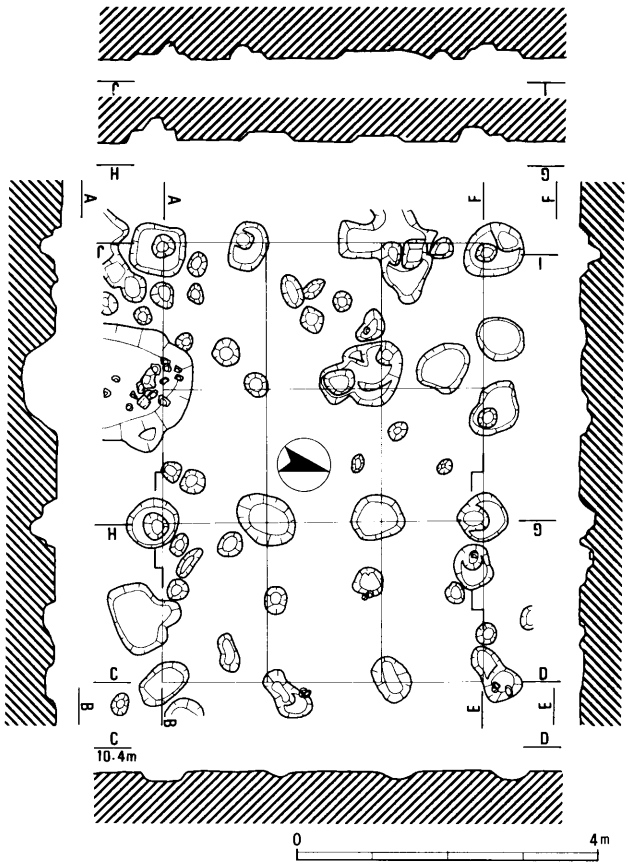
ＳＢ54・ＳＡ55

ＳＢ54は、桁行５間（8.1m）×梁行２間（4.5m）の側柱建物で、棟方向はＮ14°Ｗの南北棟である。ＳＢ46と規模・方向がほぼ同じで、同一プランと見てよい。時期も同じ８世紀代であろう。しかし、柱間はやや不揃いで、柱穴の規模がＳＢ46に比べてやや小さい。

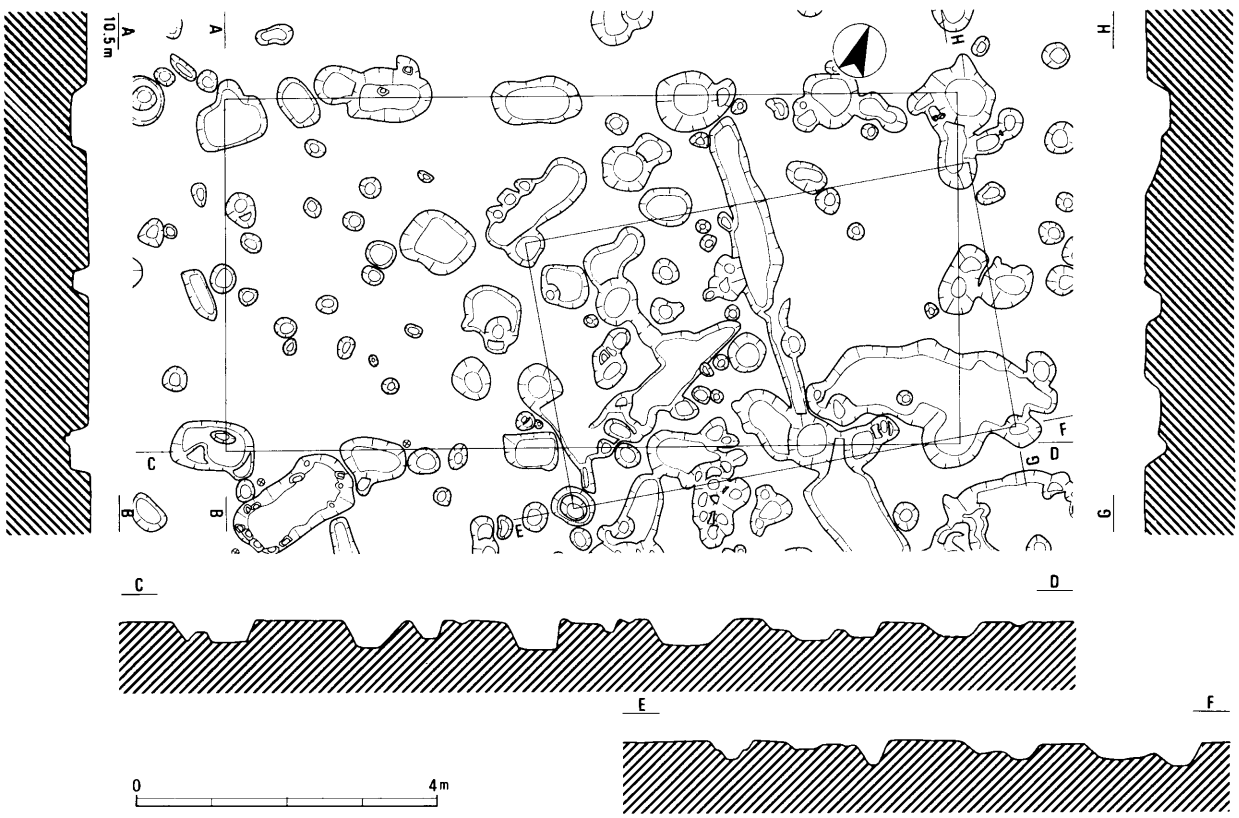
ＳＡ55は、ＳＢ54のすぐ東に存在する柱列であり、３間分を検出した。なかでもＨ－Ｖ12　Ｐ８には柱痕が残る。方向はＮ14°Ｗである。一応、独立した柱列として把握したが、ＳＢ54に重複された掘立柱建物の可能性もある。



第141図　ＳＢ54・ＳＡ55実測図（１：100）



第142図　ＳＢ67実測図（１：100）



第143図　ＳＢ70・ＳＢ71実測図（１：100）

ＳＢ67

ＳＢ66の南に位置する桁行３間（5.8m）×梁行３間（4.3m）の総柱建物である。棟方向はＮ15°Ｗで、柱通りは比較的良い。東柱のうちの一つが他の柱穴と比較して異常に小さく、やや疑わしい。またＳＫ68によって柱穴が１つ消滅している。

柱痕が残存していたＨ－Ｗ５　Ｐ８から10世紀後半の遺物が出土しており、時期的にはおそらくその頃のものと思われる。

ＳＢ70

集落域の中央部では建物が非常に集中して確認されており、その一画にある掘立柱建物である。

桁行３間（6.1m）×梁行２間（3.5m）の側柱建物で、棟方向はＮ31°Ｗである。柱掘形径は、ほぼ0.6mで、根石や柱痕などは見られない。

良好な出土遺物はないが、ＳＢ40と棟方向がほぼ一致するため、同時期の可能性が高い。

ＳＢ71

建物が非常に重複する部分の中央に位置する、桁行５間（9.8m）×梁行２間（4.6m）側柱建物で、棟方向はＮ20°Ｗの東西棟である。ＳＢ46やＳＢ54とほぼ同じ規模を持つ。

出土遺物等から、８世紀末の所産と考えられる。

ＳＢ72

建物集中部分にある桁行３間（6.2m）×梁行２間（3.7m）の側柱建物で、棟方向はＮ27°Ｗの南北棟である。柱掘形は、径0.5m以下の円形を基本とする。

出土遺物から、10世紀代前後と考えられる。

【溝】

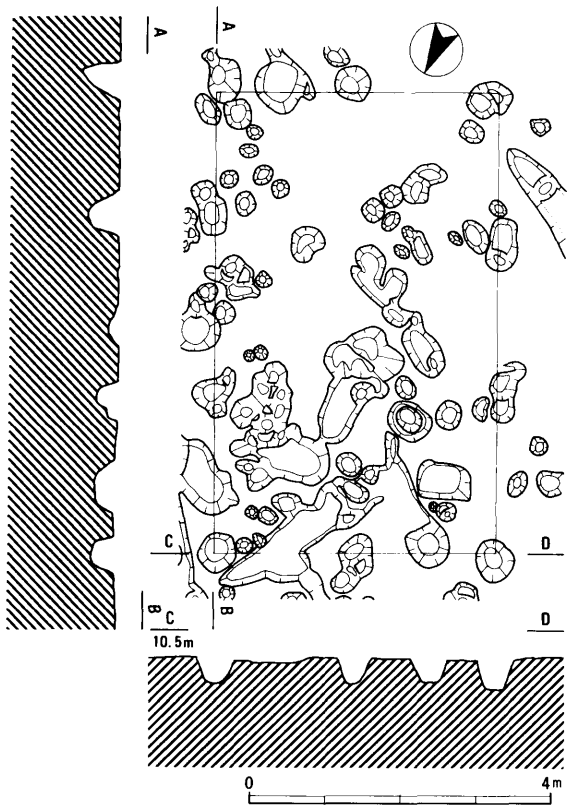
ＳＤ62

今回の調査区内で最も東に位置する遺構である。最大幅が1.0m、最小幅が0.4mで、深さは0.2mを測る。形状はＬ字形を呈しており、何かの区画溝であると考えられる。溝の軸方向はＮ10°Ｅで、出土遺物から９世紀代の時期であると考えられる。

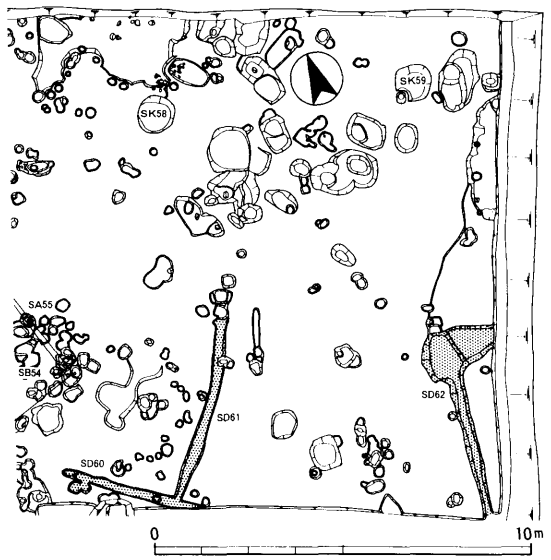
【井戸】

ＳＥ9

ＳＤ１の北岸にあり、ＳＡ10の東に位置する井戸で、径は1.3m、深さは1.3mである。人頭大の礫が多く入っており、曲物の破片の出土から底には曲物



第144図　ＳＢ72実測図（１：100）



第145図　ＳＤ60・ＳＤ61・ＳＤ62実測図（１：200）

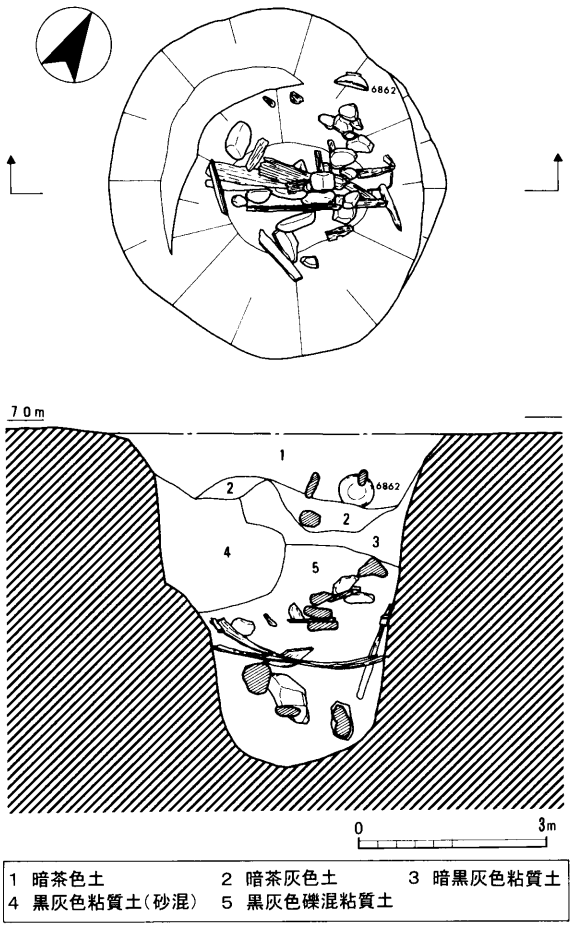
が据えてあったと考えられる。

井戸内の土層断面を観察の結果、掘形と枠は確認することができなかった。そのことから、底だけに曲物を据えたものであったと考えられる。

出土遺物から、９世紀後半と考えられる。

ＳＥ12

ＳＤ１北岸にある素掘り井戸で、径1.5m、深さ



第146図　ＳＥ９実測図（１：30）

1.2ｍを測るが、形状的には西側にやや拡がる楕円形を呈する。

出土遺物からＳＥ９とほぼ同時期の９世紀後半と考えられる。

【土坑】

ＳＫ91

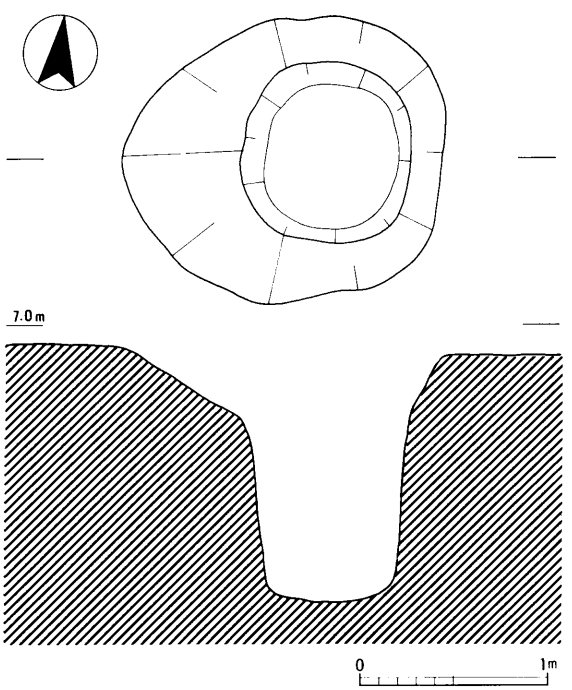
ＳＥ90のすぐ東に位置する、径は1.6ｍ、深さ0.3ｍの土坑である。埋土は黒色土の単一層であり、出土遺物も少なかった。有機質のものなどを廃棄した土坑と考えるべきであろう。

出土遺物が細片ばかりであり不確定だが、時期は９世紀後半と考えられる。

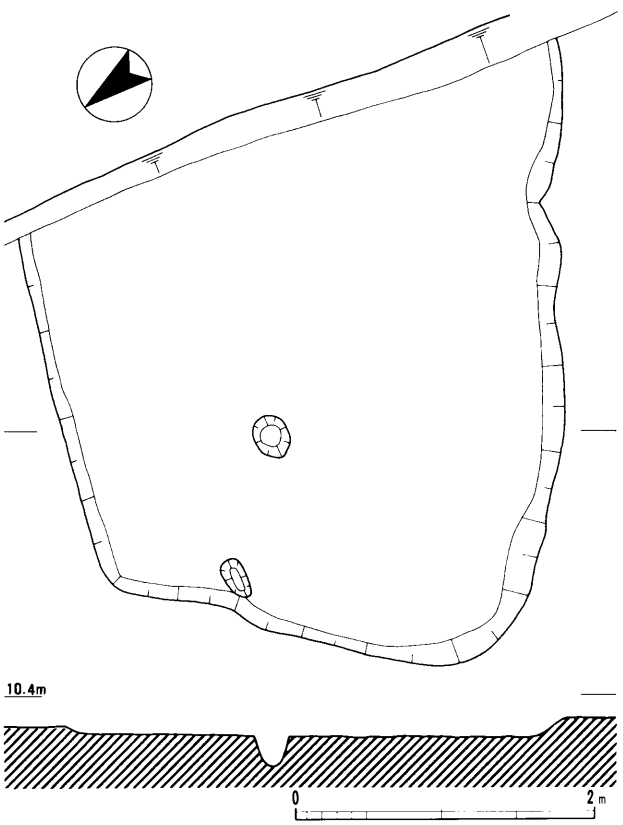
ＳＫ94

調査区の最南東部に位置し、土坑東側は調査区外へ続くものと考えられる。東側は序々に浅くなっていき、落ち込みも不明瞭になると考えられる。調査区内に限れば、径2.8ｍ×4.2ｍの台形を呈するが、深さは0.2ｍと面的な大きさに比べると浅い土坑である。黒色土の単一層で、一気に埋没している。

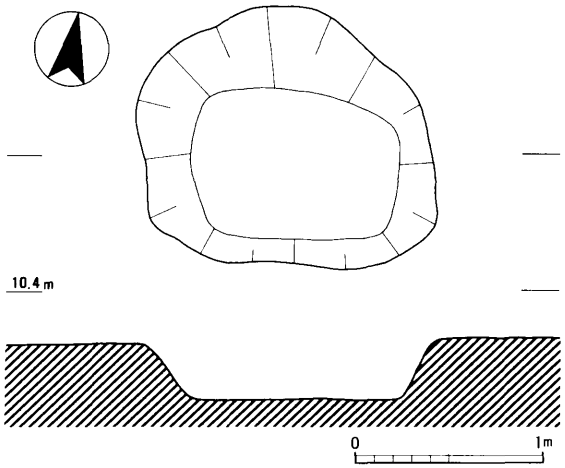
出土遺物から、10世紀代であろう。　（小林）



第147図　ＳＥ12実測図（１：40）



第148図　ＳＫ94実測図（１：50）



第149図　ＳＫ91実測図（１：40）

３　中・近世の遺構

項題は「中・近世の遺構」であるが、時期不明のものも含めて報告することとする。

【掘立柱建物・柱列】

ＳＡ10

ＳＤ１周辺部北部で見つかった柱列である。５間分を検出したが、北から３つ目の柱穴は、柱間が大きくなる。柱列の軸方向はＮ３°Ｅである。根石の可能性がある礫がＥ－Ｏ16 Ｐ２に、柱痕がＥ－Ｏ16 Ｐ１、Ｅ－Ｏ16 Ｐ４、Ｅ－Ｐ16 Ｐ１、Ｅ－Ｐ16 Ｐ３に残る。

土師器小片のみで、遺構の詳細な時期については不明である。

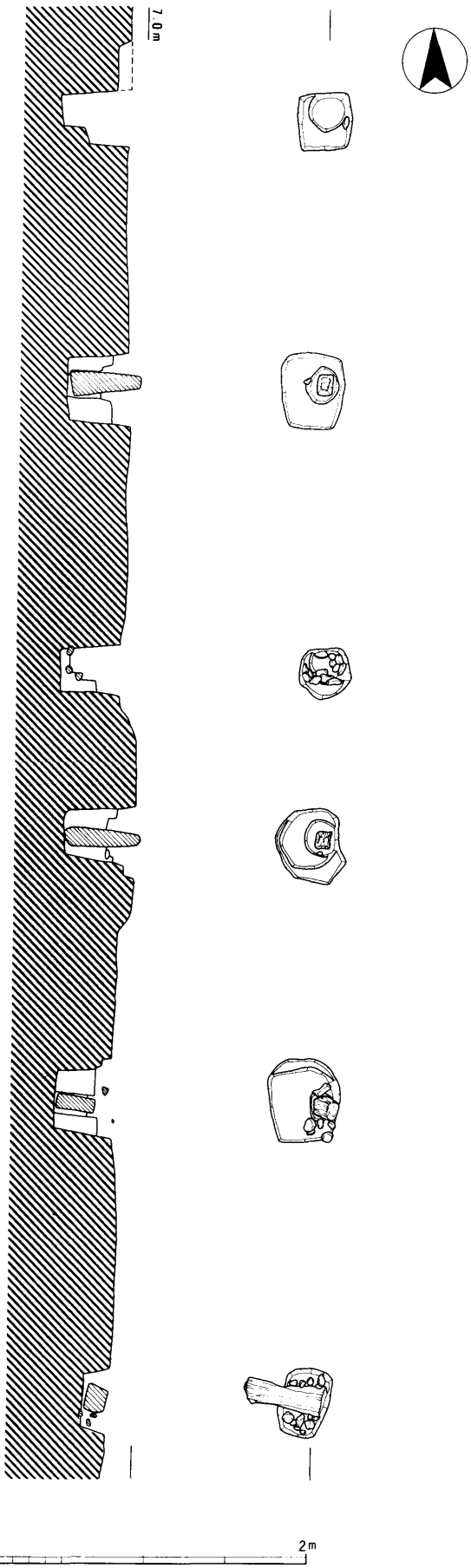
ＳＢ22

ＳＤ1張り出し部東方で検出した桁行３間以上×梁行２間の側柱掘立柱建物で、棟方向はＮ14°Ｅの東西棟である。調査区の関係で東へ拡がる可能性がある。南側の柱穴は、西端角のみ検出しているが、他の柱穴については不明である。

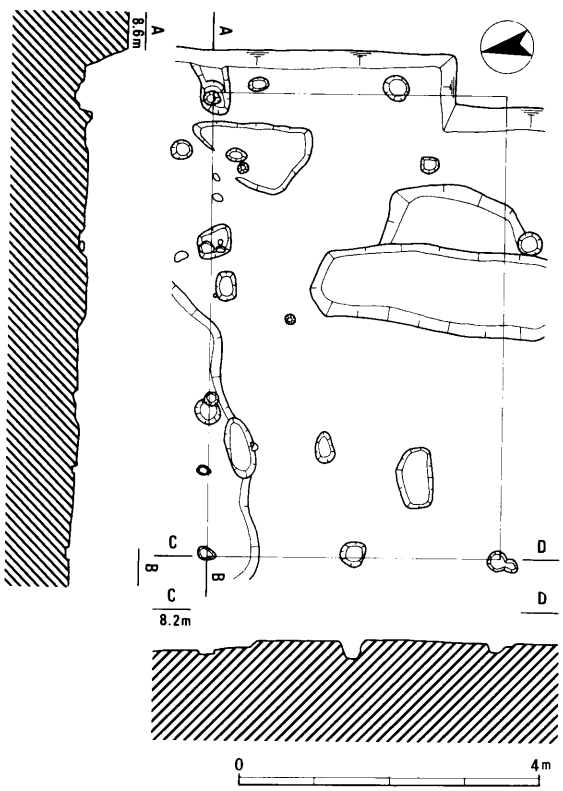
中世と思われる土師器小片や山茶碗片が出土しており、後述するＳＥ20・ＳＺ4とほぼ同時期の13世紀中葉から14世紀前半の所産と思われる。

ＳＢ48

集落域北部に位置する２間４面の総柱建物である。棟方向はＮ21°Ｗで、4.5ｍ×4.1ｍの規模がある。北側の柱穴が２個ほど確認できなかった。同一構造や同一棟方向など共通点が多いことから、ＳＢ69との関連性が考えられる。



第150図　ＳＡ10実測図（１：40）



第151図　ＳＢ22実測図（１：100）

青磁片や藤澤編年第７型式頃の山茶碗片の出土から、13世紀中葉から後半の所産と考えられる。

ＳＢ49

集落域北部に位置する桁行２間（4.9m）×梁行２間（4.3m）の側柱建物で、棟方向はＮ32°Ｅの南北棟である。南北辺の中柱穴は検出することができなかったため、南北２間というのは推定である。また西側の柱穴には小石が残存しており、根石と考えられる。またＨ－Ｓ９　Ｐ６はＳＢ48と柱穴が共通するが切り合いは認識できなかった。

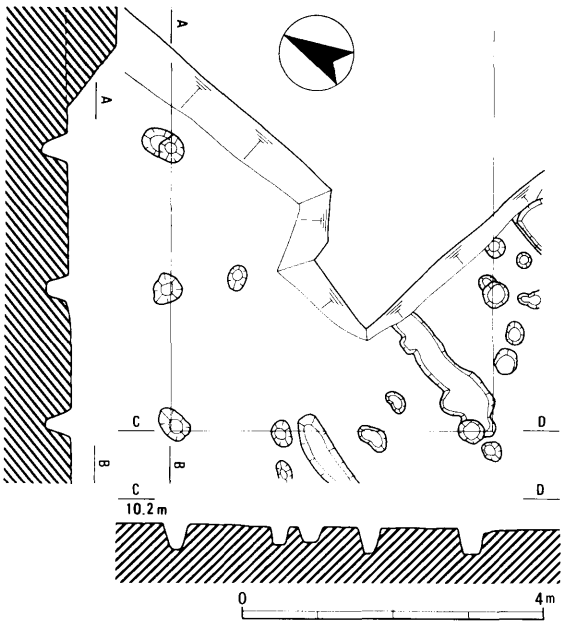
出土遺物には、山茶碗藤澤編年第７型式以降の可能性が高い山茶碗片が出土しており、柱穴が重複するＳＢ48よりやや新しい時期と見られる。

ＳＢ50

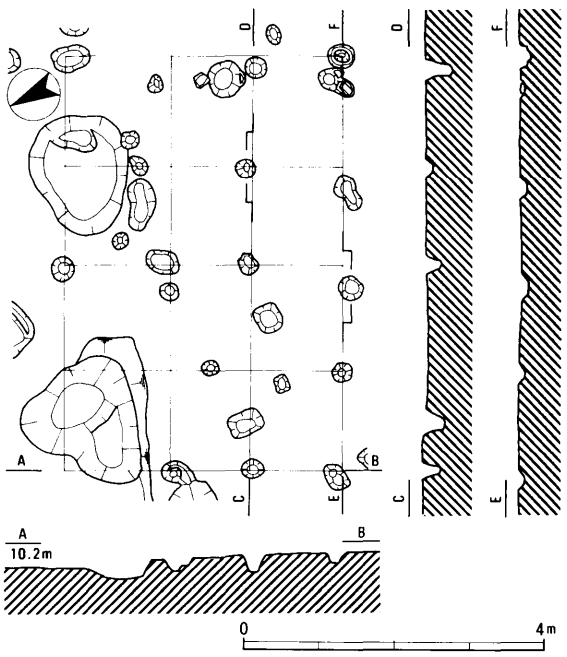
集落域北部から調査区拡張部分にかけて検出された３間×２間以上の掘立柱建物で、棟方向はＮ27°Ｗの東西棟と考えられる。調査区の関係で東側については不明である。

出土遺物はほとんどなく、柱穴の大きさなどの構造から時期は中世と考えられるが、詳細な時期は不

第152図　ＳＢ48・ＳＢ49実測図（１：100）



第153図　ＳＢ50実測図（１：100）



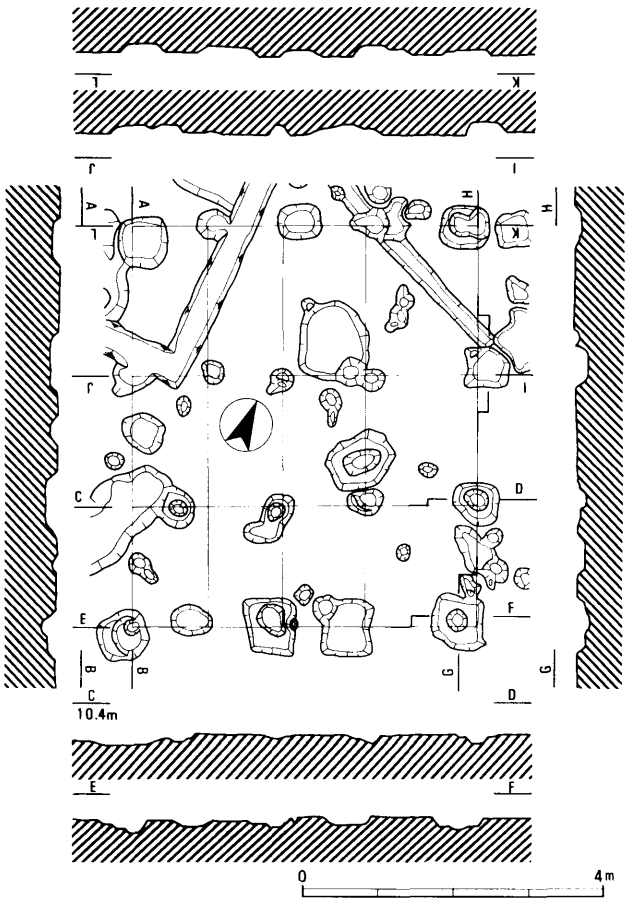
第154図　ＳＢ52実測図（１：100）

明である。

ＳＢ52

集落域北部から中央部にかけて位置する。ＳＥ51の東方にある４間×３間の総柱建物で、棟方向はＮ29°Ｅの東西棟である。柱通りは非常に悪く、柱穴も小さいことから、構造的には非常に粗悪な建物であったと思われる。

出土した南伊勢系の土師器皿片より14世紀後半から15世紀初頭の遺構と考えられる。



第155図　ＳＢ66実測図（１：100）

ＳＢ66

集落域中央部に位置する桁行４間（5.2m）×梁行３間（4.4m）の総柱建物で、棟方向はＮ22°Ｗの南北棟である。側柱の柱穴は径0.6mほどの大きさであるが、束柱は径0.2mほどと小規模で、束柱の柱通りはあまり良くない。

ＳＢ48と同じ棟方向を持つことから、13世紀中葉から後半の所産と考えられる。

ＳＢ69

集落域中央部に位置する２間４面の総柱建物で、4.4m×4.4mの規模を持つ。方向はＮ20°Ｗである。北西隅の柱穴の底には若干量の小石が入っていたが、その量の少なさや他の柱穴の状況から根石の可能性は低い。

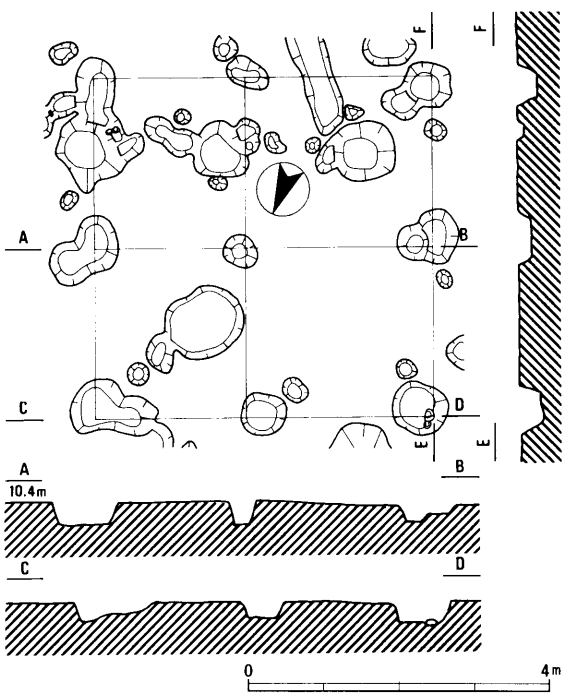
土師器鍋片の出土があり、12世紀末から13世紀前半頃の所産と考えられる。

ＳＢ73

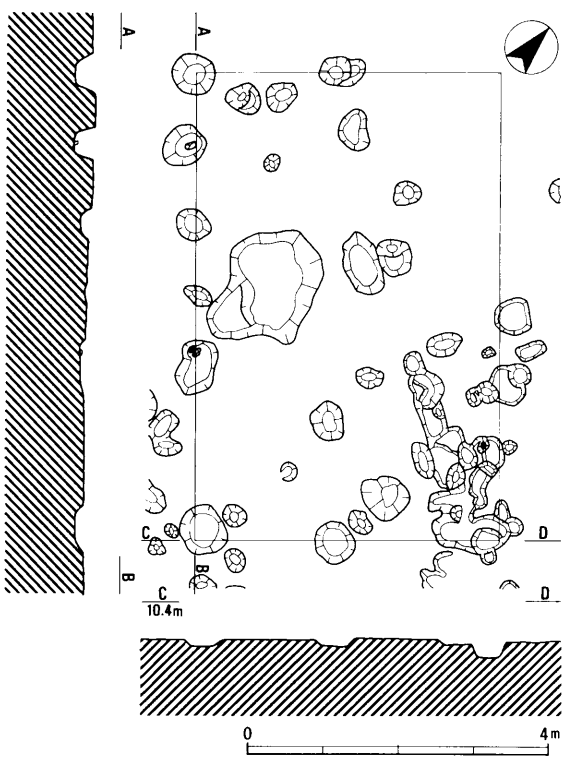
集落域中央部のＳＢ54南方に位置する桁行３間（6.3m）×梁行２間（4.1m）の側柱建物で、棟方向

はN40°Wの東西棟である。北西部の柱穴は検出することができなかったので、L字形の柵である可能性もある。

瓦片や山茶碗と思われる破片が出土しており、13世紀前半から中葉の所産と考えられる。



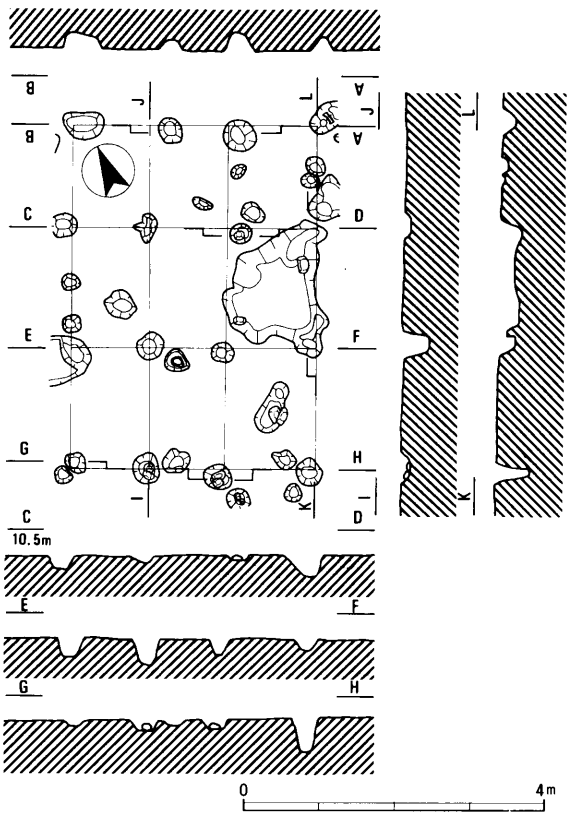
第156図　ＳＢ69実測図（1：100）



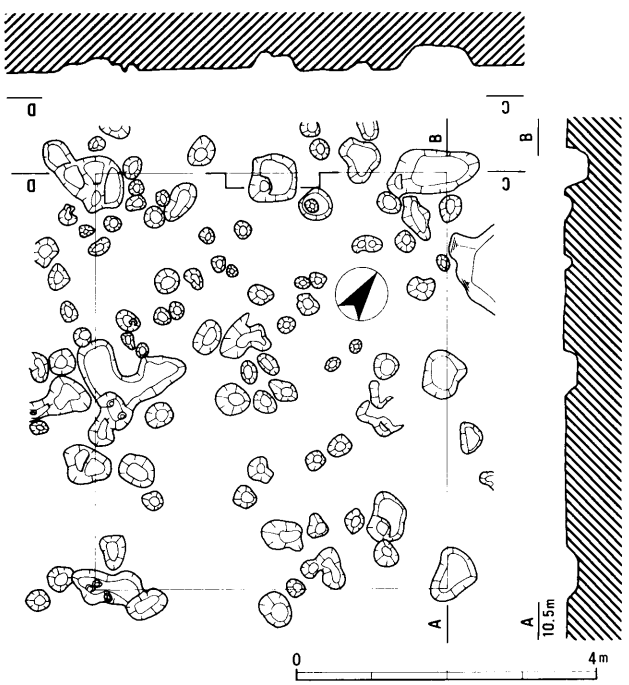
第157図　ＳＢ73実測図（1：100）

ＳＢ77

集落域中央やや南寄りのＳＢ71南方に位置する、桁行３間（4.7m）×梁行３間（3.3m）の総柱建物で、棟方向はN26°Eの南北棟である。柱通りは比較的良いが、小形の柱穴ばかりであった。



第158図　ＳＢ77実測図（1：100）



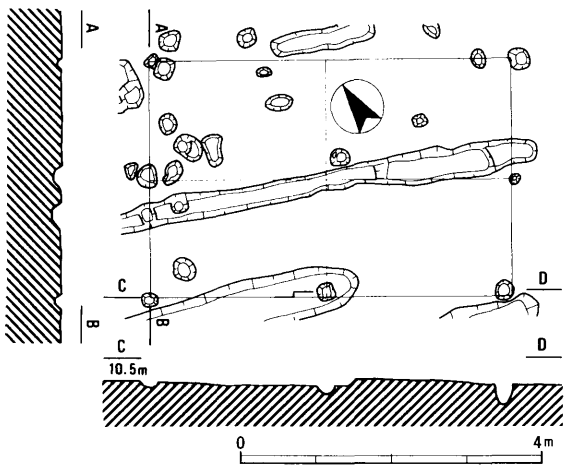
第159図　ＳＢ78実測図（1：100）

図示しうる程の出土遺物はほとんどなかったが、山茶碗の破片は尾張産第６～７型式頃かと思われるものが多く、13世紀代の所産になると思われる。

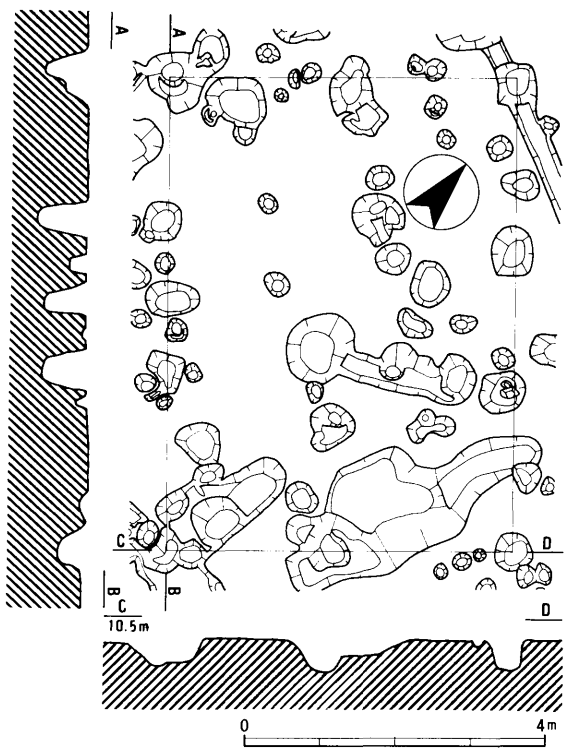
ＳＢ78

集落域南部東半に位置する桁行２間（5.5m）×梁行２間（4.6m）の側柱建物で、棟方向はＮ36°Ｗの南北棟である。南西隅の柱穴の底には少量の小礫があったが、他の柱穴の状況から根石とは考えにくい。

出土遺物から、12世紀末から13世紀前半の時期と思われる。



第160図　ＳＢ88実測図（１：100）



第161図　ＳＢ93実測図（１：100）

ＳＢ88

集落域南部西半に位置する。桁行２間（4.8m）×梁行２間（3.1m）の掘立柱建物で、棟方向はＮ34°Ｅの東西棟である。ＳＤ87の重複のため東柱が消滅したと考えると、総柱建物の可能性がある。

出土遺物はまったくなく、時期は不明である。総柱建物とすれば、ＳＤ87より古い時期であることになり、12世紀末以前と考えられる。

ＳＢ93

調査区の東南端にあり、桁行３間（6.3m）×梁行２間（4.6m）の側柱建物で、棟方向はＮ40°Ｗの東西棟である。柱掘形の径は、約0.5mで、柱通りは良い。

出土した山茶碗片から13世紀中葉の所産と考えられる。

【溝】

ＳＤ56・ＳＤ57

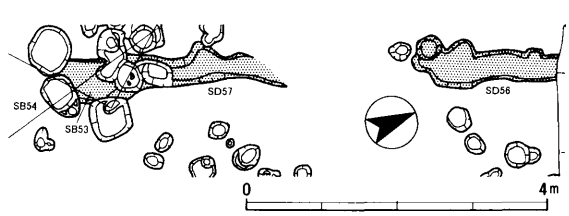
ＳＤ57は、集落域の調査区東拡張部にあり、ＳＢ54のすぐ東に位置する南北方向の溝である。幅は0.4mで、約３m分しか検出することができなかった。溝の軸方向はＮ20°Ｅで、後述するＳＤ81とほぼ同じ方向であることからＳＤ81と同時期のものとみてよかろう。

また、この溝の北にはＳＤ56が検出されており、その埋土・深さからこれらは一連のもので、何らかの区画溝の可能性が考えられる。

ＳＤ60・ＳＤ61

集落域の調査区東拡張部分に位置する。南北溝がＳＤ61で、その南側は東西方向に流れてＳＤ60にＴ字形に合流する。埋土は同じ黒褐色土で、同時期に機能していたものと思われる。軸方向はＳＤ61がＮ37°Ｅ、ＳＤ60がＮ53°Ｗである。

出土遺物は少量で、詳細な時期は特定できないが、中世のある時期の区画溝であろうと考えられる。



第162図　ＳＤ56・ＳＤ57実測図（１：100）

ＳＤ63・ＳＤ98

共に集落域の西部に南北に走る溝である。ＳＤ98の北にはこの続きであろうと考えられる長い楕円形のピットがあり、さらにその先にはＳＤ63が存在する。南北方向の溝であるＳＤ63は、軸方向はＮ10°Ｅで、その位置関係からＳＤ98と同一遺構の可能性がある。ＳＤ98の南側はやや区画の外へ膨れるが、その先は現代攪乱により不明である。

ＳＤ98からは近世の土師皿の出土が見られるが、隣接するＳＤ95・96のようにそれ以前の出土遺物が少なく、近世の可能性が高い。

ＳＤ63からは遺物の出土はないが、ＳＤ98と同時期であろう。

ＳＤ65

集落域中央部にありＳＢ66と重複して存在する。幅0.2ｍほどの小規模な溝で、出土遺物はなく時期不明である。

ＳＤ95・ＳＤ96

集落域中央部から南部にかけての調査区西端で検出した溝で、どちらも幅約0.3ｍ、深さ約0.2ｍである。南に位置するＳＤ97はどちらかの延長であり、一連の溝であると考えられる。その場合、調査区外の西を囲む形になり、囲い中には建物などの存在が想定できる。溝の埋土は暗灰褐色土の単一層であり、ここの溝を水が流れていた可能性は低い。おそらく、水流のない区画溝として機能していたのであろう。またこの地点は、調査区内で最も高い標高であり、この付近から西方が近世の窪田宿の中心となった場所と推定される。

この溝からの出土遺物には中世の遺物も混じるものの、加工円盤なども出土しており、近世の所産と思われる。

ＳＤ97

調査区の最南西に位置し、ＳＤ95かＳＤ96のどちらかの延長であると考えられる溝である。ＳＫ99を切るかたちで作られており、ＳＫ99より南の地点で西に折れ、調査区外へ出ていく。ＳＤ97は暗灰褐色土の単一層で、ＳＤ95・ＳＤ96と共通する。

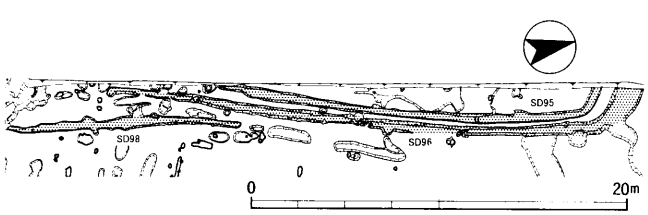
ＳＤ81

集落域南部に位置する南北方向の溝であり、ＳＫ80の東方で検出した。しかし幅は0.2ｍ、長さは4.2ｍ分検出したにすぎない。

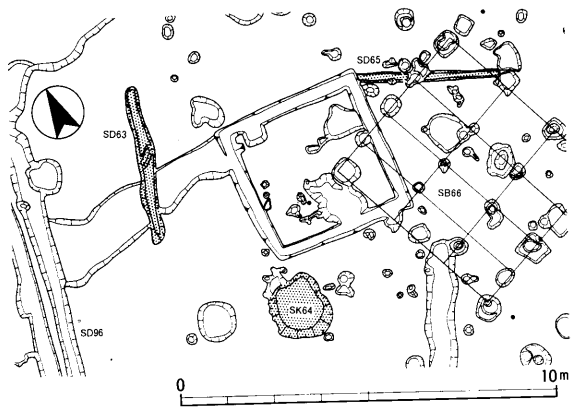
出土遺物には13世紀代のものも含まれるが、軸方向はＮ12°ＥとＳＤ95・ＳＤ96・ＳＤ97・ＳＤ98と共通し、それらと同時期と考えてよかろう。

ＳＤ82・ＳＤ83

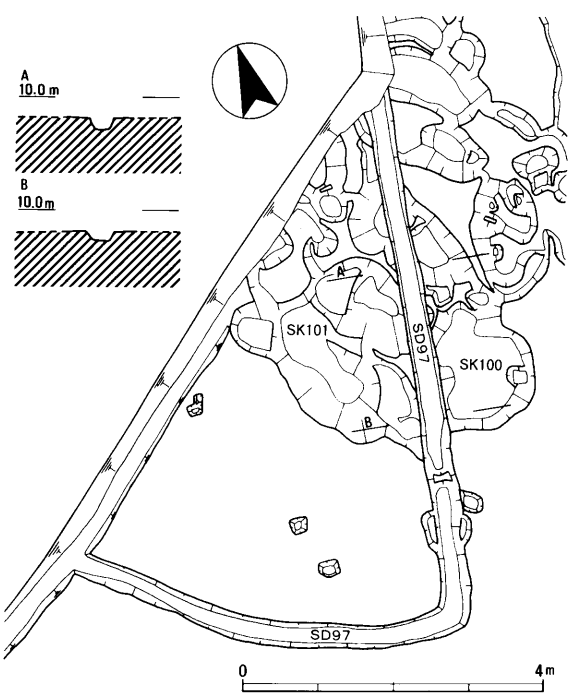
集落域南部で東西に走る溝である。ＳＤ81の東方にあってＳＫ84をはさんで位置する。双方共、幅0.1



第164図　ＳＤ95・ＳＤ96・ＳＤ98実測図（１：400）



第163図　ＳＤ63・ＳＫ64・ＳＤ65実測図（１：200）



第165図　ＳＤ97・ＳＫ100・ＳＫ101実測図（１：100）

mで、軸方向はN67°Wである。溝の西方向は双方がほぼ同じ位置で確認できなくなる。東方向は調査区外に伸びているようで、不明である。

ＳＤ83で12世紀末から13世紀中葉の遺物が出土しており、その時期の所産と思われる。

この２つの遺構は、セットで道路側溝として機能していた可能性が高く、その場合、道路幅は2.3mほどになる。なお、この延長部には東西に延びる楕円形の小規模なピットがいくつか確認されており、ＳＤ82・ＳＤ83と同一遺構の可能性も考えられる。

ＳＤ86・ＳＤ87

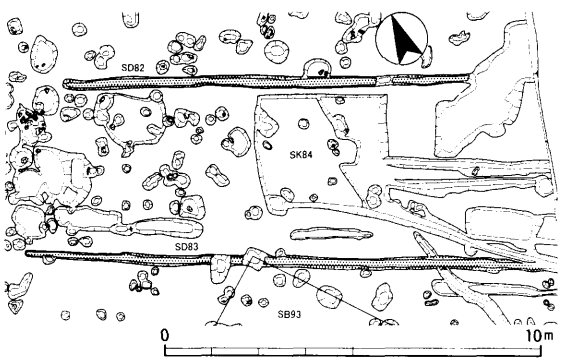
集落域南部で東西に平行して走る２本の溝で、ＳＢ88と重複する位置にある。双方共幅は0.1mほどしかなく、非常に細い。ＳＤ82・ＳＤ83同様に道路側溝と考えれば幅1.1mの道になるが、道であれば小道である。

出土遺物は土師器小片しかなく、時期の特定は難しいが、ＳＤ82・ＳＤ83と同様のN67°Wの軸方向を採っており、同時期の可能性も考えられる。

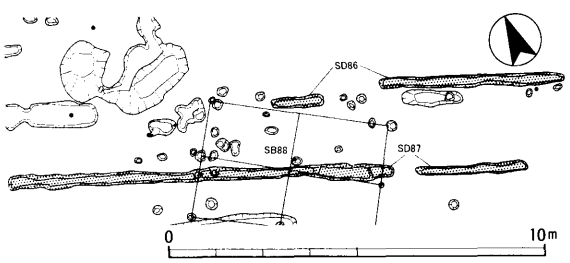
【中世墓】

ＳＸ76

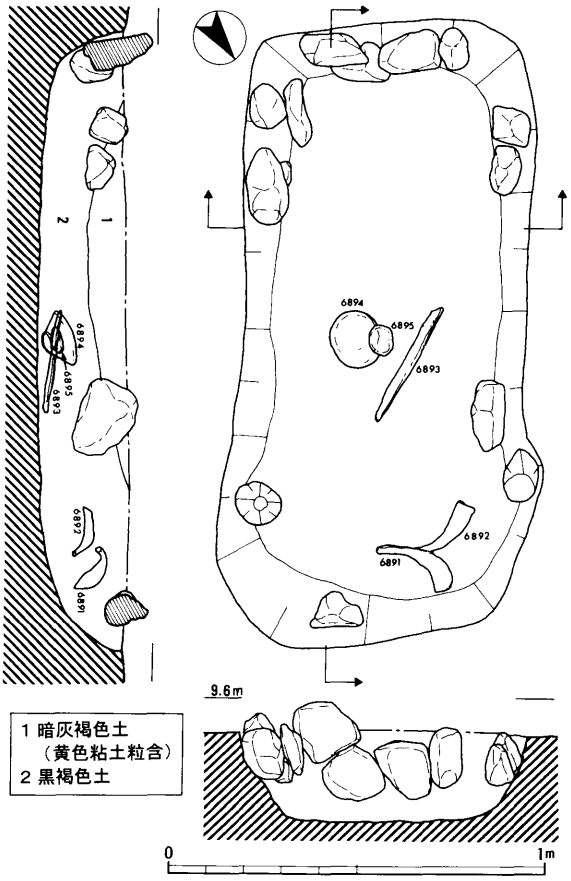
集落域中央部に位置する。ＳＢ71の南東隅にあり、1.6m×0.6mの長方形の墓壙を持ち、深さは0.25mほどである。墓壙の周囲の内側には20cm前後の礫が並べられていた。痕跡は確認できなかったが、墓壙の形状、出土遺物の状態から、箱式の木棺を使用する墓であったことが考えられる。



第166図　ＳＤ82・ＳＤ83実測図（１：200）



第167図　ＳＤ86・ＳＤ87実測図（１：200）



第168図　ＳＸ76実測図（１：20）

内部からは、鉄製の鎌が２本、短刀が１本と山茶碗、土師器皿が各１点出土した。２本の鎌は反りの向きがお互いの反対を向くように出土したが、6891の鎌はもう１本の鎌より10cmほど浮いた状態で出土した。墓壙中央から出土の短刀と山茶碗、土師器皿は着床の状態で出土している。

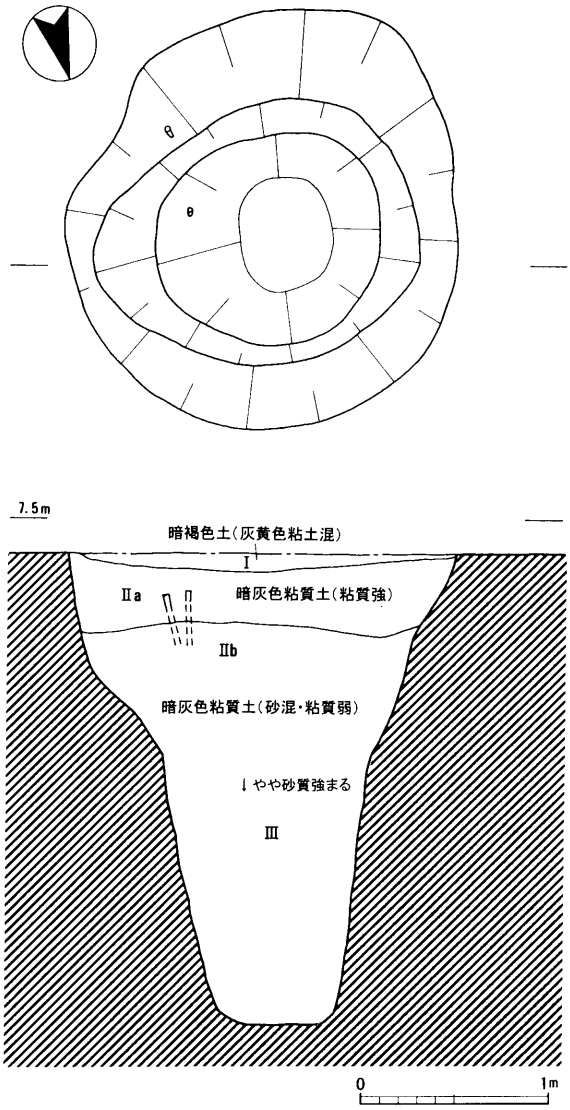
調査区内のみを見た場合にこの時期の遺構がほとんどないため単独で位置する状況に見えるが、この墓の被葬者に関連する遺構は調査区外にあったと考えるのが自然だろう。

時期は副葬された遺物から13世紀前葉の遺構と考えられる。

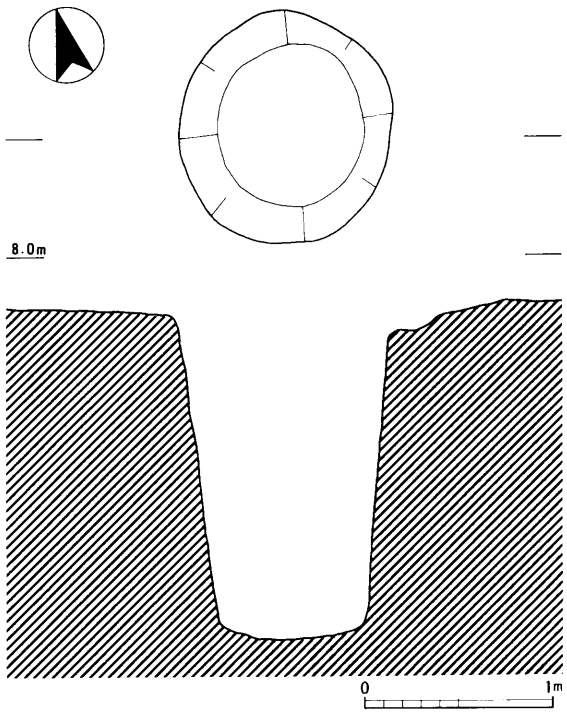
【井戸】

ＳＥ20

ＳＤ１張り出し部東岸に位置する径2.2m、深さ2.5mの素掘りの井戸である。井戸の埋土はほぼ単一で、一気に埋まったようである。井戸内には竹筒



第169図　ＳＥ20実測図（１：40）



第170図　ＳＥ31実測図（１：40）

が立った状況で出土した。いわゆる井神を祀る息抜き筒とされるものであろう。

時期は、ＳＢ22・ＳＺ24と同時期であろうと考えられ、出土遺物から13世紀末葉～14世紀初頭の廃絶と考えられる。

ＳＥ31

ＳＤ１の東岸部にあり、ＳＤ１の屈曲部よりやや南の土坑集中部に位置する。径は1.2ｍで、深さ1.7ｍを測る。

出土遺物には山茶碗の細片や南伊勢系土師器鍋の体部片があるが、かろうじて中世としかわからない。

ＳＥ41

集落域最北部に位置する井戸群の中にあり、4.0ｍ×3.2ｍの楕円形を呈する井戸で、深さ2.8ｍを測る。井戸内には木製の井戸枠が残存している。その構造は縦板組無支持井戸[2]で、横桟木の上部は20cm大の石で囲われ、枠の上部は石組、その下が木組で、曲物の破片の出土から最底部には曲物が据えられていたものと考えられる。井戸内は木組枠以下の層位については、掘り進めていく間に湧水がひどくなり、土層の観察は極めて困難であったため、確認はできなかった。

出土遺物から、14世紀前半の時期の遺構と考えられる。

ＳＥ42

集落域最北部に位置する径1.7ｍ、深さ1.0ｍの素掘りの円形井戸である。埋土は２層に分けられるが、Ｉ層は井戸埋没後の落ち込みだと考えられ、実際の埋土は単一埋土で一気に埋没したことが考えられる。

出土遺物から13世紀後半から14世紀中葉の遺構と考えられる。

ＳＥ43

集落域最北部に位置する井戸群中にあり、径2.2ｍ、深さ0.6ｍの円形の井戸と考えられる遺構である。深さは浅いが、調査時に湧水が見られたため井戸的な機能があると判断しており、井戸として報告

する。

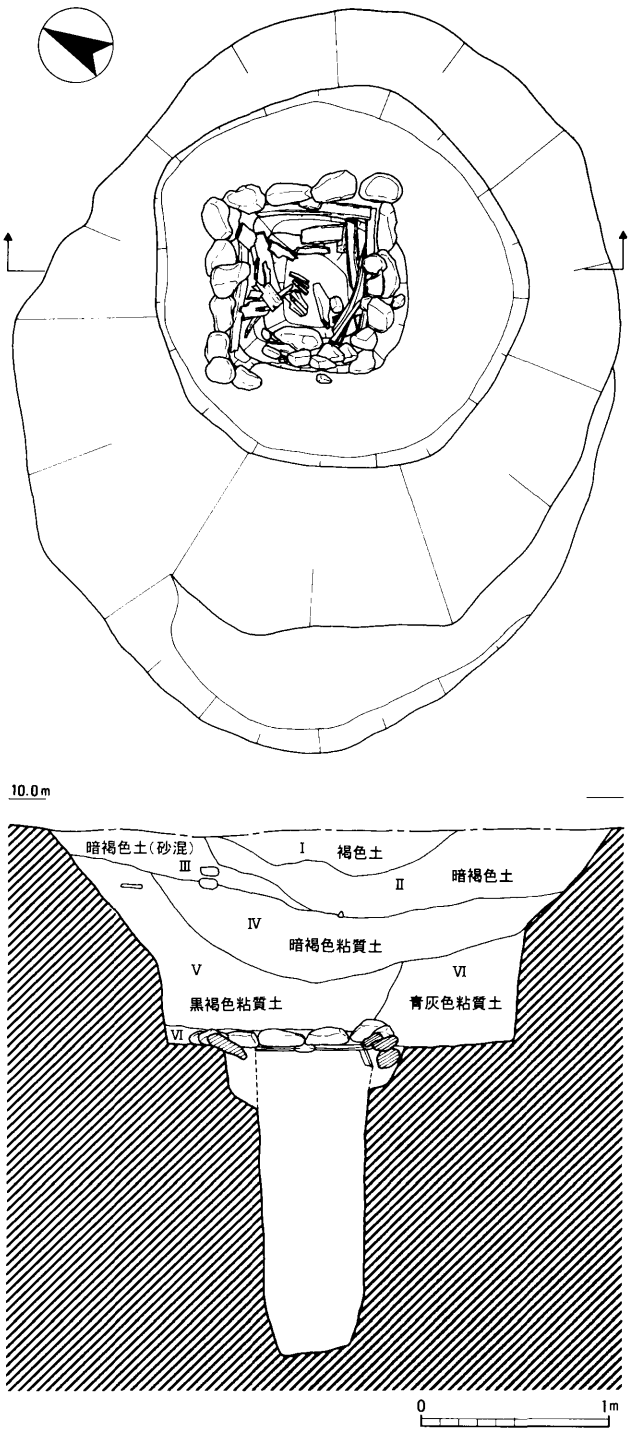
土層では枠内と掘形を確認することができず、素掘りであろうと考えられる。東に接して土坑状の落ち込みがあり、この埋土が井戸埋土と同一であることから、井戸に伴う土坑の可能性も考えられる。

出土遺物から13世紀中葉の遺構と考えられる。

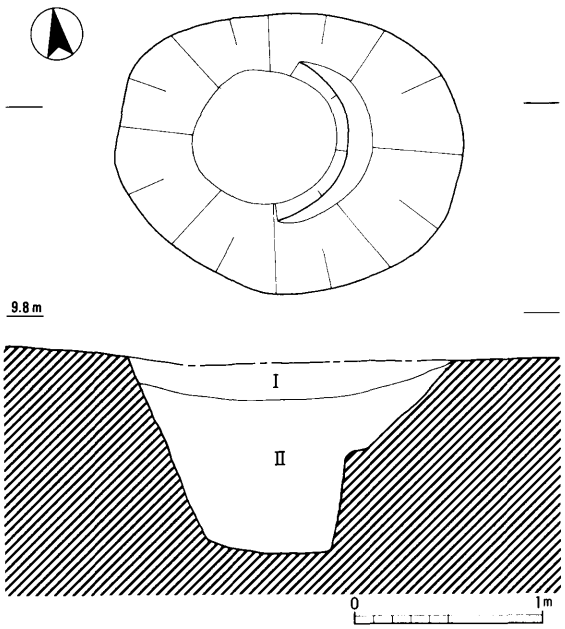
ＳＥ44

集落域北部の調査区西際で検出された井戸で、径約1.5m、深さは1.6mの小規模な円形井戸である。曲物の破片が出土しており、井戸の底には曲物が据えてあったと考えられる。また井戸枠材と見られる板材も出土していたが、腐蝕が激しくとりあげることができなかった。

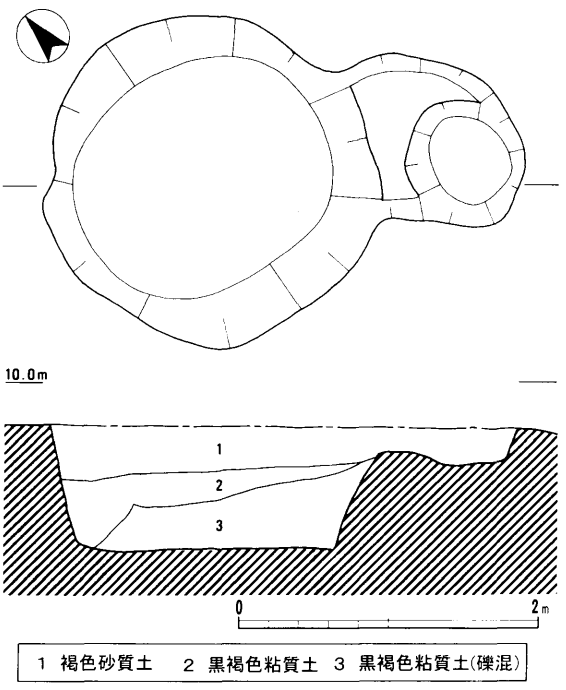
出土遺物から、14世紀末から15世紀初頭のものと考えられる。



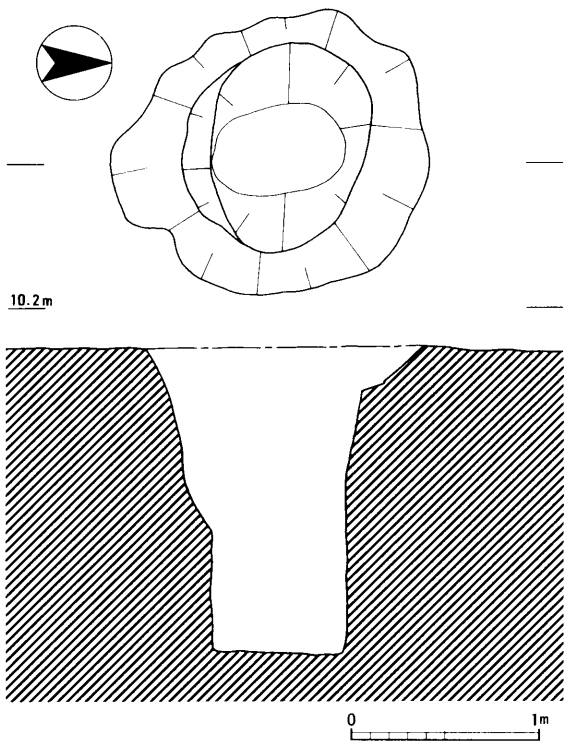
第171図　ＳＥ41実測図（１：40）



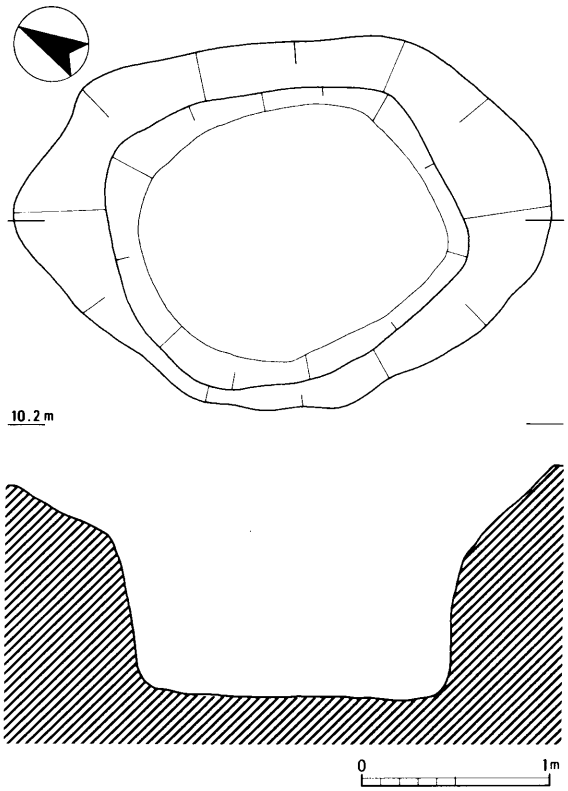
第172図　ＳＥ42実測図（１：40）



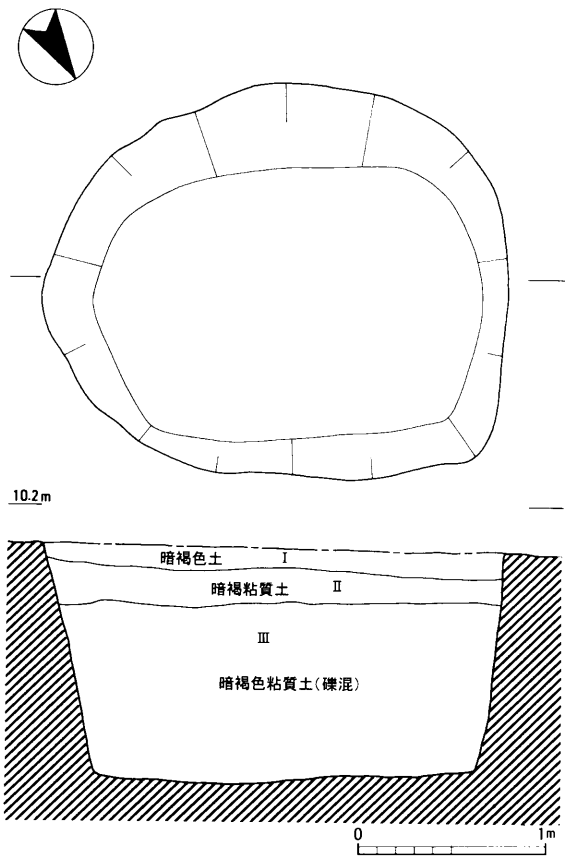
第173図　ＳＥ43実測図（１：40）



第174図　ＳＥ44実測図（１：40）



第176図　ＳＥ51実測図（１：40）



第175図　ＳＥ45実測図（１：40）

ＳＥ45

集落域北部で検出された井戸である。ＳＢ46の北西に位置し、長径2.3m、短径2.0m、深さ1.2mの楕円形を呈する。埋土は３層に分かれるが、Ⅰ層は井戸埋没後の落ち込みの埋土と考えられ、直接井戸の埋土ではない。Ⅱ・Ⅲ層が井戸本体の埋土と考えられ、ほとんどはⅢ層による埋没である。

出土遺物から、14世紀後半から15世紀初頭の遺構と考えられる。

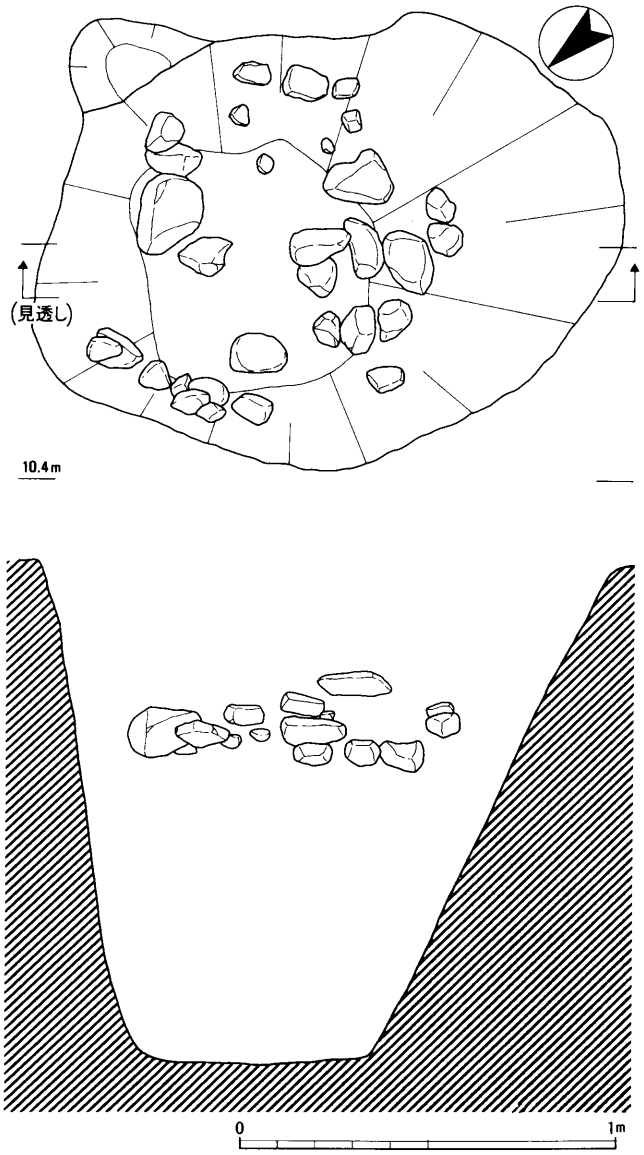
ＳＥ51

集落域北部に位置する井戸である。ＳＢ46の南西にあり、長径2.6m、短径1.7m、深さ1.2mの楕円形を呈する。枠材と考えられる板材の出土から、木の井戸枠が存在したことが考えられる。しかし、調査途中の大雨により、土層観察用セクションが崩壊してしまい、土層断面の確認ができなかったため、井戸枠の内外の範囲等は不明である。

出土遺物から14世紀後半から15世紀前葉にかけての遺構と考えられる。

ＳＥ85

集落域南部のＳＢ88西方に位置する1.6m×1.1m



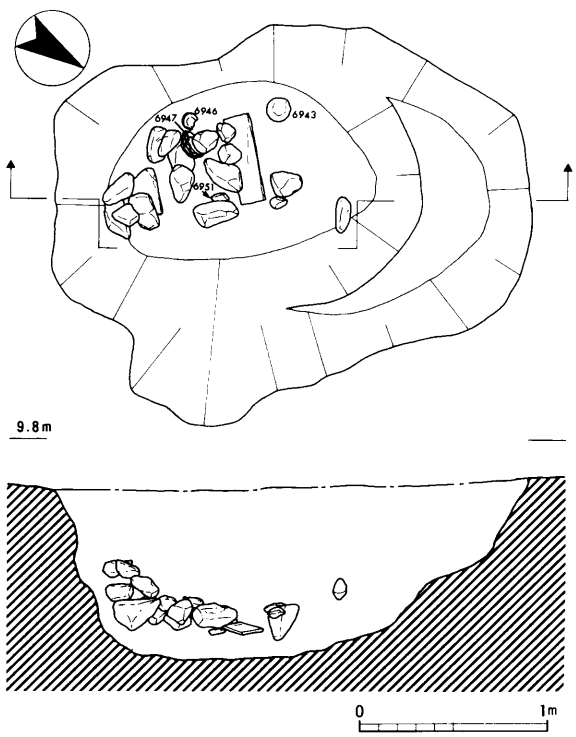
第177図　ＳＥ85実測図（１：20）

の楕円形で、深さ1.4ｍの小規模な井戸である。10～40㎝の礫が多く入っており、礫のほとんどが遺構の上層におさまる。おそらく、廃棄時に投入されたものであろう。枠の有無は不明であるが、この調査で確認された井戸としては最小のものであり、その規模から素掘りの井戸であると考えてよかろう。

出土遺物から13世紀後葉から14世紀前葉の時期の遺構と考えられる。

ＳＥ89

調査区南西部に位置する2.5 ｍ×2.2ｍのやや楕円形を呈し、深さ0.9ｍの浅めの井戸である。井戸内底部には10～20㎝大の礫が放り込まれた状態で出土している。土層断面での確認はしていないが、礫の



第178図　ＳＥ89実測図（１：40）

廃棄状況から考えると、その範囲が井戸の枠内であった可能性は高い。また礫と共に板材も出土しており、それらは枠材として考えられる。

出土遺物から13世紀前葉から中葉の遺構と考えられる。

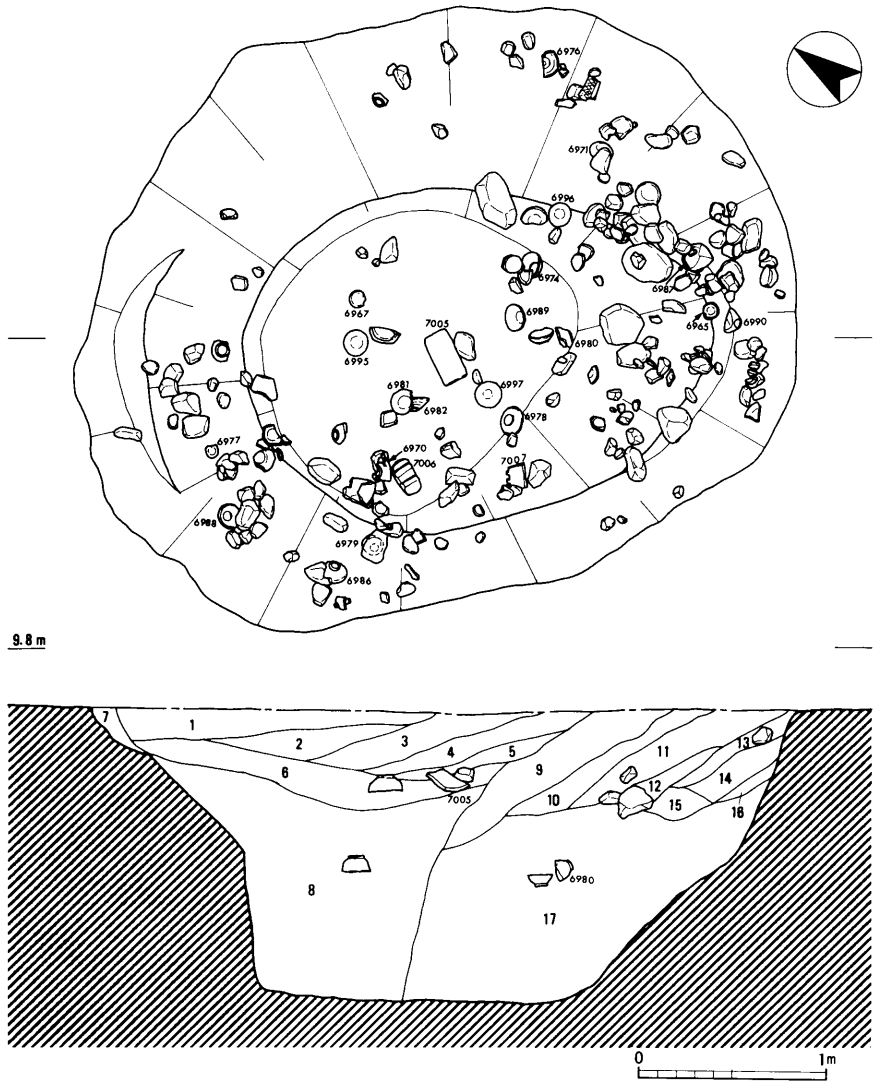
ＳＥ90

ＳＫ91の西に位置する長径3.9ｍ、短径3.0ｍ、深さ1.5ｍの井戸である。湧水が非常に多く、標高8.75ｍより下の部分は湧水と土層観察面の崩壊により土層断面図の作成は困難であると判断し、図の作成はできなかった。そのため、土層図は井戸内上層部分のみに限られる。

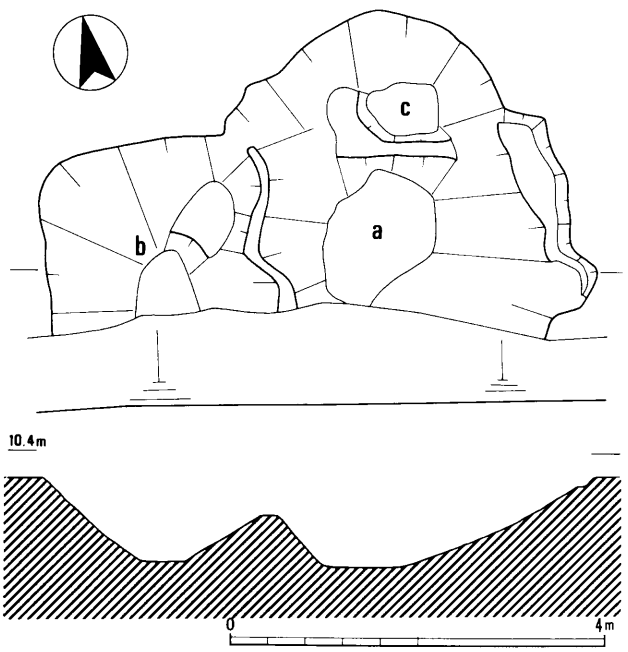
井戸内上層部では廃棄時に大量の礫と山茶碗などが放り込まれた状況で出土しているが、徐々に埋没した様相を見せている。土層図のほぼ中央以西は井戸の枠内と考えられ、黒色の粘質土が主体である。太線以東では暗褐色土だが、下層へ行くほど湧水の影響から黒色の粘質土へと変化していく。

井戸内からは曲物の底板が出土したが、腐蝕が激しく採り上げは困難であった。またスス付着の礫が少量出土している。

出土遺物から、13世紀中葉から14世紀初頭の所産



第179図　ＳＥ90実測図（１：40）



第180図　ＳＥ92実測図（１：80）

と思われる。

ＳＥ92

調査区最南端で検出したため、遺構の半分しか確認できなかった。径5.9m、深さは1.0mである。当初は土坑として調査され、概報でも土坑として報告したが、調査時に激しい湧水があったことから井戸と判断した。非常に内部が不定形で、調査はそれに従ってａ・ｂ・ｃにわけている。それらは、そのまま別遺構の切り合いである可能性も大きいが、切り合い関係は把握できず、埋土も区別できなかったことから、ひとつの遺構として扱っている。このうち、ｃには湧水がなく、ａ・ｂからは湧水が激しい。遺物の出土はｂからがほとんどである。

出土遺物から、13世紀前葉から13世紀中葉と考えられる。

【土坑・その他】

ＳＫ13

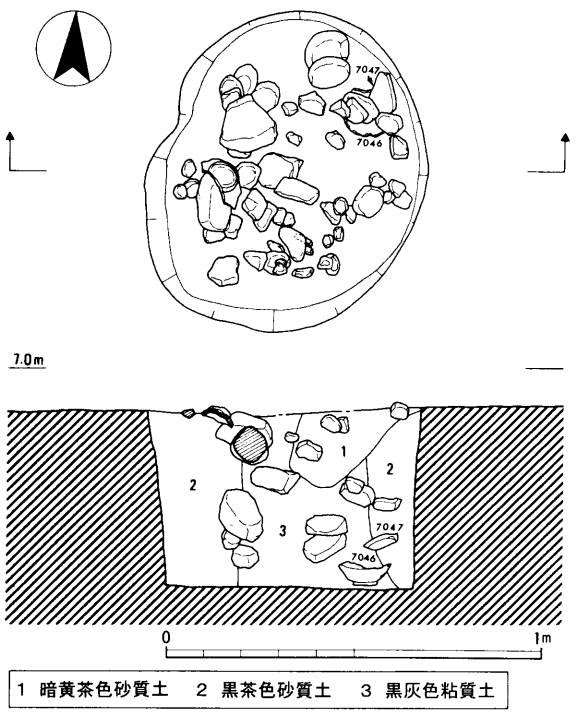
ＳＤ１の北岸でＳＥ12の東方にある。径は0.8m、深さは0.5mである。土坑内の全体に礫が多く詰まっており、山茶碗も混じっていた。土層観察の結果、また礫や遺物の分散状況から比較的短期間の埋没であると考えられる。何らかの廃棄土坑という性格であろうと考えられる。

出土遺物から、時期は11世紀から12世紀にかけての所産であると考えられる。

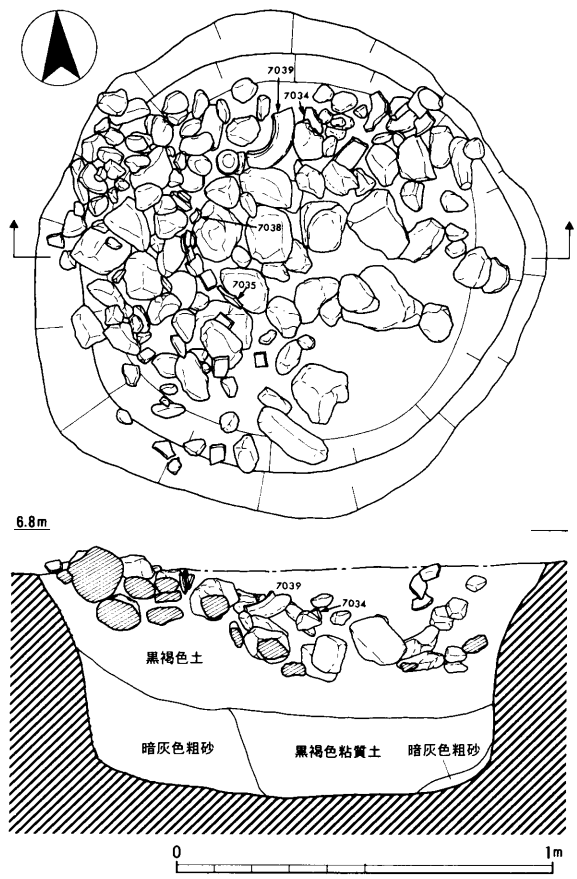
ＳＫ14

ＳＤ１入江状突出部の東岸に位置する径1.3m、深さ0.6mの円形の土坑で、埋土の上半には多数の礫が入っていた。この礫が入っているのは黒褐色土のみであるが、これは二度目の埋没で、一度目は暗灰褐色の粗砂で埋まっている。また、礫の間には土に混じり、骨片状の白い粉状のものも出土したが、粉々で採取は不可能であった。中世墓の可能性もあるが、白い粉状のものが不明であり、ここでは土坑として扱った[3]。

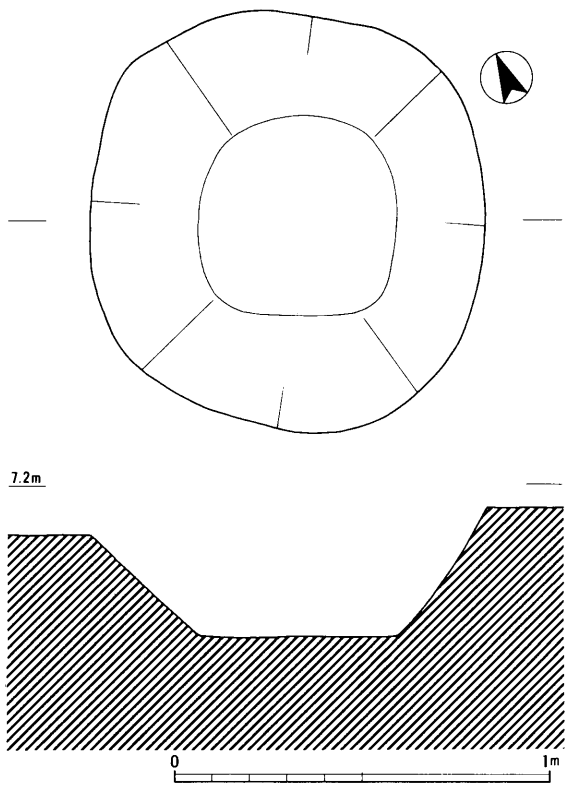
二度目の埋没時期は、13世紀後半から14世紀初頭である。一度目の埋没時期は良好な資料がなく、不明とせざるをえないが、さほど時期は変わらないであろう。



第181図　ＳＫ13実測図（１：20）



第182図　ＳＫ14実測図（１：20）



第183図　ＳＫ15実測図（１：20）

SK15

ＳＤ１入江状突出部東岸に位置する径1.1ｍの土坑で、埋土は黒褐色土である。

出土遺物から、13世紀代の遺構と考えられる。

SK23

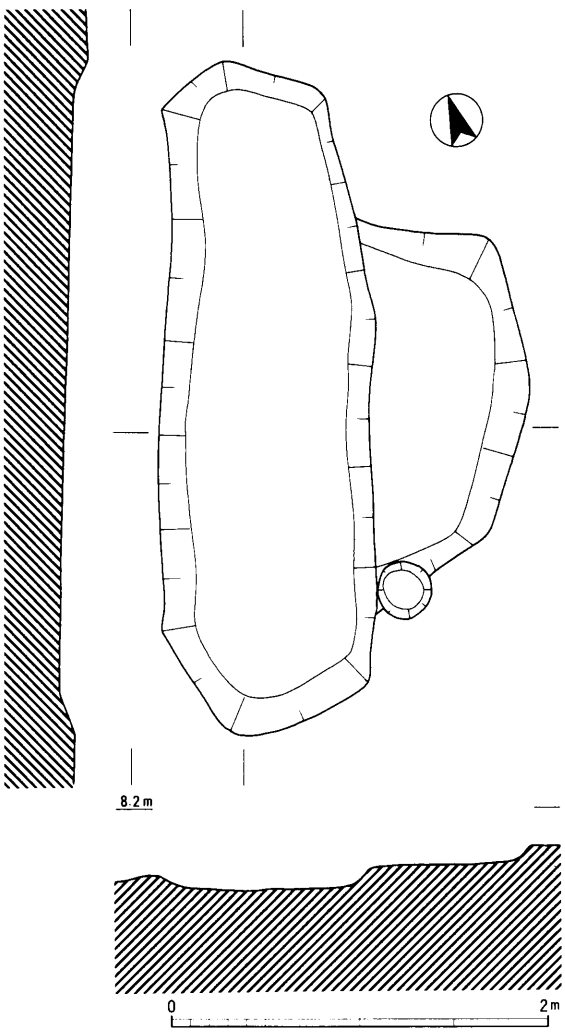
ＳＤ１入江状突出部の東南に位置する1.2 ｍ×3.6ｍの土坑である。

出土遺物から近世の遺構と考えられる。

SK32・SK33・SK34・SK35

ＳＤ１の東岸に位置し、ＳＥ31の西方から南方にかけて検出した遺構である。すべての遺構において小石が大量につまっていたが、遺物が全く出土せず、時期については不明である。

ＳＫ32は0.75ｍ×0.5ｍの楕円形で深さ0.25ｍ、ＳＫ33は0.8ｍ×0.5ｍの楕円形で深さ0.1ｍ、ＳＫ34は0.5ｍ×0.4ｍの円形で深さ0.1ｍ、ＳＫ35は0.65ｍ×0.8ｍの楕円形で深さ0.15ｍの大きさである。一見一列に並んでいるため一連の遺構であることを思わせるが、性格は中世墓の可能性も考えられるものの、不明といわざるを得ない。



第184図　ＳＫ23実測図（１：40）

SK37

ＳＤ１の東岸に位置する。礫詰まりで、近辺にある後述のＳＫ38・ＳＫ39と同様の土坑である。しかし、二者に比べ小規模なものであり0.4ｍ×0.45ｍほどの規模しかない。

出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

SK38

ＳＤ１の東岸に位置し、径0.75ｍ、深さ0.15ｍの礫詰まりの土坑である。その状況から、中世墓の可能性が高いが、骨片などそれを裏付ける資料は出土しなかった。

出土遺物には時期の明確なものがなく、時期は不明といわざるをえない。

SK39

ＳＤ１の東岸に位置し、ＳＫ38に隣接する径0.8ｍ、深さ0.7ｍの土坑である。ＳＫ38と同様に礫が詰まっていた。ただし、こちらはＳＫ38よりやや深く、礫は埋土の上部にしか確認されていない。さらにＳＫ39の石はやや小ぶりで、量はこちらの方が多い。墓の可能性を考えているが、決定的な資料はなく、時期もＳＫ38と同じく決定的なものが出土していない。

SK58

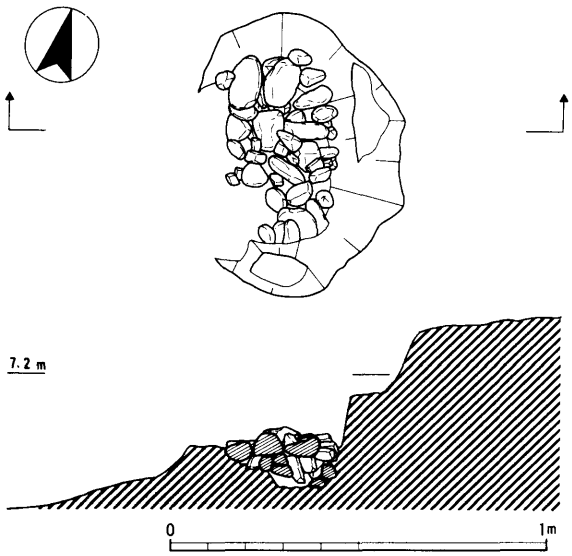
集落域の調査区東拡張部分にあり、径は1.0ｍ、深さは0.45ｍの円形を呈する土坑である。坑内は上下２層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は黄褐色粘土混じりの黒褐色粘質土である。

出土遺物がまったくないので、遺構の時期は不明である。

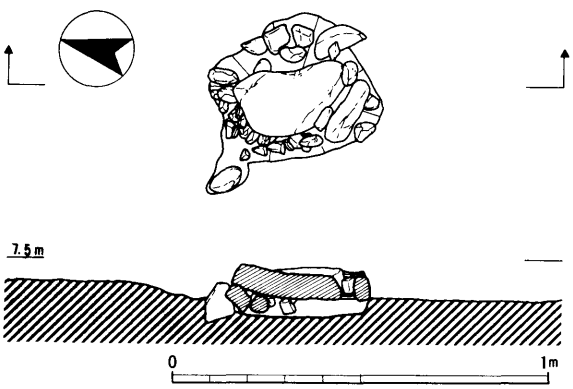
SK59

集落域の調査区東拡張部分に位置する土坑で、一辺0.9 ～1.0ｍの隅丸方形を呈し、深さは0.2ｍを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、一部をピットにより攪乱されている。

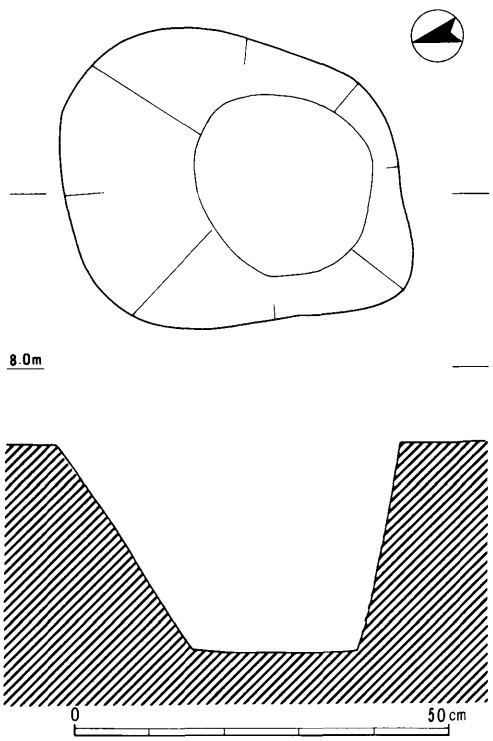
山茶碗が出土しており（7045）、13世紀代と考えられる。



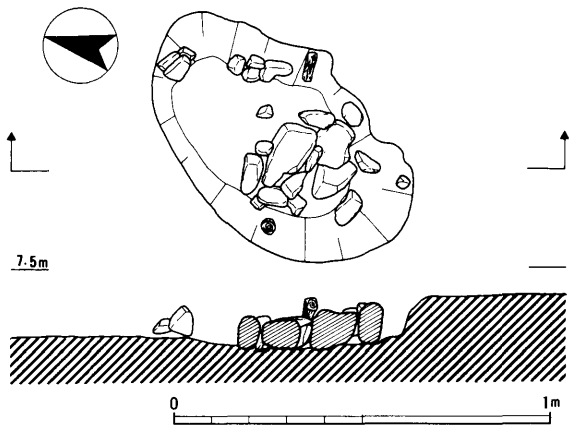
第185図　ＳＫ32実測図（１：20）



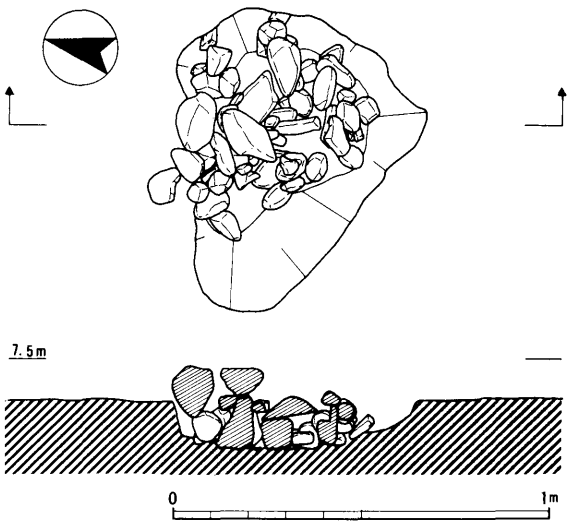
第187図　ＳＫ34実測図（１：20）



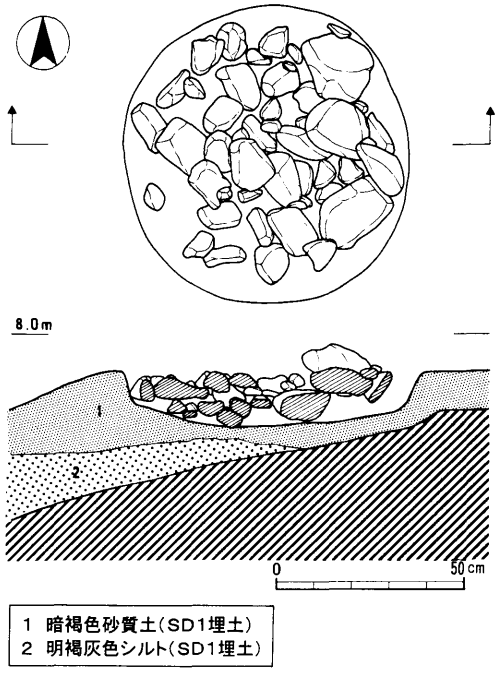
第189図　ＳＫ37実測図（１：10）



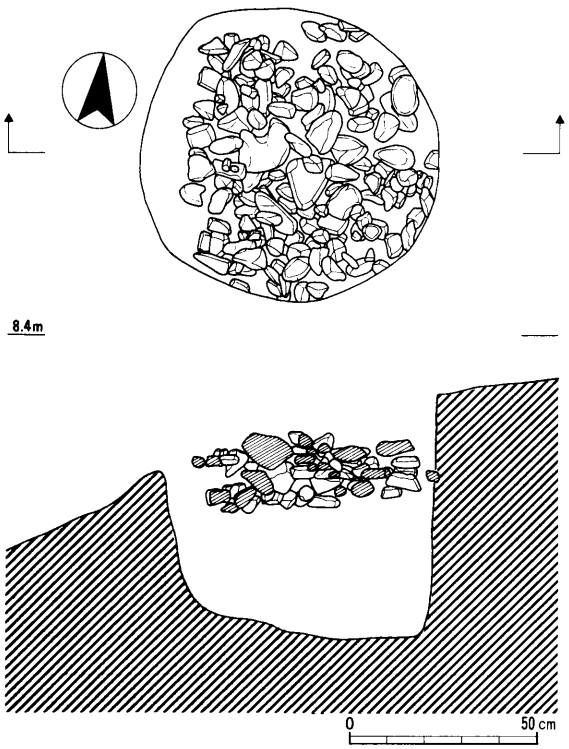
第186図　ＳＫ33実測図（１：20）



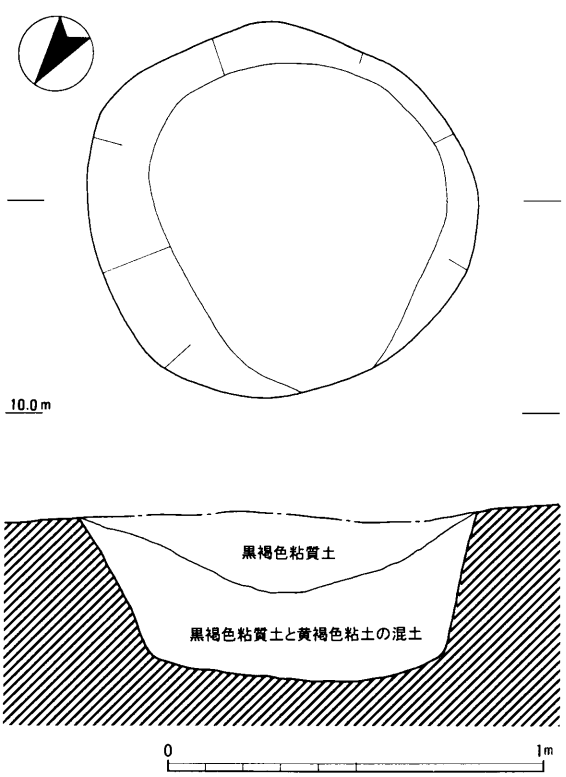
第188図　ＳＫ35実測図（１：20）



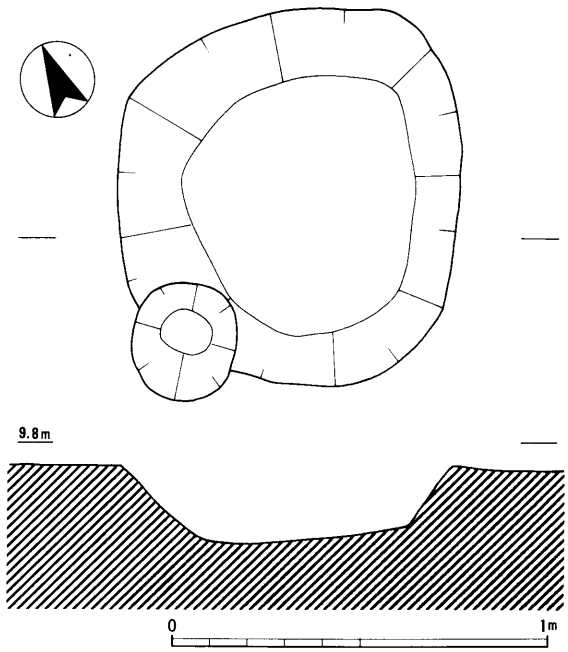
第190図　ＳＫ38実測図（１：20）



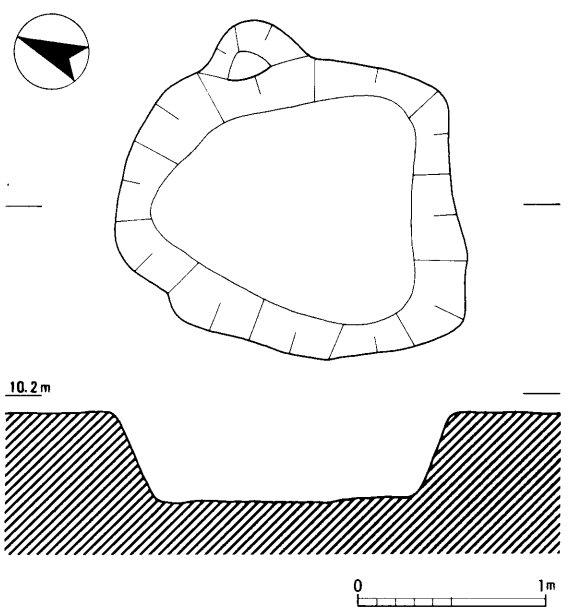
第191図　ＳＫ39実測図（１：20）



第192図　ＳＫ58実測図（１：20）



第193図　ＳＫ59実測図（１：20）

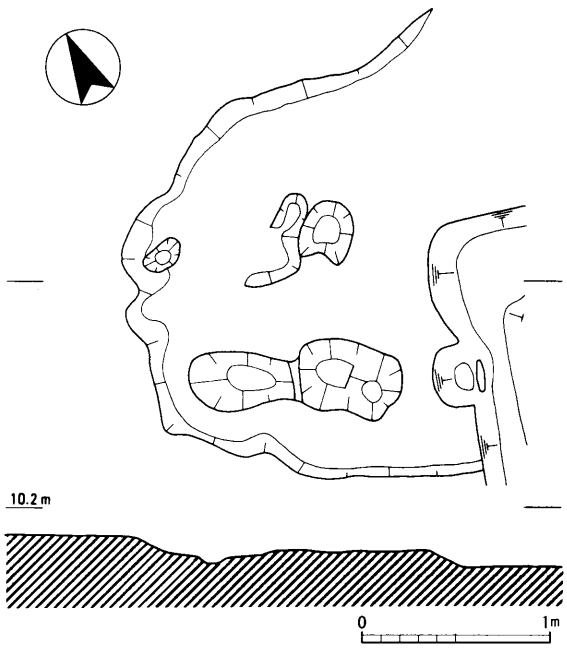


第194図　ＳＫ68実測図（１：40）

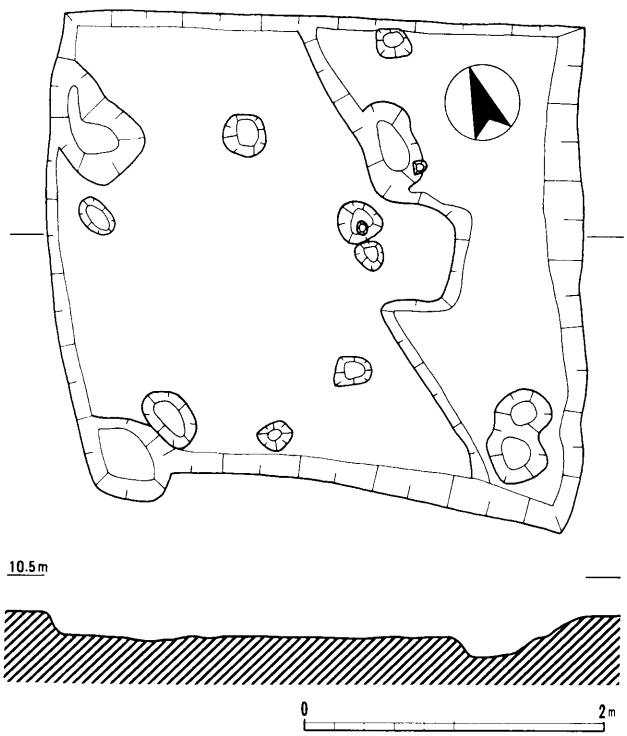
ＳＫ68

集落域のほぼ中央にあり、ＳＢ67のすぐ南に位置する。1.8m×1.5mの三角形に近い形をしており、深さは0.5mの土坑である。埋土は灰色混じりの黒色土の単一層で、ＳＢ67のピットを切る形で存在する。

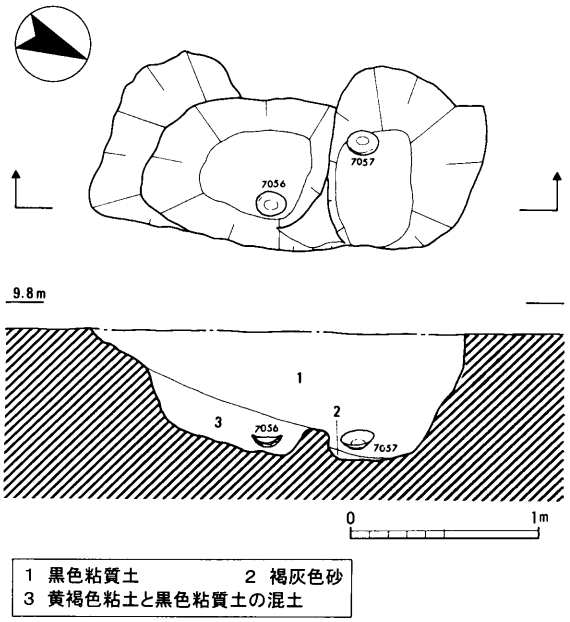
切り合い関係からＳＢ67よりも後行し、出土遺物から13世紀中葉の時期だと考えられる。



第195図　ＳＫ75実測図（１：40）



第196図　ＳＫ84実測図（１：50）



第197図　ＳＫ99実測図（１：40）

ＳＫ75

2.2 m×1.5mの不正形な土坑で、深さは0.2mある。土坑の西半には石が据わった状態で検出されており、何らかの機能を果たしていたと思われるが、具体的には不明である。埋土は黒色土の単一層であるが、東方は不明瞭になり、浅くなっていく。

出土遺物から、13世紀前半から中葉の所産と考えられる。

ＳＫ84

集落域南部のＳＤ82とＳＤ83に挟まれた部分に位置する3.1m×3.5mのほぼ正方形に近い形を呈する土坑である。当初竪穴住居という想定で調査していたが、周溝や主柱穴がないなど住居とする根拠もなく、また山茶碗も出土したことから、住居ではなく中世の方形土坑と考えた。

出土遺物から、13世紀中葉から14世紀初頭の所産と考えられる。

ＳＫ99

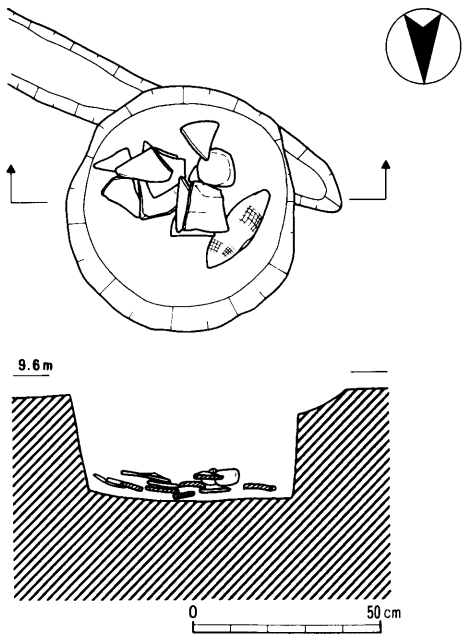
調査区最南西部にあり、ＳＤ97による攪乱で一部消失している。2.0m×1.2mの楕円形で、深さは0.7mである。土層では大きく２つに分かれるが、出土の山茶碗を見る限りさほど時期差はなく、12世紀末から13世紀初頭に埋没したと考えられる。

ＳＤ97が13世紀中葉以降の遺構と考えられることから、埋没後すぐにここに溝が掘られることになったのであろう。

ＳＫ102

集落域南東部で検出された遺構で、径0.7mほどの小土坑である。常滑産の陶器甕片が底に敷いてある状態で出土した。

出土遺物には、上記の常滑産陶器甕片があるが、

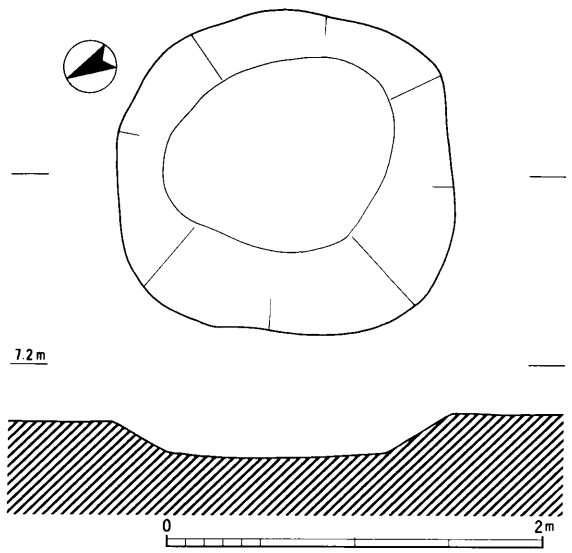


第198図　ＳＫ102実測図（１：20）

体部ばかりで口縁部はなく、時期はわからない。

ＳＫ11

ＳＤ１の北側、ＳＡ10の西側に存在する南北1.8m、東西1.75m、深さ20cmの浅い略方形の土坑である。性格はわからない。



第199図　ＳＫ11実測図（１：40）

【性格不明の遺構・その他の遺構】

ＳＺ24

ＳＤ１の東岸に位置する石列と配石群の遺構である。ＳＤ１の埋没後に設置された石群で、東西約12m、南北約10mの範囲に拡がる。石列は南北に伸びており、6.5mある。軸方向はＮ21.5°Ｅである。この部分に拡がる全体の配石群には特に規則性はないが、石列は埋没後のＳＤ１の落ち込みを意識してつくられたものと思われる。

第200図　ＳＺ24～ＳＺ29実測図（１：100）

第201図　ＳＺ24実測図（１：40）

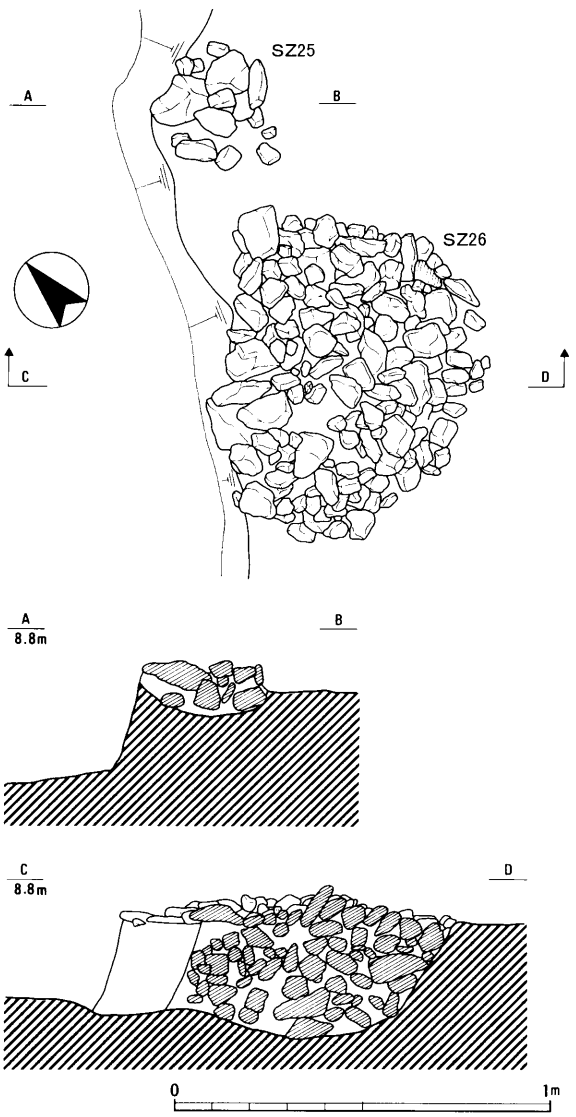
石列には一部欠けた部分があり、抜き取り痕も認められなかったことから出入口として設定していた可能性があるが、単に後世の攪乱かもしれない。

また、石の揃い方から西方を外側とする意識が働いていたとみられる。内側と想定される配石部分は全体的にやや落ち込みが見られ、この部分が何らかのスペースとして活用されたとみるのがよかろう。

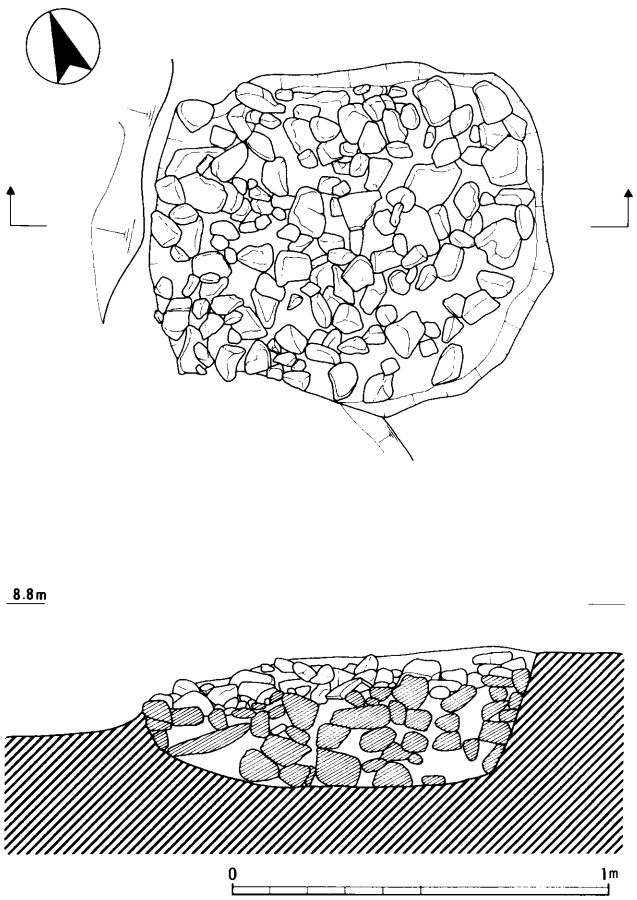
時期は、ＳＤ１埋没後で、出土遺物も勘案すると、ＳＥ20などと同じ13世紀中葉から14世紀初頭と考えられる。

ＳＺ25・ＳＺ26・ＳＺ27・ＳＺ28・ＳＺ29

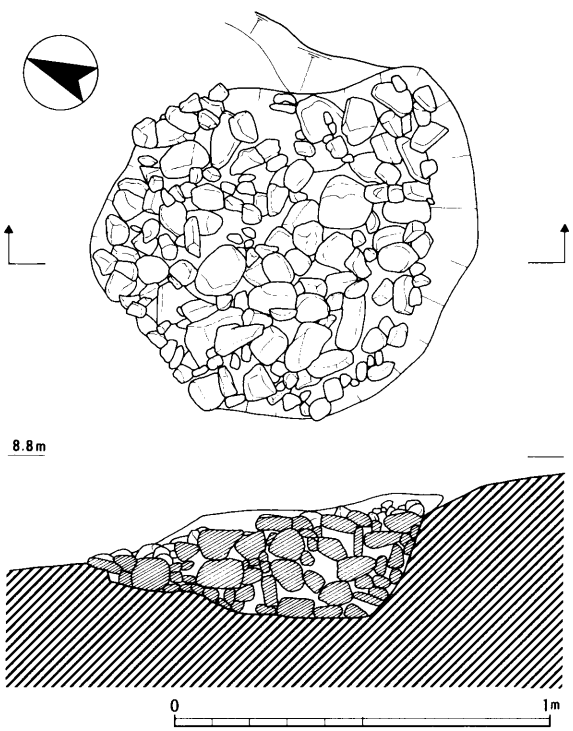
配石・石列ＳＺ24の南に隣接する一連の礫詰まりの土坑である。この部分には次に述べるＳＺ30を含めて６つの礫詰まりの土坑があり、当初はすべて墓という認識で調査をしていた。しかし、どの遺構



第202図　ＳＺ25・ＳＺ26実測図（１：20）



第203図　ＳＺ27実測図（１：20）



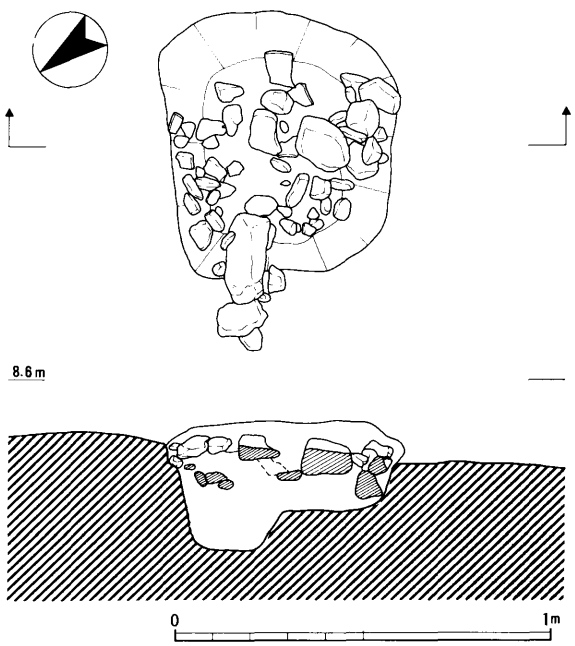
第204図　ＳＺ28実測図（１：20）

でも骨の出土はなく、中世墓とは確定できず、不明遺構とした。

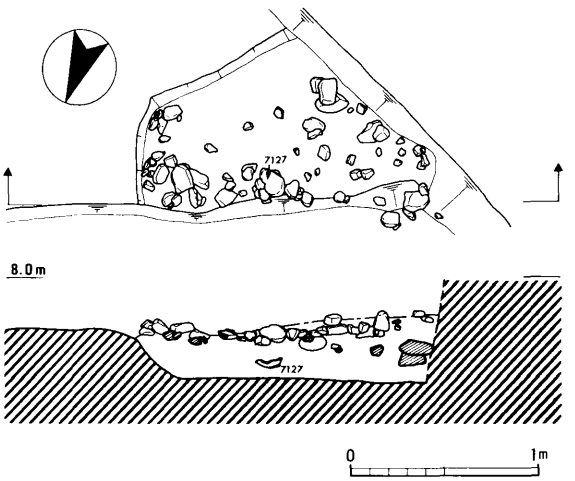
ＳＺ26～ＳＺ29は約1mの円形で土坑の内部には大量の礫が詰まっており、遺物はあまり出土せず、あっても時期の特定できない破片が多かった。

ＳＺ25は既述の４つに比べてかなり小さく、径0.3mの円形である。これにも大量の礫が詰まっていた。なお、この遺構は、全く遺物の出土がない。

これら遺構群の時期は、少ない遺物から188貢遺構一覧のように措定したが、ＳＺ24と同じ13世紀中葉から14世紀初頭頃の可能性もある。



第205図　ＳＺ29実測図（１：20）



第206図　ＳＺ30実測図（１：40）

ＳＺ30

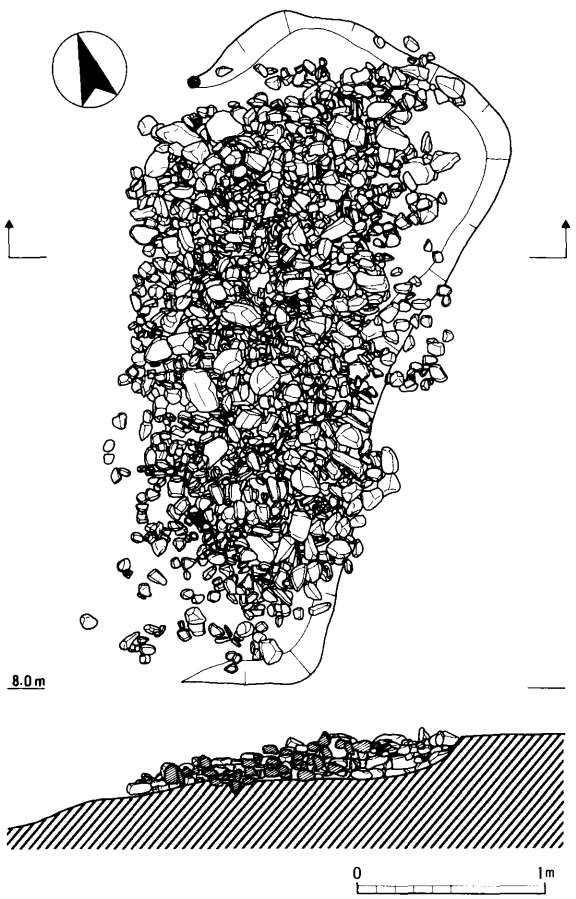
配石・石列ＳＺ24の南に隣接する礫詰まりの遺構である。遺構南半分の状況は不明であるが、1.3m×1.3m、深さ0.4mある。前述のＳＺ25～29と一連のものと思われるが、礫の状況は詰まっているという程ではなく、他の５つとはやや異なる。

ＳＺ30からは山茶碗と思われる破片が出土している。ＳＺ25からＳＺ29を含め、ＳＺ24と同じ層位に作られた一連の遺構と考えられ、同時期の13世紀中葉から14世紀初頭であると考えられる。

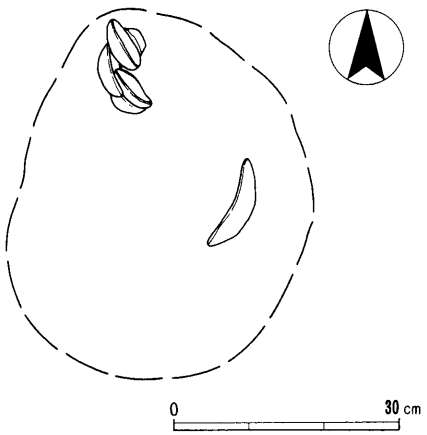
ＳＺ36

長径3.2m、短径1.6mの楕円形を呈する集石遺構である。ＳＤ１のすぐ東岸にあり、ＳＤ１の影響で落ち込んだ窪みに石が溜まった状況で検出された。従って深さは0.1～0.2mほどしかない。

中世の遺物の出土はなく、時期は近世以降の遺構であろう。このような集石の上部には石塔が建立されたり火葬施設が設けられたりすることもあるが、詳細は不明である。



第207図　ＳＺ36実測図（１：40）



第208図　ＳＺ79平面略図（１：10）

ＳＺ79

検出時点では確認することができず、掘り下げていく段階で土師器皿が重なった状況で出土した土師器皿溜まりである。明瞭に遺構の輪郭が確認されたわけでないが、遺物は原位置を動いていないと判断し、何らかの埋置行為の可能性を考えた。ただし、第208図は出土状況図ではなく、現場での略図である。なお、この略図にある円の範囲は、土師器皿の部分だけ残した際の高まりを示したものであり、遺構の範囲ではない。長径0.5ｍ、短径0.4ｍの範囲から、土師器皿１枚、土師器小皿10枚、鉄製の鎌の破片が１片出土した。土師器皿溜まりの範囲の土は茶褐色土の単一層のようであった。その出土状況から墓であったことも推察されるが、性格については不明である。時期は、出土の土師器皿より13世前半から中葉と思われる。　（小林）

（註）

① 山茶碗は以下の文献に拠っている。
・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター　1994
・中野晴久「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

② 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第５号　1982
水谷豊「石組井戸と木組井戸―三重県内の資料から見たその使い分け―」『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター　1999

③ 四日市市苑上遺跡では、多くの火葬穴と見られる土坑が検出されているが、それと比較すると土坑の周囲に焼土がなく、白い粉状のものの出土量も少ない。これらの条件から考えると、墓もしくは火葬穴と断定することは難しい。（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ　三重県埋蔵文化財センター　2000）

第２節　出土遺物

１　古墳時代の遺物

上段及び中段から出土した古墳時代の遺構に伴う遺物と包含層や後世遺構に混入した古墳時代遺物、それに調査区隣接地の畑耕作土より出土した古墳時代の遺物について述べる。

Ｈ－Ｓ12 pit３出土遺物（6814）

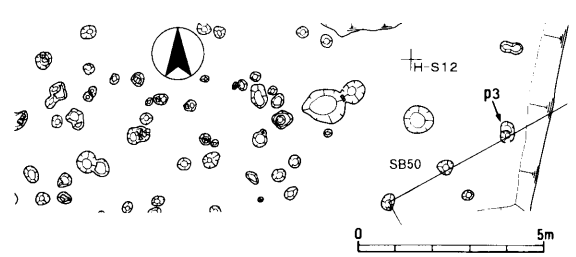
本ピットは、中世と考えられるＳＢ50の柱穴に重複されているが、遺物はその影響を免れた。小型の台付く字形甕で、口縁部ヨコナデ、体部をハケ調整する。ほぼ完形に近い土器で、混入というよりはこのピットに埋置された可能性が高い。そういう意味では、小さいながらも土坑状の遺構といえよう。

ＳＫ15混入遺物（6815）

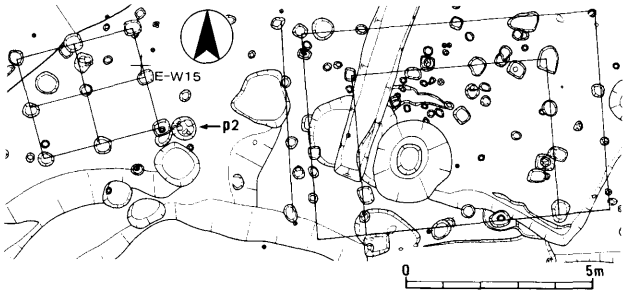
ＳＤ１に重複する中世の土坑であるＳＫ15に混入していた遺物で、そういう意味ではＳＤ１埋土に含まれていたとみてよかろう。初期須恵器の台付壺と推定され、ＳＤ１出土の3438と文様構成や波状文の特徴など酷似している。出土位置は異なるものの、同一集団の手によるものか、ことによると同一個体の可能性すら存在する。

ＳＫ74出土遺物（6816～6817）

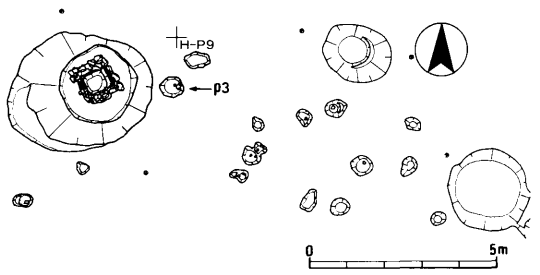
直口壺6816とＳ字甕Ｃ6817がある。6816は、頸部の括れが緩やかで、胴部の膨らみに乏しいややイレギュラーな形態をとるもので、器台の可能性もある。6817は、口径11.0cmと小さく、Ｓ字甕の小形品といってよい。



第209図　Ｈ－Ｓ12 pit３位置図（１：100）



第210図　Ｅ－Ｗ15 pit２位置図（１：100）



第211図　Ｈ－Ｐ９ pit３位置図（１：100）

ＳＫ64出土遺物（6818）

Ｓ字甕Ｄである。口縁端部のヨコナデは弱く、丸くおさめられている。

ＳＫ80出土遺物（6819～6820）

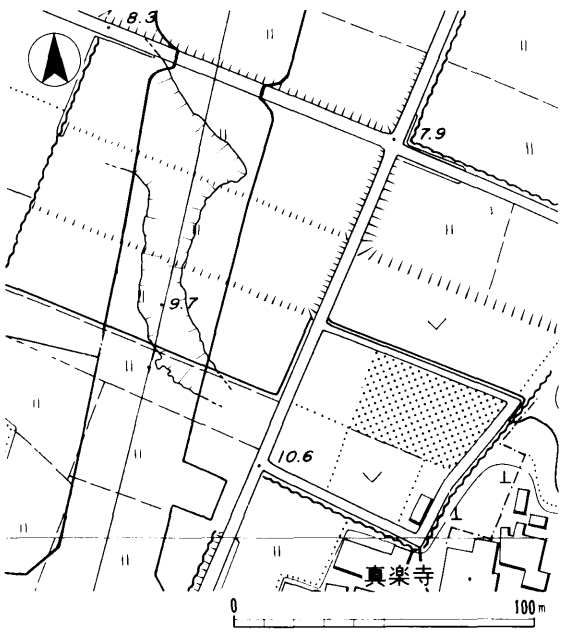
甕（6819）と石製模造品の紡織具（6820）が出土している。甕は、体部上半にハケ、下半にケズリを施したく字形の甕で、底部は円板状を呈する。石製紡織具は、前述の4393～4394と同形である。

Ｅ－Ｗ15 pit２出土遺物（6821）

本ピットは、ＳＤ１付設施設である貼石を取り除いた後にＳＢ19の東南隅柱穴に隣接して確認されたピットで、埋土に礫を含む。韓式系土器の鉢で、底部は丸底でアトランダムに円孔を穿っている。上半部が欠損しているため把手の有無は不明である。

ＳＺ21出土遺物（6822～6827）

須恵器甕（6822～6823）・坏身(6824)・短脚有蓋高坏（6825～6826）・土師器台付甕(6827)がある。須恵器坏は受部の立ち上がりが高く、底部のロクロケズリも丁寧に施されたシャープな作りで、短脚の高坏なども含め、５世紀後半の所産であろう。6827は、全体に磨耗しているが、Ｓ字甕であろう。



第212図　6828～6835採集の畑地（１：2,500）

ＳＺ16出土遺物（6838～6842）

土師器高坏（6838）・坏（6839）・須恵器坏蓋(6840)・坏身（6841～6842）がある。須恵器坏身・坏蓋は底部及び天井部が丸みをもっている。土師器高坏は屈折脚高坏Ｃである。

Ｈ－Ｐ９ pit３出土遺物（6836）

土玉である。所属時期は不明であるが、ＳＤ１では古墳時代に属するものが多いことから、本例も一応ここに措定した。

ＳＢ17出土遺物（6837）

北側の庇部分の柱穴から出土した遺物で、ハケ調整の小型坩である。

調査区隣接の畑地採集遺物（6828～6835）

発掘調査で出土したものではないが、ちょうど発掘調査と同時期に、調査区に隣接する畑地（発掘調査で作業員として来られていた方の所有）の耕作中に出土した遺物である。当該の畑地は、ちょうどＳＤ１上流部の東側への延長部に相当しており、ＳＤ１が上流部でかなり浅くなっていくこととあわせると、何らかの関連を想定してもよい遺物群である。

このうち、6829は、口縁部がやや短いが、上げ底形態の底部を含め、内彎口縁壺Ｅとの類縁性をもつ。ただし、やや小形であることは、小型坩的な土器であったのかもしれない。全面をミガキ調整した精製品である。

6833は、Ｓ字甕の脚部と推定されるが、ハケの方向が通有の右下がりと異なり、左下がりである。

包含層出土遺物（6843～6860）

いわゆる包含層や表土、攪乱部分から出土した遺物を包含層出土遺物として一括した。

6843～6850は土師器、6851～6852は土玉、6853～6854は初期須恵器、6855は韓式系土器、6856～6860は須恵器である。このうち、特徴的なもののみその概要を記しておく。

6843は、有段口縁壺Ａ３で、外面全面をハケ調整する。

6844は、器台Ｃに相当しようが、全体の屈曲はシャープさに欠ける。

6849は小型無頸鉢Ａ１で、内面全面に赤色顔料の塗布が認められる。

6853と6854は器台で、同じＨ－Ｕ10区から出土しており、同一個体の可能性がある。6853は、２条１単位の隆帯を有し、器台上部はやや幅狭で括れる特徴をもつ。6854は、鋸歯文をもつ。

6859は、天井部にヘラ記号をもつ。欠損しているが「×」であろう。　（穂積）

２　古代の遺物

ＳＢ67出土遺物（6861）

土師器甕[1]で、口縁部の折り返しは丸く、全体にススが大量に付着しているが、体部外面はオサエで成形している。11世紀代のものと考えられる。

ＳＥ９出土遺物（6862）

灰釉陶器[2]の碗である。口縁部は強く外反し、高台はいわゆる三日月高台を呈する。黒笹90号窯式のものであろう。

ＳＥ12出土遺物（6863）

灰釉陶器の碗である。口縁部は強く外反して高台はしっかりしており、高さもある。しかし、6862のように三日月高台ではない。黒笹90号窯式のものであろう。

ＳＥ91出土遺物（6864）

土師器甕である。磨滅が激しいが、外面のハケメと内面の板ナデがなんとか確認できる。９世紀後葉のものであろう。

ＳＫ94出土遺物（6865 ～6867）

土師器甕（6865）、須恵器坏（6866）及び甕（6867）の出土がある。6865の土師器甕は小形の甕の口縁部で、８世紀代のものか。6866は須恵器坏の底部である。

各pit出土遺物（6868 ～6869）

Ｈ－Ｘ８・Ｐ９、Ｈ－Ｙ８・Ｐ19からは製塩土器（6868）、Ｋ－Ｄ９・Ｐ３からは黒色土器（6869）が出土している。

6868はいわゆる志摩式製塩土器である。外面はユビオサエが見られ、内面には板状工具によるナデが見られる。

6869は黒色土器椀[3]で、いわゆるＡ類である。

包含層出土遺物（6870～6882）

本報告ではいわゆる包含層出土遺物のみならず、遺構内出土の遺物でも遺構の時期とは明らかに異なる遺物（混入遺物）や表土中の遺物も包含層出土遺物と共に報告することとする。

6870～6872は土師器甕である。6870はやや須恵質に焼きあがっている。

6873～6876は須恵器坏である。

6877は土師器坏である。内面にはらせんの暗文が見られる。斎宮跡の編年[4]では、８世紀前半のものである。

6879は土師器碗である。内面の一部に炭素の吸着が見られ、ハケかと思われる調整が見られる。

6880は志摩式の製塩土器である。6868とは違い内外面共ユビオサエによる成形が見られる。

6881～6882は須恵器壺の底部である。

３　中・近世の遺物

ＳＡ10出土遺物（6883～6886）

ここに掲載した遺物はすべて柱根である。6885は断面長方形に、それ以外は断面長方形の上に一方の長辺の角２ヶ所を面取りする。使用用材は6883～6885がヒノキ科、6886はサクラである。

ＳＢ93出土遺物（6887）

山茶碗[5]である。底部外面には「｜」の墨書が見られる。胎土は非常に粗く、口縁部のナデによる凹みが明瞭ではない。尾張産のもので、藤澤編年の第７型式にあたる。

ＳＤ57出土遺物（6888）

土師器小皿[6]である。小片のため詳細は不明だが、胎土から中北勢系のものと考える。

ＳＤ95・96出土遺物（6889～6890）

これらの遺構は削平が激しいためか出土遺物も少なく、図示できたものはわずか２点である。共に加工円盤で、6889は磁器染付の碗を、6890は瀬戸産の陶器碗をそれぞれ再利用したものである。

ＳＸ76出土遺物（6891～6895）

陶器山茶碗（6894）、土師器皿（6895）、鉄製品鎌（6891～6892）、鉄製品短刀（6893）がある。

6894は器壁が薄く、口縁部が強く外反し、体部下方はやや丸みを帯びる。藤澤編年の第5型式のものと考えられる。6895は橙褐色を呈し、やや厚手である。中北勢系のものであろう。

鎌２点（6891～6892）は共に木質が良好に残る。柄の木質が非常に残りが良い。特に6891は目釘の痕跡も明瞭に観察できる。目釘でどのように押さえていたかがわかる良好な資料で、『木器集成図録　近畿古代篇』[7]で紹介されている古代の鎌とほぼ同じ形態である。

6893の短刀は、鉄部分は完存しているが柄部などの木質等は観察できない。残存部の長さは33．2cmを計る。

ＳＥ20出土遺物（6896～6901）

井戸の土層から山茶碗（6896）が、Ⅱ層から山皿（6897）が、Ⅱｂ層から土師器皿（6898）・山茶碗（6899）が、Ⅲ層から山茶碗（6900）が、井戸内下層から土師器皿（6901）が出土している。遺物全体でその時期幅を見ると、概ね13世紀末葉から14世紀初頭の幅におさまる。6899のⅡｂ層出土の墨書山茶碗は、当初ひらかなで「け」と書いてあるのかと考えたが、「氏」である可能性もありその読みは不明としておく。

ＳＥ41出土遺物（6902～6915）

この井戸はⅠ～Ⅴ層まで分けることができ、出土した遺物はすべて出土層位別に把握されている。

Ⅰ層からは6902～6907が出土している。6902は石製の用途不明品であり、図示してあるオモテ面に磨滅した使用痕が見られる。材質は花崗岩と考えられる。6903～6905は土師器小皿、6906は同皿で、すべて南伊勢系のものである。

Ⅳ層からは6908・6909が出土している。6908の木製品櫛は漆塗りの横櫛で、背部は丸く仕上げられており、菊と思われる花文が刻まれる。歯は全く残ってなかったが、残存が31本、推定で36本を数える。6909は陶器片口鉢で、常滑産のものである。

Ⅴ層からは6910～6915が出土している。6910の瓦は凸面に格子目のタタキが入りその中に花菱文を配する平瓦で、当遺跡周辺の津市大里地域の遺跡で確認されている既報告分では川北城跡出土瓦[8]、窪田大垣内遺跡（３次）ＳＫ３出土瓦[9]がある。

6911は節抜の竹である。

6912は曲物片で、井戸底に据えられたまなこの破片であろう。

ＳＥ42出土遺物（6916～6922）

この井戸もⅠ～Ⅱ層に分層可能で、遺物の出土層位が把握されている。

Ⅰ層からは6916の山皿が出土している。外面底部に「十」の墨書が見られる。

Ⅱ層からは6917～6922が出土している。6917は土師器皿で南伊勢系のもので14世紀後半のもの。6919の山茶碗には墨書が見られるが、書いてある内容は不明である。6921～6922の木製品は曲物の底板で、底板と側板の結合形態は、6921～6922共に当遺跡『木製品編』[10]の穂積分類のＨ類に相当するものである。

ＳＥ45出土遺物（6923～6929）

土師器小皿（6923）、土師器皿（6924）、木製品（6925 ～6929）の出土がある。

6923の土師器小皿は南伊勢系、6924の土師器皿も南伊勢系のものである。

6925～6929は木製品箸で、『木製品編』で示した箸状細棒とは形状的に異なり、先端部分を尖らして口に入れやすくしている。

ＳＥ51出土遺物（6930～6942）

砥石（6930）、土師器小皿（6931）、山茶碗（6932～6935）、陶器甕（6936～6937）、竹製品（6938）、木製品（6939～6942）の出土がある。

6930の砥石には図示してある面の表裏共に使用痕が見られる。

6931の土師器小皿は南伊勢系のもの。

6932の山茶碗は、底部外面に墨書が見られるが、完存でないため内容は不明である。6933～6935の山茶碗は、藤澤編年第７型式から第８型式にかけてのもので、13世紀後半から14世紀前半の所産と思われる。

6936～6937は常滑産[11]の陶器甕である。中野・赤羽編年の８型式のもので、14世紀後半に属する。

6938は竹製品で、口縁部に２個の孔を持つ。用途

に関してはわからない。

6939の木製品は大きさから曲物底板になることは考えられず、円形加工板としておく。

6940～6941は不明木製品である。6940には枠材の可能性もある。6942の場合は遺物の大きさや厚みから井戸枠材としてよいだろう。

ＳＥ89出土遺物（6943～6951）

土師器皿（6943）、山皿（6944～6946）、山茶碗（6947～6951）が出土している。6943の土師器皿北勢系のもの。6947の山茶碗には底部外面に「十」の墨書が見られる。おおむね藤澤編年第６型式のものである。

ＳＥ90出土遺物（6952～7007）

六大Ａ遺跡の集落域では最も多くの遺物が出土した。土師器小皿（6952）、土師器皿（6953）、土師器鍋（6956～6958）、瓦器碗（6954）、山皿（6961～6969）、山茶碗（6970～6999）、無釉陶器練鉢(6960)、陶器甕（6959）、青磁碗（6955）、砥石(7000～7002)、鉄製品（7003）、瓦（7004～7005）、木製品（7006～7007）の出土がある。

6952の土師器小皿、6953の土師器皿は共に南伊勢系のもの。6954は伊賀型瓦器碗で、山田猛氏の編年[12]のⅡ－4頃か。6956～6958は南伊勢系の土師器鍋、6959は常滑産の陶器甕で６ａ型式のものか。13世紀後半代。

6960は無釉陶器練鉢で知多産。6961～6969は山皿で、6962には底部外面に「Ｄ」の墨書が見られる。6970～6999は山茶碗である。山皿・山茶碗は第６型式から第７型式の中でおさまる。

特記すべきことは、多数の墨書山茶碗が出土していることである。特に6985は「桶」や「楠」に近いが解読不能である。また6973は花押、6975の「の」のようなものは略押と考えられ[13]、6999の渦巻文風の墨書は略押ともなんらかの記号とも考えられ非常に興味深い。

7001・7002の砥石には砥面が確認でき、それぞれ４面、５面と確認できる。7000は断定できないが、砥石の可能性がある。３点とも砂岩製である。

7004は前述の凸面格子目内花菱文瓦、7006は木製の下駄である。木製下駄に関しては穂積分類のＢ４類とすべきか。左足の指の痕が明瞭に見られ、かなり履き込んでいたと思われる。7007は上部に受け部となる板材を組み合わせる何かの脚であろう。

ＳＥ92出土遺物（7008～7033）

比較的多量の遺物が出土した。土師器皿（7008～7009）、土師器鍋（7011）、青磁碗（7010）、無釉陶器鉢（7012）、陶器甕（7013）、山皿（7014～7018）、山茶碗（7019～7033）がある。

7008～7009の土師器皿は、共に中北勢系である。

7010は青磁碗で口縁部に大きな玉縁を持つ。大宰府跡の分類[14]では玉縁を持つ青磁は越州窯系青磁のⅡ－２ｆがあるが、口縁の形状はどちらかというと白磁Ⅳ類に近い。

7013は常滑産の甕で５型式あたりと思われる。

7014～7033は山皿・山茶碗である。尾張産と渥美産のものがあり、第５型式から第６型式にかけての所産である。墨書の入ったものも６点出土している。そのうち４点が「十」もしくは「×」の墨書、7033は墨痕がつぶれていて不明瞭ではあるが花押である。

ＳＫ14出土遺物（7034～7039）

陶器甕（7034～7035）、山茶碗（7036）、白磁（7037～7038）、陶器壺（7039）の出土がある。

7034～7035の陶器甕は常滑産のもので、５～６型式あたりのもの。

7036の山茶碗は体部外面に墨書が見られる。欠損部が大きく確定できないものの4077から4078と同じ花押の可能性が高い。

7037は白磁碗の底部、7038は白磁壺の頸部から口縁にかけての部分である。

7039は色調が灰オリーブ色を呈するもので陶器壺とするのがよかろう。

ＳＫ68出土遺物（7040～7042）

図示したもの３点（7040～7042）はすべて山皿である。第６型式から第７型式の中におさまる。

ＳＫ75出土遺物（7043～7044）

いずれも山皿である。第５型式から第６型式におさまるものである。

ＳＫ59出土遺物（7045）

山茶碗である。内部には重ね焼きの痕跡も残る。尾張産で第６型式あたりか。

ＳＫ13出土遺物（7046～7047）

7046は山茶碗で、渥美産であろう。内面にはスス

が大量に付着、さらに焼け焦げたひもも残存しており灯明用に使われたものである。

ＳＫ15出土遺物（7048～7049）

山皿（7048）、白磁壺（7049）が出土している。

7049の白磁壺は、壺の肩の部分が残存していた。４条の刻線が入り、耳が少し残存する。その間隔から三耳壺の可能性が高い。

ＳＫ84出土遺物（7050～7055）

山皿（7050）、山茶碗（7051～7054）、無釉陶器鉢（7055）があり、尾張産と渥美産のものが見られる。

ＳＫ99出土遺物（7056～7057）

図示したものは２点共に山茶碗である。7056は渥美産、7057は尾張産のものであり、産地は違うが時期はほぼ同じころと見てよいだろう。第５型式あたりか。

ＳＺ24出土遺物（7058～7124）

土師器小皿（7058～7066）、土師器皿（7067～7072）、土師器鍋（7073）、山皿（7074～7080）、山茶碗（7081～7101）、陶器鉢（7102～7103）、陶器甕（7106～7107）、陶器卸皿（7108）、青磁類（7104～7105・7110～7111）が出土している。

土師器には中北勢系のものと南伊勢系のものが混在する。小皿は7066を除きすべて南伊勢系のもので、7066は中北勢系のものである。皿は7067を除きすべて南伊勢系のもので、7067は在地のものと比較して焼成が良い。外来のものであろうか。

山皿・山茶碗には尾張産、渥美産のものが見られ、第６型式から第７型式のものが中心である。墨書のあるものも数点見られ、7083は「交」としたが２文字とみて「大入」の可能性もある。7092は「貳」、7088～7089・7093は「○」もしくはそれに近いものであるが筆順や書き方などは異なっており、分類上は別々の記号とみるべきであろう。

7104～7105は青磁である。共に口縁小片であるためどのようなものか不明だが、碗であろうか。

7106～7107は常滑産の陶器甕である。7106は６ｂ型式のもので、甕としたが広口壺とすべきか。

7108は瀬戸産陶器卸皿で、古瀬戸前期様式[15]のものである。

7109は加工円盤で、山茶碗の底部を再利用したものである。山茶碗時の底部内面の一方向ナデが明瞭に見られる。

7110～7111は青磁碗で、龍泉窯系のもの。

7112～7113は瓦で、共に凸面格子目内花菱文の平瓦である。

7114～7116は砥石である。7115の実測図に表されているらせん状の文様は擦痕である。

7117は有孔石製品、7118は不明石製品？で、7119は土製紡錘車である。

7120～7123は古銭ですべて宋銭[16]である。7123のみ折二銭だと思われ、それ以外は小平銭か。鋳造年代はすべて11世紀代のものである。

7124は漆器椀である。器全体を黒漆で、また内外面それぞれに朱漆で花文の絵付けが施されている。漆の部分だけが残ったもので、本体の木質部は腐蝕のためなく、使用樹種は不明である。

ＳＺ27出土遺物（7125）

丸瓦である。玉縁部の段状部分が残る。

ＳＺ26出土遺物（7126）

山茶碗の出土が見られる。渥美産で第５型式のものである。

ＳＺ30出土遺物（7127）

山茶碗である。渥美産で第６型式のものと考えられる。

ＳＺ79出土遺物（7128～7139）

土師器小皿（7128～7137）と土師器皿（7138）、鉄製品鎌（7139）が出土している。土師器小皿・皿は、共に中北勢系のものと思われる。

各pit出土遺物（7140～7153）

7140～7142は土師器の皿である。7141は「て」字状口縁を持つ京都系土師皿である。7142はロクロ土師器である。

7143～7145は山皿、7146～7149は山茶碗、7150が無釉陶器の片口鉢である。7147は体部に籾柄痕が見られる。7146・7149には墨書が見られる。

7151は常滑産の陶器甕の底部、7152は青磁碗の底部で、7153は砥石である。

包含層出土遺物（7154～7213）

古代遺物の項目でも述べたが、ここでは包含層出土遺物のみならず、表土中の遺物や遺構内出土でも遺構の時期とは明らかに異なる遺物（混入遺物）の場合もここで報告する。

7154～7158は土師器小皿である。7154にはススの付着が見られ、灯明皿としての痕跡が見られる。7156はやや厚手で中北勢系のものか。それ以外の土師器小皿は南伊勢系のものであろう。7158のロクロ土師器については産地系統等不明である。

7160～7166は山皿、7167～7181は山茶碗である。7160は皿としたが、小碗とすべきか。尾張産と渥美産のものがあり、第4型式から第8型式までが見られる。墨書のある例も多く見られ、7166は外面の体部底部共に墨書が見られる。体部は「大」、底部は「御（お）めいし」と読め、「いし」という女性名を示すものであろう。また7176は「又」、7179は「米」7180は「はくち」もしくは「はくろ」と判読できる。7180が「はくち」とすれば「博打」、「はくろ」とすれば「博労」を意味するものであろう。

7183～7184は瓦質土器である。7183は奈良火鉢[ママ]の浅鉢もしくは風炉の脚部であろう。7184は奈良火鉢の浅鉢の口縁から体部にかけての破片で、菊花文のスタンプが見られる。

7185～7187は青磁碗である。7186～7187には内面見込み部に文様が入る。龍泉窯系のものか。

7188は陶器の小皿で、口縁部に油燈の付着が見られる。7189～7190は陶器で香炉か。7191は擂鉢である。7192～7193は磁器染付碗である。

7194～7195は加工円盤である。7194は天目茶碗の底部を再利用したもの。7195は陶器擂鉢の擂り目を生かして再利用したと考えられる。

7196は青磁の皿である。内面に装飾が見られ、見込みには花文が見られる。

7197～7198は土錘。7199～7204は瓦である。7199はおそらく鳥衾瓦[ママ]で、軒部分が残る。珠文がない三巴文で巴は左に巻く。巴の頭は欠損によって繋がるのかどうかは不明で、尾は瓦当の3分の1ほどをまわる。外縁部は1.9cmの幅である。7200は平瓦で、凸面格子目内花菱文瓦である。

7205～7206は石製品で擦り面が確認できることから砥石であろうと考えられる。

7207は石臼で約半分の残存である。材質は花崗岩でできており、完形ならば直径は32.4cmを測る。

7208は猿形土製品である。材質は素焼きの土師質で浅黄橙色を呈する。頭部のみの残存で、右側の耳が欠損しており、左側の耳は軽く貼り付けられているだけである。頭はハケ調整により毛が表現されている。また毛の表現がなくなる首部分にはオサエ調整が見られる。このことから頭部は体部に差し込む形で使用された可能性が考えられる。まぶたの部分がややへこみ、鼻・口部分が前へ出る形で、非常に滑稽な表情をしている。

7209～7212は鉄製品である。7210～7211は釘の可能性が考えられる。

7213は、北宋銭の「明道元寶」で、材質は銅である。初鋳年は1032年で真書のものである。（小林）

（註）

① 以下、土師器甕は下記の文献に拠った。
・泉雄二・森川常厚「伊勢・伊賀・志摩」古代の土器研究会編『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』真陽社 1996
・新田洋「平安時代～中世における煮沸用具―「伊勢型」鍋―に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会 1985

② 以下灰釉陶器は下記の文献に拠った。
・山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

③・田中琢「古代・中世における手工業生産の発達（4）畿内」『日本の考古学』Ⅳ歴史時代（上）河出書房新社 1967
・大川勝宏「斎宮の黒色土器―供膳形態を中心に―」『斎宮歴史博物館研究紀要』2 斎宮歴史博物館 1993

④・泉雄二「斎宮跡の土器様相」『記念シンポジウム斎宮の土器・みやこの土器資料』斎宮歴史博物館 2000

⑤ 以下山皿・山茶碗は下記の文献に拠った。
・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994
・中野晴久「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994

⑥ 以下中世の土師器については、下記の文献に拠った。

〔皿〕
・倉田直純「下川遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1990
・伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」『嶋抜』Ⅱ 三重県埋蔵文化財センター 2000
・伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1

集　(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987

・伊野近富「土師器皿」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

・新田洋「中・南伊勢における中世土師器」『マージナル』No.9 1988

・伊藤裕偉「調査の成果—出土した遺物—」『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993

・伊藤裕偉「土器の変遷～土師器皿について～」『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996

・前川嘉広「各時期の土器」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告—第6分冊—蚊山遺跡左郡地区』、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1993

〔鍋・羽釜類〕

・伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』、第4回東海考古学フォーラム 1996

・伊藤裕偉「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター1999

⑦ 町田章・上原真人『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所 1984

⑧ 萱室康光『川北城跡（1次）発掘調査概報』津市教育委員会 1981

⑨ 大川勝宏・川崎志乃『窪田大垣内遺跡（第3次）・管ヶ谷古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997

⑩ 穂積裕昌『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』三重県埋蔵文化財センター 2000。以下、本文中は『木製品編』と略す。

⑪ 以下常滑産の陶器甕は下記の文献に拠った。

・赤羽一郎・中野晴久「中世常滑焼の生産地編年」永原慶二編『常滑焼と中世社会』小学館 1995

・中野晴久「中世陶器（常滑・渥美）」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

⑫ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会 1986

⑬ 平川南『墨書土器の研究』吉川弘文館 2000

⑭ 以下貿易陶磁は下記の文献に拠った。

山本信夫『大宰府条坊跡15—陶磁器分類編一』　太宰府市教育委員会 2000

⑮ 藤澤良祐「中世瀬戸窯の実体」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 1996

⑯ 以下出土銭貨は下記の文献に拠った。

永井久美男編著『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会 1996

⑰ 以下奈良火鉢は下記の文献に拠った。

・立石堅志「瓦質土器（奈良火鉢）」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

・菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989

・福田哲也「向王子B遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1990

⑱ ・毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至寶瓦』小学館 1992

・山崎信二『奈良国立文化財研究所学報第59冊　中世瓦の研究』雄山閣出版 2000

〈付記〉井戸の「息抜き筒」について

本文中でも示したが、ＳＥ20では井戸を埋める時に井神の息ができるようにいっしょに埋め込まれたいわゆる「息抜き筒」と思われる正立状態の竹が確認された。またＳＥ42では、正立状態かどうかは確認できなかったが、最下層のＶ層から節を抜いた竹（6911）が出土しており、同じく「息抜き筒」の可能性がある。ＳＥ20は13世紀末葉から14世紀初頭、ＳＥ42は13世紀後半から14世紀中葉の埋没で、現代まで続く井戸を埋める時の「井戸の神様」に対する儀礼が、六大Ａ遺跡では14世紀前後には存在していた可能性を示した。

遺構番号	遺構の性格	規模(m) (長径×短径×深さ)	時期	備考
SD1	大溝	100.0×15.0～30.0×1.0～3.0	弥生時代後期～中世	各種付設施設有(別表参照)
SR2	旧河道	不明	弥生時代後期～中世	志登川右岸の低湿部に相当か
SD3	溝	2.4×1.0	古墳時代中後期	
SD4	溝	1.4×0.8	古墳時代中後期	
SD5	溝	14.0×2.0×0.2	古墳時代中後期	
SK6	土坑	3.2×2.0×0.5	古墳時代前中期	
SK7	土坑	1.7×1.7×0.3	不明	
SE9	井戸	1.3×1.3×1.3	9C後半	
SK11	土坑	1.8×1.75×0.2	不明	
SE12	井戸	1.5×1.5×1.2	9C後半	
SK13	土坑	0.8×0.8×0.5	11C～12C	
SK14	墓？	1.3×1.3×0.6	13C後半～14C初	
SK15	土坑	1.1×1.1×0.35	13C代	
SZ16	竪穴状遺構	6.2×5.0以上	古墳時代か？	
SE20	井戸	2.2×2.2×2.5	13C末～14C初	井神の竹筒有
SZ21	不明	1.75×1.2×0.1	5C末	
SK23	土坑	3.6×1.2×0.2	近世	
SZ24	配石・石列	12.0×10.0	13C中～14C初	石列の軸方向N21.5° E
SZ25	墓？	0.3×0.3×0.1	不明	遺物なし
SZ26	墓？	1.0×1.0×0.4	11C末～12C中	
SZ27	墓？	1.0×1.0×0.4	12C代?	
SZ28	墓？	1.0×1.0×0.6	不明	
SZ29	墓？	0.8×0.6×0.3	12C前～13C初	
SZ30	墓？	1.3×1.3×0.4	不明	
SE31	井戸？	1.2×1.2×1.7	中世	
SK32	土坑	0.75×0.5×0.25	不明	遺物なし
SK33	土坑	0.8×0.5×0.1	不明	遺物なし
SK34	土坑	0.5×0.4×0.1	不明	遺物なし
SK35	土坑	0.8×0.65×0.15	不明	遺物なし
SZ36	集石	3.2×1.6×0.1～0.2	近世	
SK37	墓？	0.45×0.4×0.3	不明	
SK38	墓？	0.75×0.75×0.15	不明	
SK39	墓？	0.8×0.8×0.7	不明	
SE41	井戸	4.0×3.2×2.8	14C前半	枠材あり
SE42	井戸	1.7×1.7×1.0	13C後～14C中	曲物底板
SE43	井戸	2.2×2.2×0.6	13C中葉	
SE44	井戸	1.5×1.5×1.6	14C後半～15C初	H-Q2 P1でもある
SE45	井戸	2.3×2.0×1.2	14C後半～15C初	
SE51	井戸	2.6×1.7×1.2	14C後半～15C前葉	枠材あり
SD56	溝	2.0×0.5	中世？	遺物なし
SD57	溝	3.0×0.4	中世	軸方向N20° E SD56と同一遺構か？
SK58	土坑	1.0×1.0×0.45	不明	
SK59	土坑	一辺0.9～1.0の方形×0.2	13C	
SD60	溝	4.0×0.2	中世	軸方向N53° W
SD61	溝	5.0×0.2	中世	軸方向N37° E
SD62	溝	5.0×0.4～1.0×0.2	9C代	軸方向N10° E
SD63	溝	4.0×0.3	近世	軸方向N10° E
SK64	土坑	1.7×1.6×0.2	古墳時代前期	
SD65	溝	4.0×0.2	不明	
SK68	土坑	1.8×1.5×0.5	13C中葉	
SK74	土坑	2.5×2.0×0.2	古墳時代？	
SK75	土坑	2.2×1.5×0.2	13C前葉～中葉	
SX76	墓	1.6×0.6×0.25	13C前葉	
SZ79	墓？	不明	13C前葉～中葉？	

遺構番号	遺構の性格	規模(m) (長径×短径×深さ)	時期	備考
SK80	土坑	2.55×2.35×0.2～0.6	古墳時代	
SD81	溝	4.2×0.2	13C中葉～	軸方向N12° E
SD82	溝	11.0×0.1	12C末～13C中葉	軸方向N67° W
SD83	溝	14.0以上×0.1	12C末～13C中葉	軸方向N67° W
SK84	土坑	3.5×3.1×0.15～0.3	13C中葉～14C初頭	
SE85	井戸	1.6×1.1×1.4	13C後葉～14C前葉	
SD86	溝	6.4以上×0.1	12C末～13C中葉	軸方向N67° W
SD87	溝	13.2以上×0.1	12C末～13C中葉	軸方向N67° W
SE89	井戸	2.5×2.2×0.9	13C前葉～中葉	
SE90	井戸	3.9×3.0×1.5	13C中葉～14C初頭	曲物底板
SK91	土坑	1.6×1.6×0.3	9C後葉	
SE92	井戸	径5.9m(推定)×1.0	13C前葉～中葉	
SK94	土坑	4.2×2.8×0.2	10C代	
SD95	溝	20.0以上×0.3×0.2	13C中葉～近世	底が暗灰褐色土
SD96	溝	28.0以上×0.3×0.2	13C中葉～近世	底が暗灰褐色土
SD97	溝	12.0以上×0.2×0.1	13C中葉～近世	
SD98	溝	12.0×0.4	近世	近世土師皿出土
SK99	土坑	2.0×1.2×0.7	12C末～13C初頭？	
SK100	土坑	1.4×1.4	中世	
SK101	土坑	2.0×1.1	中世	黒色土
SK102	小土坑	0.7×0.7×0.3	中世	常滑甕片

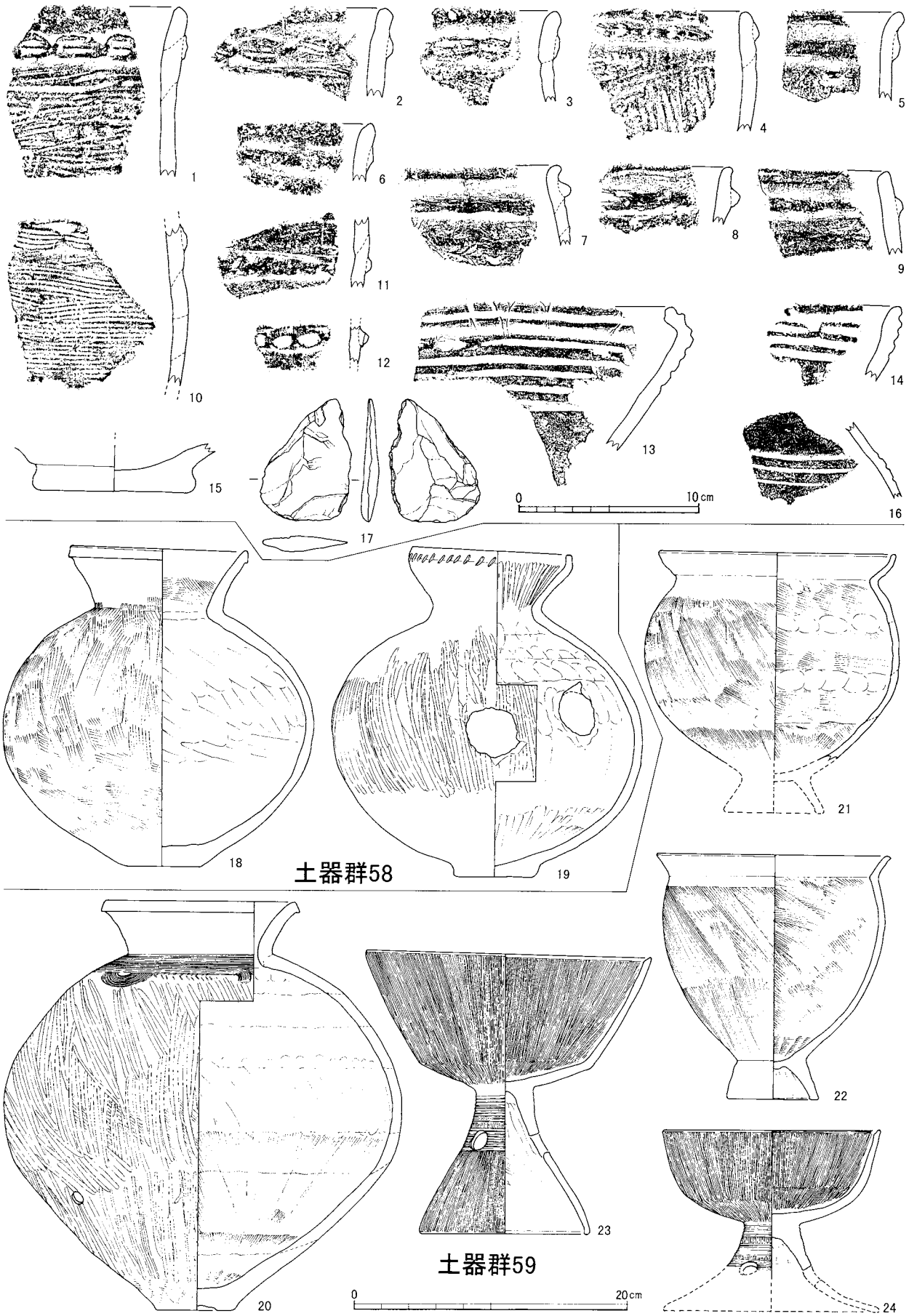
第２表　遺構一覧（大溝・溝・土坑・井戸・墓・不明遺構等）

遺構番号		規模(m) (長径×短径×深さ)	時期	備考	調査時番号
SD1内	井泉10	2.0×1.7×0.3	弥生時代後期		H-L11 Ⅳ層下部井泉
SD1内	井泉5	4.0×3.5×0.6	弥生時代後期	2.1×1.9mの下段有	H-J10 Ⅲb層井泉
SD1内	井泉4	3.2×2.0×0.5	古墳時代前期		H-G･H9Ⅲb層最下層土坑
SD1内	井泉6	1.9×1.0×0.25	弥生時代末～古墳時代初頭以前		H-K11 Ⅲb層井泉
SD1内	井泉2	1.3×1.2×0.4	古墳時代中後期		－
SD1内	井泉3	2.45×2.25×0.9	古墳時代中期		－
SD1内	井泉1	2.35×2.25×0.4	古墳時代中後期	木製刀形と勾玉出土	E－V9 井泉
SD1内	井泉7	1.5×1.5×0.48	6世紀初頭前後	3.4×2.2(石敷部)	H-L11 Ⅱ層下部～Ⅲa層井泉
SD1内	井泉8	2.0×1.6×0.2	5世紀後半～末頃		H-K･L11 井泉上面
SD1内	井泉9	2.0×1.8×0.15	5世紀後半～末頃		H-K･L11 Ⅱ層下部配石
SD1内	井泉11	1.5×1.3×0.35	古墳時代後期	2.85×2.5(石敷部)	H-M12 井泉
SD1内	井泉12	1.1×0.8×0.15	飛鳥時代		H-M11 Ⅱ層SZ
SD1内	井泉13	1.6×1.3×0.6	飛鳥時代以降		H-K10 左岸配石
SD1内	井泉14	2.4×1.9×0.7	中世		H-K10 左岸配石
SD1内	石組1	2.4×1.5	5世紀		H-N14 Ⅲa層最上流部石組み
SD1内	石組2	0.5×0.45	古墳時代前期		H-A11 Ⅲa層セットB
SD1内	木組	7.0×4.0	古墳時代初頭～前期		H-L12周辺木組
SD1内	礫群1	6.0×2.0	古墳時代前期		Ⅲb層上部礫群
SD1内	礫群2	7.0×4.0	古墳時代前期		Ⅲb層下層礫群
SD1内	礫群3	5.0×4.0	古墳時代初頭～前期		Ⅲb層下部入江状屈曲部石敷
SD1内	木柱	6.2×2.8	古墳時代前期	礫群1面に存在	－
SD1内	上層礫敷	100.0×5.0	古墳時代中期		Ⅱ層礫敷･貼石
SD1内	下層礫敷	36.0×4.0	古墳時代前期		Ⅲa層下部･Ⅲb層礫敷
SD1内	最下層礫敷	14.0×5.6	弥生時代末～古墳時代初頭		Ⅳ層上面礫敷
SD1内	壁材	5.0×4.5	古墳時代中期		壁材
SD1内	貼石	17.0×4.0	飛鳥時代		右岸貼石

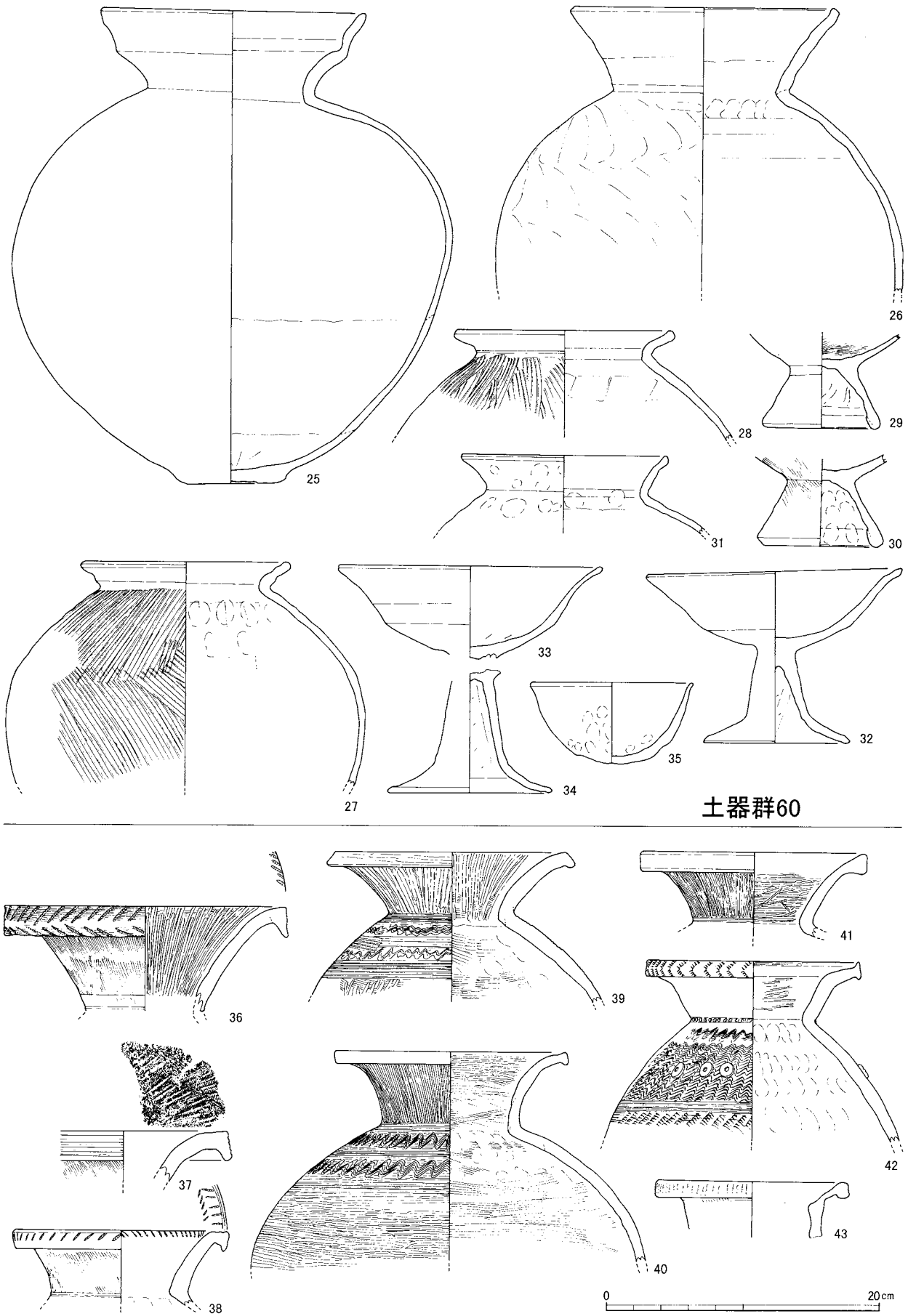
第３表　遺構一覧（ＳＤ１内付設施設）

遺番号	規模				棟方向 軸方向	柱間(m)		時期	備考
	間数	東西(m)	南北(m)	面積(㎡)		東西	南北		
SA8	12前後	-	9.0	-	南北 N31° W	-	不等間	古墳時代？	
SA10	5	-	8.3	-	南北 N3° E	-	1.8+1.8+0.9 +1.6+1.9	中世？ 詳細不明	一部に柱痕が依存 根石有
SB17	3×3	5.2	4.3	22.36	東西棟 N6° W	約1.7	約1.3	古墳時代中後期	SA18と関係？ 根石有？
SA18	3	-	5.4	-	南北 N6° W	-	約1.6	古墳時代？	SB17と関係？（平行）
SB19	2×2	3.3	2.9	9.57	東西棟 N15° W	1.6	1.4	古墳時代後期	
SB22	3×2	6.3	3.9	24.57以上	東西棟 N14° E	2.0	2.0	13C中葉～14C前期？	
SB40	3×2	3.9	5.9	23.01	南北棟 N32° W	2.0	2.0	奈良時代～平安時代	
SB46	5×3	5.2	9.5	49.40	南北棟 N13° W	1.6	1.7	8C代	
SB47	3×2	7.0	4.0	28.00	東西棟 N36° W	2.2	2.0	9C代	
SB48	2×2	4.5	4.1	18.45	東西棟 N21° W	2.2	2.0	13C中葉～13C後期	
SB49	2×2(推定)	4.3	4.9	21.07	南北棟 N32° E	2.2	不明	13C中葉？	
SB50	3×2以上	3.7以上	4.2	15.54以上	東西棟(推定) N27° W	1.8	1.4	不明(中世？)	
SB52	4×3	5.4	3.7	19.98	東西棟 N29° E	1.3	1.2	14C後半？～15C初頭	
SB53	3×2	6.4	4.3	27.52	東西棟 N46° E	2.1	2.1	8C後半～9C	
SB54	5×2	4.5	8.1	36.45	南北棟 N14° W	2.2	1.8	8C代	
SA55	3	-	5.1	-	南北 N14° W	-	1.4+1.9+1.8	8C	
SB66	4×3	4.4	5.2	22.88	南北棟 N22° W	1.1	1.6	13C中葉～13C後半	
SB67	3×3	5.8	4.3	24.94	東西棟 N15° W	1.8	1.5	10C後半	
SB69	2×2	4.4	4.4	19.36	東西棟か？ N20° W	2.2	2.2	12C末～13C前期	
SB70	3×2	6.1	3.5	21.35	東西棟 N31° W	2.0	1.8	平安時代か？	
SB71	5×2	9.8	4.6	45.08	東西棟 N20° W	2.0	2.3	8C末	根石有
SB72	3×2	3.7	6.2	22.94	南北棟 N27° W	1.8	2.0	10C代？	
SB73	3×2	6.3	4.1	25.83	東西棟 N40° W	2.1	2.0	13C初頭	
SB77	3×3	3.3	4.7	15.51	南北棟 N26° E	1.1	1.5	13C代	
SB78	2×2	4.6	5.5	25.30	南北棟 N36° W	2.3	2.7	12C末～13C前期	
SB88	2×2	4.8	3.1	14.88	東西棟 N34° E	2.4	1.5	不明	
SB93	3×2	6.3	4.6	28.98	東西棟 N40° W	2.1	2.3	13C中葉	

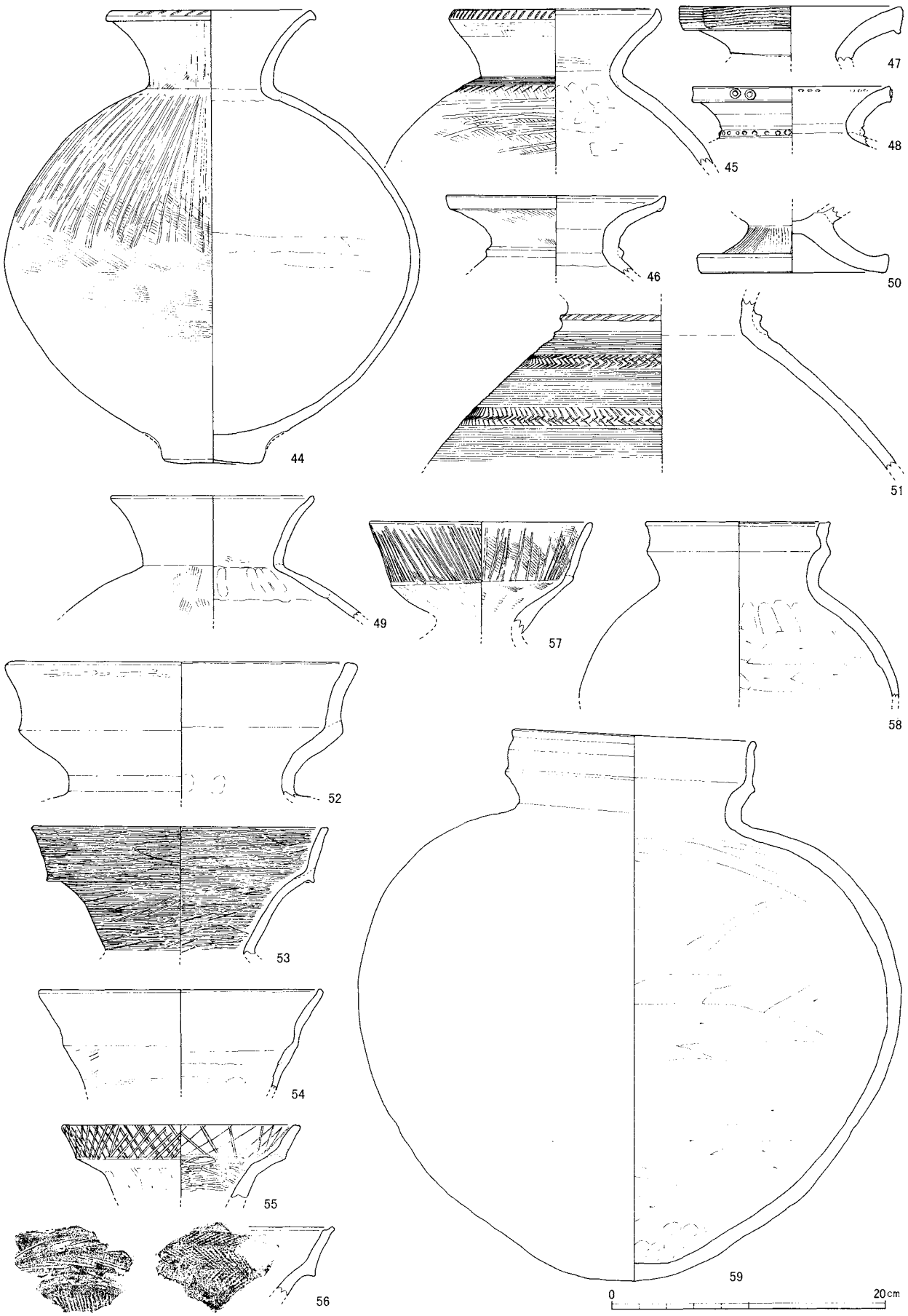
第４表　遺構一覧（掘立柱建物・柵・柱列）



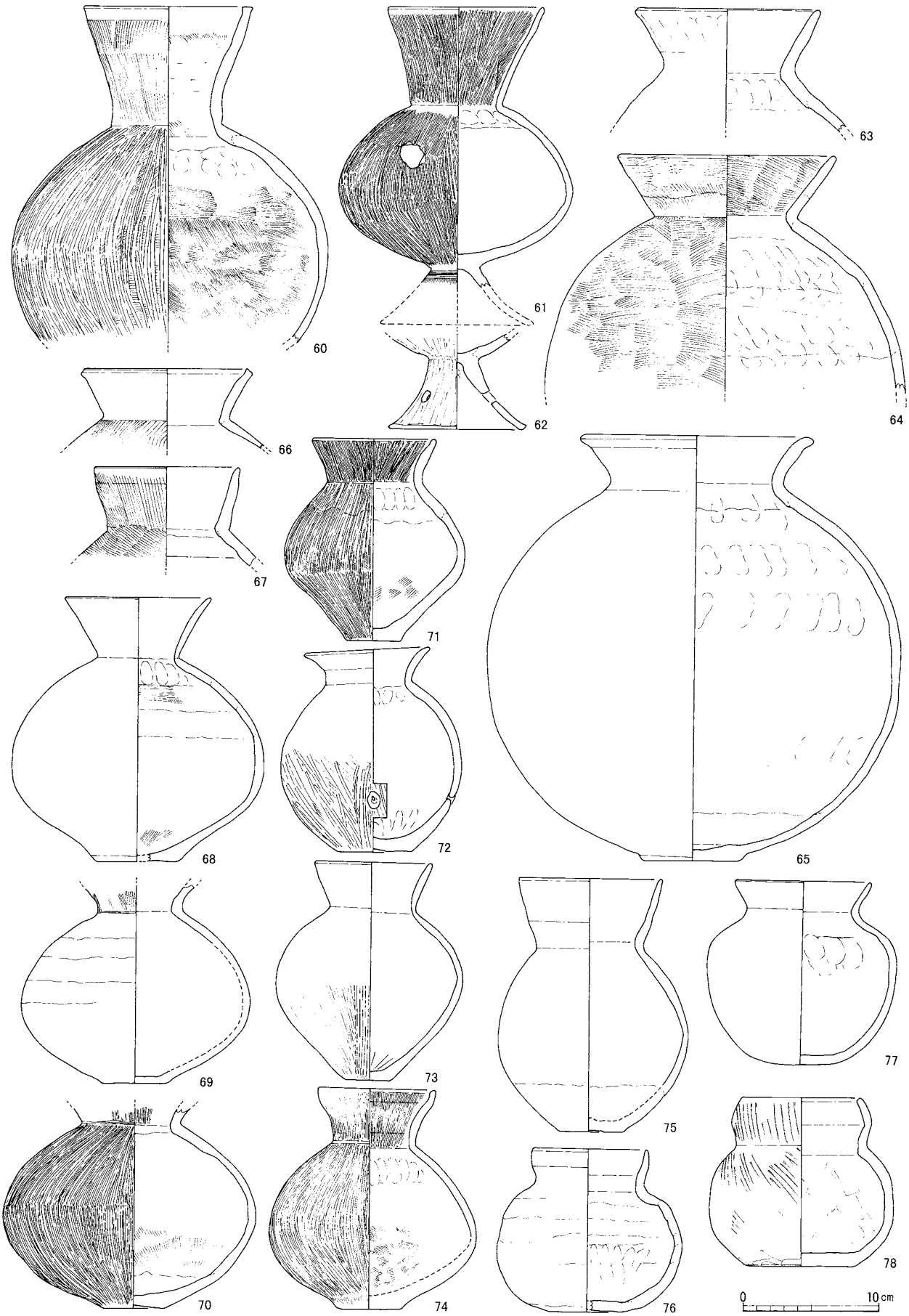
第213図　ＳＲ２出土遺物（土器群58・59を含む）　　（１～16は１：３，17～24は１：４）



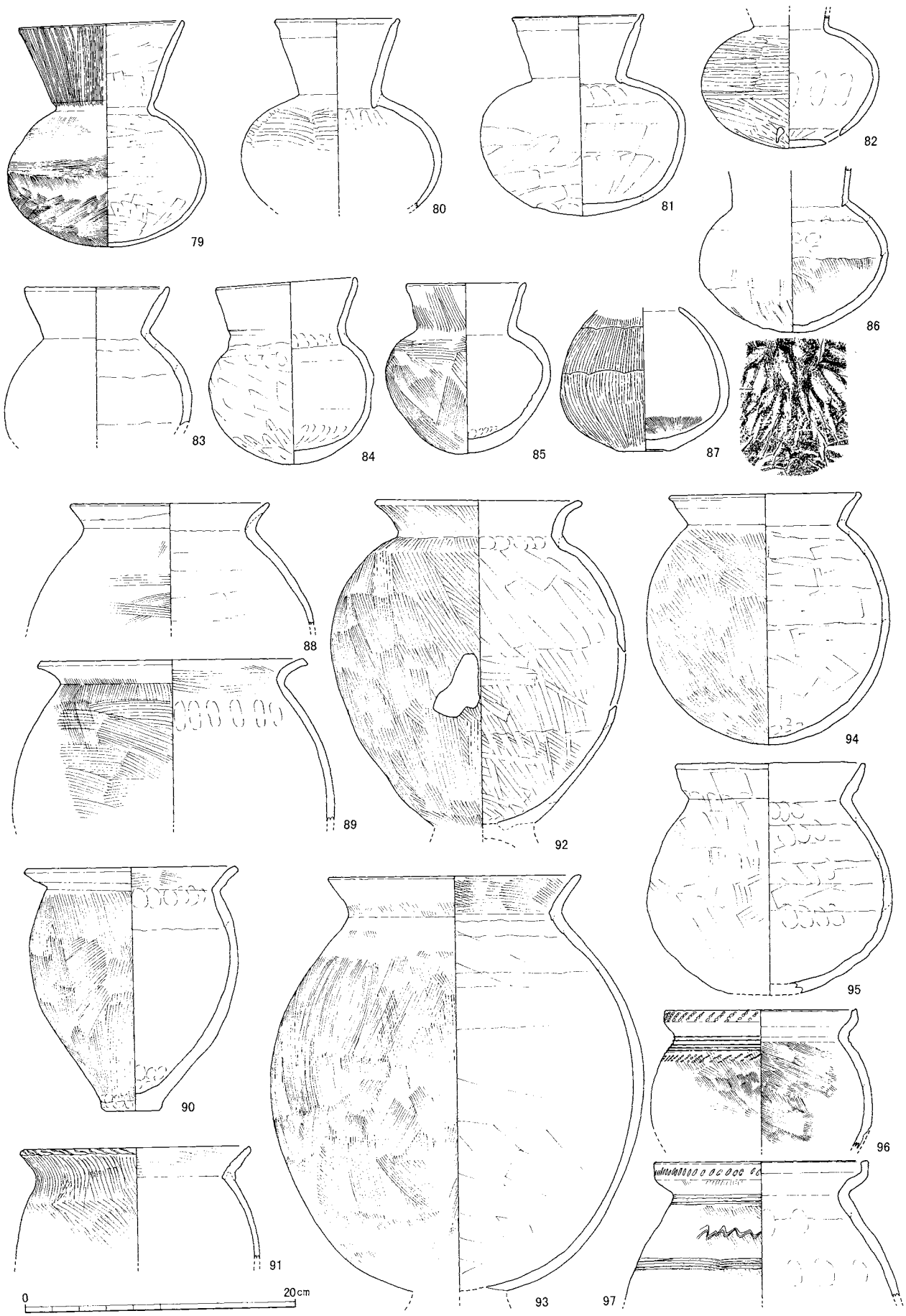
第214図　ＳＲ２出土遺物（土器群60を含む）　（１：４）



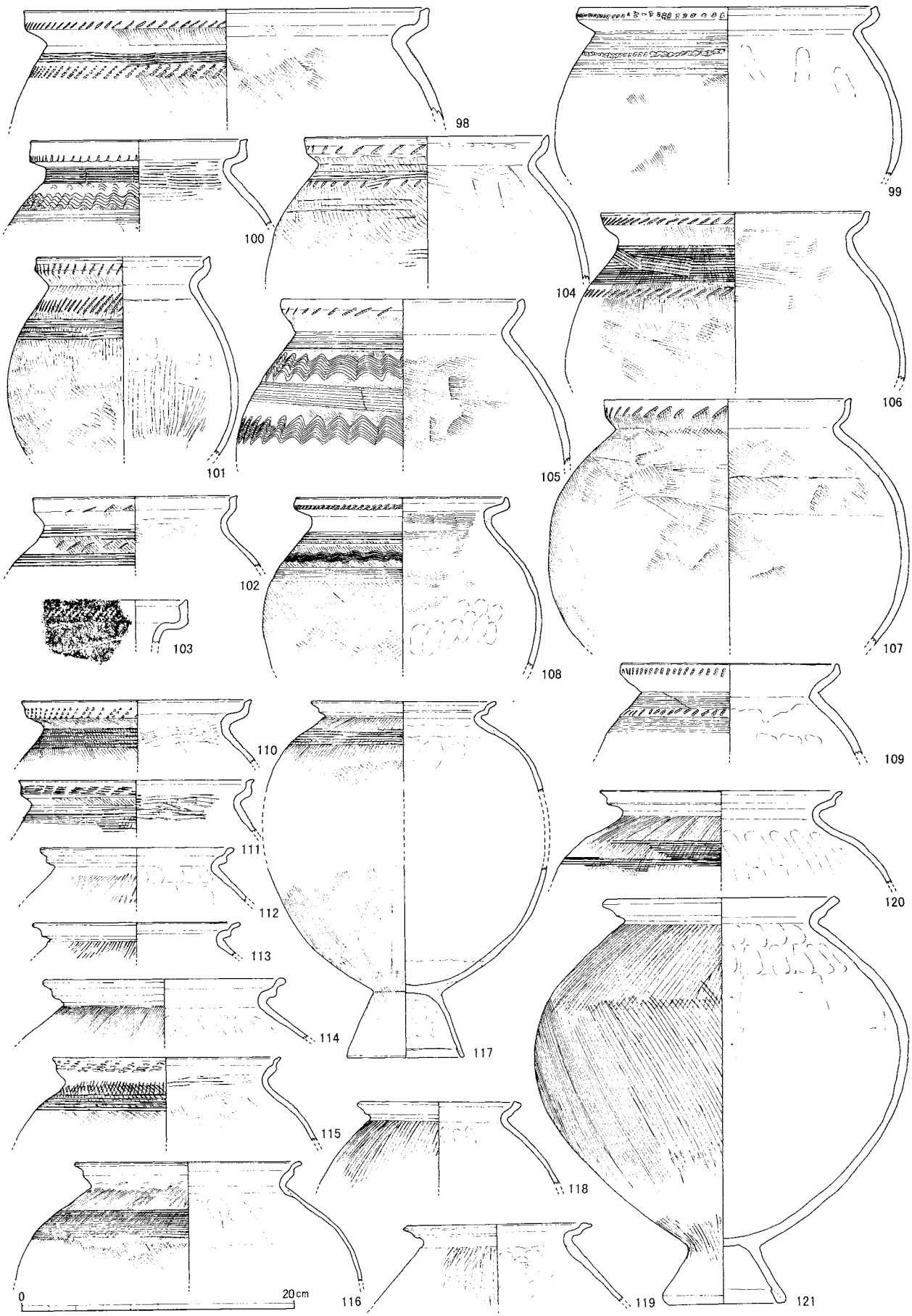
第215図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



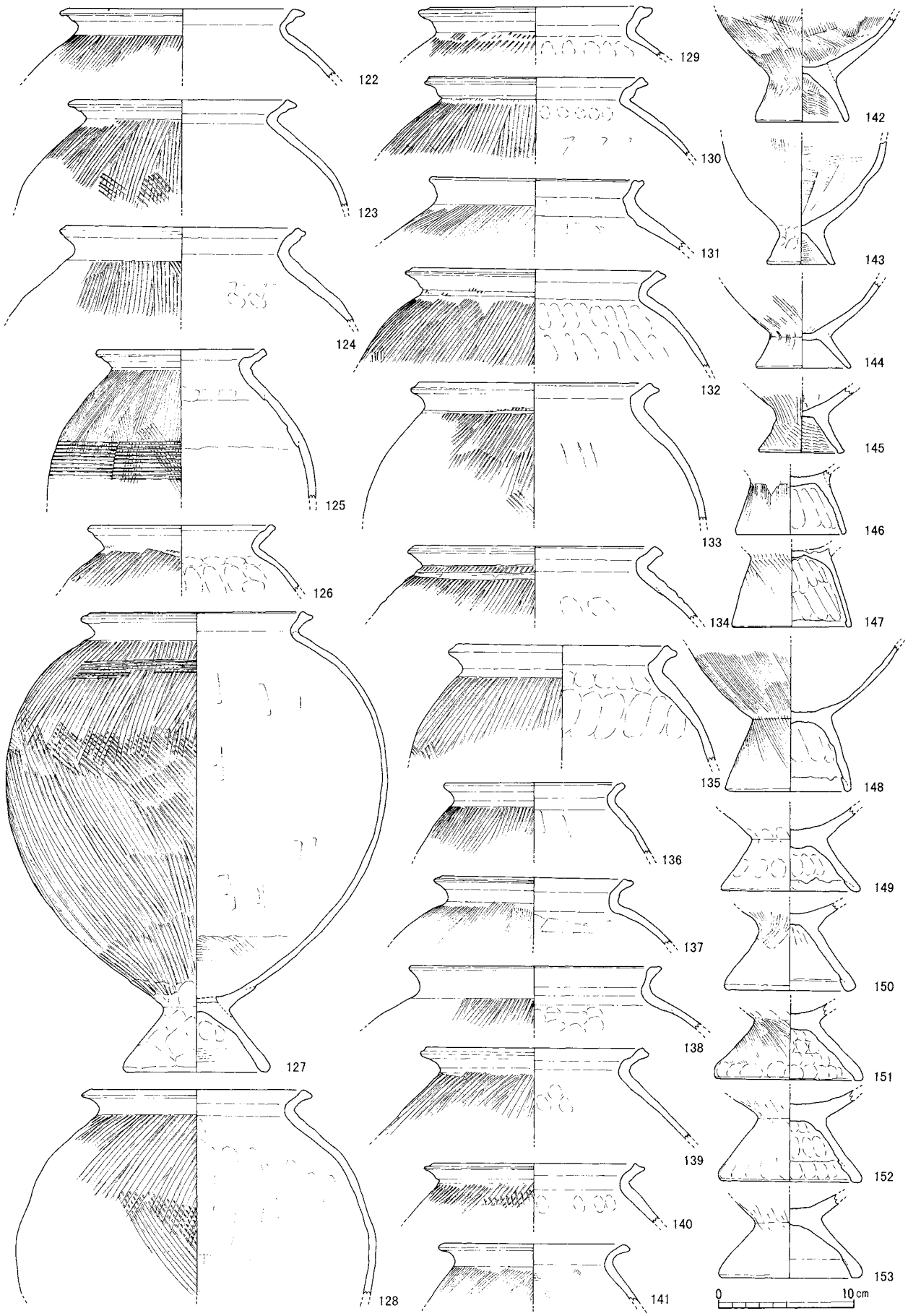
第216図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



第217図　ＳＲ２出土遺物（１：４）

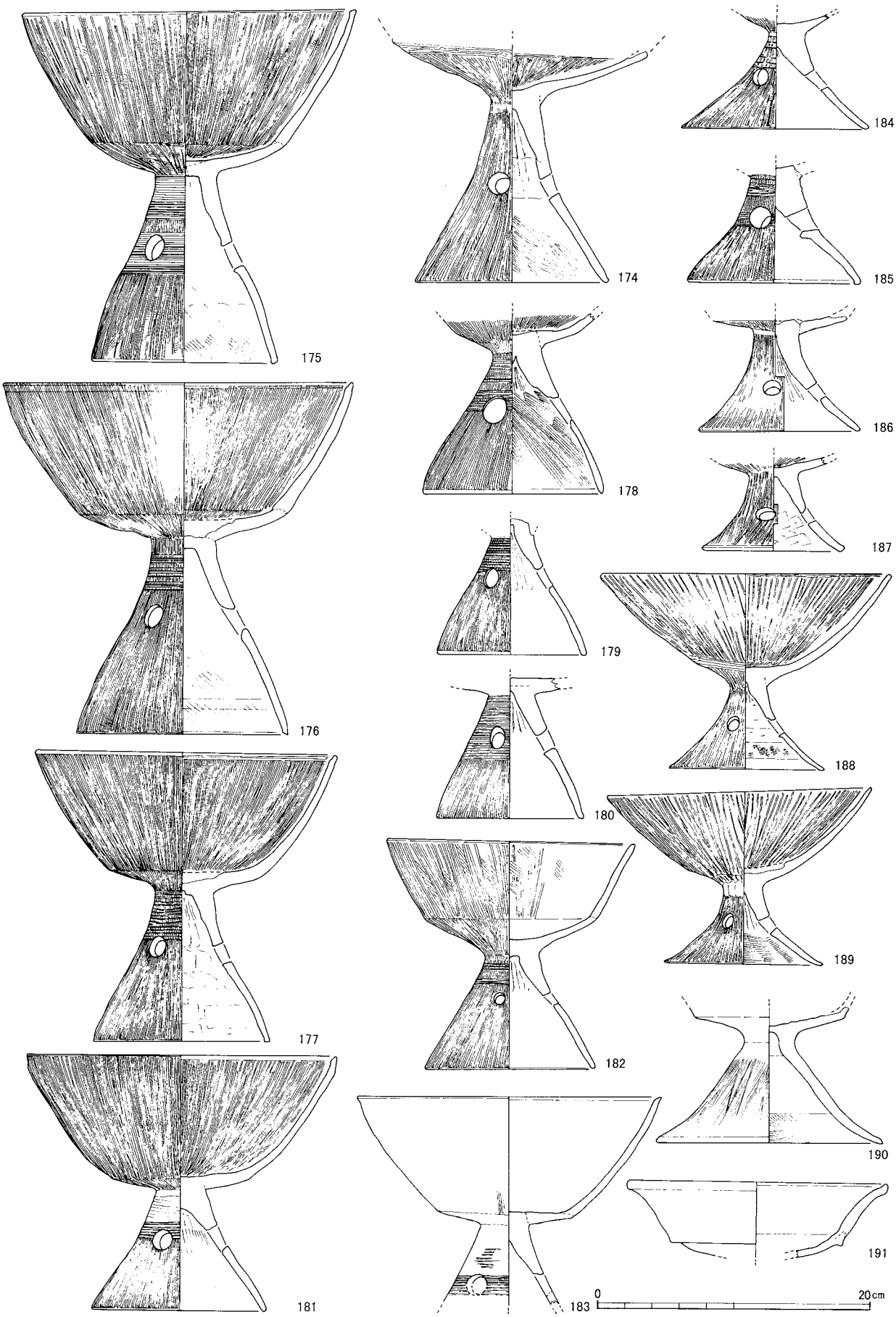


第218図　ＳＲ２出土遺物（１：４）

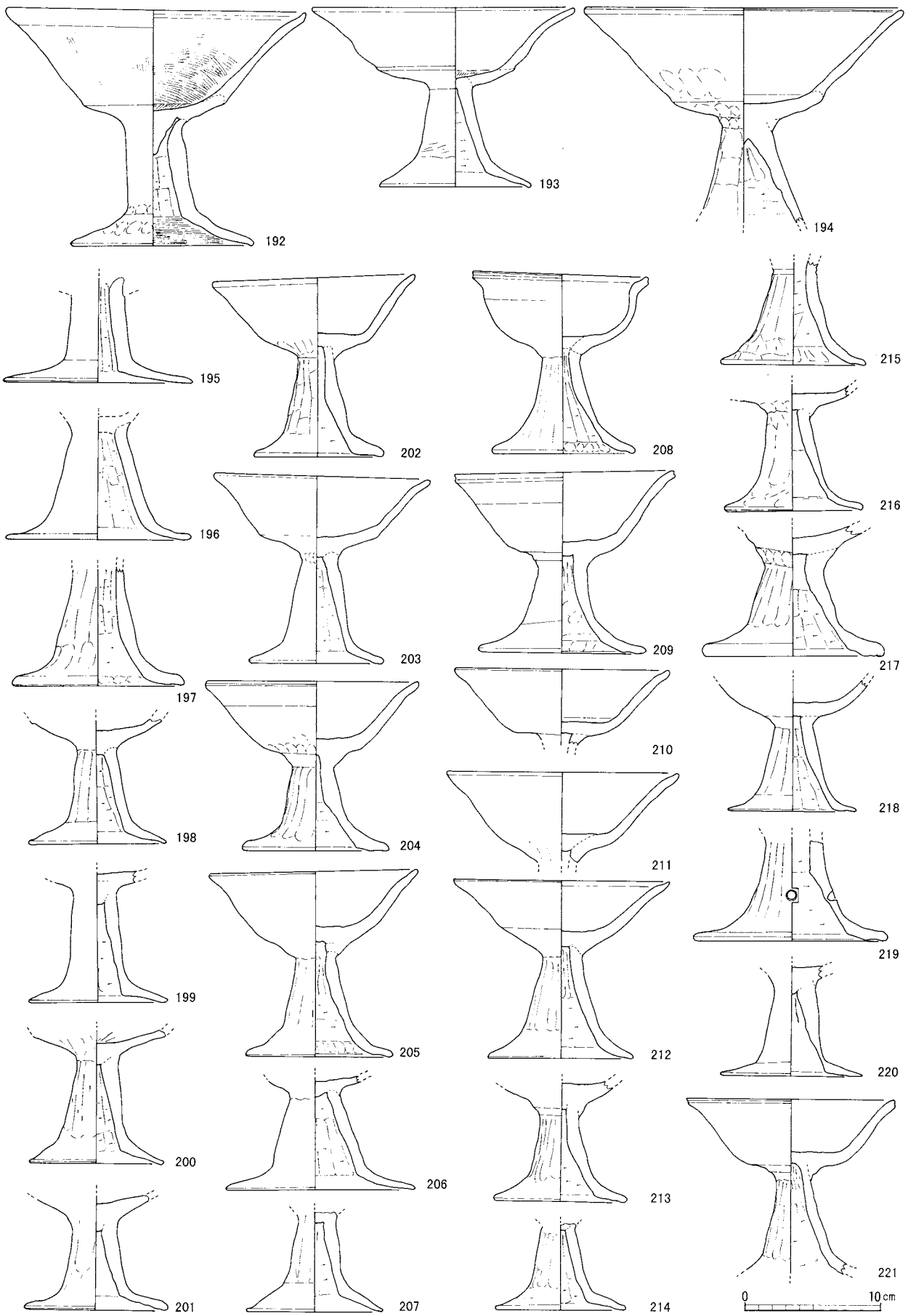


第219図　ＳＲ２出土遺物（１：４）

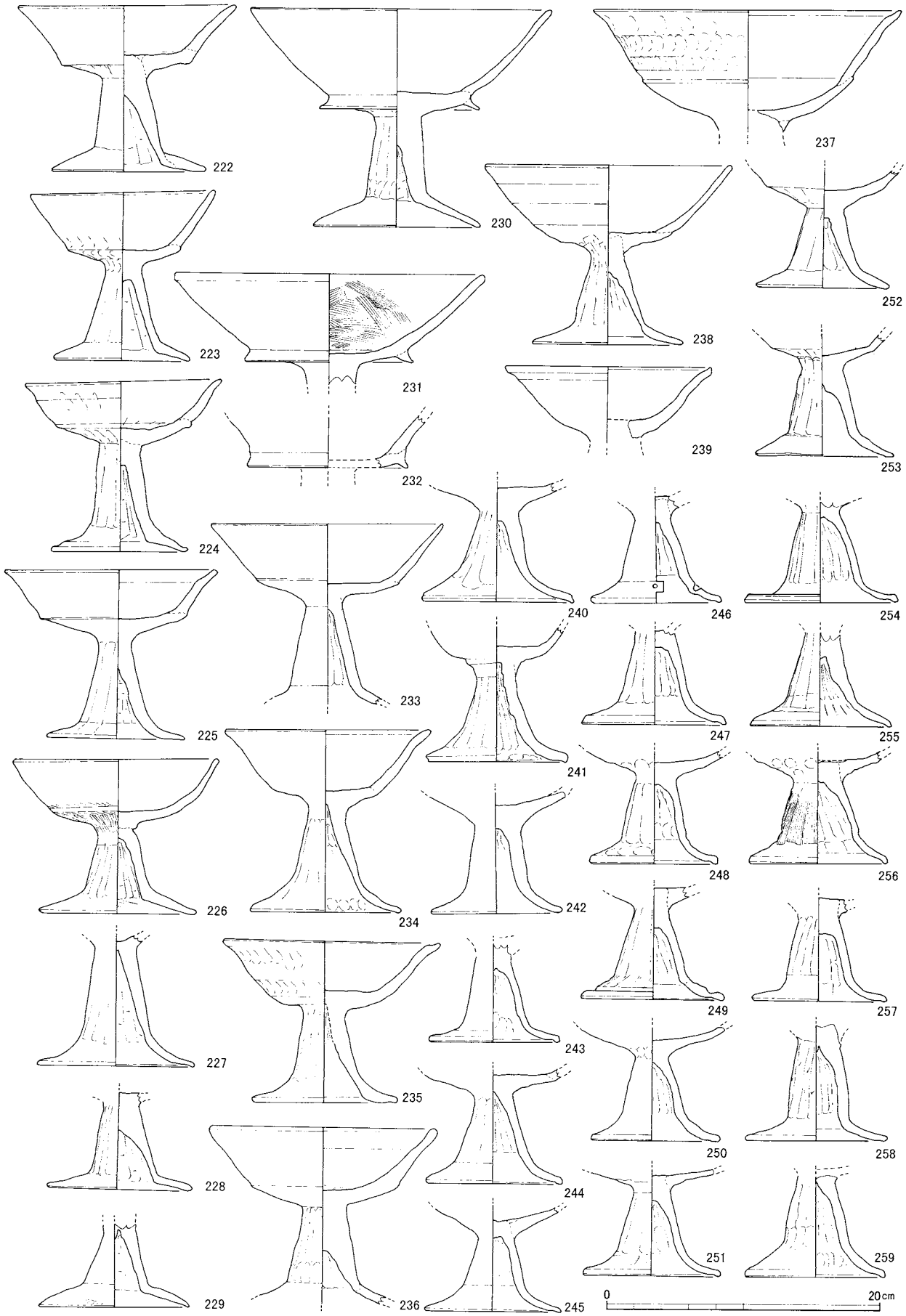
第220図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



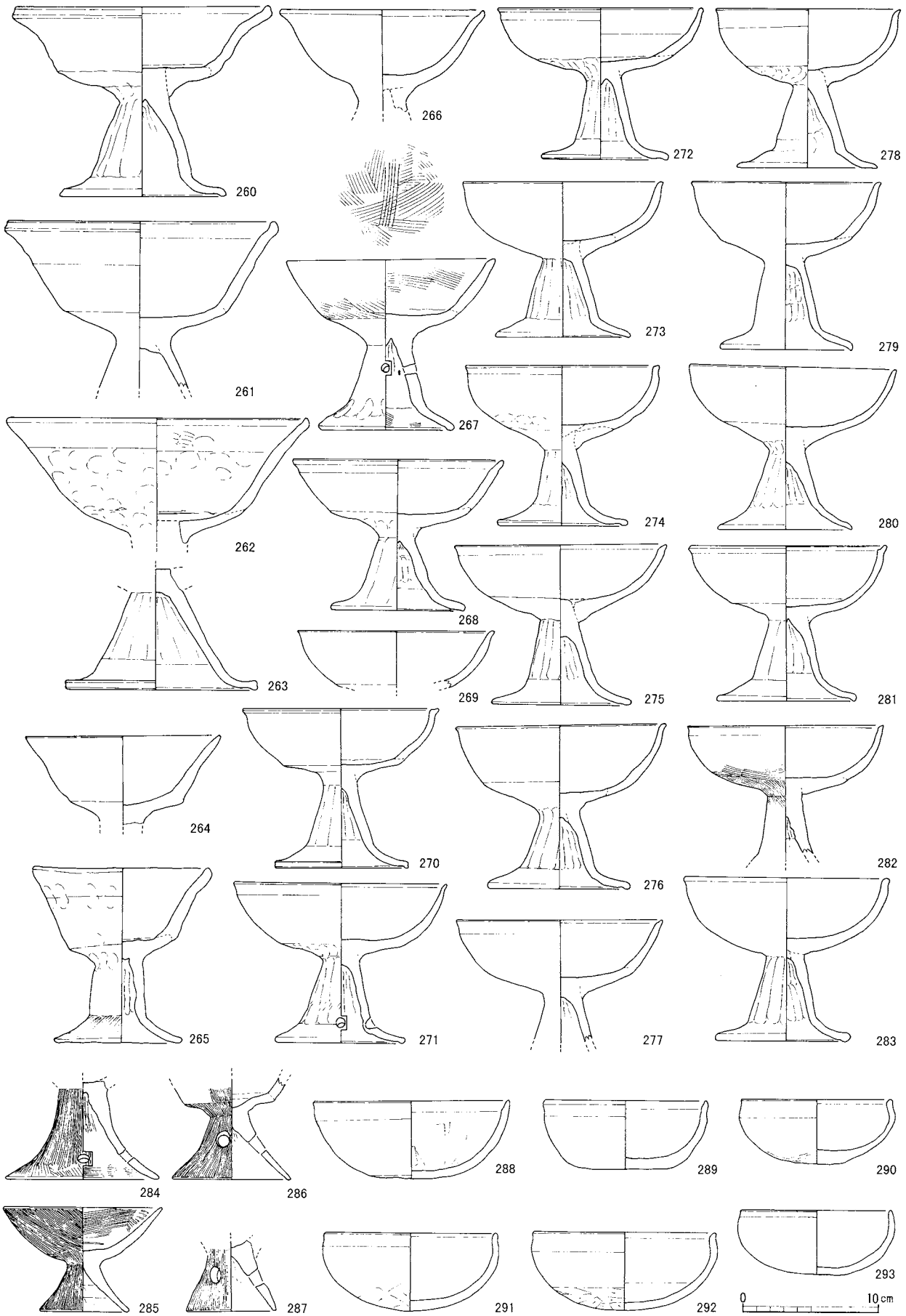
第221図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



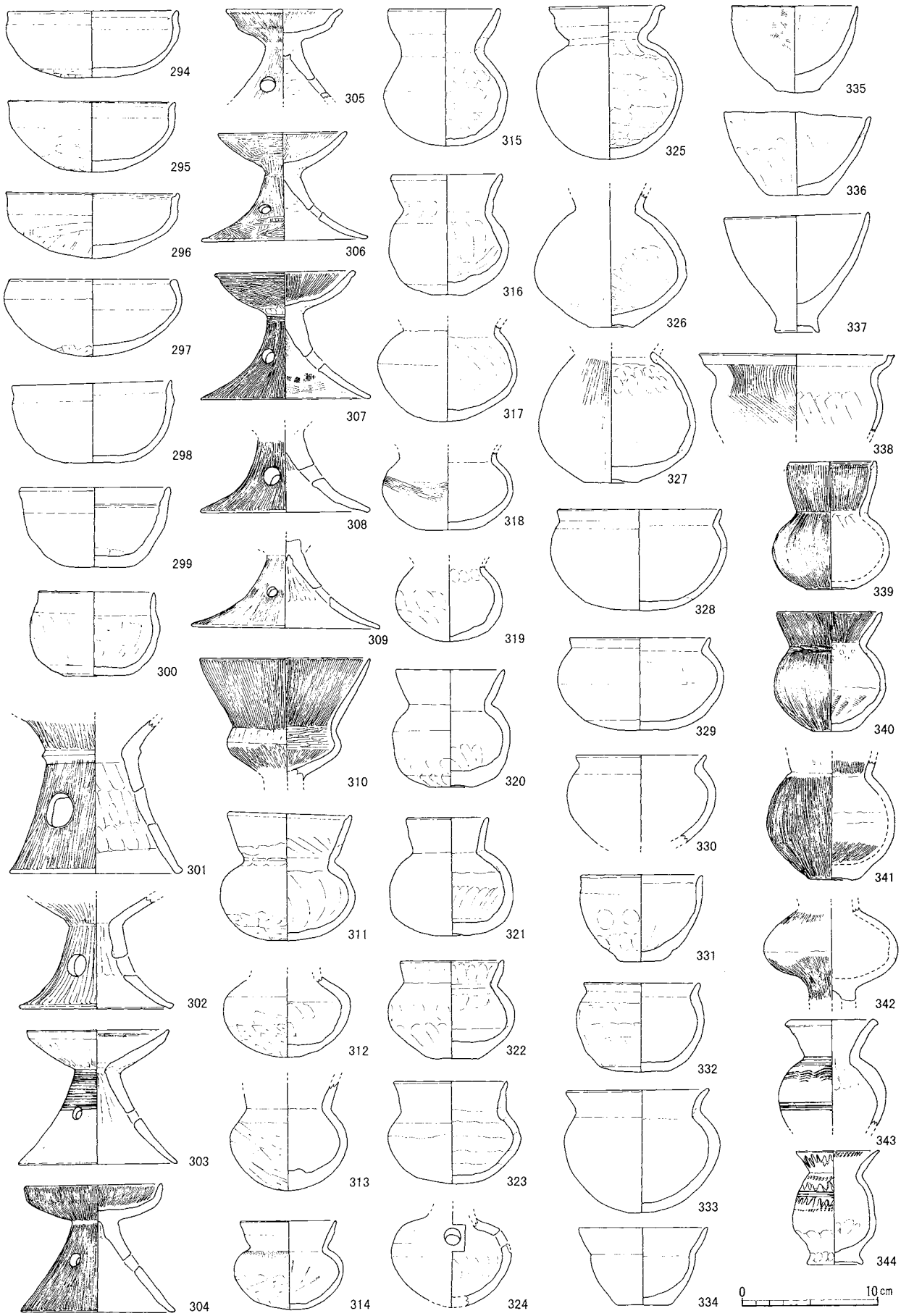
第222図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



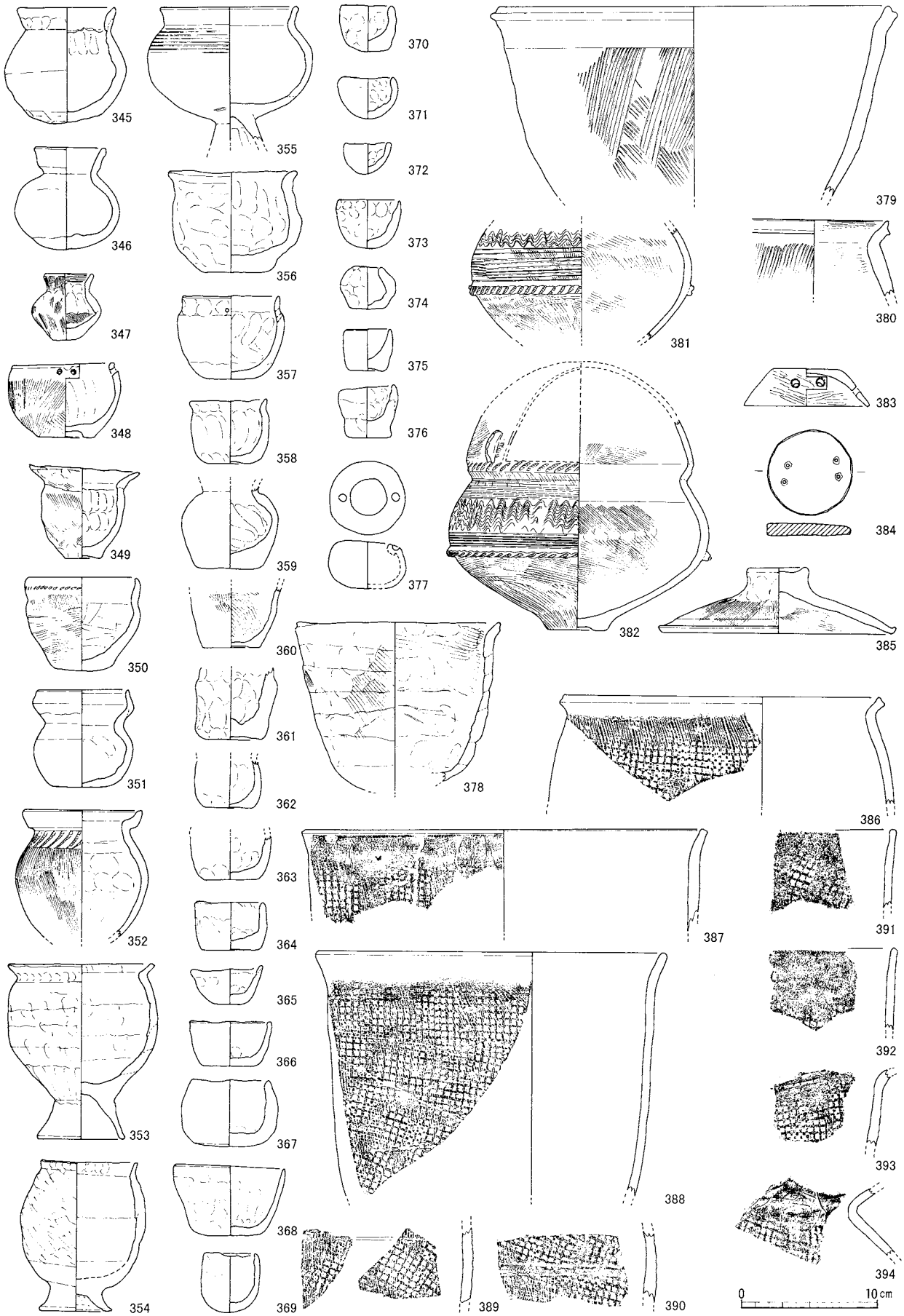
第223図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



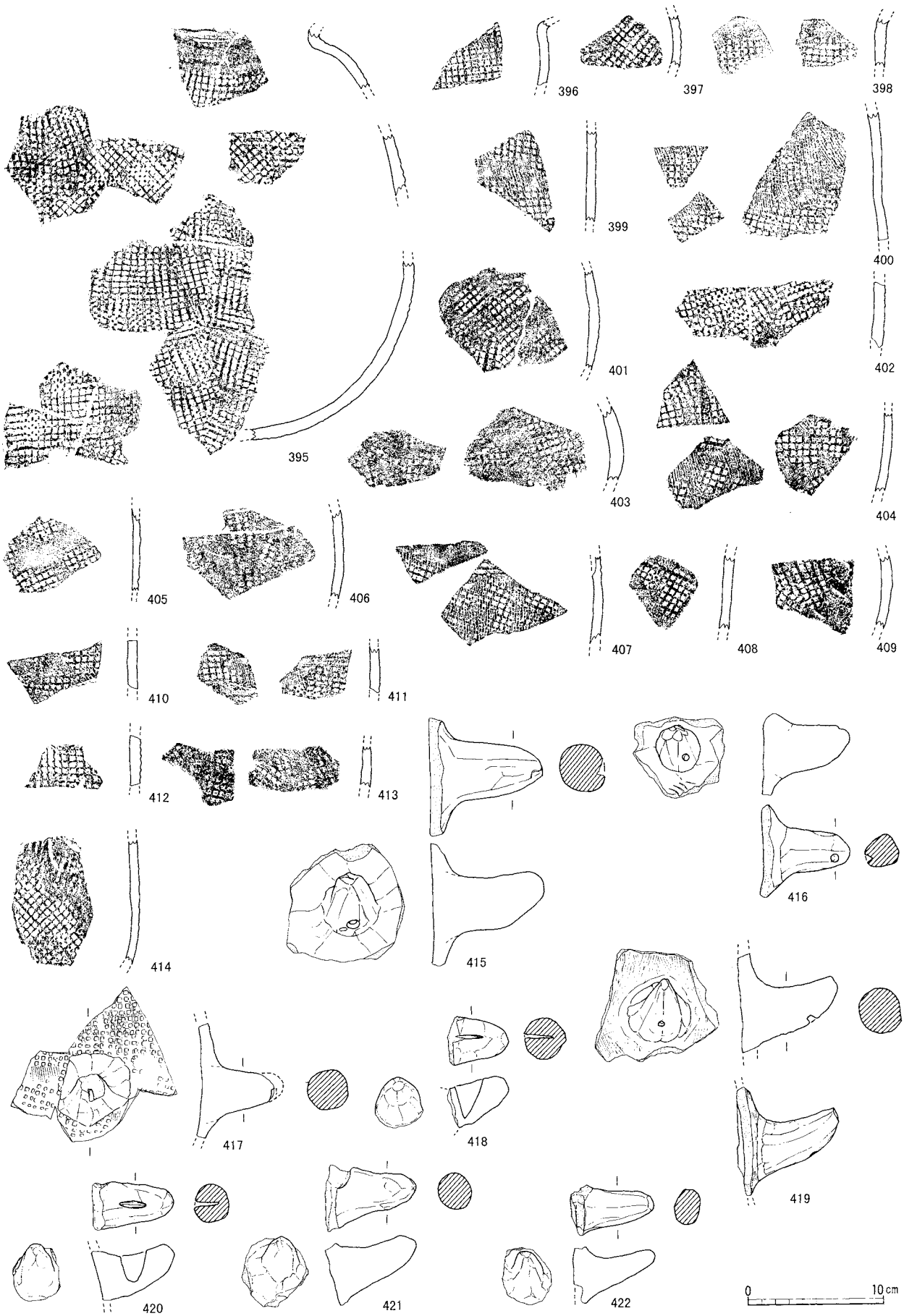
第224図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



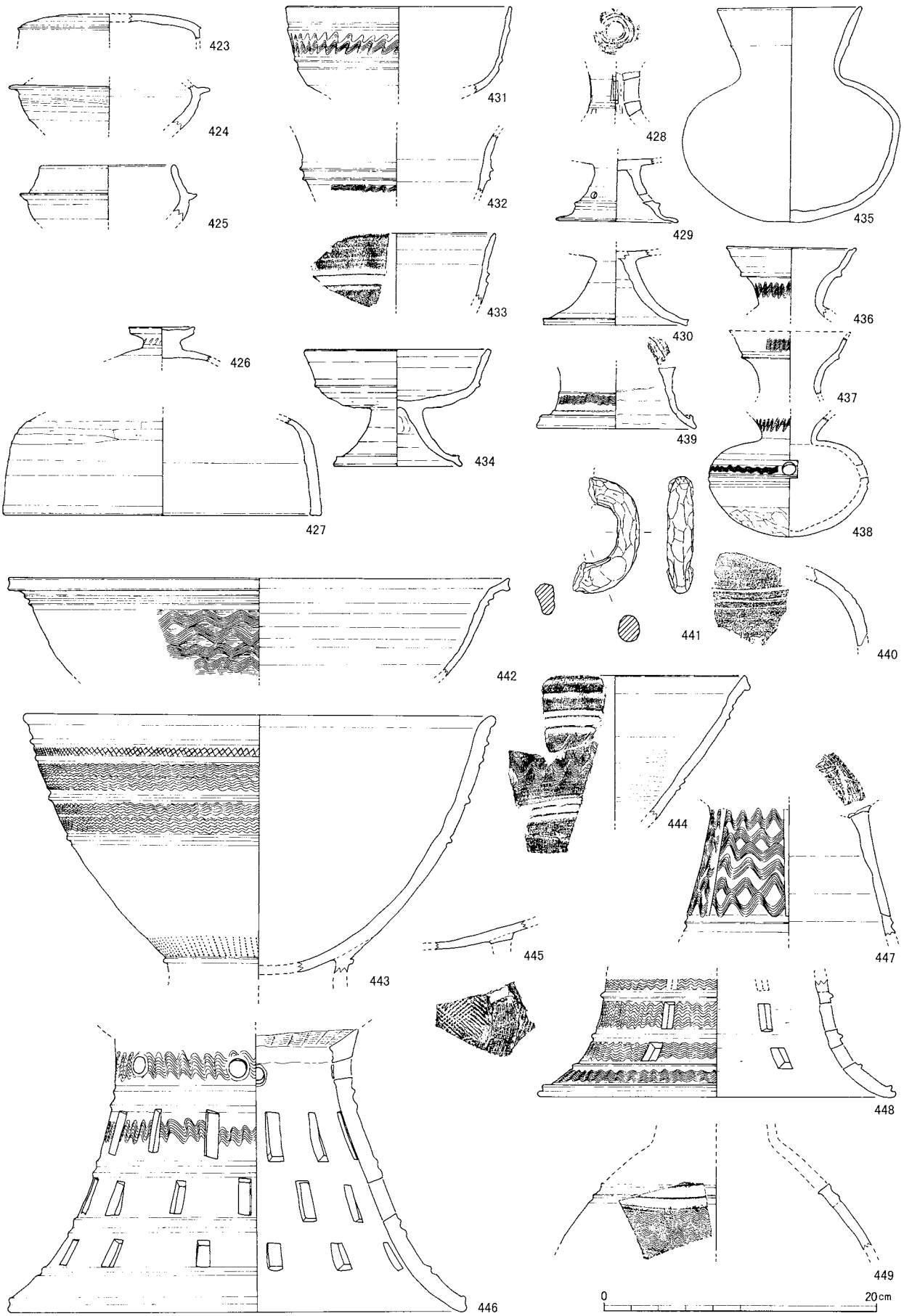
第225図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



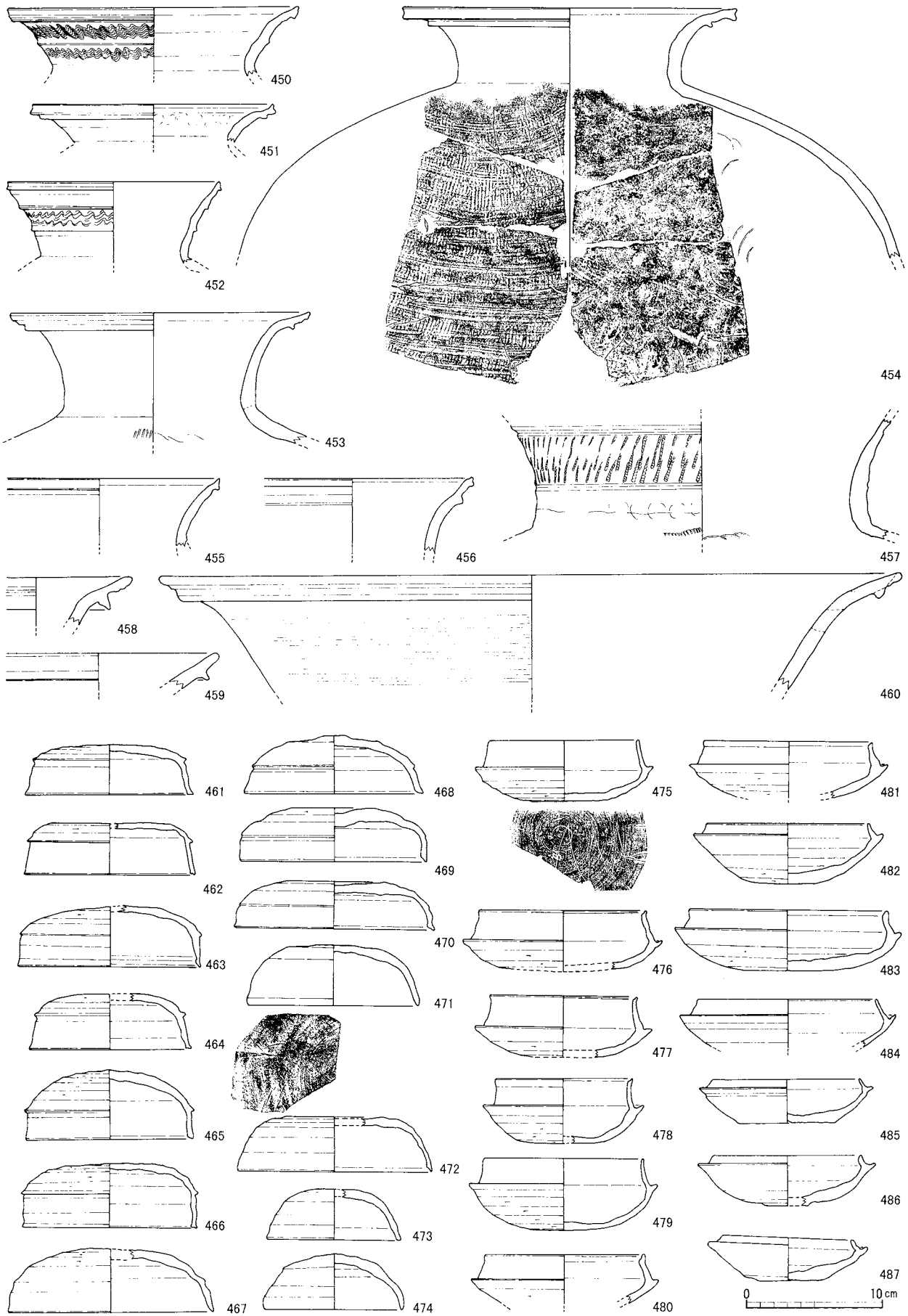
第226図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



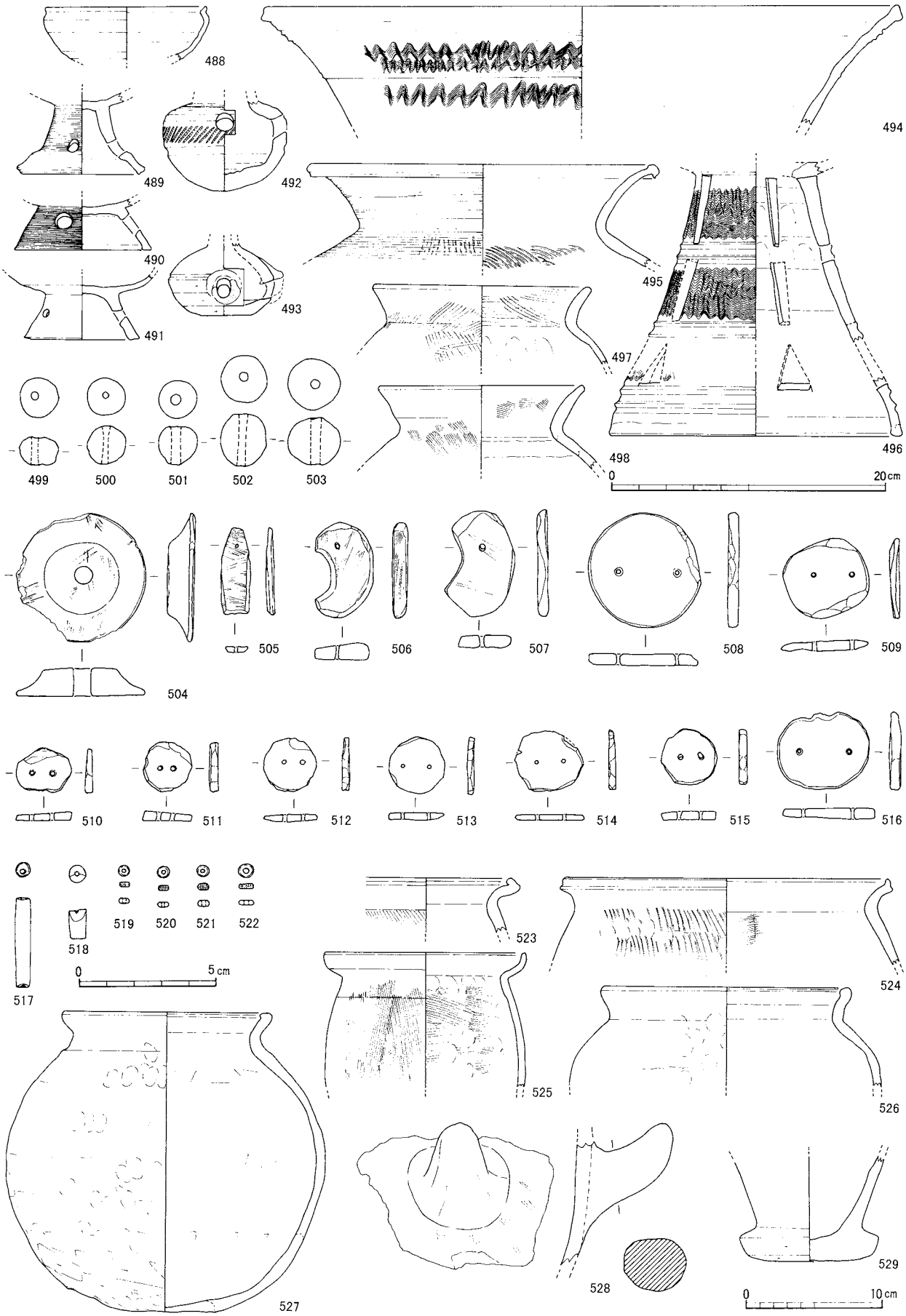
第227図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



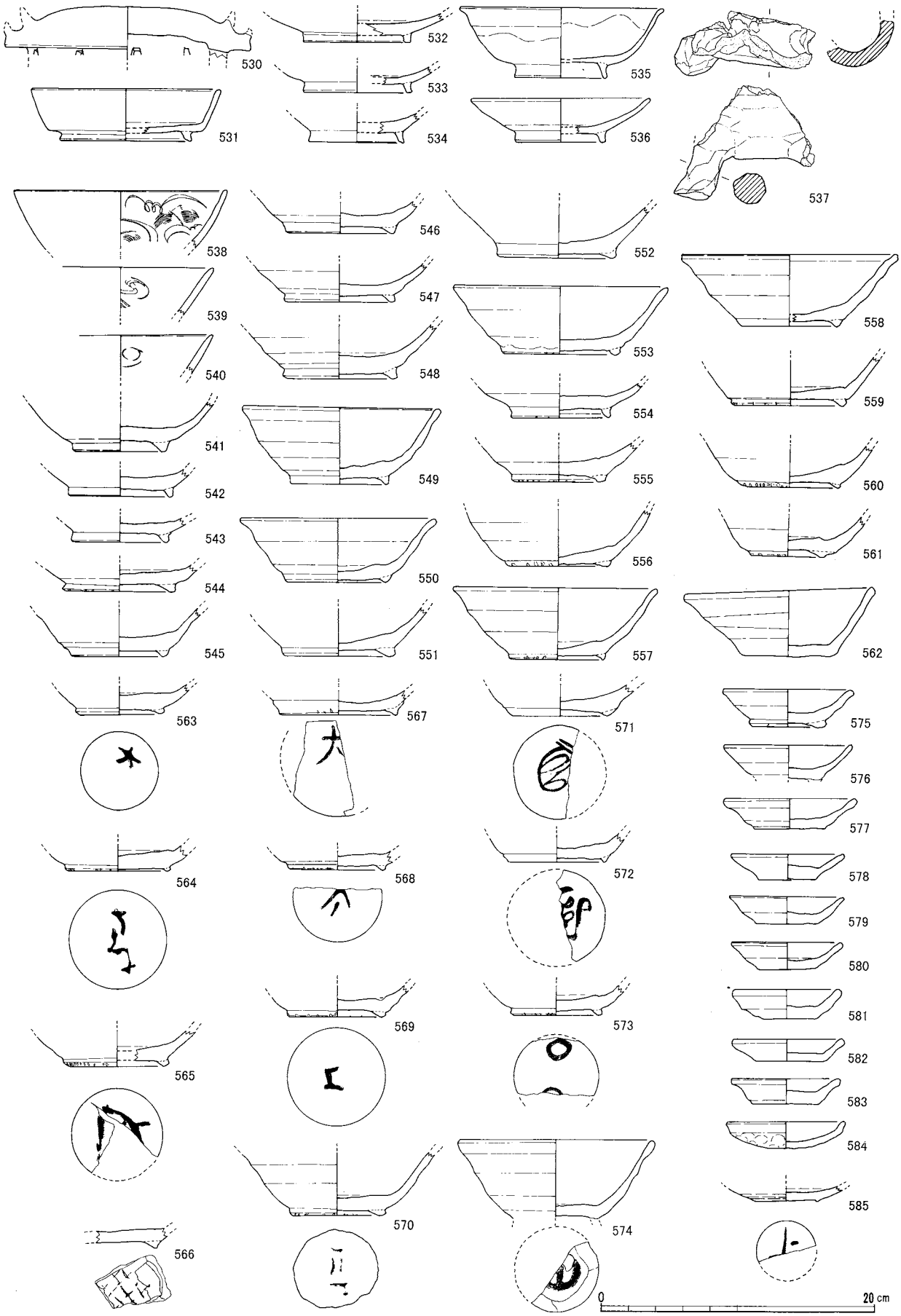
第228図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



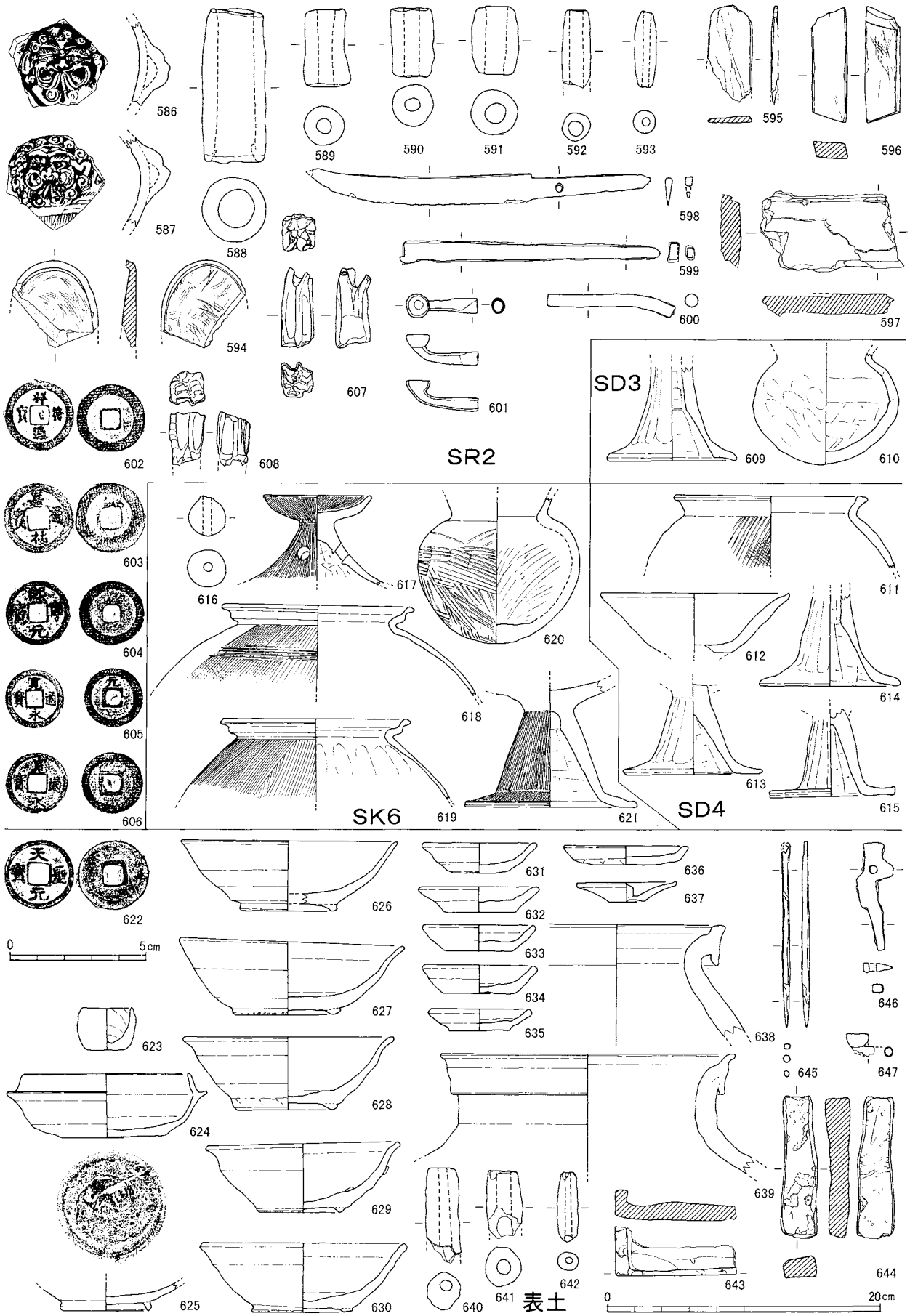
第229図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



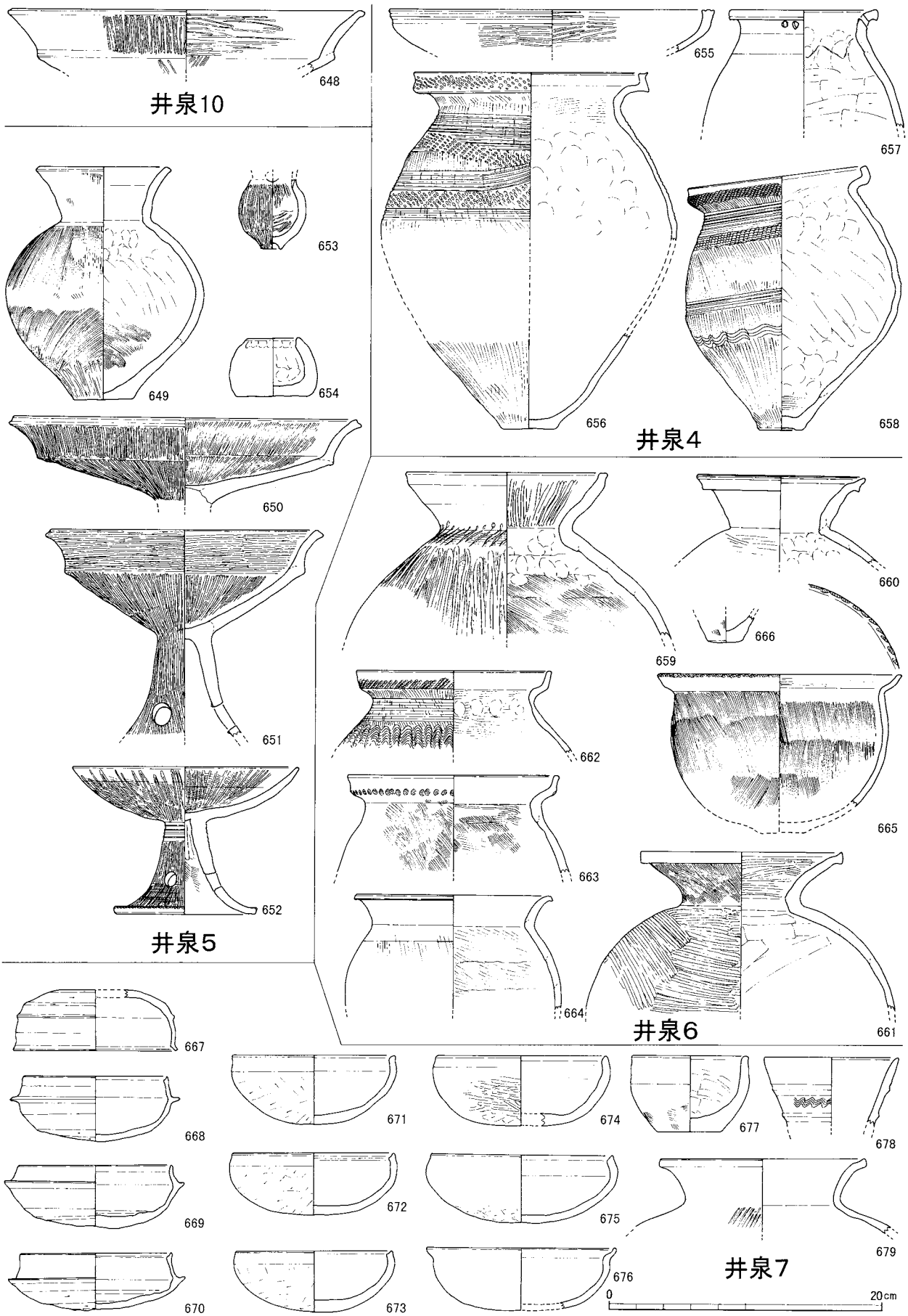
第230図　ＳＲ２出土遺物（504～522は１：２，他は１：４）



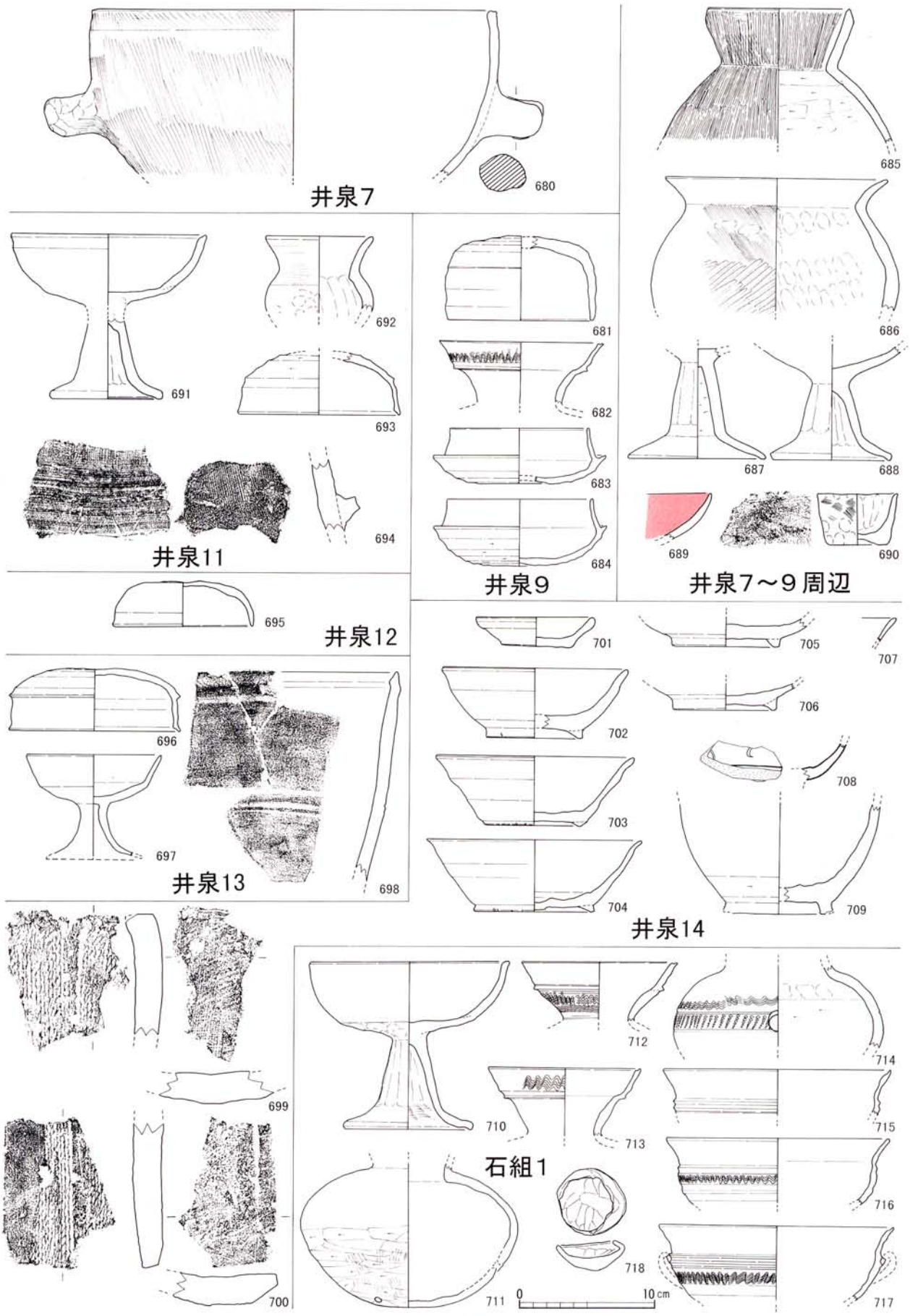
第231図　ＳＲ２出土遺物（１：４）



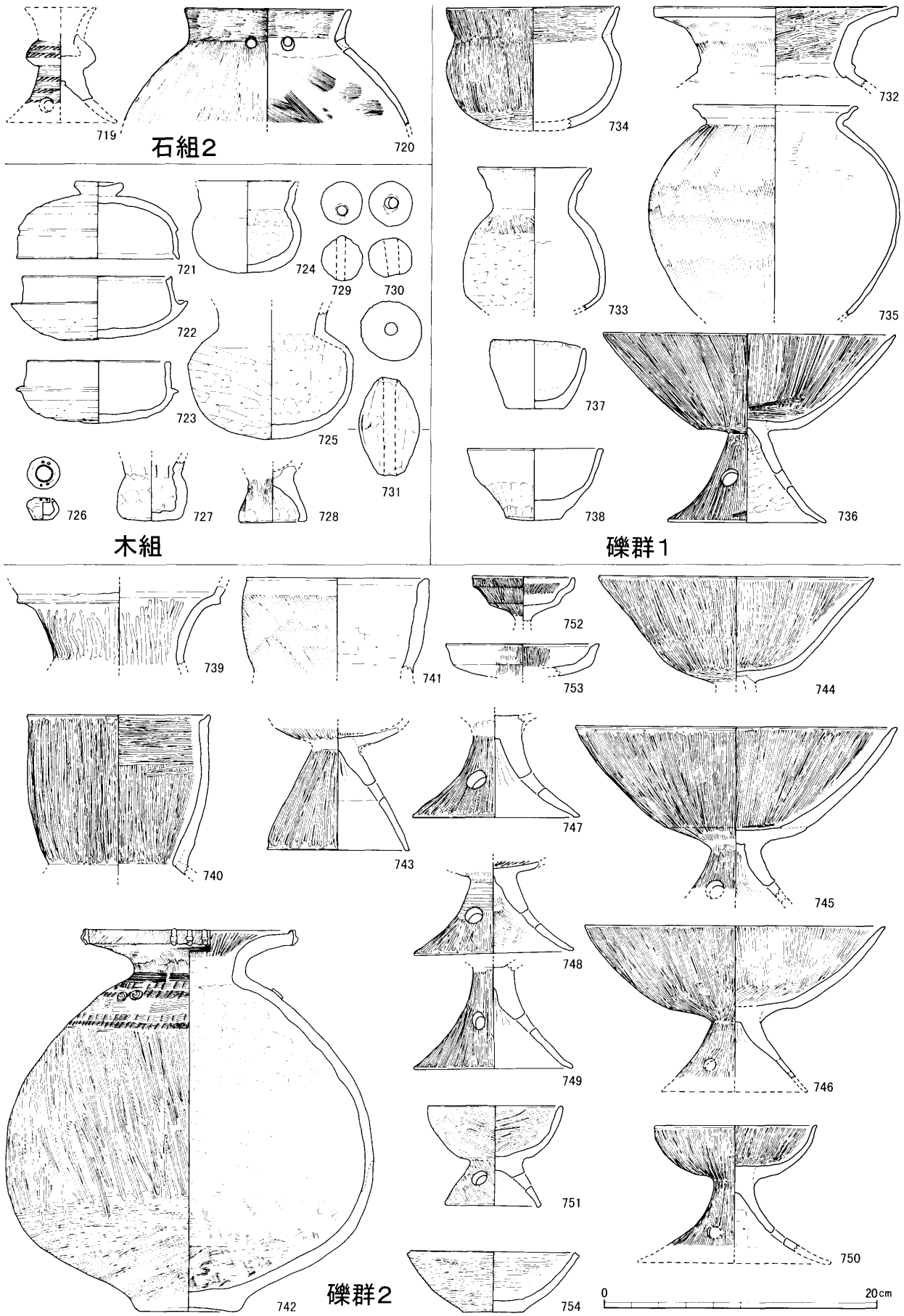
第232図　ＳＲ２・ＳＤ３・ＳＤ４・ＳＫ６・表土出土遺物（602～606・622は１：２，他は１：４）



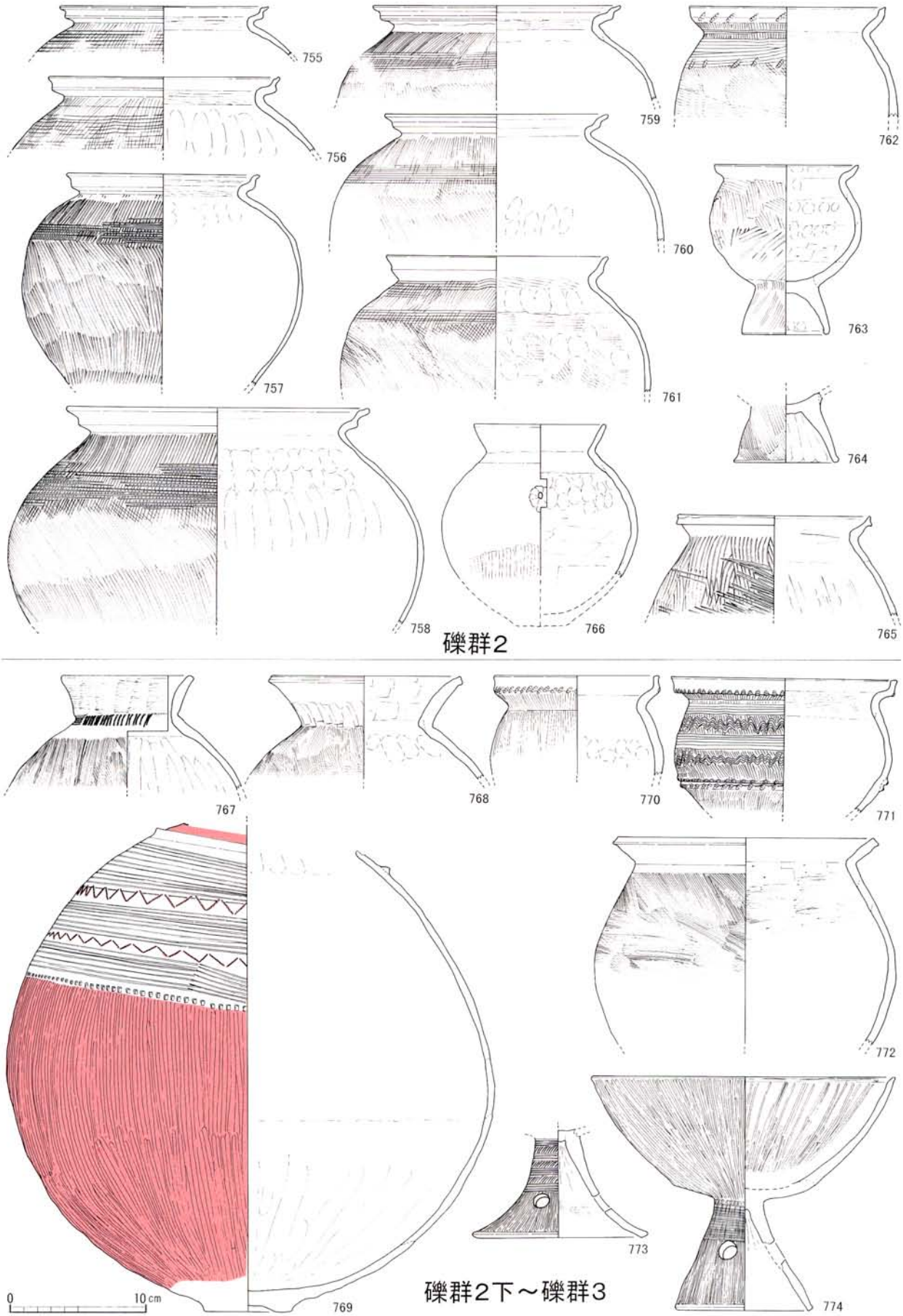
第233図　ＳＤ１出土遺物（井泉４～７・10）　（１：４）



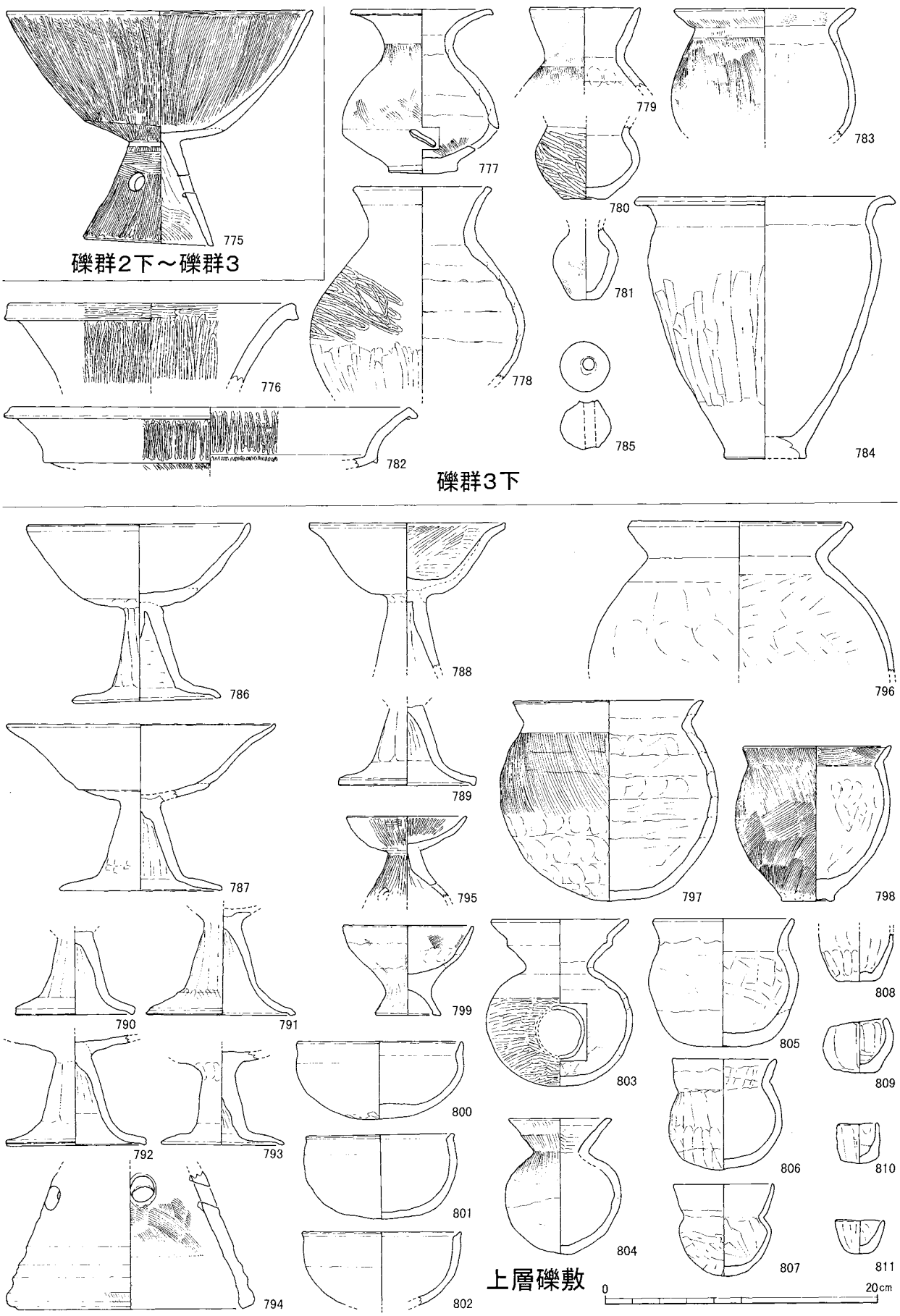
第234図　ＳＤ１出土遺物（井泉７・９・11～14・井泉７～９周辺・石組１）　（１：４）



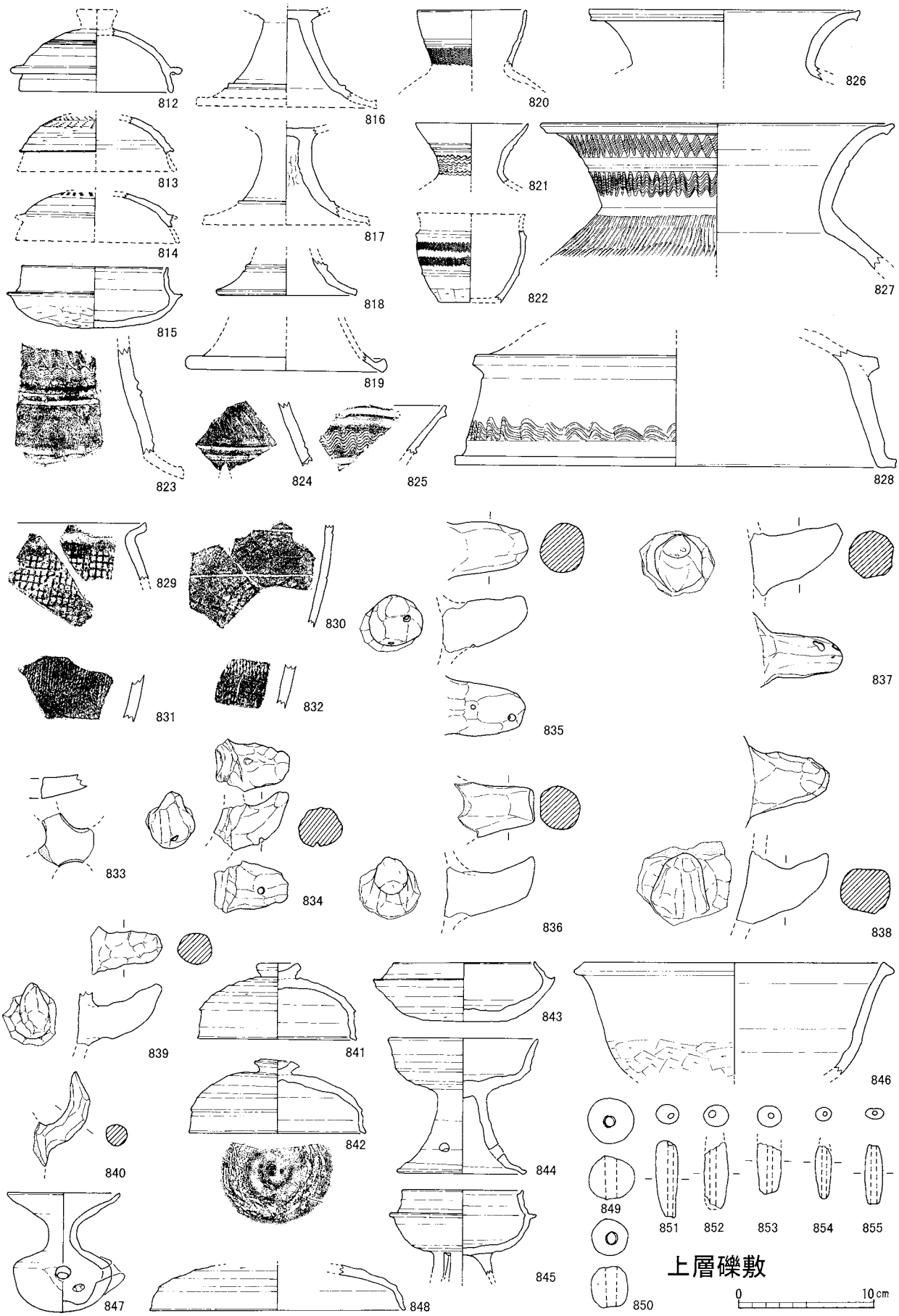
第235図　ＳＤ１出土遺物（石組２・木組・礫群１・２）　（１：４）



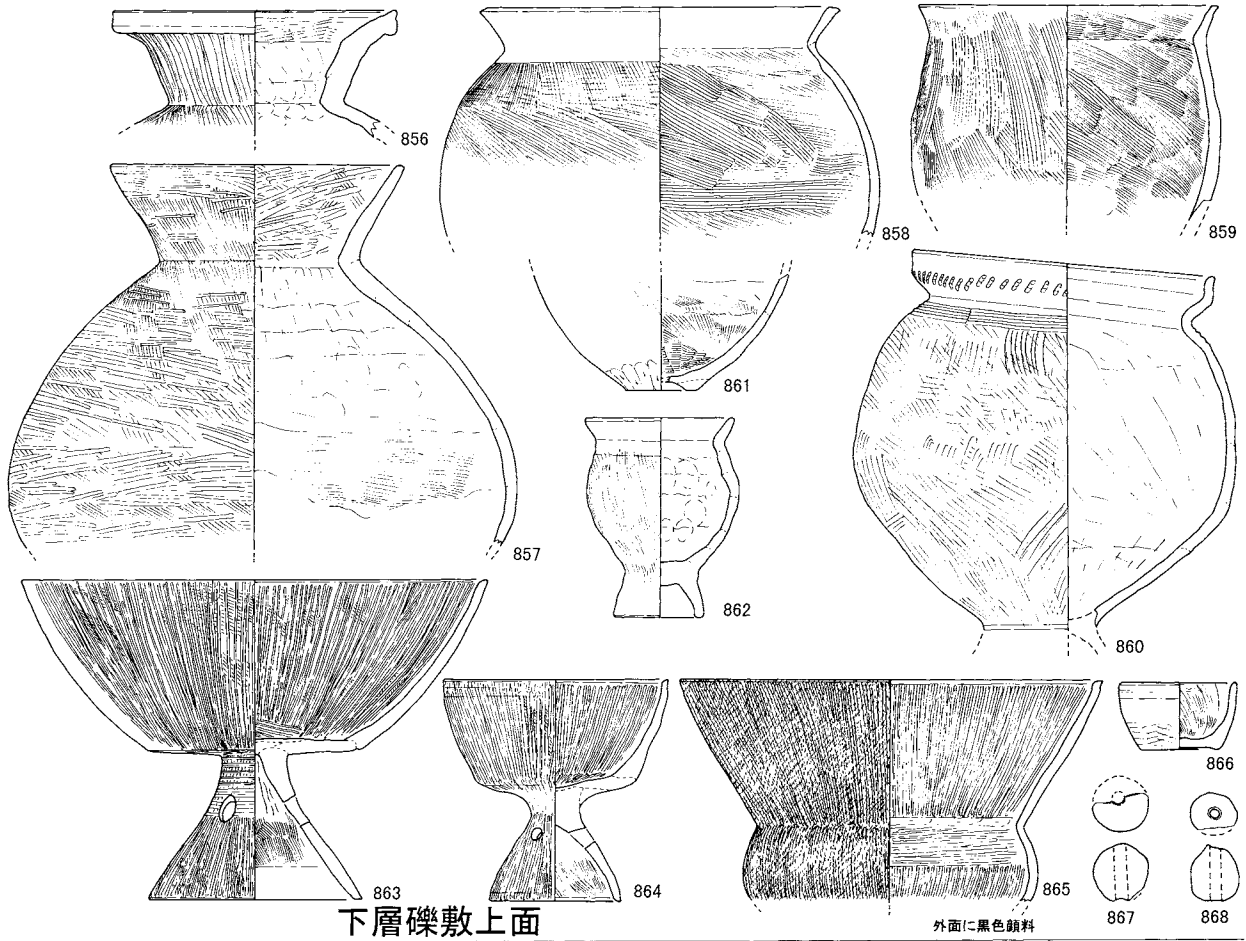
第236図　ＳＤ１出土遺物（礫群２・礫群２下～礫群３）　（１：４）



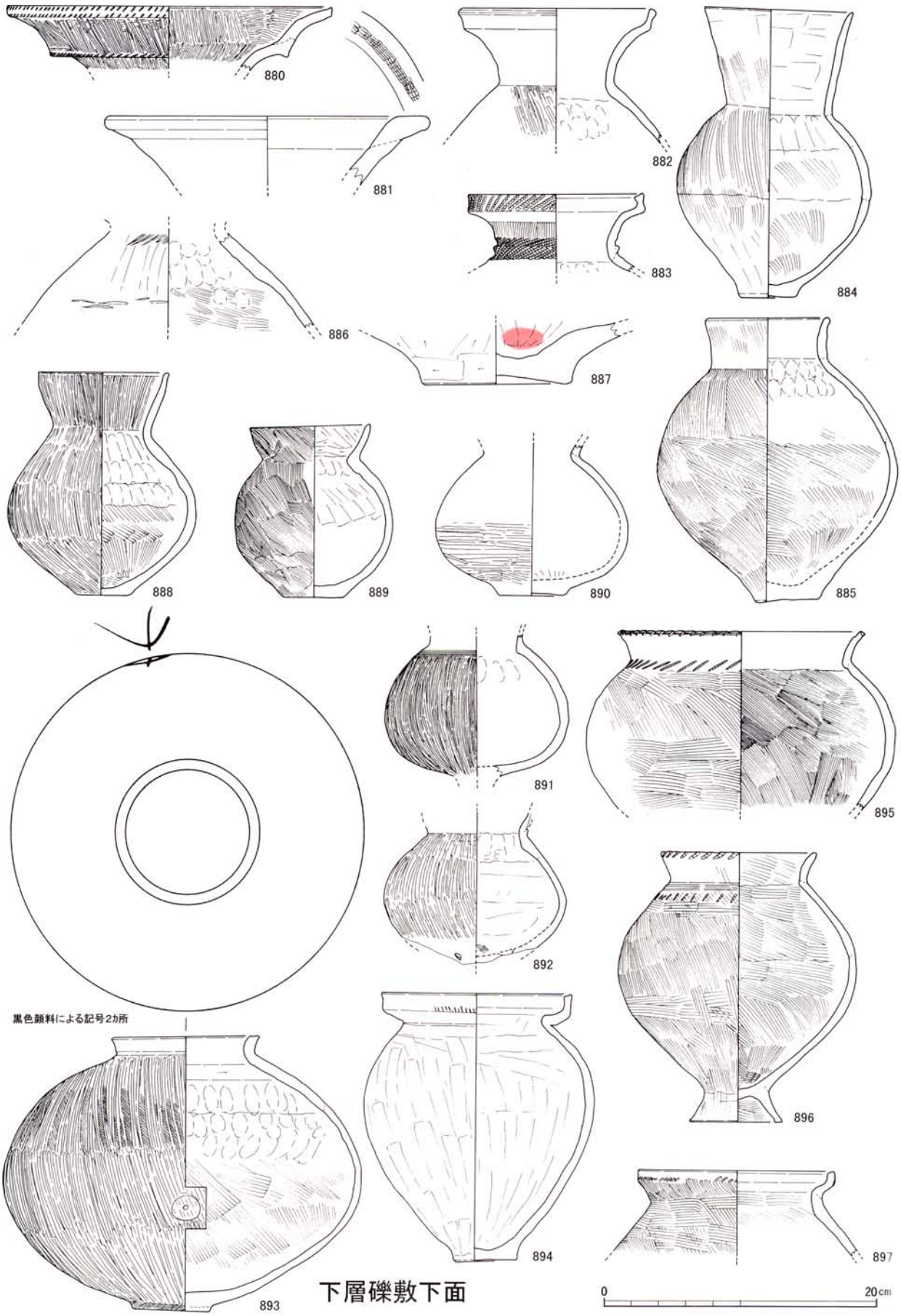
第237図　ＳＤ１出土遺物（礫群２下～礫群３・礫群３下・上層礫敷）　（１：４）



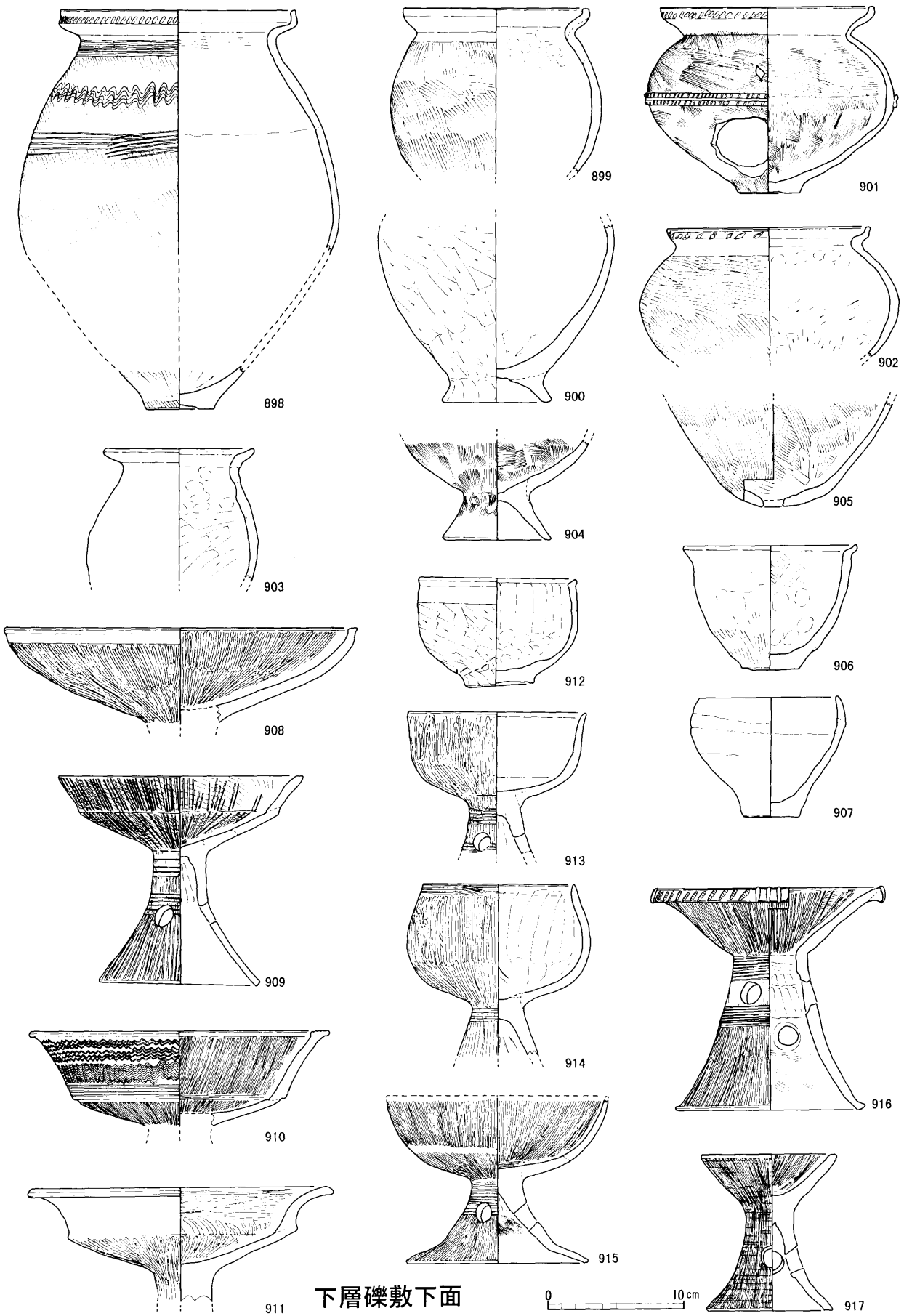
第238図　ＳＤ１出土遺物（上層礫敷）　（１：４）



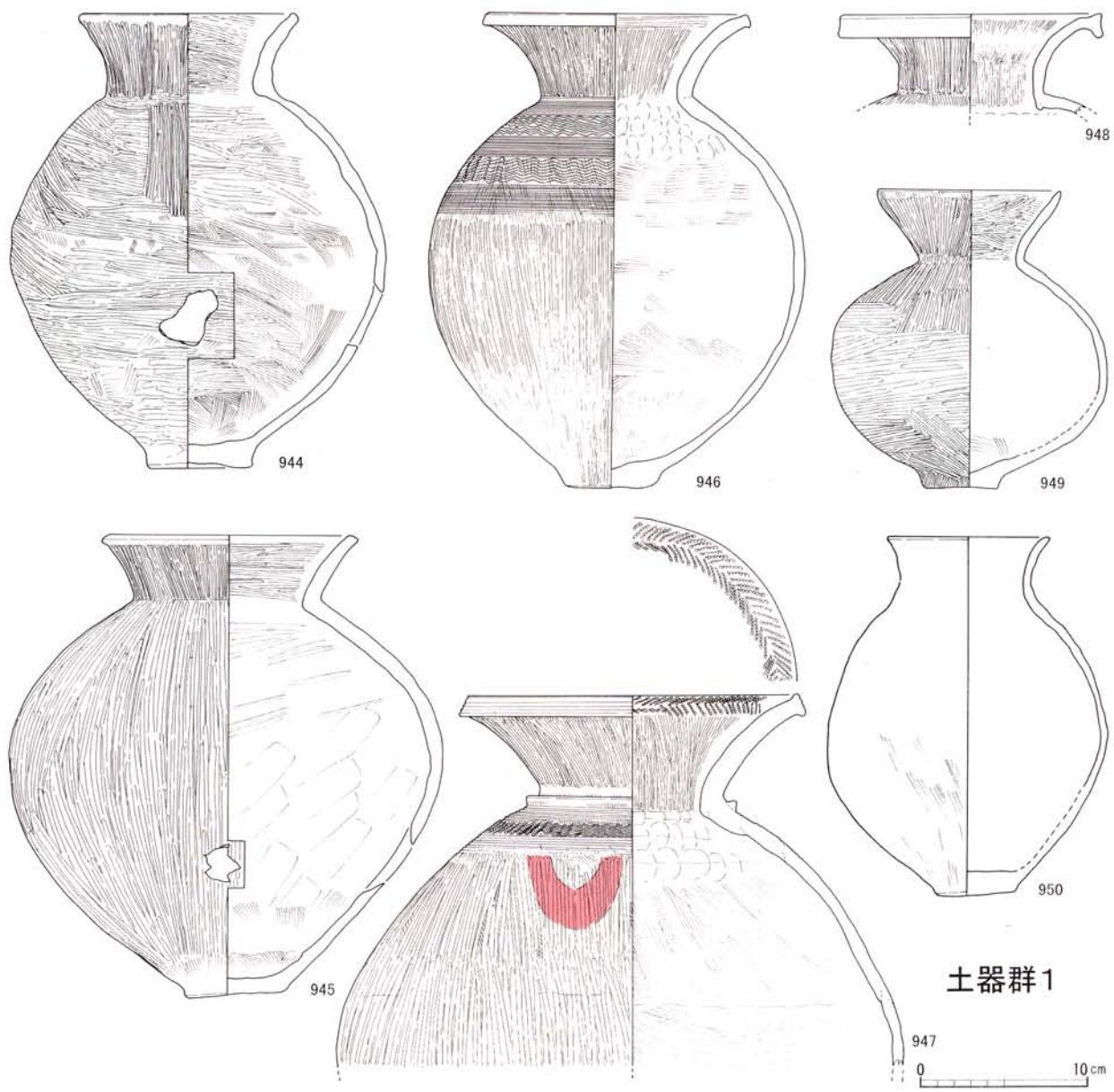
第239図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷・下層礫敷上面・下面）　（１：４）



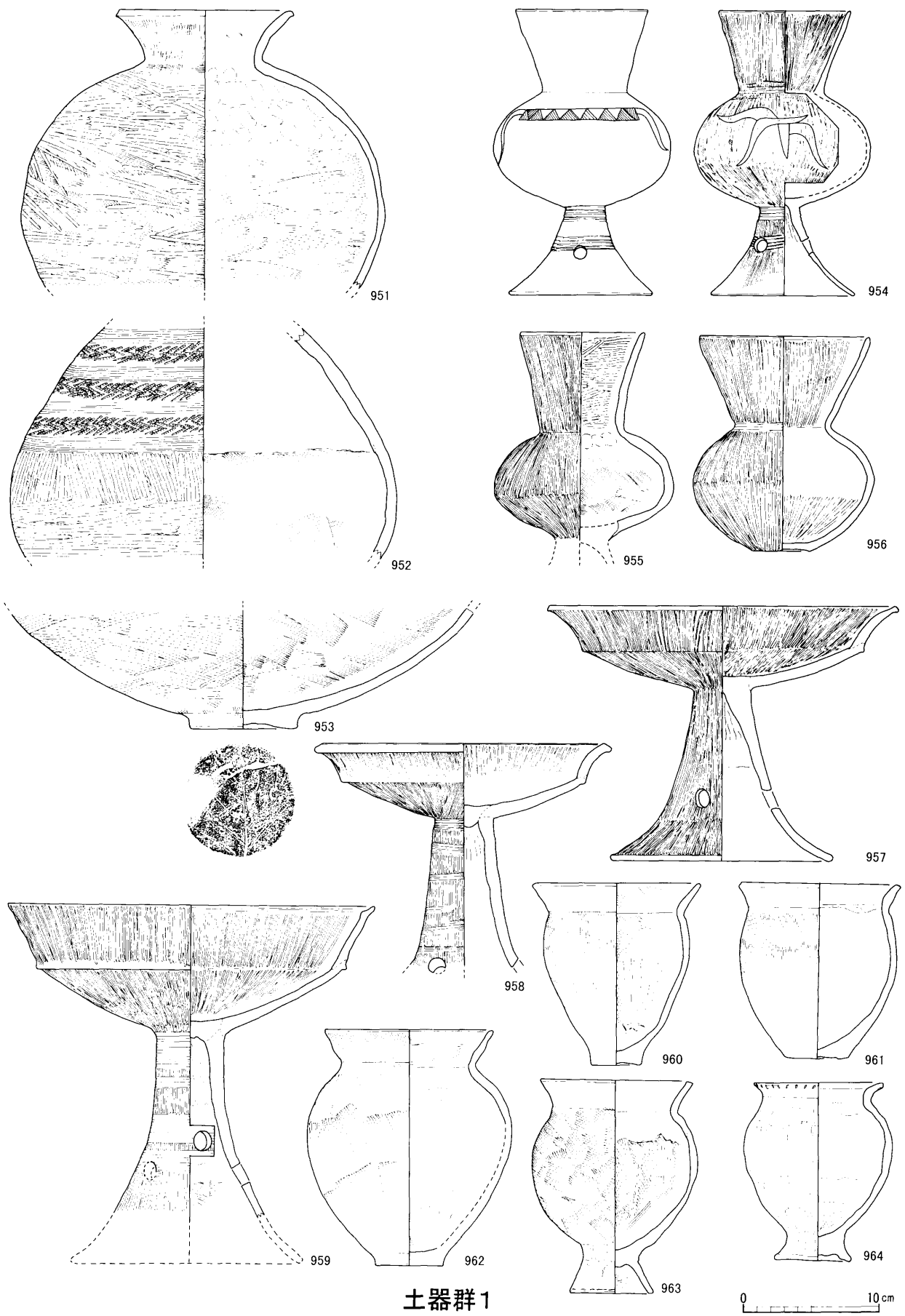
第240図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷下面）　（１：４）



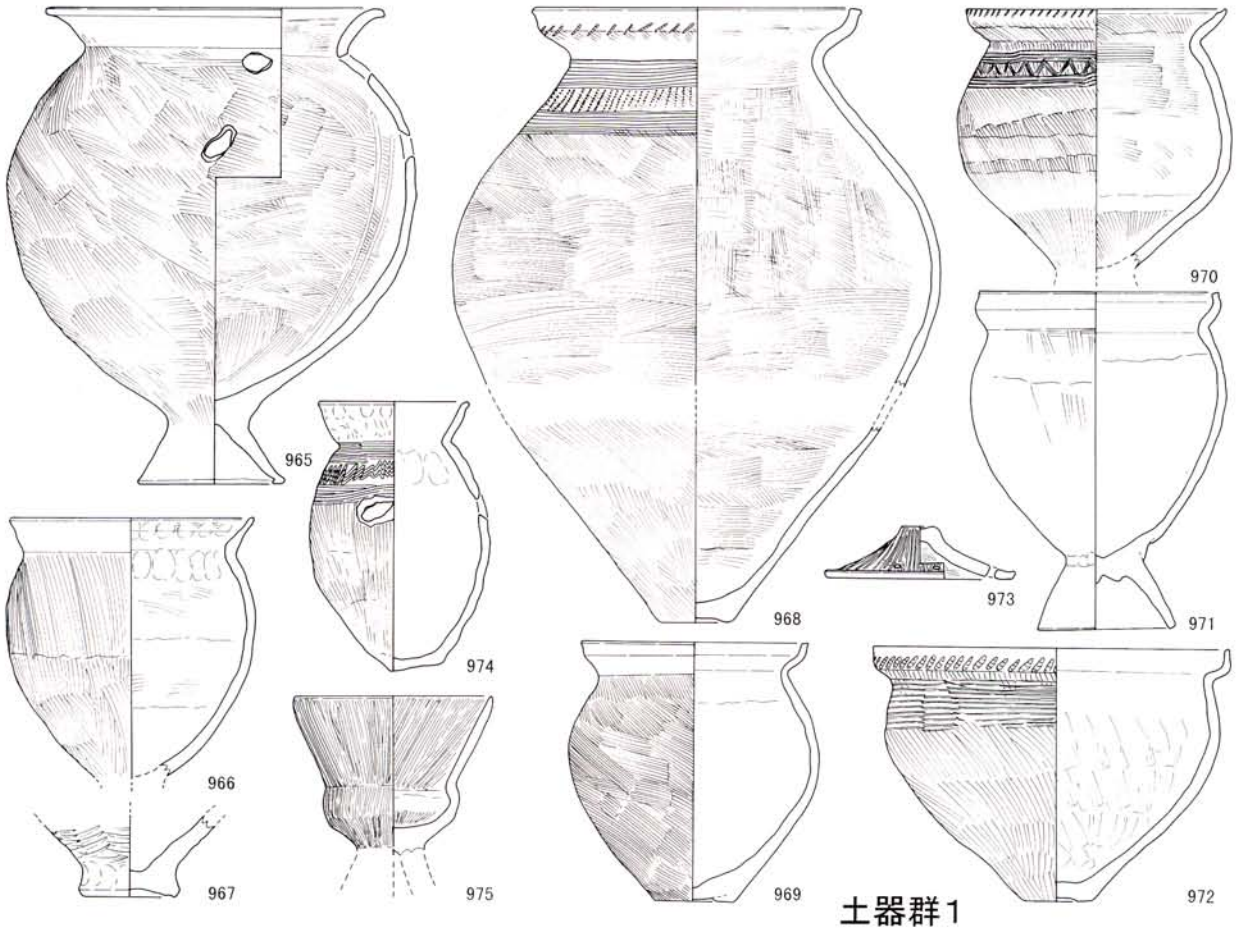
第241図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷下面）　（１：４）

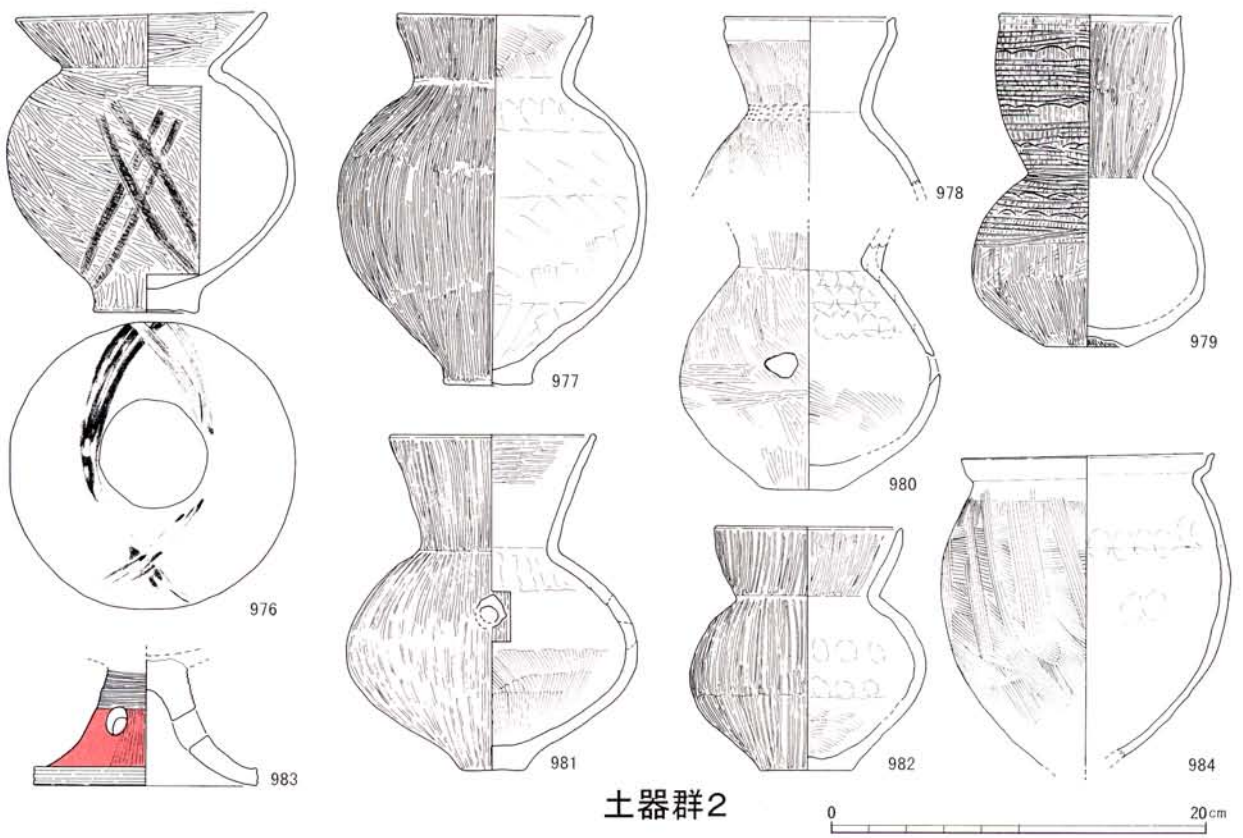


第242図　ＳＤ１出土遺物（下層礫敷下面・土器群１）　（１：４）

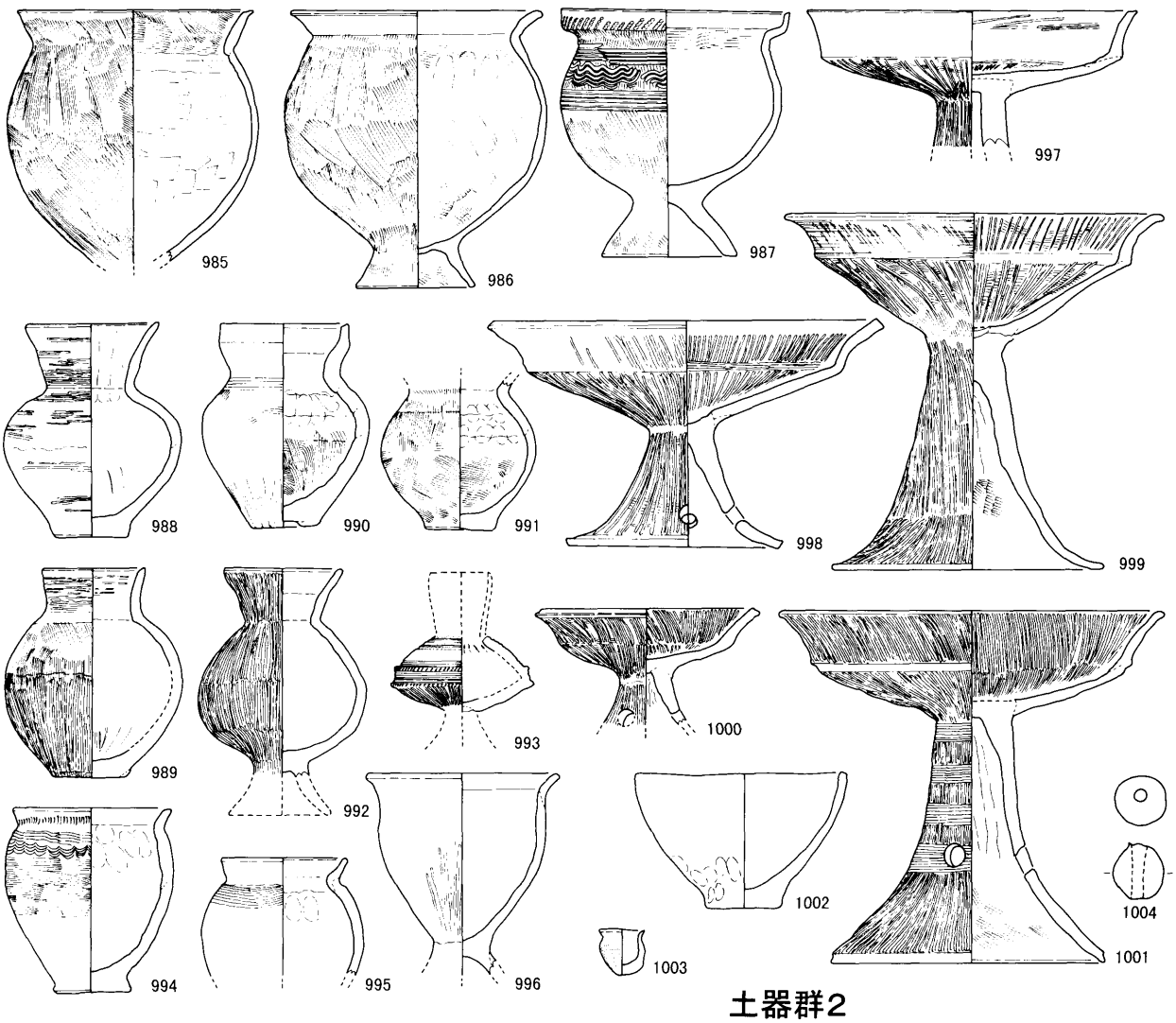


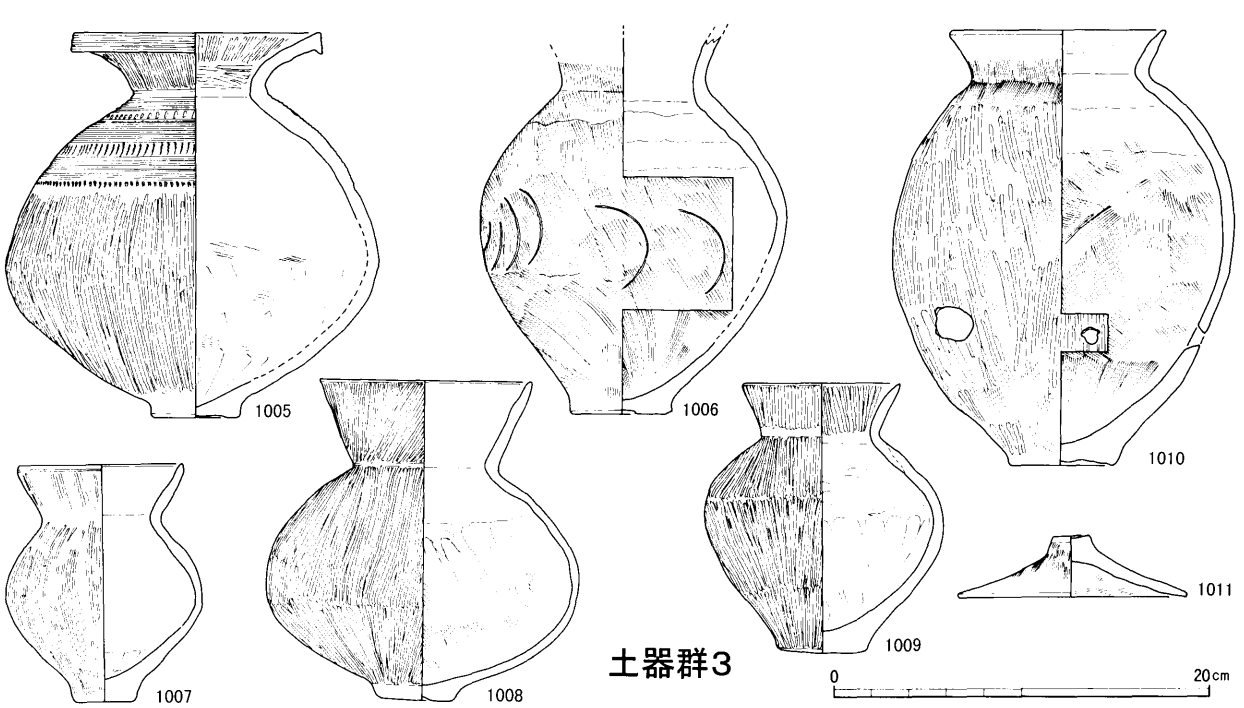
第243図　ＳＤ１出土遺物（土器群１）　（１：４）



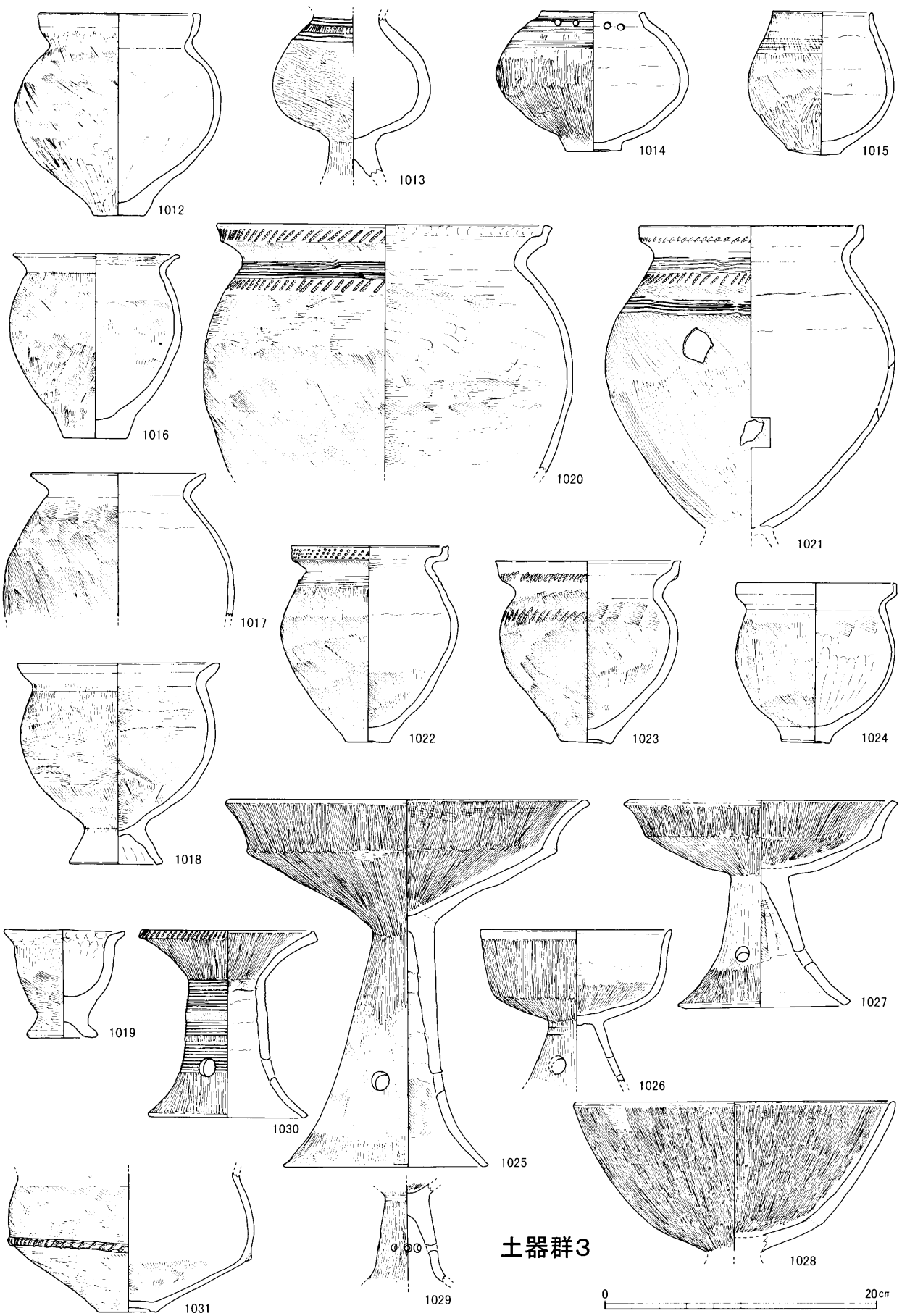


第244図　ＳＤ１出土遺物（土器群１・２）　（１：４）

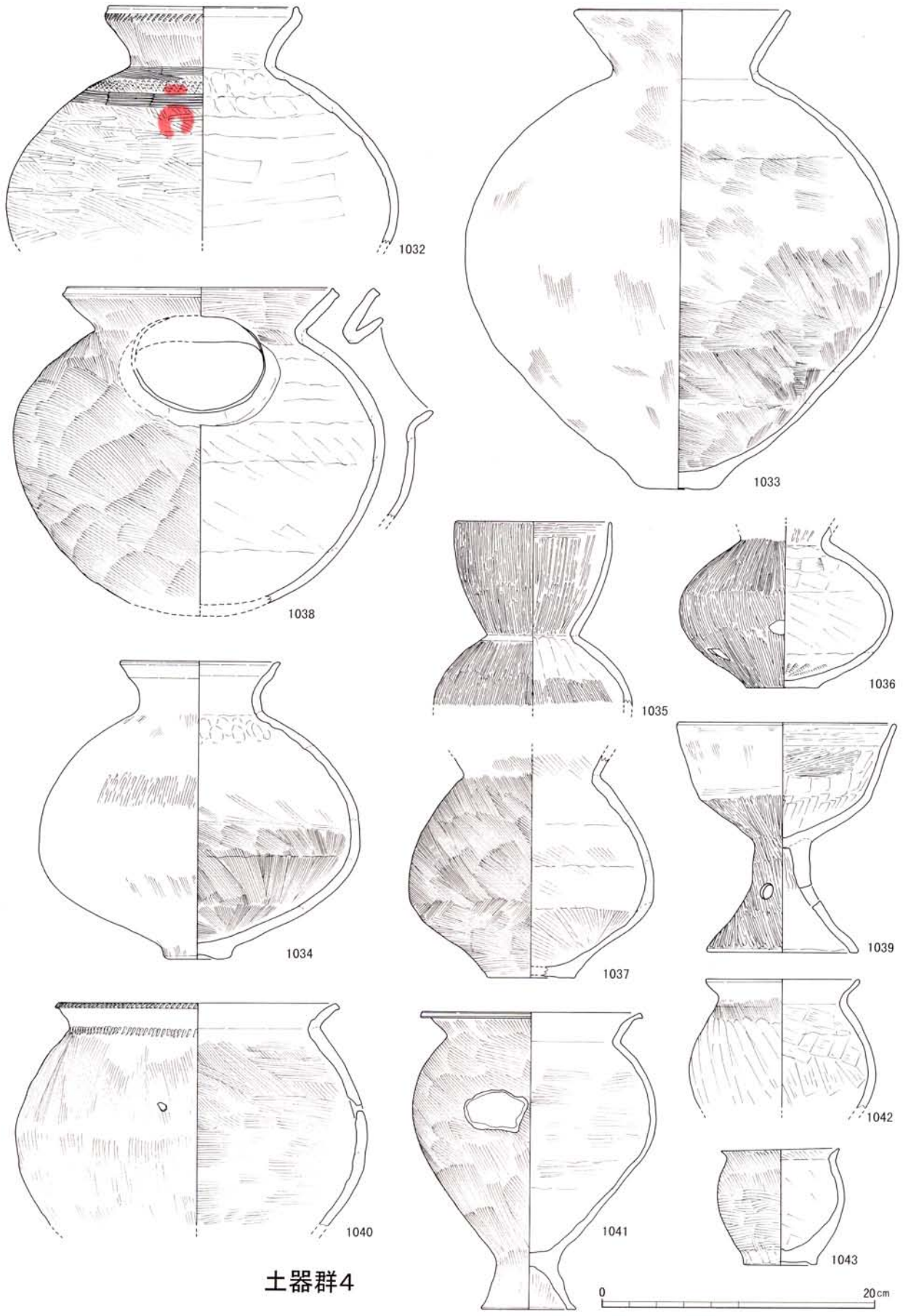




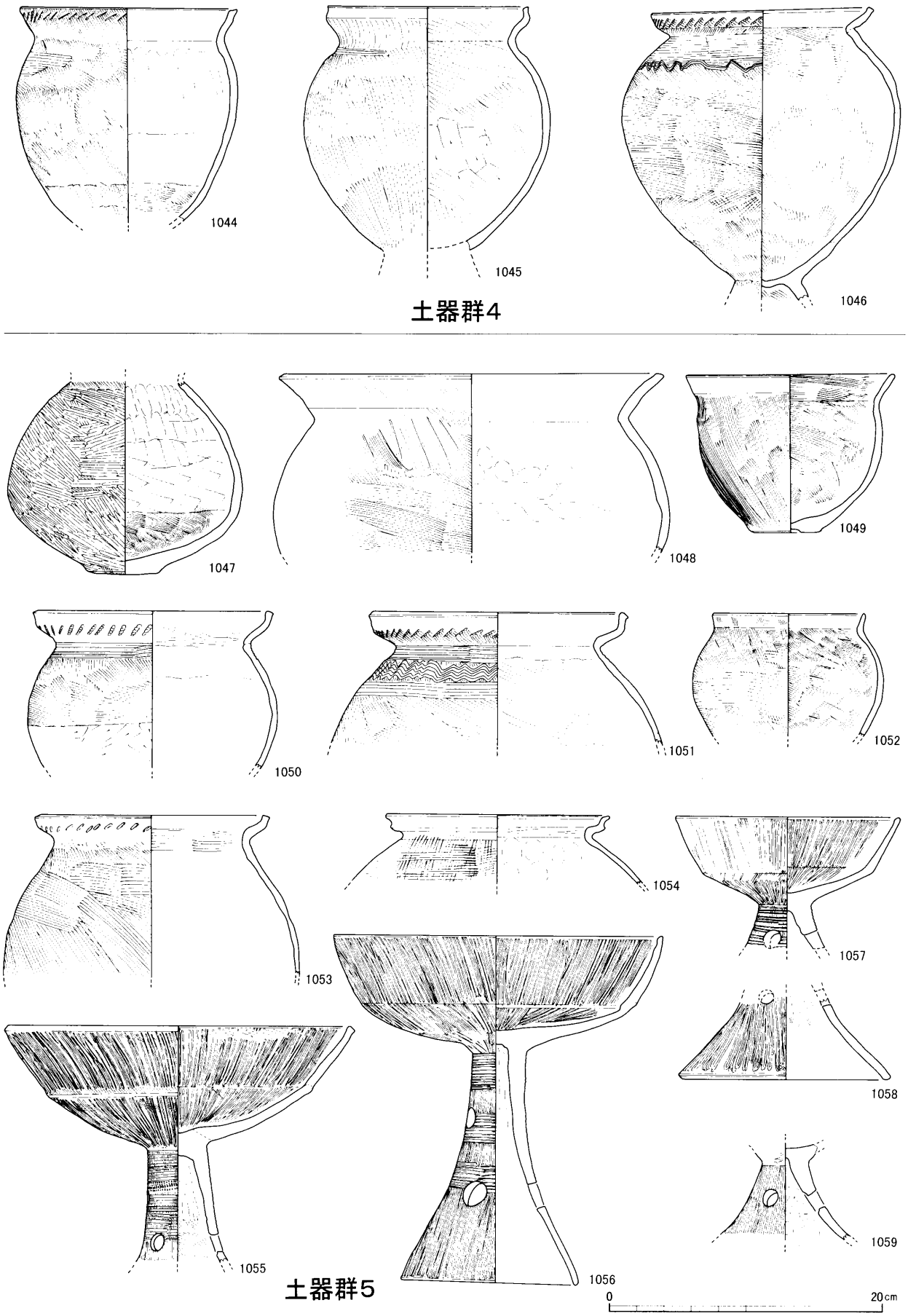
第245図　ＳＤ１出土遺物（土器群２・３）　（１：４）



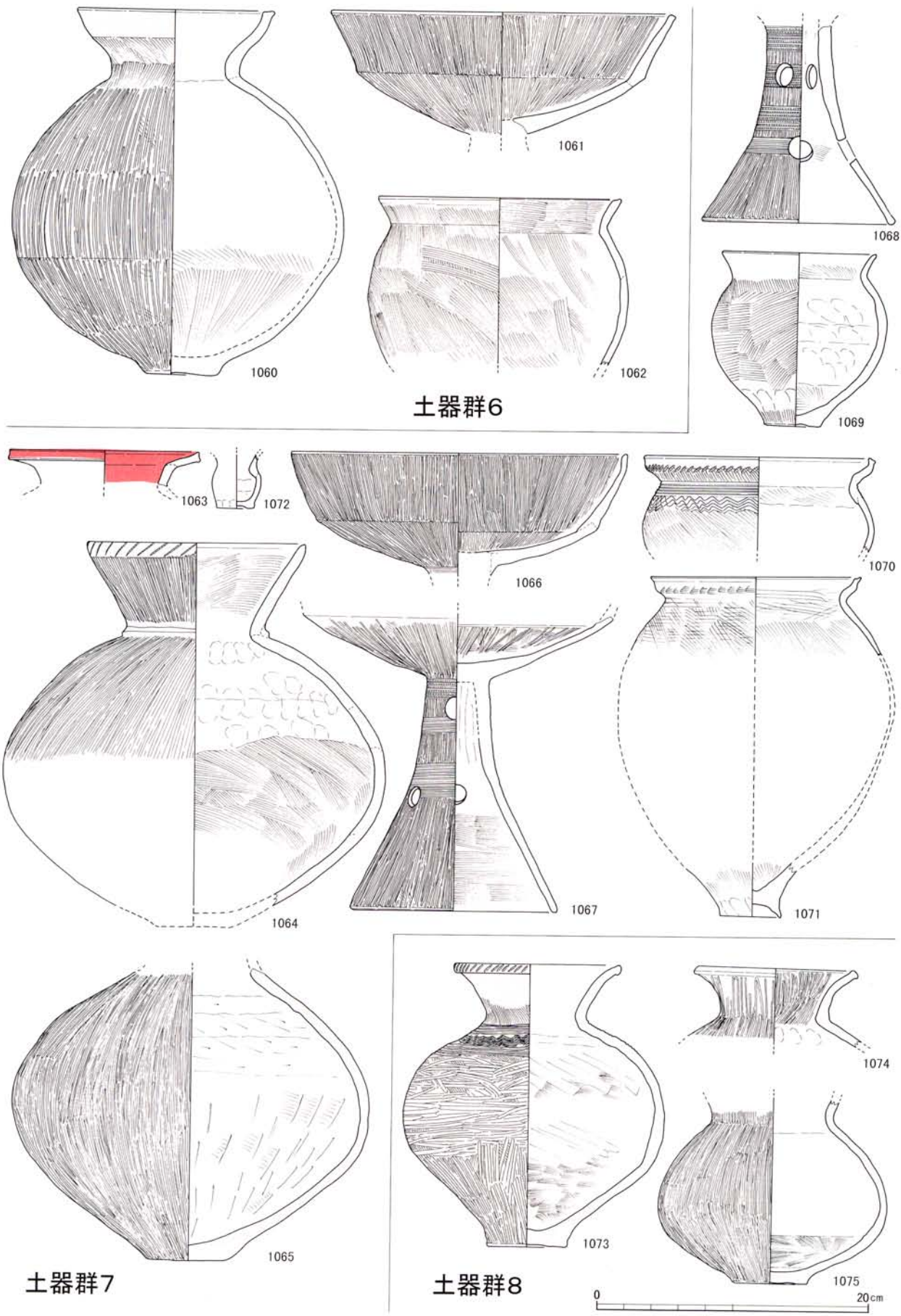
第246図　ＳＤ１出土遺物（土器群３）　（１：４）



第247図　ＳＤ１出土遺物（土器群４）　（１：４）

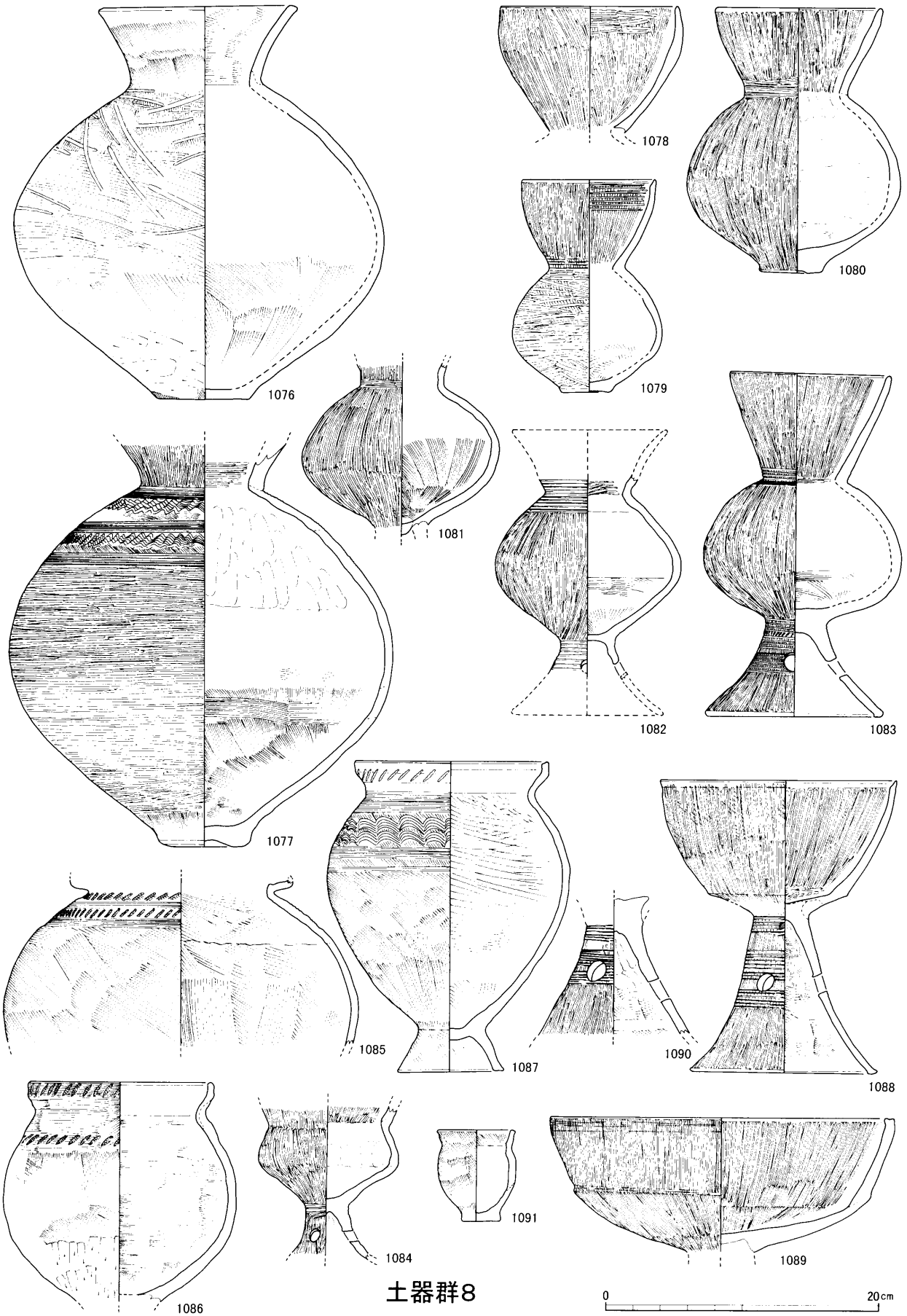


第248図　ＳＤ１出土遺物（土器群４・５）　（１：４）

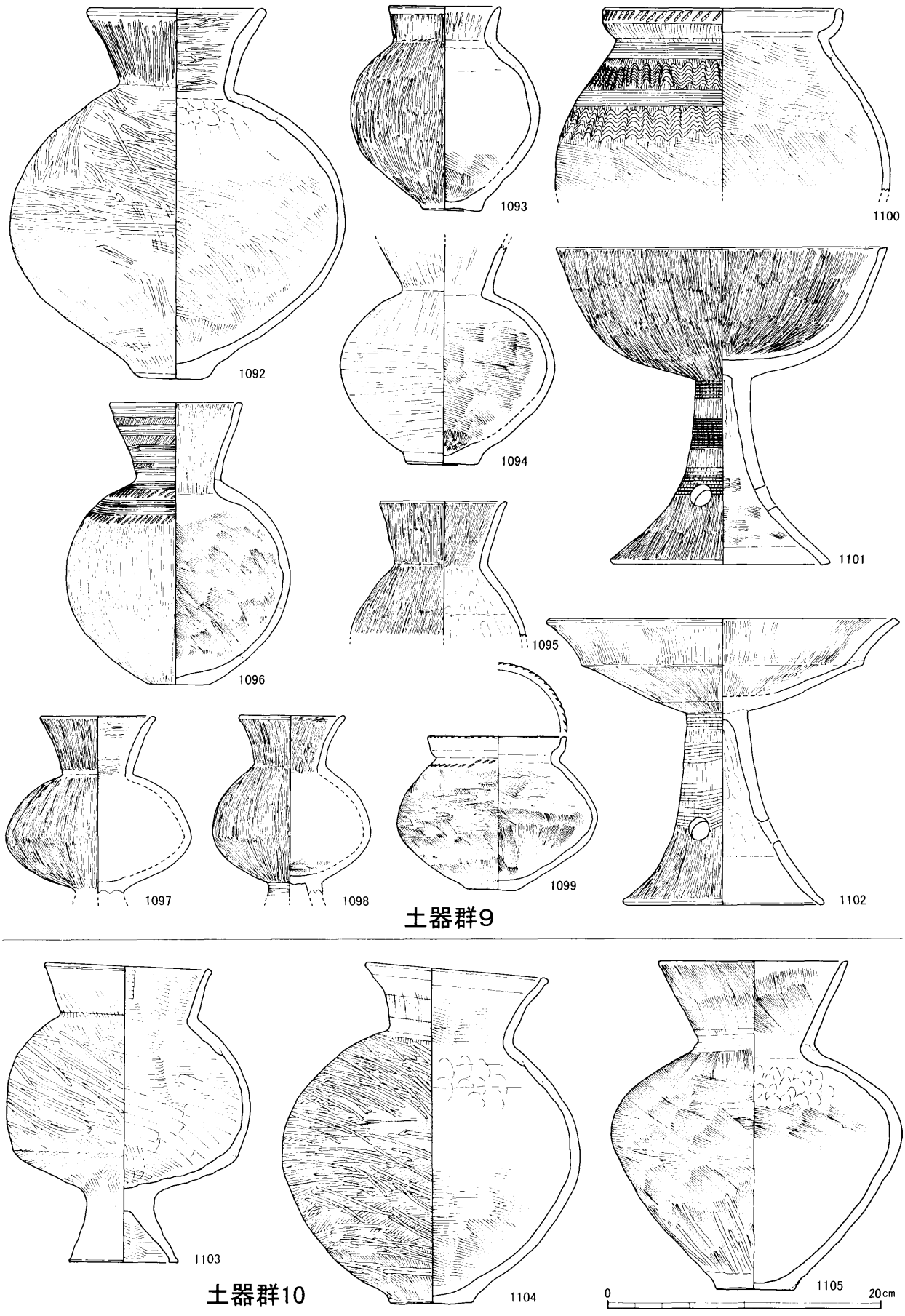


第249図　ＳＤ１出土遺物（土器群６・７・８）

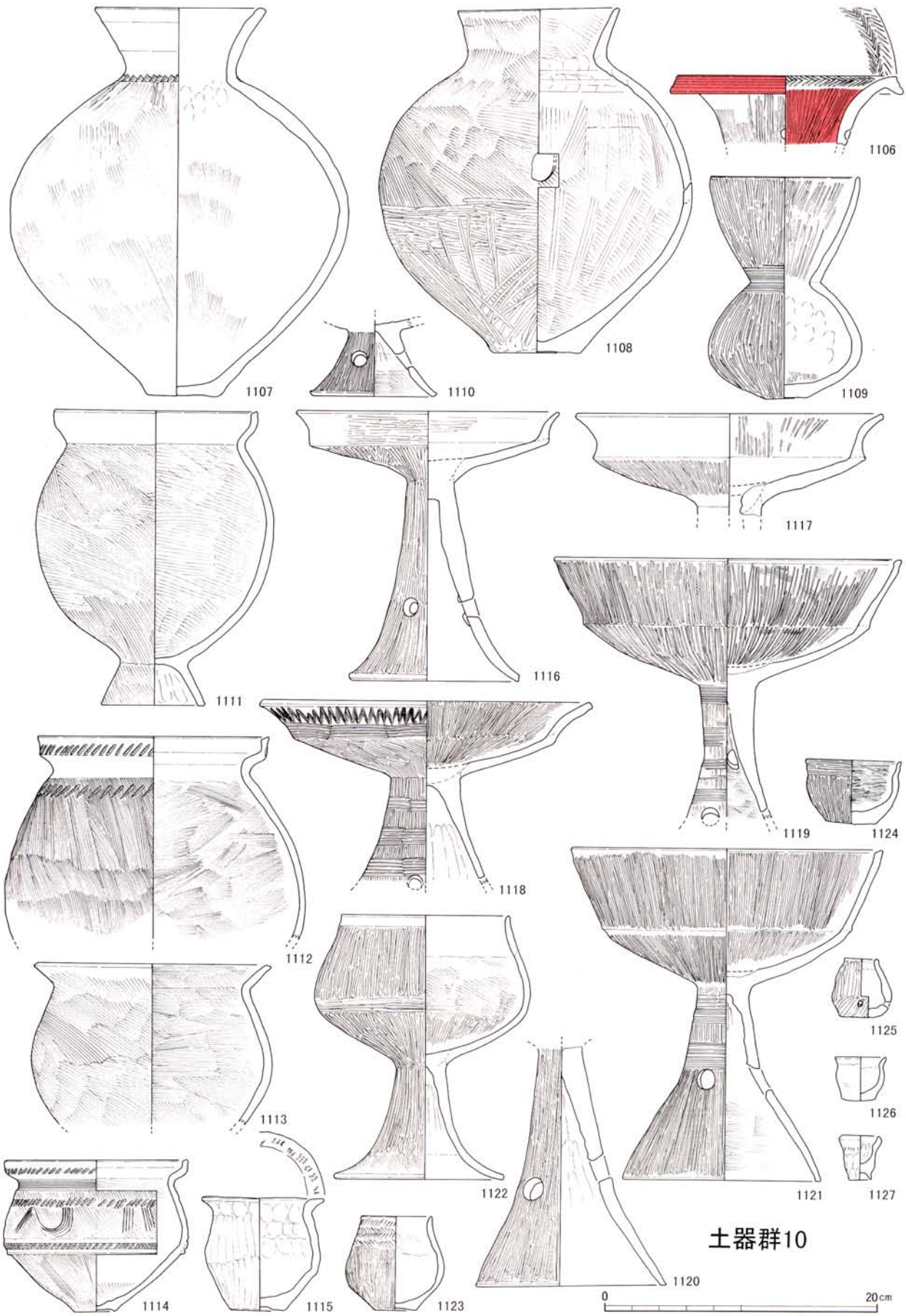
（１：４）



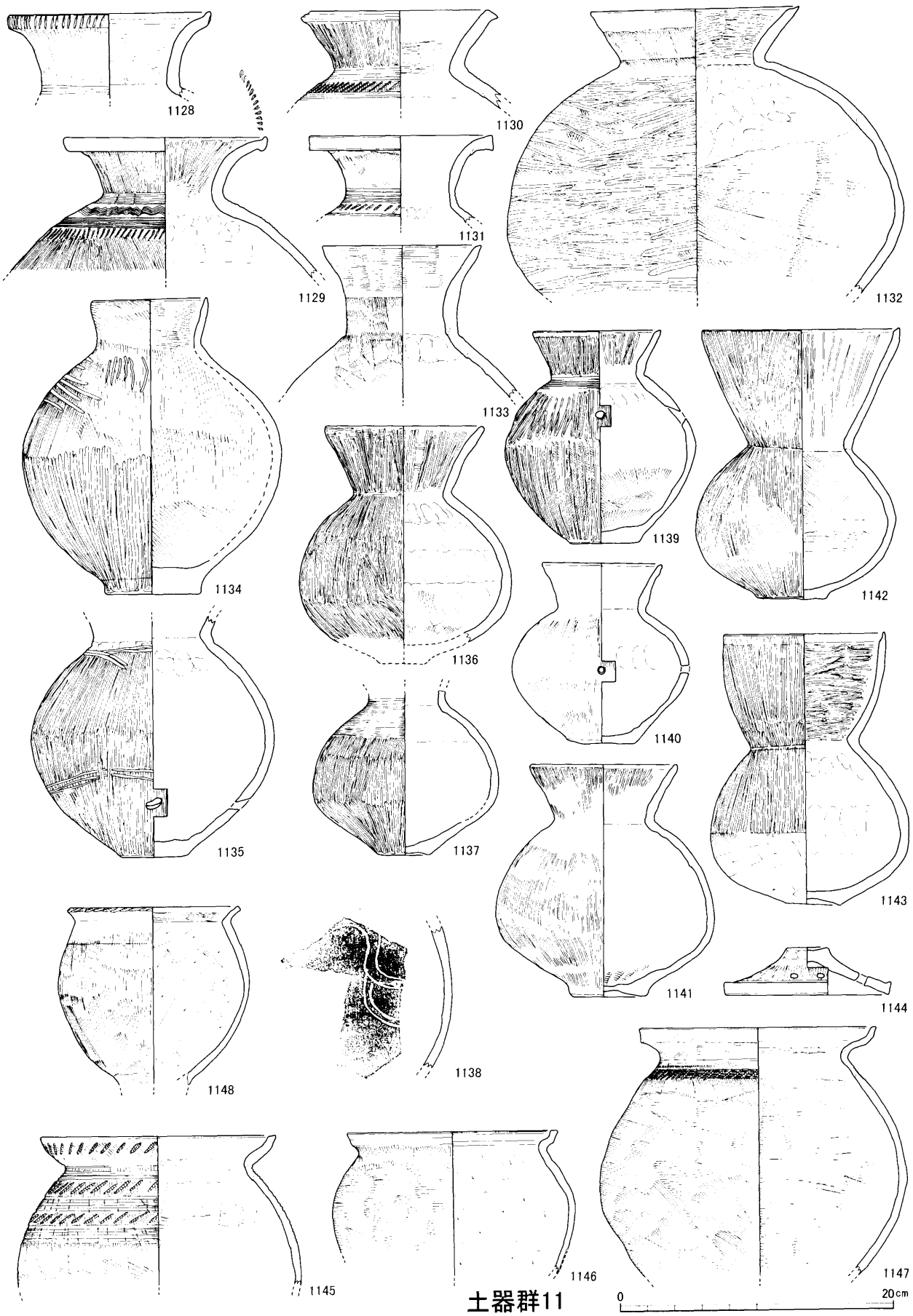
第250図　ＳＤ１出土遺物（土器群８）　（１：４）



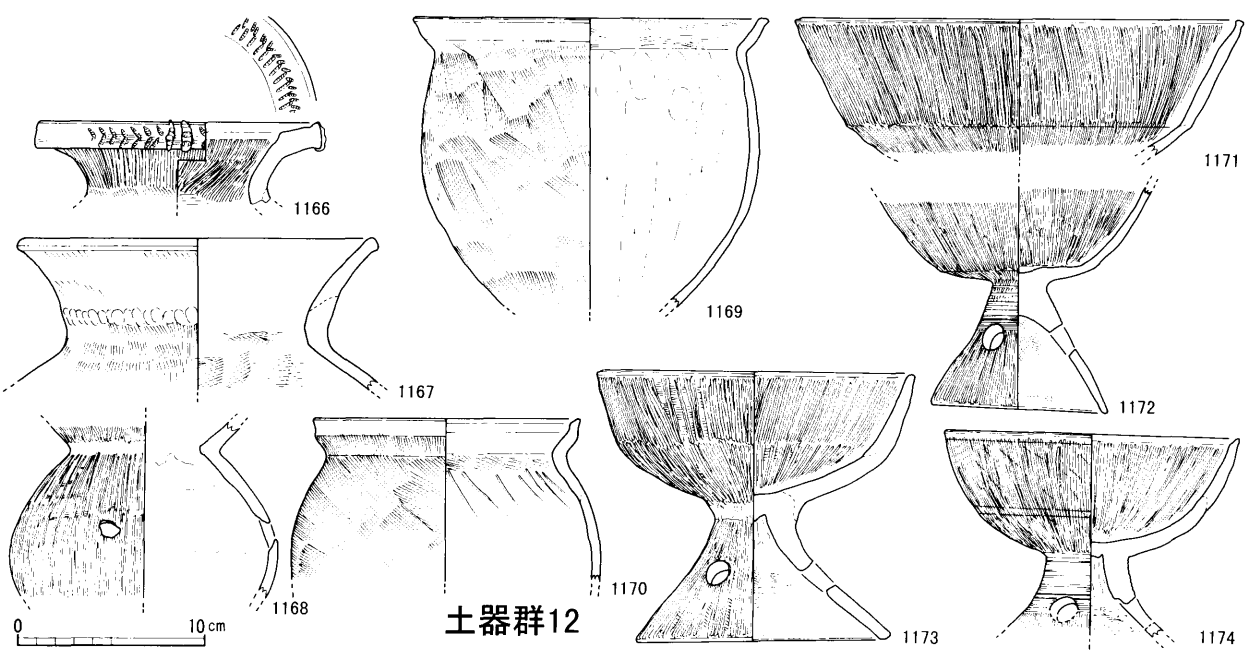
第251図　ＳＤ１出土遺物（土器群９・10）　　（１：４）



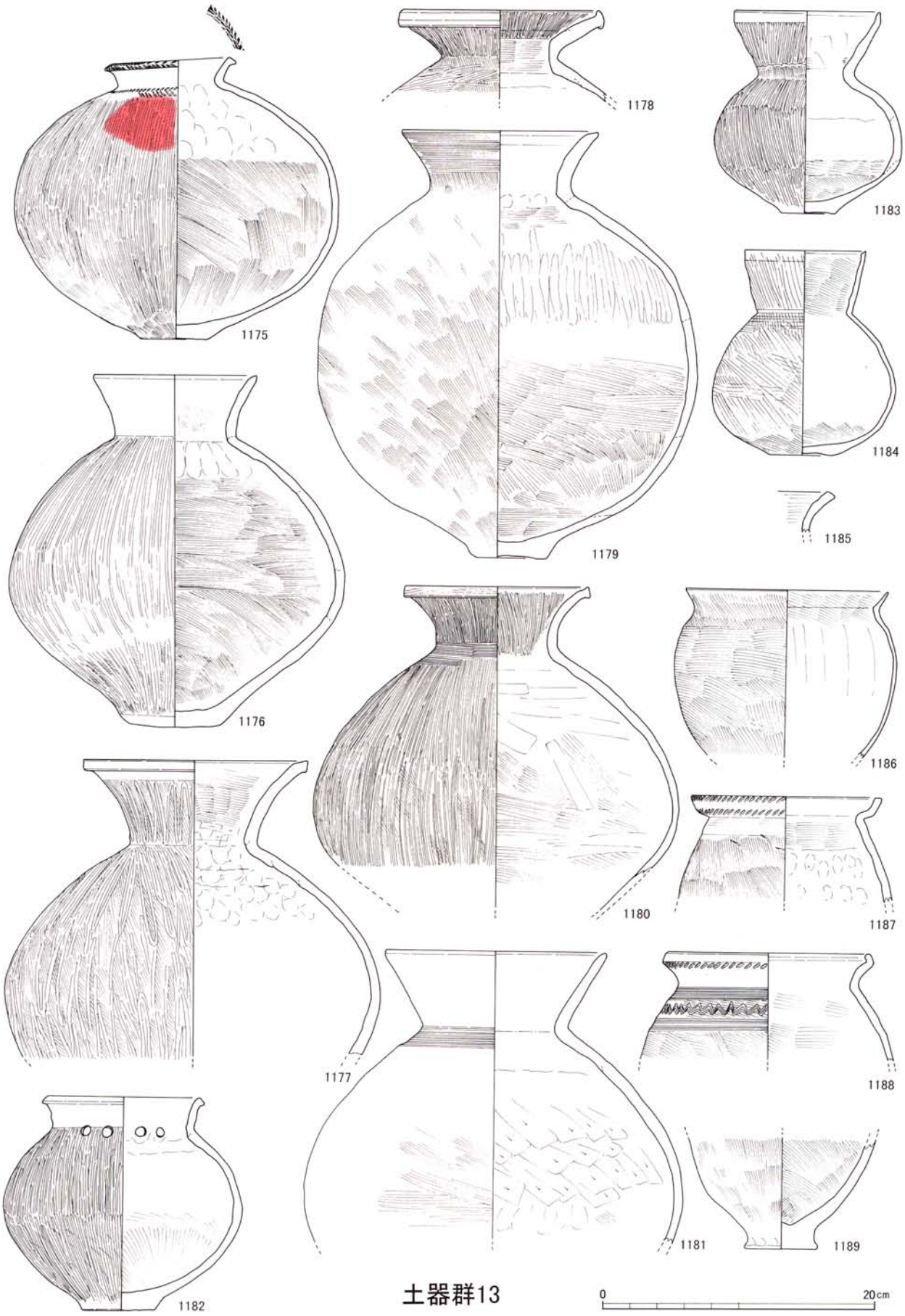
第252図　ＳＤ１出土遺物（土器群10）　（１：４）



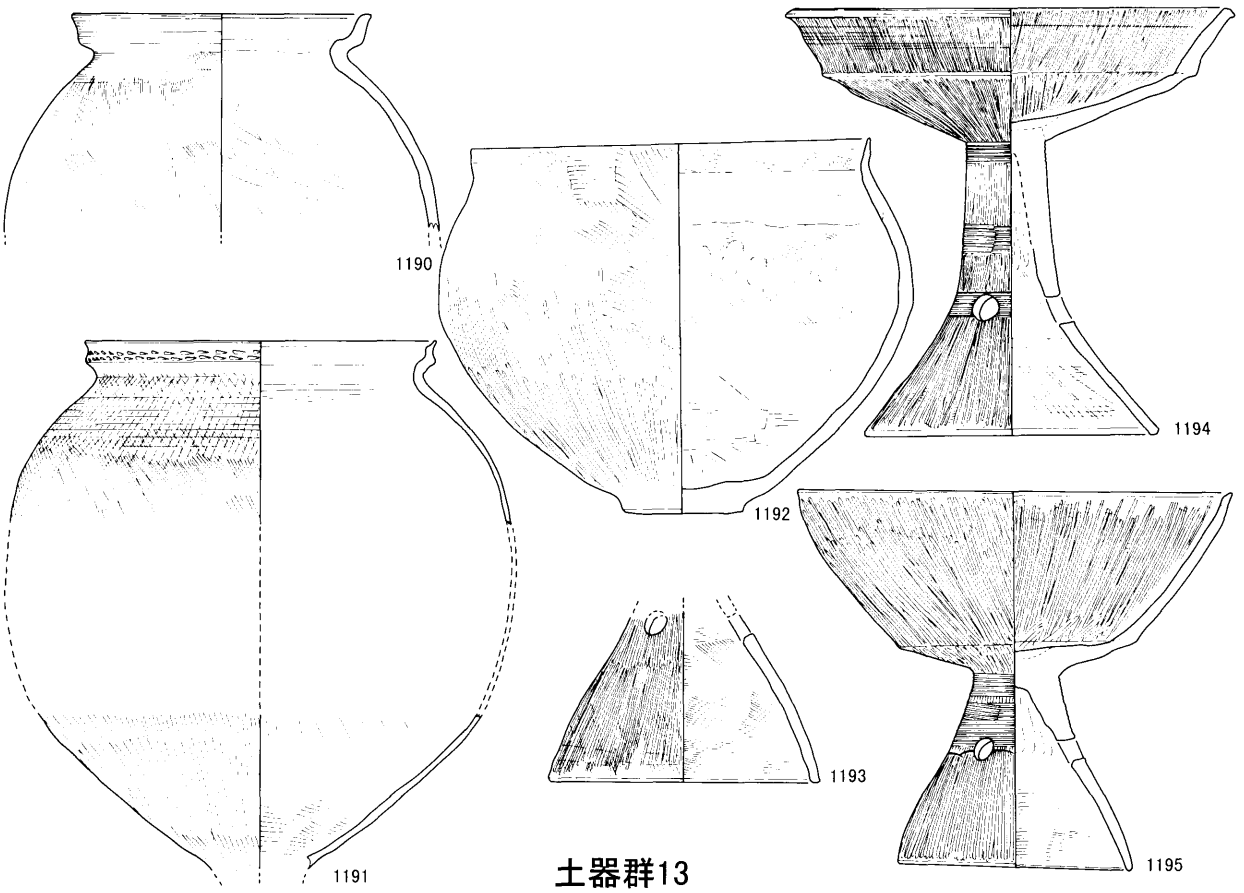
第253図　ＳＤ１出土遺物（土器群11）　（１：４）

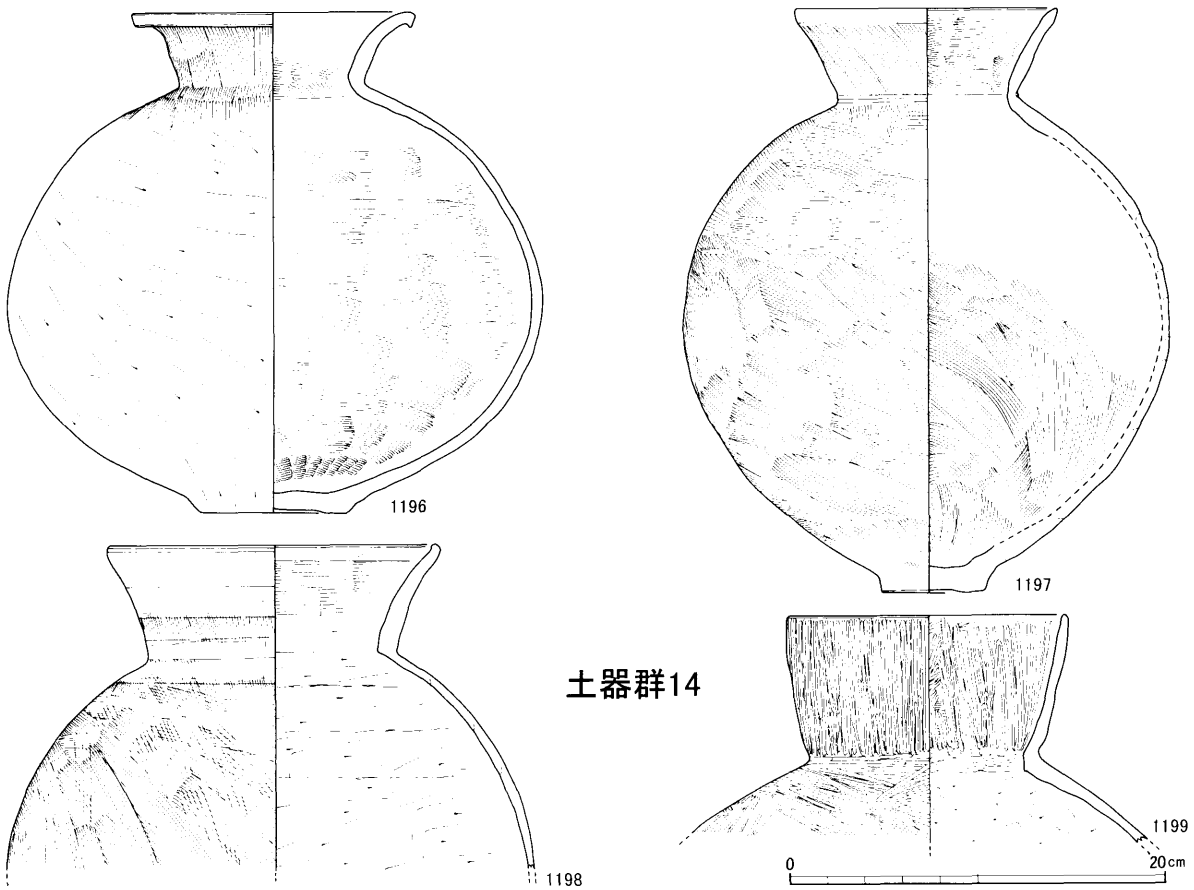


第254図　ＳＤ１出土遺物（土器群11・12）　（１：４）

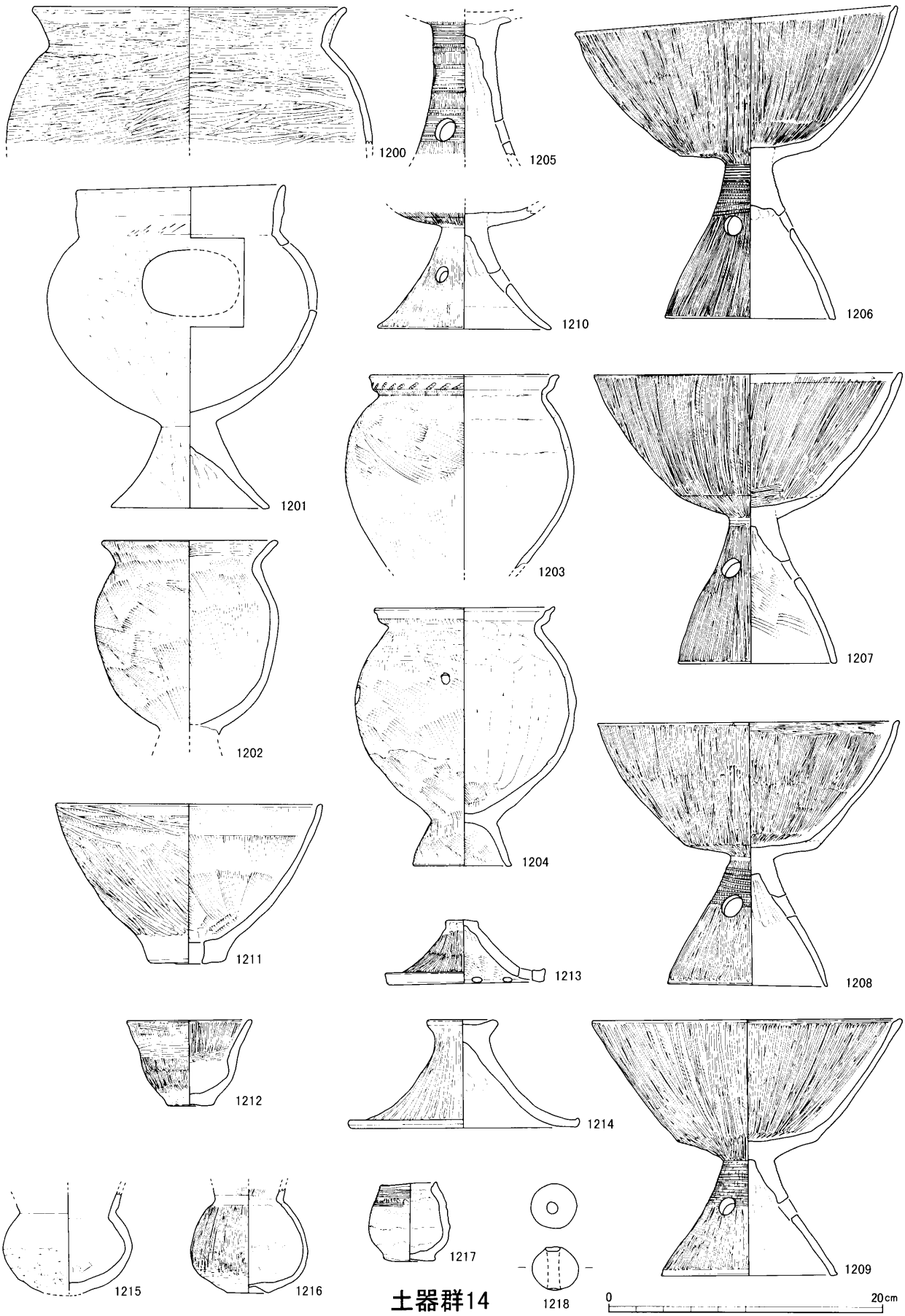


第255図　ＳＤ１出土遺物（土器群13）　（１：４）

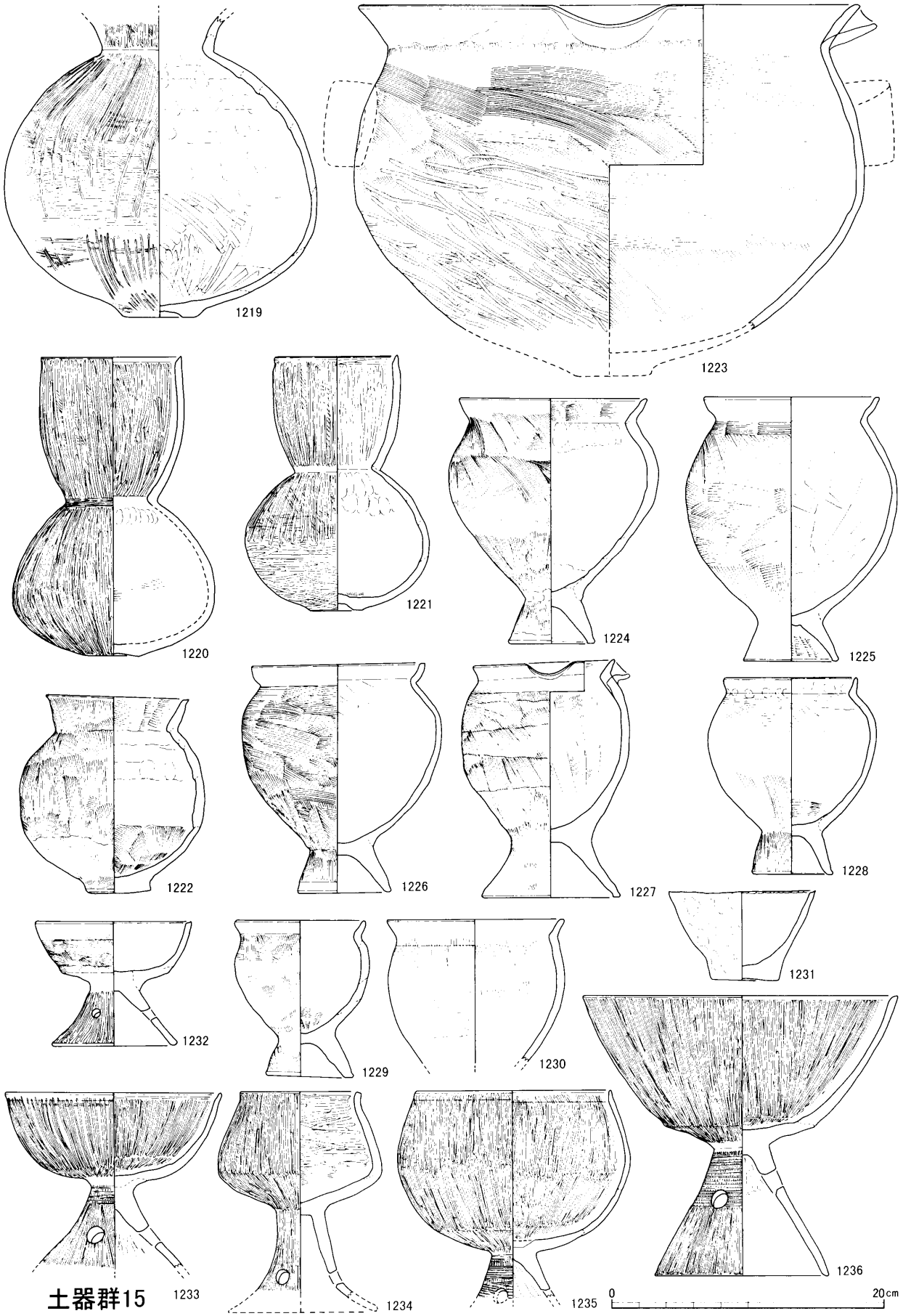




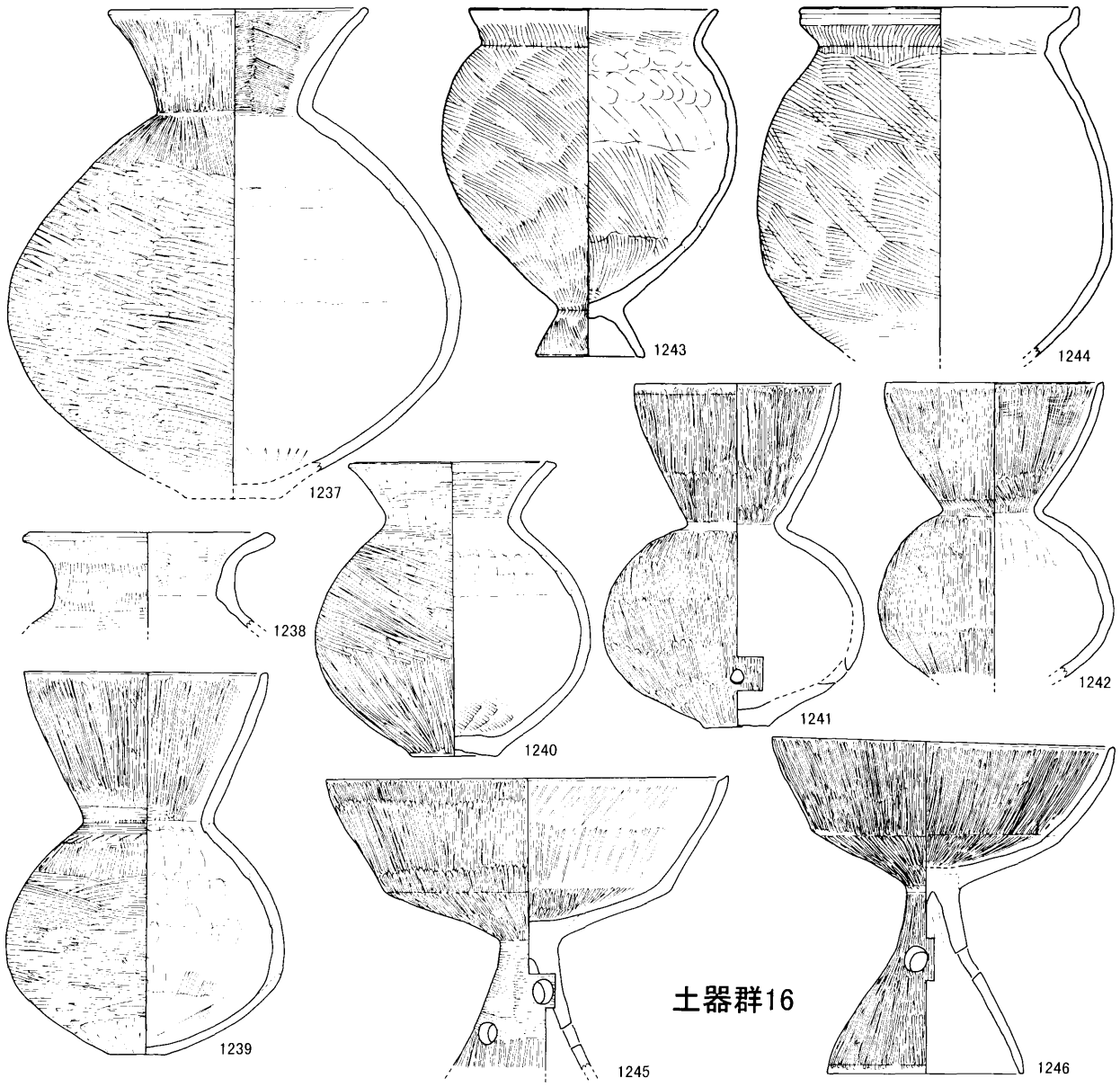
第256図　ＳＤ１出土遺物（土器群13・14）　（１：４）

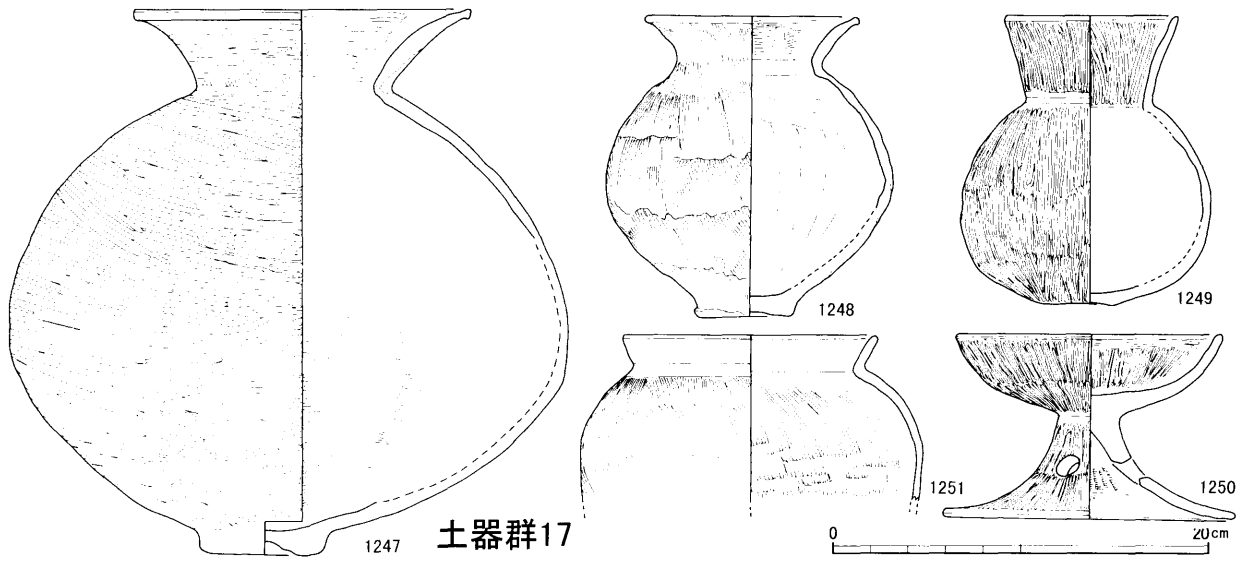


第257図　ＳＤ１出土遺物（土器群14）　（１：４）

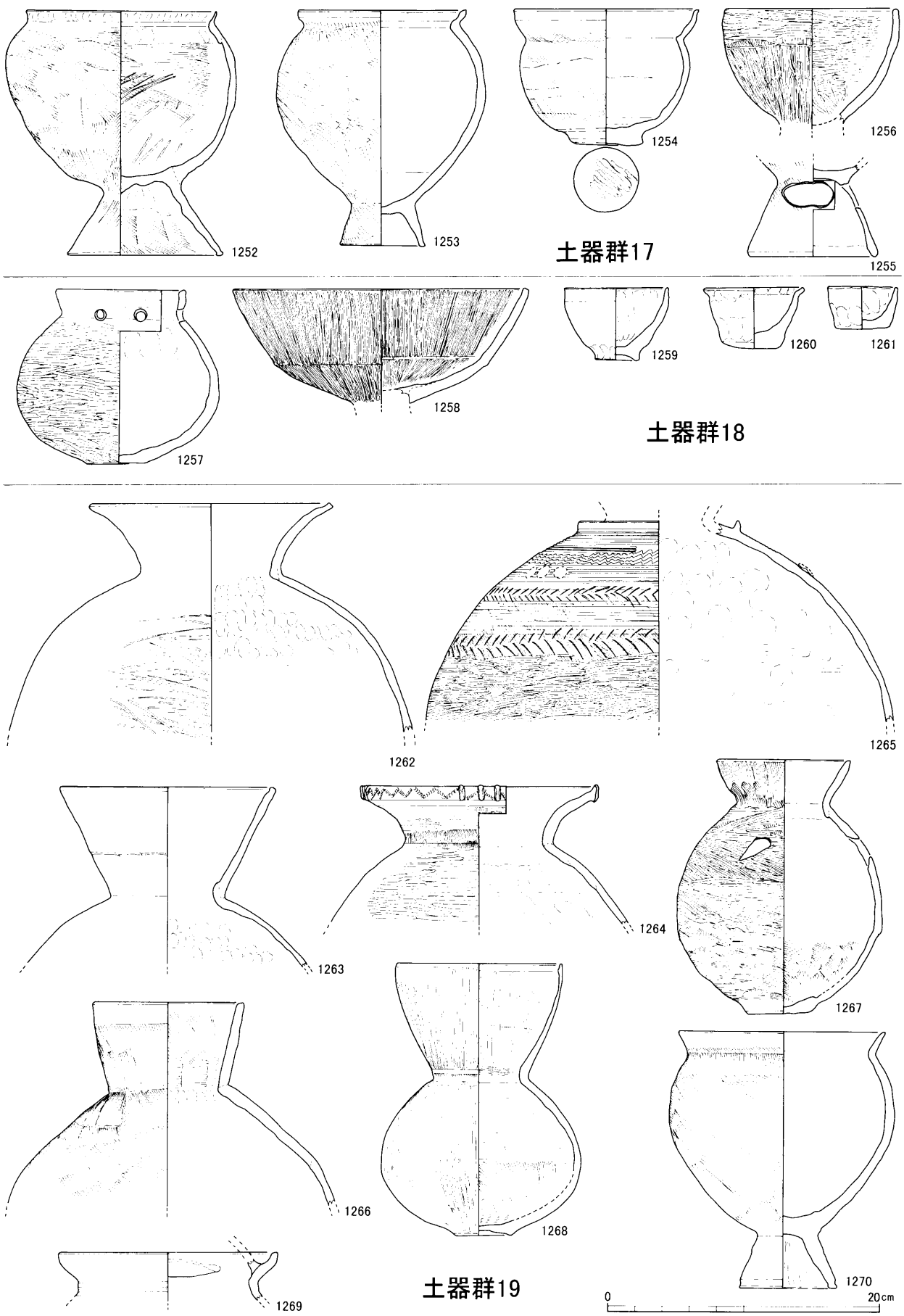


第258図　ＳＤ１出土遺物（土器群15）　（１：４）

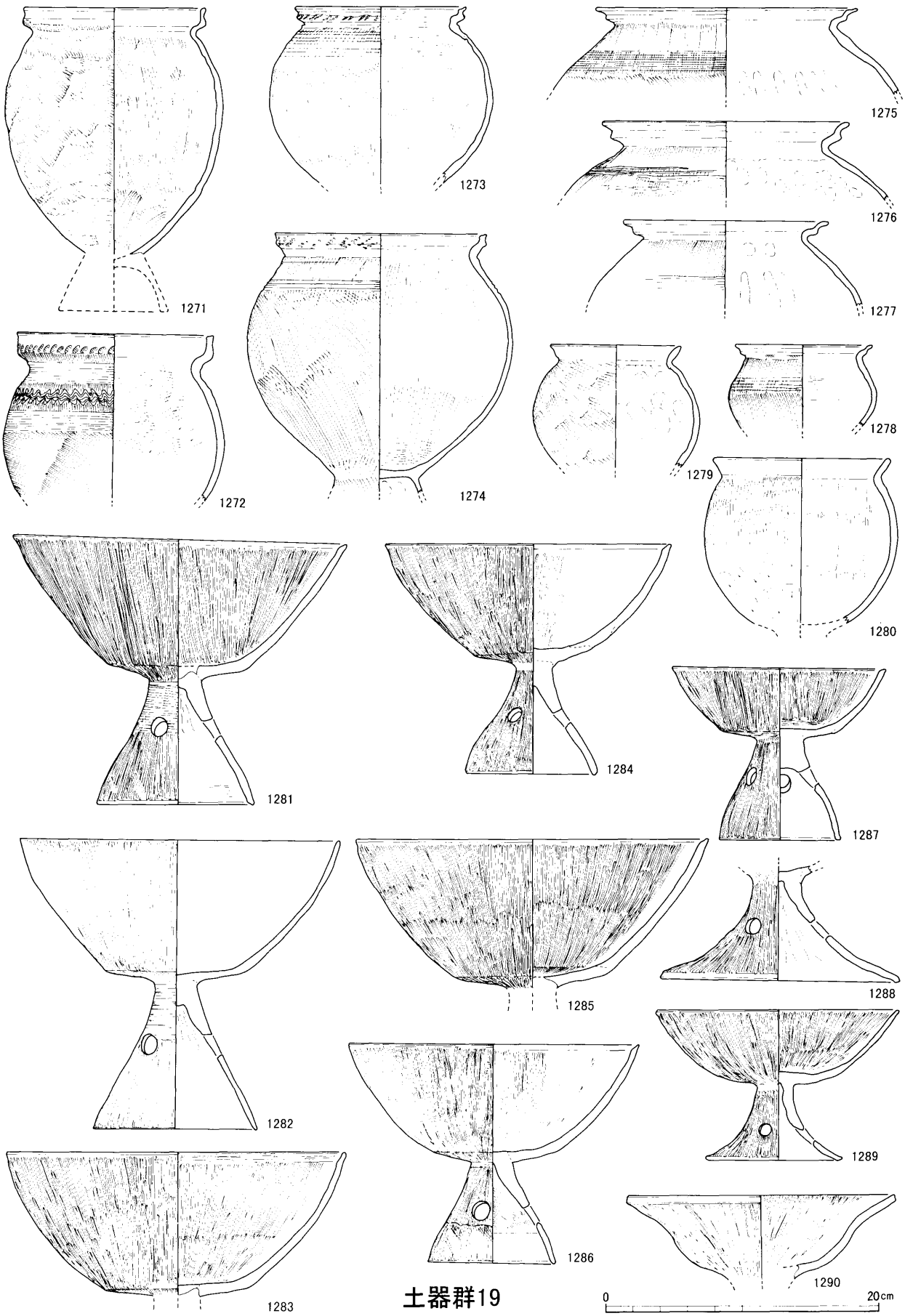




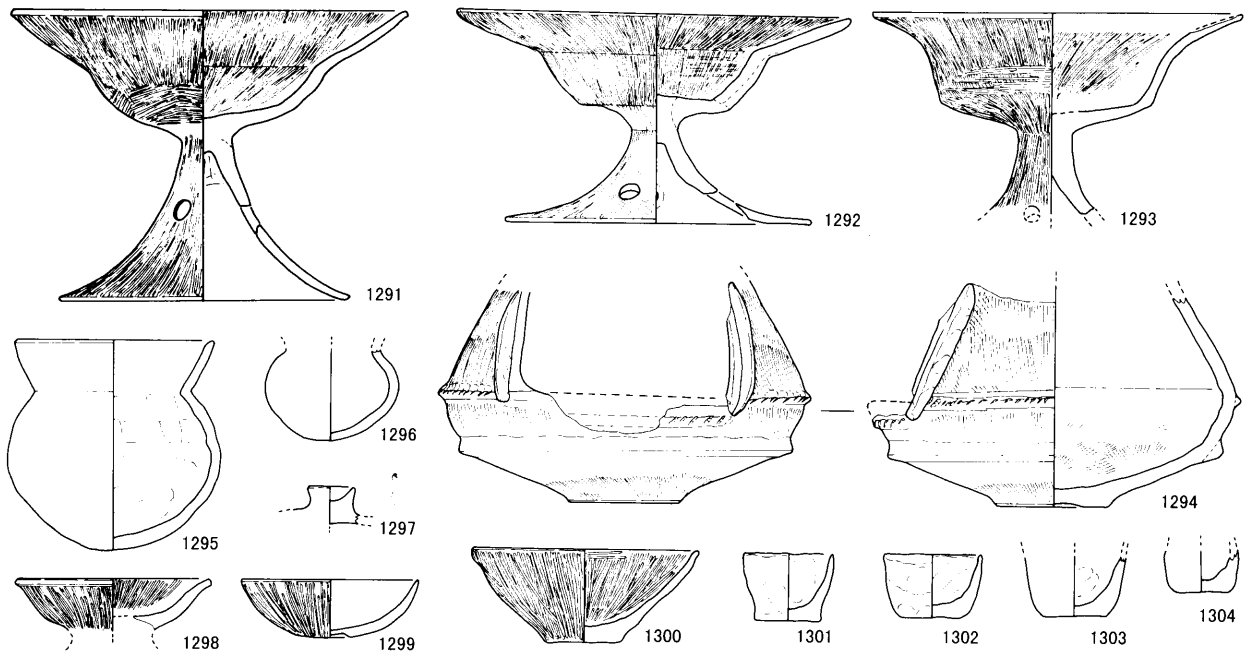
第259図　ＳＤ１出土遺物（土器群16・17）　（１：４）

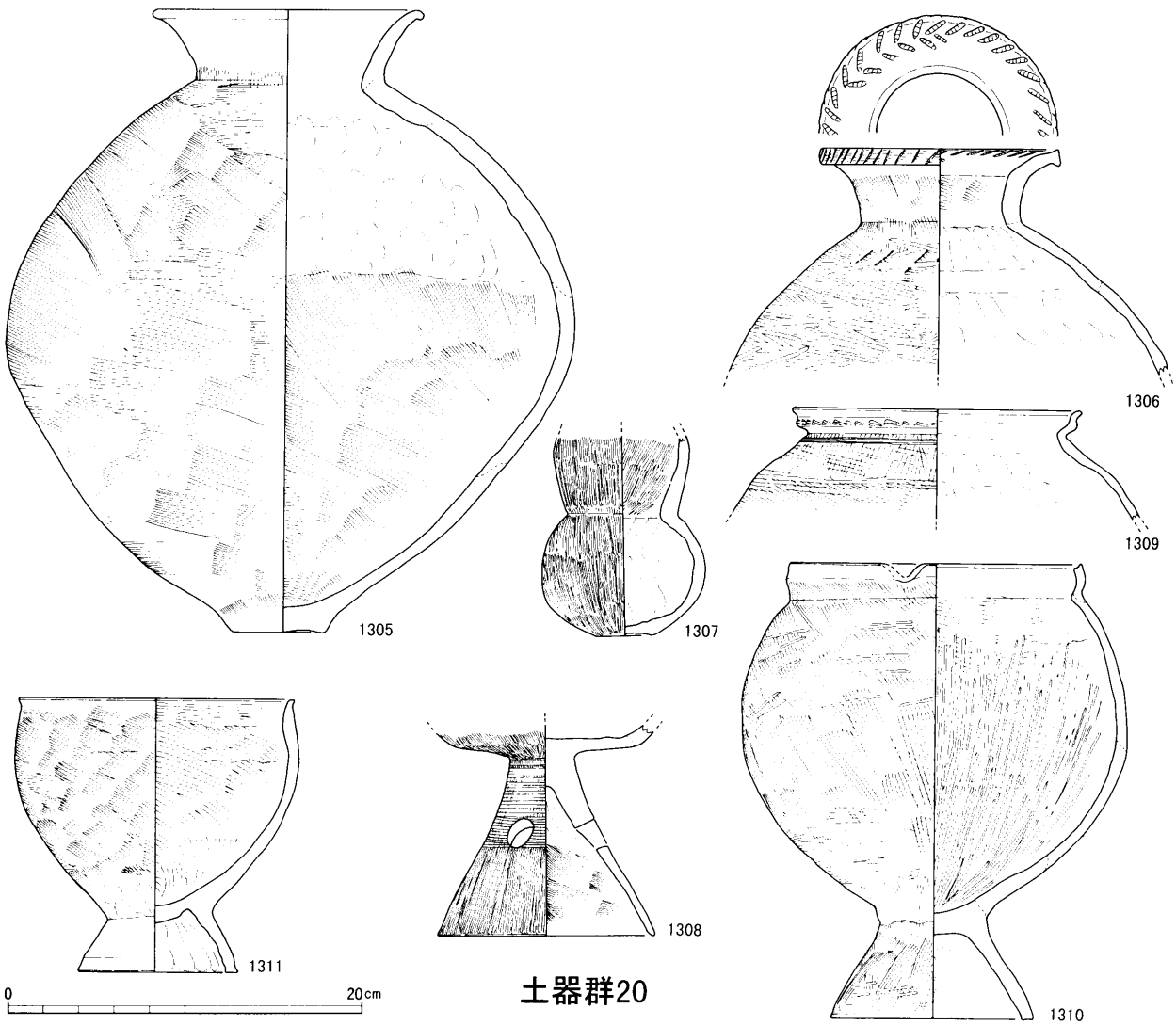


第260図　ＳＤ１出土遺物（土器群17・18・19）　（１：４）

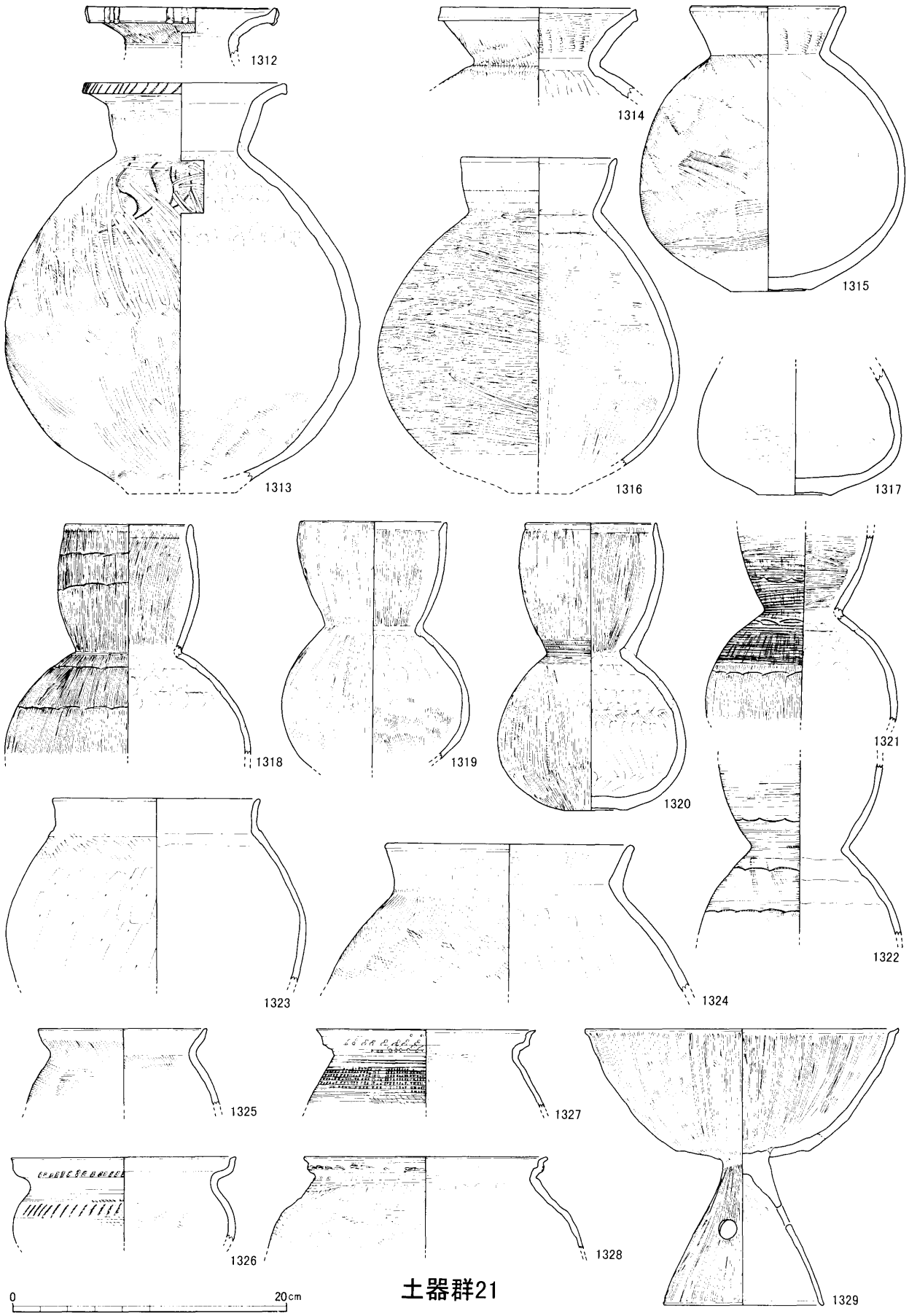


第261図　ＳＤ１出土遺物（土器群19）　（１：４）

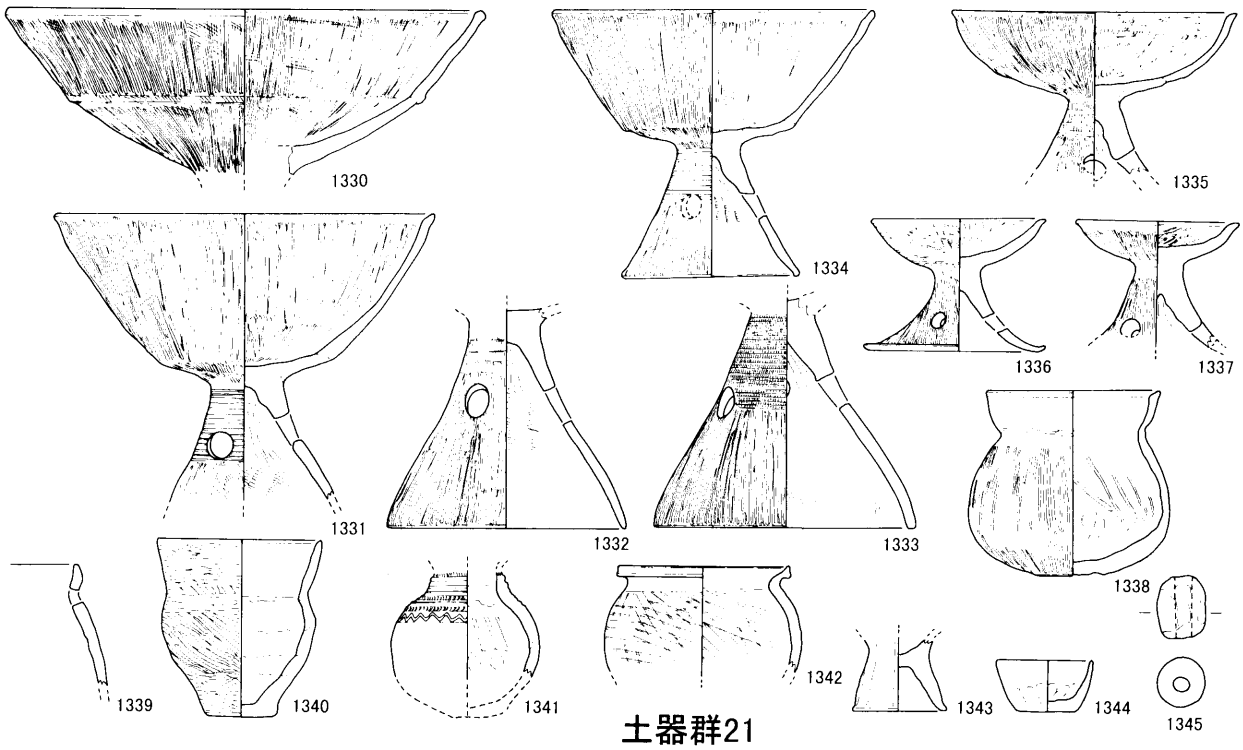


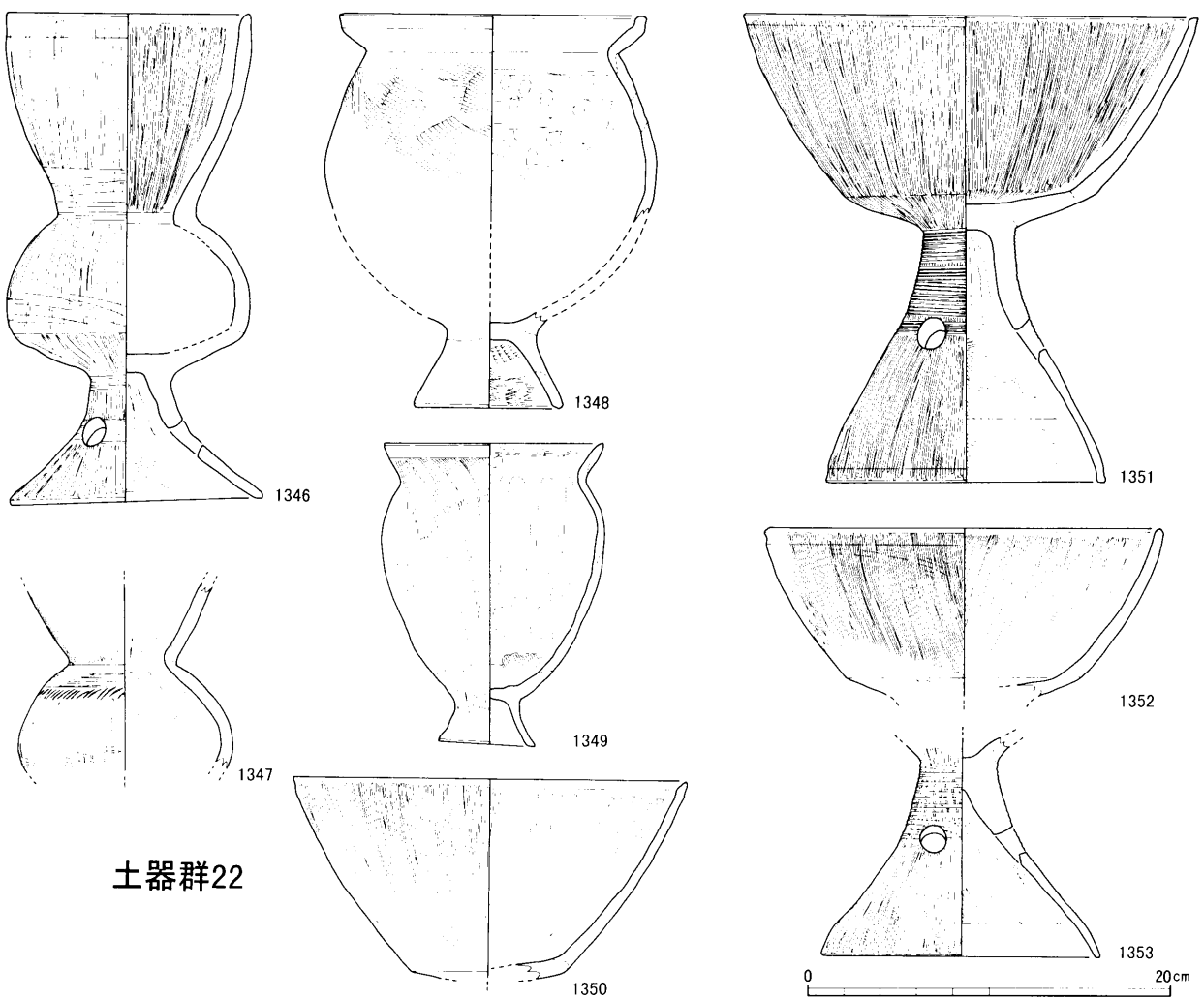


第262図　ＳＤ１出土遺物（土器群19・20）　（１：４）

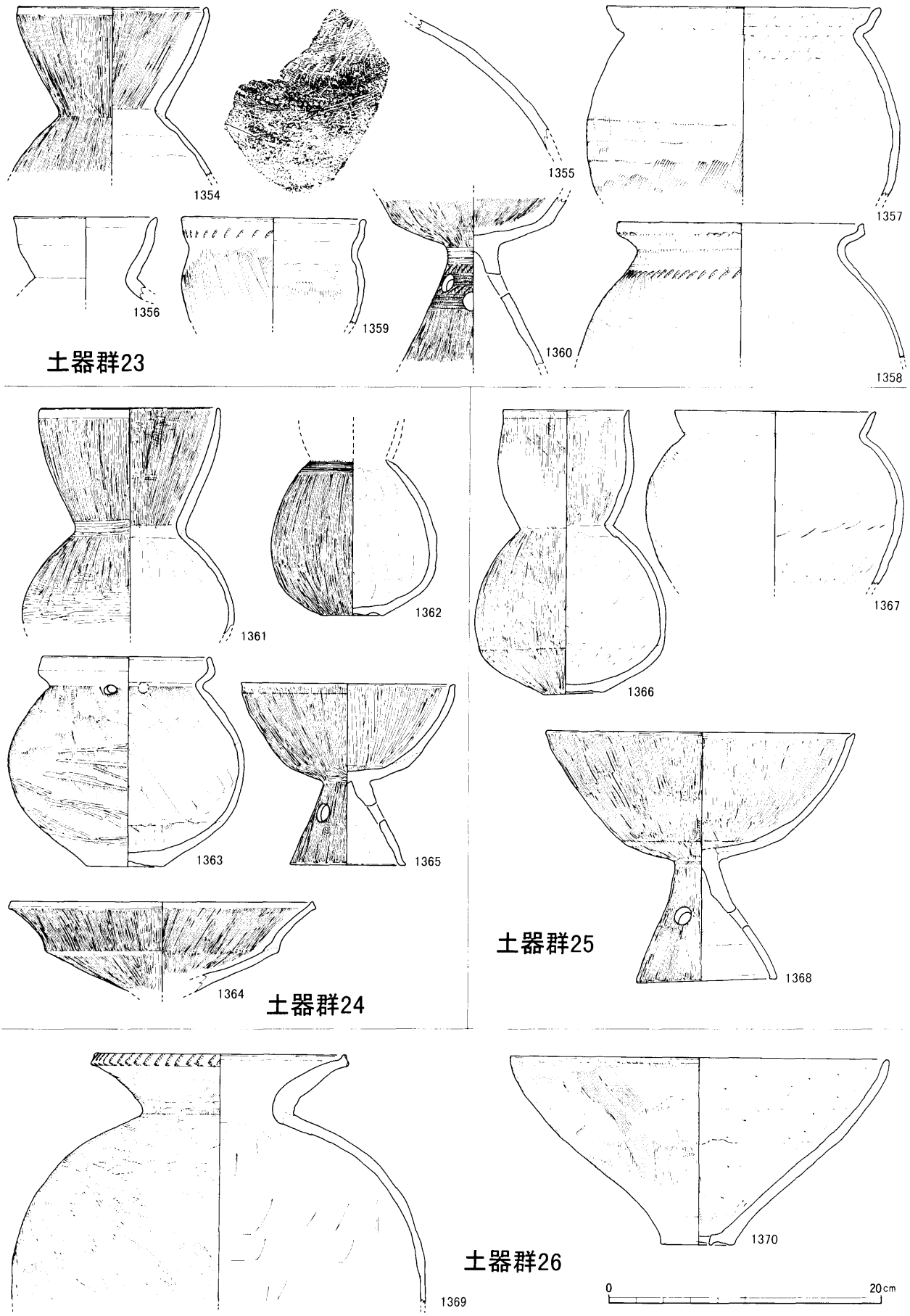


第263図　ＳＤ１出土遺物（土器群21）　（１：４）

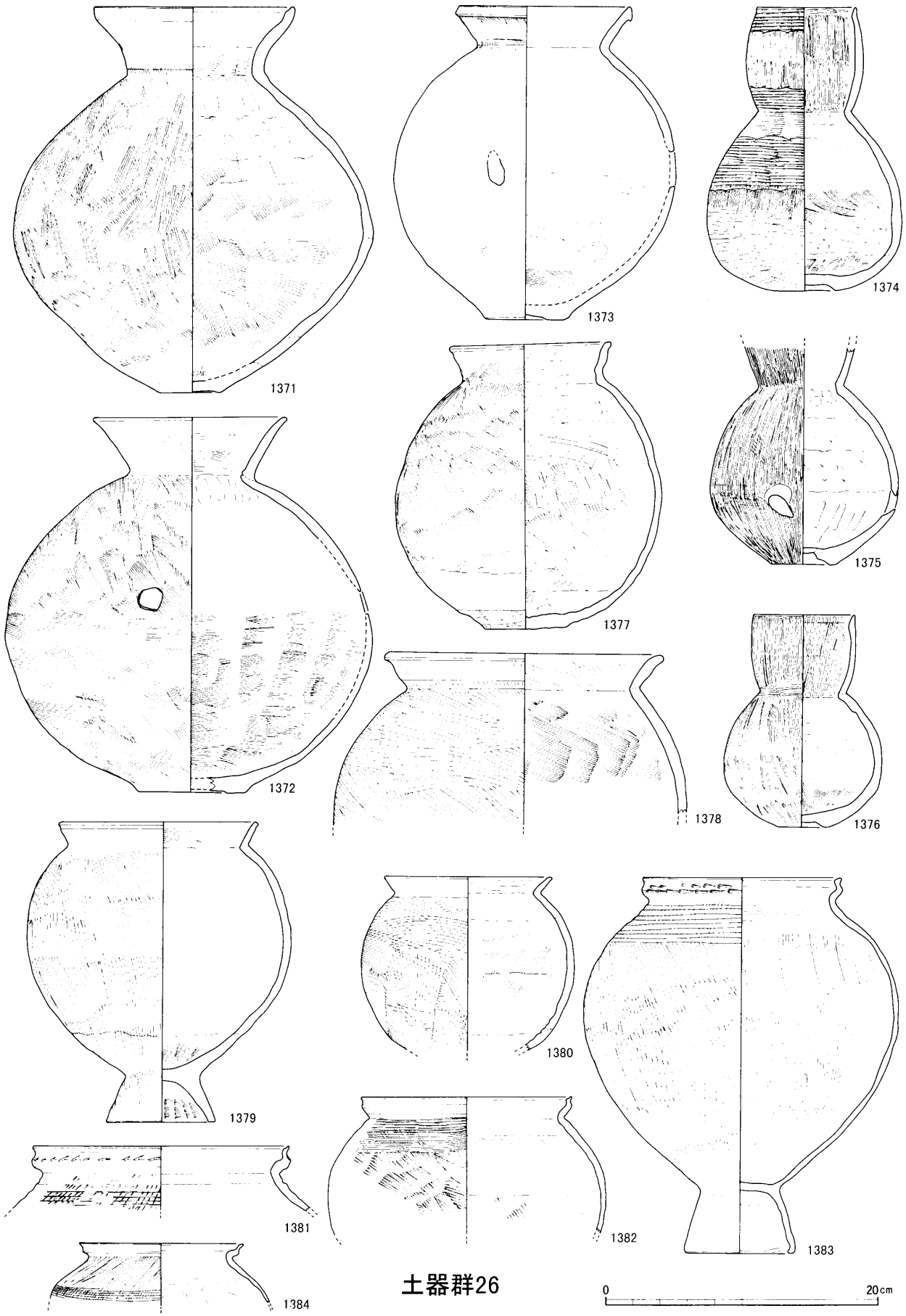




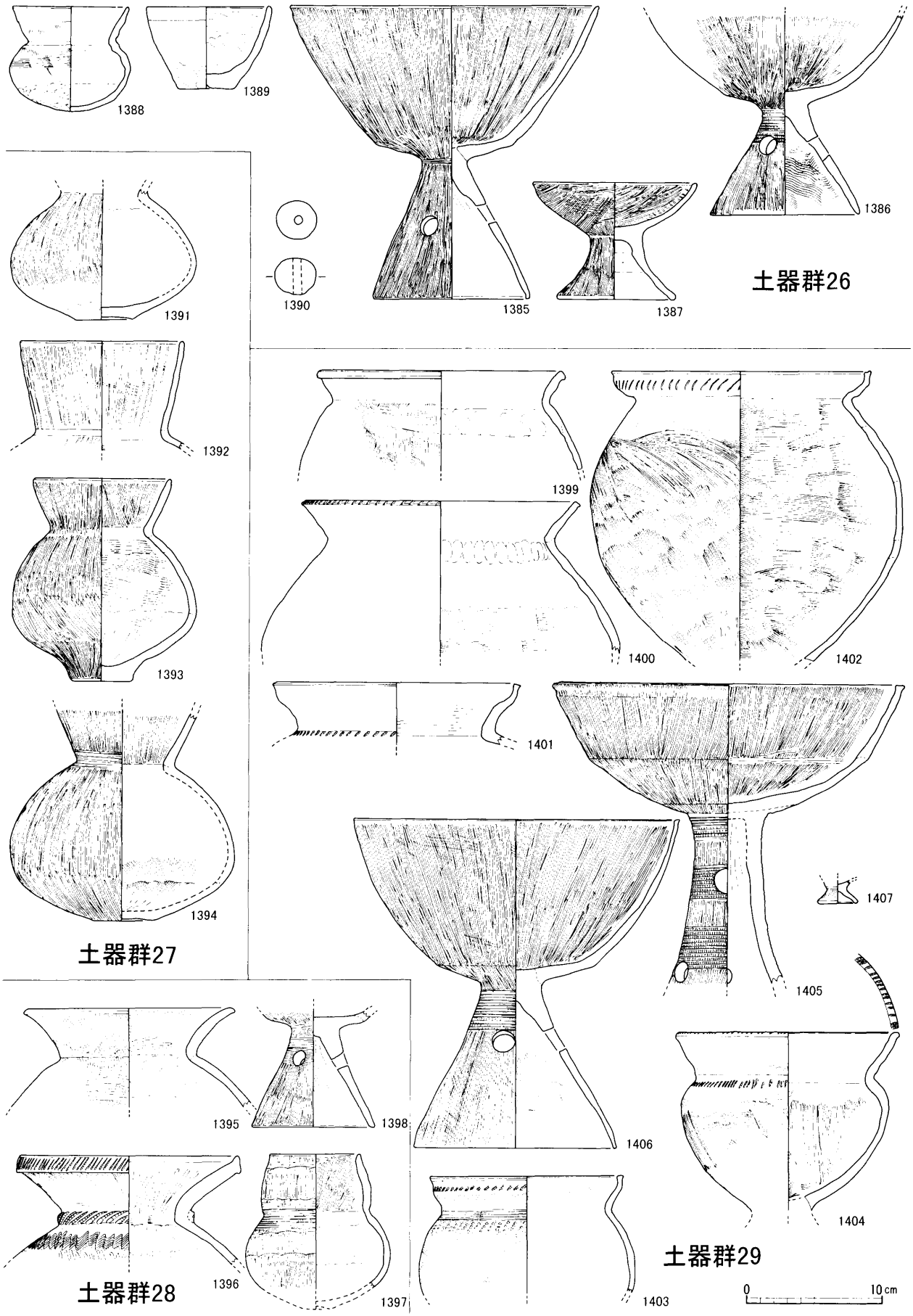
第264図　ＳＤ１出土遺物（土器群21・22）　　（１：４）



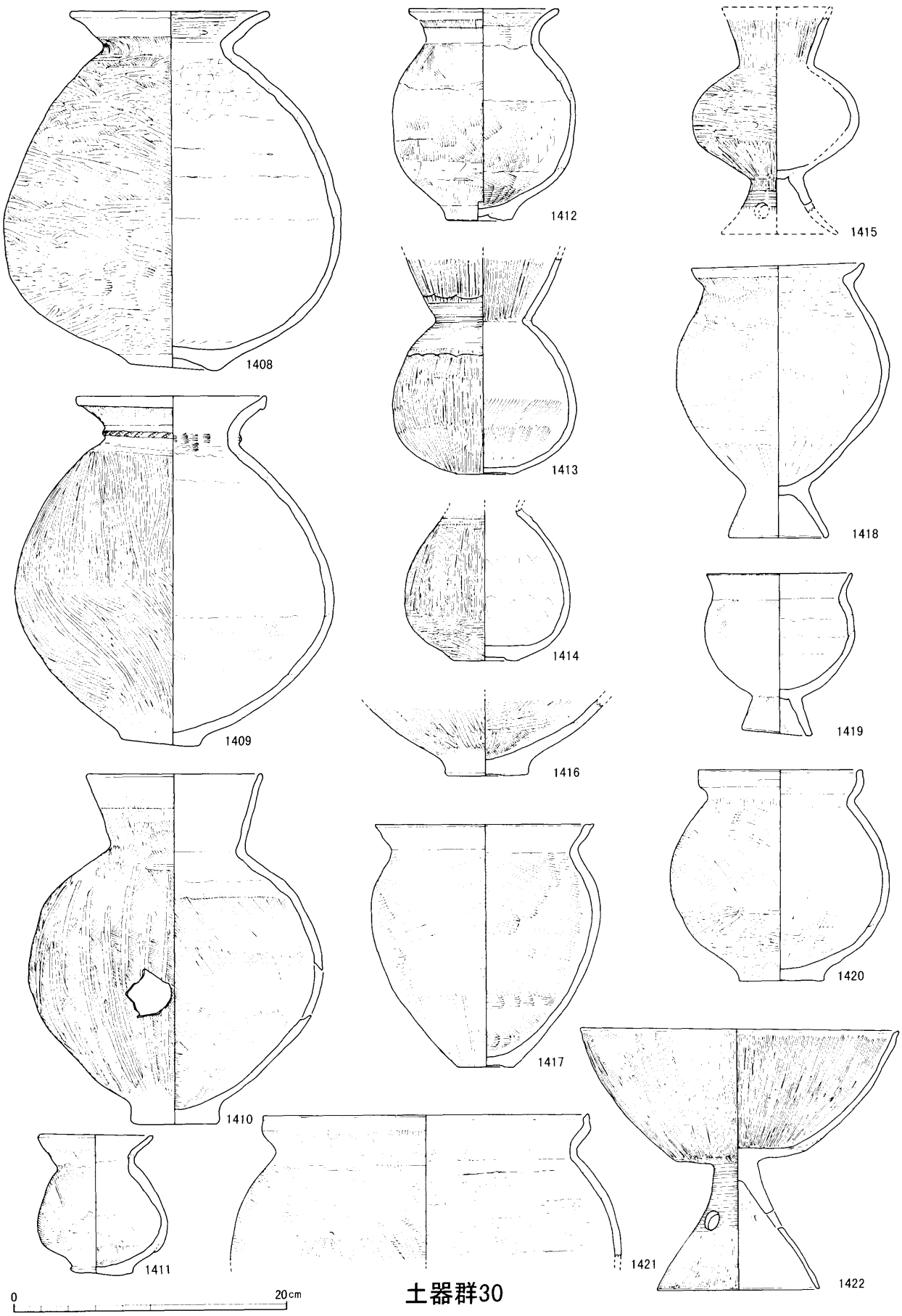
第265図　ＳＤ１出土遺物（土器群23・24・25・26）　（１：４）



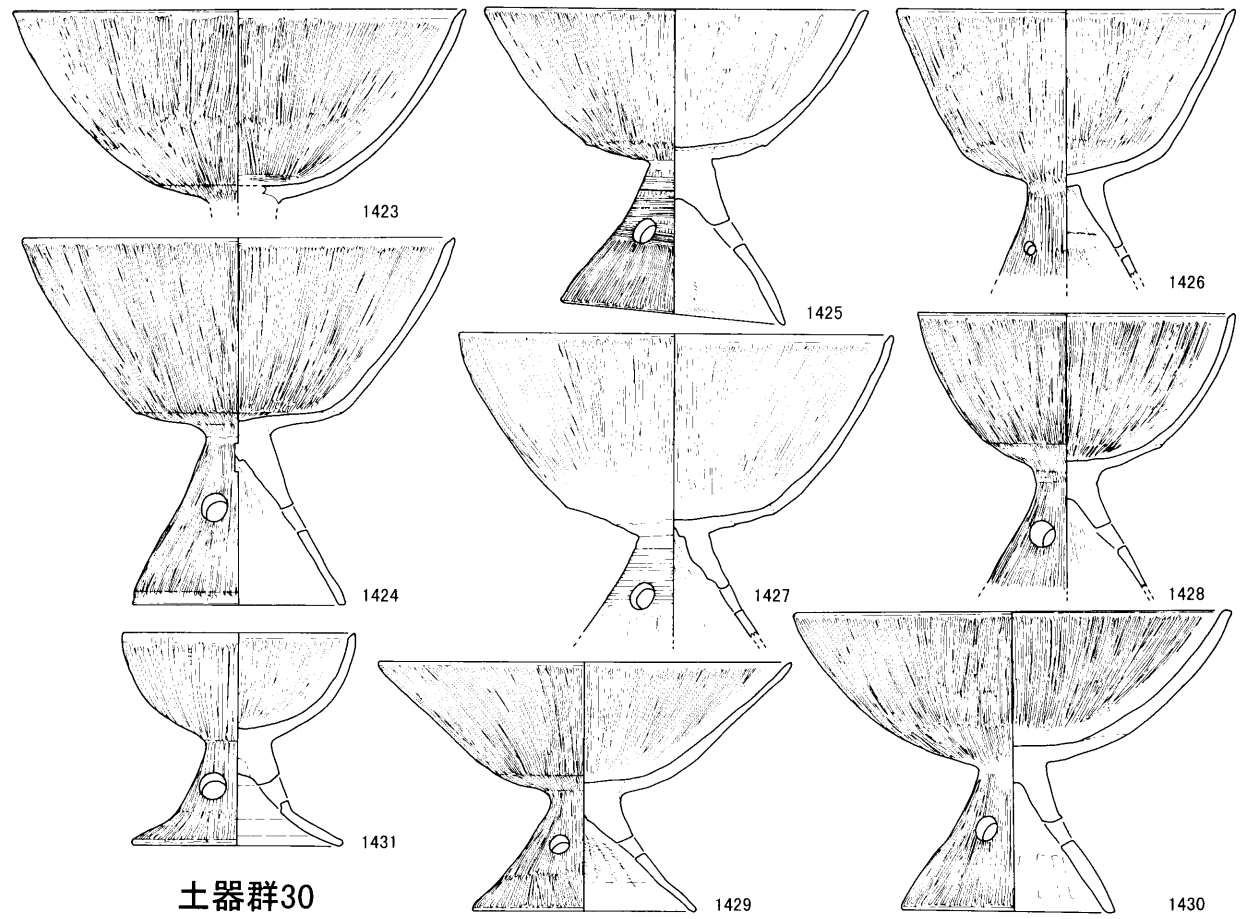
第266図　ＳＤ１出土遺物（土器群26）　（１：４）

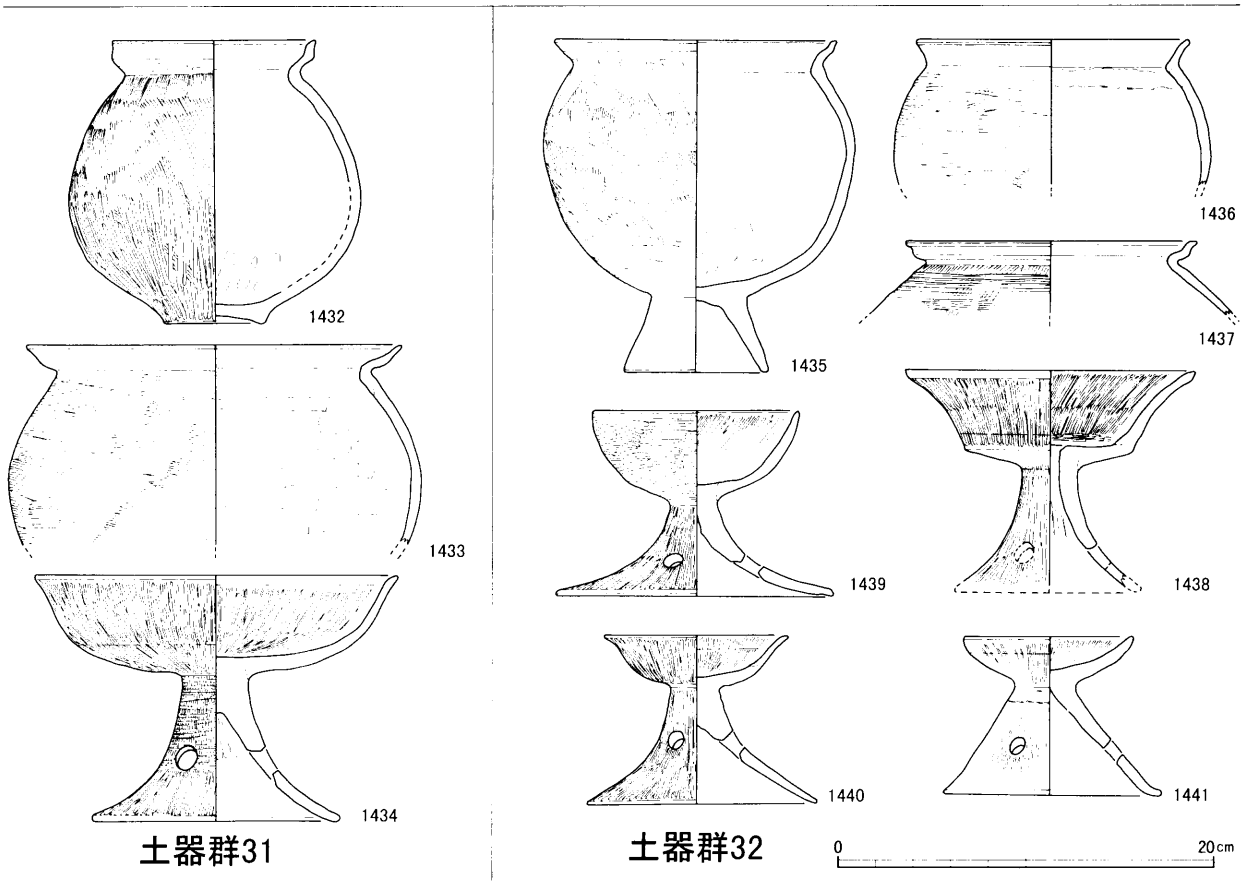


第267図　ＳＤ１出土遺物（土器群26・27・28・29）　（１：４）

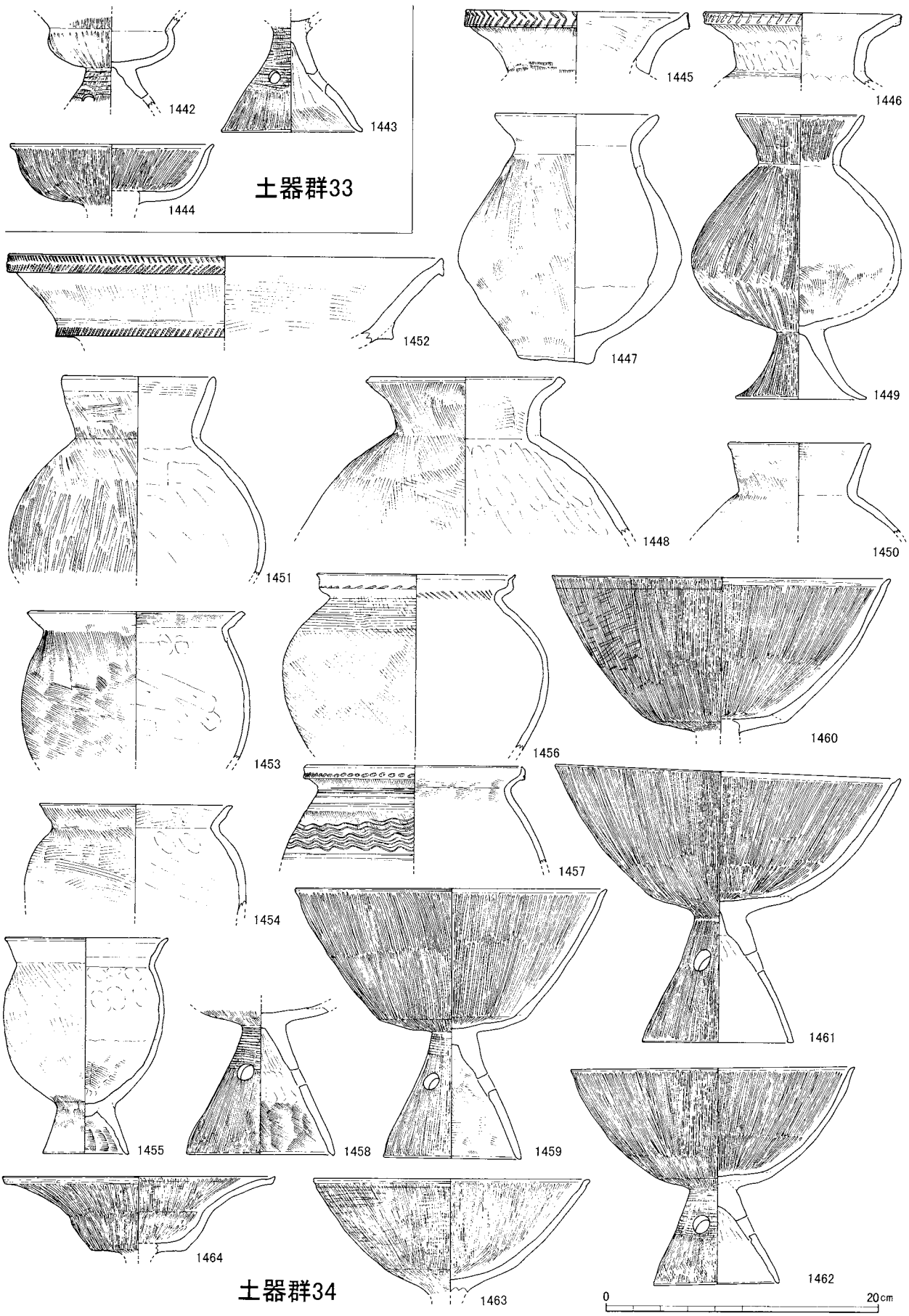


第268図　ＳＤ１出土遺物（土器群30）　（１：４）

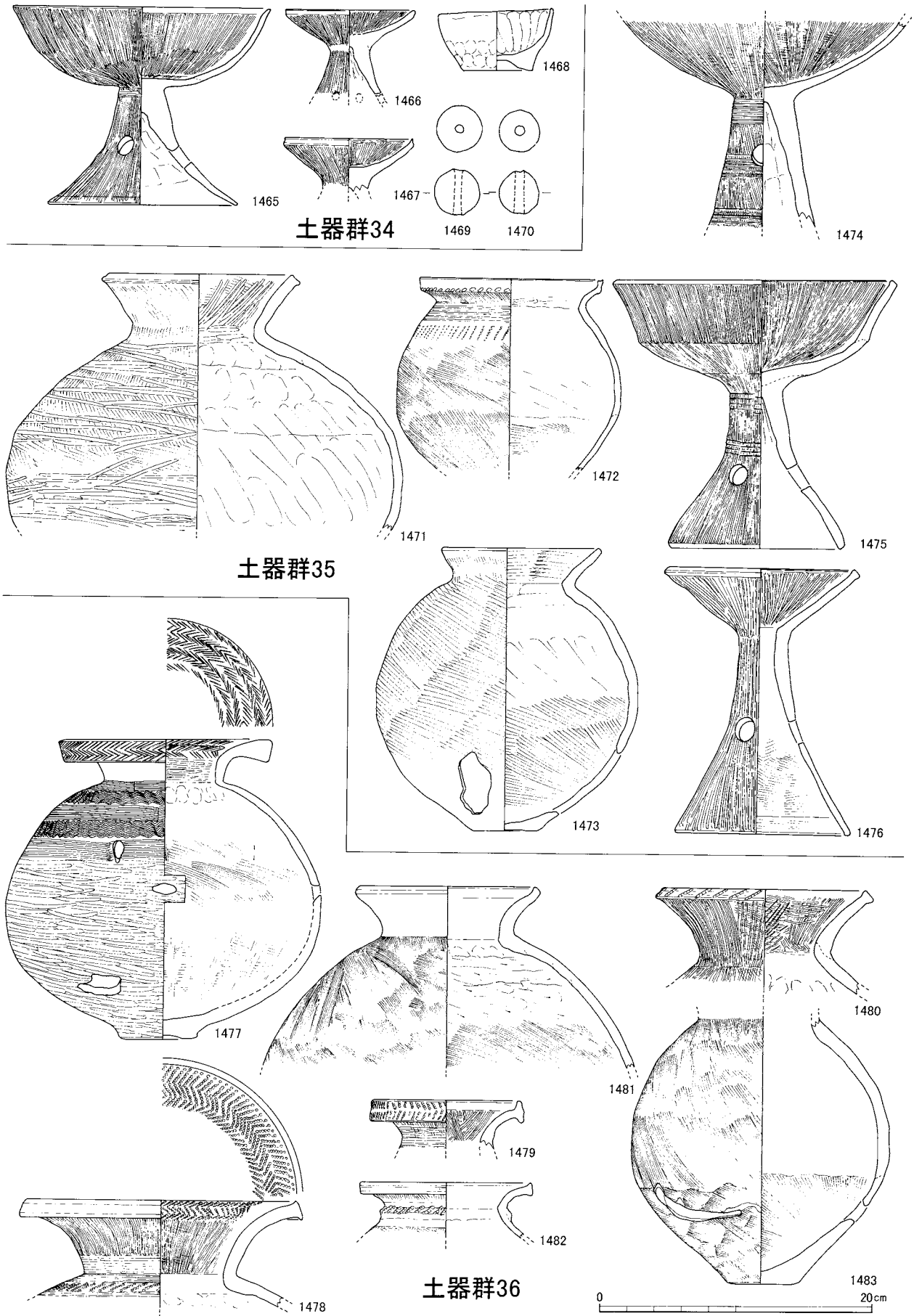




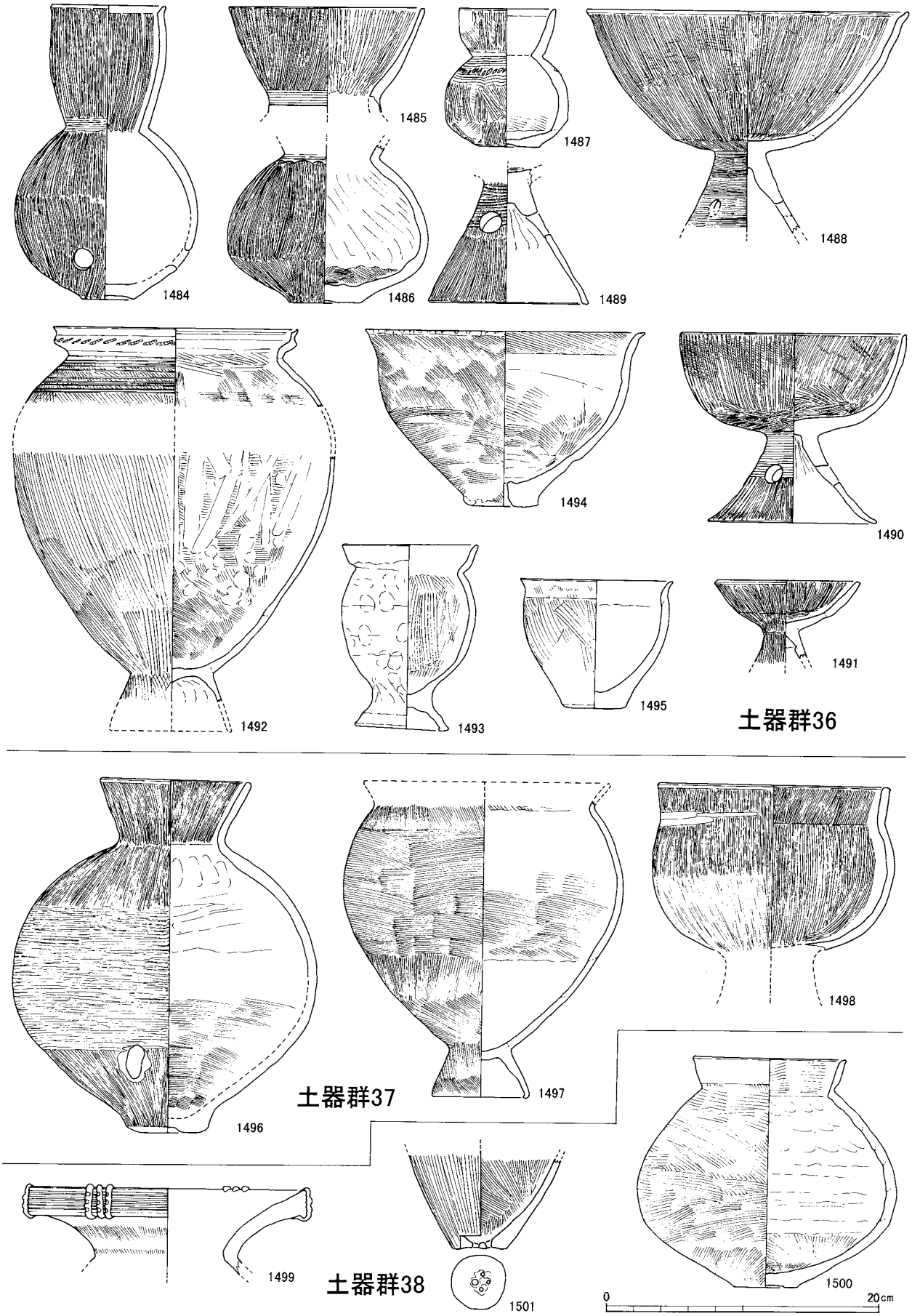
第269図　ＳＤ１出土遺物（土器群30・31・32）　（１：４）



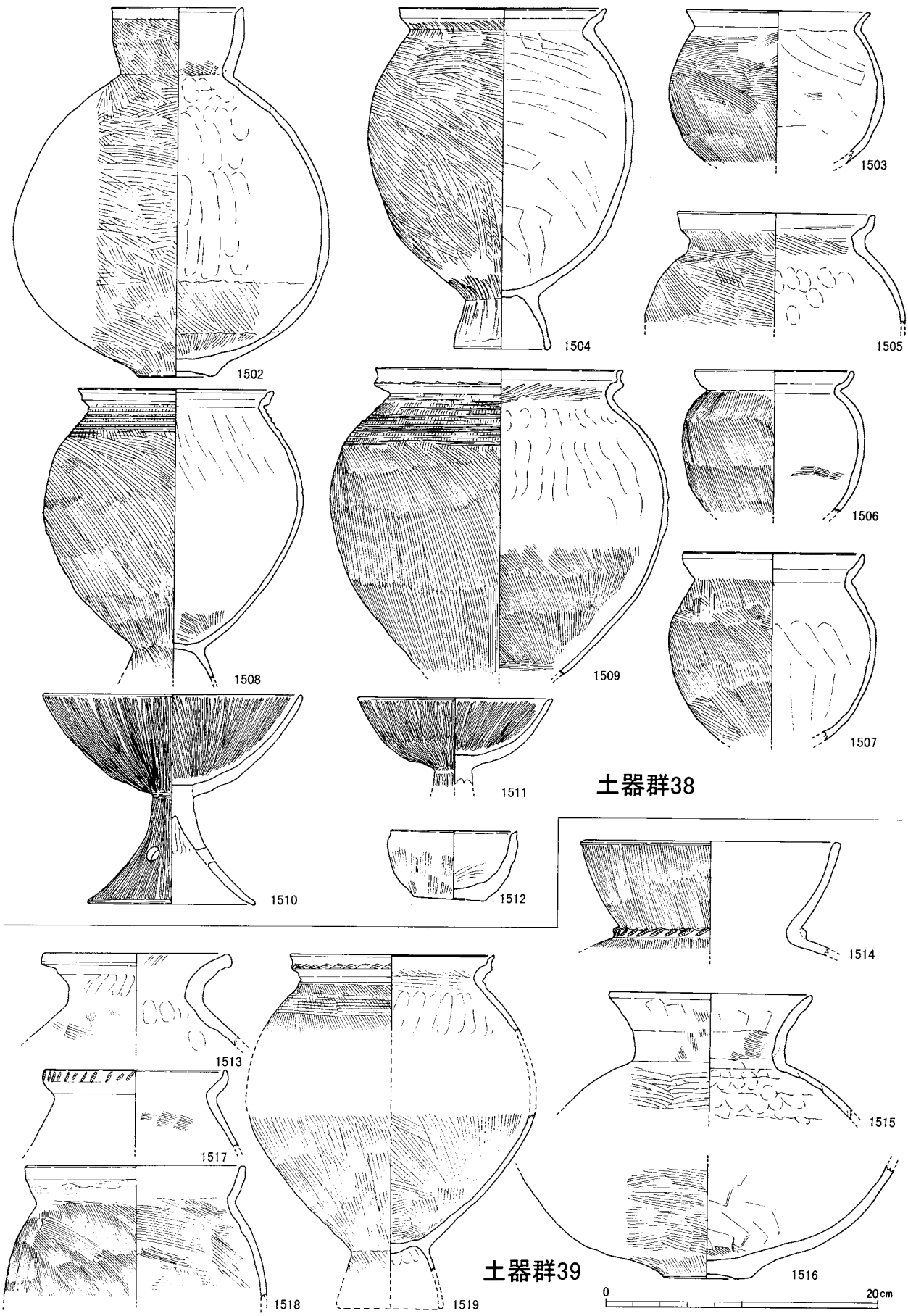
第270図　ＳＤ１出土遺物（土器群33・34）　（１：４）



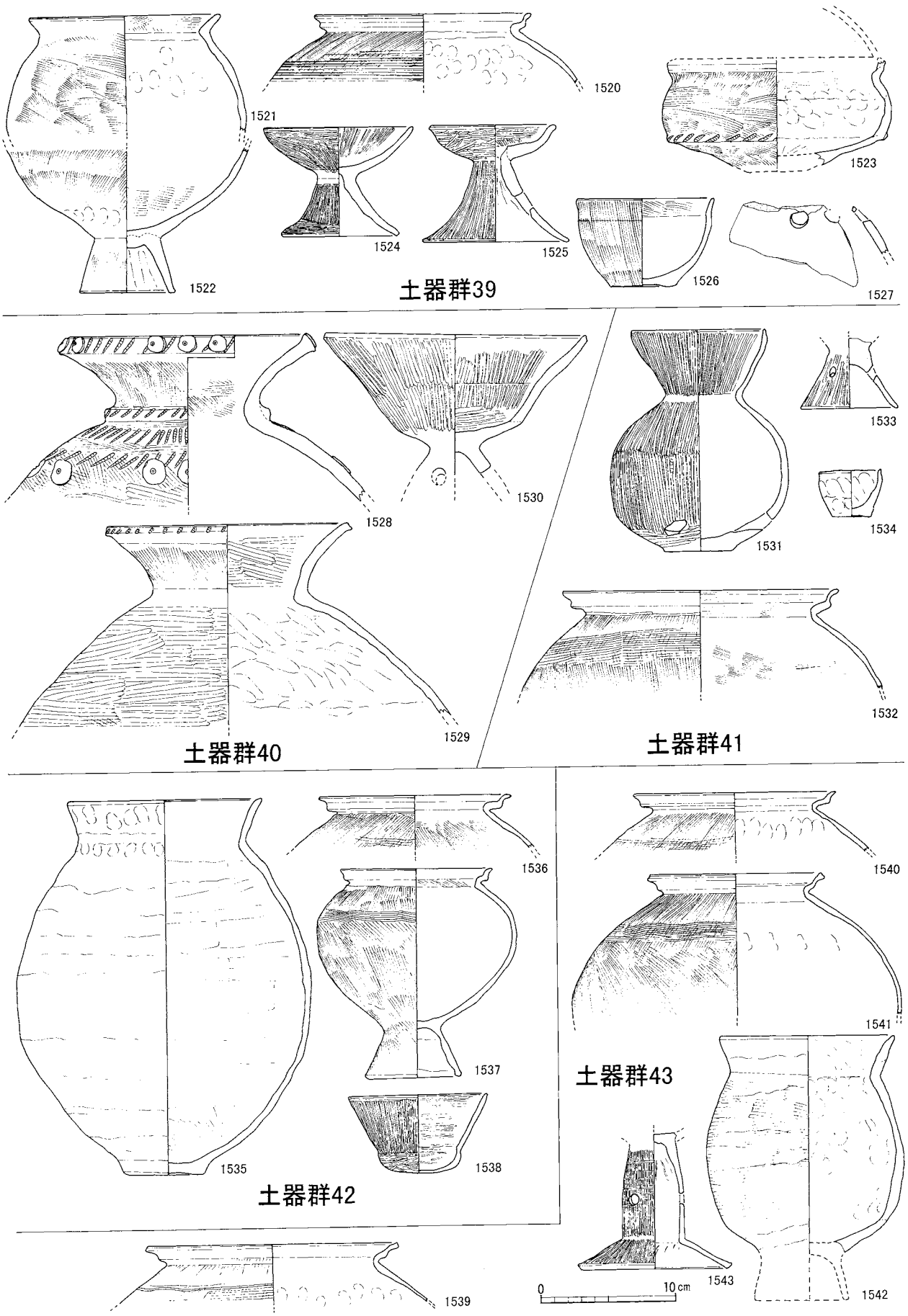
第271図　ＳＤ１出土遺物（土器群34・35・36）　（１：４）



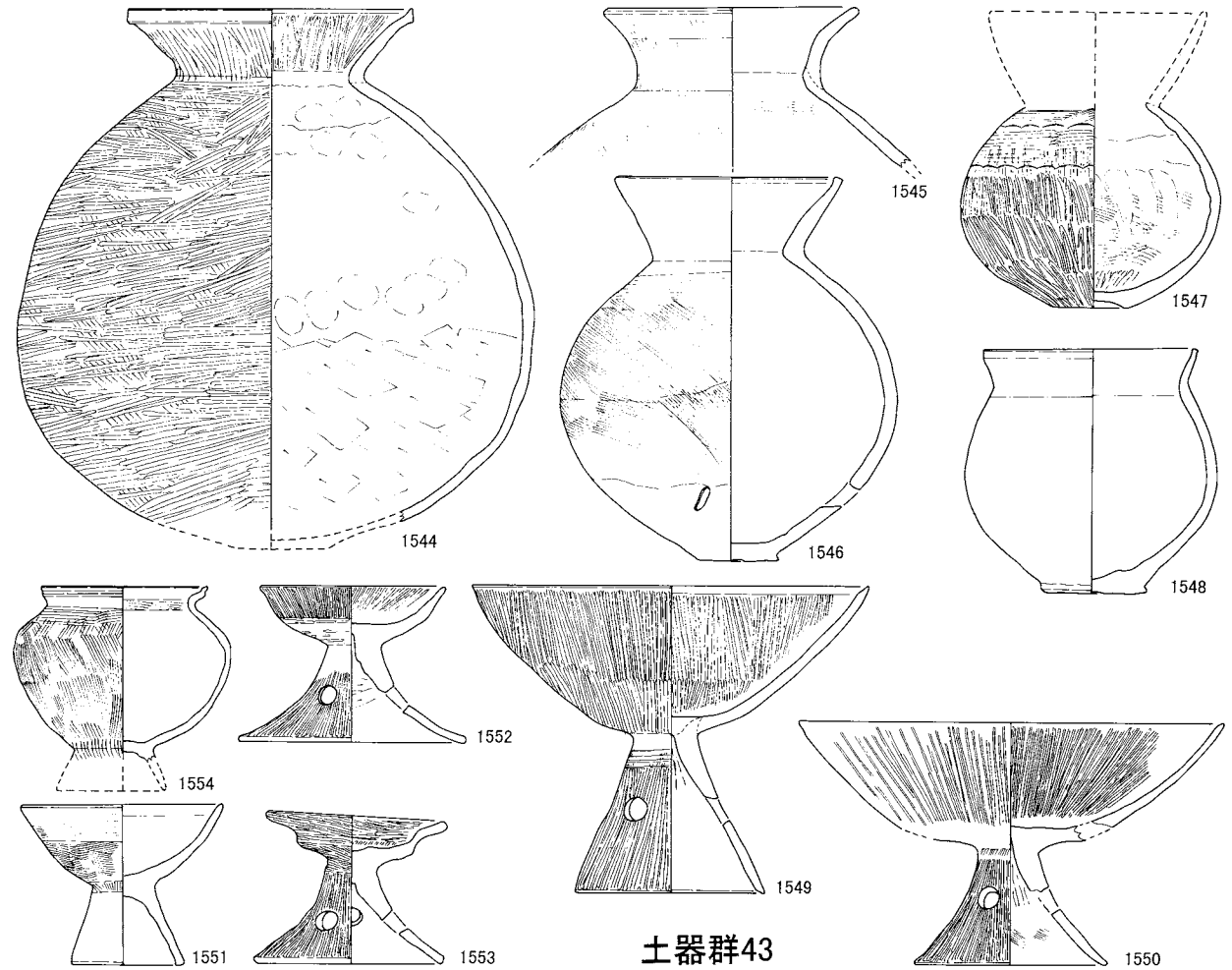
第272図　ＳＤ１出土遺物（土器群36・37・38）　　（１：４）

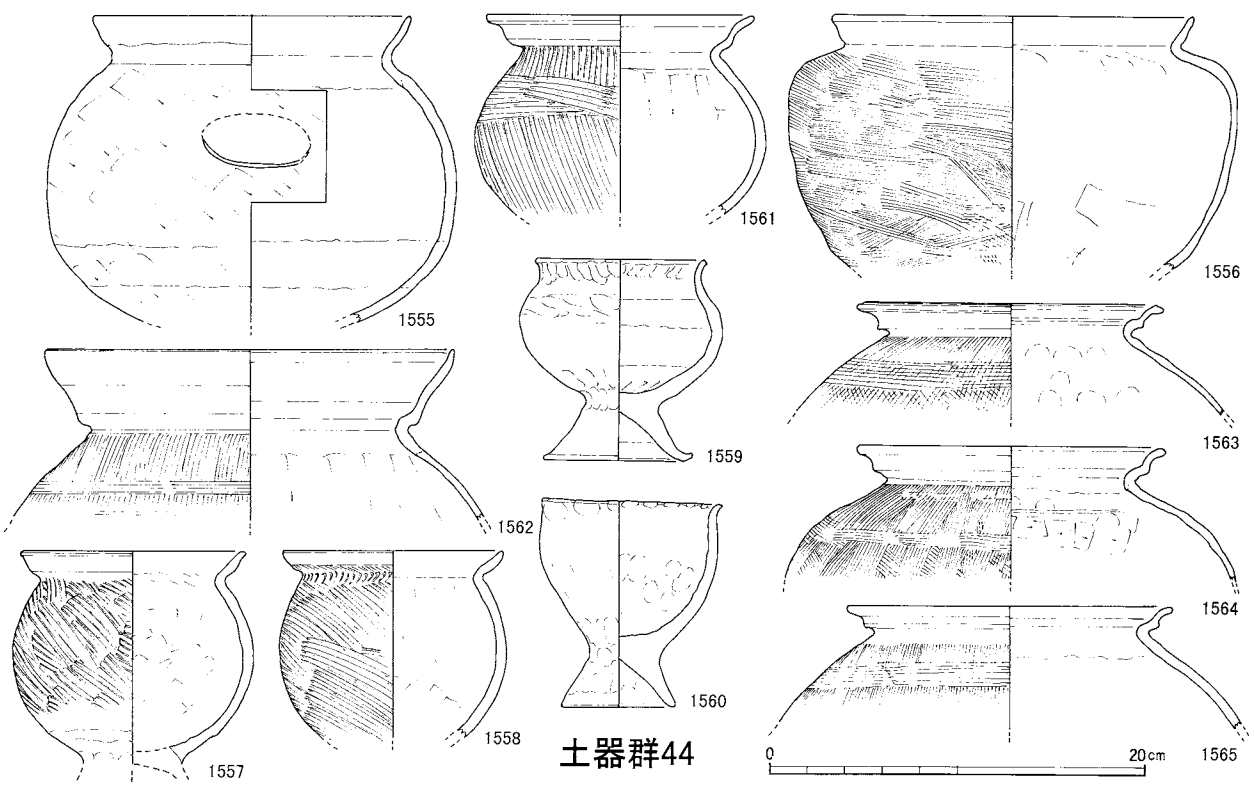


第273図　ＳＤ１出土遺物（土器群38・39）　（１：４）

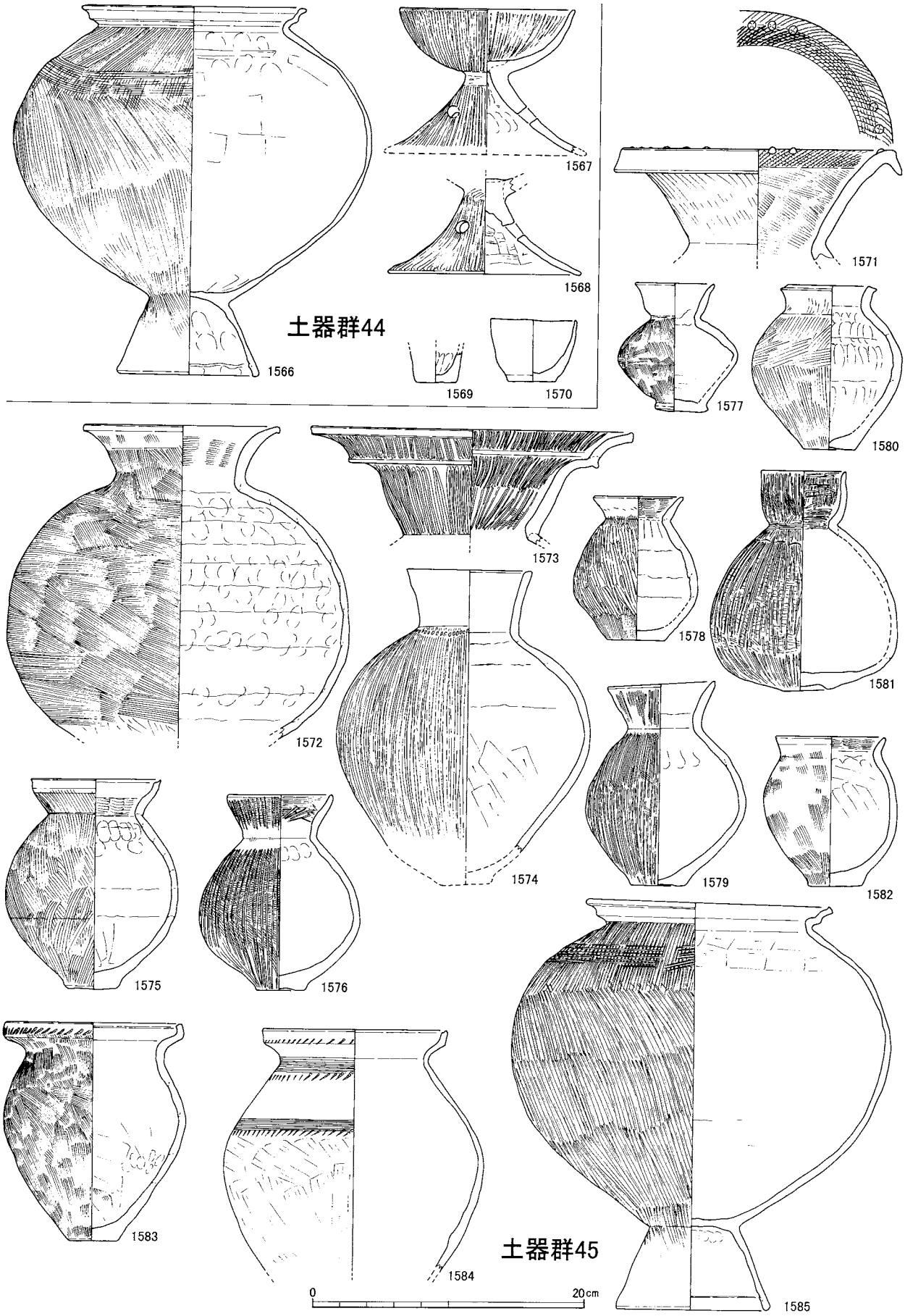


第274図　ＳＤ１出土遺物（土器群39・40・41・42・43）　（１：４）



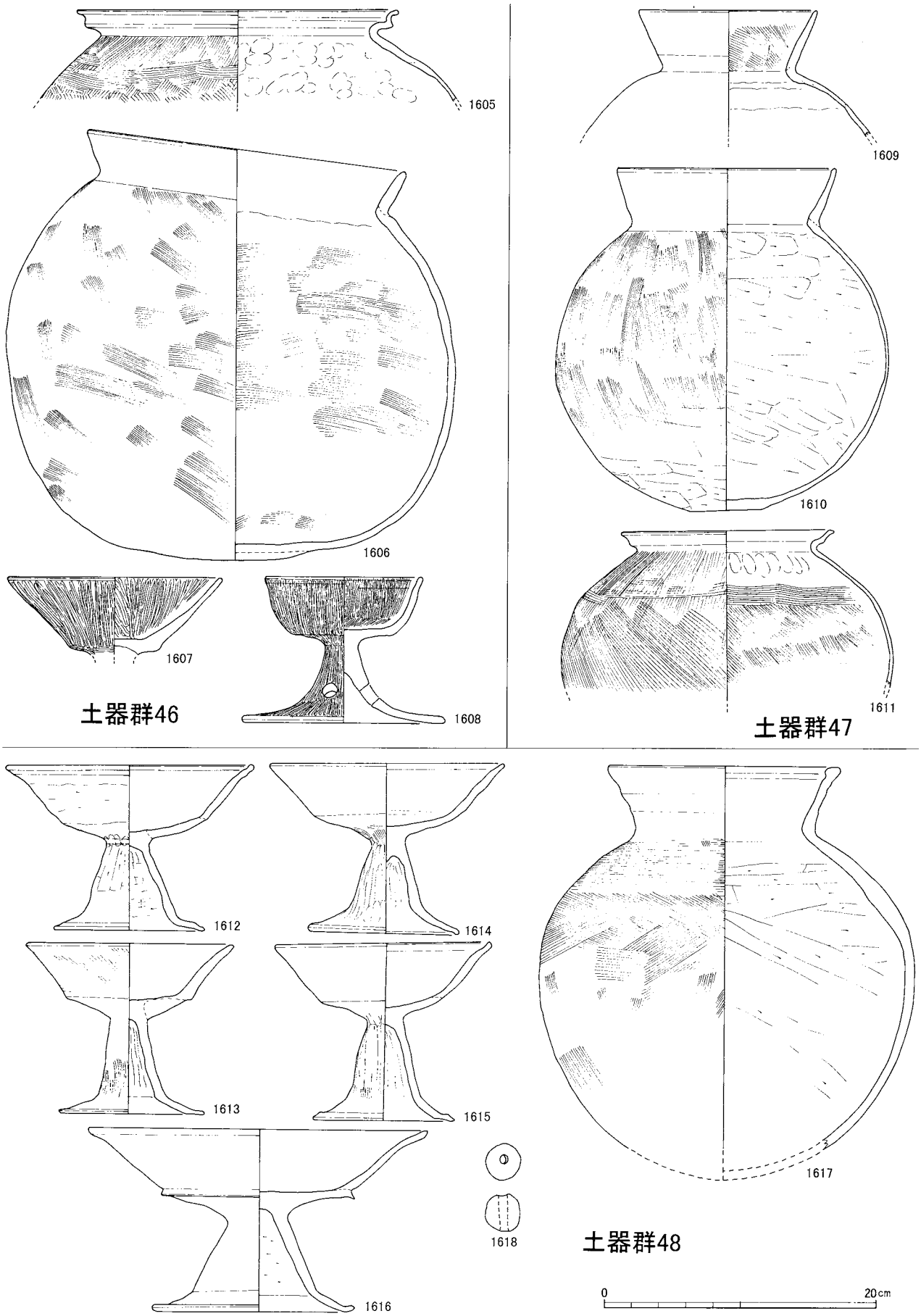


第275図　ＳＤ１出土遺物（土器群43・44）　（１：４）

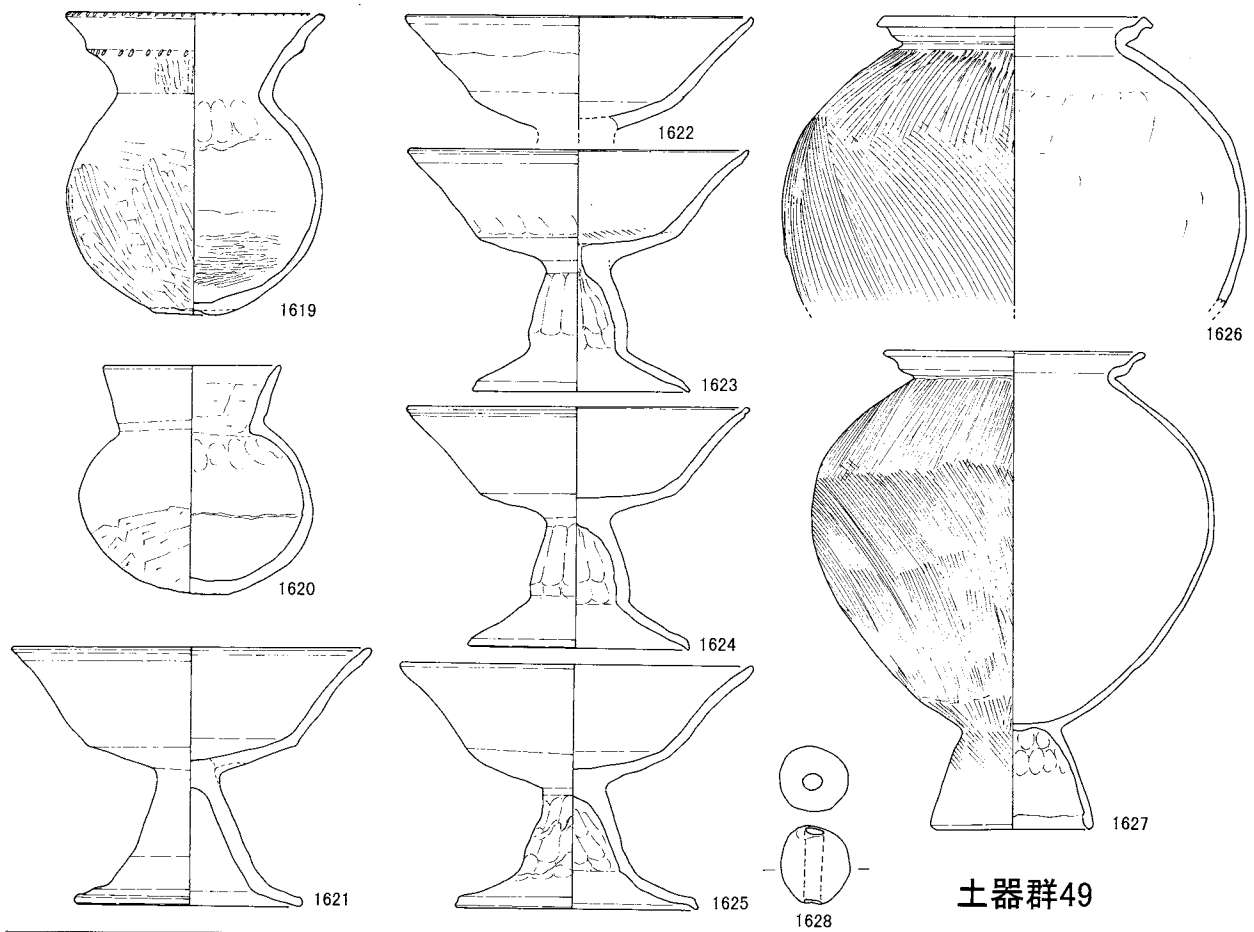


第276図　ＳＤ１出土遺物（土器群44・45）　（１：４）

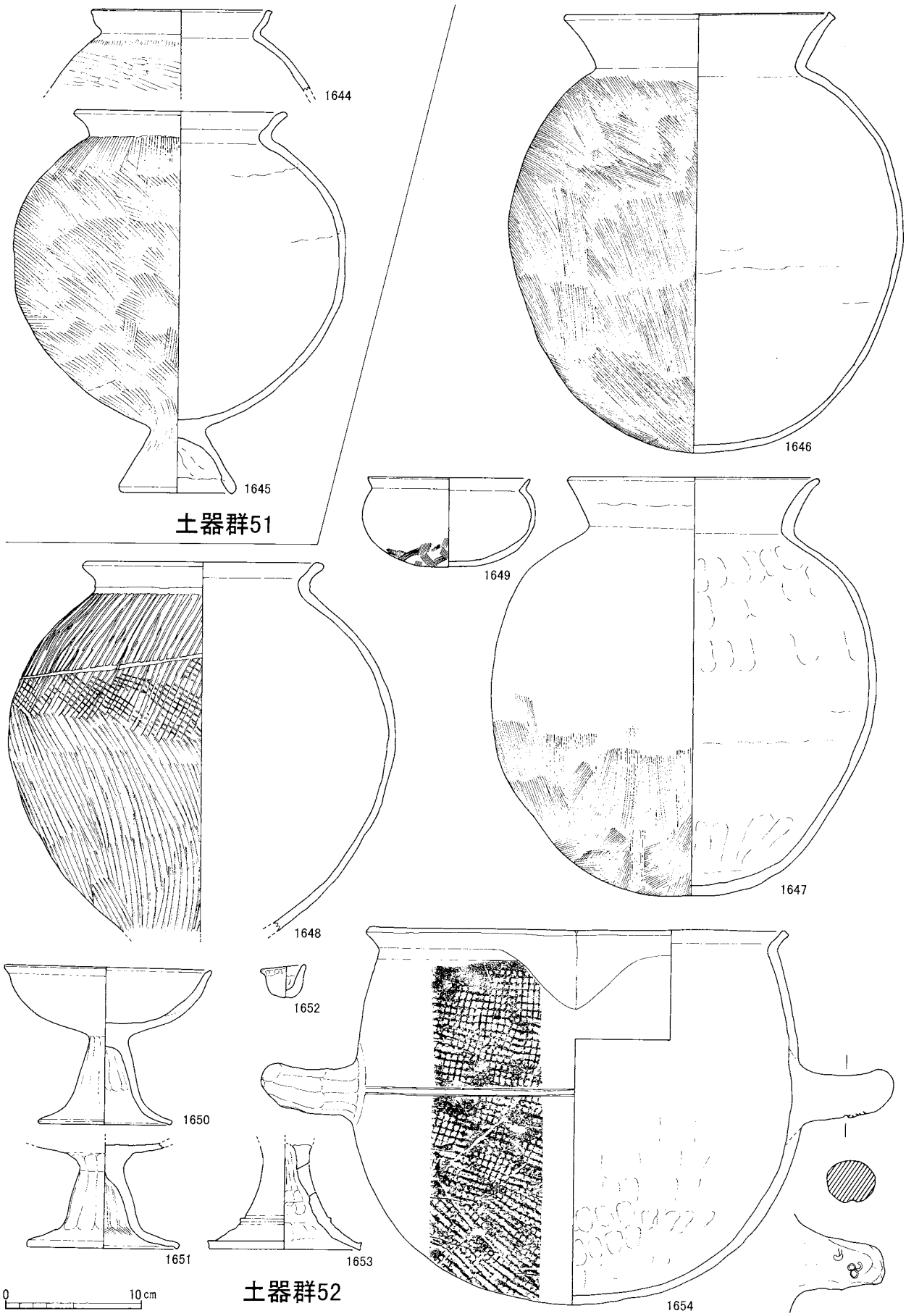
第277図　ＳＤ１出土遺物（土器群45・46）　（１：４）



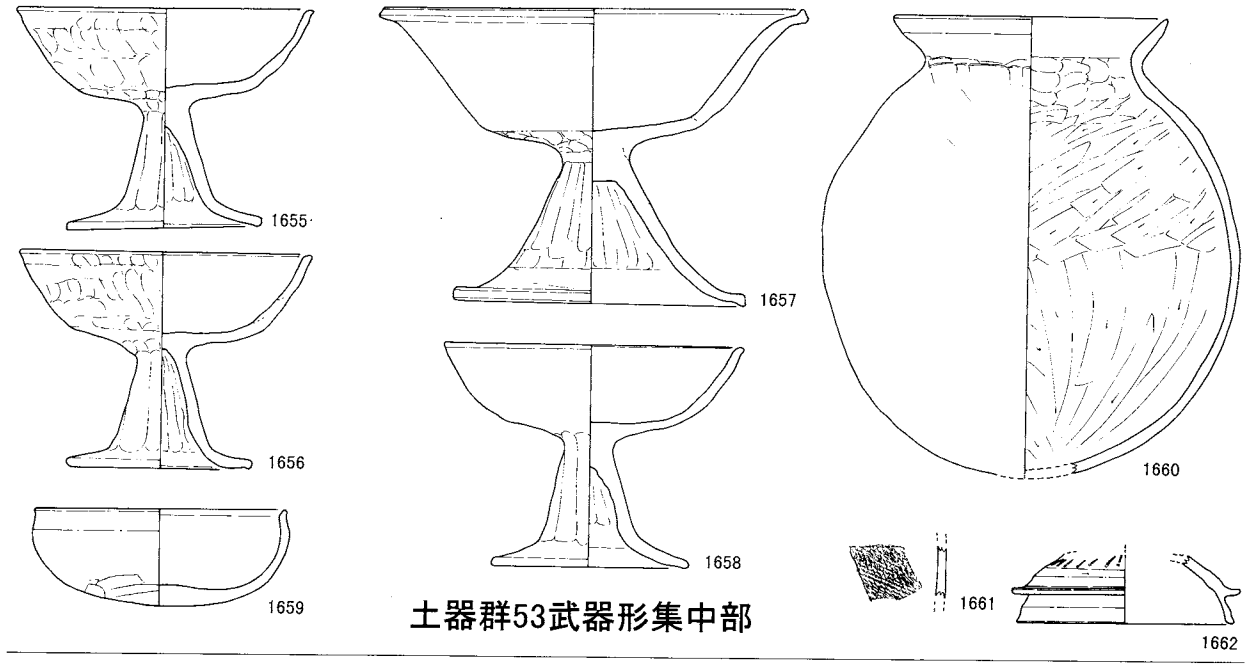
第278図　ＳＤ１出土遺物（土器群46・47・48）　（１：４）

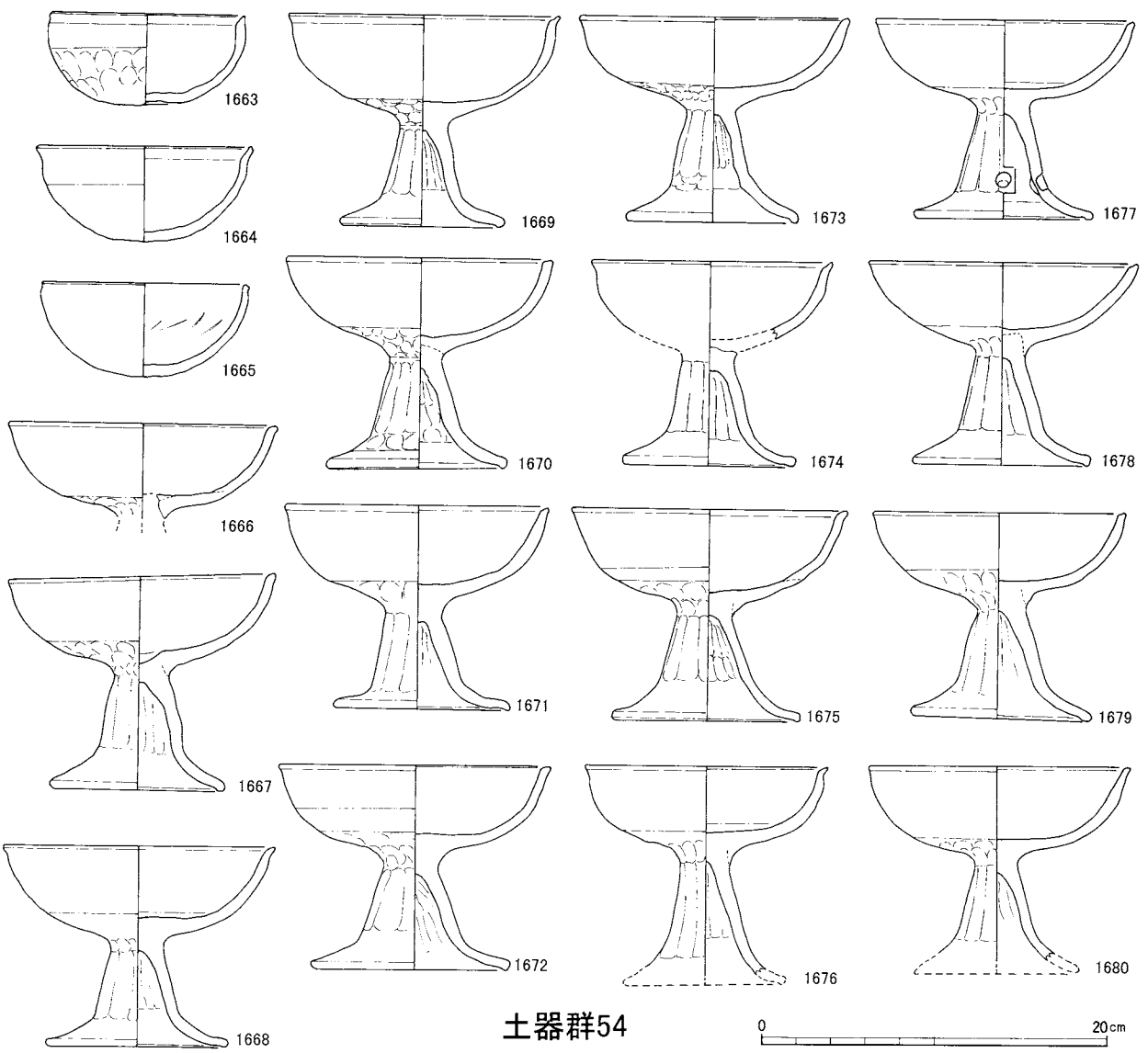


第279図　ＳＤ１出土遺物（土器群49・50・51）　（１：４）

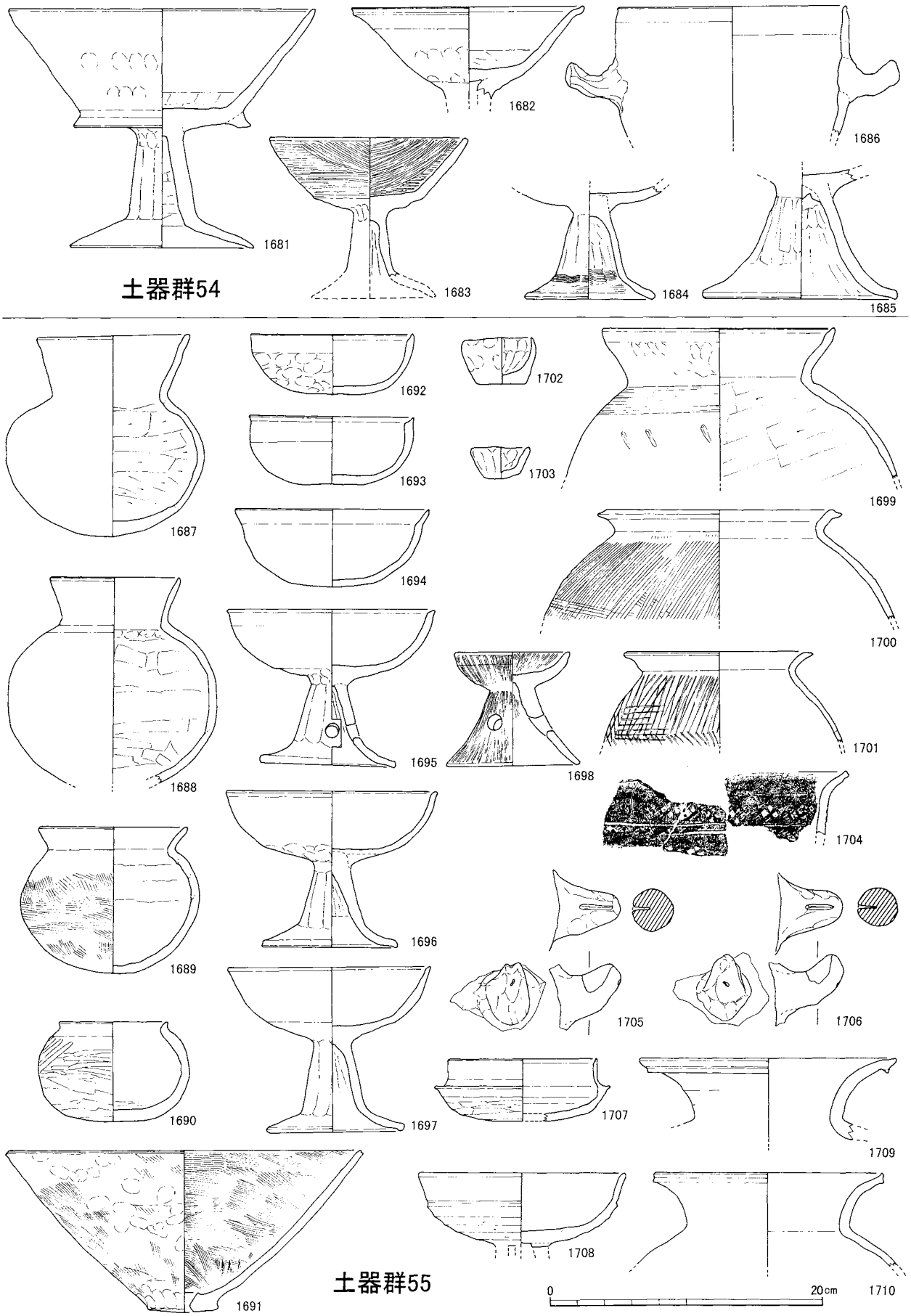


第280図　ＳＤ１出土遺物（土器群51・52）　（１：４）

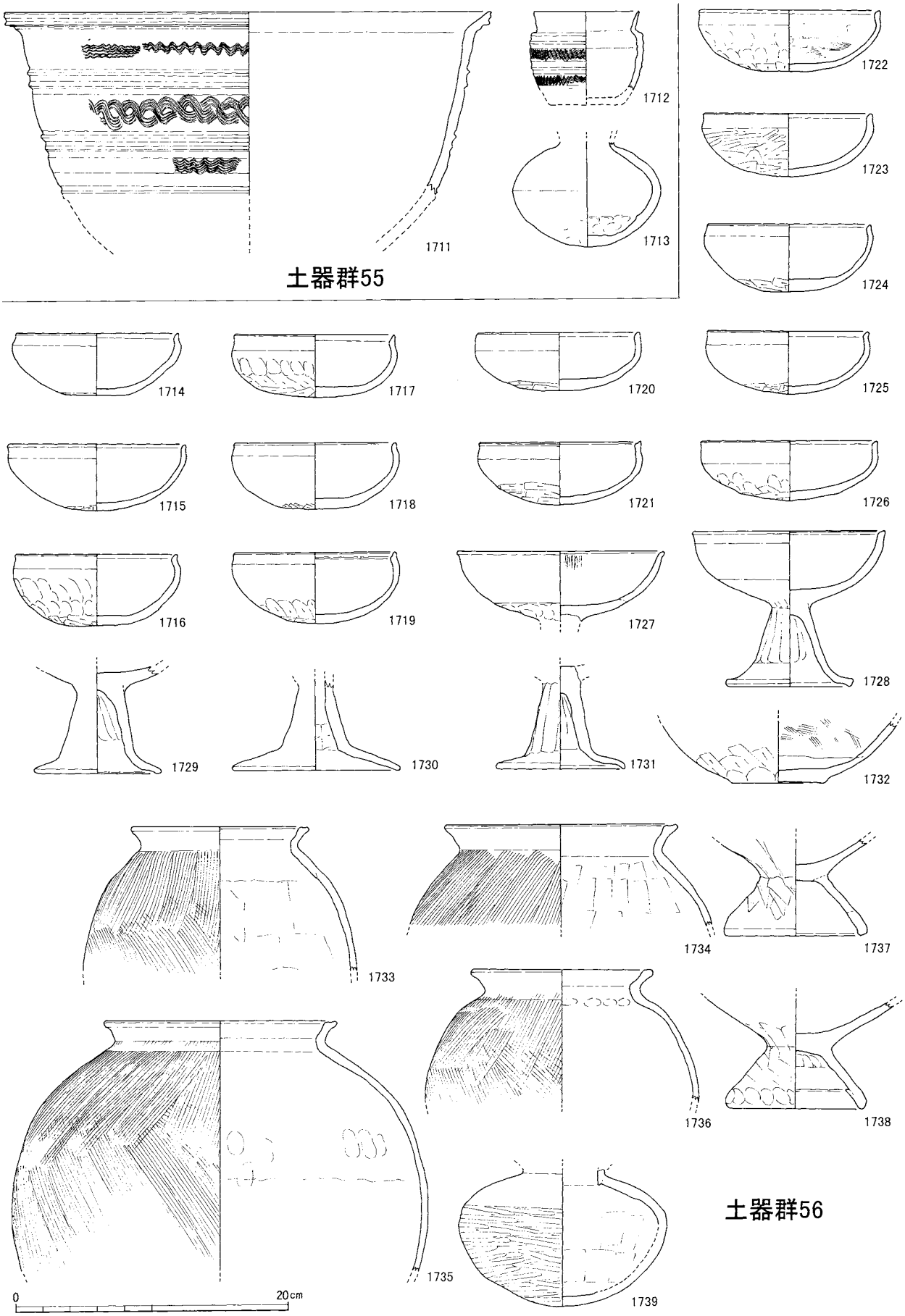




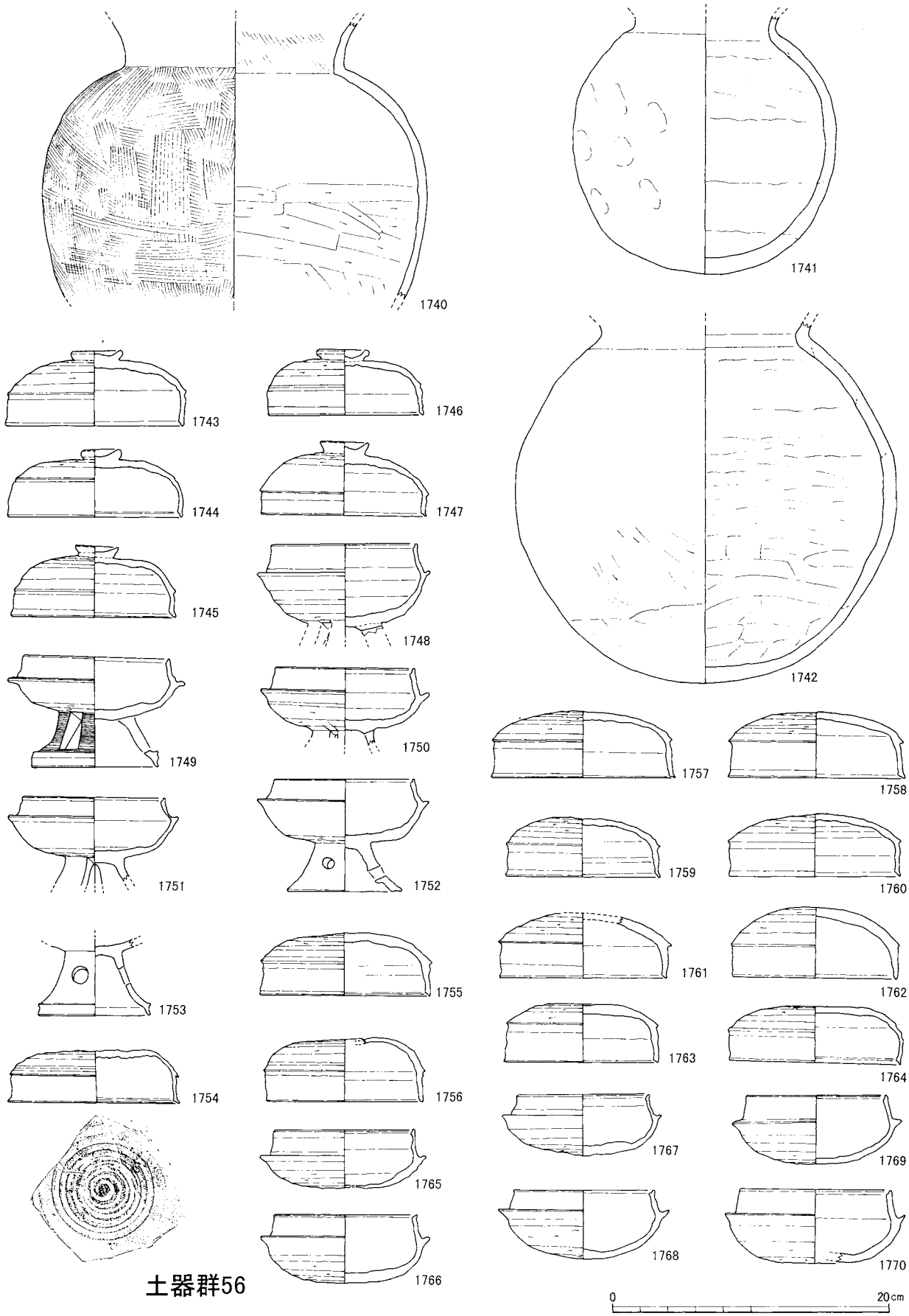
第281図　ＳＤ１出土遺物（土器群53武器形集中部・土器群54）　（１：４）



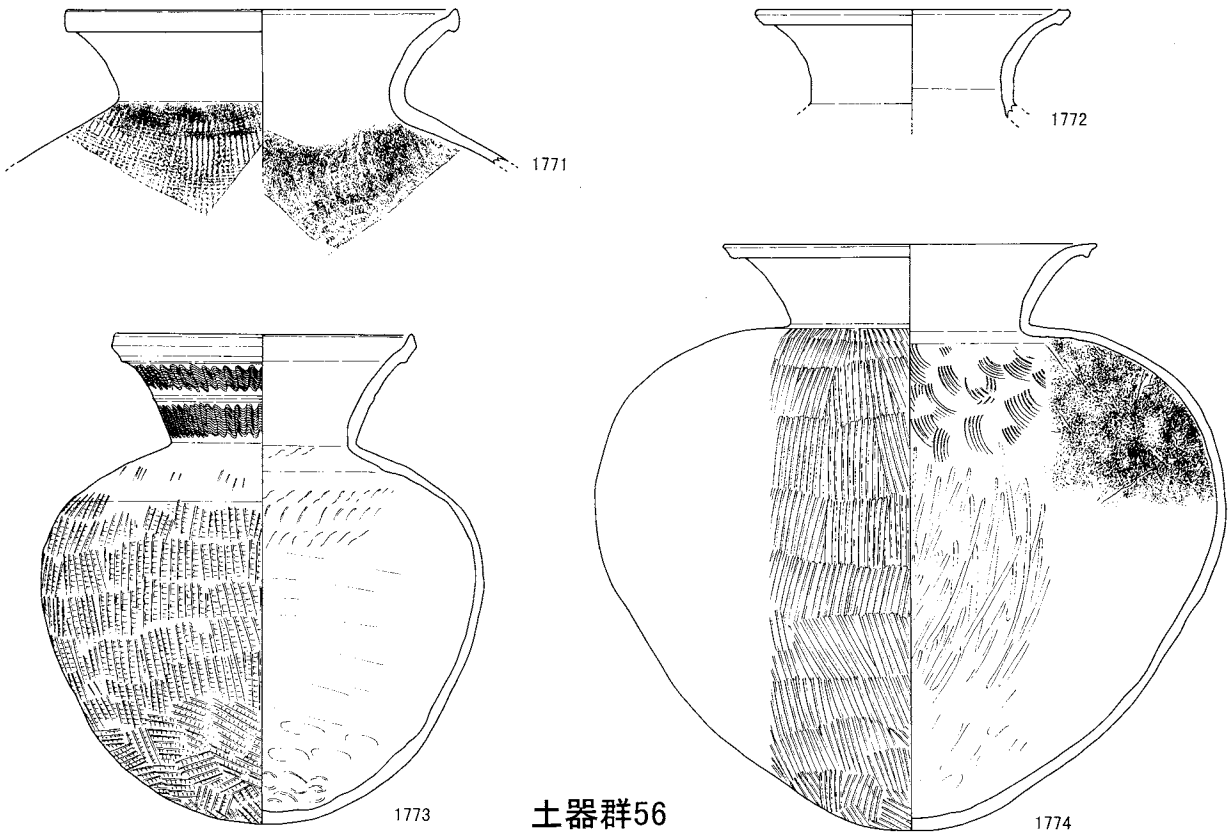
第282図　ＳＤ１出土遺物（土器群54・55）　（１：４）

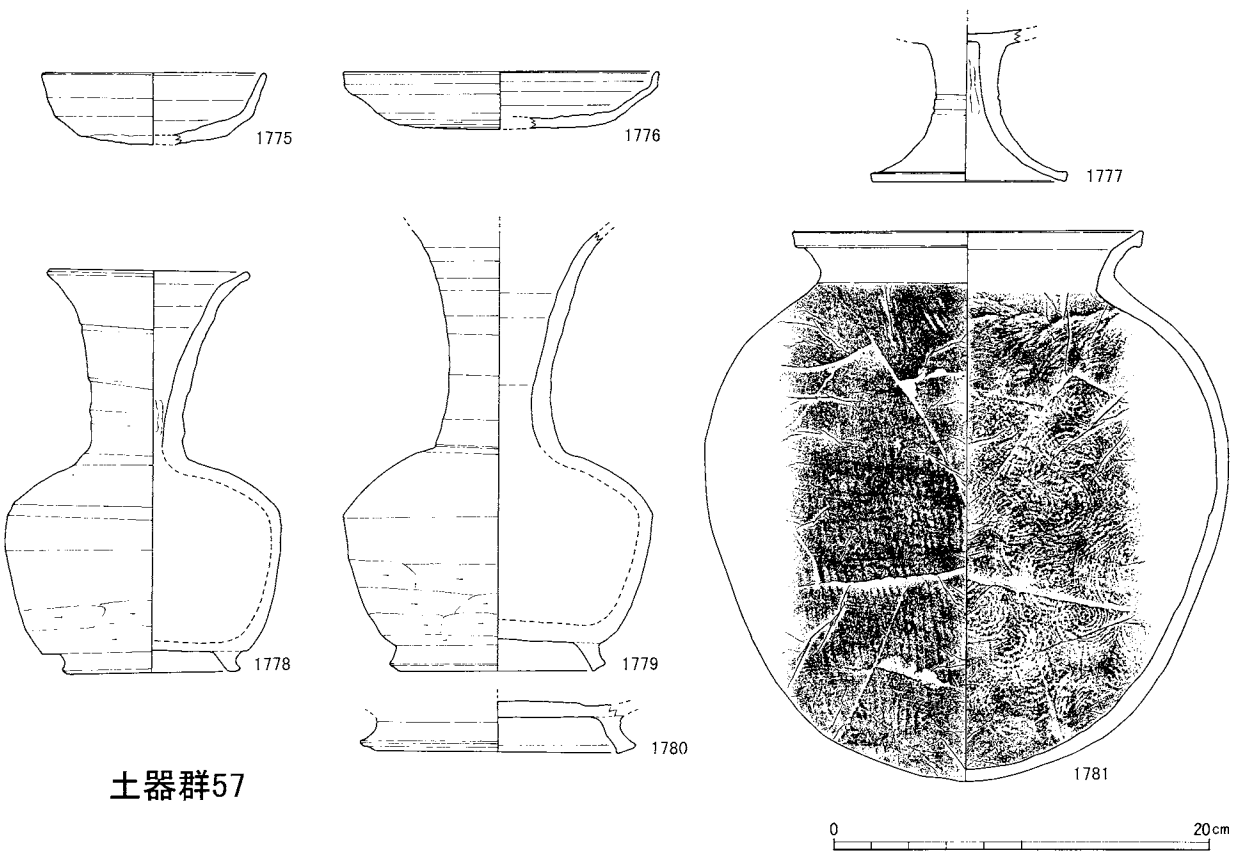


第283図　ＳＤ１出土遺物（土器群55・56）　（１：４）



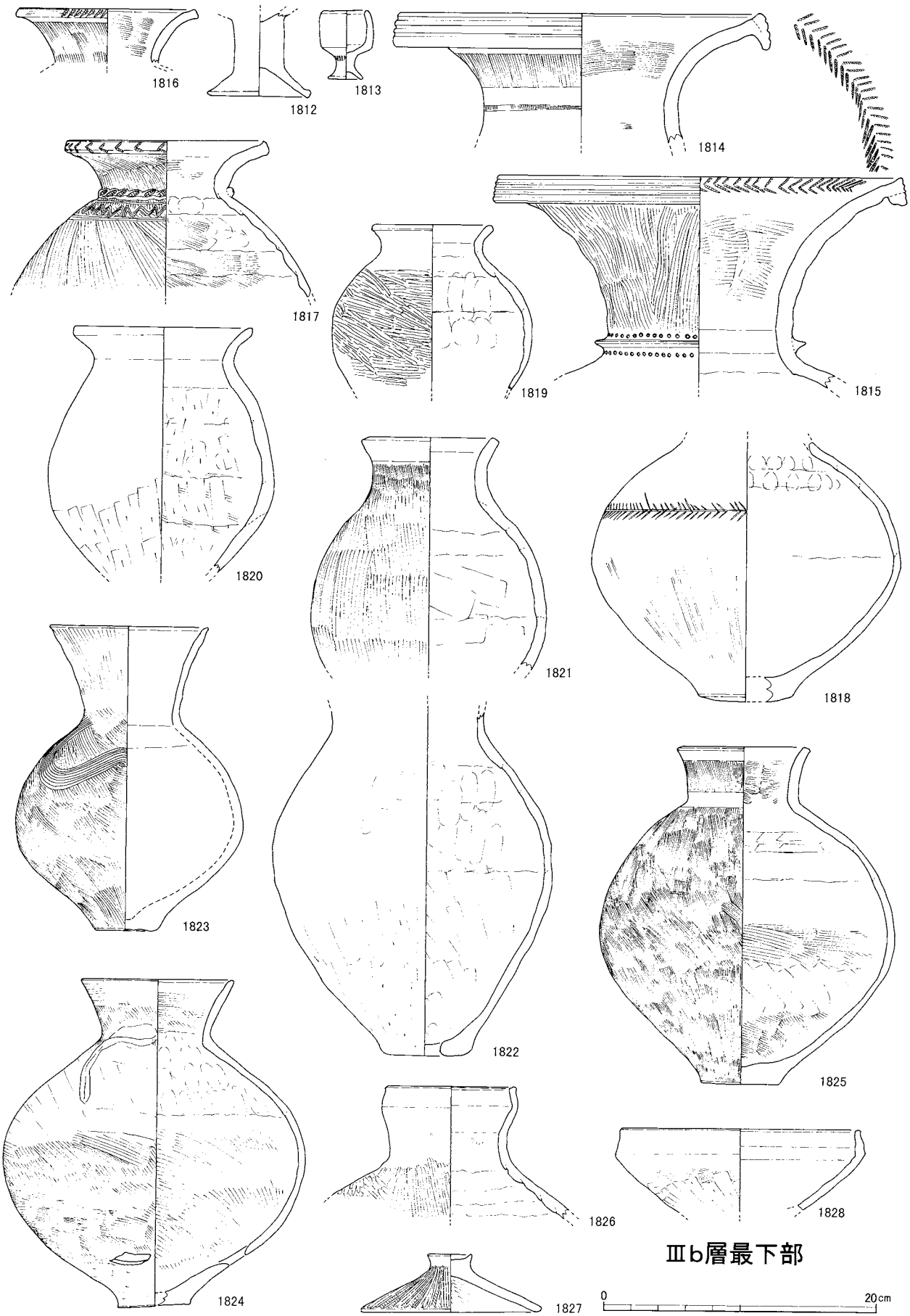
第284図　ＳＤ１出土遺物（土器群56）　（１：４）



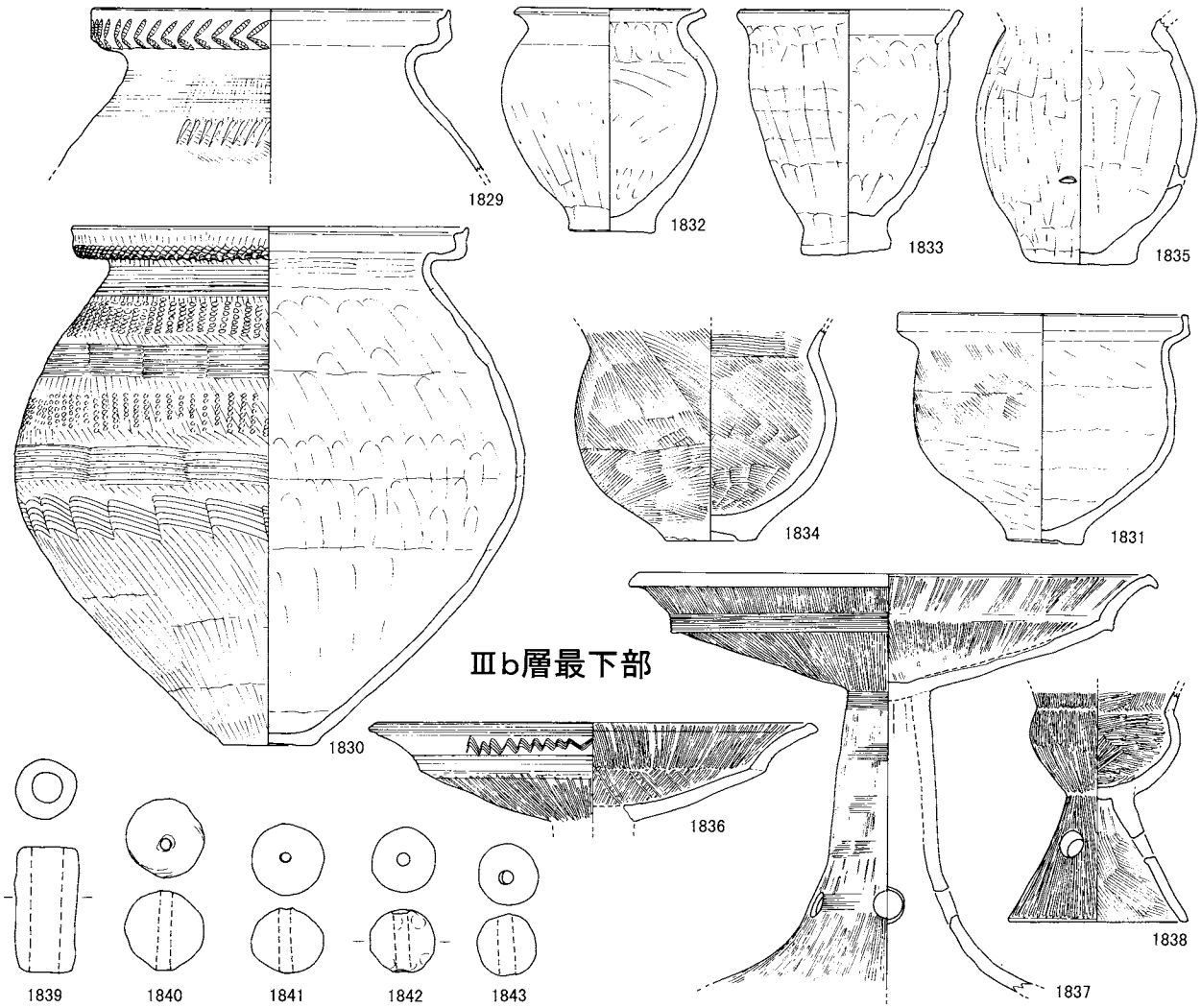


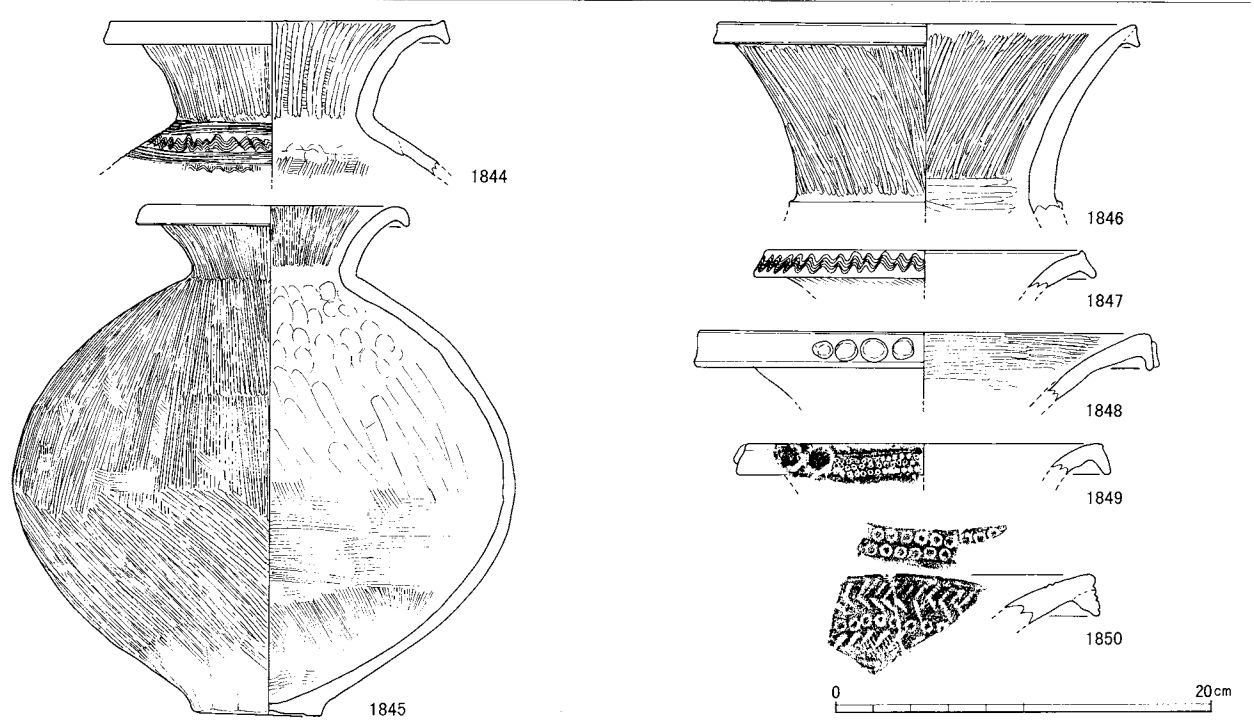
第285図　ＳＤ１出土遺物（土器群56・57）　　（１：４）

第286図　ＳＤ１出土遺物（１：３）

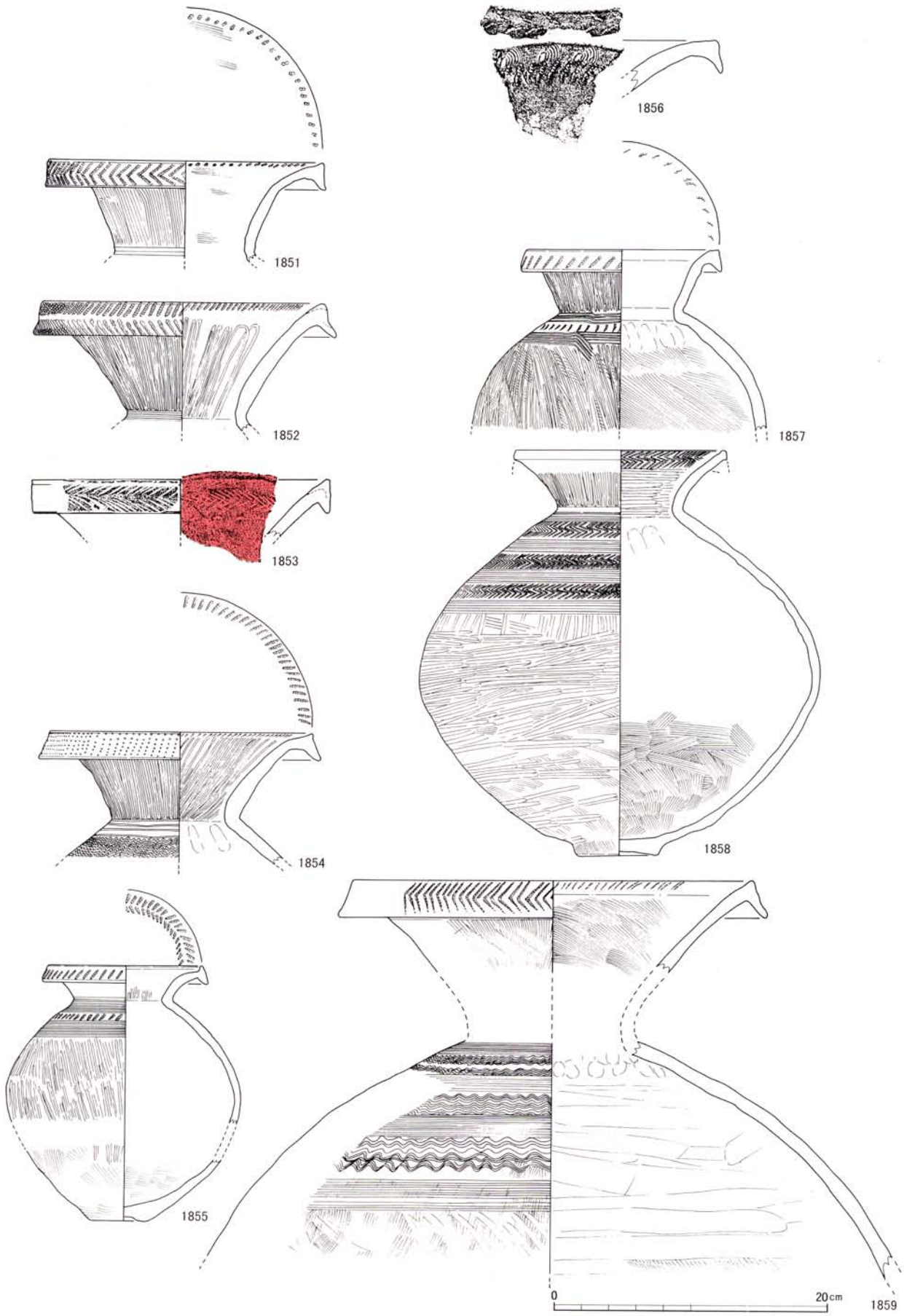


第287図　ＳＤ１出土遺物（Ⅲｂ層最下部）　（１：４）

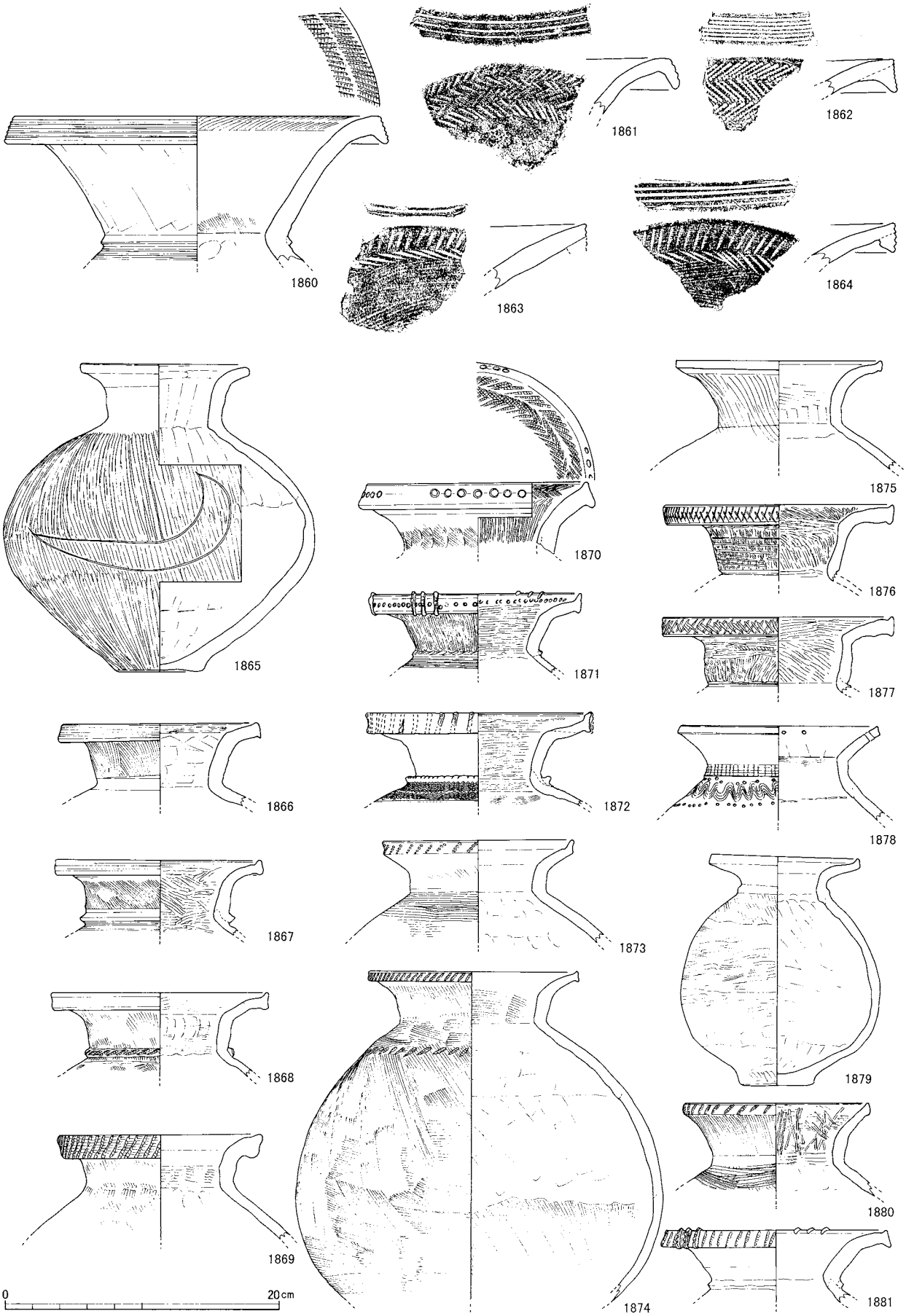




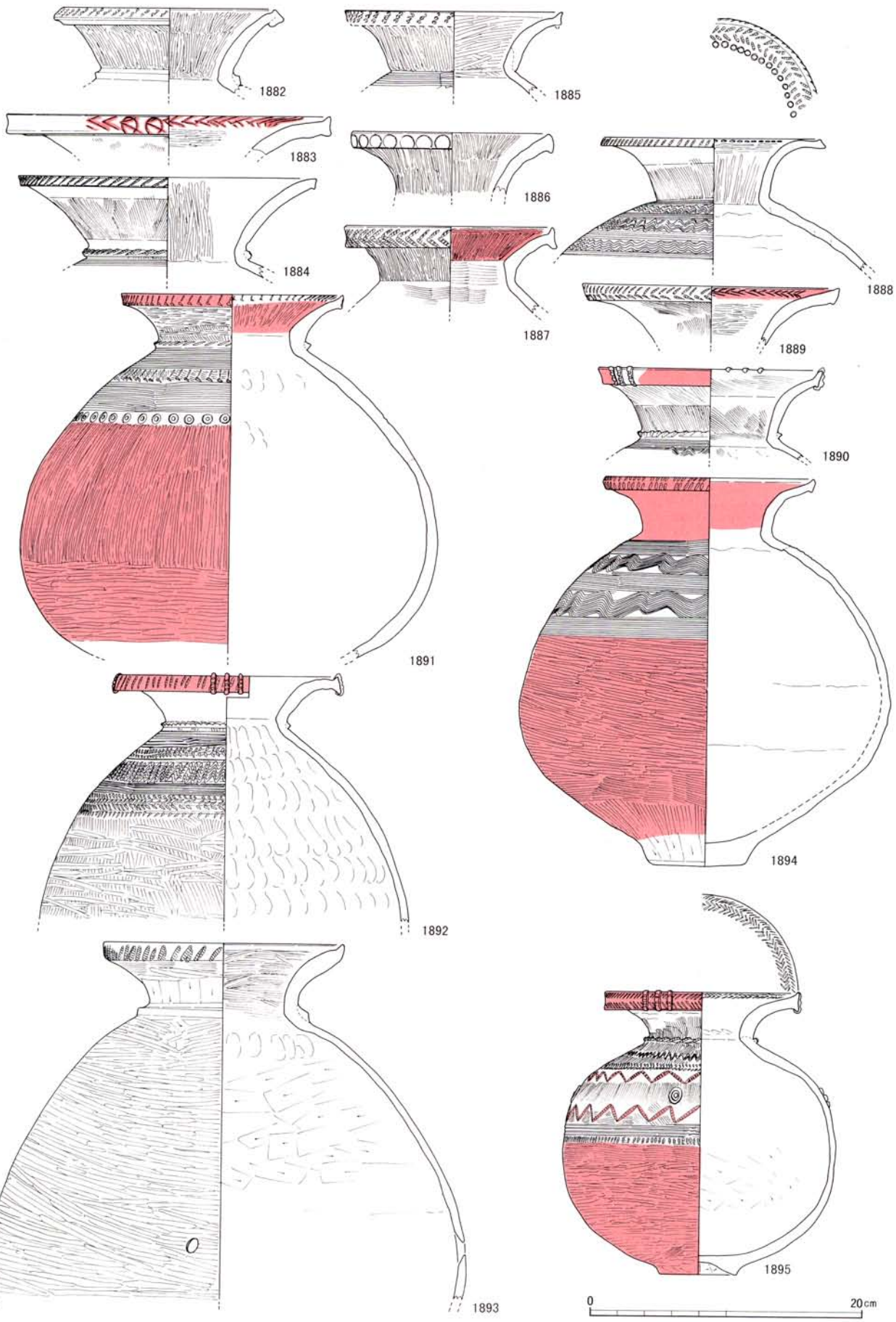
第288図　ＳＤ１出土遺物（Ⅲｂ層最下部を含む）　（１：４）



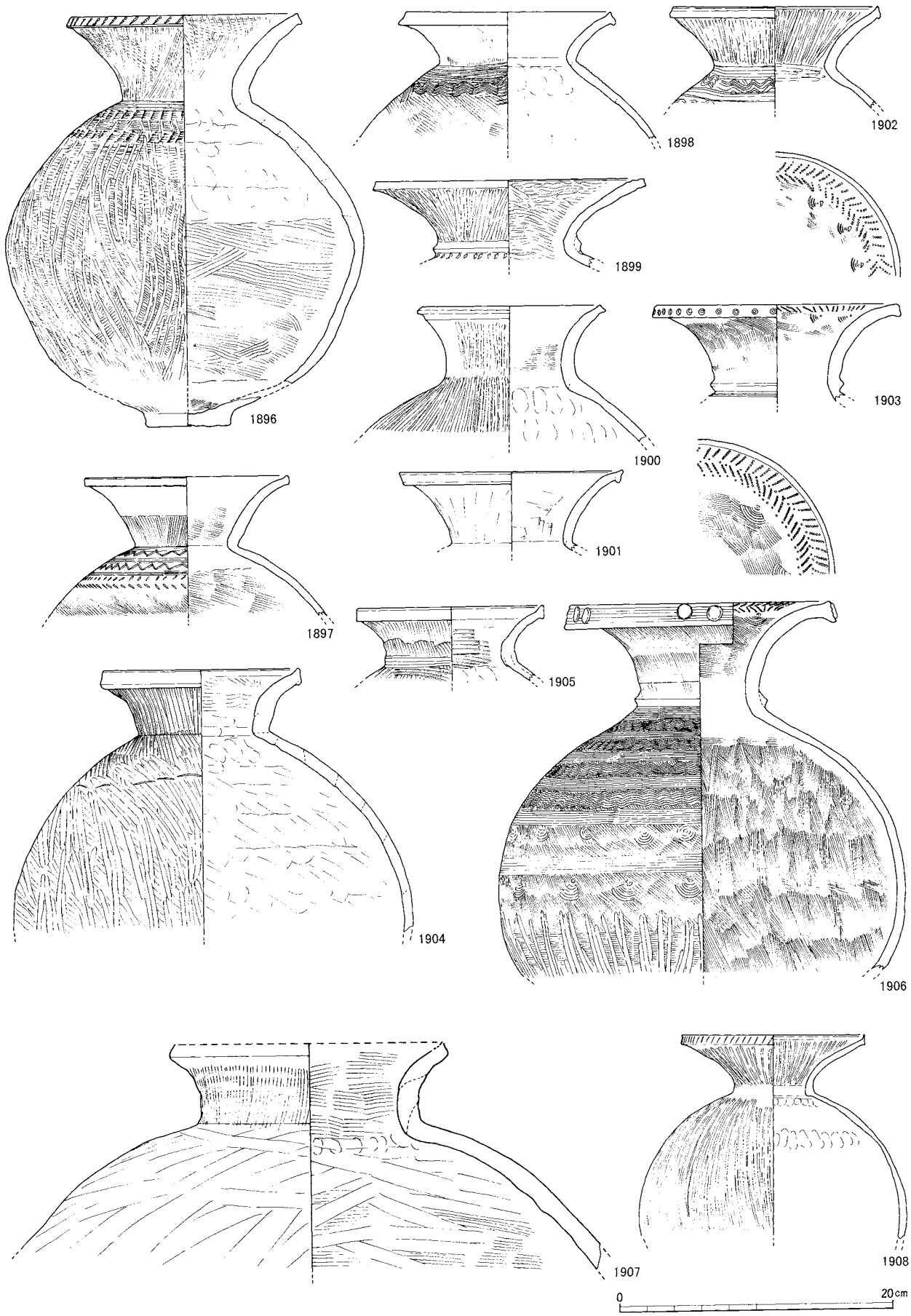
第289図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



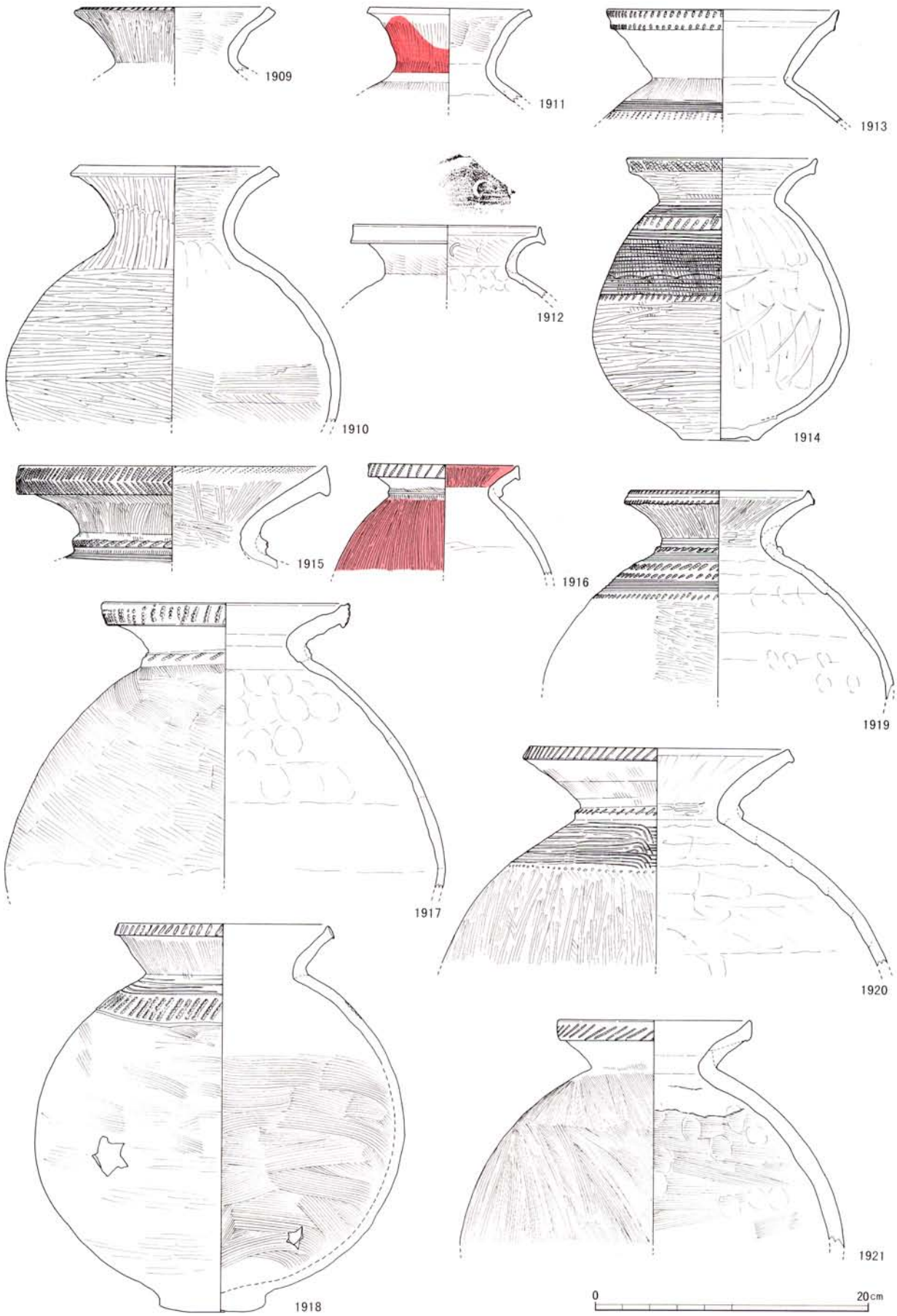
第290図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



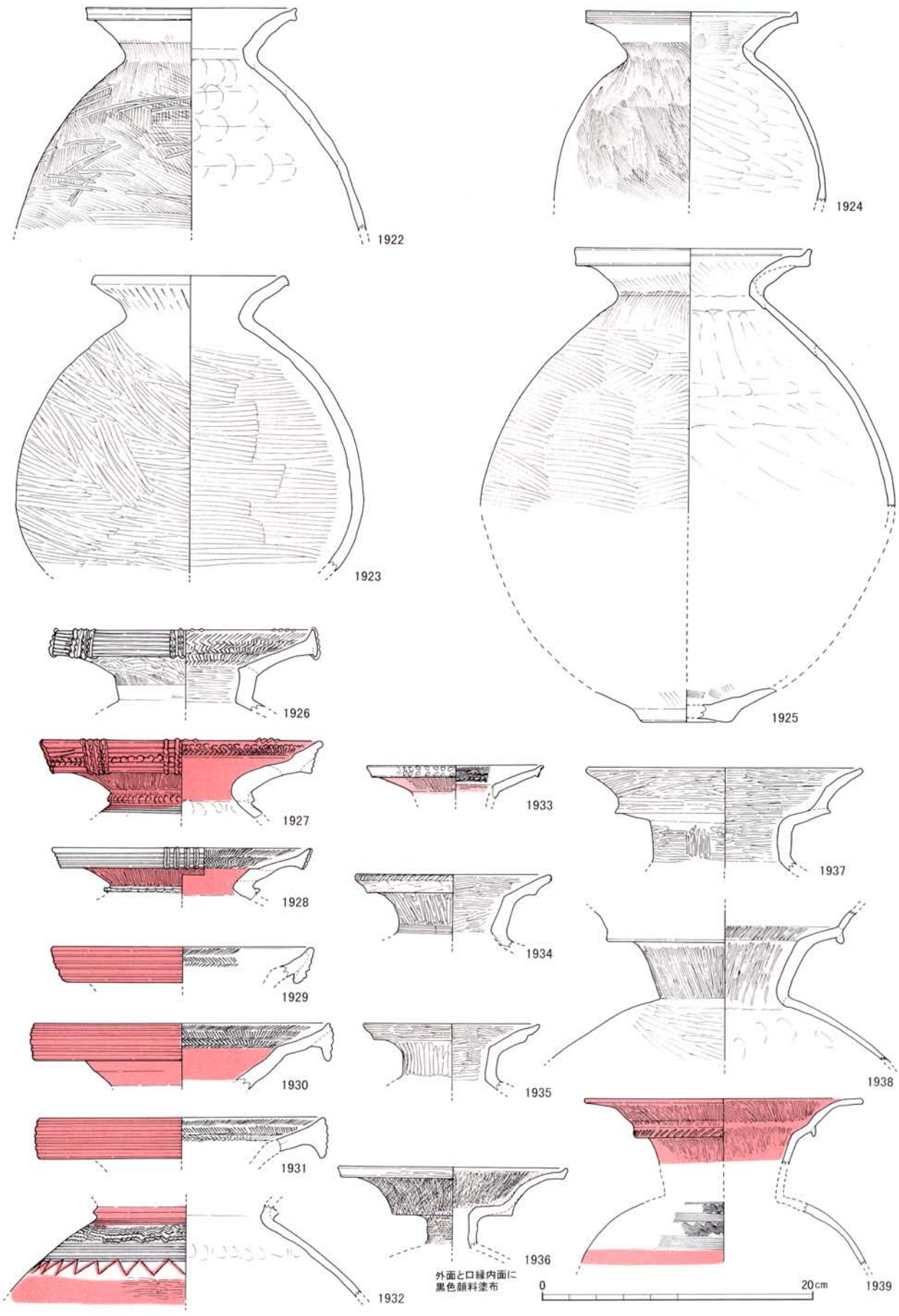
第291図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



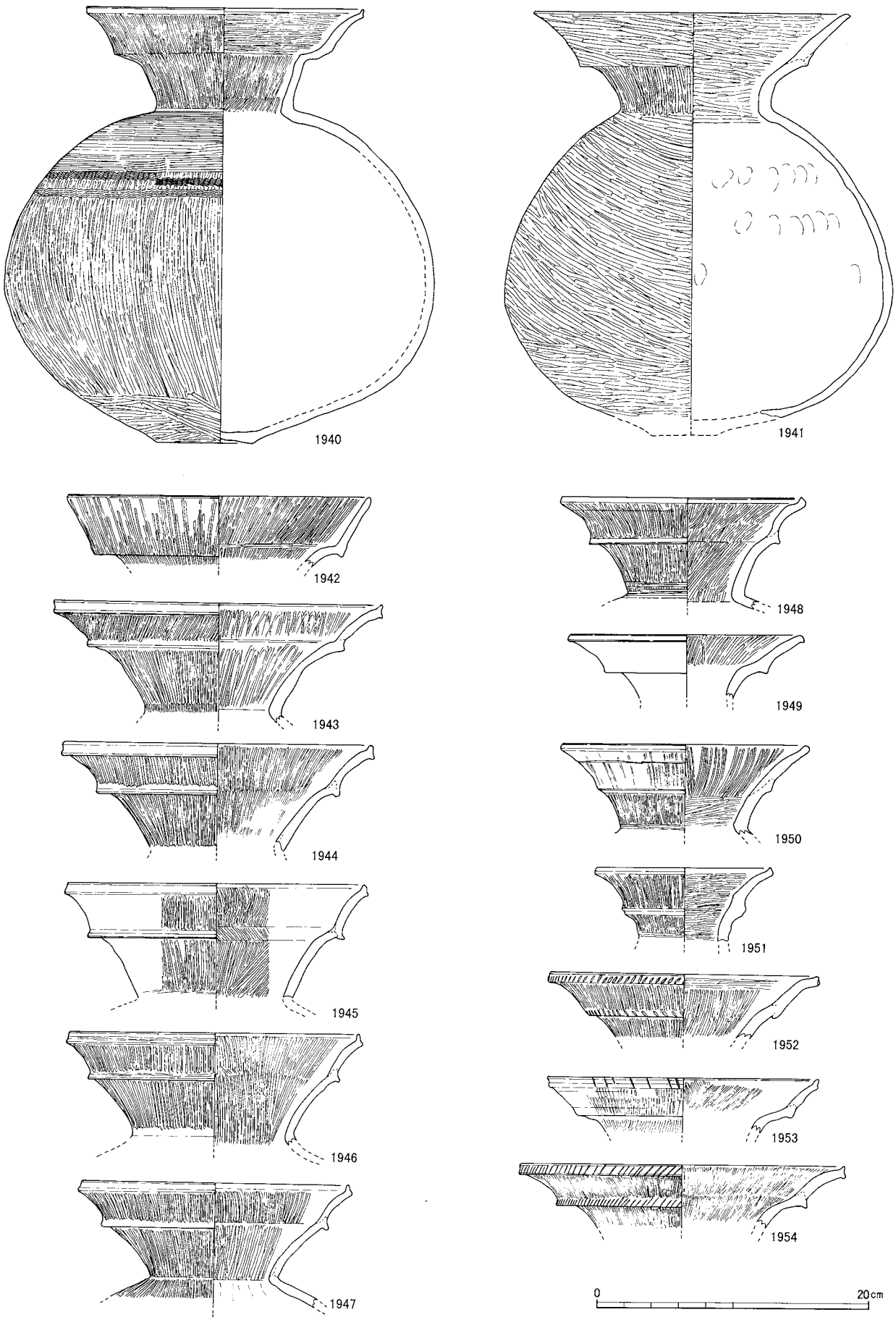
第292図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



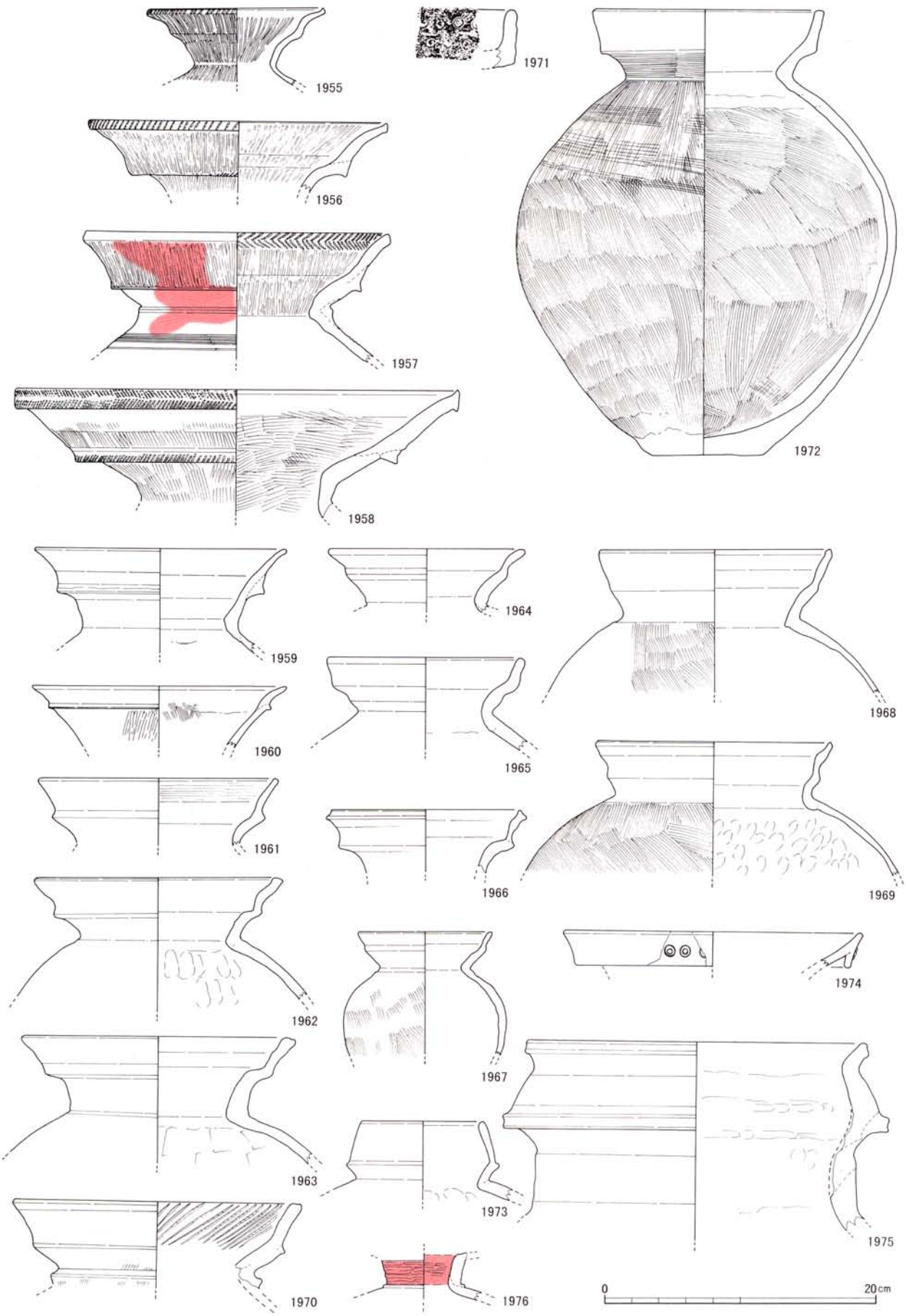
第293図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



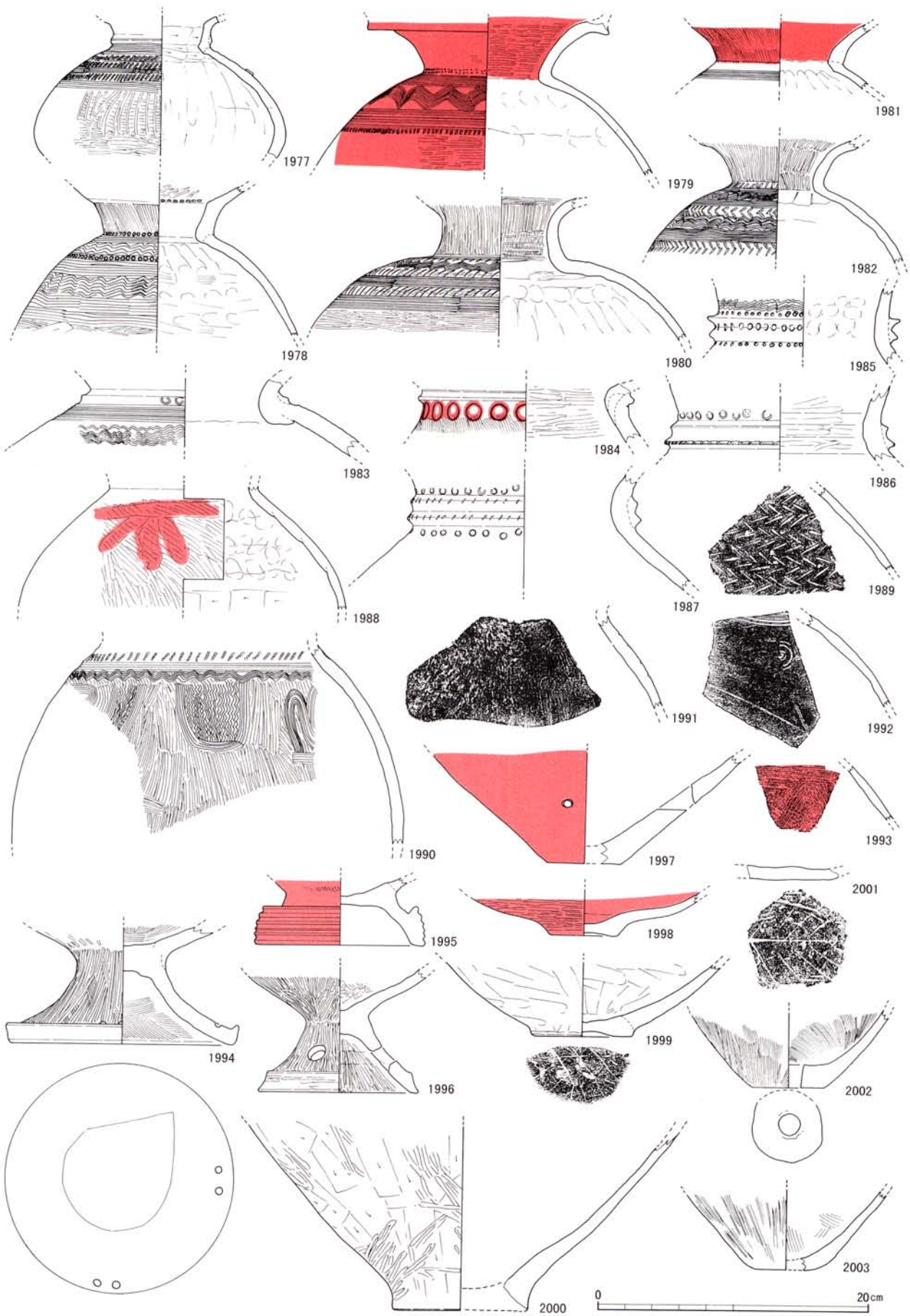
第294図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



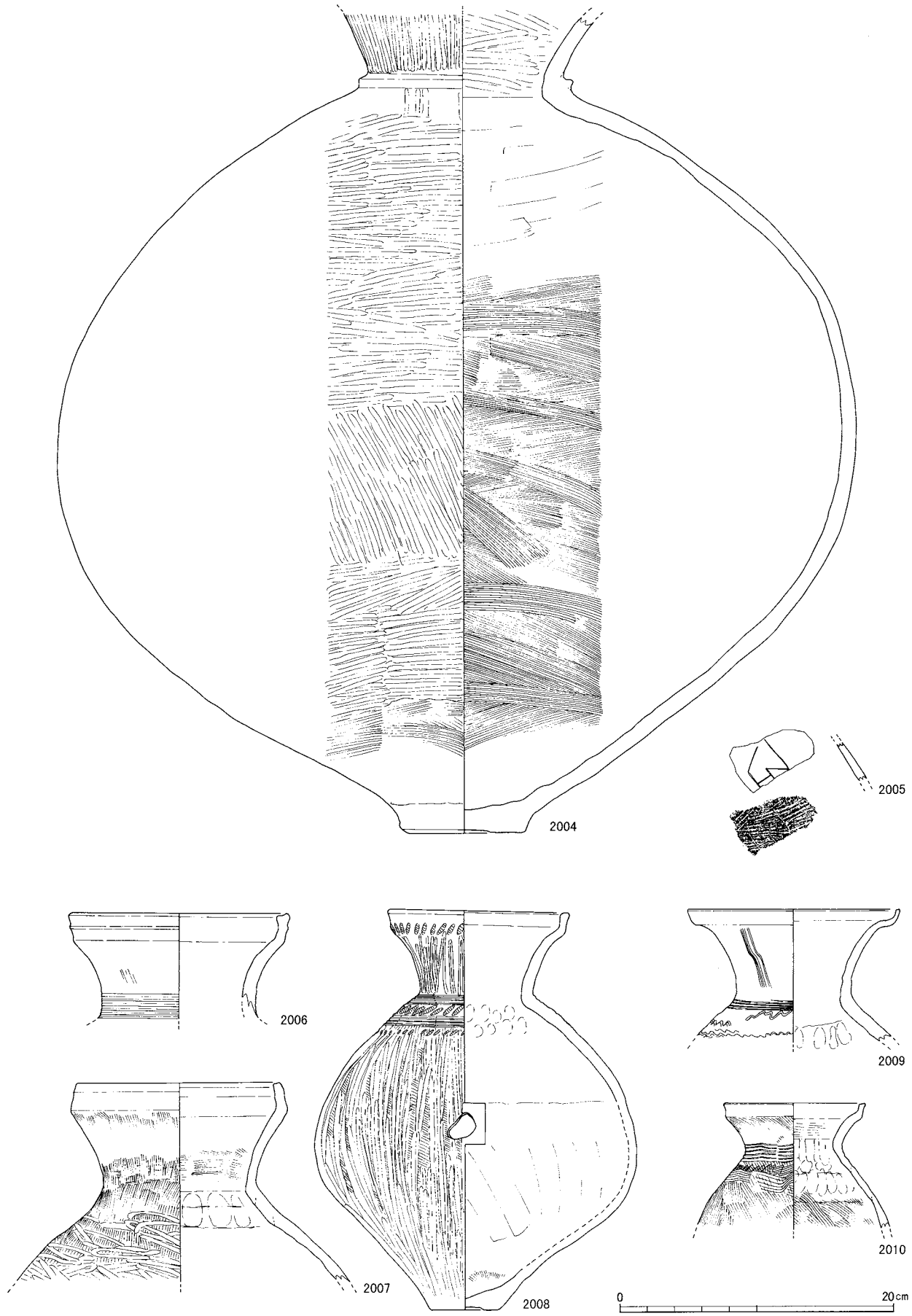
第295図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



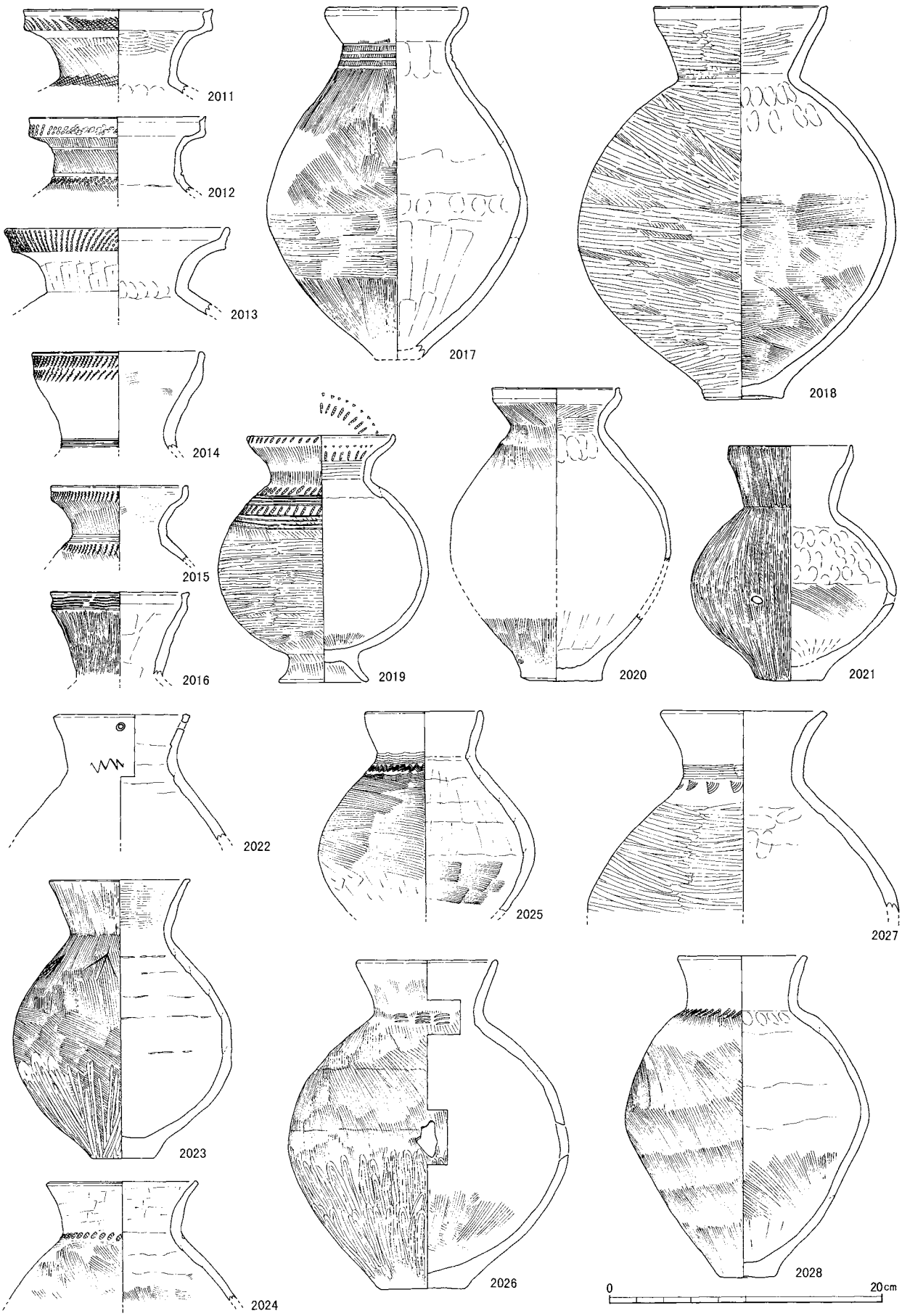
第296図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



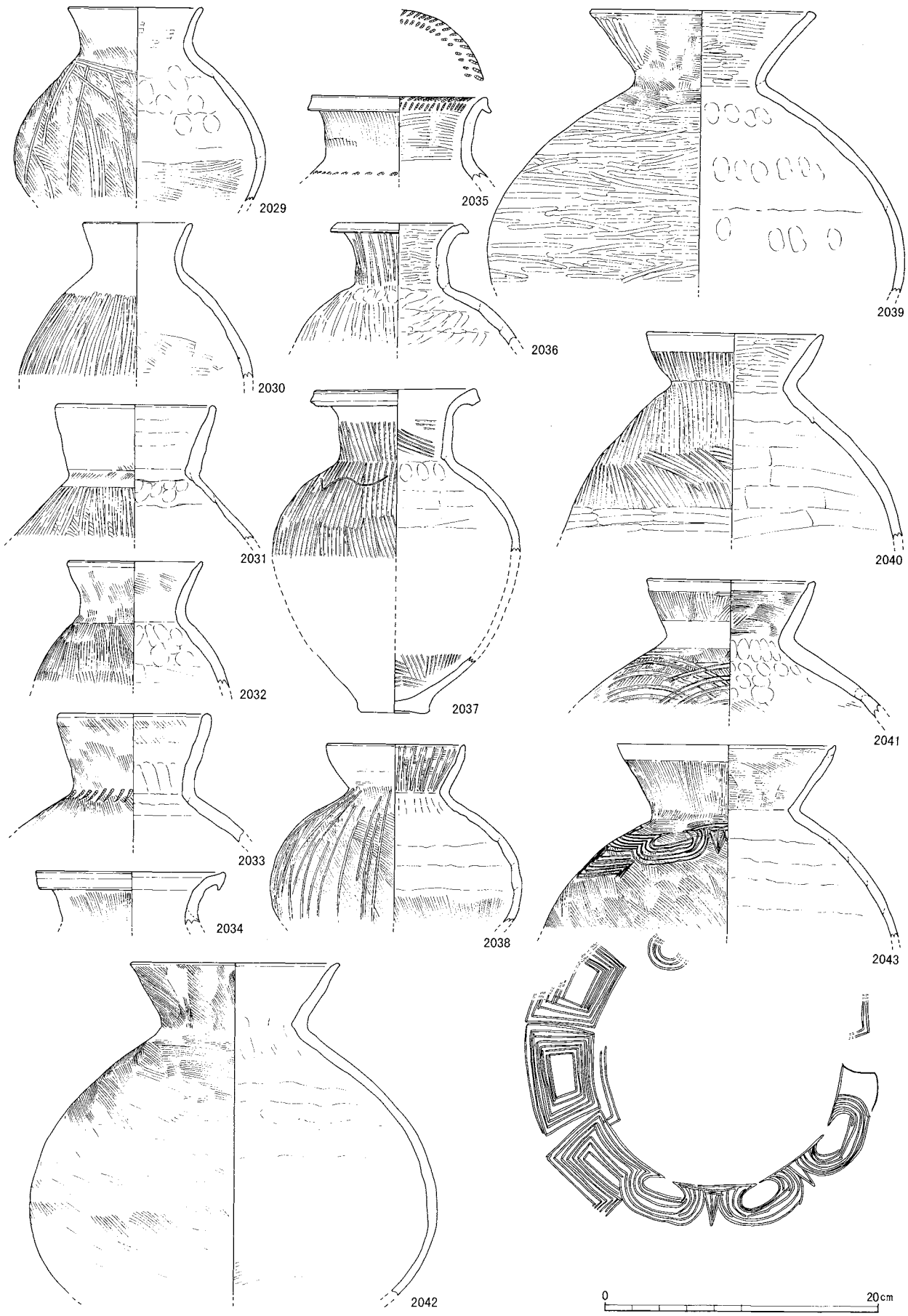
第297図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



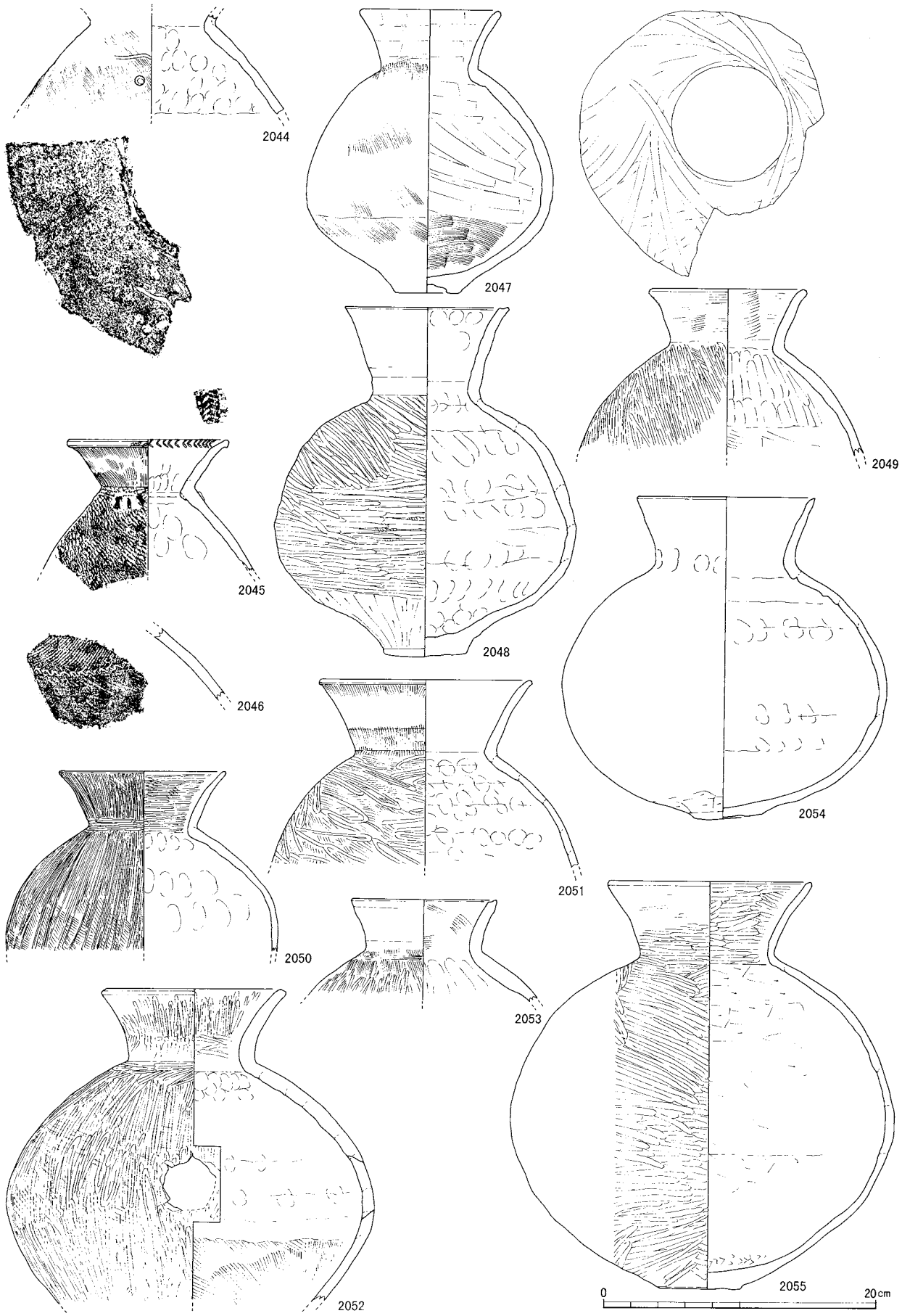
第298図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



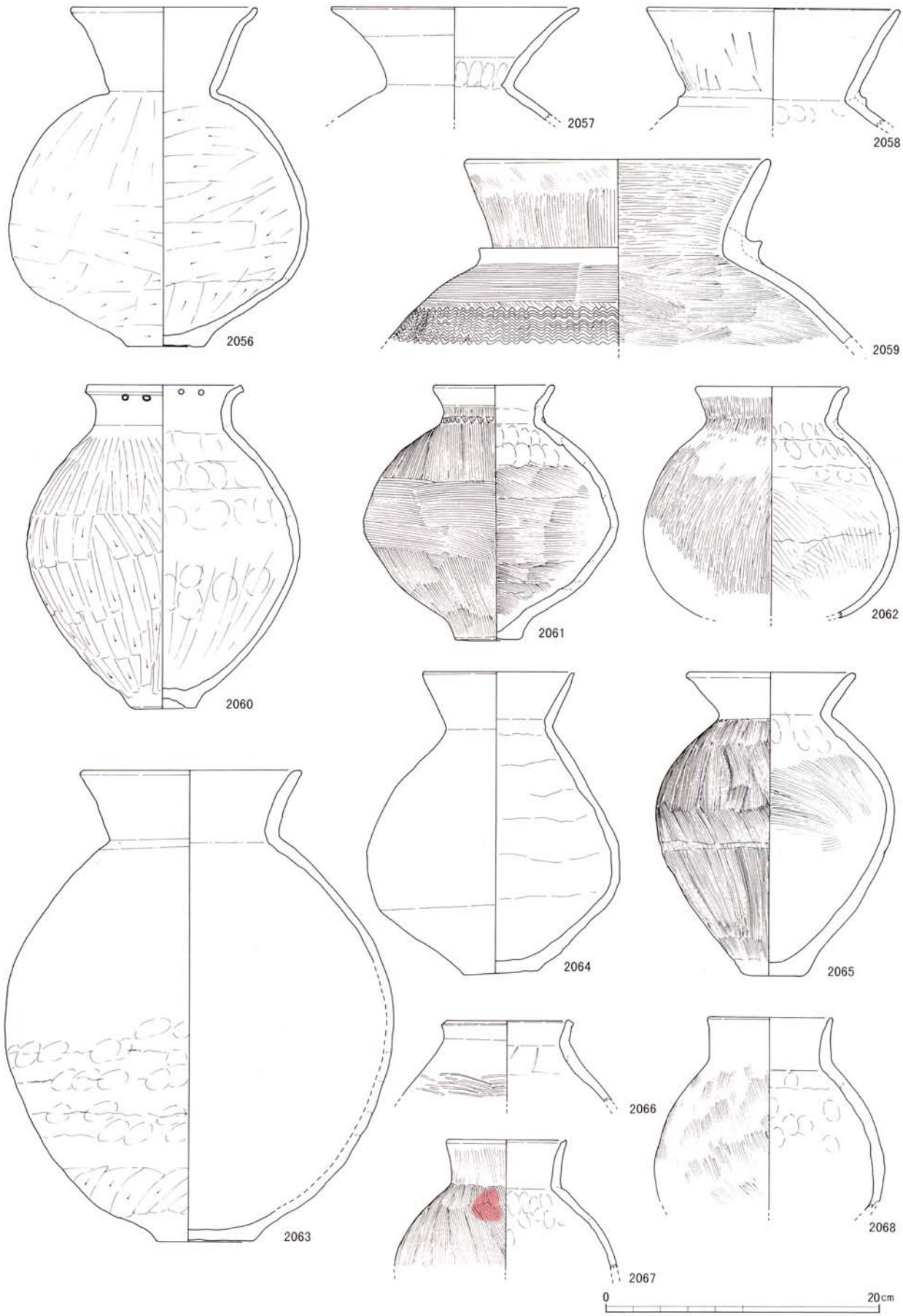
第299図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



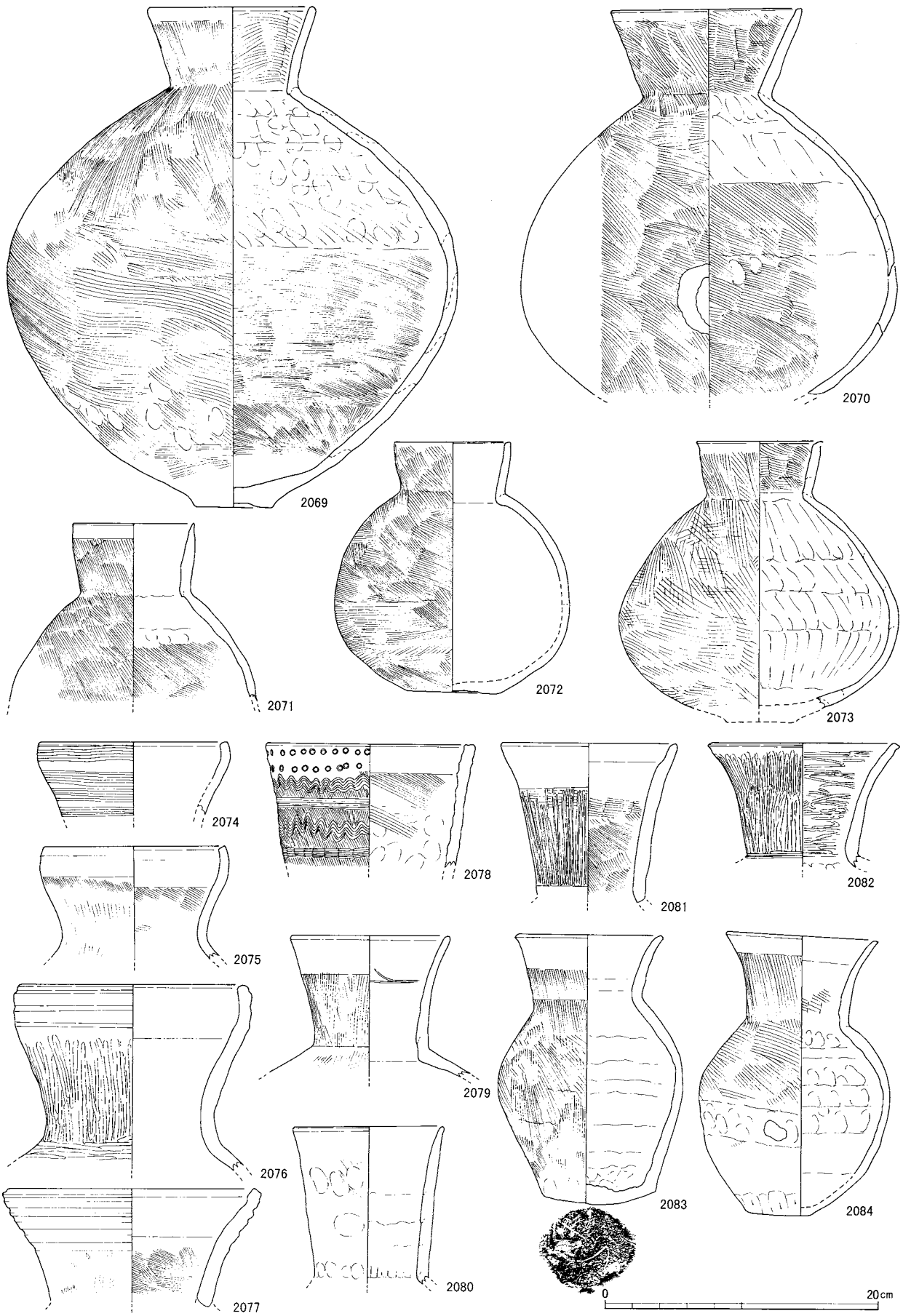
第300図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



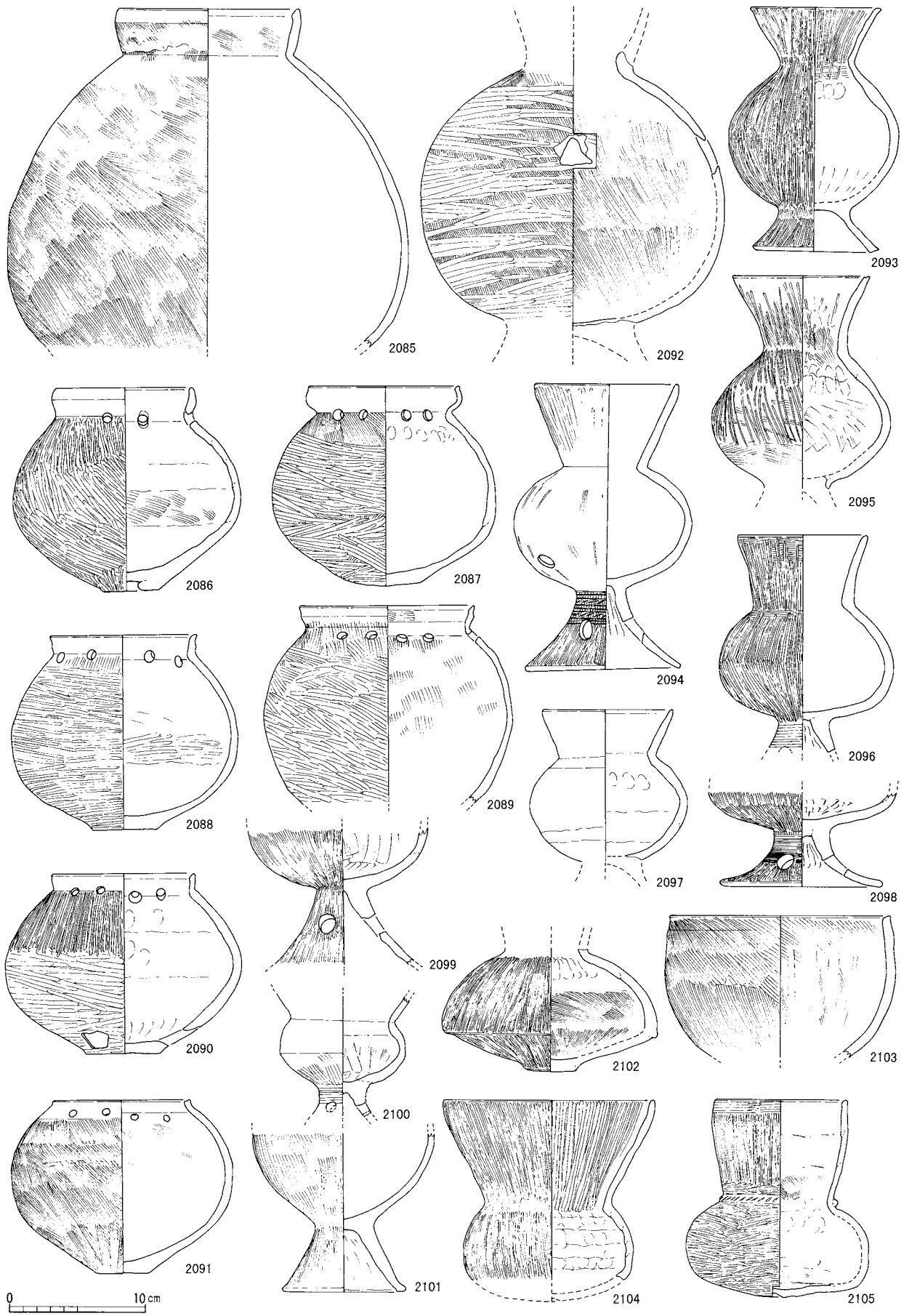
第301図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



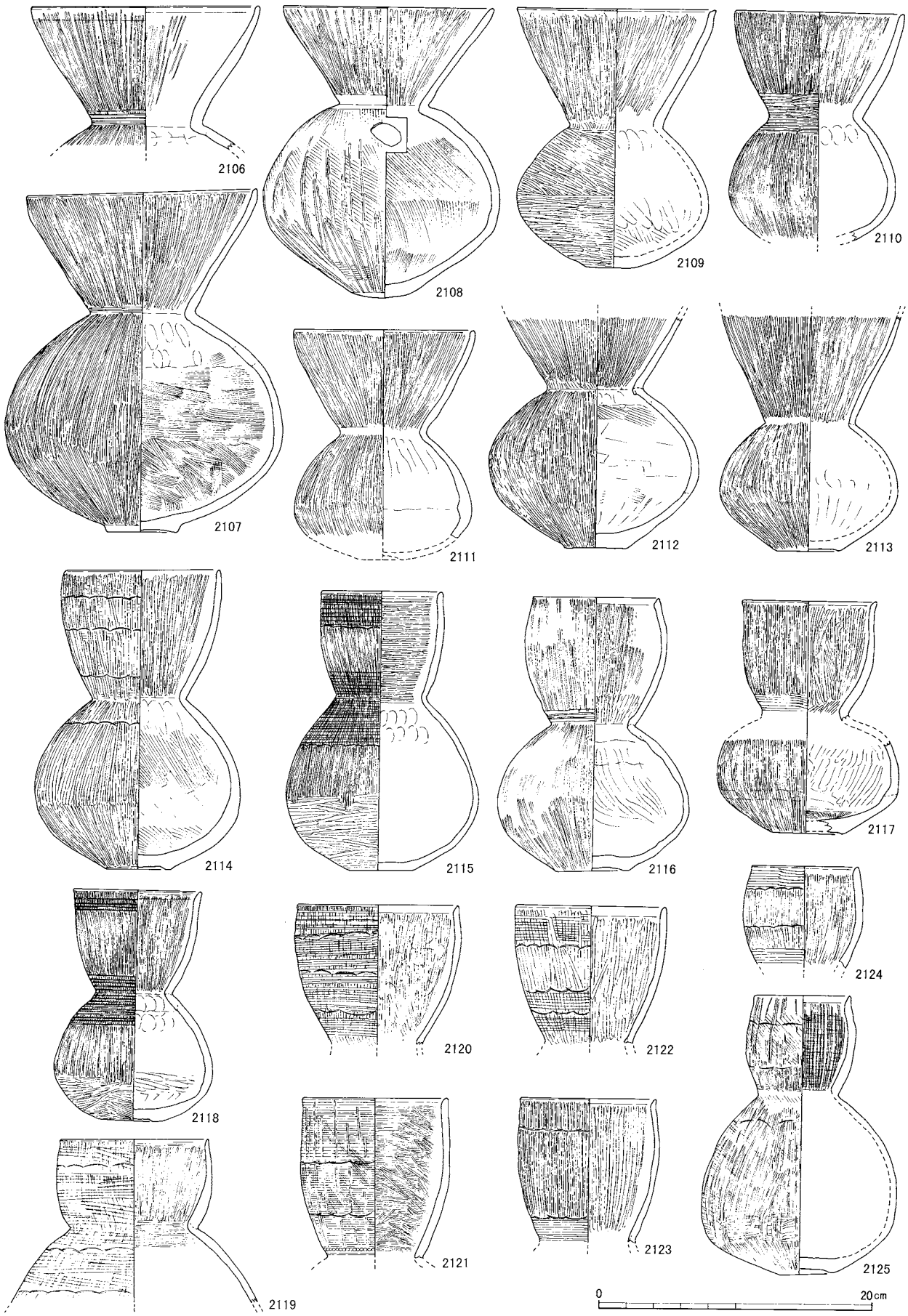
第302図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



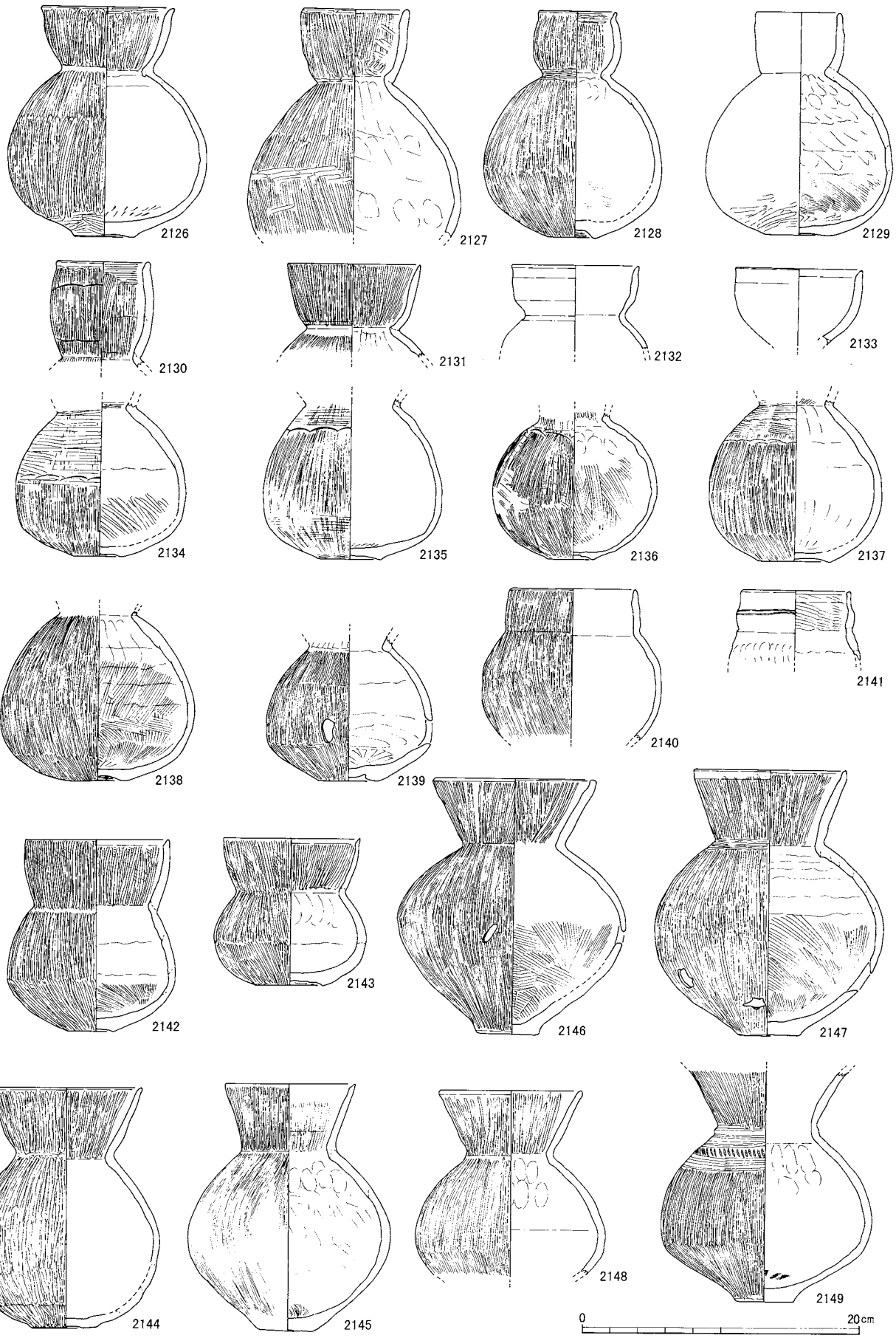
第303図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



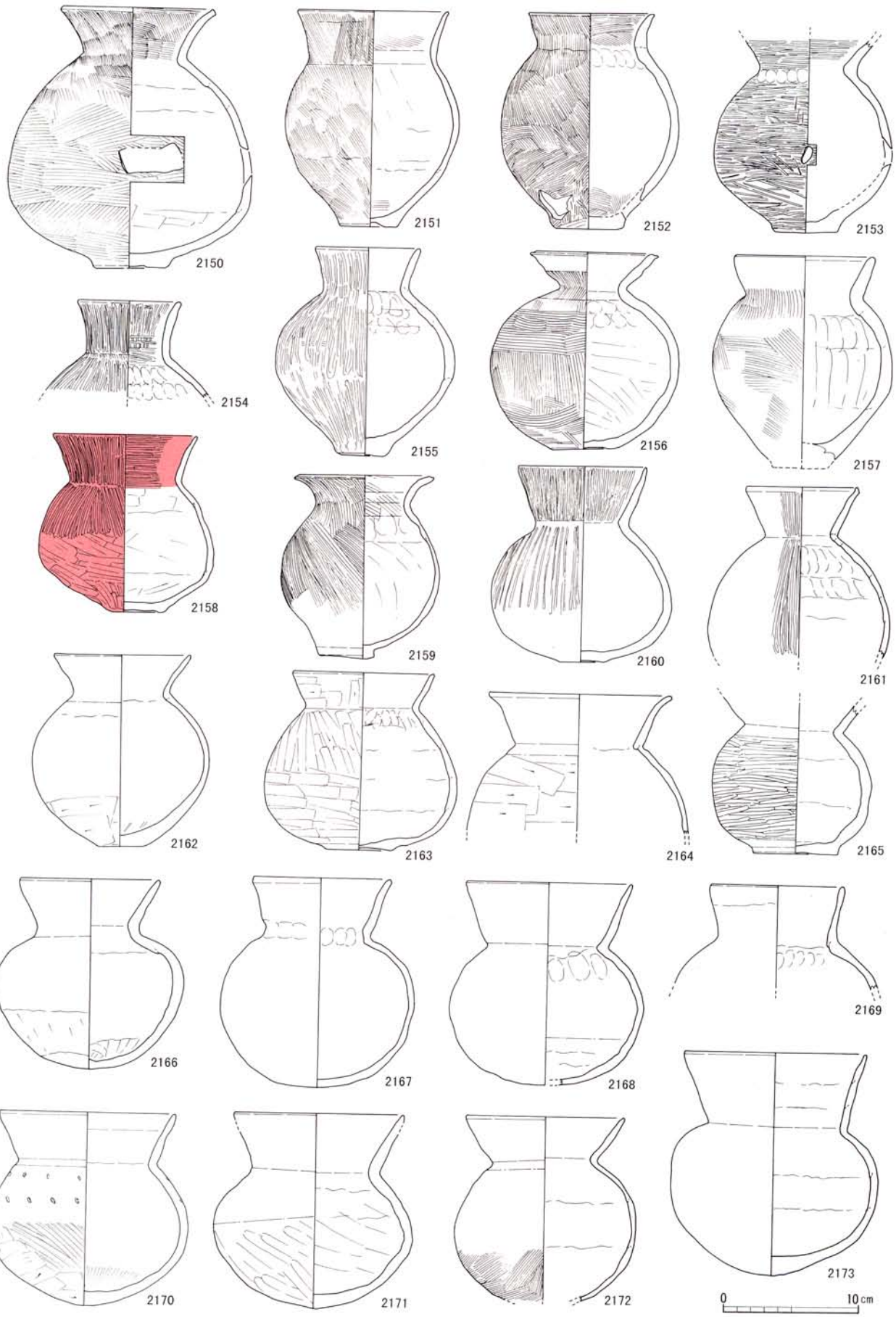
第304図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



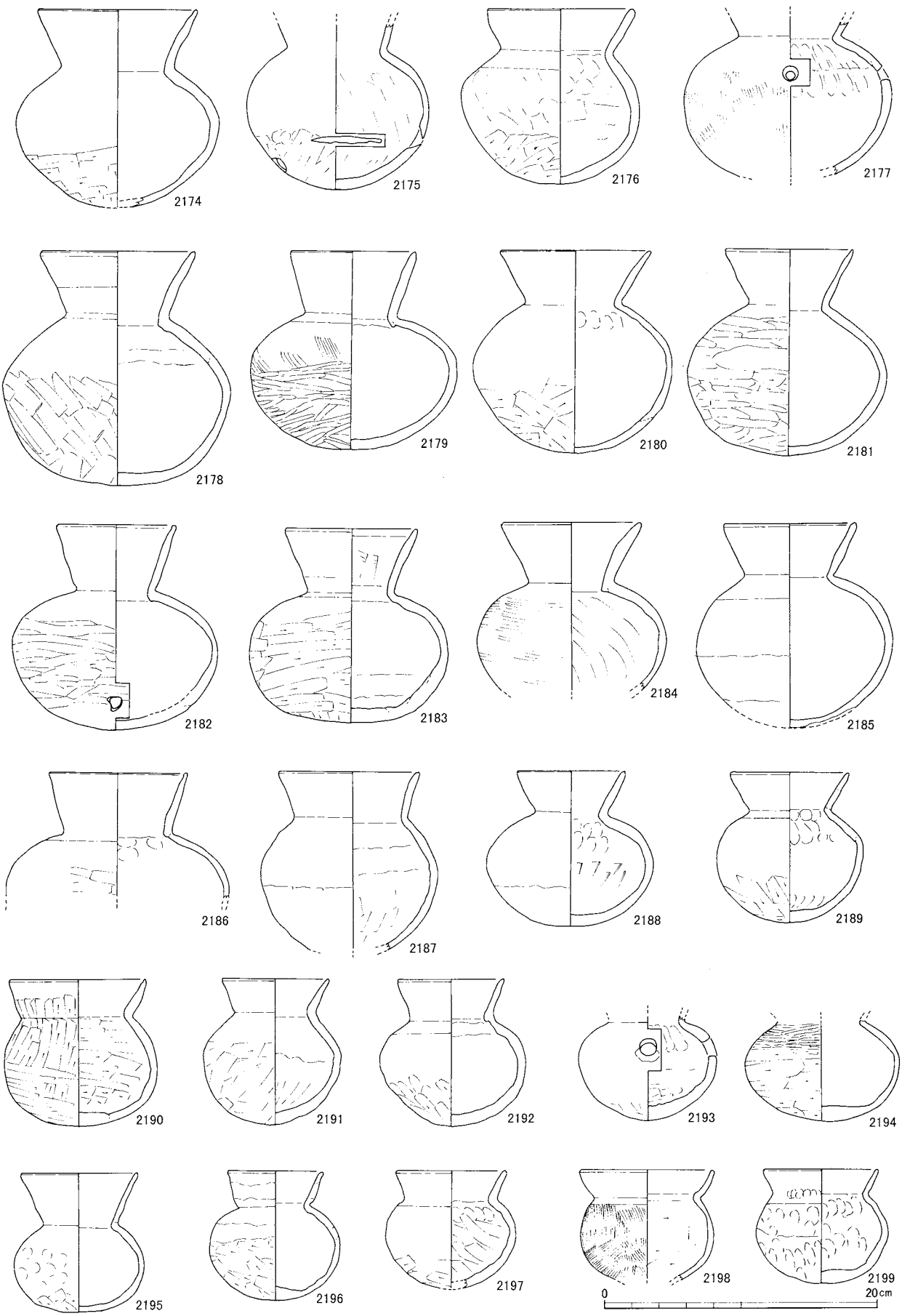
第305図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



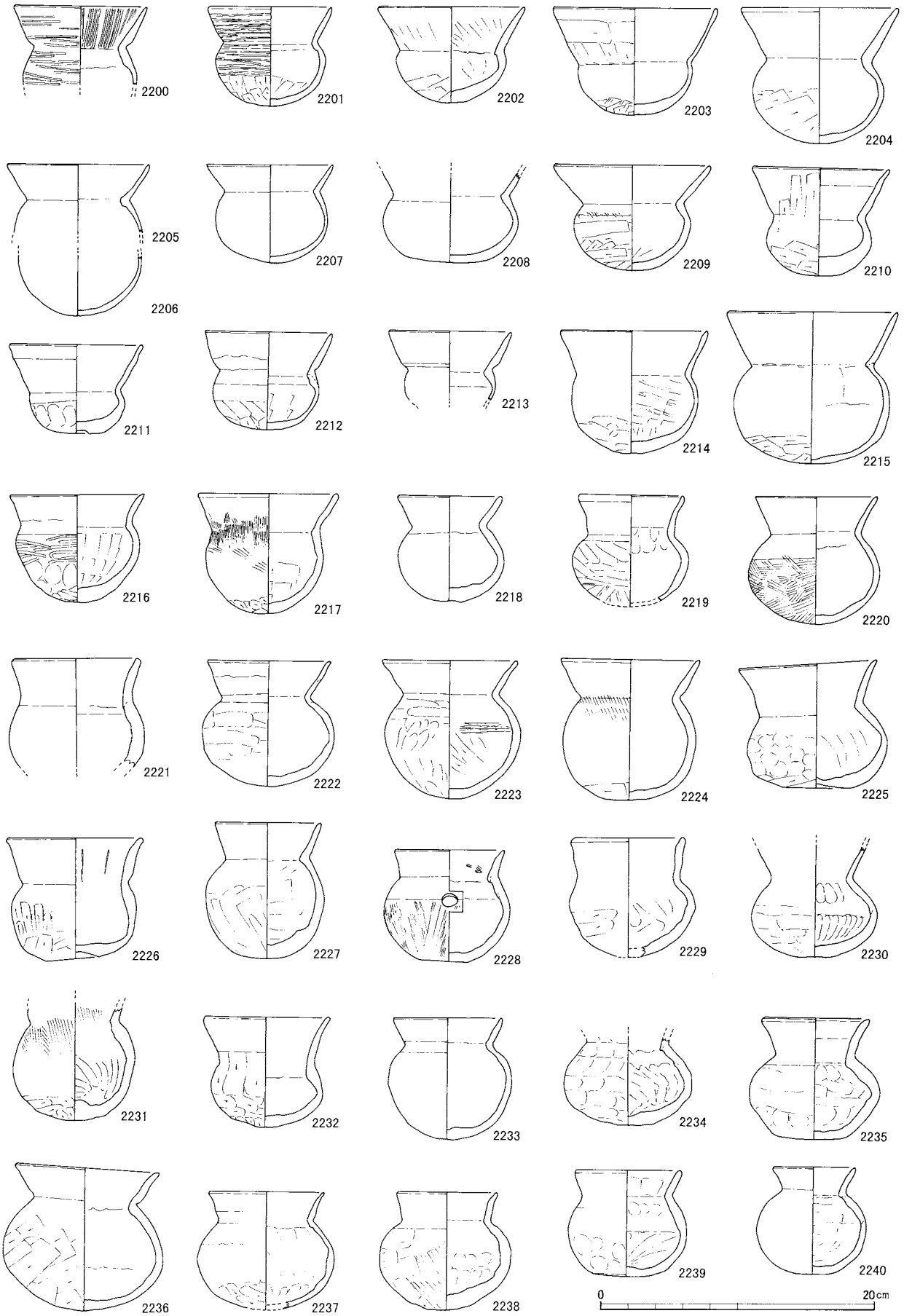
第306図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



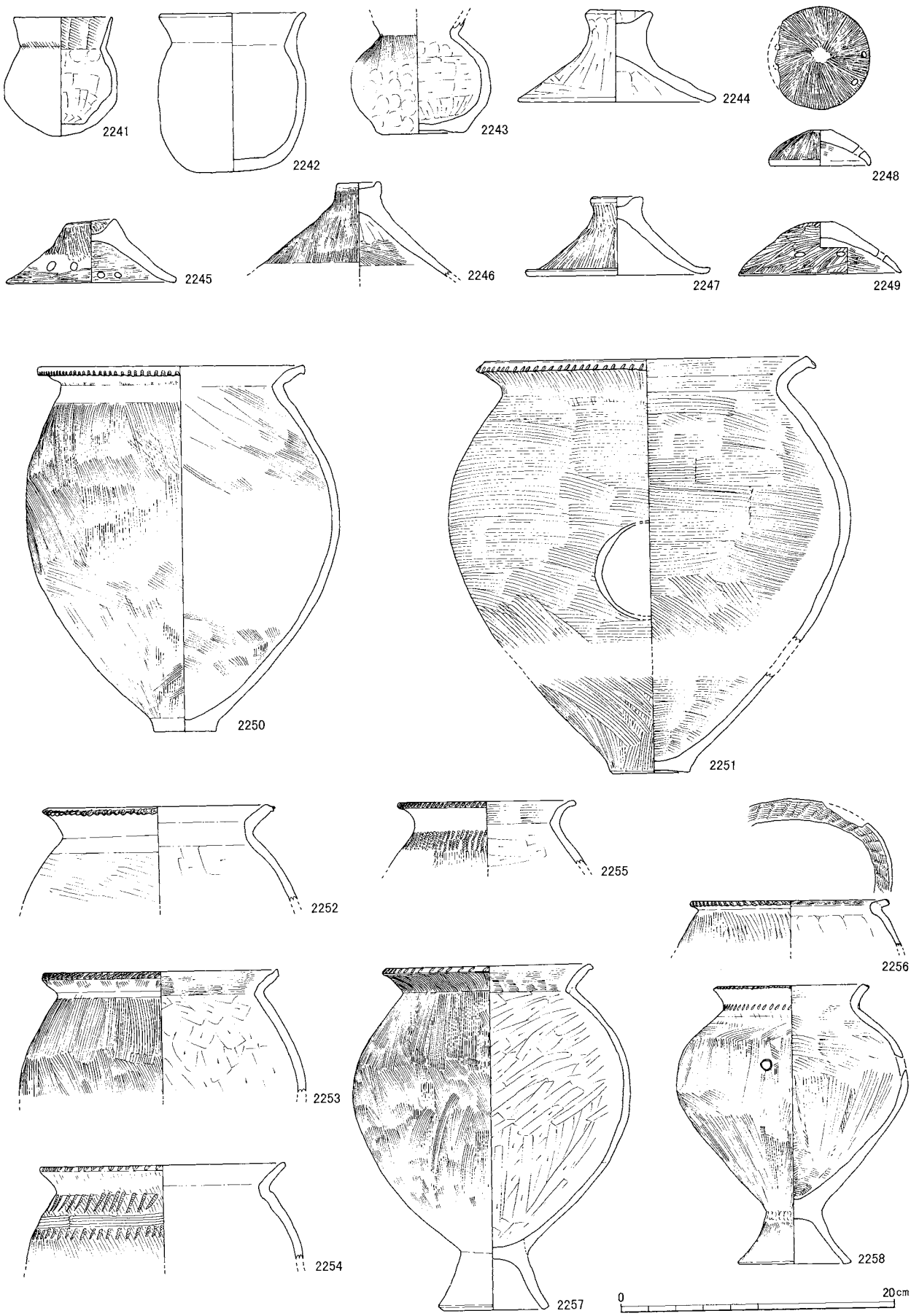
第307図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



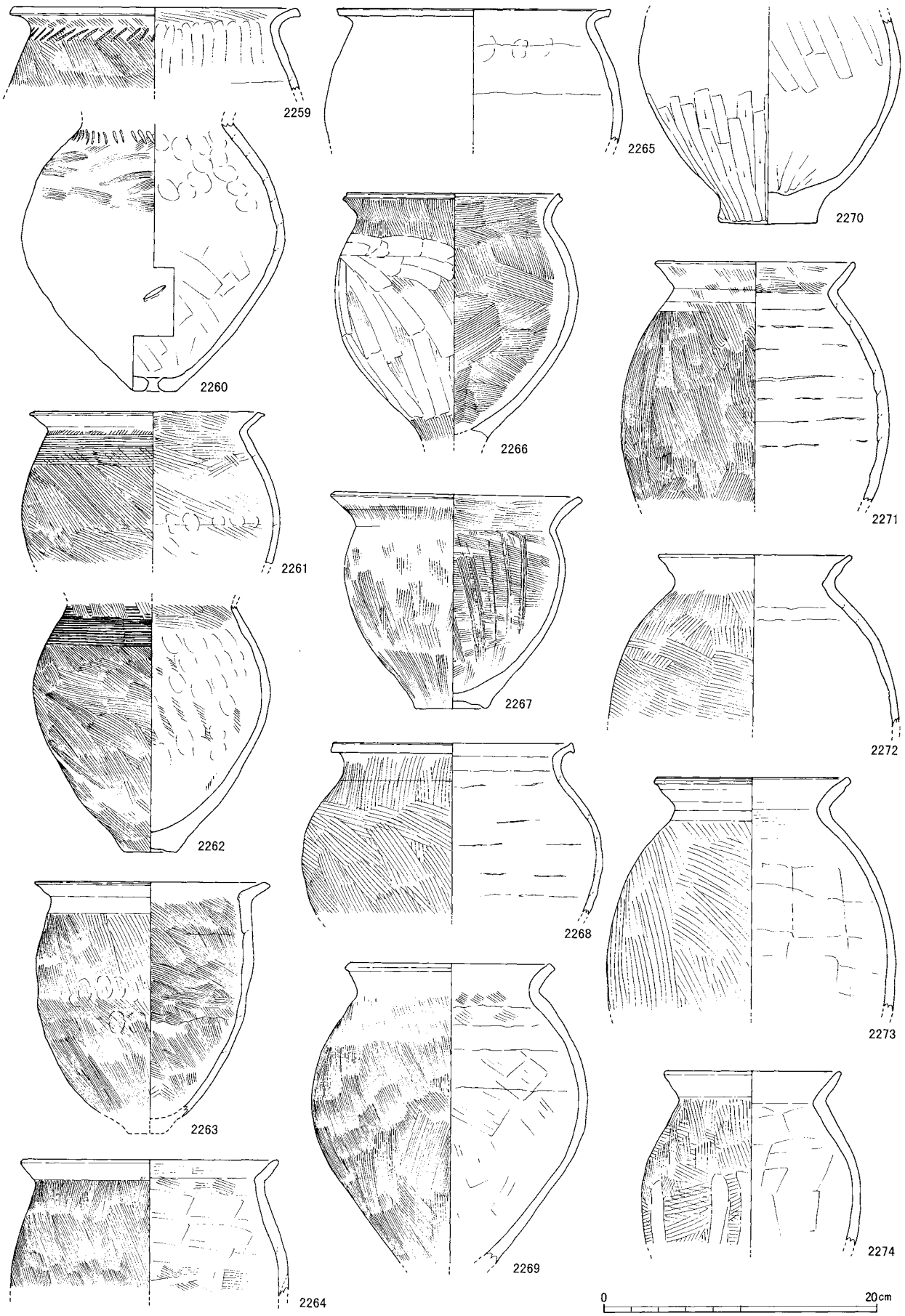
第308図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



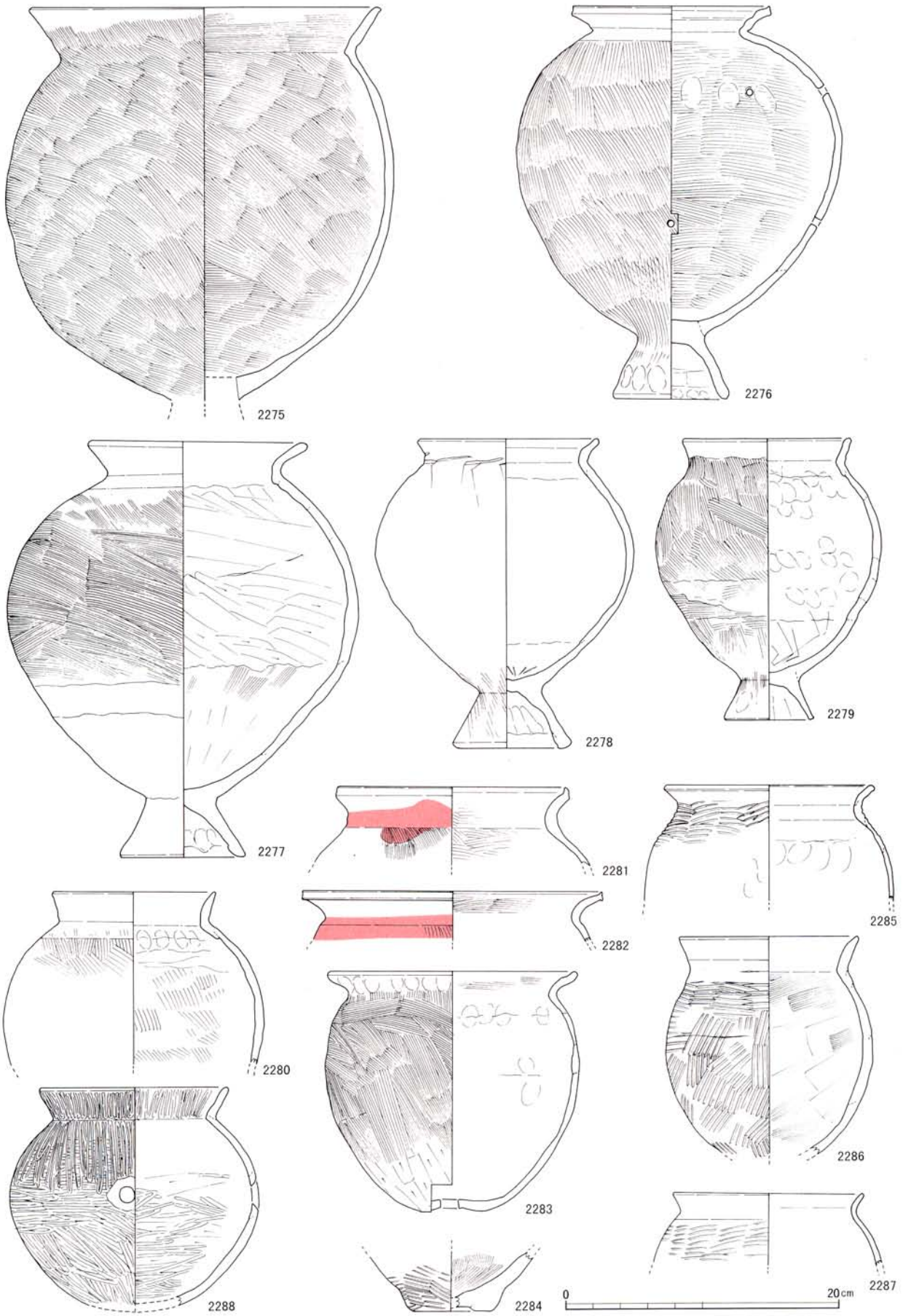
第309図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



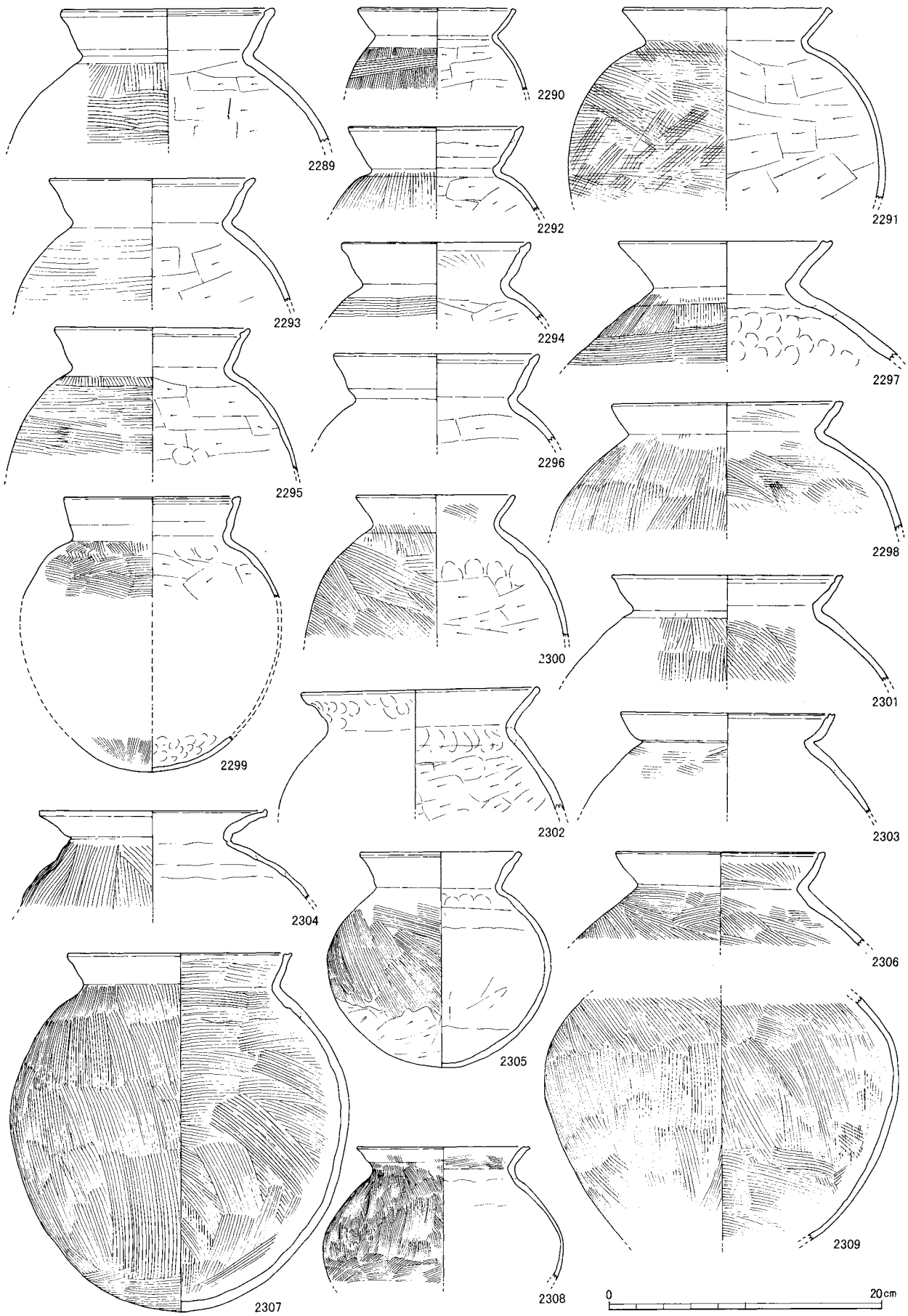
第310図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



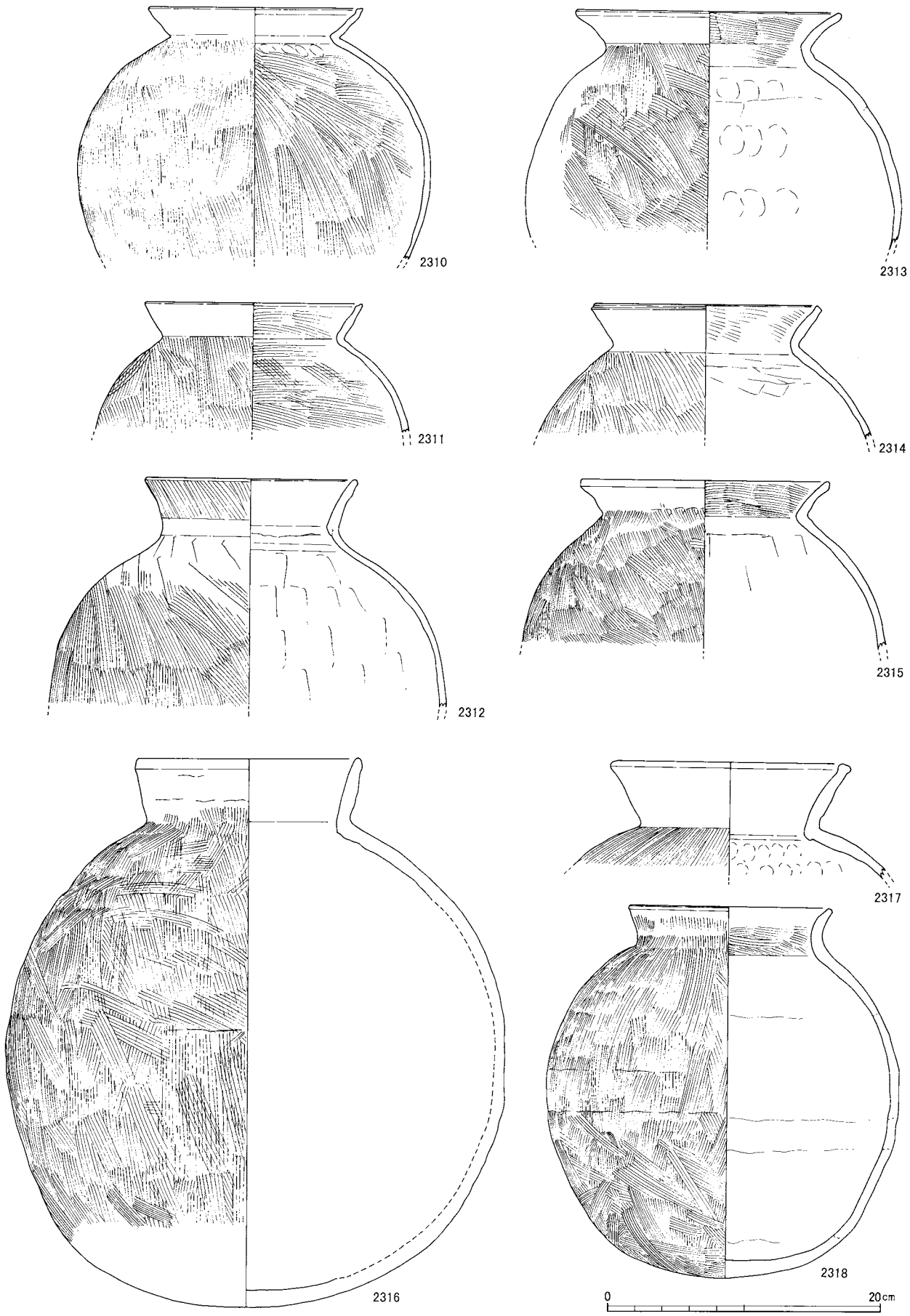
第311図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



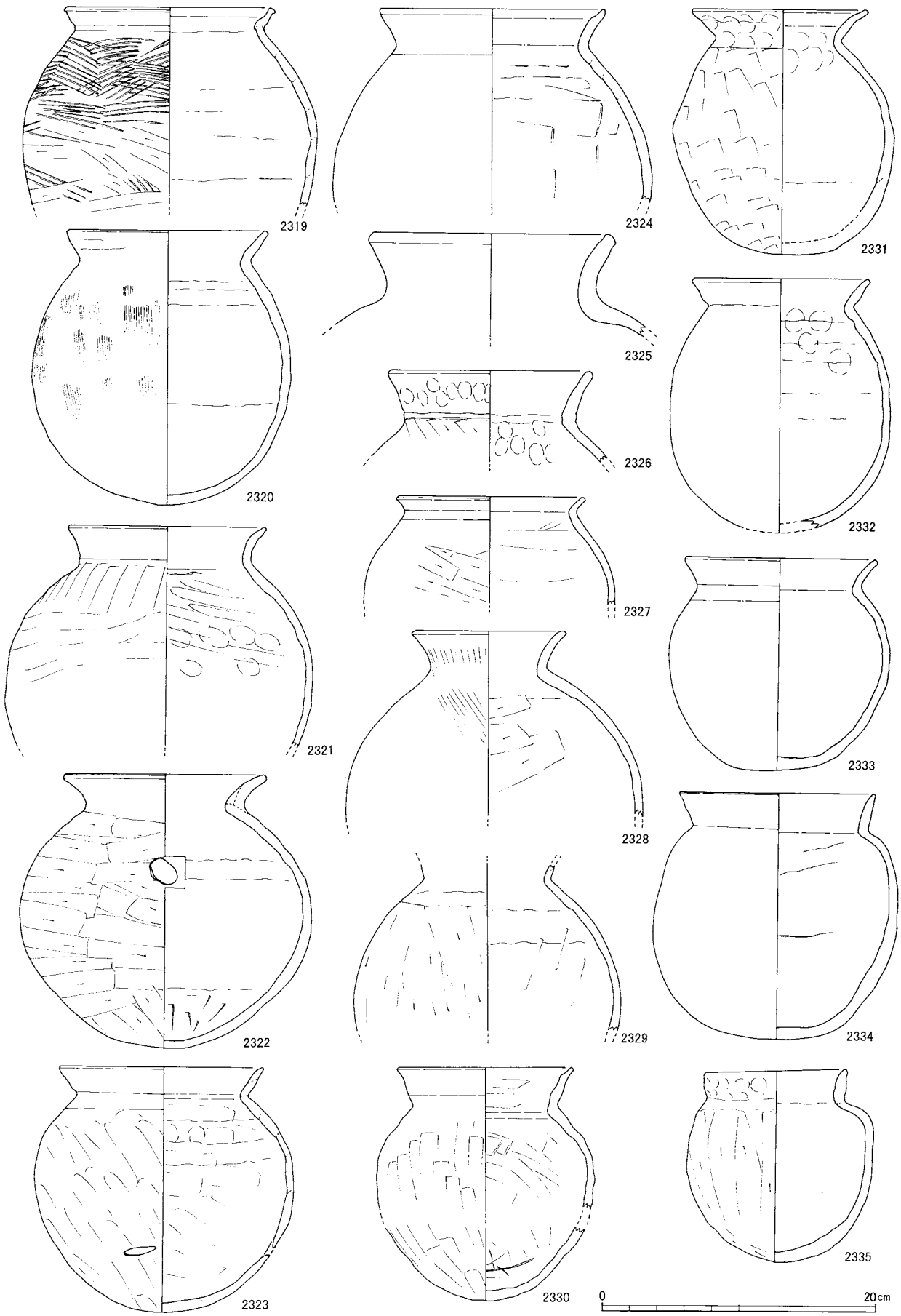
第312図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



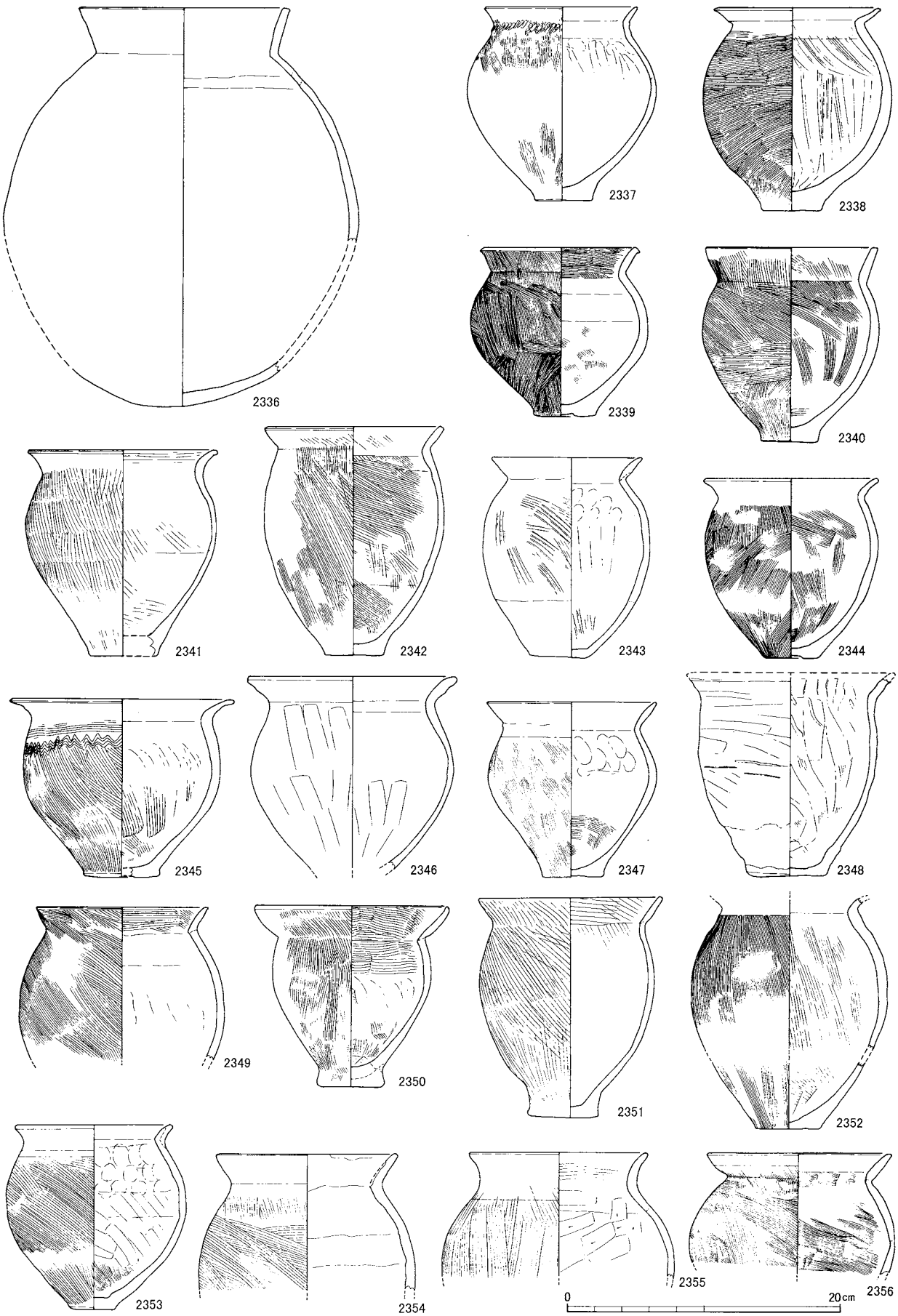
第313図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



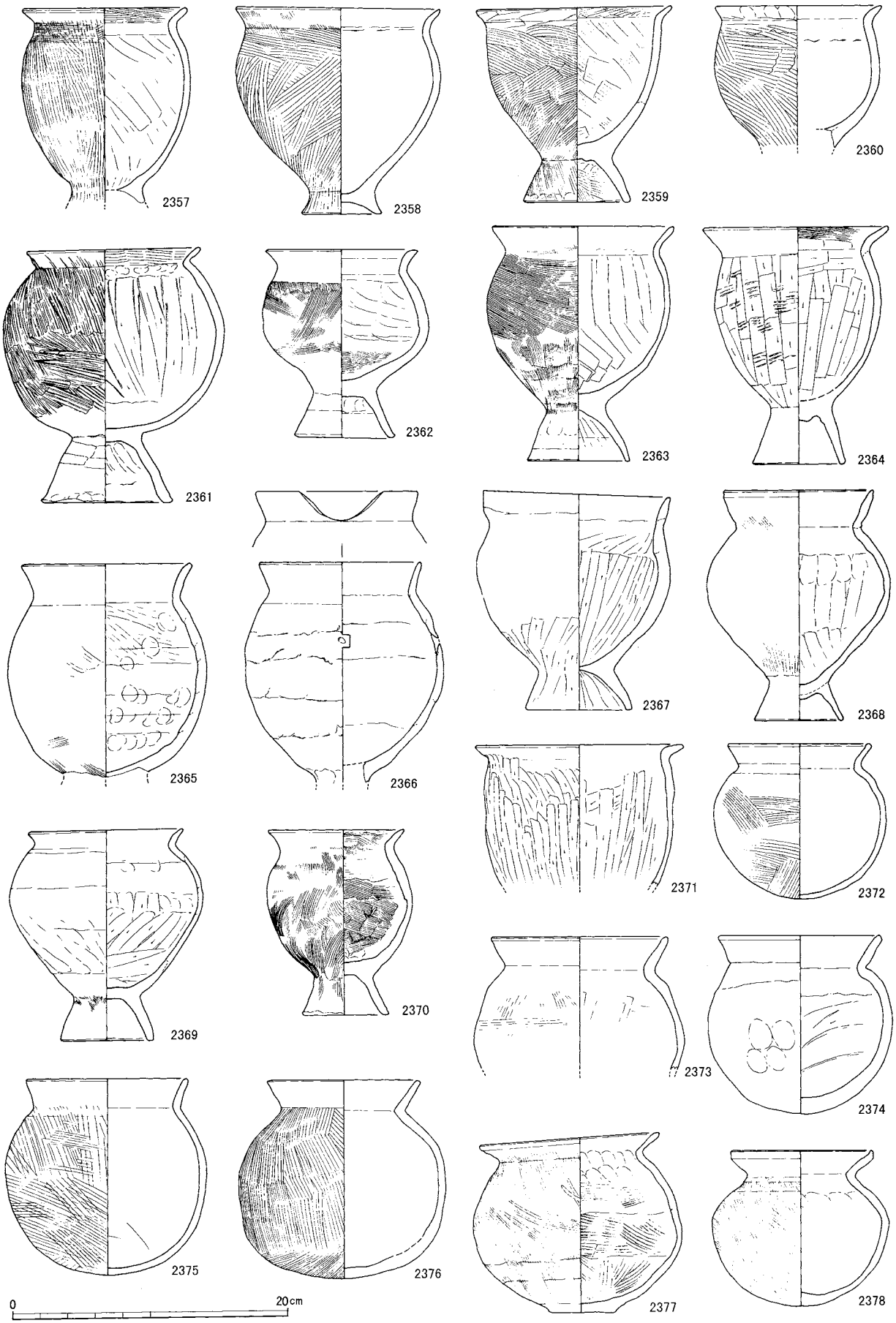
第314図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



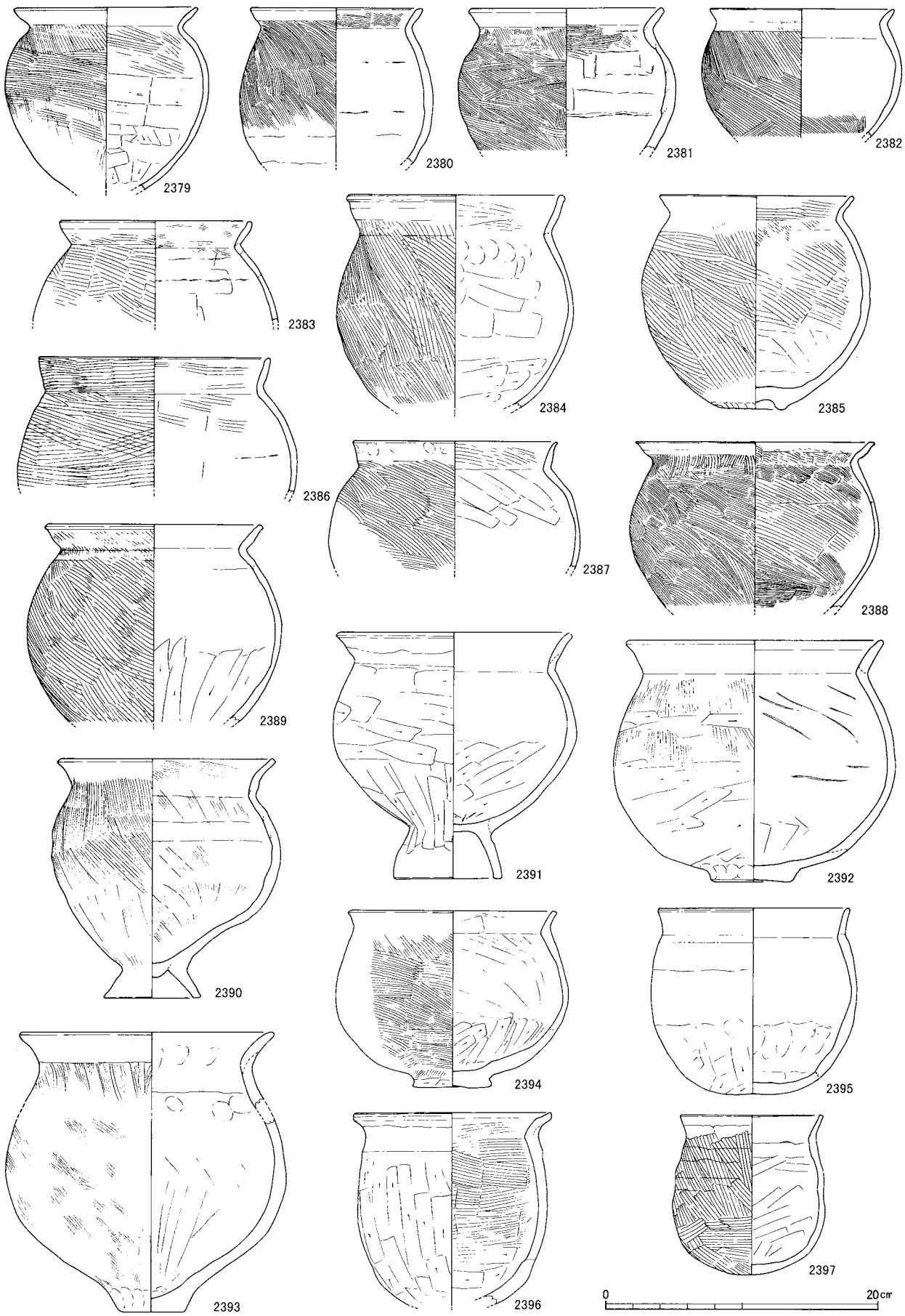
第315図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



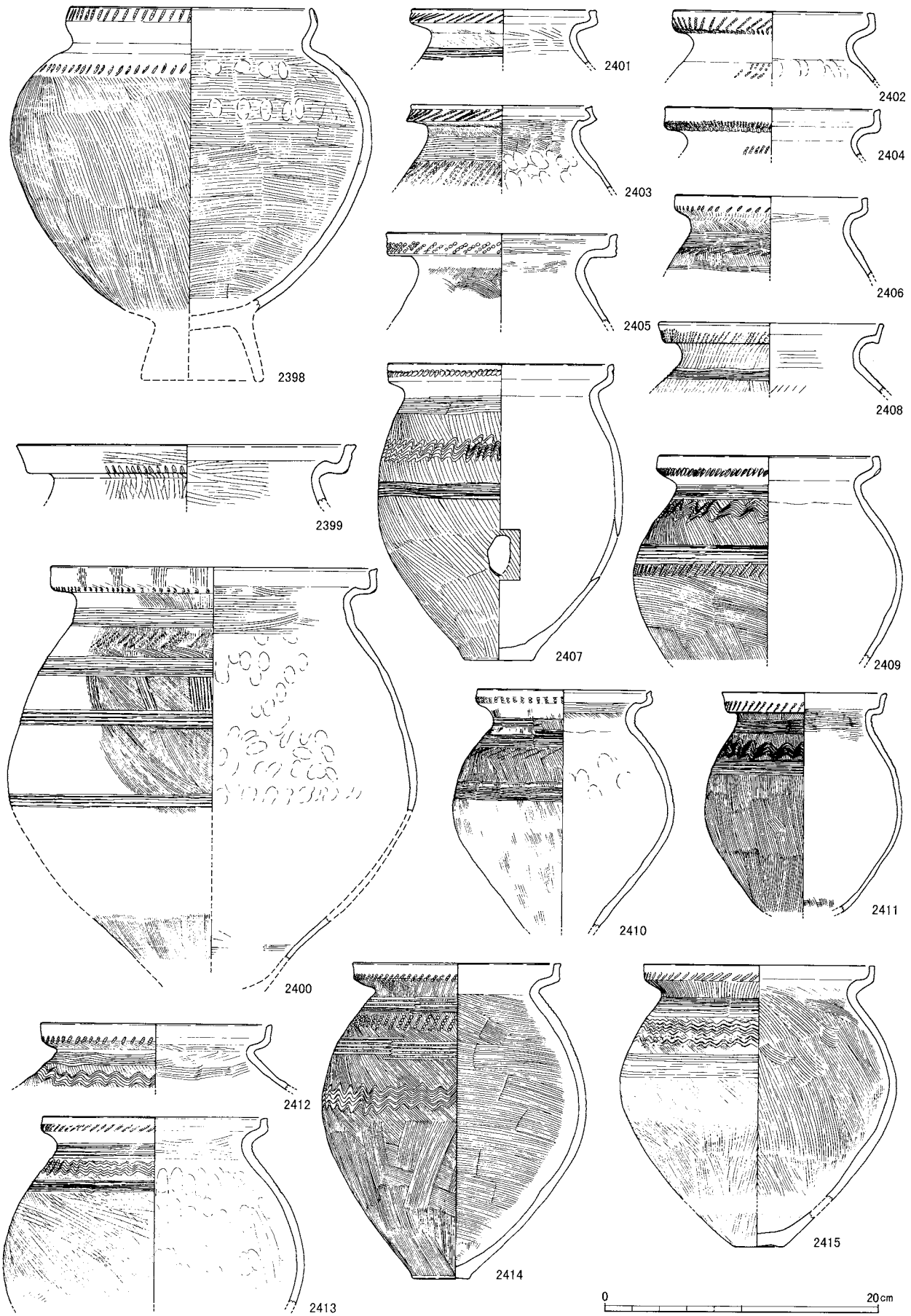
第316図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



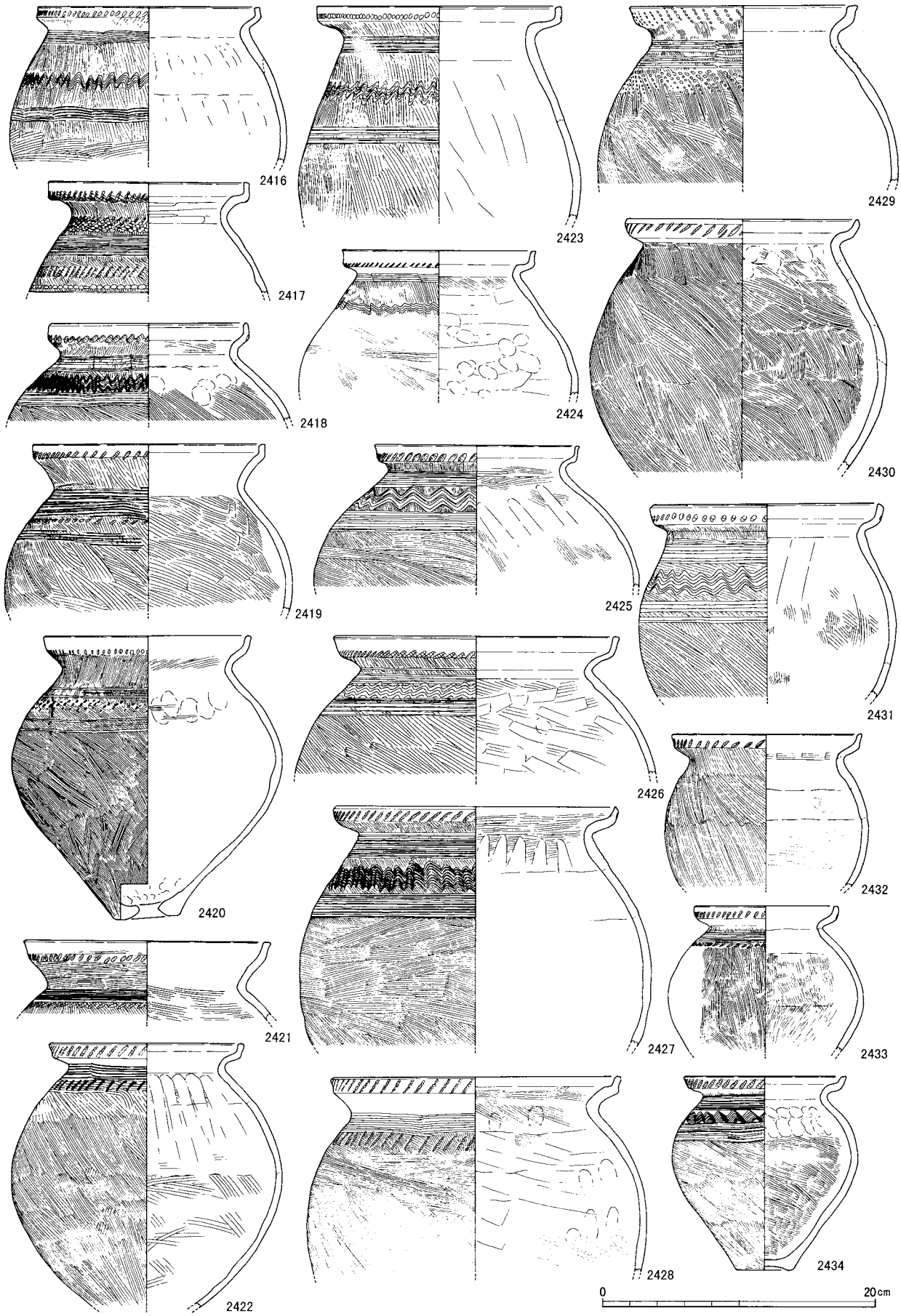
第317図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



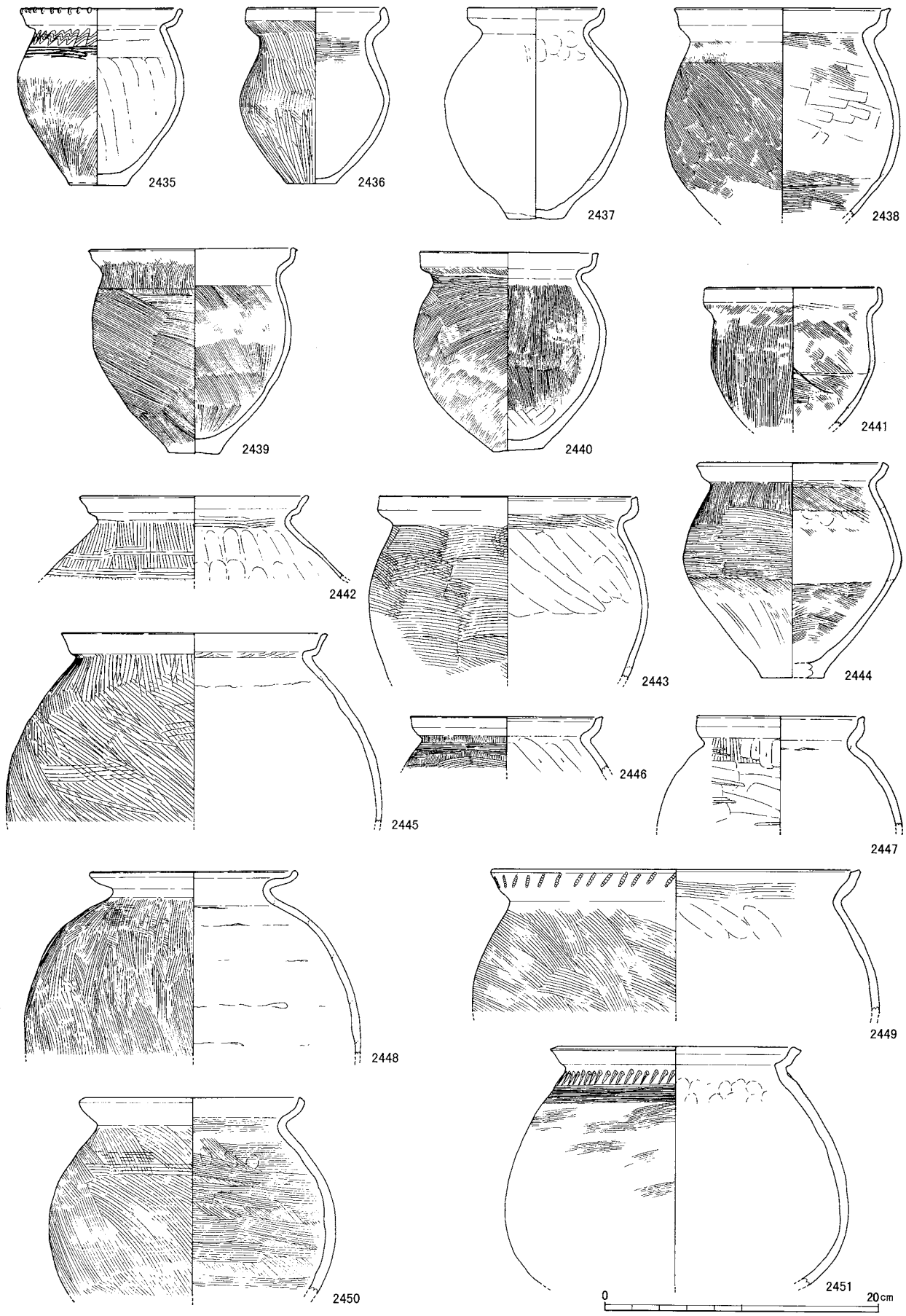
第318図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



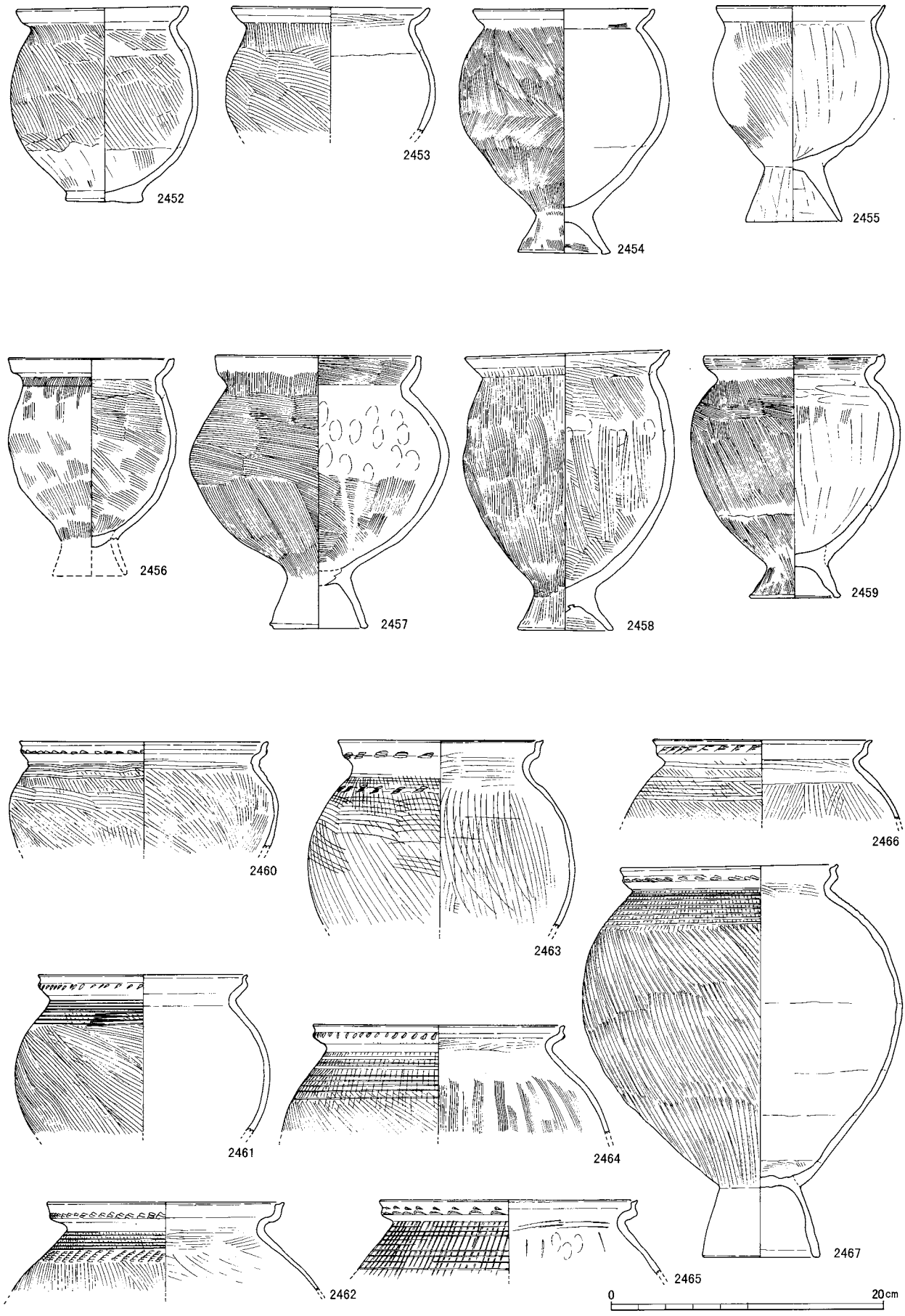
第319図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



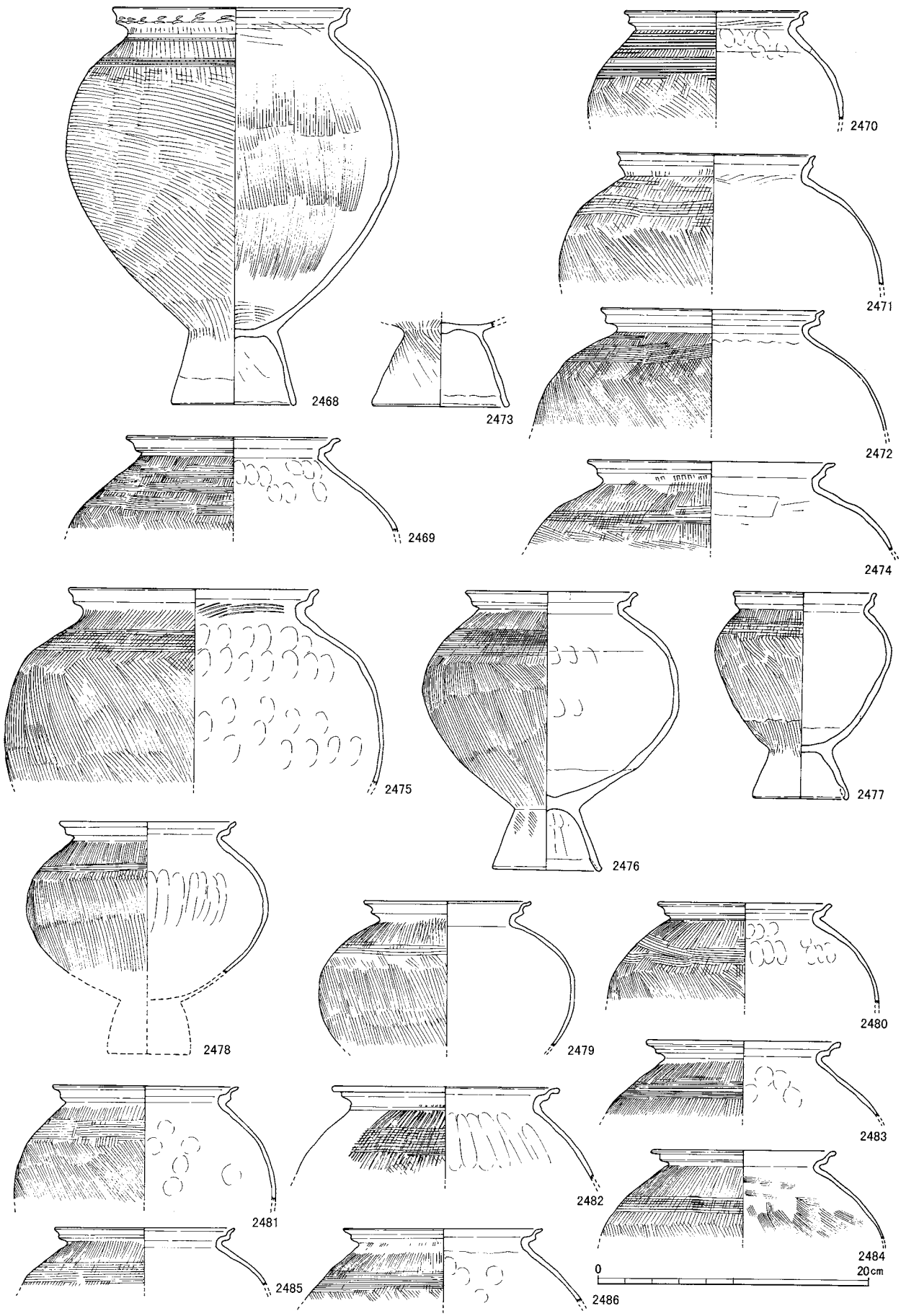
第320図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



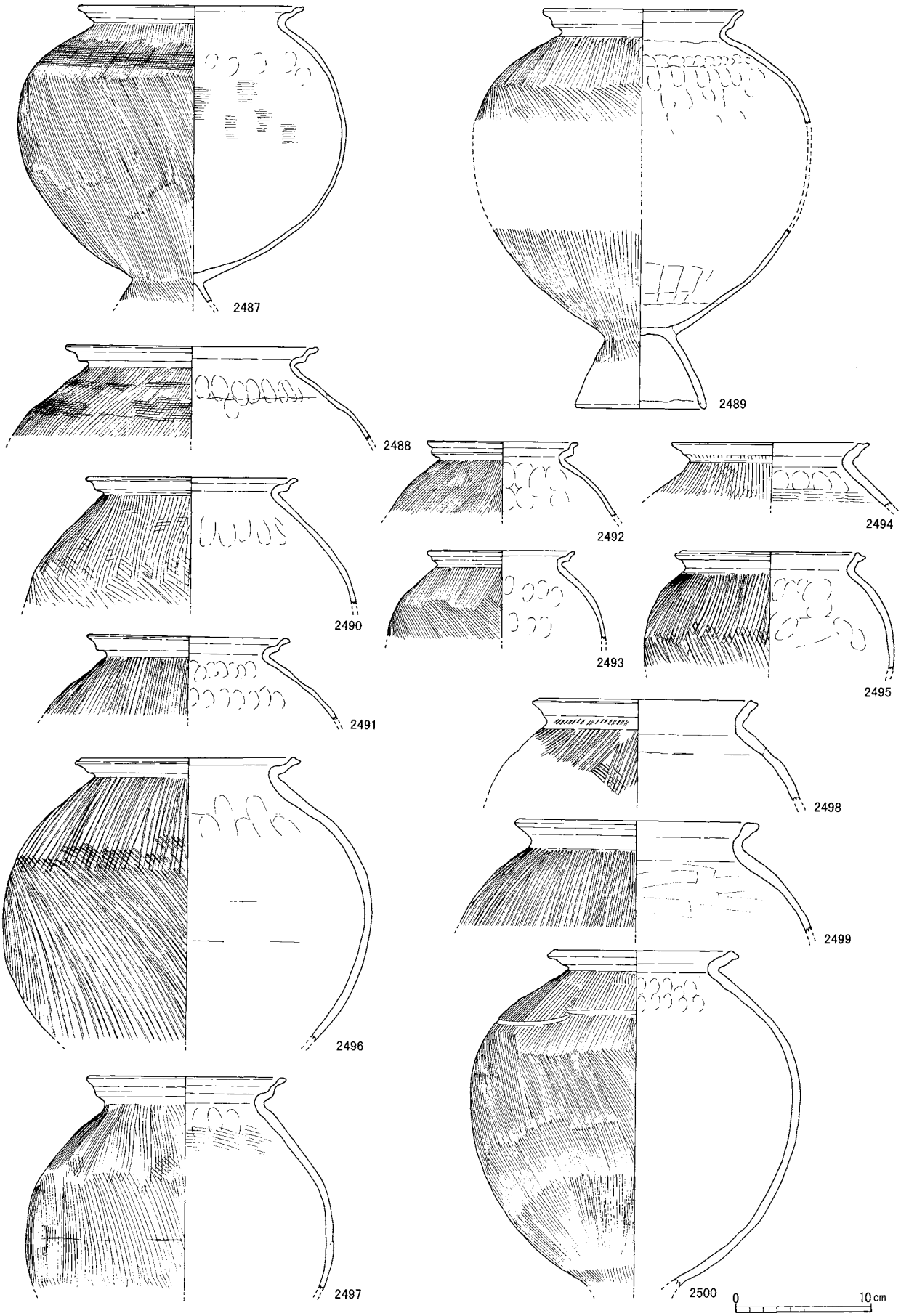
第321図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



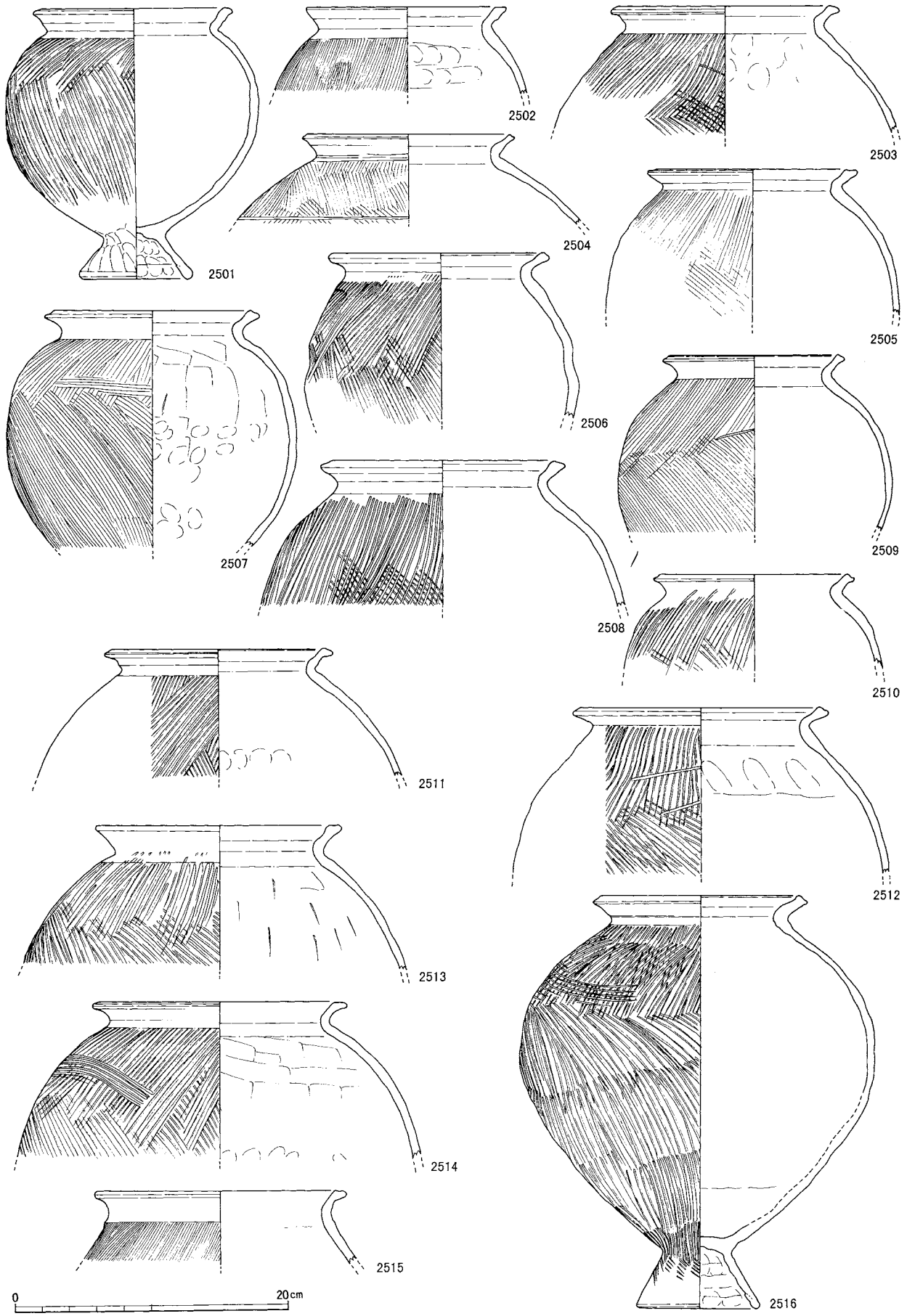
第322図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



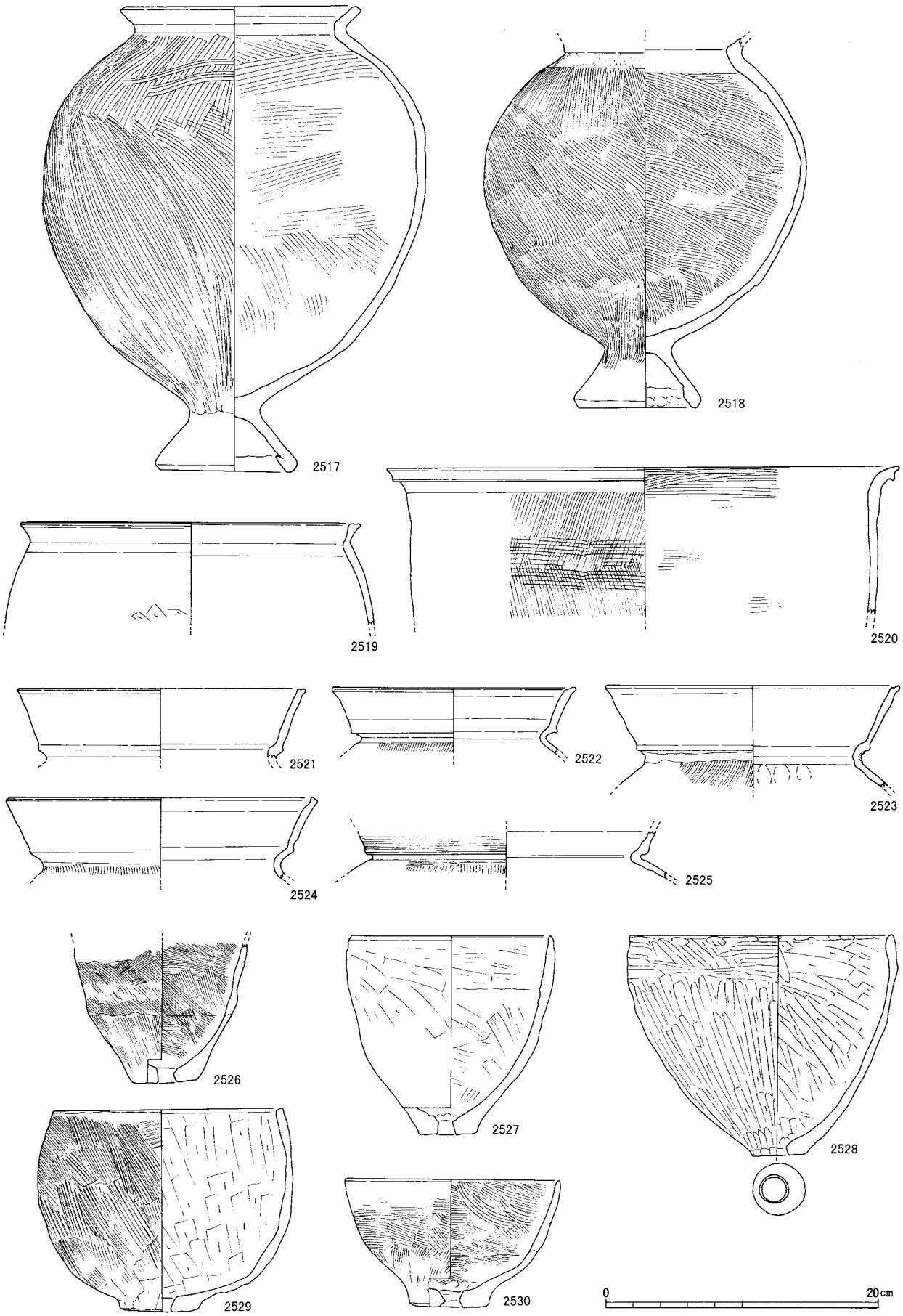
第323図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



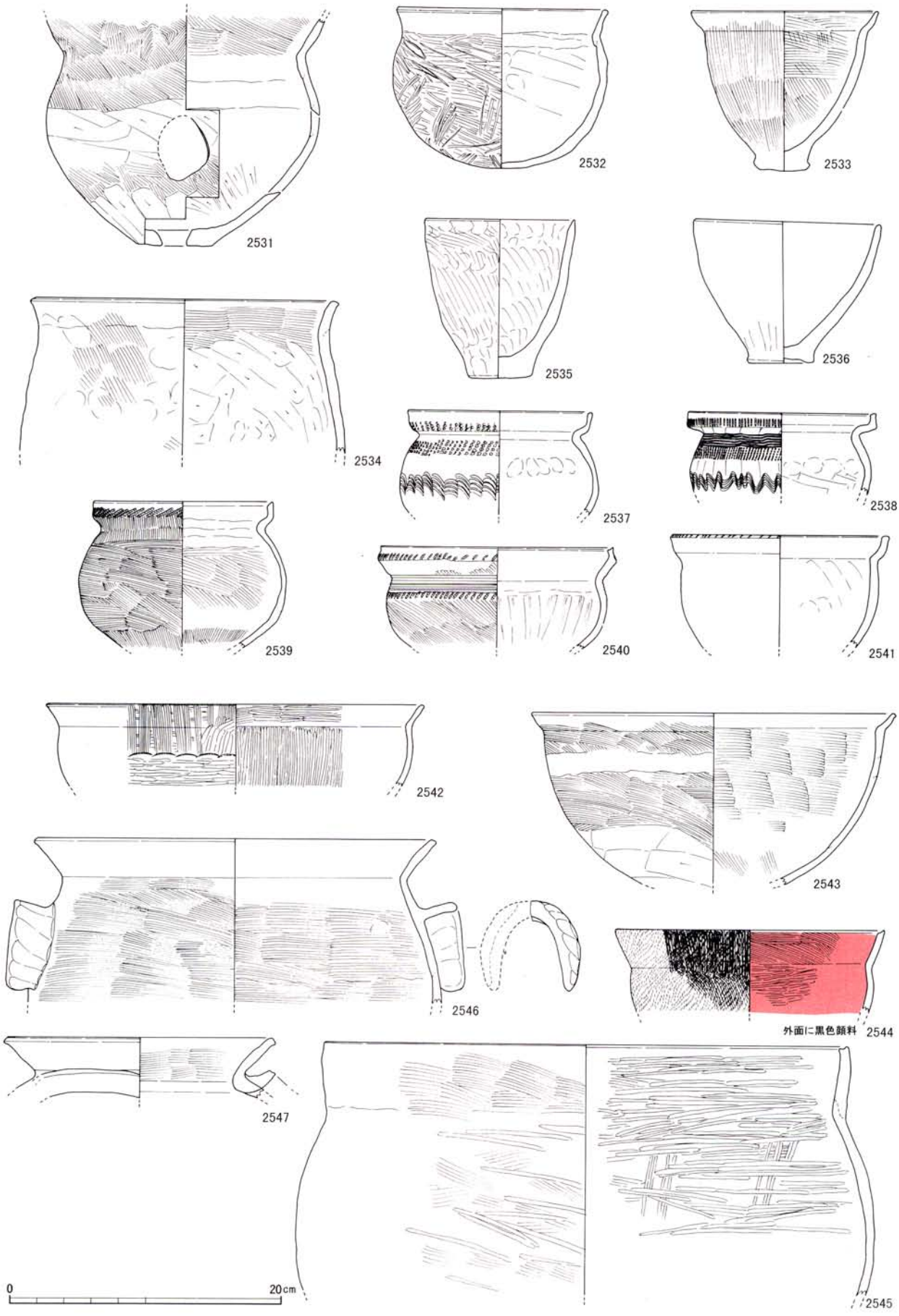
第324図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



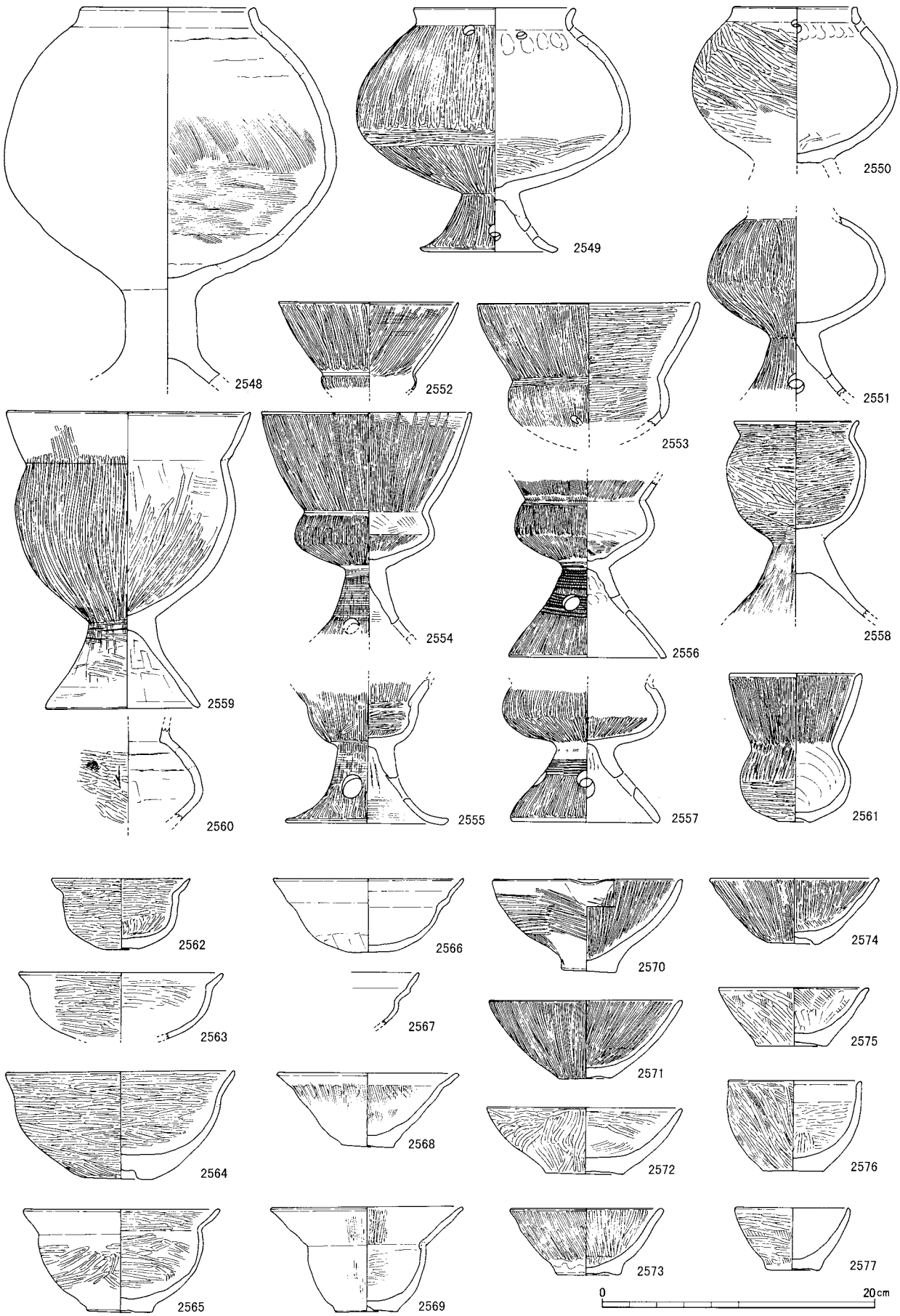
第325図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



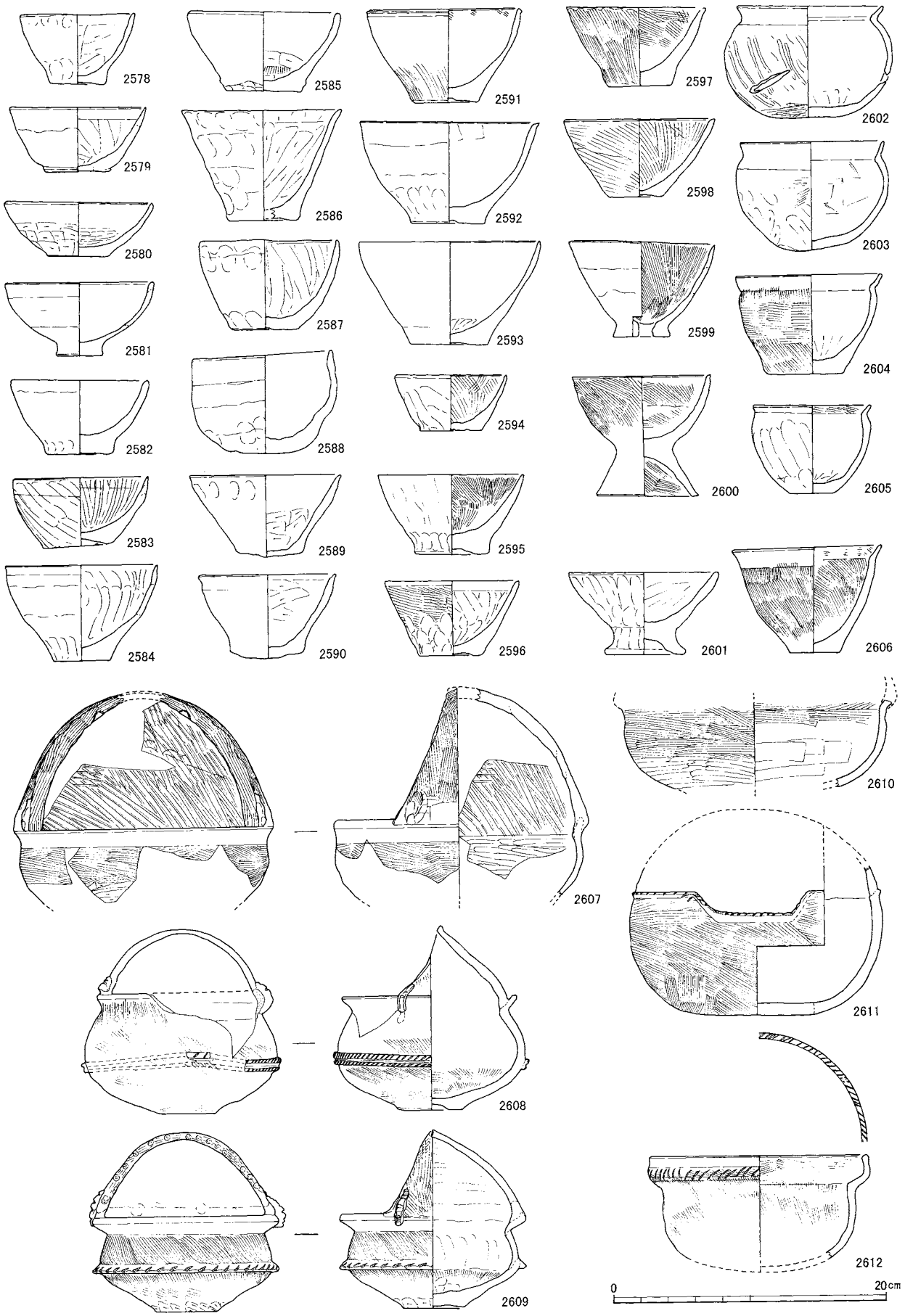
第326図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



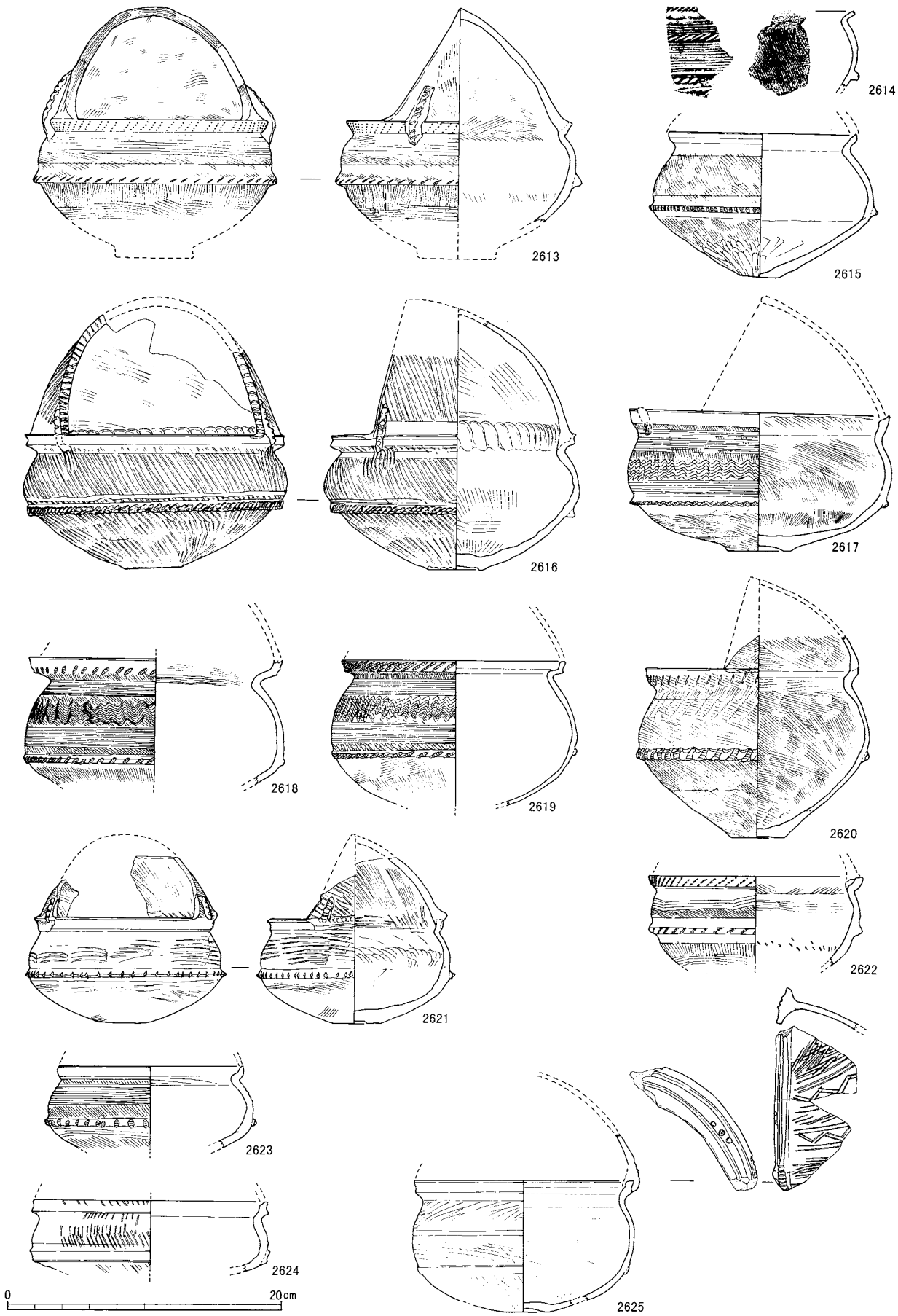
第327図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



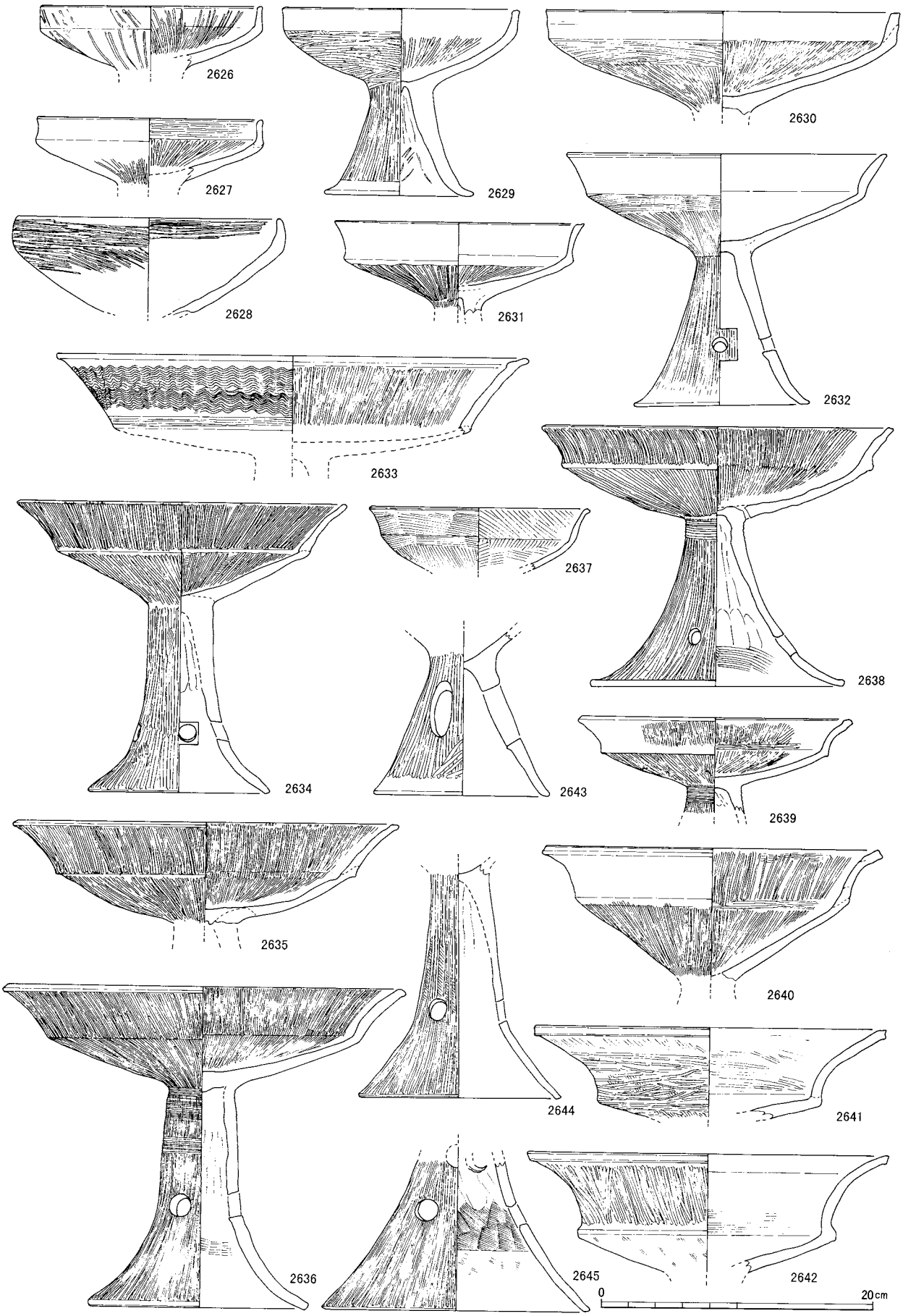
第328図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



第329図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

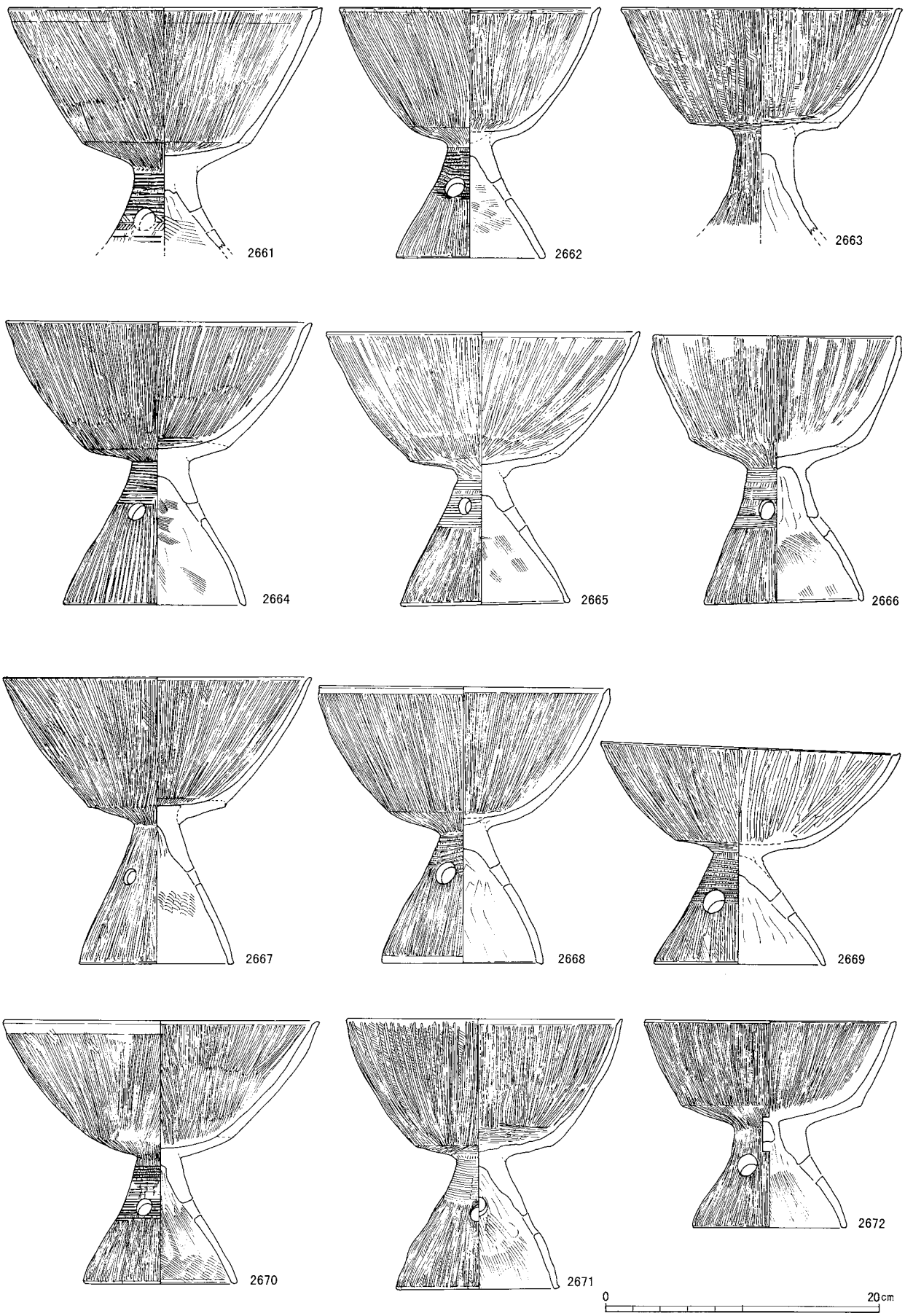


第330図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

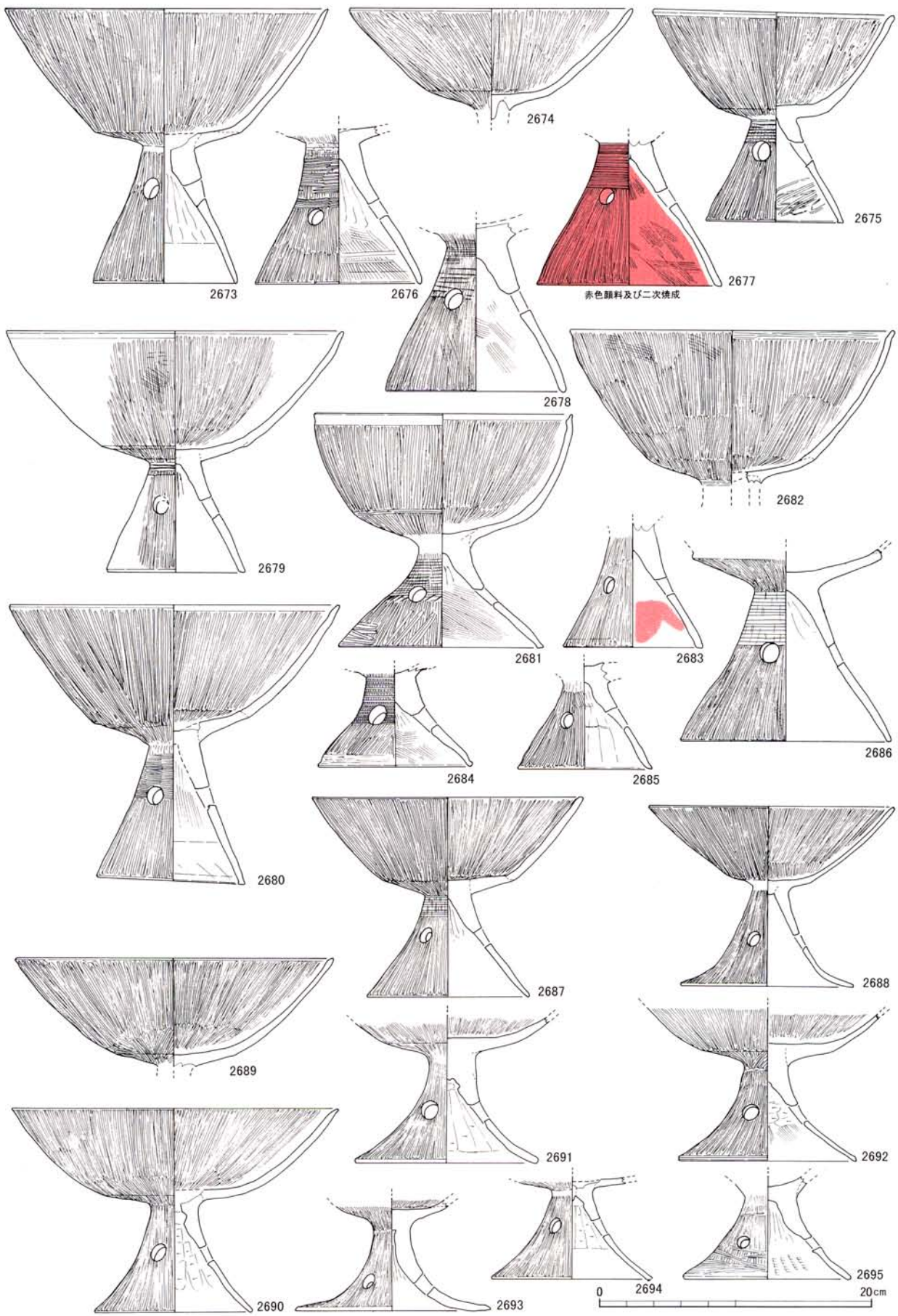


第331図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

第332図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

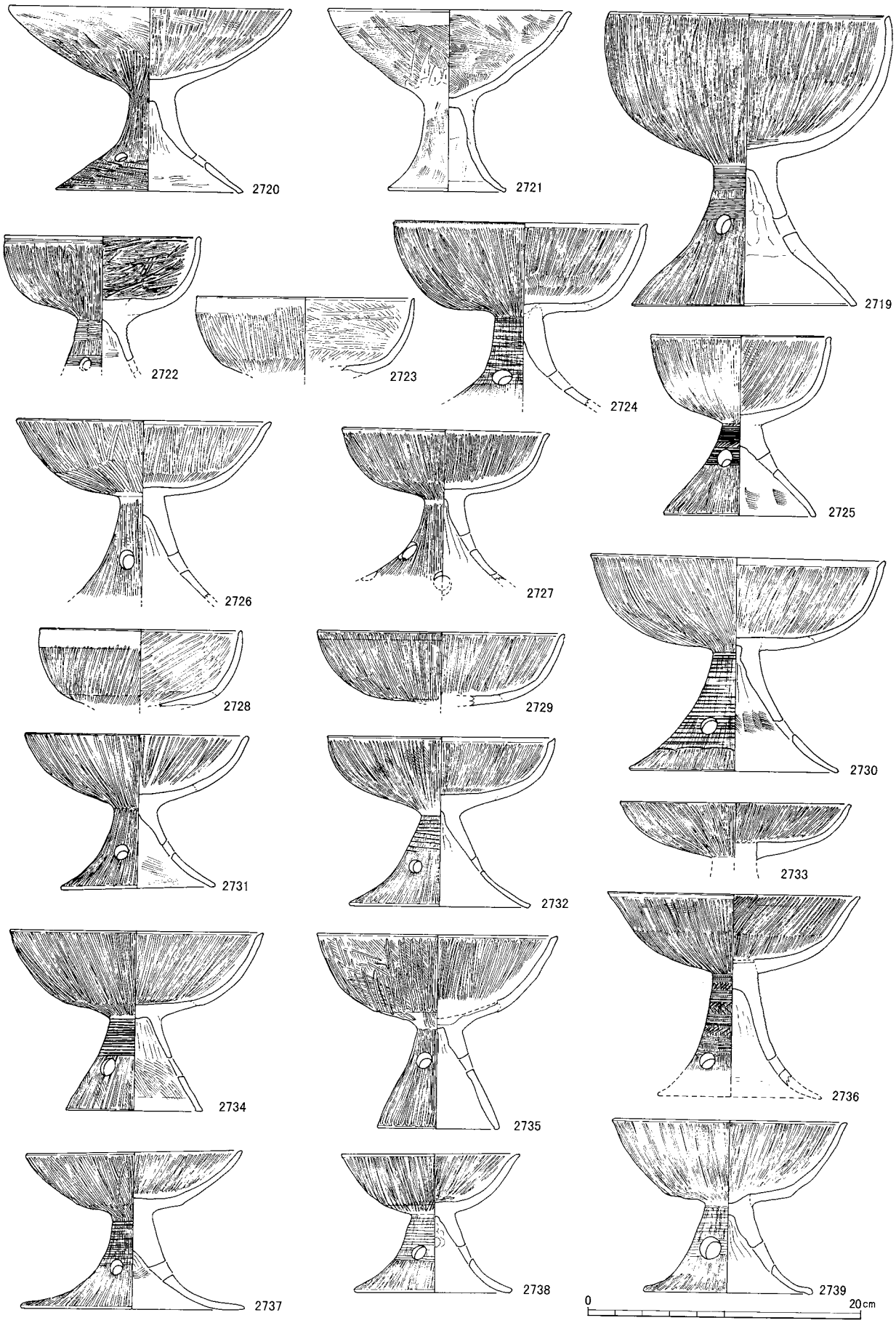


第333図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

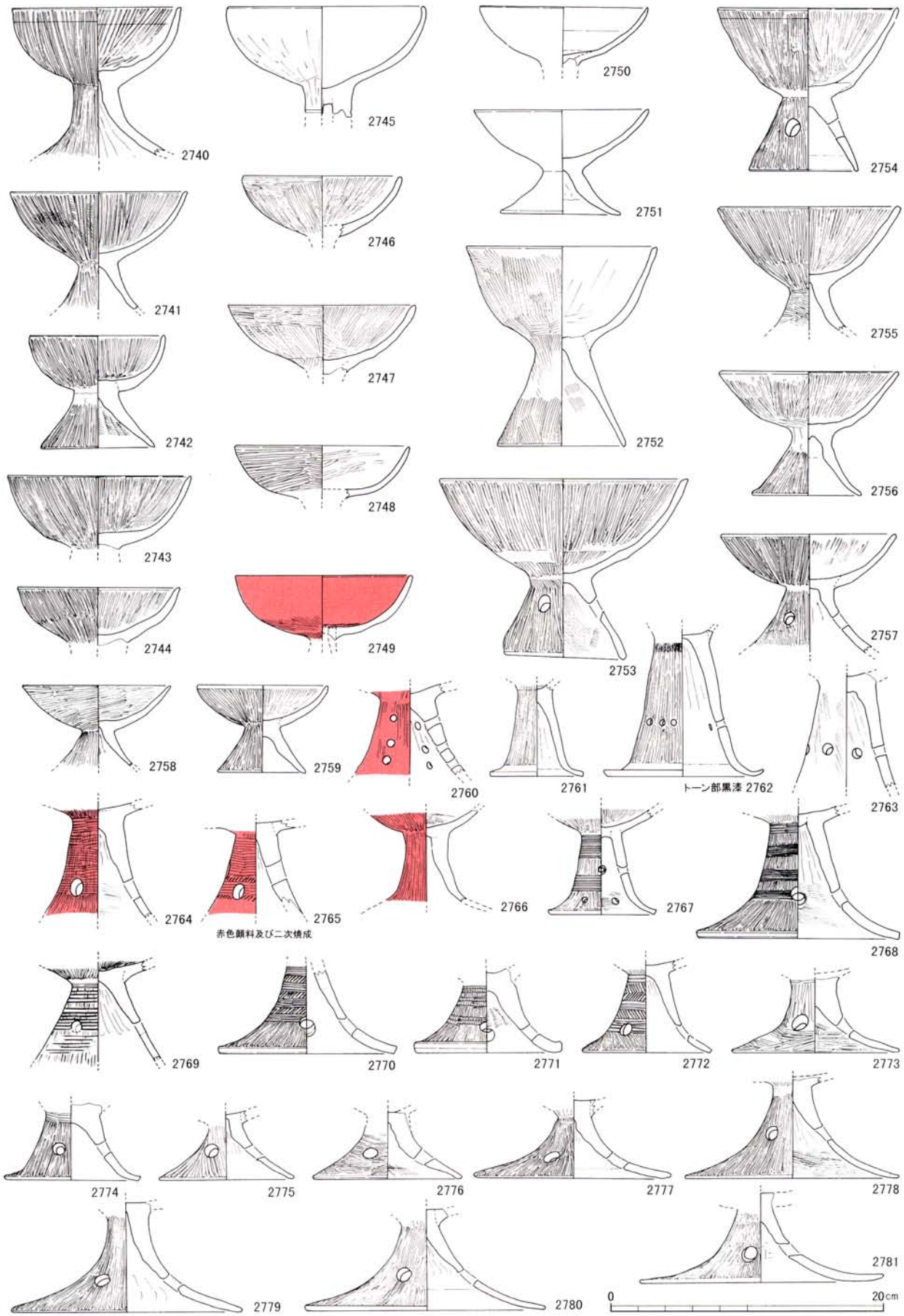


第334図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

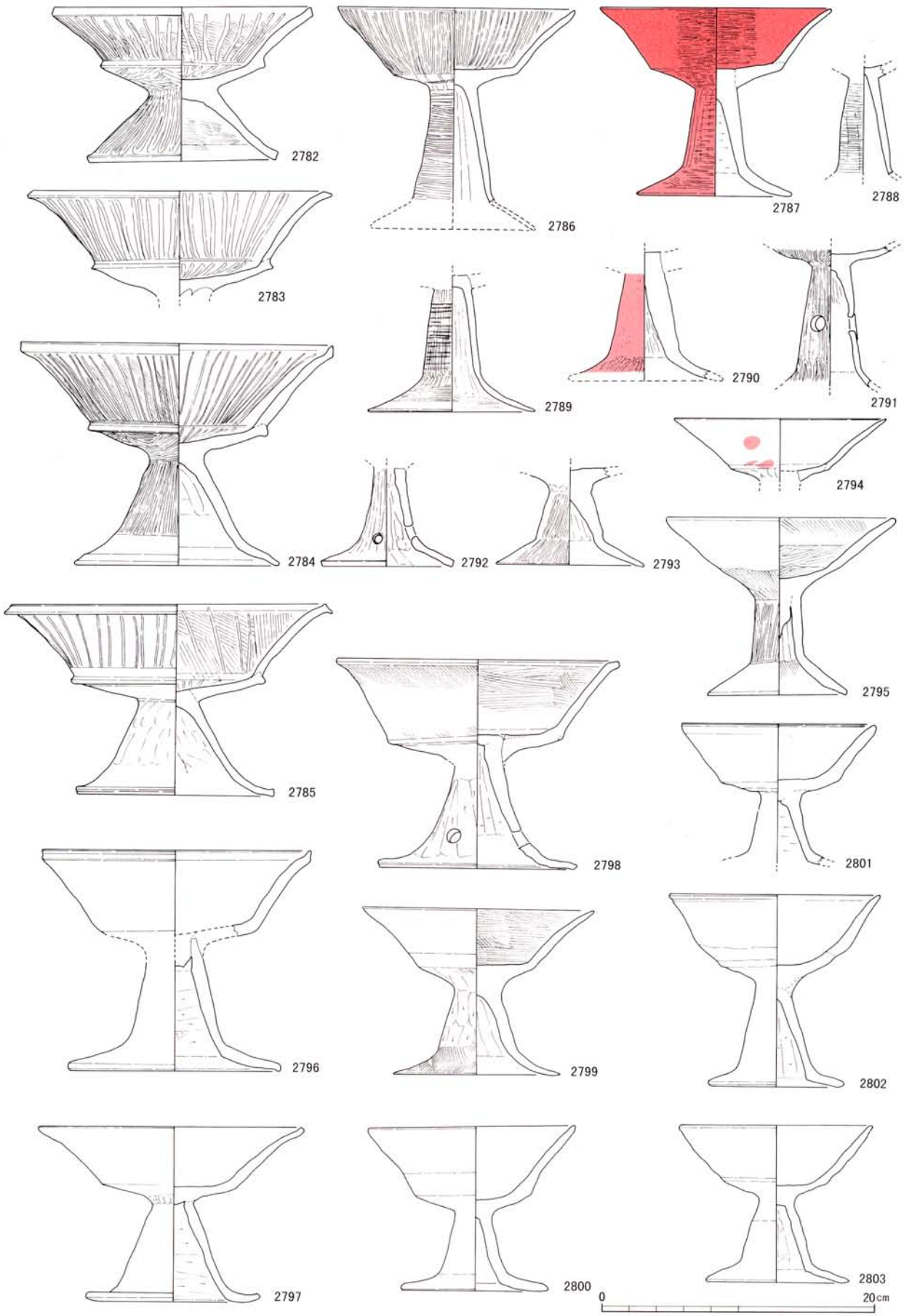
第335図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



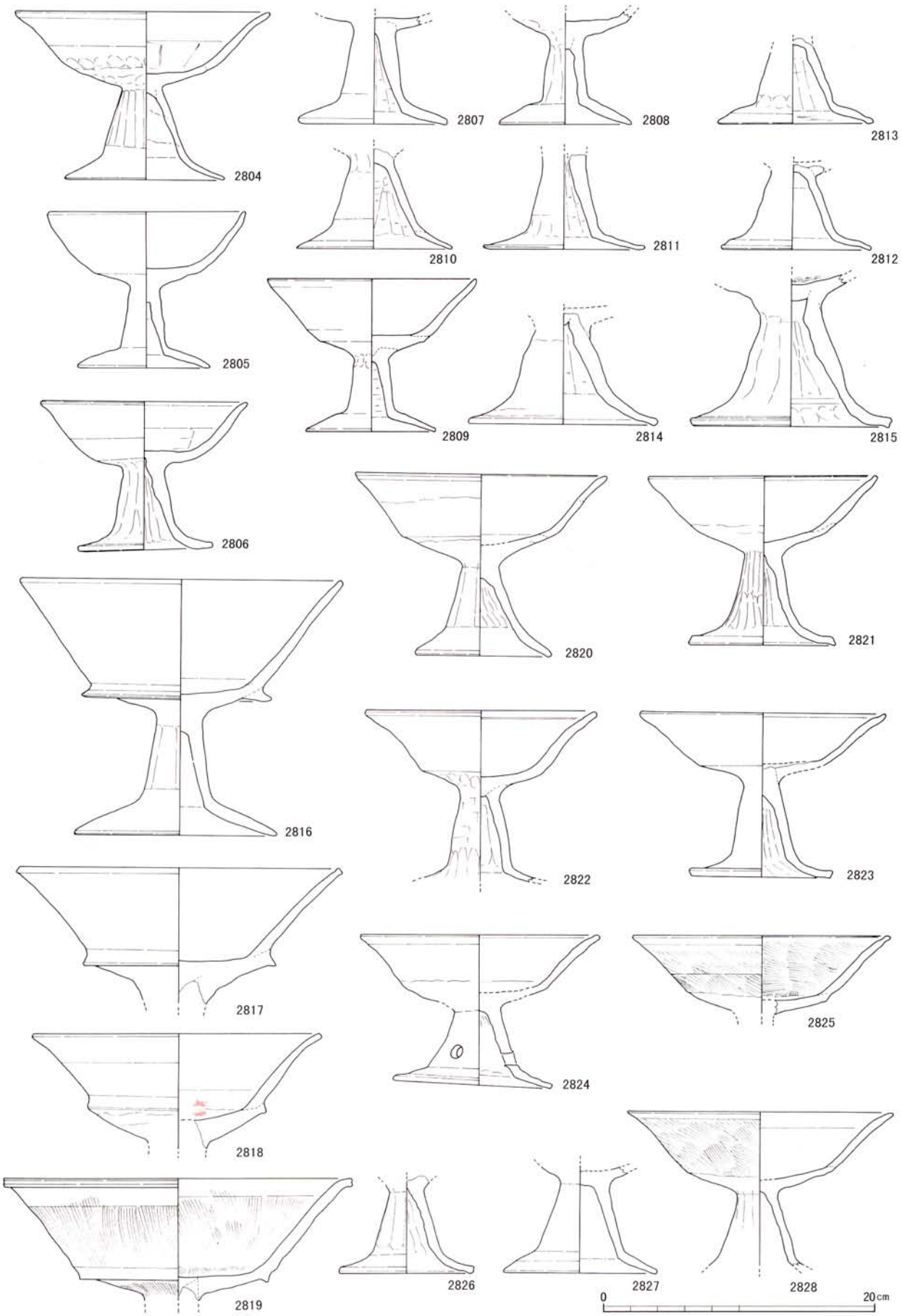
第336図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



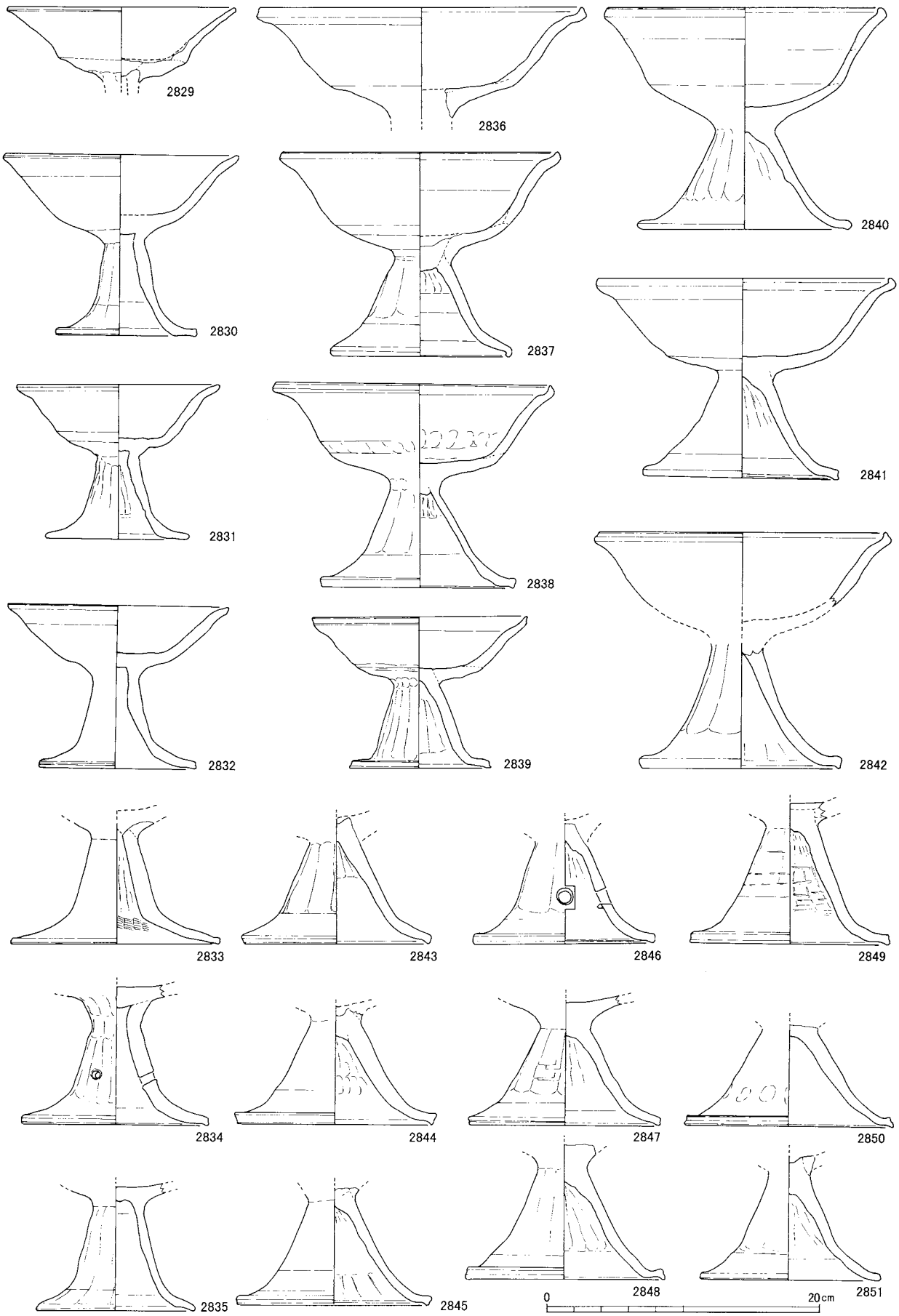
第337図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



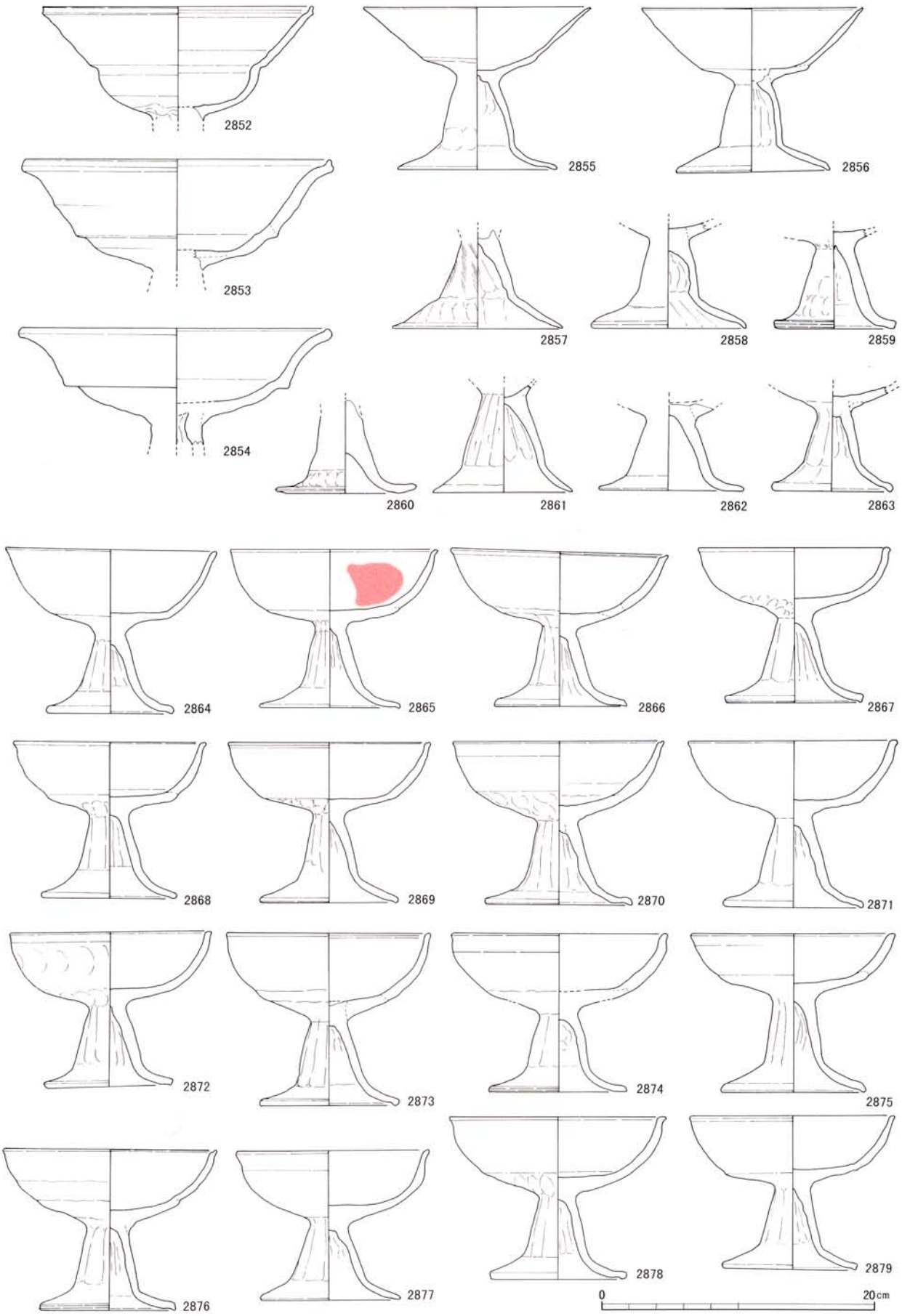
第338図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



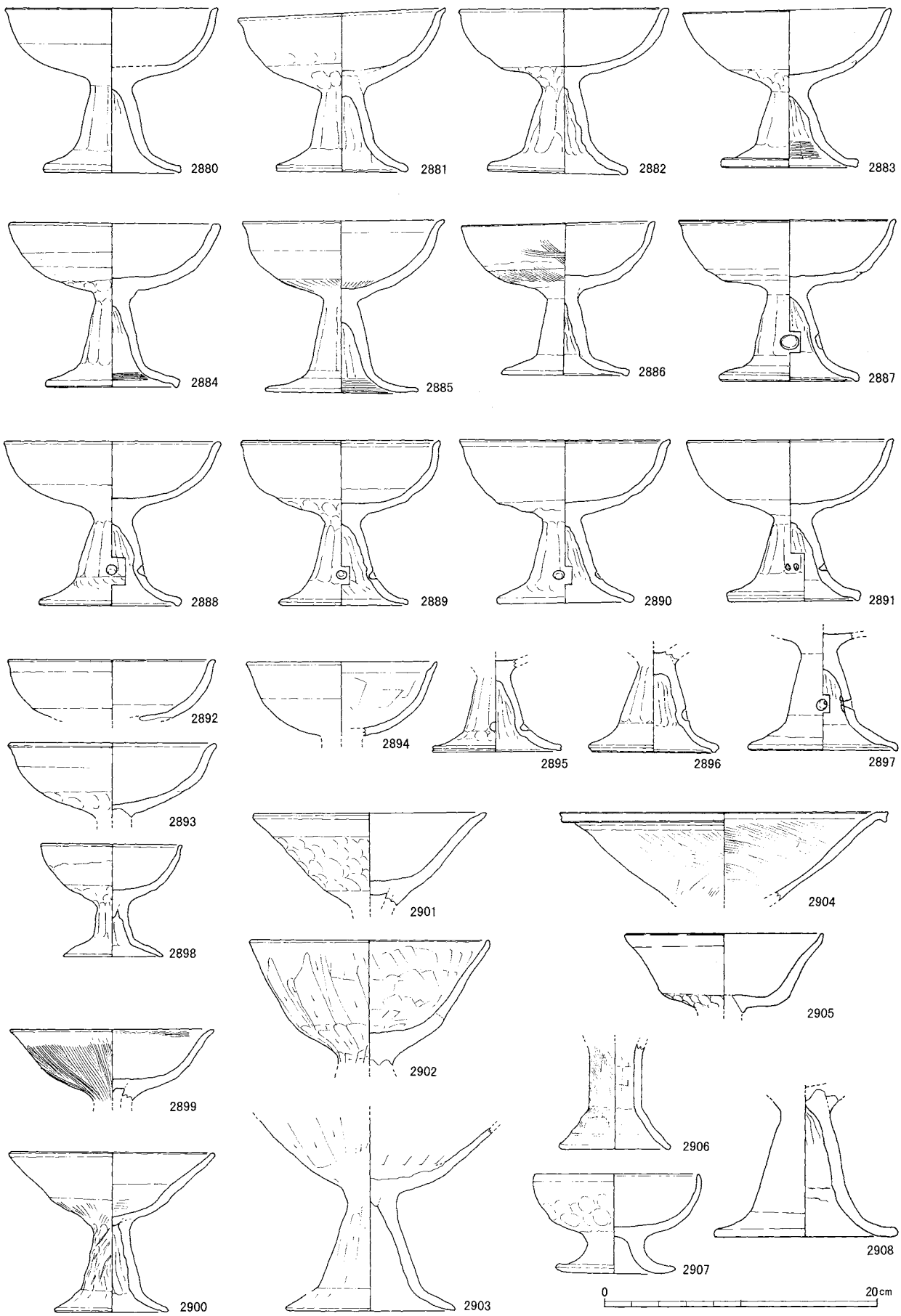
第339図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



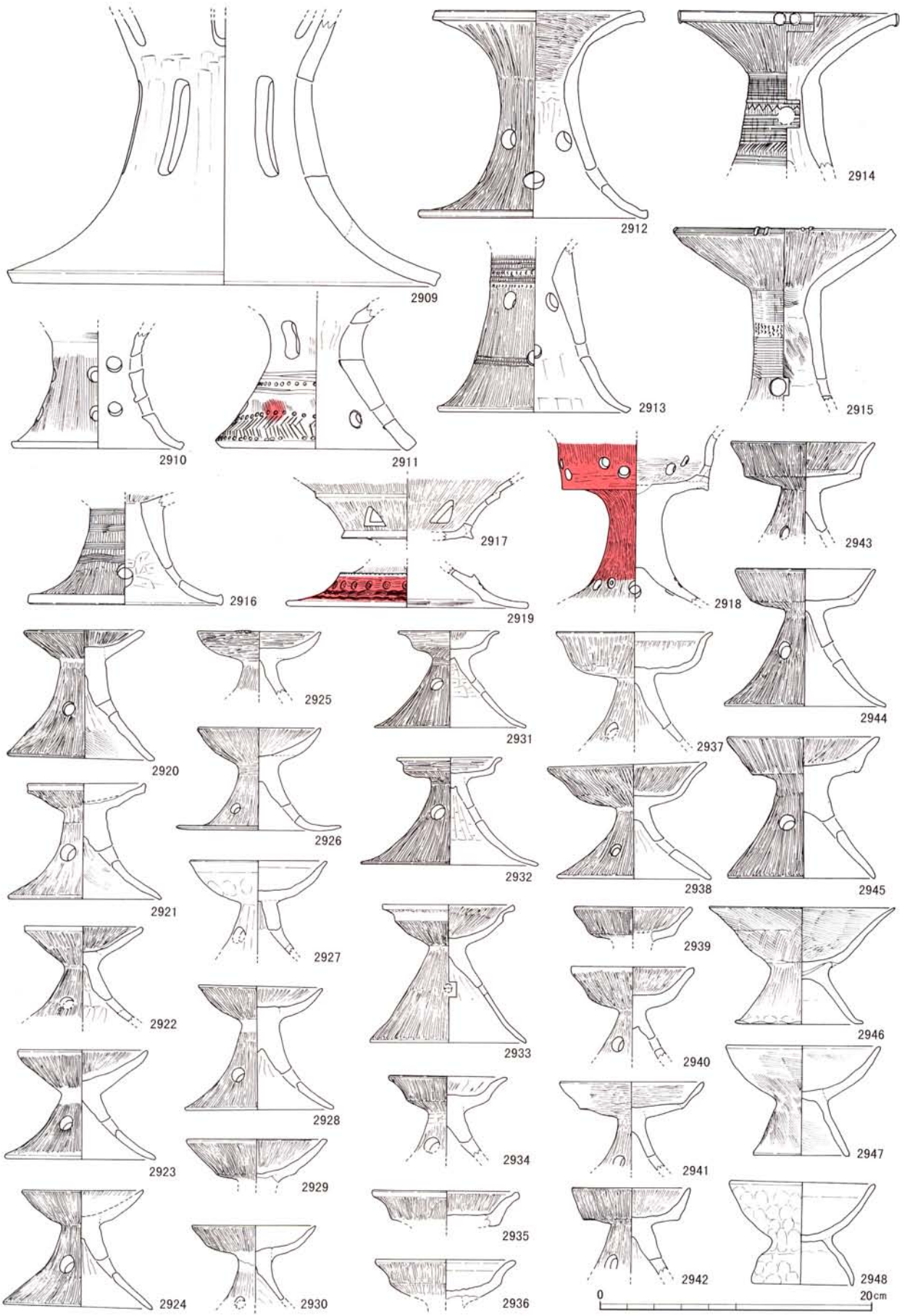
第340図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



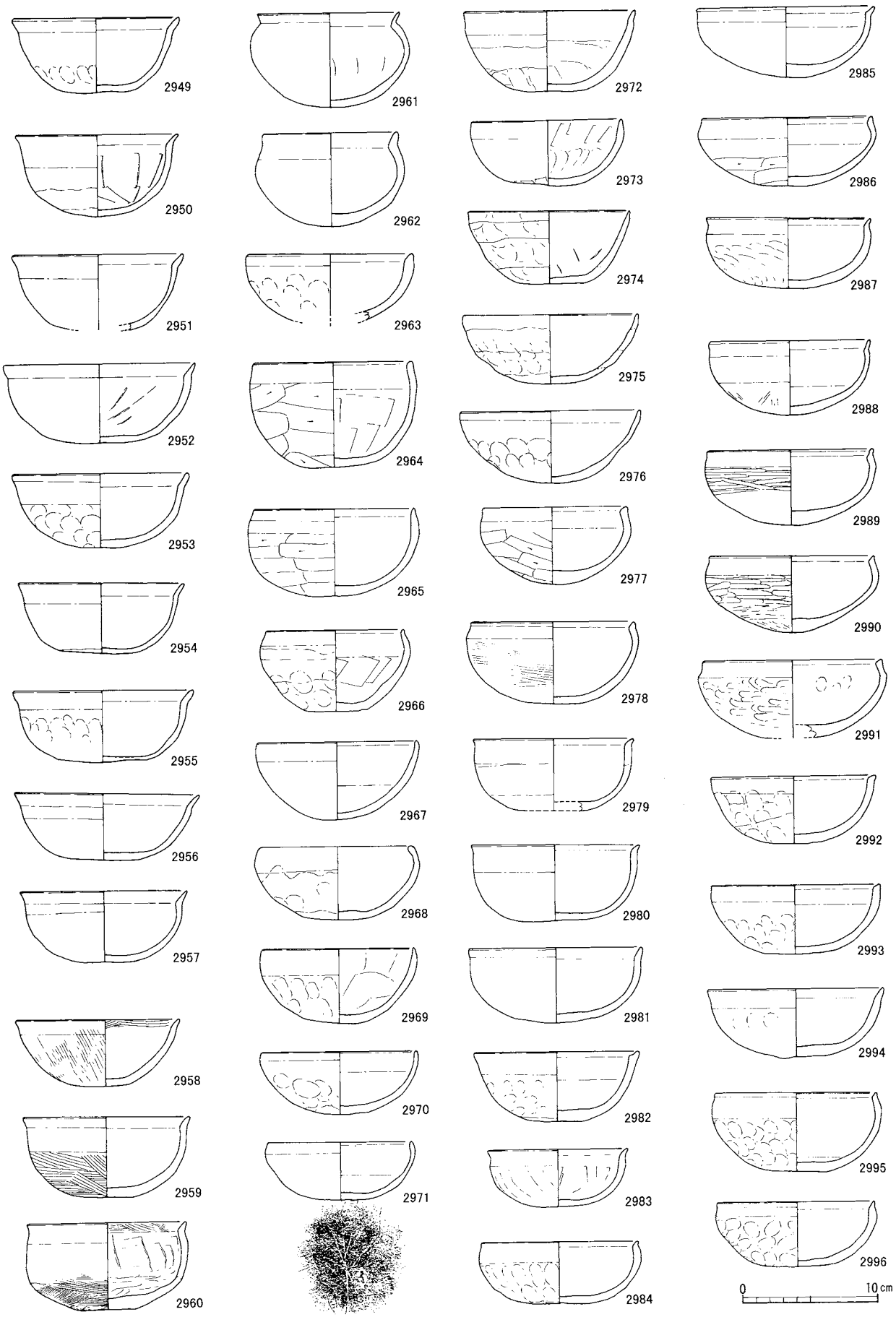
第341図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



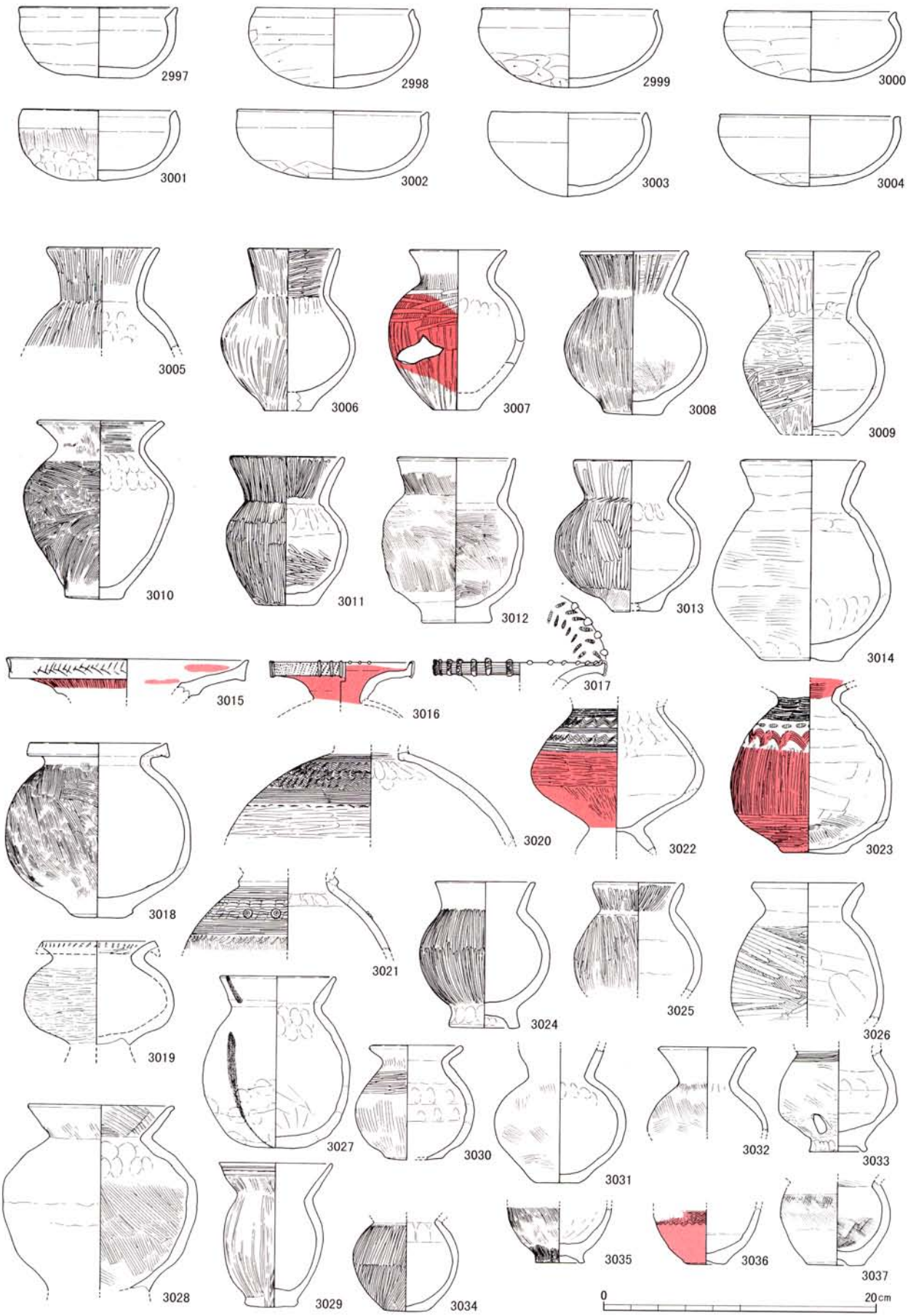
第342図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



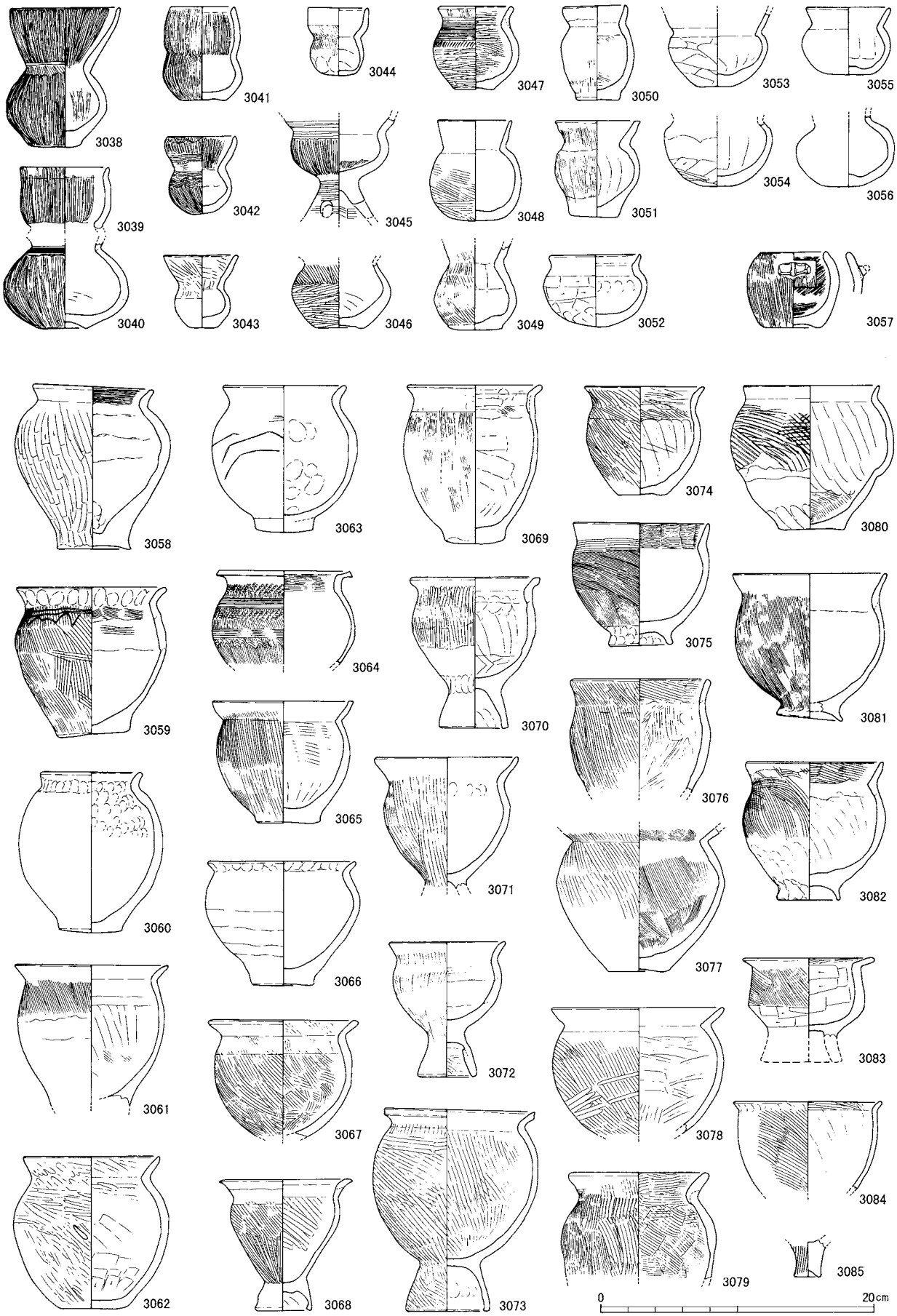
第343図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



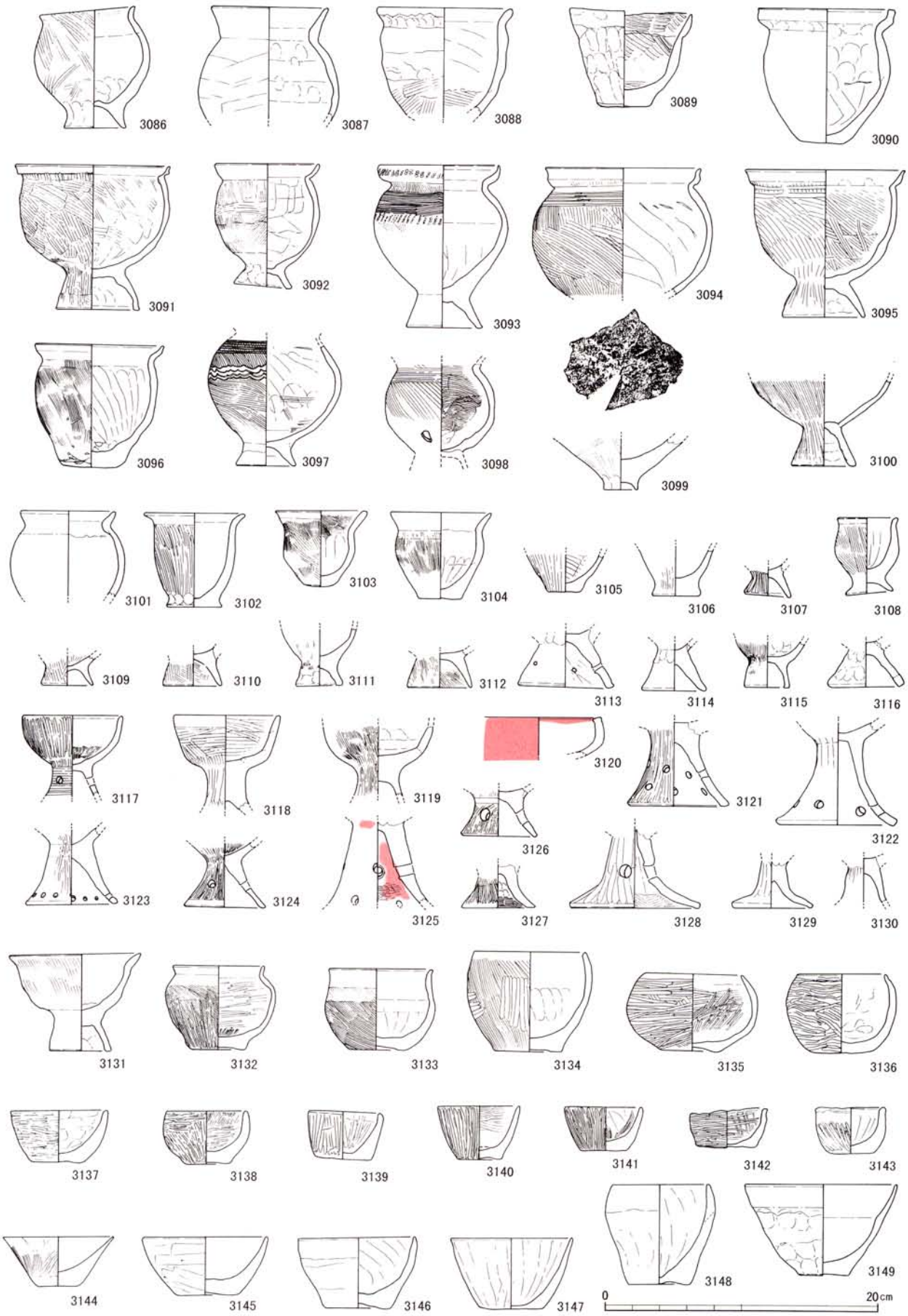
第344図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



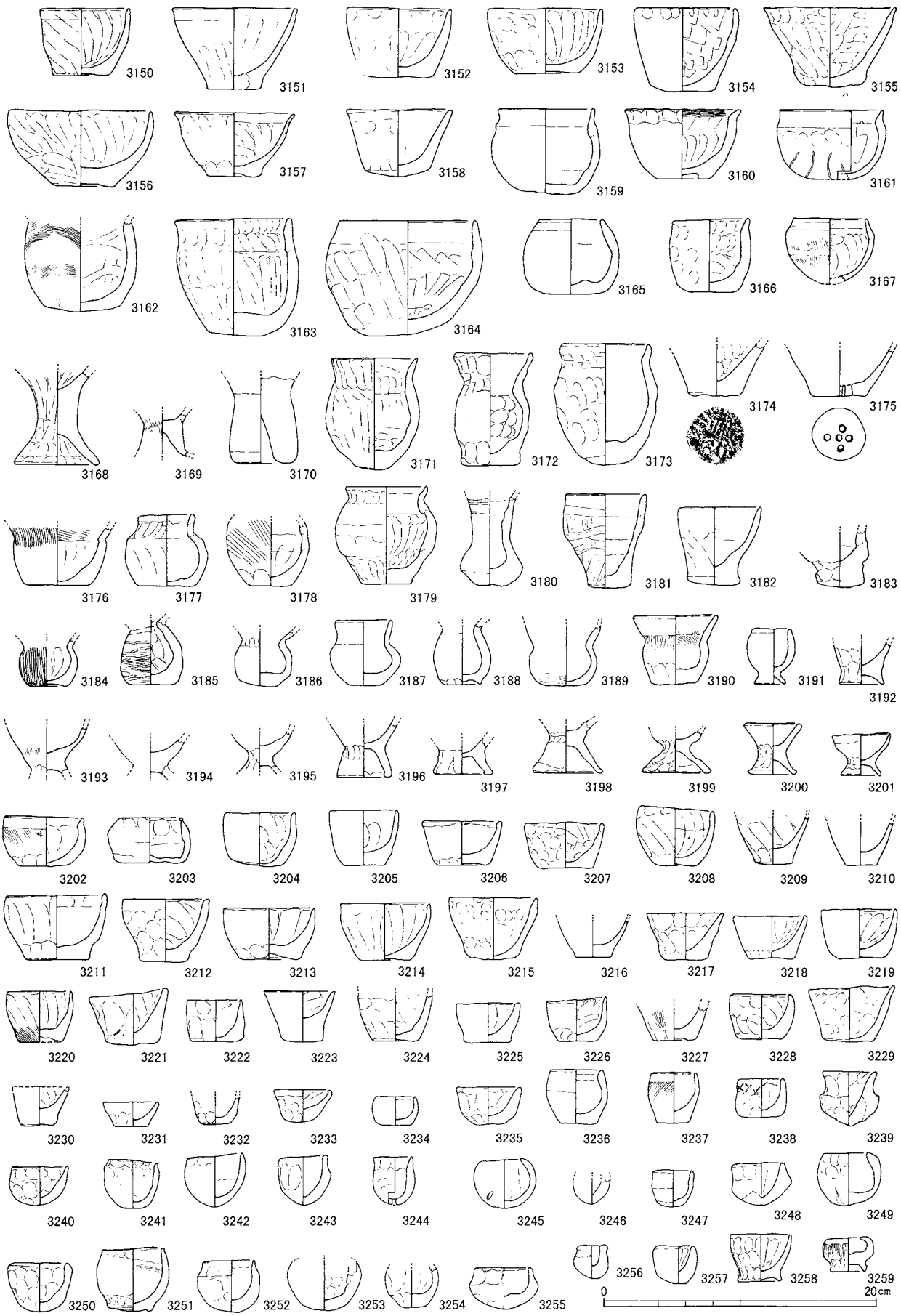
第345図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



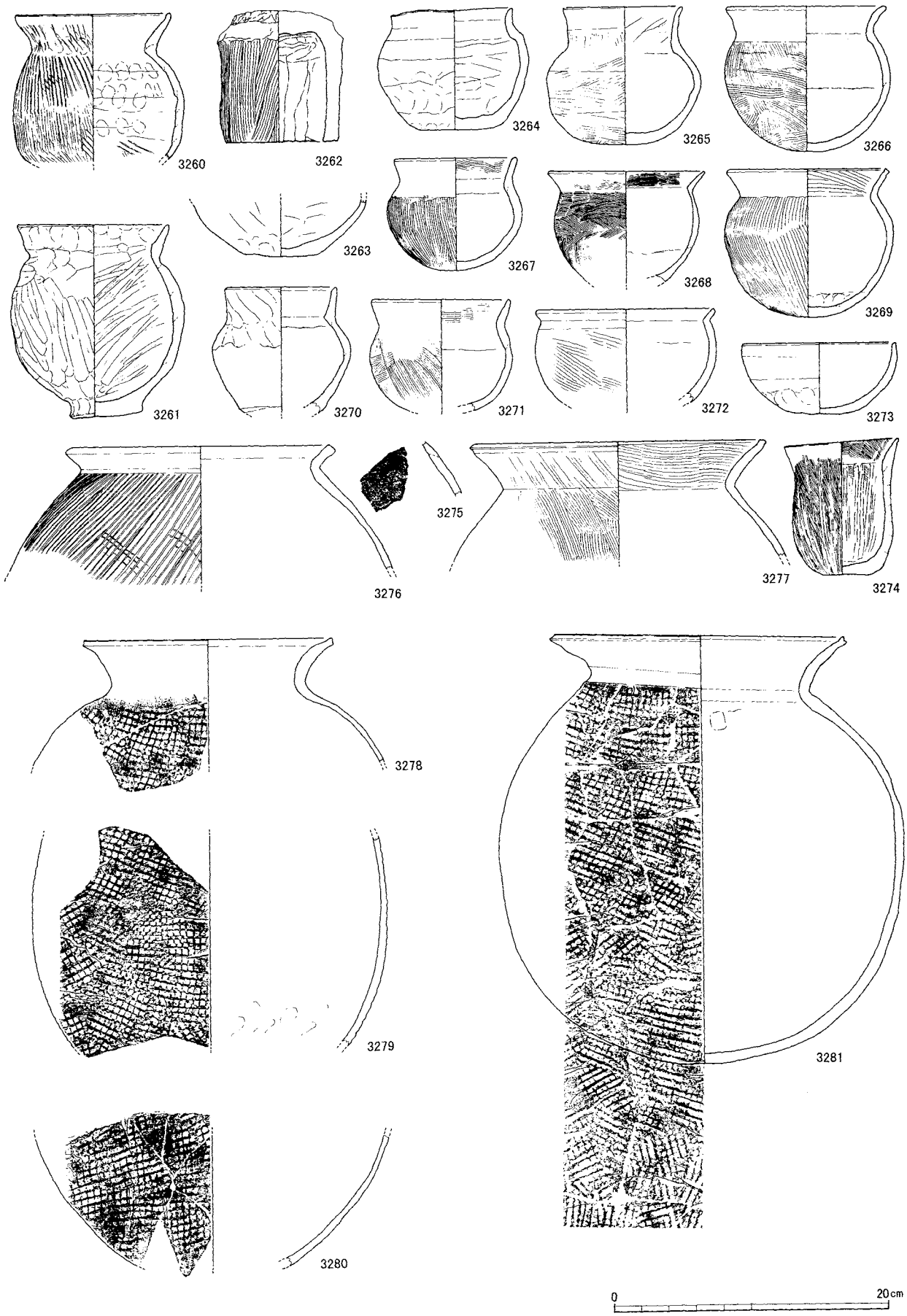
第346図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



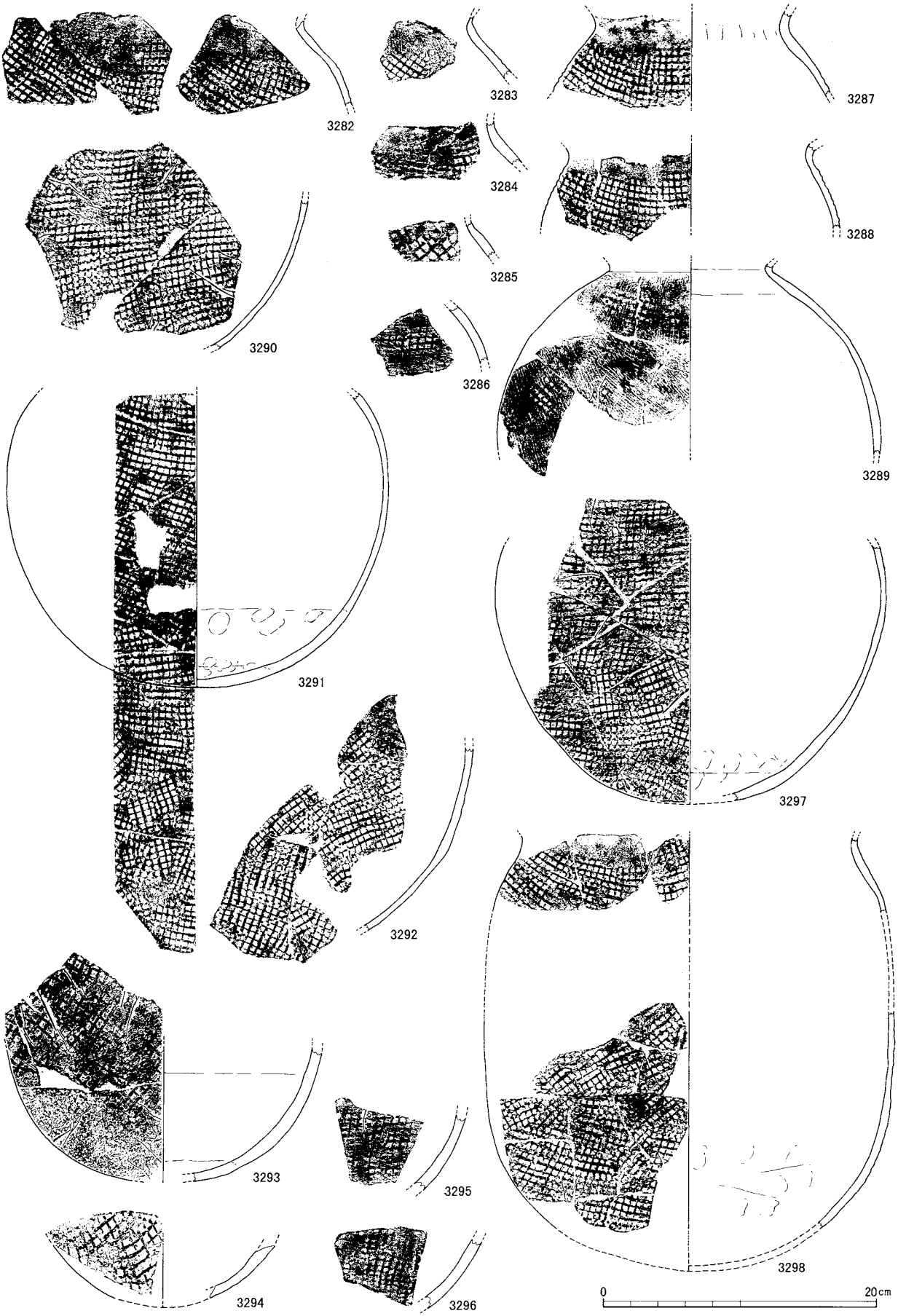
第347図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



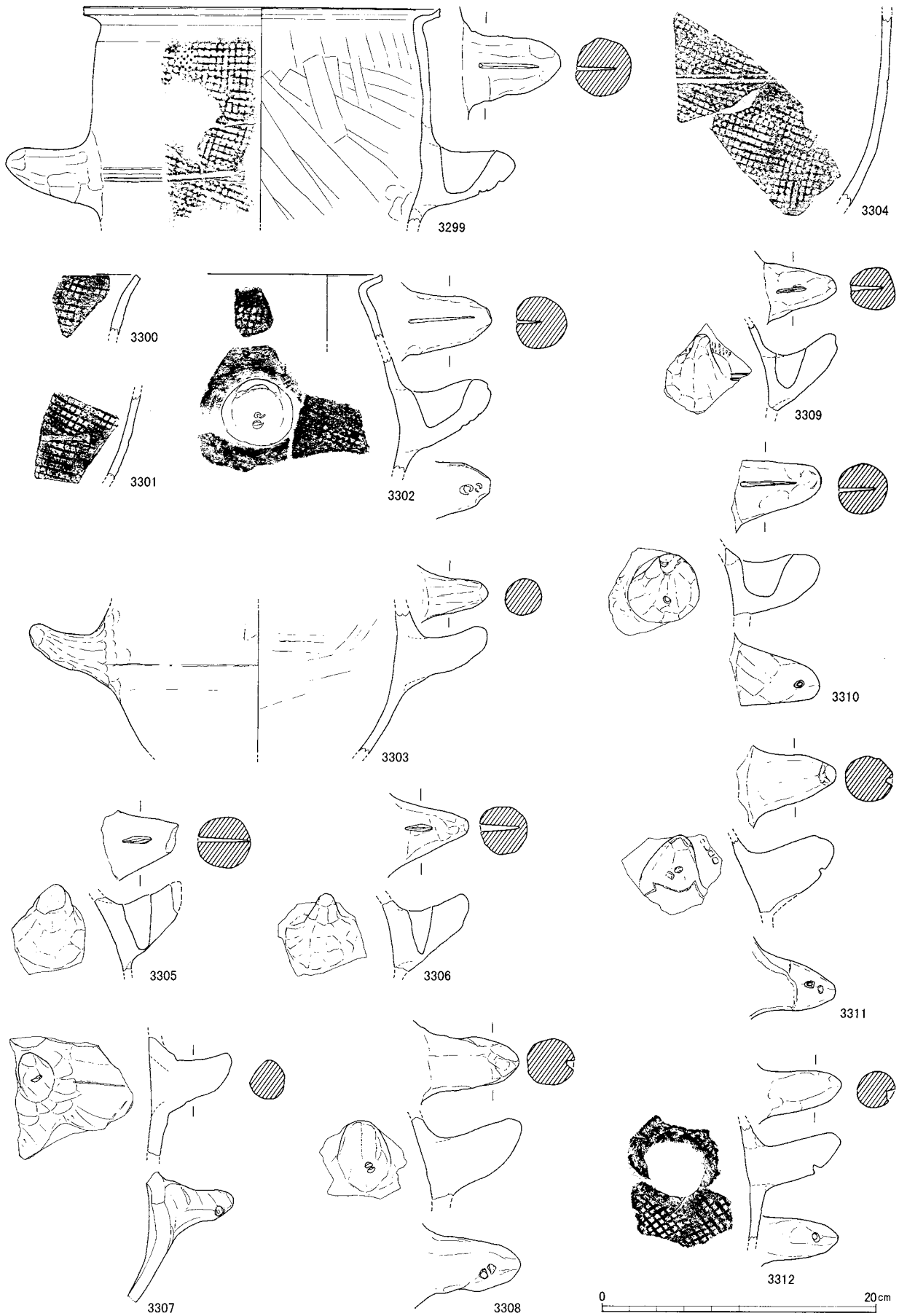
第348図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



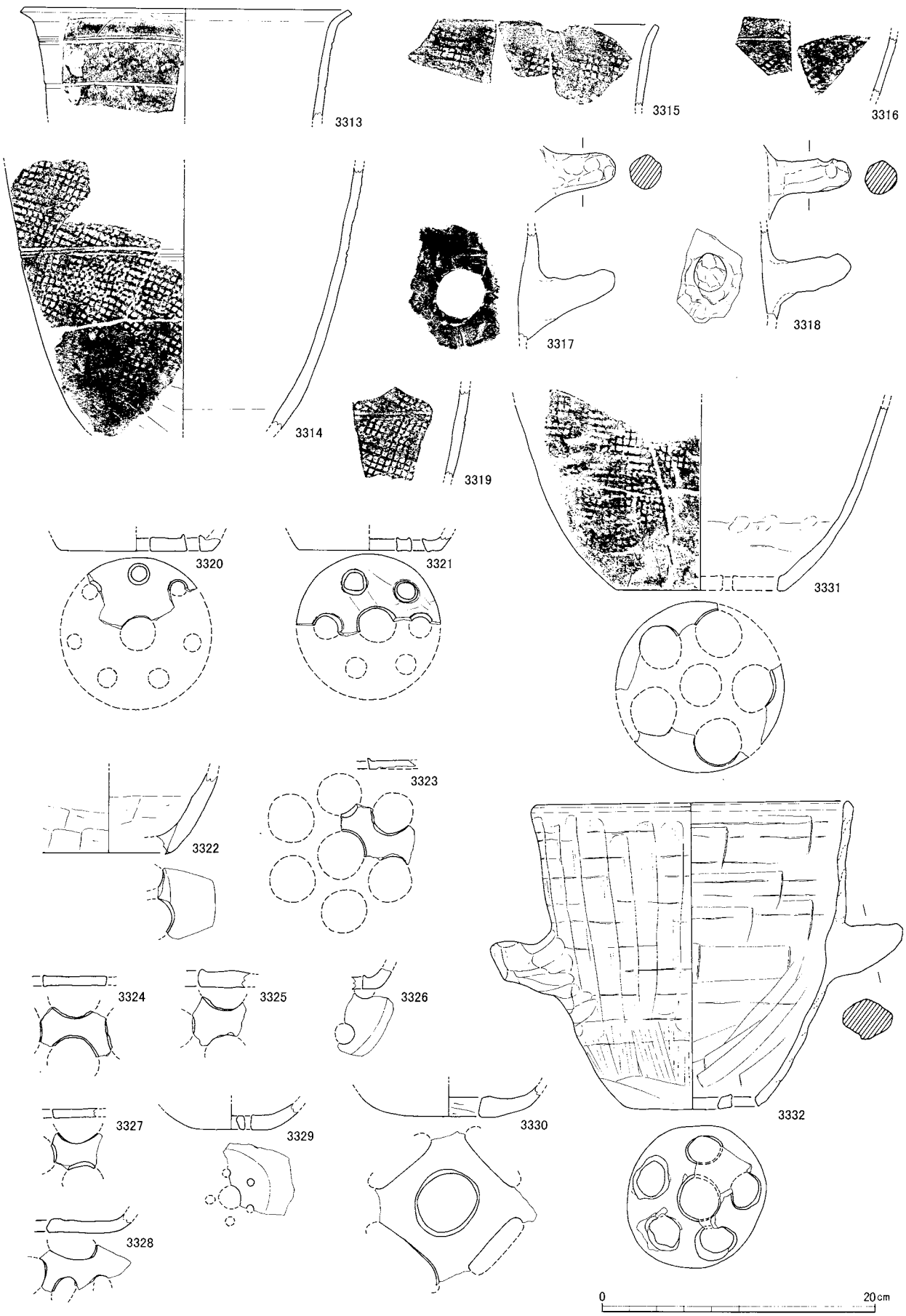
第349図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



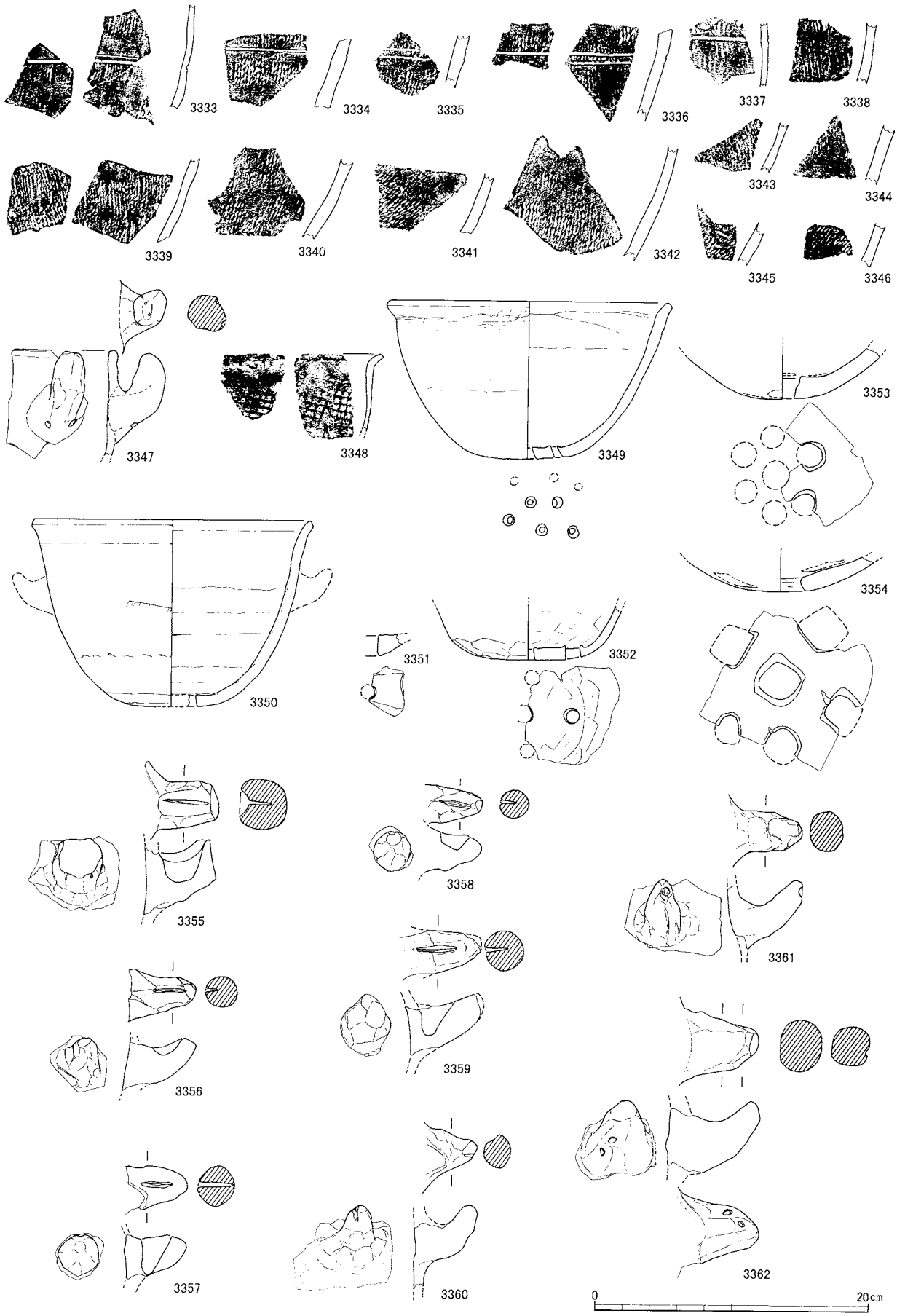
第350図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



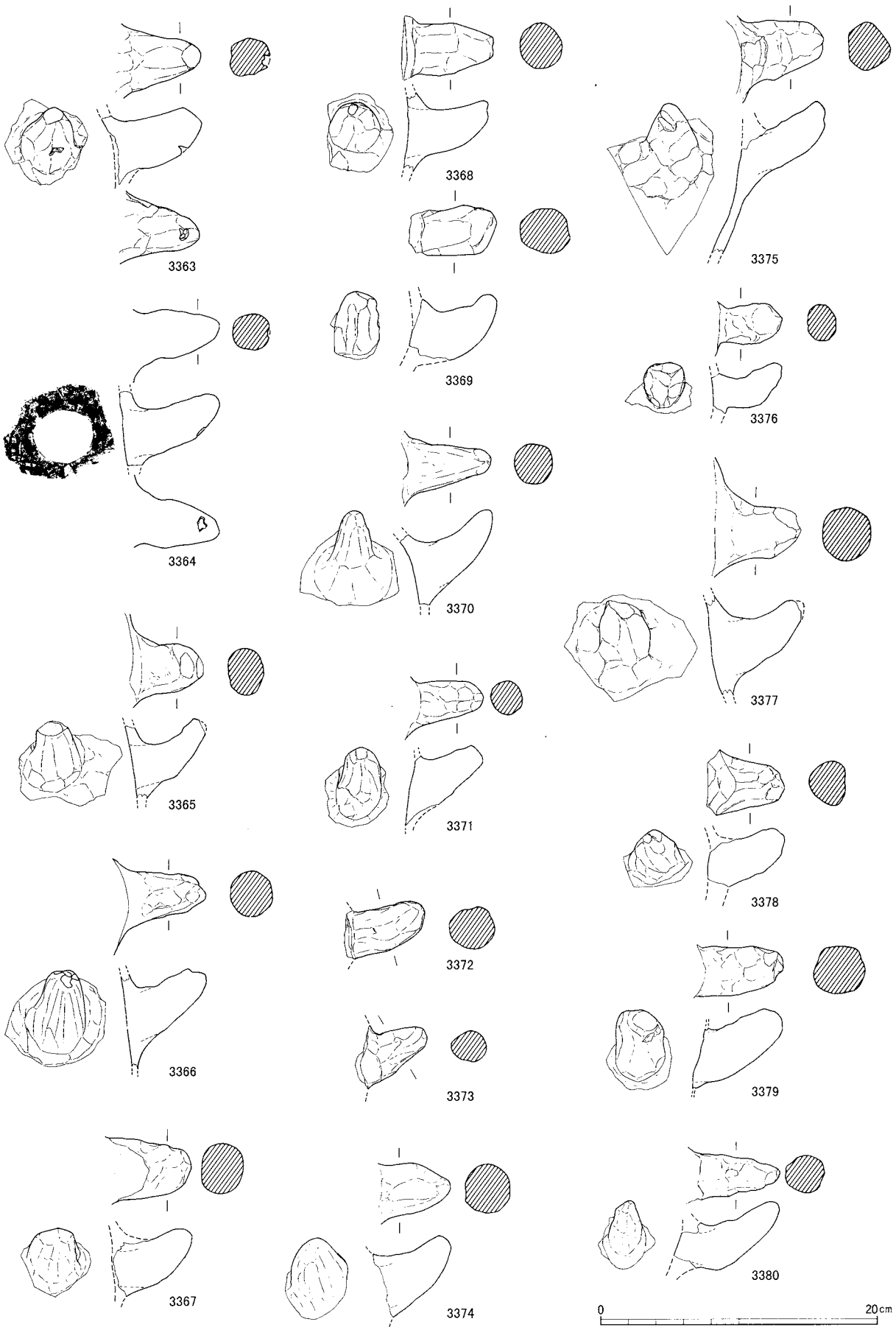
第351図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



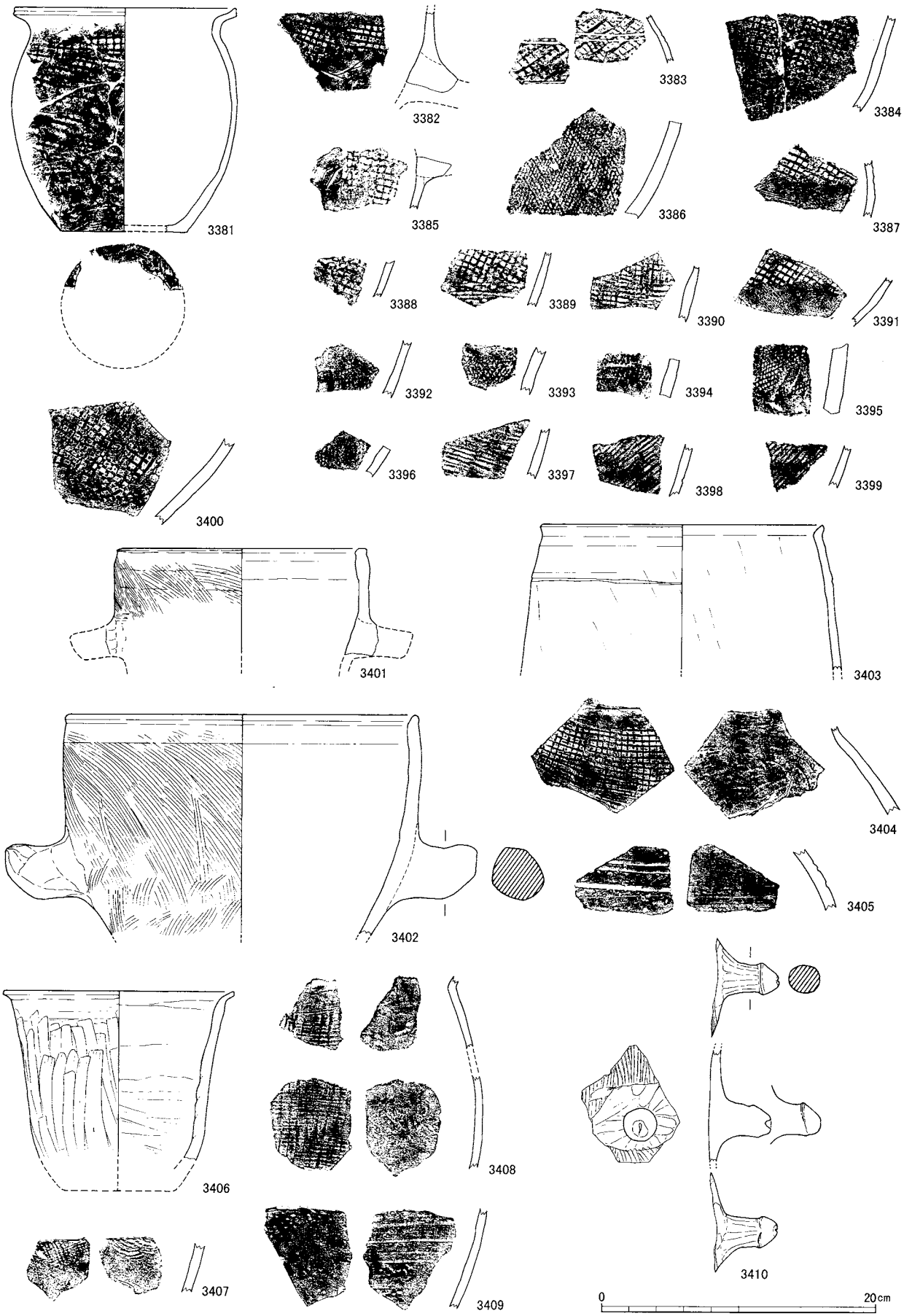
第352図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



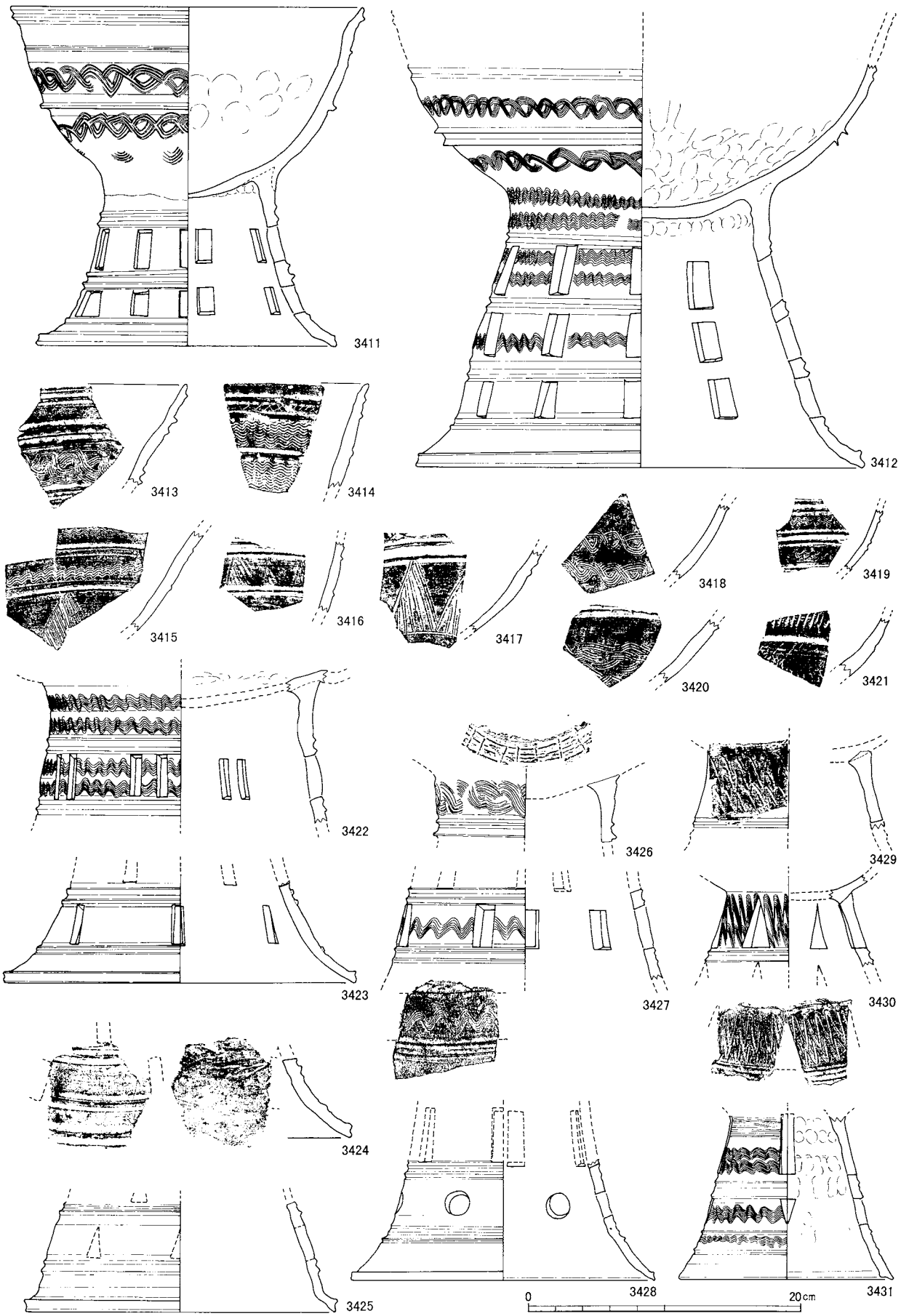
第353図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



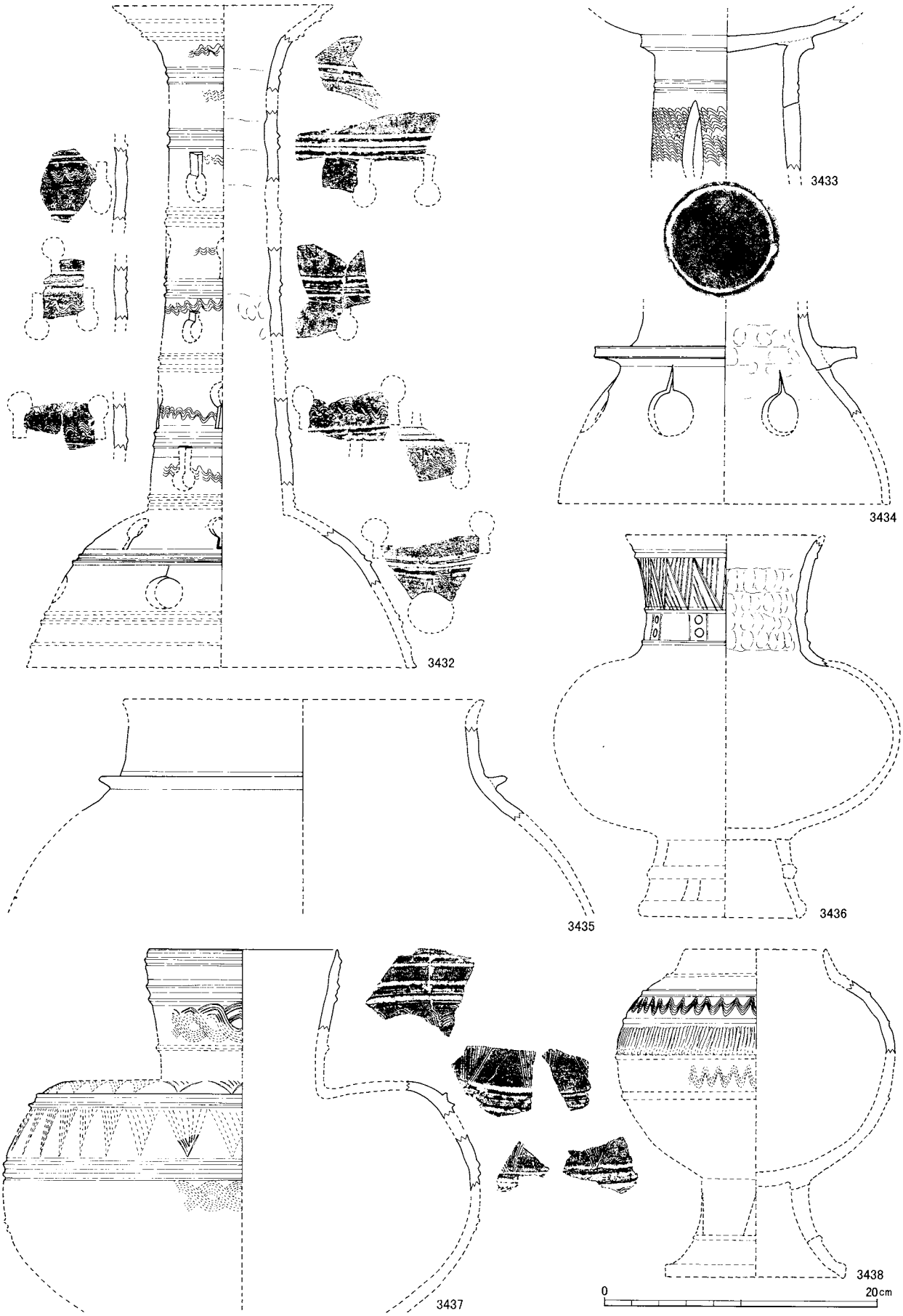
第354図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



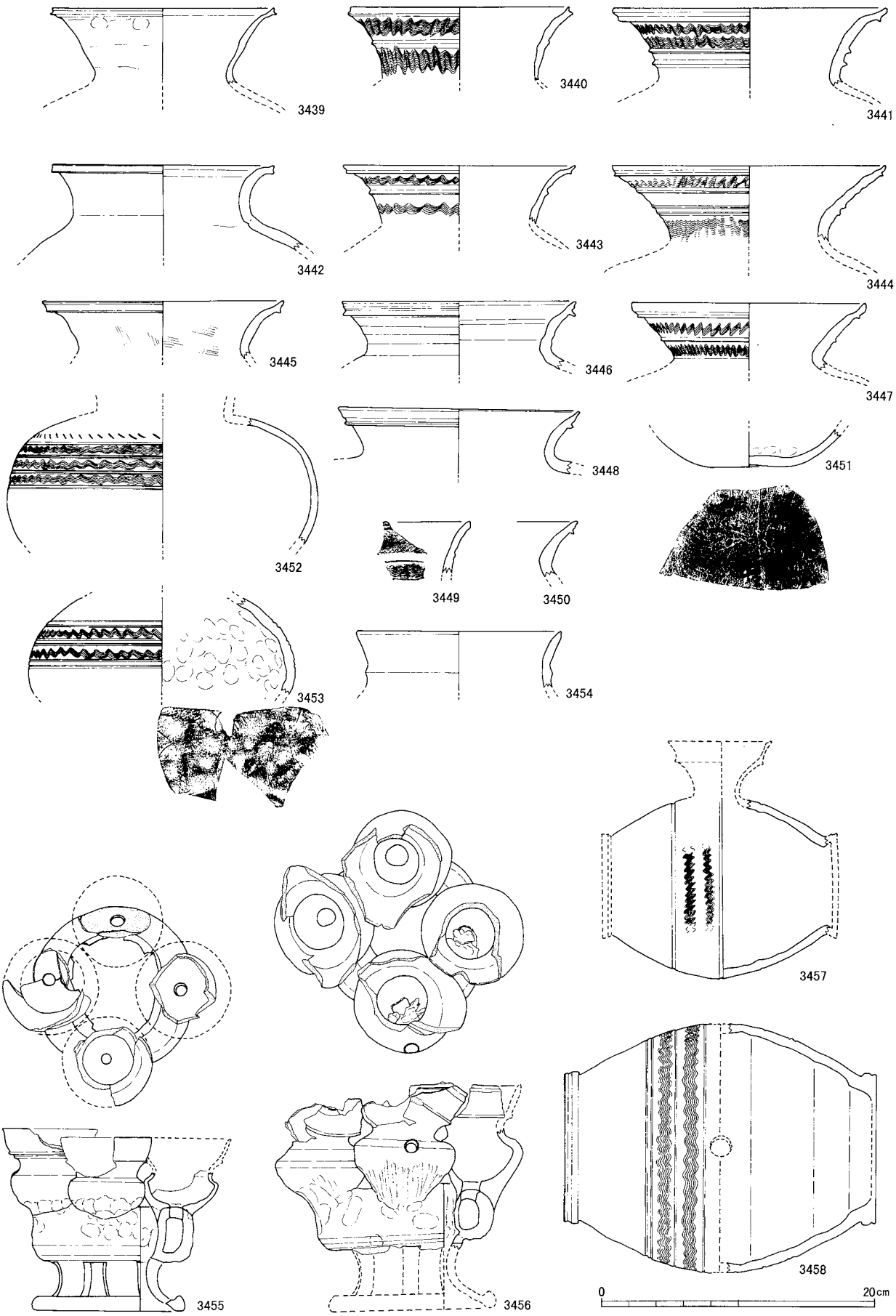
第355図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



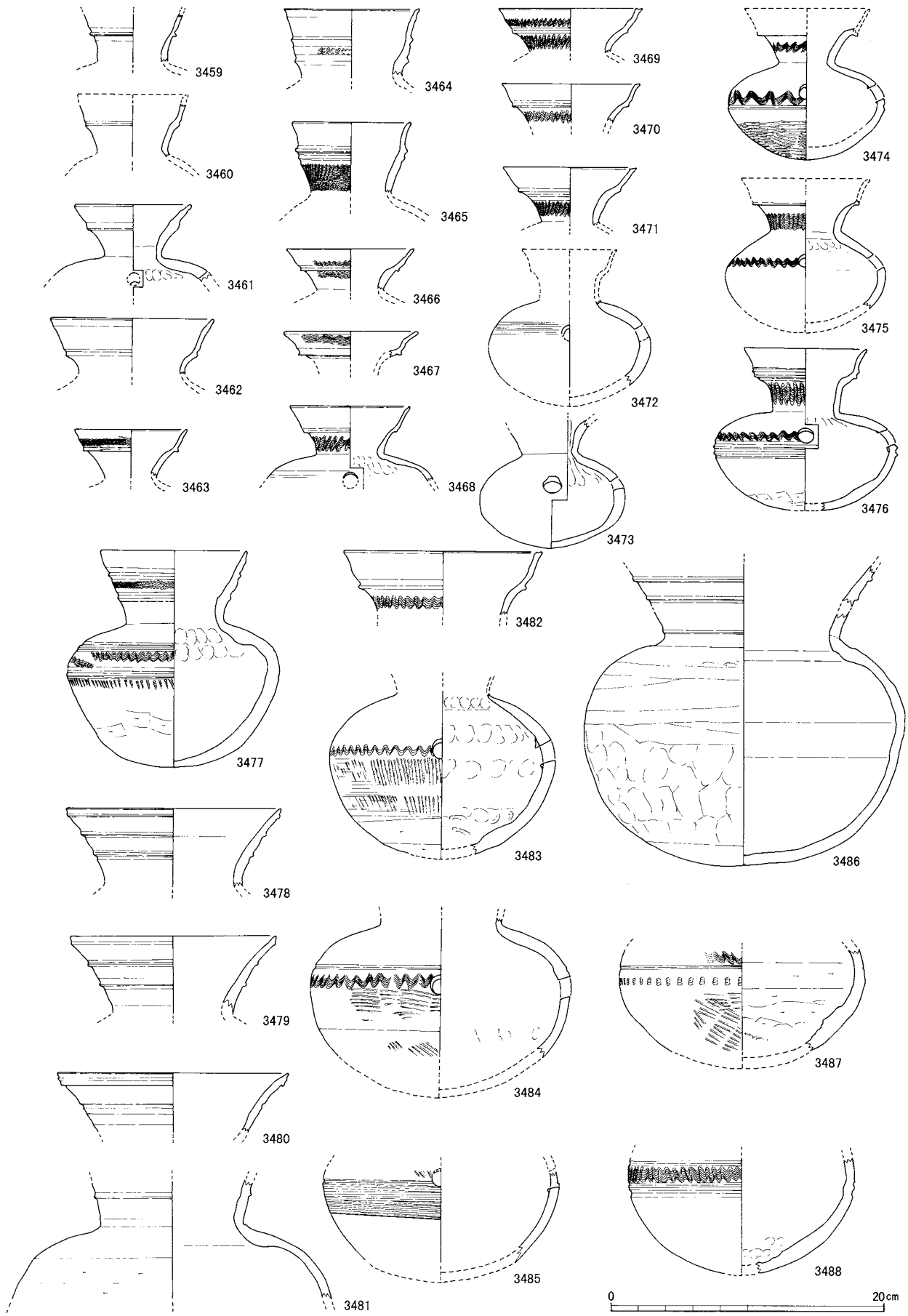
第356図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



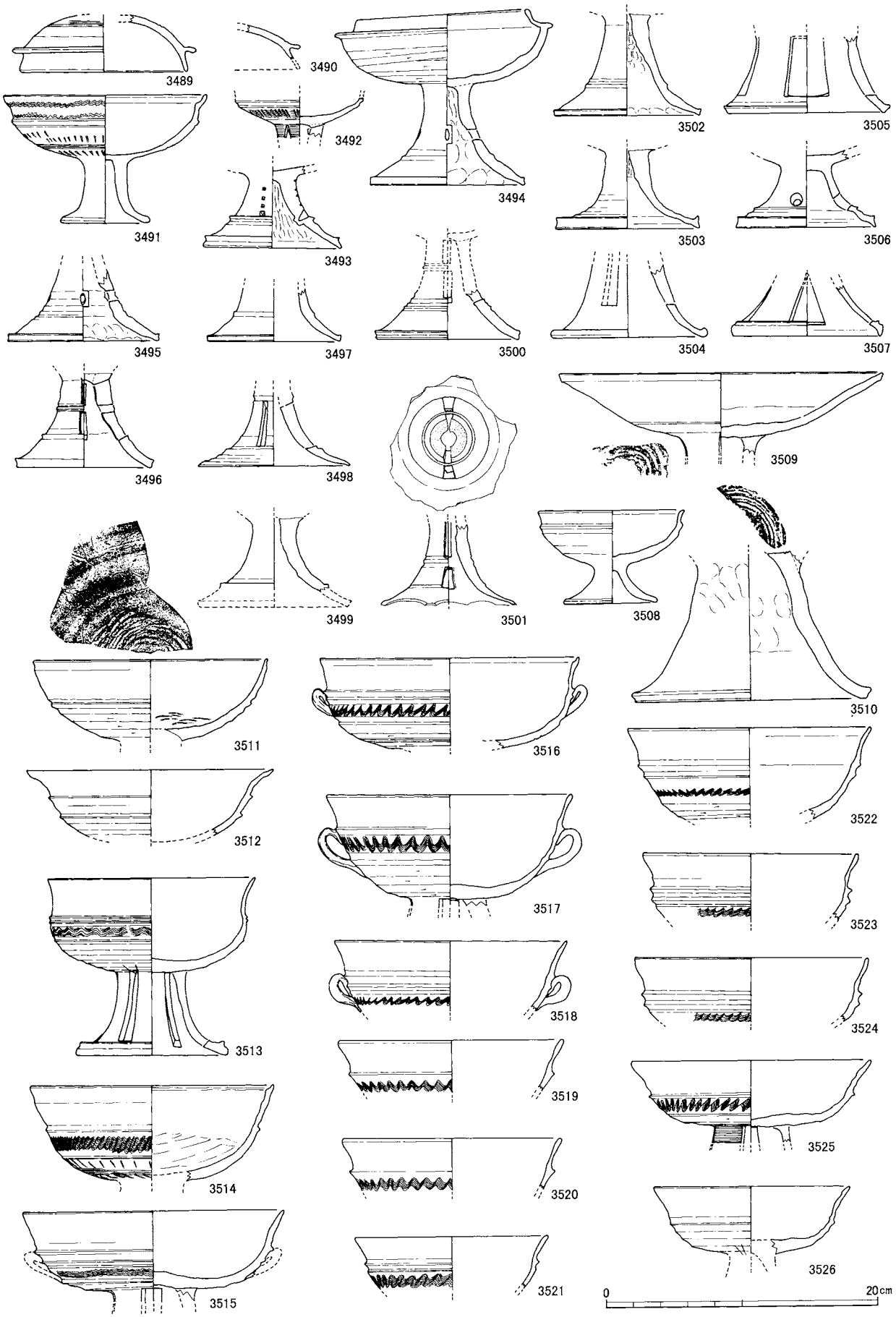
第357図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



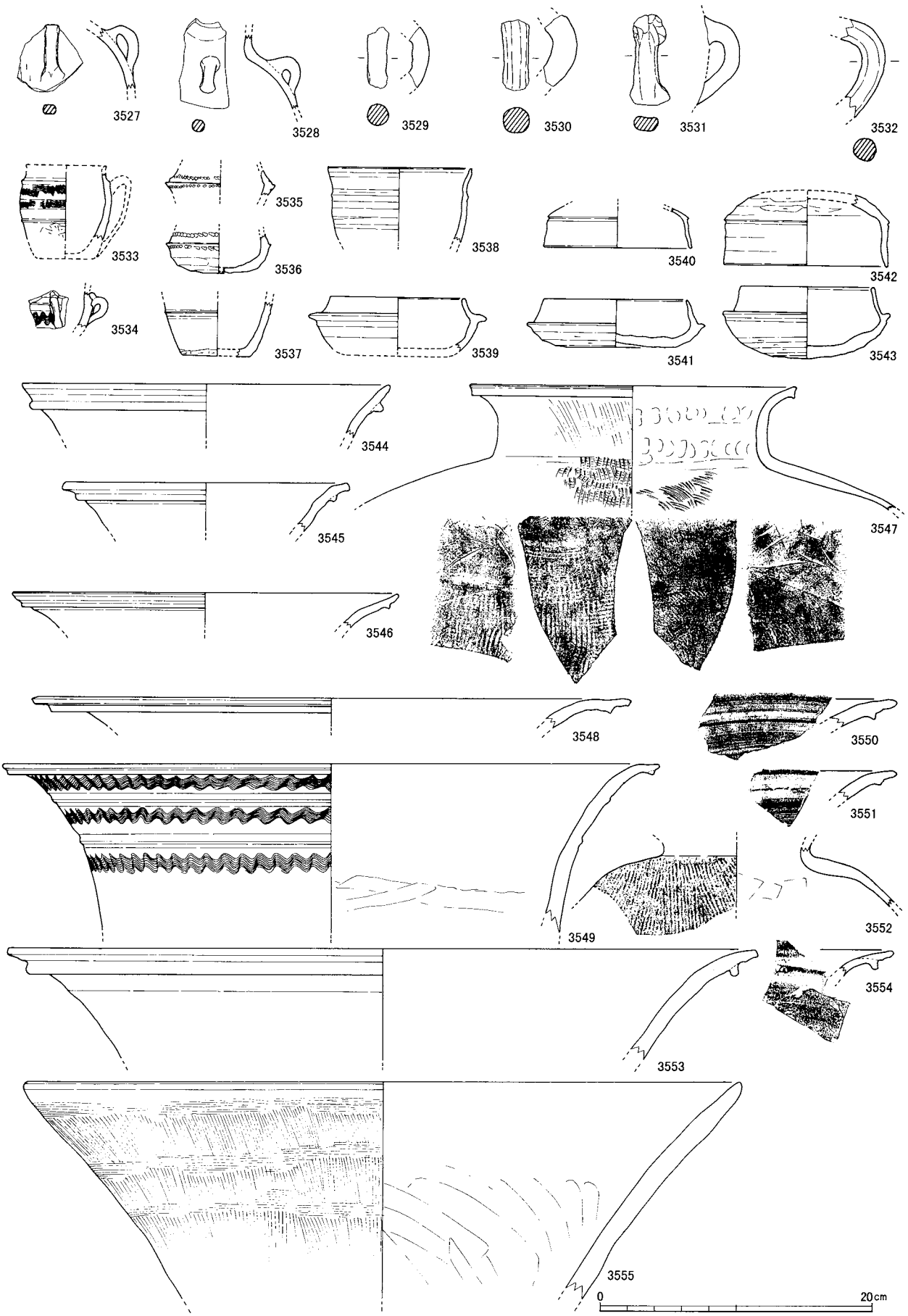
第358図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



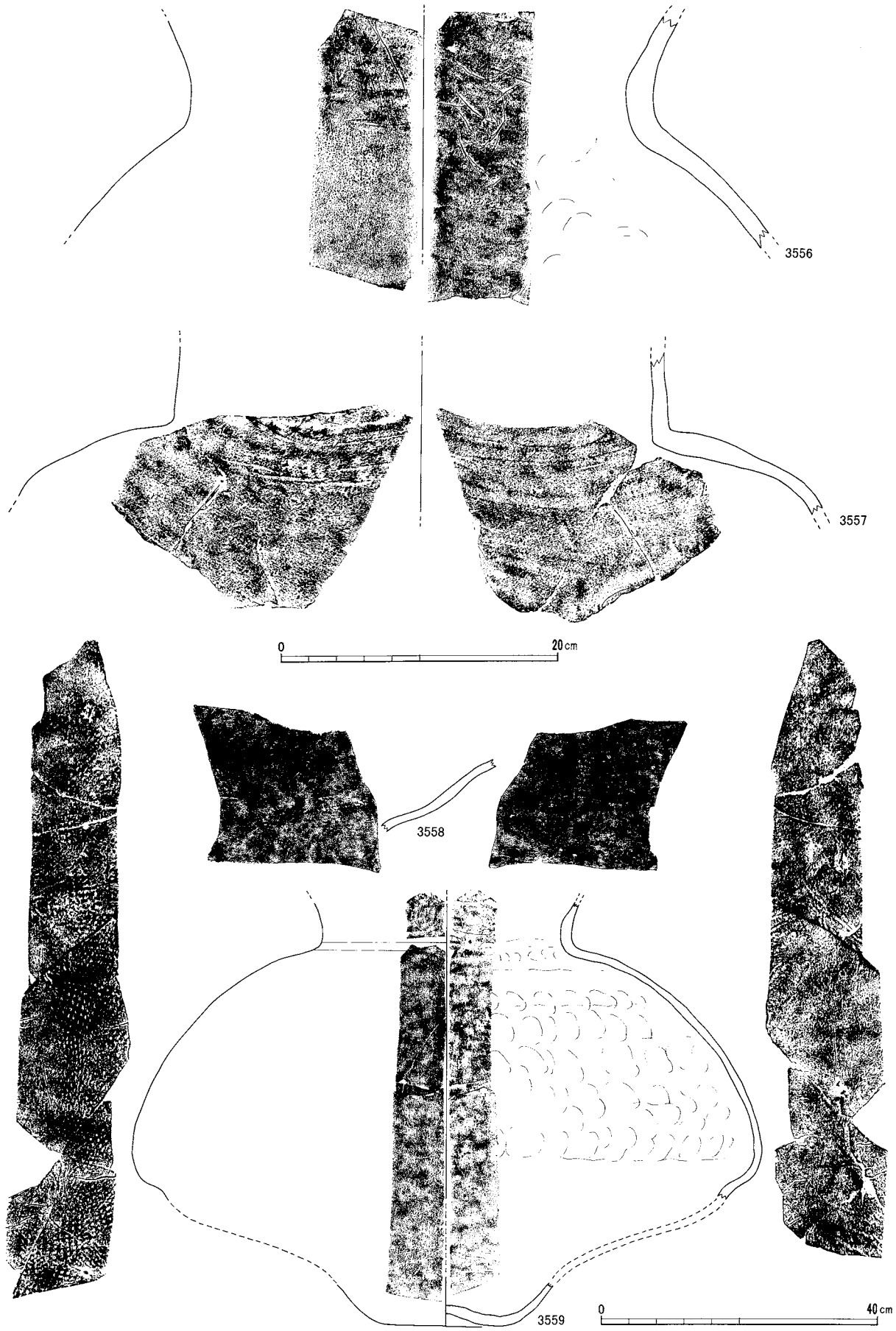
第359図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



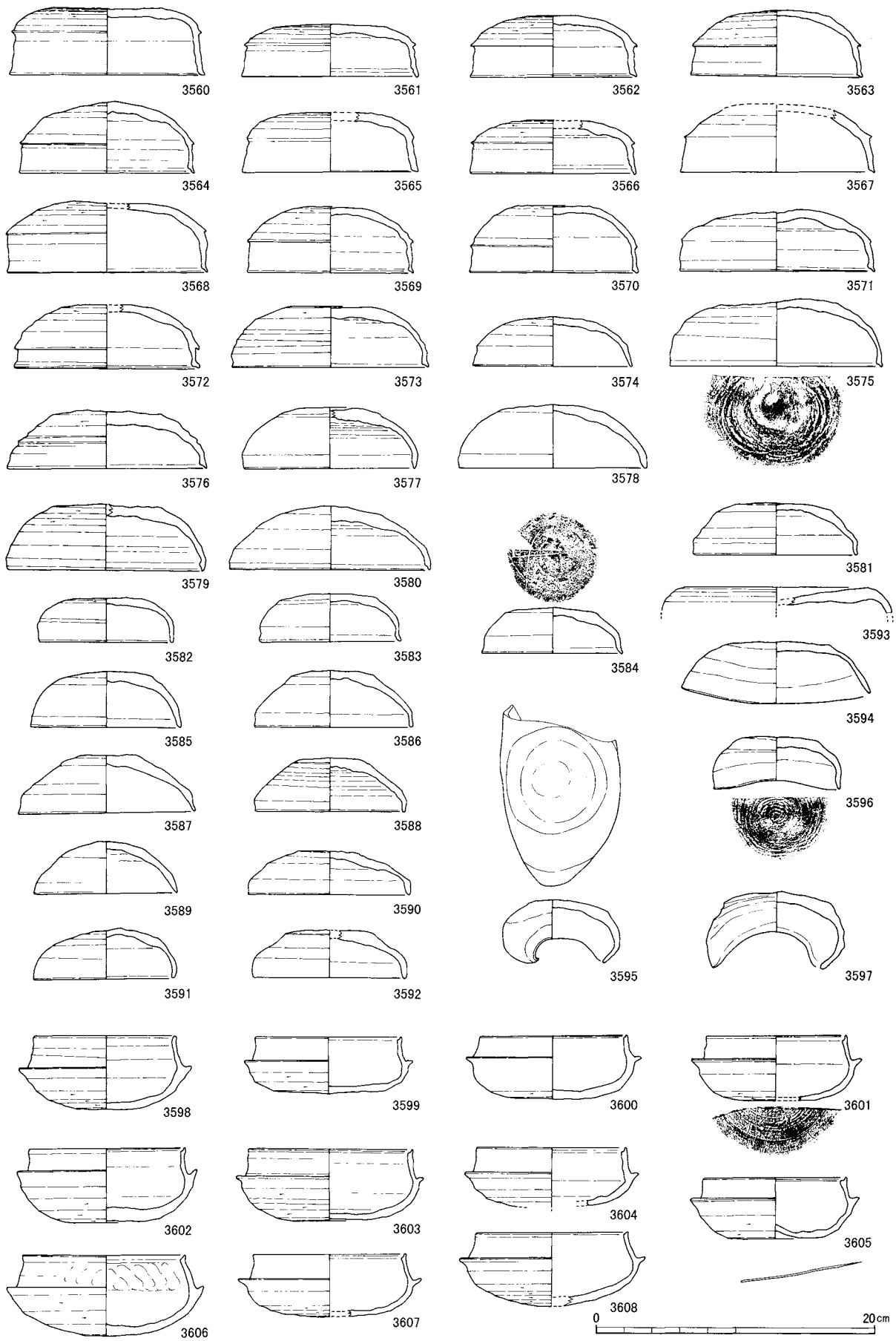
第360図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



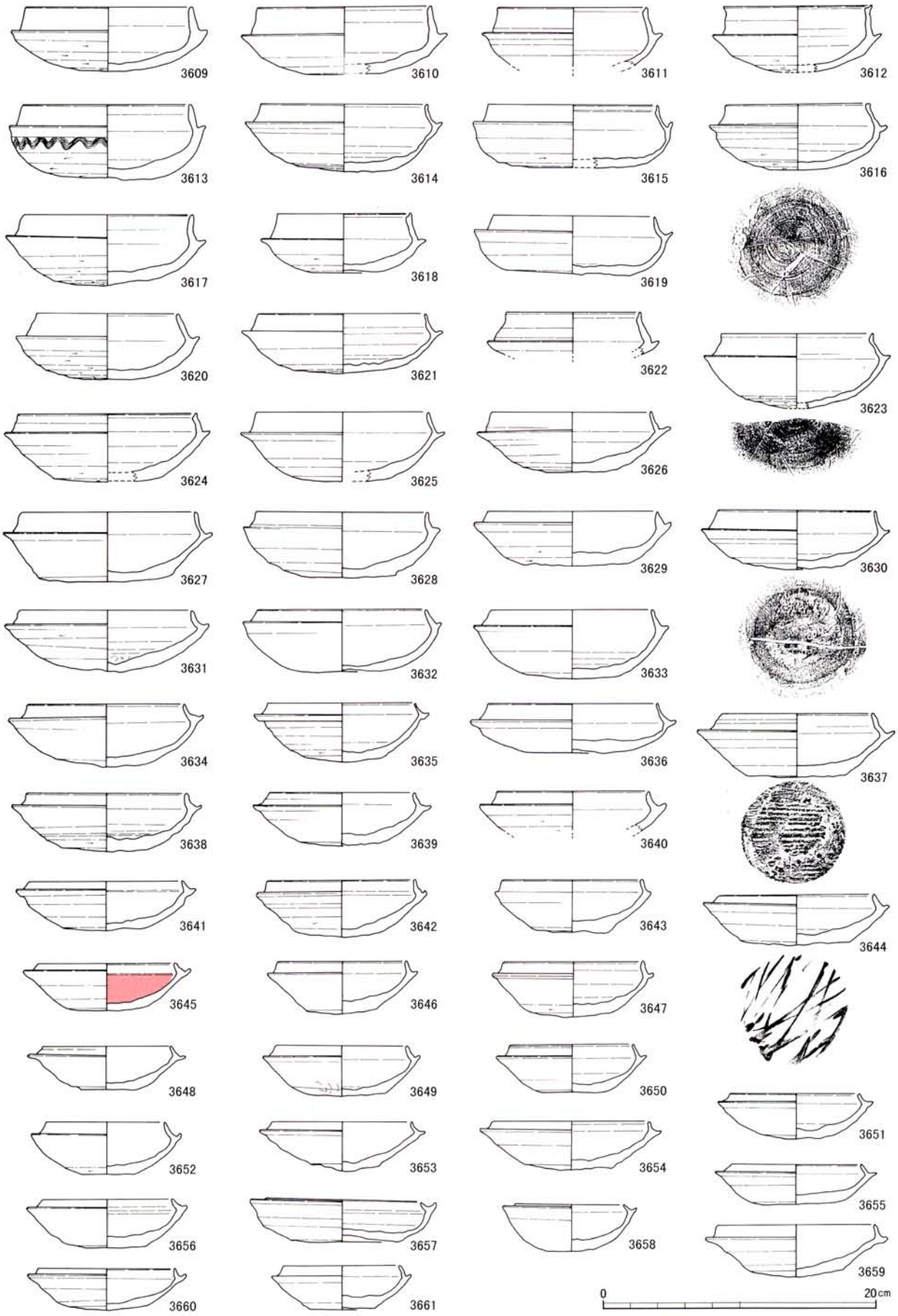
第361図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



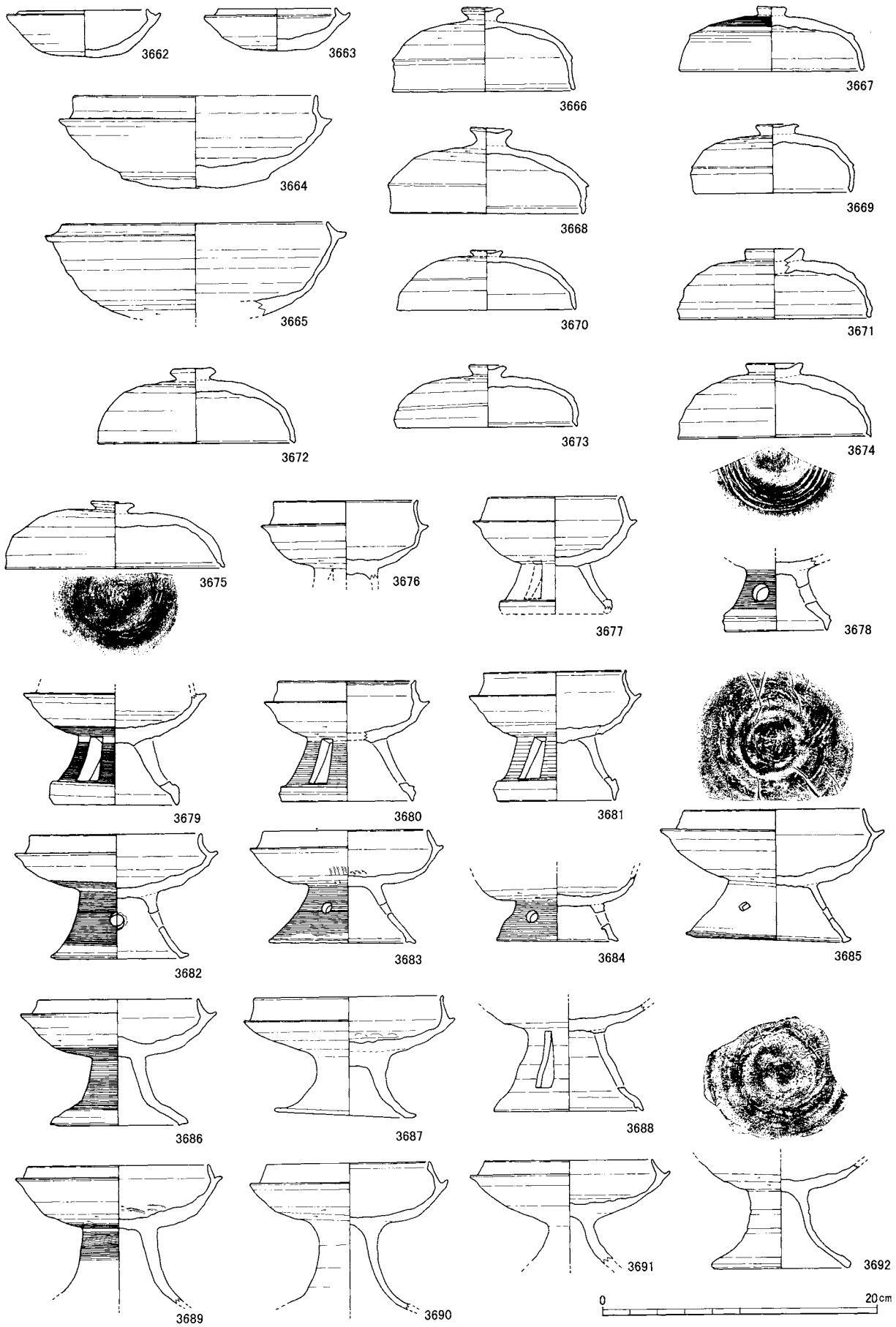
第362図　ＳＤ１出土遺物（3556・3557は１：４，3558・3559は１：８，ただし3559の両脇の拓本は１：４）



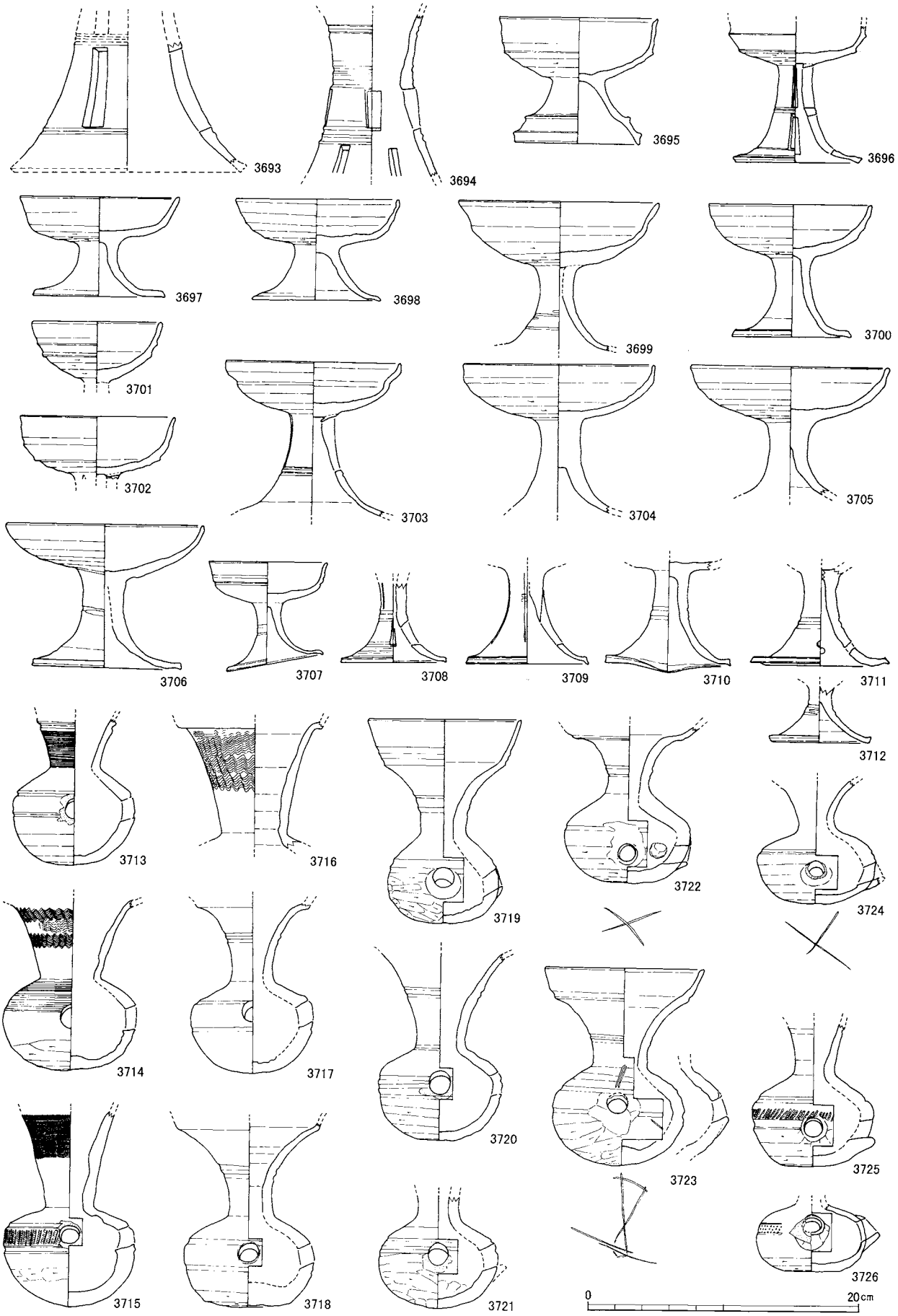
第363図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



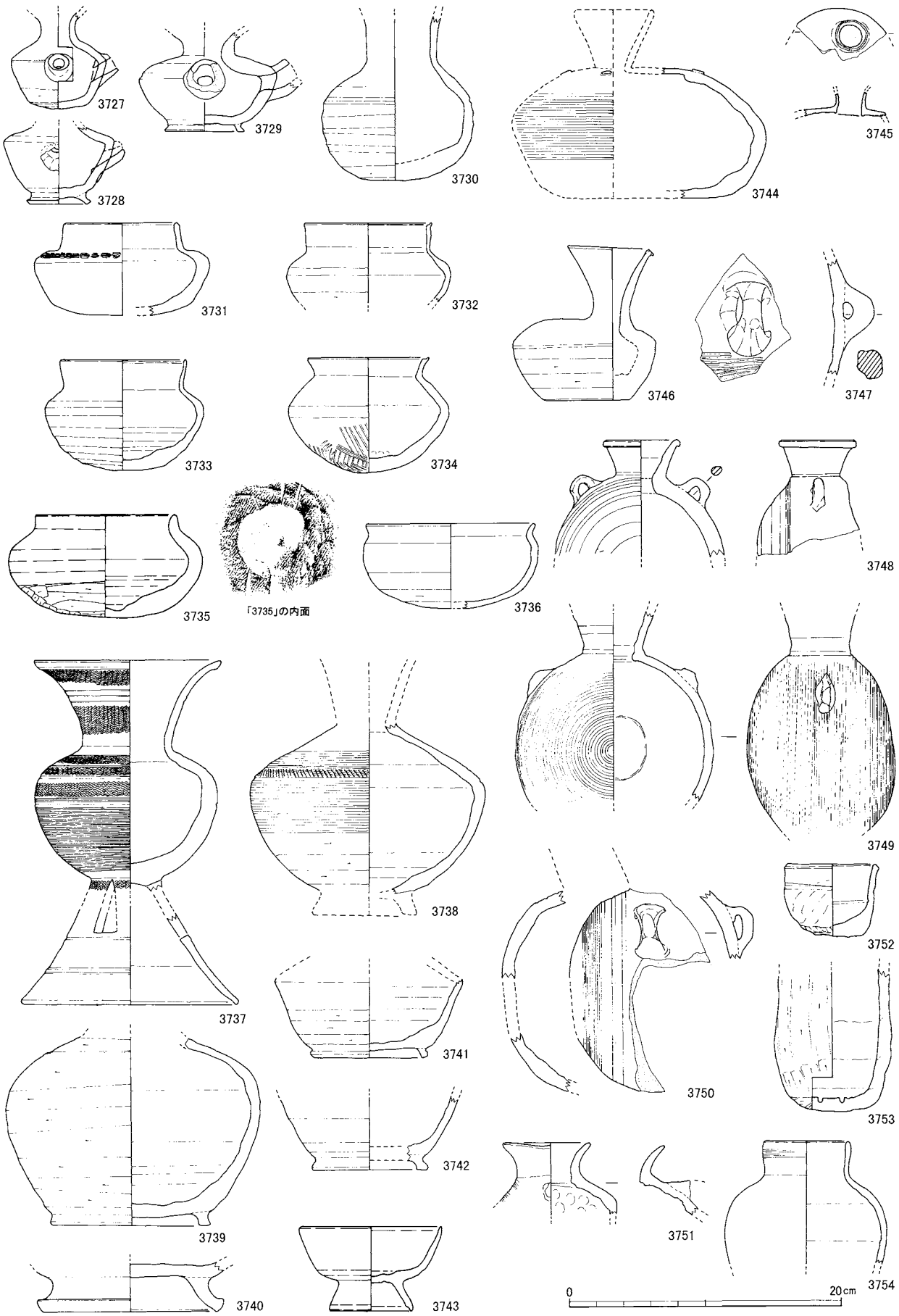
第364図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



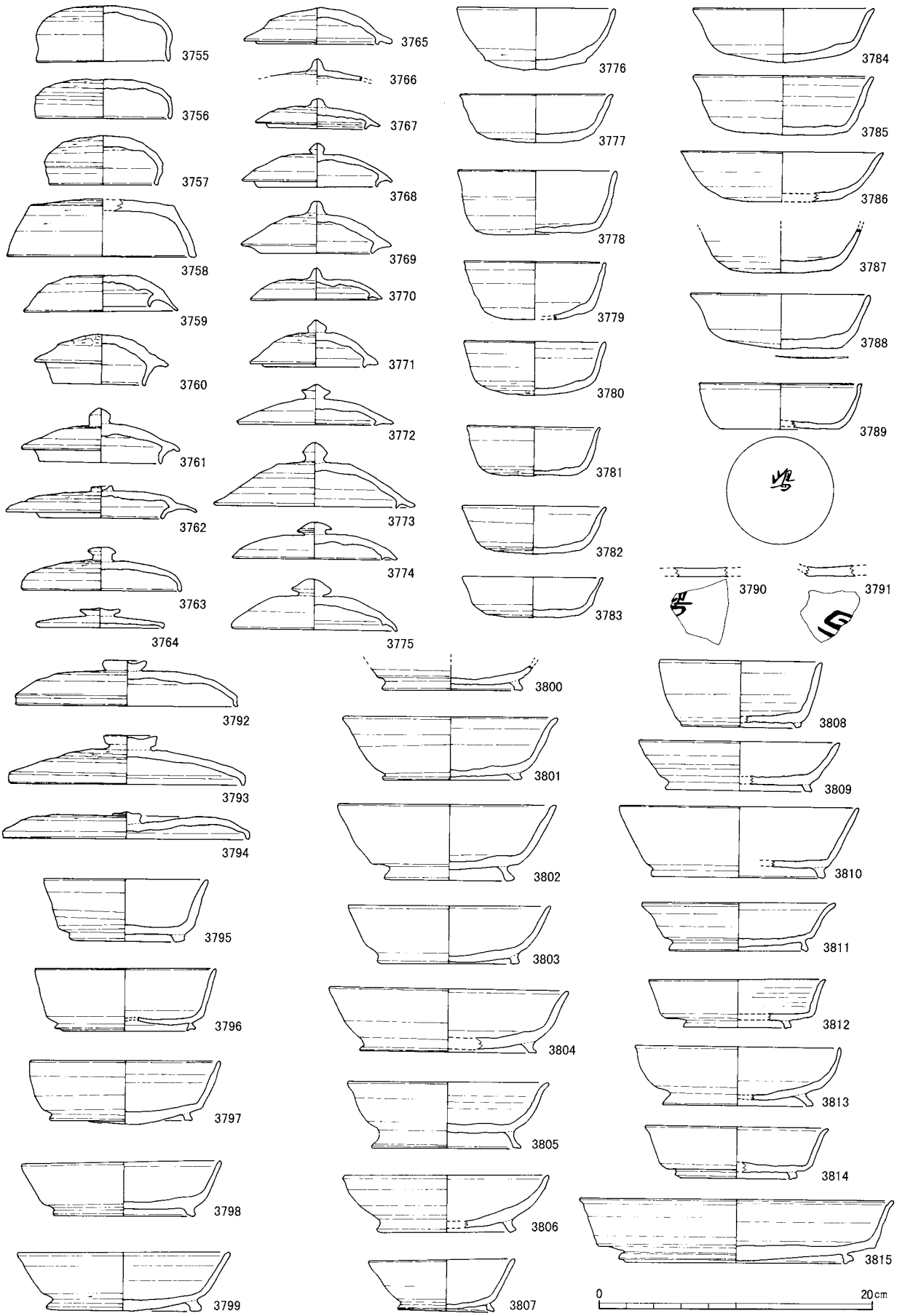
第365図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



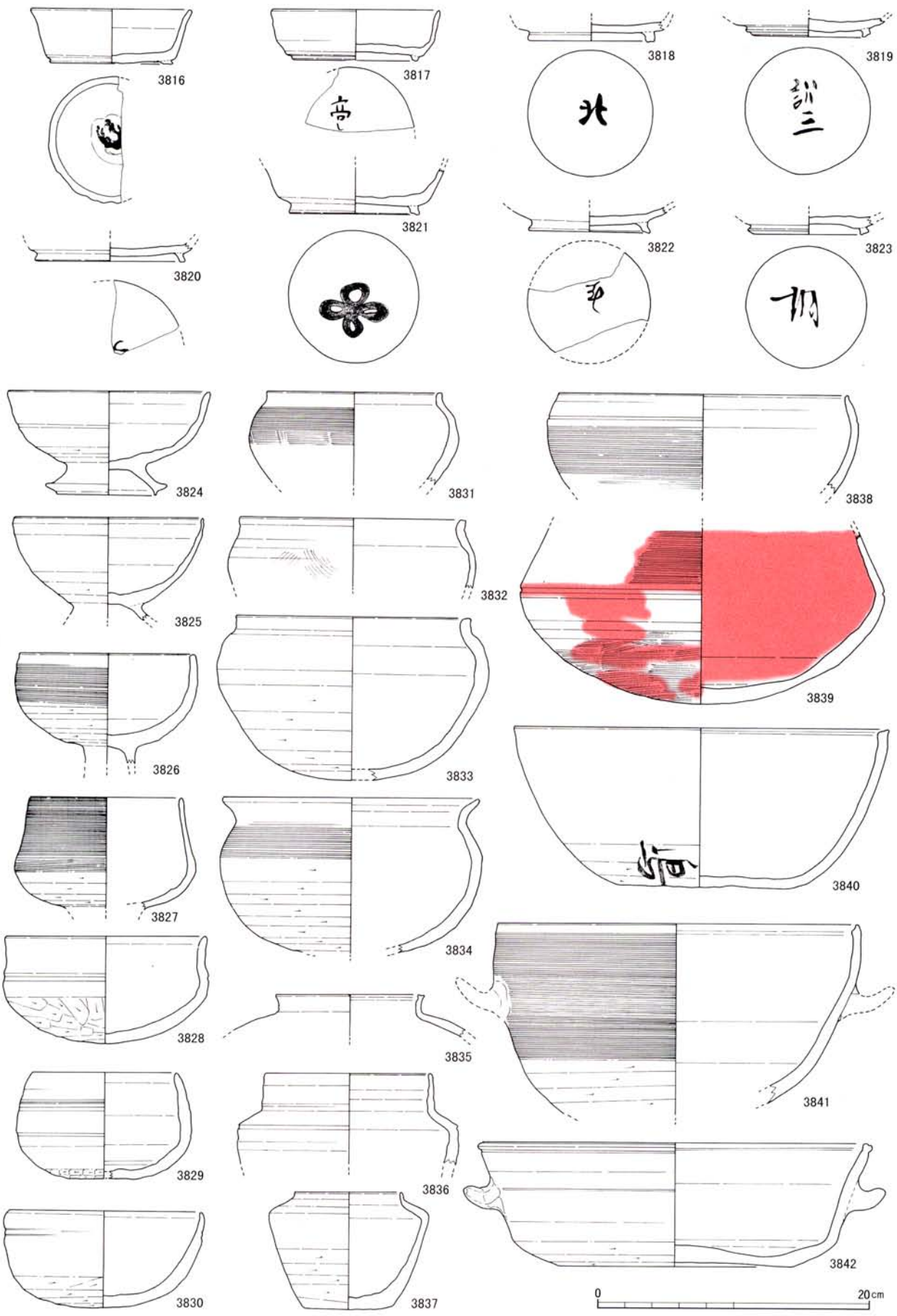
第366図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



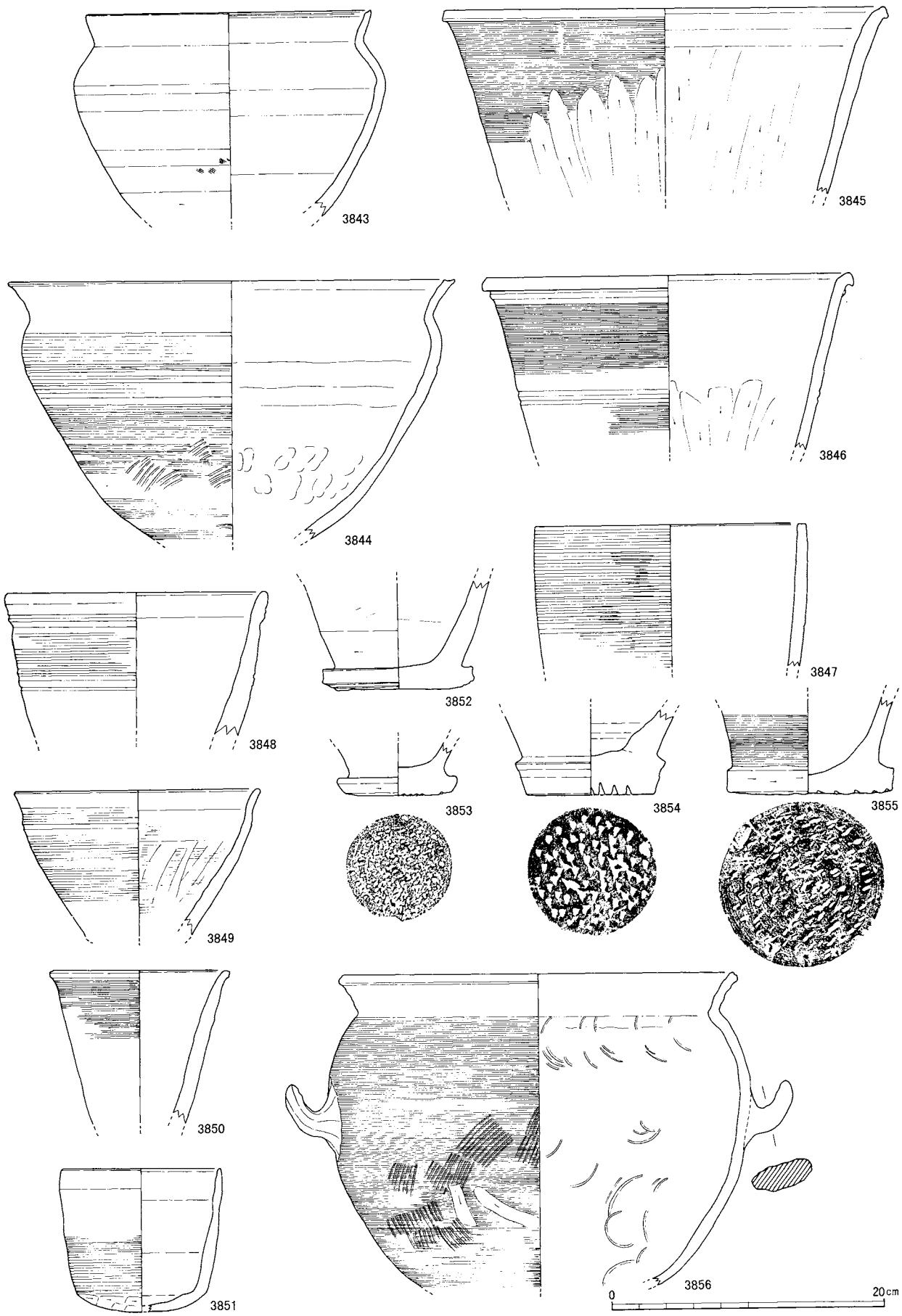
第367図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



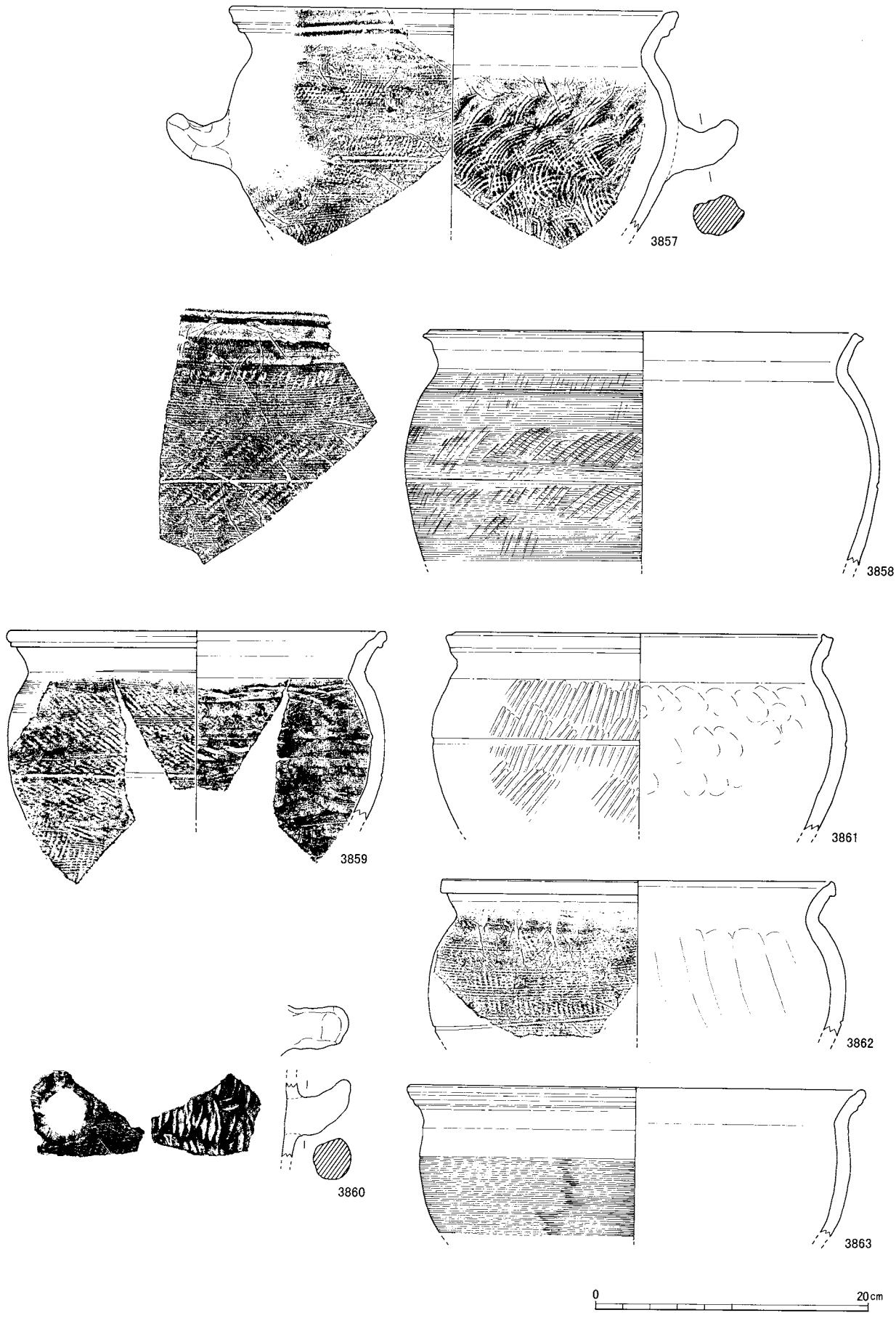
第368図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



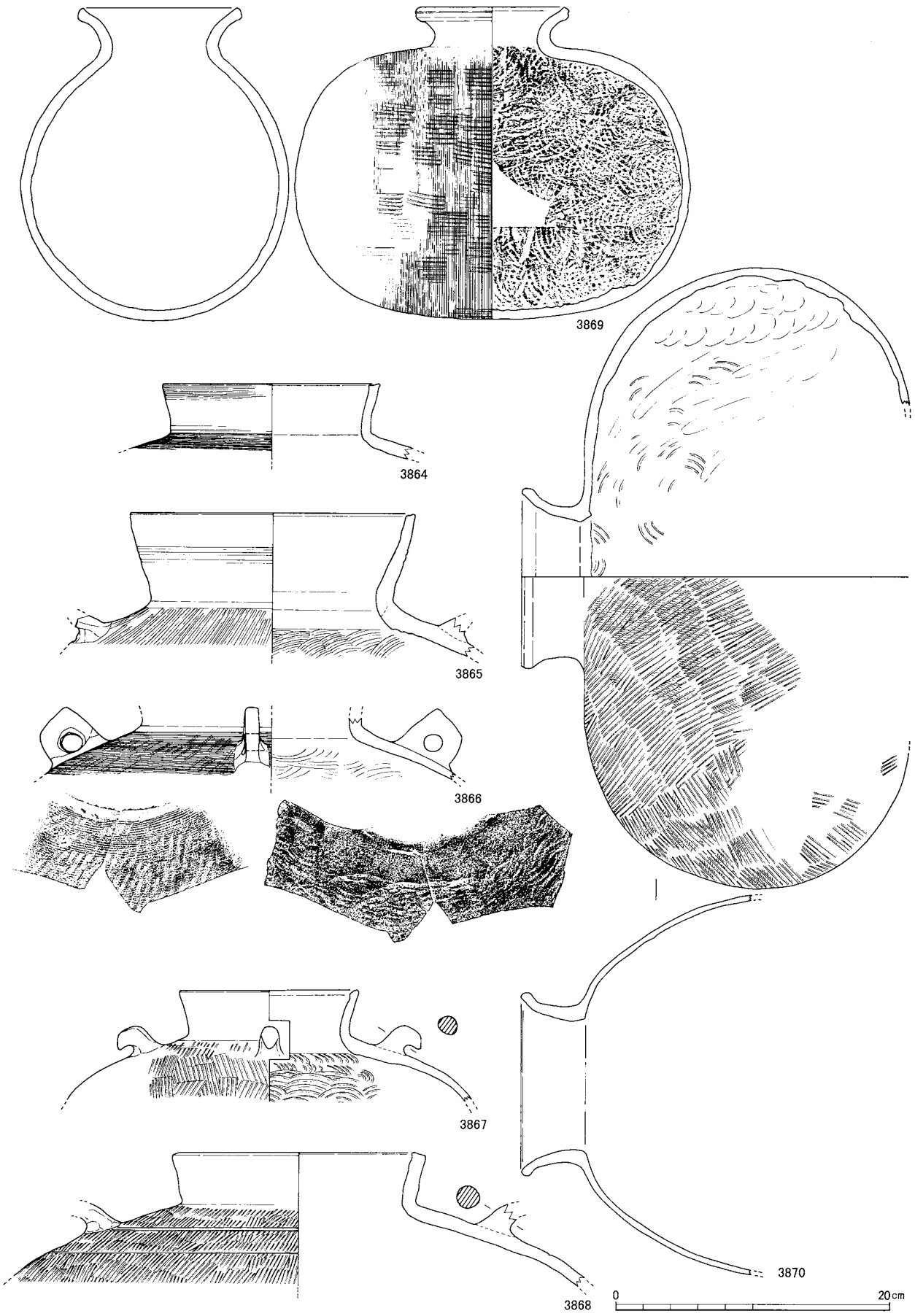
第369図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



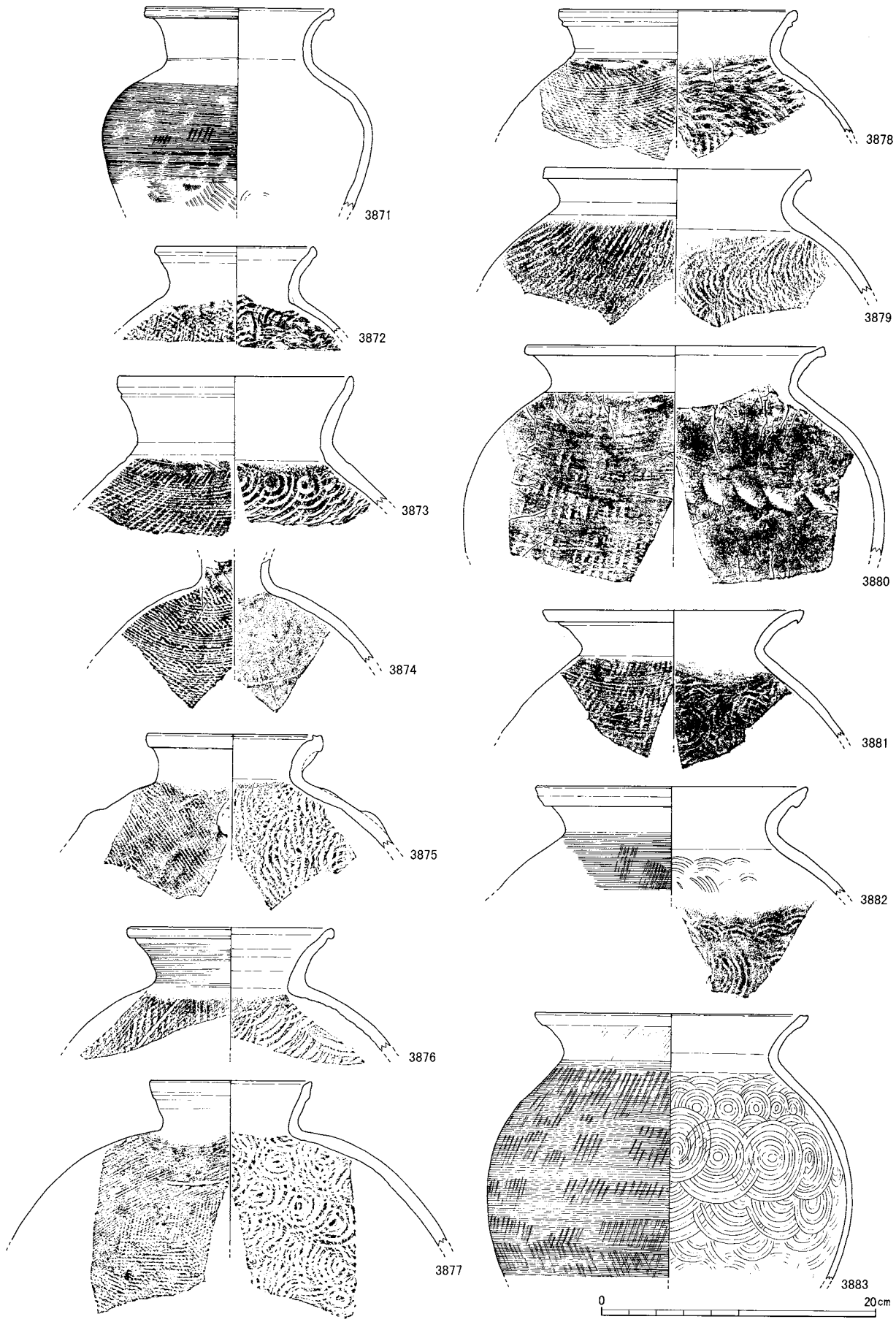
第370図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



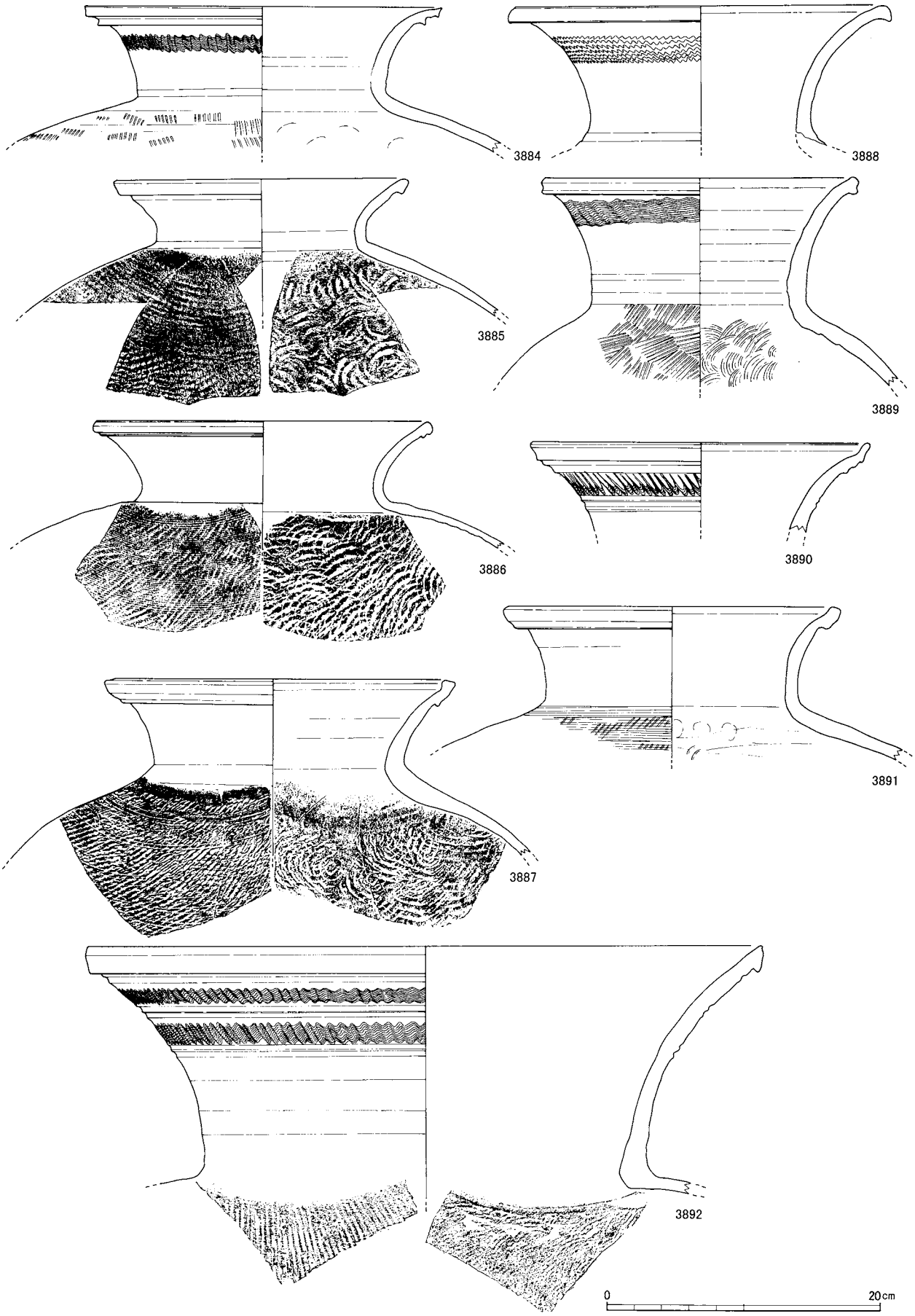
第371図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



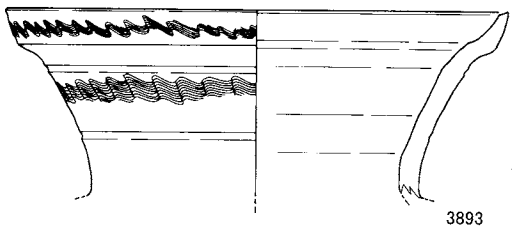
第372図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

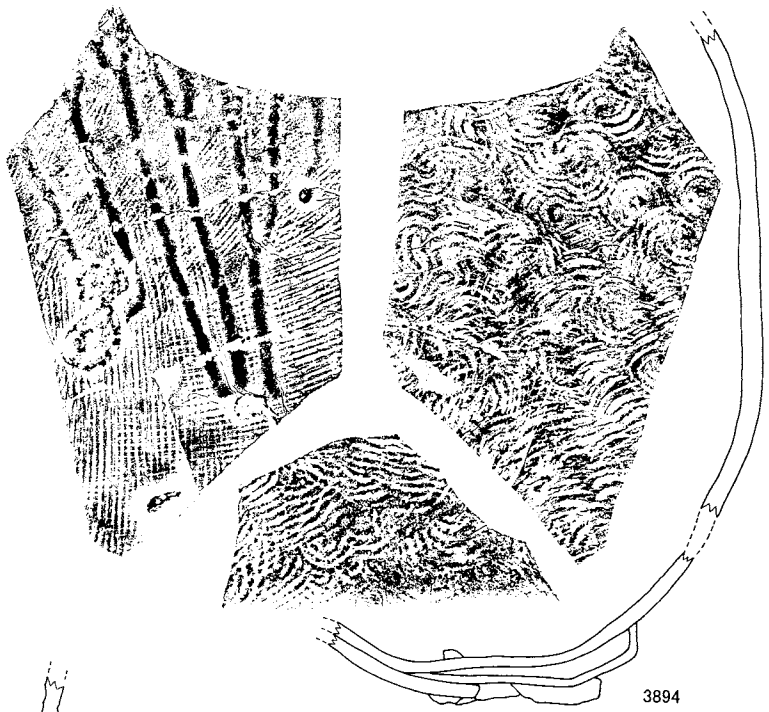


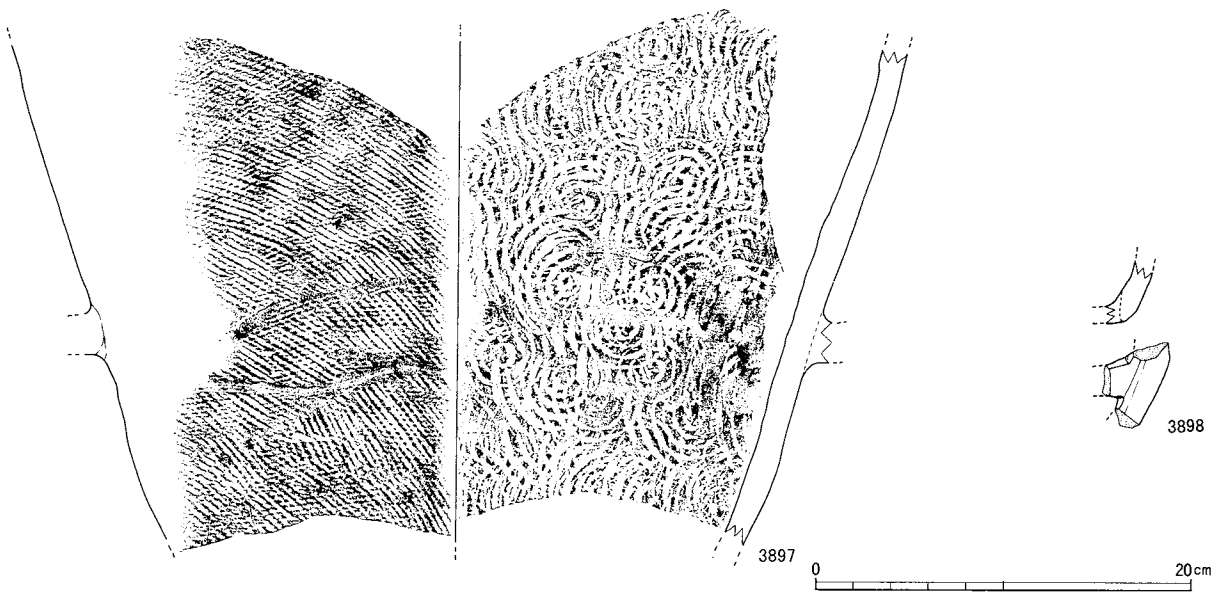
第373図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

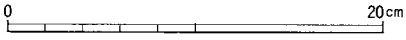


第374図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

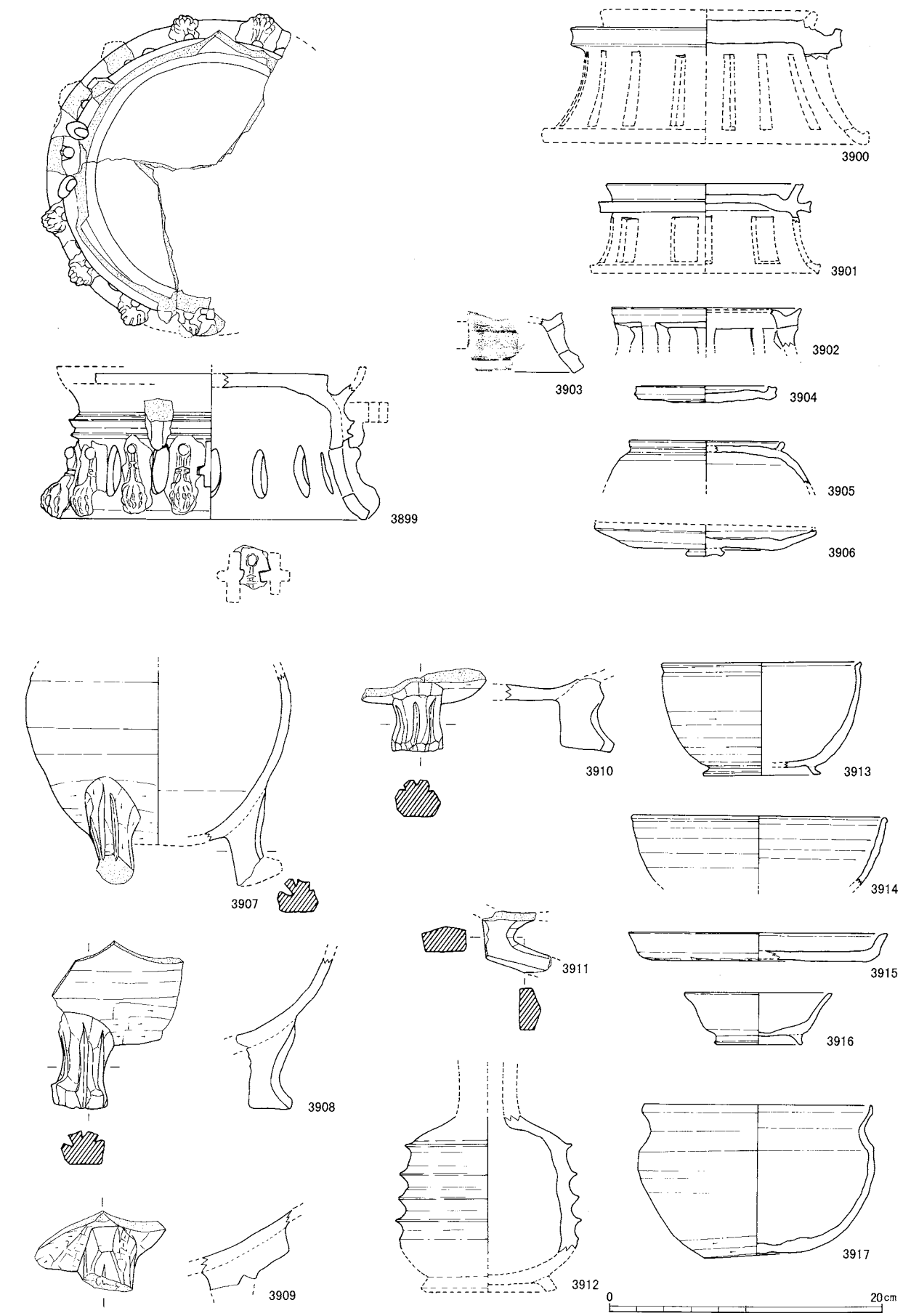




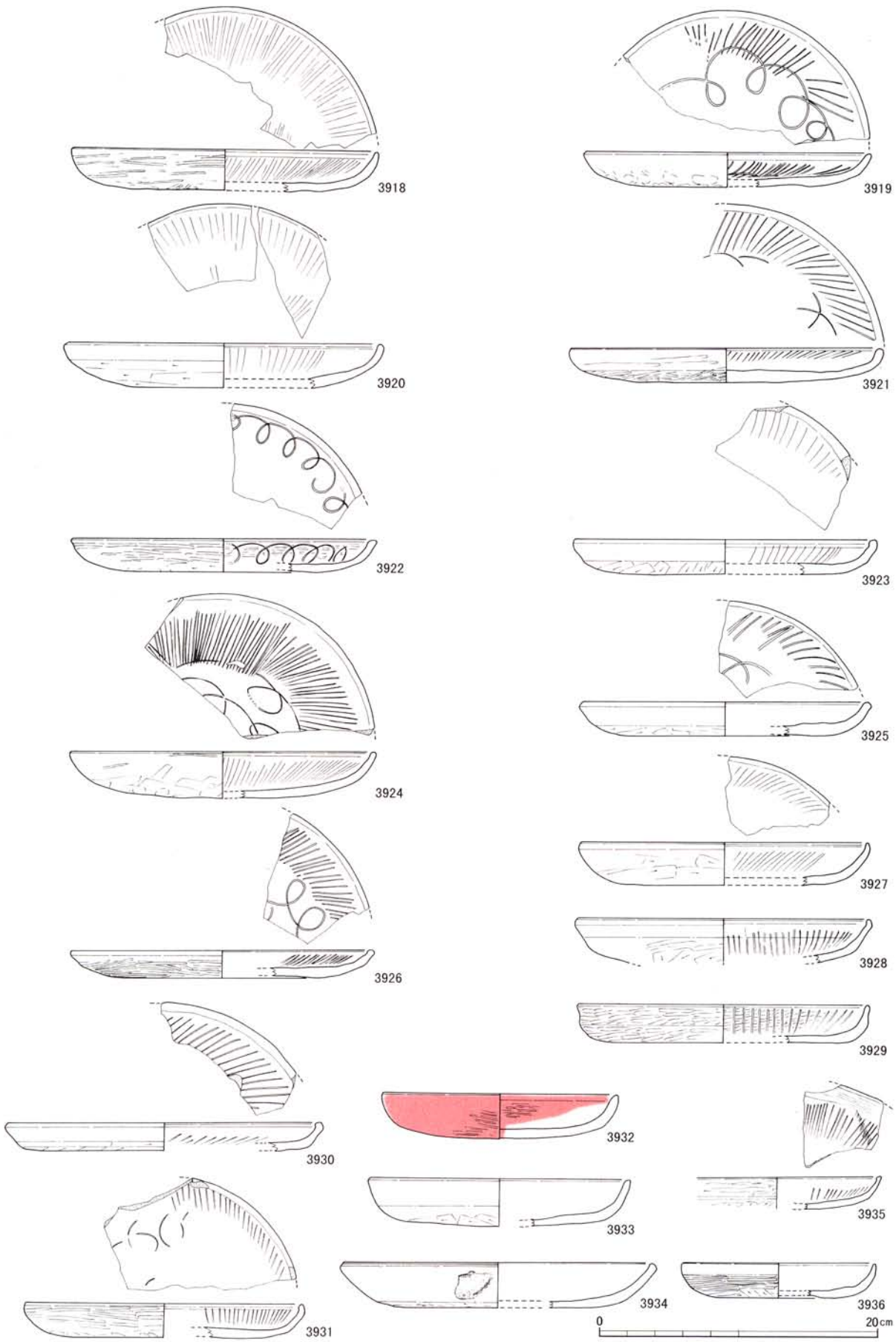




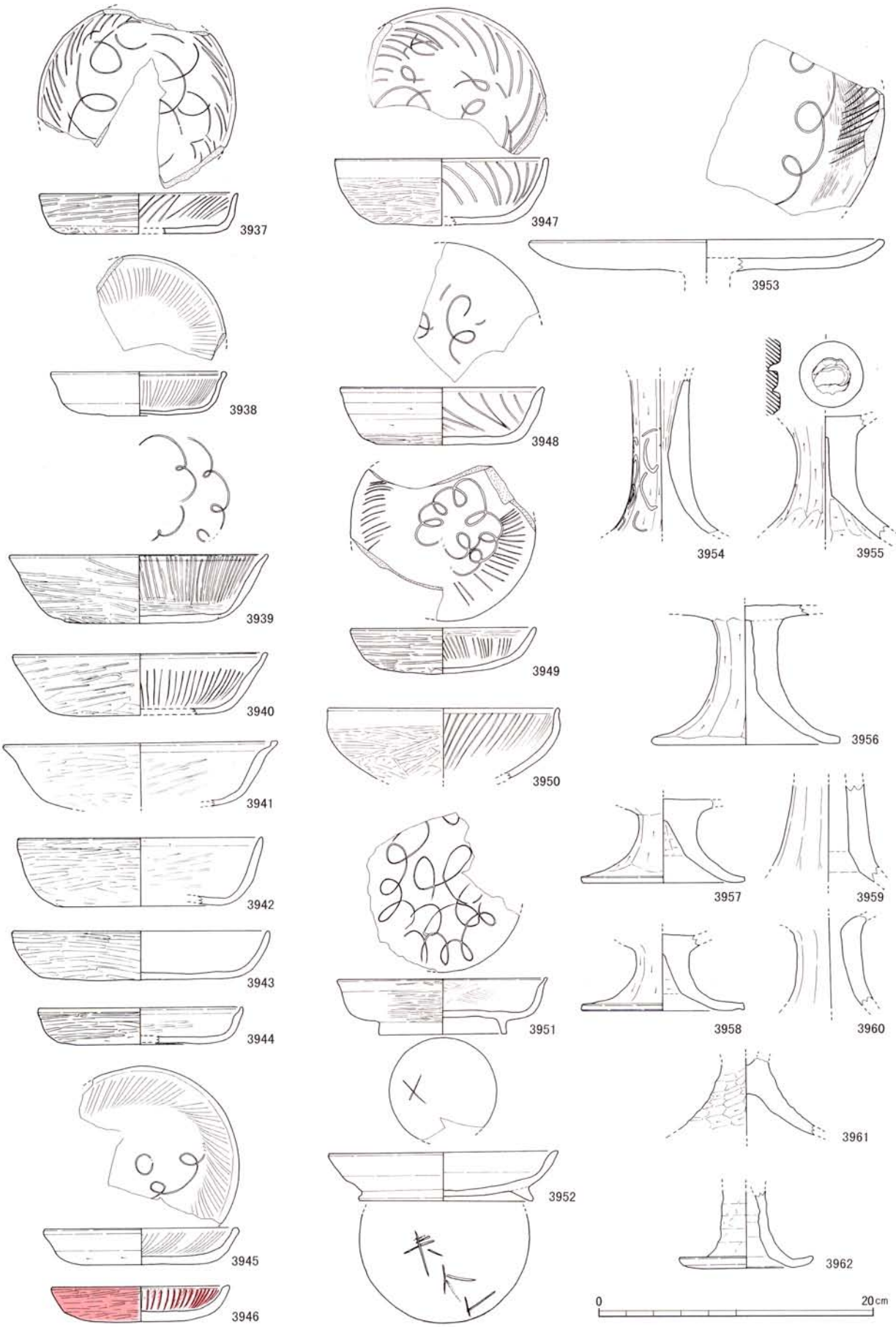
第375図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



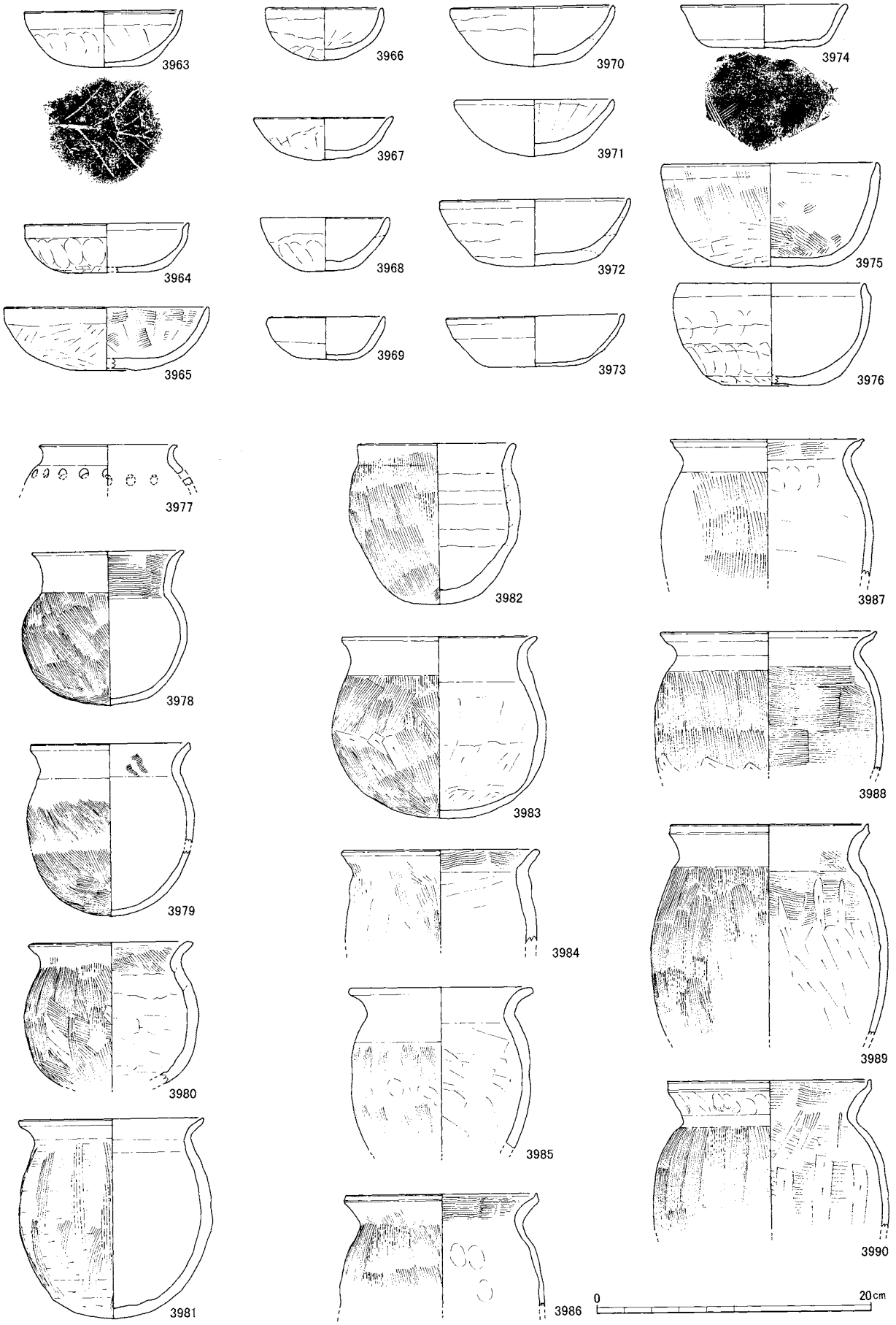
第376図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



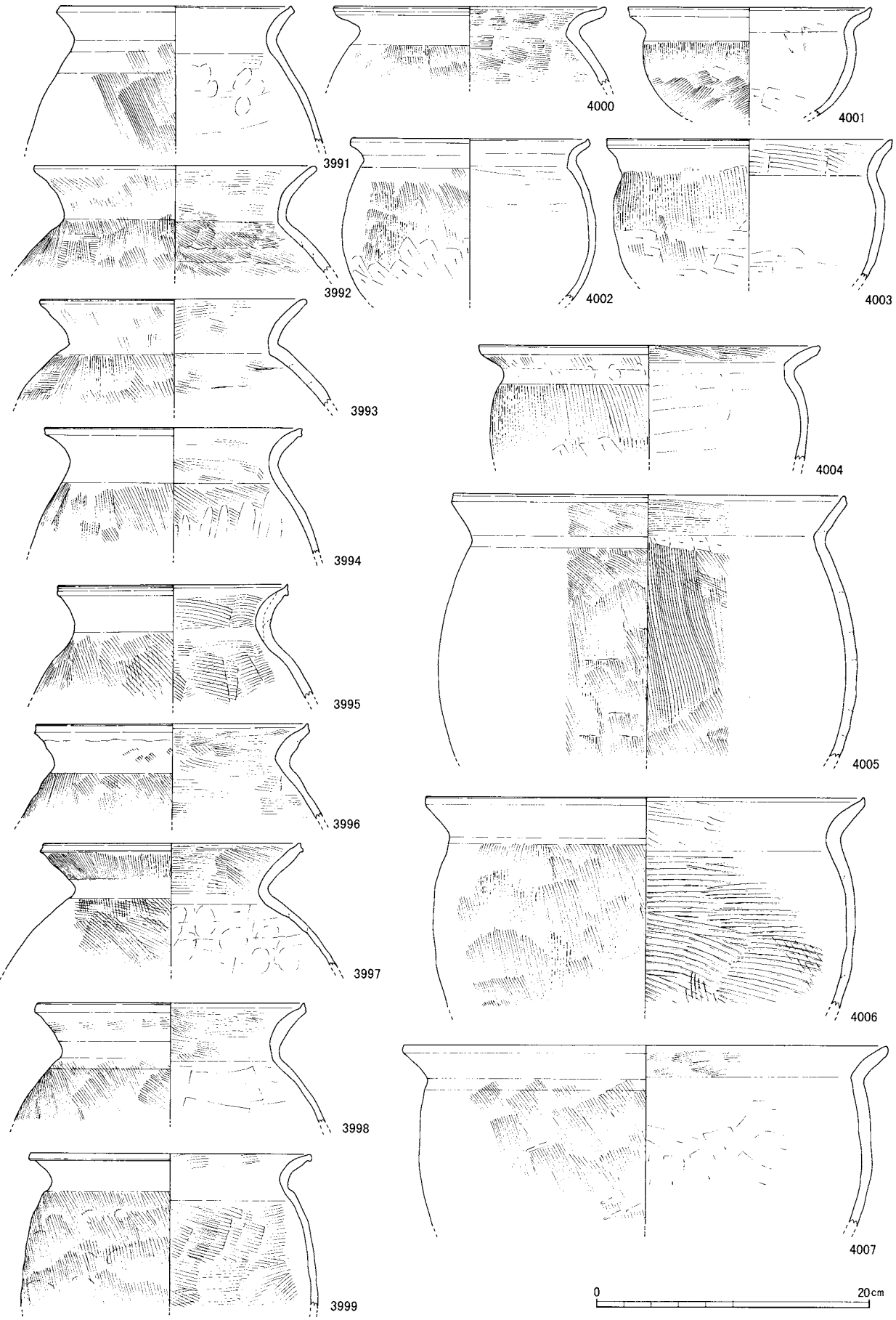
第377図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



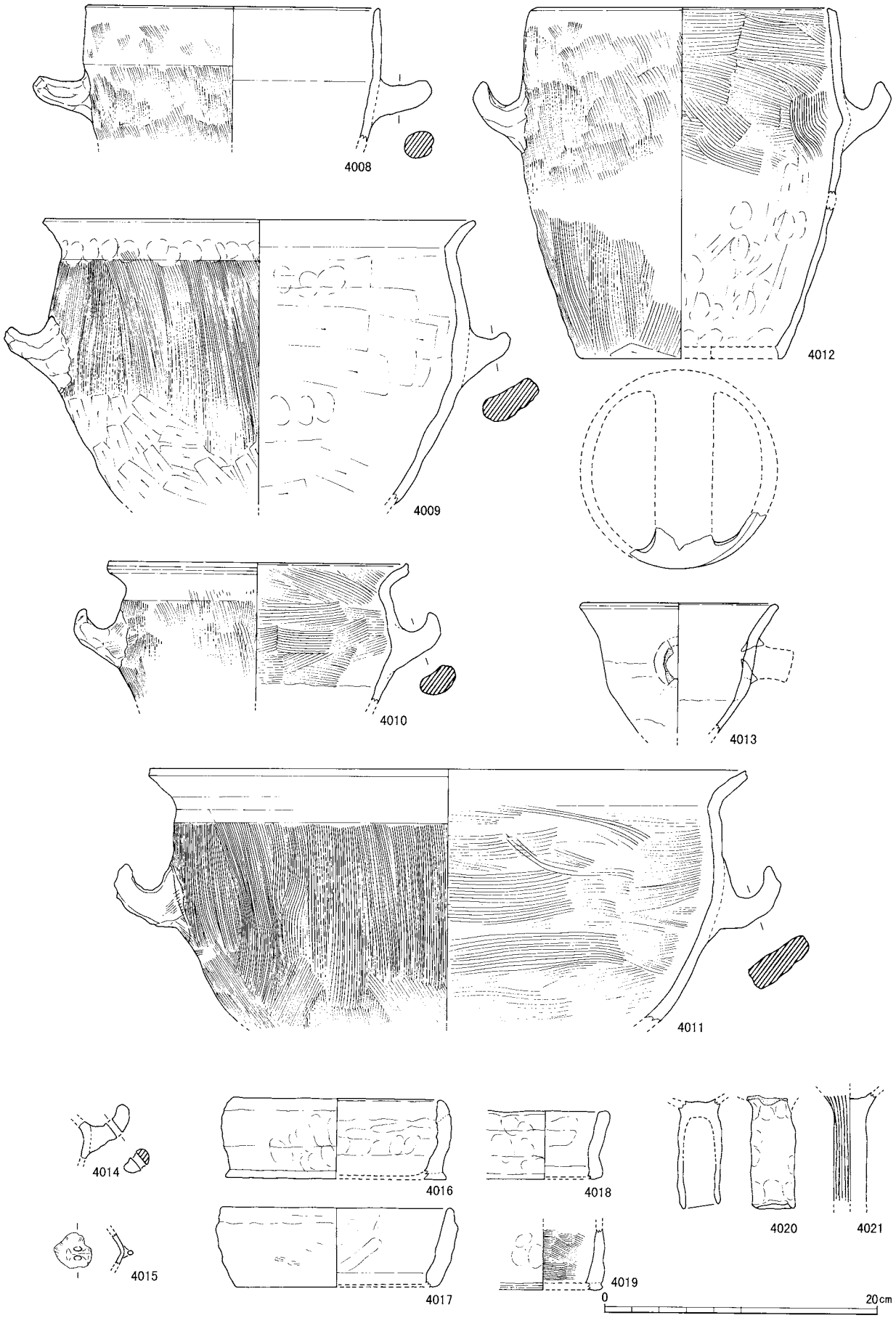
第378図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



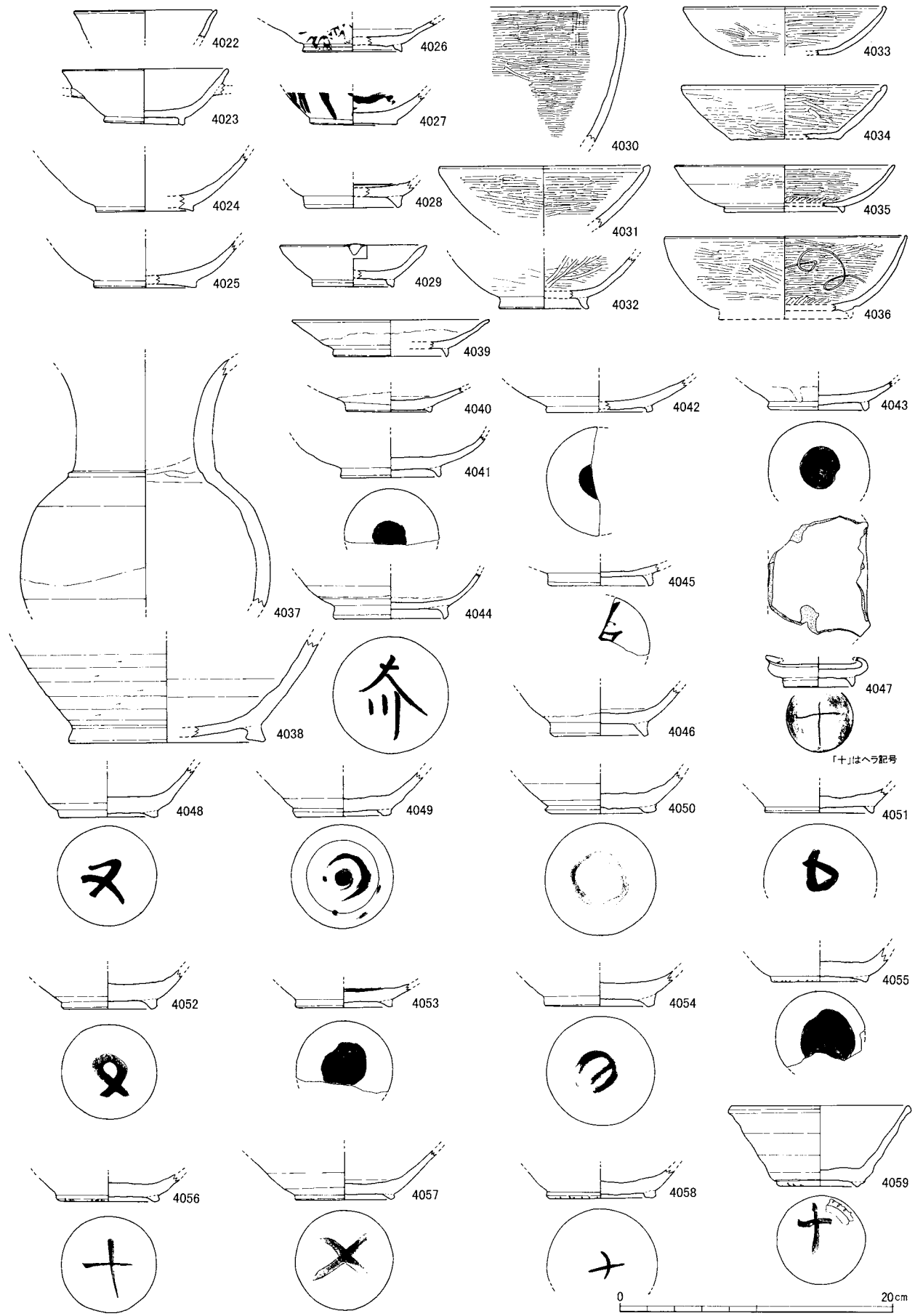
第379図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



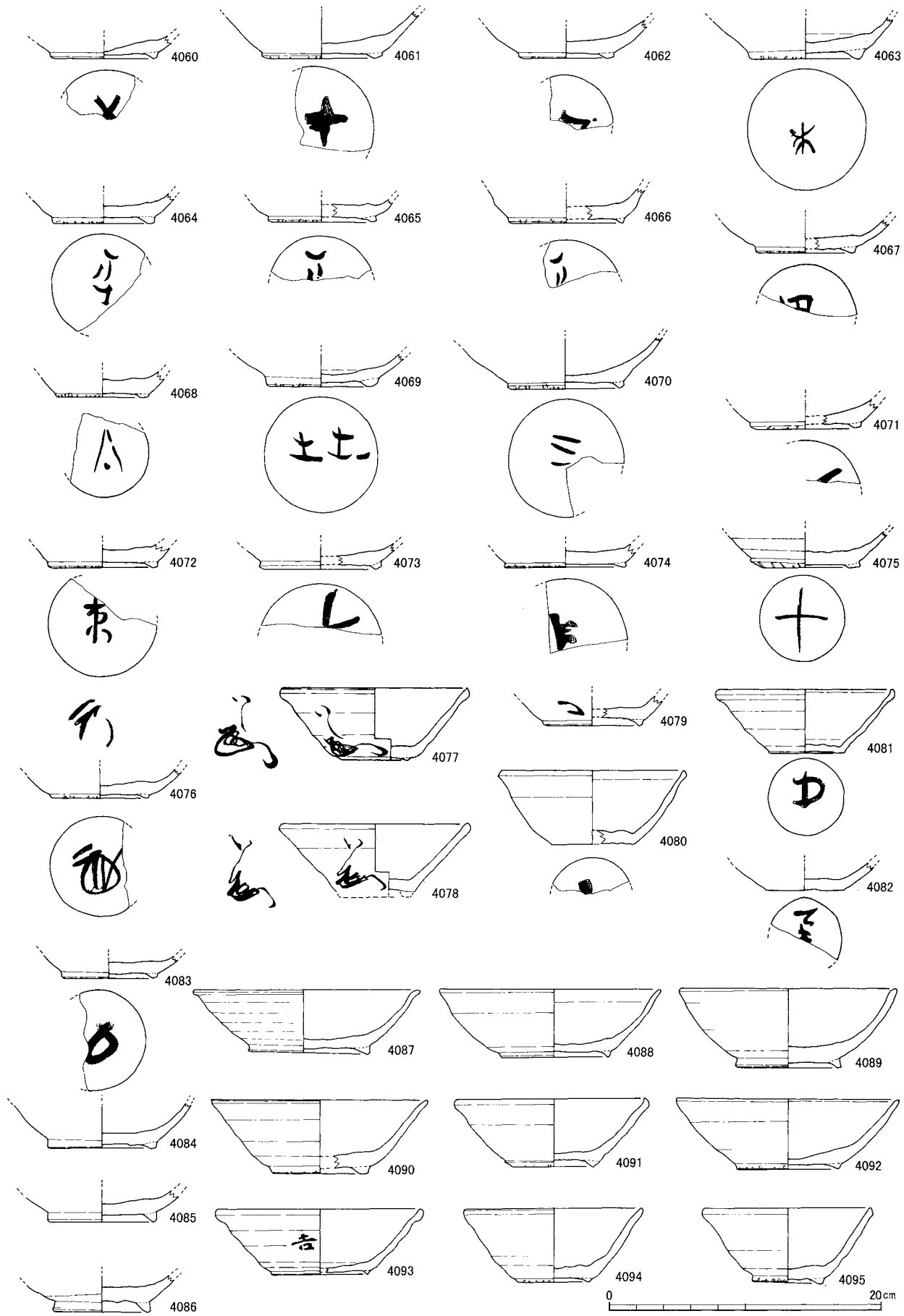
第380図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



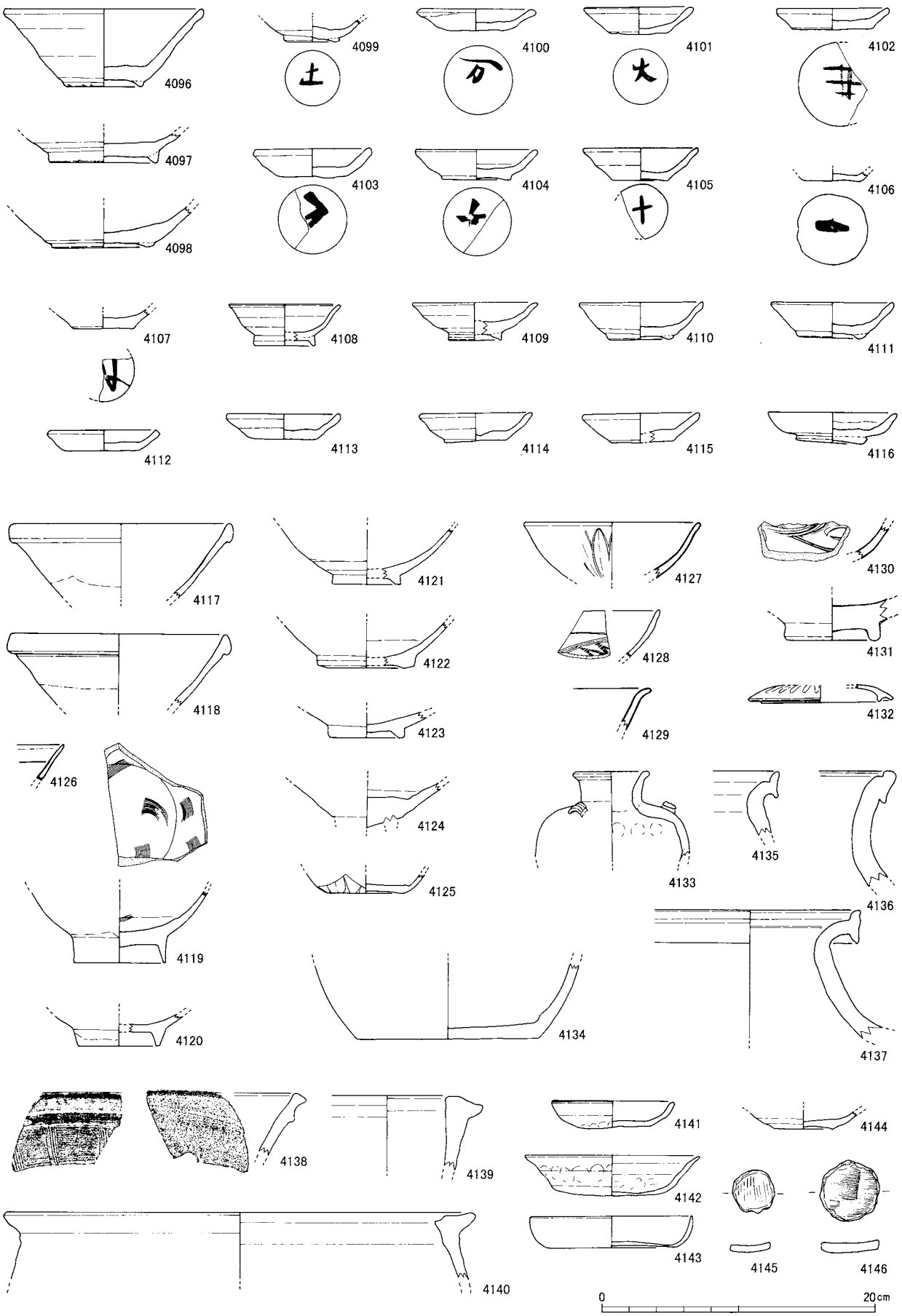
第381図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



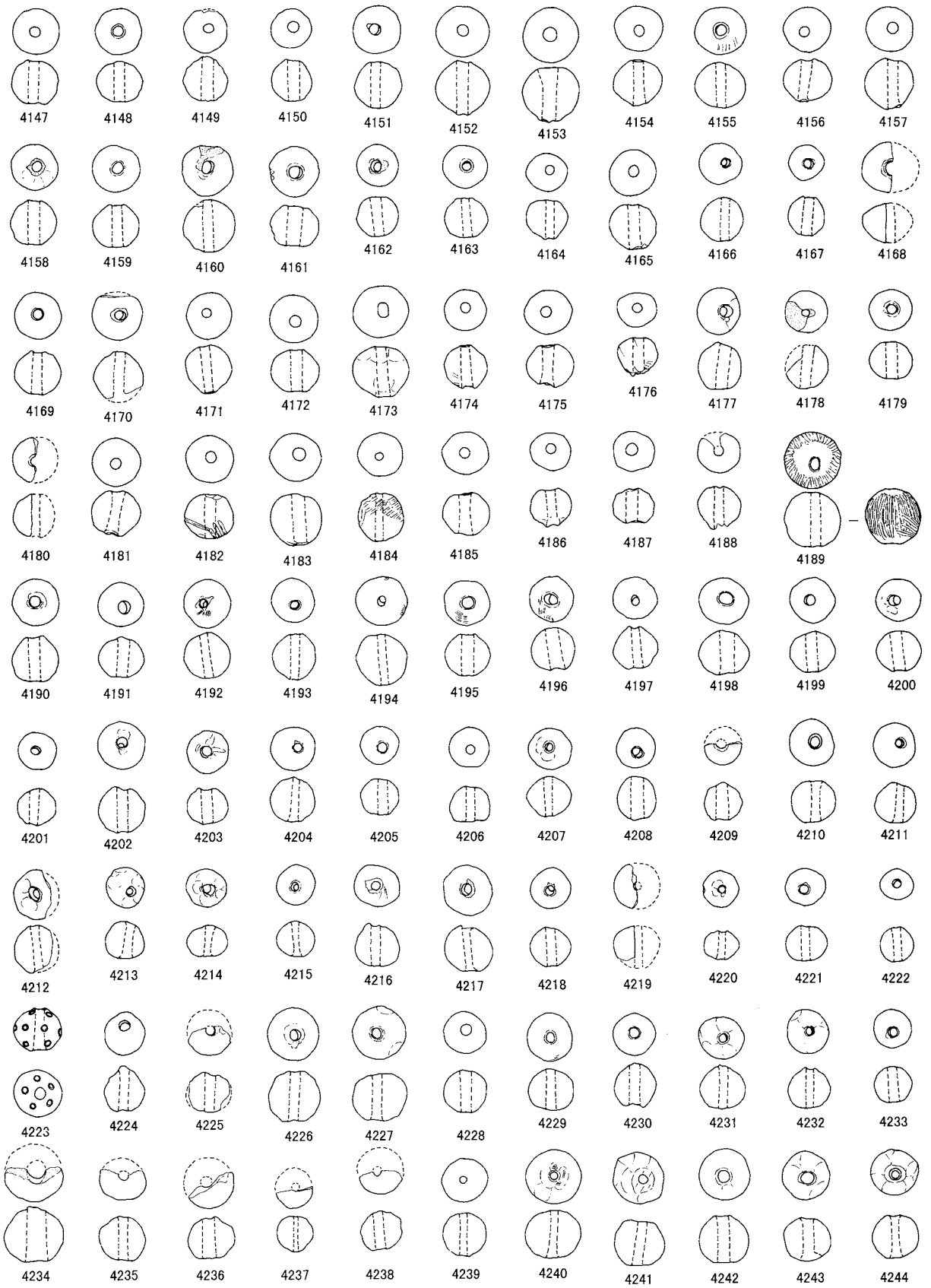
第382図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



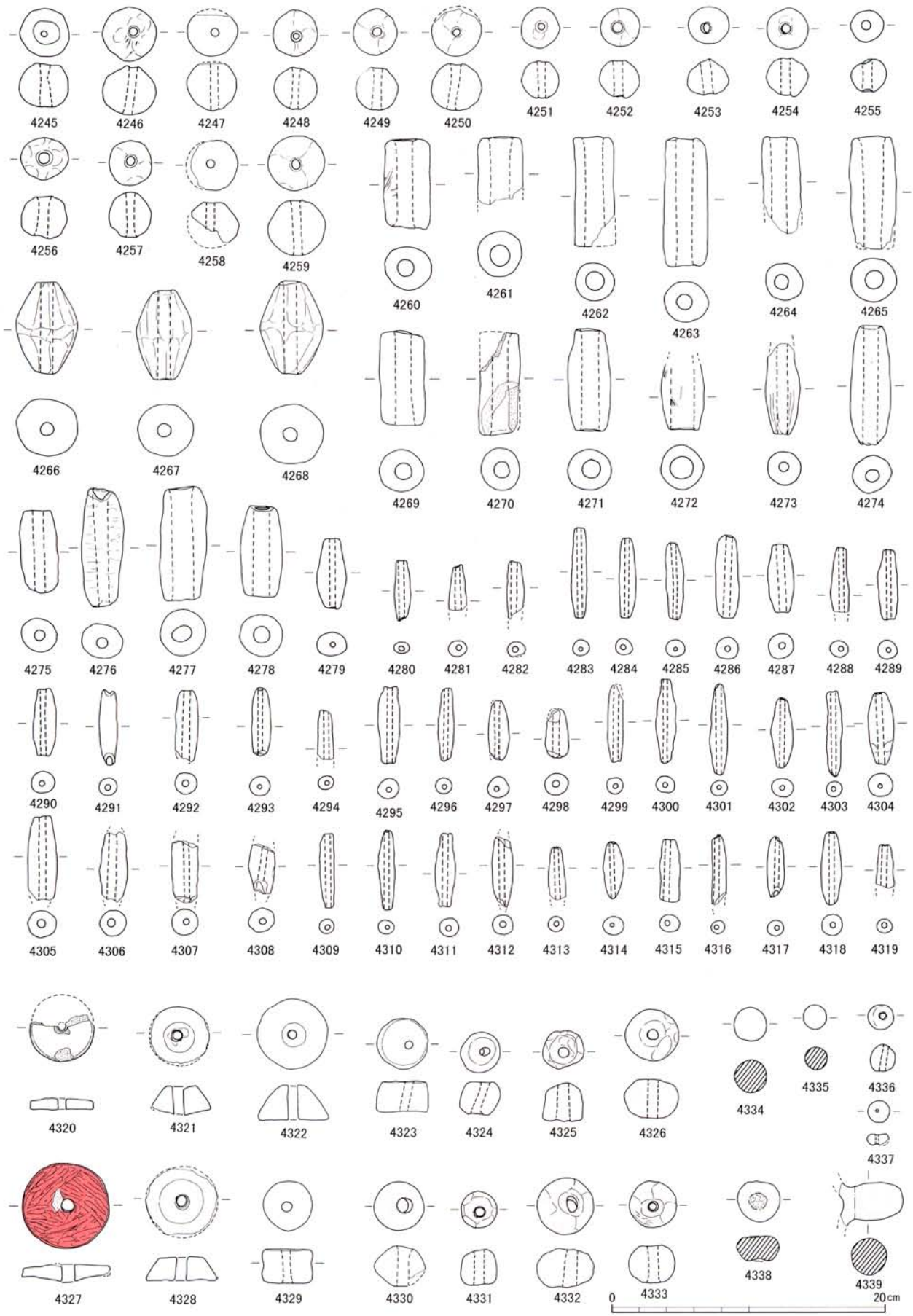
第383図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



第384図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

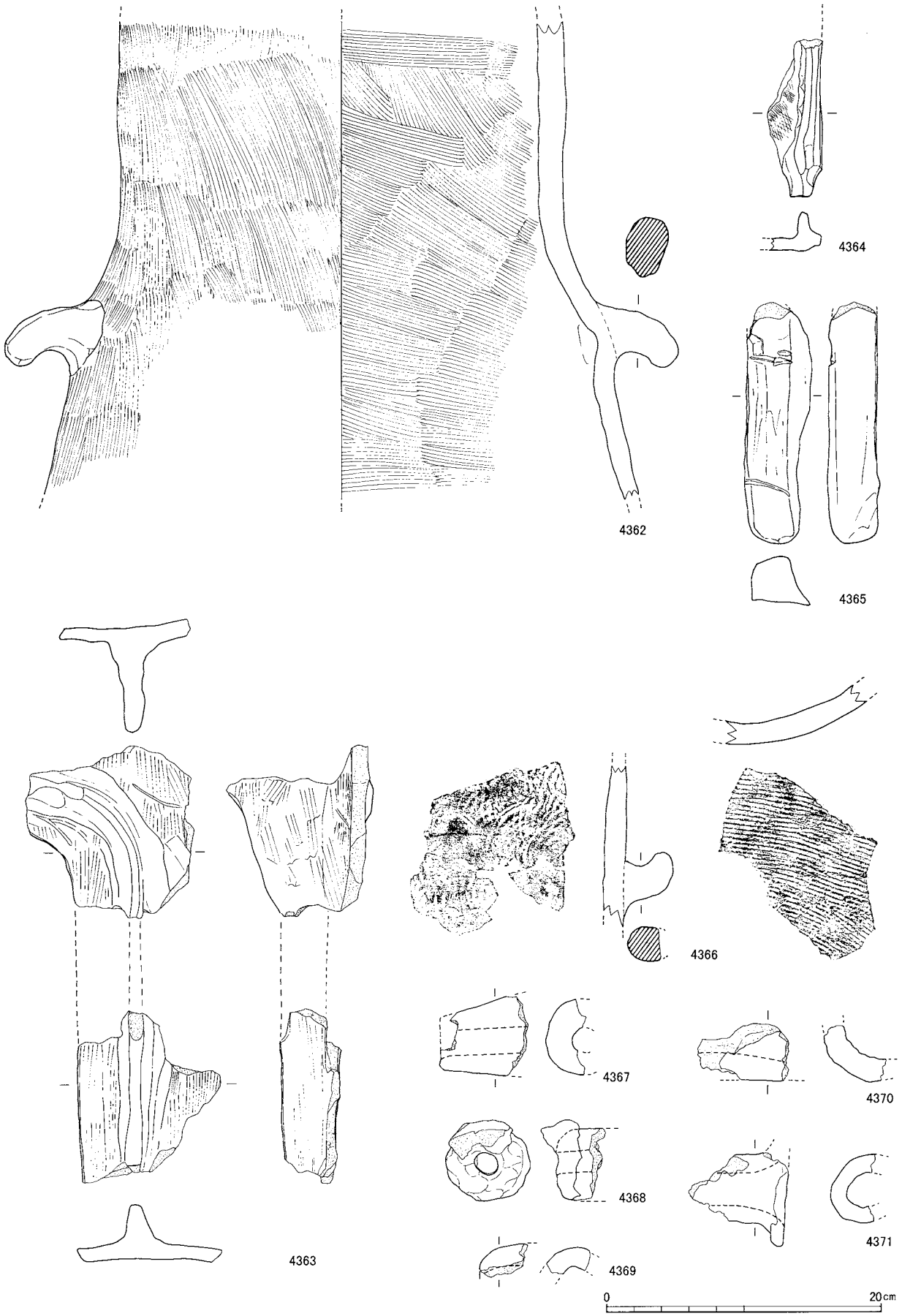


第385図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

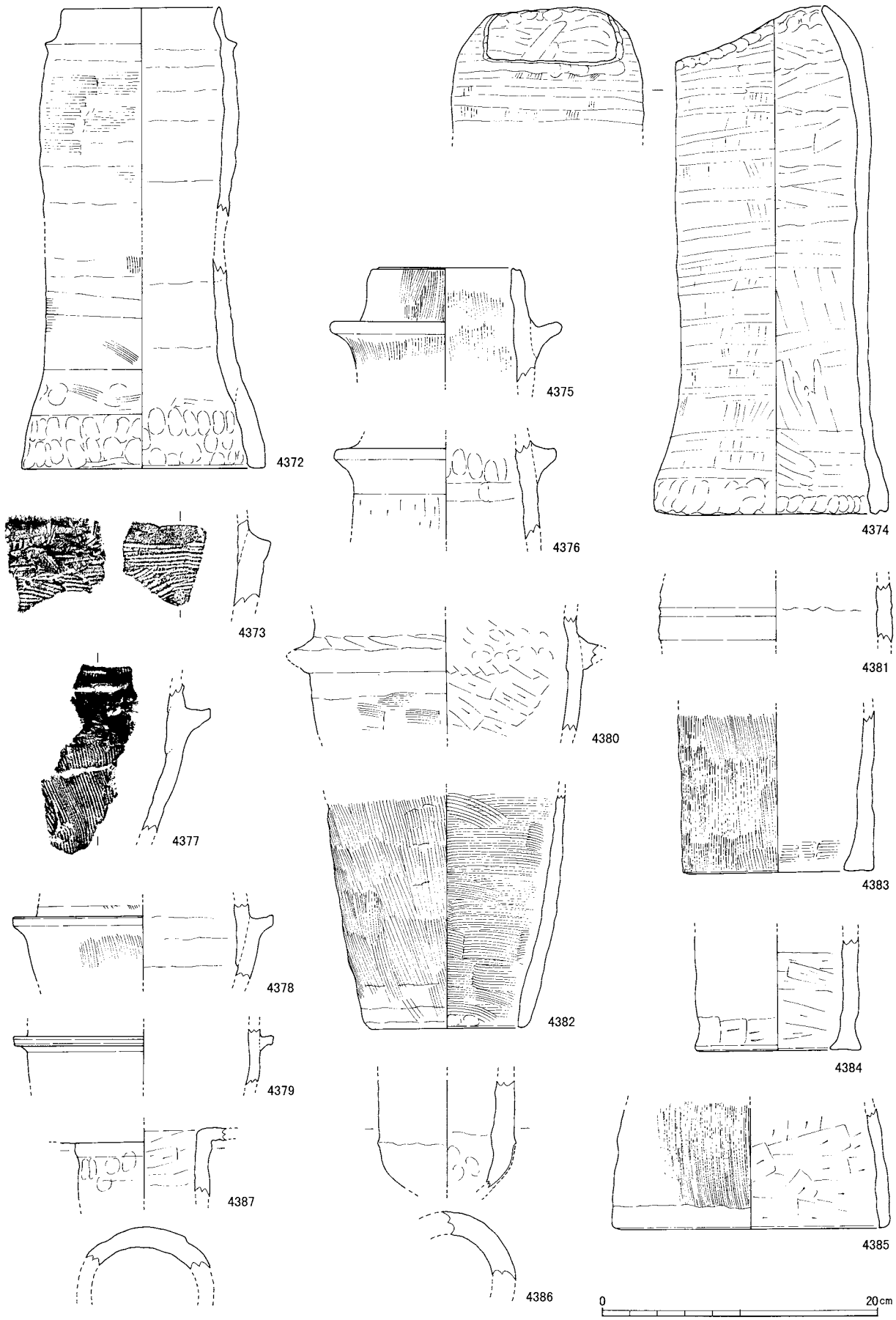


第386図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

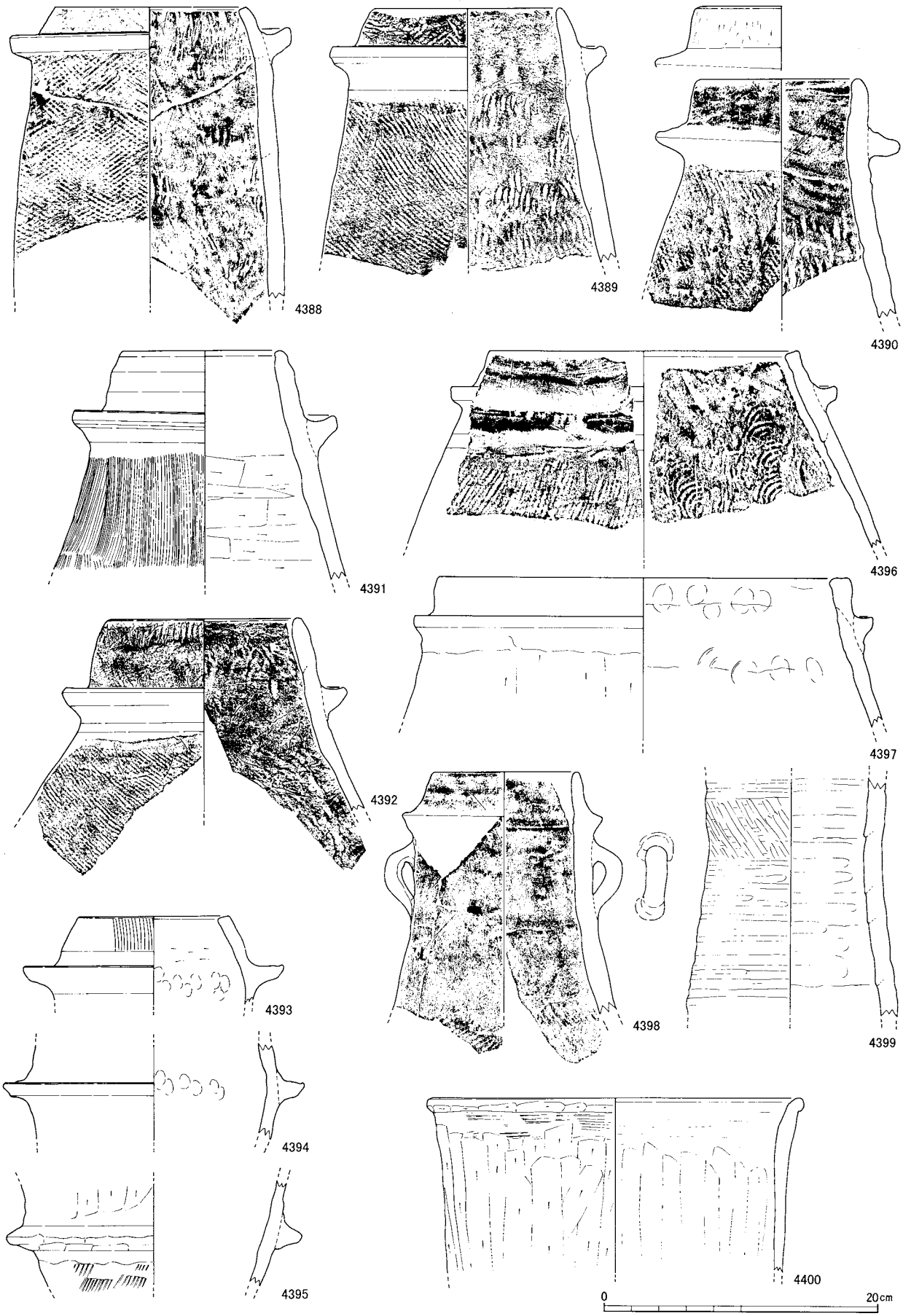
第387図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



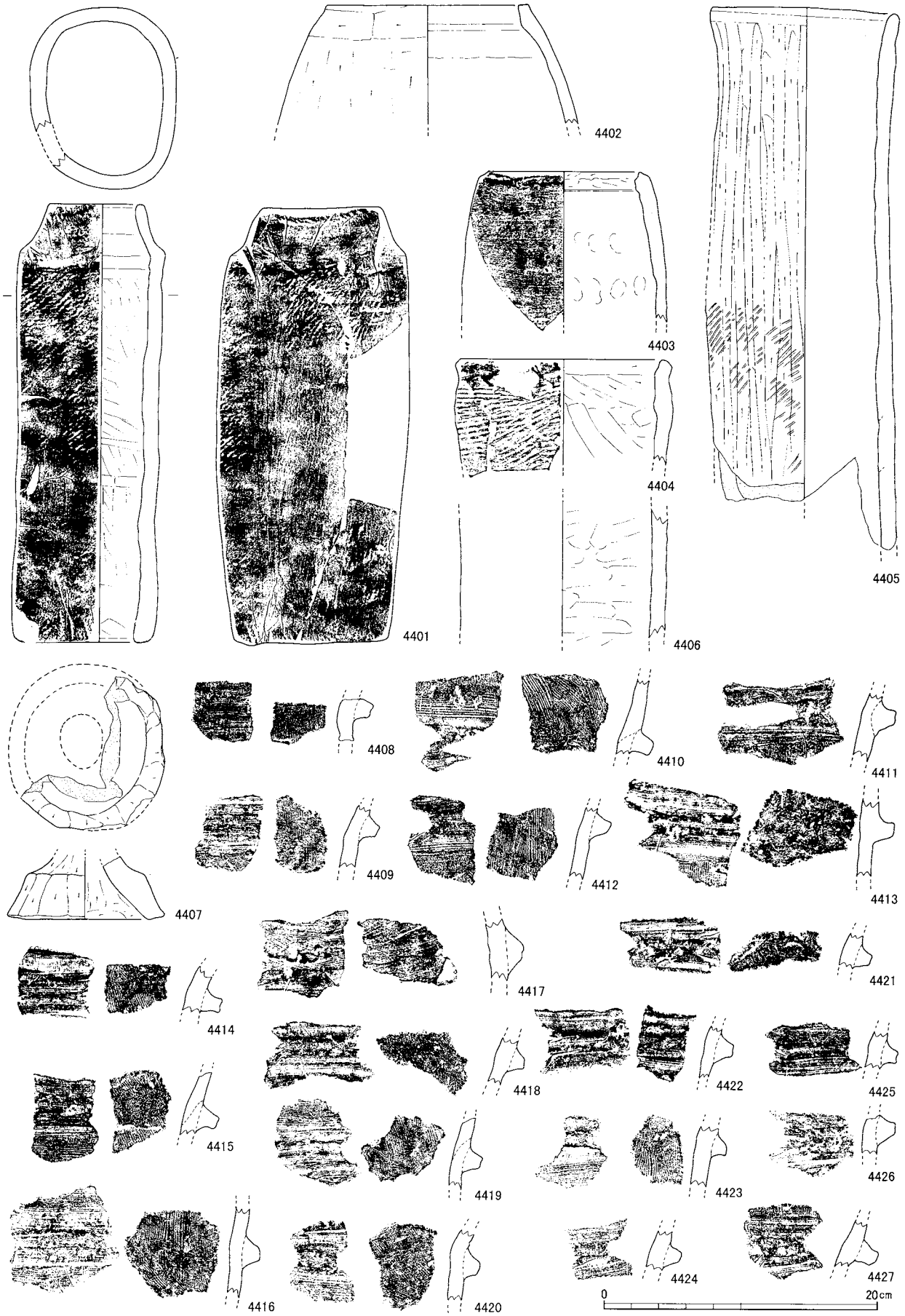
第388図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



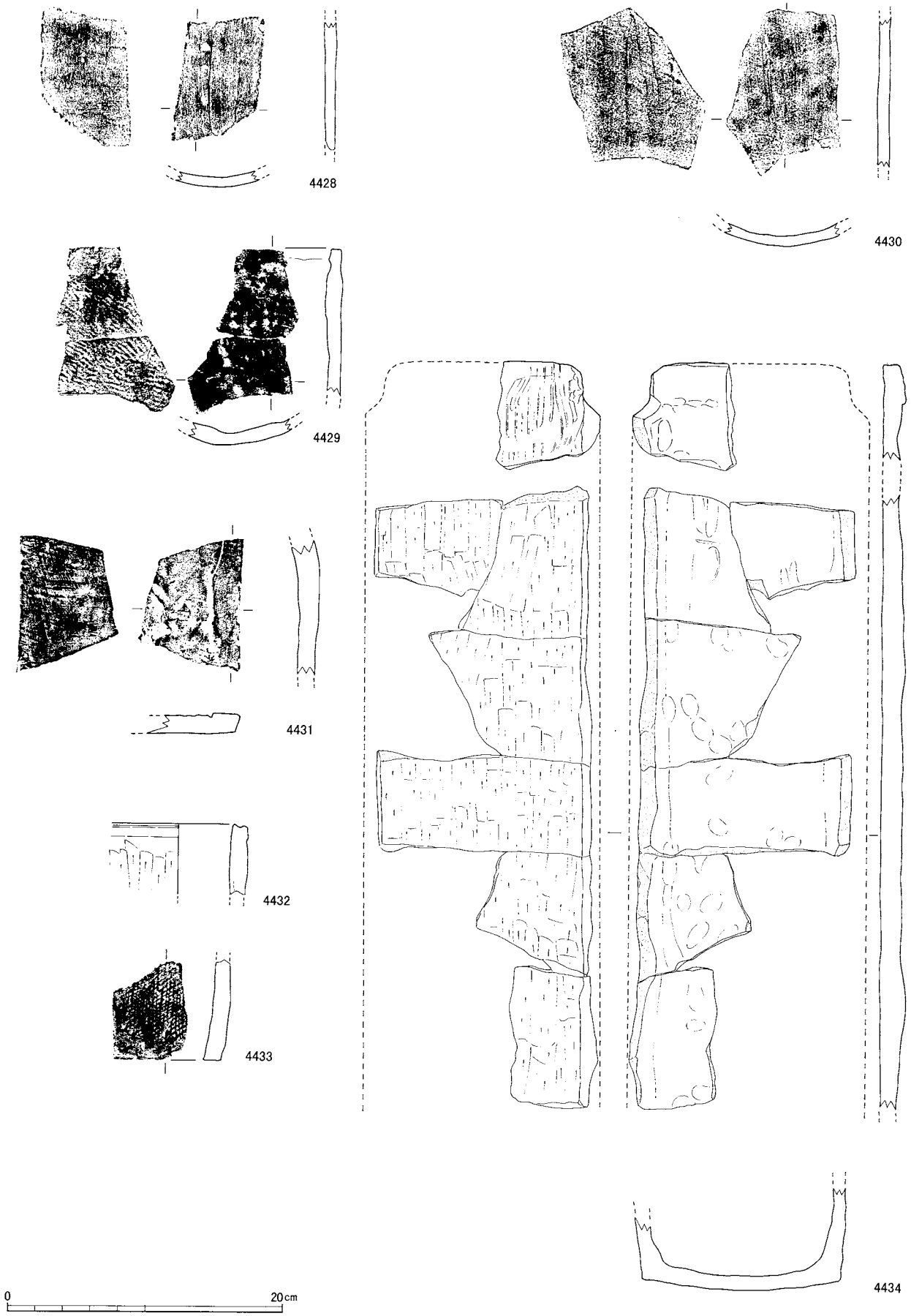
第389図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



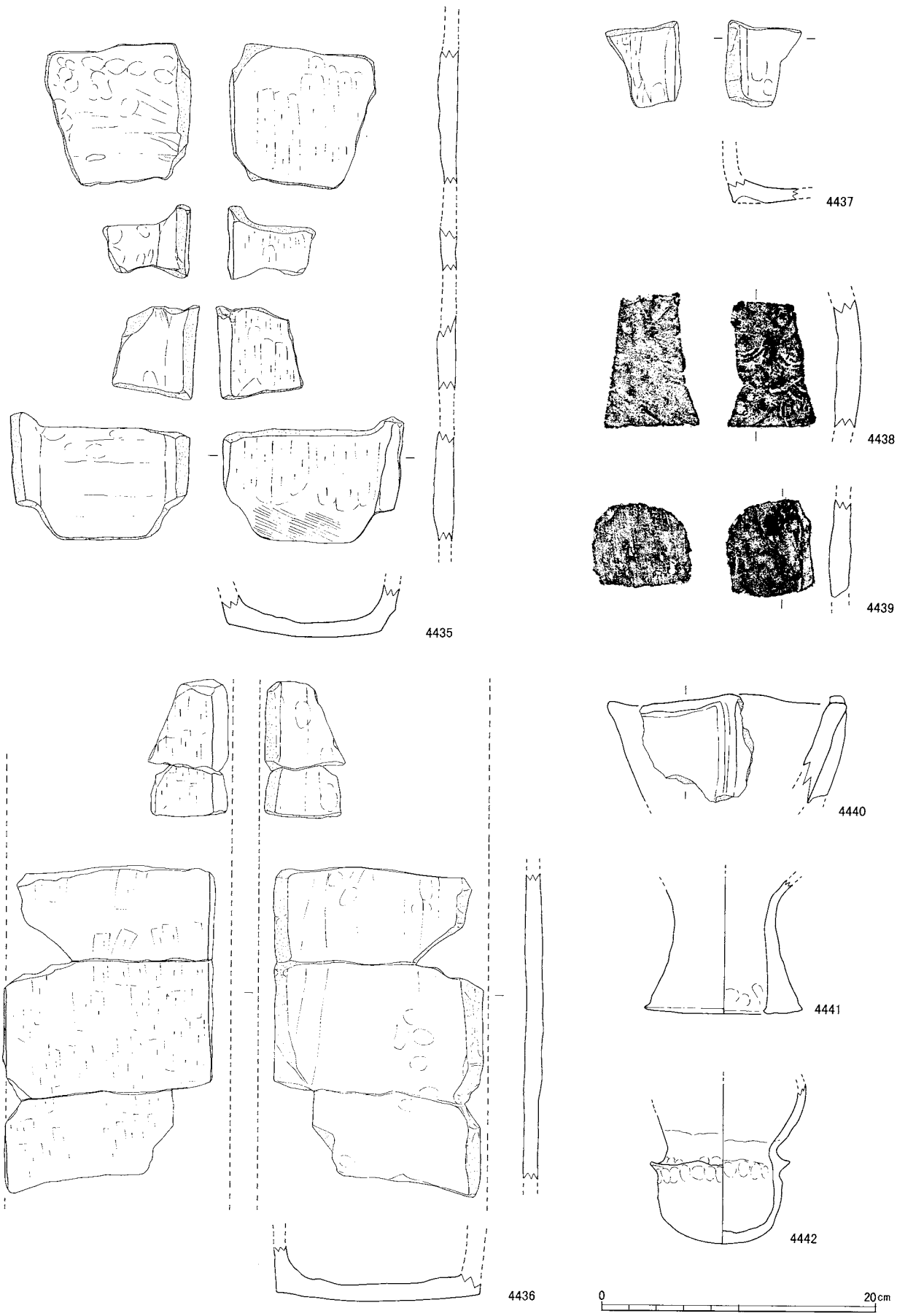
第390図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



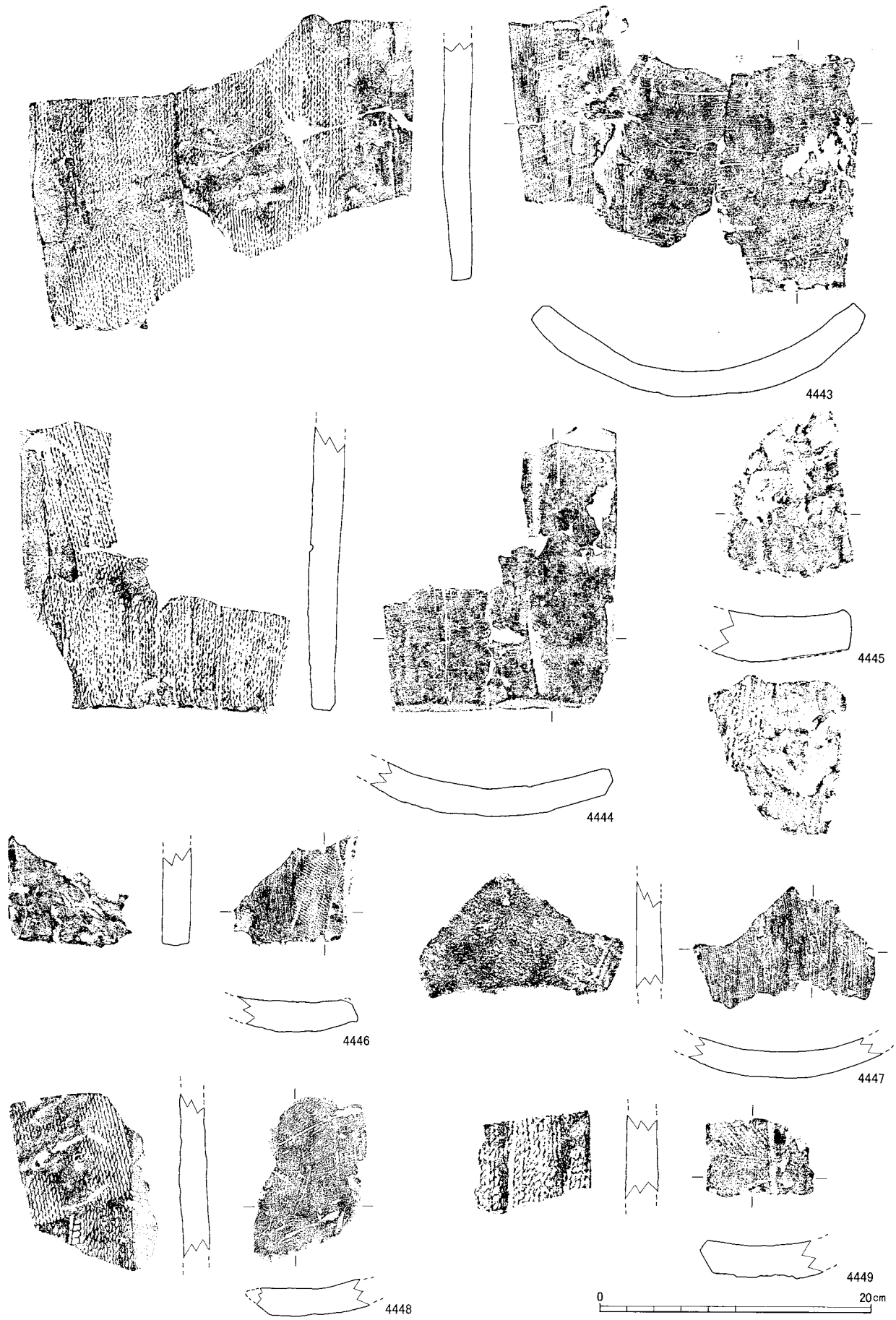
第391図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



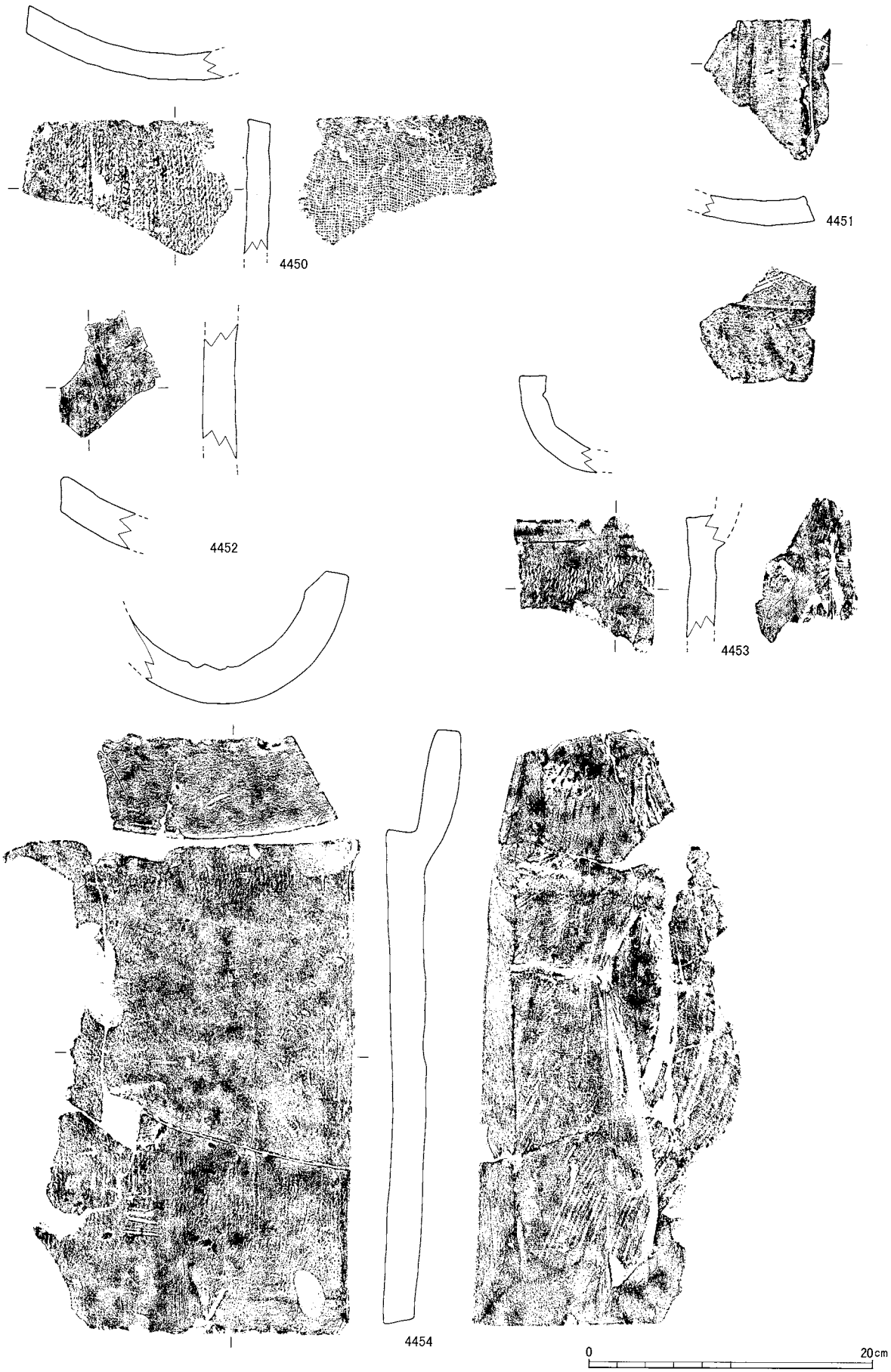
第392図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



第393図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

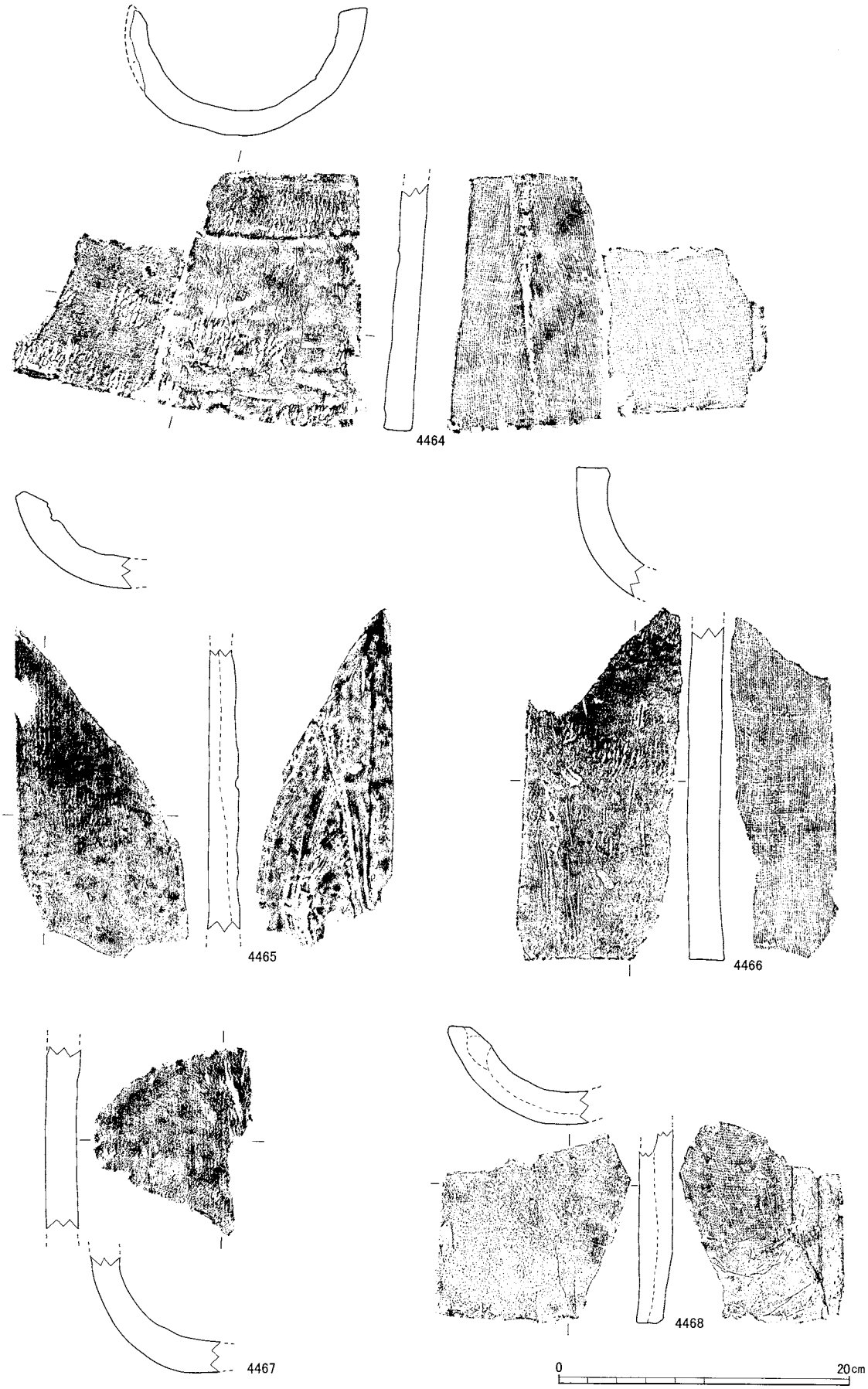


第394図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

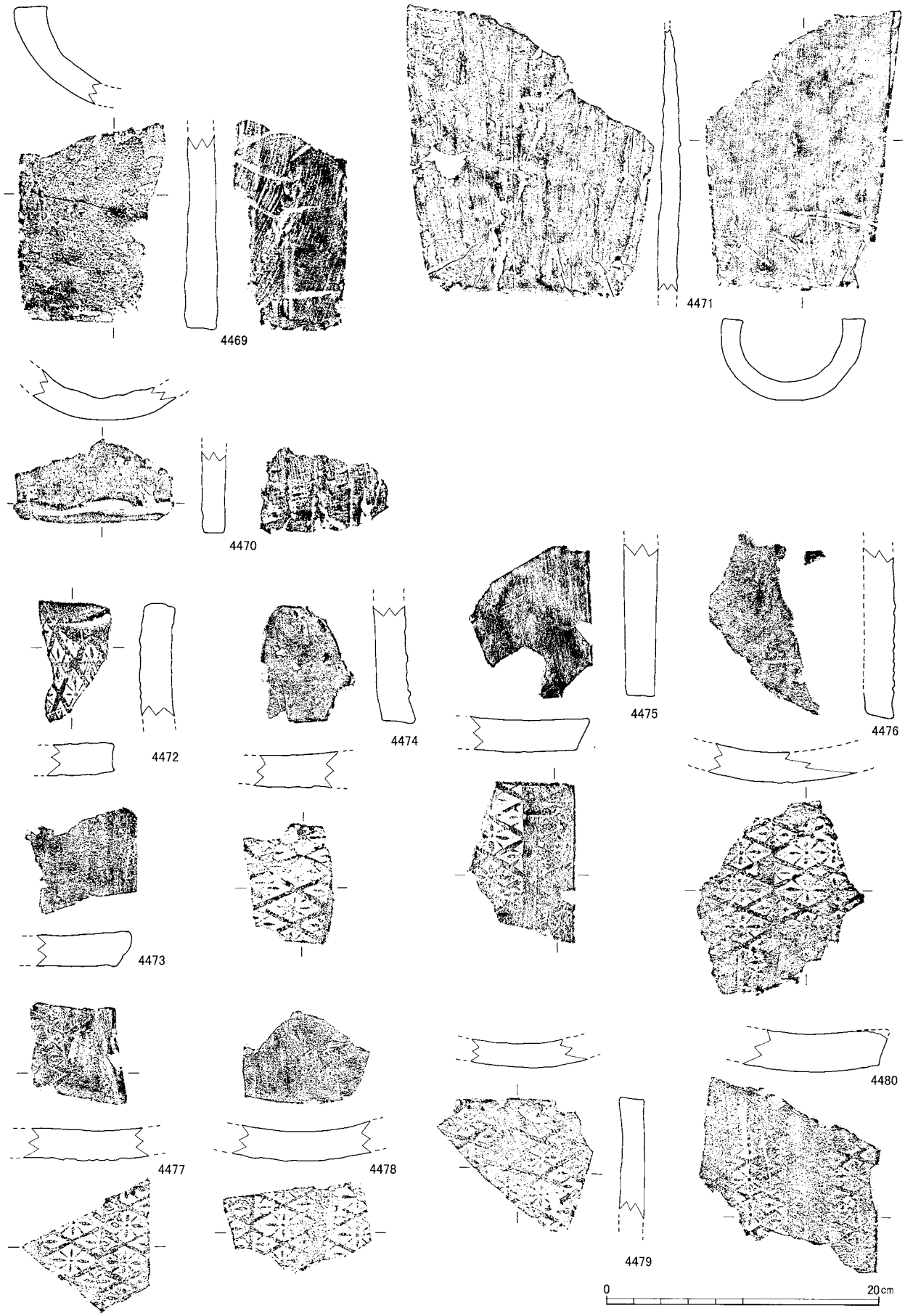


第395図　ＳＤ１出土遺物（１：４）

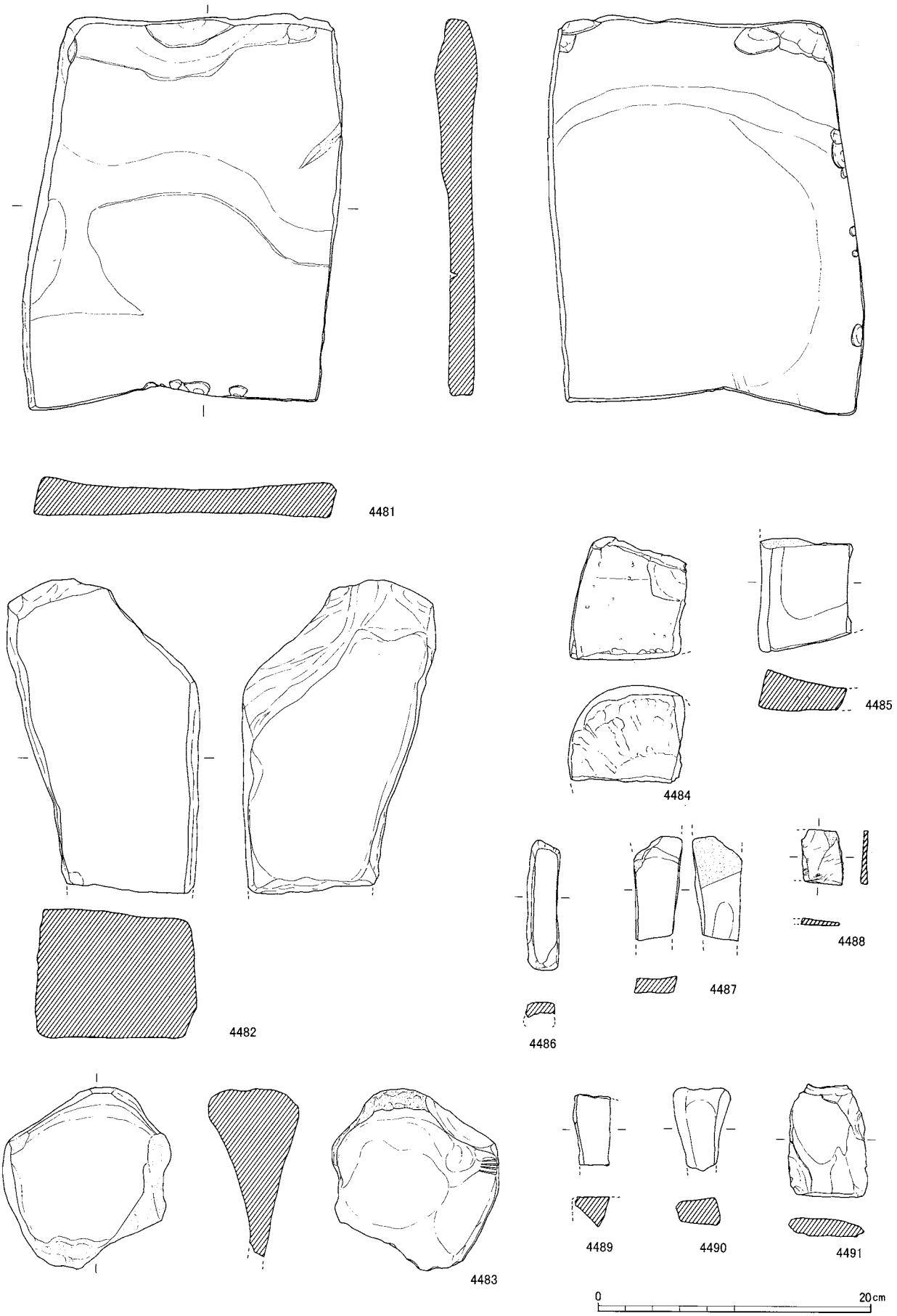
第396図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



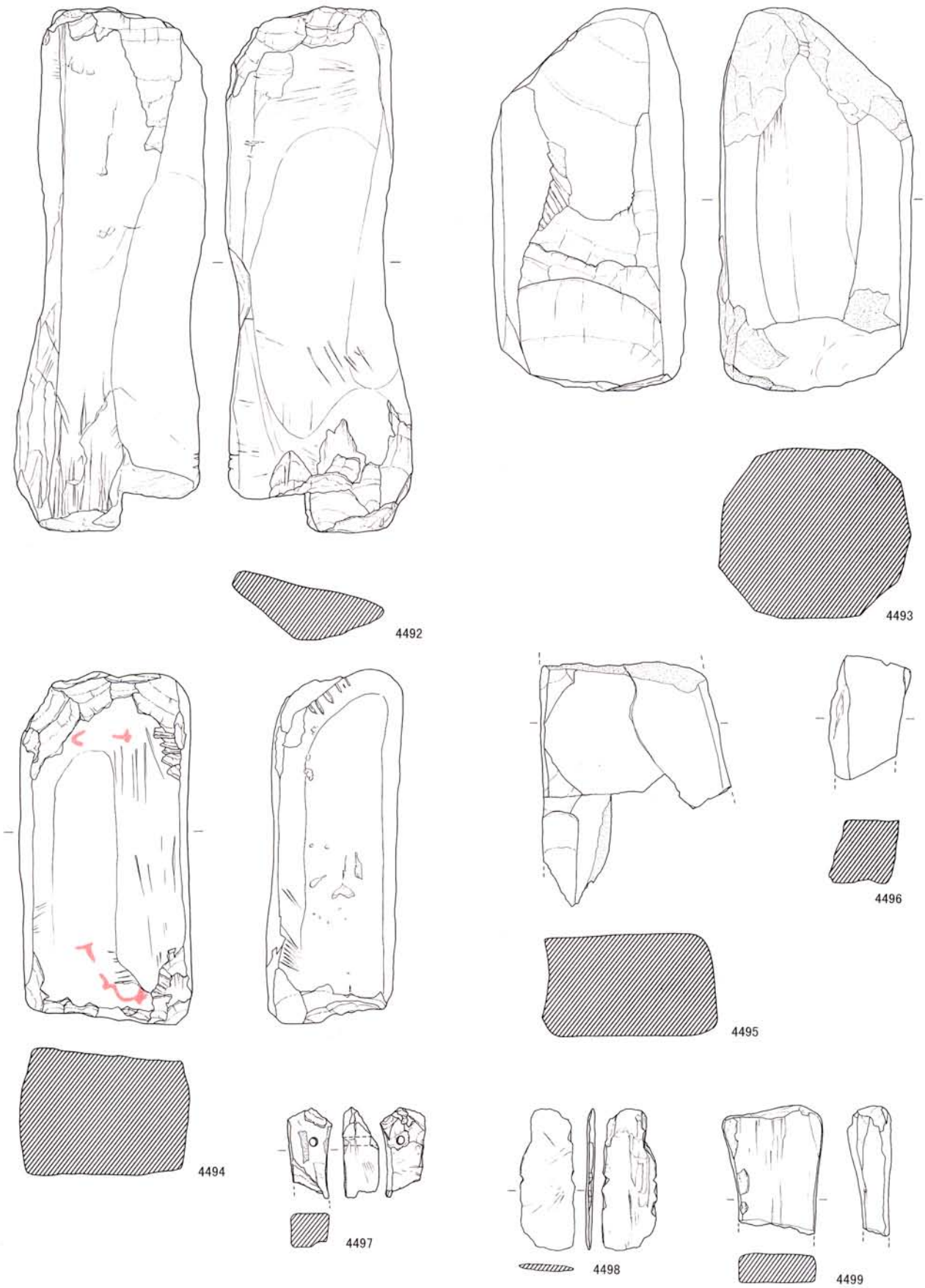
第397図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



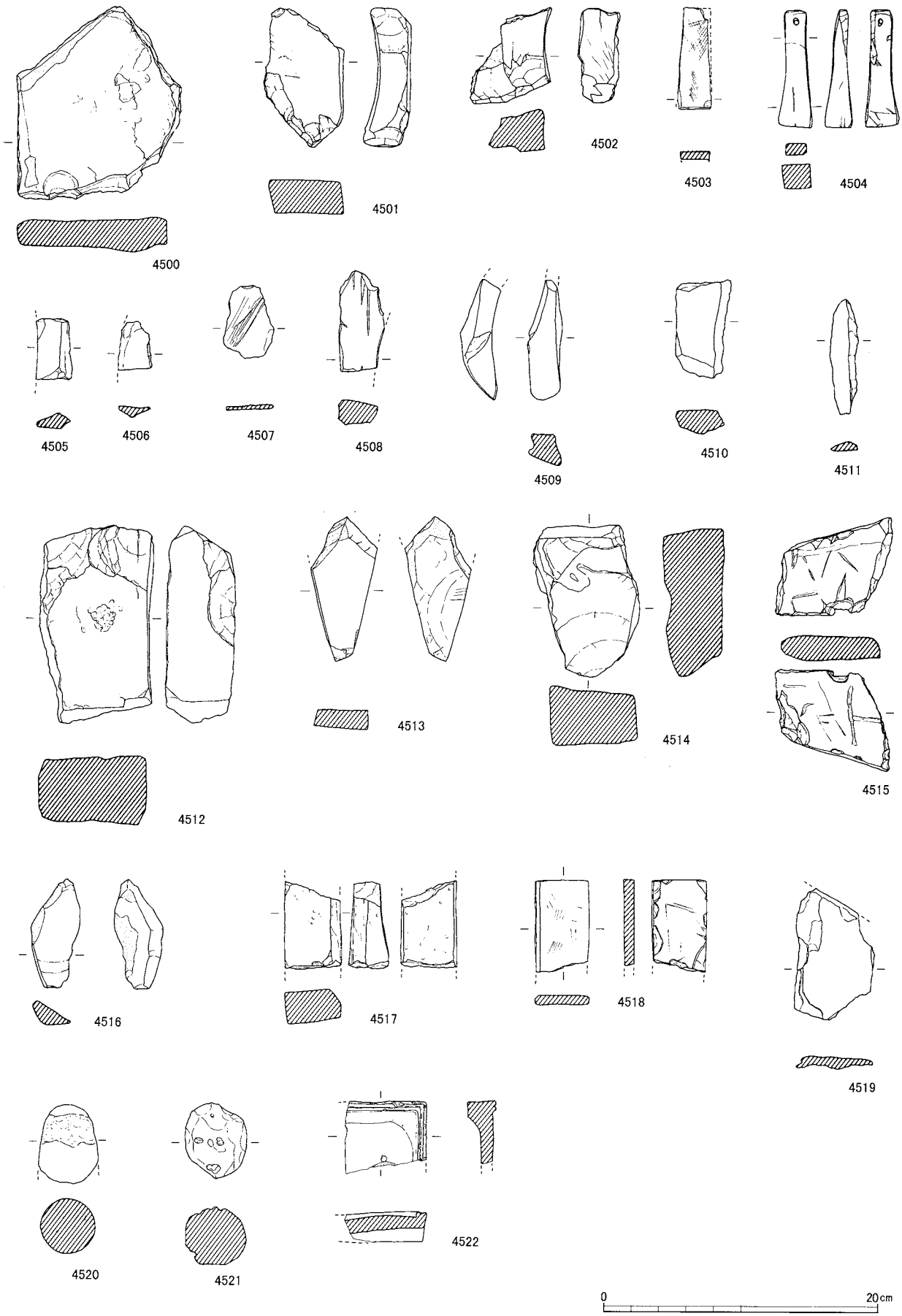
第398図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



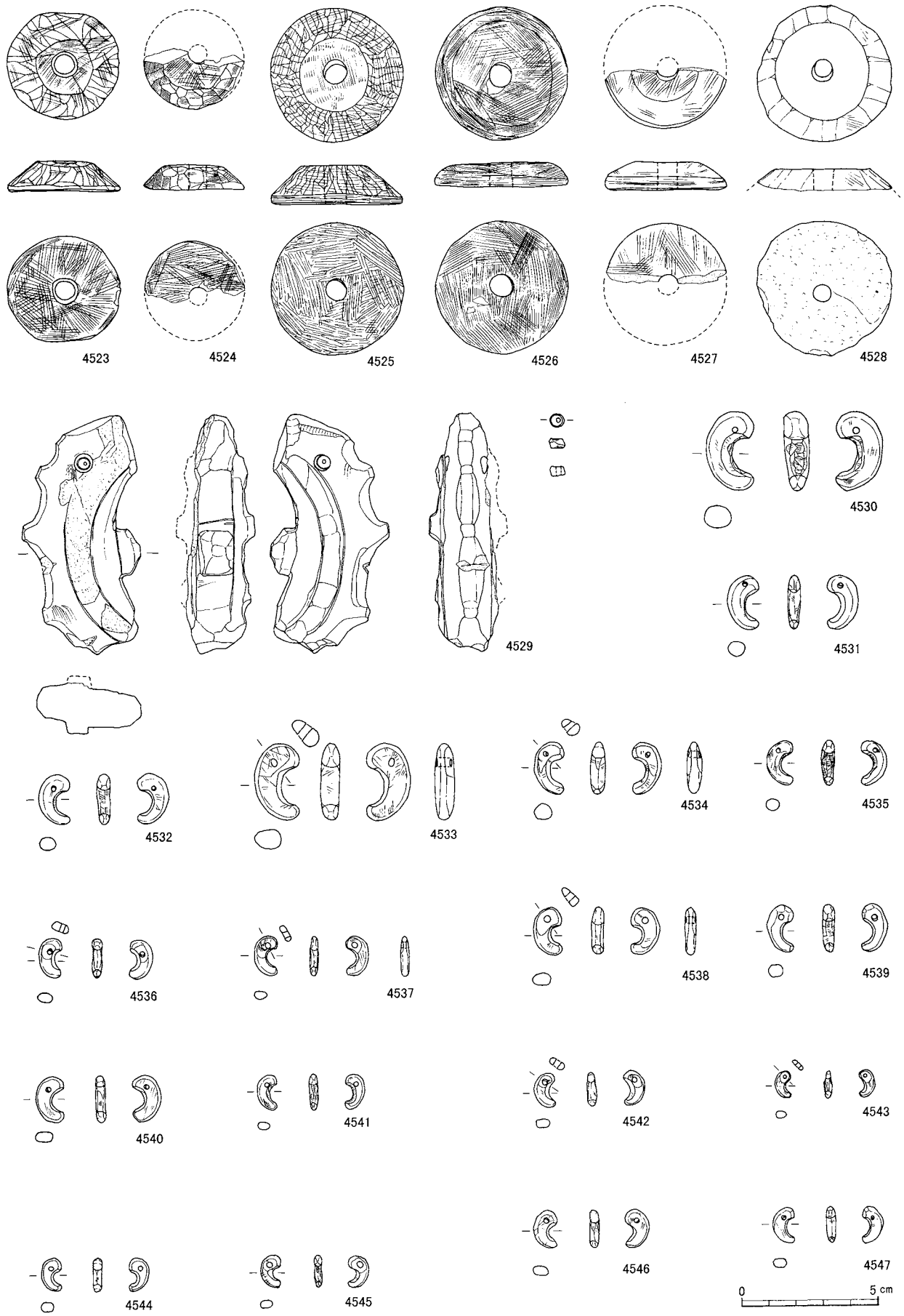
第399図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



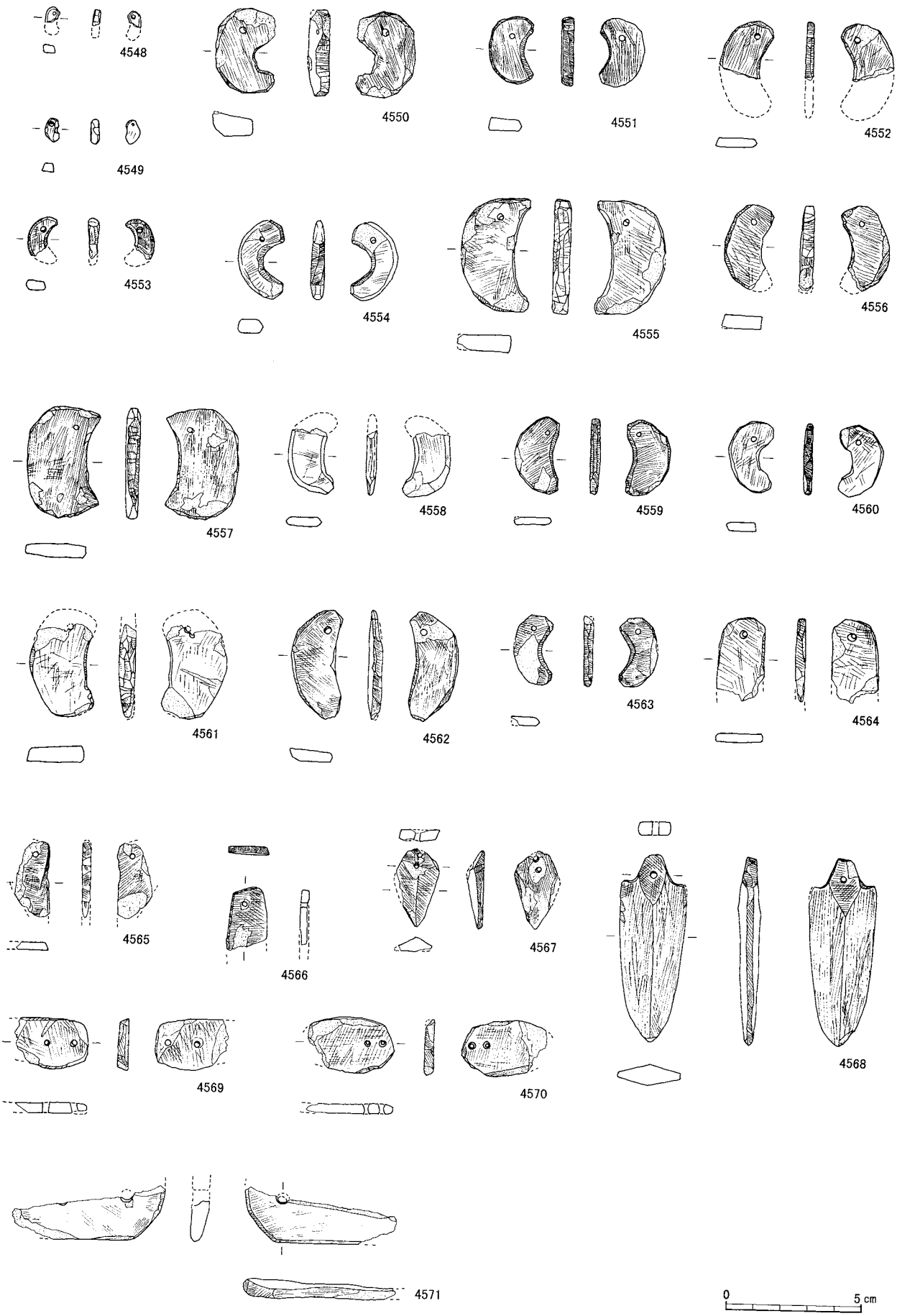
第400図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



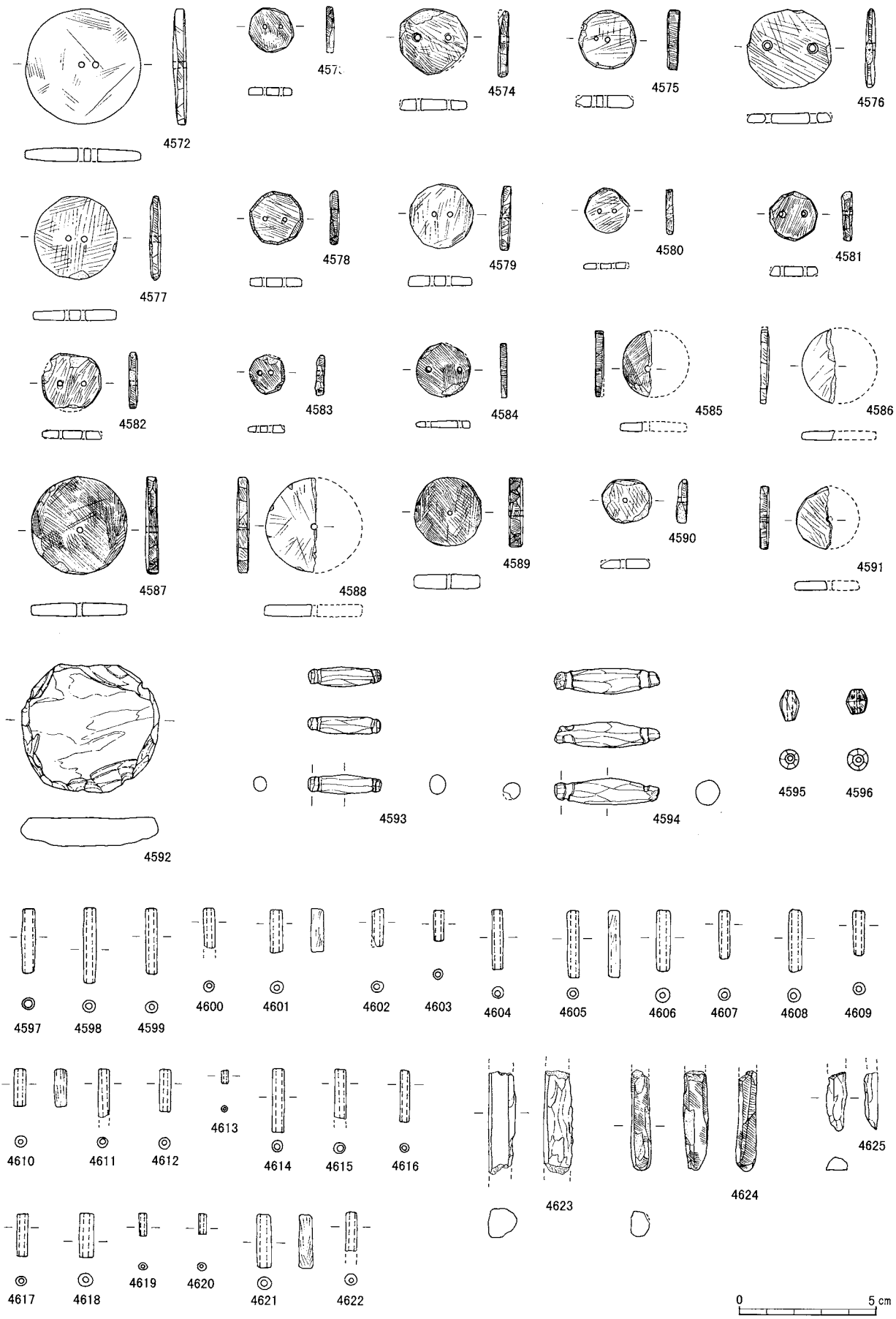
第401図　ＳＤ１出土遺物（１：４）



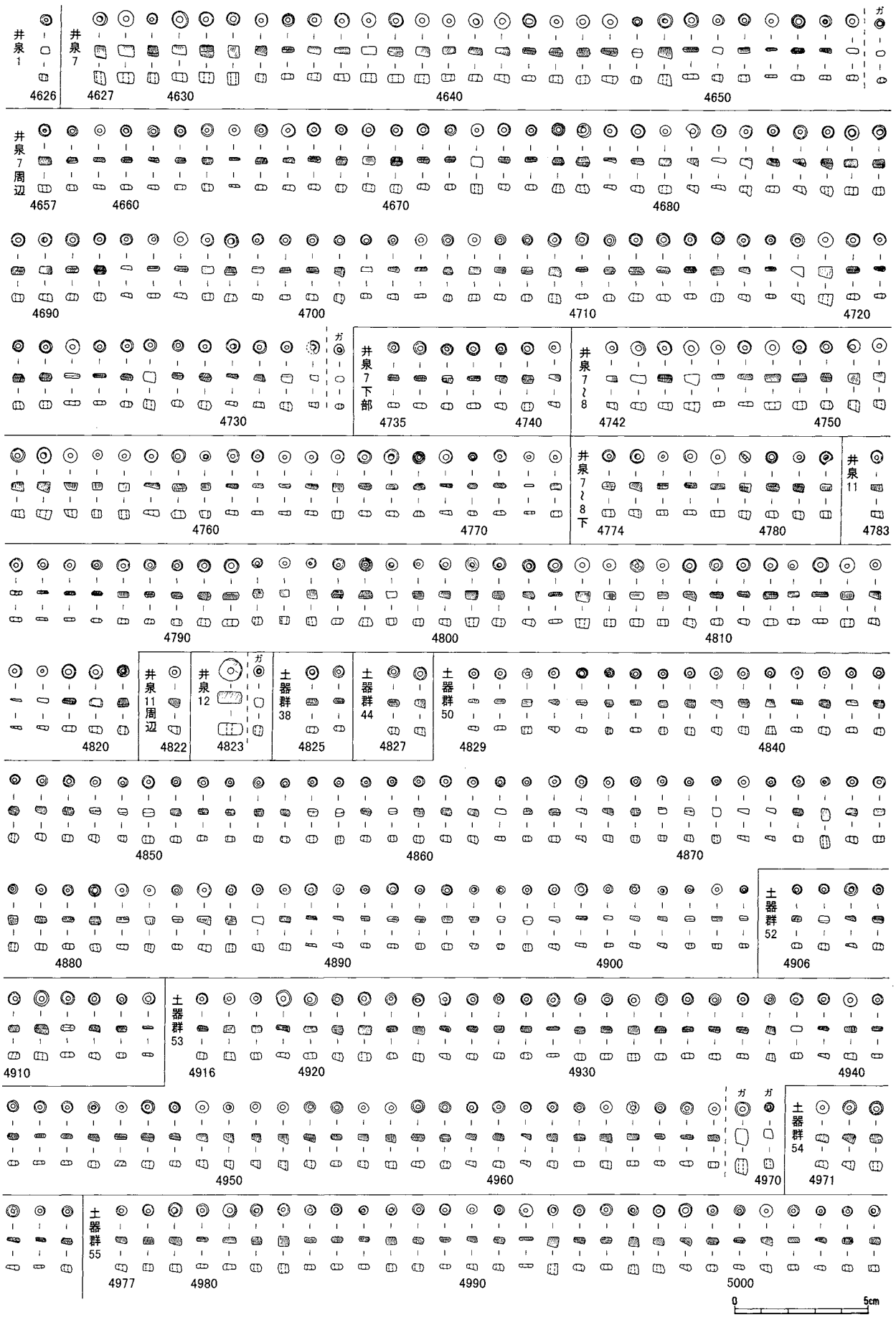
第402図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



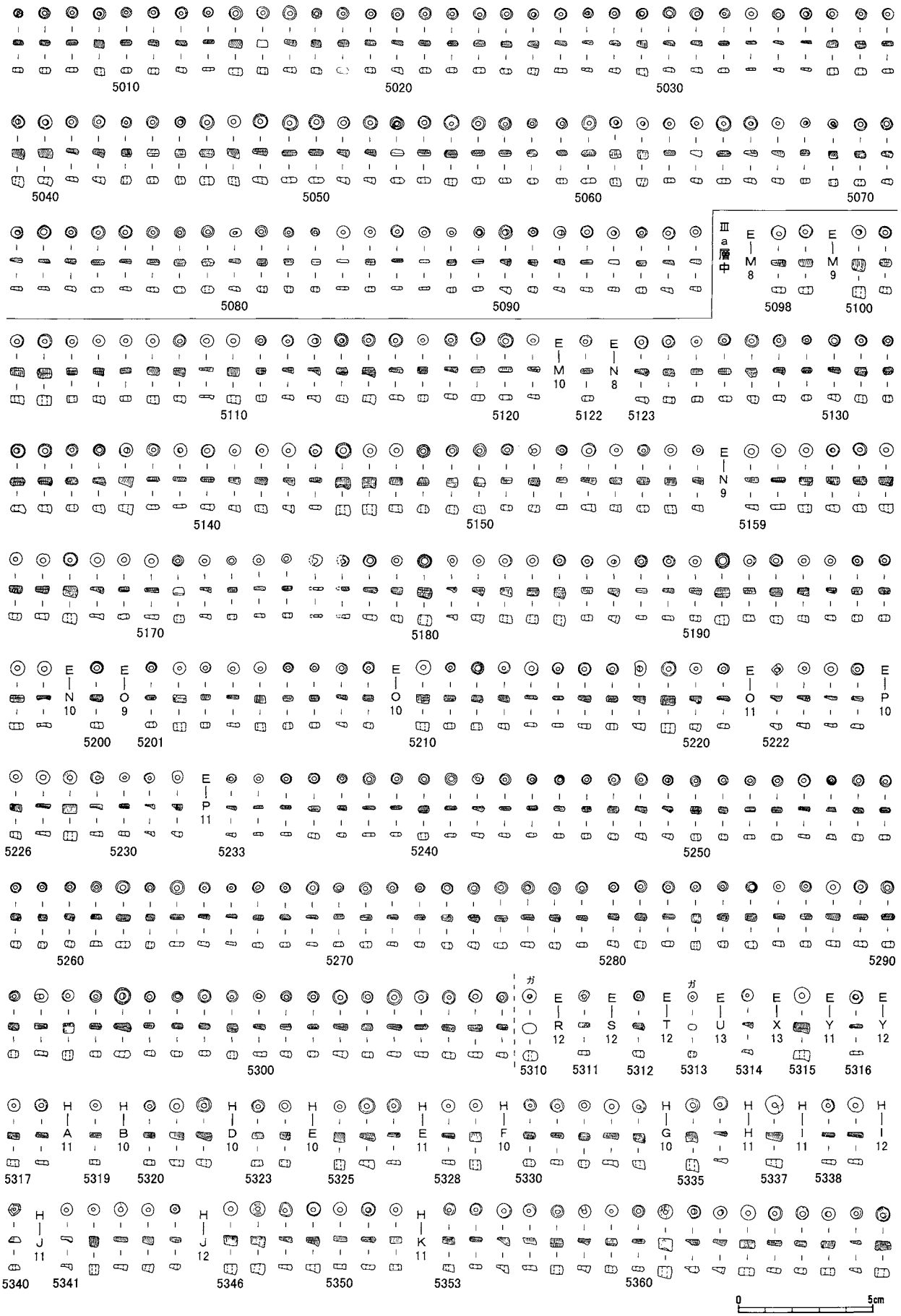
第403図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



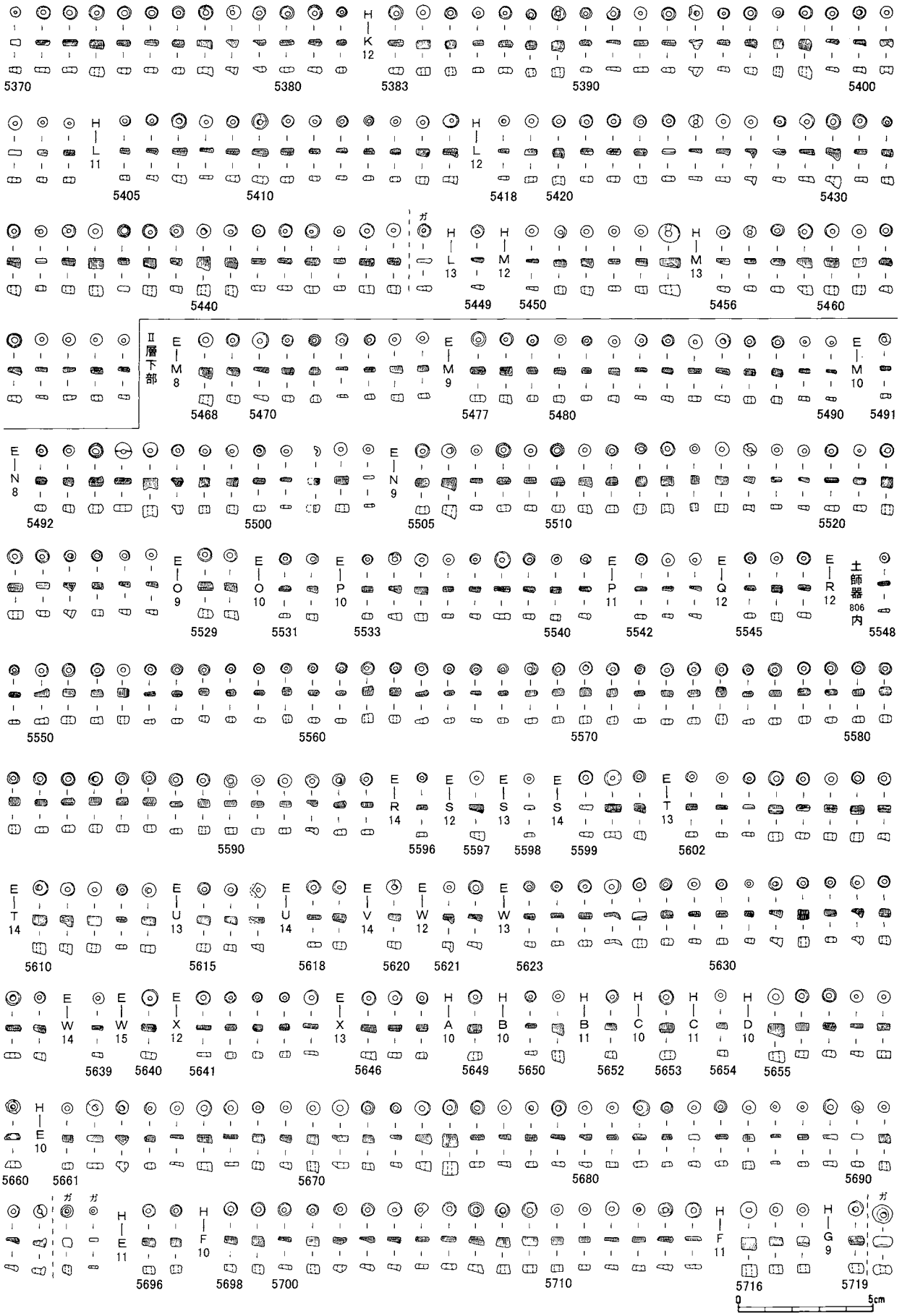
第404図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



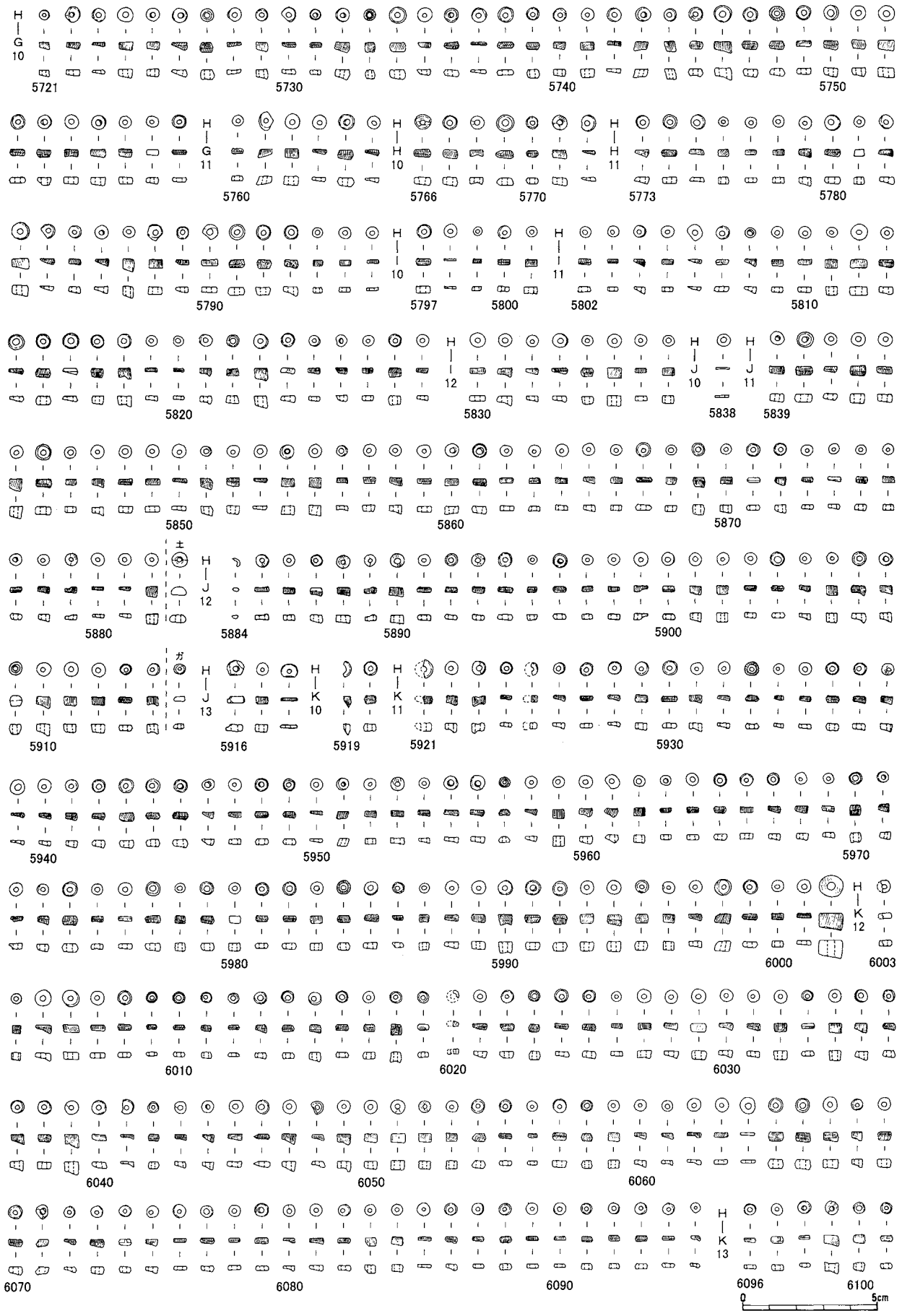
第405図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



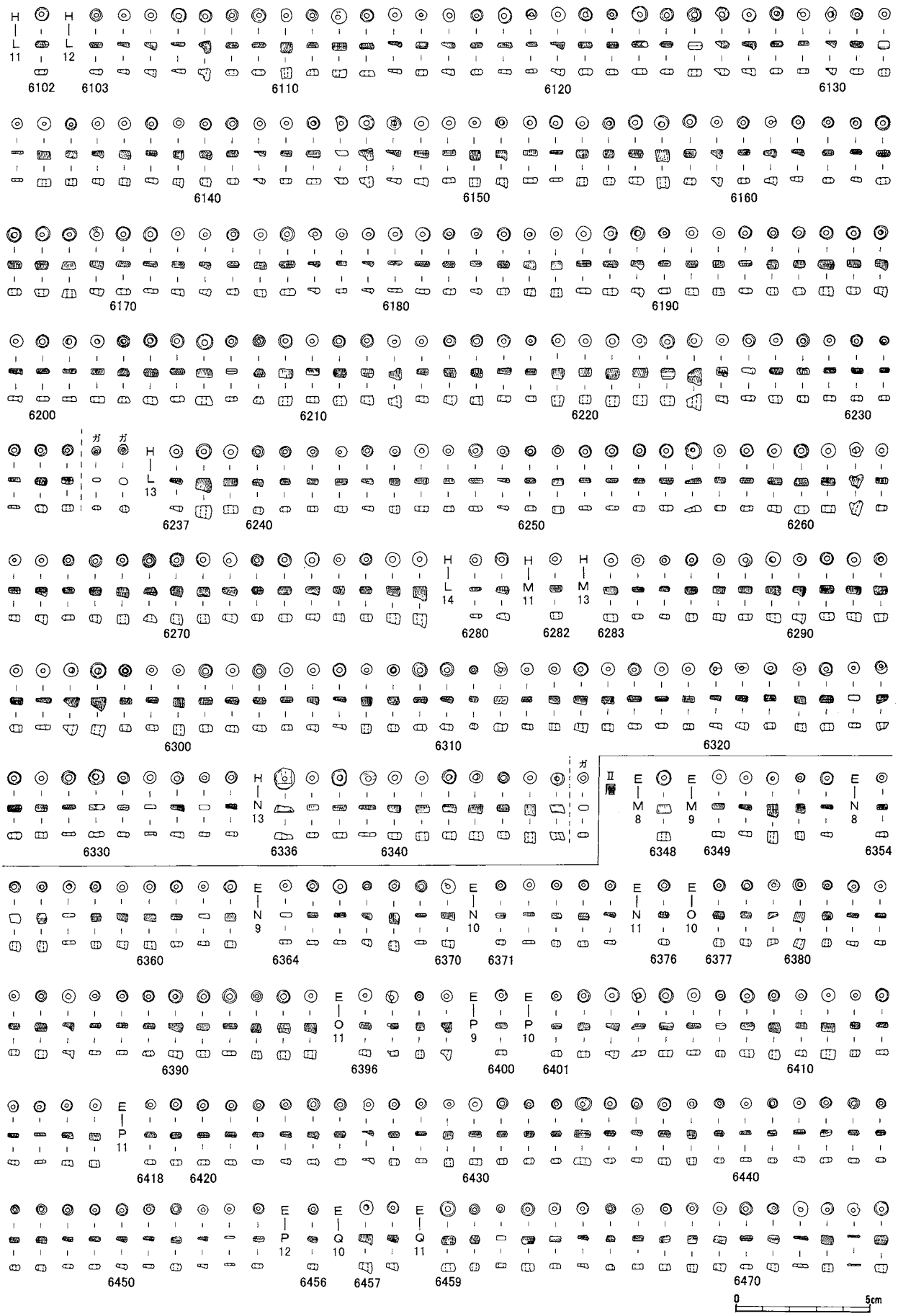
第406図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



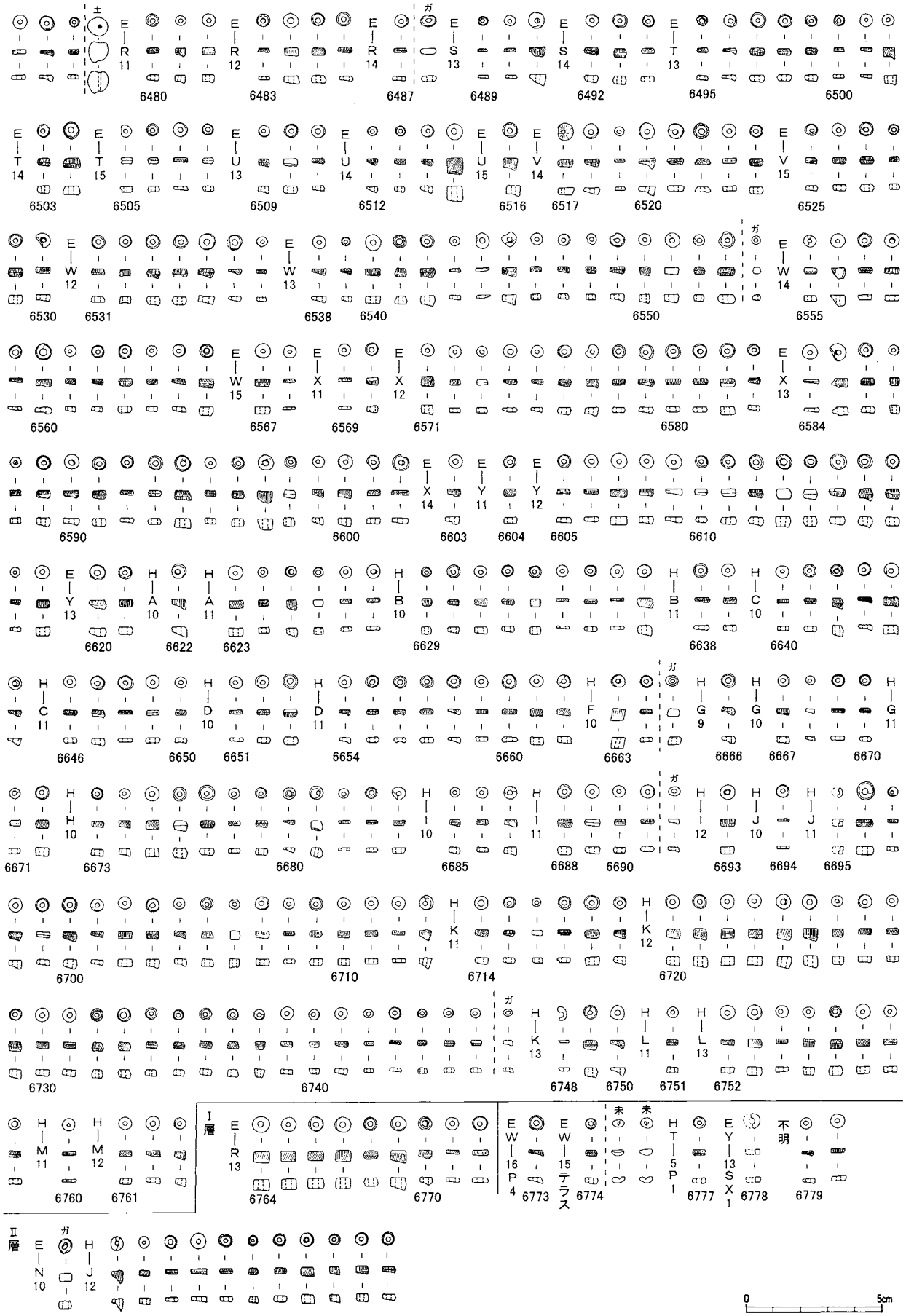
第407図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



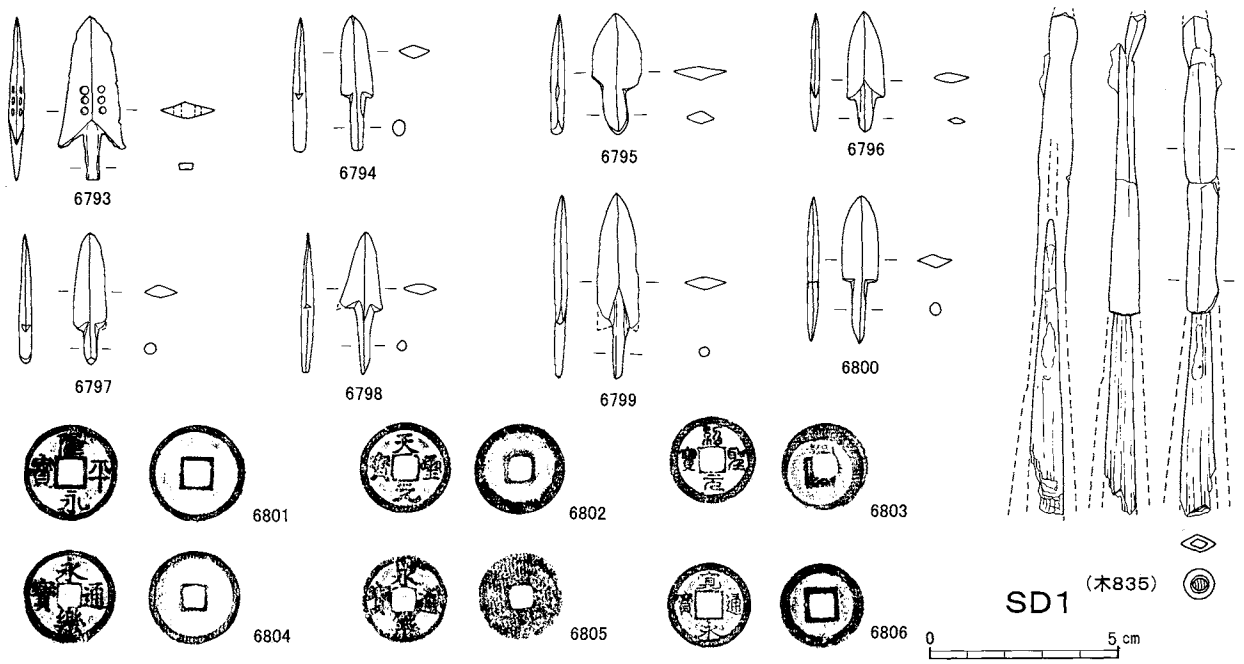
第408図　ＳＤ１出土遺物（１：２）

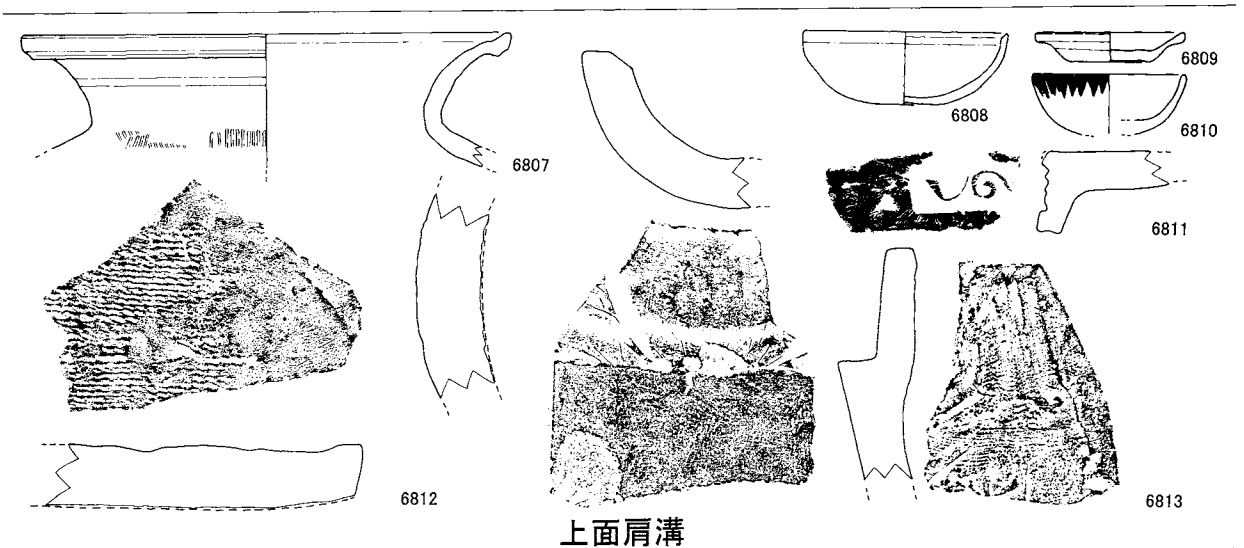


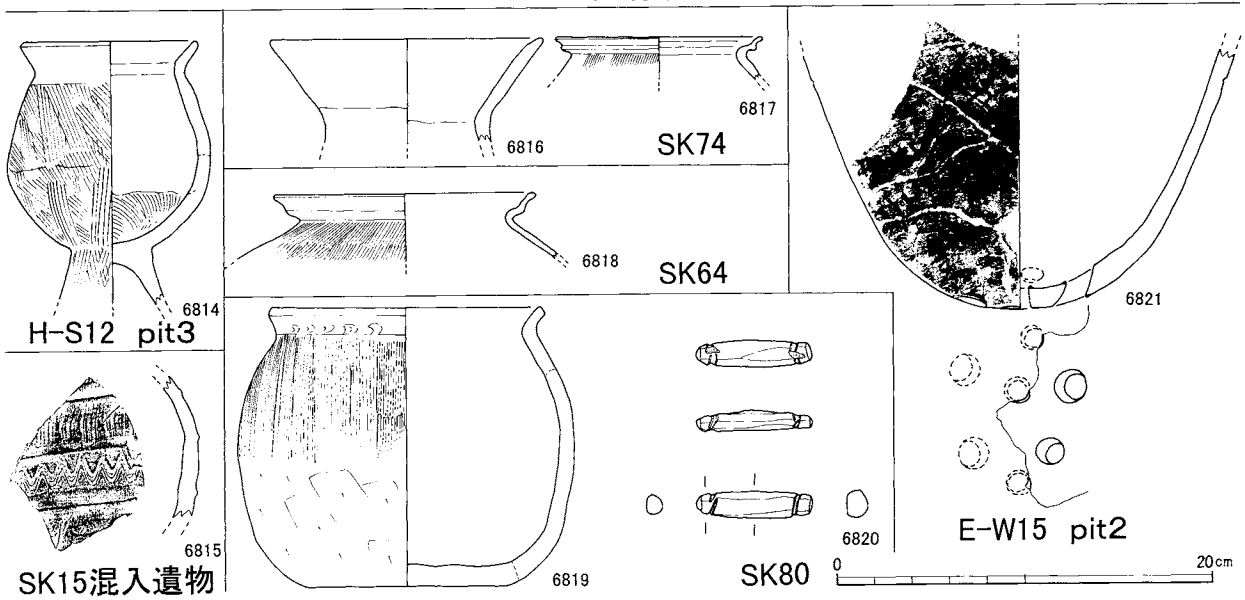
第409図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



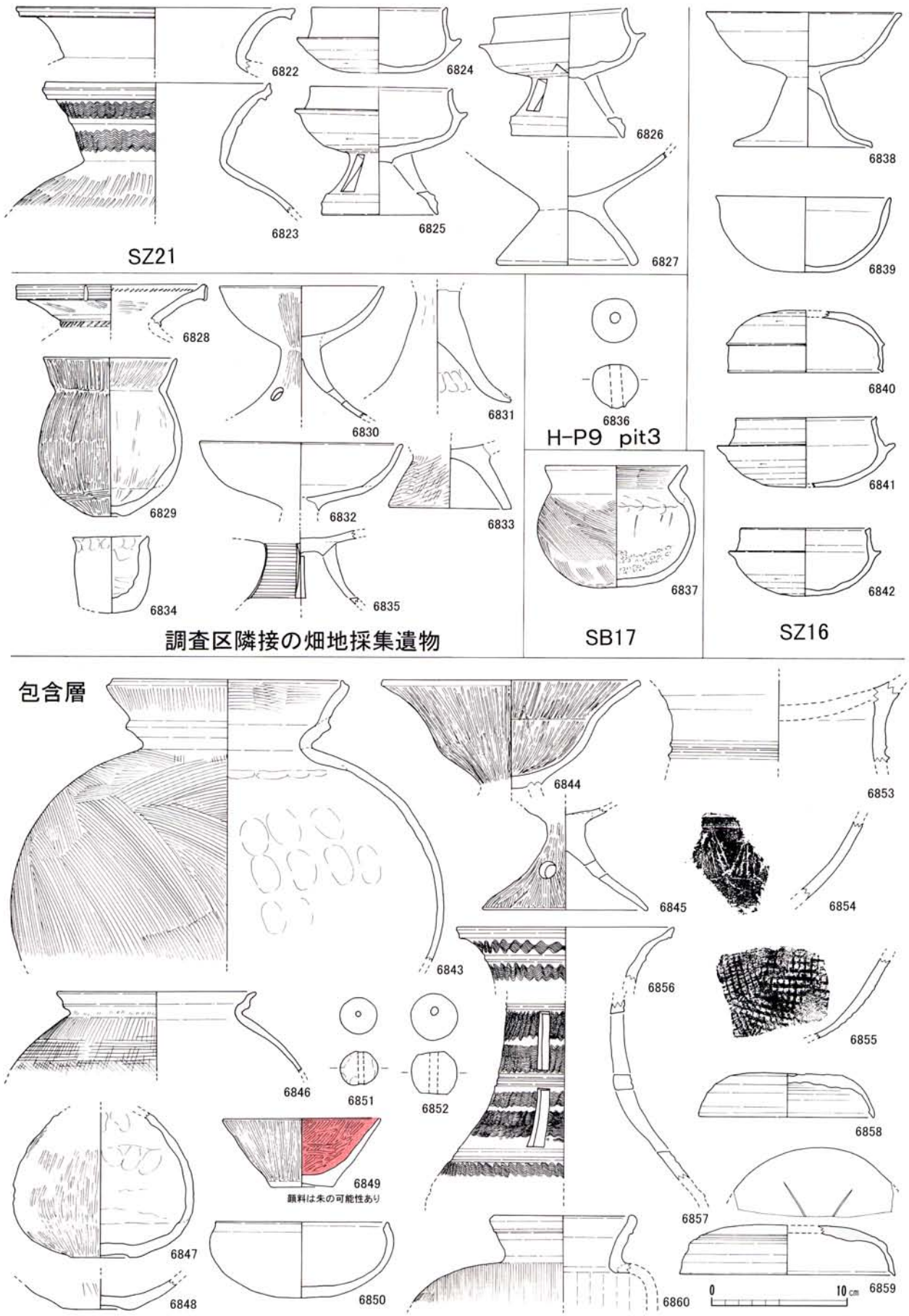
第410図　ＳＤ１出土遺物（１：２）



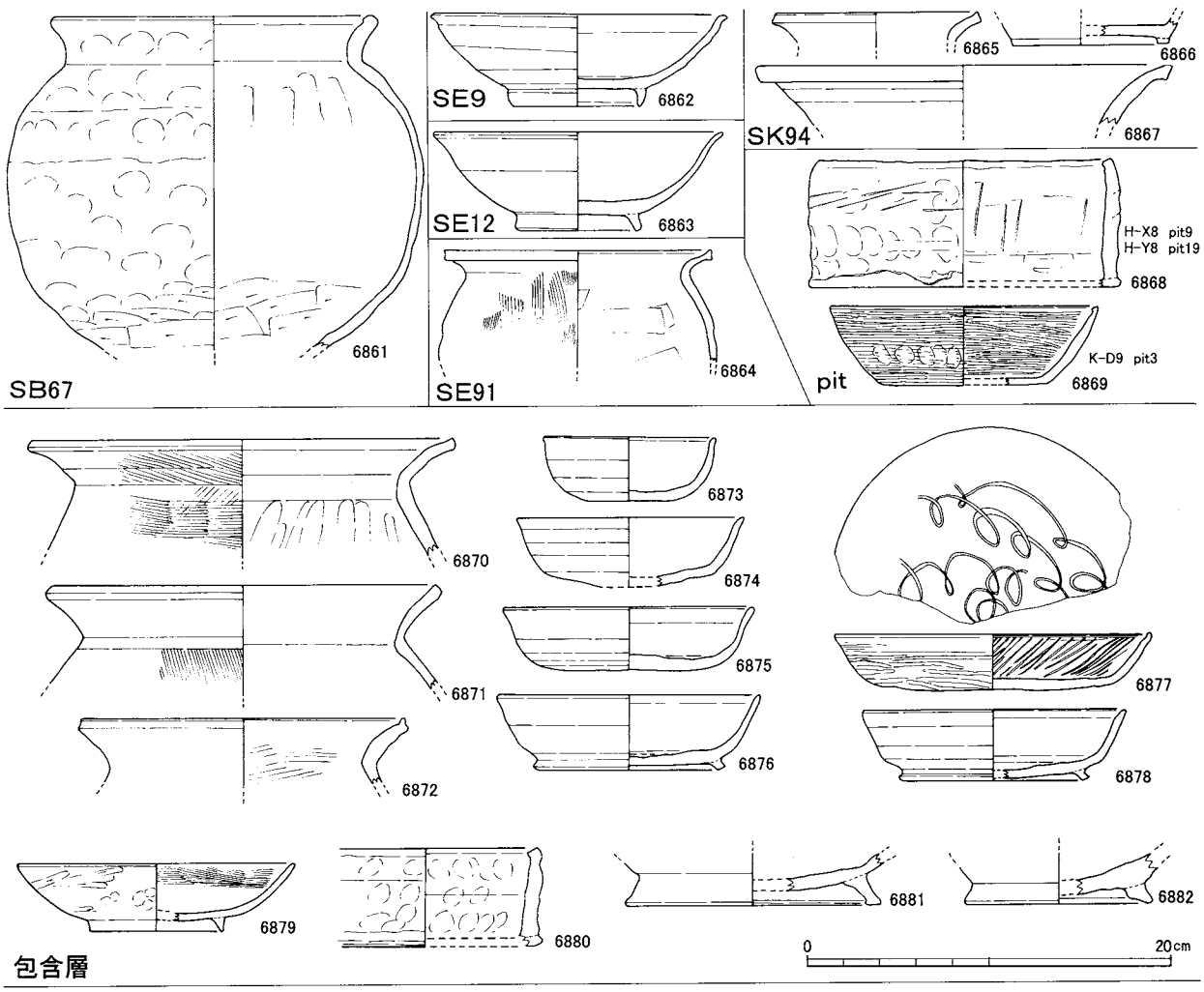


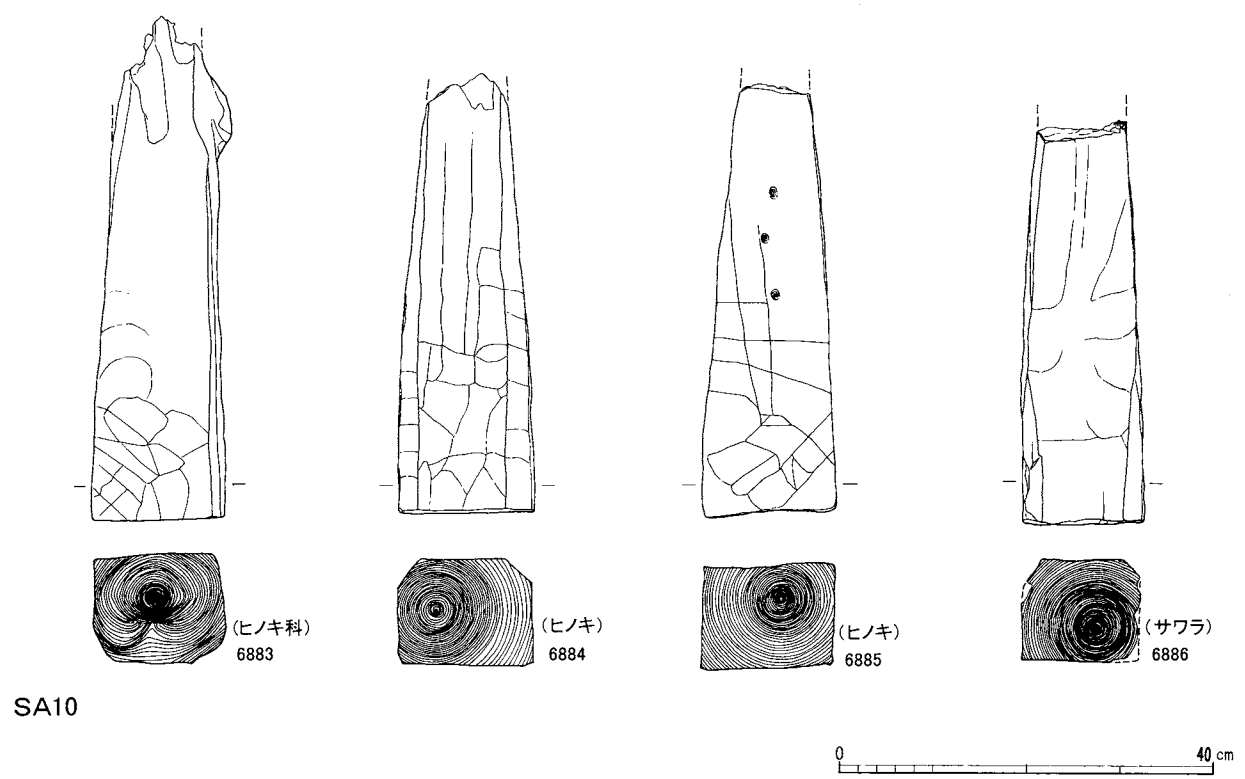


第411図　ＳＤ１・上面肩溝・H-S12pit３・ＳＫ15混入遺物・ＳＫ74・64・80・E-W15pit２出土遺物
（１：４，6793～6806・6820は１：２）

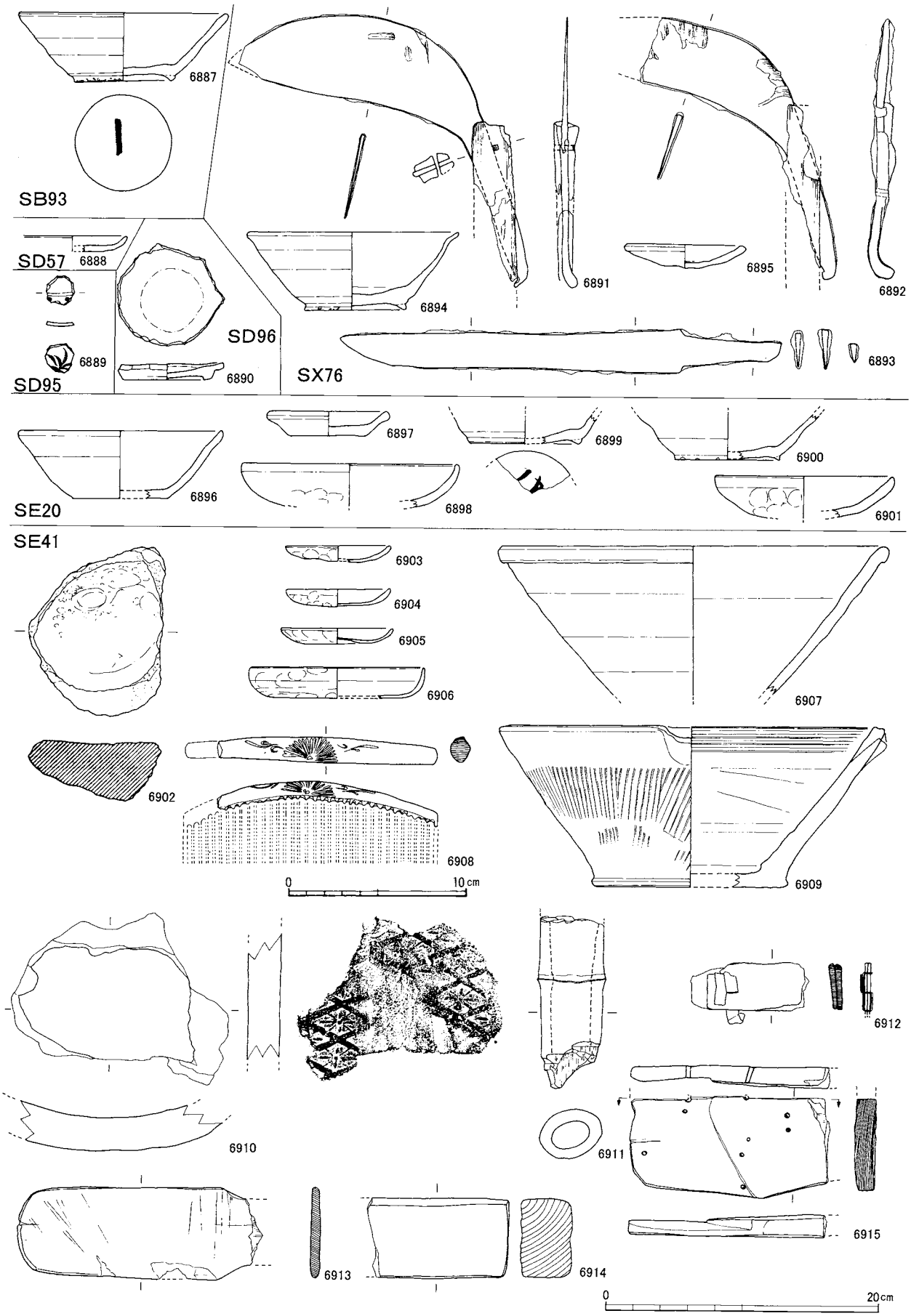


第412図　ＳＺ21・調査区隣接の畑地採集遺物・Ｈ－Ｐ９pit３・ＳＢ17・ＳＺ16・包含層出土遺物（１：４）

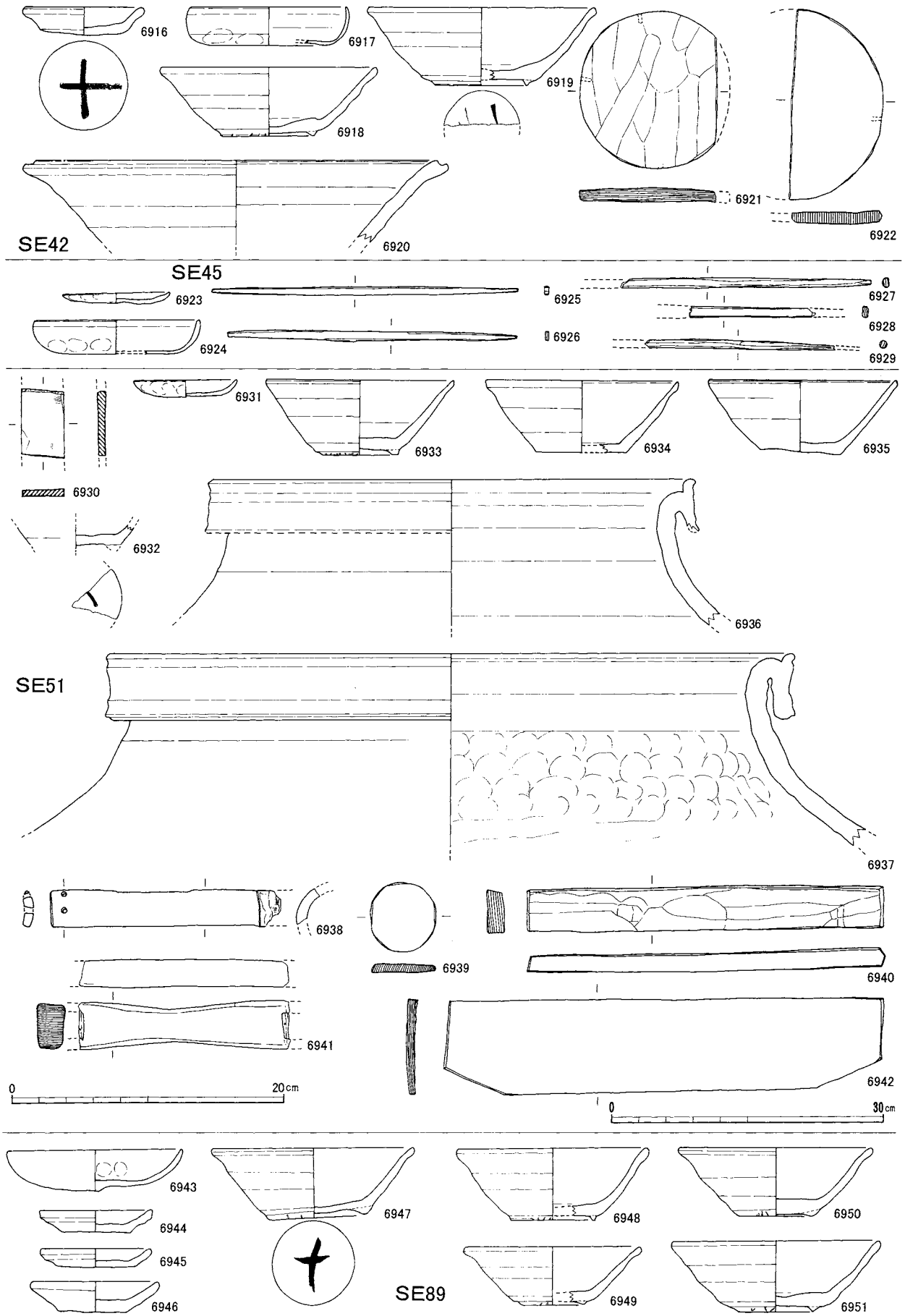




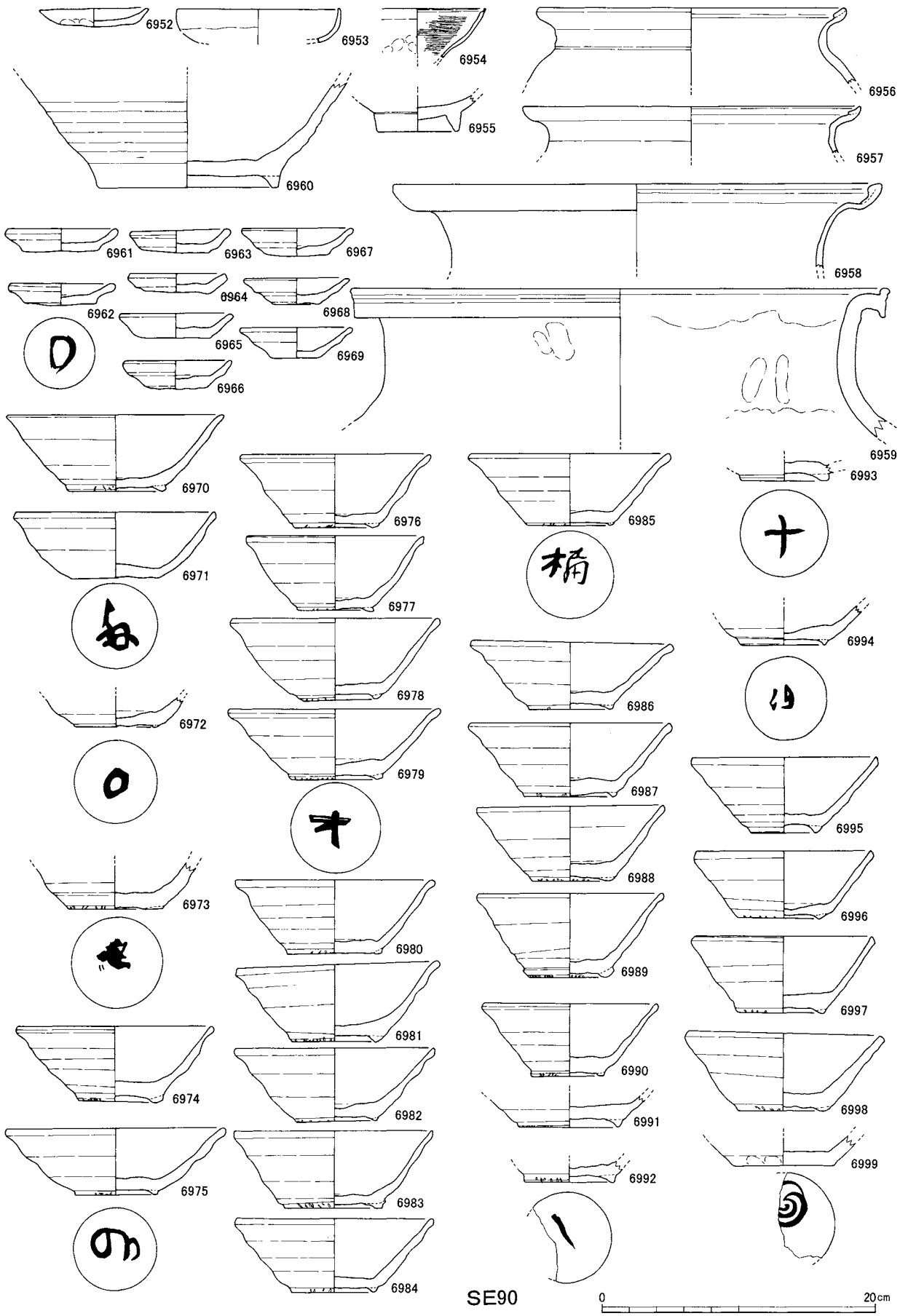
第413図　ＳＢ67・ＳＥ９・12・91・ＳＫ94・H-Ｘ８pit９・H-Ｙ８pit19・K-Ｄ９pit３・包含層・ＳＡ10出土遺物
（１：４，6883～6886は１：８）



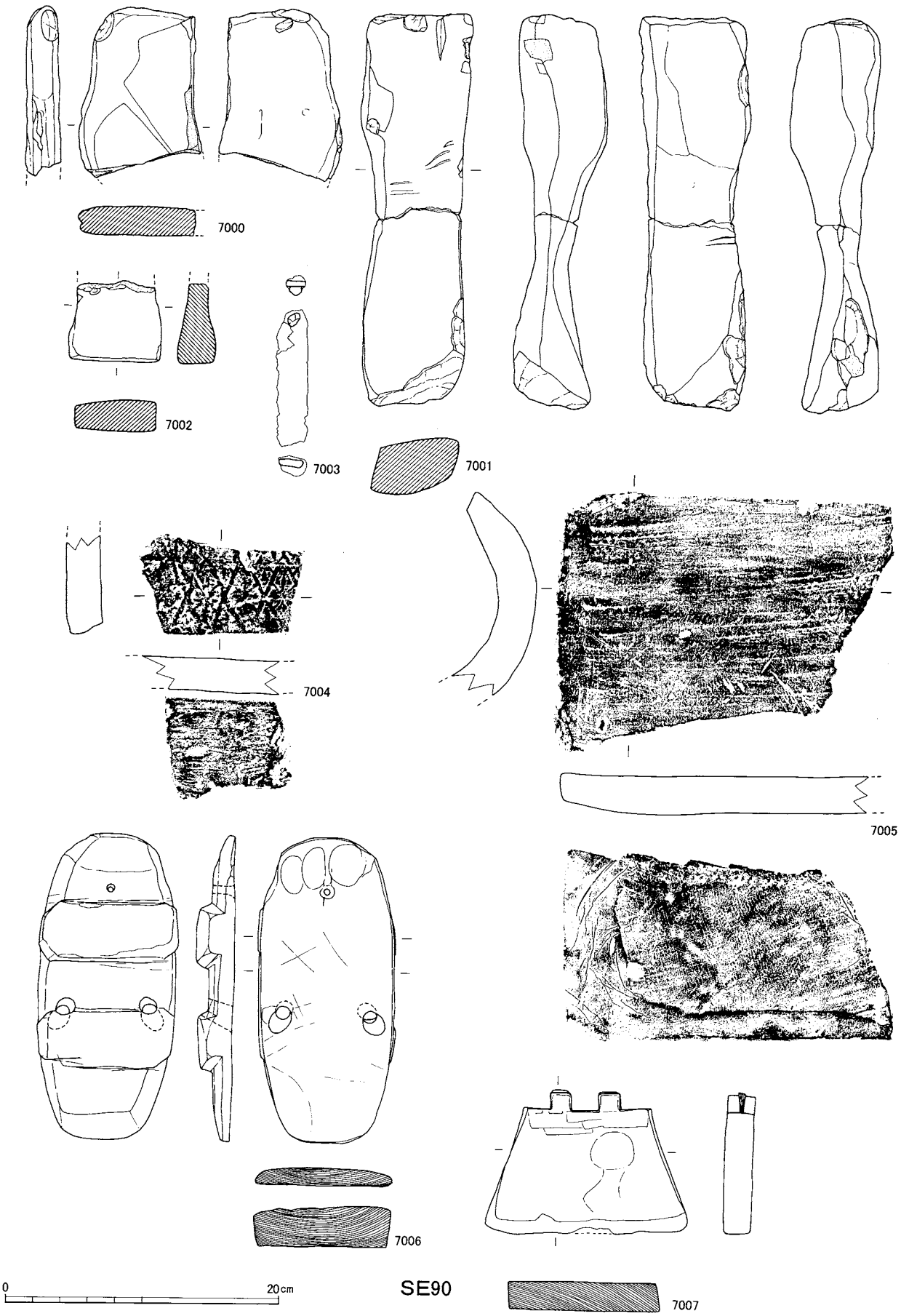
第414図　ＳＢ93・ＳＤ57・95・96・ＳＸ76・ＳＥ20・41出土遺物（１：４）



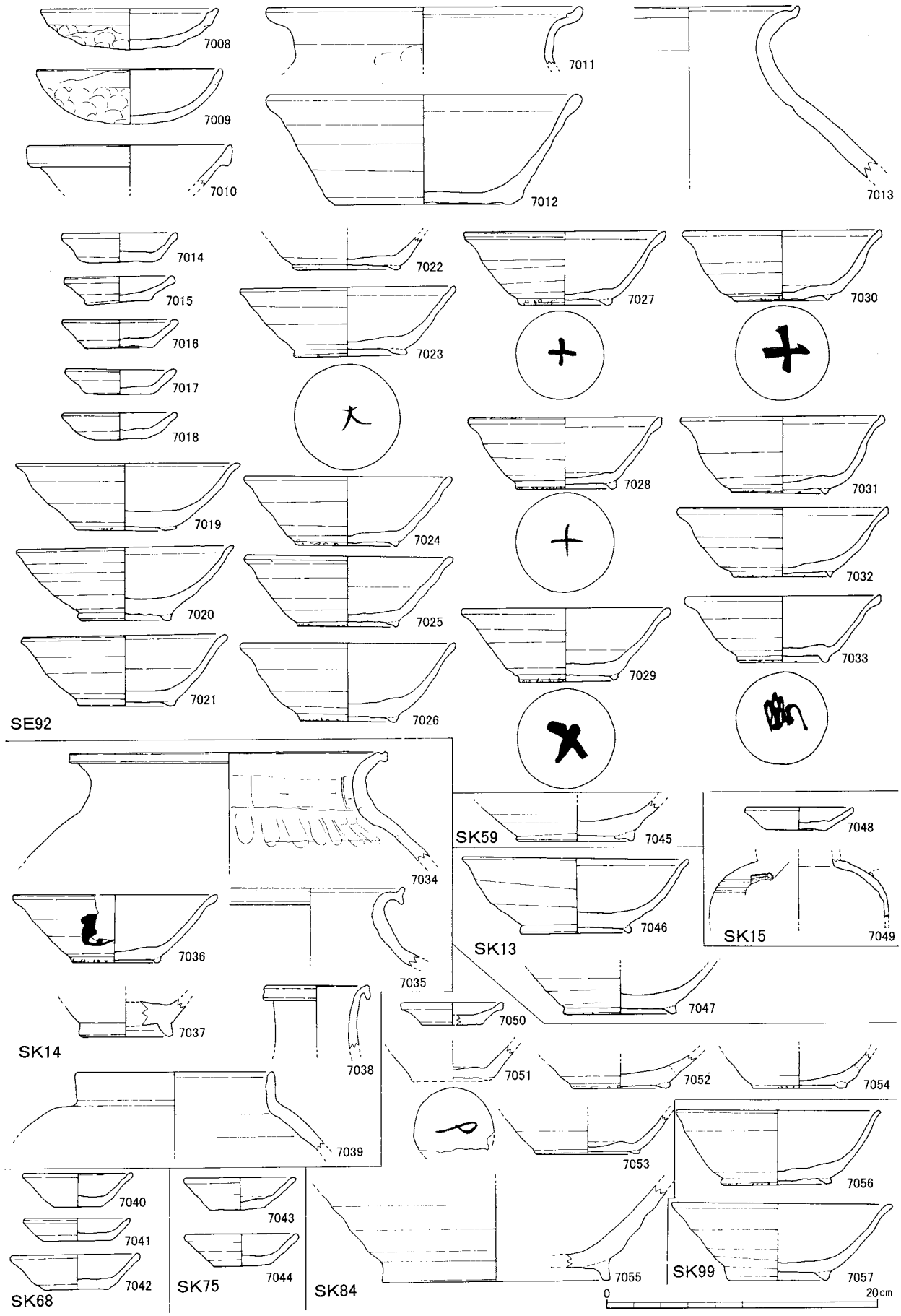
第415図　ＳＥ42・45・51・89出土遺物（１：４，6942は１：６）



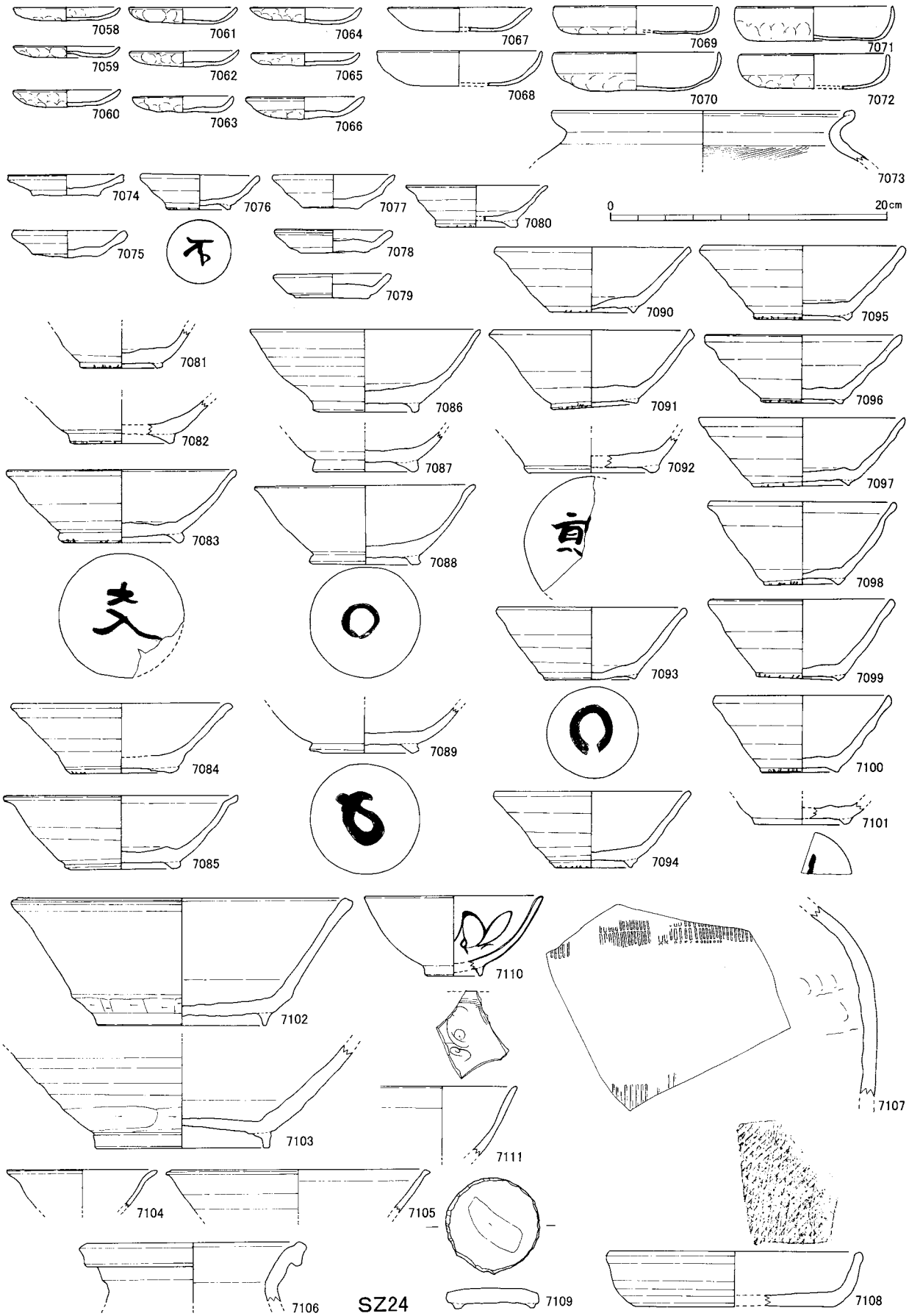
第416図　ＳＥ90出土遺物（１：４）



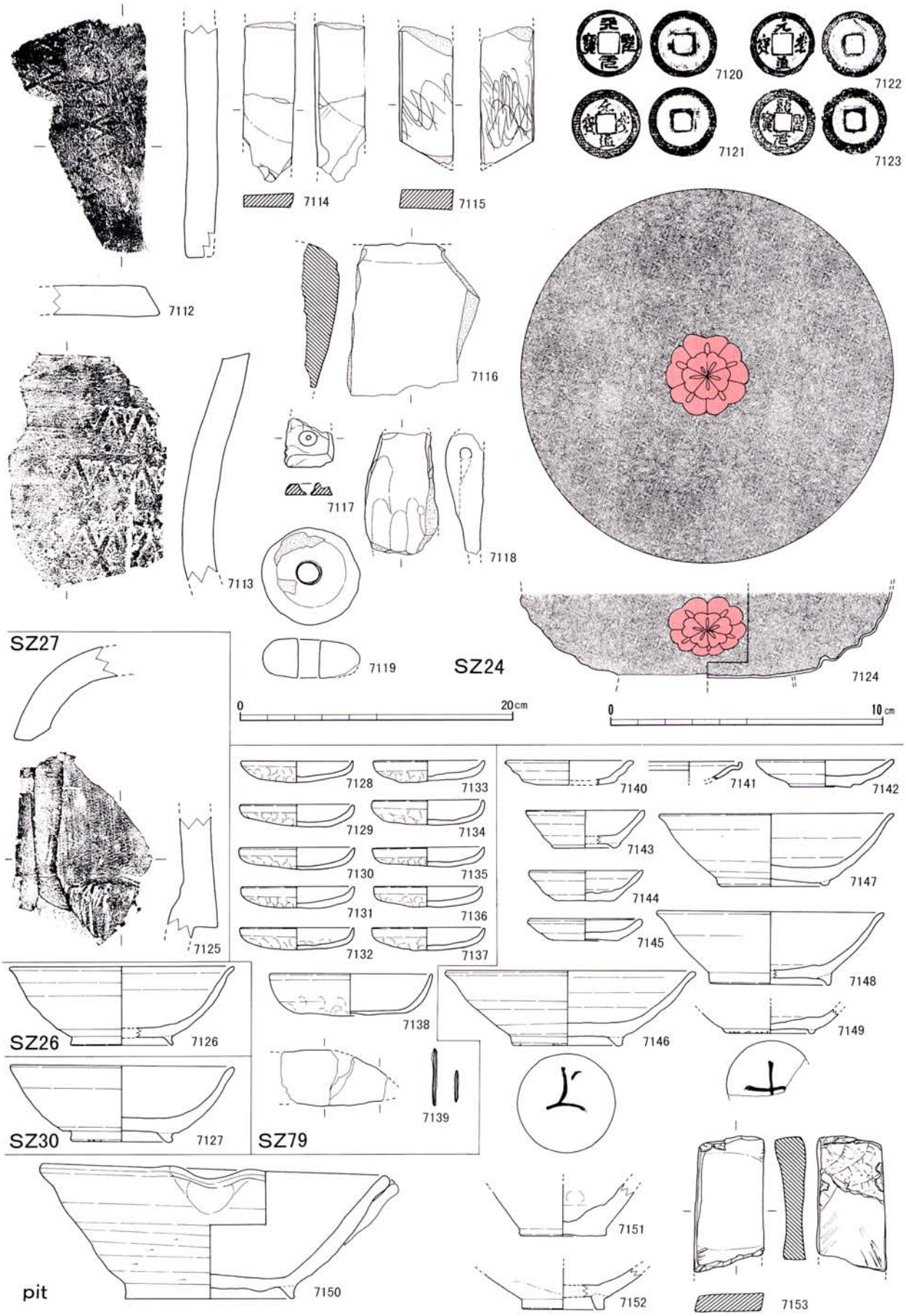
第417図　ＳＥ90出土遺物（１：４）



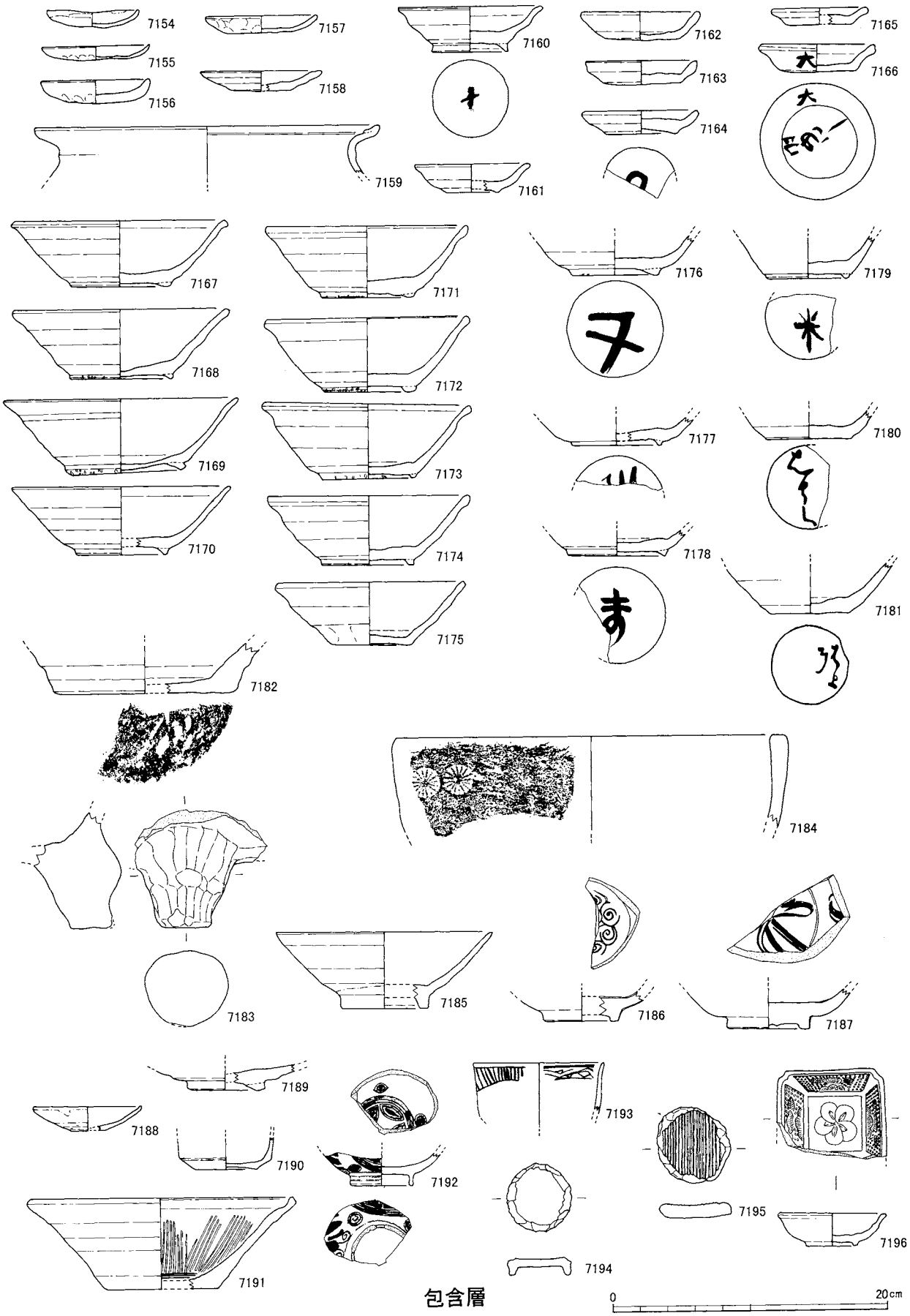
第418図　ＳＥ92・ＳＫ14・68・75・59・13・15・84・99出土遺物（１：４）



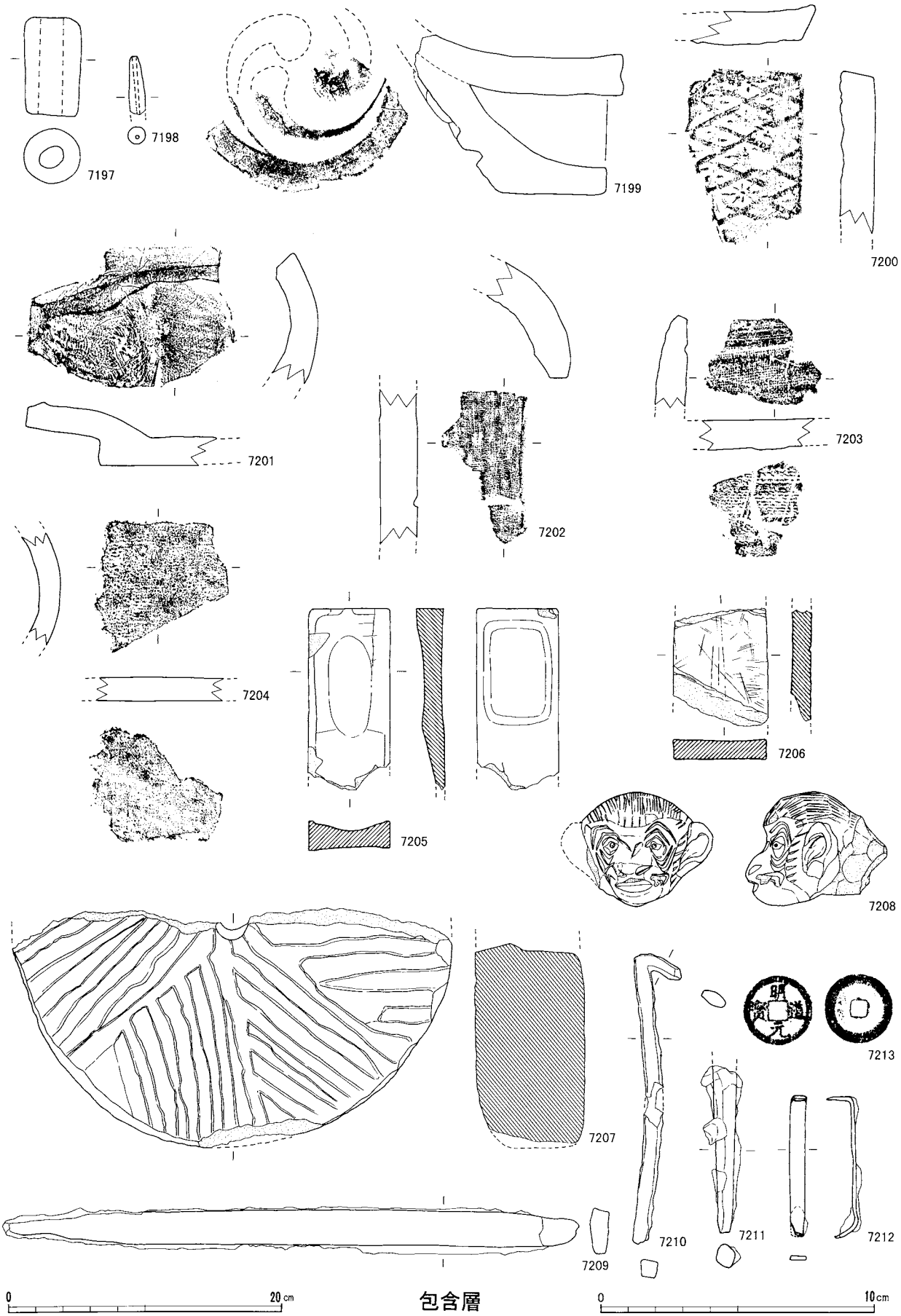
第419図　ＳＺ24出土遺物（１：４）



第420図　ＳＺ24・27・26・30・79・各pit出土遺物（１：４，7120～7124は１：２）



第421図　包含層出土遺物（１：４）



第422図　包含層出土遺物（1：4，7208・7210～7213は1：2）

Ⅶ　遺構・遺物のまとめと考察

昭和63年度の範囲確認調査を経て、平成元年度の橋垣内遺跡を嚆矢として始まった中勢道路建設に伴う津市一身田大古曽から津市大里窪田町地内の発掘調査は、最北の六大Ａ遺跡の調査をもって終了した。志登茂川右岸に所在するこれら遺跡（南から大古曽遺跡、橋垣内遺跡、六大Ｂ遺跡、六大Ａ遺跡）は「窪田遺跡群」ともいうべき相互に関連する内容をもっており、一連の調査はこの地にほぼ間断なく延々1.3kmにわたる幅30～50ｍの大トレンチを入れたといってもよい。最終的な調査面積は13,320㎡を調査した六大Ａ遺跡を含め、総計63,990㎡にものぼった。

これらの調査によって、旧石器～縄文時代の遺物も含みつつ、主に弥生時代中期から近世に至る志登茂川右岸の遺跡動態が、より明瞭になったといってよい。特に、古墳時代後期から律令体制成立期の６世紀末～７世紀初頭頃、当地域に一斉に掘立柱建物による集落が広汎に成立する事実は、窪田遺跡群全体の動向として注意する必要がある[1]。

志登茂川を望む六大Ａ遺跡は、これら遺跡群の北端に位置するとともに、地勢上、脇を伊勢別街道が走り、志登茂川も扼するということから、水陸交通の帰結点的な位置を占めていた。六大Ａ遺跡が担った歴史的意義は、まずはこうした窪田遺跡群全体のなかでの位置づけを図っていく必要がある。

さらに、六大Ａ遺跡の各々の遺構や遺物には見るべきものが多く、それらは古墳時代祭祀のあり方や渡来系文物の流入の問題をはじめとして、列島全体の動向のなかで議論すべき内容のものも多く含んでいる。六大Ａ遺跡の位置づけを図るには、こうした個別遺構・遺物の検討も行っていく必要がある。

以下では、六大Ａ遺跡の遺構・遺物の調査成果をまとめるとともに、そこから提起されるいくつかの問題に対して考察を加えていきたい。

第１節　六大Ａ遺跡の調査成果のまとめ

１　全体的なまとめ

六大Ａ遺跡は、志登茂川に連続する低湿地と推定される下段のＳＲ２、そこに注ぎ込む谷状地形の大溝である中段のＳＤ１、さらにＳＤ１の周辺及び上段に広がる律令期を中心とする集落域として把握することが可能である。

ＳＤ１及びＳＲ２は、縄文時代晩期の遺物も微量含みながらも、本格的に遺物の投棄が開始されるのは弥生時代中期末から後期にかけてで、その後、遺物量の多寡はありつつも、古墳時代を経て律令期、さらには中世に至るまで遺物の投棄が認められる。

このように長期にわたって継続的に営まれたことが六大Ａ遺跡の特徴のひとつであるが、土器や木製品等の遺物量の多寡を指標とする限り、古墳時代初頭及び中期にその最盛期の一端があるのは間違いない。しかし、ＳＤ１がちょうど調査区を縦断するかたちで検出されたため、この最も盛期ともいうべき時期の遺構（特に建物遺構）はまとまったかたちでは確認されていない。これらは、ＳＤ１に影響されない上段部分にほとんど確認できなかったことを考慮すると、おそらくＳＤ１の東西両側、あるいはどちらか片側に存在していたものと推定される。

ここに存在したであろう建物群の具体的様相の一端は、既刊の『木製品編』で示した多量の掘立柱建物部材、特に一遺跡からの出土総数としては日本でも屈指の20枚が出土した扉板の存在からも窺い知ることができる。このことは、六大Ａ遺跡に扉板を建築部材の構成要素として含む高床倉庫が複数存在していたことを示す。この場合、六大Ａ遺跡西側の高台に存在する中鳶遺跡が六大Ａ遺跡と何らかの有機的関連を有していたことは間違いなかろう。

ＳＤ１には、井泉をはじめとする付設施設が多く設置された。それらは、何らかのかたちで祭祀と関連をもつものが多い。出土遺物をみても、武器形をはじめとする木製祭祀具や祭祀専用物品である石製模造品、体部穿孔土器や手捏ね土器をはじめとする祭祀系土器、それに律令時代に入るが土馬や男茎形木製品の出土などＳＤ１もしくはその周辺部での祭祀行為の存在を広く想起させる。そういう意味で、ＳＤ１は六大Ａ遺跡における祭祀遺物の投棄の場であるとともに、祭祀行為の拠点地のひとつであり、

特に古墳時代中期には祭祀域そのものであった、ということがいえるのではなかろうか。また、付設施設はないが、ＳＲ２においても、祭祀に使用されたと見られる遺物の出土が認められる。これら六大Ａ遺跡の祭祀については、後段で考察を加える。

祭祀ということを離れても、ＳＤ１及びＳＲ２からの出土遺物は、遺物組成も土器・木製品・石製品など多岐にわたっており、内容的にも見るべきものが多い。特に注目できるものとしては、東日本としては最多量となった韓式系土器・初期須恵器の出土があげられる。このことは、本遺跡が何らかのかたちで渡来系集団との関わりももったことを示すとともに、本遺跡の性格を考えるうえでも非常に重要な論点となろう。さらに、韓式系土器などの出土から六大Ａ遺跡と渡来系集団の関連を一定認めてよければ、横櫛など土器以外の一部遺物にも渡来系として収斂させたほうがより適切と思われるものもある。これら韓式系土器をはじめとする渡来系文物の意義についても、後で個別に考察を加えたい。

さて、六大Ａ遺跡の出土遺物、とくに上述の渡来系遺物をはじめ、一般集落では通常出土しないような特殊な木製品（刀装具・盾・馬具・横櫛・琴・多量の下駄・精巧な案・木簡など）、それに優秀な掘立柱建物部材が多数出土していることは、調査部分が首長居館に含まれるかどうかはともかく、首長層などの当時の支配者階層に関わった遺跡であることを示すものであろう。井泉１にみる「玉と刀剣の祭儀」（後述）も、これら首長層に存在した観念を示すものと捉えると、理解しやすい。

つまり、古墳時代の六大Ａ遺跡は、現時点では首長層が実修した祭祀域を含む首長関連の遺跡として捉えることが可能であろう。

律令時代に入っても、ＳＤ１からは大型土馬や跡脚部付圏脚円面硯、木簡、多数の墨書土器、それに多数の土管など、通常集落とは言いがたい出土品がある。調査範囲内の集落域で確認できる掘立柱建物にさほどの規格性はないが、集落域はさらに東西へ連続しているものと想定され、かなりの有力者層が六大Ａ遺跡に拠っていた可能性が高い。もっとも、旧の久菩田（窪田）里の中心地は六大Ａ遺跡南側の六大Ｂ遺跡Ｄ地区[2]に中心の一角があると推定されることから、六大Ａ遺跡は窪田遺跡群にとって、街道と水運による物流の流通拠点と、集落群北端の境界としての祭祀域を担っていたものと推定される。

中世は、さほどの有力な建物群は現状では確認できないものの、掘立柱建物や井戸といった集落構成要素の他に、中世墓（木棺墓・土坑墓）も確認されている。さらに、遺物では、花押を含む多数の墨書山茶碗が出土していることは注目される。岩田川流域の津市里前遺跡[3]ほどの出土はないものの、一遺跡出土の墨書山茶碗数としては相当な数にのぼっており、墨書内容も里前遺跡出土品と共通するものがある。里前遺跡では、墨書山茶碗にいずれも使用痕が認められることや墨書内容の検討などからそれらが年貢集配機能に関わるのではないかと推定されているが、六大Ａ遺跡もこれと同様の性格を考えることができよう。その場合、里前遺跡も六大Ａ遺跡も河川脇の水運流通適地に占地することは、年貢集配に水運が利用されていたことを示すとともに、ここが物資集配の拠点地としての役割も担っていたことを示すものといえる。なお、このことの詳細は、後節で検討を加える。

２　遺跡の性格の変遷

六大Ａ遺跡もしくはその周辺での集落形成が本格的にはじまるのは、出土遺物をみる限り、弥生時代後期以降のことである。この時期以前の断片的な要素を六大Ａ遺跡の前史とし、弥生時代後期以降を本格的な集落の活動時期として遺跡の変遷を時期別に見ていくと、以下のようになろう。

前１期－谷状地形が形成される（ＳＤ１底面下の木質層の木片の放射性炭素による年代測定からＢＣ1000年頃には存在している）

前２期－少数の集団がＳＤ１やＳＲ２周辺で活動を開始する（ＳＤ１下層部やＳＲ２で突帯文土器や浮線文系土器、弥生時代の遠賀川系土器が出土する縄文時代晩期～弥生時代前期）

第１期－ＳＤ１やＳＲ２の埋没が始まる弥生時代後期から古墳時代前期前半。多量の土器類の投棄が始まる一方、ＳＤ１底の左岸側に井泉の構築が始まる。やや時期をおいて最下層礫敷や下層礫敷も施される。出土遺物に絵画・線刻土器や胴部穿孔土器、ミニチュア土器、武器形、琴などを含むな

どＳＤ１やＳＲ２自体で行われたかどうかはともかく、祭祀色も濃厚。また、泥除や一部の鍬に未製品が多く存在し、一定の木器加工も行われたようだ。ＳＤ１Ⅳ層（最下層）・Ⅲｂ層併行

第２期－ＳＤ１やＳＲ２からの遺物出土量が減少する古墳時代前期後半頃。ただし、井泉は造り続けられる。ＳＤ１やＳＲ２の出土品を見る限り、周辺部での活動もやや停滞気味か。祭祀色や木器加工はこの時期も継続。ＳＤ１Ⅲａ層併行

第３期－韓式系土器や初期須恵器を含む渡来系遺物が流入し、ＳＤ１に上層礫敷が施される古墳時代中期から後期頃。壁材もこの頃に倒壊しており、ＳＤ１脇には小規模な建物が存在。井泉が石組になり、木製武器形や滑石製模造品類が出土するなど祭祀色も非常に強くなる。近傍や石組井泉自体での首長祭祀儀礼の存在を示すものであろう。フイゴ羽口の存在から、小規模な金属加工の痕跡が窺えるなど、祭祀・生産両面での首長層の関与が濃厚。Ⅲａ層からⅡ層下部併行

第４期－ＳＤ１右岸入江状突出部南側に貼石が施される飛鳥時代以降の律令期。大型土馬や土管、蹄脚部付圏脚円面硯、木簡などから引き続き有力者層による遺跡への関与が認められる。ＳＤ１Ⅱ層併行

第５期－多量の墨書山茶碗が出土する中世前期。志摩茂川水運の物流拠点を担う遺跡であった可能性が高い。中世木棺墓や花押山茶碗の存在は、この時期も当地に存在した有力者層の存在を推測させるとともに、本遺跡が年貢集配に何らかの関与をしていた可能性がある。ＳＤ１はほぼ埋没し、Ⅰ層に当該時期の遺物が混じる。上面には配石遺構も形成される

第６期－ＳＤ１やＳＲ２が完全に埋没し、出土量も極端に少なくなる中世後期以降。ただし、ＳＤ１は浅い谷状の落ち込みとして、雨天時等は排水機能の役割は果たしていたものと推定される

（註）

① このことは、以下の２文献で指摘した。穂積裕昌「大古曽遺跡Ａ地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』三重県埋蔵文化財センター1994、穂積裕昌「飛鳥時代掘立柱建物群の成立とその背景」『橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997

② 杉谷政樹「六大Ｂ遺跡Ｄ地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター他 1991

③ 川崎志乃『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002

第２節 六大Ａ遺跡の祭祀の諸相

１ 確認できる祭祀行為

六大Ａ遺跡で確認できる祭祀行為は、ＳＤ１もしくはその付設施設で実修されたと推定される祭祀行為と、祭祀自体はその周辺部で行われたが、そこでの祭祀に供された遺物がＳＤ１もしくはＳＲ２で廃棄されたとみられるものの２者がある。

井泉・木組遺構・配石といったＳＤ１の付設施設は、前者の祭祀に際して使用された、もしくはそれ自体が祭祀対象となった可能性がある。これら遺構には、土器や木製品、石製模造品などが出土したものがあるが、これらはここでの祭祀に際して供された物品群であろうと推定される。

後者（周辺の祭祀）に相当するものは、ＳＤ１およびＳＲ２から投棄された状態で出土した土器群構成遺物の一部、木製品の一部などがある。これらに対しては、ＳＤ１及びＳＲ２は、周辺部で行われた祭祀で使用した物品群の投棄の場としての役割を担っていたものと推定される。

ＳＤ１に施された礫敷（古墳時代）や貼石（飛鳥時代）といった石貼りの施設は、聖域区画的な意味合いをもっていた可能性がある。ただし、礫敷については、上野市城之越遺跡の大溝祭祀遺構[1]でみられたほどの規格性はなく、祭場形成に当たって足場を確保する意味合いも高かったものと思われる。

土器群も含めてＳＤ１及びＳＲ２出土の弥生時代後期～古墳時代前期の土器は、体部穿孔されたものやミニチュア土器、手捏ね土器など明らかに祭祀に供されたとみられる土器[2]も多数出土している他、土器群のなかに高坏・坏といった供膳具が組成の高率を占める例（土器群54）など祭祀後の一括投棄を連想させる例も多い。少数ではあるが、いわゆる円窓付土器も存在する（1201・2251・2531等）。

木製品では、武器形をはじめとする形代類が祭祀

に供されたと推定される他、奉斎物品などを載せる台と考えられる案や、鞘や刀装具よりその存在が推定される刀剣類、盾、神を招き寄せる祭儀に使用したとも考えられる琴など、祭祀を行うにあったて必要とされる遺物が多数出土している。

滑石製模造品も出土しているが、ここで重要なことは滑石製模造品に関しては確実な未製品がほとんど存在せず、基本的に製品のみが出土していることである。これは、ＳＤ１やＳＲ１が専ら使用もしくは廃棄の場であったことを示すものであろう。

２　祭祀の変遷

以上の諸点を勘案して、六大Ａ遺跡の各時期の祭祀内容の変遷をまとめると、以下のようになる。

第１期（弥生時代後期～古墳時代初頭）の祭祀

ＳＤ１及びＳＲ２への祭祀使用遺物の投棄が中心であるが（周辺部で祭祀か？）、ＳＤ１に付設された井泉に対しての祭祀行為も認定できる。

祭祀使用遺物には、主に体部穿孔土器や線刻絵画土器、ミニチュア土器といった祭祀系土器類と、少数であるが武器形等の木製祭祀具がある。これら祭祀系土器類は、土器群に含まれているものもあり、これら土器群に関してはそれ全体が何らかの祭祀に供された後に一括してＳＤ１ないしＳＲ２に投棄されたとみることができるができよう。もちろん、祭祀系土器類を含んでいなくとも、組成が高坏など特定器種に偏るなど何らかの特徴的な要素がある場合は、これらが祭祀に供された可能性は高い。

この段階の井泉に関しては、出土遺物に木製農具（泥除）などが含まれている場合もあることから、必ずしも祭祀関連の遺構ばかりとは確定できないものの、祭祀系土器類の出土や後述する遺構の存在形態からやはり何らかの祭祀行為に関わった可能性は高いものとみられる。

この他、入江状突出部の礫群なども祭祀に際して何らかの役割をもった可能性がある。

第２期（古墳時代前期）の祭祀

前代に引き続き、ＳＤ１及びＳＲ２に対しての祭祀系土器を含む遺物の投棄が見られるとともに、井泉も構築される。また、ＳＤ１右岸上流部を中心に幅２ｍ程度の礫敷（下層礫敷）が施され、それに挟まるかたちで有孔銅鏃や漆塗りの木製飾弓などの出土があるが、これも何らかの祭祀行為に関わったものとみることができよう。また、土器群のなかにはＳＤ１の法面に設置されたのではないかとみられる例もあり（土器群32）、ＳＤ１自体が祭祀の場としても機能していたことを示すものといえよう。

第３期（古墳時代中後期）の祭祀

ＳＤ１自体で行われた祭祀の状況がより明瞭になる時期である。ＳＤ１右岸全面に礫敷（上層礫敷）、左岸には石組井泉が配され、上流部には木組遺構も構築される。このうち石組井泉は、祭祀遺物の出土などから祭祀行為の存在が明らかである。土器群の内容も、木製武器形と高坏などがセットで出土する土器群53や、土師器高坏と坏の集中出土地点に横櫛が伴う土器群54など祭祀色の強いものが多い。礫敷はＳＤ１内の足場確保の目的の他、聖域区画の意味合いもあったものと思われ、礫面からは滑石製模造品や土器類（高坏が比較的多い）の他、礫面に挟まれるかたちで鉄矛や臼玉48個入りの土師器小壺も出土している。家屋壁材もこの時期で、ＳＤ１での祭祀に際して小規模な家屋が存在した可能性がある。さらに、須恵器器台や脚付環状連結四連壺などは祭祀に際して供された遺物の可能性がある。

第４期（飛鳥以降の律令期）の祭祀

石組井泉の構築はこの時期も継続するほか、ＳＤ１右岸の入江状突出部南側の貼石は祭祀に際して使用された何らかの場の可能性がある。出土遺物も、斎串、男茎形といった木製祭祀具の他、大型の土馬が存在している。

第５期（中世前期）の状況

明らかに祭祀関連の遺構・遺物と認定できるものはなく、逆に中世墓が認められるなど、神マツリの場としての性格は喪失したものとみられる。

３　歴代的祭祀の場としての六大Ａ遺跡

六大Ａ遺跡の井泉は、弥生時代後期から古墳時代初頭を経て、古墳時代中期、さらに飛鳥時代まで同じＳＤ１で連綿と井泉の構築が続いていることにひとつの特徴がある。これは、長期間を通してＳＤ１周辺が聖なる地として意識されていたことを物語るもので、まさに歴代的祭祀の場として評価できるものであろう。

こうした例は、他に福岡県沖ノ島[3]や長野県屋代

遺跡[4]などが相当する。このうち、屋代遺跡は、古墳時代中期にはじまって律令期に最盛期を迎える祭祀遺構が確認されている遺跡で、具体的には湧水坑型と導水型という2種の祭祀系湧水溝をもち、多量の木製祭祀具が出土している。古墳時代中期に導水型祭祀を行った首長的存在の系譜を引き、8世紀には「官衙風建物群」と多量の文書木簡を残すなど官衙施設としての性格も色濃くなると捉えられており、六大A遺跡及び六大B遺跡を合わせた性格と相通じるものがある。また、5世紀に遡る祭祀遺構をもち、現在までほぼ同じ場所で祭祀が継続している奈良県桜井市大神神社[5]や三重県伊勢市伊勢神宮[6]などの古社も、祭場が継続している例と捉えることが可能である。しかし、多くの場合、祭祀がこれほど長期間にわたって同一地点で継続して営み続けられる例は少なく、ましてその初現が弥生時代後期に遡り、律令期まで至る例は極めて少ないということであろう。

六大A遺跡は、当初、弥生時代後期に周辺で行われた祭祀遺物の投棄の場からはじまり、礫敷や井泉が設けられるなど次第に首長祭祀の祭場としての性格を強めつつ、律令期にいたって窪田遺跡群の北の境界の地として、公的な祭儀の一端を担ったのではないかと推定される。

SD1という場所に、一貫して井泉を設け続けたり、祭祀遺物を投入し続けたことは、この地が長期に渡って聖地としての意識が存在したことと、祭祀執行者が古墳時代首長層から律令制下の郡司等の地域支配者層へ同一系譜で繋がっていた可能性を示している。換言すれば、弥生時代後期から律令期にかけて遺構や遺物で明確な断続性が認められないことは、同一系譜の集団による同じ場所（遺構）での連綿とした祭祀行為が継続していた可能性が、強く想起できるのである。

以上のように捉えてよければ、六大A遺跡は、長期間にわたる祭祀の変遷を具体的に掴むことができるまことに希有な遺跡ということができるのではなかろうか。

4　祭祀遺跡出土の渡来系遺物の意味

ところで、六大A遺跡では、いわゆる初期須恵器が多数出土している。六大A遺跡出土の初期須恵器類の具体相やその意義については後節で検討を加えるが、ここでは古墳時代祭祀から出土する初期須恵器の意味について考えておきたい。

通常、古墳時代祭祀遺跡というと、神祇系の祭祀で、そこでのカミ祀りに使用される土器は土師器が多いと考えがちであるが、意外に大規模な祭祀系の遺跡では初期須恵器等の渡来系文物の出土が多い[7]。六大A遺跡や天理市布留遺跡[8]、四国の古墳時代祭祀遺跡の代表的存在である愛媛県出作遺跡[9]でも多数の初期須恵器（陶質土器）の出土がある。また、奈良市阪原阪戸遺跡[10]でも、集石を伴う祭祀遺構に須恵器大甕が据えられた状態で出土している。

これらの例は、まだ数少ない最新の渡来系文物を導入しえたり、あるいは渡来系集団を膝下に組み込むことができた祭祀執行者の力を示すものではあるが、それとは別に、祭祀とこうした最新渡来系文物に一定の相関関係も見いだすことができるのではなかろうか。つまり、最新文物をカミに供するという意義である。

ただし、5世紀の祭祀遺跡は、すべてこうした遺跡ばかりというわけでもない。例えば、やや盛行時期に差はあるとはいえ、上野市城之越遺跡の大溝祭祀遺構では、5世紀段階の祭祀で用いられた遺物には土師器類ばかりで、須恵器類は混じっていなかった。この地域に初期須恵器が導入されていなかったかというとそういうわけでもなく、近くの高瀬遺跡[11]や城之越遺跡でも大溝祭祀遺構以外には初期須恵器の出土があることから、やはり大溝祭祀遺構の祭祀には土師器が選択されていたとみるべきであろう（ただし、それでも2点の韓式系土器は存在する）。

このように、祭祀遺跡と渡来系文物は、それぞれの遺跡や当該地域の状況を踏まえつつ、個別の背景を探っていく必要がある。六大A遺跡についていえば、SD1から出土の器台類や脚付環状連結四連甑などからも、すべてではないにせよ積極的に祭祀と関連付けて考えていくべきものと考える。

（註）

① 穂積裕昌編『三重県上野市比土　城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1992、中浦基之「城之越遺跡（2次）発掘調査報告」上野市教育委員会　1998

② 城之越遺跡でも、多数の小型丸底壺や体部穿孔の小形壺等が出土している。体部穿孔土器の意義については、穂

積裕昌「体部穿孔小型土器の成立とその意義」前掲註①文献所収を参照

③ 鏡山猛ほか『沖ノ島』吉川弘文館　1958など

④ 宮島義和他『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　古代1編』（財）長野県埋蔵文化財センター　1999。以下、屋代遺跡群については、同書を参照

⑤ 大神神社の祭祀は、以下の文献にうまくまとめられている。寺沢薫「三輪山の祭祀遺跡とそのマツリ」『三輪と石上』筑摩書房　1988

⑥ 現時点で判明している神宮の考古学的事象は以下の文献でまとめた。穂積裕昌「考古資料からみた伊勢神宮の成立」『古代探究』中央公論社　1998

⑦ このことは、下記文献でも指摘した。穂積裕昌「城之越遺跡・六大A遺跡」『信仰関連遺跡調査過程』奈良国立文化財研究所　1997

⑧ 山内紀嗣ほか『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団　1995

⑨ 松前町教育委員会『出作遺跡Ⅰ』1993

⑩ 木下亘「阪原阪戸遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1992年度』奈良県立橿原考古学研究所

⑪ 1987年三重県教育委員会調査

第3節 六大A遺跡の井泉とその祭祀

1　「井」に対する信仰の諸例～井泉と井戸～

近年、全国的に古墳時代を中心とする時期の井泉遺構の出土例が増加している。そこでは、祭祀が実修されていた痕跡もしばしば認められ、なかには三重県上野市の城之越遺跡のように、祭祀の場と推定される円形の貼石溝を中心としてその溝の源流となる湧水点を取り込んだ大規模な大溝祭祀遺構も確認されている。

こうした井泉に対しての信仰は、後の律令期に入っても続くし、前代の縄文時代にも湧水部に石を施すなど人工の手を加えた「水場遺構」でも認められる[1]。ただし、水場遺構の場合は、祭祀的行為の存在も窺えるものの、本来的には様々な生産の場であったと推定されている。

弥生時代では、大阪府和泉市池上曽根遺跡で中期後葉の大型の棟持柱式掘立柱建物の前面にクスノキ製の巨大な刳り抜き井戸が発掘され、聖なる空間に設けられた井水の儀礼が存在したのではないかと推定された[2]。このことが是認されれば、池上曽根遺跡の例は古墳時代へ続いていく井泉での祭祀行為（湧水点祭祀）の初期の例ということになる。ただし、その性格は祭祀用とするよりもむしろ実用目的の可能性をより強く考える意見[3]もあり、性格についての評価が分かれているのが現状である。

池上曽根遺跡の例はまだ不確定要素があるのでともかく、古墳時代になると、六大A遺跡や城之越遺跡などで顕著なように、人工の井泉を掘削して祭祀の場とし、井水に対して祈念する祭祀的行為が明瞭になる。このことは、首長層にとって、井泉から湧き出た湧水を用いた儀礼行為を執行することが、地域の開発リーダーかつ神祇的支配者としての自身を確認することに他ならなかったことを示している。

ところで、「井」には、池上曽根遺跡のような掘り井戸に近い形態を採るものと、城之越遺跡のような井泉の形態を採るものに分別できるが、六大A遺跡は典型的な後者、すなわち井泉形態を採る。井泉の場合、それが単独で存在するのではなく、源流か途中かはもとかく、溝とセットになっていることが通例で、井戸が単独で存在するのと存在形態のうえで明らかに異なっている。

井泉に溝が付設されることが多いのは、直接的には井戸が深さによる水圧等の関係で水が外部へ溢れ出ないのに対し、地下水位の浅い井泉では湧水点まで達すると水が容易に地上に溢れ出て周囲を水浸しにするため、それを防ぐためであろう。ただ、祭祀という観点に立った場合、絶えず水が湧き出ることが確認できる井泉のほうが井水を司る姿を容易に知らしめることができ、水に関わる祭祀の場としての構成要件をより満たしていたためと推定される。

2　井泉祭祀の具体相～六大A遺跡例を中心に～

さて、湧水点祭祀を行う井泉は、それが溝の源流となっている例と、溝の途中に付設される例が存在する。前者には、城之越遺跡の他、長野県更埴市屋代遺跡などがあり、後者には六大A遺跡の他、愛知県一宮市八王子遺跡[4]などがある。

六大A遺跡では、SD1に付設されるかたちで素掘りの井泉が6基、石組井泉が8基の都合14基の井泉が確認できる。素掘り、石組みを問わず、井泉は

湧水の湧き出し口側となるＳＤ１の左岸側で認められ、対面の溝中央へ向かう側は板材を立ててダム状の枠材とし、湧水を一定程度溜める構造となっていた。同様の構造は、城之越遺跡や八王子遺跡、屋代遺跡をはじめ、群馬県三室間ノ谷遺跡[5]や時代は律令期に下るが島根県出雲市の三田谷遺跡Ⅰ[6]でもみることができる。こうした構造上の共通性は、祭祀系の井泉に対する共通観念の存在を示すものであろう。

六大Ａ遺跡の井泉の構成要素をまとめると以下のようになる。

井泉１　石組井泉。前面に２枚の板材によるＬ字状の枠材。井泉内からの滑石製勾玉と木製刀形が出土。井泉に至る導入路有り

井泉２　特になし

井泉３　前面に枠材

井泉４　前面に枠材。埋土より土器（高坏・甕）の他、木製農具も出土

井泉５　前面に枠材。埋土より土器（壺・高坏・ミニチュア土器）

井泉６　前面に枠材。埋土より農具（泥除）と土器（壺・甕・鉢）。埋土上部に土器群９

井泉７　石組井泉。前面に２枚の板材によるＬ字状の枠材。井泉内外に須恵器坏類

井泉８　石組井泉。石に挟まれた状態で須恵器

井泉９　石組井泉。石に挟まれた状態で須恵器

井泉10　埋土に高坏片。最下層小溝の源流に相当

井泉11　石組井泉。脇に枠材。埋土より滑石製臼玉、周囲より土器類

井泉12　前面をＬ字状に石囲い。埋土より須恵器

井泉13　埋土より土器・瓦

井泉14　前面に枠材。由茶碗出土。中世

井泉の祭儀を復元するうえで興味深い例は、井泉１の事例である。井泉１では、木製刀形と滑石製勾玉が出土したが、大溝内の井泉とその出土遺物としての刀・玉という要素は、記紀神話にみえる「天の安の河の真名井で行われた誓約」と一定の対応関係を有している[7]。つまり、井泉で行われた祭儀のひとつに、神話に描かれた誓約儀礼に類する、いわば「玉と刀剣の祭儀」があったのではないかという推定が、六大Ａ遺跡の井泉１の事例は示している。

そういう視点で他の事例をみてみると、上野市城之越遺跡の井泉や群馬県三室間ノ谷遺跡の井泉では瓢箪が出土しているが、瓢箪は『日本書紀』仁徳段で２か所にわたって誓約儀礼に関わって用いられた物品として出てきている。さらに島根県三田谷Ⅰ遺跡では、六大Ａ遺跡と同様の大溝に付設された井泉が存在したが、この大溝からはその名も「麻奈井」と墨書された須恵器が出土している。

このように見ると、古墳時代から律令期にかけていわゆる誓約に相当するものが儀礼として井泉を中心とする場で行われており、それら実際に行われていた儀礼を踏まえたうえで記紀の誓約説話も語られることになったのではないかとする推定が、考古資料から逆に提起できるのではないかと考えられる[8]。

もちろん、井泉で行われた祭祀的儀礼がすべて誓約であったというわけではない。例えば六大Ａ遺跡でも井泉７では、井泉に須恵器類を奉斎していた状況が窺え、こちらはむしろ井泉自体を祀ったことを示しているのではないかと推定される。他にも、井泉やその前面からミニチュア土器や滑石製模造品等の祭祀系遺物が出土する場合は、この可能性があろう（八王子遺跡など）。

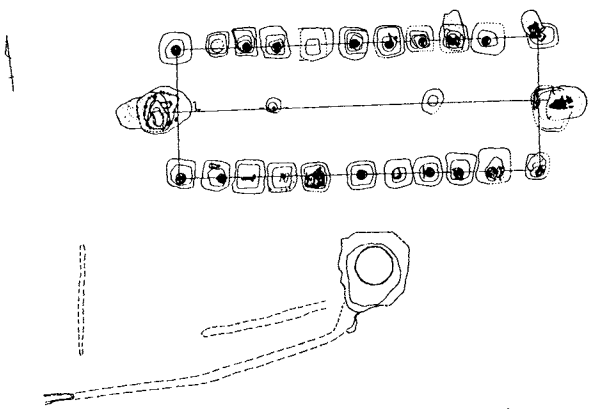
つまり、井泉で行われた祭儀は、祭祀内容、目的等によって大きくふたつのあり方があったとみてよかろう。具体的には、井泉自体を祭祀対象として神聖視し、そこに対しての祭祀的行為を行った場合、もうひとつは湧き出る水を舞台装置のひとつとし、その霊的神聖さを受けたうえで、井泉自体が祭祀対象ではない別目的の祭祀を行う場合である。そういう意味では、前者は地下に通ずる井泉を介して地霊との交感を試みたもの[9]、後者はまさに祭祀の場としての水のある空間といいえるものであろう。

（註）

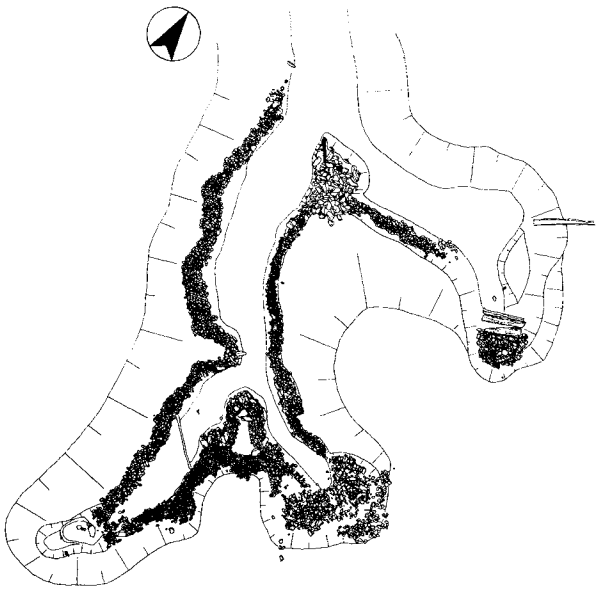
① 佐々木由香「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』108　早稲田大学考古学会 2000

② このことに関しては、調査に関わった複数の研究者から様々な見解が出されているが、まとまったものとして以下の文献をあげる。広瀬和雄「クラから神殿へ」『先史日本の住居とその周辺』同成社 1998

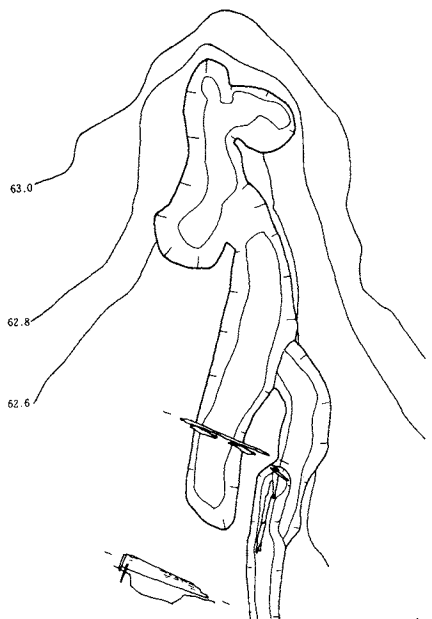
③ 秋山浩三「池上曽根遺跡中枢部における大型建物・井戸の変遷（上）（下）」『みずほ』28及び『同』31 大和弥生



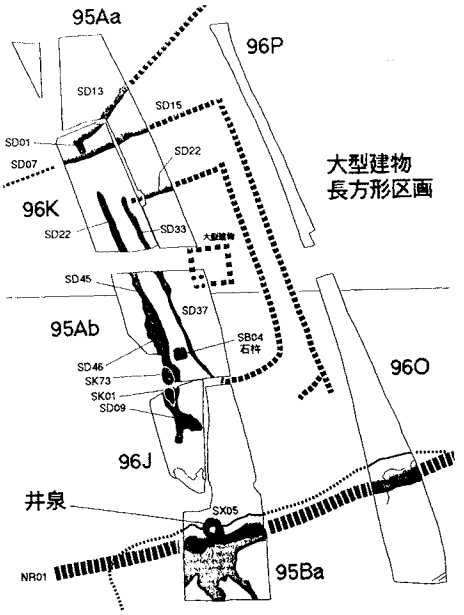
大阪府池上曽根遺跡の大型建物と井戸(S=1:100)　文献註③

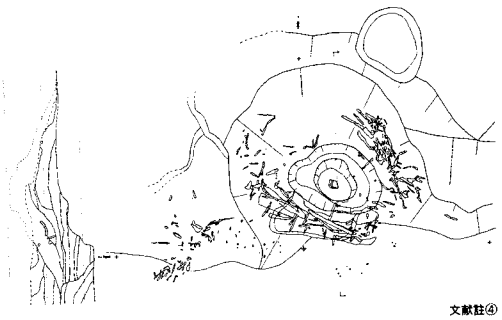


三重県城之越遺跡の大溝祭祀遺構(S=1:400)　第2節の文献註①

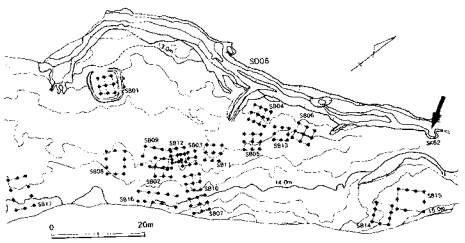


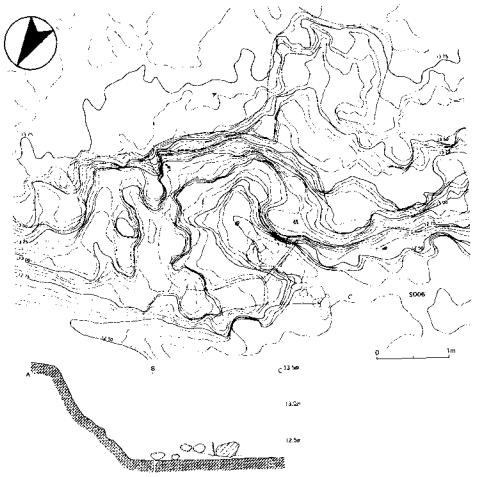
群馬県三室間ノ谷遺跡の「谷頭」(S=1:100)　文献註⑤





愛知県八王子遺跡の
長方形区画(S=1:2000)と井泉(S=1:100)　文献註④





島根県三田谷Ⅰ遺跡の
遺構図(S=1:1600)と井泉(S=1:100)　文献註⑥

第423図　各地の井泉事例

文化の会 1999。池上曽根遺跡の大型建物と井戸に関する文献としては、現時点では本文献が最も考古学的に整った分析で、本書でも基本的に本文献の意見を参照している

④ 樋上昇ほか『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 2002

⑤ 大木伸一郎ほか『上淵名裏神谷遺跡　三室間ノ谷遺跡 一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団 1991

⑥ 熱田貴保『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.2）』島根県教育委員会ほか 2000

⑦ このてんに関し、榎村寛之氏を通じ、直木孝次郎氏よりご教示を得た。穂積裕昌ほか「六大Ａ遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ』三重県埋蔵文化財センター 1995

⑧ 穂積裕昌「井泉と誓約儀礼」『考古学を学ぶ遺物』同志社大学考古学シリーズⅦ 1999

⑨ 銅鐸祭祀に関して、三品彰英氏はそれを「地的宗儀」として捉えられたが、湧水点への祭祀はそれに相通じるものがあろう。同様の見解は、すでに鈴木敏弘氏が表明されている。三品彰英「銅鐸小考」『古代祭政と穀霊信仰』（三品彰英著作集第５巻所収）平凡社 1972、鈴木敏弘「神がみの世界と考古学」『季刊考古学第59号』雄山閣 1997

第４節 絵画・記号土器とその系譜

～特に龍・蛇線刻土器を中心に～

六大Ａ遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭頃の土器に、線刻もしくは顔料の塗布によって施された絵画や記号の類をいくつか確認することができる。ここでは、そのなかでも、龍・蛇線刻絵画を中心に、出現の背景を探ってみたい。

六大Ａ遺跡出土土器で線刻等が確認される事例はいずれもＳＤ１から出土する土器で、施された器種には広口壺（受口壺を含む）・短頸壺・脚付壺・無頸壺、それにミニチュア土器がある。まず、図版への配置順に従って、確認しておこう。

869　短頸壺に線刻されたもので、頸部から胴部にかけて縦方向に沈線を１条配している。

893　無頸壺の胴部中央に一対施されたふたつの図案で、線刻ではなく黒色の顔料によっている。非常に薄くなっており、本来の形状を示すのには困難が伴うが、ひとつはいわゆる鳥足文、もうひとつは「◎」状の小さな図案である。

947　広口壺の体上部文様の下に施された赤色顔料による「Ｕ」字形の図案である。

954　脚付壺の胴部に線刻された、崩れた龍と推定される図案と、長方形区画内に鋸歯文を施して両脇から凧足状の垂れ下げ文様を施した蛇と推定される２個の図案がある。

1006　短頸壺の胴部に連続して逆Ｃ字形の図案が線刻されたものである。

1138　壺の胴部中央に線刻された、崩れた龍と推定される図案である。

1313　ヘラミガキによりやや消されているが、広口壺の体上部に、緩い「Ｓ」字状の図案が連続して施されている。

1599　頸部に２個の円孔を有するミニチュア土器に、龍の図案を線刻したものである。ミニチュア土器の大きさや形状は島根県西川津遺跡などで土笛とされているものに類似する⑦。土笛とすれば「龍を呼ぶ笛」ともいえようか。

1865　広口壺の胴部に横長の三日月形の線刻を施している。

1904　記号かどうかは判断しづらいところだが、広口壺の体上部に極めて緩い弧状短沈線が横に連続して線刻されている。

2005　破片資料であるが、壺の胴部に線刻された２本線で梯子の両脇を表現した、高床倉庫と思われる図案である。

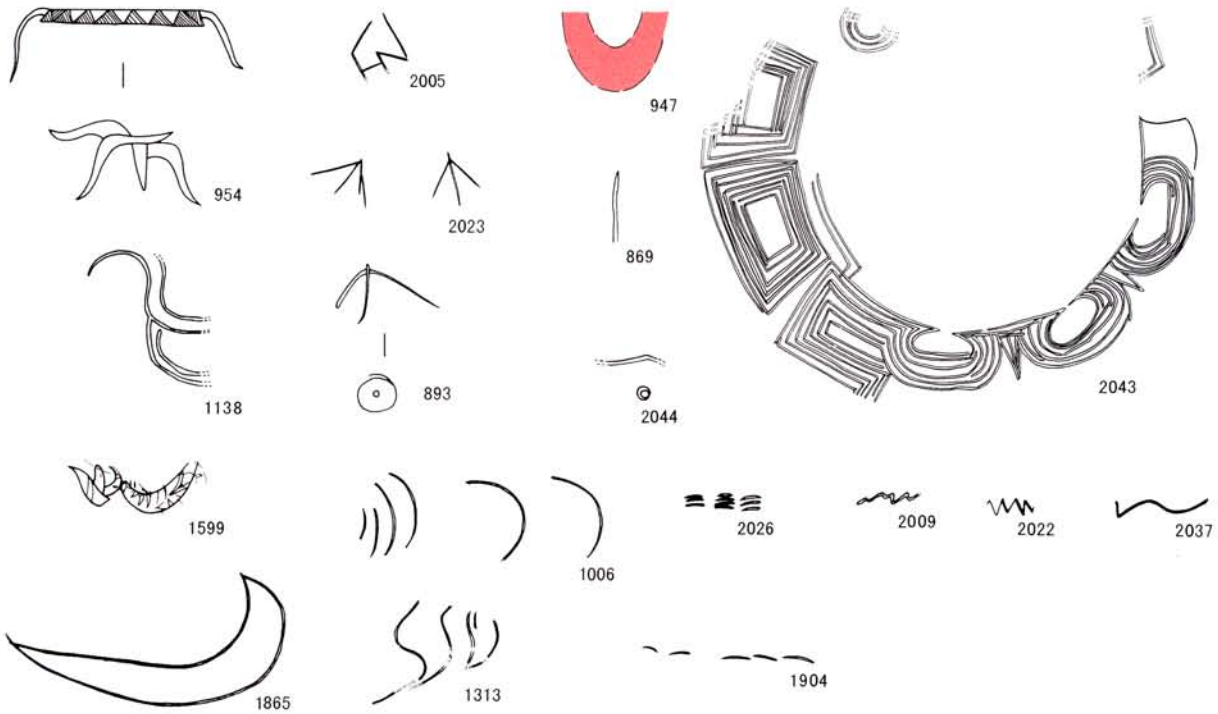
2009　明瞭な絵画・記号というものではないが、受口口縁を呈した広口壺の頸部に縦の直線文、体上部の直線文の下位に沈線による波状文が線刻されている。

2022　短頸壺の頸部にヘラ状工具によって山形文が線刻されている。

2023　短頸壺の体上部に鳥足文が連続して施されている。

2026　胴部穿孔の短頸壺の頸部に短沈線を縦に三本重ねた図案が３単位連続して線刻されている。

2037　短頸壺の体上部に沈線による波文が線刻され



第424図　六大Ａ遺跡出土の土器絵画と記号文

ている。

2043　直口壺の体上部に重方（圏）文が施されている。

2044　破片資料のため全体像は不明であるが、短頸壺と推定される土器の体上部にヘラ状工具による極めて緩い波文と、その下に竹管状の図案が施されている。

以上のように、六大Ａ遺跡で絵画・記号を施したと思われる土器は18例を確認することができた。なかには文様的なものも含み、またその施文方法も線刻によるものと何らかの顔料によるものを合わせてはいるが、この数値は三重県の単一遺跡から出土した絵画・記号土器の数としては群を抜いて多い。

記号文は、短頸壺に施された事例が多く、記号パターンは奈良県田原本町唐古・鍵遺跡出土の記号文を分類された藤田三郎氏の分類によるＩＢ$_2$型及びＩＢ$_N$型に相当するもの[2]が比較的目立つ。このうち前者の一例である893 は、線刻ではなく黒色の顔料による表現である。後者は、ヘラ描による簡略な記号で、波状文を崩したもののようにも見えるが、一応、意図的に記号として施文したものとみてよいものであろう。

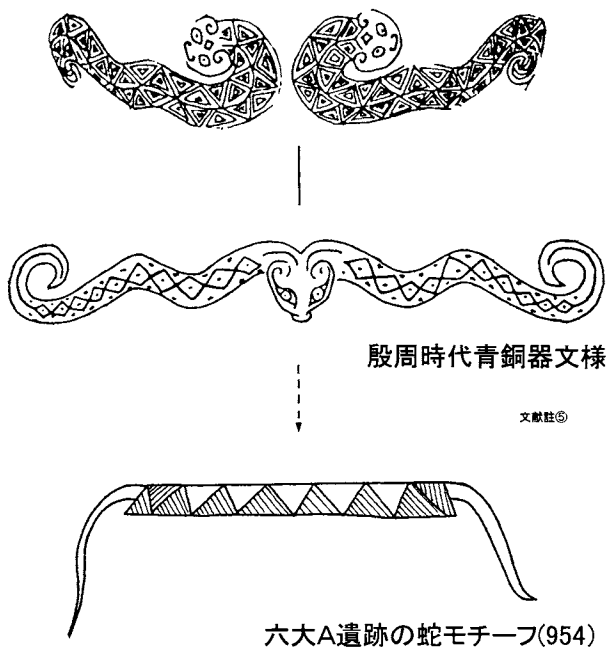
絵画・記号文は、その多くが水の湧く土坑や溝に廃棄された状態で発見されることから、水に関連したものととして捉える意見もあり、六大Ａ遺跡の性格を勘案すると興味深い見解[3]である。

ＳＤ１の土器群から出土した絵画・記号文の土器には、体部穿孔の土器などとセットで出土する事例もあり（例えば、土器群１や土器群３等）、それら土器群では相対的に壺の出土量が多い。構成する土器に複数のものが混じる土器群45でも龍を線刻したとみられる1599（土笛？）が出土しているが、ここでも精製の完形土器の出土が多い。このように、絵画・記号文土器が祭祀に際して使用されたと推定される土器と共に出土している事例が多いことは、絵画・記号文土器が祭祀に用いられたとの指摘をより補強するものであろう。

さて、六大Ａ遺跡で注目できる絵画・記号事例として、崩れてはいるものの、龍の図案が３例確認できること、さらにこのうちの954 には、蛇と推定したものとセットで線刻されていることである。

龍については、1599が崩れてはいるが比較的表現が密なのに対し、954と1138はかなりデフォルメされたもので、大阪府恩知遺跡出土品[4]や静岡県角江遺跡出土品に比較的近い類例がある[5]。

これに対し、954の蛇状の線刻は、これまであまり類例を見ないものであるが、林巳奈夫氏によって紹介された古代中国の殷や周の青銅器のモチーフと



第425図　蛇モチーフの変遷模式図

なった蛇[6]が参考になる。蛇の表現は、頭部を中央に相対させて2匹を横並びにするものと中央に1つの頭部を配してそこから左右に胴部を延ばすものがあるが、蛇の鱗が鋸歯文ないしは菱形文の連続で表現されることと、尾が巻き込むように終わらせることに共通性を見いだすことができる。六大A遺跡の例では、全体的に省略が進み、頭部も表現されていないものの、これらの胴部鱗表現や尾部表現を単純化すると、六大A遺跡954 のようなモチーフになると思われる。

以上の推定が正しいとするならば、古代中国における想像上の霊獣である龍はもちろん、蛇についても、表現のモチーフの淵源を古代中国に求めることが可能となる。このことは、直接か間接かはともかく、当時の中国思想の列島への流入の一端を示すものとして評価できよう。

龍・蛇は、ともに水を象徴する生物であり、これらモチーフを配した土器が六大A遺跡で3個体も確認できたことは、出土遺構であるSD1がいわゆる水辺の祭祀の場であったことを端的に示す遺物ということができよう。

（註）

① 山田光洋『楽器の考古学』

② 藤田三郎「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ　1983

③ 前掲註②

④ 瓜生堂遺跡調査会『恩知遺跡Ⅰ』1980

⑤ 岩本貴『角江遺跡遺物編1土器・土製品』静岡県埋蔵文化財調査研究所。なお、龍線刻土器については、岩本貴氏よりご教示を得た

⑥ 林巳奈夫「殷周時代の遺物に現された鬼神」『考古学雑誌46－2』1960

第5節 六大A遺跡にみる首長関連要素

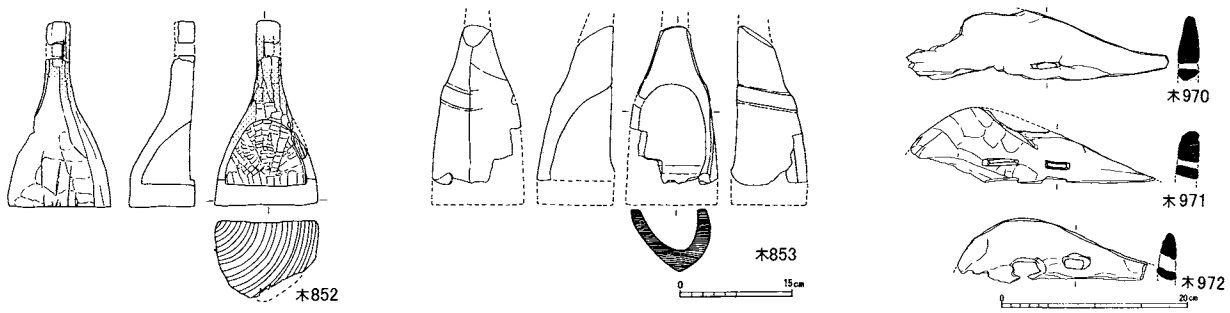
古墳時代の集落にみる社会構成の研究は、これまで首長居館と一般集落に分けて考えていくいわば二元論で展開してきたといっても過言ではない。もちろん、首長居館にはいくつかの規模による段階差なども想定されてはきたが、これらはあくまで「首長居館」という枠組みを決めたうえでその機能を議論していたように見受けられる[①]。

これに対して近年、坂靖氏は、首長居館を頂点としつつも、最末端の集落までを重層構造で一貫して捉える枠組みを提出された[②]。これは、手工業生産をはじめとする古墳時代の諸活動も首長に統率された一連の動きとして捉えることで、集落内もその統率者と成員という階層構造をもつことや、「豪族麾下集落」という作業概念を与えることによって、いわゆる首長居館内に限定されない首長（坂氏は、「首長」という用語が厳密な階級の定義を必要とすることから、そうした階級概念を外す意味で「豪族」という用語を使用される）の活動を活写した。

筆者もかつて上野市城之越遺跡の報告のなかで、城之越遺跡を首長居館ではないが首長層がその祭祀に関連した首長祭祀遺跡として捉え、首長居館ではない首長の拠点遺跡のひとつにこうした祭祀の場があったことを提示した。六大A遺跡も、少なくとも調査範囲が首長居館に相当するとは思えないものの、様々なてんで首長の存在を想定させる要素をもっている。ここでは、六大A遺跡での首長関連要素をまとめるとともに、首長居館という枠では対処できない首長諸活動の一貫を捉えてみたい。

1　遺構にみる要素

SD1の付設施設である石組井泉や礫敷、貼石など、遺構に石礫を伴う仕事は通有の集落遺跡ではみ



第426図　六大Ａ遺跡出土の馬具（木852・木853は１：10，木970～木972は１：８）

られず、関東地方の首長居館に類例がある貼石濠や城之越遺跡の貼石など古墳時代の首長関連の遺跡に特徴的に認められるものである。礫敷は人工の規格性には乏しいものの、ベースとなる地山は粘質土で礫を伴わず、右岸域のみに認められることやＳＤ１が粘性の強い堆積であることは、礫が自然の堆積ではなく搬入されてきた可能性を強く示唆している。

六大Ａ遺跡の場合、礫敷の貼付範囲が110ｍにも及ぶ広大なもの（上層礫敷）である他、井泉も石組みや前面の石敷が伴う例が多いことなど、より手の加えられたものといえ、まさに首長層が関与したと推定するに相応の内容をもつものといえよう。

２　出土遺物による要素

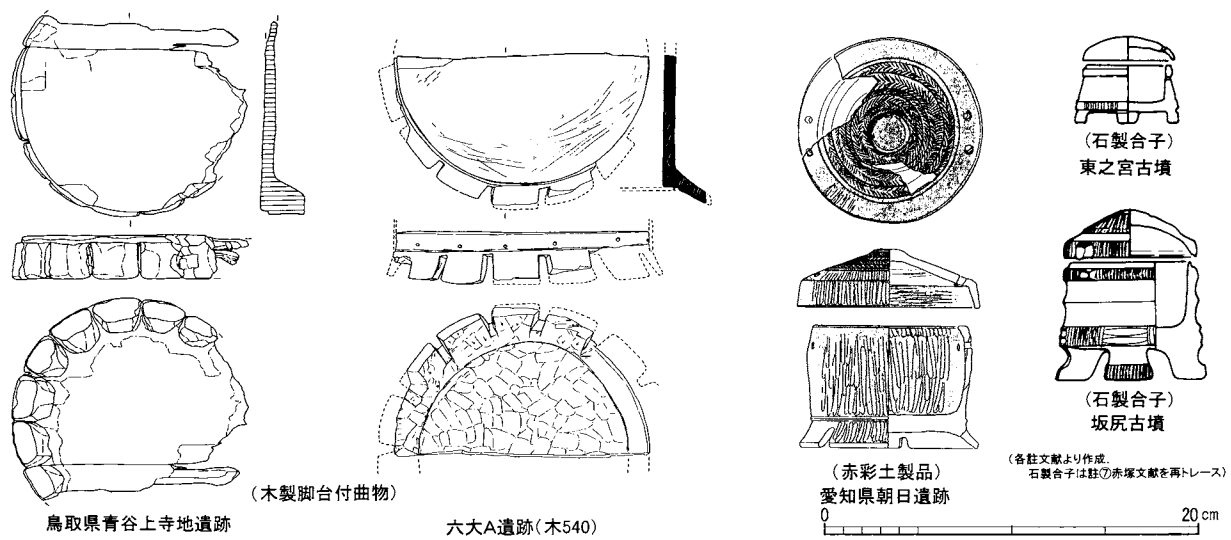
遺構に比べ、ＳＤ１及びＳＲ２から出土した遺物には首長層の関与を想定しうるものが多い。

まず、木製品では多数の優秀な掘立柱建物部材があげられる。すでに詳説したので多くは述べないが多数の扉板の存在は、すべてが同一時期のものではないが、近傍に大規模な倉庫群の存在を窺わせる。

掘立柱建物部材以外では、漆塗りの盾や飾弓、馬具、直弧文を施した刀装具、刀剣鞘、さしば形木製品、琴、横櫛、椅子、案、脚台付曲物（『木製品編』で曲物Ａ類に分類したもの）、それに準構造船部材などが注目できる。

このうち、刀装具と刀剣鞘は、すでに腐食して存在しないものの、それらを装着した実物の飾太刀類や剣が伴うことを示していよう。盾なども含めてこれら武器関係遺物がセットで出土する遺跡は、例えば奈良県の遺跡では葛城氏麾下の集落群と関連されている御所市南郷遺跡群[3]や、物部氏の関与が想定されている天理市布留遺跡[4]がある。これら遺跡との出土品の共通性は、遺跡規模の差はともかく、六大Ａ遺跡と南郷遺跡群・布留遺跡との性格の共通性を示していよう。

馬具は、『木製品編』で２点の鐙を報告したが、馬形もしくは鳥形として報告した木970～木972も鞍の可能性が高いとのご教示を名古屋大学大学院岡田賢氏より頂戴した。この指摘は妥当と判断されるので、木970～木972は木製鞍と訂正したい。つまり六大Ａ遺跡では、ＳＤ１の出土品に木製鐙２点と木製



第427図　木製脚台付曲物と同形態の土製品・石製品（１：４）

鞍３点が確認できたことになる。ただし、所属時期は、Ⅱ層下部の木組遺構部から出土した木852が古墳時代中後期に属すると判断した他は、層序からの限定は難しい。

弥生時代後期に遡るⅢｂ層下部から出土した脚台付曲物（木540 、Ⅲ層出土の木541 も同様）は、同形態のものが鳥取県青谷上寺地遺跡[5]でも出土している（弥生時代中期後葉）。非常に丁寧な仕事を施して装飾性を高めたもので、いわゆる嗜移品と判断できる。木製品ではないが、愛知県朝日遺跡出土の赤彩土製品[6]も同様の器形を呈しており、また前期古墳から出土する石製合子も形態的共通性からこの木製品が祖形となって模造品化したものと捉えられる[7]。つまり、脚台付曲物は、最終的にはいわゆる威信財として石製品化する古墳（出土するのは大型古墳が多い）の副葬品にもなる非常に特殊な容器で、まさに首長に関連する特殊容器といえるものである。木540～木541 は、これが本来は精巧な木製品として存在していたことを示すとともに、それを保持した階層の高さを示すものであろう。

案や椅子についても同様である。案は、それ自体一般集落と目される遺跡からの出土例がないわけでもないが、六大Ａ遺跡出土品は大形品で、極めて丁寧な仕事が施されていることからも、首長祭祀に供した物品類を載せた台として使用された可能性が高い。椅子についても、形象埴輪では首長層等の高位の人物に伴う例が多いことから、その出土は相当程度の有力者の存在を暗示していよう。ちなみに県内では、上野市城之越遺跡で類例がある。

琴も、『記紀』等では使用者が天皇クラス等のかなりの高位者であることや、人物埴輪で示される弾琴人物も装飾のしっかりした高位者に限定できることから、使用者の階層性の高さが窺える。六大Ａ遺跡で出土した琴には、長さ１ｍを越える大形のものもあり、首長が関与した遺跡というに相応しい。琴は、音色によって神が寄り憑く物品であり、首長による祭祀に際して使用されたものであろう。

土器・土製品では、多数の韓式系土器や初期須恵器がまず注目できる。韓式系土器はそれ自体は渡来系集団が使用した日常品であるが、５世紀段階での多数の渡来系集団の将来は、それを押し進めた勢力の存在を窺わせる。その主体が在地にあったのかどうかは判然としないが、少なくとも在地に受け入れ側の有力勢力が存在したことは間違いなかろう。

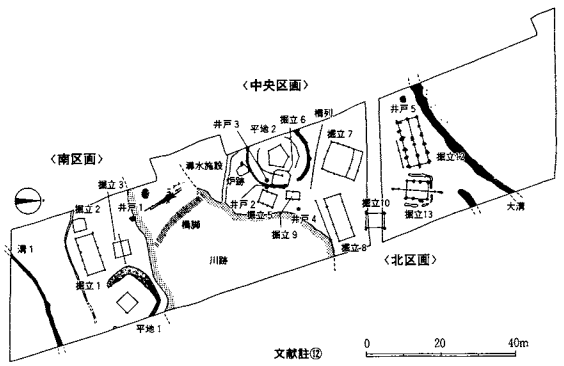
また、古墳時代のフイゴ羽口の存在は、本遺跡で小規模ながら鉄器加工などの手工業生産が行われていたことを示す。こうした金属加工に関わる遺物の存在は、古墳時代を代表する首長居館とされる群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡[8]をはじめ、前述の奈良県南郷遺跡群や布留遺跡にもみられることで、居館の内か外かのあり方の差はあるとはいえ、首長の元で生産活動に従事したことが窺える。

律令期以降のものでは、土管や方筒状土製品、蹄脚部付円面硯、大型土馬などがその使用者の高い階層性を暗示させる。土管は、暗渠施設を必要とした高級な建物の存在を推測させる。また、木簡や多数の墨書土器の存在も本遺跡がたんなる一般集落の枠には入らないことを如実に示している。

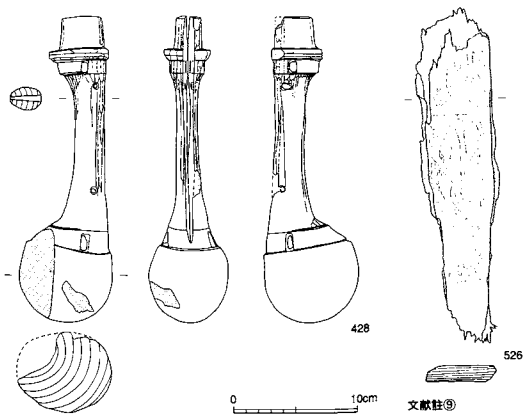
３　首長祭祀の場

以上に検討したように、六大Ａ遺跡の遺構・遺物の内容は、首長居館そのものかどうかはともかく、その出現の背景に首長の存在を強く想起させるものであった。小規模ではあるが、金属器加工や『木製品編』で言及した部分的な木器生産・加工といった手工業生産と、上記で示した多様な特殊遺物がひとつの場所で確認できるてんは、まさに六大Ａ遺跡が首長による関与を受けた遺跡ということを如実に示すものではなかろうか。首長が関与したとみられる遺跡は、出土遺物の組成にも極めて強い共通性があることが多い。前述の城之越遺跡や布留遺跡、南郷遺跡群の他、例えば島根県八雲村前田遺跡[9]では貼石を伴う溝（この遺構自体、首長の関与を窺わせる）から刀装具や琴、掘立柱建物部材などが出土している。そして、これら遺物組成は、首長居館そのものの代表例ともいえる群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡とも共通し、まさに首長層に伴う遺物群ということができる。

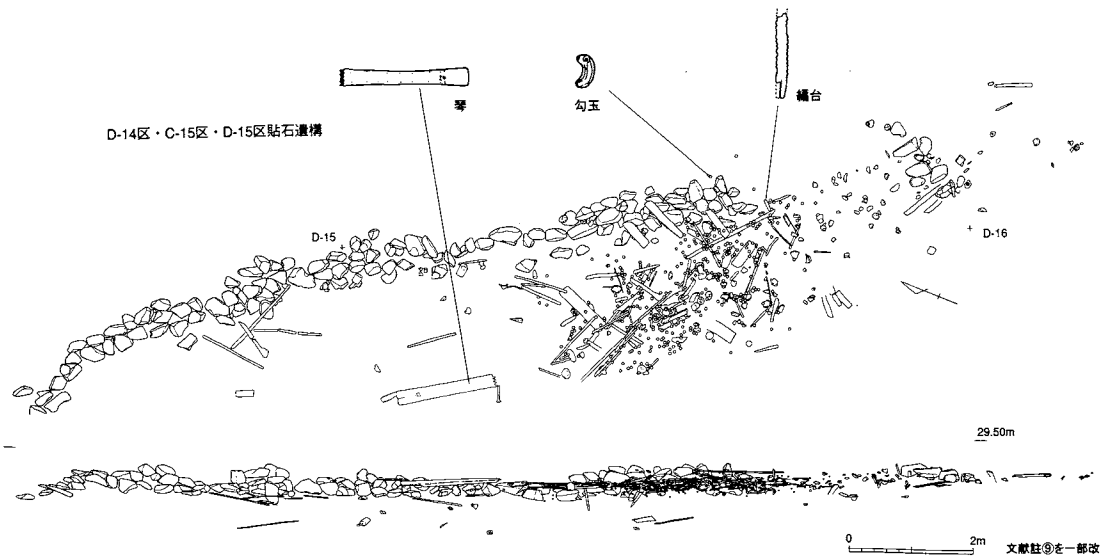
その場合、六大Ａ遺跡が、坂氏のいう「豪族麾下集落」に相当するのか、城之越遺跡で想定したような首長居館とは別の首長関連遺跡[10]（城之越の場合は首長祭祀遺跡）として捉えるのか、あるいは首長居館そのもの（この場合、首長居館が関東の諸例のように堀・溝や柵等で画された方形区画を有する規



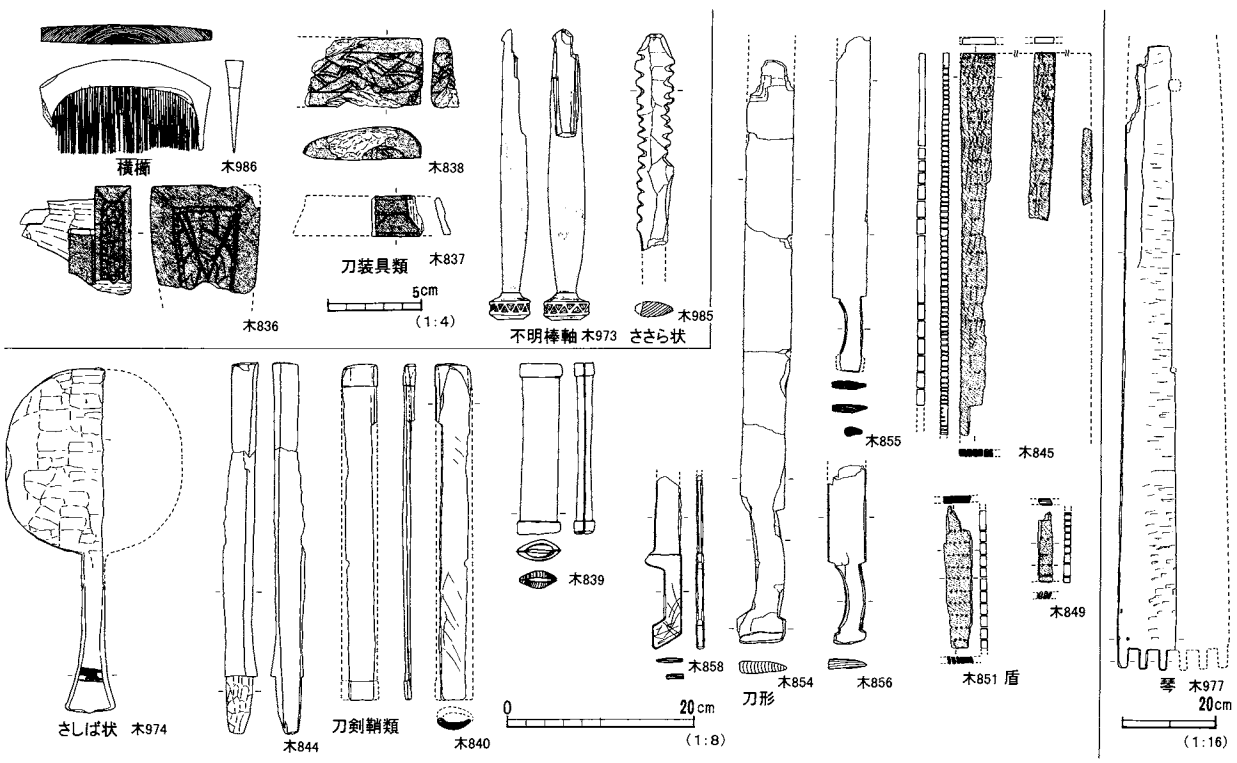
第428図　石川県小松市千代能美遺跡遺構要図
（1 ：2,000）



第429図　島根県八雲村前田遺跡出土の刀把装具と盾
（1 ：6）



第430図　島根県八雲村前田遺跡の貼石溝の遺物出土状況（1 ：125）



第431図　六大Ａ遺跡出土の首長層関連木製品群

格があったかどうかは別問題[11]）と捉えるかが問題となる。例えば、石川県小松市千代・能美遺跡[12]では、「首長の居住空間」の周辺に生産機能と祭祀機能をもつ区画が付随し、それらが川や柵、大溝等で区画された古墳時代前期の首長居館が確認されている。ここでは、明確な方形区画の有無は不明であるが、もし方形区画が存在するとしても川や大溝をその内部に取り込んでいたことになる。

六大A遺跡は、長期間にわたって営まれているため、遺跡の性格も各時代を単一の性格で規定するわけにはいかないが、少なくとも古墳時代に関しては祭祀を示す遺構・遺物の痕跡の多様さから、首長祭祀の場を含む首長層関連遺跡であった可能性を現状では考えておきたい。その前後の時期に関しても、その営みに首長層が関与していたと推定することは是認してよかろう。その場合、周辺にいわゆる首長居館が存在していた可能性も高いものと思われる。

(註)

① 首長居館（この用語自体、「豪族居館」「首長居宅」など様々な意見がある）に関する研究史は多いが、これまでの論点は以下の著作にうまくまとめられている。広瀬和雄「古墳時代首長居館論」『展望考古学』考古学研究会 1995

② 坂靖「近畿地方の「豪族居館」都市論の前提として」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会ほか 1998

③ 青柳泰介「井戸遺跡・南郷（丸山・大東）遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1994年度』奈良県立橿原考古学研究所 1995、及び、坂靖ほか『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所 1996

④ 山内紀嗣ほか『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団 1995

⑤ 北浦弘人ほか『青谷上寺地遺跡3』（財）鳥取県教育文化財団 2001

⑥ 宮越健司『朝日遺跡Ⅵ－新資料館地点の調査－』愛知県埋蔵文化財センターほか 2000

⑦ 赤塚次郎「容器形石製品の出現と東海地域」『考古学ジャーナル 453』1999

⑧ 下城正『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会ほか 1988

⑨ 川上昭一『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』島根県八雲村教育委員会 2001

⑩ 首長が関与した祭祀遺跡・工房・港湾施設・大規模倉庫群などがこれに相当しよう

⑪ 大規模な方型区画を伴う居館例は、東日本を中心に確認されている。西日本にも勿論類例はあるが全体として発見例は低調で、当時の王権が存在した近畿地方中枢部の様相がいまひとつ明瞭でないことは今後に課題を残している。

⑫ 林大智「千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号（財）石川県埋蔵文化財センター 2001

第6節　韓式系土器・初期須恵器の系譜

六大A遺跡では、東海地域以東としては最多量となる大量の韓式系土器（朝鮮系軟質土器）と初期須恵器が出土した。韓式系土器は、渡来人の日常雑器として把握され、一般的に渡来人がその地に存在した査証のひとつとして捉えられている。ここでは、六大A遺跡出土の韓式系土器と初期須恵器についてまとめ、その特質を考えてみたい。

1　韓式系土器

事実報告でも記したとおり、六大A遺跡出土の韓式系土器には甕・長胴甕・把手付鍋・甑・有孔鉢・平底鉢がある。このうち、量的な主体を占めるのは甕と甑、それに把手付鍋である。平底鉢は、完形に近いものが1点あるが、他はあまり明瞭でない。このように、器種間の量的な差異には多寡はあるが、ひとつの遺跡にこうした多種類の韓式系土器の器種が存在することは、渡来人が直接当地へ来ていたことのひとつの査証[1]になろう。

胴部に施されたタタキ原体は、ほとんどが格子タタキで、ごく少数の縄蓆文がこれに伴う。他の遺跡では格子タタキとともに最も一般的な平行タタキがほとんどみられないことは、六大A遺跡出土韓式系土器の際立った特徴ということができる。このことは、今後、六大A遺跡の韓式系土器の系譜を辿っていく際の重要な手掛かりになるものと思われる。

甑は、酒井清治氏の研究によると、底部形態・底部穿孔の数の形状・口縁部形態から都合10類に分類されている[2]が、六大A遺跡の代表的な例をそれに当てはめると、丸底形態の3354が10類で伽耶系、3331～3332が直口口縁で底部中央に円孔、周囲にも小円孔を配する1類もしくは2類で百済系（厳密に

は百済南部から伽耶西半部に遡源があるとされる)、3330は底部が平底で穿孔が中央円孔＋楕円孔４個という３類で百済系となる。このように、酒井氏の説によると、甑に関する限り伽耶から百済の地域に淵源が辿れるものが中心となる。

有孔鉢などには、底部の有孔部が小孔がアトランダムに穿たれる多孔タイプのものが存在する。これは、底部の穿孔が１＋６などに定型化する以前の古い段階のものとされており[3]、六大Ａ遺跡出土の韓式系土器は古墳時代前期以前の古い段階の渡来集団ではないものの、５世紀頃を境に増加する渡来集団の新たな波のなかではかなり古い部類に属する可能性がある。また、格子タタキを施した後、ハケを加えている例があるが（386～390などＳＲ２出土のものに多いがＳＤ１でも3289などに顕著)、これは当該土器の時期的な後出性、もしくは製作における土師器工人との協業作業を示している可能性がある。

このことに関連して、韓式系土器の器種としてはごく一般的な長胴甕の出土量が六大Ａ遺跡では際立って少ないが、これに関しては当地のこの時期の土器様式に一般的に組成し、六大Ａ遺跡でも大量に出土しているＳ字甕がその代用をしていた可能性が考えられる。鈴鹿市稲生遺跡などでは５世紀後半以降の竪穴住居の竈の支柱の上にＳ字甕を置いて竈で使用しており[4]、器種の代用としての機能が十分に果たされていたため、韓式系土器の長胴甕が少なかったと思われる。もしこの想定が妥当とした場合、タタキの上にハケを使用した手法など、土師器工人と当地へ将来した渡来系工人との一定の協調関係の存在を示すものと評価できるのではなかろうか[5]。

2　初期須恵器

六大Ａ遺跡からは、韓式系土器とともに、多量の初期須恵器も出土している。これら初期須恵器は、若干の時間幅も想定できるものの、古いものについては装飾文様に組紐文や鋸歯文、斜格子文など轆轤製作に不向きなもの[6]を多用するなど、列島に導入された最古期の須恵器の特徴を備えている。これは、多少の遅れはあっても、高蔵73号窯式[7]以前で、大きく『陶邑・大庭寺』の段階[8]に併行すると捉えて大過ないであろう。

この場合、六大Ａ遺跡出土品がすべて列島で製作された初期須恵器なのか、あるいはそれに渡来人によって将来された陶質土器も含まれているのかがまず問題となる。六大Ａ遺跡の場合、韓式系土器もあわせて大量に出土していることから陶質土器が存在する条件は揃っている。しかも、胎土・焼成が一様でないことからも、これらに陶質土器が含まれている可能性を残している。しかしながら、最古期の須恵器と陶質土器との峻別は容易ではなく、六大Ａ遺跡出土品にもし陶質土器の可能性のあるものが存在しても、胎土分析等の科学的検討を行わなければ確定しきれないのが現状である。そこで、以下では、形態や文様によって示される系譜・系統関係の検討は行うものの、そこに陶質土器が含まれるか否かについては留保し、すべてを初期須恵器として記述を進めていきたい。

九州島とその周辺以外の地域から、こうしたいわゆる初期須恵器が出土する場合、これまでは現在の大阪府南部の地域[9]（陶邑古窯跡群と呼称されることが多い）で生産され、それが各地へもたらされたと考えるのが一般的だった。いわゆる「陶邑」からの一元供給論[10]である。

しかし、香川県三谷三郎池西岸窯[11]をはじめ、岡山県総社市奥ケ谷窯[12]など、大阪以外の地域での初期須恵器窯の確認例が増加し、近年では半島から列島への初期須恵器の波及は、いくつかの多元的な系譜が想定されるようになった。ただしこの場合、須恵器導入最初期にはいくつかの地域で初期須恵器窯が成立するものの、最終的に短期の操業で終わらずにその後も定着して発展していくのが大阪南部地域であるとする理解が一般的である[13]。

こうした近年の初期須恵器を巡る研究のなかで六大Ａ遺跡出土品を位置づけた時、六大Ａ遺跡出土品も、具体的な窯は未確認ではあるが、焼け歪みによる破損品の存在をはじめ、形態や文様、器種といった様々な要素から、在地生産を考えるのが妥当であろう。問題は、当地域へ須恵器生産技術をもたらした主体者の系譜が国内（具体的には「陶邑」を含む大阪南部地域）に限定されるのか、朝鮮半島との系譜関係も存在するのかである。これを行うには、六大Ａ遺跡出土品自体の全体的な特徴を把握しておく必要がある。以下では、土器系譜の特徴が把握しや

すい器種を中心に、若干の比較検討を行い、このてんについて考えていきたい。

まず、高坏形器台をみてみよう。高坏形器台の口縁部形態に着目すると、大阪府下の初期須恵器でも最古の部類に属する久米田方墳[18]や陶邑・大庭寺遺跡の例では、口縁部の外折形態と口縁直下の二条凸帯を特徴としている。これは、釜山福泉洞31号墳出土の例と共通するとされ[15]、口縁部形態という視点だけ捉えれば和歌山県楠見遺跡出土例[19]も同様である。これに対して六大A遺跡の例は、口縁部があまり外折せずに直口状形態を採り、口縁直下の凸帯も2条に定型化していないものが多く、口縁部が外折するものについても口縁直下の2条凸帯を欠く（1711等）。また、3411のような小型品の存在や、施文の文様も組紐文が規範を守りながらも崩れ気味なのが多いことなど、大阪の諸例とは様相を若干異にしている。ただし、443に典型的にみられるように、凸帯や稜部を太く丸くして突出させる手法は、植野浩三氏によると初期須恵器でも初出段階に特徴的な手法とされ[17]、本遺跡の初期須恵器が時間的にかなり早い段階を含んでいることを窺わせている。

なお、高坏形器台は、器台上部を太く作るものが伽耶の洛東江西岸でも金海周辺に多くみられる特徴とされ、これに対して、器台部上部の幅が狭いものは、咸安地域に多いとされる[18]。六大A遺跡の高坏形器台は、3411や3412、3428のように器台部上部が太い金海タイプのものが一般的であるが、3430や3431が脚付壺ではなく器台とすると、咸安タイプのものも含まれている可能性がある。

次に、筒形器台をみてみよう。六大A遺跡の3432は、筒状部と器台部に火焔透かしを千鳥式に配するのを特徴としている。火焔透かしは、伽耶でも咸安地域に多いものとされ[20]、列島内では大阪府鈴ノ宮遺跡[21]、久宝寺北遺跡[21]、奈良県布留遺跡[22]などで出土例があるものの非常に少数で、現在のところ陶邑・大庭寺遺跡でも未確認である。器台への使用例としては、高坏形器台へ施されたものとして久宝寺北遺跡例があるが、筒形器台への使用例は六大A遺跡例のみである。3432の場合、火焔部の頂部形態も方形の鍵形を呈するなど列島内の資料としてはかなり特徴的であり[23]、今後そうした特徴をもとに半島での故地を探っていく必要がある。

同じく筒形器台の可能性を考えた3434は、器台部に先端が尖った火焔透かしをもつことと、器台部と筒状部の境に鍔をもつことを特徴としている。火焔透かしは前述のように咸安地域にその故地があるものと思われるが、鍔付きであることや全体的な器形自体は、例えば釜山福泉洞32号墳出土の動物小像を鍔の上に配した筒形器台[24]のように、金海周辺でも類例がある。

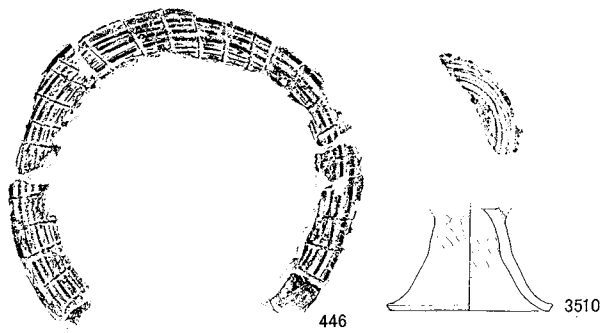
有鍔土器については、列島内では大阪府野中古墳出土品[25]に類例があり、土器の系譜としては百済系統の可能性が説かれている[26]。

複合鋸歯文と上下2個を1単位とした円形スタンプを口頸部に配する長頸壺3436は、文様的には新羅地域に系譜を求めうるものであろう。

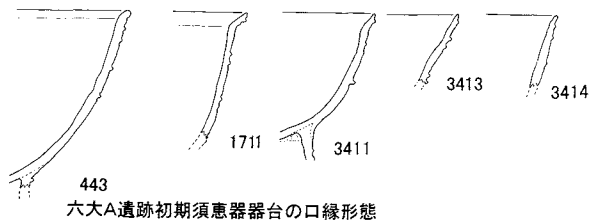
六大A遺跡出土初期須恵器中、最も特徴ある形態を示すものが脚付環状連結四連壺と報告した3455～3456である。これは、主壺を持たず、環状部の上に4個の小壺（うちひとつが胴部有孔の壺形態）を均等に配するのを特徴としている。この類品はあまり列島内では確認できないが、僅かに奈良県橿原市南山4号墳出土の四口壺[27]などと共通する部分がある。全くの同一品ではないが、類縁関係がありそうなものが釜山福泉洞古墳群を中心とした金海周辺にあり、例えば、釜山福泉洞1号墳出土品[28]のなかには環状部の上に小碗を4個配するものがある。これらは、六大A遺跡出土例と基本構造が同じとすることができよう。このように考えると、本例に関するかぎり、全くの同形態ではないものの、系譜としては伽耶の釜山周辺に求められるのではなかろうか。

高坏については、短脚に方形刺突を縦方向に直列配置する3493や短脚2段透かしの形態をとる3496、楕円形の小孔をもつ3494などは基本的に陶邑・大庭寺遺跡にも類例があり、勿論その淵源は朝鮮半島の陶質土器に由来する。

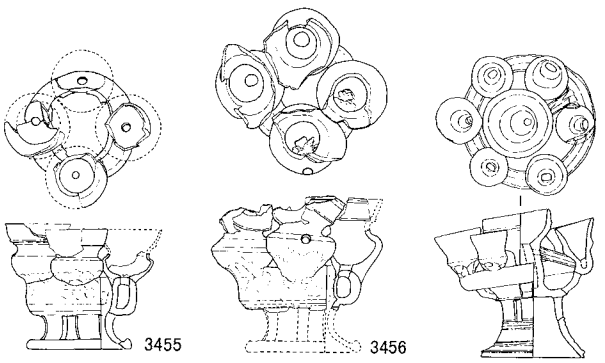
この他、高坏脚部や壺胴部内面などに整形時にユビオサエを用いたいわゆる「手延技法」の痕跡が認められるものがある。これは、八賀晋氏によると朝鮮半島の陶質土器にもしばしばみられる手法とされており[29]、六大A遺跡出土の初期須恵器もこれをひとつの特徴としている。また、3559のような甕内面



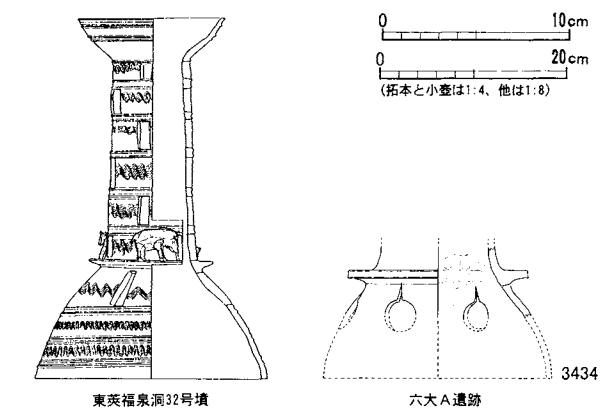
六大Ａ遺跡初期須恵器器台(446)と
土師器高杯(3510)の接合手法の共通性



六大A遺跡初期須恵器器台の口縁形態



脚付環状連結四連壺と関連資料



鍔付の筒形器台

東莢福泉洞古墳は文献註㉓より作成、
ただし１号墳の土器のみ註⑮定森文献所収の図を再トレースして使用

第432図　六大Ａ遺跡初期須恵器関連資料

に残る無文当て具痕跡[30]や、波状文が施された壺胴部片（3453、本例は内面のユビオサエ痕も顕著）なども初期須恵器の初出段階ないしは陶質土器との類縁性を強く示唆する[31]ものが存在している。

さらに、土師質焼成の高坏3510は、坏部と脚部の接合が初期須恵器の器台や高坏の手法であり、韓式系土器のみならず、初期須恵器に関しても土師器工人との折衝が窺える。これと同様の状況は、近年調査された岡山県菅生小学校裏山遺跡でも既に指摘されている[32]。

以上、代表的な例についてその類例などを確認してきた。その結果、六大Ａ遺跡出土品は、朝鮮半島では金海周辺にその故地が求められるものが多いものの、火焔透かしなど咸安的な要素もあり、まとまって単一の地域にその故地が求められるようなものではなく、いくつかの地域の要素が複合していることがわかった[33]。もっとも、このことは、何も本遺跡出土の初期須恵器だけに限った特徴でなく、例えば陶邑・大庭寺遺跡などでも同様のことが指摘されている[34]。つまり、ある地域の初期須恵器の系譜が朝鮮半島の特定地域に限定された器形なり特徴で占められるという状況はなく、列島で出土する場合はその出現の当初から朝鮮半島のいくつかの地域の要素が複合していたということである。

その場合、成形時の手延手法など陶質土器との類縁性を認めうる要素や、火焔透など特徴的な器種・手法の存在、器台口縁部の特徴、初期須恵器の特徴をもつ土師器の存在など在地生産を考える要素が強い[35]。つまり、六大Ａ遺跡出土初期須恵器群は、岡山県奥ケ谷窯など近年確認例が増加してきている最古期の須恵器窯同様、地域における須恵器系譜の多元的なあり方を示すひとつとして位置づけられよう。

3　韓式系土器・初期須恵器出現の背景

では、この地に韓式系土器や初期須恵器が存在するに至った理由はどこに求められるのだろうか。韓式系土器に示される渡来系集団は、初期須恵器等の窯業生産に関わっていた可能性が高い（他にフイゴ羽口等の存在から小規模な鉄器生産・加工等も想定される）。焼け歪み品の存在も考慮した時、窯自体が六大Ａ遺跡の近傍に所在したことも十分に考えられる。

当時のヤマト・河内王権膝下の陶邑・大庭寺遺跡の生産量には比ぶるべくもないが、こうした初期須恵器の導入にも伊勢における当地域の先進的な性格の一端を窺うことができる。そして、こうした渡来系集団を膝下に組み込むことができたのは、当時の王権ないしは地域首長層の関与があったものと推定される[36]。

前述の菅生小学校裏山遺跡では、渡来系集団を膝下に置き、泊的な港湾を管理した地域首長層の関与が想定されている。六大A遺跡も、その立地に河川交通を介した海上交通との関わりは、遺跡立地の特性や『木製品編』でも示した準構造船部材の存在などから窺えることであり、こうしたてんにも、六大A遺跡のもつ重要性の一端が窺える。つまり、志登茂川河口部の潟状地形の最奥部に位置する六大A遺跡は、海上にも開かれていたとみるべきであり、海上交通と陸上交通の帰結点的な位置にあったことが六大A遺跡の重要性を高め、最新文物をもたらすに至った背景として存在していたのであろう。

なお、韓式系土器や初期須恵器以外でも渡来系要素を示す遺物として、小円孔が穿たれた砥石、いわゆる「提砥」がある[37]（4497・4504）。さらに、鋸状工具によって58本もの薄歯を作りだした横櫛や、多量の出土をみた古墳時代の下駄をその可能性があるものとして『木製品編』で指摘したことを付記しておく。

（註）

① 今津啓子「渡来人の土器－朝鮮系軟質土器を中心として」『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版 1994

② 酒井清治「日韓の甑の系譜から見た渡来人」『楢崎彰一先生古希記念論文集』1998

③ 能登川町教育委員会植田文雄氏のご教示

④ 穂積裕昌ほか『南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995

⑤ これら韓式系土器製作工人と土師器製作工人の協調の可能性は、以下で言及した。穂積裕昌「三重県津市六大A遺跡出土の初期須恵器・韓式系土器について」『韓式系土器研究Ⅵ』韓式系土器研究会 1996

⑥ 山田邦和「須恵器生産系譜論の現状」『考古学と移動・移住』同志社大学考古学シリーズⅡ 1985

⑦ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

⑧ 岡戸哲紀ほか『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』（財）大阪府文化財調査研究センター 1995

⑨ 『日本書紀』崇神段に記載されている「陶邑」を大阪府南部に広がる大規模な須恵器窯跡群として捉えることが多いが（この場合、大庭寺遺跡もその範囲内に含んでいる）、厳密な意味での記紀でいう場合の「陶邑」とは須恵器窯跡群全体を指す名称ではなく、陶荒田神社を中心として湯山古墳などをその範囲に含むいわゆる拠点遺跡を指すとする森浩一説に同意する。森浩一「考古学の成果再吟味」『歴史九州』（九州歴史大学講座９月号）2001

⑩ この見解を代表する当時の見解として、以下の文献をあげる。田辺昭三「須恵器生産の誕生」『日本美術工芸』390 1971

⑪ 香川県教育委員会「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 1984

⑫ 柴田英樹「奥ケ谷窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 』岡山県教育委員会ほか 1997

⑬ 代表的なものに、以下の文献をあげる。植野浩三「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』第21号 1993

⑭ 虎間英喜「久米田古墳群出土の初期須恵器」『韓式系土器研究Ⅳ』韓式系土器研究会 1993

⑮ 定森秀夫「陶質土器からみた近畿と朝鮮」『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版 1994

⑯ 園田香融ほか『和歌山市における古墳文化』関西大学 1972

⑰ 植野浩三「兵庫県千種川中・下流域の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅴ 1994

⑱ 昌原文化財研究所李柱憲氏のご教示による

⑲ 竹谷俊夫「初期須恵器の系譜に関する一考察－火焔形透孔をもつ陶器を中心に－」『天理大学学報』 1984

⑳ 福田さよ子ほか『鈴ノ宮５－鈴ノ宮遺跡第８地区の調査－』堺市教育委員会 1986

㉑ 中西靖人・尾谷雅彦ほか『久宝寺北遺跡（その１－３）』（財）大阪文化財センター他 1978

㉒ 竹谷俊夫「布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土器」『考古学調査中間報告』８ 埋蔵文化財天理教調査団 1983

㉓ 火焔透かしや壺については、李柱憲・竹谷俊夫両氏よりご教示を得た

㉔ 釜山大学校博物館『東萊福泉洞古墳群第２次調査概報』

1989

㉕ 北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学 1976

㉖ 前掲註⑮

㉗ 坂口俊幸「橿原市南山古墳群第4号墳」『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』埋蔵文化財研究会ほか 1987

㉘ 東亜大学校博物館『東萊福泉洞第1号墳発掘調査報告』1971

㉙ 八賀晋「須恵器製作の一視点」『楢崎彰一先生古希記念論文集』1998。なお八賀晋氏より直接ご教示を得た

㉚ 藤原学氏のご教示による

㉛ 前掲註㉓

㉜ 中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』5 岡山県教育委員会 1993

㉝ 釜山大学校博物館にて、申敬澈・全玉年氏のご教示を得た

㉞ 前掲註⑧

㉟ 大沢池を含む六大A遺跡から内多遺跡における谷筋がその候補となろう

㊱ 坂靖「近畿2 大和における渡来文化の受容と展開」『渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 1999

㊲ 門田誠一「古墳出土の提瓶－近年の韓国出土資料との対照による若干の視点－」『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学校地調査委員会

第7節 古代の文字関連資料とその周辺

六大A遺跡出土の墨書土器には、須恵器や古代土師器に墨書された古代に属するものと、山茶碗等に墨書された中世に属するものがある。また、文字関係の資料として、『木製品編』で報告した木簡や円面硯等の硯類、ヘラ状具によって土器に線刻が施された線刻文字の資料がある。ここでは、六大A遺跡で確認できた墨書土器や文字関連の資料のうち、古代に属するものについてまとめておく。

1 古代の文字資料

古代の文字資料には木簡（木1491）と墨書土器、文字線刻土器があり、関連資料として円面硯（獣脚部付のものを含む）がある。

まず、事実報告でも若干触れたが、出土した墨書土器を再確認しておこう。ある程度、釈読が可能なものには、「嶋」（3789・3790・3840）、「北」（3818）、調？（3823）、「大川」（4044）がある。このうち、4044のみが灰釉陶器碗への墨書で平安時代後期と推定されるのに対し、それ以外のものはすべて須恵器への墨書で、飛鳥～平安時代前期の所産と推定される。

また、文字線刻土器では、土師器坏の底部に「夫人」？もしくは「奉水」？と線刻された例（3952）がある。線刻が不鮮明であるが、前者とみた場合、いわゆる「夷」（＝蝦夷）を含む線刻となる。

以上のうち、注目されるのは3点が出土した「嶋」と「調」？、および線刻土器である。「嶋」という語は、明日香村島庄遺跡にみるように、水に囲まれた陸地のことだけでなく、築山・泉水のある庭園を表すものとされており[1]、出土遺構のＳＤ１には飛鳥時代頃の貼石も存在することから、そうしたものと何らかの関連を有する可能性がある。

また、3823は「調」と読めるとすれば、律令制下の負担体系であるいわゆる租庸調の調で、律令期の税に係わった墨書である可能性がある。

これらに関連して興味深いことは、平城宮から出土した「伊世国奄伎郡久善多里私部小□□」という木簡[2]と、六大A遺跡の南に隣接する六大B遺跡から出土した「□□十□年十月七日□前東人」という木簡[3]の存在である。

このうち、六大B遺跡出土木簡は、日付＋人名であるが、奈良時代後期に当地が都へ送るための物品類を集積する地であったことを窺わせている。六大B遺跡D地区では正方位でコの字型配置を採る大型掘立柱建物群も確認されており[4]、古代奄芸郡の中心地のひとつと目されるとともに、税を取りまとめるような何らかの公的施設が存在した可能性が高い。3823の墨書が「調」であるとするなら、上記の推定をより補強する材料となろう。

なお、『木製品編』でも報告したように、六大A遺跡でも木簡（木1491）が出土している[5]。これは曲物の底板を転用したもので、上端部および側面を欠損する。文字の配列は規則性に乏しく、文章としては意味がとれず、また記号様の意味不明の墨痕も存在する。文字は表裏に存在し、仮に文字数の多い方を表面とした場合、表面では「真」「壬」「可」「殖」「多」が、裏面では「殖」1文字のみが判読できる。表面の「真」「可」「多」以外は線が太く異筆

と思われる。木簡の性格については確定できないものの、六大B遺跡出土木簡の存在とも合わせ、当地における一定の識字層の存在を示す資料ということには違いない。

このように考えた場合、律令期の六大A遺跡は、郡ないしはその関連施設を中心としたエリアの北に位置するとともに、物品の廃棄や境界での祭祀的行為（SD1における律令期の井泉や貼石の存在・土馬等の出土）を行う場所であったと推定される。

2　獣脚部付圏脚円面硯（3899）について

六大A遺跡では、計6点の円面硯が出土しており（他に転用硯等も存在する）、そのうちの1点が獣脚部付のもの（3899）である。

3899は、硯面部径が17cmを越える大形品で、型押しによる獣脚を貼付した後、その間に長方形及び十字形の透孔を穿ったもので、獣脚には爪の表現が残るなど非常にリアルな作りである。また、欠損しているが筆立てをもつと推定される。ただし、使用された痕跡には乏しい。

圏脚円面硯を母体として、そこに獣脚部を貼付するというてんでは、いわゆる蹄脚硯Bの製作技術との共通性をもつ。蹄脚硯は、唐で完成した獣脚円面硯を模したものとされ、硯部・脚部・脚台部を分割製作したのちに合体させる唐様式そのままの蹄脚硯Aから、圏脚円面硯の台脚部に蹄脚部と脚台部を貼付した後に逆三角形状の透孔を切り取る蹄脚硯Bへと日本化の道を辿るとされる[6]。蹄脚硯Bの出現は奈良時代中頃とされ、蹄脚硯と同様の変遷を辿るとすれば本例も奈良時代中頃以降の所産となる。

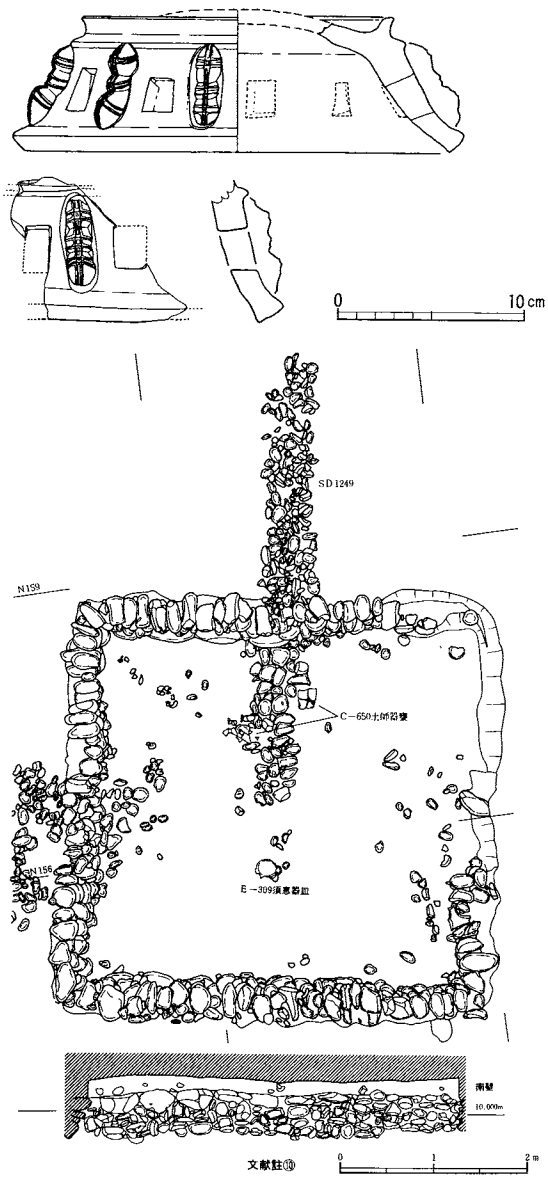
しかしながら、元来が蹄脚硯が獣脚硯の模倣である以上、3899のような極めてリアルな獣脚表現をもつことを勘案すると、製作技術的には新しいが表現的に古相を残すと考えるには非常に無理がある。むしろ、圏脚円面硯は6世紀末頃に列島に出現し、獣脚を表現した脚をもつ獣脚硯もほぼ同時期に出現するとされていることから[7]、蹄脚硯の系譜とは別に（それ以前に）、圏脚円面硯に獣脚硯の獣脚部を貼付させて両者を融合したものと考えるほうが妥当であろう。その場合、獣脚を模した脚は、唐だけでなく朝鮮半島にも製作の伝統があり[8]、半島的な要素を考える必要があるかもしれない。

以上のことから、3899の所属年代は、細かい部分までの限定は難しいが、7世紀代、下っても8世紀前葉前後までの時間幅でみるのが妥当であろう。

3899は、その表現の緻密さや個性的な作りなどから、一般集落ではとても存在しえない優品であることは疑いない。これと全く同様のものは他に存在しないが、比較的似た表現をとるものは、東北地方の太平洋岸に存在する。ひとつは、福島県原町市泉廃寺、もうひとつは宮城県仙台市郡山遺跡である。ともに、獣脚部の表現は、3899とはやや異なり、明瞭な爪の表現などが施されているわけではないが、圏脚部に獣脚系譜の型押しによる装飾を貼付し、透孔を穿つというてんで3899と基本パターンを同じくするものといってよかろう。

このうち、泉廃寺は、瓦類の出土から古代寺院とされているが、陸奥国行方郡の郡衙という見方もある。行方郡は、郡とはいえ広大な陸奥にあって軍団も付設された極めて重要度の高い郡で、律令国家による様々な統括のもとにあったと考えられている[9]。また、郡山遺跡[10]も、多賀城の前身的な官衙遺構とされるものである。ともに律令国家の東北経営に関わって、その支援の元に成立した国家的な施設ということができる。つまり、3899に類似する土器が出土した遺跡は、いずれも国家的な要請に基づいて経営された極めて重要な遺跡、ということになる。これに関連して、九州の事例からではあるが、円面硯は希少性などのランクをもって存在していることが指摘されており[11]、その面からも3899は硯の「格」としては最上位の部類に入るものと思われる。

ところで、郡山遺跡の中心建物の背後に広がる石敷き広場には、飛鳥の苑池（石神遺跡の方形池）に対比しうる石組の方形池が発見されている[12]。石上遺跡の池は、斉明朝に蝦夷の服属儀礼（誓約）が行われたれた場所ともされており[13]、これに酷似する施設が郡山遺跡でもみられることから、ここでも同様の儀礼が行われたのではないかとみられている[14]。これに関連して興味深いことは、六大A遺跡においても当該時期の井泉遺構や貼石施設が存在しており、服属儀礼かどうかはともかく、それら施設で誓約を行った可能性があることである（前述のように、前代の古墳時代においてはその痕跡が明瞭）。前述の



第433図　仙台市郡山遺跡出土の円面硯（上，１：４）と石組池（下，１：80）

３例の「嶋」墨書土器や、判読に問題はあるが、3899の線刻文字が「夫」（夷）を含むものとした場合、これらが相互に関連していく可能性がある。特に「夫」は蝦夷との関連を示すものとして注意されており、「東人」の文字を含む六大Ｂ遺跡出土木簡も考え合わせ、今後その判読を含めてさらに詳細な検討を加えていく必要がある。なお、六大Ａ遺跡近傍の大垣内遺跡からは、「饗」線刻土師器も出土している⑮。

獣脚部付圏脚円面硯3899というまことに希有な優品を介して、「嶋」墨書土器や儀礼などとも関連させながら、それが六大Ａ遺跡に存在した背景を探ってみた。これらから提起できることは、現在認識できる以上に六大Ａ遺跡、ひいては窪田の地が、律令国家にとって重要な地であったことを示している可能性である。説話に属するものではあるが、『景行紀』などでは景行天皇の東国行幸は伊勢から出船したことを伝えていることをはじめ、今後、鈴鹿関や軍団が置かれたとされる伊勢の地政的位置も考慮しながら、当地域の重要性を考えていくなかでこれら遺物存在の意義を考えていく必要がある。

（註）

① 櫻井満『古代の山河と伝承』おうふう　1996

② 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』12　1978

③ 中村光司ほか「六大Ｂ遺跡（Ｉ地区）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター　1993

④ 杉谷政樹ほか「六大Ｂ遺跡Ｄ地区」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター　1992

⑤ 『木製品編』のほか、下記文献にも示した。穂積裕昌「三重・六大Ａ遺跡」『木簡研究』第21号　木簡学会　1999

⑥ 吉田恵二「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第１輯　1985

⑦ 一瀬和夫「墨書のひろがり」『古代の人名目録』大阪府立近つ飛鳥博物館　1995

⑧ 千田剛道「獣脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1995

⑨ 泉廃寺については、下記文献を参照。鈴木啓「陸奥国海道伝路の予察」『論集しのぶ考古』1996

⑩ この土器は、８世紀初頭以前のⅡ期官衙に伴うものとされている。多数の報文があるが、当該土器が報告されたものを示す。いずれも木村浩司ほか『郡山遺跡発掘調査概報』　仙台市教育委員会　1980、「郡山遺跡Ⅵ－昭和60年度発掘調査概報－」仙台市教育委員会　1986

⑪ 佐藤浩司「墨書土器、ヘラ書き土器と硯に関する一考察」『古文化談叢』30下　九州古文化研究会　1993

⑫ 木村浩二ほか『郡山遺跡群Ｘ－平成元年度発掘調査概報―』仙台市教育委員会　1990

⑬ 今泉隆夫　「蝦夷の朝貢と饗給」『東北古代史の研究』吉川弘文館　1986

⑭ 次山淳「斉明朝と蝦夷」『斉明紀』奈良国立文化財研究

所飛鳥資料館　1996

⑮　三重県埋蔵文化財センター『大垣内遺跡』（現地説明会資料）1993

第８節　中世の墨書土器について

中世の墨書土器は、主に山茶碗・山皿に認められる。これらは勿論、全てが同一時期に廃棄されたものではなく、また出土遺構も複数の遺構から出土していて、その性格は一概に言えるものではない。しかし、一遺跡から出土する墨書土器としては非常にバリエーションに富み、また数も多く、これは遺跡の性格に関わっていた可能性が高い。ここでは、六大Ａ遺跡出土の中世の墨書土器についてまとめるとともに、そこから提起される当該時期の六大Ａ遺跡の性格について言及する。

まず、六大Ａ遺跡出土の中世墨書土器にみられる文字や記号は、合計で48種類程を確認することができた（明らかに異筆と見られる「又」や「米」などについても種類としてはひとつにみている）。もちろん残存状況が悪く、判読しきれないものもあることから、若干の増加はあると思うが、ほぼ50種類前後とみてよかろう。この種類数は、極めて多量の墨書山茶碗が出土した岩田川沿いの津市里前遺跡ほどではないにせよ、一遺跡出土の墨書種類としてはかなり多い部類に属する。ちなみに里前遺跡では、92種類の墨書が確認されており[①]、種類数としては六大Ａ遺跡のほぼ倍である。

第６表に示したのは、六大Ａ遺跡から出土した山茶碗・山皿に書かれた墨書種類と出土数を表にまとめたものである。この表からも読み取れるように、六大Ａ遺跡の墨書土器は、文字・花押・簡略な記号の３種類に分類できる。

このうち、文字は、漢字二字によるもの、漢字１字によるもの、複数の平仮名によるもの、平仮名１字のものがある。

花押は、単独の花押と、同一花押である4077や4078のような（7036も同様か）上に平仮名で「いし」と書いてその下に続けて花押を記すものがある。また、「○」や「×」「＋」等の簡略な記号は、比較的下位の身分によるものの花押、いわゆる「略押」の可能性がある[②]。従って、ここでは、そうした簡

分類	墨書	数量	分類	墨書	数量	分類	墨書	数量	分類	墨書	数量	分類	墨書	数量
A1	253	2	C2	264	2	E7	15	1	G5	870	1	K5	1223	1
A2	1039	3	C3	631	1	E8	416	1	G6	415	12	K6	1051	2
A3	1038	1	C4	1045	4	E9	1151	3	G7	505	17	K7	95	8
A4	428	3	C5	262	2	E10	288	6	H1	877	2	K8	548	1
A5	453	1	D1	1011	13	E11	1023	8	H2	1010	1	K9	1131	1
A6	1060	1	D2	1034	1	E12	1188	1	H3	871	1	K10	494	4
A7	595	4	D3	184	6	E13	289	12	H4	653	1	K11	539	1
A8	443	1	D4	1147	4	E14	432	1	H5	1019	1	K12	245	1
A9	515	1	D5	159	1	E15	1169	1	I1	1047	1	K13	374	1
A10	1129	1	D6	423	6	E16	1146	1	I2	449	1	K14	248	1
A11	1088	1	D7	570	1	E17	1026	1	I3	859	2	K15	454	1
A12	1132	1	D8	427	2	F1	456	2	J1	1048	1	K16	1095	1
A13	1082	20	D9	300	1	F2	438	1	J2	1027	1	K17	1133	1
A14	574	2	E1	1152	2	F3	1055	3	J3	1048	1	K18	1009	1
A15	1033	1	E2	285	25	F4	1140	1	J4	1139	1	K19	945	1
A16	411	1	E3	1058	5	G1	1023	7	K1	201	8	K20	1032	3
B1	1116	2	E4	650	3	G2	283	1	K2	180	4			
B2	1022	2	E5	288	1	G3	636	34	K3	1018	1			
C1	1004	11	E6	1165	3	G4	643	1	K4	1212	2			

文献註①

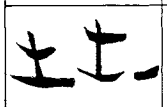
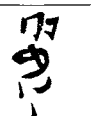
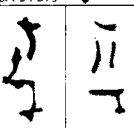
第５表　里前遺跡墨書分類表

略な花押は、「略押状記号」とする。基本的に文字と略押状記号の併記はない。

ちなみに、墨書部位に着目すれば、略押状花押は全て底部外面への墨書であるが、最も整った花押である4077～4078と、一部の文字（4093の「吉」と7166の「大」）は側面への墨書である。また、これも整った花押である4076は底部の内外面に墨書がみられる。

六大Ａ遺跡の花押をもう少し細かく見ると、同じ花押でも4076～4078・7036と、571・4076はいわゆる公家様花押であるが、非常に達筆で、それなりに身分があった者の手による可能性が高いとされる。これに対し、7033は、武家様花押に近いものとされる。また、6973も花押であろうと思われるが、墨痕が乱れ、判読不能である。

以上の花押は、いずれも書き慣れた者の手になる極めて達筆の花押で、略押とは明らかに一線を画している[③]。荘官など窪田荘の支配に関わるクラスの

墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類
 4069	1		交？ 7083	1		7033	1		4052	3	
7181	1		6994	1		4077	3		7051	1	
4093	1		両？・多？ 6971	1		6973	1		568	1	
4100	1		才？ 6979	1		6999	1		4068	1	
4101	4	A13	里？・田？ 4067	1		573	1		6993	15	G6
7146	4	A4	厨？ 572	1		7088	2	D1	7029	3	G7
4048	3		 7166 「御(お)めいし」	1		7093	2		4070	1	G3
京？・東？ 4072	1		「はくち(ろ)」 7180	1		4049	1		6992	3	G1
桶？・楠？ 6985	1		 564「ます」 570	5		574	2	D3	566	1	C
貳？ 7092	1		4082	1		4053	2		4102	1	C1
7179	2		7178	1		4081	2		4103	1	K2？
7076	1		4076	2		4083	1		6975	1	

第６表　墨書分類表

手に拠るものであろう。

このように、六大A遺跡では、花押や略押状記号から判断する限り、複数の階層による墨書が認められることになる。

さて、この六大A遺跡出土の墨書を、里前遺跡出土の墨書と比べてみよう。里前遺跡では、文字・花押・略押状記号が認められる。なかでも略押状記号が特に多く、それを残した者の数が多かったことを示していよう。また、六大A遺跡出土の墨書中、文字や略押状記号でほぼ10種類程が里前遺跡出土のものと内容が共通している。ただし、花押では、それ自体の「格」は、六大A遺跡の4076等のほうがやや高いようである。つまり、六大A遺跡出土の墨書群は、種類こそ里前遺跡に及ばないものの、それを残した主体にはより高い階層を含んでいると解することができよう。

里前遺跡を報告した川崎志乃氏は、里前遺跡出土墨書中に「よね」や「か」（加地子？）などの年貢に関係する語句を含むことや、「政所」と書かれた墨書の存在、複数の階層（数多く出土した略押状記号を百姓層、花押を支配階層とみる）がひとつ所で会する場としての機能などを考えて、里前遺跡が年貢集配に関わった遺跡の可能性を指摘されている。

この状況は、いわゆる略押状記号の種類が里前遺跡よりは少ないとはいえ、基本的に六大A遺跡も同様で、六大A遺跡でも「米」や「万す」（ます、平仮名一字の「ま」も同様か）などの年貢に関わったと推定される墨書を含む。すでに小林秀氏は、花押や記号の書かれた山茶碗が「ます」として使用された可能性を言及されていた④が、今回の「万す」墨書の確認は、この先見を具体的に裏付ける極めて重要な発見ということができるであろう。

つまり、六大A遺跡の多種類の山茶碗墨書の背景には、当該時期の六大A遺跡が窪田庄の年貢集配に関わった機能があったことを示しているものと推定される。その場合、里前遺跡、六大A遺跡ともに岩田川、志登茂川という河川交通の要衝地にあることは偶然ではなく、そうした場を選んで領主層と農民層による何らかの「場」が設定されたとみることができよう。

なお、里前遺跡や六大A遺跡以外で山茶碗墨書が多数出土している遺跡に、安濃川流域の芸濃町大石遺跡⑤がある。大石遺跡出土の墨書は、「僧器」「侍器」「国枝」「包松」をはじめとする文字墨書が中心で、略押状記号はほとんど存在しない。遺構としても、区画施設を伴う居館機能が想定されており、遺跡に拠った主体が侍身分などかなりの上位階層であったことがわかる。

つまり、遺跡に拠った主体者を残された墨書土器を指標としてみてみると、侍身分や僧などの上位階層を中心とした大石遺跡、身分は不明ながらかなりの上位階層者と百姓身分までの重層構造をとる六大A遺跡と里前遺跡という構成になる。いわゆる略押状記号をほとんど含まないことなど、大石遺跡は六大A遺跡や里前遺跡と遺跡の性格のうえで異なっていたとみるべきであり、このことは遺構の状況とも対応する。

以上のように、六大A遺跡出土の中世墨書文字を巡って、里前遺跡との共通性から遺跡の性格に窪田庄の年貢集配に関わる場である可能性を想定するとともに、大石遺跡との対比から、墨書土器の示す内容が遺跡の性格をより際立たせる可能性を推定した。

六大A遺跡出土の公家様花押は非常に達筆で、これを著した人物がかなりの高位であることを窺わせているが、具体的な人物・氏特定などは今後の課題としたい。（穂積）

（註）

① 川崎志乃『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2002。以下、里前遺跡については同書に拠る

② 小林秀・川崎志乃両氏のご教示による

③ 墨書・花押全般について、小林秀氏のご教示を得た

④ 小林秀「中世における三重出土の墨書土器について」（三重歴史文化研究会発表資料）1997。なお小林氏からは、六大A遺跡の墨書土器および付随する論点について、懇切なご教示を得た

⑤ 森川幸雄ほか「安芸郡芸濃町椋本　大石遺跡」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告―第1分冊―』三重県埋蔵文化財センターほか　1992

Ⅷ　調査の総括と学術上の課題

六大Ａ遺跡の調査は、弥生時代後期から中世の遺構・遺物についての多大の新知見を得て終了した。最後に、六大Ａ遺跡の全体的な意義とそこから提起される学術上の課題、及び今回は考察で触れられなかった事象を列挙し、今後の課題としたい。

地方拠点遺跡としての六大Ａ遺跡

六大Ａ遺跡では、弥生時代後期以降、ＳＤ１周辺で大量の土器類や祭祀用木製品等を祭料としてカミに奉斎する祭祀が行われるが、５世紀以降、新たに大量の武器形木製品や滑石製品を用いての祭祀行為が行われ、初期須恵器も導入されるようになった。前章でも触れたように、西日本の大型祭祀遺跡では「神祇系」と目される祭祀の場に意外と渡来系の文物の出土が多く、おそらく最新文物をカミに供することに一定の意義があったものとみられる。

これら祭祀行為や出土遺物の内容は、全体として例えば物部氏の関与が想定されている奈良県奈良市の布留遺跡の内容と共通する部分が大きく、初期須恵器の導入とも関連してヤマト王権勢力との何らかの交渉が想定される。こうしたことは、六大Ａ遺跡が単に在地に根ざした遺跡に止まらないことを示唆している。

文献史学では、大化前代のヤマト王権の地方支配拠点として屯倉の存在が説かれるが、六大Ａ遺跡はそうしたものの初現的なあり方を示す遺跡の可能性がある。六大Ａ遺跡への渡来系文物や滑石製品波及の主体が在地の側からの働きかけによるものか、ヤマト王権側にあるのかはともかく、５世紀以降に整備されはじめると考えられる「安濃津」とも関わって、ヤマト王権が東国進出を図っていく過程でそのための拠点となる「地方拠点遺跡」とでも言うべき性格も担ったものと思われる。

そういう意味で、『木製品編』で報告した準構造船部材（部材自体は転用後の再利用と推定）の出土は、重要な意味をもつものと考えられる。

こうした性格は、その後、古代へも何らかのかたちで引き継がれ、獣脚部付圏脚円面硯などの出土もこの流れのなかで理解されるものと思われる。

今後の課題

弥生後期土器と古式土師器の位置づけ

六大Ａ遺跡出土品で最大量を占める弥生時代後期～古墳時代前期の土器については、形式分類を示して事実報告では適宜言及したが、まとまっての考察は行わなかった。これは、当該土器が、基本的に大溝や旧河道出土のため、一部で土器群としての把握はあるものの、土坑や井戸、あるいは墳墓出土品ほどの一括性は期待できなかったことに拠る。しかしながら、編年的な検討はともかく、一遺跡からの安定した土器の出土というてんでは、志登茂川流域、あるいは中勢北部という地域の当該時期の土器相の把握に寄与するものは大きいと思われる。少数ながら、吉備や駿河をはじめ、他地域からの搬入もしくはその影響と推定される土器も存在する。そういう意味で、本土器群は、当地域の土器組成や地域色を考える際の「辞書」的な役割は担うものと考えている。今後、今回提示した膨大な土器群が、土器研究のうえで少しでも活用されることを望みたい。

古代の六大Ａ遺跡の意義

土管や硯、方筒状土製品、大型の土馬などが出土した飛鳥時代以降の六大Ａ遺跡の意義については、考察でも触れたものの、未だ十分とはいえない。これは、六大Ａ遺跡だけで帰結する問題ではなく、窪田遺跡群全体のなかでの六大Ａ遺跡の評価を行っていく必要がある。そういう意味では、窪田遺跡群の中心的な部分は、南側の六大Ｂ遺跡（古代の大型建物群）や大垣内遺跡（大型建物や「饗」墨書土器）にその一端があったものと考える。かつて橋垣内遺跡の報告でも触れたが、本地域ではフイゴ羽口等の鍛冶関連遺物（六大Ａ遺跡でも確認）の出土が古墳時代中期以降認められており、そうした文物の包括的な意義付けもなされる必要がある。六大Ｂ遺跡や大垣内遺跡の正式報告を待って、これらは再度その意義付けを図っていきたい。　　（穂積）

（註）

① 穂積裕昌ほか『橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ（はちこうく）けんせつじぎょうにともなう　ろくだいえ・いせきはっくつちょうさほうこく
書名	一般国道23号中勢道路（８工区）建設事業に伴う　六大Ａ遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５－１６
編著者名	穂積裕昌　　小林俊之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL　0596(52)1732
発行年月日	西暦2002年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ろくだいえ・いせき 六大Ａ遺跡	みえけんつし 三重県津市 おおさとくぼたちょう 大里窪田町 あざ はなむら 字 花村	24201	693	34° 45’ 50”	136° 29’ 55”	19940413 ～ 19950503 19950417 ～ 19960329 19960819 ～ 19961004	8,830 4,130 260	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六大Ａ遺跡	祭祀跡 集落跡	弥生時代後期 古墳時代 古代 中世	旧河道 大溝 掘立柱建物 （古墳時代～中世） 井戸 土坑 溝	後期弥生土器 古式土師器 初期須恵器 韓式系土器 古代土師器 須恵器 土馬　土管 方筒状土製品 獣脚付円面硯 銅鏃 滑石製模造品 隆平永宝等の銭貨 墨書山茶椀　皿	大溝には付設施設として井泉や礫敷が伴い、古墳時代を中心とした時期の首長層による水辺の祭祀の場と推定される。 古代・中世は集落と考えられるが、出土遺物は非常に優秀なものを含んでおり旧奄芸郡や窪田庄などの重要な拠点地であったと推定される。

平成14（2002）年3月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告115－16

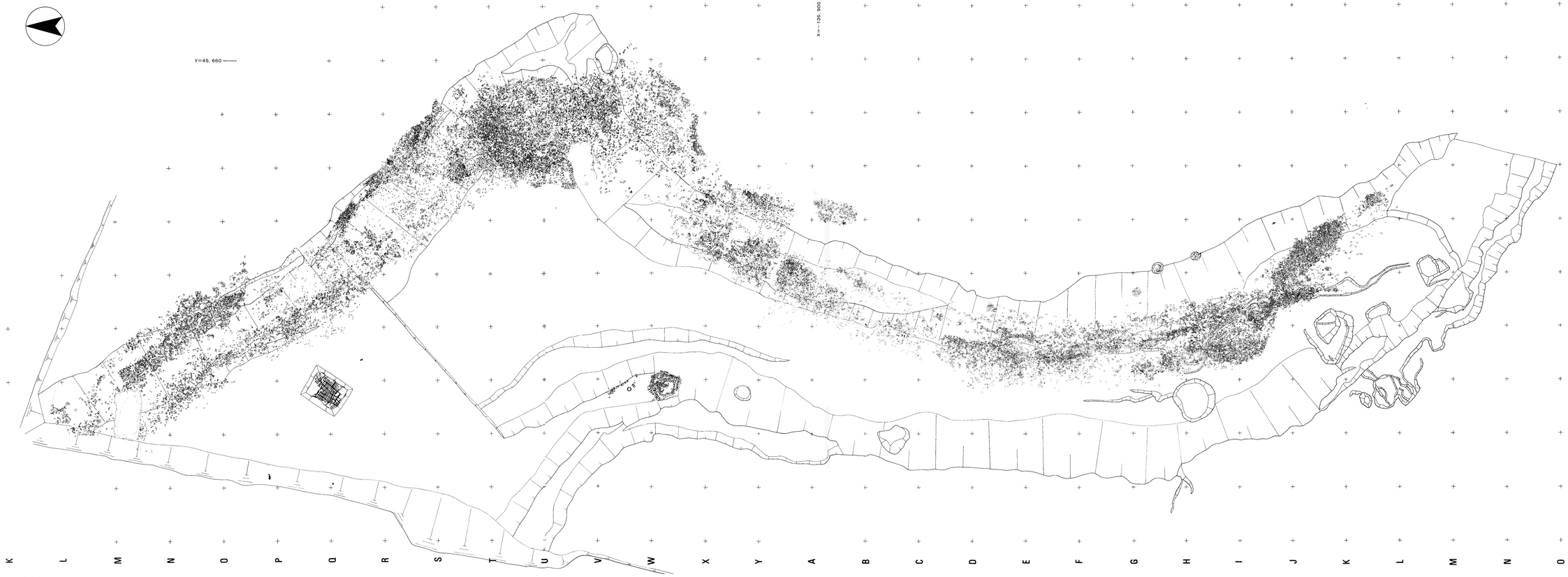
一般国道23号中勢道路（８工区）建設事業に伴う

六大Ａ遺跡発掘調査報告

2002．3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　㈲第一プリント社



付図１　ＳＤ１上層礫敷実測図（１：150）